

東方ギャザリング

roisin

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

カードゲーム、マジック・ザ・ギャザリング（略称・MTG）に登場するクリーチャー、呪文、武具などを召喚&行使する力を貰い、東方プロジェクトの世界へ。

MTGをご存じない方にも楽しめるよう執筆させて頂きましたが、至らぬ点は間々あるかと思われます。ご了承頂ければ幸いです。

●SS投稿サイト『arcadia』様との二重投稿となります。

目次

はじめに	1
一章	
0 0 プロローグ	2
0 1 大地に立つ	22
0 2 原作キャラと出会う	42
0 3 神と人の差	60
0 4 名前	74
0 5 洩矢の国で	84
0 6 悪魔の代価	117
0 7 異国の妖怪と大和の神	141
0 8 満身創痍	164
二章	
0 9 目が覚めたら	187
1 0 対話と悪戯とお星様	209
1 1 大和の日々 《前編》	233
1 2 大和の日々 《中編》	251
1 3 大和の日々 《後編》	271
1 4 大和の日々 《おまけ》	292
1 5 鬼	297
1 6 Hulk Flash	323
1 7 ぐだぐだな戦後	347
1 8 崇められて 強請られて	
1 9 浜鍋	383

《中編》

29 Hexmage
Depth
639

《前編》

28 Hexmage
Depth
607

27 氷結世界に潜む者
579

26 蓬萊の国では
549

25 手札破壊
528

24 プレインズウォーカー
508

23 青い人
476

22 月の異名を持つ女性
451

三章

21 太郎の代わりに
420

20 歩み寄る気持ち
396

1060

40 飲み過ぎ&飲ませ過ぎ《前編》

39 力の使い方
1018

38 置き土産
988

37 玉兔
941

36 病室にて
891

35 高御産巢日
868

34 対面
831

33 移動中《後編》
791

32 移動中《前編》
753

31 一方の大和の国
713

《後編》

30 Hexmage
Depth
672

4 1	飲み過ぎ&飲ませ過ぎ《後編》	1103
4 2	地上へ	1126
四章		
4 3	小さな小さな《前編》	1175
4 4	小さな小さな《後編》	1218
4 5	砂上の楼閣	1265
4 6	アドバイザー	1312
4 7	悪乗り	1368
4 8	A w a k e n i n g	1423
4 9	陥穽	1486
5 0	沼	1515
5 1	墨目	1551

5 2	土地破壊	1612
5 3	若返り	1652
5 4	宝物神	1684
5 5	大地創造	1736
5 6	温泉にて《前編》	1772
5 7	温泉にて《後編》	1819
5 8	監視する者《前&後書き追加》	1851
1891	ご報告+嘘予告リリカルギャザリング	

はじめに

- こちらの作品は、『東方Project』と、カードゲーム『MagiC:The Gathering (マジック・ザ・ギャザリング)』を題材としたものとなっています。
- SS 投稿サイト『Arcadia』様との二重投稿となります。

《注意》

- 東方のキャラクターがMTGをプレイする訳ではありません。オリジナルの主人公が、MTGを東方世界で使うとどうなるか。を、コンセプトに執筆しています。カードゲームとしての要素は薄くなっております。
- 転生、チート、オリ主、の三種の神器完備。
- 俺TUEEで転生厨二チートなご都合主義にする予定です。
- 何か問題がありましたら、場合によっては文章削除or丸々書き直す可能性があります。あります。その際にはご報告させていただきます。

一章

0 0 プロローグ

一定感覚で、電子音が響く。

心電図と呼ばれるそれは、黒いモニターに歪な光の線を生み出していた。

だが、それも徐々に弱くなっていって……。

振れ幅が少しずつ狭まり、その機械に繋がれている一人の命が消えかけていることを伝えていた。

(何てこった……怖すぎて笑いがこみ上げてくるなんて)

初めての経験に、男は戸惑いながらも状況を受け入れる。

——いや、受け入れざるをえなかった。

どこにでも居るような男だった。

一人っ子ではあったが、父親と母親の愛情で甘やかされながらも元気に育ち、小中高

校と、中の下の成績で終業。

大学には魅力を感じず、これといってやりたい事もなかったので、好きなものの延長線上にあつた消防士……には成れずに、その関係である防災設備の会社に就職。

女性関係は見事に全滅。

顔も身長も並み以下で、若干の上がり症という事も相まって、今現在でもフラグの1つすら見出せていない。

友人も多くは無いが、1〜2週間に1度、3〜4人で集まっては、他愛のない会話や遊びで、笑ったり怒ったりを繰り返していた。

しかし、それも、もうすぐ終わる。

仕事中、廃屋となった工場から、リサイクル回収の為に運んでいた消火器が破裂。

長年の雨風で腐食した外壁が限界を迎えていて、それが運悪く彼の運んでいた時に臨界点を超えたのだった。

爆散するでなく、ロケット弾のように彼の体に当たったそれは、心臓と、続いて脳内に深刻なダメージを与えてしまった。

それから3ヶ月。

段々と弱くなる鼓動。それと連動するように微弱になる脳波。

心肺機能のみなら機械で代用出来るが、頭はそうはいかず。

原因不明の症状に、物珍しさもあつたのか、治療費は国が出す代わりに、モルモットのような状況が続く。

見舞いに来る知人、友人、親戚。そして、足しげく通う両親。

男はその事が堪らなく嬉しく、そしてそれ以上に、悲しみと恐怖が溢れて出てきていた。

時刻は夕方頃だろうか。窓から差し込み、沈んでゆく夕日が、まるで自分の命を表現しているかのような印象を、男に与える。

何か特別なイベントの日でもない、誰もが普通に過ごす1日。

そんな日に、男は両親に片方ずつ手を握られ、今まさに消えようとしていた。

もはや、誰も一言も喋らない。ただ、握られた手が小刻みに震え、両親と、そして男の心を表していた。

怖い、悲しい、悔しい。

元気になりたい、助かりたい、生きたい。

大声で泣き出したくなり……けれど薄れていく意識はそれすらも不可能で。

どうせ死ぬのだから、と、アニメや漫画を元に格好良いセリフを考えてはみるが、すぐさま不安で打ち消される。

(俺は、ヒーローの真似事すら出来ないのか……)

男の目から悔しさから涙が溢れる。けれど、最後なのだからと、全力で意識を強く保つ。

カッコいいセリフではないけれど、今の自分の気持ちをも、せめて、この両親にだけは。だから、もつと気力を。もつと意識を。もつと感情を。もつと——命を。

一言で良い。

それだけで良いんだ。

もうそれしか出来ないのだから。

いや、まだそれだけは出来るのだから。

今だけは、今この時だけは——

いままで ありがとう ごさいました

20××年○月×日 18:01

世界でまた一つ。命の火が消えた。

……………一体なんだこれ。

俺は今、白いもやもやの列の一つと化していた。

幽霊？ 霊魂？ 人魂？

次々に疑問が浮かんでは消える。

しかし、それを解決しようにも体は動かさず、言葉も出せない。

今さつき死んで、気が付いたら雲の上っぽいトコにいて、そしたらチャリに乗ったスーツ着た30台のリーマンに案内されて……

あの世つては、存外俗物くさいところなのかもしれないな。案内してくれた人も、どこにでも居そうなおつちやんだつたし。

「次の方、どうぞ〜」

事務的な男の声が響く。

もうこの際、日本語だとか鬼の角とか天使の輪は無いんだとか、もう諸々の考えは捨てよう、うん。

ここはあの世。まさに世界が違うのだ。常識なんて、あつてないようなものだろう。

「では、以上の事に相違ありませんね」

2人きり。どこその面接部屋のような、広すぎず狭すぎず『これがオフィスです』と言わんばかりの素っ気の無い一屋。

そんな中で俺の履歴を読みあげた面接官のおつちちゃん（仮名）は、こちらに確認を促してきた。

喋れはしれないが意思は相手に伝わるようで、肯定の意を送ると、面接官はこちらに向かって1枚の紙を――

（うお!? 紙、浮いてる!）

念力でも使ってるのか、滑るように空中を移動してきたそれは、俺の目の前で、見やすい位置にピタリと固定。

モヤモヤを見たり雲の平原を歩いたりしてきたが、やっぱり今までの常識から外れたものを見たら驚くわ。

読め……………つてことだよな。

どうやって浮いてるんだろ。

疑問が尽きないが、とりあえずその紙に目を通す。

そこは空欄だが、以下の文字が見て取れた。

名前……………技能……………身体数値……………？

なにこれ？

「現在、冥界では靈魂受け入れ枠の削減を図っております」

あの世だつてのに変なトコ世知辛いですね。

「死後の世界は天国なら極楽だ、とか誰が言ったか分かりませんが、あんなの宗教家や死に不安を持つ他所の方の幻想です。かといって地獄という訳でもありませんけれどね」

さいですか。

「こつちも色々と苦勞あるんですよ。もう上司とかが……………おほんつ。——それでです、こゝこゝ冥界は收容する靈魂の管理が追いつかなくなっております」

……え、まさか俺、消滅とかですか？

「いえいえ。結論だけ言いますと、靈魂の管理体制が整うまで、外で時間を潰しておいて欲しいんですよ」

よ、良かった。2連続も死ぬような体験しなくて。

「失礼しました。思慮が致しませんでした」

あ、えと、お気になさらず……。

「感謝します。長年やってますと、どうもこの仕事を事務的にこなす癖がついてしまつて……」

分かります。俺が今ここにいるのもそれが原因みたいなものですし。

ま、それで死んでちゃ情け無い限りですが。

「ははは……心にとどめておきます」

嫌味のつもりは無かったんだが、ブラック風味な指摘になってしまった。

この面接官さんが言うのをまとめると、

①外で時間潰してきて

②出来る限りのサポートはするよ

③ 外の場所はこちらで決定します

④ 冥界へ戻るタイミングはそっちで決めて良いよ

⑤ 最低1億年は外に居てね。

ってことらしい。

⑤なんて条件出されたら人格消滅するわと思ったが、それは②で何とかしてくれるんだとか。

で、この②の意味が広義過ぎるので聞いてみると、ようは転生や憑依もののテンプレである、『1つだけ好きな能力を与えよう』ってことらしい。

ただ、それらの案には多少のデメリットは付随させるそうさ。

けれど、誰もが1度は思う『ぼくのかんがえた、さいきょうのうりよく』。

いよいよここで使う時が来たか!! と思って取得したい能力を言った。

物語の設定なら兎も角として、実際に生きていくのなら弱点とか要らない。

最強テンプレばっちこい! っで感じた。

ところが、

「ええと、その能力の保持者は既に居ますね」

………つまりあれですか。オンラインゲームとかでパスワードやらキャラ名が被ってはいけません的な?

「そう考えて頂いて問題ありません」

これはやばいかと思いつながら、他にも考えていた能力を次々と提案する。
しかしそのどれもが既出。

やばい……………まじヤヴァイ……………これでも自分だけのオリジナル能力だと思つて色々と考えていたんだが、そのどれもがアウト。

先に案出したお前らバねえツス。

なんて悩んでいる俺を見かねたのか、アイディアの提案につながれば、と既出の能力例を読み上げてくれる面接官。

無限の剣製——進化し続ける——スキマを操る——存在を司る——神を召喚——思い通りに事象を——e t c , e t c

流石流石と言いたくなる先人達の能力。

自分で考えたオリジナルの技や魔法を使うつてもあつたが、これは二次、三次問わず、既出のものと被つてはいけないうつてことだったので、きつと効果薄そうだ。

……………ん？ 神の召喚？

そういうのもアリなんですか？

「ええ。過去にお亡くなりになつた方達を、アニメ漫画やドラマの主人公を。といった方もいらつしやいましたね」

まじかー！じゃ、じゃあ二次元のキャラを召k

「それは既にいらつしやいます」

o r z

「同じ能力ではいけません、その能力を広義、狭義的に解釈して登録することは出来ませんよ」

ん？ どういうことですか？

「つまりですね、例えばその、二次元のキャラを召喚する能力。これを広義に解釈した方の例ですと、あらゆる存在を召喚する能力、逆に狭義に解釈した方ですと、クトゥルフの神々を召喚、といった具合です」

神話も二次元範囲内ですか……………

召喚系か。確かに汎用性高そうだし、良いかもしれないなあ。呼び出したキャラで自分も強化してもらえば一石二鳥以上の効果も得られるだろう。

でも神系はまず全部抑えられてるだろうし、二次元キャラもどこまで通用するかどうか……………

実在した偉人や英傑は俺が殆ど知らないのと、やはり神や二次元に比べて能力が低いのでパス。

と思つて、知つてる範囲での二次元作品をあらかた聞きまくる。

スターウォーズは？

「おりますね」

エックスメン！

「おります」

ポケモン！

「1000人を超える方がそれを望まれましたね」

多いな。じゃあロボ系好きだからその作品全b

「おります」

めげないよ！ 俺ファイト！ ならば狭義解釈でスーパーロボツt

「おります」

なんの！セイント……

「以下同文です」

あうち。

しかし参った。良い感じのものが思いつかない。

召喚ものは数あれど、多岐に渡って役立つもの、となると知識がどんどん限られてしまう。

召喚ものつてもしかしてもう打ち止め系なのだろうか。

……いやまて。まだ召喚ものの、日本最大クラスのが残っているじゃないか。しかもカードゲームだから、まさに召喚してくれと言わんばかりのものが。

決まったぞ！遊g

「おります」

Orz

がつくりし過ぎだ俺。

あー、でもそういえば、遊戯王ってやったことねえや、ははは……

じゃあ広義でカードゲームで出てくるキャラや呪文は？

「同文です」

まーじーかーよー。じゃあマジック・ザ・ギャザリングは？

「——問題ありません。提案者ゼロです」

これもか。他に何か応用効く作品あったかな………ん？

いないの？

「はい、いませんね」

——やった、助かった俺。しかもギャザ。これは神の啓示に違いない。

他のカードゲームは殆ど知らないが、このマジック・ザ・ギャザリングは何年もプレイし続けた、思い入れの強い作品のうちの1つだ。

何をするにしても、かなり無理がきく作品だろう。チート的な意味で。

『マジック・ザ・ギャザリング（以下 MTG or ギャザ）』

アメリカのゲームデザイナーで数学博士の称号を持つ男が開発。

全てのトレーディングカードゲームの始祖。

日本ではあまり馴染みは無いが、高い戦略性と豊富なカードの種類で一躍全米を震撼させたホビーゲームである。

じゃあ、その能力でお願いします。

「分かりました。では能力名は『集められた魔法を扱う能力』とします」
なるほど。ギャザの和名ってことですね。

ん？ でも召喚や使用にデメリットを伴う呪文はどうなるんだ？ カードの枚数制限とか召喚コストも。というか、カードルール全般。

「あるにはありますが多少は無視です。遊戯王のアニメ、見たことありませんか？」

ああ、ご都合主義万歳ってことですね。で、俺もその万歳の仲間入り、と。

「万能ではありませんので。もしお嫌でしたら、デメリット、多めに付属させましょうか？」

いえいえ、主観になるのならウエルカムです。ご都合主義最高!!

「ははは。割り切りもココまで来ると清々しい印象を受けますね」

結構欲望には忠実なんで。

「その欲望は周りに害の無い限り、尊ぶべきものです。では、その他の設定を行います」
……………迷惑かけんってことですね。分かります。

「既存の作品であるマジック・ザ・ギャザリングを使う能力への条件として、以下のデメリットが付属されます。覚えておいて下さい」

・ 1ターンは1日(24時間)。

・ カードは1日に、1種類につき1枚を1回のみ使用可能。

- ・ 召喚や現存し続けるカードには維持費（体力）が掛かる。
- ・ マナを増加、あるいは減少させるカードは効果を発揮しない。使うことは出来る。
- ・ カードの効果が必ずその性能を全て発揮する訳ではない。
- ・ これらは全て『原則』である。経験値を積むことで、これら制限や上限の開放が可能。

「といった内容が原則です。その他詳細なルールはご自身でお確かめ下さい。何かご質問は」

RPGみたく、敵倒してレベルアップして使えるカードの枠を広げていくって考えで良いんですか？

「大まかには。ただレベルアップは『経験値』の蓄積の結果です。討伐のみや何か一つ特化での『経験値』では一定以上の効果は見込めません」

色々やれっつてことですね。

「はい。ですが、戦闘関係で得られる経験値のウェイトは大きいですので、先程のお言葉どおりの考えでも問題はないかと」

分かりました。続きをお願いします。

全ての設定が終わり、巨大で、やけに和風な門の前に俺は来た。

結局、身体的特徴は生前とあまり変わらず、けれど『こうであって欲しかった』箇所の修正をした。

身長165↓175 体重60↓70 細？ マツチヨ体系で黒髪の、日本ではどこにでもいるような顔。ただし眼光だけは意識すれば鋭くなる。

うん、一部だけカッコイイとか良いね。

完全イケメンとかでも良かったのだが、何せ両親に貰った体だ。

思い入れも強く、自分が許す限り特徴を引き継ぐ。

そして、最低1億年はやっていかなければならない事への配慮として『倦怠』感情の制御と、何でも食べて栄養に出来る能力に、当然ながらの寿命の無効化。そして、記憶容量の増大化。

最初の3つは当然として、最後の1つは人間の記憶容量は140〜150年と、どこぞのラノベで言ってたので、納得の配慮だった。

そして生前と同じように、少しずつではあるが成長はするということ。

体を鍛えれば体力が、勉強すれば知識が、精神力を高める努力をすれば、胡散臭い気孔くらいは習得出来るらしい。

なるほど、それがレベル上げてって意味か。

良かった、俺って元がスタミナ低いから、持久戦な場面になったら不安だったんだ。ただ、普通に死ぬし、死んだらまたここに戻ってくる羽目になるので、気をつけるようにとのこと。

セーブなしのRPGとかマジ鬼畜、って印象を受けるのだけれど、好きな能力貰って
おいて、さらにその事への配慮まで望むのは我が侂だろうか……………。

「これで全ての過程を終了します。お疲れ様でした」

「こちらこそ、色々ありがとうございました」

そう言うと、この面接官のおっちゃん。言葉には出さないが、口元が笑みの形になる。
(事務的だけど優しかったなあ)

若干視線の高くなった、五体満足の体。

けれど今までの肉体ときほど違いが分からずに、違和感の無さを喜ぶべきか、はたま
た違う自分を実感する為に金髪碧眼にでもするべきだったかと馬鹿な考えに思いを巡
らせた。

「これからあなたが向かう先は、——あるPCゲームの世界です」

いきなりゲームか。しかもPC。あー、原作知識あると良いんだけどなあ……………エロ

ゲだったらウハウハしたいな。

「名前は……東方プロジェクト。人間が支配する地球で、その存在を忘れられた者達が集う場所が主な舞台です」

って結構大御所が来たね。

やばい、俺ゲームとか1回もプレイしたことないぞ。知識はそれなりにあるが。

「以上です。何かご質問はありますか？」

「……………いえ、何もありません」

俺とおつちゃんが話をしてきた建物の奥（中？）には、転送装置っぽい門が幾つも並んでいた。

なるほど、ここからそれぞれ決められた世界へと送られていくのだろう。

そう考えながら、先頭を歩くおつちゃんにそれにつられて俺も移動する。

そうして、見計らったかのようにビルの上層階はあろうかという巨大な門は開いていった。

溢れ出る光。

まるで前は見えないが、これから異世界へ行きます、的な雰囲気、実に俺を興奮させる。

期待を胸に、それへと足を進めて出した時、

「あなたが無事、成し得たい事を遂げられますよう、この場のみではありませんが、応援させていただきます——がんばれよ、坊主」

光に溶け込む寸前。

事務的な優しきでしかなかったおつちゃんその声は、本心のような気がした。最後だけ優しくなりやがって……男として惚れてまうやろ！

「——はい！ 行ってきます!!」

返した声は、とても澄んできたと思う。

両親に申し訳ないと思う気持ちは多々あるが、今はそれよりも未知への第一歩を踏み出せるのだという興奮が上回っている。

したいこと、しなければいけないこと、やってはいけないこと。

色々な思いを馳せながら、俺は人外魔境の地へと踏み込んでいった。

あれ、何か忘れてるような………？

01 大地に立つ

どこまでも青い空、雄大に流れる白い雲、大地を埋める新緑の森、黄金のように降り注ぐ太陽光。

そして、今まで嗅いだ事の無い澄んだ空気。

(すげえ！ 空気って美味いんだ！ (注・能力のせいです))

ああ、今俺は気づ知らずの、どことも知れない地面に足を付けている。

感動が感動を呼び、これから起こるであろう、不安や恐怖を一切吹き飛ばす。

どうしよう。どうしよう。何をしよう。

幼い頃、新年最初の日には『初寝起きき〜！』とか『初朝食！』なんて『初』を何でもかんでも付けていた。

それは、その行動がこれからの行く先を決定するかのような、こう、何か特別な十二力を感じるのだ。

(どうしよう……体が超興奮してる……!!)

今すぐ走り出したい衝動に駆られるが、第2の人生の初めてがそれの良いのだろうか
と逡巡。

しかし、もう抑えられないこの気持ちに全てを委ねる事にした。

それは、

「あああああ!!」

咆哮。

ありったけの声を腹から出す。

いや違うな。

もう腹とかではなく、全身から振り絞る感じで。

「あああああ!!」

しばらく叫び、それでも足りずに大地を駆け出す。

我ながら馬鹿みたいだと第三者のように感じながら、踊るような心の躍動を、今確かに感じていた。

楽しい。楽しい。——とても、楽しい。

親不孝な俺であった。自分勝手だとも思っている。

だから、だからこそ。

今生きているこの瞬間を命いっぱい楽しもう。

粛々と生きるのは、俺を知る誰かが現れてからでいい。
今を生きる。

全ての存在にするものに与えられた使命を、俺は謳歌した。

結果

「のどが……」

潰れる寸前です、はい。

やり過ぎた。体力も限りなくゼロ。

声も出せず、思考能力も著しく低下していた。

(……どんだけハッスルしてんだ俺)

だが、心地良い。

大の字で倒れこんだ地面は、思った以上にふかふかであった。

気候も良いし、頬をなでる風も、少しひんやりとした草の布団も、疲れや熱をゆつくりと奪ってくれている。

こんなことならもつと体鍛えておくんだった、と今更ながら後悔。

それと同時に、ようやく今自分が置かれた状況を冷静に振り返った。身に付けているものは紺色Gパン、無地の白いTシャツ、白いスニーカーのみ。もちろん下着も確認済みだ。

何処その歌のように、ナイフもランプもカバンも所持していない。

そしてココからが本題。ここ何処、今っていつの時代よってわけで。

(いやいや、まずは能力の確認か)

命あつての何とやら。

今の俺は考えを間詰めるのが早い一般人。

殴られれば痛いし、打ち所は悪ければ死ぬ。

ここで死んでしまったら、またおっちゃんのお世話になるし。違う人かもしれないが。

「つてことで早速」

確か脳内で思い描くことでカードのものを召喚………だったか。

何が良いかな。色々あるけど、初めての能力行使だもんな。

そうだ。

「こういう時は、初心に戻るべし」

ルールは基本、度外視とおっちゃんは言っていた。

ならば、マジック・ザ・ギャザリングのカードに割り振られたコンセプトを思い返し

てみよう。

MTGには6種類の属性が存在し、それらは色で呼ばれている。

『白』

平和や秩序、正義を表す。ライフの回復やダメージの軽減に長け、平等化という意味でリセットカードも多く存在する。行動の制限や抑制なども長けている。

『緑』

自然の色であり、大地や生命・現実を表す。全般的に優れたクリーチャー（モンスター）が特徴。クリーチャー同士の正面衝突に持ち込み、強引にダメージを捻じ込むことに長けている。

『赤』

火や混沌を表す。直接ダメージを与える呪文（通称：火力）や、形がある物を破壊するのが得意である。敵、味方を問わず自傷行為を求めるカードが多いが、その攻撃速度はMTGで1〜2を争う。

『黒』

死や悲哀、狂気・恐怖の色。クリーチャーの除去、ペナルティ能力を持つ高性能なカー

ドなどが特徴的。自身の何かと引き換えに、相手を倒す事に長けたカードが多い。
『青』

狡猾の色で水や空気、精神・知識・文明を表す。どの要素もカードの種類や強さ、対戦相手の戦力を無視するものがほとんどのため、常にマイペースな戦略をとることができる。が、反面ダメージを与えることは苦手。

『無』

無という色がある訳ではなく、どの色にも適合する色である。機械やアイテム、装備といった無機質なものがイメージに近い。ロボットや機械といった系のカードが多く、全ての色と相性は悪いわけではないが、決して良い訳でもない。

上記の属性に加え、MTGには様々なタイプの呪文があるが、今は考えなくて良いだろう。

「だって今やりたいのはクリーチャーの召喚だしね！」

アメリカ発祥なだけあって、キャラ——とうか絵が全般的に濃いので、選ぶのが大変だ。俺濃いキャラ苦手だから！

まあそのうち慣れるんだろうが、初めくらいは心臓に優しいクリーチャーを見たい。

色としては白か緑。

で、その中で一番見やすそう&一番気になるカードは……………。

「うん、これに決めた」

某ポケ……ゲフンゲフン何とかマスター風な口調で、そのカードを思い浮かべる。

難しいと思った空想も簡単に出来て、心でそれが、もう召喚出来るのだと判断出来た。「カード名とか叫ぶのかこれ。あ、別に言わなくてもいいっばいな。……………いやいやいや、こういうのはノリが大事なんだ。これ叫ばなくて何叫べってんだ！」

テンションは下がった筈だったか、クリーチャー召喚という儀式の為に、再度その炎が燃え上がる。

よし、ここは某ガンダムファイターみたいにしてみるか。あれ一度言ってみたかったし。

「来い！ガンdゲフンゲフン」

言い間違えくらいあるよね！

しかも天井！

さらにベタというか狙いすぎて逆に引くレベル！

でも今の俺は気にしない！

では改めて。

「来い！【極楽鳥】!!」

突如、どこからともなく光が集まり、それを形作る。

瞬きする間すら与えず終わったそれは、まさにMTGのカードから抜け出した、【極楽鳥】そのものだった。

0／1と飛行能力があるクリーチャー。

戦闘能力は皆無だが、全ての色のエネルギーを少量生み出す能力を有している。

炎のような赤い全身に、雄雄しいまでの翼。

小鳥よりやや大きいであろうそれは、俺の目の前で悠々と飛び回る。子供の頃何度もお世話になったカードのうちの1つであった。

「凄い……本当に……」

眩きつつ、手を上にあげ、この手に止まれと意思を送る。

すぐ極楽鳥は俺の手に止まり、その存在感を教えてくれた。

手を目の前に戻す。

周りを伺いながら、時折こちらに目を合わせては首をクリクリ傾げるその行動に、俺の心は早くもKOされた。

故に。

「生まれる前から好きでしたー！」

空いていた片手で背中や喉をくすぐる様に撫でる。

撫でる。撫でる。超撫でる。

何だか目線が『うわコイツうぜえ』みたいになっている気もするが、そんなんじや俺の衝動は止まらない。

結局、我に返ったのは、我慢出来なくなつた【極楽鳥】に手を突かれるまでであつた。

「だめだ、一瞬我を忘れてしまつた」

一瞬ではない気もするが、細かい事は流そう。

そんな俺の態度が気に入らないのか、バツパラ（極楽鳥の愛称、英語名の Bird of Paradise より）は俺の頭に止まり、数回頭を突く。

突くと同時に髪の毛をつまみあげるといっておまけ付きで。

「いてえ！ 地味にいてえ！ すいませんでした！ 以後気をつけますから許して下さいー！」

髪の毛数本の犠牲と引き換えに、バツパラの突く攻撃は終わる。

頭上にいるので奴の姿は見えていないのだが、何となく『参つたか』とどや顔してる

イメージが浮かぶ。

まだ地味に痛むんだが……。血、出てなきやいいけど。

ズキズキする頭部をさすりながら、今の状況を鑑みる。

「召喚した時にそこそこの疲れ、か。召喚〔コスト〕が低いからなのかどうなのかは分からないけど、コストくらいならまだ召喚出来そうだな」

『マナコスト（略称はコストやマナ）』

魔法やクリチャーの特殊能力などを発動させる為に必要なエネルギー。種類によつて必要なマナの色や量は変わってくる。

今回召喚した【極楽鳥】は緑のコスト1。

能力は、好きな色のマナを1つ生み出す。

これによって他者より早く大量のマナを確保し、より巨大な魔法に繋げていく、通称【マナ・ブースト】要員の代表格。

愛でてよし、食べてよしのスペシャル要員である。

「ごめん！ 逃げないで！ 食べるのなんて嘘！ 嘘だから！ ちよつとした茶目っ気だからー！」

瞬間的に飛びのいたバツパラに、追いつがるようにその手を伸ばし叫ぶ男。

それは恋人に振られてもなおしつこく付きまとう、ヘタレの見本のようだった。後に某バツパラAはそう述べたという。

時刻は分からないが、日も傾きかけた夕暮れ時。

結構な時間バツパラを出していたが、奪われた体力はずっと立っている程度のものだった。

初めはそんなでもないけど、後半からボディーブローのように効いてくるなこれ……

そんな事を考えながら、食事は空気か土でも食べるとして、寝床を確保したい。

「食事の心配しなくていいのはホント助かるな……。後は、雨風くらい凌げる場所があれば」

辺りを見回してみるものの、洞窟なんてものはないし、人が木陰に入れるくらい大きな木もない。

都合良くそんなものでもあればと思ったのだが、無いなら仕方ない。

本日2回目の召喚能力で、寝床を確保すると致しましょうかね。

「何があつたかなあ。こーういつた方面での見方でカードなんて眺めてないから、何出したらいいかさっぱり分からん」

家……家系……雨風凌げる系。

城？ はまずそうだな。大きさに。

他は……なんだろう。【土地】か【アーティファクト】で何かあつたかな。

『土地』

基本マナを生み出すことの出来るカード。つまり、このカードが多く出ていなければならないほど強力な呪文が行使出来る事になる。マナコストがゼロで召喚出来るが、通常は1ターンに1枚か場に置けない。MTGではこのカードを基盤にして様々な呪文を行使し、ゲームを展開していく。

『アーティファクト』

「魔法の道具」や「機械」のこと。多くは「魔力で精錬された道具」や「古代の失われた技術によって創られた機械」としてデザインされている。『無色』マナの代表。

脳内wiki（ただの思い出し作業）で検索をかけると、候補が幾つか上がってきた。その中で今一番良さそうなものをチョイス。

お、これ良いんじゃないかな。

そう思い、思い浮かべたカードを使用しても問題のない場所を見つけた事にした。何

も無いところにバンと唐突に建造物が出来ていたら目立つしね。

……が、体力があまり無い俺は数歩進んですぐにバテた。

おいイ、さつきまで大声で走り回ってた俺はどこへ行つた。

かむばつく！ その時の俺かむばつく！

……なんて思つても体力が戻るわけもなく。

ふと、先程から俺の周りを飛んでいたバツパラに目が行く。

「……アイツに探してもらえば良いんじゃないやね？」

——数分後、指定した条件どおりの場所を発見したとバツパラから報告あつた。

マジ早いツス、バツパラさん！

この時に何となく分かつたのが、この念話っぽい能力、どうも俺の声の届く範囲でのみ機能するらしい。

生物電話とかは出来なさそうね、とか思いながら、バツパラが教えてくれた場所へと重くなった体を引きずる様に向かつていった。

「来い！【隠れ家】！」

そこそこ大きな木の1本。

その前で俺は、決めていたスペルを唱えた。

次の瞬間、木の根元に、人間大の丸い木の扉の付いた入り口が出現する。

隠れ家の召喚コストはゼロ。

但しこのカードは「土地」と部類されるタイプのものである。

コストが無い代わりに、1ターンの1枚しか場にセット出来ない、というルールが存在していた。

この1ターンというのが「土地」というカードに対してどう機能するのか不明瞭だが、先程のバツパラと違い、召喚維持コストはかからないようだ。

これならもう少し召喚の幅を広げても大丈夫そうだと思いつつ、召喚した「隠れ家」に目を落とす。

こんなので隠れられるんだらうかと疑問には思うが、今は睡眠が俺の中で最優先だが、扉を開くと、ベットだと思わしき藁の敷き詰められた箇所があった。

そして、それ以外には何も無い。

ただ、どこまで続いているのか、この隠れ家は奥行きが半端じゃない………というより、部屋の端が全く見えない。

そういやこのカードって何体でもクリーチャー收容出来るんだったか、と。

ぼんやりその能力を思い返すが、些細なことだと思い——、と、周囲を飛んでいたバツパラが目に入った。

体力が続くのならずとこのままでいたいのだが、生憎を体がだるくなってきた。

気は進まないが、戻ってもらおうとしよう。

「ありがとうバツパラ。戻れ」

言うと同時に、バツパラは優しい声でひと鳴きして、光にかえっていった。

少し切ないが、今後何度もやる出来事でもあり、別に2度と会えないという訳ではないのだからと、気持ち切り替えた。

そして俺は、「隠れ家」に対する感想を洩らす。

「さすが【隠れ家】。必要最低限ですってか」

せめて布の布団とかベットが良かったが、安全に寝られるだけ御の字だろう。

新聞紙の1枚でもあれば大分違うんだけど、そんな便利なものは手元にない。

ならばとカードで生み出そうか考えてみるが、紙1枚の召喚とか少し悲しくなったので、気分を変えて別の方針で行くことにする。

先程考えた、戦闘力のあるクリーチャーの召喚、だ。

いざって時になって『何出そう』とかじゃ、きつと死ぬる。

「護衛してくれるクリーチャーとかいても良いよな……体力的にキツイけど。人型はちよつと怖いから、馴染みなれた……あ、犬系とか良さそうだな」

そうと決まれば脳内wikiだ。

といつても、今召喚したい犬キャラは1匹しか思いつかないのだ。

「俺が知ってるのの大半が黒色か赤色だもんなあ」

赤や、特に黒のクリーチャーはおぞましいものが大半なのだ。

好き好んでそれと一緒にいたいとは、少なくとも今の俺には思えなかった。

偏った知識だと改めて突きつけられたが、今更どうしようもない。

それに、今回は良いクリーチャーが思いつくのだ。それ以上何を望めというのか。

「つてことで、早速イメージイメージ」

今回は、犬。

継続力も考え、マナコストは最低クラスのを。

絵柄は怖いが、きつと平時にはもふもふで可愛いであろう、アイツ。

「白くて忠犬でもふもふで——来い! 『勇丸』!」

バツパラや隠れ家と同じように、一瞬で光が集まり、四散する。

略称での呼び名だったが、問題はないようだ。

そこに現れたのは、2Mはあろうかという、白い毛並みとトゲトゲの首輪がトレード

マークの「今田家の猟犬、勇丸（こんだけのりようけん いさまる）」である。

特殊な能力はない、「バニラ（由来はアイスクリームのバニラで、何も入っていないシンプルな、ということから）」と呼ばれるカードの一種だが、白manaコストでパワー（攻撃力）とタフネス（防御力&HP）が2もあるという優秀なカードだ。（例・以下の表記はパワー／タフネス \parallel 2／2とする）

MTGのクリーチャーには、パワーとタフネスという数値が存在する。

先に記述されている通り、パワーが相手に与えるダメージを、タフネスがそれを防ぐ防御力を示している。

そして、そのタフネスは1ターンの間にゼロになると、そのクリーチャーは死亡する。

2という数値は少ないように思えるのだが、MTG内で、コスト1以下でパワーとタフネスが2を超えるカードは殆どない。

あっても、それは殆どがデメリット能力を付随されている。

よって、ゲーム序盤での勇丸は中々の制圧力を誇るのだ。

召喚された勇丸は、四肢を揃え、背筋を伸ばしてこちらの顔をじつと見つめている。
——ご主人様、命令を。

そんな幻聴まで聞こえてきそうなオーラが伝わってくる。

ど、どうしよう。完全に主負け？ だ。

家来（犬）が立派過ぎて主（人間？）の面子丸つぶれでござる。

だが！ 俺は諦めない！

いつか勇丸の主として相応しい人物になるその時まで！

「【今田家の猟犬、勇丸】。以後、俺の手足となり、剣となり、盾となれ」

とりあえず形から入って格好付けてみようか。そう考えて、それっぽい台詞を言ってみただが。

……吼えるでもなく、動くでもなく。

ただ目線を細くして、勇丸は肯定の意をこちらに返す。

主人らしくカツコつけて言ってみただが、逆に格の違いを見せ付けられたような気分になる。

（やばい。おっちゃんに続いて、勇丸にまで惚れちまう！）

内心で色々な意味の涙を流しながら、寝床作りの為、周囲に散らばっている藁をかき集める。

だが、藁で寝るなんて人生で初めての経験だ。

どう使っているのか分からないので、とりあえずは体の上にかけてみるのだが、やはりというか、寝心地は最悪。

(メンタルとボディのダブルパンチっすか)

と、そんな事態に陥った俺を見かねたのか、勇丸はこちらの横に座り、背中だけが、体と体を密着させる。

——俺！ 陥落!!

思わず声を大にして叫びたい衝動に駆られるが、勇丸の背中に手をあてもふもふすることですべてそれを回避する。

(……決めた。俺、コイツずっと使っていこう)

生前じゃ一回もデッキに組み込んだ事なかったけど、それも今日までさ！

そんな新たな決意を胸にする俺とは裏腹に、勇丸はいたって忠実に周囲を警戒していたのを知るの、もう少し先の事だった。

02 原作キャラと出会う

所々に体が寒い。

けれど正面だけはとても暖かで。

温もりを求めて体を摺り寄せると、その暖かさはもそもそと動いた。

（——ああ、これ勇丸だったか……）

寝起きながらも状況ははつきりと分かった。

過去嗅いだことのないほど濃厚な土と木の匂いの交じり合う、ここ隠れ家の中。

勇丸にも匂いつてあるんだろうかと思ひ、嗅覚に集中するが、全く嗅ぎ分けることが出来なかった。

多分、匂いについての記述のないクリーチャーとかは、全てそうなんだろうと、段々と意識が覚醒していく中で結論付ける。

そう考えると、昨日のバツパラや、これから召喚する予定の天使やゴブリン、ゾンビ

にドラゴンなんかは大半が無臭なのではないか、と残念3割、安心7割の心境で判断した。

だって良い匂いの奴なんてそうそう居ないだろうし、居たとしても『良い匂いの強いクリーチャー』ってカテゴリに入る奴はまず居ないだろう。ってか俺が知らない。

先にデメリットの方から考えるなんて、相変わらずネガティブな思考してんな、と我ながら呆れた。

さて、いい加減目を開けなきゃなあって思うので、何とか瞼を押し開ける。

思考のハッキリしない寝起きの為か、もうやる事なす事の初めに『初』なんかなくて付ける気はない。

視界に飛び込んできたのは、白。

予想通り勇丸の背中なのだが、コイツは寝そべりながら首だけを起こして、出入り口に警戒を続けていたようだ。

(一晩中ずっと警戒してくれてたのか……?)

睡眠とか要らないのかもしれないと考えてみたけれど、完全徹夜を経験した時の自分と今の勇丸を重ね合わせてしまい、申し訳なさ感謝の念がこみ上げる。

そうとなれば、この気持ちを伝えておかないと。

「おはよう。警戒してくれて、ありがとう」

首をこちらに向け、勇丸は目を細める。

——お気になさらずに。

言葉や行動ではない、言うなればニュータイプみたいな、心で分かる感覚が俺の中に届く。

どうも、このクリーチャーって奴は、心で気持ちを通わせることが出来るようだ。

言葉を話せそうな人間タイプの奴はどうなんだろうかと思いつながら、別の問題を考える。

(バツパラや勇丸もそうだけど、俺への忠誠は無条件で付いてると考えても良いのかな) あたり前だとは思いますが、この前提条件がなければ俺はこの世界でやっていけない自信がある。

「召喚したのだから俺に従えー」なんて、何とかの使い魔で出てきたサイト状態だったら目も当てられない。

なんてつたつて、パラメーターだけ見ればただの人間なのだ。

間違いなく、最低ランクのクリーチャーでも殺される自信がある。

(初めに出した攻撃力のあるクリーチャーが勇丸で良かったのかもしれない)

体に被った藁を押しつけて、服に付いたそれらを払う。

朝日の差し込む唯一の出入り口の扉を開け、勇丸を先に行くよう思いを伝える。

二メートル近くある大型犬なせいか、勇丸が歩くだけで幻想的な光景が視界を埋めた。

(こりや、大型コストのクリーチャーとか見た日にや卒倒するかもな)

誰もいなくなつた隠れ家内部に目を向けるが、これといった感情は沸かない。

恐らく何度も利用するんだろうなと思ひ、逡巡。

【隠れ家】の能力を思い出した。

(そういえばそんな能力あつたな……どうなるんだろ)

実験に近い気持ちで、誰も居なくなつた隠れ家の扉を閉める。

そのまま数秒。

何の変化も起きないことに、俺は内心ガツツポーズをする。

——【隠れ家】には無限のクリーチャーを内容出来る能力があるが、その收容されたクリーチャーを開放するには、【隠れ家】自身を生贄に捧げなければならないのだ。

そして今回、内包されたクリーチャー(俺もか?)を放出し終えた今でも、【隠れ家】は依然としてそこに存在している。

(デメリットはある多少無視出来るつておつちゃん言つてたけど、これホントにどこまで無視出来るんだ?)

使う側になつた為、ご都合主義万歳派になつた俺だったが、このデメリット無視がど

ここまで通用するのか確認しないことには足元をすくわれかねない。

（これから、手札を捨てる、ライフを支払う、ターンを前払い、なんてデメリットの検討もしていかないと……）

やる事は山積みだが、今はそれよりも優先して調べたい事を思い出す。

それは、クリーチャーについているパワーとタフネスが、こちらの世界でのどの程度のものになるのか、という事だ。

バツパラは0／1。

これは攻撃力が皆無の、タフネスは最低ランクという事。

対して、勇丸は2／2。

攻撃力が2のタフネスが2という事だ。

一番分かりやすいのは、何かと戦わせるか、同じく何かを破壊してみればいい。

そう思いながら、目の前の隠れ家を消す。

お世話になりました。と、宿家になってくれた木に感謝しつつ、林を先導する勇丸の後を追う、初日にいた草原へと戻った。

「さて、まずは今いる場所の確認をしてみますか」

思い、役に立ちそうなカードを思索する。

するのだが……

「……ダメだ、さっぱり思いつかない」

ダメでした♪

……うん、音符つけてもキモさ倍増するだけだな。以後自重しよう。

脳内wikiに検索をかけるも、そこまで容量がある訳ではないので、ゲームの対戦として使用頻度が低ければ低い程に、俺のギャザに対する知識は霞んでいく。

「仕方ない、周囲の散策をしてくれるクリーチャーでも呼びましようかね、っと」

分からないのなら、分かるようにするだけだ。

例え効率が悪くとも、停滞するのはいただけない。

それに、カードを扱う良い練習にもなるのだと思い、探索に便利そうなキャラを思い浮かべる。

探索……機動力がある……足が速い……地形無視……空……

うん、鳥———というか飛行系だ。

今度はバツパラのような攻撃力のないもじゃなくて、しつかり攻撃出来る奴を出してみよう。

コストゼロの隠れ家は出したし、コスト1のバツパラや勇丸は出したから、次は2で。そして、どうせならと、あまり使われる事のない、少し捻ったクリーチャーを召喚する事にした。

「イメージイメージ、っと。来い！「エイヴンの遠見（とおみ）」！」

3回目ともなると慣れたのか、イメージもすんなりと形を成す。

そして現れる「エイヴンの遠見」。

人と鳥が融合したのような外見。

顔が鷹……だと思う。

手は大空を駆けるための翼がついていて、人間どころか牛やゴリラといった大型生物でも楽々と捕食出来そうな鍵爪が見て取れた。

天使を思い描くより、鳥人間といったコセンプトの方が合っている印象。

1/1に飛行能力と、ちよつとした能力が付随されているのだが、そのちよつとした能力はこの場では無関係なので省略。

能力には表記されていないが、遠くを見渡すことに長けている筈だ。名前的に。

召喚と同時、ドツと体力を奪われる感覚が俺を襲う。

百メートル全力疾走しましたと言わんばかりに俺は荒い息を吐く。

(こりや3マナとか出したら立てなくなるかもな)

幾ら運動不足だったとはいえ、結構疲労するなあ、と思いながら、召喚したエイヴンを見る。

俺をゆうに越えるその躯体に、思わず息を呑む。

これでガチンコの戦闘をしたら勇丸の方が強いというのだから、MTG内では不思議な現象も起こるものだ。

……そして、その不思議現象をこちらに当てはめて考えるのはやや危険。

おっちゃんが『カードの効果必ず効果を発揮する訳ではない』といていた。

これは恐らくパワーやタフネスといった数値にも関係するのだろう。

カード上では戦闘行為は足し算引き算の結果だが、実際は経験や技術、その場の状況に運といった様々な事象が関わってくるのだ。

目安の一つにするならまだしも、絶対だと思いつまむのは避けておこう。

そう思いながら、エイヴンを見上げる。

(うわあ……マジこええ)

ギンと睨む眼光に、俺の股間が竦みあがる。

きつと目つきが悪いだけだ、と強引に考え、遠ざけるかのように周りを探索するよう

言葉をかける。

「今ここにいる地点を中心に、探索を始めてくれ。ただし、人型の生き物を見た時は報告しに戻ってきてほしい」

一瞬。

しゅぼつ、つと離陸して、彼は瞬く間に空の彼方へ偵察に出かけていった。

見届けると同時、緊張と疲労も合わさった疲労感を回復させるべく、すっと地面に腰を落とす。

雄大に大空を駆ける彼に憧れを抱き、機会があつたら何かの呪文を使って空を飛ばうと心に決めた俺だった。

(いつかは100マナ以上の召喚とかやってみたいねえ……世界終わりそうだけど)
漠然と、視界から小さくなっていくエイヴンを見ながらそう思う。

100マナ以上ともなると、神みたいなクリーチャーが多い。

元々、MTGは次元世界を題材とした作品だ。

ギャザの神がどの程度の存在なのかはイマイチ掴めないが、間々、次元崩壊で星一つどころの話ではない事態が起こっている。

そんな事象を引き起こす存在を召喚出来るかもしれないというのだから、そりやあてンションも上がるってもんよ！

俺TUEEEとか誰もが1度は夢みる出来事な筈だ。

ただ俺の体力がそこまでもたないので、気の長い話ではあるのだけれど。

(1マナが鳥とか犬で10マナ以上が神クラスだとしたら……単純に2マナだから1マナの二倍強い、とかって訳でもないんだろ(うな))

その辺りは今後分かるとして。

お日様も真上に昇ろうかという時間帯。

クリーチャーとして召喚されたせいなのかは分からないが、周囲を警戒している勇丸は空腹なることはないようで、尋ねてみるも、大丈夫だという意思が返ってくる。

食費は掛からなくていいなあと漠然と考えながら、勇丸の様子を観察しつつ、何をするでもなく周りの風景を眺めながら、考える。

クリーチャー2体。1マナと2マナの計3マナ維持とは、中々に大変であることを実感した。

感覚としては、やや早歩きをし続けている位の疲労感。

一応は体を休めながら行っているのですが、そこまで苦ではないのだが、いつかは体力でもレベルでも何でもいいから上げて、召喚出来る範囲を広げていきたい。

考えをまとめつつ、ごろんと大の字に体を横たえる。

見上げた景色は一日目と同じで、青い空に白い雲。緑の絨毯はふかふかで、昨晚お世

話になった林には、鳥達が時折飛び出す様子が窺えた。

（——平和だ）

心からそう思う。

能力の把握とか、これからどうするのかとか。

そんな思いすら、この景色の前では豆粒のような考えなのだと思感させられる。

ここは『東方プロジェクト』の世界だとおちちゃんと言った。

だが、だからといって別にそれらに登場するキャラクターに遭遇しなくても良いのではないか。

教えられた時には『原作介入ひゃっほー！ 俺好みのストーリーにしてやるぜえ！』なんて脳内で息巻いていたのだが、今の俺には飽きることのない感情と、何でも食べられる能力が備わっている。

ぶっちゃけ、体調さえ崩さずに籠れるのなら、幾年だろうと問題ない。

何かカードを使って、日が昇っている間は大地を、夜は星を眺めている状況を作るだけで、今の俺は満足なのだ。

それに、原作には原作の流れがあり、こと東方プロジェクトには悲しい出来事は多少あるが、幻想郷に集う時には、大体が円満になっている。

——原作に限らず、世界では悲しい出来事が多々起こっている。飢餓や戦争も、当

然の事ながら。

だが、俺にはそれらは興味の対象外なのだ。

そこに俺がいなくてもなるようになるし、ならなかったら滅んだり、他の人がどうかする。

世の中、そんなもんだった。

たかだか数年社会に出ただけの俺だったか、そんなもんだったのだ。

情もなく、思い入れもなく、繋がりもない何かの為に、少なくとも俺は動けない。……いや、動きたくない。

『力を持つ者の定めだー』とかクソ食らえ。

それは他力本願というものだ。

頼ってきたのならいざ知らず、こうべき、なんて押し付けがましい考えは、受け入れられない。

だから、このままゆったりと自然の流れに身を任せて――

突如、座っていた勇丸が四肢を広げ、何かを威嚇しながら、俺の前に盾になるかのようになり立ち塞がる。

低く唸り声を上げる勇丸に、俺の思考は一気に警戒を最大値に引き上げた。

氷柱を背中に入れられたように、一気に背筋が凍る。

天気の良い、ただの見晴らしのいい草原。

それに寸分違う事無く、俺の視界には、ただの草原しか映っていない。

けれど、勇丸は何もない筈の一点に顔を向け、全身の毛が逆立っている位に警戒をしている。

(何かが……来ている……!?)

見えない何か。

俺が——人間が知覚できない存在。

決して真つ当な生き物ではないだろう。

(くそっ！ 東方の世界ならば、妖怪やら精霊やらが普通に跋扈(ばっこ)していたのを失念してた！)

思うや否や、チグハグながらも何とか思考を戦闘方面へと切り替える。

(正体不明。攻撃……は不得策。防御を最優先に)

敵の正体を見破るのは後回し。

(今の状況で使えそうなカードは……強化……【エンチャント】か？ よし、あの二枚でいい！)

『エンチャント』

呪いや魔力の付与などの具象化された魔法のイメージ。個別と全体に効果を及ぼすものがあり、前者は加護や呪縛、後者は結界や聖域といったイメージが似合う。

(カード、「不可侵(ふかしん)」「鏡のローブ」選択。対象は俺！)

共に「エンチャント」呪文であるそれは、前者は付けた者は受ける全てのダメージをゼロにし、後者は装備したクリチャーを呪文や能力の対象から外す……対象に選ばせない能力を持つ。

本来プレイヤー(俺)とクリチャー(勇丸)は別扱いなのだが、クリチャーのみを収容する隠れ家へ入室出来たことを考えると、俺はクリチャーでもあり、プレイヤーでもある性質を持っているのか、それともそういった仕様は無視なのか。少し首をかしげるが、今は無視。

で、前者は俺の知る限り、アニメとか漫画じゃよくある能力かもしれないが、後者は東方世界にとっては致命的の部類に入るかもしれない。

相手を燃やしたり、境界を操ったり、破壊したりなど、他に方法はあるだろうが、こちらに干渉する手段をかなり減らされるのだから。

無効化などといったレベルではない、それを選択肢に入れることが出来ないのだ。

その能力名は、MTGでは「被覆」。

あるいは、決して触れられないことを意味する「アンタッチャブル」と呼ばれている。ただMTGではそれすらも割と簡単に対処する方法が多々あるので、安心は出来ない。

というのも、一番楽な方法として、単体ではなく全体に効果を及ぼすものにはこの「被覆」は効力を発揮しないからだ。

相手がどの程度の能力なのか不明だけれど、もし個別の俺を狙えなかったのなら、やっぱちの全体攻撃とか無差別攻撃みたいなのをやられて、その攻撃が通用してしまうかもしれないので、油断は禁物。

【不可侵】は外見上の変化はないが、【鏡のローブ】は名前の通り、所々が鏡面になったローブだ。手鏡を縫い合わせた服、とっていいかもしれない。

……ただこのカード。この手の戦闘では致命的な欠点があるのに気づくのは、もう少

し先の話。

傍から見たら、突然衣類を着替えたように見えるであろう俺に、近づいてきた姿の見えない何者かはどう思うのだろうか。

不気味に思っただち去ってくれるのならよし。

仮に襲い掛かってきたのなら、個別のクリーチャー破壊カードで対応しよう。即死にはならずとも、それに近い効果が見込めるはずだ。

しかし、疲労感がマジやばい。

【不可侵】は2マナ、【鏡のローブ】は1マナ。

計3マナの連続使用で、クリーチャー分も合わせるとそのさらに倍の6マナになる。

切羽詰った体力は、俺への死を否応なしに連想させる。

(きつつ……仕方ない、エイヴンには悪いけど、戻ってもらって余力を稼がないと)

今は目の前の事態を解決するのが最優先。

念話も届かず、いつ戻ってくるかも分からない状況では、何の足しにもならないのを痛感する。

心の中で謝りながら、エイヴンを戻すイメージを実行。

どこにいたのかも不明だったが、先程召喚した時から続いていた疲労感の一端が消えるのが分かった。

これならもう少し粘れると思いが、勇丸が見つめる先に目を凝らして、けれど俺はその場から動けずにいる。

というのも、状況の問題もそうなのだが、疲労が限界近くに達していた今の俺は荒い息を繰り返す、まさに突けば倒れる存在だ。

鼓動が煩い。

ドクドクと、心臓の音が痛いくらいに耳に響く。

唸り声を上げ続ける勇丸の後ろに隠れて数秒。……いや、数十秒だろうか。

時間の感覚が分からなくなっていたが、カードを使ってから少し間が開いた。

勇丸がずっと唸り続けているのだからまだ目の前には居る筈なのだが、やはり俺には姿を見ることは適わない。

(解析系のカードってあったかな……)

望遠鏡とかメガネとか、そんな感じのカードが解析系なのだろうか。

それともゲーム的な視点で考えて、相手の手札を見る系？

守りのカード二枚が展開されている状況の為か、自身のスナミナと相談しながら、先程よりはゆつくりと思考を巡らせる。

——いや、巡らせようとした。

まるで、そんな思考を遮るかのようにな、

「ここへ何用だ、人間」

……俺の胸に届くか届かないかという所か。

小さな体からは想像も出来ないような威圧感を放ちながら、黄金の稲穂を思わせる髪を独特な帽子の隙間から覗かせて。

何も無かつたその空間。

さも当たり前のように、

(くそっ！　なにが『あーうー』だ。ネタに走つた奴出て来い！　そんな存在じゃねえぞ
!?)

土着神の頂点との二つ名を持つ、日本最高クラスの神が一人。

『洩矢 諏訪子』が俺の前に降臨した。

03 神と人の差

「……………」へ何用だ、人間」

二度目の問い。

まずい、神様を無視したばかりか再度問い直させちやつたよ！

一瞬で混乱した脳内を正常に戻す。

だが。

(ぐぬっ、対面してるだけでもメンタル削られる……！)

というか息吸えねえ！

ガリガリと、自分の中で気力が削がれていくのが実感できる。

人生初であろう神様との対面が、まさか日本全国の崇り神のまとめ役だとは夢にも思わなかった。

何とか喋らねばと声を出そうとしてみるも、まるで窒息する魚のように、口をパクパ

クと動かすだけにしかなっていかない。

まずいまずいまずい！

もう、何十回叫ぶんだってくらいまずい！

このまま相手を放置プレイし続けたら確実に呪われる！　つてか殺される！

しかし、口が動かない。

手も足も、いや、体中から滝のような汗をかいているのが分かる。

もはや自分が地面に立っているのかも分からなくなりかけた頃、こちらを見つめる神の眼光が、キツと細まった。

(あ……俺死んだ……)

噴火する火山を、もしくは降り注ぐ隕石の群れを見たような、諦めの境地とも言える心境の中、

「……………ふむ、これで話すことが出来るか、人間」

俺にとつての小さな死神様は、その威圧感を緩めてきた。

途端、俺は膝から倒れるように、四つん這いになる。

体中に酸素を取り込むように、過呼吸とも言えるくらい肺に空気を取り入れる。

(た、助かった！　何とか俺生きてる！　神様仏様！　何より勇丸、ありがとう！)

とりあえず生きている事へ感謝をした後、今度こそと対応すべく、今し方、感謝を捧

げた神様へ顔を向ける。

訝しげにこちらを眺める、幼い女の子がそこにはいる。

こんな容姿でも、威圧するだけで俺は死にそうになったのだ。

人間と神とはこれ程の差があるのかと畏怖の念が込み上げてくると同時、自分の愚かさに怒りも湧き上がってきた。

(話にならねえ。攻撃でも能力でもなく存在で格が違うんだ。不可侵でダメージ無効つての、肉体面だけだし——いや、そもそもダメージだとすら認識されていない事象なのか。それともダメージゼロは神相手にや効果ないのか……こんなんじや、俺TUE EEなんて出来るわけないじゃないか)

今までの考えを悔いると共に、まだ震えの抜けない足に力を込めて、神様と向き直る。こちらを興味深く観察するかのよう、じつと見つめるその眼にまたも意識が薄れそうになるが、何とか堪える。

相手は神様。雲の上のお方。

ならば古来よりの例に習って、低姿勢で対応を試みよう。

——というか、だ。

さっきの心が折れかかって、反抗とかタメ口とかなんて考えらんねえだけだったりする。

「……大變失礼致しました。こちらへは昨日着いたばかりでして。あまりの景色の雄大さに心打たれ、眺めていた次第でございます。出て行けと言われるのでしたら、すぐにそう致します故、何卒お許し下さい」

立ち上がつてすぐ、俺は再び膝から地面に、手、頭と付けていく。

この頃の日本——諏訪子がいるのだから日本だろう——には土下座はあるのか疑問だったが、これが俺の中での精一杯の謝罪の形だ。

そんな俺の前に立っていた勇丸は、雰囲気を観察したのか、俺の斜め後ろに回り、そこに座る。

「良い者を連れているな。犬畜生など、狗神しかまともな者なぞおらんと思っていたが。私に勝てないと見るや、即座にお前を逃がそうと機会を窺っていたぞ」

面白いものを見たかのような声色で、俺に言葉を投げかけた。

言われ、勇丸に視線を向ける。

こちらと目が合い、大丈夫ですか、と意思の確認をしてくるそれに、俺は今の精一杯の感謝の気持ちを伝えた。

「さて、人間。お前の事情は分かった。だが、ここは我が国の中でも、聖域とされ、誰も立ち入ることを許されておらぬ土地だ。……首を刎ねられて当然。そんな所へ踏み込んだお前は、一体私に何を捧げて、その許しを請おうと言うのかな？」

さ、捧げるものって……。

何だろう、「アーティファクト」ならいっぱいあるけど、それで良いんだろうか。

それとも便利なクリーチャー？ はたまた使える「エンチャント」？

候補は幾つもあるが、大雑把な要望過ぎて、何を提示していいのか判断がつかない。

よって、失礼になるかもしれないが、下手なもの差し出して『魂よこせ』とか言われるよりはマシだ。

何か要望がないか聞いてみよう。

「……恐縮ではございますが、何かご要望があれば、可能な限りそれに近いものを捧げたいと考えおります」

ふむ、と一言。

まるで玩具を見つけた子供のような目になった神様は、俺に

「では、お前の魂をもらおうとしようか」

にやりと笑みを浮かべ、そう告げた。

超！ 藪！ 蛇！

地雷回避しようとしたら、グラウンドゼロでした！

あかん！ やばいやばいの六十四乗だ！

自ら墓穴とか空気の読めない主人公だけかと思ってたYO！

「お、恐れながら……そればかりは……」

消え入りそうな声で何とか訂正してもらうと、尋ねてみる。

すると、それを見越していたかのように、この外道神様は再度、提案してきた。

「では、そちらの忠犬を貰おうか」

……え、ちゅう……けん……？

「お前の後ろ控えている、その犬のことだ。その忠義を尽くす姿勢を見て、私も欲しくなったのだ」

ニタニタと、段々と笑顔の性質が変わっていくのが俺にでも分かる。

「まさか命を助けられ、1度私の要望を拒んだばかりか、2度もそれを繰り返すつもりはなからうな」

一転。

今度は笑みなど一切なく、先程と同じような、威厳を放つ存在となっていた。

再び俺の前に立ち塞がる勇丸。

先とは打って変わり、唸り声は今にも飛び掛らんばかりの音量にまだまっている。

そして俺はいえ、やはり息も吸えず、目の焦点すら定まらない状態に陥っていた。

——そんな中、1度体験したせいかな。

俺の思考だけは、この状況を打開する為だけに巡る。

勇丸を差し出す？ となると当然、アイツはこの神様が飽きるか死ぬかするまで返ってくることはない。

……いいじゃないか、数あるカードの中の一枚だ。

他にもカードは山のようにあるし、もし勇丸を取り戻したいのなら、差し出し、逃げた後で再度召喚すればいい。

だが——だが待つて欲しい。

そう俺の心の一部が訴える。

その一部とは、怒りと呼ばれる感情である。

相手は神様で、そして、崇り神の頂点だ。

西洋の神ならいざ知らず、こんな絆を引き裂くような真似をするものなのだろうか。

伝説や言い伝えは等は、羽陽曲折し、捻じ曲がるものだろうが、それでも日本という国は、その神々達は素晴らしい方々だと——そう、思いたい自分がいる。

日本嫌いの国民や政治家を見ていたせいかな、俺は日本という国に一定以上の崇高な何かを見続けていた。

それは無条件の信頼であり、信仰であり、誇りだ。

それは今でも俺の中にあるし、目の前の神を見たことによつて、それはより強固な確信へと変わっている。

しかし。

その信仰は、俺に害を与えないことが前提なのだ。

威圧感のみで死にそうになったことは、こちらが不法侵入したのだからと思つていいた。

けれど、自分のみならず、勇丸を物のように『寄越せ』と言つてきたのを、俺は許せなかつた。

(日本の神様つてのは、もっと人間のことを考えてくれるもんだと思つてたけどよ……) その結論に達すると、途端に威圧感が軽くなる。

いや、自身の怒りでそれらが気にならなくなつたと言つた方が正しい。

憤怒という名の覚悟は俺を炊き付け、後先考えずに、この口を動かす。

「申し訳ありませんが、それは出来かねます」

「断ると申すか。ならばお前の魂を貰うことになるが、構わぬか？」

「その忠犬——勇丸を選択肢に入れていなければ、それも致し方ないと考えておりました。ですが、あなた様の行動は、とても神とは思えません。まるで……まるで暴君、いええたちの悪い妖怪そのものに御座います」

「……吐いた唾は飲み込めんで、小僧」

「——小僧で結構。生憎と親の育て方が良かったんでね、踏み込んじやいけない領

域つてのは心得てるつもりだ」

気分のせいか、口調まで荒くなる。

「小さきことよ。神と人間を同じ尺度で測ろうなど、愚かな」

「だったら人間から完全に離れろつてんだ。関わっている以上、お前のそれは我侷な言い訳だと思いがね」

もはや言葉では語らず。

辺りの空気がズンと重くなる。

青い空の、白い雲で、緑の大地と何一つさつきと変わらない光景は、それだけで一遍し、処刑場へと姿を変えたようだった。

神様の前に死が付いてしまった相手に、俺の頭では、暴走気味に高コストのクリヤーチャー群と凶悪スペルの列が並ぶ。

疲れや制限など知ったことか。

ここままで啖呵を切ったのだ。もはや行くところまで行く覚悟を決めた。

それに、俺の物語はまだ序盤。

開始直後の死亡リトライなど、ゲームでは定石。

押しつぶされそうな世界で、俺は自称神様を睨みつける。

軽く俯き、帽子のつばで目の見えないそれは、怒りで暴れだす一步手前の火山に見え

る。

そして、俺がクリーチャー群の第一陣を召喚しようとした矢先――

「――ぷっ、あははははは！ 凄い凄い！ あたしの神気にここまで耐えられる人間がいるなんて！ しかも向かって来ようとするじゃないか！ いやあ長生きはするものだねえ」

なんか今までの威厳をキングクリムゾンしたような出来事に会ってしまった。

……はっ!?

(これはあれか!? 『ちよつとからかってやるか♪』的なシチュエーション!?)

ダメだ。このシチュエーションって第三者から見たらまる分かりだけど、当事者になると全くそんなこと考える余裕がない。

威圧感とはハンパじゃないからね！

あれだ。

上司とか得意先とか先生とか親から全力で説教食らってる時に、『実はうつそで〜す』な相手の状況を思い浮かべられる余裕なんて無い感じ。

本日二度目の腰砕けになった俺は、今更ながら、自分が立ち向かおうとしていた存在の大きさを知る。

膝はガクガク汗はダラダラ、貧血でもないのに目の前がクラクラしやがる。

今まさに orz を体言している俺だったが、まるで慰めるかのように、俺の腕に勇丸が体を擦り付けてきた。

あんた、ほんま優しすぎるねん！

思わず体全体をもふつと抱きしめる。

何をするでもなく、成すがままにされている勇丸だったが、尻尾が少しだけパタパタと嬉しそうに左右に振られているのを俺は見逃さない。

(これか！　これがツンデレというものか！　(注・違います))

ようし分かった。もう今日はお前を放さんぞその毛がツヤツヤになるまで撫で回し

t

「気分が乗つてるとこ悪いんだけど、人間、そろそろこつちも相手してもらえるかね」
「はい！　失礼しました！」

我ながら素晴らしい反射神経だと思う。

一瞬にして開放された勇丸はこちらの横に控えるように座るが、尻尾が心なしか寂しそうに垂れ下がっている。

すまん、後でいっぱい遊ぼうな。

「さて人間よ。実を言うとな。私はこの地にお前が入った時から、お前のことを眺めていてね——その、式神か妖術か分からないが、お前の使う奇跡に興味が沸いたわけな

のだよ」

「あ……と……この、今着ている服の事でしょうか？」

「誤魔化すでもいいけどね、お前が前にしている私は、崇り神と呼ばれる存在だと思つていい」

分かる？ 崇り神。

そう、小首を傾げ、くりくりとした目をこちらに向ける自称崇り神。

いやいや、あんた崇り神つて言うよりそれを操つてる立場でしょうが。

行動は可愛いのだが、話の内容は物騒な事この上ない。

ええ、あなた様の素性に関しては重々承知していますとも。……前世で。

「すいませんでした。お答え出来る範囲でしたら全てお答えしますので、どうか崇らないで下さい」

本日二回目の土下座だったか、一度目よりは真面目度が大幅に下がっている。

今の状況を例えるなら、浮気を謝る夫、というところだろうか。

情けない限りである。

「ふうん、それでも全部は答えてくれない、か。うん、ま、いいよ。聞きたくなったら絶対に聞かし」

ぶるりとこちらの背を振るわせる発言をして、神様——彼女は、近くにあった子供

程ある岩の上に歩き出す。

岩まで着くと、その上にびよんとひと乗り。

こちらを向き——ちよっと見てみたかった俺的東方名物のうちの1つ。カエル座り？ をして、俺を見下ろした。

(生ケロちゃんだあ……スカートの中は見えないんだなやっぱりゲフンゲフン)

「お前は人間にしては体が大きいからね。見上げるのは首がキツイし。それに私、神様だし。こういう格好のが、それらしく見えるでしょ？」

それはそうだが、だからって俺に同意を求めないでほしい。

この様子じゃ違うと答えても、『これが神様つてもんさ』ってな具合に押し通されそう。

彼女に習い、俺も彼女の前で胡坐を組む。

少し見上げる感じで、態度は悪いが、これくらいならば長時間でもいけそうだ。

「では人間よ。楽しませてもらったお礼に、まずは私から名乗ろうじゃないか」

やっぱり目上……というか神様から名乗らせるのは失礼に当たるんだろうな、今のセリフから察するに。

この時代、何が失礼に当たるかなんてさっぱり分からんぞ。

「私は、洩矢 諏訪子。ミシヤクジ——崇り神達を統括している、土着神だよ」

出会った時とは一転、コロコロと鈴を鳴らすように、軽やかに、諏訪子……様は告げた。

こつちが彼女の素なのだと思います。

だって神モードで対応されたら俺の魂魄消えそうだしね！

ただ、俺はここで、やっと忘れていた事を思い出した。

なぜ忘れていたんだと思うだろうが、そんなの分かっていたら、もうとっくにその疑問を解決していた。

今まで忙しすぎたせいで、考えが及ばなかったのだろう。

だから、今の状況を、俺は諏訪子様に素直に告げる事にした。

「お初にお目にかかります。昨日こちらの地に流れ着きました人間で、名前は——あ
く……ありません」

「……へ？」

告げた答えに対しての返答は、神様にしては、あまりに間の抜けた声だった。

04 名前

太陽が地平の彼方へ消えようとしている。

まだ時間はあるものの、大地を燃やすその光に、俺はまた心を奪われる。

この光景を何度見ても飽きる事はないというのだから、この倦怠感の制御が出来る能力は、実は何にもまして代えがたい能力なのではないかと思う。

「へえー、じゃあお前は色々な奇跡を起こすことが出来るんだ」

「奇跡って言い方は大げさだと思えますが、考え方としては……間違っていないかと思えます」

今、俺の前には、洩矢 諏訪子が——違うな。

勇丸に乗った諏訪子様が先行していた。

『他の民への配慮もあるから、様はつけてね』ってことだったので、何となく諏訪子様と呼ぶことにした。

装備中の「不可侵」と「鏡のローブ」を解除する。

その時に気づいたのだが、この「鏡のローブ」、俺が「アンタツチャブル」になるのであって、「鏡のローブ」が「被覆」になるのではない。

よって、精神攻撃とかなら効果を発揮しそうなのだが、よくある雷とか炎とか氷とか、生身の部分で対処しないとローブに当たるのだ。

しかも名前の通り全面鏡なもんだから、恐ろしく耐久性が悪い。……動いた時に何かに当たったのだが、パキンと嫌な音がした時は中々に焦ったのですよ。

しよっぱなから選択肢間違えてんじゃん俺、と次に生かせる教訓を学べた事に感謝した。

そんな中、『日も暮れそうなので私の国に来ないか』って話になったので、尽きぬ興味に動かされ、帰宅する彼女のご同伴をしているというわけだったのが……。

「乗りたい」

そうストレートに言われたのは、2人と1匹で少し歩いていた時。

諏訪子様の後ろ——俺の前に居た勇丸を指差して、そうのたまってくれた。

連続召喚で疲労感MAXのダレダレな俺に何言ってくれちゃってんのこの神様。

(なんてこった！俺だって乗ってみたいのに！重いから乗ったらきついだろうなあ。とか思ってたやらかったんだぞ！)

俺より先に乗るのは許せん！けど崇られてもイヤだしなあ。

……そうだ、遠まわしに勇丸に拒否させてみよう。

「私には何とも……。一応、勇丸に尋ねてみませんと」

「あ、それなら、お前が良いなら構わないって言われたよ」

勇丸ううう!?

既に根回しが済んでいたとは知らず、最後の1押しをしてしまった自分を責める。

というか諏訪子様、動物と話せるんですね。

しかも話す姿を見ていないことから、念話じゃないかと推測できる。

ホント神様って何でもありね。

こっちは召喚者だからってチートな理由で意思の疎通ができるだけってのに。

まあ思考が読まれていないだけ良しとしよう。

リーディング機能なんて備わってる日にゃあ恥ずかしくてお天道様の下を歩かせ

ん。

理由？

エロいこと考えられないからだよ！

……さとりさんに出会ったら詰むな、俺。

「つてことだから、えっと、勇丸。宜しくね？」

不安そうに声をかけた諏訪子様に反応して、勇丸は体を寝かし、伏せの状態になる。乗れ、つてことなんだろう。

行動だけで察することが出来る。

「ありがと。えへへ、よ、つと、つと。お、お。……おお、ふかふかだあ」

少しギクシヤクシヤしながら、勇丸に諏訪子様は跨った。

それを確認した後、その忠犬はゆっくりと四肢を伸ばす。

一気に視界が高くなり、俺と同じくらいになると、諏訪子様は満足そうに顔に笑みを作った。

うう、良いなあ、ふかふか。

犬に跨る女の子つてのも可愛いと思うが、今の俺は「もふもふ」女の子だ。興味の対象が違う。

「よしよし。それじゃあ私の国へしゅっぱーっ！」

明るく宣言しながら片手を挙げるその姿は、年相応の女の子に見えた。

それが、大体一時間くらい前の出来事だろうか。

眺める先には、幾つかの白煙の筋が見える。

その下には木で作られた家と、かやぶきで作られているであろう、藁の家リアル版が多数点在していた。

(おー、田舎へ泊まろう(番組名)、なんて目じやない田舎だな)

感想がずれているとは思うが、なにぶん仕方のないことなのだ。

俺は、生前はコンクリートジャングルから1度も出たことのなかった。

あつたとしても、それは模造品。

テーマパークやアミューズメント施設の一区画でしかなかった。

ゆえにこの光景は、テレビやスクリーンの中だけの————言ってみれば、幻想の景色そのものであったのだ。

(そういうやこの時代つてトイレは汲み取り式か？　じゃあやつば手とかでケツ拭くのか？　そもそもトイレなんてあるのか？)

少し下品な思考だが、今後の大切なことだ。

そう思つて便意に気を集中してみるも、よくよく考えると、まだ一度も、尿意すら感じていない。

(まさか空気とか主食にしていると出るもんは出ない、と？)

この生理現象は人間とは切れない間柄の1つである。

そこまで考えると、目の前にいる1匹と1神にそれを当てはめようとするが……。(やめとこう、今俺は自ら墓穴を掘りにいつている)

嫌な予感かとまらず、断念。

ため息を一つついて、視線を上げる。

すると大分国の近くまで来ていたようで、柵のような囲いが周囲に広がっていた。

恐らく、国(村?)を1周している……のだろう。

一部に隙間が開いているので、あそこが出入り口なのだろう。

もののけ姫で見たなど何となく思っていると、門と思われる出入り口の前で、諏訪子様が、びよんと勇丸から飛び降りて、俺の目の前に立った。

まるでおせんぼをするように道を塞ぎ、こちらの顔をじつと見つめられた。

「人間、まだお前には名が無いと言ったね」

「ん、ですね。……こつちに来る前にはあったんですけど、その名は置いてきました。本当は出発前に決めておこうと思っただけ……」

「それじゃあこれから名が決まるまで、ずっと私は『お前』とか『人間』なんて呼ばなきゃいけない。私の国に入るんだ。他人との関係を築くのに無名じゃあちと難儀だろう。で、だ。ここは、一つ私がお前に名を送ろうと思うんだが、どうかな？」

突然のサプライズに、思わず目が点になる。

「……え？ ……これといった案もなかったんで、こつちとしては願ったり叶ったりですけど、良いんですか？」

「なになに。私は神様。民の願いを叶えるのが仕事の1つだよ。入国祝いだとも思っ受けて取ってくれると私は嬉しいな」

そう言つてニコリと笑う彼女を見て、どこか胸が締め付けられるような、それでいて暖かくなるような思いが広がる。

何が琴線に触れたのか分からないが、思わず涙が溢れそうになった。

(神様とか関係ねえ。……諏訪子様、めっちゃ良い人や)

言葉では表せない感情が心を占めて、それでも足りずに、その感情は涙となって溢れ出そうとしている。効果音としてはウルウルって感じで。

けれど、俺の心がそんな涙する俺を恥ずかしいと思ひ、必死にそれを堪える。

神様とはいへ、こんな幼い女の子の前で涙するのは、男としてのプライドが許さないようだ。

「それじゃあ、お願いします。カツコイイ名前にして下さいね」

「どうだろうね。ただ、私は似合っていると思うよ」

「そのお言葉だけで充分です。——洩矢 諏訪子様、俺に、名前を下さい」

カツコつけようと思つても俺には無理があつて。

ならばと気持ち素直に言葉にする。

これから一生付き合っていくものなのだ。

しかも、それが日本有数の神様からの賜りものだつてんなら、気に入らないことはないだろう。

ニコニコしていた彼女の顔は、笑顔のまま、けれど、とても真剣なものになる。

威圧感とはまた違つた……：……神気とでも言えればいいのか。

崇め、奉る存在だと思わせるオーラが滲み出していた。

「——お前は私が見てきた中でも、さらに特別な奇跡を扱う。

それは、神々の中ですら異様と呼べるものだ。

鳥の、鳥でも人でもない者の、狗の——様々なものの呼び子。

まるで万物を生み出すかの如くその力を駆使するお前は、人間でありながら、まるで幾人もの生命を統べる神のようだ。

これらを組み込み、『多種多様な万物』という意味の、けれど、八百万には届かずとも、私に挑むその姿勢から、それに届き、いつかは追い抜かんとするその姿を示す——
『九十九（つくも）』と。

その名をお前にあたえる」

神なんて、生前の俺が聞いたら鼻で笑うだろう。

けれど、今ならすんなりとそれを受け入れられる。

宗教とかは、切羽詰って何かにすがりたい奴か、金儲けを企む奴しか居ないのだろうと頭ごなしに馬鹿にしていた。

だが、実際はどうだろう。

今の俺には、この目の前にいる彼女が神かどうかなんて些細な事なのだ。

決められぬ俺に名を与え、優しく微笑んでくれる。

言葉にすれば、たったそれだけ。

だがこの少しいことが、一体何人に出来るのだろう。

理屈は分からない。

けれど名を告げられた瞬間、俺の胸にはストーンと、彼女の言葉がはめ込まれたのだ。

まるで失った何かを取り戻せたような、そんな気持ち。

ご大層な宗教名文なんて知らないが、彼女になら——この洩矢 諏訪子という人格者に対してなら、その信者になったとしても、それに仕える人物に出会ったとしても、馬鹿にするでなく、鼻で笑うでなく、純粹に、『ああ、素晴らしい方に仕えているのだな』と思えるだろう。

——日本人とは、本能的に誰かに仕えたいと思っている。

なんて発表した学者もいた。

それは、彼女のような神々が、この狭いながらも広大な日本という土地を治めていたという名残なのかもしれない。

「謹んで……拝命させていただきます……」

ちくししよう、ガチで泣き顔モードだよ……。

俺の震える声にも笑顔を崩さず、彼女は小さな体を大きく広げ、ただ自力の声だけで、声高らかに宣言した。

『洩矢の国』へようこそ、異国の旅人、九十九。私はお前を歓迎しよう」

05 洩矢の国で

国の中央に位置する、彼女が住む社の一角。

諏訪子様は、そこに俺を連れてきた。

仏像とか置いてありそうな中央の間に、団体さんで固まっていた、国のお歴々っぽい人物の前で自己紹介をしてくれた。

思ってたよりも中々広い。

二十人近く集まってるけど、その三倍くらいは収容出来そうな大きさだ。

何でも、丁度統括している各地の代表が現状報告をしに来る日だったのだから。

その時の諏訪子様は、俺と出合った時と同じように、神様らしい口調で説明をする。

その時も少しではあるが威圧感を放つ感じを漂わせていたので、ただの自己紹介が神

託を授かる儀式のように思えた。

(あ。ように、というか、まさに神託か)

……ただ、自己紹介の際の『これは私の使いである』ってのは一体どういうことだね
オイ。

確かに前は神々しい雰囲気と名前を貰えた感動から、気持ちが感謝フルブースト
入っていたが、だからってお前にや仕える気はまだ無いぞ。

しかも、

「物の怪や妖怪が現れた時は、この九十九に言え」

とか偉そうに(偉いです) 言い放ちやがった。

やめてくれおっちゃん達！ 俺に向かって『ははあ！』とか。格好がGパンとかT
シャツだから異様だけど、平伏す人じゃないから！ どこのお奉行様よ!? むしろ逆の
立場ですから！

……もういい。公の場じゃない限り、お前なんて敬語はいらねえ！ 呼び捨てだ諏訪
子………さん(無理でした)、と心に決めた瞬間でもある。

紹介が終わり、お歴々の方々が部屋から全員退出するのを見届けて、辺りにはもう聞く者が誰も居ないだろうと思ひ、俺は諏訪子を問いただす事にした。

「アー、スワコさん？ 俺、確かに色々クリーチャーを召喚出来るけど、何だか妖怪退治っぽい仕事を俺に任せるみたいな発言をしませんでしたか？」

「うー？ くりーちゃーつてのが何なのか分からないけど、呼び出していた鳥やら勇丸やら、鳥と人の中間のような奴らのことだよな？ だったら問題ない。だって九十九、それ以外にも荒事に向いている奇跡を起こせるんでしよう？ じゃなかったら、勇丸を貰おうとした私と敵対しようなんて考えるはずないしね」

もはや疑問符すら付かぬ確定宣言。

俺的東方名物の一つ、『あーうー』の『うー』だけ聞くことが出来た。お前はレミリアかつつうの。

おー、生『うー』だ。なんて感想は一瞬にして消え去り、食って掛かろうとするが、何が可笑しいのか諏訪子はこつちを向いたままニコニコと笑ってやがる。

この仕草といい『うー』発言といい、毒気を抜くのを図ってやってるんじゃないかと判断し、それに見事に引つかかっている自分を見て、落胆する。

実際、見事に俺の毒気は抜かれているのだから。

そして、そんなこちらに止めを刺すかのように、

「……否定しないってことは、その通りってことだね。じゃ、それ系の荒事は任せたら」

そう宣言されました。

……なにか？ 俺は誘導尋問に引つかかったのか？

情けなさを通り越して、涙が出そうだぜ！

うじうじと、orz ポーズをする俺に、勇丸が元気出せとばかりに体をすり寄せる。

ああ、お前だけだよ俺の味方は。

もうちよい熱血入った人なら『分かりました！ この私めにお任せ下さい！』とか言つて、戦闘して経験値積んでレベルアップしてくストーリーもあるだろうが、俺は基本ものぐさ。

避けられる面倒ごとなら可能な限り避けて通りたいものだ。

「え？ だからこれは避けられない出来事なんだって」

「……俺の思考を読まないで下さい」

「そんなことは出来ないよ。ただ、顔にそう書いてあったから」

どんなに詳しく俺の顔に書いてあるってんだ。

「……ただ、さ。私の国は段々と大きくなってはいるけれど、それに対して私の守れる範囲がまだ狭いんだ。だから、九十九にはその補助をしてもらいたいんだよ」

「……こう見ても俺、一度も生物を……はしないな。虫とか魚とか殺してるし。……一度も大きな生物を殺したことないんですよ？ 妖怪退治って、ようは妖怪の殺害でしょ？

追い返すとなでなくて。ずぶの素人で勤まるようなもんなんですか？」

「子供でもあしらえるようなものいれば、大人が何十人いても敵わない奴もいる。命の危険は常にあるよ。けれど、誰かそれをやらないと、誰かが食べられちゃう。幾らでも言い方はあるけど、有体に言えば、九十九に犠牲になってほしいんだ」

幾らでも言い方あるのなら、せめてもつと口当たりの良い言葉で勧誘してほしかったです。

しかしまあ、変に真実をぼかして言われるよりは、よっぽど好印象です、諏訪子さん。ただ、それと俺のやる気が比例するってわけではないのは、ご了承下さいって感じだが。

「そんな嫌そうな顔しなさんなって。なあに、私の国だと分かって侵略してくる奴は、強い妖怪にはいないよ。来るのはそれが分からない、私の神気も判断出来ないような、そういう奴ら。ちよつと強い動物、程度に思ってくれていいよ」

顔に出てたか。

俺の気持ちをくんでくれて何よりだけど、顔に出るのは直していかねば。

それに、命がかかっているとはいええ、誰かに頼られる場面というのはの懂れていたことだ。

誰しも自分だけのナンバーワンがほしくて、けれどそれが叶わなくて、大半の者は身の丈にあつた場所へと落ち着く。

だが、俺はその夢を再び掴むチャンスが巡ってきたのだ。

誰かに感謝され、必要とされる職は、それだけで何事にも変えがたい、心の満足感を得ることが出来るだろう。

ならば、やってやる。

チート能力もあつて、誰からも頼られ、感謝される職で、神様から名前まで貰つて。命の危険はあるが、それはどんな仕事でも程度の差はあれ伴っている。

特に俺は、仕事中の事故が原因で、今ここにいるようなものだ。

ここまで来たら、多少の命の危険性は無視して、俺のレベルアップの経験値を積むことにしよう。

それに、車の免許を取る時、教習所の人が言っていた。

『フオローしてくれる人間が居る時に、うんと失敗しておきなさい』と。

理由は言わずもがな。

この場合、俺のバツクには洩矢諏訪子というビツクネームが控えていることになる。妖怪退治をやれと言っているのだ。少しはサポートしてくれるだろう。

幾らかの失敗もするだろうが、それは今後の活躍をもって返上するとする。

よって、

「……分かりました。この九十九。精一杯お勤めがんばります」

「ん、急に素直になったことに裏を感じるけど、まあいいか。——改めて宜しく。九十九」

「こちらこそ。宜しくお願いします」

一応ケジメをつけるように、軽く頭を下げて真面目に返答。

気持ちよくまとまったところで、うんうんと満足げに頷く諏訪子さんを尻目に、丁度良いやとさつきから気になっていた疑問をぶつけてみる事にした。

「そういうえば、諏訪子さんの口調って、どっちがホントなんですか?」

「……九十九ってばさつきから様を付けてないし……まあ、いいか。なんか九十九の『様』付けて気持ち悪いし」

ほっとけ。

「国民達の前では、ちゃんと様付けしてね。信仰に影響するから。最悪、九十九を食べないといけなくなるかも」

「……マジ気をつけます」

「(マジ?) 宜しい。で、どっちが本当の私かだったよね。……ん、別にどっちかが本当の私、とかって訳ではないんだよ。私は神様。かく在りきと願われれば、それが私になるの。最も、私の根源から外れない範囲でだけだね」

「ええと……。つまり、この人達は諏訪子さんのことを神だと崇めているから神様らしく、俺は諏訪子さんと仲良くしたいから砕けた口調になった、ってことですか?」

「そうだね。私は望まれてここにいます。それは、そうあるべきと願った人々に応えた結果で、私自身もそうしたいと思ったから。ん、こんな回答で満足かな? 人間」

「急に偉そうにならんで下さい。でも、うん。よく分かりました。ありがとうございます」

「偉そうじゃなくて、偉いんだよ。……それに、迷い人を導くのも私の仕事の一つだからね。これぐらいは当然さ」

それは良いことを聞いた。

早速、確かめてみるでしょう。

「……神様神様、楽に生きたいのですが方法を教えて下さいな」

「死ねば良いんじゃないかな」

間髪いれずに返ってきた答えに、思わずたじろぐ。

生きたいと言っているのに死ねばとはこれいかに。

……だからニタつて笑いながら言わないで下さい諏訪子さん。

あなた崇り神の統括者なんスから。

そこまで人の生死に直接関連している神様なんてそうそういないんスから。

本気くさいのが笑えないツス。

以上、思わず語尾がス系になるくらいには動揺を誘える、神様からの神託でした。

それから体感で、大体六ヶ月。

諏訪子の社の一角に部屋を貰った俺は、起きて景色を眺めて寝るだけの完全ニート生活満喫し——たかったなあ、もう！

初めの二、三日位は、勇丸と一緒に国——というか、村（諏訪子のいる社の周りだけ）だった俺の感覚的には——を見て回ったり。

縄文だか弥生だか時代は分かんが、逆ジェネレーションギャップに驚いたり感心し

たり。

諏訪子の生活（妖怪退治とか豊作祈願とか）を見て、神様の大変さを感じたり。

妖怪退治にしては、諏訪子が睨むだけで妖怪の足元から無数の蛇が絡みつき、毒か窒息か分からないが息絶えた姿を晒していた。……小便ちびりそうでした。

で、見るもん見たし、景色でも眺めてだらだらするかと思つたら、『九十九様！ 妖怪が現れました！』とか村人Aに言われた。

覚悟は出来ていたし、勇丸を常時召喚しているのにも慣れてきた。

といつても体力が増えたのではなく、微妙な疲れ具体の中でも生活する術を学んだ、というべきなのだが。

で、よしきたとばかりに連れられるままに行つてみると、そこには殺した家畜を食べている、黒い犬——いや、狼か？ がいた。

勇丸と同じくらいの大きさで、その口と目は真つ赤に色づき、あああれが妖怪なのだと本能で理解出来る容姿をした。まじこええ。

隣には、いつでも俺の盾になれるよう、勇丸が吼えるでもなく佇んでいる。

諏訪子の時には今にも飛び掛らんとする姿勢だったのだが、今回の様子を見るに、苦戦しない相手なのではないかと判断し、行動を起こす。

勇丸へ『いけるか？』と思念を送ると、当然だと言わんばかりに黒い犬に向かって走

り出した。

初めての戦闘。

クリーチャーである勇丸の2/2というステータスがこの黒い獣にどこまで通用するのか見る為に、俺はあえて何の強化もしないことにしている。

ただ、劣勢になったら即座に呪文を唱えて勇丸を助けるが。

飛び掛る勇丸。

それに気づき迎え撃つ妖怪。

いざとなつたら勇丸を強化し、妖怪を焼き払い、瞬時に増援を召喚出来る体制を整えていたのだが、黒い獣は勇丸の噛み付き一撃で絶命し、その場に崩れ落ちた。

(……あっけねえー)

勇丸に全部やってもらつておいてあんまりな感想だったが、心はそれが全てだと言わんばかりに唾然の一言で埋め尽くされていた。

(あの黒いの、家畜の馬を何頭も殺してたから、少なくともそれらよりは強いんだろ?)

で、勇丸はソイツをあつという間に倒した。……パワー2つてこの世界じゃ結構強い部類なのか?)

この疑問は、後々解決していった。

その後何度か戦闘をして分かったことだが、こちらの世界では、パワーやタフネスの

数値が1上がるごとに、どうも+1ではなく二倍、もしくは三倍、といった具合でパラメーターがインフレ上昇しているようなのだ。

様々なクリーチャーを召喚し、熊、怪鳥、人型と、多種多様な妖怪を相手にした結論だった。

じゃあ4/4とか5/5とかのクリーチャーを召喚出来る俺なら、体力面を考えなければこの仕事なんてチョー余裕じゃん。ということは無かった。

何故ならあいつら、数が多い。

三日に1回は妖怪退治に出かけていると思う。

それだけ聞くと少ないと思えるだろうが、いやいやちよつと待ってほしい。

俺が守らなければならない範囲は家でも村でもない。国なのだ。

『ちよつとコンビ二行つてくる』的な距離ばかりに妖怪は出ないものだから、必然、そこから出向いて討伐しなければならない。

目的地へ行くのに野を越え山を越え三日四日なんて普通。

西へ東へ、忙しく駆け回る日々の連続。

初めは自分の足で。

二回目の討伐からは勇丸に乗せてもらって。

初日に何キロ移動するんだつてくらい歩いたので、体力もそうだが足が棒になってき

為に、勇丸へ乗せてくれないかと頼んだのだ。

初めての勇丸騎乗？　がスナミナの辛いから乗せてくれたってのは微妙な気分になつたけれど。

ええ、超良い触り……もとい、実に良い乗り心地でしたよ。勇丸が俺に配慮して乗りやすいように移動してくれたつてのが大きな理由ですがね。とほほ。

そして、何とか空いた時間を利用して、今度は呪文系の特訓も始める。

【火力】ダメージの代表格である、赤マナー【インスタント】呪文。対象に2点のダメージを与える電撃っぽい攻撃絵柄が特徴の「シヨック」を選択。どの程度の範囲まで届くのかと試してみると、これも俺の声が届く辺りにまで有効なようだ。

『火力』

クリチャーやプレイヤーに直接ダメージを与える呪文の総称である。語のイメージから、基本的に赤の呪文のことを指すが、直接ダメージを与える呪文であれば、他の

色であつてもこう呼ばれることがある。

『インスタント』

即座の、すぐに起こる、の意。ゲーム中、わずかな場合を除いてはほぼ全て任意のタイミングで唱えられるカードタイプのこと。

ただ、「ショック」を甘く見ていたと、その時痛烈に感じた。

太さも人の胴体より少し太いくらいの、手ごろな木を見つけたので、それを的にした。周りに人が居ないことを確認し、初めての呪文だからと、十メートル程離れて使う。刹那、辺り一面に響く破裂音。

一瞬で耳が馬鹿になり、視界は真っ白に染まり、平衡感覚が失われ、俺はそのままぶつ倒れてしまった。

きんきんと耳鳴りのする、所々視界が白くにごる人間一丁出来上がり。

星が回る視界で何とか木を見てみると、半ばからまるで爆弾で吹き飛んだように上下真つ二つになっていた。

(……なんだこれ。「シヨック」だよな? 上位の「稲妻」じゃないんだよな?)

確かに名に偽りなしだが、「シヨック」どころかギガデイン、もしくはサンダガっぽい威力に、啞然。

効果を見るに、大気中の電気を対象にぶつける呪文のようだ。

ギャザのルールを覚えるにあたって、初級の第一歩として必ず話題に上がるカードだっただけに、人生初の呪文詠唱が「シヨック」だったのは少し嬉しかった。

これでもつと威力のある「音波の炸裂」なんて使った日にゃ俺の耳は取れかねん。恐らく名前通りの効果を発揮するだろうから。

ならばと下位の……対象に一点のダメージを与える「ふにやふにや」……は選ばずに、さらに下位の「焦熱の槍」を選択。

1マナ一点「ソーザリー」とかホント誰が作ったんだろうと目を疑ったものだ。しかしMTGにおいて完全な下位のカードは存在しない。

きつと、何かの拍子で目の目を見る機会が訪れるかもしれないと、ちよつとだけ祈ろうと思う。

『ソーサリー』

魔法、魔術の意。上記の「インスタント」とは違い、基本、自分のターンでしか発動出来ない。だがその分、効果は「インスタント」より強い——場合が多い。

【ショック】で真つ二つになった木の近くにある、別の木に向かって、焦熱の槍を試す。突然空間攻撃したようなショックのときは違い、ピッコロさんよろしくマカンうんたらのように俺の指から出た赤い光線は、いかにも『魔法です！』的な軌跡をえがき、木に当たった。

パンと大きめの音が響き、メキメキと木が倒され、燃え上がる。

おお、「ショック」に比べればお手頃（被害的な意味で）な呪文を発見したぜと思う。暫定で俺のメインスペルにしよう。

……どうせすぐに上位カードを主に使うようになるんだろうしな。慣れ的に。

【焦熱の槍】で燃えた木が周りに四散して森林火災になりそうになっていくのを、勇丸と共に慌てて消しながらそう決めた。

そんな感じで、割と精力的にどこまでMTGのカードを扱えるのか検証していった。その過程で分かったのは、

●ライフを支払うデメリットは体の細胞の減少らしい。それ系のカードを使うとそこそこ痛いどころか体中に痣が出来始めた。何てこった。俺生前は黒使いなのに「スーサイド」系とかはもう最後の手段だな。ライフ（プレイヤーのHP）1でどれくらい何処の細胞が減るのかとか検証するのすら怖いからやめる。脳みそだけは減らないと思いたい。

『ソーサイド』

自分のライフをリソースとして使うこと。また、ライフ支払いが必要なカードや自分のライフを減らしつつ相手に損害を与えるカードの総称。「欲しい物を得るためにあらゆる物を利用する」という黒が持つ基本理念そのもの。元々の意味は「自殺」らしい。

● 1日の上限使用枚数は7枚。ただしドローする能力が発生した場合は、その効果が現れる。

● ソーサリーは俺が動いていると使えない。

● 体力の続く限り、どんな色でも使用可能。一度に同時使用出来るマナは約3で、自身のマナストック数は大体5つぽい。イメージとしては、蛇口から一度に出る水の量は3が限界で、ストックされている水の量は5。

ってな具合だった。

ゲーム風のパラメーターで表すなら、

HP 3 以上（検証が痛いので断念）

使用可能なスキルの種類、1日7種。

MP 容量 5 MP 出力 3 MP 回復力 5

以下微々たるものなので未記入。

というところだろうか。

デメリットの多少の付随とか言っても、結構制限あるもんだな。と思った。

あれなんで？ チートじゃなかったの先生。と頭を抱えるが、自分を鍛えていけば上限開放とかがあるんだろうと自分を納得させて、暗い気持ちを押し込める。

まあそれでも、三以下でも組み合わせれば無双は難しくとも効果的な「シナジー」を發揮するカードはごろごろあるのだ。

妖怪倒して経験値を上げつつ、今はこの三以下のカードをうまく組み合わせ、自分とカードの相性を最適化させていくことにした。

『シナジー』

相乗効果のこと（英語語源の直訳）。コンボと似たような使われ方だが、コンボは「勝利に直結する」ようなニュアンスで使われることが多く、その点で意を異にする。

「ちよつと西の最奥の村まで行って、貢物をとってきておくれよ」

「……えらい唐突ですね諏訪子さん。後、西の最奥つて言ったら山あり谷ありの難所じゃないですか。往復で二、三週間以上は掛かりますよ」

俺たちが住んでいる神社の大広間に、諏訪子と俺は互いに胡坐をかきながら座り込む。

妖怪の討伐から帰ってきたら、ちよつとお話しようと呼ばれ、今に至っていた。

「ふふん、神様はいつも唐突なのだ」

「……唐突なのは別に良いですけどね。何でまた、急に」

「日頃の感謝の意も込めて、道中にある温泉にでも、と思つてね。私がたまに行く場所で、よく疲れが取れるんだよ」

ケロケロと笑うその表情を見て、温泉に入る自分を想像する。

——昇りたちこめる湯煙。

一望する絶景。

吹き抜ける風は火照つた体に心地良い。

良く冷えたお酒に、少し塩気の強いおつまみ。

ゆったりとダラダラ過ごす、至福のひとつ時。——はあびばのんのん。

……良い。

「それは嬉しいなあ。正直、体を洗うのが川だ池だ雨だとか、キツかったツス」

「九十九つて結構良い家の生まれなの？ 普通はそうやって体を清めてるのに」

「……ええ、かなりの良いトコのぼっちゃんでしたよ。衛生面とかは結構贅沢な生活してました」

今と現代生活を比べて、ね。

——俺はまだ、諏訪子さんに転生やら何やらを言っていない。

能力の一端は話したが、生み出すのとか維持するのが疲れる程度のことだけだ。

諏訪子さんもまだこちらから強引に聞きたい事はないようで、こつちが誤魔化しながら話をすると、察するように会話を切り上げてくれる。

一応は未来から来たことになるのだから、興味を持った諏訪子にせっつかれその世界での話しなんてしようもんなら、最悪日本が崩壊し兼ねないと思つたからだ。

科学の発展で神秘が神秘でなくなり、神や妖怪は架空の存在へと成り下がる。

豊かな森や空や川はその範囲を狭め、コンクリートジャングルなんて言葉が似合う国へとなった日本を見て、神々は——諏訪子さんはどう思うのだろうか。

「でも、その間の妖怪退治とかはどうするんです？」

「九十九が来る前に戻るだけだしね。それに、勇丸を置いていってほしいんだ。なに、温泉は私の聖地の中にあるものだし、そこへ行く道も聖地内で安全だから、一人でも問題ないさ。」

「そういうなら一人で良いですけど……勇丸をどうする気ですか？」

「別に何もしないよ。ただ、勇丸もずっと主と一緒にいたらかしこばつて疲れちゃうでしょ？ たまには別れて生き抜きさせてあげなきゃ」

確かに。

言われ、もはや定位置と化した俺の横で、勇丸は、やはり座りながらも周りの警戒をしてくれていた。

元はカードだし俺からの体力を糧に実体化しているとはいえ、例え問題ないとしてもこつちの気分的に勇丸が苦勞し続けているのは申し訳ない、と改めて考える。

半年近く勇丸を出し続けて、低コストクリーチャー一匹くらいならそこまで気にならなくなってきたのだが、そういった気づかひもたまには良いだろう。

「分かりました。勇丸を置いていきます。それで、貢物つてのはどんなものなんですか？ 熊を丸々一頭、とかだったら、俺無理ですよ？」

「何でも新しい酒を作ったらしいんだ。今回はそれをね。少しくらいなら飲んでも良いよ？」

「それは良いですね。頂いておきます。あんまり量は持てないでしょうけど、出来るだけ運んできますよ」

「大丈夫、完成したら西の村の若い衆が持つてくるさ。だから九十九は瓢箪一個分だけ持つて来てくれればいいよ」

了解ですと返ししながら、勇丸にその旨を伝える。

OKの返答があり、この世界で初めての気ままなぶらり一人温泉旅行だと思つてワクワクする。

「じゃあお言葉に甘えて、明日の朝からでも出発します」

「分かった。天候が崩れないように祈っておくよ」

「ありがとうございます。……ん〜っ、はあ。今日はこのまま休んで、明日に備えますね」

「このまま寝るかと背伸びを一つ。」

諏訪子さんと別れ、部屋で明日への準備を始める。

「といつてもこれといった準備もなく、せいぜい着ていく衣類の点検くらいだったけれど。」

「それじゃあ、行つてきます」

「ゆつくり休んで来るといい」

「いつてらっしやいませ、九十九様」

朝日も隠れている時間帯。

諏訪子さんと村長さんに見送られて、俺は村の出入り口から旅立っていった。

見送りには諏訪子さんと村の村長、そして勇丸が来てくれた。

村長の前だったので口調は神様バージョンだが、いつもの事だ。

どこか遠くへ討伐に行く際は、村長と諏訪子さんはいつも見送りに来てくれた。

村長は——この国の人々は、信仰心の関係で、俺に対して友人に接するような態度は今でもとつてくれないが——そのうちフレンドリーになりたい——それでもこちらを気づかない、感謝しているのは伝わってきた。

なるべく早く帰ると伝えてると、それだと送り出す意味がないと諏訪子さんや村長から言われ、結局本来より一週間ばかり多めの期間、大体二十日くらいをもらってしまつた。

二十日以前に帰ってきたら崇つてやるとか、どこまで本気なんだこの神様。

いつもは勇丸と一緒に来てくれるのだが、今回は一人。

少しどころか結構寂しいし心細いが、俺も子離れ？ をしないといけない時期でもあるのだろう。

旅行期間に新しいクリーチャーや呪文でも開拓して驚かせてやろう。

良さそうな「シナジー」見つけたら切り札その一とかその二とか名付けてやる！

期待と不安と楽しみがせめぎ合う心を押し付けるように、俺は西の村への第一歩を踏

み出した。

勇丸が、元氣付けるかのように遠吠える。

ふっ、俺は振り向かずにはクールに去るぜ！ あくばよく！

「……これで、宜しいのですか？」

九十九が見えなくなつて、少し。

村長は私に尋ねてきた。

「よい。九十九が来て半年。彼は本当によくこの国に尽くしてくれた。半ば脅しに近い形での出会いではあつたが、それを気にするでもなく、ごく自然に私達に良くしてくれた。奴なら最悪、この国が落ちていても機微を察して逃げれるだろう」

「初めて諏訪子様が人間を連れてきた時には一体何事かと思いましたが、何とも面白い考えをしたお方でしたな」

「そうだな。こう——私やお前と根本で考え方が違う。何とも甘い考えを持った坊やだよ」

「……一体、あの方は何者なので御座いますか？ 諏訪子様の眷属だとお聞きしましたが、どう見ても人間です。が、勇丸様を従え、物の怪を退治して下さった時には、様々な——まるで妖怪を従える大妖怪のようでごさいましたな」

「言っていることへの辻褄が合っていないぞ？ そして、その割には恐れておらぬな」
「人は矛盾し葛藤するものだと思っております。それに、あの方を恐れるなど、それは無理というものです。ことあるごとに私共に『仲良くしよう』と笑顔で言い、様々な知恵や技術を授けて下さいました。あの方は大したことはしてないと仰いましたが……最近また、九十九様から教えていただいた『千歯こぎ』なる道具で、稲作の負担が大幅減りました。これで従来の半分以下の時間と労力で脱穀が可能で御座います。……そんなものを私達に与えて下さった方を、どうして恐れることが出来ましょう」

その話を聞いて、私はくつくつと笑う。

全く、どこの国から来たのかは知らないが、大層な拾いものをしたのだと実感する。
突如、私の聖域に現れた、異国の服に身を包んだ男。

『坤を創造する』能力を持った私は、それを即座に察し、その者へと近づいた。

よく見てみるとこの国の民よりも背は高かったが、肌も、髪も、目の色もこの地方でよく見られるもので。

私の神気で気絶しそうになり、こちらの姿を見た時など頭を擦り付けて許しをこうて

きた。

ならばと反応をみるように勇丸をよこせと言うと、一転。こちらを妖怪のようだと言
い放った。

唇も青く、体も震えた状態で、お前は最低だと啖呵を切ったのだ。

何か策があつたのかもしれないが、あんな状態でよくもまあ大見得を張れたものだと
感心する。

名前が無いと言うから付けてやったら、すこぶる喜んだ。

私の社に住んでも良いと言ったら、笑顔で感謝を言われ。

この国について、私の知る世界の話をしてやれば、目や耳を皿のようにして傾け。

崇つてやるぞとからかってやれば、それはそれは女々しく謝ってきた。

——今まで、私と相對した生き物は全て、神である私と接していた。

だが、奴はどうだ。

初めこそ他と一緒だった。

けれど時間の経つうち、敬う態度ではあつたが、それは“年上・目上だから”程度の
もので、決して神だから、といったものではなくなった。

かつて出会つた者達と比べれば何とも無礼だったが、九十九の行動や言葉はこちらと
仲良くなりたいたいという思いから発生したものだ。

これまでなかった事に戸惑いはしたものの、私はそれがいつしか心地よく感じるようになって。

——この地に生を受け、人々の生活を見守り続けている中で見る、人と人との触れ合い。

私と九十九との関係は口調こそ違えど、その中の一つである「友達」と呼べる存在だったのではないかと今では思える。

(心が暖かい……。うん、良いものだな、友というものは)
踵を返す。

社に向かい歩みを進める先には、村中の男達が集まっているのが見えた。

集団を掻き分け、社の段の上に立つ。

何かの会合か集会か。

祭りの類ではないのは確実。

何故なら、男達の手には各々弓や棍棒や鍬などが握られている。

特に多いのが、この国で近年生産された、鉄と名付けた特別硬い鉾石で加工した剣だ。動物の皮や檜の木の盾など、一刀両断に出来るだけの硬度と鋭利さを兼ね備えている。

——これならば、多少なら戦力差を埋められるだろう。

「時は来た！ 彼奴らはぬけぬけとこちらに対して『従え』とのたまった！ それを断るや否や、我が国に侵略を仕掛けてきている！ こんなことが許せるか！ 我らはこの国の為に骨身を惜しまず働いてきた。しかし！ 他の国への侵略など一度たりとも行つたことは無い！ そんな我らがなぜ他者から略奪されなければならないのか！」

声を張り上げる中、集まった民達の目に怒りの炎が灯るのが分かる。

それはそうだ。私が焚きつけているのだから。

けれど、そうしなければこの国は一方的に負ける。

分かり合えぬからこそ争いが生まれ、負ければその分かり合えぬ者達の下で生きねばならない。

そんな理不尽、例えば天地が許そうとも、この私が許しはしない。

「拳を握れ！ 目を見開け！ 我らはこれより死地へ向かう！ 敵は強大だ！ 生きては戻れぬ者もいるだろう！ だが忘れるな！ お前達の背中には、妻が、子供が、両親が、国がある！ それを忘れなければ、我らは鎧袖一触となつて、敵を打ち倒すだろう！」

割れる様な声の渦。

これが祭りだったらどんなに良かったかと、一瞬の後悔が過ぎる。

「我が眷属九十九は、狗神である勇丸の力を最も引き出す為に動けぬが、その甲斐もあつ

て今勇丸は最も気高く誇り高き獣となつて、我らの怨敵を打ち据えてくれる！」

既に勇丸には話してある。このクリーチャーという存在は、仮に息絶えたとしても、九十九が無事ならば幾度でも蘇る事が出来るのだという。

すまないとは思うが、勇丸にはこの国の為になつてもらふ。

九十九を戦わせたくない私と、けれどそれをすれば民に要らぬ不安を与え一方的に蹂躪される事態に陥つてしまうことを考慮した、苦肉の策。

主の為だと騙すような真似をしたのに、勇丸はこちらの提案を受け入れてくれた。……この様子では、全てを理解した上でこちらに協力してくれているのだろう。

私の機微を察して、主の害にならないならばと最大限の譲歩をしてくれたようだった。

——全く。ここまでの忠犬ならば、本当に私が貰つておくべきだったか。

「敵は『八坂』の神とその軍門。強大なれど、我らには恐るるに足らず！ この洩矢諏訪子が打ち払つてくれよう！」

大喝が全てを揺らす。

天を、地を、人々の心を。

けれど、私の心までは揺らしてくれなかった。

恐らくこの男達の一握りも無事には戻れない。

そしてそれは、私にも当てはまる。

この国が鉄を精製出来るという情報を、相手が掴んでいない訳がないのだ。

現存するどの武具よりも強大なそれを知っておいてそれでも攻めてくるということ
は、そういうことなのだろう。

他国を次々と飲み込んでいった神が、いよいよこちらに牙をむく。

その為の準備はしてきたし、民達の鍛錬だつて、九十九には隠れていたが、しっかりと行っている。

私自身も充分に力を温存出来た。

「人々よ！ 今が戦う時！ 勝つて……勝つて明日を勝ち取ろうぞ！ —— 総員、進めえ！」

号令に従い、民が進撃を開始する。

死地へ送り出す命令をしたことに心を痛めるが、そつと勇丸が腰に鼻を擦り付けてきた。

これが指導者として、先にたつものとしての義務。

そう心を縛りながら、勇丸の鼻の頭を搔いてやる。

気持ち良さそうかは分からないが、目を細め、こちらに目を配る。

「……ありがとう」

九十九め、良い家来を持ったものだ。

……そんなアイツの戻ってくる場所を奪っちゃあ神様の名折れだね。

ああ、そうだとも。絶対に倒す。絶対に戻る。——絶対にこの国を守ってみせる。

だから、皆には申し訳ないが——私の為に死んでおくれ。

「——舐めるなよ八坂。例えこの身朽ちようとも、お前をこの地には入れはせんぞ」

06 悪魔の代価

「へ……へっ……。ぬう。出ないクシヤミとか、勘弁してほしいわ」

むず痒くなった鼻を擦る。

国を発つてから二日。思ったよりも早く発見できた温泉に、俺は早速お世話になった。
いた。

さすが神様御用達。体の芯から疲れが取れて、精神も澄み渡る効果も実感出来た。

うっかり一週間程そこで過ごしてしまつたが（え、お陰で色々とカードの組み合わせもまとまつた……様な気がする。

うん、今度から度々ココに来るようにしよう。

温泉から上がり西の村へ向かうべく、散歩をしながら森林浴。

木々の間を吹き抜ける風が、火照った体から良い具合に熱を奪ってくれていた。

格好は相変わらずのGパンに白Tシャツだが、今はそれプラス、灰色寄りの白い外套

を装備中。

これの外套を貰ったのは、洩矢の国で初めての遠征討伐の時だった。流石にその格好では長期間の旅は辛いのでは、という諏訪子さんからの配慮でもある。

おお神様から装備品貰えるなんて！ と貰った瞬間に小踊りしたのを、俺は忘れないだろう。

で、どんなSUGEE効果があるのかと思ったのだが、常に清潔であるだの通常より多少丈夫になるだの、攻撃力UPとか移動速度倍増なんてことはなかった。でもこの外套。なんとミシヤクジ様の抜け殻を使っているのだからか。

確かに蛇皮？ つばい、光沢の抑えられた白い生地で出来ているのだけれど、結構快適だったりする。

雨や風を通さず、野宿する時にはこちらの体温を適度に逃がし、中々に快適な状況を作り出してくれる、優れもの。

厚みが無いので、下に敷く場合は地面を整地しないとゴツゴツで寝にくいのはご愛嬌。

軽くて丈夫で快適で。衣類として見るならこれ以上ない機能が搭載されていたのだ。

これが純白だった日にゃあ、俺は鷹の団とか作らないといけなかったが、色的にも性

能的にも文句のない逸品だ。

それから、どこかに行く時にはいつもコイツのお世話になっている。

勇丸に続く、相棒その二つて感じですよ。

(よっし。気力体力ともに充実。折角だから移動用のクリーチャーを試してみて、もう一度温泉に寄れるだけの時間を捻出するかな)

既に十日程経過しているが、急げばどうにかなるだろう。

毎回毎回勇丸に乗って移動するのは何だかあいつに悪い気がして、いつか移動用の奴を召喚しようと思っていたのだ。

良い機会だし、試してみようと思う。

……温泉気持ちよくて、だからだし過ぎでカードの組み合わせとか全く考えてないのは忘れることにしよう。

「来い！ 【ターパン】！」

現れたクリーチャーは、ぱつと見は、馬。

しばらく眺めても、やっぱりただの馬。

それもそのはずで、こいつはどこからどう見ても少し能力がある程度の馬である以外の何者でもないのだから。

緑マナーで現れる1/1の馬クリーチャー。能力は、コイツが死んだ時にプレイヤー

のライフを1、回復させるといふもの。

このカードを見るまで知らなかったのだが、何でも前世では実際にいた絶滅種の馬なんだそうだ。名前もまんまターパン。

カード製作者も粋なカード作るじゃねえかと、召喚し、実物を前にして、そう思う。つぶらな瞳に幼い頃お世話になったポニーランドなる乗馬施設での記憶が蘇る。

その時はまるで山を見上げている気分だったが、今はさすがにそこまで大きく見えることは無い。

村では競馬に出てくるよりは小さめではあったがそこその馬がいたし、熊やら勇丸やらの大きな動物を多々みていたことで、感動は薄れてしまったようだ。

「よろしく、【ターパン】」

ぶるりと鼻息を荒くし、こちらに答えたように返事をしてくれた。

OKみたいなので、早速【ターパン】に跨る。

……いや、跨ろうとした。

「……あれ、なんかこう、足とか引つ掛ける道具はないのか?」

【ターパン】の体を見てみるも、どこにもそんなものは見受けられない。

しまった、馬だからって騎乗に適した道具が付随している訳じゃなかったんだった。

「何だったか……鑑（あぶみ）? 兎も角、今度それを作ってみるかなあ」

構造自体はそこまで難しいものではなかった筈だ。

俺が楽出来るのなら、発案者達には悪いがガンガン製造していく。それが俺クオリテイ！

……なんて調子に乗った思考を試してみるも、現状、「ターパン」の上に登るのはキツそうだ。

壁とかならダツシユ飛び乗りとか出来るので良いのだが、またがる相手は生物な訳で。

極力ダメージを与えないように、近場にあった木の上から「ターパン」の上に乗る。

カツコよく跳躍で飛び乗れたかったが、はてさて、垂直飛びで全国平均以下の成績が当たり前の俺は、一体何年脚力を鍛えれば出来るのやら。

(それ以外の瞬発力ならそこそこだと思っただがなあ)

あ、持久力系は論外です。
ならば。

手綱も鎧もない乗馬だが、今の俺にはチートスキルのオマケである意思疎通が備わっている。

乗ってる最中に色々とお願ひして対処することにしよう。

(今度からしやがんでもらうか)

しやがんだ状態から俺を乗せて立てるかなあ？

とか漠然と考えてみる。

次降りた時にでも試しようと思い、「ターパン」に西の村へ行くよう指示を――

「――」

息を呑んだのだ。まさか、と。

体が突然軽くなったからだ。

温泉や気分の高揚から生じたものではない、まるで、クリーチャー1体分を維持することが必要なくなったような……………。

(!?)

振り返り、今まで進んできた道を、その奥にあるはずの洩矢の国を見る。

山々に囲まれて見えないが、なんてことは無い普通の道。

空は晴天。雲1つない快晴で。

けれど、何かがオカシイ。

「——静か……過ぎる?」

鳥も、獣も、虫すらも。

耳に届くのは、風が木々を揺らす音だけ。

今までこんなことはなかった。

何かがおかしい。その決定的な何かが分からないまま、俺は「ターパン」へ洩矢の国へ戻るよう、指示を出す。

そうして、徒歩では考えられない速度で、木々の間に張り巡らされた道を駆け抜けていく。

この分なら、月が大地を照らす頃には戻れるだろう。

(何が……何が……何が——!?)

焦る気持ちと相まって、数刻の間、俺の頭は正常に動いてくれなかった。

やっと冷静になれたのは、日暮れ間近。

無休で走り続けた「ターパン」も、流星に夜目は効かないようで、若干の速度を落とすして走っている最中であつた。

(体力に空きがある。必要以上に力がみなぎって……違う。本来の体力に戻っただけだ。か、考え……考えられる……ことは……)

体力のレベルが上がった。なんて話だったら、手放して喜べた。

けれど違う。そんな感覚ではない。

考えたくない結果に目をそむけ、それでもはやり辿り着いてしまうその結論。

——勇丸が……死んだ

初めてのクリーチャーの死。

カードゲームでの出来事なら、墓地と呼ばれる捨て札置き場に行くだけのことだが、こちらで死んだ場合はどうなるのだろうか。

情報では知っている。あの世のおつちゃんから教えてもらったから。

この世界では死んでから24時間は脳内のカード捨て場に置かれた状態になり、時間が経つと脳内山札に戻ると。

そんな、何処にでもあるトレーディングカードゲームに乗っ取ったルールだった。

だが、記憶はどうなるのだろうか。

俺と勇丸は決して短くない時間を一緒に過ごしてきた。

勇丸におんぶに抱っこ状態だったが、思い入れは今までのクリーチャー達とは比べ物にならないほどある。

——召喚されたカードは、成長する。

身体や能力的には分からないが、少なくとも勇丸は俺に対してゆつくりとその態度を軟化させていったのだ。つまりは、思考の成長だ。

それが、無に帰す。

ただ実体からカードに戻すだけなら記憶の引継ぎは出来ると実験で分かったが、死んだ場合は試すことが出来なかった。

ならば今すぐにも勇丸を召喚したいが、あいつはクリーチャーの中でも特殊な「伝説」タイプが付与されている。

『伝説（レジェンド）』

MTGには原案となった物語があり、そのストーリー上重要な人や場所、道具などがカード化された場合、この特殊タイプを持つことが多い。

そんな重要なものが2つ以上同時に存在するわけがない、という解釈の下、もし同時に存在しようものなら、その瞬間、それらカードは対消滅し、捨て札場に置かれる。

俺が召喚した【今田家の猟犬、勇丸】は白1マナで2/2の【バニラ】という、MTGの価値観からすれば破格のコストパフォーマンズを持つクリーチャー。

その際唯一のデメリットが、この【レジエンド】。一度に複数枚は使用出来ないよう調整されていた。

今、あいつの生死を確認する為に勇丸の召喚を行えば、この【レジエンド】ルールに引っかけり、対消滅を起こしてしまうかもしれない。もしそうだったとしたら、最悪、勇丸を殺しかねない。

だからといって召喚しないのだとしたら、あちら側は勇丸が危なくなっている状態にも関わらず、雑多な妖怪相手だったが、6ヶ月無敗の戦力が急に消えている事になる。

遠くにいる相手を確認するカードを使うのも手だが、後少しで村に到着しそうではあるし、マナを使うのも危険だ。

【ターパン】に使ってしまったので、使えるマナは残り4。

勇丸が対処に困る相手だと、4マナ位は無いと心もとない。

だから、今俺に出来るのは、必死に【ターパン】の背にしがみ付き、少しでも移動速度を上げることだけ。

(待つてろよ勇丸！　すぐ向かうからな！)

例え現実が勇丸の死を肯定していたとしても、それを心が理解してくれるのは別だと思いつながら。

駆け出す蹄の音は、それから一時間ほども続いた。

日もとうと暮れた、星々と月が大地照らす時間帯。

急いで勇丸のいる場所に向かおうと村へ来てみれば、そこには老人や女子供しかおらず、そんな彼女らは皆、社の前で、懸命に何かに祈っている。

これが俺の知らない夜の信仰儀式とかだったなら、どんなに良かったことか。

近づく俺にそのうちの一人の女性が反応し、泣きすぎる様に祈りの内容をぶつけて来た。

曰く『諏訪子様と男達全員が異国の神、それ率いる軍と戦っている』『自分達は、戦に向かった諏訪子様達の無事を祈っているのだ』と。

戦？ 異国の神？ 諏訪子さんが出陣？

色々な疑問が沸き上がるが、一つの出来事を思い出し、俺の思考は一直線にまとまった。

(諏訪……大戦!!)

東方プロジェクトの出来事で、大和の神である八坂神奈子がこの洩矢の国へ攻め入る戦争。

この大戦の後、八坂と洩矢は互いに共存の道を歩み、幻想郷へ辿り着く。

辿り着くまでの経歴は詳細には知らないが、幻想郷にいる時の——作品中で出てくる彼女達は、少しの寂しさは窺えるものの、それなりに面白そうな事件を起こしたり、色々やって楽しんでいた。

最後がハッピーなら良いじゃないと思うだろうが……その過程では、死にはせずとも、多くの血が流れているのかもしれない。

普段の俺ならば、そんなもの。と、興味もなく切り捨てる出来事。

けれど巻き込まれるのは、俺が接し、笑いあい、とても良くしてくれた人達なのだ。とてもではないが、納得出来ない。

……どうして忘れていたのだ。楽しかったから？ 話すのが怖かったから？ 言う

タイミングを掴めなかったから？

どこその漫画やアニメの主人公なら明確な答えでも出せるのだろうが、その答えには、俺にはとても辿り着けそうにない。

——— しいて上げるとするのなら、ただ。

ただ、本当に忘れていたのだ。

素晴らしい人達、不自由ながらも満足感のある生活、そして優しい神様。

どれをとつても素敵なことばかりで、自分がPCゲームの中にいるなんて、一瞬たりとも自覚することなど無かったのだ。

自分の愚かさに、怒りで我を忘れそうになるが、今やりたい事は決まった。

『助けて下さい』『お救い下さい』と懇願する人々の願いを背に、諏訪子さんが向かっていった方面へと「ターパン」を駆る。

向かうその先。

幾筋ものか細い煙が立ち昇っているのが、遠目であるにも関わらず、よく分かっただけだった。

「……」

言葉が出ない。

星の光が降り注ぎ、夜だというのに本すら読めそうで。

小高い丘の上から見下ろす平原には大勢の人がいて、手には各々武器を持っている。

そいつらが見つめる先。

かつて激戦が行われたであろうその場所には、巨大な白蛇や人が大勢倒れ転がっている。

所々に、防衛を行ったであろう櫓（やぐら）の跡が見て取れるが、そのどれもが破壊され、崩れていた。

その周囲。

そこには言葉にならない呻き声を上げる者。大切な人だと思われる者の名を呟く者。

腕が足がと体の欠損を訴える者に、もはや呼吸をするのがやつとだろうと思われる者。

布団をくれた奴がいた。道を教えてくれた奴がいた。狩のやり方を教えてくれたり、恋愛相談をしてきた奴もいた。

……そんな奴らが、一人残らずこの地獄絵図を彩る絵の具になってしまったかのように

な。

諏訪大戦。

どうにも俺は勘違いをしていたようだ。

八坂の神と洩矢の神の一騎打ちで、熱血よろしく八坂が洩矢を負かした後は手と手を取り合い互いに国をよくしていくのだろうと、心のどこかで思っていた。

けれど目の前にあるこの光景は何だ。思い描いていた幻想とは、あまりに遠い。

勝てば官軍。

なるほど。そんな言葉を俺の目の前にいる奴らは実行したのか。

神だ何だと言いながら、本人はいざ知らず、周りの連中なんて結局そんなものなのか。

美談で固め、信仰の対象をより強固にする。

理解出来るし、事情も分かるが、納得できるものではない。

そんな漠然とした思考の中。

その軍隊の中央に、俺の記憶と外見が一致する人物がいた。

『八坂神奈子』

乾を創造する能力。

鉄の武器で挑んだ洩矢の国に対して、その武器に蔓を巻きつけ酸化させ無効化したと

いう、主に天候を象徴する神。

まるで太陽を象徴するかのような円形に形とられた注連縄を背負い、辺りに巨木ほどあろうかという何本かの石柱を浮かせている。

けれどそんなものはどうでもいい。

今問題なのは、その八坂神の足元。

無事なところが見つけれられないほどに傷つき、片足の角度はおかしな方向へ曲がり、自らが作り出したであろう血の海に沈みピクリとも動かない、洩矢諏訪子がそこにはいた。

「手間をかけさせたな、洩矢の神よ」

諏訪子に向かってなにか言っているようだが、関係ない。

無意識の内に、乗っていた「ターパン」を還す。

俺の脚は何か盗り憑かれたように、ふらふらと諏訪子の元へと歩みを進めた。

「鉄の武器、確かに脅威であった。しかしそんなものは私の前では屑だというのがよく分かっただろう」

駆け出すでもなく、一步一步ゆっくりと。

「見事に戦ったと褒めてやる。安心しろ、国の方は繁栄を約束しよう」

まだ、まだ生きている筈だ。

見える範囲でなら、人影は皆生きている。

だから、諏訪子も、まだ……。

「これで終わりだ洩矢諏訪子の神。お前の為にと先に逝った狗神に謝罪でもしてくるかい」

石柱の一本。

「あ……」

槍の様に細いそれは、血溜まりに沈む諏訪子の胸を貫いた。

少し走れば手が届く。

そんな距離で、神の鉄槌は無慈悲に下された。

広い平原。

一人でこちらに向かってくる者の洩らしたような一言に、周りの者はやっとその者の存在に気がついたようだった。

八坂とて例外ではない。

領土拡大達成の思いにふける中やってきた、一人の男。

人間にしては背の高いそれと、身に着けた外套はミシヤクジの皮で作られているのだ

とすぐに判断し、この神に仕えていた神職が何かだろうと思い、声をかける。

「主らの神は私が倒した。以後、この国は私のものとなる。民の命や財産は保障する。私を奉れ。国の繁栄を約束しよう」

男はそんな声など聞こえない。目の前の光景が信じられないとばかりに目を見開き、けれど歩みを止めず、倒れた神の前まで行き、手を伸ばす。

『あ……あ……』と言葉にならない声を上げる男に、八坂は訝しげな顔を向けた。

「八坂様、この者は心が壊れております。対話は難しいかと」

八坂の後ろ、人間の代表のような男がそう進言する。

言われ、それもそうだと考え直した。

神職が崇拜していた対象を目前で倒されたのだ。

こうなっても仕方ないのだろう。

「致し方ない。洩矢の神をその男に渡せ。我らがするより、その方が良からう」
貫いていた柱を消す。

男は血溜まりに沈んだ神をそっと抱き上げ、顔を埋めた。
声を押し殺して泣いてでもいるのだろう。

他人事のように、客観的に八坂は判断し、自軍の状態を見る。

強大であった軍勢が、四割程も減っていた。

それに、私の力も大分減少している。

洩矢の民が手にした武器の威力は絶大で、こちらの攻撃や防御をもともせず向かってきた。

これは拙いと瞬時にその武器の特性を見抜き、風化させたはいいものの、彼らはまるで意に返さず立ち向かってくる。

その先頭に立つ、巨大な白蛇と賢狼を引き連れた洩矢諏訪子の神。

こちらにも八咫鳥などで対抗し勝ちを収めたは良いが、被害は甚大であった。

既に負傷した者は後方に下がらせ休養をとらせている。

復帰出来ぬ者が一割、残りの者はゆっくり養生させ神気で助力してやれば、元気になるだろう。

ため息が出る。

これでは再編には時間がかかるなと思ひ――

――その場から、一瞬で飛びのいた。

原作通りの変な神様だった。

偉いわりには小さくて。意地悪で、女の子で。

笑うたびにケロケロと、蛙を連想させるのは女性としてどうかとも思った。

時に叱られ、時に愚痴を聞き、時に笑いあい、過ごしてきた。

けれど、そんな彼女は今はとても冷たい。

触れた事など一度もなかったが、羽のように軽いその体は、今にも消えてしまいうんじやないかと錯覚させる。

(……なぜだ。なぜ、こんなことに)

様々な「もし」が頭を駆け巡り、そのどれもが現実を前に否定されてしまう。

本当に——なぜ、こんなことになったのだろう。

前で、声がする。

纏う神気でそれが八坂神奈子だと思い出した。

(……そうか。こいつ等に殺されたんだった)

思い出したように、頭の中でその事実が掘り起こされる。

憎いとか、怒っているとか、それらの感情が一気に沸点に達し、限界を超える。

ただただこの怨みを晴らすべく、抱えた諏訪子をゆつくりと地面に寝かせながら、考えられうる最高のカードを具現化させる。

(召喚、【ブラッドペット】【鬼火】【泥ネズミ】)

姿を見せるのは、その三体のクリーチャー。

いずれもコスト1で、パワーもタフネスも1以下の黒のクリーチャー。今この場で出しても俺の怨みを晴らすべき能力もないし、力もない。

けれど、黒のクリーチャーが三体ここに出ている事が重要なのだ。

八坂はこれらのクリーチャーが突如出現したことに警戒して、一気に距離をかなり空ける。

まるで様子を窺うかのようにかのようにこちらから視線を逸らさない。

(ああ、もう、どうでもいいか……)

相手がこつちを見てるとか、見てないとか。

ようは相手を倒せばいいのだ。

オマケにマナのストックが、後1しか存在しない。

もう、向こう数時間は回復しないだろう。

ならばもう、やることは1つ。

さらに追加で1つ。

思い描くは、またも黒のクリーチャー。

けれどそいつはマナコストが高く、今の俺では到底召喚出来るようなものではない。

——だが、その縛られたルールを覆すのがカードゲームであり、MTG。

【ピッチスぺル】というものがある。

代替コストと呼ばれる、マナ以外のコストのみで唱えることができる呪文の俗称のことだ。

そして、出そうとしているクリーチャーが要求するコストは、『黒のクリーチャー三体の生贄』。

呼び出そうとしているそのカードは、攻守共に優れた6/6の性能を誇る、強力なものの。

維持出来るのならば、それは充分脅威となる。

しかし足りない。まだ、足りない。

相手は神。

諏訪子達と戦い滅ったとはいえ、軍門は数多く、幾千の人間と力のある神々がその下に名を連ねている。

——足りない。足りない。この怨みを晴らすには、まだ足りない。

ならば、足るようにしてやればいい。

三体の生贄と……俺自身の体を糧に。

ライフの支払い——細胞の減少だと思っていたが、本当の意味を確かめる時が来たようだ。

(対象は、俺の左半身)

死ぬかもしれないし、仮に生きていたとしても、とても生き難い体になるのは確實。……だからどうした。

それがなんだ。

今、この瞬間。

この思いこそが、俺の全て。

「来い——」

どこからともなく、俺の周囲が闇に染まる。

そこから伸びる、二本の腕。

人の胴体ほどあろうかという太さのそれは、片手で生贄とした三体のクリーチャーを串で肉でも刺すかのようにまとめて貫き、闇の中へ引きずり込む。

そしてもう片方の腕は俺の左手を掴み——引き千切った。

視界が白熱する。

一瞬で瀕死に追い込まれるが、それでもこの思いは曲がらない。

止め処なく溢れる赤を羽織っていた外套で押さえつけながら、この状態でも冷静でいられる頭にミシヤクジの加護でもあるのかと、逡巡。

横たえた諏訪子に血が掛からぬよう、体を傾けた。

黒のクリーチャー三体と、自身のライフを6点。

六点というのがどう作用するのか不明だったのだが、それは左腕一本分らしく、もの見事に俺の体は一部が欠けた状態になってしまった。

自身のライフを大量に失うことはこういうことなのか、と。痛みによる激痛に抗いながら、内心で苦笑する。

ライフの支払い——それは、自身の体の一部を代価にすること。
手でも足でも、血でも肉でも。

初めて使った時は、捧げるものの指定を行わなかった。

恐らくその状態でライフを支払うと、体全体から生きるのに可能な限り支障の無いよう、均等に何かが失われていくのだろう。

……そうして。

代替コストを全て払い終えたのを確認し、心で、言葉で、奴の名を叫んだ。

「——来い！ 【死の門の悪魔】 ああああああ!!」

07 異国の妖怪と大和の神

悪魔と呼ばれるものが居るのなら、それは恐らくコイツのことを言うのだろう。

背中に生えた羽は蝙蝠のようで、身の丈は俺の三倍を越えようか。

まるで人間を数倍大きくし、虫の羽をつけたような格好のそいつは、血色の眼を幾つもち、開く口はまるで昆虫をさらに醜悪にしたかのような、おぞましい顔をしていた。

だが、今の俺にはその醜悪さすらも充実感に変わる。

パワー&タフネス、共に9。

今まで召喚してきたクリーチャーの中では、もはや規格外と言っても良い数值。

実験の結果で、カード表記されている攻撃防御数值が1上がる毎に、戦闘能力は二倍にも三倍にも跳ね上がっていた。

では、この9という数值はどこまで神を相手に打ち合えるのだろうか。

——いや、どれくらいまで、敵を殺せるのだろうか。

暗い感情が心を満たし、それを燃料に感情が煮え立つ。

俺の大事な人達を傷つけたばかりか、勇丸を……何より諏訪子を殺してくれたのだ。

左腕のものがれた痛みと出血による意識の希薄化と抗いながら、一言。

もはや口上は無い。

頭ン中には怨みつらみがぐるぐると渦巻き、考えられうる限りの罵詈雑言が思考を埋め尽くすが、出てきた言葉は単純明快。

「——殺す」

俺の怨みの代弁者は、今まで聞いたことも無いような咆哮をあげた。

「……皆の者、下がれ。奴は私が相手をする」

神々や民達を下がらせる。

妖怪を使役している人間など聞いたことも見たこともなく、ましてその妖怪の頭に大の字がつけば、立場は違えど最低でも下層の神程の力は持っているだろう。

それが、私の目の前にいる。

虫の頭に人の体。

神職の男は死の門の悪魔と言っていた。

(悪魔……か)

私も初めて見る。海に向こうの妖怪をそういう名で呼ぶのだったか。

見るもおどましく異郷な者なれど、その身に宿す力は本物。

辺りの靈魂を、体の全てを使って取り込んでいるのが見て取れる。

(魂喰の類か。……死の門とは、また安直な)

自身の周囲に特殊な神気を練りこんだ石柱——オンバシラを展開する。

洩矢の国で作られた鉄より強度は低い、鉄より重く、神気を通して手足のように扱う事が出来る。

これに対処出来ずに、大妖怪と呼ばれる奴らや、下級の神などは敗れていった。そうして何本ものオンバシラが宙に浮く中。

「——殺す」

下手な神や妖怪より殺気の籠った言霊が聞こえてきた。

なるほど、洩矢の神は崇り神の統率者だったと知っていたが、言い換えれば怨みの力だと思えば直す。

その神職であるものがその力を宿していても不思議ではなからう。

……悪魔とやらが咆哮を上げる。

見た目通りの畏怖を周囲に与えながら、魂すら奪われそうな声は、まさに絶望ともとれる光景に、思わず口の端がつり上がる。

他のものから見れば、それは死以外の何者でもないだろう。

だが私は神。

……絶望？　笑わせるな。

人や妖怪ならいざ知らず、奇跡の1つや2つ起こせずして、伊達にその名を語ってはいない。

「我が名は八坂　神奈子の神。覚えておけ。お前を屈服させる者の名だ」

展開していたオンバシラのうち四本を射出。

身の毛もよだつような風きり音を撒き散らしながら、寸分変わらず悪魔へと殺到していく。

だが。

木々を裂き、大岩をも砕くその攻撃も。一本はかわされ、一本はいなされ、一本は腹部へ当たったものの怯んだ様子もなく、最後の一本は殴り付けられたことによつて粉微塵に破壊された。

「はっー！」

呆れるように、小馬鹿にしたように鼻で笑う。

ここまで効果がないと、逆に相手を褒めてやりたくなる。

この攻撃で幾人もの神や人を傘下に加えてきたというのに。

(面白い……)

こやつ相手ならば、力加減など気にしなくても良さそうだ。

過去、全力で戦闘を行ったのは、一度か二度。

その際には地形が変わってしまい、復興までに中々の時間を要していたので控えていたのだが、構うものか。

「どこまで耐えられるのか、楽しみだ」

余力を残しつつ、けれど能力を最大まで使い対処するでしょう。

二十本以上展開していたオンバシラを全て撃ち出す。

足止め位にしかならないだろうが、それで充分だ。
体中に神気を行き渡らせる。

途端、空が泣き出しそうになった。

澄み渡る月夜だったにも関わらず、今はもう曇天で覆われており、視界も悪化し、時折空を走る雷のみが大地を照らすようになった。

どちらも闇に隠れるようになるが、片や体が神気によって青白く発光し、片や撃ちだされたオンバシラを砕きながら、血を凝縮したような輝きを持つ複数の眼がその存在を主張している。

私は神。

神とは何かの象徴として具現化している。

自分の場合は——天。

天候や風そのものと言い換えてもいい。

干ばつには雨を、日照りには曇天を、嵐には快晴を。

敵対者には——神の鉄槌を。

「天からの贈り物だ。色々あるぞ？　くれてやろう」

悪魔の頭上に出現するのは、雹。

人間の頭ほどある大きさの雹が、無数の雨となって降り注ぐ。

オンバシラを全て迎撃し終えた、悪魔に殺到するそれは、まるで天が地上へ落ちてくるかのような光景を彷彿とさせた。

しかし、それでは役不足。

オンバシラの直撃ですら耐え切る強度を持つあの悪魔は、体に揺らぎをみせるものの、羽を傘のように使い、まるでただの雨を凌ぐかのように防いでいる。

神職の男が、自分への被害が及ばぬよう、悪魔を壁のように見立てて配置したせいだろう。

地形を変えるほどの雹の雨を、何のこともなく耐えている。

耐久性は今までに出会った者の中でも最高峰なのではないかと判断しながら、片手を前に突き出した。

（丈夫な体だ）

その事にあまり効果の見られない様子を気にしする事もなく、私は次の攻撃を仕掛け

た。

突き出した拳を握り込む。

たったそれだけの動作だけで、周囲の風が一気に悪魔を囲むように渦巻いた。

風が土砂を巻き込み土色の壁となって相手を拒む。

(もつと……もつとだ)

こんな風では奴は消えない。

強く、強く、強く。

唸りを上げる風の渦は徐々にその力を増し、寸暇のうちに自然界ではありえない風力を持つ暴力となった。

地面の大岩すら持ち上げ、触れる者を切り裂き、バラバラに砕き散る渦となったそれを収縮させる。

握りこんだ手をさらに握りこみ、渦の中心となっている安全圏を狭めてやった。

凶体はでかいのだ。少しばかり範囲を絞ってやればいい。



そうする事で、やっと悪魔に被害を与えられるようになったのだろう。

暴風によってあまり聞き届けられないが、渦の中心で奴の叫び声がし始めた。

(小枝が岩にめり込む程の風速は、流石の悪魔とやらにも効果はあるようだな)

しかも、一抱えもある雹を巻き込んだの台風。

その破壊力はほぼ全ての神や妖怪も屈服させてきた。

だが――

「ほう、まだ刃向かうことが出来るのか」

そんな地獄の中、奴は男を守る体制を緩めることはなかった。

その躯体には多少の傷を作ってはいるものの、その眼は今にもこちらを殺さんと輝かせている。

ならば追加だ。

「降り注げ、天よりの雷」

耳をつんざく雷鳴。

暗闇の世界の中、閃光が走る。

寸分変わらず悪魔の脳天に落ち、体中を沸騰させる電撃。

それが、無数に飛来し、蹂躪する。

風によって巻き込まれた雹の間で帯電し、さらなる電力を伴って襲い掛かっている。

——暴風で切り刻み、雹ですり潰し、雷で蒸発させる。

天災三重苦。

山ですら、これの前には平地と化す。

(……くつ、やはりこれの維持は堪えるな)

幾ら神とはいえ、そう易々と天候を変化させられない。

なればこそ、この三重苦を行っている内に仕留めておく。

洩矢の国と戦ってなお余力はまだあるが、今後を考えれば温存しておかねばならな

い。

一国を支配下に置くには神気は幾らあっても困ることはないのだから。

……丁度一分。

もはや叫び声すら聞こえなくなった状況で、私は能力を解除した。

舞い上がっていた瓦礫や雹、土砂が落ちてくる。

まるで巨大な手で掬い取った様な窪地が出来ていた。

——隕石が落ちたかのようなその中心。

腕で顔を隠し、羽で体を覆い、自身を庇うよう死の門の悪魔を配置しながら、その足元に男はいた。

全身を見ても傷ついていない場所がない。

もはや立っている事も間々ならないようで、地面へと前のめりに倒れている。けれど顔だけはこちらへと向けて、視線を逸らすことはない。

例え悪魔が無事だとしても、召喚した本人はそこ等の人間と変わらないのだ。

それが今、こうして悪魔に守られていたとはいえ無事であるのは、奇跡以外の何もでもないだろう。

しかし。

ギリツ、と。

そう、思わず奥歯をかみ締める。

(凌がれた……)

今まで何人(なんびと)も抗うことが出来なかつた天災の三重苦を耐え切つた。

天変地異といつてもおかしくない光景を眼にしながら、男のその瞳には、強い恨みが色濃く残っている。

(洩矢の神は良い神職を従えていたようだな)

もし自分に仕えていてくれたのであれば、と思う。

しかし、その思いも一瞬で流す。

もはや覆ることのない事実を思い出したかのように——これから反撃だとばかりに、悪魔はこちらへと襲い掛かってきた。

神気を大量に使つた反動で、いま少しばかり充填に時間を要する。

あの天災の中で男を守っていた結果、体はもちろん羽もボロボロだが、それでも飛行

には問題ないようで、こちらとの距離を詰めてきた。

あつという間。

馬ですら全力で駆けても五秒は掛かろうかという距離を、コイツは二秒を切る勢いで到達した。

(間に合わんか！)

悪魔がとうとう私の前まで辿り着く。

屈強以外の何ものでもないその腕は、全てを圧殺する勢いで振り下ろされた。

天候を使った神気での迎撃が間に合わない判断。

オンバシラの何本かを具現化し、避けながら、振り下ろしてきた拳に合わせる。

破碎音。

束ねたオンバシラが、悪魔の拳と激突し、全て砕かれる。

そのお陰で威力は大分削がれたものの、何とかかわしたその腕は、大地を抉り、それだけでは足りずに地面に亀裂を生んだ。

叩きつけられた拳から逃れるように土砂が四散する。

巨大な物体が落ちてきたかのような重い音を響かせて、奴の攻撃は一瞬止まった。

笑つてしまふくらいの豪腕。

こんなものを真正面から馬鹿正直に相手をしてはならない。

撒き散らされた土煙に紛れる様に悪魔から距離をとる。

そうすれば対処も容易いのだろうが、問題はそこではない。

——神が、化け物相手に退いた。

僅かの間だったとしても、それは屈辱以外の何ものでもない。

舞い上がった土埃のせいで民や配下の神々からは見えてないが、この事実は私の中で揺るぎのないものとなった。

もはや、掛ける慈悲はなくなった。

余力など考慮せず、一気に消し飛ばしてしまおう。

そう考えた矢先、

「がはっ」

悪魔の後ろ、私の前。

神職の男は、口から大量に血を吐き出していた。

生きている事さえ不思議なのだ。

むしろ、それくらいですんでいるのだから重畳と言えるだろう。

けれど、男自身が限界を迎えようとしているのと同調しているかのように――

その存在が維持できなとかばかりに「死の門の悪魔」は霞のように闇に溶け消えていった。

立ち上った煙が消えるように、何の後腐れもなく。

初めから存在していなかったかのように、夜の闇へと還っていった

「……何だそれは」

苛立ちから、語彙が荒くなる。

今までの出来事は何だったのだ。

過去私を後退させた者など上位の神々ですら数えるほどしかおらず、ましてやそれがただの人間になど、生を受けて初めてのこと。

なればこそ真つ向から挑もうと、純粹な力では叶わぬのなら、神気でそれを補い正面から屈服させてやろうと思つた直前、その相手は私の前から消え去つた。

そんな存在を召喚した男は、むせる様に咳をし、時折口から血を吐き出す。

虫の息とはこのことか。

つい先程まで戦い、負かした洩矢の国の者達と同様の状態になつてしまった。

自分の表情が表情が険しくなるのが分かる。

人として良くやつたと褒めてやるのが普段の私の筈なのに、今回は何故か怒りしか込み上げて来ない。

人間の身にあるまじき力を誇示したせいかな、それとも洩矢の神ですら出来なかつた私をかすり傷とはいえ傷つけたという行為に対しての思案からか。

——兎に角、この沸き立つ怒りをぶつけねば気がすまない。

まだ息はあるようだ。

辛辣な言葉を浴びせたいのか、その命の最後をこの手で散らしたいのか。

湧き上がるものに突き動かされ、私はただ怒りのままに、その男の元へと向かった。

(ああ……もう、視界が完全にぼやけてやがる……)

視界も埋まり、曇天の世界がモザイクへと変わってどれくらいの時間が経っただろうか。

左手を取られたことによる出血で、段々と体力は奪われ、意識すらも霞んできている。庇うように守っていた諏訪子は……諏訪子の体は、まだ俺の前にあるだろうか。

(……全く、幾ら強大な存在を使役出来たとしても、自分が殺されたら終わりっていう弱点があるのなら、対処は簡単じゃないか)

現に八坂は電を降らせて【死の門の悪魔】を防御に使わせるしかない状況を作り出し、台風をこちらの周りに展開し自由を奪い、止めとばかりに雷を無数に放ってきた。

電は何とか防げたのだが、続く風の攻撃で呼吸が困難になり、最後の電撃で体中で無事なところの発見が難しい位に感電し、肉体を壊された。

——そうして、限界が訪れた。

幾ら強力な存在を召喚出来たとしても、維持できなければ効果を發揮し続けてくれない。
い。

天災の終わった直後、何とか顔だけを八坂が居た方へと向け、奴を殺せと悪魔に命令する。

刹那の如く移動し、大地が破裂するような一撃を与えた事を音で判断した俺は、もはや堪えるだけの力もなく、【死の門の悪魔】の供給を終わらせるよりなかった。

マナコスト9。

その維持は、常にほぼ全力で走っているかのような疲労具合だったのだから。

(もしこれで殺せなかったら……)

自分が死ぬのは確定だとして、無念のままに潰えるのはイヤだった。

例え何度も人生リトライ出来るとしても、この思いだけはリセットできよう筈もない。

幸いにも耳……いや、片耳だけはまだ聴力が生きているようだが、それでも体は、もはや痛みすら感じられず、消えそうになる意識を意思の力でキープしている状態。

このまま何も聞こえなかったのなら八坂を倒せたと判断し、満足のままに再スタートするとして。

「……何だそれは」

倒せなかったら、俺はどんな思いで第三の人生を歩めば良いんだろう。

聞こえた声は、間違ひなく風神。

しかも大したダメージを負っていない様な口調ではないか。

——イヤだ、イヤだ。このまま何の思いも遂げずに死ぬなんて。

大切なものも守れない。己の意思すら貫き通せない。

そんな状態で死ぬなんて——絶対に嫌だ。

だから——

(近づいて来い)

八坂の呟いた声には怒気が含まれていた。

恐らくただの人間の俺が抗ったのが許せないのだろう。

こちらは瀕死。あちらは壮健。

こんな状況、まさに強者が弱者を躡るのにおあつらえ向きじゃないか。

——獲物を前に舌なめずり、大いに結構。

その油断を、その慢心を。その、思考力の低下した状態でこちらに来てくれ。

そうすれば……否。それでもなければ、お前を倒せないから。

1歩1歩、こちらに近づくと足音が聞こえる。

まだだ。まだまだだ。

もう少し。あと少し。

徐々に近づくと気配に願いを込めながら。

俺の側まで寄って来い。

その時は俺の命を差し出そう。

だから、だからその時は。

「——お前は何者だ、洩矢の眷属よ」

来た。

残り1マナ。

最後のカードを思い浮かべる。

呪文系では効果が怪しい。

現状でも対象を破壊するカードは山ほどあるが、それが神相手にどこまで通用してくれるのかは検証したことがない。

ならば、純粋な力による撃破が望ましい。

よって、先程と同じように、クリーチャーを思い描く。
通常の状態では効果の薄い、でも、こんな状態の今だからこそ最大限の効果を発揮する、あれを。

……八坂、俺の命を差し出そう。

それ位しないと、今の俺には手が届かない。

——だから。だから代わりに。

お前の命を——くれ。

「——死、……ツね、え……!!」

08 満身創痍

コストの代償と、能力の性能はほぼ比例する。

つき込めばつき込んだ分だけ効果を発揮してくれるMTGのカード達には、当然ならそれ以外の——代価と結果がアンバランスなカードも存在していた。

その代表が、黒。

ライフを、手札を、クリーチャーを、山札を、行動ターンを。

差し出せるものがあるのなら、黒のカードはそれらを覆す。

先程の【死の門の悪魔】は9マナという膨大なコストの対価として、数体の黒クリーチャーと、自身のライフを捧げた。

——今から呼び出すものは、やはり黒のクリーチャー。けれど、コストはたった1。しかしそれは捧げるものが無くとも、現状では圧倒的な制圧力を持っている。

コスト1にして、13/13というMTGの中でも比類無き【マナレシオ】を誇って

いた。

『マナレシオ』

パワーとタフネスの平均を点数で見たマナ・コストで割った値。 クリーチャーの強さを評価する際に使われる指標の一つで、基本的には値が高いほど良い。ただし、当然ながらこの値が高ければ必ずしも優秀というわけではなく、あくまでも目安の一つである。

けれど、そいつは当然ながらデメリットを持っている。

自分の体力が多ければ多いほど、そいつの力は減少する。

つまりは、俺が瀕死であればあるほどに力を増すのだ。

そのデメリットを、今の俺は相殺している。

風前の灯である自分を頼もしく思うのは、そうそうある事ではないだろう。

俺のライフの総量が幾つあるのかは分からないが、ここまでくそつたれな死体一步手前状態なのだ。

これで先の悪魔より弱かった日には、目も当てられない。

そんなクリーチャーの名は「死の影」

俺の死が濃ければ濃いほどに、この影は強く、巨大になるようだ。

簡潔にして名は体を表すを体言するソイツは、俺の影からぼこりと湧き出てきた。

全身風のように黒く覆われていて、体の中央には赤いコアのような球体が見て取れる。

それに彩を添えるかのように、骨だと思われる肋骨が何本か、コアの周りに存在していた。

まるでクワガタのような真っ白い牙を二重三重にも供えている死の影は、一瞬にして

その体を巨大化させる。

死の門の悪魔よりもさらに膨れ上がったその体は、輪郭が霞むように周囲の闇に溶けながら、空ろな風貌を完成させた。

「なっ……!!?」

八坂の驚く声と、その場から退避しようとする気配が窺える。

——だが遅い。

瞬時に死の影はその巨大な手で、まるでそこにある闇が硬さを持つかのように周りを取り囲むように捕縛し、八坂の体を捕まえた。

体が地上から持ち上がる。

もはやそれは握りつぶさんとするほどの力であり、到底抗えるものではない。

しかし、流石は上位の神というところか。

神気を使い、拘束を解こうと対抗してきた。

両の手で全力を込めるよう命令するが、八坂はそれを弾き返さんと神気をまとう。

ここで逃せば、俺はもう八坂に何も出来なくなる。

コスト1のために維持する力は微々たるものだが、元の力がゼロに限りなく近いのだ。

後数分、いやもつと短いかもしれない。

それだけ経てば、俺の意識は——命は失われる。

このままでは握り潰せない……ならば。

ばくん。

私の頭上から、冥土への門が開く音が聞こえた。

油断。

その一言に尽きる。

もはや相手に抗う力など残っていないと思いついた結果がこれだ。押し潰さんと籠められる力に、自身が持てる力の全てを当てる。

ここまで接近されては能力も使用困難になり、例え使えたとしても、使おうと他所に気を回した瞬間に圧殺されるだろう。

故に、今私は全力で神気を放出し、魔の手から逃れられるようにすることだけ。

幸いにも余力はまだ残っている。

そして召喚者の男は瀕死。このままなら、こちらが耐え切れれば決着が付く筈だ。

先の見えた勝負に、思わず口元から笑みがこぼれる。

——いや、こぼれ様とした所で、頭の上から、何かが開く振動が感じられ、思わず空を仰ぐ。

黒。

それが私が見た色。

私を握っているこの影人間は、その昆虫のような二重三重にもなっている巨大な牙を持った口を開放したのだ。

口内には無数の白く鋭い乱杭歯。

(……ああ、私を喰おうというのか)

ゆっくりと、黒い口が迫ってくる。

拘束を解くことも、ここから逃れる術も今は無い。

（まさかこうも早く終わりが来るとはな）

達観した感想を洩らし、次に来るであろう事態を考え、口をあけて近づく影人間を不敵に笑いながら睨む。

誰が目など背けるものか。誰が絶望などするものか。

その瞬間の来る時まで、睨んで、睨んで……。

一向に來ないその時に、一瞬思考が停止した。

（止まつ……た……？）

疑問が駆け巡る。

大きく開いたその口は、今にも噛み千切ろうとする風貌のままに固定され、僅かにも

動く気配がない。

まるで時が止まってしまったような光景に、内心首をかしげる。

瞬きを一度。そして浅い呼吸を何度か行い、今ならば大丈夫かと思ひ深呼吸をしようとした矢先——こちらを喰い殺さんとしていた影人間は、その口を閉じ、ゆつくりと私を地上に降ろした。

今までとは正反対の、壊れ物でも扱うかのような振る舞いで開放され、またも考えが止まる。

そして、その事を問いただす間もなく、影人間は消えていった。

一風。

曇天の空も晴れ渡り、夜空には星の照明が輝き大地を照らす。

影から生まれし者は影へと帰るのが自然だとも言いたいのか。

つい今まで生きるか死ぬかの決戦があつたことなど夢のよう。

そこに残るのは私と、もはやピクリとも動かない洩矢の眷属。

そして。

「——八坂の神よ。……私の願いを……聞いてくれぬか」

体をオンバラシラで貫いた、洩矢諏訪子の神のみである。

(やった、やったぞ……!! 捕まえた、捕まえたあ!!)

子供のように心の中ではしやぐ。状況と相まって思考が狂人の域だが、こうでもしな
いと意識を保てない。

もう逃がさない。

絶対放さない。

この命、尽きようとも。

パワーやタフネスの数値なんて気にしている場合じゃないし、気にしてもいられない。
い。

どんな値だろうと、もうやるしかないのだ。

やらなければ——この怨みは晴らせない。

死の影に握りつぶす様、指示を送る。

パキン、パキンと。ガラスが碎けるような音が聞こえるのは、八坂が何かバリア的なもので防いでいるせいだろうか。

青白い火花が散っているのがぼやけた黒い視界からでも分かる。

拮抗。

ここまでしてこの程度なのか。

ここまでしないと対等にはなれないのか。

……庄殺がダメなら、他のやり方を。

手がダメなら足。

足がダメなら——口がある。その、見るからに凶悪な、クワガタの顎のようなモノが。

幸いにも八坂は死の影の手から逃れることで精一杯のようだ。ならば、これはもう必勝の行動。

もぎたての果実に齧り付くかのように、その命を刈り取ろう。

原作キャラが何だ。

女だから何だというのだ。

奴は——八坂神奈子は、俺の大切な者達を奪っていった。

だから奪う。

復讐なんて上等なもんじゃない。単なる八つ当たり。

けれど、やる。

今の俺にはそれが全てだから。それしかないから。

それすら出来なかつたら……俺は、俺でいられなくなりそうだから。

(いけ、【死の影】)

地獄への門が開く。

洋画の地球外生命体を思わせるその光景に、俺は八坂の死を確信し——

「——つくも、やめて……」

俺の目の前。

血だまりにその身を沈め、石の柱に胸を貫かれていた、洩矢諏訪子が語りかけてきた。

「え……?」

生き……ている……?」

同時、ピタリと死の影の行動が止まる。

俺の意思なのか影の意思なのか。

時が止まったかのような静止像が完成した。

「諏訪、子……？」

「九十九つたら……とうとう敬称まで抜けちゃって……」

「えっ……あつ、す、すいません。じゃない、えっ、あれ？ 諏訪子、さん……生きて……？」

動揺しまくる俺に対して、囁く様に語りかける諏訪子さんの声はとても優しく、神様というよりは恋人か母親のようだった。

「ちゃんと生きてるさ。神に死んで概念があるかは分からないけど、間違いなく、私は私
のまま、今ここにいるよ」

そう言いながら、咳き込むように呼吸を始める。

器官にたまった異物を吐き出しているようだ。

体は冷たくなって心臓の鼓動も聞こえなくて、何より息をしてなかった筈なのに、こ

うして会話が成立している事態に、これは漫画でいう死ぬ間際の最後のセリフなのではないかと嫌な予感が頭を過ぎる。

「そんなボロボロになっちゃって……。二十日は帰って来るなって言ったじゃない……」

「俺のことはいいです……。ぐっ！ ……はは、きつついなあ……。諏訪子さん、死に際のこと……捨て台詞とかじゃないですよね……。？」

「あまり話すな九十九。……安心して。私は時間をかければ回復するから。問題はお前だよ。その傷——自分の体がどうなっているのか分かっているの？」

安心した。

なんで生きてるのとか、その手の疑問は置き去りにする。

だって、生きているのだ。

それ以外で、彼女に何を望めというのか。

「ははは……もう、秒読みだって事は、何となく……。一度、体験……してますからね」

視界が黒で埋まる。

モザイクすら見えなくなった目には、何となく諏訪子さんの心配する瞳が向けられている気がした。

「そっか……。うん、大丈夫だよ。九十九は、私が助ける。だから、その八坂の神を放してあげて」

「……何故ですか。コイツはみんなを、勇丸を——何より諏訪子さんに害をなしたんですよ。祟り神の頂点が、なんでそんなこと言うんですか」

親しい人に言われた受け入れられない言葉に、怒りから来る気力で滑舌が回るようになる。

何故。後一步なのだ。

もう一秒もしない内に、俺は八坂に一矢報いることが出来るのに。

「九十九、ここで八坂を倒してしまったら、洩矢の国は終わる。：いや、私の国だけじゃない。戦の主神となった2人が消耗したことで、周りの妖怪や盗賊にしてみれば、この二国は格好の餌食だ」

「……分かります。分かりますけど……」

頭では分かっている。

今日本という国は盛大なバトルロワイヤルが行われていて、そのトップクラスの二国が激突し、疲弊しようとしている。

攻めるなり略奪するなり、どうにかしたいのなら、この時をおいて他にあるだろうか。守り神の居なくなつた神の国など、妖怪達から見ればご馳走だ。

俺はまだ見たことはないが、鬼や天狗といった日本固有の強力な魑魅魍魎が、美味しいケーキを切り分けるかのように国を分断させていくのだろう。

「ごめんね九十九。みんなを守れなくて」

諏訪子さんが謝っている。

別に何も悪いところなど無いというのに。

「ごめんね。帰る場所を失ってしまつて」

まるで全ての非が自分にあるかのように、謝罪の言葉を紡ぐ。

それは俺への謝罪の意味もあり——自身の力が及ばなかった事への無念さを悔やむ声でもあった。

「——ごめんね、勇丸を守れなくて」

その言葉で確定してしまった。

自分の相棒の、死。

きつと何か特別なことが起きて、繋がりが感じられないだけなのだろうと思ひ込もうとした。

だけど、それも終わってしまった。

悲しみに涙がほろほろと頬を伝うのが分かる。

また召喚出来るのだからと言い聞かせ、何とか自制心を保つ。

これで記憶を失っていたのならどうなってしまうのだろうかという不安を胸に押さえつけながら、ならせめて、と勇丸の最後を訊ねてみる。

「——勇丸は、どうでしたか」

言葉足らずな自分のセリフに、我ながら馬鹿だと思ったが、諏訪子さんは俺の聞きたかったことを理解してくれたようで、ぽつぽつと、けれど簡潔に、その光景を話した。

「雄々しく戦ってくれた。次々と相手の人間達を蹴散らして、最後は、二体目の八咫鳥と、相打ちに」

八咫鳥——神の使いとされ、太陽の化身なんてご大層な役職に就いていた奴だったか。

仮にも太陽の象徴の一端を担っていたのだ。

実際の戦闘は見えていないが、とてもじゃないけどただの2/2である勇丸が対処出来るとは思えない。

おまけに相手は鳥。空を飛ぶ相手に、地上を這うことしか出来ない生き物がどう対抗するのだろうか。

けれど、二体。

きつと、あらゆる限りの知略を尽くして屠っていったのだ。

良くやったと褒めてやりこそすれ、何故逝ってしまったのだと嘆くのは、全て終わっ

てしまった今となつては虚しい限りではないのか。

分かつてはいる。分かつてはいるのだ。

しかし、頭で理解しても、心がそれを受け入れてくれない。

辛い、悲しい、憎い。

心が押し潰されそうの中。

ふと、では諏訪子さんはどうなのだと考えた。

……苦しいのは俺だけではない。

むしろ俺以上に感情をうねらせているのは、このポロポロの小さな神様な筈なのだ。

幾年もかけて築き上げてきたものが崩れていくその光景の前に、蹂躪されていくそれを見続けるしかなかった無力な神様。

正直、そんな考えなどクソ食らえだと思っていた。

他の人も辛いのだから我慢しなさいなど、他の場面ではいざ知らず、恨みを晴らすだけのこの場においては、火に油の言葉でしかない。

——諏訪子さんに話しかけられる前までは。

周りを、他人を、全てのものを怨み、けれど何より無力であつた自分を最も責めるか

のような謝罪に、隠し切れない恨みと後悔と、それらを覆い隠すほどの悲哀が混ざっているのが理解出来た。

それを押し殺し、この国を奪おうとする者を倒さないでくれとは、一体どれほどの葛藤と決断力があるのだろう。

「……良いんですね、本当に」

「構わないよ。もう、決着はついた」

言葉の裏に様々な感情が透けて見えるが、それが諏訪子さんの決断だというなら、その気持ち痛みほど分かる今の俺は、従うしかない。

俺がもし最後の一步を踏み出してしまったのなら、もうこの小さな神様に救いは訪れないのだから。

【死の影】に、掴んでいた——いや、飲み込まんとする勢いで広げていた口を閉じさせ、八坂を地面に下ろす。

生憎と顔が見えないが、きつと驚いているはずだ。

「はは、は……参ったなあ……」

——これじゃあ、本当に無駄死にじゃないか——

言葉に出さず、飲み込んだ。

閉じられた目の隙間から、ポロポロと大粒の涙が零れる。

鼻水も出てきて嗚咽も止まらないこの姿は、情け無いを通り越し、哀れの類だろう。

全く、原作様々だ。

確かにこの流れなら、俺の知っている東方プロジェクトのキャラ像に向かつていく事が予想できる。

屈服した諏訪子さんが負けた事にもめげず大和の国の為にと尽力して、それを八坂が評価し二人は仲良くなつていくのだろう。

本当に……これでは道化もいいところだ。

一人で空回りをして、勇丸を死なせて、自分まで瀕死になつて。

……いや、笑いも取れないとなれば、もはや道化にすら及ばない。

ぐずぐずと、えぐえぐと。

恥も外聞もなく、声を押し殺し、鼻水垂らしながら泣いた。

なんて、無様。

B級映画の脇役ですら、もつとマシな最期だろうに。

「本当に、ごめんね。そして、ありがとう」

ふわりと、俺の残った右の掌に暖かい感触が触れる。恐らく諏訪子さんだろう。さつきまでは冷たかったのに、今では人並みに暖かい。

これは本当に、体の方は大丈夫のようだ。

(安心した、ら……意識、が……)

唐突に、意思をつなぎ止めていた最後の線が切れそうになる。

我ながらタイミングの良過ぎる思考電源OFFに、何もこんな場面で主人公属性を体験したくなかった、と軽く現実逃避。

せめて逝つてしまうのなら、もつとカツコつけたかつたなど、内心で苦笑する。

一度死んだ時と同じように、どうやら俺はカツコつけられない生き物のようで、理解するのに二度も死ぬ羽目になるとは、我ながら巡りの悪さに呆れつつ。

「——ゆっくりお休み。後は、私が何とかするから」

その日俺が最後に聞いた言葉は、眠る我が子に言い聞かせるような、諏訪子さんの優しい声だった。

09 目が覚めたら

鳥の声がする。

頬を撫でる風が心地良い。ずっとこのままでいたい気分だ。

けれどそれを意識したせいか、眠気はどんどん消えてゆく。

瞼を閉じていても差し込む光が目を焼き、たまらず左手で遮ろうとして……。

——感覚の無くなった腕に気がつき、一瞬で全てを思い出した。

ただ、だからといってガバツとなんて起き上がる気にはならなかった。

じんわりと、雪が解けていくかのように今までの出来事が思い出され、整理されて脳

内に格納されてゆく。

そんな、起こってしまった全てを受け入れるべく、ゆつくりと目を開けながら……

(……知らない天々——)

「目覚めたか、洩矢の眷属よ」

天井見えねえし。見えるの人の顔だし。

わあ、綺麗な人だなあ。

青黒いシヨートヘアに、首から掌くらいの大きさの鏡をネックレスのようにひっかけて女性が上から覗くように声をかけてきた。

キリつとした眼光が、可愛いかではなくて、出来る女って印象を際立たせている。うむ、こんな美人が俺と接点なんてあるはず無いから、これは夢だな。

ただこんな夢は望んでいる訳ではなかったので、見なかったことにして再び目覚めるのを待つとしよう。

おやすみなs

「目覚めたのなら体を動かしてみるといい。違和感のある箇所は言え」

随分と堅苦しい美人さんだな。

夢は本人の無意識下での願望でもあるって聞くし、俺にはこの手の趣味があったんだろうか。

いやしかしこの態度で付き合うとなったら色々と考えさせられる場面が出てくきそうだな。

参ったな、こりや今後の嫁さん候補を真剣に検討しなきゃいけないぜ。ははは。

……無理だな。

「お前、何してんだ」

我ながら開口一番のセリフが結構冷たいと思う。

しかし、本当に何してるんだこの神様。

俺の記憶じや殺す殺されるの関係だった筈だが。神だから人間と感覚違うんだろうか……。

こちらの顔を覗き込むかのように体をかがめていた八坂は、一瞥観察した後、ゆっくりと立ち上がった。

「無礼な口の利き方だ……まあいい。お前の体の面倒を見ていた。諏訪子との契約でな」

契約……？

諏訪子さんが？

八坂と？

——今までの出来事と、この手の漫画的展開の終始を思い出し、尋ねてみる。

「……諏訪子さんが服従する代わりに、俺の治療をお前がやったのか？」

「その通りだ。生憎と失った腕は戻せんが、それ以外ならばもう充分に回復しているはずだ」

……何てこった。一人で勝手に自滅したどころか、他人の足まで引つ張るハメになるなんて。

「……諏訪子さんは無事か？」

「ああ。今し方、念話で連絡を入れた。もう——」

「九十九！ 目が覚めたって!?!」

襖が勢いよく開け放たれる。

大変ユニークな帽子にそこから覗く金髪な小柄な少女は、俺がとてもよく知っている人物であった。

「あ……えと、おはよう……ございます」

長年の習慣からか。混乱した頭から出てきた回答は、無難といえれば無難な朝の挨拶だったと思う。

元気いっぱい息を弾ませながら挨拶する諏訪子さんに、思わず安堵のため息が零れる。

日の光に照らされて、崇り神だっというのに、それとは真逆の性質の太陽の化身に見えた。

子供は風の子元気の子って感じ。

良かった。どこも悪いところは無さそうだ。

「おはようって……確かに目が覚めたらおはようだけどさ……。うん、まあ元気そうだし、いいか」

「諏訪子、これで契約は果たした。腕以外、心体共に健全な状態に戻っている筈だ。何かあればまた私に言え」

八坂め、諏訪子さん呼び捨てですか。俺が意識を失っている間に仲良くなったのかね……。

そんな面食らった諏訪子さんとは対象的に、八坂はサバサバした感じで会話を一方的に済ませる。

そしてそのまま背を向け諏訪子さんが入ってきた襖から、チラリとこちらを見た後、出て行った。

そのまま、しばしの間。

改めて周りを見てみると、俺が寝泊りしている諏訪子さんの社の大広間にいることが分かった。多分、神気とかそういった気質を集めるのにココのが効率良いんだろう。前にそんな話を諏訪子さんがしていたし。

で、こっちは何から聞いたものか悩んでおり、逆にあちらは何から話したらいいものかで迷っているような……お見合いのように会話の糸口を探り、けれどどちらも攻め手にあぐねている状況に陥っていた。

だったら、女の子にそれをやらせちゃ男が廢る。

一人で勝手に空回って、もう付けるカツコすらないが、それでも意地を張りたいたいものなのだ。

「あれから……」

「ん？」

「あれから、どれくらい経ちましたか」

まずはテンプレその一。いつまで寝てた？ な質問。

問い自体にあんまり意味はないが、この手の会話の王道。

時間も切羽詰ってるって訳でも無さそうだし、ここから色々聞いてみれば良いよな。

「丁度一週間。その間、国の合併と、民達への説明。そして、取り決めの制定をやったね」

「体の方は、もう何とも無いんですか？」

「ああ。元々神つてのは肉体にそこまで縛られてる訳じゃないからね。神奈子の奴も私を滅するより屈服させる目的で戦争起こしたんだし。確かに肉体的な損傷は激しかったけど、霊核……魂が健在なら、神様つてのは存命し続けるものなのさ。ある程度まで、ね」

本当にズタボロになったら消滅するってことなんだろうか。

……血溜りの中で腹にオンバシラ刺されてた時点で充分瀕死だと思っただけ（汗

「本当に良かった。俺が見たのは血の中で倒れてた諏訪子さんでしたからね。これでも

かつて位ボロボロな。最後には……棒で胸を貫かれましたし」

「あの時は参ったね。心までは折れてなかったんだけど、あれやられてポツキリ」

昨日転んじやつてさ。みたいに気軽な物言いに、何だか問い詰めるのも馬鹿らしくなる。

……俺、あれを見て今までにないくらい怒ったんだけどなあ。

もう神様の定義が分からん。普通の生物とは違うと思っておこう。生命力的な意味で。

それから、今までに起こった出来事を聞いていった。

国の合併と、在り方。

民達への救済と説得。

法の制定。

そして、八坂への恭順。

諏訪子さんがミシヤクジの何体かの譲渡と八坂への服従を了承することで、国や民の安全と繁栄と、先の戦で傷ついた者達への治療の確約をしたようだ。

「で、最後の一人である九十九がこうして目覚めて、晴れてこの国は一から出発することになったのです」

「……あつさり言つてくれちゃってますけど。……俺が倒れる前に言つた気もしますが、そんなにサバサバ割り切れるもんなんですか？」

「そうせざるを得なかつたからね。確かに私はミシヤクジの統括者で、恨み辛みを代弁する者ではある。でもそれ以上に民達の成長を願っているんだ。これで国民全員皆殺し、とかだつたなら、私は消滅しても一族その他草木に至るまで、関わりのある者は例え空気であつたとしても、全てを呪い殺す気概があつたよ」

何だ空気を呪い殺すつて。ミシヤクジ様マジこええ。

「そういえば……。村のみんなは……何人、死んだんですか？」

言つた途端、ぽかりと頭を殴られた。

あまり痛くはないが、突然の行動に思わず鳩が豆鉄砲食らつたような顔になる。

「九十九。心して聞け」

う、ガチの神様モード。神気が少し溢れている。

一週間寝たきりだつた体にやあ、ちと堪えるツス。

俺は一体何の地雷を踏んだのかと思ひながら、はいと返事をした。

「まず結論から言おう。——この戦で散つた命は、勇丸だけ。神奈子は敵味方の死傷者をそれ以内に取りめて戦つたんだ」

「ちよ、ちよと待つて下さい。だつて俺が到着した時には、戦場は死屍累々の状況だつ

たんですよ？ 何人も地面に倒れてて——ん？」

あれ、倒れていて……呻き声とか……あれ？

「そう、倒れていたただけだ。傷ついていない者は居なかったが、それらは全て神奈子が治したよ」

「……勇丸が、敵兵を蹴散らして八咫鳥と相打ちになったつてのは」

「殺す事よりも戦闘能力を奪った方が効率良かったんだろう。戦い方を見てそう思った。事実、あいつは恐ろしいくらいに速さで敵を無力化していったんだ。敵は生きている事で泣き叫びながら周囲に恐怖を与えて味方の心に傷を与え、その救助をする為に人手を割かなければいけない状況を作り出していた。人間達には足を、八咫鳥には羽を攻撃することで、封殺していったよ」

「……でも、勇丸は死んだじゃないですか」

「ああそうだ。勇丸は死んだ。その事実は何の言葉を以ってしても覆らない。ただ私はそこで止まれない。まだ残っている者達の為に、私は私でなくなるまで神としてあり続けねばならない。それが、傷ついてもなお付き従ってくれた者達への、何より勇丸への恩返しだと思っている。……九十九は、自分の復讐を他人にやってほしいと思うかい？」

「……その聞き方は、ずるいです」

「すまない。こうでもしないと九十九は止まってくれそうに無いからね」

一拍。諭すような表情を変化させ、今度は謝罪の言葉を紡ぐ。

「——勇丸との仲を引き裂いたのは私だ。私に出来ることなら可能な限り償わせてくれ」

そう言つて、諏訪子さんは俺に向かって深く頭を下げ、両の手を地面につける。

土下座。

古来より人々が神に対して行つてきたものを、逆の立場で見ることになるとは。

「……それに關しては俺にも思うところがあります。ですので……」

諏訪子さんの手が強く握られるのが分かる。

恐らく、これから殴るなり蹴るなり罵倒するなりされるのではないかと思っているのだろう。

その気持ちに答えるような真似もしたくない訳ではないが、そういうのは一番被害にあつた者が行ふべきものの筈だ。

仲を裂かれたのは不快だが、俺はこうして、腕は無いものの生きている。
なので、

「そういう事は、一番の被害……。違うな。一番の功労者に聞いて下さい」

「え……?」

疑問の声と同時に、目線を俺の方へと上げる。

白くて、大きくて、もふもふで。

そこには、初めて見た時と同じように勇丸が悠然と鎮座していた。

「じゃ……まる……」

漏れるように諏訪子さんが言葉をこぼして、動きが止まる。

「勇丸……私が分かる？」

震える声で、すぐる様に尋ねた。

すると、僅かではあるが、はつきりと分かるように、勇丸は頷く。

途端、諏訪子さんは勇丸に抱きついた。

その首に顔を押し付け、すまかった、許してほしいと懇願する。

ちよっと空氣的に居づらいのだが、俺も当事者の一人ではあるので動くに動けない。

それに、諏訪子さんを覚えているということは、俺のことも覚えている筈だ。これが

嬉しくない訳がない。

勇丸召喚の僅かな疲労感に懐かしさと失ったものを取り戻せたことへの安堵感が重なり、俺の心はそれだけで満たされる。

今の心中は恨みとかそんなものは一切無くて、いつもの俺そのもの。

明るく楽しく過ごしたいなあ、『楽に』↑ココ重要。

の精神が前面に押し出ている常態だ。

ぼりぼりと頬をかく指にザラつく感触を感じながら、そういやヒゲ剃ってないなあとかぼんやり考えていると、諏訪子さんの気が済んだのか、こちらに視線を向けてきた。

「本当……何て言っているか……」

「気にしないで下さい。馬鹿な男が一人で空回って勝手に自滅しただけの話です」

「でも……それじゃあ……」

何もしないでいることに我慢がならないのだろう。

そわそわと何かを提案しようとするが、こちらが要らないと言ってしまったのでどうやって謝罪しようかと考えているようだ。

俺が諏訪子さんの立場だったなら、確かに何かしらの謝罪を行いたくなる。

だが困った。これといってやってほしい事など無いのだ。

謝ってもらっても逆にこちらが申し訳ない気持ちになるし、かといって欲しいものがある訳でも……あつたわ

ただなあ。この手の出来事にありがちな『え？ そんなことでいいの？』的な要求をして驚かせてみるのも面白そうなのだが、勿体無い気がしてならないので少し悩む。こんな機会滅多にないだろうし、会いたくもないし。

腕を組み、うんうんと唸って考えること数十秒。

気持ちより実益！ と結局物欲に負けた俺が諏訪子さんに提案したのは、「じゃ、服作ってくれませんか？」

というものだった。

今の俺は弥生時代の人辺りが来ていそうな服……つまりは、この時代の服を着ている状態。

GパンとかTシャツはポロポロになってしまったのだろう。

履いていたスニーカーだって、今まで歩き続けてきたせいで、戦う前からポロポロだった。

……誰が俺のこと着替えさせたんだ。まさか諏訪子さんとかじゃないだろうな。

考えない方が良く、俺の良心と羞恥心が無意識下で働きかけたかのように、その出来事をスルーする。

あんまり考えたことは無かったのだが、身に着けるもの全ては消耗品。

ゲームとかアニメなんかじゃキャラは全員いつも同じ服な場合が殆どだったが、歩けば靴は磨り減るし、衣類だって雨風でポロポロになり、武器とか持つていてもメンテナンスをしていたっていつかは完全に切り替える時期が来るのだ。

多分服自体が自己再生とか能力持つてるんだらうとか何着も同じの持つてるんだとかで当時は強引に納得するようにしていたのだが、その手のルールが今の俺には当ては

まらないので困ってしまっただという訳で。

ここに来てから約半年。

Gパンは問題なかったとして、Tシャツなんか別に土ぼこりの多いところへ行っていたわけでもないのに、一週間で野球漫画の主人公並みに汚れちゃったもんなあ。

村の人が手洗いしているのを横で眺めながら、二回目以降は自分で洗濯をしたものだ。

きつと冬になって水温が下がったら洗濯ローテーションが一週間から二週間に伸びていだろう。寒いのがイヤだから。

……：そーいや今つて季節はいつなんだと疑問に思うが、これもスルーしておこう。

「分かった。最高のものを仕立てさせてもらおうよ」

「前に頂いたミシヤクジ様の外套みたいな感じのだと有り難いです。あれ今まで着てた衣類のどれよりも着心地最高だったんですよね」

あ、地味系でお願いします。と付け加えたところで、諏訪子さんは目線をずらし、俺の後ろにある襖に、もういいよ、と声をかけた。

ん？ と首を傾げるまもなく、スツと入ってくる八坂神奈子。

出て行った時と違って、注連縄は外している。

ゴツさが取れて美人度UPな感じだが、やっぱりまだ怨む気持ちは残っているので、

素直に感動することはない。

そんな俺の心情など気にする様子もなく、八坂はどかりと部屋の中央、元々諏訪子さんが崇め奉られていた位置へと座り込んだ。

組んだ胡坐を崩して、あの例の偉そうな（偉いです）ポーズになる。

ちよつと複雑な心境だが、諏訪子さんや勇丸は何も感じないようで、体を八坂の方へ向けた。

場の空氣的に俺も体を向け、それを見て、これで話す場が出来たとでも思ったのか、八坂が威厳に満ちた語りと言う名の自己紹介を始めた。

「私は八坂神奈子。大和の国を治めている者の一人だ。ここは我が国の傘下に入ることで、名前も洩矢の国から守矢の地へと改名した。——洩矢諏訪子、並びにその眷属よ。以後、私に任せ、称え、崇めよ。さすれば飢える事のない日々を約束しよう」

頭の中が真っ白になった。

諏訪子さんが八坂へと下るのは知っているし、国の改名も分かっていた。

ただ——ただ、だ。

並びにその眷属つてのはあれか？ 俺のことか？

『待ってくれそんな話聞いてないぞ』と諏訪子さんに顔を向けると、当の諏訪子さんもきよんとした目でこちらを見ていた。

……あれ？ 諏訪子さんも知らない……？……どういうことだ？

「ちよ、ちよっと待って神奈子。確かに私の国は服従するし、私達ミシヤクジもその指揮に入るとは言ったよ。でも九十九は別だ。こいつは、私の眷属じゃないんだよ」

今度は八坂がきよんとした顔をする。

え、何この展開。

面白い顔を見られて良いもの見れたなとは思うが、口を挟むのも怖くて、とりあえず色々取り決めをした当人同士で話し合ってもらおうとしよう。

「……嘘を申すな諏訪子。この国の……守矢の者達は口を揃えてその者はお前の眷属だと言っていたではないか」

嘘ついてんじやねえと八坂が言った言葉に、諏訪子さんと俺があちやー的な顔をずる。

「あく、神奈子。その、ね。……うーん言葉じゃあれだし……。九十九と私の繋がり、見えてみてよ」

いまいち理解し難いが、繋がりと言うからにはやっぱり霊的とか神的なものなのだろう。

眷属というのは、そういうった繋がりがある——のだと思うので、それを見てみるって事なんだろうか。

慥然としながらも八坂は目を凝らすように俺と諏訪子さんを見比べる。

一回、二回、三回。

視線を行ったり来たりさせながら、その表情は納得いったという風に深く目を伏せ、大きなため息を吐いた。

「どういう事なのか分からぬが……確かにお前とその男、そしてその狗神との繋がりはないな」

「ごめんね神奈子。この九十九はさ、半年位前に私が招き入れた外来人で——」

そのまま、この国への異様な外来人を招き入れる為の方便である事。俺との出会いから、様々な奇跡を起こせる事を買われ、妖怪の討伐を行っていた事。この国の為に様々な知識や技術を授けてくれた事への説明を終えた。

崩した胡坐に肘をつき、添えられた手に頬を乗せながらじつとその話を聞いていた八坂は、最後までその姿勢を崩すことはなく、話し終えてからは瞳を閉じ、じつと何かに思考を巡らせているかのように、ふむ、と一言呟いた。

「なるほど。つまり洩矢の国の為に働いてくれていたのは事実だが、仕えてさせていた訳でも使役していた訳でもないのだな」

そう、まとめる様に八坂は締め括った。

こくりと頷く俺と諏訪子さん。

勇丸は何をするでもなく、ただ静かにその場に控えている。ああ、この感覚がとても懐かしい。

「そうだな……。お前、名を名乗れ」

唐突に、八坂は俺に向かってそんなことを言った。

指を自分に当て、俺ですか？ というジェスチャーをしてみると、どうやらその意味が分かったようで、そうだとばかりに不適な笑みを浮かべる。

名前なら諏訪子さんが散々言ってただろうに、やっぱり自分で名乗る事に意味があるんだろうな、この手の挨拶は。

くそう、この高慢チキめ。

「……九十九」

「何が出来る」

間髪入れずに質問続けやがった。

まさか一問一答みたいに問い詰めていく気か!?

「……色んなものを呼び寄せられる」

「やってみせろ」

……何か腹立ってきた。

この野郎……じゃない。この女郎、あんま舐めてつとイてまうぞゴルア。

やってみせろなあ？ いいじゃねえかやってやるよ。

体力も回復しているし、わざわざ相手からやれと言ってきているのだ。

凶悪なクリーチャーかスペル使ってやんぞ！

と息巻いた目で八坂の方を見てみると、横から諏訪子さんが袖をちよんちよんと引つ張りながら、首を左右に振った。止めなさいって事なんだろう。

その仕草、おねだりする妹みたいでGJです、と一瞬意識が違う方向へ飛んだがすぐ戻ってくる。妹なんていたことないけどね。

仕方ない。ならばと違う意味での凶悪なカードを思い浮かべる。

その余裕綽々（よゆうしやくしやく）な表情崩してやんよ！ 効果あるか分からんけどな！

あれ何manaだったかな。多分2だと思っただが……いや3だったか？

まあいいや。実行あるのみ！

「覚悟しんしゃい！【お粗末】！」

言動は気にしない。なぜなら俺だから。

我なら何言ってるんだとは思いますが、そういうカード名なのだからしょうがない。ふざけた名前なれど、その効果は折り紙つき。

『お粗末』

コスト2で、白の「インスタント」カード。
対象のクリーチャー1体を0/1にし、全ての能力を失わせる効果を持っている。

0/1ということは攻撃力は皆無となり、防御力も、下手をすれば俺以下。
何より能力の全てを失うのだ。

これが決まれば神だろうが悪魔だろうが一般ビープルと同等になる。

だが、MTGではこのカードの採用率は皆無。

クリーチャー対策をしたいのなら、そんなまどろっこしいものなど使わずとも、もっ

と単純に『このクリーチャーを破壊する』といった除去系のスペルを使えばいいのだから。

MTGにおいて、その手の除去系カードが高コストという訳ではないので、この「お粗末」はネタか、カードの購入が揃わない時点での代用品くらいにしか記憶になったが、思わぬところで役に立った。うん、今度から捕縛系呪文その1として覚えておこう。

疲れが襲ってくるが、今までに比べると疲労の度合いが少なく感じ……お、ちよつとはレベル上がったんだらうか。と考える。

唱えたと同時、八坂に光が集まり、四散する。

やはりその事に驚いたようで、目を見開き、次は俺を睨み付けた。

「何をした」

「やってみろつて言うからやってみただけだ。呼び寄せたんだよ。奇跡の1つを」

ふふん、これでお前はただの女になったのだあ！

ぐへへへ。これであんなことやこんなことをし

「気味の悪い目で見えるな」

ズドンッ！　なんて。そんな音がピツタリだろう。

俺の目前に何か突き刺さる。

板張りの床を貫きそびえ立つそれは、紛れもなくオンバシラ（細め）。

後十センチ近かったら俺の顔面剥がれていたよね？　つてぐらいの勢いだっただぞ。

(あれえ？　能力封じられてねえじゃん(汗))

と先ほどまでの余裕ぶっこきまくりな思考は捨てて、視線を遮るオンパシラを避けて、首を曲げながら八坂に目を向ける。

俺の青ざめた顔を見て満足したのか、彼女は鼻で笑うと、気に入ったとばかりに、

「九十九。お前——我に仕えよ」

なんてのたまってくれた。

10 対話と悪戯とお星様

有象無象の者が私に仕えている。

神やら人やら妖怪やらが、私の傘下であり、力であり、守るべきもの。

だが、この者は何だ。

諏訪子の眷属ではないという。かといって、妖怪の類でもなく。

ならば人かと問われれば、首を傾げざるを得ない。

奇跡、と。

この男——九十九はそう言った。

様々な異形の者を呼び出し、今私の身に起こっている事態を目の当たりにして、なるほど。これは人の身に出来る事ではないと判断する。

覚悟しろと言った後、私の体に光が集まり、四散した。

何をしたと眼力を込めて気負そうと睨み付けるものの、効果はなく……いや、効果が

現れず、九十九にだけは効果がないのかと思いきや、周りの者——狗神や諏訪子も何をしているのかとばかりに、表情に変化はない。

私の身に何が起こっているのかを知っているようで、九十九とやらはゲスな目を向けてきた。

神に牙をむき、後一步のところまで追い詰めたあの面は見る影もない。

……いや違う。追い詰められたのではない。もはや殺す殺さないの殺生権を奴は握っていた。

今の私は、コイツに生かされているようなものなのではないか、と僅かながらの疑問を抱く。

なれば多少なりともコイツに良くしてやるのが神というものだろうか……

(その視線は我慢ならん！)

その視界を遮るように、大樹ほどあるオンバシラを具現化し、奴と私の間を隔てるように出現させた。

だが、どうだ。

(なっ!?)

出てきたオンバシラは私の腕ほどしかない、か細いもので、しかもそれは出現させた途端に神気を失い、無造作に床へと突き刺さった。

派手な音が響き、それに対して九十九はそのゲスな表情を引つ込め、今度は顔を青くしてこちらに顔を向ける。

その事自体は気分が良いが、力が上手く行使できない事に気がついた。確かめるべく、体中に神気を行き渡らせ、確認を行う。

神格が大幅に低下。

それに伴い、神気もかなり失われ、能力の発揮にも支障を来たしている、この状況。(……何だ、これは)

これではもはや、そこいらにいる下、中級の神々と変わらない。

流石に雑多な大妖怪程度には負けないだろうが、苦戦してしまう水準だ。

【お粗末】と、九十九はそう言った。

文字通り、私がお粗末になってしまった、と考えるべきか。

奴が言う奇跡とやらは、言霊を現世に呼び出す事なのではないか、とあたりをつける。

(くくくつ。 たった一言呟かれただけで、名だたる神々とも渡り合え、打ち据える力を持つこの私が、こうも削がれるとは)

油断していたから、といえは聞こえはいいが、体に変化が起きたことすら意識しなければ気づかなかった。

一つの奇跡でこれだ。

多少の疲れは見て取れるが、奴の矍鑠（かくしゃく）とした態度はまだまだ健在。

九十九は色々なものを実現させるのだと言った。——恐らく、言霊を実現させるようなものだろう。

人ではない？ ああ、確かに人ではない。人でなどあるものか。

人でも妖怪でも諏訪子の眷属でもないのだとしたら、自然とそこに考えがたどり着く。

——神。

それ以外の何だと言うのか。

神にしては人間のように表情をころころ変え、まるで強大な自分を偽らんとするが為に、わざと下賤な行動をとっているようだ。

何の為にそのような行為をしているのか分からないが、きつと退屈しのぎの類だろう。そうでなければ余程偏屈な神だと言える。

『九十九』とは『憑く物』と韻を踏んだ名前であるところの、物に宿る神を表していた筈だが、名前は諏訪子が命名したと言っていた。ならば、本来は別の名が付いていたのだろうか。

ただ、言霊を操る大神など聞いた事がない。少なくとも、この大陸では。

その神——九十九自体は人間と変わらぬ体力しか持ち合わせていないようだが、そ

の程度、こやつを持つ奇跡を行使する力を前にすれば霞む。
欲しい。

ミシヤクジの統括者を従え、鉄を精製する技術を獲得し、そして言霊を實現さる神を
手中に収めれば、この大陸はおろか、海に向こうの国々まで制覇出来てしまえるのでは
ないか。

笑いが込み上がる。

弱体化した自分のことなど棚に上げ、九十九を誘う事にした。

このような態度なのだ。色好い返答はないであろうが、伝えずにはいられない。

「九十九。お前——我に仕えよ」

我ながら、とても簡潔な一言であつたと思う。

さて、わたくしこと九十九は、現在、神様からの勧誘を受けている真つ最中な訳でし
て。

日本でも最高位に近い神様なもんだから、本当なら諸手あげて嬉しさアピールタイムなのだろうが、この前の戦闘の相手が相手なだけに、そんな訳にもいかず。

あれか、【死の門の悪魔】とか【死の影】とか勇丸とかを傘下にしたとかその手の類か。

それとも『菌向かって来るとは中々に見所がある云々』みたいな反骨心が好物なお方なのか。

ま、なんにしても答えは1つ。

「嫌です」

もつと遠まわしな拒否の仕方があったとは思うが、俺の心をストレートに表した結果がこれである。

第一、この八坂神奈子って神に仕えたのなら、息抜きとかだらけるとか出来ない——
—ゲフンゲフン、ではなく。

アニメ版ジャイアンに対して、初見で好意を持てるのか？ といった感じだろうか。だって、まだ一度もこの神様の良いところを見たことがないのだ。

キャラ背景も性格も将来も知っているが、だからって、俺の大切なものに手を上げた奴に対して、全面的に好意を持って接する事など、出来る訳がない。

性格に関しては二次設定を多分に含んでいる印象を受けるが、あまり反れたものでは

ないだろう。

だって、言動がまさにそれっぽいやから。

きつと、ここから親しくなっていくたのなら、もつとフランクな口調になるのだろうが、別に求めてはないのだし、今は無関心。

嫌だと答えた自分の心情を分かって欲しい。

「神奈子、いきなりそんな事言つたつてダメだよ。せめてお互いに、ある程度相手の事を知っておかないと」

諏訪子さんが、もう少し手順を踏んでから勧誘しろと言っている気がする。

あれえ、諏訪子さんは俺が八坂陣営に行くのに賛成なんですか？　と思つたが、単純に会話をスムーズに成立させる為だけに言つただけっぽい。顔が呆れてたし。

「それもそうか……。九十九、何故私の誘いを断る」

お前、人の話を聞いてないだろ！　ココは普通、自分語りとか始める流れじゃありませんでしたか!?

「そりゃ俺自身ポロポロにされましたし、諏訪子さん刺されましたし、国乗つ取られましたし、国のみんな傷つけられましたし、勇丸殺されましたし」

ぶーぶーぶー。

とりあえず、思いつく限りの嫌な出来事を脳内再生しながら言ってみる。

これだけやられて、逆にどうして好意的な態度をとれるのか聞いてみたいもんだ。つてか聞いてやる。

勇丸がその時の事を思い出したのか、尻尾がいつもより垂れ下がっている気がする。よしよし、お前のがんばりは無駄にすまいぞ。

「これだけの事をされて、どうしてその原因である相手に従わなくちゃいけないんだ」
どうだ参ったかお前の提案は受け入れねえぞ、と自分を通す男、九十九。

ふつ、俺はNOと言える日本人だ！

「まあいいではないか。楽しいぞ、領土拡大やら統治やら」

……うわあい、俺の意見が一言でバツサリだあ。

ここまで唯我独尊だと、これはこれで親しみが沸くものなのではないかと思えてきてしまう。

そういうや原作でも、やれ産業革命だとかやれ太陽神の力だとか好き勝手やってたもん
なあ……流石、神様。

む、いかんいかん。

あまりに感覚の認識がずれ過ぎてて、段々と憎悪が薄れていつている。

自慢じゃないが、俺は怨みやすくもあるが、情に流されやすくもあるのだ。こんな美人と会話出来るだけでもテンション上がるつてもんよ。

……といった理由は後付けで、俺の中に八坂を怨み続ける燃料が無い事が、態度軟化の最大の原因だろう。

国としては負けてしまったものの、諏訪子さんや国民は健康になっており、勇丸も無事に記憶を引き継いでいる事が分かった。

俺自身はボコボコにされ隻腕となってしまったが、それは、悪意からではない根源からの発生による暴力だと、原作を見ていて分かっているので、相手の事を考える余裕の出来た今となっては、八坂の出方次第で俺は許してもいいと思っている。

もつとも、負けた側が許す許さないと判断しているのは、このデスマッチ日本の中では些か滑稽だとは思うが。

なので、とりあえず八坂に何かを提案させて、それを俺が受け入れて怨み辛みはチャラにする。という流れで事態の收拾……というか、俺の気持ちに区切りをつけることにしよう。

諏訪子さんも、既にこの大和の国へ尽力する覚悟を決めているのだ。

俺一人が反骨心を持っていても、この国の人は誰一人幸せになることはないだろう。

「……八坂の神。あなたは俺に対して、何をしてくれますか？」

遠回りな意見を口にしてしていると、この神様はスルーしてしまうのだと判断して、本心をストレートにぶつけてみる。

一応、雇用形態の確認というか契約という名の交渉をやっている形になるので、好かない相手といえど、口調はフランク過ぎず丁寧すぎず。諏訪子さんを相手にしている時より幾分忠誠心ダウンな感じでいく。

領土とか政治なんかは興味がない訳でもないのだが、そういったものはMTGの能力を把握してからでいい。

「そうだな……。子孫繁栄を約束し、無病息災を確定し、この国の誰よりも富を持たせてやることも出来る。勿論限度はあるが、大体の事は出来ると思うぞ」

話に食いついてきたのが嬉しいのか、八坂は楽しそうに、そう話す。

しかし困った。

子孫なんて悲しいかな、まず相手がいない時点でピンとこない。無病息災は確かに嬉しいが、それだけの為にずっと従僕になるというのはナンセンス。財はあつて困るという事は無いだろうが、金銀財宝とかは能力を使えばザクザク出せそうなので却下。

（参ったなあ、惹かれる提案がない……。八坂にも服作つてもらおうか？ もしくは便利なアイテム貰うとか……。ん？）

———ここまで考えて気がついた。

さつきもさらつと思つたのだが、何か条件を飲んだ時点で俺はこの国に、八坂に仕えなければならなくなる、という流れなのは間違いない。

誰かに忠誠を捧げるというのも悪くはないと思うのだが、今はまだアウトロー、もしくは一匹狼をしたいお年頃。

多分やる事は諏訪子さんのところで働いていた時と同じように、妖怪退治をするのだろう。

となれば、長い間の休職は出来なくなる。この仕事つてのはそういうもの。

それはそれであり……だとは思うのだが、諏訪大戦という重大な原作分岐点の1つに巻き込まれてしまったのだ。

どうせなら、見れる範囲は全て行ってみようかという気持ちで湧き上がっている。

(でも死にたくねえしなあ)

ストーリーは大まかにしか覚えていないが、この後のビックイイベントは《かぐや姫》から始まって《西行寺》と向かって……筈だ。多分。

正確に何年に起こる事態なのかは分からないが、生死が関わるものは、かぐや姫には月からの迎えの場面にさえ居なければ問題ないとして、西行寺に向かうのなら戦闘云々ではなく、幽々子さんと出会ったら能力で死ぬそう。

……いや、俺の事だから出会う前に死ぬんじゃないだろうか。庭師に切られたりとかで。

ガチンコ戦闘する機会は薄そうだけれど、やっぱり、もつと経験値積んで強くなって

おかないと、後々で苦しむ羽目になるのは予想できる。

どうせなら、情けない姿ではなく、真逆の態度で出会いたいもんだ。

俺の中にはスキル『格好付け（偽）』でも備わってるんじゃないかと疑いたくなるが、やるやらないは兎も角として、目指すだけなら構わないだろう。

こう……ヒーロー的ポジションに位置する為には、今ががんばらねば間に合わないくさい。俺の成長率的に。

「あなたっ！ 誰!？」

「名乗るものの程でもない。ズガガガーン（↑なんか敵をまとめて倒した音）！ じゃあな○○（好きなキャラの名前を入れてね）」

「待つて！ ……あの人は一体……」

——良い。

痛いだけな気もするが、この流れは厨二を通り越してテンプレ……違う。もはや王道だ。一度くらいはやってみよう。

(うーん、じゃあやつぱり……俺の修行の為に付き合ってもらおうとかぐらいかなあ)

洩矢に居た時は、RPG系で例えるなら、序盤の村とかでひたすら雑魚を倒しまくる作業。

この間に俺の何のレベルが上がったのかは不明だが、体力はついたし、戦略の幅も多少は広がっている。

ただ、あくまで自己流の戦い方を学んだだけであり、指南してくれる人はいなかった。もうそろそろ、次の段階へと進んでもいいだろう。

「そのどれも要りません。代わりに、俺の修行に付き合ってください」

「ほう、あの悪魔や黒き影と、再び私が対峙するということか」

「意味合いは近いですけど、それだけじゃありません。もつと色々な相手と、つてとこです」

八坂は顎に手を当て、ふむと呟く。

油断からとはいえ、死の一手手前まで追い詰めたものと再度戦えというのは、やはり躊躇われるものなのだろう。

こりやあもう少し条件緩めて、カードスペル効果の実験台だけでも良いかな、と考えを改めようとすると。

「お前が起こせる奇跡とやらは、まだ成長の余地があるということか？」

なんて尋ねてきた。

「ええ。というか、むしろまだまだひよつ子です。やつとスター……出発地点に立つたところですかね。……あ」

言った後に後悔した。

八坂を首の皮一枚まで追い詰めてしまった俺がこのセリフを言うという事は、『成長すれば、お前を倒せるぞ』と同義なのだ。

勧誘までしてくるのだから、理由はともあれ俺を必要としてくれているのは間違いないのだが、これが狭量な相手だったり疑心暗鬼に近い性質の性格だと、俺は消されかねない。

（た、頼むつ。『ははは気に入った』な展開になつてくれっ！）

原作基準の性格ならそうなってくれるとは思うのだが、微妙に思っていた展開と違った諏訪大戦を思い返してみると、今一步踏み込めない心情に陥る。

表情には出さずに、内心で神（諏訪子さん）に祈りまくりながら、八坂の顔を見てみれば……

「それは良い。楽しみが一つ増えた」

くつくつと、いたぶる相手を見つけたかのように笑う軍神様がいらつしやいました。

（あちやー……バトルジャンキーな方でしたかあ……）

オラわくわくすつぞ！　って感じて明るく対応してくれたのならまだ良かったんだけど——それもそれで問題ありだが——と、案にやっぱり辞めたい願いを祈つてみるも叶わず、漏れる神気にびびって言葉の続きが出てこない。

「では九十九の神。以後我的手足となり、奮起せよ。尽力する限り、対価を支払い続けよう」

Nooo!!

決まっちゃったくさいー!?　ずつとなんて仕えたくないよ。

……ん?　九十九……の『神』?

「ちよつとストツプです八坂の神。色々聞きたい事はありますけど、まず1つ確認させて下さい。——九十九の『神』ってのは何です?　俺、人間ですよ?」

「異国の言葉は分からぬ。——神というのは、お前の事だ、九十九の神。何の酔狂で人間の真似事などしているのかは理解に苦しむが、私の下に就くからには、ある程度は神の役割をこなして貰うぞ」

そーいやストツプって英語か……ってそうじゃない。

八坂さんや、何を以って俺を神だと言っているのか、こつちの方が理解に苦しむわい。「話を聞いて下さい。俺は神でも眷属でもありません。それに九十九神って他に居るでしょう、物に憑く奴が」

「ならばお前のその力をなんと説明する。様々な妖怪——悪魔を従え、私の身に変化を来たすような奇跡を起こす者を人だとしても言うつもりか」

「(変化?) そう言われると、俺自身首を傾げたくありませんけど……それでも、カテゴリ……部類としては人間なんです。腕力がある訳でも神氣を使える訳でもない」

「だが、その奇跡とやらは我々神と近いものを感じる。魑魅魍魎を呼び出すその性質は真逆なれど、力は純然たるものだ。そんな力を、精々数十年しか生きていないただの人間が持ちえている訳がない」

そこ突っ込まれるとキツいんですよー(汗)

どうしたものか。諏訪子さん相手だとその事は空気読んで流してくれたけど、八坂相手じゃそれは期待出来そうもない……というか現在進行形で突っ込まれる。

「神奈子。九十九は過去に関して話さない事を理由の1つとして、私の国の為に働いてくれていたんだ。もし伝えさせるのなら、それには触れない方がいいよ」

ナイスフォローです諏訪子さん！

ちゃんとした確約ではないけれど、俺と諏訪子さんの間にはそういった暗黙の了解があった。

嘘は言っていない作戦です！ 分かります！

何度か『聞き出してやるぞ』って空気はあったのだが、全て冗談……というか、俺を

からかう為にやっていただけという場合だけだった。

おお、八坂が考え込んでいます。これで引き下がってくれば良いんだが……はっ!? このセリフはフラグ踏んだか!?

「……致し方ない。だがいつか話せ。興味がある」

フラグは回避したっぽいが、状況はあまり変わっていない。

剛速球がスローボールに代わった印象だろうか。

どちらにしろ相手にボールは届く的な意味で。

……何とかして忘れてくんないかなあ。もしくは諦めてくれるか。

どっちも無理だとさっくり諦められれば楽なんだが、きつと俺の事だからことある毎に悩むに決まっている。

そこだけはさっくり諦められるな。ははは、情けない方向に自信満々だぜ。

「それへの返答は、否としか応えられません……助力は出来るだけやりますよ。ただし期間がありますけど」

「ほう、言ってみよ」

「(この時代の人の寿命つてどれくらいだったかな……)……百年。その間だけ、俺は尽力します。あなたの為ではない。この国の為でもない。……この国に飲み込まれてしまった洩矢の民と、諏訪子さんの為です。そこを履き違えてくださらなければ、私はあ

あなたの下で働きましょう」

「(……百年、か。やはり人間ではないではないか) 分かった。よく覚えておこう」

そう言つて、八坂はすぐと立ち上がる。

こちらにゆつくりと歩みを進め、俺の前で立ち止まった。

目前で持ち上げられる右手。

手を差し出すその行為は、握手を求めているからなのだろう。つられてこちらも立ち上がる。

確か相手から名乗らせるのは、こいつた友好関係を結ぶ際には失礼なんだつたか。

「俺の名前は九十九。一応人間です。宜しくお願いします」

「八坂 神奈子。大和の国の一端を治めている。好きなように呼べ。人間と言つたんだ。私に対して敬う事を忘れるなよ」

「じゃあ……。神奈子さん、つて呼ぶ事にしますね」

「ふふつ、そうやって呼ばれるのは初めてだな。ただし、諏訪子にもやっているように、私にも民達の前では呼称を変えておけよ」

『様』は付けろつてことですね。了解です。

色々と聞きたい事もあつたが、何だか話の流れ的に聞き難くなつてしまい、結局、まあいいかとスルーすることにした。

どうせ決して短くない付き合いになるのだ。
尋ねる機会は、それこそ無数にあるだろう。

さて、これで諏訪大戦という原作のビックイイベントの一つが区切りが付いたわけだ。
俺の心にも同時に区切りというか踏ん切りが付き……これで残すところ憂いは後
一つになった。

……くつくつく。

「じゃ、早速ですけど神奈子さん。修行……というか、実験に付き合ってください」

「もうか。構わんが、何をするつもりだ」

よっし。OK発言、確かに聞いたぞ。

「簡単です。少しの間、動かないでいてほしいだけです」

うわあ……。

急に顔が強張って睨む様な視線になっちゃったよ。

「そうおつかない顔をしないで下さい。何もあの悪魔とかをまた召喚して殴らせようとかって訳じゃないんです。痛くも痒くもありません。むしろ楽しい事かと」

「ならば言え。何をするつもりだ」

眼光緩まらねえ。警戒心MAXだぜ。

ふふふ、でもそれじゃあ俺の気持ちには止められない!

神気が強まって結構息苦しくなってきたのだが、流石に半年近く諏訪子さんの側に居たせいかな、ある程度は無理が利くってもんよ。

「それを言ったら実験にならないもので。それともあれですか? 大和の国の一端を担っているお方が、自分の発言には責任が持てない?」

おお、神奈子さんの顔が面白い事に。

美人の困り顔というのも乙なものだが、今回の目的ではないので残念ながらも安心させるような言葉が続ける。

「別に害をなそうって訳じゃありません(ある意味害だが)。天地神明に誓います(信じないが)。もし命の危険を感じたら、俺をぶっ飛ばして構いませんから(優しくお願いします)」

「……分かった。この場から動かなければ良いんだな」

「はいそうです。ただ、少し足を崩していただけると助かります」

「足……? ん、こうか?」

「ええ。そのままその足を揃えて、前に向けて下さい」

一体何をするんだって表情の神奈子さん。

それもそうだ。俺だって同じ立場ならば困惑している。

……うん、素晴らしい足だ。一点の曇りもない美脚は至宝と認定しても良いだろう。もう少し雰囲気があれば、そのまま顔を埋めてしまいたいくらい。

足を投げ出した神奈子さんの横に座る。

何かしたら分かってんだろうな、と顔を向けてくるが、本当に、傷ついたり痛めついたりといった類の事はする気は無いのだ。

そつと、その二本の足の踝（くるぶし）を上から押さえつける。そして、

「勇丸！ GO!!」

満を持して、今勇丸が神奈子さんに突撃。

思念で命令は既に伝えてある。

元から近い位置に居たこともあり、すぐに側まで寄ってきた。

そのまま俺が抑えてつけていた足に顔を近づけ……

舐めた。

「……?!?!?」

おお、悶えとる悶えとる。

バタバタと足を動かそうとするが、自力での体力は男には適わないようだ。良かった、この辺は神様が規格外じゃなかった。

諏訪子さん、洩矢のみんな。そして俺の清算は終わった。

けれど、勇丸だけは、まだなのだ。

さつきから、とんとん拍子で進む俺と神奈子さんの関係に対して『ご主人様が望むのなら』つてな具合に沈黙を保っていたけれど、晴らしたい恨みが無い筈がない！ と俺が気持ちを汲んでやり（独断）、けれど血みどろな結果は避けたいなど考え、ハッピーな方面でそのストレスを発散してもらおうと、ペロペロ作戦を仕組んでみた。

「九十、九つ！ お、おま、お前という奴はっ——!!」

こちらを必死に叩くものの、まるでノーダメージな俺。いくら女性だからって非力過ぎるにも程がある。

ははは。可愛いですよ神奈子さん。

ああ、さつき言ってた変化つてこういう事なのか。

恐らく先ほどの呪文、「お粗末」の効果なのだろう。本来なら問答無用で対象を雑魚にするスペルだが、原因は不明だけれど、中途半端に効果が現れているようで。

能力の方は分からないが、力はまさに0/1に相応しい症状が発揮されている。

(……何だ、やっぱり効果あるんじゃないか。微妙だけど。……いや充分か？ 最高ランクの神を相手に、この成果なら)

湧き出す笑みを隠そうともせず、俺は神奈子さんへと話しかける。

「そういえばまだ言ってますね。実験内容は、神様の弱点探しです。神様側か

らしたらとてもじゃないけど協力なんてしてくれないでしょうし、こういう手段をとらせて頂きました」

なんて託けて言ってみるものの、結局は悶える姿が見たかっただけだったり。

勇丸に足を舐めさせるなんて……。とも思ったこともあったが、そこはほら、俺の悪戯ゲフンゲフン。——勇丸自身に恨みを晴らさせてやらねばらないので、このようにな形になったのだ。

他にいくらでもやり様があるだろう、なんて気にしない。

こういった、地味だけど効果がありそうな（相手が嫌がる）意地悪をするのが、俺は大好きなのだ。

転生前の能力を考案していた時は、『水虫にさせる能力』とか『歯並びを悪くさせる能力』など、別に死にはしないし生きる上で支障は何も無いけど、やられたら嫌な能力の取得を一瞬だけが本気で考えたりもした。広義解釈で『相手に嫌がらせをする能力』。これ結構汎用性高そうだなとも思っただよね。

そんな話はさておき、現在進行形でペロペロの刑を執行中なのだが、いい加減そろそろ来る“タイミングだ”と思うので、心頭滅却し、いつ起こっても良いように備える。

正直すまんかった勇丸。こんな下らない我が侷に付き合ってくれて、お前ホント忠犬だわ。

だから、こんなことをお前にさせた俺は、そろそろその対価を支払ってこようと思う。諏訪子さんだって、さつきから呆気に取りられ、声を上げる事すら忘れてるようだし。

……あ、神奈子さんの目がこつちをロックオンした。

「このっ——痴れ者がああああ!!」

天井ではなく、後方にあつた襖をぶち破り、空を飛ぶ。

『ふふふ、オンバシラって結構飛ぶんですね』なんて意味の分からない思考のまま、人生初のギャグパート修正による致命傷の無効化に思いを馳せつつ。

——今日、俺は星になった。

11 大和の日々 《前編》

この島国でかなりの国土を持つ国となった大和には、幾つかの大きな社がある。

その内一つはこの国の一端を治める神である、八坂神奈子を祭る場所。

もう一つは、近年新しく領土となり、洩矢の国から守矢の地と名を改めた、洩矢諏訪子の神社。

片や太陽や天候などの陽を司り、方や生きとし生けるものの感情の、最も暗き陰を司る者。

その国の名の下には、有象無象の権力者や中々下級の神々。そして人間達と、僅かではあるが、妖怪が名を連ねている。

言葉で並び立てるだけならば、それは無敵の帝国と言い換えても間違いではないだろう。

そんな国に、こじんまりとした社が一つ。新たに建造されていた。

何を祭っているのかも分からず、けれどもはや絶対的な存在となった二神の命令により、速やかに。

ある人物の希望もあり、とある温泉の付近に据えられたそれは、お世辞にも大きいとは言えないが瀟洒な作りが施されており、居住性を特化させた結果の機能美とも言える出来栄えであることが窺えた。

そこに、幾人かの息遣いが聞こえてくる。

一、二、三……。全部で四人、と一匹。

うち三人は社の中にある、広間とも言えない小さな部屋の中央に位置しており、そこに、一人の人間——村の男が入ってきた。

格好はこの国の人間なら誰でも着ている、イグサ、ヤマブドウの蔓、樹皮などを編んで作られたものだ。

ただ、その入ってきた村人はおかしい。

言動や格好が、ではない。……いや、ある意味格好がおかしいのだが、そのおかしさが問題なのだ。

足が、無いのである。

右の膝から下。本来あるはずのものが欠けている。

足りない箇所を補うように松葉杖を不器用ながらも操り、三人の前に崩れ落ちるよう

に座り込み、頭をたれた。

丁度、三対一の面接のような図式になったその場で、部屋の中心に構える村人は、額が床についてもなお頭を下げようとし、

「止めなさい」

部屋の横。村人から見て右側にいた人物によつて静止の声が掛けられた。

青黒い袴のような着衣の下半身に、純白とは言えないものの、ぬめる様な光沢が見て取れる白を基調とした上半身の服。肩からは同じく白の外套を羽織り佇むその人は、八坂の神でも洩矢の神でもなく、彼女らに力を貸しているとされている、神でも人でも……まして妖怪でもない、正体不明の者——白い男。

頭を上げる村人。

それを何の事はなく見つめる二神。

村人の顔には脂汗が滲み、これから起こるであろう出来事に不安と期待が入り混じっているのだろう。

「なに、そう身を堅くする必要はない。すぐに終わるさ」

言つて、白い男は村人を見ながら目を細める。

……効果は、すぐに現れた。

「あつ、ああつ……！」

村人の口から、驚嘆と歎喜の言葉が漏れる。

それは失ったものが取り戻せた際に発せられる、感謝の言霊。

——足が、生えている。

もしくは、戻ったといった方が正しいか。だが、男にとってはどちらでも良いことだ。目の前にいるこの国の最高神の事など、対面してただけで畏怖で気絶してしまいうな過去の自分を忘れたかのように、座っていた姿勢から足の感触を確かめ、恐る恐る立ち上がる。

指は動くか、感覚はあるか。筋力は、肌の色は、爪は。

一つ一つ目を皿の様にしながら確認し、足を軽く床に下ろす。

木製の床を軋ませながら、板張りを触るように、叩くように。

何度も、何度も。足を打ち付ける。

神々達は何も言わず、白い男もその様子を見守っていた。

そして、最後にしつかりと大地へ立つかのように足を床へと踏み込んだ村人は、再び膝を折り、頭を下げて、

「……………」

何か言おうと嗚咽のような声を漏らす、けれどそれは言葉になって出てこないでいた。

「これで終わった。さあ、帰れ。皆に無事を知らせてくると良い」

その言葉に突き動かされたのか、村人はふらふらと立ち上がると、しゃんと一礼をし、入ってきた場所から出て行つた。

遠ざかる足音が聞こえ、入れ違いになるように一匹の大きな白狗が入ってくる。

通り過ぎる村人を横目で見ながら、その狗は白い男の横に座り、差し込んでくる夕日に目を細めた。

もう、日も暮れる。

これから朝までは、恐らくこの国の民は誰もこの場所に立ち入る事はないだろう。

夜の帳が近づき、虫達も騒ぎ出す。

そろそろ明かりが必要になる刻限だ。

暗闇が大地を侵食^s

「さて、九十九。飲むか」

……も少し語りの脈絡なんかを考えて言葉を発してほしいです、神奈子さん。

「腕……無いと不便だな」

当然といえば当然な感想を溢す。

つぶやく様に言ったにも関わらず、一緒に温泉に入っていた勇丸は、目を細めながら同意の意思を送ってくれた。

良いですなあペット同伴の温泉。ペットじゃないが。

湯にやんわりと広がる勇丸の純白な毛を見ながら、のぼーつと今の状況を思い返す。俺がぶつ飛ばされてから、幾日の月日が経ち、その間、一応の休養も兼ねて諏訪子さん御用達の温泉に再びお世話になっていたのだが、兎に角、不便なのだ。

バランスが悪い。無い感覚が気持ち悪い。幻痛は無いものの、どうも腕のある感覚で生活を送ろうとしてしまう、等々。

『じゃ、生やせば良いじゃん』と古今東西全ての者が思い、けれど諦めて来たそれを行うべく、俺はそれが可能なカードを思い描く。温泉に浸かりながら。

何とも罰当たりな感想な気がするが、それを咎める者はいないので意味はない。

（腕を生やすねえ……【再生】？ ライフの回復？ ……再生方面でやってみるか）
手ぬぐいを絞って頭に載せながら、脳内wikiを使い考える。

『再生』

かなり簡潔に述べるのなら、言葉の通り、腕や足が『再生するだけ』とも言える。

MTGの定義で説明すると難解になる為、やや緩めた噛み砕き方で説明すると、カードが破壊された場合、この再生が発動すると、受けたダメージ含む、そのカードの破壊効果を上書きし、無効にする。あくまで上書きである為、破壊されなかった事にはならない。

ちなみにルールに乗っ取りきとんと表記すると(MTG wiki丸写し。スルー推奨)。

●キーワード処理の一つ。パーマネント(場に出ている全てのカード)の破壊に対する置換効果を作るということを意味する。

●呪文や能力の解決による効果の場合、「[パーマネント]を再生する」とは、「このターン、次に「パーマネント」が破壊される場合、代わりにそれから全てのダメージを取り除き、タップし、(戦闘に参加しているなら)戦闘から取り除く」を意味する。次の破壊1回だけに対して有効。

●常在型能力の効果の場合、「[パーマネント]を再生する」とは「[パーマネント]が

破壊される場合、代わりにそれから全てのダメージを取り除き、タップし、(戦闘に参加しているなら)「戦闘から取り除く」を意味する。

能力が有効である限り何回でも有効。

なんて壮大な説明になり、専門用語が乱れ飛び、文章だけだと何とも頭の痛くなりそうな解説である。

(再生系のカードかあ。あんまり多様してなかったから、いまいち想像し難いなあ)

再生能力は、元々カードに備わっている場合が多い。特に多いのが体感的に緑、次点で黒、といったところか。

緑は植物や野生といった力強い生命力を。黒は不気味に蘇る闇の力を意味しているのではないかと思われる。

ただ、これらの中には後天的に能力を付随させる事はコストが高くなるのだ。

というのも、この手の能力はやはり継続して効果を発揮させたい場合が多く、【エン

チャント」の形をとっている場合が多い。

要約すると、

●継続して再生能力が欲しい↓「エンチャント」呪文↓平均使用コスト3〜4

●一度だけ再生能力が欲しい↓「インスタント」呪文↓平均使用コスト1〜2

といった具合になる。

前者は戦闘面でのクリーチャーの強化による生存率UP & 攻撃力増加。後者は本来備わっていない能力を瞬間的に付与する事による「コンバット・トリック」に使えるのだ。

『コンバット・トリック』

戦闘を自分に有利に運ぶ目的で戦闘中に使用される呪文や能力のこと。奇襲の類だと思ってもらっていいだろう。

よって、呪文を継続させるだけでも体力を消費するこの世界のルールで当てはめるなら、【エンチャント】系は避け、【インスタント】呪文系を行使するべきか。

そして、その手の補正を与えてくれる代表格が『白』である。

ダメージを軽減し、ライフを回復させるといった、プレイヤーやクリチャーの生存率を高める、防御面に優れたカードが多い。

先に述べた緑や黒が再生の代表格なのは間違いないのだが、そのどれもがコスト2以上のものばかりなのだ。

勿論例外はあるものの、それは今の状況下では制約があり、発動するか怪しいので除外する。

その中で今回の条件に合うものとなると、1つ該当するものがあつた。

(頼む。効果発揮されてくれよー)

内心不安に押しつぶされそうになりながら、まだ選択肢はあるのだからと勇気をちよびつと振り絞り、選んだカードを実行する。

そのカードは【蘇生の印】

白が1マナの【インスタント】呪文。効果は、対象のクリーチャーを【再生】する。というもの。

だいぶ前に、俺は自分がプレイヤーでもありクリーチャーでもあるのではないか、という仮説を立てた。

クリーチャーにしか効果のないカードを自身に使用した際に、変化が見受けられたからだ。

なので、今回も効くのではないかと思い、実行してみる。

これだめなら、次はライフ回復系かなと思いつながら。

そしてそれは、瞬きをする間に終わってしまった。

光った？ と思った瞬間、俺の左手は元通り。

握って開いてを繰り返し、ぶんぶんと振り回して見たり、お湯をすくって宙に投げられることも、背中を搔くことも出来た。

もつところ壮大な、『腕再生劇場！』って感じで効果が表れると思っただけに若干の戸惑いはあるものの。

きちんと生えてきてくれた左手に、胸の前で拳を握りこんで、目を瞑る。

ああ、腕がある。

たったそれだけのことなのに、どうしてこうも涙が溢れ、止まらないのか。数日。たったそれだけで、このザマなのだ。

——ならば、と。

俺が世話になっていた人達のことを思い出す。

諏訪大戦では、実質、死者は一人もいなかった。だが、俺が見た光景には、体の各所を失った、あるいは機能しなくなった者が、多数居た筈なのだ。

気を許した相手が悲しんでいる姿は見たくない。

よし、と一声。

勇丸と一緒に湯から上がる。

こちらから少し離れ体中の水を身震いで飛ばす勇丸を横目に、俺も木に掛けてあった衣類を着込む。

心身ともに回復した俺達は、身支度を整えながら、政務をこなしているであろう土着神の元へと向かった。

太陽が頂上に昇り、これから傾きかけるかなと言った刻限に、俺は諏訪子さんの住居に辿り着いた。

あの戦いの後もこれといって変化の無い社を見ながら、ちよつと嬉しい気持ちになりつつ中に入る。

何の理由だかは分からなかったが、諏訪子さんの社に訪れていた、体の一部の無い村人に協力してもらい、カードの効果が現れるのかどうかを実験した。

といつても、いきなり『治してしんぜよう』なんて真似は出来ない。

治ったのなら良いのだが、もし治らなかった場合は余計に落胆させかねないからだ。そんな希望を奪うような真似など、俺には無理。

なので諏訪子さんに事情を説明し、二人が謁見している間に、こつそりさりげなく、忍者のように呪文を行使した。

辻斬りならぬ、辻回復。

右の手首から先が無かったその村人は対話の最中、突然の発光に驚き、それを確認しようとして、生えていた右拳に驚愕した。

何度も右拳の感触を確かめ、そしてそれが頭でしつかり理解出来たであろうと同時、何かが決壊したかのように涙を流す。

その事に諏訪子さんも、民の前だから。と表情は威厳を保ちつつ、けれど目だけは驚きを隠せないように、大きく見開かれていた。

むせび泣きながら感謝する村人に、神様っぽい（神様です）対応をして、退室させる。そんな出来事の影で、カードがきちんと効果を發揮してくれた事でガッツポーズをしている俺に近づき、凄い。良くやった。これで皆……等々。傷ついた者達が、五体満足に戻る喜びを分かち合った。

それから三日。俺は休まず再生呪文を使いまくった。

1マナで再生出来る「蘇生の印」を筆頭に、それと類似したカードを片っ端から実行する。

この時に分かったのだが、俺の1日最大マナ保有量が1つだけだが増えていた。

これは有り難い。と喜びよりも先に、救いの手が広がった事への感謝が湧き上がる。

だが、1マナ再生カードは俺の知識の中では一枚だけ。それ以外だと2マナ以上かかってしまうものになり、一日に回復させられる人は三人しか出来ない計算であった。

これは不味い。時間が迫っている訳ではないのだが、俺の心情的にこんな悠長な現状は許せなかった。

よって、個別ではなく全体に効果を及ぼすカードを考える。

なんでもっと早くその結論に辿り着かなかったのか疑問が尽きないが、とりあえず前進はしているのだし、と、次に生かす事にした。

初めは人。

選んだカードは「活力の覆い」

自軍全てのクリーチャーを再生する能力を持つ、2マナの緑カード。

この自軍、というのがどう機能するのか不明瞭なところはあったが、問題はなかった。諏訪の社に集められた彼らは、瞬時にその効能に驚き、そして感謝する。

——これならいける。

五体満足になった村人達を見ながらそう思い、諏訪子さんをお願いして、四肢のどれかが欠けている者などの括り無く、外傷を負っている者全てを日数を分けて呼んでもらった。優先順位はあるが。

それからは、徐々に人数を増やしてもらった。

まずは十人。もう十人。更に十人。まだまだいけるかと、一気に百人。

話を聞きつけた神奈子さんから、大和の民も見てほしいと言われ、承諾しながら日々を過ごす。

千人以上を超えた辺りから大まかにすら数えるのを止めて、さらに数ヶ月。国中の怪

我人が俺の元に押し寄せる事態になった。

最初の頃はこちらから各地へ向かおうとしたのだが、どうも俺が思い立った時には皆こちらへ向かっている最中らしく、ここで待つていた方が早いと言われ、回復職に精を出す。

来る人来る人がお礼（貢物？）だと言つて海山の幸を持ってきてくれたり、集まつてきてくれた人の待機所としてなのか『いつそ社を建てろ』とか二神に言われて、俺の意思など無視して強引に建造されたり——温泉の近くが良いつて要望だけは通つた——そんな感じで一年くらい経つたか。

山が色づき、黄金色に田畑が輝き。

純白の化粧をした大地を眺め。

新たな生命の躍動を感じる緑と出会ひ。

天の存在を身を以つて感じる熱を体感した。

世間じゃ俺は怪我や万病を治す神だと言われていたり、言霊を司る存在だと囁かれたり、百鬼夜行の主じゃないか、なんて噂も飛んでいたり、もう言いたい放題。俺はスイカ（何故か変換できない）じゃねえつうの。

厨二ネームが跋扈（ばっこ）し始めたのはスルーして、温泉に入つては怪我人を治し、温泉に入つては妖怪を倒し、温泉に入つては村人達と交流を深めた。

今の俺の血にはきつと温泉が流れているんじゃないか、つてくらい入ってるな。……生前は別に、そこまで好きじゃなかったんだがなあ。

そんなこんなで今日、神奈子さんと諏訪子さんが言っていた人数の最後の一人の治療が終わり、一区切りが付いた訳なのだが……。

「今日は何食べよつか？」

諏訪子さんあんたもか。

ずるずると神奈子さんに引きずられる俺を眺めながら、楽しそうに、そう切り出した。

つてか酒を飲むならご飯食べてからにして下さい、神奈子さん。

「そうですね……。しらす丼と……。白身魚の赤だし味噌汁なんてどうです？」

今更逃げられないと分かっているの、観念して返答してみる。

もつとも、本気で逃げたい訳ではなく、少し呆れているだけなのだけれど。

「おお、しらすどんつてのは聞いた事無いけど、なんだか興味が掻き立てられる名前だねえ」

期待して下さいな。とつても美味しいですから。

北陸の……何処だったか。信越？ 江ノ島辺りで有名だった筈だ。多分。

——兎に角、旨いものだからノープログラムってもんよ。

いい加減引きずられるのにも嫌気がさしたので、神奈子さんの腕をタップして放してもらう。

諏訪子さんはニコニコ笑顔で、神奈子さんは柔らかく笑みを浮かべる。

それだけ見れば和む光景なのだろうが、その表情の裏には、食事と酒のつまみに対する期待があるのだと知っている俺にとっては、やや複雑な心境ではある。

ま、頼られるのは嬉しいですよ？ 理由はどうあれ、ね。超美人だし。

12 大和の日々 《中編》

湯気を立てるご飯に、生しらすをふんだんに盛り付ける。

小皿に醤油と生姜を取り分け、山葵も好み程度に追加で添えておく。

少し風味の強い赤味噌の出汁に、適度な大きさに切り揃えたタラの身を投入して、さつと味をくぐらせて。

箸休めとして大根と胡瓜と人参の三色浅漬けを用意したら、完成である。

「おお、このしらすという小魚が、いい塩梅に暖かなご飯と合うな」

「神奈子、こっちの味噌汁も美味しいよ。ちよつと味が濃い目だけど、しらす丼と一緒に食べると丁度いい感じで」

美味しそうに食べてくれる2人を見ながら、俺も一緒に箸をすすめる。ポリポリかじる大根の浅漬けが、しらす丼や魚の赤出汁で鈍った舌の感覚をクリアに戻す。

我ながら良い仕事してますねって言いたくなる様な出来栄えに、思わず頬が緩む。

ま、カードのおかげなんだが。

団欒のひと時を楽しむ大和一家、とても言えるだろうか。

俺の目指していた光景の一つである。

何でこんな事になっているのかというと、事の始まりは、戦勝祝いだったかの祭りの際に出された食事から始まった。

今までずっと空気を食べてきて、飽きの来ない能力によってこれといって不満もなかったのだが、あの味の無い団子やら焼き魚やら粟やら何やらを、基本塩味のみで食えというのが、現代生活だだ浸かりだった俺には拷問にも等しかった。

せめて味噌か醤油でもあればと思ったけれど、今は恐らく……西暦四、五百年位か。どちらの調味料も、後数百年は待たねば味わえないときた。

これは無理、と。

そう、祭りの最中に思った。

その祭りも終わり、勝手知ったるなんとやらと化した、諏訪子さんの社の一室で考える。

かといって自作出来る知識も無いし、この状況を甘んじていられる訳でもない。

ということ、MTGの出番と相成ったのであるが……。

(食べ物を出す効果を持ったカードなんて知らねえ……)

カードゲームにそんな効果を持つカードなどある筈も無く、料理を知っていいようなカードキャラも思いつかないし、かといって手当たり次第に召喚する線は、時間も体力もマナも食う。

おまけに目標を達成するまで、一体いつまで掛かるのか不明と来た。

こりやダメかなあなんて思っただけで諦めようとした時。ふと、別の観点からカードを召喚してみてもどうか、という考えが浮かんだ。

それが、「フレーバーテキスト」である。

『フレーバーテキスト』

MTGの雰囲気や世界観をあらわすために使われる文章を指す。ゲームのプレイやルールには関係しない、ルール・テキストでない文のこと。元は「バナナ」クリーチャー

という何の能力も持たないカードの能力欄を埋める為のもの。

ちなみに勇丸にもそれはあり、

『その獵犬は空気に鼻をひくつかせ、低いうなり声をあげた。武野御大将は忠実な勇丸を見下ろし、撫でて落ち着かせた。「兵を準備せよ。神が来るぞ。」』

という一文が記述されている。

この文の効果か否かは分からないが、勇丸は姿を隠していた、神である諏訪子さんに気づけたのかもしれない。

思い出すのは、ある「アーティファクト」

多分、公式の大会では一部を除き、1度として使われた事など無いであろうもの。

コスト2の、クリーチャー戦闘を若干サポートする程度の能力を有するそれは、「フレーバーテキスト」に、こう記してある。

『旅の間、ジャンドールが毎日、鞍袋を開けるたび、そこには羊肉から、チーズやマルメロの実、ナツメヤシ、ワインまで、ありとあらゆる種類の、おいしく滋養に富んだ食料

が詰まっていた。』
と。

その名は「ジャンドールの鞍袋」

ジャンドールというのは誰の事だか分からないが、馬に備え付けられる機能を伴っている、食べ物関係で特化した道具なのだろう。某青タヌキの秘密道具を思い出す。

召喚したそれは、まさしく袋。

所々に金銀宝石で彩りが鮮やかになっているそれは、サッカーボール二、三個なら収納できそうな大きさだ。

(すげー、こんなに貴金属が付いてる袋とか初めて見た)

若干の疲れを感じながら持つてみると、思ったより重く、あんまり長時間の持ち運びは出来ないかと考える。売ったら高いだろうなあ……。

で、早速能力を行使。多分カードを使用する要領で脳内に描けば袋の中に現れるのかな？　と試して試してみる時——ふと、気になる疑問を解決する為、脳内にある食べ物を思い浮かべる。

それはラーメン。

完成された食品が出るのか、その一段階手前の食材が出現するのか、カード絵を見る限りだと後者な印象が強く、不安に思ったからだ。

チーズやワインといった、ある意味完成された食品は出てくるらしいが、これが汁物で様々な工程を踏んだ食品だった場合はどうだろうか。

まさか器の無い状態でびちやびちやになって出現することは無いだろうな、とビビりながら袋を確認すると、そこには湯気を立てるオーソドックスな、ザ・ラーメンとでも言わんばかりのものが収まっていた。

ただし、あの卍の連なつたような模様が特徴的な器に入った、四百〜六百円で食べられそうな、あれではない。

スーパーカップと呼ばれるカップ麺のしょうゆ味が、今三分経ちました的に湯を注がれた状態で収められており、嗅覚を刺激する。カップヌードルでないのはご愛嬌。

久しく嗅いでいなかったあの独特な醤油ベースの中華麺に舌鼓を打ちながら、胃へとかつ込む。

手元に箸など無かつたので必然と流し込む形になつたが、今の俺はそんなことなど気にならない。

ああ、この安っぽい味が堪らない。

口内を軽く火傷させながら、まだ半分ほど手元に残っているカップメンをマジマジと見つめる。

どう見ても俺の記憶にある、あれそのもの。

水を通さない特殊な容器から、プリントされている鮮明な絵柄まで、記憶の中のそれ、そのまま。

何となく予想を立てながら、次々に頭の中で思い描いた食品類を取り出し始める。

日本酒——豚の丸焼き——うまい棒。

日本酒は中部地方地の大吟醸『究極の花垣』。

一般的に酒瓶と呼ばれる、無色透明の頑丈な容器に入っている。

豚の丸焼きはアニメデフォではなく、中華街などで見られるあれが皿でドンと出てきて、うまい棒は考えていた味が全てパッケージごと出てきた。

……あれだ。

この袋、食べ物に関しては一部を除き、制限が無いっぽい。そしてその一部というのが、どうにも空想というか二次系の代物のようで。

ドラゴンボールの仙豆や、蟲師の光酒、ハリーポッターのビーンズなど、色々後から試してみたのだが、欠片すら出る気配は無かった。残念。——光酒、飲んでみたかったなあ。(注・仙豆、ハリーポッターの百味ビーンズは商品化されていますが、現状はスルー)

そんな訳で、出した料理や酒を調べてみると、酒は味や香りは全く問題なく。豚の丸焼きは流石に袋には収まりきらなかったようで、切り分けしたような感じで大皿に盛り

れて出てきた。駄菓子系に關しても味も形もすっかりとしている。

この袋の口径が食材の大きさの限界なのだと思いますながら、久々のチート能力に内心で
歡喜の声を上げる、俺。

しかし、やはりというか、能力を使えば使いほど疲労が溜まるようで、何百品も出してたんじゃへとへとになりそうである。それでも大パーティー一回くらいならいけそうな感覚なのだけれど。

で、わいわいと自己満足的に酒やら食べ物や丸と二人で楽しんでいたら、匂いに釣られて諏訪子さんがやってきて、あれよあれよという間に食事担当に。

とはいってもマナも体力も地味に使うので、週に一回だけつて制約を飲んでもらった。

ただ一つ気になったのが、「アーティファクト」もそうだが、クリーチャー以外の呪文を維持する体力の度合いが少なく感じたのだ。

コスト2の【ジャンドールの鞍袋】を維持し続けているのが、同じくコスト2のクリーチャーに比べるとあまり苦にはなっていないので、体力が増えたのかそういった制約なのか悩むところではある。

その一件以来、気分が乗らないとき以外は、俺が一から食材を捌いたりして料理やら

つまみを提供している。その方が、料理を作る楽しみがあるからね。

何しろ食材は全て一級品を新鮮なうちに用意出来るのだ。いくら俺が単純な料理しか作った事がない独男とはいえ、不味くなる筈がなかった。

食事の後半になり、デザートにと用意していた苺大福とほうじ茶を用意する。

やつは苺大福は香川の『夢菓房』でしょ！ ……と思ったり思わなかったりしながら、二人の前に差し出した。

諏訪子さんは目を輝かせて……というか「キラキラ」とか効果音が聞こえそうなくらい光っていらつしやる。目から星がこぼれそうです。

一方の神奈子さんも嬉しそうな表情をするのだが、諏訪子さんに比べれば反応が薄い。

……そうだった。神奈子さんはこっちよりも別のものが好きなんだった。

ポンと。片手をもう片手に打ち付ける。

隅に置いてあったジャン袋を引き寄せて、取り出したのは、またも大福。

けれど中身は別物で、今度は苺ではなく塩大福。

菓子の通りにある、塩大福といったらこのお店。的なポジションになる『みずも』のものを前に置く。

諏訪子さん程ではないものの、何処かその表情が柔らかくなったのを確認しながら、

俺は自分用の豆大福（そこらのスーパーで売ってそうな奴）を確保する。

この時代じゃあ、ちゃんとした甘味なんて数が限られている上に、どれも味が単調……微妙（俺の感覚で）だと来たもんだから、この手の食品は実に受けが良い。

美味しそうに頬張る諏訪子さんと、一口一口吟味するように、けれど感じる幸せは隠し切れずにこぼれてしまっている神奈子さんを見ながら、そういえば、と前々から思っていた疑問を口にした。

ちよつと込み入った事だから聞きづらかったんだが、ある程度は親密になつたし、こういったまつたりの場なら尋ねても良いだろ。

「神奈子さん神奈子さん」

「ん？ どうした」

「その、ですね。前々から気になっていたんですが……答え難かったら、それはそれで構わないんで、教えていただければ」

「ほう、私に何を聞きたい。……いや、私〃の〃何を聞きたいんだ？」

いつも浮かべている不敵な笑み、というものが現れた。

何となく聞く内容が想像ついてんだらうなあ。

その辺の察しの良さは、流石神様、とでも言うべきか。

恐らく嫌な事を聞く事に対して、ものによつては答えてやる、的な気分になつたのだ

ろう。

「簡単に言いますと、ここに侵略を仕掛けてきた経緯が聞きたいんですよ。今でこそ、こうして三人で大福食べる仲ですが、あんまりその手の過去の話とか知らないもんで」

直接本人の口からは、ですがね。

今更語るまでも無い事実として、俺は転生を行っている。

知識として仕入れた東方プロジェクトの設定は多少なりとも目を通しているのだが、神奈子さんの侵略経緯までは知らない。というか見ていない。

諏訪大戦が起こる前に知っていたのならこの戦いを止められたのかもしれないが、全てが終わった今となつては、ただ、俺の興味を満たすだけのものに過ぎない。

「何だそんな事か」

「またもう、あつさりと……。もう少し重めに言つて下さいよ。そのせいで俺や諏訪子さんは侵略されちゃったんですから」

「それで何が変わる。せいぜいお前の気持ちくらいだろう？ ならば問題あるまい」
「神奈子って、九十九に対してはいつも等閑（なおざり）だよな。他の配下達には、それなりに優しいのにな」

「私を神として見ているからな。それに答えるのが我々だろう。それは、お前にも言えるのではないか？」 諏訪子

「そりやそーだ。九十九つてば私達に対しても……もつところ、崇め奉るつて気概を持つて接しても良いんじゃない？」

げ、よく分からん内に俺が説教食らつとる。

「そういう関係になるくらいなら、俺は逃げ出しますよ。あんまり格式ばつた関係つてのは好きじゃないんです。………もう職場復帰とか出来んな（ボソツ）」

自傷気味に呟いた言葉に『職場？』と首を傾げるお二方。

すんません。転生前の事なんで流して下さい。

「それより、さっきの話の続き、聞かせて下さいよ」

「お前は物事をはぐらかすのが好きだな。いつかしつぺ返しを受けるぞ」

「うっ……すいません」

強引にやり過ぎちやいけませんって事か。

しかし、今の俺にはそうでもしないとちゃんとした言い訳なんて思いつかんのだから、勘弁してほしいッス。

「自覚はしておけ。いつかそれが行動に変わる。……さて、この国に攻め入る切欠となつた話だつた」

ですです。

「とつても、先にも言ったとおり、大した理由は無い。——国を従える者とは、国の発

展を考え、人材、資材、国土を確保するよう勤め上げるものだ」

「えー、より豊かになる為に攻め入った、と?」

「むしろ、それ以外で他国に侵攻する理由が思いつかなくて。あんなもの、国が発展する行為の1つでなければ、誰がするものか」

前にチラつとバトルジャンキーな面を覗かせていたけれど、やっぱりその辺の分別はしつかりあるようだ。

国の指導者がその性格を前面に押し出すようなら、それこそ民がついて来ず、神などではなく妖怪として名を轟かせるようになるだろう。

「それは、まあ何と言うか……これからも続けていくんですか? 戦」

「当たり前だ。広い国土とはそれだけで選択肢が増える。当然問題も増えるが、そんなものは些細なものだ。豊かな土壌が国を発展させ、それが強い国を生み、安心して暮らせる場所を作り出す。それは民達が私に従う前提条件。そうでなければ、誰か進んで戦場で命を捧げるものか」

もの本では、戦争は最も儲かる事象の一つだと書いてあった。

儲かる。という事は、金だけではない。軍事、行政、教育など、様々な分野の躍進も行ってくれる。

一時的には国としての成長率止まる、もしくは伸び悩んでしまうが、戦争が終わった

後の……外敵が居なくなり、軍事方面に割く資金を他の分野に回せるようになるだけでも、大分変わるものらしいのだ。

「それは分かりますが……」

「他により良い手段があるのなら、そうしよう。だが現状でそれ以上、国の発展を助長する手段を私は知らない。これを否定したいのであれば、代案を示せ」

「そんなん分かったら俺は億万長者どころか世界一の大富豪だわさ！」

「何だろなあ、国を戦争より豊かに出来る方法なんて……」

既存の知識や技術じゃ思いつかないし、かといってカード方面に頼るってのは、俺がずっと居るならまだしも、あんまり頂けないよなあ。

「そう渋い顔をするな。私とて、現状のままが良い、と思ってる訳ではない。年に一度、出雲に話し合いの場を設け、それによって他の案を模索しておるわ」

「もつとも、良い代案など近年はとんと出てこないが。」

「そうやって締め括る神奈子さんに追従するように、諏訪子さんが横から声を掛けて来た。」

「持っていたお茶碗を置いて口を拭う姿が愛らしい。」

「『そういえば、もうそろそろじゃない？』 出雲に出向くのって」

「ん？ 出雲って、神様の会議がある、あの？」

何の名称だったか忘れたが、旧暦の十月十日には、年に一度。日本中から八百万の神々が集まり、一週間程、自国の行く末なんかを話し合う会合が行われていた筈だ。

それに赴く、と言っているのだろうと当たりをつけて、尋ねてみた。

「あれ？ 九十九つて知らなかったっけ？」

「ええ、そういつた祭事があるというのを知っていました。……神奈子さんは兎も角、諏訪子さんは去年もその前も行ってませんでしたよね？」

「私は代わりの者を向かわせていたからね。そもそも土着神っていうのは、その土地からあまり出たがらない性分なのさ。自身の力が弱まるっていうのもあるんだけど、土地自体の力も弱体化してしまうのが大きい。だから、滅多な事では、ね。私もそうだけど、他の土着神達も、自分達の使いを超越すだけかな」

そういうえば、諏訪子さんはその土地の神なんだった。

というか日本の神って殆どがそれに部類されるんじゃないだろうか。

つて事は、その祭事って殆どが代理出席？ ううん、ちよつと残念な気分。

「ただ、今年は流石に私達も出なきやダメかなあ。戦の詳細を伝えないと、下手をすれば、報告するまでずっと戦時中、つてなる可能性もあるし。それだと他国からの使者やら商人やらが来難いから」

「戦後間も無くである故、私もあまり動きたくないが、仕方がない。……幸いにして、国

の融合はあまり支障が無かったからな。諏訪子のお陰だ。感謝するぞ」

「神奈子がこっちの死者を勇丸以外誰も出さなかつたのが大きいからね。ホント、戦で戦死者がほぼゼロってどうなのさ」

「ゆくゆくは我が国の一端を担う者達を、出来る限り存命させたいと思うのは当然だ」
情けは人の為ならず、ってか。

それを地で行える神奈子さんマジばねえッス。

しかし、出雲かあ。

一度で良いから見てみたいよなあ、神々の集会。

「出雲の会合って、やっぱり名立たる神々も出席されるんですよね？」

「そうだ。イザナキ、イザナミは勿論、ツクヨミやスサノオなどが常連だな。アマテラスを筆頭に、他の皆がそれぞれ報告やら相談事を持ち込む、といった事が、神在祭の概要だな」

おお、一度は耳にした事のある神様の名前がオンパレードで出てきましたよ。

話を聞くに、太陽神のアマテラスが司会進行役で、ツクヨミやらが副司会。イザナキ、イザナミは完全中立のご意見番、といった立場のようだ。

良いなあ、ちよつと見学させてくれんかなあ。

日本に生まれたからにやあ、その国の神話の光景に興味が無い筈が無い！

といつても前々から興味があつた訳ではなく、見る機会があるのなら見たい、という野次馬根性丸出しな理由なのだけけれど。

……ん？ イザナキとかつて神様の部類なのか？ まあいいか。

「良いですねえ。ちよつと見れるものなら見てみたいですよ」

もしかしたらご同行出来るかなあー？ なんて暗に期待しながら二神に目をやると、諏訪子さんは『どうだろねえ』的な表情を浮かべ、神奈子さんに至つては至極真面目な顔で考え込んでしまった。

流石に、ただの人間がお偉いさんが集う場を覗き見るような真似は不味いか。

神様の御付の人で、なんて路線なら、もしかして“と思つただけだなあ。

「……お前は出雲に行つた事が無いのか？」

「？ ありませんけど……」

不意に、神奈子さんがそう尋ねてきた。

転生前ですら行つた事無いですからね。

日本人としては一度くらいは出雲大社とか見てみたかたんですが……つて、あ。

「神奈子さん、前にも言いましたけど、俺、神様じゃありませんからね？ その辺を考えたも無意味ですよ」

どうもこの神様、前々から俺の事をどこぞの神だと勘繰っている節があつて、その度

に色々微妙なフェイクや誘導尋問っぽい言葉攻め……？ をされているのだが、本当にそういった裏事情など無いので無駄なのですよ。

「今、そう判断した所だ。なに、いずれ外の神とやらにでも、お前の事を聞くとしよう」
つて今度は外国な神様路線ですか。

外国つて言うよりは、地球外な神という方向性なら合ってるのかもしれないなあ。

あのカードとかこのカードとか。

神系列で考えるのなら基本はクトゥルフ……だけじゃないか。

変なところで色々な体系が出てきてるから、何処、と当てはめる事が出来んわ。

「……だが、我らについて来れば問題無かろう。出雲に集まった神々は、大概そこに控えている従者達で身の回りの世話をさせているが、先にも言った名立たる上位の神達は、専属の者達を連れて来ているからな。それに習い、お前を連れて行く事も可能だろう」
「ああー、そういえば、そういった事もあったねえ。私は殆ど代理に行かせていたから、すっかり忘れていたよ」

「諏訪子……偶には顔を出すようにしておけ。いずれ、お前の神気すら忘れてしまう輩が出てくるかもしれないぞ」

「無い無い。負の感情に私は潜むからね。憎しみの裏に洩矢あり、つてな具合さ。人間が居る限り、私（憎悪）を忘れるという事は無いよ」

「ふむ、想いに宿る神は、そういったところが羨ましいな」

互いの良いところを再認識しているお二人だが、こつちは、ついていけるかもしれない、という選択肢にドキドキが止まらない！……とまではいかないけれど、内心で期待を膨らませる。

御付の従者路線がまかり通りそうだけぞ！

まあ、色んなトラブルもありそうだが……言つちや悪いが、二千年後には全ての神は表舞台から退場している。

最悪、それまで逃げ切れれば良いのだし、この出雲の集會が期間限定モノだと来たら、見ない訳にはいかないだろう。

もし行く事になったのなら、何か、その手のトラブルをやり過ぎす事の出来るカードを考えておくべきだろう。

——そのまま話は続き、その延長線上にあった、この地を統べている神々の話を聞いた。

北から南。西へ東へ行ったり来たり。

あちらの神は信仰が強い、そちらの神は無病息災に秀でている、等々。

全てが新鮮で、どれも興味をかきたれられる物語ばかり。

今まで御伽噺としてしか知らなかった知識を、体験談として聞く機会があるというのは、これまでに無かった面白さの発見である。

気づけば日も完全に沈んだ頃合。

ぐいぐいと神奈子さんや諏訪子さんの話に引き込まれ、あつという間に時間は過ぎていった。

13 大和の日々 《後編》

「九十九、ちよつと北の村まで行つて来てよ」

話も一段落つき、酒のつまみにと、ホツケやらきゆうり味噌やら摘みながら齧つていたら、諏訪子さんが唐突に、そう切り出した。

「……良いですけど。確かそつちつて海側に面したところですよ？ めつちや遠いじゃないですか。つてかその台詞、前にも聞いて」

「いやあ良かった。私も神奈子も何かと忙しいからね。そう言つてもらえて助かるよ」
うわひでえ。強引に押し込まれた。

「お前が治した者達が、感謝をしたいと宴を開くそうだな」

「神奈子と私が中央の行政を取りまとめるから、気にせず行つて来ていいよ」

……まあいいか。もう諏訪関係での血みどろフラグは点在してない筈なのだ。今は何も考えずに行動したつて、問題はないだろう。

「はあ。相変わらず唐突とか何とか……。でも、俺の為に言ってくれるのなら、それに応えないわけにはいかないですね」

とか何とか軽いツンデレを披露しながらも、内心は久々の遠出に胸が高鳴っていた。海かあ。時期的に海水浴が出来ないのが残念だが、久しぶりに、あの独特の磯の香りを嗅ぎたくなる。

「そんな訳で、ね。九十九」

諏訪子さんが俺を呼ぶ。

ん？ と首をかしげ、二人の顔を見る。

うわ、目が輝いていますよお二方。

「お前が帰ってくるまでの間、私達は二人だけで晩酌をしなきゃいけない。民達と宴会するのもいいけど、それでも頻繁には出来ないからね。だから——」

OKよく分かった。

「明日中におつまみやお酒類を出しておきます」

やったー、とハイタッチする二人。

古代日本に現存する神々のハイタッチ。レアなもの見れたな。

神奈子さんも、ゆっくりではあるが、表情が柔らかくなってきた。

段々と神奈子さんの態度というか行動が軟化しているようで、後数ヶ月もすれば、原

作基準のフランクな姉御口調になってくれそうだ。

その時になったら修行にでも付き合ってもらおう。うん。

「私は辛口の酒がいい。海産のものと良くあうからな」

「こっちは和菓子を多めに残しておいてほしいな。いちご大福、だっけ？ あれが特に美味しかった」

酒に大福か。太るぞ。

なんて前に言ってみたが、『神様は太らないもんね』って言われた。悔しい。

荷物なし、衣類よし、勇丸よし。

その他諸々異常なし。

空は快晴。絶好の旅行日和。

「それじゃあ行きますかね」と

神奈子さんも諏訪子さんも、既にそれぞれの役職をこなしている。

妖怪討伐ではないので村人の見送りもなく、この秘湯『諏訪』（勝手に命名）付近には人っ子一人居ない。元が諏訪子さん用の聖地だからつてのもあるが。

「んじゃ勇丸。ちよつと供給絶つね」

領く忠犬を脳内カードに還しながら、目的地までの移動用のカードを考える。

流石に地上に行くには馬であつても幾日も掛かりそうなので、空を飛ぶことにしたのだ。

選ぶカードは三種類。どれも飛行という目的は達成出来るが、そのプロセスがいずれも異なっていた。

一つ目のカード『羽ばたき飛行機械』

コストがゼロという、「アーティファクト」クリーチャーの部類に当てはまるカード。攻撃能力0のタフネスが2である、0/2の「飛行」能力を有するもの。0マナクリーチャーカードの代表格。

『飛行』

数ある【回避能力】の中でも、最も一般的なもの。そのままの意味だと考えてもらっていい。【飛行】を持たないクリーチャーは、飛行を持つクリーチャーの進行を防ぐ事は出来ない。一部例外がある。

『回避能力』

クリーチャーが攻撃する際に、相手のクリーチャーによって防がれてしまう事に対して何らかの制約を設けて回避する能力のこと。MTGに限らず、トレーディングカードゲームでは相手にHP、またはライフが設定されており、それをゼロにすることが勝利条件の1つとなっている。よって、相手のクリーチャーを突破する能力があるクリーチャーは、それなりに重宝される。

二つ目のカード『飛行』

コスト1の能力である飛行を後天的に永続効果としてクリーチャーへと付与する、青のエンチャント呪文。

三つ目のカード『ジャンプ』

同じくコスト1の飛行能力を一時的に付与する、青の「インスタント」呪文。「コンバット・トリック」目的で使用する。

この三つの中で、一番目は飛行能力のあるクリーチャーに目的地まで運んでもらうもの。これはこれで楽しそうなのだが、自分の力で飛んでみたいなど思ったので、一瞬にして却下。

二つ目は、自分に飛行能力を付与するもの。これが最も軽く、「エンチャント」による永続性も期待出来るので、恐らく、飛行能力万歳な東方世界では主力になるのではないかと思う。

だが、だ。

三つ目のカードである【ジャンプ】。これもジャンプと名がついてはいるが、効果は飛行能力を与えるもの。

どちらも受ける恩恵は一緒だが、さて。

「とりあえず、一番不確定な奴を試して……あれ、諏訪子さん？」

視界に入る、金髪の小柄な神様が一人。

「良かった。まだ行ってなかった」

息を弾ませながら、俺へと近づいてきた。

「何かありましたか？」

「いいや、ただの見送り。今回は距離があるからね。しばらく会えなくなるし、こっちの時間が少し空いたから、丁度良いかかって来てみたよ」

「ははは、それは嬉しいですね。実を言うと、ちよつと寂しかったところですよ」

今更隠し事やカッコつけをする仲でもないの、思ったままに心中を吐露する。

いや、カッコつけたい場面では真似事くらいはやりますけどね？

そのまま、他愛のない会話をした。

思えば出会ってこの方、二人だけでの会話なんて数えるほどしかなかった。大体は勇

丸か、それ以外では村の人々が側に居たし。

生い茂る木々には未だに黄色の葉がついていて、落ちる木の葉は諏訪子さんの姿と相まって、まるで一枚の絵のようだ。

（——いかん、二人だけつてのを意識したせいで、変に意識してしまう）

悲しいかな、こと女性に対する接し方は経験値ゼロ。

何せ俺は生まれてこの方、この手の出来事からは完全に疎遠であつたから、どうもうまく意識をまとめる事が出来ない。

今までそういつた目線で見たことは無かつたけれど、容姿はあれだが、間違いなく全日本で5本の指に入るであろう美人なのだ。幼と付くが。

————そういうや東方キャラつてそんな奴らばっかりだな。美人枠の入る指の数を増やしておこう。うん。

「どうしたの？ 九十九。目が泳いでるよ」

わあお態度にまで表れてましたか。

やめてー、そんな綺麗な瞳でみつめないでー。俺のライフは……まだあるな。

ではなく。

これ立場逆じゃね？ 普通、こういう目線を逸らす的な行為は女の子側がするもんじゃね？

そうやって、内心でおちやらけてみるものの事態は進展せず、むしろ見つめられる諏訪子さんの目線でゴリゴリとライフポイントが削られていく。

ちよつともう耐えられそうにないと思い、強引に、もう旅立とうとすると。

「——あれから、もう二年くらいかな」

なんて、諏訪子さんが言い始めた。

良かった。いや助かった。相手から話題を提供してくれるのなら、今はそれに飛びつくしかない。

切羽詰まった思考とは別に、急にしつとりとした会話になったことに若干戸惑うけれど。

秋風がやや肌寒く感じる。もうすぐ冬がやってくるであろうことが分かる。

だから……。だから、こんな会話もしようがないのかもしれない。

「……そう、ですね。長かったような短かったような。ちよつと色々あり過ぎて、正直もうお腹いっぱいですよ」

諏訪大戦が脳裏に浮かぶ。

大切なものが傷つき、時に失う場など御免こうむるといふものだ。

「私だつてごめんだよ。ただ、そこに人の本質が若干はあるからね。完全に無縁には、人である限りならないだろうさ」

……たはー。まさにその通り。頬をポリポリと搔きながら苦笑いする。

千五百年以上先から来た俺の時代ですら、それは変わっていない。

何だか『餓鬼は餓鬼のままさ』って感じで皮肉られた印象を受けるが、事実その通りだから苦笑するしかなかった。

「——人の生涯は短い。私達神からすれば、それこそ、瞬く間に、人も世も移り変わる。いつも私だけがそこに立っていて、皆、私を抜いて去っていく」

諏訪子さんが、ぽつりと、そう呟いた。

「耐えられないってことはないんだけどね。時折、心に穴が開くんだ」
分かり切った——けれど避けられない思いを胸に、この神様は皆の為にと過ごしてきた。

それでも人間と共に歩むことを止めず、みんなが幸せなら、とがんばり続ける彼女に、俺は何がしてやれただろう。

妖怪退治？ 技術提供？

違う違う。それはどれも民に対しての尽力であって、彼女本人を手助けするものではない。

愚痴は今まで色々聞いてきた。

ただ、今回の話は愚痴というより、自身の行いに対して、揺らいでいる心を静めよう

としているかのようで。

急に小さく見えるようになった姿に、胸を締め付けられる。

表面上は、いつもの諏訪子さんだ。

少し湿った会話ではあるものの、陰を司る者でありながら、ニコニコと笑顔を絶やさない土着神。

しかし、俺には、今にも泣き崩れてしまうのではないかと思えてくる印象を受けた。足が前に出る。

何も言わず、諏訪子さんの方へ。

思い違いであったのなら良い。その時は、俺が馬鹿をやっただけの笑い話になる。

「……あ」

ふわり、と。

まるで羽のような、小さな神様を抱きしめた。

この時を失ったら、恐らく俺は、一生諏訪子さんの心には踏み込めない気がしたから。寒さからか、それとも他の要因からか。彼女の体は、か細く震えている。

身長差から俺の腹部へと諏訪子さんの顔が当たり、表情が分からなくなったが、否定の意思は感じ取れない。

成すがままにされて、一方的な抱擁が続く。

互いに何も語らず、動かず。

彼女の熱が体で感じられるようになって、俺は切り出した。

「……………どうにか、したいですか？」

「……………え？」

疑問の聲が上がる。

体を少し離し、諏訪子さんは顔を上へと向けた。

「心に穴が開くのは、どうしようもありません。その穴——スキマを埋める事は、失ったスキマの欠片にしか出来ない。他のものでは、埋まったように見えるだけで、実際は空いたままだと思えます」

小さい頃、犬を飼っていた。

一緒に遊んで、一緒に寝て、一緒に食べて、一緒に過ごして来た家族。

そんな犬も、俺が小学校に上がる頃には年老いて動く事も間々ならず、その年の暮れ。そいつは旅立っていった。

悲しかった。

何が悲しかったのかも分からないくらい悲しかった。

心にぽっかりと空いた、穴。

埋まらず、無視できず、漠然とそこにあるその穴は、俺の心の中に影を落としていく。

けれど、それも時間と共に解決していった。

何かが切欠になった訳じゃない。

ただ、両親が夜寝る俺をずっと抱き続け、友人達がいつもと変わらず俺と遊ぼうと言いつづけてくれた。

それだけで俺の顔からは、段々と笑顔がこぼれるようになっていった。

忘れた、という事ではない。

少し大げさに言うのなら、世界が広がったのだ。

見続けていた闇は視野が広がる度に段々と小さくなり、視界に入ってもただの点に見える程に気にならなくなつて。あれほど冷たかつた心は他の幸せで温かくなり、凍てついて動けなつた体を動かすまでには回復させる。

愚直に言つてしまうのなら、他の幸せで誤魔化したのだろう。

けれど、決して悪いことではないはずだ。

これが悪なのだとしたら、正義というものは、なんて胸糞悪くなるものなのだろうか。失つたものに嘆き続け、それでも取り戻せないスキマに心を締め付けられながら、時にそれに耐え切れなくなり、一生を終える人生など、少なくとも俺は御免である。

だから。

「俺が、居ますから」

返ってくる言葉はない。

「誰も彼もが居なくなっても、例え地上の生物全てが死に絶えたとしても。——俺だけ、諏訪子さんの側に居ますから」

俺の服の裾。そこに、彼女の手が控えめにそれを摘む。

「それに、最近じゃあ神奈子さんも居るじゃないですか。勇丸も居ますし、決して一人だけじゃありません。後、寿命がめちやくちや長い生き物なんて結構居るんですよ？」

蓬萊人とか、月の民とか、天人とか。

言つて段々と恥ずかしくなってきたので、誤魔化すように、他にもこの思いを共有してくれそうな者達の存在を思い浮かべる。

“ははは”と笑いを振りまいてみるも諏訪子さんからの反応はなく、ちよつとくさ過ぎる台詞を思い返しては『あれはねえだろ』『そこは違うでしょ』の単語が脳内でフォークダンスを踊っていらつしやる。死にたい。

「……じゃあ、さ」

不意に、声が掛かる。

別に涙声という訳でもなさそうで、少なくとも悲しい気持ちにはなっていないようだ。

「九十九、ちよつとこつち見て」

顔を向けると、こちらを真つ直ぐ見つめる二つの眼。
「もつと腰落として」

言われたとおりに姿勢を下げる。

……はっ！ ま、まさかこれは!?

「そのまま動かないでね」

来るのか？ 来るのか!?

思わず目を瞑り、唇を突き出す。

もはや言わずもがな。この手の展開の後は——

こつん。そんな柔らかい音が、俺の額から聞こえる。

——ん？ こつん？ ちゅっ、じゃなくて？

「……何してるんですか？ 諏訪子さん」

「いいから少し動かないで」

柔らかい口調であつたけれど、思ったより真剣な物言いに、何も言えずに沈黙する。

諏訪子さんが、額を俺の額に当てている。

おかしい——この行為は風邪を拗らせた時にするお約束イベントだったのでな

いか。

いやいや、そもそも今の流れは、もつと別の行為をするための伏線であった筈だが……。

今の俺は体調も頗（すこぶ）る良好。むしろ痛いくらいの心臓音に頭がどうにかなりそうなくらいだ。

——目を閉じるタイミングを失ったせいで、俺の視界は諏訪子さんで埋まってる。

光のような白い肌に、綺麗に整った眉毛。

閉じられた目と唇が妙に艶っぽく見えて仕方ない。

一瞬ロリコンではないかと思ってしまうが、それでも良いのではないかと思えてきた。

小さな子が好きなのではない。たまたま好きになった子が小さかっただけのこと。

（うう、東方キャラって美人揃いだから、そういった目線で見たら惚れるの分かったのになあ）

村の皆は十人十色な顔だったのだが、やはりメインなお方は出来が違うと申しますか……。これ以上は村人達に失礼なので自重。

（あー……美人だなあ。可愛いなあ。このまま言ってしまうなあ、付き合ってください

さいって)

デートして下さいってコクってみるか？ 俺、この任務が終わったら……。

無理だ。

フラグ云々の前に、心臓が先に過労で死ぬ。

「ん、もういいよ。ありがと」

ふと、諏訪子さんが俺から離れる。

何だかよく分からないが、用件は済んだらしい。

ハグとかだったら『心の充填』とかの理由で分かるのだが、デコ同士くっ付けあっていただけってのはなあ……。それはそれで気持ちよかったが。

だって諏訪子さんめっちゃ良い匂いやもん！

なにこれ？ どうやったらそんな匂いになるの？ 結構な割合でこの神様の側に居

たが、香料とか何も付けてないよね確か。

「一体何だったんですか？」

「ん〜。帰って来てからの秘密。今言ったんじゃ面白くないしね」

少しばかりテンションが高い。

話す言葉の節々には明るい笑みがこぼれており、こちらまで楽しくなりそうな雰囲気になる。

何だろう。何かの加護でもしてくれただらうか。

体にこれといった変化は見られないが、いざとなったら発動するタイプなんだらうか。

しかし、なんにしても、今一步のところでは押しに行けない自分が恨めしい。人生初のそれらしい場面だったのに。勘違いかもしれないが。

……でも、まあ。諏訪子さんの気分が晴れたようで良かった。

旅立つ時には、やっぱり笑顔で送り、送られてほしいと思うから。

「そう言われちゃ仕方ないですねえ。ん、っと。それじゃあ行ってきますわ」
「はいはい。お土産は何でも良いからね」

はいはい、お土産希望っと。

「持てるだけ持つてきますよ」

「俺が疲れない程度で？」

「そういうことです」

ははは。よく分かっていらっしやる。

——よし。ではきりが良くなったところで、早速ぶつ飛ぶとしますかね。

選んだカードは「ジャンプ」

カードを使用した時点で飛ぶのか、俺の意思で飛ぶのかは不明だが、ジャンプなんて

名なのだから、きつとびよんぴよんホップする呪文なのではないかと予測して、唱えたと同時。

——不意に。

頬に暖かく、柔らかなものが触れた。

(……は?)

一瞬見えた、金色の髪。

とととつと俺から離れていく小さな女の子。

その顔はとても楽しそうに、嬉しそうに。この世にある幸福全てを嘯み締めているかのような。

「九十九がずっと居てくれるんでしょ? だつたら少しくらいは発言に責任を取つてもらわないと」

ね? と可愛らしく言い放つ神様に、俺の頭は真っ白になった。

頬が温かい? 柔らかい?

え? なに? あ、ああ……これは……ああ……あれか。

——俺、転生して良かった。

父さん、母さん。親不孝な俺をお許し下さい。

俺は今——青春してます。

「——責任！ 取らせていただきます!!」

懇親の思いを込めて。

諏訪子さんに近づくと、一步踏み出し、

「……は？」

飛んだ。

視界に広がるのは、自然が支配する、日のいずる国。

臓腑が無重力の制約を受けて、何とも形容詞し難い感覚を脳に伝えてくる。

(……あく、【ジャンプ】の効果っスか)

風圧によって、俺の顔が可笑しなことになりながら、その結論に辿り着く。

どうやら、カードの効果の発動タイミングは自分で決められるタイプのものらしい。

流れる視界は、もはやどこぞの名も知れない山の中腹まで差し掛かっている事を伝え

てくる。このままでは、山を越えた辺りまで落下しそうだ。

(なんかもう……なんだかもうよお……)

今更、もう戻れない。

仮に戻ったとしても、どんな面下げて会えばいいというのだ。

知り合いだと思つて手を振つたら全く違う人で、すかさず他の人に向かつて手を振つて、『ああ、初めからあつちの人に挨拶してたんだよ』的な演出をするような……そんな心境だと思う。

人生初の飛行体験で嬉しいだとか、ビルの何階相当にあたる場所を飛んでるんだ超怖いだとか、その他諸々の疑問を一切置き去りにして。

「やつてられないんだぜえええええ……!!」

某ソードマスター風な口調のドップラー効果を響かせながら、見ず知らずの方角へと、かつ飛んでいった。

もうこのまま消えたい……ぐすん。

14 大和の日々 《おまけ》

「……あれ？」

心からこぼれた吐息に近い言葉は、誰に聞かれることも無く周囲に溶けていく。

——九十九が、消えた。

正確には凄まじい速度で空へと打ち上がっていったのだが、あまりの速さから、視界からは完全に消え去った。

神気であいつが上空を移動しているのが分かるが、一体これは何の意味があるというのだろう。

先ほどまでの色づいた空気など一瞬で消え去り、残された私はただカカシのように棒立ちになる。

「何だ、あのまま押し倒すのかと思ったぞ」

堂々と、まるで何もやましい事が無いと言わんばかりに神奈子が立っている。

「……覗き見とは趣味が悪いね」

「覗いて、などしておらん。ただ前を見て歩んできたなら、たまたま視界の先に居ただけの事だ」

「うっ」

九十九と私が話していた場所は、丁度一本道の先だった。

これなら前を歩くだけで、先ほどまでの光景が嫌でも見えてしまう。

「どうした諏訪子。いつものお前らしくもない。もつと飄々（ひょうひょう）と受け流さるか」

「……良いじゃないか。私だって泣いたり怒ったりくらいするさ」

「それには、愛しさも含まれている……か？」

言われ、僅かに悩む。

「……どうなんだろうね。いつも人間達の営みを通して愛だの恋だの見てきたけど、自分が体験するなんて、考えた事も無かったから」

空に消えた九十九の後を追うように、視線を上へと彷徨わせる。

「今まで、私はあいつを友人だと思っていたんだけど、どうも違ったようだね」

この気持ちは、決して友情の類ではないだろう。

私を知っている友情とは、胸の鼓動が早くなる類のものではない。

トクトくと、駆け足で心の臓が脈打つのが分かる。

そこに手を当て、ああ、私はこんなにも感情が揺らいでいるのかと、今まで体験した事の無い——けれどそれが嬉しくて堪らないと思いつながら、神奈子に自分の心境を伝えた。

「少しは懂れたこともあつたけれど……うん、悪くないね。この感情は」

「それは、惚気、とやらか？ 私は生憎と色恋沙汰の神ではないので、縁結びや祝福の効果はないぞ。——ただ、お前が産む子は別だ。そちらには最大限の賛歌を奏でてみせよう」

「なんだ。バレちゃった？」

「からかうな、お前と同じ神だぞ。……まあ、九十九は気づいておらんようだったがな」

「それを気づかれちゃったら、楽しみが無くなっちゃうじゃない」

意地の悪い奴だ。

そう言つて、神奈子はからからと笑う。

それに釣られるように、私からも笑みがこぼれる。ああ、気分が良い。まるで青空を飛ばたく鳥のよう。

ずっと、これから一人で生きて、人々から忘れ去れては、誰とも知られずに消えてゆ

くものだと思つていた。

けれど、今の私は違う。

神奈子がいる。勇丸がいる。九十九がいる。何より——の子がいる。

多分、あいつが帰ってくる頃には間に合うだろう。

ほぼ間違いないく、驚くに決まっているのだ。

ああ楽しみだ。

九十九が来てから、視点の変わった世界を眺めている。傍観でもなく、まして客観でもない。

私は今、誰かの為ではなく、自分の為に動き出そうとしている。

「諏訪子、行くぞ。やる事は山のようにある。惚けている場合か」

背を向けながら、村へと続く道を神奈子が行く。

それに追いつがるように、私も歩みを始める。

「そんな神奈子だつて、行事がまだまだ残つてるのに、こつちまで来ちやつて。私に言えた義理？」

「何を言う。お前だつて知つているだろう。神様は——」

「——我が俣なものさ、つて？ たはは、神奈子の口からそんな台詞が聞けるとは思わなかつた」

木枯らしが吹く山林を歩く。

隣に居るのは私が服従した相手で、私の仇で、私の友達。

何の因果かこうして一緒に肩を並べているけれど、それが決して嫌ではない。

また、私の周りに灯火が増えた。

背後の社から消え去った暖かさとは別に。

私の心には、また別の温もりが宿っていた。

「そんなに嬉しいものか……。ふむ——私もやってみるかな」

「……え？」

二章

15 鬼

(トンネルを抜けると、そこは——)

雪国とか、あるはずがない。

ましてやトンネルなど論外。

(ホントもう……ここ何処よ……)

軽くボケ入れる程度には余裕があります。元気です。

——守矢の地を立ててから一日。俺は、どこぞとも知れない山林の中にいた。

あれから気持ちの整理をするのに数時間。

【ジャンプ】の能力を把握するのに、さらに数時間。あれって力の入れ具合で飛ぶ距離が変わるらしい。思いつきりやつたら、山の一つ二つ越えたから。

その辺はジャンプと言いつつ飛行能力の付与なだけはあるのだと思った。使うタイ

ミングがもつと遅かったなら、俺は……

「うう、自分惨めツス……」

思わず声に出してみたくなるくらいの後悔が押し寄せてくる。

当分引きずるなあ、こりや。

フラグへし折つちまつたもんなあ。やだなあ。とほほ……。

【ジャンプ】の能力を使い、恐らく目的地であろう方向へ進む事、はや数時間。

垂直飛びで海の方角は分かっていたので——もう垂直飛びはやらんと切実に思った。

上昇する時は気分が良かったが、落ちる時は、死ぬかと思った。いや悟った。俺はここで死ぬと。たまたまがきゅん！ っとなったからね！

とりあえず、そちらの方面へとびよんぴよん小ジャンプ繰り返しながら跳ねて来たのは良いのだが、地上から通る道と微妙な空中からの景色は全くの別物な訳で。

大きな山などを目印にして、多分この辺だろうと当たりをつけて北の村を探し始めて

1日。

【ジャンプ】の効果も切れて、普通に徒歩で移動しながら、はや数時間。

いい加減、勇丸か〔ターパン〕でも召喚して乗らせてもらおうかななんて思っ
てしまふ。むう、ちよつと焦つてきた。

結果として、俺は海沿いの森の中をうろうろとしながら目的地を探している真つ最中
な訳であるが、

（お？ あれかな？）

視線の先には、幾本もの白い煙が立ち上る、茶色い細々とした塊が見える。恐らく沿
岸の集落、北の村の筈だ。……そう思いたいだけつてのものもある。

しかし、仮に違つたとしても、集落があるというのはありがたい。もしかしたらご好
意に甘えられて、布団で眠れるかもしれないから。

この時代は基本が煎餅布団だから、寝心地があれだけど、無いよりはあつた方が断然
良い。

獣道のような、辛うじて通れそうな木々の間を通り抜けながら、俺はその白い煙の方
へと進んでいった。

村へと続いている、よく踏み均したであろう道に行く。

段々と視界に収まってくるのは、今まで住んでいた村よりもボロさの目立つ……失
礼。風格のある佇まいの民家が並んでいる。

沿岸沿いに建築された漁業を生業としたこの村には、吹き付ける潮風が全てを塩味にしてしまいそうな印象を受けた。

ううん、やっぱり海といったら魚介類でしょ、つて具合に、海の幸をふんだんに使った海鮮料理が思い起こされる。

空気がかり食べていたせいとか、興味の対象が料理に多大に向くようになったとは思いますが、結構運動もしているので体的にはむしろいっぱい食事をした方が良さそうになってきている。

見てほら（見れません）！ 腹筋が割れてるのが分かるようになってきたんだよ！
今までプニプニだった体のあちこちも、今では立派な細マツチョ体系さ！

俺。パンチングマシンで百とか余裕で出すし。

は、さて置き。

「勇丸かもーん」

俺の相方を呼び出してみる。

現れた勇丸はちらりと一瞬で周囲を確認し、危険は何も無いと分かったようで、こちらへと向き直る。

潮風に鼻をひくひくさせながら、いつもの定位置と化した俺の横へと並び立つ。

それを片手で頭を撫でてやり、相変わらずの暖かさともふもふさを体感した後、俺達

は村の入り口と思われる、等間隔に開けた杭の間を潜った。

「すみません、ちよつといいですか？」

投網の補修をしてるっぽい、第一村人発見。他には人影は見えない。

村人は作業している手を止め、俺へと顔を上げた。

足音で近づいて来るのが分かりそうなものだが、余程集中して仕事をしていたのでろう。五メートルくらいまで寄っても気づいてくれなかったから、唐突に声をかける形になつてしまった。

「……あんた、誰だ」

ほらねー、白い格好で白い狗を連れた怪しさ満点の人物だから、要らぬ警戒心を……ん？

「九十九と言いますが……あれ、ご存知ありませんか？」

「いや、知らない。何処から来たんだ」

「守矢の方からです」

「ああ、最近神様同士が戦をして飲み込まれたつて言う、あの」

ああああと納得したように声を上げる村人A（三十代っぽい男）に、嫌な予感を確か

めるべく、尋ねてみることにした。

「あの、~~ここ~~は北の○○○村ですか？」

「~~ここ~~は×村だ。そつちは確か……反対方向だな。何だ、村を間違えたのか？」

……何となく会話の流れから予想はついていたので、そこまで驚きはしなかったが……結構心に響く。

「おい、急に蹲つて……どうした、腹痛か？」

優しいツスねえおじさん。

でも違うツス。単に気力が低下しただけツスから。

心なしか勇丸も小さな声できゅんとひと鳴きして、残念そうな表情と、垂れ下がった尻尾を披露する。

「ごめんよー。【ジャンプ】でぶっ飛んだ時に『こつちだよな！』ってノリで方角決めたのが悪かったんだ。

だってあの出来事のせいで、あまりのやるせない気持ちに押し潰されそうになって、少しでも体を動かして気分を紛らわしかったんだもの。

「お気遣い無く……。ちよつと自分の馬鹿さ加減に落ち込んでしまっただけですから」

反対つてことは、単純に考えて県二、三個分くらい逆走したつてことか？

【ジャンプ】の効果が凄いのか、俺の頭がやばいのか。

後者だと思いたくない為にさっさと思考を切り替え、前向きに事に当たることにしよう。

「すみません、もし宜しければ、こちらで一晩宿を貸していただけないでしょうか」
家事手伝いとか色々しますから、と提案してみる。

流石に体力と気持ちいを回復せねばと思つて言つてみたが、

「ああ良いさ。ただ、手伝いはいらねえ。ゆつくり休んどけ。……代わりといつちやあ何だが、兄ちゃんは守矢での話をしてくれよ。夜にやあ興味のある奴らを集めてくるからよ。ちったあ人づつてで話は届いてくるんだが、今ひとつ、はつきりしなくてな」

「はつきりしない？ 情報が、ですか？」

「そうなんだ。洩矢の国が負けて、守矢の地になつて大和の国に組み込まれたつてところまでは、言う奴言う奴一緒なんだがな。あそこの……あく、名前はなんつたか、八坂様だったか？ その神様が、真つ黒な大妖怪に飲み込まれたたの、戦が終わつた途端に国中の傷を受けた者達が回復したたの、見たことも聞いたことも嗅いだことも無いような食材が国中に溢れているたの、もう何を信じたらいんだがさっぱりだよ」

……心当たりがあり過ぎて困る。

でも、あれだ。別に隠す必要は無い訳で、良く知っているというか体験している俺ならば、事細かに出来事を伝えられるだろう。

「ここはいつちよ、洩矢の国改め大和の国、ひいては神奈子さんと諏訪子さんの為に、一肌脱ぎますかね。」

「分かりました。それじゃあお言葉に甘えて、しばらく休ませてもらいます」

「そうしな、そうしな。俺の家がこの先の松ノ木辺りにあるから、そこに入って勝手に休んでくれ。ああ、その犬っころは上げないでくれよ」

「分かりました。それでは」

おじさんを背に、言われた家へと歩き出す。

勇丸は綺麗だつて言いたかつたんだが、その辺りは事情を知っているものと知らない者の認識の差だと思つて諦める。

こういつた出来事は、今に始まつたことではないので対応も慣れたものだが、やつぱり少し寂しいものだ。

「よつし、じゃあ今晚は集まつてきてくれた人に大盤振る舞いしちゃいましょうかね。勇丸も、食べたいもの考えておいて〜」

こくりと頷く相棒と共に、松ノ木が目印の、おじさんの家へと足を踏み入れた。さつて、寝るぞー。

「そこで俺は言つてやっただですよ！ 『俺の大切なものに手を出すんじゃないやねえ！ お前からまとめて掛かつて来い！』 って」

「よっ！ 兄ちゃんカッコいいぜ！」

合の手ありがとう おじさん。

村の中央の開けた広場。

小学校の小さな体育館くらいの広さの場所で、俺は集まった人々に、武勇伝を語っていた。半分以上そっぽを向かれていますけどね。

思っていた四く五人くらいという俺の予想は覆され、パツと見で三く四十人は居るっぽい。

日も暮れてきたので焚き火を囲む形で話し込んでいたのだが、どうしたことか、どんどんと話が誇張していつてる気がする。

諏訪子さんに拾われたところから始まり、諏訪大戦から、二神が互いに手を取り合っている様子から、俺の能力で人々の治療を行ったまでを話していたのだが……。

諏訪大戦の詳細を知りたいと言われたので説明していたのだが、語っているうちに思

い出修正というか……天狗の鼻が伸びてきたというか、嘘ではないけど事実でもないよ
うな言い回しで『俺って凄いなだぜ！』な話の展開になってしまっていた。

フラグな感じがビンビン伝わってくるが、酒も入ってストツパーの無くなった思考回
路は軽く暴走していて、止まる様子を見せない。

村人達は、俺が振舞った酒や料理に舌鼓を打ちながら『こいつそんなに凄いのか？

でも酒も食べ物も出してくれたし、酒の席だから楽しんでやえ』みたいな様子で俺の話
を空想物語の一つとして割り切りながら聞いているようだ。

それはそれで悲しいとは思いますが、誇張の入った話なので、酔っ払いの戯言で済むのな
らそれに越した事はない。

違えてはいけない語るべきところは素面のうちに全て話し終えたので、後は口直し程
度の馬鹿話の1つくらいは言ってもいいだろう。

「九十九様く、お酒切れましたく」

「あ、こつちもですー。追加でお願いしますー」

はい喜んでー！ って俺は居酒屋の店員か。

初めに会ったおじさん以外、俺の事は皆、様付けで呼んでくる。

ジャン袋（略称）を出して勇丸を従えている、よく分からない力を行使する存在なの
だから、畏怖とか尊敬の念を籠められて呼ばれるのかと思つたが、何だか小鳥とか子猫

が親に餌の催促をする為に甘い声を出しているだけなんじゃないかと思えてきてならない。

「あなた達それ何杯目ですか！ 俺が覚えてただけでも一人で瓶一本分開けましたよね!？」

「あの透き通った綺麗な入れ物のことですかあ？ そんなに飲んだ筈はないですよ。だってほら、瓶の中は透明なままですから」

だからそれは完全に中身が空だからじゃないか。

うえーい。なんて村人達がい出しそうな空気の中で、俺は本日何本目か分からない酒瓶を取り出す。

名前は久保田の『純米大吟醸』万寿。

すつきりとした、クリアな後味が、飲んだ事すら忘れそうな風味を演出して、度数の強い日本酒であるにも関わらず、酒が進む進む。まるで水のようにだ！ ってなもんよ。

が、それはこの混沌と化した現状を見るに大失敗であったと思ひ知らされる。

もはや自分勝手に酌をして、酒が切れればこちらに強請り、たまに思ひ出したように俺の話を聞く、この状況を見れば。

まあ酒の席なんてこんなものだが、仮にも俺の話を聞くついでという名目で開かれたのだから、もう少しちやほやして欲しいというか何というか……。ああ、おじさんまで酒に

没頭し始めた。

いいもんいいもん。俺には勇丸が居るもん……つて勇丸うううう!?

「わあくふかふかだあく」

「あー、ずるいよ！ 次は私の番だったのに！」

「つ、次は僕が……」

「凄く凄く！ 伸びるよー！」

明るい声が聞こえてくる。

こことは違う集団の輪に、勇丸は村の子供たちに揉みくちやにされていた。

本来ならば、彼らは日も暮れた今は床に就いていなければならぬのだが、俺という来客の歓迎の意を伴って、夜更かし決行サインが親から出されたのだった。

その結果が、あれである。

尻尾はピンと引つ張られ、体には二人の子供が縫り付き、頬をこれでもかと言わんばかりに左右から引き伸ばされている。

まさに玩具。

それでも為すがままにされているのは、きつと勇丸が『主に迷惑を掛ける訳には』とかそんな理由なのだろう。

もう少しくらい甘えてくれても良いんじゃないかと思うが、そこが勇丸の良い所でも

あるんだけれど……ねえ？

何はともあれ、あのままではあまりにもあいつが不憫だ。

どうにかしましょうかねっと。

「おーい君達。甘いもの食べたくないかー？」

「『食食べたーい!!』」

うむ、素直（欲望に忠実）な良い子達だぜ。

最悪一喝しなければならなかったが、言葉で分かってくれるのならそちらの方が良い。——言葉じゃない気はするが。

勇丸を放り出すようにこちらに詰め寄り、子供たちは何をくれるのかとせがむ。

本来なら叱るべきである大人はあんな状態なので、仕方なしにこいつらの面倒を見る羽目になった訳だが、子供は嫌いじゃないので、むしろばつちこいな展開である。勇丸は開放されるし俺は遊べるしで一石二鳥ってもんさ。

「大人達はあつちでお酒を飲んで楽しんでるから、こっちはこっちで楽しんでやおう。大人達には秘密だぞ」

はい、と元気に返事をすることに満足しながら、俺は持っていたジャン袋に手を突っ込む。

取り出したのは、綺麗な宝石。

赤、青、黄色、オレンジに紫と、焚き火に照らされながら色とりどりに輝くその宝石は、飴玉と呼ばれる、あの砂糖菓子 の 代表 格 である。

「ほーら、好きな色を選んで、口の中に入れてみなく。飲み込もうとするなよ。舌の上で転がしながら、ゆつくり舐めるんだ」

『私、赤！』『僕、緑！』と。皆は思い思いの飴玉を選び、それを口へと放り込む。

石でもしやぶつているかのような感覚だったのだろう。

始めの方こそ、頭にはなマークを表示させていた子供達だったが、甘味が溶け出し舌の上でその独特の甘みが広がると、途端に目を輝かせながら、口々に感想を叫ぶ。

「なにこれ！ すつごく甘いよー！」

「私のこれはブドウの味がするー！」

「僕のはカキだー！」

柿味の飴なんてあったかな？ まあいいか。何にしろ、喜んでくれているのだ。この笑顔の前ではどんな事でも些細なものよ。

頬袋を一生懸命に膨らましながら、五百円玉を球くらいにした大ききの飴を口内で転がす。

少し大きすぎたが、こういった食べ難さも良い思い出に変わってしまうのが子供の特権だ。その特権を有意義に使ってやろうという俺の優しさだと思つて、がんばつて飴

ちゃんを舐め続けなさいな。

焚き火を囲んだ輪から、距離をとる。

近くの家の壁に背を預けながら、隣に座って来た勇丸の背に手を置き、温もりを楽しむ。

洩矢や大和でも何度かあつたが、こういったどんちゃん騒ぎというのは、何度やつても楽しいものだ。

馬鹿やつて、楽しんで、ああ、明日もまたがんばろうという気持ちに繋がる。

ただ、子供の手綱くらは握っていて欲しいとは思うが、四六時中それをもとめるのも酷というものだろう。今くらは、全て忘れて自分の為に楽しんだって罰は当たらない筈だ。なんとたつて俺が面倒みてるし。

満天の星空も、焚き火のせいで多少は霞んで見える。

それと相まって、この宴会は幻のような印象を受けた。

あそこで踊るおじさんも、酒瓶を片手に馬鹿笑いする村人達も、飴玉を一生懸命頬張り、顔に至福の表情を浮かべるあの子達も。

皆、今にも消えてしまふんじゃないか、なんて、センチメンタルな気分になつてしまふ。

……ダメだなこれは。飲みが足りないんだ。

久々の遠出だったからか、諏訪子さんとの別れがあれだったからか、喧騒の輪から休憩にと思つて離れてしまった事で、ちよつとネガティブになつてしまった。

——こういう時には、無理にでも楽しむべし。

別に、これを吐露せずに抱えたままだと後の爆弾に発展する、なんてことは無いだろう。ただのホームシック+ α だし。

「よっしゃ、ならば飲むしかあるまいて！」

両膝に勢い良く手の平を叩きつける。

パンツ！ と子気味の良い音と共に立ち上がった俺は、喧騒の中心へと歩き出す。

「一番、大和の国、守矢地方から来た九十九！ 酒瓶一気飲みやります！」

「お！ 兄ちゃん良いぞ！」

「気張つていけ〜！」

やはりこの手の一発芸は受けが良い。酒の席だから、箸が転がっただけでも笑いを取れるくらいなので、当然といえはそうなのだけれど。

急性アル中でぽっくり逝つてしまふような荒事も、今の俺ならば何の気兼ねもなく実行出来る。

流石にそれは不味いと判断したのか、勇丸が服の裾を噛み、くいくいと引つ張るが、一気飲みを止めることはしない。

まるで、落雷が直撃したかのような音を聞くまでは。

「な、なんだあ!？」

我ながら、何という脇役の名台詞。というか雑魚がやられる寸前に言う死亡フラグな台詞。

この台詞だけで一生食っていけるんじゃないかってくらいの発音の良い言葉が出てくる。良い仕事してますね。

とか冗談こいてる場合ではないので、酒瓶片手に、落雷音があつたと思われるところまで走る。溺れるものは藁をも掴むというが、俺の場合は酒瓶だったようだ。

勇丸が既に先行して偵察に走っていたので、道中は安全だろう。相変わらずの素早い行動力に感謝しながら、目的地を目指す。

走る俺を横目に、村人達は唾然としながら音のあつた方へと首を向けつつ、固まって

いる。さっきの子供達も同様だ。皆、何が起こったのか分からない、といった表情を浮かべていた。

下手にパニックになるよりは良いかもしれない、と思いつつ、俺はいざという時の為に、脳内にカードを展開しておくのだった。

ああ、酒が全身に回るぜ……うえつ。
で。

「……あくあ——出会っちゃったか」

目を逸らしたい真実だったせいかな。

思わず、キザったらしい二次元キャラの台詞を引用してみた。好きですけどね、この台詞。

目に入ってきたのは、牙を覗かせながら低くなり声を上げる勇丸と、丸々一軒分あるうかという壊れた、かつて家と名のついていたのであろう廃材の数々と。

「ああ？ 犬っころだけかと思ったら、ちゃんと人間がいるじゃねえか」

数は二十前後。ニメートルはあるうかという体格に、独特な、黄色と黒の斑模様衣類。肌の色は俺らと大差無いのだが、何より目を引くものが——その頭部に突き出した、角である。

鬼。

強き者、悪い者、恐ろしい者という意味を併せ持つ、古来より存在する、日本の三大妖怪のうちの一派。

東方の世界でもそれは一緒で、その強大な力を誇示しつつ、人々が嘘という知恵をつけるまで、頂点に君臨し続けた、妖怪の中の元締め。

今までは洩矢や大和の国でしか活動をしていなかった為に、これら大妖怪に出会う事など皆無だったが、この場所は、彼女達の傘下ではない。

必然。今まで相手にしてきた妖怪などとは違う、弱肉強食の世界で生き残ってきた歴戦の妖怪達と出会う羽目になる。

これが生まれたての妖怪などだったなら今まで通りに対処するだけなのが、どう見たって幾つも争いをしてきましたって集団なのだから困ったものである。

だって顔に傷とかある奴もいるし、眼光というか表情が雑魚っぽくない。

ヒヤッハー！ 汚物は消毒だー！ な集団だったなら、油断やら慢心で付け入る隙は多分にあるのだが、それは諦めなければならぬようだ。

(くっそー、第一声からして雑魚だと思っただけだなあ)

金棒こそ持っていないものの、その威圧感というか妖力がそこいらの雑多な妖怪とは一味も二味も違う事を伝えてくる。

そして何より残念なのが、

(原作キャラいねえー！)

なのである。

東方で鬼といえ、伊吹萃香と星熊勇儀の両名であるが、どこを見ても、それらしい人物が見当たらない。

一応女の鬼も何人かいるのだが、美人の部類ではあるものの、全く知らない顔である。――後から顔変わるって訳じゃないよなあ？

「おい」

呆けていると、リーダー格っぽい男の鬼が声をかけてきた。

額に一本、俺の腕くらいあるんじゃないかと思える角が生えている。

白く、鋭く、逞しく。何処か風格漂うそれは、まさに鬼の象徴と言えるだけの代物である。――それに比べると勇儀さん遊びすぎだろ。

「……何だ」

「他の人間は何処に居る」

うわー嫌な予感しかない質問だなあ。

「……それを聞いてどうする」

「見つけて食うんだよ」

……もつとこうさあ。『それを知る必要はない』やら『人間如きに』な台詞を予想して
いたんだが、あまりにストレートな物言いには、思わず目の前がクラクラしてきた。

でもきつと、今の台詞はその手の考えの延長線上から発せられたものだろう。

言つても言わなくても、どちらにしるこの一帯を風潰しに探しながら、確認するのだ。
俺が質問にどう応えようと、それは暇つぶしの一環でしかないのだろう。

イラつとするので、何か嫌味の1つでも言つてやろう。

「お前達鬼つてのは、仲間を売る事に何の感情も持ち合わせていないようだな。そんな
台詞が出てくるなんて、なんて可愛そうな種族なんだ」

鼻では無理でも、口元にそれらしい嘲笑を浮かべて語りかける。

これで感情の一つでも乱してくれれば良いが。

「はっはっはっ！ そりやそうだな！ そんなこと出来るわきやあねえよなあ！」

逆に、一笑の下に片付けられた。

笑う『はっ』の部分だけで、大太鼓でドンと叩いたときのような振動が空気を揺らし、
全身を震え上がらせる。

参つたな。挑発にも乗り難い。おまけに強いとなつちやあ、難易度が一気に跳ね上が
るじゃないか。

「でもな、出来なくても良いんだわ。どっちにしたって——」

たん、と、踏み込む音が一つ——いや二つ。

それぞれ僅かな時間差で、一つは前方の鬼が「いた」場所で、もう一つが。

「——お前、これでおつ死んぢまうからな」

俺の目の前。

逞しい握り拳が、俺の頭を吹っ飛ばそうと迫る。

十メートルはあろうかという距離を、一呼吸をする間もなく詰めて来た。

即死だ。俺「だけ」ならば。

今までならば、ここで走馬灯の一つでも見ているのだろうが、生憎と神奈子さんの戦闘経験からか、それを見ることはなかった。

迫る拳が、上空へと弾け飛ぶ。

下から殴られたかのように宙に浮いた拳は対象を失い、同時に限界まで伸びきった腕の長さの関係もあって、威力も失った。

何が起こったのか分からないといった表情の一角鬼に、にやりと不適な笑みを浮かべて、言ってやった。

「死んでないぞ——この「嘘つき」が」

下から鬼の拳を跳ね上げた白き従者の勇丸は、俺と敵との距離が近すぎることを考慮して、距離を離すべく行動を起こす。

呆けている鬼の背中に一瞬で回り、体を前転でもするかのように回転させる。

同時、相手の背中を啞え——まるで一本背負いでもするかのように、放り投げた。投げる方向は地面ではなく、鬼達のいる陣営側。

鈍い音を立てて落ちる肉塊。

頭から落下した鬼はピクリとも動かず、周りの鬼達も啞然とした表情で俺達——と
いうか勇丸を見ていた。

ただの狗畜生だと思つて油断していたのだろう。幾ら大型犬だとはいえ、鬼と比べれば指先一つで倒せる存在なのだ、高を括った結果がこれである。

いい気味だとは思うが、問題はこれから。

あの程度のダメージで倒れるようなら、日本三大妖怪の一角を担つてなどいない。

「……せたま」

ほら来た。

投げ飛ばされた鬼から、声が聞こえる。

まるで地獄の底から響いてくるかのような音声に、軽くビビる。

だが、ダメだ。

ここで気持ちが悪くしまえば、俺は冷静な判断が出来なくなる。

嘘でも良い。虚仮でも構わない。

あの時の、諏訪大戦での過ちを繰り返さない為に、俺は仮初めの強い自分を想像し、創造する。

いつか、その自分が本物になるように。

「何言ってるのか聞こえないぞ。鬼つてのも案外弱つちいもんだな。ただの狗相手にぶん投げられるなんてなあ」

俺の語尾に「w」か（笑）でも付きそうな勢いで馬鹿にしてやる。

何より、俺はあいつを嘘つき呼ばわりしたのだ。

嘘を何より嫌う鬼にその台詞を言うのは、自殺願望以外の何者でもないだろう。だが、やる。

その奢った慢心に、自分達が頂点だと言わんばかりの態度に、一発入れてやる。

普段ならば、酒でも食べ物でも召喚して穩便に済ませようとする俺だが、こちらら酒の力が働いて、自制心が効かぬ、媚びぬ、省みぬつてもんよ！（謎）

ゆつくりと、まるで地獄の淵から一本一本指を這わせて獲物に喰らいつかんとする悪魔のように、一本鬼は体を起こす。

ギンツとこちらを射殺さんと視線の槍が刺さった。

——だがなんだ。それがどうした。怒ってるのはお前だけだとも思ってるのかゴルア。

少し下がってろ勇丸。ちよつと凄いの見せてやるから。

「——俺に、嘘をつかせたなあああああ!!」

「んなこと知るかくそつたれえええええ!!」

弾丸の速度を伴ったダンプカーのように、一本鬼は突進して来る。

始めからこの勢いだったならば、勇丸も対処できずに俺は瀕死になっていたことだろう。

だがお前は俺に時間を与えてしまった。

それがお前の敗因。それが俺の勝因。

破裂音が木霊する。

木々をなぎ倒し、家一件丸ごと破壊したその豪腕は、俺の目前で止まっている。

いや、正確には、止められていた。

鬼の拳。その何人も触れられぬであろう死神の一閃を、そつと割れ物でも扱うかのよう、添えられている、白い手。

鬼達を見る。眩い人を。

鬼達を見る。純白の羽を生やした存在を。

鬼達を見る。それら翼人達が、何十人も周りに出現していることを。

鬼達は知らない。それは、天使と呼ばれる西洋の神の使いであることを。

……鬼達は知らない。壊したその家は、一本松の近くにあったその家は——俺の
宿一飯の恩人の家であることを。

「俺の大切なものに手を出すんじゃないやねえ！ お前らまとめて掛かって来い！」

16 Hulk Flash

トレーディングカードゲームでは、互いに対戦するという目的から、各プレイヤーは自分が使用する山札——デッキと呼ばれる、それを構築する。

当然、それは大体の場合は勝利することを目的に構築されており、限られたカードプールの中から星の数ほどの組み合わせを考え出して、組まれている。

殆どのトレーディングカードゲームにおける勝利条件は、三つ。

一つ。相手に設定されたライフポイントをゼロにする。

一つ。相手が、自身のデッキからカードを引けなくなつた場合。

一つ。その他、各種カードに書かれている特殊勝利条件を達成する(例・クリーチャーカードを合計十枚召喚する。墓地と呼ばれる捨て札を置く場所に、カードが三十枚以上ある、など)。

この三つだ。

そのそれら目的達成の為に、世界中のプレイヤーは日々組み合わせを熟考し、思案し、

デッキを構成しており、それら数多のデッキをカテゴリ分けする名前が存在する。

MTGにおけるカテゴリ名は、大雑把に分けて、同じく三つ。

『ビートダウン』

語源は、殴り倒す、の意味を持つ、基本クリーチャー中心で構成されたデッキタイプ。広義にはクリーチャーによる攻撃を中心とし、複雑なギミックを搭載していないデッキタイプの総称。もつと広く言うとは積極的に相手を攻めるデッキ。

『コントロール』

名前そのままの意味で、戦場をコントロールし、一步一步確実に勝利への歩数を刻むデッキタイプ。狭義には、相手に何もさせない&動かさない『ロック』と、呪文を打ち消す、という概念のあるMTGならではの『パーミッション』が存在する。

ちなみに、日本人プレイヤーはこのパーミッションが多い傾向があり、世界でも日本のパーミッション好きには一目置かれている（良い意味でも悪い意味でも）。この手のデッキは相手の行動を大きく阻害するので、友人同士で戦う場合は、その関係に亀裂が入る事もあるとかないかか。

『コンボ』

多大なアドバンテージ——優位性を確保出来るか、コンボが成立した時点で勝敗の決してしまうデッキタイプ。

(以下 MTG wiki 丸々引用)

コンボが”失敗しても”コンボパーツ自体が単体である程度戦えるような、安定感のあるデッキは強力である。しかし、コンボの成功率が高すぎて”失敗しない”デッキは、それ以上に脅威である。

稀に、高確率かつ高速で、失敗しても立て直しが利く、爆発力と安定感を兼ね備えたコンボデッキが誕生する。このようなデッキは公式大会を荒らす原因となるため、キーカードの禁止カード指定などで規制される。

瞬殺コンボデッキの場合、相手のデッキタイプにかかわらず戦えるが、”相手を無視している”ことでもあるため、対戦ゲームとして問題があるとされる。

——前々から考えていた。

カード一枚一枚を使ってきたが、デッキの名前を思い浮かべて使ったのならどうなるのか、と。

デッキに含まれたカードを全て使うのか、はたまたオートで一つ一つカードを実行召喚してくれるのか。

一度も試した事は無く、ぶっつけ本番になってしまったが、問題ないだろうという確信はあった。

構築されたデッキは、目指す勝利パターンがおぼろげながら決まっている。大会で名を残すような、トップクラスの強さを誇るものであれば、それはむしろ顕著だ。

名は体を表すという言葉通り、構築されたデッキには、辿り着けるかどうかは別として、勝利へと続く道を敷く手段が備わっている。

ならば。それを言うという事は、その道を敷くことと同義。

『デッキとは道である』

これがこの世界に来てからの、心の奥底にある持論。

そもそも『道具』という言葉には、『道』の字が組み込まれている。それにあやかり自論その一にしてしまった訳だが、昔の人へ感謝を表明しておこう。

過程を……敷設作業を省き、結果だけを残し、道は完成する。

それが——俺がデッキ名を唱える意味。

ビートダウンならば、相手を圧倒的な物量か無比の突進突破力で押しつぶすクリーチャー軍を展開し終えた状態で。

コントロールならば、戦場を支配し、その場の神と化したかのように、相手へ多大な制約を掛けた状況で。

コンボならば、膨大なアドバンテージを稼ぎ、相手の喉下に手を掛け、幾枚ものカードがまるで一つの呪文であるかのような——あと一息で仕留められる一歩手前で。

自身の制限に触れなければ、それらは実行される。

今、大量に展開された天使達を見るに、俺の考えは正しかったのだと、満足九割、安心一割の心で、月夜に照らされた、閃光と豪腕と土煙が入り混じる戦場を見ながらそう思った。

「くそっ！ 何でだ！ どうして！」

鬼の一人が、たまらず叫ぶ。

数の差から見て、鬼一人対天使が一〜二人という振り分けになっているのだが、躯体の差から、天使達はまるで柳のようにその攻撃を回避、あるいは受け流している。

とはいえ、相手は鬼。

戦闘経験と自己のスペックをフルに活かして五〜六回に一度は攻撃を当ててるのだが……。

豪と唸りを上げる攻撃が、とうとう避けきれなくなった天使の一人にヒットする。通常ならば、それで充分だ。

引き裂けぬものなど無いと主張するかのようなそれは、けれど、まるで絶対的な何かに阻まれたように威力を緩めて、僅かに天使の行動を阻害し、体をよろけさせる程度に留まった。

不可解だ。

そう、表情が物語っている。

仕返しにと言わんばかりに天使達が放つ、妖気だが神気だが分からぬエネルギー弾を避け、あるいは防ぎながら、鬼達は戦いを繰り広げていく。

そんな光景を見ながら、俺は結構効果のあるものなのか——と。その天使達に備わっている能力の一端を思い出す。

その天使達は、2/2の飛行と『プロテクション(黒)』と呼ばれる、指定された条件に対して一定条件下で効果を無効にする能力が備わっていた。

相手は日本妖怪の顔。つまりは人間にとつての悪そのもの。

それが正義か否かはさて置き——ならば、それは色に部類するなら黒以外にあるだろうか。

妖怪Ⅱ黒のイメージは我ながら安直だと思つたが、効果観面のようで、鬼達は殆どダ

メージの入らない天使達に、悪戦苦闘している。

良かった。もしかしたら赤とか緑にも部類されるんじゃないかと思っていたけど、少なくともコイツらは全員、黒が含まれているようだ。【プロテクション黒】って妖怪相手じゃ反則の部類じゃね？　なんて思ったり。

……MTGのカードには、相手を倒す手段にダメージか直接破壊かの差が明記されていたが、こちらではどうなのだろう。

とりあえず物理系は殆ど無効っぽいかな、と、若干ではあるが鬼の攻撃でよろめいている天使を見ながら判断する。

これが相手の力量によるものなのか、それとも天使達の地力なのか悩むところではあるので、過信せずに、切り札ではなく、神奈子さんにお粗末の効果が現れ難かった事を踏まえて、手段の1つとして思っておこう。

そして、絶え間なく戦闘が行われている最中で、ふと思った。

——これなんてエロゲ？　と。

何考えてんだ。って思うかもしれないが、彼女達の格好が格好なのだ。

純白の翼に薄いブラウンの髪。うん、ここまではいい。

身に着けているのはベストのような金色のプレート——素肌にタンクトップのよ
うな——と、よく光の通るスカート——ようはスケスケ。

——つまりは、結構裸に近い格好なのである。

しかも全開ではなくチラリズムとか、男心をくすぐり過ぎ。

もつと別の形でハーレム目指したかったよチクシヨウ！

「罅が明かねえ……。お前らー！」

一本鬼の掛け声と共に、周りの鬼達が一瞬で戦鬨を取りやめ、俺へと殺到する。敵ながら良いチームワークに焦燥と感心を同時に思う。

——かかって来い、なんて言ってフラグ立てたのが不味かったか。こっちくんな。

半分以上は、背中を見せた事で天使達の気孔弾つぼいのに被弾して勢いを止めたのだが、残りは全て、こちらへと向かってきている。

俺の護衛についていた1人の天使が、精一杯の弾幕を張るも、これといって怯んだ様子も無く。

あの物量では、地力も相まって勇丸も対処しきれないだろう。

……諏訪大戦の時には、それが原因で敗北を刻んでしまった。

だから、考えた。

未だに明確な対処手段は思いついていないが、一つも思いつかなかった訳ではない。

その内の一つが、大量のクリーチャーによるサポート体制。

単純にして明快の、だからこそ崩れ難い戦法。

呼び出した天使は鬼より数の多い、三十以上。

通常ならば、維持する以前に、呼び出せないくらいの量であるクリーチャー数。

だが、召喚されている。

ルールに沿って——ではない。ルールが変わっているのだ。

召喚した存在に維持費が掛からなくなった訳ではない。

それにはまず、彼女達が「トークン」と呼ばれる存在であるところから語らねばならない。

『トークン』

何らかのカード効果によって生み出される擬似カードのこと。

これからカードは場にしか存在できず、手札や山札に戻ったり、墓地に置かれた場合

は消滅する。そして、そのマナコストは召喚に使用したマナコストに関わらずゼロとなっている。ただし、何かのコピーカードである場合は、それらカードのマナコストは、コピー元と同一のコストを持つ。

この大量に出現したクリーチャーは、元は一体のクリーチャーをコピーした結果のもの。コピー元のコストは5。

今までの俺ならば、万全の状態で、戦闘と呼べるだけの時間現存させ続けられるのが3体。一瞬だけならば、精々十を越えるかどうか、といったところ。

だが、展開している。召喚している。維持している。それも、余裕をもって。

一体何故なのかと問われれば、こう答える。——上限開放したからなのだ。

転生前に言われた、『経験値を積むことで、原則の制限や上限の開放が可能』。

これが、その成果。

開放された制限は『トークンの維持コストは全て極小換算』というものだろう。

本来ならばコスト5を三十体以上維持している計算だが、感覚は「死の門の悪魔」を維持している時以下か、もしくは同程度の疲労具合。

あの時は、かなり瀕死な状態で数分は持った。

今の疲労具合はそれと同等くらいかとはいえ、宴でジャン袋を多用したことを差し引いても、数十分は今の状態を維持できる。

よくよく考えてみれば、おかしかったのだ。

主に戦闘での経験値によって、勝敗とは関係なく、俺のレベルは上がっていくと聞いていた。

雑魚ばかりではその成長率が遅い事は当然だとして、諏訪大戦で八坂神奈子というラスポスどころか裏ボスレベルの相手と戦って、判明した上限開放が使用ストックマナが1ランクアップだけだというのは疑問が残った。

大和の国になって一年。

負けた経験を活かして、自身を守るようにカードの組み合わせを試していた時に、このレベルアップボーナスに気がついた。

その時はテレビゲームのように、レベルが上がった時にはそれらしい音や表記でも出てくれれば良かったのだが、と愚痴を零したものだ。

現在判明しているのは、マナストックの増加と「トークン」維持費の減少。そして、後

一つ。

他にも何かあるかもしれないが、今分かっているのは三点だけだ。

どうせなら、出力マナの上限を開放してほしかった。

4 マナを使えるようになっていたのなら大分戦略も広がるのだが、無いもの強請りは空しいだけなので、さらっと流す。

鬼達を見据える。

どいつもこいつもやる気満々な顔をして、後数秒もしない内にこちらへと到達する。

だが、その様子だとお前らは気づいて……見えていないんだろうな。

そうじゃなかったら、もっとその表情を歪めている筈だ。

眩い天使達に霞んで見えないのだろうが、もうその異常に気づく筈だ。

——ほら、その顔を歪ませるといい。

「……ぐつ、何だこの臭いは!？」

突撃しながら、鬼の一人が周りの鬼に向けて、そう話す。

微かに漂うのは、腐った卵を数倍臭くしたような臭い。

臭いの元は——俺の後方。

そこには、俺と同じくらいの人型が居た。

爛れた皮膚に、醜く晴れ上がった顔面。

片側は落ち武者のようにボサボサの髪の毛が隠し、もう片方の辛うじて覗く眼球には
 瞼が存在せずに、けれど気にした様子もなく、グリグリと前方を観察していて、体の至
 るところには縫い目が見て取れ、そのボロボロの体を縫い合わせているのが覗える。

左半身からは脇の辺りから第3の腕が後付けされて、反対の右側——肩甲骨と肩の
 中間くらいに——人間の首から上が備え付けられていた。

まさに醜悪、まさに異形。

それは、ゾンビと呼ばれる、かつて人であった者。

あまりの臭いに、勇丸は先ほどから鼻で息をすることを止めているくらいだ。……こ
 の臭いは毒レベルだな。

攻撃クリーチャーはゾンビクリーチャー、黒で1マナ、場に出ているクリーチャー1
 体を食う事で+1/+1の永久修正を受ける、『屍肉喰らい』一体と。5マナの天使ク
 リーチャー『霊体の先達(せんだつ)』三十名以上。

この兩名の召喚を以って、MTGにおいてもトップクラスの強さを誇るコンボデッ
 キ。

——【ハルク フラッシュ】の完成である。

『ハルク フラッシュ(Hulk Flash)』

由来はそれぞれのカード名『閃光(Flash)』『変幻の大男(Protégé) H
ulk』から。たった2枚のカードのみで成立するコンボデッキの名前である。

アメリカンコミックのキャラクター、緑色の巨人ハルクの決め台詞のひとつで、「ハル
ク スマッシュ(Hulk Smash)」という英語圏で使われる俗的な言い回しを流
用した名前。ちなみに同名の『ハルクスマッシュ』というデッキも存在する。そちらの
性質は全くの別物。

『閃光』

青で、2マナのインスタント

あなたの手札にあるクリーチャーカード一枚を出してもよい。そうした場合、あなた
がそのコストを最大(2)まで減らして支払わない限り、それを墓地と呼ばれる捨て札
場に送る。

『変幻の大男』

緑で、7マナのクリーチャー 6/6

これが召喚された後に墓地に置かれた場合、あなたのライブラリーから点数で見たコストの合計が6以下になるようにクリーチャーカードを望む枚数探し、それらを場に出す。

変幻の大男を閃光で経由させ召喚し、即座に墓地に叩き込む。そして能力を誘発させ、様々なクリーチャーを呼び出し、相手に勝つという流れのデッキである。

コンボ完成に必要な手札カードが僅か二枚、通さなくてはならない呪文に至っては2マナの「インスタント」一枚と、妨害するにも時間が足りない事が多く、MTGの歴史を通して見ても、前代未聞のコンボパーツの少なさを誇る。

従来のコンボデッキと比べてもその決めやすさ、そして速度が段違いであり、最速1ターンの平均で二〜三ターンで勝利を勝ち取るその速度は、まさに閃光。私見で一般的な試合が五〜八ターンで終わる事を考慮すれば、その異常さが分かってもらえると思う。

登場するや否や、公式大会でその猛威を振りまいた。

その影響度があまりにも大きすぎたため、閃光が大会において禁止カード（使ってはならない）か制限カード（一枚だけしかデッキに投入できない）に指定され、消滅、あるいは勢いを落とすこととなった。

上記の説明では少しややこしいので、大雑把に流れを説明するのなら、以下のようになる。

1 『閃光』⇒

2 『変幻の大男』を出す但墓地に送られる⇒

3 能力で山札の中から条件に合う好きな数のクリーチャーカードを選びそれによつて倒す。

という、この三段階のみ。

呼び出すクリーチャーによつて展開は変わるが、今回呼び出した天使は、『プロテクション（黒）』と飛行を持つことに加えて、ある特殊能力を備えている。

それが、召喚された時に墓地のクリーチャーカードを一枚、場に出すというもの。

『霊体の先達』

白で、5 マナのクリーチャー。

2 / 2

『プロテクション（黒）』【飛行】

召喚された出た時、墓地にあるクリーチャーカードを1枚を場に戻す。

これの他にデメリットが一つ付随されているのが、この戦闘においては関係ないので省く。

この能力によって、例えば10マナだろうが100マナだろうが、墓地にさえ落ちてい
るのならコスト無視でクリーチャーを戦場に召喚することが出来る。最も、今の俺では
制限の関係で、100マナなんて存在を出してしまったのなら、疲労困憊どころか気絶
することだろう。

だが、これだけではこの多大なクリーチャーの数は召喚させられない。

よって、新たにカードを使う必要がある。

少し複雑なので掻い摘んで説明すると、召喚されているクリーチャーカードを一ター
ンに一度コピーする能力を持つ、『鏡割りのキキジキ』という、5マナである赤のクリー

チャーカードを使用した。

- 1 『変幻の大男』で『屍肉喰らい』と『霊体の先達』を持つてくる
- 2 『霊体の先達』の効果で墓地に落ちた『変幻の大男』を場に出す
- 3 『屍肉喰らい』の能力で『変幻の大男』を再度墓地に
- 4 『鏡割りのキキジキ』を呼び出し、能力で『霊体の先達』をコピー
- 5 その間に『屍肉喰らい』で『鏡割りのキキジキ』を喰らい、墓地へ
- 6 墓地にある『鏡割りのキキジキ』を『霊体の先達』で場に出す

以下4から6までループ。

これにより、自身の体力が許すまで霊体の先達のコピー〔トークン〕を召喚することが出来る。

もう少し無理をすれば、まだ召喚出来そうではあるが、今は屍肉喰らいにがんばってもらおうとしましょう！

「蹴散らせ、屍肉喰らいい！」

悪臭と共に、屍肉喰らいが突貫する。

ゾンビとは思えぬ軽快さに驚くものの、この場では頼もしい事なのだと自身に言い聞かせる。……機動性のあるゾンビ、マジこええ。

だが、屍肉喰らいは本来1／1。

鬼達に腕力で劣っている、2/2である天使達より劣るのだ。

それが鬼と真つ向から力チ合うというのだから、無謀以外の何者でもない。けれど、今のこのゾンビは違う。

能力循環の為に、【鏡割りのキキジキ】を三十体以上喰らっているのだ。

一体喰らう毎に、+1/+1の修正を受ける特殊能力を持つ【屍肉喰らい】

単純に考えるのなら、今のパワーとタフネスは、三十以上となっている。

30/30など、【死の門の悪魔】など目では無い……もはや考えられない数値だ。

恐らく、一瞬にして山の一つでも吹き飛ばしてしまえそうな力になっているであろう、その存在。

……見てみたい。

鬼の一人へと、両手を叩き下ろさんと振り上げる【屍肉喰らい】を見ながら、そう思う。

体格も身長も鬼と同程度。

牙を剥き出しにし、唸り声を上げながら右ストレートを叩き込まんとする一本鬼。

それは一瞬。

大気を揺らし周囲に木霊する打撃音。

片や天に拳を突き出す形で。片や大地に拳を振り下ろさんとする形で。

互いに拳がぶつかり合い、けれどどちらも崩れる事はなく、拮抗状態を作り出した。互角。この状況が示すのは、そういうこと。

おかしい、と焦燥に駆られながら判断する。

何故30/30以上と互角なのか。

体力か能力か不明だが、相手も同等の力を持っているのか。

いや違う。考慮すべきはそこではない。疑うべきは、相手ではなく自分。

——そもそも、屍肉喰らいは本当に30/30以上なのだろうか。

ゲーム上でなら単なる足し引きの計算の結果だが、ここは独自の制限の掛かった異世界。

ならば、能力の向上にも一定の制限があると見るのが妥当だろう。

相手ではなく自分に原因があると考えた方が、まだ対処が楽というものだ。

一体幾つまでの修正を受けているのか不明だが、何とか互角になっている現状を受け入れ、次の手段へと現状を見据えながら対策を練る。

しかし、使用出来るマナは後1。

カード枚数に至っては……勇丸やジャン袋を含めての召喚から数えて、丁度七枚使ってしまった……。

必然、新たに手を打つ展開は望めず、方法は一つしかなかった。

屍肉喰らいとガチンコしている一本鬼の横を通り抜けて、他の鬼達が殺到してくる。十体以下ではあるが、脅威であることに変わりはない。

——俺の元まで来れば、の話であるが。

「護衛は二体だけだ！ 誰でもいい！ あの白い人間をぶん殴れえ！」

鬼が吠える。

もう盾はないと言わんばかりに。

……呆れてしまう。

戦闘には慣れているようだが、格下だと思っていた相手が牙を忍ばせているという展開は、出会った事は無いようだ。

その証拠に、警戒している視線は、勇丸と天使の両方にだけ向いている。

それは正しい。認めよう。

俺自身は何の力も無い、無力な一般人と同程度だ。障害物になるかどうかも怪しい存在であるだろう。

だが、お前達は蜜に釣られて群がってきた蟻だ。

俺という餌を見せられて、我慢出来ず、真っ先に狙って来る。

行動が読める敵ほど対策の練りやすい相手はいない。

神奈子さんほど圧倒的な何かがある訳でもない。諏訪子さんほど絡め手な能力があ

るわけでもない。

そんな相手に、今更どうやって遅れを取れというのか。

「誰が言ったよ……」

——俺のコンボは、止まっていない。

三十体以上を召喚した時点で、それ以上のクリーチャー維持は長期戦に向かないと判断し、それ以上出さなかつただけだ。

「打ち止めだつてえええ!!」

向かってくる鬼達の頭上。

そこには、さらに二十体の天使達が点在していた。

俺の声に合わせて、光の雨が降り注ぐ。

二十名による、光弾の絨毯爆撃。

ピチュン、ドカン。と、ギャグの様な音が視界を埋めた。

全く警戒していなかつた無防備な背中や頭上に、これでもかと言わんばかりに攻撃が当たっていくのは、とても愉快なもので。

光が滝のように流れ落ちる光景に、吹き飛ばされる鬼や土埃などは忘れ、僅かに見入る。

そのまま数十秒が経つただろうか。

目前に動く影はなく、残り半分も残りの天使達に鎮圧されたようだ。

——ただ一人を残して。

屍肉喰らいと一本鬼。絶えず打撃音が木霊するその兩名には、防御という概念が存在しないかのように、互いに拳を繰り出している。

……まだ、敵はいる。

残っていた天使達の大半を消して、体力の余裕が生まれるよう工面した。

それでも、もはや自力で立つていられるだけの体力は無くて、勇丸に支えてもらってやっと立てている状況だ。一刻の猶予も許されない。

残り数十となった天使達を、決闘の場を囲むよう移動させる。

タイマン張ってる、なんて状況は気にしない。

それを見守る理由もないし、そこまで相手に思い入れがある訳でもないから。

よって、屍肉喰らいには渾身の一撃を放ってもらい、鬼の動きを一瞬止めてもらう。
(クリティカルな攻撃よろしく!)

「ガッ!?!」

いい『ガッ』だ。ぬるぽって言っとくんだった。

モンゴリアンチョップが鬼の鎖骨に綺麗に決まり、悶絶するように呻き声を漏らす。

おお! キラーカーンのモンゴル殺法! と、もはや戦力差から生まれる余裕によつ

て、軽くテンション上がるものの、まだそっち方面の気持ちになるには早いと自分を諫めた。

屍肉喰らいを消し、多々良を踏む鬼へと、何の通告もなく、天使の光弾を浴びせ掛ける。

十、二十、三十――

弾ける光の数が五十を超えたかと判断した時、俺は攻撃を止めさせた。

見た目じゃオーバークルっぽいが、相手は鬼。それもそのリーダー格のような奴が相手だ。

それに、そこいらじゆうに転がっている他の鬼も、天使との交戦でダメージを受けているが、手足ちよんぽだとか、内臓どろんだとか、そんな感じの致命傷だと思われる傷を受けている奴はいなかった。

天使が非力なのか鬼が強敵なのか、天使の光弾着弾の威力とか見ていると後者だと思うのだが、とりあえずスプラッタな光景は確認出来ない。

微妙に肉の焦げた臭いが漂っているので、多少は火傷くらいはしているのだろうと――その程度で収まっているはずが無いのだが、そう思ってしまった。南無三。

17 ぐだぐだな戦後

土煙が張れたそこに立っていたのは、もはや満身創痍の鬼だった。

衣類は所々千切れ、両手は垂れ下がり、足元はふらつき、けれど決して膝を折る事はないとでも言う風だ。

(目だけギラつかせやがって……カッコいいじゃねえか)

これだけのことを仕出かしたせいもか体内のアルコールが抜けてきて、幾分、思考の波が落ちついてきたお陰で、相手を多少は冷静に観察する事が出来た。

改めて周りの状況を見てみれば……。まあ、あの出来事にしてこの惨状あり、といったところか。

(——あ、おじさんとか子共達……村人のみんなも来てたのか)

啞然とした表情でこちらを見て『何なんだこの光景は』って顔をしていらっしやる。

それもそうか。おじさんの家どころか、その周囲の建造物も跡形もなく。

地形は変わり、焦げ臭い香りが漂い、鬼達が倒れ、天使達が浮き——と、言葉にしても状況が掴めなさそうな現状だ。

ああ、どう話をしたもんかなあ。

疲れてるんだよなあ、休みたいなあ。今なら三秒で眠れる自信がある。

このままだと本当にぶつ倒れてしまいそうなので、負担を減らすよう、召喚していた方々に目を向けて。

(天使さん、お疲れ様でしたー)

ああ、帰り際の笑顔が素敵です。

にこやかに手を振る天使達を全て還しながら、勇丸と俺と鬼という構図になった。

満身創痍の敵に、止めの有無を決定出来る俺。

……この状況なら語りの一つでも入れれば仲良くなれるんじゃないやね？　なんて思ってみたり。

これはあれだ。

敵が味方になるフラグに似ている——というか、そうに違いない！

喧嘩が好きで、宴会が好きで。勝負事にはすっかりとした信念の下に、勝ち負けを潔く受け入れる種族だった筈だ。相手が嘘でもついていない限りは。

宣言なしのガチンコ勝負だったが、俺側は健全の、相手は疲労困憊どころか壊滅状態。勝敗は明らかだろう。

——村人達もそうだが、俺の命を奪おうとしたのだ。多少なりとも理不尽な要求は呑んでもらわねば。

勇丸を先頭にし、鬼へと近づく。

無用心だとは思ったが、相手はこちらに意識を向けることもなく、立っているだけで精一杯のようだった。

「おい」

鬼の目前。腕を伸ばせば届く距離で声をかける。

この距離ならば、例え勇丸であっても対処するのは不可能だろう。

ただし、今回の立場は逆。こちらが強者。あちらは弱者。

けれど、油断せず、慢心せず。

いつでも逃げられるように、重心は後ろに傾けながら。

本当は余裕な気持ちを出したいのだが、仮にも大妖怪の一角を担っている相手だけあって、勇丸を挟んで見ているだけでも、回れ右をして布団に籠っていたくなる。

『調子こいた』『距離詰めすぎた』と立ち止まってから思うが、ここまで来たのなら逃げられない。

後は、やるだけ。

自分で自分を追い込まねば動かない&動けない性格が恨めしい。

「おい、聞こえてるんだろ。目くらみ見ろよ」

「……うるせえ……聞こえてるよ……」

ゆつくりと目線をこちらに合わせる一本鬼に、それだけで体が縮み上がる。

それを拳を握り込むことで、体中に震え広がるのを抑えた。

今大事なのは、言葉と態度。

ここで舐められたら、俺は人生再スタートだ。死亡的な意味で。

「お前は負けた。分かるな？」

「……ああ、味方は全滅。おいらはズタボロ……完敗だよ」

「なら、もうこの村を襲うな。別に人を採って食うの事態は何も言わない。ただ、ここだ

けは襲うんじゃない」

「……はあ？」

うむうむ、良い反応だ。

「おい」なんて漫画の世界でしか聞いたことないが、東方世界だつてのと古代日本

だとそれが普通なのかと思ひ、個性だと割り切って流す事にする。

「おいら達を負かしたんだろ。だったらこの首取ってなんぼの関係じゃねえか」

「普通は、な。あー、どう言ったもんか……」

勿論、ただの善意でこんな提案している訳ではない。

この鬼達を通じて、萃香や勇儀——他の鬼とエンカウントした時に、少しでも勝負にならないよう策を講じているだけ。

基本、俺は自分と関わりのない相手の心配までする事は無い。

過去にも言った気がするが、相手が頼ってきたとかならいいざ知らず、見ず知らずの誰かの為になんげられる心は持ち合わせていないのだ。

それに、コイツらは食う為にここの里へ来たのだと言った。

腹が減れば誰でも何かを食べるし、誰もが持つているその欲求を否定など出来よう筈も無い。

ただ、仮に俺自身が——大切な何かがその欲求によって襲われたのだとしたら、話は別だ。弱肉強食の摂理に乗っ取り、抵抗という名の虐殺を行う用意はある。

よって、我が仮な俺の気持ちと生理現象を理解出来るが故の同情を脳内裁判にて考慮し、ここだけ襲わないで下さいと言ってみた。

この出来事によって、前に見逃してもらった、とかそういう感じの話を広めてくれれば、少なくとも他の鬼達と出会った場合、即、死亡コースはないだろう。

今の俺ではあの鬼四天王に名を連ねている兩名に勝てる気がせず、仮にあったとして

も、周辺への被害の大きさと未だ試した事の無いデツキだったり制限だったり、自身の死を考慮に入れなければ勝ちを得るのには、とてもとても。

死の門の悪魔は最後の手段その1で、「ハルクフラッシュ」も強い事には変わらないのだが、雑魚相手なら兎も角、トップランカークラス相手には如何せん決め手に欠けるのが今回の戦闘での印象だ。

それに、ここで『萃香や勇儀さん達と仲良くしたいから』なんて説明してしまうと『何でお前がその二人を知っている』とかその辺の説明をしなければならぬ。

それは不味い。

知名度が高ければそれで通せそうなのだが、それ系の情報を仕入れていなかったのだから却下。

『実は転生前のゲームで……』なんて言える筈もなく、かといって鬼相手にまた嘘を付くのは頂けない。

よって、ここは強引に流す事にする。

「まあいいじゃないか。お前は敗者、俺は勝者。だったら大人しく言う事聞けっただ」
「……分かった。従おう」

「すげえ！俺すげえ！こんな厳つい相手を屈服させちゃったぜ！（注・凄いのは天使やゾンビ、勇丸です）」

勝敗を強調したせいか、口調まで従順になったのが気に掛かるが、これも弱肉強食の一環だと思って受け入れる。

つと、とりあえず、幾つか確認しないといけないことがあるので聞いてみることにしよう。

この辺を勘違いしていると、後々でしつぺ返しを受けてしまいそうだから。

「質問だ。鬼達の中ではお前らはどれくらい強い強さなんだ？」

「……大体真ん中くらいだ」

ふむふむ、これで鬼の強さの程度は分かった。これくらいで中なら、まあ納得の範囲内だろう。対処出来そうな意味で。

能力も無さそうで、単純に豪腕の者が集まっているだけの相手。

まだ上がいるのかという不安と、これで対策を講じられるという安心感が湧き出てくる。

「次。お前ら、嘘は嫌いか？」

「ああ、大嫌いだ」

即答。

しかも「大」まで付くか。……さつきはすまん事したかなあ。

勘違いしてはならないのが、鬼は本当に嘘が嫌いかどうか、という情報。

そしてそれは真実のようで、鬼という種族には、楔や自戒の類である、信念——もしくは生き様を貫く者達なのだと言断出来る。

幸いにして日本古事記というか東方プロジェクト通りの設定だった為、嘘を付くという地雷を回避するのは容易な部類だったが、これが未知だった場合には何かの拍子で踏みかねない。

ここを怠つてしまったのなら、俺は諏訪大戦と同じ類の苦渋を味わう事になる。

相手を知るには相手の恐怖——嫌だと思ふ事を知りなさい、とサーヴァントとかで戦う話の某赤い悪魔は言っていた。

その為には、少なくとも原作で知っている設定を鵜呑みにせず、せめて一度は自身で確かめてから行動を起こす方が良い。

その辺りさえ履き違えなければ、俺は今後もやっていけるだろう。

「最後だ。……お前、酒好きか?」

「あ、ああ……好き、だが……」

いきなり方向性の違う質問に面食らったのか、若干詰まりながらも答えた。

そりゃそうだ。俺だって同じ状況ならば返答に困る。

で、鬼は酒好きって設定も合っていそうなので、媚売って仲良くなる為に、貢物でもしてみようかと思う今日この頃。……というか今。

縁も出来た。勝負も勝った。後は今後の付き合い方だが、選択肢は『無関心』『嫌悪』『好意』の3つが思い当たり、だったら『好意』一択だろうと思つて、手に持つていたあれを目の前に掲げる。

それは、酒瓶。

戦闘の初めから終わりまでずっと持つていたそれは、傍から見ればさぞシユールな光景だっただろう。

ただ、それを見せられた一本鬼は、意味が分からないとばかりに困惑の色を浮かべる。そういえば瓶なんて代物は、今の時代じゃ存在しなかつたか。

村人達も初めてこれを見た時には何かの宝石か、なんて驚いていたし、今の時代は竹や動物の胃で出来た水筒、水瓶に瓢箪などが主流だった。

このような、無色の入れ物など全く未知の物質だろう。

「お前、名前は？」

「……一角（いつかく）」

「一角か。似合つてるな、カッコいいし。俺は九十九つて言うんだ。で、丁度凄く美味しい酒を持つてるんだが……飲め」

「は、はあ……くれるんなら貰うけどよ……」

そう言つて、蓋を開けた酒瓶を渡して、ジエスチャーでラツパ飲みをして見せ、はよ

飲めと催促する。

俺が持っているのは『純米大吟醸』万寿。

最良という訳でもないが、それでもこの時代に現存するどの日本酒よりも美味いであろうという思惑はある。俺が気に入ってる部類の一つだ。

訝しむ様子を見せながらも、恐る恐る——じゃない!? こいつ、一気に酒瓶を傾けやがった!

まるで胃へと直通しているかのように口に当てられた瓶の中身が減ってゆき、あつという間に空になる。河童と天狗は別としても、酒豪の名がこれ程似合う種族もそうは居ないだろう。

2リットル近くあつた液体が完全に消え、鬼……一角は、まるで魂が抜け落ちたかのような、恍惚とした表情を浮かべた。

渡した酒に毒とか嫌がらせ用のただの水とかその手の考慮が全く無かったのは、俺を信用してくれたのか酒が好きだっただけなのか悩むところではある。

どう声をかけたものか。

酒の方はお気に召したようだが……これは樽で出すべきだっただろうか。

「……うめえ」

「そ、そうか。気に入ってくれたようで何よりだ」

「もう、無いのか？」

「あるけど、疲れたかから今は厳しい。やったら気絶しそう」

「……まだ出せるんだな？」

あ、あれ？　今のところは『じゃあしょうがねえな』みたいに引き下がる場面じゃなかったか。

視線が結構致命的なレベルで睨まれていることが分かったので、ここは大人しく酒を出す事にする。やっぱ距離詰め過ぎたなあ（汗

ここで選択肢を間違えたのなら、さっきも言ったとおり、人生リトライだ。何としても回避せねば。

「あ、ああ……仕方ない。お前、寝ている俺を殺そうとかはしないよな？」

「当たり前だ。勝負に負けて、こんな美味しい酒まで出してくれる奴の寝首を掻くような真似、この角に賭けてやらねえ。勿論、仲間にも言つて聞かせる」

殺気とはまた違った覇気に当てられて、ビビった俺は新しく酒を出す事にする。

鬼が手を出さないと言うのなら、それは本当だろう。

……ただ、威嚇というか最後の駄目押しで、一応こちらの力を見せておこうと思った。

そういう理由——力の誇示的な意味もあるのだが、内心はもつと別の事を考えていたり。

ここまでする意味は薄そうだが、やらないうで何かあった時に、後悔したくない。

それに、何度も言うが、こちらは勝者なのだ。

少し位は役得があつても良い筈なのだ。自己満足的な意味合いで。

「嘘を言うようには見えないが、一応、もし破つた場合には、酷い事になるつてのを覚えておいてくれ」

「おいらが嘘を付くつて言いたいのか」

けれど、それら自己満足は相手を見てから行えばよかつたと、蛇に睨まれた蛙状態になりながら思った。

というかもつと事態は不味い方向へと行っている——軽く逆鱗を撫でているので、本音全開のぶつちやけトークで会話を進める事にする。

じゃないと、瞬きをする間に俺の命が刈り取られてしまいそうで。

ここは一つ、テンション上げて押し切ってみるとしよう。

「違うんだ。さっきのは建前で……ようはお前に自慢したいんだよ。俺はまだもう少し余裕がありますつて。偉ぶりたいんだよ天狗になりたいんだよ敵に恐れられる俺最高とか思いたいんだよ！ 言わせんなよ恥ずかしい！」

「あ、ああ……す、すまなかつ、た？」

黙つていようと思つていたけれど、勢いに任せて言ったのが功を奏したようで、一角

はこちらの勢いに負けて何を許したのか分からない謝罪を行ってきた。

とりあえずは流せたようだが、いやはや、参ったものだ。

アルコールは殆ど抜けた筈だが、まだ何処かに残っていたのかもしれない。

普段なら口に出す事の無い『カツコイ俺目指してます』トークもダバダバと出てきている。これくらいで済んだのは、はてさて幸か不幸か。酒の勢い、恐るべし。

……けれど、俺が底の浅い優越感に浸りたくとも、使用可能なカード枚数は「七」。

勇丸、ジャンドールから数えて、丁度七枚使い切ってしまったので、本来ならば、カードで何かするのは不可能であるのだが。

—— 諏訪大戦で判明したレベルアップ、最後の一つが使用枚数の増加。

従来までは七枚のみだったが、今回からは八を通り越して、九枚に増えていた。

一段階ずつ制限が外れていくものだとばかり思っていたので、増え方の規則性が掴めないが、一足飛びでレベルアップしてくのは決して悪い事ではないので、とりあえずは諸手を上げて喜んだものだ。

マナのストックは後1。枚数にいたっては二。

マナの枚数二とはいえ、一応余裕を持たせて勝利を収められたことに安堵しながら、本当はこの戦闘中に使う予定だった呪文を思い描く。

それは、赤の火力呪文。

属性的に青に部類されそうなのだが、火力は赤が主流であり、破壊と混乱はこの色の特徴だ。MTG的には、赤を代表する呪文の1つである。

見た目が派手で、低コスト。それでいてこのランクでは最高クラスの威力なのだから、過去に使った「ショック」や「焦熱の槍」が不憚でしようがない。

使う呪文は『稲妻』

1マナにして無条件で3点のダメージを選んだ対象に与える、MTG界において、最高の火力呪文の一角として名高い、全ての火力カードの原点。

同じ使用マナで、過去使った火力呪文の「焦熱の槍」が一点、「ショック」が二点。それらと比較すると、とりあえずその強さを何となく分かっていただけだと思う。ちなみに1マナ四点ダメージを与えるカードは、デメリット付きでない限り存在せず、同性能の1マナ三点のダメージを与えるカードも、様々な制約付きでない限り存在しない。

名前からして危険な香りがするので使いどころに悩んでいたのだが、こんな場面だ。しっかりと効果を確かめてみるとしよう。

さて、問題は何処に落とすか……なのだが。

山や平原とかだと燃えそうなのでアウト。平原なんて見えないけれど。

近場の木は論外で、後残っている場所と言えば……海。

これは上手くいけば、海魚もゲット出来て一石二鳥だろう。

考えもまとまったところで、改めて一角へと向き直る。

余裕が出てきたせいか、ただ怖かっただけの顔も、今ではどこことなく愛嬌のある表情を浮かべている気さえしてくる。気持ちの余裕って大事ね。

「分かった。そこまで言うのなら、お前を信じよう」

嘘が嫌いという言葉を聴いた時から本当は信じていたのだが、『お前を認めたから俺は気を許した』的な台詞を言ってみる。

そう言つて、周りを取り囲む村人達へと体を回転させた。

「誰か！ 俺が持っていた宝石の散りばめられた袋を……つておじさん」

「あ、ああ……よく覚えてないんだが、持って来ちまった……」

溺れる者が掴む候補にジャン袋を追加すべきだろうか。酒瓶を持ってきた俺が言えた義理ではないが。

戸惑うおじさんに近づき、持っていたジャン袋を受け取る。

皆の顔は先ほどと変わる様子はなく、まるで事態が飲み込めていないといった表情だ。

説明しなきゃいけないかなあ。いけないよなあ。でも疲れてるし……一角に言つてもらうか。

「一角、後でここの人達に今までの出来事を説明してくれ。俺は疲れた」

そう言つて、返事も待たずにジャン袋に手を突つ込む。

本当は樽で出したかつたのだが、袋の取り出し口の大きさがサッカーやらバスケットボールくらいしかないのです、もう少し小さめの——ピアタンクとでも呼ぶのだろうか。

鋼鉄かステンレスか。何の素材で出来ているのかは分からないが、金属製の、居酒屋の隅に置いてあつたり野球会場で売り子さんが背負つているあの容器に酒が入っているのを思い描きながら、取り出した。

普通はビールやらコーラやらの炭酸飲料を入れておく容器だつた筈だが、まあこういう使い方もありだろう。

この線で合金とか貴金属とかの、金属チートとかも考えてみるかねえ。

金属製の容器もはやり始めて見るようで、鬼どころか村人達まで何を出したのかと覗くように、けれど彼らは近寄れずに遠巻きに眺めている。

それを、十本。

大体一つが二十リットルくらいだから、結構な量を出したと思う。

出し入れだけで腕がパンパンになりそうで、さらに召喚の疲労から、戦闘の累計も合わさつて、今にもぶつ倒れてしまいそうだ。

もはや立つていられずに、どかりと胡坐を搔いて地面に座つている状態に陥っている

のが今の俺。

このまま宴会に突入出来そうな格好だが、それをしたのなら。俺はすぐさま気絶するだろう。

「ここをな？　こうやって緩めると蓋が取れるから、それで中身を取り出して飲んでくれ」

そう言って、開け方を実演。

推奨している方法がタンクからの直飲みだが、先ほどやっていた一升瓶のラツパ飲みを思い返してみれば、それでも問題はないだろうと内心苦笑する。

酒が絡んでいるせいか、一角の目つきは真剣そのもので、俺の一挙一動を逃さないとばかりに目を皿のようにして観察していた。

（鬼にビアタンの使い方を教える人間つてのも、何ともいえない状況だよなあ。写真にでも撮りたいねえ）

写真かあ。撮れるものならこの光景を残しておきたいと思いつつ、一角が実際に蓋を開けるのを見届ける。今度は絵でも描いてみるか。

パカツつと子気味の良い音を立てて開いた蓋に、驚きと小さな感動で鬼の表情がコロコロと変わる様は、とても貴重な出来事であったと思う。

そして、ここからが問題なのだが……。

このビアタンク、言うまでもなく俺の時代で普通に使われていた代物の一つである。過去にジャン袋で出した食材——と一緒に出てくる食器類。

当然これらの品々を残しておくタイムパラドックスやら何やらが起こりそうなので、これらの処理は、それを取り出したジャン袋に再度突っ込んで念じれば消える、という方法を発見し、そうやって解決していた。

出した後の処理までしてくれるなんて、ジャン袋万能過ぎ。

とはいえ何でも回収してくれるものではなく、あくまで袋から出したものだけを処理するようで、食べ終えた食い散らかしの中に他の料理が混ざっていたりすると、少し悲惨な結果になるのだが。

「……おーい！ おじさん！ 後で漁に出て行くと良いよー。魚が一杯水面に浮いてい
ると思うからー！」

遠巻きその一と化していたおじさんへ『投網の修理をしていたのだから、恐らく職は漁師なんだろう』とかいい加減な決め付けで声をかけ、ようやく夜も明けてきた海へと視線を向ける。

ああ、良い夜明けだ。『日本の夜明けぜよ』とか内心で某偉人風にキメながら、対象を沖合いに定めて……。

（【稲妻】発動!!）

撃った。

途端、視界を朝日より赤白い光が満たす。

耳を覆いたくなるような雷鳴が響き、一本どころか幾本もの閃光となった【稲妻】が、
“この辺”と思つた箇所に降り注ぐ。

幾筋も閃光が走り雷鳴が「んざく」空に目を細めながら、至近距離で使わなくて正解
だったと安堵。

効果は数秒もしないうちに終えたが、瞬時に立ち込めた大量の水蒸気が、その威力を
物語っていた。

これで三点ダメージなのだから、クリーチャーと呪文の数値は別計算なのだろうか
と朦朧とする思考の中で、俺の意識は闇へと溶けていった。

18 崇められて 強請られて

目が覚めた時に、見慣れない光景であることの多いのが、物語の主人公というものでろう。

そこから新しいストーリーが始まり、胸躍らせる展開が広がってゆく。

アニメや漫画、ノベルでは、お約束の手法。

俺自身も、2度。転生直後と諏訪大戦終了後に味わった。

だからこれも……………

「おお、九十九様がお目覚めになられたぞ！」

「皆の者！ 祈れ！ 祈るのじゃあ！」

「頭が高いぞ！ もつと低くするんだ！」

……………まあ……………なんだ。

想定範囲内といえば、範囲内なのだろう。

差し込む光の加減から判断して、今は大体お昼くらいだろうか。

傍らに佇む勇丸は無言。

というか現状を分かっている、俺に対して害の無い行為だと判断した為に、護衛に徹しているだけっぽい。

気絶してても勇丸を維持し続けていられることに大きな躍進を感じながら、辺りを見回す。

誰の家だか分からないが、この村にしては結構大きな家。

そこに俺は寝かされていて、玄関先で様子を窺っていたであろう2〜3人の村人が、呼び掛けに反応して続々と集まってきたとおり、順に外で傳（かしず）いてゆく。

では、一体何故室内に入って来ていないのかというところ……、

「おお、起きたか九十九」

俺の周り。

寝ていた布団の周囲に10人前後の鬼達が……睨みながら視線を向けてきた。

うは、死にそう(汗)

そう思っているのだが、勇丸はそんな彼らに顔すら向けずに、家の唯一の出入り口へと警戒心を傾けているだけだった。殺す気は無いって事なんだろうか。

そんな中、声の主である鬼の一角が陽気に声を掛けて来る。

声色に何となく喜びが含まれている気がするのだが、どうにも悪い予感しかしない……少なくとも、良い予感は全くしない。

「ああ、えつと……おはようございます」

「お、おう。おはよう」

丁寧な挨拶に驚きながら、一角は挨拶を返してくれた。

何はともあれ挨拶は大事だ。

人間関係のコミュニケーションの第一歩だよ。相手は人外の代表だが。

「一角……現状説明よろしく」

「俺が説明したらこうなった」

それは分かってんねん。

だからそこに至る過程の説明をしくれつちゅーとんねん。

「お、恐れながら、私で宜しければ説明致しますが……」

そう進言してくれたのは、飲み会の席で紹介された、ここの村長だった。

白髪の低身長猫背。杖は持っていないが、いかにも「村長」って印象の背格好をしていた。

この魔窟と化した室内にいる、ただ一人の純粹な人間。

その目には、若干の恐怖と畏怖が溶け込んでいるのが窺える。

周りに居る鬼達を警戒して……かと思つたが、彼のまとう空気で、鬼との戦いで使
用した天使やゾンビといったカード効果を、俺の後ろに煤けて見ているような感じだっ
た。

今までの俺を見る目は大道芸人のような扱いだったのが、一転してこの変わり様。

無碍にされてきたけれど一気に成長して立場逆転。な展開は好む所なのだが、そう
いったものは見下していた相手がいてこそ成立するもので、そこそこフレンドリーに
なっていた関係から今の状況では、寂しだけが先行する形となって、心に若干の冷た
さを残す。

(これじゃあ大和に居た時と大差なくなっちゃうなあ)

過去の対応から、この手の印象は中々拭えないものだと言っているの、何かを諦
めるように、村長の対応の変化には黙認する。

それに、俺自身も痛いほどよく分かるのだ。

自身の殺生権を、気分や指先一つで決めてしまえる相手に対して「仲良くしろ」というのが無理な話である。

このような展開には今後、慣れていくしかないのだろう。そう、ぼんやりと思った。（何はともあれ、現状を把握しないと）

悲観的になったせいかわ、状況を冷めた気持ちで観察してみる。

すると、周囲を見回しただけで、昨晚の出来事が誰に言われるまでもなく漠然と理解出来てしまった。

食い散らかされた小皿や動物や魚の骨に皮。

何より、空になっているのであろう、ひっくり返され、所々に傷や凹みのあるビアタンクを見れば、自ずと答えは導き出される。

それでも、やはり誰かの口から状況は聞いておいた方が良いでしょう。改めて村長に訊ねる事にした。

「じゃあ、すいません。説明をお願いします」

大分人口の減った家屋に、俺と勇丸、一角に村長の4人が、部屋の中央に備え付けられている囲炉裏を囲って座っている。

鬼達がひしめき合っている先ほどの状況では、村長の心臓が止まりそう&俺の心臓も止まりそうだったので、出て行ってもらったのだ。

『すいませんが、皆さん退出してもらえますか』と言うのにも胆力が必要だったが、意外にもすんなりと意見を聞き入れてくれて、驚いたものだ。

渋々家から出て行く鬼達を尻目に笑う一角が『ありやあ、お前の酒目当てさ』と言ってくれたので、寝起きのギンと刺さる視線の意味も理解出来た。

大体の経緯が分かり、俺へと殺気に似た意思をぶつけて来た鬼達へと話が移る。

なんでも、俺が倒れた後に目覚めた他の鬼達に——今までに飲んだ事の無いほど美味しい酒を味わった——と、一角が用意したビアタンの半分以上を空にした後で言っただけらしい。

で、1人でそれだけ飲んだものだから、当然他の鬼達に配分される分量は少なくなる。まして鬼とはかなりの大酒飲みなのだから、各2〜3リットル程度じゃ舌は楽しませても腹を満たすまでには到達しなかつたのだとか。

美味しい酒を味わって、〃待て〃を言い渡された犬のように、鬼達は酒を生み出してくれる俺が目覚めるまで、首を長くし、視線で壁に穴が開きそうなくらいに待っていたそ

うだ。

何人かは叩き起こしてでも酒を出させようと行動に移ろうとしたのだが、それを一角や勇丸が目線だけで鎮圧していた——と。玄関で動くに動けず様子を見守る羽目になつていた村長から聞いた時は、今自分の命があることに安堵し、2人に感謝したものだ。その後、村長から今までの出来事を聞いた。

鬼達がココへ襲いに来た事。

それを俺が式神を使い撃退した事。

見たことも無い酒や食材を出し、天候を操り（稲妻の効果）、羽の生えた高潔な者から醜悪な異形の者まで使役、もしくはは生み出している事から、ただの人などではなく、かなり偉い神様なのではないか、と予想した事。

顎で使うような真似をしたり、色々と無礼な態度を取ってしまったし申し訳ありませんでした許して下さい。と最後に付け加え、村長は再び額を地面に擦りつける様に頭を下げる。

こういった状況は、俺があれこれ言うのも変に話が拗れるだけだと分かっていたので、ここは若干の弁解を入れつつ、一応相手の思う象徴になつたつもりで、事を済ますとしよう。

「面を上げてください。俺は何も気にしていませんし、あなた方に対して何かしよう

も思いません。むしろ、変に気を使われるより嬉しかったんですよ？　ですので、難しいとは思いますが、今後とも前と変わらない態度で接していただければ嬉しいです」

「は、ですが……………しかし……………」

「無理にとは言いません。極力で構いませんので、ちょっと凄い人、程度を目指してもらえば、それで」

「はあ……………そう仰られるのでしたら……………何とか……………」

「はい、お願いします」

何か言いたげな村長を尻目に、とりあえず納得させたつぼいので一安心。

神であることは否定しなかったが、もう好きにしてつて感じで、その勝手な解釈による後付設定は忘れる事にする。

今後同じような事があった場合、一々誤解を解くのはかなりの手間が掛かりそうだと諦めて、いつそ神と名乗ってしまおうかとも思い悩む。

「なあ、九十九」

「な、何だよ」

一角が、覗き込むようにこちらを見る。

面と向かつて対峙すると、その威圧感がピリピリと肌に感じて、神気とはまた違った居心地の悪さを与えてきた。

狭い室内に、2メートルを超えようかという大男の鬼が居て、その角は天井に刺さつてしまふようなほどご立派なものだから……逆立ちする亀や背筋を伸ばして移動する猿を見たような、そんな気持ち搔き立てられる。

「酒、飲みたいんだ。出してくれ」

その珍獣が、手に持つているものを差し出してきた。

一体何が、と目を向けてみれば、それはかつて「ジャンドールの鞍袋」と名の付いた、煌びやかな宝石袋であつた。

『ああ、この袋も消えずに残つていたのか』なんて思ったのも束の間——それが今では、ボロ絹のような醜態に……。

装飾品は所々欠損し、真つ二つに引き裂かれたその姿は、どこをどうすればこのような状態になるのか、俺を悩ませる。

「何やつたんだ」

「あ、ああ。みんなが酒飲みたいって——」

「分かつた。もう分かつた。何も言うな」

ボロ雑巾になつたジャン袋を消しながら、搾り出すように答えた。

頭が痛くなる。

思わずため息がこぼれ、ああもう、という気持ちで胸が一杯になつた。

今の言葉だけで、この惨状が出来上がるまでの工程が用意に想像出来る。という事は、だ。

過去、ジャン袋を他人に使わせた事は無かったが、どうやら俺以外の相手には能力を使用出来ないようだ。

きつと『これを使って酒を出していたんだぜ！』とかそういったノリで色々弄繰り回した挙句、このような無残な姿を晒す事になったのだろう。

「……………一応、その袋、俺のなんだよ。……………何か言う事は無いのか？」

「……までやらかしたら、言葉なんて酒気の抜けた酒のようなもんだ。覚悟は出来てる。ドンと来い！」

そんな言葉は知らないが、ニュアンスは何となく伝わってくる。

だが、それが何の慰めになるというのだろう。

何故胸を張る。何故傲慢げな態度なのよ。少しはバツの悪そうな顔をしなさい。

しかしカードでも使わない限り、俺がどんな攻撃をしてもコイツはケロつとしてるであらう耐久力を持っている。

……………ムカつくぜ。

ということ、バターチエンジ！

背番号19、今田家の獵犬、勇丸。

「勇丸、良いか？ あの角が骨だと思え。きつと齧り甲斐あるぞ。バリバリ良い音がする筈だ」

「ぬお！ 誰かにやらせるなんて卑怯だぞ！」

すくと立ち上がった勇丸よりも早く、一角は非難の視線をこちらに向けながら、角をサツと両手で隠した。

何が卑怯だ。そんな顔したいのはこっちだつづうの。

というか、お前の角、めつちや頑丈じゃないか。ゾンビに殴られてもビクともしなかつただろうに。齧られるという行為が生理的に嫌なんだろうか……………。

「もういいや……………。で、経緯は分かった。一角達は俺が出す酒目当てで残った、と。そういうこと？」

「ああ、出せるんだろ？ 酒。ぶっ倒れる寸前でそこそこな量を出せたんだ。休んだ今ならもつといけるよな？」

「(ビアタンク20本がそこそこって……………)……………いけるけど、何でそんなにお前らへ奉仕しなきゃいけないのよ」

「飲みたいから」

……………俺はサービスする理由を聞いたんだつづうの。お前の理由なんか聞いてないってえの。

さつきといい今といい、本当、少しは悩んで言葉を出しなさいよ、もう。

「じゃあ何かくれよ。奢りつばなしじゃ面白くない」

「んー、じゃあ打出の小づつ……」

「——待て、それはいけない」

今サラッと日本童話の伝説級アイテムの名前が挙がった気がする。

それを貰ってしまったら、恐らく小さな人の物語が日本から消えてしまうだろう。というか、実話だったのか？ あの話。

ってかそれを使って酒を出せないもんならどうか……。出せないんだろうな。俺に頼るくらいだし。

どうもこれ以上物を催促すると、やばいことになりそうだと判断。

酒を出せ、という要求を飲む事にし、仕方なく他の案を考える。

コイツの目を見て分かったのだ。

俺がこの事態を回避するには、言葉では防げず、殺す殺さないのところにまで行かなければならないのだと。

逃げたら何処までも追ってきそうだし。

さて、ならどうしたものかと有効そうな要求を考えてみる。

アイテム系は色んな意味で危ないからダメ。なら約束を増やしてみるか、と都合の良

い案を探す。

俺に一生服従？ ……面倒見きれない&見たくないので却下。

萃香や勇儀を紹介してもらう？ 自分から墓穴を掘る必要もない。

ならば、鬼達と出会った時にいざこざが起こった際のストッパー係りが無難なところだろうか。

ただ、他の鬼ならいざ知らず、四天王を相手に、それより下の者が対処し切れるとは思えない。

……仕方ない。別に今すぐ決めなければならぬ、という訳でもないのだ。お願い聞いてもらう券は、今後の為にとっておくでしょう。

「じゃあ、いつか俺の頼みを聞いてくれよ。あんまり無茶な事なら断って良いから」

「何水臭い事言ってるんだ。頼みたいならいつでも頼め。何度だって答えてやる」

……いつの間になんか間柄となったのか分からないが、ちよつと発言が男らしいと思つたので、それでも良いかなと考へてしまふ。

——これって、つまりは友達かな？ という考へに辿り着いた。

大和でも男の知り合ひは居たが、誰もが偉い人やら神といったフィルターを通してしか接してくれず、唯一友達のように付き合ってくれた例外は子供達位だったけれど——
——大人の相手だつて欲しい。

友情にも様々な形があるのは分かっているつもりだが、今の俺は無邪気にはしゃぐだけの関係では満足出来なくなってきた。

自身の価値観を共有出来る相手が欲しいのだ。

………相手は、鬼。

人を襲い、妖怪を束ね、強き者として君臨する日本妖怪の頭。

人間側から見れば、恐怖以外の何者でもないだろう。

幾ばくかの良好な関係がある人や村の話は聞き及んでいるものの、どれも御伽噺の域を出ない程度。

この鬼——一角だつて、村への襲撃は初めてではない筈だ。

それはつまり、過去何度も村を襲い、人々を食ってきた事に繋がる。

「………一角」

「おう」

「お前、今まで人間を何人くらい食つた？」

「………女子供含めて、100人以上は食つてる。何だ、やつぱり首が欲しくなつたか？」

俺が何を聞きたいのか理解したのか、少々考え込む素振りを見せ、返答に態々「女子供」まで付け加えてきた。

意図を掴んでいてそれを言ったのだ。

自分の発言一つで、また先ほどの戦闘が起こりえる事など分かっているだろうに。けれど、何ら後ろめたい出来事など無いと言わんばかりに、真つ直ぐに答えてくれた。人を襲い、人を攫い、人を喰らい、人に恐れられ。

因果応報の覚悟を伴い、自分が決めたの“理”に身を委ね貫き通す。

貫く姿勢への憧れと、平穩を謳歌していたであろう人々が無残に食い散らかされている場面が脳裏を掠め――。

「……………いや、いいんだ。ちよつと聞いてみたかっただけだから」

俺は人間寄りの勢力では無くなってきているのかもしれない。

見ず知らずの他人とはいえ、仮にも同じ種族を捕食する相手に対して好意を感じているのだから。

この辺はアニメや漫画の“偏ってる俺カツコイイ”の影響なのだろうか。

明確な理由は言葉に出来ないが、『我ながら変わっているな……………』と自分を他人事のように、そう思った。

……………とりあえず、これは保留だ。

何も今結論を出す必要も感じないし、二つの狭間で苦悩する主人公を演じる気も無い。

答えを出さなければならぬ時になったら、自然と心が判断してくれるだろう。

何より、先ほどから続々と集まってくる村人達が地面で土下座をし続けているというのが、心情的に頂けない。

こつち側の話に集中し過ぎたか、と20を超える人々を見ながら、この状況を解散させるべく声を掛けた。

「後は私と鬼で話をつけますから、皆さんは各々の仕事へ戻って下さい。……………一角、壊した家、直しておけよ。じやなきや酒はやらん」

「分かった。すぐ取り掛かる」

そのまま、有無を言わず入り口に向かい、周囲に居た鬼達へと声を掛けながら遠ざかっていく。

海を割ったモーゼの如く、村人達に距離を取られながら、おじさんの家へと向かっていく。

それに刺激されたように、周りに集まっていた人達も散り散りになる。

……………村人だけを解散させるつもりが、指示の出し方を間違えて、全員居なくなってしまう。

今までぎゆうぎゆうだった室内が急に閑散として、1人と1匹がぽつんと残される。な、なにこの放置プレイ。

唐突に手持ち無沙汰になった俺を慰めるかのように、勇丸が鼻を腰へ軽く擦り付ける。

うう、すまんなあダメな主で。

頭をワシヤワシヤ搔いてやると、相棒は気持ち良さそうに目を細め『いつまでも撫でてくれ』——と。言葉にも態度にも出さないが、何となく俺がそう思ってるんだろかなと感じたので、撫で続けることにした。

19 浜鍋

やや肌寒い風が、俺が休んでいる屋内を通り過ぎる。

日も傾き、そろそろ夕暮れに差し掛かる時間帯。

誰が訪れる事も無く。自身も動こうとしない為、外から聞こえてくる木を打ち付ける音や、時折響く人々や鬼、鳥などの獣の声だけが俺の周りを支配していた。

今回の出来事——戦闘を振り返る。

戦果は快勝。

苦戦する場面もなく、体力面での時間制限は問題だが、中ランクの鬼達相手にこの出来栄えならば、ギリギリ及第点の自己評価を付けても良いだろう。

しかし、改善点が多々出てきたのは、喜ぶべきか悲しむべきか。

【ハルクフラッシュユ】

数十体の天使と、1体のゾンビによる軍団。

俺の体力が増えたのなら、いずれ天使達は三桁の大台にまで増やす事が出来るだろう。

けれど、元の数値が2/2である天使達の攻撃は、恐らく3/3く5/5である鬼達の進行を止めるのにも一苦勞。

切り札であつた30/30以上の修正を受けていた筈のゾンビは、どのような制約が掛かつたのか、その馬鹿げた数値が発揮されているとは思えない状況を一角との戦闘で示唆していた。

つまり、仮に一騎当千や国士無双級のエース……この世界を基準に考えるのなら、絡め手が主体なスキマや亡霊姫といった方々は除外するとしても、鬼の四天王やスカレット姉妹、フラワーマスターに、神の残り火を使う鳥さんなどが出張ってきた場合への対抗が難しい。

……神奈子さんが味方で良かった。最悪泣き付いて助けてもらうのも……あく……壮絶にカツコ悪い展開なので、最終手段の1つに入れておく事にしなければ。

選択肢は無いよりあつた方が良いだろう。絶対回避したい事態ではあるが、で、対抗策を考える事にする。

雨だれ石を穿つ作戦はやや効力に難有り。よって、小出しに連続でダメージを与える線ではなく、1発に威力を集中させる……先【死の門の悪魔】などの、大体5/5

以上を指す場合が多い〔ファッティ〕と呼ばれる大型クリーチャーが望ましい。

よつて、1枚で多大な効果を發揮するカードを使うのが無難、ということなのかもしれない。

と、前方に誰かの気配を感じる。

どれ、と顔をそちらに向けてみれば——玄関に男が1人。

「おじさん……」

「……おう」

体の所々が濡れ、水浴び……な訳はないから、恐らく漁から帰ってきたのだろう。手には何も持っていないようだが、乗っていた船にでも置いてきたのだろうか。

ただおじさんは、家を壊されている。現在鬼達が急遽建造しているとはいえ、思い入れがあるものであった筈だ。

俺の気持ち1つで鬼達を許し、この村への略奪を止めるように言い聞かせたが、村人達の……家を壊されたおじさん達の不満が消えた訳ではない。

『力のない者の宿命だ』とか言つてその手の考えを切り捨てても良いのだが、生憎それを行うには、親切にされ過ぎた。情の1つくらいは移つてしまう。

「……体は、もういいのか？」

「ええ、お陰様で。全快とまではいきませんが、普通に生活する分には何の支障もありま

せんよ」

「そうか……」

そう言つて、おじさんは言葉を切つた。

いや、何か言おうとして、それが口に出せないでいる様だ。

そのまま、俺達の間を風が通り過ぎる。

視線を泳がせ、何度か口を湿らせて。

そして、意を決したように、ぽつりぽつりと話し出した。

「……今更なのは分かつてる。言葉遣いも同じだ。謝つて済むとは思っていないが、言わせて欲しい。——済まなかつた。俺に出来る事なら何でもする」

済まなかつた、の部分で、玄関先の地面に頭を付けて、土下座を行つてきた。

参つた。

雰囲気からして予想はしていたけれど、おじさんからすると土下座するレベルの問題だつたらしい。

気にしていいないと村長に言つたばかりだつた故か、まだおじさんには伝わっていないようだ。

この村で一番良くしてくれた相手だつただけに、この変わり様は、中々に応えるものがある。

「……謝罪を受けます。ただ、私はあなた方と接していて、一度たりとも気分を害した事はありません。ですので、出来る限り今まで通りに接してくれる事。これが、私がおじさん——この村の方々に望む事です」

「九十九……兄ちゃんは……それでいいのか？」

「良いも何も、それを望んでいるんですよ。鬼退治とか雷を落とすとか色々やりましたが、これでも小心者でして。平伏されるよりは、手を手を取り合つて笑顔でいたいんです」

「……そうか……分かった。言うとおりにしよう」

何とか条件は飲んでくれた様で、渋々……というよりは『これで本当に良いのか？』といった様子で引き下がってくれた。

しばらくはギクシヤクした関係になるだろうが、このおじさんとは、また元通りの接し方に戻つて欲しいという願いがあつた。

真つ白い犬を連れた真つ白い男と、見るからに怪しい相手を自分の家に招き入れ、宴会の席では、俺と村人との架け橋を買つて出てくれた親切な人。

一度優しさを知つた分、そんな人から今後ずっと他人行儀にされた日には、俺の心にはまた一つ、消えない傷が残りそうだ。

なので、少しでもこの空気を払拭するべく、別の話題に切り替える。

「あく、おじさんは、漁の帰りですか？ 鬼とか居て大変だったでしょ」

「———そうだな、俺なんかあんまり怖いもんだから、お前の言ったとおり、すぐ漁に出ちまったよ」

こちらの意図を察してくれたようで、少し詰まりながらも返答をしてくれた。

「確かに。あいつらおつきいですからね。威圧感とかハンパないですよ」

「お陰で村長がみんなの代表という名の人身御供になって、お前の世話をする事になったんだぞ。あの鬼達が宴会やらかす中で。……とても生きた心地はしなかっただろうな」

「うっ、そうですか……。後でお礼言っておきます」

それは何ともバツの悪い役目を押し付けてしまった。

意図せずの結果とはいえ、俺の為に老骨に無理打ちながら、がんばってくれたのだ。

後でお礼の一つでもしておこう。

「———お礼と言えば、こっちもまだ言っただけな……。ありがとう、九十九。お前のお陰で、村の人間は全員無事だ。助かったよ」

そう言っつて、おじさんは潮風と土埃で汚れた顔を、笑顔で飾りながら向けてきた。

思えば、村長からは許しを請う言葉しか受けとっていなかった。

神が生きる時代から、日本人とは謝罪を第一にするものかと思いに耽ると同時、感謝

を言ってくれたおじさんに心が温かくなる。

過程はともあれ、誰かに感謝されるのは気分が良い。

今後はこのような場面に出会ったら、謝罪と同時に感謝を述べるように広めていこうと思う。

……状況を鑑みるに、少なくとも今回起こった状況下でそれをするのは、すつごく言い難いだろうけれど。

「そう言つて貰えて何よりです。がんばった甲斐がありました。今、おじさんの家とかその他壊れた諸々を鬼達に直させてますんで、何日か分かりませんが、しばらく待つていて下さい」

「鬼の手作りか……縁起が良いやら悪いやら——くくつ」
「ですかねえ……ぷつ」

「災害を擬人化したような相手が作る家に住む」というコンセプトが互いにツボに入つたようで、それぞれ忍び笑いから、声を荒げての笑いに変わる。

先程までの空気は嘘のように消え去り、今はただ馬鹿話に花を咲かせる男が2人——と一匹。

「そういえば、ちゃんとした紹介がまだでしたね。俺の事は言つたので……こいつは俺の友達——や、その他諸々を兼用している、勇丸つて言うんです。とつても頼りにな

る相棒ですよ」

傍らで顔を伏せていた勇丸に視線を向け、こいつがそうですよ、と示してみる。

そんな忠犬はその意図を組み、おじさんの方へ目を細めながら、軽く会釈をして、また顔を伏せた。

ちよつとドライな挨拶だが、元々あまり感情などを表現することの少ない奴だ。これくらいは愛嬌の内に入るだろう。

「ただの犬じゃねえとは思っていたが、賢いワンコなんだな。おつと、俺の名前は太郎。宜しくな、勇丸」

告げてから、勇丸の伏せられた頭を、ごつい手でわしやわしやと撫でる。

相棒はちよつと迷惑そうに鼻息を一つ吐くと、後はただされるがままに状況に身を任せた。

……つてか、これだけ一緒に居て、未だにおじさんの名前を尋ねていなかった事へ、自分自身に対して軽く驚いた。

転生前はそんな事無かった筈だが、こつちに來てからは気づかない内に、名前に対してはあまり執着しないんだろうか。

それとも東方世界で作品に出ていない方々への世界的な修正なんだろうか。まあ、細かい事は気にしないでおこう。

しかし、太郎か。

……ありきたりだよなあ、まさにモブその1の名前って感じじゃないか（かなり失礼です）。

「そういうえば、おじさんってさつきまで漁に行ってたんですよね。どうでしたか？」

名前を知った直後だが、名前で呼ぶのも照れ臭いので、おじさんで通す事に決めた。

それでもって、あの後おじさんは何をやっていたのかが気になって尋ねてみる。

『収穫量はどうかのよ、と』。

【稲妻】をぶっ放した張本人としては感心が大きいにある訳で。

これが成功していたら、上手くすれば簡単に大量の食材をゲット出来る方法が確立する。

ただ、生態系への影響が怖いってのもあるので、あまり多用出来るものではないのだけれど。

「おお、お前の言ったとおり、大小色々な魚が浮いててな。投網をすくう様に使ったのは初めてだったな。期待していいぞ。今夜は浜鍋だ！」

ニカツと海の男らしい笑顔を作り、心底嬉しそうに話してくれた。

喜んでもらえて何よりだと思う一方、作ってもらえる料理に若干の不安が過ぎる。

浜鍋。

確か海産の幸をこれでもかと大鍋に投入した具沢山の「味噌汁」を思い浮かべるのだが……………」

「浜鍋、ですか。どんな料理なんです？」

「おう、取ってきた魚を適当な大きさに切つて、それを大鍋でぎつと煮込んで食べるんだ」

「塩味ですか？」

「？ そりゃそうだろう。お前のところだと、他の調味料でも入れて食うのか？」

予感的中。

『何言つてんのお前』的に返答された内容に、思わず眉間に皺が寄る。

海産の塩味スープ。悪くは無いのだが、やっぱり数年前まで世界中の調味料が手に入る国で過ごしていた身分としては、それだけの味付けでは腹は膨れても心は満たされそうに無い。

思えば歓迎会と名ばかりの宴会では、酒は振舞つてもおつまみ——食べ物系は殆ど出していない。

というのも、宴会開始時に用意されていた料理が多すぎて、俺が準備しなくても充分な量が確保出来ていたからだ。

新しく大量に品を出して、他の食べ物を腐らせる気はなかつたので、何かお礼にと

思つて出したのが、浜辺では入手困難そうなキュウリの浅漬けとかそういうったものだっただけ。

(そういうえば味噌とか醤油とかは振舞つてなかつたもんなあ)

そうと決まれば即行動。

体力は………全快ではないが、大体は回復しただろうか。夜にでもなれば元通りになるだろうし。

これなら一角の要望に応えられるだろうかと目安を立てたところで、固まった体を解しながら立ち上がる。

「おじさん、料理なんです、俺に作らせてもらえませんか？」

「おいしい、主賓に宴会の準備をさせる訳にやあいかねえだろう」

それはそうなのだが、それを許してしまうとちよつと残念な未来が待っている、出来れば回避したい。

「料理作るのが趣味なんです。最近あまりやっていなくなつたんで、久々にたくさん腕をふるう機会なものですから、是非にと思ひまして」

「料理………ねえ………。そうまで言うなら良いけどよ。村全員が参加するんだ。昨日よりも少し増えるぞ？」

「あれ、昨日集まつたのが全員じゃないんですか？」

「山に狩に行つていた連中がいたからな。本来ならまだしばらく山に籠つて獵をするんだが、こんな事態になつただろ？ お前がぶつ倒れてからしばらくして、村長がそいつらを呼び戻す為に狼煙を上げてるんだ。夕暮れ前には戻ると思うぞ。八人、だったか。今回行つた奴らは」

「分かりました。——今回は今までに無いくらい大量に作らないといけないですからね。鬼的な意味で」

「………そうか、あいつらが居るのを忘れてた。やつぱり宴会は一緒にやる流れになるのか？ 申し訳ないんだが、こつちの様子次第じゃあ俺達は不参加つて形になるかもしれん」

「その場合は仕方ないですね。あんな魔窟の中で宴会をしたい、なんて思う方が稀ですし」

「すまんなあ兄ちゃん」

「すまなそうにするおじさんだったが、その気持ちは充分に分かるので、苦笑で返事をする。」

「この人達には次回により豪華な食事やらを用意して勘弁してもらおうと思う。」

「じゃあ、この辺りで一番大きな台所あったら貸して頂けますか？ 出来れば食材も」

「右隣の家が結構広かつた筈だから、話をつけておくぞ。後、食材は半分くらいは残して

おいてくれれば良いさ。どうせ村の全員で一生懸命食べても、食べ切れずに腐らせちゃうしな」

保存用にも限界あるしな、と。

そう締めくくって、おじさんは隣の家へと向かって行った。

鬼の宴会を取り仕切る羽目になるとは思ってもみなかったが、あれだけの大酒飲みなのだ。きつと食べる量だって凄い筈。

恐らく今までに無いくらいジャン袋を多用する事態になるだろうと予想しながら、俺と勇丸もおじさんの後へと続いて出て行った。

20 歩み寄る気持ち

借りた大鍋に、おじさん達から貰った海産物をごそつと入れる。

獲れた品物はカニ、サケ、つぶ貝、ウニなど。中々の高級食材に俺の期待値は鰻登りだ。

野菜も思ったよりたくさんあって、物足りないやつはジャン袋で補填。

50人分くらいは一気に作れるのではないかと思えるほどの大鍋でそれらは茹で、煮られ、徐々に完成度を高めてゆく。

そこへ、酒、昆布と、鰹節を少々……いや大量？ と、日本が生んだ万能醗酵物の1つである味噌を加え、さつとひと煮立ちさせたら、出来上がり。

多分、後数十分もしないうちに、料理は完成するだろう。

(ああ、この味噌と磯の香りのコラボが大和魂を揺さ振るぜ……)

やはり日本男児たるもの、米、味噌、魚に醤油は外せないのではないか。

いやいやそれを上げるのなら沢庵だって……：……：……：ううむ、上げてみればきりが無いな。

そんな事を思いつつ、木製のお玉で救い上げた浜鍋を味見しながら、魂に刻まれているであろう日本人としての心が、味噌に共振している気がする。

だから、周りで五月蠅くしている一角やその仲間達。

そして、村の方々が今か今かと首を長くしながらこちらに向ける視線も理解出来るというもの。

しかし。

(空気重っ！)

俺を取り囲むように、けれど決定的な溝がある、この状況。

初めは、本当に鬼達と俺と勇丸オソリーの宴会だった筈なのだ。

それが浜鍋を作っている際に漂う匂いに引かれたのか、続々と俺の周りを囲うように見守る村人達の輪が出来上がり——けれど鬼と混ざる事は無く。

時折チラチラと鬼達に何か言いたげな目線を向ける村人に、何故か俺までバツの悪い心境に陥りそうになる。

あまりに居心地が悪いもんだから、料理へ没頭する事で現実逃避をした。

そうしていたら、いつの間にか人間 v s 鬼の構図で陣営が分かれ、俺はそのソードラ

インとでも呼ぶべき位置に、どつちに付く事もなく立ち往生するハメになっていて……。

方や村長率いる村人集。

方や一角率いる鬼軍団。

睨みあっている訳ではないのだが、どう表現したものか。あの自由奔放な鬼の一角ですら、周りと一緒に、互いに『ここにいたらまずいんだろうな』といった空気を醸し出していた。

(なに、この嫌な上司と来る飲み会的な空気)

そも宴会をする場所をココにしたのが最大の原因なのではないかと自分の安直さを後悔し、なら解決しなきゃいけないのは俺なんじゃ……と嫌な結論に達した。

本当、嫌な結論だ。忘れてしまおうか。

など思ってみても、このギスギスとした空気が和らぐ事も無く。

これでは折角の浜鍋の味が台無しになってしまう。

食事は、調理側の努力が半分、食べる側の努力が半分。なんて何処かのドラマで言っていたのを思い出す。

どんなに美味しいものでも気分最悪では完全に楽しめるものではないし、気分だけでも料理が美味くなる訳でもない。

泣いている人を食事一つで元気にしてあげたり、心の持ちようでクソ不味い食事も高の一品に変わる場合もあるらしいが、一々そんな屁理屈なんて考えていられない。

都合の良い言葉だが、ケース・バイ・ケースを今回は適応しよう。

ということ、今の俺の前には独身男自慢の一品、男の浜鍋が出来上がりつつある訳だが、食べる側の雰囲気が悪くは、どちらにとつても良い結果にはならないだろう。

そして、解決出来るのだとしたら、村長か一角か——人側、妖怪側のトップと、完全な第3者である俺の3名以外に居ないだろう。

だが、一角は動かさず、村長は尻込みし、どちらともこの場を解決する気配はない。

……ガラじゃない。

今しようとしているのは、人と妖怪、双方の和解——の助力。

力を示すでも、知識をひけらかす場でもない。

敵を負かした時の決め台詞とか、その手の類だったのなら、言いたい台詞も使ってみたいポーズも湧き水のように思いつくというのに、こういつた出来事とは とんと無縁だった為、どうやって仲裁に入れば良いのか分からない。

でも、やる。

経験も無い。自信も無い。

あるのはただ “どうにかしない” という意思のみ。

鉄は熱いうちに打て、だ。イザコザは時間が経てば経つほど拗れるだけ。

だったら、双方共に決定的な、決め付けとも言える考えが定着する前に畳み掛ける。

このままでは、俺が何もしなくとも、悲惨な結末に向かつていくであろう事は想像に難くない。

「——皆さん、聞いて下さい」

口火を切る。

こういうものは、気持ちが大事。

何を言おうか頭の中で考えに考えた挙句、口にしない、というような真似はしない。

ポツポツと、情けなくても、子供が積み木で幼稚な建造物を作り上げるかのように形にしていけば、きっと分かってもらえるだろう——という願望に乗せて。

「みんな、それぞれ思うところはあつてしよう。人間なんか、鬼なんか——と。

それを忘れるとは言いません。我慢しろとも言いません。

ただ、その思いを黙って胸の奥に潜ませて、相手を騙す、裏切るといった行いは止めて下さい。

村人の皆さん。鬼達は、決して嘘を言いません。なので、話して下さい。嫌な事があるなら嫌と。助けて欲しい事があるのなら助けてと。

そして、感謝する事があつたのなら、ありがとうと。はっきりと感謝の言葉を言つて

下さい。

相手は鬼です。妖怪のまとめ役です。鬼は——少なくともココにいる一角達は、もうこの村を襲つたり、危害を加えたりしません。

ですので、話してみして下さい。どのような形であれ、こちらに害を為す事無く、きつと彼らは応えてくれるでしょう」

一息。

「鬼の皆さん。人間は弱い生き物です。……ある国の大名——支配者の言葉で、こんながありました。

『飯が食えれば、尊厳などなくとも人は生きられる。尊厳があれば、飯が食えなくても人は耐えられる。——だが、両方無くなると、人は「何にでもなる」と。それら条件が達成された時……私達人間は、容易く禁忌の向こう側へと足を踏み出します。

愛した者を、信念を、時には——己の命すらも対価にして。

人間を追い詰めすぎないで下さい。

もし、それをやり過ぎてしまったのなら——あなた達は、あなた達が最も嫌うもので武装した人間を相手にしなければならなくなります」

本当に、ガラじゃない。

なんでこんな取つてつけたような、辛気臭い話をしているんだろうか。

ここは酒の席だ。宴の中心だ。人外魔境の酒池肉林だ。

どんちゃん騒いで楽しむ場ではなかったか。

——いや、だからこそ、か。

だからこそ、俺は言わなければならない。

恐らくこの機を逃したのなら、少なくとも今この場所では、人と妖怪を交えて話をする場など訪れるとは思えない。

人だけと話しても、妖怪とだけ話しても、俺が目指すものには到達しない。

だからこそ、今。

人魔が混合する、この宴をおいて他にはない。

「簡単にまとめると………『持ちつ持たれつ』を指してみて下さい。

そしてどうしても駄目だった場合は——また、その時に考えてみませんか。少なくとも、まだ何も相手の事を理解していないのに切り捨てるには、とても勿体無い関係だと思うのです。

ですので、悪い所ではなく、相手の良い所を見つけてみませんか。

もう少し具体的な案を出してみるのなら………。

鬼の皆さん。珍しい物や食材を人間に預けてみませんか。きっと、あの手この手で加工や細工をして、素晴らしい変化を与えてくれる筈です。服や装飾品が綺麗になった

り、料理が美味しくなったりして、きつと、もつと楽しい生涯になるでしょう。

村の皆さん。自分達の技術を彼らに使ってやってみませんか。きつと人間からは想像も出来ない発想が生まれてくる筈です。その受けた恩恵を、彼らに返してやる事が出来たのなら、さらに大きな利益になって返って来る筈です」

相手を理解しろ。

自分ではそう言っているつもりなのだが、はたしてちゃんと言葉に出来ているだろうか。

何とかどもらずに、それなりの形で口には出しているつもりだが、頭の中は今でも真っ白。

話した台詞は半分も覚えちゃいないし、途中から、『相手を利用してやれ』なんて方向にまで行っているような気もしてくる。

(ど、どうしよう。『今のはなしで』とか言って訂正入れてみようか……………)

自分で話した内用の所々が虫食いのように記憶から消えているので、いつそ全部無かった事にしてまた始めからやりなおしたほうが良いだろうか。

誤解されて関係が拗れるよりは断然良いのだが、場の空気に言い出し辛い事この上ない。

……………と、テンパっている間に動きがあった。

俺の左右。

鬼側からは一角が、村人側からは村長——ではなく、おじさんが、それぞれ中央に歩み出す。

互いに顔を見ながら、まるでこれからコロツセオで決闘でも行うかのように距離を詰めていく。

鬼達も、村人達も、それぞれ一角やおじさんと同じ表情をしており、何か覚悟を胸に秘めて事へ当たるようだ。

切欠は作った。

後は、野となれ山となれ。

——この出来事は、あくまで俺「だけ」が望んだ事。手と手を取り合い笑いあつて過ごせるのならそれが一番だとは思うが、だからといってそれを強制する事態は、いずれ破綻する。

最も望ましいのは、どちらも自発的に俺の言った状態を目指してくれる事。

各々が自分で考え、行動し、責任を負わないといけない。

だから、この一步は大変大事なものとなる。

何としても成功させるべく……、最悪、関係が罅割れたものになつたとしても、殺生沙汰にまで到達する事態は、切欠を生み出した者として避けなければならぬと考え

る。

それ系の、捕縛やら無力化やらのカードを思い浮かべながら、対話の成り行きを見守るとして。

「……………俺はお前らが嫌いだ」

開口一番。

一角に対して会心の一撃とも思える挑戦状を叩き付けたおじさんに、俺はどんな反応をすれば良いのやら。

「奇遇だな、おいらもお前らが嫌いだ」

一角も一角で、売り言葉に買い言葉なのか、とてもステキなお言葉でいらっしやる。

「勝手に人の土地に踏み込んできて、俺達を襲って、攫って、食って飲んでまた襲って。

こんなに我が侷な奴らは他の妖怪でも居ない」

「勝手に自分の土地だと決め付けて、自分より弱い動物を狩って、食って、増え続けて。

こんな独り善がりの種族は他に見た事が無い」

どっちも一歩も引かず、抱えていたものを吐き出すかのように相手にぶつけている。

「力があるからつて偉ぶりがつて。何も出来ずにただ為されるがままでいるしかない奴らなんかこれっぽっちも気にしちやいない」

「弱いことを理由に何でもかんでも好き放題やりやつて。木を切つて、空き放題猫を

して、妖怪を殺して。しかも自重する気配すらねえじゃねえか」

それぞれの主張を宣言しつつ、相手の宣言を胸に刻みながら。

「だから俺（おいら）達はお前の事が嫌いだ」

一刀両断に言い切ってくれやがりましたよこの方達は。

さて、次は乱闘だろうか。いやパワーの差があり過ぎるから虐殺か。

まずは勇丸で牽制しつつ、使うカードは何にしようかなあ、と思い描いていると。

一角とおじさんは、互いに手を取り合い、がっしりと堅い握手をしていた。……………あれ？

ちよつと状況が飲み込めない。

そのまま不適に笑みを浮かべたかと思つたら高笑い……………つてこつち見たあ!?

「九十九（兄ちゃん）!!」

「はいー!」

「酒（飯）だ!」

「……………はい?」

……………あの二人の間で一体何があつたのだろう。

ちよつと怖い質問が質してみようかしら。

「だから酒だよ、酒。こんな美味そうなものまで用意して酒が無いってんじや、画竜点睛

を欠くを体言しているもんだぜ」

その四問文字熟語は、今の時代的にはアリなんだろうか。

「もう良いんだ兄ちゃん。怨み辛みは言った。後は互いにそれを解決するよう努力するだけだ。ここまで最低な関係なんだ。後は上を目指すだけ。楽なもんさ」

それに、とおじさんは言葉が続ける。

俺が切欠を作った事で、このまま敵対関係が続けるのは好ましくないと思ったそう
だ。

というか、そもそも今後の事で鬼と対話する為に、この場所へ村人全員が集まってき
たのだとか。

言われてみれば幾ら良い匂いを漂わせているとはいえ、危険極まりないこの地帯に、
全員が集合するという事態は考えられない。

おじさんの台詞には村の総意が籠められていて、今後の対応として、出来るだけ良い
方向に——もっと卑下するなら、悪くならないよう交渉をしようとしていたのだそう
だ。

どちらにしろ話し合う気では居たらしいのだが、どうやって一声掛けようかと悩んで
いるうちに、どんどん空気が悪くなっていつて、ますます言い出しづらくなっていって
拳句に、俺の語りで決意を固めたのだからしい。

……うーん、元から話し合う気でいたのならもつと早く行動して欲しかったけれど、俺だつてそんな立場だったのならおうそれと交渉なんて出来る訳がないと思うので、あまり強くは言えない。

で、鬼側は鬼側で今後の対応を決めていたらしく、余程変な話でなければ応えようと思つていたのでか。

要約すると『一度命を失つたようなものだが、信念まで失つた覚えは無い。だから、それから外れなければ、話し合いに応じよう』という事らしい。

どっちもそれなりの覚悟を以つてこの場に集まつていたよう——まだ貢献少しは出来たから良いようなものの、危うくまた俺の独り善がりになるところだった。

兎も角、流れは円満に終わつて、その後の打ち上げに移行しようとしている。

人妖の相互が相手を理解しようと努力する姿勢を見せて、今までの理を崩したことに、新たな展開が見えてきそうだ。

ならば、今は——今宵は、その第一歩。

人外魔境と化したこの宴に相応しく、混沌と、されど嬉々とした状況を作り上げよう。二人がそう言うなら私——俺としても嬉しいかぎりです。……よつしや、今からぶつ倒れるまで出しまくるぞー！」

心機一転。自身の気持ちを切り替えて、真面目モードから宴会モードへと移行させ

た。

皆も何を出すのか具体的に言わなくても分かってくれたようで、周りからは歓喜の聲が響き渡る。

特に鬼側。もう地震でも起きてるんじゃないかと思えるほどの地響きとなつて周りと俺の体を揺らす。

勇丸なんか、器用に耳をぺたんと倒している。俺もそれやりたいなあ。耳いてえッス。

「じゃあまずは、料理をちやつちやと配つちやいませうかね。おらガキ共く！ お前らは配膳係りだー！」

村人達の後ろ。大人達の影に居た子供達に声を掛ける。

「な、何かお兄ちゃん前と喋り方違う?!」

「あんなに乱暴じゃなかったよね？」

「ちよつと………怖い………」

「これが俺の素だあー！ もう色々取り繕うのも面倒になったのよ！ つてことでキリキリ働けえい！」

「うわーん！ お兄ちゃんが変わつちやつたー！」

ぐはははは！ 一仕事終えて心が磨り減ってるから、色々と気を抜ける所は抜いてお

かないと持たないんだぜ！

何だかんだ言いながらテキパキと働く子供達を見ながら、今後の展開を考える。

恐らく体力の限界に挑戦するであろう、この宴。

鬼が全部で20数人。村人達が4〜50人位。

鬼を計算に入れて作らなければならぬので、食べ物は兎も角、酒はかなりの人が飲める量を作っておきたい。

具体的にはビアタンク200本。

……嫌な数だ。あまりに量が多すぎて絶望しか思い浮かばない。100に訂正しておこう。

しかし、既にある食材を使って浜鍋を作っておいて良かった。

これなら食事の方はバカスカ出さなくて済みそうだ。逆は湯水の如く出さなければならぬ。

おお、おつかかなびつくり鬼達に渡して回っている子供達の反応も面白いなあ。

鬼も『食つちまうぞー』とか言ってからかっている。……それは洒落にならんぞおまいらの種族的に。

「お兄ちゃん、全員に配り終わったよ」

村の子供の1人がそう教えてくれた。

どかり、と全員が胡坐をかき、それぞれの前には浜鍋がよそわれたお椀が置かれていて——ああ、酒がまだだったか。

「今更だけど、一角よ」

「何だ？」

鬼側陣營の中央に、再び戻っていた一角へ呼び掛ける。

「鬼って、酒は自前のか持っていないのか？」

「あるぞ。酒虫って言ってるな。水を酒に変えてくれる奴を、瓶や瓢箪の中に入れておくんだ」

「じゃあ、酒出すのも結構大変だから、初めはそれ使って酒盛りやってく」

「駄目だ」

「……………理由は？」

「飽きたんだよ。あんなのもう唾と一緒に。お前の酒の味を知った後じゃあ、特にな」

何でも、酒虫によって味は色々あるそうだが、希少な為にとつかえひつかえ試す事も出来ないんだそうだ。

で、10年に1回くらいの頻度で酒虫が手に入るのを、楽しみにしているのとか。

「そうなのか……………ちよつと照れるな」

俺自身が精製した訳ではないが、居た時代の物を褒められて嬉しくなる。

よっしや、どうせなら前回のと違う奴でも出してやるべ!

「つてことで、再びおいでませ。ジャン袋様〜」

再度俺の手に握られるジャン袋。といっても浜鍋を作る時から出していたので、足元に置いてあったのをそれらしく言つて胸元まで持ち上げただけである。気分が大事なよね、こういうものは。

何処も異常な箇所は見られず、1度破れていたなんて微塵も感じさせない状態だ。

中に手をいれ、思い描く。

前回は万寿だったか。

今回は、どうせなら名前もちよつと掛けて、十四代『大吟醸』双虹としておこう。

メロンのような香りに独特の甘み。そして万寿と同じように、あつという間に口の中から消えてなくなる後味スッキリ過ぎな素晴らしい酒だ。

鬼と人。二つの種族の間に掛かる、互いの理解の意味を込めて双虹。

酒のレパートリーなど大して持つていなかったが、丁度良い語呂合わせ的な名前の酒があつたものである。

……あれ、俺はこの手の酒で何か失敗したような……まあいいか。

(いつかは『鬼ころし』とか飲ましてやるかねえ)

俺が知るだけでも4種類以上ある酒、鬼ころし。

本来は鬼をも殺すような悪酒——つまり、不味い酒の代名詞として使われていた言葉なのだそうだが、ある蔵元がそれを逆手に取って販売した所、大好評。それに肖ろうとした同業者が挙つて……といった流れだったか。上司の受け売りだが。

コンビニで売られている紙パックの粗悪品から（これはこれで良い味だしてると思う）、しつかりと木箱と高級和紙に納められた特級品まで多種多様に渡つて世に送り出されているそのの、どれを飲ましてやろうかと内心で笑みを浮かべながら、双虹の詰まったビアタンクを取り出していく。

それを、子供達は重量の関係から2人1組になつて配つて回る。

鬼達へは1人1つ。人間へは10人位の前に立つ。

『やつぱり鬼は量がネックだよなあ』と思いながら、全員にタンクが行き渡り、鬼がタンクの蓋を。村人は持参していた湯飲みに並々と注がれた酒を確認してから、自分も瓶で出しておいた双虹を掲げる。

「それでは——」

さつと皆が俺と同じようにタンクや湯飲みを掲げ、

「——新しい出会いに、乾杯!!」

乾杯、と言葉は続けてくれなかつたが、各々『おお!』だとか気合の掛け声だとかで応えてくれた。

野球の祝勝祝いをやっているようだ、と割れんばかりの歓声の中で思いながら、手にした双虹を一口。

—— 美味しい。これなら何杯だって飲めそうだ。

そう思いながら、足元にいる勇丸へと酒を進める。

前に置かれた茶碗に注いでやると、静かに顔を傾けてペロペロと飲み始めた。

それがしばらく続き、ふと、顔を上げて、瞼を閉じる。

まるで酒の味を噛み締めるかのような印象に、犬にも酒の味が分かるものなのかと思いを尋ねてみると、『美味しい不味の判断は出来ないが、また飲みたくなる味』という返答が来た。

犬に酒つてのは本当はいけなかった筈だが、いざとなったらカードに戻すなり再生やライフを回復させるなりして対処しようと思う（注：犬はアルコールが分解出来ないのも毒物として体に残るようです。絶対に与えないで下さい）。

（しかし、常温の酒つてのも飽きてきたな）

ラッパではなく湯飲みに酒を移しながら、新しい方面への探究心が湧き出てくる。

これはこれで良いとは思うのだが、キンキンに冷やしたものか、熱燗にして飲みたいと思うのは、日本人ならではの感覚なのだろうか。

中国だか韓国では、嘘かホントか、常温ビールが主流なのだそうだ。理由は腹を壊す

から。

(ううん、否定する気は無いが、俺はノーサンキューだなあ)

なんてぼけつと考えていると、視界の隅には、この状況が面白くなさそうな子供達。

酒によって馬鹿になるのは大人だけな為、必然、彼らは取り残された形になっている。

1人だけでは無いにしろ、普段は自分達によく構ってくれる大人達が皆自分達を無視、もしくは軽視して自分勝手に騒いでいるのは、何とも言い難い気分になっているだろう。

(たはは、仕方ないねえ)

見てしまったからには放っておけない。

酒瓶を置き、勇丸と一緒に彼らの元へと向かう。

その気持ちは、よく分かるから。

俺だって、子供の頃、親戚が一同に会する場所でハブられた事があった。

当時は大人だけがクソ不味い無色や黄色の液体をガブガブ飲みながら、煙たいだけの紙の筒に火をつけ、口から白い煙を吐く。

そうしながら話し合っているだけで笑いあっているあの場は、何が楽しいのか全く理解出来なかった。

そんな事をしなくても、一緒に遊ぶだけで充分に笑い合い、楽しめるのに、と。

そんな嫌っていた筈の大人達の行為の方が、今の俺は楽しくなっているのは、少し寂しいものを感じながら、彼らに声を掛ける。

「詰まらなそうだな。何かして遊ぶか？」

「え、本当!？」

子供の1人が、まるで今までのしよげていた雰囲気を一気に吹き飛ばして表情を一転させた。

陳腐な表現だが、花の咲いた様な顔だな、と嬉しそうにしているこの子供達を見ながら、そう思う。

「しっかし、こんなに暗いと体を動かす系は危ないしなあ」

「じゃあ、手遊びしましょうよ! 私、綾取りが得意なの!」

「それよりも、カゴメカゴメしようぜ! あれなら暗くても出来るよ!」

「暗いからこそ鬼ごっこでしょ!」

だから動き回るのは危ないって言ったやん。目が届きませんよ、それやられると。

わいのわいのと騒ぐ子供達を宥めながら考案していると、ふと、鬼達の姿が目飛び込んでくる。

鬼↓妖怪↓異様なもの↓非現実↓別次元、という図式が俺の脳内に一瞬で成立して、ある結論に達した。

(そうか、遊びつてのは、体を動かすだけじゃないもんな) 体を動かさない遊び。

しりとりや山手線ゲームといった類ではなく、もつと別の、俺の時代では普通の遊び。「よし、じゃあ今から、俺が面白い話を聞かせてやろう」

それは、物語を知る事。

ぶつちやけアニメや漫画。趣味の欄に記入すると映画鑑賞と言える類の行為。

ただこの面白さを分かってくれていないようで、子供達はぶーぶーと不満を言ってきた。

ふふん。アニヲタを舐めるんじゃないぞガキ共。その手の知識なら腐るほど知っているのだ。

昔小学校で、国語の音読をした際に先生から『気持ちが良いと伝わってくる表現ですね』と褒められたのは伊達じゃないぜ！

きつとカチカチ山のタヌキが背中を燃やされている時の声、とか入れたのが良かったんだと思う。

「まあまあ。じゃあーつだけお話するから、それが面白くなかったら綾取りなりカゴメカゴメでもやろう。何事も好き嫌いは良くない。少なくとも一度は体験してから物事を判断しなさい」

口調が先生っぽくなったのは、構図がそれっぽいやからと脳内で変換されているからだろうか。

素直に『はい』と返事をしてくれた事に俺は満足げにうんうんと頷きながら、子供達を自分の正面を囲むように座らせて、話し始めた。

「何が良いか……」。よし、題名は『こいしのドキドキ（がぶり）』ぎいつ!!」

タイトルを言い終える前に、俺の尻に勇丸が牙を立てた。

何？ いけない気がしたので止めたかった？ 囁きを感じた？

そ、そうか。囁きなら仕方ないな。……おーいてえ。歯型が残りそうだ（汗

「お兄ちゃん、どうしたの？」

「気にするな。ちよつと天罰を受けただけだ」

痛む尻を摩りながら、悪乗りも程々にせねばと、改めて子供達に向き直る。

「そうさなあ……まずは長編は避けて短編の、今の子どもでも分かるような……鬼とか出てくるのは今はあれだし……」。よし、では俺の名前と似てる奴で」

子供の昔話といえば、国語の教科書然り、NHK日本昔話然り。

ネタは豊富にあるのだ。

どうせならためになる様な話が良い。

「おほんつ。昔々……じゃねえな。ありや江戸時代の話だったか。えー……。ある

ところに、一休さんという小さな子坊主——神職の者がおりました——」

まあ、多少の時代背景は前後しても大丈夫だろう。

そんな事を考えつつ、大人達の笑い声をBGMにしながら、人魔両方での団欒という他に類を見ない宴会の熱は高まっていった。

2 1 太郎の代わりに

草木も眠る丑三つ時……だと思ふ。

時計なんて無いので大体の感覚で今まで過ごしてきたが、時間の分からなかった初めの頃は何故だか不安に駆られたものも、たった二年程度だが、遠い昔と感じられる。

人間、無ければ無いで、どうにかなるものである。

三々四話程度の日本昔話劇場を終え、おねむになつた子供達を家へと寝かしつけてから、俺は宴会へと戻っていつて。

彼らの耳を傾ける様子は、話しているこつちとしても気持ちのいいもので、思わず身振り手振りの大リアクションになりながら話していた。

(花咲じいさんなんて、勇丸との合同演技かっくらいの状況だったしなあ)

俺による、意地悪いじいさん&正直じいさんの一人二役だったが、我ながら良い演技していたと思ふ。

若干の疲れが心地良く、宴の場へと目をやれば、人と妖、それぞれがもはや区別無く入り乱れて話に花を咲かせている。

鬼の自慢話を感じしながら聞く輪もあれば、人間の苦難に立ち向かう姿勢に心を打たれる鬼もいた。

まずは互いの境遇や生き様などを酒の肴にしているようだ。

で、俺も誰か知ってる奴の辺りで飲もうかと思つたら。

「おい、九十九ー。こつちだこつちー」

「兄ちゃん、こつちこいよー」

といった感じで一角とおじさんに合流。

あの後からずっと二人は飲み合っていたらしい。

で、そこに俺も混ざって、勇丸と合わせて四人でワイワイと騒いでしばらくしたら

……。

「何だ！ 兄ちゃんまだ女を知らんのか！」

「ぐはははは！ 鬼を負かした男が経験の1つも無いだあ、面白い世の中になったじゃ

ねえか！」

「うっさい！ こちとら相手を見つけるのにも一苦勞だつづの！ フタ舐めんなゴ

ルア！」

酒も入って良い感じに回って来て、馬鹿話にも熱が入ってくる。

ただ、女性関係の話を俺に振るのは勘弁してほしかった。

お陰でフラグを一本押し折ってきた時の記憶まで蘇って来てしまう。

「俺だって……俺だってなあ………つい最近ほつぺたにちゅーして貰ったつてのになあ………見た目が犯罪だけど超美人なんだぞ………うう、ぐすつ」

「(まさか頬に接吻程度しか経験が無いってことなのか………だとしたら………——すまねえ、勇丸。そう睨まんでくれ)お、おい兄ちゃん。その、何だ。悪かった。俺が悪かったから、もうその事は忘れそう、な？」

「(おいおい何だこの落ち込み様は………洒落にならん影が背中に煤けて見えるぞ………)おいらも悪かった。九十九、飲め。で、気分を変えよう。なあに、おいら達を負かした奴だ。女なんて、これから沢山言い寄ってくる『筈』だ！」

「ぐすつ、ぐすつ………うう、ありがとう………」

そう言つて、注いで貰った酒を流し込む。

何だか二人の言葉に哀れみの類が見え隠れしているような印象を受けたのだが、分かってくれたのなら嬉しいので素直に喜んでおく事にする。

そして、それからまた会話がしばらく続き、酒の肴を出したり追加のビアタンクを増量したりしているうちに、この村に鬼が住む、という話に移っていった。

俺が来るまでにある程度はまとまって話をしていたようで、大体の概要は既に決まっているようだった。

「で、ここに住居を構えようかと思うけれど、流石に村に住み着くのは色々と問題があるから、何処か別の場所が良い、と」

「そうなんだ。ココは元々人間の村。そこに妖怪のおいら達が住み着いちゃあ、他の人間なんて絶対に寄ってこない。それこそ、帝の軍隊とかくらいしか、な」

「それじゃあ俺達人間とも折り合いが悪いってんで、遠すぎず近すぎず、良さそうな場所に家を建てようって考えている訳よ」

当然と言えば当然だ。

鬼と仲良くする、という目標は掲げたが、だからといって今まで築き上げたこの村以外の人間達との交流を途絶する訳ではない。

人は今までの繋がりを綺麗サツパリ切り捨てられる程強い生き物ではないし、そうする必要が迫ってきている事態でもない。

よって、先程言った条件の住処を辺りの地形を考慮しながら検討するのだが……。

「北は一面海の沿岸。西東は平地だけど村との交流があつて人目があり、南は森林というより山岳地帯で、岩肌が多くて隠れ難い、と」

「参った。はやくも手詰まりだな」

がははは、と豪快に一角が笑う。

諦めるの早えよ。とも思ったが、単に状況がそれ以上の思考を許さないだけの事。

正攻法で前後左右はダメだとしたら、こう、裏技的な何かは無いものだろうか。

(ここっつて東方プロジェクトだったよな……。だったら結界の一つや二つ、どうにか出来ないもんか)

現実と幻想郷を分ける結界、博麗大結界。

もはや語るまでも無いその結界を、劣化版でも良いからココら辺に作れないものだろうか。

「なあ、一角」

「ん？」

「結界とか作って、その中に閉じ籠れんの？」

「そりや無理だ。ありやあ、よっぽど力のある妖怪がやるかしないと、精々が視界をぼやけさせる程度だな。しかも、それにしたって俺達が住む場所全体に張るとなっちゃあ、今ココに居るおいら達全員の力で何とかって位だ。穴でも掘って隠れていた方がマシだな」

第一専門外だ。と締め括り、鬼のリーダーは断言した。

そーういや大結界作る時にゆかり人も苦勞したっつてたしなあ。

規模が小さいからっておいそれと出来るものでもないのか。

……ん？ 穴でも掘って……？

「一角。最後のところ、もう一回言って」

「おいら達は結界に関する事は専門外」

「その少し前」

「……穴でも掘って隠れていた方がマシ？」

途端、俺は一角の両肩にガシツと手を置いた。

「ナイスだ一角。そうだ。その案で行こう。それなら地震やら隕石でも落ちてこない限りはまず大丈夫な筈だ！」

「ないす？ よく分からんが、何か案が見つかったのか？」

「その通り！ 一角よ、鬼つてのは地面の中でも生きていけるか？」

「おいおい、生き埋めは流石に応えるぞ。まさか本当に穴でも掘ってそこに埋める気なのか？」

「すまん、言葉が足りなかった。洞窟とか、そういった場所での生活には不満ってあるか？」

「別に無いな。あまり狭いと嫌だが、多少なら空気が淀んでいようが湿気っていようが気にならんぞ」

問題は無し、と。

後は実際出来るかどうか試してみるのみ、だな。

「よっしゃー、お前らついて来ーい」

ふらつく足元に力を入れて、狂った平衡感覚を楽しみながら、宴会の輪から離れていく。

付き添う勇丸が心配そうに横へ並ぶ。

それに釣られるように、何だ何だと言いながら、一角とおじさんは俺の後を着いて来た。

で、村の外。

率いているメンバーの若干違う桃太郎になりながら、人気の無い大岩の前まで移動してきた。

何処にもであるような場所で、これといったものは、先程言った岩くらい。

「おーい九十九。ここに何があるってんだ？」

「そうだけ兄ちゃん。小便なら一人で行ってくれよー」

「ふっふっふー、そんな事を言えるのは今のうちだぜえ〜」

いつもならば、他人に披露する時には事前に試してからにするのだが、今回は別に慎

重を期する場面でもないし酒も入っているしで、何の根拠もなく言いたい放題である。
(選択カードは【土地】。ものは……青寄りで行ってみるかな)

既にカードを使つてから、もう一日以上は経っている筈。

昨日はこの時間帯に後ろの一角達と戦つていたなんて嘘のようだ。

そう思いながら、今まで一度しか使つたことの無い【土地】カードを施行する。

「召喚！【水没した地下墓地】！」

『水没した地下墓地』

土地と呼ばれる部類の中で『基本地形』と『特殊地形』の2つに部類されるものの、
者。青か黒のマナのどちらかを生み出す効果を持つ。

事前に【島】か【沼】のどちらかを召喚していなければ、マナを生み出す動作がワン
テンポ（一ターン）遅れてしまうが、それを込みにしても、その汎用性の高さには一目
置かれるものがある。

『基本地形』

MTGには6種の属性が存在し、それぞれ、白・緑・赤・黒・青と、そのどれにでも対応する無がある。

そして無を除く5色には、そのエネルギー元となるマナを生み出す基本である土地が存在している。

白は『平地』、緑は『森』、赤は『山』、黒は『沼』、青は『島』となっている。『島なら全部生み出せるんじゃない？』なんて思っただけじゃない。

MTGにおいてゲームの基本中の基本となるカードである為、様々な絵師達によって、同じく様々な絵が描かれている。独特の世界観を表したものから、一枚の額に入れても違和感の無い荘厳なものまで多種多様。一度見ていただきたいと思う。

『特殊地形』

上記の平地、森、山、沼、島以外の土地カード全てを指す。それだけ。基本地形でない土地は、特殊地形である。

過去に【土地】カードを使用したのは一度だけ。

この地に来てから初めての夜。完全孤立無援の野宿を慣行する為、【隠れ家】というカードを使った。

今思えば消費する体力が全く無かった事にもっと注意を向けておけば良かったと後悔しながら、今日の前に広がっている光景に、満足げに頷く。

そこには、ぽっかりと空いた穴が一つ。

牛車でも通れそうな大きさの、何処のボスを倒しに行くんですかってくらいのRPGダンジョンのような入り口がそびえ立っていた。

奥がおぼろげに見えているのは、月光なのか光苔とかカードの効果なのだろうか。

これでゾンビでも出てくれば、そのままお化け屋敷のアトラクションで日本ならトッブ三に入れそうな佇まいである。

名前に反して完全に水没している訳ではなく、浸水程度に留まっているのがこのカードの絵柄の特徴だ。

「……あれ、可笑しいな。さっきまで何も無かった場所に変な洞窟が」

「太郎、お前もか。俺もな？ 洞窟が出来るように見えるんだ。きつと飲み過ぎだな。九十九の酒は美味しいから、つつい羽目を外し過ぎたらしい」

そのままガハハと笑う二人。

おじさんは兎も角、一角の声は良く通るものだから自重してほしいところだが、それよりも今は目の前の現実を直視してもらわねば、話が先に進まない。

「違うっつーの！ ちゃんとあるよ！ 見て分かんかったら触って確かめてもいいから、ほんとにも〜」

口調が駄々っ子モードへ若干入ったのは、酒のせいだと思いたい。

言われて『ほんととか？』って表情を浮かべながら洞窟の入り口をペタペタと触り。

匂いを嗅ぎ、手や足で感触を確かめ、その上で改めて目を凝らしたようだ。

「……本当にお前がやったのか？」

やっと事態を飲み込めたようで、一角がそう尋ねて来た。

おじさんはおじさんで、やはり未だに信じられないという風に洞窟の確認を行っていない。

「一角達が住む場所が無いんだろ？ だったら地下なんてどうかなと思つてさ。不満なら言つてくれ。他のものを考えるから」

「……お前は、他にどんな事が出来るんだ？」

「どんな……ねえ。酒や飯、クリ……式神（としておくか。詳細話すのもあれだし）の召喚はやつただろ？ 後は大和の国でみんなの治療だな。それくらいかな、今までやつた

事は」

一瞬、一角の声色が堅くなったのに『俺って凄いだろー』的な気分になる。

『自分に何が出来るのかを探している最中なのさ』とラノベで出てきそうな旅人の台詞を言ってみる。

この手の台詞、一度は言ってみたかつたんだよねえ。

だって昔じゃ言う機会なんてまず訪れないし、あの手の台詞は自分に何かしらの可能性がある、と思っている人にしか言えない。

防災屋で一生を終える事を覚悟していた俺には、眩し過ぎる言葉だ。

「もしかして、今大和の国で噂になつてる事件は全部お前の仕業か？」

「ああ、そうだぞ。なんてつたつて、この兄ちゃんはその八坂の神と対等に渡り合つた奴だからな！」

今まで蚊帳の外であつたおじさんが、唐突に混ざつてきた。

嬉々として話す内容に感じたが、俺は『いやあ』と照れた仕草で肯定してみせる。

ただ、渡り合つたつての言い過ぎだと思ふんだ。

精々一矢報いた程度のもので、神奈子さんが連戦などしていなかつたら、恐らく秒殺モノだつただろう。………実際に秒殺に近いものだった、という突つ込みはナシの方面で。

「何でも、来る村を間違えちまったそうだな。一晩横になれる場所を探して、うちの村に来たそうなんだ」

「ほお。じゃあ、兄ちゃんも偶然この村に立ち寄ったばかりか、さらにおいら達とも遭遇して戦いになったと」

「うん、我ながら貴重な体験をしたと思うよ」

偶然の重なり具合的に。

本当なら、一晩だけおじさんの家にお世話になって、翌日には出発しようとしていたのだ。

それが何の因果か鬼との遭遇。

戦いに勝利に、宴を催し、住む土地の作成まで助力しているという現在。

『そろそろ行かないと不味いのでは』と時間に追われる昔を思い出して急いで事を成した日もあったが、今の時代では到着が一、二週間遅れるのもザラにある出来事なので、後一日二日程度は全く問題無い。

(あく、でも早く帰らないと諏訪子さん達の酒が……)

帰ったら何作ろう、的な主夫になった気持ちだ。

……というか顔合わせづらくて堪らないの忘れてた。どうしよう。いつそ、このまま何処かにトンスラしてしまおうか。

「九十九一、中に入るが構わないよなー?」

そう言いながら、一角は早速洞窟へと足を踏み入れていた。

既に入ってしまったっているのに、俺に尋ねた意味は何だったのだろう。

「構わないけど、後で感想聞かせてー。さつきも言ったけど、ダメそうなら他のものにするからさ」

「……九十九よ、お前さんは何者だ? おいら達が知っている人外の奴らは、嵐を起こしたり稲作を芳醇に実らせたりはするが、お前のそれは明らかに一線を超えてやがる。時間を掛ければ出来るが、瞬きをする間に洞窟が一個出来ちまった。こんな奴あおいらは知らねえ。おまけに、その口ぶりじゃあ似たような事がまだまだ——それも簡単に出来るようじゃねえか。人間でない事は分かる。かといって妖怪だと言われれば、否だ。お前からはこれっぽっちも邪な気配がしない。……気になるんだ。お前の正体が」

「それには俺も同感だ。兄ちゃんは人間だつつつたが、都の名のある妖術使いでも、兄ちゃんと比べれば月と鼈(すっぽん)。人間が一体どうしたら兄ちゃんみたいになるのか気になるね」

でかいくてゴツイ体系に似合わず、まるで宝物を見つけた子供のよう、その瞳でじっと見つめてくる一角と。

同じく無精髭の似合うナイスミドルなおじさんが尋ねてくる。

二人共恐れや憧れなどではなく、純粹に好奇心が湧き上がっているのだろう。

いつか、神奈子さんに言われた事を思い出す。

お前は何の神だ、と。

その時は神でなく人だと言い張ったが、渋る俺に仕方なくその言葉を信じてくれたよ
うなものだった。

そろそろ、相手が納得し易く、そして自分でも納得の出来る身分とやらを考える時期
なのかもしれない。

だが。

「正体つつつてもなあ。一応は元人間みたいなもんだけど……生憎、決まった部類が無
いんだ。だもんだから、二人の質問には正確には答えられんですよ」

鬼を相手に嘘はいけない。それはおじさん相手でも同様だ。

嘘でもないけれど本当でもない作戦を使っても良いけれど、勇丸は例外だとして、初
人外の友達っぽい相手と一宿一飯の恩人に、そんな真似はしたくない。

なので、正直に自分の置かれている状況を伝えて納得してもらおう。

自分にも分からないものを相手が分かる筈も無いから、分かったら（決まったら）伝
える事にする旨を伝える。

「どうしても何かに決めたいって言うなら、俺は俺。俺以外の何者でもない」

王道の台詞を引用し、それっぽくキメた言葉を使ってみる。

だって今の俺には、それ以上に説明のしようが無いのだから。

「……決まってるじゃないって言うんじゃないやどうしようもねえな。——分かった。お前はお前だ、九十九」

「あゝあ、これでまた酒の肴が増えると思ったんだがなあ」

言葉とは裏腹に、おじさんの言葉にはこれっぽっちも残念な様子が窺えない。

一角の方はじつと見つめていた眼力を緩め、ふと虚空に顔を向けた後、何かに思いを馳せるよう息を吐く。

「どんなすげえ奴かと思つたら、まだ何者でもない奴だったとはなあ。おいらの知らない神か妖怪の類だと思つたんだがなあ」

「事情は話せないけど、こつちに来てからまだ二年くらいだからな。無名で当然さ」

「兄ちゃん、その事情ってやつを俺達が一番聞きたいんだぜ？ 全く良い根性してるよ」

「いやホント勘弁して下さい。これで下手な事言おうものなら後々大変になるのが目に見えてるんですよ」

「太郎、諦めろ。九十九はおいら達に良くしてくれる。それだけで良いじゃねえか」

「ポロっと口が滑ってくれるかもしれないって思った程度さ。別に無理強いする気は

ねえよ」

「そうかい。精々気持ちが変わらない事を祈るこつた」

「そうするさ。………さて、と。兄ちゃん、俺はこの事を村長に伝えてくる。不可侵の場所してもらわにやあな。二人はどうする？」

「おいらも一度戻つて、仲間達に声を掛けてココの探索だな。この場所なら人通りもなくて、中もちよつと——環境は悪いが広々で、ちよつと地形を弄つてやりやあ入り口が見難いと来た。おいら達妖怪が住むにやあうつてつけの場所さ」

分かった、と返事をして二人を見送る。

こんなに便利そうなら、「土地」系のカードは今度からどんどん使つていこうと思ひ直す。

体力消費の感覚が全くなく、恐らく俺が意識するまでずっと残り続けるっぽいこの洞窟。

カードを使って体力の消費が無いというのは素晴らしいと実感しながら、なら試しにと、別の「土地」を、カードを思い描きながら実行してみる。

だが、どんなに思案してみてもそれは現実にはならず、ただ現状があり続けるだけに留まっている。

一日に使えるカードは九種までとなっていたが、「土地」カードに関しては一日に一枚

だけのようだ。

本来ならば、MTGにおいて【土地】とはゲームの基礎にして基本。

一ターンに一枚のみ自分の場に置く事が出来、【土地】は同じく一ターンに一度だけ、その【土地】固有のmanaを一つ——例外もあるが——発生させる事が出来る。

【土地】を多く並べれば並べるほど一度に得られるmanaは増大し、それによつてより強力な呪文に繋げていけるのだ。

生憎と、今の俺ではこの根源たるmanaの発生という機能が使用不可になっているが、この地下洞窟を見る限りはまだその機能は必要なさそう。

(manaさえ発生すればコンボやら強力【シナジー】炸裂のオンパレードなんだけどなあ)
MTGなのにmanaの発生が不可とか、黒くない松崎○げるとか、キャラクターの居ない某千葉のテーマパークとかのレベルだ。

一体いつになったらこの根源的なルールは開放されるのかとため息が漏れる。

——解決しなければならぬ問題は山のように。

カードの効果をうまく使えば対処出来そうだが、一万を超え、もはや二万近くあるMTGを全て把握するのは現状では不可能だ。

ゆつくり、それこそ数年、数十年かけて覚えていくしかない、高すぎる壁に愚痴を零す。

「先が長すぎて嫌になりそうだよー。でもその辺の感情を制御出来るってのはマジであつて良かったな……。勇丸く、今後とも仲良くしようなく？」

諏訪子さんの気持ちが少し分かった気がする今日この頃。

恐らく俺が維持し続ける限りずっと側に居てくれるであろう相棒の鼻の頭を搔きながら、俺も二人が消えて行つた宴の方へと足を進ませた。

その翌日。

俺はおじさんと二人で朝日の昇つた浜辺を歩いていた。

一角達は洞窟の探検&改造。

村人達はいつもの仕事は行つておらず、友好条約みたいなものを結んだ鬼達への対処を話す会議などやっていた。

「おじさんって会議に出なくて良かったの？」

「飲み過ぎて体がだるくてなあ。あんだけ飲んで悪酔いしないってんだから、とんでも

ない酒を飲んだのは分かるんだが、どうも昨日は騒ぎすぎたらしい」

「あの後一角と飲み比べなんてするからですよ。結局それが原因で『洞窟探検は明日の朝から』って一角達が言っちゃいましたもん」

「いけると思っただよー。あの酒なら幾らでも飲めたしな」

「鬼と人間を同系列で見ちゃいけませんって」

軽く笑いあいながら、吹き付ける潮風を胸いっぱい吸い込む。

昔ならこういった場所には親戚の家へとお世話になるか、旅行先のホテルにでも行かなければ味わえなかった経験だ。

これで朝はパンやスクランブルエッグにミルクかコーヒーなどだったのなら完全にリゾートホテルだが、俺の周りにはぼさぼさの髪をしている完全極東アジア顔の中年男性が一人と、白い大型犬が一匹。

とてもじゃないが、観光地に来ているとは思えない。

「兄ちゃんが来てからまだ三日も経ってないってのに、この村は今後大きく変わるなあ」
「でしようね。妖怪の——鬼との共存を目指す村なんて、俺の知る限りココが初めてですよ」

「おいおい、他人事のように言ってるが、お前さんにやあ今後とも協力して貰わんと色々困るぞ」

「分かってますって。ただ、出来るだけそつちで対処して下さいよ。俺だつてずっとこの村に入れる訳じゃありません。それに、今日か明日にでも元の目指していた村へ出発しようと思つてるんですから」

「安心してくれ。未だに一角達には怖いと思う気持ちはあるが、あいつら良い奴らだからな。近いうちに蟠りも薄くなるだろ」

自分をとつて食おうとしていた相手に対して凄い事を言える人物である。

「この辺の思考の幅とでもいうのか、懐の広さは見習うべきなのか、どうなのか。」

「ああ、そうだ。壊れた家な。中々の住み心地だ。ちつと体の違いから来るっぽい縮尺の差はあるが、しっかりと作りの良い家だよ」

「あいつら本当に一日で作ったのか……。すげえ」

「何言つてんだ。あいつらだつて、一日どころか一瞬で洞窟作った兄ちゃんにやあ、言われたかねえだろう」

カツカツカと子気味の良い音を響かせながら、おじさんは高笑いを響かせる。

「それもそうだ、と俺も釣られて笑い出す。」

「そうそう、兄ちゃんに伝えたい事があつてな」

「ん？ 何です？」

「村長がな。『来年の春から、村長はお前だ』つて言われたんだ」

「おお、凄いいじゃないですか」

「鬼とのいざこざから逃げたかつたって気もしてるんだがな」

「ははは、確かに鬼と対峙していた時の村長って影薄い………というか空気でいようと徹していましたからね」

「もう歳も歳だし、丁度良い機会だったってことさ。——それでな？　村長になるにあたって、俺あ苗字を貰う事になった訳よ」

「おー。おめでとうございます。これで名実共に、村の代表ですね」

「おうよ。つてことで、改めて名乗らせてもらうぜ。心して聞きな！」

「おじさんノリノリですね！　分かりました。是非教えて下さい！」

これから鬼との交流で粉骨碎身するであろうおじさんの顔はとても晴れやかなもので、これからの出来事にやる気MAXって覚悟が溢れ出ているかのようだ。

「浦辺の戸島村、来年から村長を務める。浦島 太郎」だ。これからも宜しくな」

「大和の国、守矢の地から来た九十九です。浦島太郎おじさん、これからも宜しくお願いします」

お互い、がっちりと片手で握手をする。

流石に投網猟を行っていただけあって、中々の握力で俺の手が潰れそうになりそうだ。ナイス筋力だぜ、おじさん

……ん？ うらしま……たろう……？

「何だ……？ お、海亀とは珍しいな。よし、今夜はあれを食うか」

あまりに唐突だった為、『おじさんそれフラグー！』と突っ込む事もない。

俺の考えがまとまる間もなく、おじさんは俺の横を通り過ぎて、奥に居た、浜辺へ打ち上げられている亀へと向かっていった。

「でかいな、これから村の皆にも……ん？ この亀、なんで光ってるんだ？」

聞こえた声に我に返り、その方向へと顔を向ける。

そこには落ちていたであろう木の枝で亀を突くおじさんが見とれ、対して突かれてい
る亀は、ぐったりとしていて動く気配が見えない。

とりあえず俺もそこへと向かいながら、先程おじさんが名乗った苗字について思案す
る。

（浦島って……あの浦島？ 助けた亀に連れられて云々の？ えー、うっそ……）

おまけと言わんばかりに亀とのツーショットになる浦島おじさん。

村の名前だって、あの御伽噺と何の脈絡も無いものだと思っていた為に聞き流してい
た位だ。

色々と聞きたいし突っ込みたい場面ではあるが、近づいていくうちに、問題の亀へと
視線が移っていつて——

(……あれ、あの亀、なんか変じゃね?)

俺の胴体程もある大きな海亀。

とても立派な体格で、あれなら大人一人くらいは上に乗せられそうだ、と思う。れつ
つ竜宮城。

しかし、問題はそこではない。

あの亀、おじさんが言ったように、所々が光っているのだ。

——いや、正確には発光している。

まるで電気がショートするかのような光源が亀の体から発せられていて、見た光景
は、先程言った言葉がまさにピッタリと当てはまった。

(つて、この亀……火花散らしてるんですけど……)

見えた亀の体は、所々が傷つけられた後が残っており、その箇所から見えるのは、俺
の世界では良くあった「機械」と呼ばれるもの。

それが表皮の間から覗いていて、時折その箇所から青白い火花が弾け飛んでいた。
これは……一体……。

「何だこの亀は? 体の中に雷様でも飼ってるのか?」

そう言いながら、機の部分と思われる箇所にも木の枝を押し当ててる。

それに連動するように火花を散らす光景は面白いかもしれないが、どんな代物だ

が彼らよりは分かっている自分としては、即刻止めさせなければならぬ。

この手の類は、最悪自爆オチだと相場は決まっているの……だ……？

「む？ 散らす火花が増えてないか？」

おじさんそれフラグー!!

僅かの間に二回もイベント起こす発言するとか大したもんです。つてそうじゃない。

やばいのよ！

虎口に飛び込まんとしていると分かっているだけに即行動を起こす。

無邪気に言ったおじさんの台詞に、俺は慌てて声を張り上げた。

「逃げろ!!」

この手の台詞は、実際には『何で?』とか『どうして?』なんて疑問がまず返って来るので意味は薄いのだが、声を出さずにはいられない。

しかし唯一、勇丸だけは俺の意思を分かってくれたようで、おじさんの背中を口で啜えて全力ダッシュでこの場から離脱してくれた。

勇丸GJ! と内心で親指を立てて感謝の意思を伝えると、『逃げて下さい』つて返答が来たので、慌てて現状を思い返す。

さて、後は俺も逃げて——途端、メカ海亀の周囲に光の壁が出現する。

それはまるで自分を覆うバリアのようで——その中に俺も囚われた。

「意味分かんねえぞコンチクショウ！」

脱出しようとしてバリアののようなものからの離脱を試みるものの、文字通り壁となった光の膜がそれを拒む。

ガラスのような触り心地の強固な防壁に一撃入れてやろうと拳を振り上げた所で、背後の亀が、まるで内側から飲み込まれるかの様に消えていく。

（ブラックホールみたいな感じか!?!）

一刻もない状況の中で、混乱せずに物事を考えられているのは、きつと何度かの危機的状況を乗り切ったからなのだろうか。

とりあえずはココから脱出する為のカードを思い浮かべて見るものの、既に俺の体までブラックホール（仮）の方へと引き寄せられている。

ちよつと自力での脱出は無理くさいと判断し、退避系カードではなく保守系のカードで安全を確保しようと画策し、即座にそれを実行した。

（【死への抵抗】！ 対象は俺！）

『死への抵抗』

「manaで、緑の【インスタント】

クリリーチャーイー体を対象とし、それはターン終了時まで破壊されない。

過去、俺は諏訪子さんと対峙した時に「不可侵」という受けるダメージをゼロにする【エンチャント】を装備した。

だがあれは神気——威圧感による心の負荷を防ぐ事は無かった。

このダメージという範囲が何処までなのか分からない以上、現状での使用には疑問が残る。

よって、ダメージを受けないという部類分けではなく、ダメージを与えても意味のない効果を付与させた。

勿論例外は多々あるが、鋼の肉体よりも強固で頑丈な体へと変えてくれる筈のもの。

呪文を唱えると同時、俺の目前に一枚の金属板が出現した。
黒く、フリスビーのような大きさ。

鈍く光り、表面に何か文字の彫られたそれは、「ダークステイル」と呼ばれる特殊合金で出来ていた。

『ダークステイル』

とある次元の管理者が作り出した。

光を吸収する特性があり、その結果、黒色に鈍く光っているように見える魔法の金属。
取り込んだ光を、まるで蛍が周囲を舞うかのように出現させ、飛び回らせる性質を持つ。

特殊な魔法によってのみ造り出し形作ることができ、決して壊れることはないと考えられている。

まるで俺の周りで遊ぶ妖精のように周囲を漂うフリスビー型の「ダークステイール」に、効果の発動を実感したと同時に、別の疑問が沸き上がった。

（俺って破壊不可になってるんだよな？ この円盤使って攻撃防げって意味じゃないよな？）

またやらかしてしまった感が焦りに変わる前に、俺の体は亀と共に黒い渦の中心へと飲み込まれていく。

「兄ちゃん!!」

その僅かの間。

バリアのようなものを挟んでいても声は届くようで、遠くからおじさんが必死に声を張り上げているのが聞こえてきた。

勇丸はまだ距離を離すべく疾走しており、これなら俺の場所にミサイルの絨毯爆撃が降って来たって回避出来そうな位に退避してくれた。

もはや応えるだけの間もなく、体は半分以上この場所から消え去っている最中、せめ

て少しでも安心させなければと思って、僅かに残っていた右手の親指を立てて、グッドのサインを作る。

——後にして思えば、そんなサインなどその時代の人は知る筈もなかったのだが、その時の俺はそれが精一杯で。

そうして、俺の視界は一面の黒へと塗り潰されていった。

——周りに見えるのは一転、一面の白。

上下左右前後ろと、見回してみれば全てが真っ白な部屋に俺は居た。

小中学校の教室一個分位の大きさだろうか。

その室内の中央に、俺と、完全に壊れてしまったであろうメカ亀。

……気絶しながら移動出来たのなら、また『ここは……』なんて言つて、既に俺という存在を周囲に知らしめた後に行動すれば良かった。介護されてる的な意味で。

だが意識のあるまま、見ず知らずの誰かと唐突に対面した場合、はたして何と言つて

コミュニケーションを取れば良いのやら。

「……………あなた、誰？」

月の光りを織り込んだような銀と、月の夜を混ぜ込んだ蒼の2つを融和させたような髪に、左右対称の赤と青の服と帽子。

その上から純白の羽織——白衣をまとい、こちらに目線を向けるその人物こそ、『月の頭脳』『月の賢者』などの月を代表する二つ名を持つ、八意 永琳その人である。

三章

22 月の異名を持つ女性

座るタイミングの掴めぬまま立ち話状態になって、二、三十分位だろうか。

あのバリアの内側にあつたであろう砂浜の一部が丸ごと俺の周囲に散乱していた。

どうやらあのバリアっぽい何かは転送範囲を決める為のマーカーだったのでないかと思ひながら、目の前にいるお方との当たり障りの無い会話をし続ける。

「——なるほど。そちらは今、多種多様の妖怪が増え続けている、と。アヤカシ系の生物の調査は難航していたから、教えてくれて嬉しいわ」

「色んな奴が居て飽きる暇が無いですね。ついこの前までは鬼と一緒に居たんですよ。あいつら、やれ酒は飲むわ飯は食うわで、ホントもう給仕やつてる身としてはてんてこ舞いでした」

「鬼……。一部の島国で見られる、頭に角の生えた固有の妖怪の名称……だったかしら。

ちよつと前に資料で見たのだけれど……。そう……。九十九さんは、色々な出会いを経験しているのね」

「良かれ悪かれつてのが入りますけどね。まあ、何度か死にそうな目には会いましたが、こうして無事でいる今としては良い経験ですよ」

目の前には、『あらあら』と、そう言つて口元に手を当てて優しく笑う女性、八意永琳。東方世界において最も長く生きてきたであろう候補その一人人物。その年齢、最低億単位。

穢れた地上を捨て、月の都市——建国を支えた賢人。

月の頭脳、月の賢人、月の e t c, e t c……。呼ばれる二つ名は数知れず。

失礼だけれど、もう面倒なので『月の母』とかでも良いんじゃないかと思つてしまう。

そして、容姿も同人本などの絵柄で感じてはいたのだが、超を三個くらいつけてもお釣りの来る美人。

絶妙ともいえる造形とすつきりとした全体のラインに、女性らしさの象徴が目にも毒。上下共にもう一サイズ上の衣類を着て下さいと言つてみたくなる。——絶対言いませんけどね。役得役得。

ただ、受ける印象は妖艶、ではない。

着ているもののせいなのだろうか、研究者、科学者といった、知性が服着て存在して

いるといった印象だ。知的美人万歳。

諏訪子さんと比べるのはあれだが、神奈子さんとは別方面の美がそこには佇んでいて、もう一緒にの空間にいるだけでも満足ですつて思えてくる。

敵意を向けて見なければ、神奈子さんにもときめいていたと思うのだが、生憎と出会う方が不味かったので、第一印象が払拭されるまではそれ系の目線で見る事は無いだろう。

俺がここへ来た直後、えーりん……八意さんは、警戒心よりも好奇心を優先させたかと思えるほどに質問をマシンガンのように繰り返して来た。

種族は、出身は、何をしに来たのか、何をして過ごしていたのか、住んでいた場所の状況は、等々。

こつち側の情報……知識に飢えている感じがする。

それも「知りたい」の類ではなく「暇つぶし見つけた」的な。

ただ、いい加減そつちの情報を教えて欲しいんだ。

会話するにしても、名前を呼べないんじゃないやあ、じっくり来ないのですよ。

「あの……教えて欲しい事があるんですが……」

「あら、何かしら」

……何かしらって。

自己紹介とか場所の説明とか俺の処遇とか色々あると思うのですが……。

「色々あるんですが……まずは名前を教えて頂ければ」

「……ごめんなさい。久々に楽しかったものだから、つい」

自分の失態を恥じる様に、片手で顔の下を覆うように隠しながら、謝罪を口にした。

こんな美人に頬染めさせるたあ、俺の地獄行きは確定やもしれん。その時は宜しくお願ひします、えーき様&こまつちゃん。

—— 東方キャラって美人多すぎだよなあ……最高です。

「私の名前は八意永琳。〴〵ここでは〴〵様々な研究を行っているわ」

「さっきも言いましたが、九十九です。苗字とかはありません。宜しくお願ひします、八意さん」

何に対して宜しくなのかが自分でもよく分かって無いが、テンプレ挨拶なんて、そんなものだと思う。

『えーりん！』とか腕を振りつつ言ってみたい衝動に駆られるが、そこは本人を目の前にしているので自重。

東方キャラ全般に言える事だが、いつもは下の名前で認識しているだけに、いざ苗字で相手呼んでみると心の何処かに違和感が残る。

諏訪子さんや神奈子さんの時のように、いつか下の名前で呼ぶ仲間になれたら良いなあ、なんて思いながら、新たに目指す野望を一つ増やしておこうか。

……しかし、うっかり自分の本名を名乗ってしまったのを、まさか後悔するとは思ってもみなかった。

というのも八意さんに出会った瞬間に、あのタイミングで亀と遭遇した浦島おじさんとを吟味した結果、本当はおじさんが今ココに居る筈なのでは、という結論に達したからだ。

もしかしたら、自分が浦島太郎と名乗って日本童話を破綻させずに済んだかもしれないのだけれど、今となっては悔やむばかりである。

浦島太郎。

日本の御伽噺の中で、5本の指に入るであろう程の有名な作品。

事の顛末から主な登場人物の名前まで、知らない人など日本には居ないとさえ言い切れるほど知名度のある物語。

ただこの世界では、助けた（拉致られた）亀に連れられてきたのが竜宮城などではなく、恐らく月の都——蓬萊の国？ であるという事。

乙姫様というのはこの八意永琳その人なのではないかという事。

……あれ、東方では綿月豊姫ってキャラが瑞江浦嶋子……だったか？ 浦島太郎の元になった人物を匿って云々、といった流れだったような。

ぬぬぬ？ 瑞江浦嶋子が既存の人物で浦島太郎が想像キャラで、でも俺はさつきまで浦島太郎というおじさんと一緒に歩いていて、豊姫が乙姫の筈で……。

ダメだ。

考えれば考えるほど泥沼に嵌っていく気がしてならない。

これの考案はもつと落ちついてからにしよう。

その後、八意さんから俺が聞きたかった事を大まかに尋ねた。

真つ先に聞きたかった、あのメカ亀は、何でも地球探索用の端末なのだから。

他にも鳥や犬といった生物に擬態している物もあるそうで、定期的に地上の情報を入れておくのだ、と説明してくれた。

で、万が一壊れた時には、痕跡を残さない為に緊急帰還装置が付属しているのだが、それが発動してしまったのだという。

ただこの機械、妖怪とは相性が悪いらしく、近づくだけで大抵の妖怪は姿を消してしまふのだとか。

調査が難航する訳だよね。

「過去例を見ないほど急に、天候が変わってしまったの。それなりの自然環境の変化には十分に耐えられる性能はあったのだけれど、許容量を超えた落雷が降り注いできてしまつて……」

妖怪の仕業かしら？ と、疑問に思いながら対策を練つてるかのように、八意さんは考え込む。

——こりやあ早めに謝罪した方が良いのだろうか、それ俺ですつて。

……もう少し親密になつたらにしておこう（汗）

そんなやり取りをしながら、その他諸々な会話に移っていく。

ただ、場所や名称を暈かして言われるのかと思いきや、どれもこれも恐らく正式な名前である単語が飛び出してくる。

間違つても、竜宮城やら、乙姫やら、海の底。なんてものは、これっぽちも出てきちゃいない。

そもそも俺が地上の人間で、未だ月の文明とは程遠い生活を送っていることなど、微塵も考慮していない話し方だ。

月面都市とか研究室とか、初めて聞く人が居たのなら、ポカンと口をあけてしまう事は必須。

全くの無知で通すのか、その手の単語は知っているものとするか、どう振舞ったら良

いのか悩んでしまう。

……というか、ココは月の国。

言語体系が違った筈なのだが、どうして会話出来ているのだろうか。

『八意さんは私の国の言葉が分かるのですが』ってさり気無く聞いてみたのだが、彼女は『この部屋に念波で意思疎通が出来る機能が備わっている』と解説してくれた。

何と、マジ便利だそれ。

異国語を勉強中の人々（主に受験生）にやあ、百万払ったって欲しい機能かもしれん。MTGにもそれらしいカード無いかなあ。あつたら国外行きまくりで俺もパーフェクトリンガルになれそうなのに。

——あつたな。それっぽいカード。機会があつたら使ってみよう。

「……それで、さっきから気にあっているのだけれど、良いかしら？」

また考えすぎてしまった。

夢中になると周りに気が向かないとは……。八意さんの事を言えないな、こりや。

「あ、はい。何ですか？」

「その、あなたの上に浮いている円盤は、何？」

……おういえ。元気そうですね、「ダークステイル」さん（汗

思わず隠すように引き寄せた冷たい金属を抱きしめながら、『やっぱり触り心地は金

属なんだな』とか思いつつ。

そういうえば、あの時からずっと出ていたんだよなあ。

これで、巻き込まれ型一般人で通す線はボツになった。

俺の頭上を漂うに浮いていた為に、自身からは全く視界に入らなかったもので、それを展開していた事すら忘れていましたよ。

けれど第三者から見れば丸分かりで、むしろ矢継ぎ早に質問攻めをしていたあの状況を考えてみれば、今まで突っ込みを入れなかった彼女は俺を気遣ってくれているのだからうか。

……分かん。分かんが、とりあえず今の発言で身の振り方はある程度決まっちゃった。

能力を隠してサツサと地上に返してもらうのも手だと思っただが、確か彼女は、ココを知ってしまった瑞江浦嶋子が地上に戻りたいと言った際、『処断なさい』と命令をしたという、冷徹な面を覗かせていた。

その時は、豊姫が規制緩和を申し出て軽減はされたのだが、大切にしているもの以外に対して、無慈悲とも言える判断を下せる人物なのだ。

これで全く興味の湧かない存在だったのなら、同じ判断をする可能性が……。

それに原作とは違い、今回は豊姫の口添えが期待出来ない状況。

もう危険度がレットゾーンに突入していても、不思議じゃない。

ちよつと滞在時間が長くなりそうだが、ここは興味を引く事で、目の前の死亡フラグを回避せねば。

と、いう事で。

「これは……特殊な金属で出来たもので、こつちの方じゃ、絶対に破壊されないって評価がついている代物です」

MTG界では絶対に壊れてないとされている金属、〔ダークステイル〕。

世が世ならオリハルコンとかダマスカスとかミスリルとか、その手の伝説級金属の名称で通りそうなものだが、同じMTG界ではこれを食ってしまう生物もいるというのだから、何処まで破壊不可を信用して良いものか、悩むところである。

「へえ、それはまた凄いわね。——ちよつと試して良いかしら？」

「……」期待に沿えるかどうか（センサー 目ガ コワイ デスヨー）」

ゾクリ、と背筋に氷柱が差し込まれたかのような感覚が走る。

目線から、興味の対象から実験体へと目線が変わったのが肌で分かってしまった。

突如、八意さんは目の前の空間に手を伸ばす。

そのまま右から左へ手を動かすと、今まで何も無かった空間に光で出来たディスプレイ

イ——だと思っ——が出現した。

今までアナログ以前の世界に居た身としては、現代どころか超未来——SFな場所に来てしまった故に、懐かしさよりも未知の技術に対する興味が沸き上がって来る。

そのままキーボードよろしく、ポチポチとタッチパネルを操作するのかと思いきや、ディスプレイに片手を置き、そのままの状態で動きが止まった。

——ここはタイピングなんて作業は必要無い場所のようだ。

あのパネルに手を置き思案するだけで、それが機械に入力されていくのだろう。

自分の常識が既にローテクになってしまっている事実に、若干の寂しさを感じるものの、身近な時代の変化を感じた代物——テープがメタルテープに、CDに、MDに、MP3やHDへと移行していった場面を思い出しながら、彼女の作業を黙って見続けた。

何かの作業に没頭している八意さんを見続けて、しばしの時間が過ぎた。

しばらくすると、何処からともなく電子音のような音が定期的に響く。

目覚ましや携帯の着信音のようなメロディに、何かを知らせる音なのではと思っていると、彼女は、ふいと顔を見上げ、目尻が垂れ下がり、残念そうな表情を浮かべた。

「……もう、良いところなの……。ご免なさい、用事あったのを忘れていたわ。戻ってきてから続きをしたいのだけれど、構わないかしら？」

「あ、はい、分かりました。どれくらい掛かりそうですか?」

「多分半日は戻って来れないから……そうね。休めそうな部屋へ案内するわ」

『着いて来て』、と踵を返し、真っ白な部屋に突如と開いた黒の出口へと進む。

通る廊下は照明のような物が無く、けれど全体が眩し過ぎず暗過ぎず、適度な光量が保たれている。

だからだろうか。

窓と思われるものは一切無く、歩く道一面は全て壁。

味気ない事この上ないのだが、それも僅かな時間で終了する。

部屋の入り口と思われる窪み。それが音も無く開き、その中へ八意さんは入っていった。

プシユー、とかニュイーンとかすら音がしないというのは、SF映画を見てきた者としては少し物足りないな、と思いつつ入室する。

これといった特徴の無い——良く言うと小奇麗な、悪く言うとプライベートが守られてる独房、といった印象だろうか。

「申し訳ないのだけれど、私が戻るまで、この部屋に居てもらおう事になるわ。予定外の来客だったから、色々とやる事が出来ちゃって、しばらく掛かるかも」

「お手数おかけます。……あの、俺はいつ元の場所に帰れるのですか? あまり長居す

るのは避けたいのですが」

「それも含めて、の、色々とする事があるのよ。戻ってくるだけならあの探食用擬態だけで可能なんだけど、送るとなると、それなりの設備が必要なの」

どうもこちらを元の場所へと返してくれるような口振りなので、これで死亡フラグは回避したと判断しながら、心の中で、安堵のため息を漏らす。

思ったよりも優しげな彼女の対応に警戒心を緩めて、大人しく待つ事に決めた。

一応、何かあっても動揺しないように心構えだけはちゃんとしておこう。

これからの事についても考えないといけないし、一応繋がっている感覚はあるが、置いてきた勇丸の事も気になる。

「分かりました。じゃあ、少し休ませてもらいますね」

「ごめんなさいね。退屈だとは思いますが、少し我慢してね」

了解の意を伝え、退出していく八意さんを見送った。

——第一印象は超美人。

続いて連想されたのが、気遣いの出来る大人の女性という印象。

今まで周りには居なかったタイプなだけに、表面上は普通に受け答え出来ていたと思うが、内心は心臓バクバク状態だ。

白い部屋とは少し色の違う、若干灰色がかかった白いベットにどかりと腰を落とす。

良かった、ベッドはベッドのままっぽい、という感想は一瞬にして置き去りにして『超ふかふか!』という思いが心から溢れてきていた。

今までずつと薄い煎餅布団だっただけに、ベッドというものが凄く新鮮に感じられ、それによって転生前での生活を思い出し、結構ノスタルジックな気分になってしまった。

金属製っぽい壁に、ふかふかのベッド。

ガラス——ではないんだろうが、無色半透明の素材で出来ている、二人掛け用のテーブル。

奥に見える扉と思わしい窪みは、廁か浴室への出入り口だろうか。

生憎と窓の類は一切無いが、下手なビジネスホテルより豪華な作りの部屋だ。

(浜辺での散歩の後は、こういった部屋か専用の食堂での朝食コースだけど……)

さらつと思っていた事が現実になり、けれどこんな現実ならば遠慮しておきたかった、と苦笑を浮かべる。

さて、八意さんは、半日は帰って来れない、と言っていた。

月の頭脳なんて呼ばれていたのだから、きつと色々忙しいのだろう、と考えてみるものの、これで『あの者は処分すべきです』とか他の人に進言しに行ってたのだとしたら、どうしよう。

もしくは逆に、周りからそういつた方面の進言をされたのなら……。理に適ってれば、彼女は迷わず判断を下す筈だ。

(となると、やばいな……。何よりまずは、脱出用のカードを考えておかないと)

逃げるカード——今いる場所から移動するものは色々とあるのだが、月から地球までの長距離を移動させてくれるとは限らないのだ。

それに、名前そのまま【脱出】というカードがあるにはあるのだが、これは残念な事に5マナも消費してしまう為、3マナ出力制限の掛かっている現状では実行不可。

何とかして思いついておかなければ、最悪、ここでエンディングを迎えなければならぬ。

勿論、悪い意味で。

(勇丸も置いてきちゃったし……繋がりを感じるから、無事ではいるんだろうけど、念話が届かないのは困っちゃったなあ)

けれど、別の見方をすれば、勇丸も、俺との繋がりを認識しているのだ。

残念な事に言葉は話せないが、頼りになる相棒の事だ。

俺が無事なのを周りに伝えてくれるだろう。

(戻るまでの辛抱だからなあ、勇丸。それまではそつちで……。ちよつと時間を……。ふあ……)

頭上に浮いたままの「ダークステイール」を眺めていると、久々のふかふかな寝心地のせいか、急激に睡魔に襲われる。

体内時計では朝方なのだから、こちらはきつと夜なのだと思う事にして、夜なら寝ないとね！ って訳で掛け布団を捲り、その中に入る。

やっべ超ふかふかマジこれやっべえよホントふかふか2年ぶり位かどうせすぐ起きるだろうしその時に色々考えれば良いやふかふかだあふかふか柔らかくzzz……。

長く生きていると、様々な出来事が起こるもの。

思い起こせばきりが無いけれど、ここ最近ほとんどその手の話には疎くなった。けれどその更新も今日で終わる。

白。

初めの印象はそれだ。

滑る様な白い外套を羽織り、同じく白のシャツを身に着けた男。

地上では、このような服装が主流になりつつあるのだろうか。

前に調べた時は、植物や動物の皮で作られた単純な作りものだけだったが……。時代の移ろいは早いものである。

帰還させた探査機達の情報を整理してからだだが、今行っている研究を修正しなければならぬだろう。

「永琳が忍び笑いなんて珍しいわね。何か良いことでもあった？」

鈴を鳴らしたような声。

華奢という言葉の言葉が良く似合う——立てば芍薬、座れば牡丹、歩く姿は百合の花。そんな、とある地上の言葉がピッタリだろう。

私ほど体にメリハリがある訳ではないが、黄金比とも呼べる絶妙さを体言しているこの子は、月の姫。

蓬萊山 輝夜。

それが、私の教え子のうちの一人。

「ええ、先日から地上へ向かわせていた探索機を回収したのだけれど、うち一体に面白いものが見ついてきてね」

「定期的に地上を調べているっていう、例のあれよね。……それで、それはどんなものかしら？ 鉱石？ それとも何かの化石？ 大概のものなら既に、そうなる前の段階で、見ているでしょうに」

「どれも外れ。——正解は、人間よ」

「……永琳ったら、長年に渡る心労が祟って、とうとうネクロフィリアに目覚めちゃったのね。共感はいらないけれど、否定はしないわ。人それぞれですものね。……あ、でも私にそれを求めないでね。流石にそっちの趣味へは、まだ早いと思うの」

「違うわよ。ちゃんと『生きている』状態ですもの。質疑の応答も、呼吸も瞳孔も、その他諸々体の不具合全部異常な箇所はなし。真正正銘、健康な人間よ」

「……あの転送装置を経由してここまでこれる時点で、ただの人間なのか怪しいところよ。ちゃんと調べたの？」

「それはこれから。あまりに普通過ぎて、地上のスパイなんじゃないかって疑うのも馬鹿らしくなってしまうわ」

——月の民は、昔、地上に住んでいた。

けれど時が経つにつれ『穢れ』が蔓延。

それから逃れるべく生まれ育ったそこを捨て、月へと移住した。

以後、再び穢れの脅威に晒されぬよう、鉄壁とも呼べる体制で事に当たっている。

その一つが、浄化。

地上から持ち込まれるものには全て穢れが付着しており、それを除去する手段として特殊な光を照射し、対象にぶつける。

けれどそれはあまりに強すぎて、過去生物でこの光線を浴びた中で生きている者は居ない。

——いや、居なかった。

探査機の帰ってきたあの部屋には、帰還した瞬間、穢れを払う為に特殊な光を照射する機能が備わっている。

作動しなかった訳ではない。

だから……生きた状態で月側の土を踏むのは不可能だった筈なのだ。

それを、あの男は何事も無かったかのように存在していた。

まるで、自分が何故ココにいるのか分からない、といった様子の彼——九十九は、何処にでも居るような、少し間の抜けた男性だった。

何か主張がある訳でも、強い意思を持っているようでもなく、ただ普通に生きてきたかのような。

そのような人間が、何故、あらゆる穢れを払う光を受けても無事だったのか。興味が尽きない。

いつそ、今この場を放り出して、彼の元へと駆けつけた位に。

どのような条件が彼を存命させているのか……体中を開いても調べてみようかしら。

「あなたは素晴らしい師だけれど、たまに自分の考えに没頭し過ぎて、周りを蚊帳の外にするのはやめてほしいわ」

「あら、ごめんなさい。最近、これといった刺激が無かったものだから、つい」

「……何よ、私達の相手だけじゃ不満だって言うの?」

「手の掛からなくなるよう教育する事が目的ですもの。こういった流れは当然だわ。それに、綿月達に比べれば、未だに手の掛かる子は、あなただけよ? 輝夜。あの子達はもう、政治や軍部でその手腕を発揮しているわ」

「あの子達が、がんばり過ぎなだけよ。……永琳。あの子達が、あなたを見る目って、よく観察したことある?」

「あるわよ。真剣に私の教えを取り込んでくれている様で、師としては嬉しい限りね」

「……時折、依姫が、熱の入った視線を向けているのだけれど」

「勉強熱心で嬉しいわ。あなたも、それ位にきちんと物事に取り組んでくれるのなら良いんですけどね」

やれやれ、とでも言いたげに首を竦めながら、輝夜は手元の植物を手折って、工芸を再開した。

何よ、熱心なのは良い事なのよ? あなたにもそれが分かってくれる日が来ると良いのだけれど。

「もうこの関係は百年、二百年じゃないのよ？　今更そうそう変わるものでもないわ」
「……流石に長く付き合っているだけあると、私の考えも分かるのね。だったらこの気持ちに答えてみよう、なんて思わない？」

全然。

そう、輝夜は私の気持ちをバツサリと切り捨てる。

今に始まった事ではないけれど、この中途半端な無気力さは、どうにかならないものだろうか。

——私の教え子は、現在三人。

一人は綿月豊姫。

温和な性格なれど、確固たる意思があり、その範囲内で可能な限り——楽をする子。

一人は綿月依姫。

真面目で誠実な正確で、私の教えを誰より熱心に学んでいる子。

最後の一人が、この蓬萊山輝夜。

心技体、どの方面でも優秀な成果を出すものの、飽きたものに対しては極端に興味が無くなる、継続力が問題な子。

ゆくゆくはこの子に仕えるのだけれど、この、飽きたらすぐに物事を投げ出す癖は、い
ずれ矯正しなければならぬだろう。

今ではここでの全てに興味を失ってしまい、穢れてしまった地上に、その興味の対象
を移している始末。

これで『その人間を見てみたいわ』なんて言い出した日には、どう静止したものか。

「そうだ。永琳、その人間と私を、会わせて頂戴」

「……今、あなたがそう言い出したら、何と言って止めようか、悩んでいた所なのだけ
れど」

「じゃあ、諦めなさい。別に取って食おうって訳じゃないわ。未知の経験を積む事で、新
しい発見や発想が生まれるのは、良くある事よ?」

「はいはい、暇を潰したいのが丸分かりよ。——分かった。会わせてあげるけど、今す
ぐはダメよ? 彼の事を調べ終わってから、なら構わないわ」

「へえ、彼……か。男なのね。どう? 格好良かった?」

「……あまり印象に残る程の個性は無いわね。衣類は白が目立っていたけれど、造形は
不出来でもなければ出来が良い、と言いつつ切れる程でもない。背丈が多少高い位かしら」

「なあんだ。永琳にも、とうとう異性として隣に立つ人が出来たのかと思ったわ」

「見た目で興味を惹かれはしなかったけれど、中身は面白そうよ? 彼、何でも 絶対に

壊れない” っていう円盤の中に浮かせていたのだもの。地上でそんな物質は無かった筈だから、人間の能力持ちなのかもしれないわね」

「……その能力って、安直だけど、『絶対に壊れない能力』かしら。永琳、彼つてその能力で自分を守ったんじゃないの？ で、その円盤とやらも破壊不可能に出来るとか」

「ありうるわね。……——ダメ、もう我慢出来ないわ。今日は早めに切り上げる事にします。今取り組んでいる課題を終わらせれば、後は好きにして良いわよ。上には自習という事で通しておくから」

「ちよつ……幾ら何でも、唐突で、しかも投げやり過ぎじゃない!?!」

そんな声を背に受けながら、私は踵を返す。

足早に退出する様子に不満の声を上げる輝夜だったが、今の私はその程度では止まらない。

数百年ぶりに出会った、興味の尽きない観察対象——もとい、実験体——ではない、生贄——……ん？

……おほん。

兎も角、長年に渡る倦怠感を、一風してくれそうなモノが見つかったのだ。

ゆつくりと時間をかけて楽しむのも良いが、少し位は好奇心に身を任せて、前のめりになっても、問題ないだろう。

何せ、*「絶対に壊れない」*かもしれないのだ。

それが精神面でなのか肉体面でなのかを調べると共に……両方であったのなら、どんなに心躍る出会いになる事か。

今日が、輝夜の教鞭を取る仕事だけだったのは幸いだ。

これが綿月達ではなくて良かった。

もし彼女達なら、真面目に話を聞いてくれる分、途中で投げ出すといった、誠実さに欠ける真似は出来ない。

そうして私は、いつも訪れている、蓬萊山の大屋敷を抜け出した。

日頃の行いが良いお陰で、すれ違うこの家の人々は、いつもより早めに切り上げる事に対しても、一切追求は無い。

逆に、『お疲れ様です』『今後とも宜しくお願い致します』などと言われ、少し良心が痛む。

けれど、課題は既に今日教える分は与えてきたのだし、問題は無い。

自分の中で、そう判断を下した。

弾む心を抑え切れず、足早に帰路へ向かう。

久々の感情の高ぶりに、はて、この思いは何年ぶりだったかと考えを僅かに巡らせる。地上から脱出する為の計画を練った時？ 月の都の建国を助力した時？ それとも

綿月達や輝夜と出会った時だろうか。

何にせよ、数百年ぶりの機会だ。

出来るだけこの気持ち継続出来るよう、私は全ての英知を以って、人生の暇つぶし——この命題とも言える難題に、取り組むとしよう。

23 青い人

テンポ良く、木を叩く音が木霊する。

まな板に打ち付けられる包丁が、調理中の独特の空気を演出し、充満する固有の薄い、けれど香りたつだし汁の匂いが彩りを添えている。

盛り付けられた惣菜が、陳列された小皿を飾り、それ自体が一枚の絵のような仕上がりを魅せていた。

ひじき、焼き魚、小松菜にお吸い物。

甘い出し巻き卵と、炊き立てのご飯を盛り付けて、味付け海苔を揃えたら、完成ですつと。

「あーあー、またそんな格好で寝て……。ほら、永琳さん、起きて下さい。そろそろお仕事行かないと、まずい時間ですよ」

「……………ふわあ……………あ……………あら……………もうそんな時間？　ちよつと待ってて。顔を

洗ってくるから」

「配膳しておきましたから、ちやつちやと支度して食べちやつて下さい。俺もその時に頂きますから」

「ありがとう」

そう言つて、永琳さんは寝ていたソファから体を起こし、洗面所へと向かつていった。

僅かな期間しか共に過していないが、相変わらずベッドで寝ない人である。

——こうして暮らし始めて、一週間と一日。

こうなつた原因は、俺が転送されて来た初日まで遡る。

『この部屋で待つてて』と言われ、熟睡していた俺へ、突撃ドッキリお目覚めバズーカ、宜しく帰ってきた永琳さんは、『予定を早めに切り上げた』『実験するから付き合つてね』と興奮気味に、それはそれは素晴らしい笑顔で、捲くし立てるように言い放つてくれた。

で……まあ、色々とおつた訳だ。

こつちは直前まで寝ていた訳で、意識が完全に覚醒する前に、とんとん拍子で準備が進み。

【死への抵抗】を使ってから一日は経過していなかつたよう——浮いていた円盤に、

メスっぽい何かやら光線っぽい何かやらで、色々とかかやってみている、そんな光景をぼんやりと眺めていたら、何故か対象がこちらへと移り、俺も同じような方法を試されたり。

——そこで初めて分かった事だが、破壊不可な効果が俺自身にも掛かってたらしい。

『この試作品』と満面の笑みを浮かべながら、豊姫の使っていた、例の粒子分解を引き起こす扇子——の原型っぽい棒を使って来た時に、衣類が吹き飛び、けれど俺本体は無事なままでいたからだ。

ただ、完全分解とまでは行かずとも、肌がビリビリ痛み出して来た事で、意識が完全に覚醒し、慌てて止めてもらったのだが……先程も言った通り、衣類の方が問題で、一瞬にして上半身裸な男の一丁出来上がり。

……肌がビリビリって事は、完全に破壊不可になってる訳じゃなかったんだな、危ない危ない。

幸運にも、初めの頃に貰った外套は、ベッドの脇にどけてあったので無事だったが、ものの見事に、半露出狂な変態が一人生まれちゃったのですよ。

ただ、その、分解された服も諏訪子さんに作ってもらった、思い入れのある品だっただけに、結構カチンと来た俺が、声を荒げようと腹に力を入れた時、彼女は既に頭をこ

ちらへ下げて、深く陳謝して来た。

どうも、興奮して色々突つ走つてしまった結果のようで、『すまない』『申し訳ない』等々、矢継ぎ早に放たれる謝罪の言葉に、限界点を超えようとしていた理性は急速に熱を失い、さてどうしたものかと悩んだ末に、またも『じゃ、服、下さい』とお願ひしてみた。

何でこう、衣装をコロコロ変えなきやアカンのだと場違いな感想を洩らしたのはさて置き。

今度は和服いってみようか。もしくはそれっぽいのを仕立ててもらおうかな、とか思っていると、それまでは彼女の所へお世話になる流れに。

興奮していた熱も冷めたようで、冷静に今度の対応を話し始めてくれたのは良かったものの、服を壊した罪悪感も相まったせいか、『永琳で良い』『時間は掛かるが、出来るだけすぐに地上への渡航許可を取り付ける』と約束してくれ、その間の世話をさせて欲しい、と現在に至っている訳である。

……ただ、このお方。興味の無いに關しては、とんと無頓着なようなのです。

世話をするなら近くに居た方が、つてことで初めて彼女の家を訪れたのだけれど、その時の第一印象は『うわあ』の一言。

レトルトやインスタント食品の残骸のようなものが散らかり、正装と思われる、高そ

うなドレスなどの衣類も、折り重なるように山済みにされて、そこから僅かにではあるが、下着のようなものが見て取れる——目の保養、目の保養。

しかし、普段使っている場所や道具、白衣やブラウスといった、仕事用の衣類といったものだけは、手が行き届いているらしく、見えた範囲ではキッチンと整理され、あるいはピカピカに磨かれていた。

片や物置、片や聖域の清濁併呑（せいだくへいどん）的な光景を拝む事が出来て、興味の有無で、ここまでキツパリ分かれるものか、と逆に感心してしまう。

“これは興味云々ではなく、彼女の中で必要な行為と不必要な行為を決めている結果ではないか”なんて考えを頭の中で巡らせていると、その事実を忘れていた永琳さんに、『少し出て行って下さい！』と、わたわたしながら部屋から俺を追い出していた時には、何本か、理性のネジが吹き飛びそうになったものである。

そんな訳で、ただ住まわせてもらうのも、忙しそうにしている永琳さんを見ていて気が引けたので、家事全般を俺が引き受け、渡航許可が出るまで永琳さんの実験に付き合いつつ日々を過ごしています。

しかし、一体いつになったら戻れるんだろうか。

一日や二日じゃあ問題はないけれど、週単位での誤差は、正直厳しいですよ。

……といった疑問をぶつけてみたいのだけれど、いつも忙しそう駆けずり回っている

彼女に、今日も今日とて、何も言い出せずに、いつも通りに過ごすのでした、つと。

「お待たせ。それじゃあ食べちゃいませうか」

考えに耽つてしていると、永琳さんが身なりを整えて、食卓へと着いていた。

それに倣つて俺も正面の席に腰掛けて、互いに頂きますの挨拶をして、食事を始める。恐らく一度も使われていなかったであろう台所を片付けて、こうして料理を出せるようになるまでは、片付けやら整理整頓やらで何度か心が折れそうになったけれど、『ファイト!』な精神と怠惰抑制機能をフルに活用して、何とか乗り切った。

家電だと思われる、色々なハイテクっぽい機器は色々とあったものの、あまり俺の中の常識を逸脱した家電製品とかが無くて助かった、と、片付けながら、思ったものだ。

「ん、今日のご飯も美味しいわね。これはどんな料理なのかしら」

「和食、ですね。魚介類と穀物なんかが主体の、俺の故郷の味です」

「あなたの故郷の味……ね。昨日食べたのが洋食で、その前が、中華。……何品か私達も食べている馴染みのものが出てきたけれど、どれもこちらのものより美味しいわ」

「良い食材使ってるからだと思えますよ。俺自身の腕なんて、素人に毛の生えたようなもんですし」

「【ジャンドールの鞆袋】……だったわよね。……本当、どういった原理で食材が出てくるのか、解明出来ていないけれど、凄く便利だわ。本来含まれている筈の穢れが一切付

着していない、地上の品物。……元々ここでも自給自足の為に食材方面での供給は行っているけれど、こうして比べてしまうと味の差……劣化具合が良く分かる。——やつぱり、地上の生き物は、地上にいなければ本領を発揮しないのでしょね」

寂しそうに微笑を浮かべ、永琳さんは食事を再開した。

食材にこういった意見を述べるのもどうかと思うのだが、ある程度の辛い経験は、その後の良い肥やしになる。

穢れと呼ばれる——まあ具体的にどんなものかは知らないが、良くないものであるのは確かだろう。

それを一度も経験する事無く育った……言ってみれば温室育ちが、日々過酷な環境で精一杯その命を真つ当しようと努力している者に適うだろうか。

『野菜舐めてんのか』なんて台詞が聞こえてきそうだが、あくまで俺だけのイメージという事で、ご了承頂きたい。

「ご馳走様」

「はい、お粗末様です。後はこっちで片付けちゃいますんで」

「お願いね」

がつついていた訳ではないのに、あつという間に食べ終わり、食器をまとめて、荷物を持って外へと向かっていく。

一週間前と変わらず、慌しい朝の出勤風景だが、忙しいからといって、省いてはいけ
ない事まで、寛容でいる気はない。

「永琳さん！」

「ん、何？」

「挨拶、忘れてます」

「……そうだったわね。——行って来ます」

「はい、いつてらっしゃい」

この辺は、独男だった俺の自己満足が多分に含まれているが、彼女もそれに嫌な顔一
つせずに付き合ってくれているのだから、決して嫌という訳ではない……と思いたい。

やっぱり、こういう挨拶は良い。

家に誰かが居て、『いつてきます』や『ただいま』を言えるというのは、この上ない贅
沢のうちの一つだと、転生前に、一人暮らしを始めて一年目にして実感した。

この辺は、各々の家庭環境で感想が変わるっぽいのだが、俺の場合は円満だった為に、
このような心になってる。

殺伐とした家族構成で無かった事へ感謝しつつ、若干冷めた緑茶を一口啜った。

備え付け荒れている、窓の方へと足を向ける。

下に広がる景色から、一体どれくらいの高さにいるのか分からないが、中々の上層にいることだけは分かっている。

(幾ら月でもそうそう地球側へ向かえないって事なんだろうなあ。豊姫の助力が得られれば戻れそうなんだけど。……そろそろ本気で帰還方法を考えますかね)

視線の先。

低空を走る車。何をするのか分からない機械の数々。時折、宙を浮く人々に混じって、ウサミミを付けて歩くお方がちらほらと。

窓から見えるその光景は、俺が思い描いていた未来都市とは違う世界である事を訴えかけてきているかのよう。だって、ウサミミとかマジありねえッスよ。——美人は別枠ですがね。

そんな思いに耽りながら、俺は首元に掛けられた小さな青い宝石の付いたネックレスを弄りつつ、朝食を片付ける準備に取り掛かった。

……まるで新婚生活のようだ、という感想に辿り着き身悶えするのは、もう少し先の話である。

いつもの定例報告会。代わり映えもせず、大して新しい事など無いけれど、それでも私にとっては至福の時。

このやり取りも、もはや数える事が適わぬ位に数を重ねてきた。

私の師となって、様々な事を教えて下さった、八意永琳様。

この国の誰もがあの方の事を知り、神格化している者までいる始末。——それには私も含まれているのだけれど。

ただ、今日の永琳様は、いつもと変わっていた。

話をして何処か上の空で、時折何か思い出したように忍び笑いを洩らしたり、明らかに、別のものに対して思考を向けているのが見て取れる。

時折あることなのだけれど、前にそれがあつたのは……かなり昔の事。

あの時は確か、永琳様が、輝夜様の下へ、教師として通い始めた頃。

手の掛かる子供をあやすかのように、けれど一歩一歩着実に成果を上げている輝夜様を見て、永琳様はとても楽しそうにしていらっしやっていた。

「あの……永琳様」

「……ん？ どうかした？」

はあ、と、隣に居た姉が、私にだけ聞こえるか聞こえないか、といった大ききの溜め息をつく。

私だってそうしたいけれど、だからといって、よりもよって、永琳様本人の前で、それをやる勇氣は無い。

「永琳様。興味をそそられるものが見つかったのは分かりますけれど、依姫ちゃんのお話を聞かないのは困ります。——拗ねちゃいますよ？」

「なっ!？」

あまりに唐突過ぎた為に、思わず突拍子も無い声を上げてしまう。

情けない。

如何なる時でも冷静に、それでいて優雅に振舞うよう、努力を重ねてきたというのに。反省する点は反省し……。

「何を言い出すのですか、姉上。私は別に、そのような気持ちは持ち合わせておりません」

言うべき所は言っておく。

そうでない、この私の姉——綿月豊姫は、どんどんこちらに踏み込んでくる。悪い意味で。

「あらそう？　あながち間違いでは無いと思うのだけれど。——依姫ちゃん、目が泳いでいるもの」

「ぐっ」

みつともない声が漏れて、永琳様に聞かれてしまったであろう事実、羞恥心から顔へと血が上るのが分かる。

これはまずい、と、弁明するべく、視線を永琳様に向けるが、

「……」

何とかこの醜態をカバーしなければと思った相手は、またもや思考の旅へと出て行ってしまっていた。

「……これは重症ねえ」

「姉上、永琳様が病気のような発言はお控え下さい。それに、今までにもこのような事は、何度かあったではないですか」

「でも、その時だって、こんなにご自身のお考えに没頭しているの、初めてじゃない？」

「それは……」

確かに、今までに見た事無い程に上の空であるのは、間違いない。

過去に似たような事態は間々あったけれど、それでも少し意識が他所へ行く程度のもので、ここまで自己の世界へ閉じこもってしまふ様なものではなかった。

永琳様が、そこまで頭を悩ませる出来事……。

……私にも、何か手伝える事は無いだろうか。

「永琳様」

「……あら、またやっちゃったのね。ごめんなさい。ええと……豊姫に、試作兵器の実験をお願いする話だったかしら」

「そうですが、それは後ほどで構いません。ただ、永琳様があまりに他所へと意識を飛ばしていらつしやるので……。一体、何かあったのですか？」

「——そう！ そうなのよ！ 何かあったの！ 聞いてくれる!？」

「は、はい。私で宜しければ……」

後は、永琳様の独壇場だった。

何でも、数日前に探査機の帰還に巻き込まれ、人間が一人、巻き込まれて来たのだとか。

その人間に興味が沸き、色々と経て家に住まわせ、実験に付き合ってもらっているらしい。

まさかあの探索機械の転送に巻き込まれて、生きている生物が居るなんて……ん？

家……に……？

「あの、永琳様」

「どうしたの？ 今の説明じゃ、足りなかつたかしら」

「足りないといえれば足りません。今さらつと、その人間を家に住まわせている、と聞こえた気がしたのですが」

「ええ、そうよ？ 彼、こつちが悪い事をしたつていうのに、色々と家事を引き受けてくれて……。掃除は普通で、洗濯は、やつぱり私も女ですから、完全に任せられないけれど、料理がとても美味しいの。……やつぱりあの「ジャンドールの鞍袋」は量産されるべきよね、あれの技術を獲得すれば輝夜が続べる頃には、月はまた一步豊かになる……そうすると輝夜の家の研究所じゃ物足りない、か……。国立の研究所に持つていて……それから……」

「またも別の思考へと、考えが飛び火している永琳様を他所に、私もまた、別の考えを巡らせる。」

……今、あの方は何と言つた？

家に、人間を置いている？

訪れる事は度々あつたが、あのきつちりと住み分けされた家に、人間がいる。

……永琳様は、あのようなお方だ。月の頭脳であり、様々な知識を行使して、各種分

野で、その英知を存分に振るっている。

それに限らずあの容姿。

流れる星々ですらも、見惚れて、その動きを止めてしまふだろう。

加えて、その権力。

色々な機関の相談役やお目付け役を任されており、彼女が白と言えば、例えブラックホールやダークマターですらも、白くなる程の力をお持ちだ。

そんなお方なものであるから、その付属品——権力や友好関係——に惹かれるのは、一部の者にとっては当然だが、異性は勿論、同姓からもそれらを抜きにしても、一生を添い遂げたいという思いの丈を、何度も告白されている事を、私は知っている。

……私だって、今の立場でなければ、それら人々の仲間入りを果たしていたであろう事は確実。

それ程、魅力的なお方だという事だ。

そして、永琳様はそれら全てをお断りして、現在に至る。

いつか、前にさり気なく、『添い遂げる相手はどんな人が良いか』と尋ねてみたが、『興味を引くような相手が好ましい』と仰っていた。

事実、言い寄ってくる者達はすべて、すぐに底が見えてしまったりするようで、未だにそれらしいお話はお伺いしたことは無い。

資産、権力、頭脳であの方に適う者は居らず、かといって個人特有の——能力と呼べるそれは、その性質から名前を聞けば、対外の憶測は立つ。

言い換えるのなら先程の例と同じように底が浅く、継続的に興味を掻き立てられない場合が殆どだ。

その点で言うのなら、私の『神霊の依代となる能力』は、永琳様に大変喜ばれていた。世界には、無数とも思えるほどの神が居る。

穢れてしまった地上を管理する為、古今東西、ありとあらゆる神々がその能力を行使し、それぞれの理に沿って存在しているのだ。

私は、そんな方々を呼び出し、使用してもらおう事が出来る。

要約するのなら、能力のレンタル。

数日に一度、永琳様と一緒にこの能力を検証し、データを取る事が、もはや当たり前になってから久しいけれど、その役目を私以外の者に奪われそうになっている。

——分かつてはいるのだ。これは暴論どころか、ただの我が侷だという事くらい。

あの方が他のものに興味を向けられる事態は、今に始まった事ではないし、私達との関係を無碍にしている訳でもない。

ただ単に、永琳様と他の誰かが、私以上に親しくなるのが許せないだけ。おまけに、その相手は異性だと言うではないか。

——ギシリと。

腰に据えられた刀を強く握り込む音が鳴る。

「……依姫ちゃん、顔が怖い事になつてゐるわよ?」

「……申し訳ありません、姉上」

「良いのよ。可愛い妹の為ですもの。——見栄を張りたい人の前では、しゃんとして居たいわよね」

「……ありがとうございます」

うんうん、と、満足そうに頷く姉上に頭を撫でられながら、それを振り解けずに居るのは、こういういたた行為を幾度となくやられている——長年に渡る刷り込みが原因だろう。

そうだ、そうに違いない。

決してこの感触が心地良いからではなく、もはや抗えぬ体にされてしまっただけの事だ。

撫でる姉上の穏やかな笑みも、それに釣られる様に緩む私の頬も、もはや仕方の無い事なのだ。

「んもー、依姫ちゃんったら、かーわいー」

そう言つて、姉上は撫でるだけでは飽き足らず、こちらを包み込むかのように抱擁し

て来るのを感じながら、私は流れに身を任せる。

……これも仕方の無い事なのだ。そう、思いながら。

永琳様は思考の海に漕ぎ出しており、依姫ちゃんは、そんな永琳様が気に入らない様子。

明日か明後日になれば依姫ちゃんの実験を行う予定だというのに、少し嫉妬深いのではないかと将来が不安になる。

この分では、今日の定例報告会を取り止めてしまった方が、建設的だろう。

何か真新しい出来事があった訳でもなく、すぐさま対処しなければならぬ問題がある訳でもない。

だったらこんな不毛な会議は中止して、永琳様にも、依姫ちゃんにも、そして私にも有益な提案を試してみる。

「じゃあ、その九十九さんって方に会ってみない？」

はっとした様に顔を上げる依姫ちゃんに、それは良い、と何処か納得されたような表情を浮かべる、永琳様。

「ですが、今回の定例報告会は……」

「早急に対処しなければいけない問題なんて無いでしょ？ だったら、もつと時間を有意義に使わないと」

「しかし……」

やっぱり依姫ちゃんは真面目だ。

本当は、今すぐにでも悩みの元であるその人物の所へと向かいたいののに、任せられた仕事を完遂しようと、がんばっている。

「律儀なのは、あなたの誇るべき所だけれど、時と場合でそれらを使い分けても良いんじゃないかしら。今は戦でもなければ急を要する事態でもない。だったら、今までがんばっている分を、こういった時に生かさないと。……それに、あなただけじゃないのよ？ 私や、そして永琳様も望んでいる事なの」

「永琳様が……」

この手の言葉に弱い妹は、うんうんと唸り込んで下を向いてしまった。

このパターンは倫理と私情が葛藤して、しばらく決着のつかない状態だ。

グラグラと、どちらに倒れるともしれない振り子のような存在。

……つまりは、後一押ししてあげれば、どちらにでも転ぶ状態でもある。

「悩んでいても始まらないわ。さあ、行きましよう。永琳様もそれで構いませんわよね」
「そうね。そうしてくれるのなら、私は嬉しいかしら」

「ほら、永琳様も喜んで下さっているわ」

「喜ぶ——。分かりました。そう仰られるのでしたら、その提案を受け入れます」

そんな事言つて、こつちには頬が緩んでいるのが丸分かりよ？ あちら（永琳様）はどうか知らないけれど。

あの方つて、変なところで鈍いんだから。

「よし決まり。じゃあ早速出発しましょう。永琳様の家なんて、いつ以来かしら。相変わらず、色々と「飽きさせないお部屋なのでしょうね……あ、そういえば、九十九さんという方が家事をしているんですしたっけ」

「ええ。必要な事以外だと、どうも優先順位が下がるのだけれど、彼が居てくれるだけでその手の仕事が付いて、楽になって良いわ」

「ですから、前々から給仕か玉兔を雇つてみてはどうですか、と、申し上げているのです。姉上からも何か仰つて下さい」

「えー、永琳様は『完全に、自分に仕える気にいる人を相手にするには、どうも……』つて前々から仰つていたじゃない」

「では、何故今は地上の……しかも異性を家に置いているのですか！」

あらあら、とうとう不満が爆発しちゃったわ。

すぐに我に返っているのは評価出来るとして、その後の——わたわたとしている態度は、軍部の上に籍を置くものとして、先が思いやられるわよ？

ただ、その点については私も気になっている。

だからこそ今こうして永琳様の家へと向かおうとしているのだし、その相手——十九という男性にも、興味が沸いていたのだけけど。

「ああ、それは……。彼が気構えせずに……自然体でいるから、かしらね」

そうお答え下さった永琳様は、まるで、今までに無い安らぎを見出せた、疲れた旅人のように、そつと優しい笑みを浮かべた。

「今まで私の元へ来るような方達って、『命に代えてもがんばります！』、って息巻いているような思考ばかりだったのよ。嬉しくない訳じゃないんだけど、少しね……」

それを聞いて、依姫ちゃんは、心に刃物を差し込まれたかのように、動きを止めた。

心当たりがあり過ぎるのよね……。

だって、使用人の提案を持ちかけたのは、あなたが言い出した事だけれど、それが、自分が永琳様の下でお世話をしたかったからだし。

事実、それ位の覚悟を伴って、事に当たろうとしていたのでしょう？

それが永琳様には荷が重かった、という事なのでしょうね。

「九十九さんは、がんばります、という気構えではあるのだけれど、そこに自分の命を対価にするような意思は持ち合わせていないの」

続けるように話す内容に、とうとう心が折れたのか、その場でガクリと膝を突かんばかりに影を落とす依姫ちゃんの姿は、見ていて中々に……いじめたく……おほん。守つてあげたくなる。

「依姫ちゃんが連れてくる従者候補つて、みんなその手の『命に代えても！』な精神の持ち主だったものねえ。良かれと思つてやつていた事が、逆だったわけね」

ああ、もう天照大神が岩扉に引き籠もってしまったような暗さだわ。

我ながら酷な追撃に、やり過ぎたとは思ふものの、反省する気はまるで無い。

だって私、お姉ちゃんですもの。

妹は愛でるのが当然ですわ。

……でも、やつぱりやり過ぎは良くないわよね。

困った顔も落ち込んだ表情も一瞬で充分。

それ以外は、単なる不純物。

「ほらほら、いつまでも落ち込んでないの。そのもやもやを解消する為に、これから永琳様の家へ向かうのでしょうか？ 今からそんなになつていたら、いざという時に判断も対

応も間違えてしまうわよ？」

自分でも、今の状態はまずいと思っっているようで、緩慢ではあるが、ゆっくりと気持ちを入れ替えるかのように、雰囲気を払拭させていくのが分かる。

いずれは自力で立ち直れるように……ゆくゆくは、そもそも躓かないようになってほしいのだけれど、この分だと数十年は掛かりそうね。

「申し訳ありません。もう大丈夫です」

「妹を助けるのもお姉ちゃんの勤めよ？（私が原因の一端でもあるし）」

「ありがとうございます」

先程までとは一変し、いつもの凜とした態度に戻った。

我が妹ながらこの変わり様は、将来が不安になってくる。

私も人の事は言えないけれど、添い遂げる人が見つかるのかどうか心配だわ。

しかし、これでも昔に比べれば大分改善はされて来ているのだから、いずれはこういった変化も見せる事は無くなるのだろう。

それを嬉しいと思うと同時に、自分に弱みを見せてくれない妹に少しの寂しさを感じてしまうのは、少し我が侷なのかしら。

「さて、それじゃあ気分も平常に戻った所で——。永琳様、行きましよう。迎えに玉兎を呼んであります。外で待機している筈です」

「相変わらず根回しが良いのね。助かるわ」

「いえいえ、私も、その地上の方を早く見たいですから」

あらあら、と困った子供を窘めるかのような様子で、永琳様は微笑む。

なんて暖かい……柔らかな笑みを浮かべる、お方なのだろう。

依姫ちゃんも大概だけれど、私だって負けず劣らず月の頭脳に心酔しているのは、疑いようも無い事実。

ただ、あの子よりも隠すのが上手いだけ。

だから、依姫ちゃんには悪いけれど、今は私が永琳様と戯れよう。

こうしたいが為に、今まで自分を抑えてきたのだし。

羨ましそうにこちらを見つめる妹の目線を背中に感じつつ、私は永琳様の視線を一身に浴びながら、溢れる様な笑顔で玉兔が待つ屋外へと、踊る様に歩いていった。

そろそろ正午を迎えようかという時間帯。

それぞれの建物からは、少し早めのランチに繰り出してきている人々や、そんな彼らを迎へ入れる為の準備で忙しい飲食店が、各々の役割をこなしている。

そんな地帯を通り過ぎ、一般と呼ばれる裕福層の住む地区を通り過ぎ、閑静な住宅街——入るのに警備員を通らなければならない、べらぼうに高級な地区に入ってから、また少し移動した所に、八意永琳の住居はあつた。

高層マンション。

その名称がピタリと当てはまるその場所は、この蓬萊の国の重鎮や偉人など、本人達の匙加減一つで幾らでも国の方針を変更してしまえるような怪物の住まう場所。

勿論、全員が全員、この建造物に住んでいる訳ではないが、決して少なくない人数が暮らしていた。

永琳自身はこんな場所などではなく、もつと静かで人つ気の無い場所へと住みたかつたのだが、周りが『建国の偉人がそんな場所に住んでいては面子が立たない』と全員一致でここに住まうように推し進めた結果である。

「永琳様の住居って、何階だったかしら？ 百八？」

「その通りです、姉上。ご存知ではありませんか」

「確認よ確認。……いつ以来かしら。こうして三人で、永琳様のお宅へお邪魔するのは」

「今でも、鮮明に覚えています。あれは永琳様が『あなたの能力、面白そうね。ちよつと家まで来ない?』と誘つて頂いた……」

「……こうして改めて聞いてみると、我ながら悩ませられる会話だわ。九十九さんの時には違う対応を出来ただけ、私も進歩出来たのかしら……」

「永琳様、その九十九さんって、印象はどんな方ですか? 家で何をしているのかはお聞きしましたけれど、内面的なお話はまだ伺っていませんわよね?」

「つい先日、輝夜に似たような事を聞かれた気がするわ……。そうね、まだ一週間程度しか観察していないけれど、悪くは無いわね。性格は、これといって筆頭する点は無し。欠点らしい欠点はないけれど、特に優れている、といった項目も無し。良くも悪くも男の子よ? 彼」

「男性、でしたわよね。お幾つの方ですか?」

「成人になったばかり、と言つていたかしら。肝心の年齢は誤魔化されてしまったけれど」

「なつ! 永琳様の質問を誤魔化すなどと、何と恐れ多い!」

「依姫ちゃん、そういうった態度が永琳様を困らせているの、忘れたの? その忠義は素晴らしいものだけれど、程度を考えなきゃ」

「……そうでした。私とした事が、どうもこの話題には、感情が大きく揺さ振られてしま

います」

「あなたは色々と成長する範囲が多そうで、私としても嬉しいわ」

そんな……、と照れた様に俯きながら、永琳達は大きな扉の前で止まった。

永琳自身は純粹に他意のない言葉だったのだが、考え様によつては、大變相手を侮辱している発言でもある。

しかし、言われた当人は永琳の言葉を屈折して捉える人物ではなく、その台詞の裏に隠れた意味を分かつた豊姫は、けれど永琳の性格を把握しており、それを指摘する事は無い。

互いに、信頼で結ばれているからこそその現状であるのだ、と言えるだろう。

——そうして現在、百八階にある、玄関前。

この建物は一フロアそれぞれが独立しており、一階層毎に巨大な家が丸々一つ納まっているような作りになっている。

その中でもこの階層は最も拡張が配慮された設計が施されており、言つてしまえば、永琳が研究や実験を行い易くする為に改築に改築を重ねて、国が保有する技術の一つ下か、それと同等の能力を有している。

最も、規模の關係上、幾ら一級品の技術とはいえ、一定の範囲でしか使えないのだが、「九十九さんには、今日の夜まで戻らないって話していたから、今戻ってきたのなら、

きつと驚くわ」

「あら、サプライズな出会い方になる訳ですね。初対面だから、なるべく良い印象を持って貰いたいんだけど。依姫ちゃんはどうするの？」

「これといって何かしようとは思っていません。いつも通りに会話をしてみても、それから判断します」

「その割には、声が荒くなっているわよ？」

「……多少の感情の変化は、致し方ないだろうと判断します」

「あらあら、物騒な事ね。あ、でも、彼の周りに金属板が浮いているようなら、切り掛かっても良いわよ？」

「例の『絶対に壊れない能力』でしたか。……面白い。私の長刀の錆にしてください」

「本当、面白い子なのよ。……何ていったって、彼の能力、あなたと似ているの」

「私の……ですか？」

「ええ。初めは壊れない能力を検証する為に色々と行っていただけけれど。……ふふ、まあ良いわ。実際に会ってみなさいな。八百万の神々を降ろす者として、面白い経験が出来る筈よ」

訝しむ依姫を他所に、私は自宅へと入っていく。

恐らくこの時間帯なら、九十九さんは料理をしているのかもしれない。

……ほぼ間違いなく、「ジャンドールの鞍袋」を使つて。

初めこそ、その能力である、絶対に壊れない金属や体について研究しようと息巻いていた。

けれど、どうだ。

時が経つにつれ、彼の持つ能力の多さに、問題が解決するどころか、蓄積されてしまつている。

壊れなくなつたかと思えば料理を出し、疲れて帰つてきた時には燃えるような赤い鳥を呼び出して、私の心を楽しませるよう配慮してくれた。

疲れが取れる湯だと言つて、特殊な水で湯船を満たしてくれた時には、その効能から、思わず、今行つている研究の何割かを削つて、この湯の精製に取り組むべきなのではないかと考え込んだものだ。

残念な事に、彼は過去を聞かれる事と自身の能力について話す事に抵抗があり、詳細までは判明していないけれど、まだまだ色々な事が出来るのだという言葉が見てとれた。

お礼にと、念話を応用した、意思疎通が出来る機能を持たせた石を、首飾り状にして渡したら、とても喜んでくれたようで、何でも、今日帰つたらお礼をしれくるのだと言つていた。

本来なら、こちら側の方が、すぐさま渡航許可を取り付けなければいけない状況であるのだし、だからこそ、それが出来ていない現状の貸しを返したただけだというのに、まるでそれを意識していない。

このままでは、一方的に（罪悪感）借りが蓄積されていくだけである筈なのに、この状況が、むしろ心地良い。

さて、お礼とは何かの食事だろうか。それとも贈り物だろうか。

もしかしたら、能力の説明かもしれない。いやいや、それを教えられたのなら面白さが無くなってしまふのではないか。

少し早めに帰宅してしまつたけれど、準備が必要なサプライズだったのなら、何と云つて困らせてあげよう。

様々な「もし」に心を躍らせながら、九十九さんが居るであろうリビングへと2人を案内する。

はて、自分は一体何故こんなにも心躍るようになっていたのだろうか。

特別何かをされた訳ではないのに、彼に対する興味は膨らみ続けている。

「九十九さん、今帰つた……わ……」

青い者。

目の前にいるのは、そんな……男性だろうか

容姿について詳細に観察する間もなく——その男は既に上げられていた腕に、力を込める仕草をした。

そうして。

何の抵抗も出来ずに、豊姫と依姫の二人はその場に崩れ落ちた。

私自身も急速に意識を失いそうになりながら、耐えられないレベルではないと判断しつつ、即座にこの部屋の警報装置を作動させようと、亜空間パネルを開いた。

場所が場所なだけに、この家の警備が嚴重な筈だったのに……。

何故、見ず知らずの何者かが侵入しているのか。どうして、警戒網が全く反応していないのか。

でも、この警報装置を作動させたのなら、後は迅速に警備隊がここへ応援に来てくれるようになっていく。

何はともあれ、これで謎の侵入者にも対処出来る。

——そう、全く感触の無い、何も現れていない手元を見るまでは、思っていた。

腕が切れている訳ではない。完全に手だけが五感から切り離されているかのような。

訳が分からない。

そんな些細な疑問に考えを巡らせる間もなく、青い男は何らかの力を使って、こちらの意識を刈り取ろうと、さらに力を強めてきた。

もはや完全に理解の追いつかぬまま、私は床へと倒れ込む。

希薄になっていく意識の中で、青い男の後ろに、九十九さんが何か起きているのか理解出来ないといった表情で現れた——現れてしまった。

逃げて、と。

そんな言葉すら声にする事は無く、私の意識は、深い闇へと落ちていった。

24 プレインズウォーカー

食器も片付けた。洗濯物も干した（自分のだけ）。

掃除も、大雑把にはあるが、とりあえずは終わった。

そんな、全てが一段落ついた、午前の空白の時間。

煎餅でも齧りながら、テレビでも見ていたい気分なのだけれど、困った事にそのテレビに値するものがどれなのか、ここ一週間検討もつかず。

かといって、自分の中でそこまで優先度の高い項目でも無かった為に、永琳さんに聞くといった事も、していない。

流石にぼけーつと過ごすには抵抗があるので、ならば、と、前々から考えていた、脱出方法を模索してみる事にした。

（何処から切り込んでいくかなあ。カード名？ フレーバーテキスト？ カード効果だとピンと来ないしなあ）

そのまま悩む事小一時間。

頭を抱えたり、うんうん唸つてみたり、貧乏揺すりで室内に地響きを起こしてみたり。手元に置いてあつたカップから、飲み物が完全に消え去つた頃、ようやく考えがまとまった。

(よっしゃ、例の方を召喚してみましようかね)

ソファアールから立ち上がり、大きなリビングの中央に陣取る形で目を瞑る。

今までとは全く異なつた召喚に、内心で期待と不安が闘ぎ合う。

【土地】「アーティファクト」【エンチャント】「インスタント」【ソーサリー】「クリチャー」

新たに呼び出そうとしているのは、それらとは全く別のカードタイプを持つもの。

その名を、『プレインズウォーカー(略称・PW)』。

マジック・ザ・ギャザリングにおいて、決して語らずには居られない存在である。

『ブレインズウォーカー（ストーリー）』

MTG界において、世界と世界を行き来する、次元を超えた活動が出来る存在の事。カードゲーム、マジック・ザ・ギャザリングはプレイヤー自身がこのPWになった、という設定で対戦が行われる。

次元を渡る能力は勿論の事、その保有する魔力は無限であり（放出力は個々で違う）、神の如き存在となる。

そのせい、ほとんど不死とも思える寿命を持つ。

世界をも変えうる力を手にしたブレインズウォーカー達は、それぞれ自身の決めた道に従って、その力を振るうようになる。例えそれが、世界の破滅を願うようなものであっても。

『ブレインズウォーカー（ゲーム）』

自分の下へ増援として駆けつけて来てくれた、2人目のプレイヤーとも言えるカード。

召喚されたのなら、三々四つある呪文の中からプレイヤーが選択したものを行使し続け、ライフドレイン、クリーチャー召喚、手札補充などで恒久的に、何かしらのアドバンテージを獲得してくれる、優秀な存在。

自身が召喚したのなら頼もしく、相手が召喚されたのなら、真っ先に対処したいカー

ドでもある。

これから召喚しようとするのは、MTGで最も召喚コストの低いPW。

属性の色は、青。

読心術・透視・念動力・テレパシーなど、精神操作系魔法の神童とまで呼ばれた者。名を「ジェイス・ベレレン」。

陰気な性格なれど、非常に強い好奇心と知識欲を持ちあわせせた、自身の力の使い道を悩む者である。

「ジェイス様！ いらつしやーい！」

某新婚さん応援番組のようにコールしながら、初めてのPWとの対面に心を躍らせる。

通例通り、瞬間に集まった光が四散。

久々の3マナ召喚の為に疲労感が一気に襲い掛かってくるが、体力もついたお陰でそ

ここまで気になるような事にはなっていない。

召喚し続けている勇丸と合わせて、4 マナを使用している計算になるけれど、まだまだ余裕が崩れるような事態には陥らなそうさ。

俺も進歩しているんだなど実感しつつ、現れたのは全身を青黒いローブで覆った、身長が俺より頭一つ程高めの男。

ローブと一体となっているフードで目元が見えないが、カードだってそのように表記されているのだから、特別気にはならない。

……そう、今までは。

(来た！ 生ジェイス様来た！ これで勝つる！)

——こう思ったことは無いだろうか。

テレビやPCの前などで、『も少しカメラをずらしてくれれば』と。

見切れているあの風景が見れる。全体像が確認出来る。色々な角度から撮影対象を観察出来る。

そして、もはや察しの良い者なら容易に想像出来るであろう事。

……パンツが見える。

……。

生憎と、現状はそういったものではないので、今の考えは無かった事にするとして。

今の興味の対象は、ジェイス様の顔である。

カードでは、顔がフードに隠れた、青の魔法使い、といった印象が強かったけれど、それは雰囲気がそうであつたから、という、安直な考えからだ。

しかし！

目さえ見たのならそれら印象も変わってくる。

ベンゾウさんやのび太君の③の目。

普段はビン底のようなメガネを掛けているけれど、外したのなら、パッチリお目々の美人さんがこんにちは。

前髪に隠れて見えない、時折奥に見える目が何かを訴えかける設定のキャラ達。キタ

ロー！

興奮しているのは自覚しているが、いつもストツパー役であつた勇丸は、この場に居ない。

ならば、誰も俺を止める事など出来ないのだ！

（どんな目なんだろうなく。パッチリ系？ キリツと系？ ……まさか③系じゃないだろうな）

シリアスな風貌でその目は反則だな、と思ひながら、腰を曲げて、ジェイスを見上げる様に体を動かす。

……が、彼の手が俺の目の前まで伸び、指を一本立てて、ゆっくりと左右に振る。

実際には言っていないものの、『チツチツチツ』と声が聞こえてきそうな仕事をされ、そしてそれが凄く似合っていると来た。

(……あれですか、見てはダメなんですか。そのお顔)

その通りだと言わんばかりに、ジェイスは腕を下ろし、その存在感を放つ様に佇む。

こりや、諏訪子さんや神奈子さんと対峙している時の様だと感じながら、初ジェイスとのコミュニケーションを試みることにした。

といつても、身体言語(ジェスチャー)をする程でもないので、軽い対話から。

この辺は『俺が召喚したカードの云々だから』、という意識は完全に切り捨てて、一人のPWとして彼と接する感じでいく。

精神・知識・文明を代表する青の属性を持つ、あらゆる面で俺よりも秀でた能力を有している人物。

始めて出会った時の諏訪子さんよりも若干崩したような、神奈子さんよりも上な態度で、事にあたる。

『調子はどう?』『お腹空いてない?』『したい事ある?』『とりあえず緑茶ですがどうぞ』等々。

何気に初めての人型でもあったので、対話出来るかとも思ったのだけれど、声に出す

言葉はなく、全て念話で内容を伝え合う。

意外と気さくに話してくれているのに気を良くして、『いやあー、永琳さんって人がね』など、長々と、全く関係のないところまで話が飛び火してしまった。

そうして過す事、はや数時間。

若干ギスギスしながらも、名前を呼び捨てで話せる仲には、親睦を深める事に成功した。

初めは、ただの利害関係での繋がりで接する事に抵抗があつたけれど、話していく内に、彼の思慮深い性格やらが垣間見え、それらに惹かれる様に話へのめり込んでいく。

あつという間にお昼頃に差し掛かった頃には、何となくではあるがPWの存在というものが、俺の鈍い頭でも掴めて来た。

やはりこの存在は特別なようで、ある程度の自由意志と、『第二のプレイヤーの立ち位置』という設定に偽りは無く、MTGでカード化されているものは勿論、されていない呪文まで行使出来るのだそう。

ただし、そのキャラの属性……【色】からあまり外れない、という制約は付くようだが。

彼だけに限った話ではないが、PWは様々な呪文を行使出来る存在である。

ジェイスの属性マナは、先にも述べたように、青。

その色らしい各種トリッキーな呪文を多分に習得しており、呼び出せるクリーチャーも幅が広い。

小型であるフェアリー種などの妖精クリーチャーや、同じく小型クリーチャーとしての位置付けに在る、ドラゴンの小型種、ドレイク。

小々中型に多いエレメンタル種——精霊タイプに、知性の獣としての要素が含まれた中々大に多いスフィンクス種など、自身の属性に沿った、多種多様なクリーチャー召喚、使役する一面も持っている。

大雑把に言ってしまうと、このPWというカードタイプは、*「固有の神の召喚する」といったイメージが合っているのではないかと思う。*

そしてここが最も重要だと思うのだが、このPW、強固な意志の持ち主である事は間違いないのだ。

PWになるには、皆、精神的に大きな切欠が必要らしく、肉親の死、生命に関わる危機的状况など——中には瞑想の境地の果てに開眼した者もいるようだが——大半の者が強い精神的負荷を経てからこのクラスになっている。

よって、例えば俺が召喚し、従順にしてくれる存在になっただとしても、それらを覆して謀反？ でも起こされたら一発で人生リセット。

それだけならまだしも、最悪、一生傀儡にされてしまうかもしれない。

特にこのジェイスさん。

直接的な攻撃力は他のPWよりも低いものの、精神・幻術関係での腕は一級品、を乗り越えて無双状態。

MTGは、そも物語の延長線上に点在しているものであり、そのMTG内でのストーリーが進めば、ジェイスは相手の精神を崩壊や形成出来るなど、内政チート——というより、対人関係無双が、余裕で可能なお方なのだ。

ただ唯一の救いは、当の本人がその手の精神攻略を忌避している、という事。

読心術や精神掌握ならば、ある程度はやってくれるようなのだが、『精神崩壊だー』『精神形成だー』『記憶の改竄？ 余裕です』、って事には、色々と、思うところがあるらしい。

知識欲が多分に強い、という点を除けば、初対面でも即座に見敵必戦とはならないだろう、と踏んで、ここにお呼びした訳である。

どこまでPWが自由意志を持っているのが判断し難いが、それは今後、慎重に調べてみるとして。

(ん、そろそろ本題を尋ねてみようかな)

ある程度ではあるけれど、これならば問題なく俺の言う事も聞いてくれそうだと判断しながら、彼に尋ねてみる。

「ジエイズ……さんって、次元移動ではなくて、星々の間を移動する事って出来ますか？
具体的には……大体四十万キロ位なんですが」

呼び捨てで良いと本人から承諾は貰っているのに、どうにも畏まってしまふ。

けれど、そんな事は気にもしていないようで、さらつと言ったありえない長距離にも、彼は不敵にニヤリと口元に笑みを浮かべた。

その反応から判断するに、俺の答えに対しては肯定してくれているようだ。

おお、なんて頼もしい存在なんだPW。

これは多用する日も近いかも、なんて深く考えずに、そう思っていると、

——唐突にジエイズがソファから立ち上がり、玄関の方へと顔を向けた。

下がっている、と、意思が伝わって来て、とりあえず指示された通りに、奥の部屋へと移動する。

（永琳さんは今日の夜まで戻らない筈……。誰だ？ 防犯設備は完璧だつて聞いたから、泥棒な訳は無いだろうし……。となると、永琳さん関係の知人の線が濃厚。……ああ、別に隠れて住んでいる訳じゃないから、見つかつても良いのか）

永琳さんに連れられて、俺は何箇所かの研究機関に訪れていた。

『面倒はこちらで見ている』なんて前に施設の人に伝えているのを聞いてもいたし、疚しい事は無い。

最も、周りがどう思うかは、別問題であるのだけれど。

その話をした時の関係者つぽい人達の顔といったら、まさに啞然、の一言に尽きるだろう。

イエーイ！ 美人と一つ屋根の下フォー！ なんてな！ なんてな！ ぐははははは！

……手は出しませんか？ 死にたくないですからね。

さて、それならば、ジェイスが俺を逃がす様に行動するだろうか。

家に用事があるだけなら、心の機微を誰よりも熟知している——そして、それがリアルタイムで把握出来る彼ならば、そんな真似はしない。

十中八九、この家——ないし、俺に敵意を持って訪れる人物が来た、と判断するのが妥当だろう。

ギクシヤクしながらも、何とかジェイスの指示通りに、距離を取った。

近くにあったソファアーに身を隠し、いざとなったら攻撃&防御&脱出のどれでも選択できるように、脳内にカードを思い描いておく。

すると、玄関の方から扉が開く音が聞こえ、続いて何人が室内に侵入してくるのが

分かった。

『複数で来るなんて、ますます永琳さんじゃない』と思いながら、ジェイスの方を見てみれば、彼は両手を音の方へと突き出し、何かの呪文を練っているかのようだった。

詠唱呪文とか聞こえないんだな、とか思いつつ、完全にソファーへと体を滑り込ませ、心を静める。

室内なのだから、威力の低い熱傷の槍や、お粗末といった相手を無力化させる呪文などが周囲に被害を出さずに済むのではないかと思いつつながら、

「九十九さん、今帰った……」

聞きなれた声に、思わず頭の中が真っ白になった。

高級なガラスを鳴らした様な、澄んだ声。

もはや誰が、との疑問すら湧かず、断定出来る。

八意永琳さん、その人である。

（ハッ!? いやいや待って待て。永琳さんの声だけ録音とかで、それに釣られて俺が出てくるのを誘う作戦かもしれないじゃないか!）

ふふふ、危ない危ない。危うく騙されるところだったぜ。

気が緩んで『はい』とか返事をしたり素直に出て行った日にやあ、即デンジャーコーすまっしぐらさー!

おのれ未知なる侵入者よ、人の情を餌にするとは、何と卑怯な。

その卑しい心に俺が正義の鉄槌を喰らわして……、つて、あ、隠れるも何も、ジェイスがさつきから囿になってくれてるんだったか。

とか思っている間に、

何か、重量のあるモノが地面へと接触する振動が響いた。

(あん？ まるでそこそこ重い湿った肉の塊が床に崩れ落ちるような音が……)

永琳帰宅↓ ジェイスが対処↓ 何かの魔法で永琳を攻撃↓ 永琳昏倒？ ↓ ド
サツ

当たっていたのならヤバい図式が脳内で構築されるが、ブルブルと頭を振って、嫌な考えを吹き飛ばす。

(いやいや何も永琳さんが倒れたと決まった訳じゃない。ジェイスが返り討ちになった可能性も……どっちにしたってダメじゃねえか！)

現状が分からないのなら、分かるように行動するだけ。

混沌としているであろう場を確認する為に、慌ててソファアの陰から身を乗り出して
みた。

(……おうふ)

飛び込んできた光景に、クラツと意識が消え掛ける。

予想とは違ったが、状況的には想像通りだった展開に、思わずオーマイゴット、とか洋風に諏訪子さんへの祈りを捧げてみた。

想像通りだったのは、ジェイスが何かしらの魔法を使って相手を昏倒させ、その相手が床へ倒れている事。

予想外だったのは、倒れているのが永琳さんだけではなく、金髪と薄紫の色をした長髪の人物が二人、既に倒れている事。

(永琳さんの知り合いで、薄い金髪に、同じく薄い紫色の長髪のポニーテール……綿月姉妹ですね、分かります)

俺って何でも知ってるなあ、と、軽く現実逃避しながら、あわあわしている間に、永琳さんも彼女達と同じ様に床へと崩れ落ちていた。

顔だけは何とか上げているものの、今にも昏倒してしまいそうな様子が伺える。

(つてそれどころじゃねえ！)

我に返って、現状を急いで確認。

倒れているのは永琳さんと、綿月姉妹っぽい人達。

ジェイスは健在で、むしろ問題はそのジェイスが彼女達を昏倒させた可能性が大。

……これは婦女暴行とかに部類されるんだろうか(汗

まあ、とりあえずは。

「ジェイスさーん！ ストップ！ ストップでーすー！」

この惨状を、これ以上悪化させないよう勤めるのが俺の責任だと思う。

どうにかして被害が広がらないよう、静止を呼びかけたものの……どうやら間に合わなかったようだ。

たつた今、最後の力を振り絞っていたと思われる永琳さんの首から、力が抜けた。

幸いにも『ゴンツ』なんて音がせず済んだのだが、この状況はいただけない。

狙って出来る事ではないとはいえ、月の重要人物を三人も意識不明にさせたのは、一体どんな偶然を重ねたら出来る事なのか。

嫌な事実を直視していると、ジェイスは顔を半分だけこちらに向けて、『何か？』と意思を伝えて来る。

その仕草だけでイケメンオーラが溢れ出ているが、今はそれに構っている暇は無いのである。突っ込み要因、不在なんですよー。

「あの……その人……達、俺の知り合いなんです。……あ、正確にはその最後まで意識を保っていた人が、なんですすけどね。……というか、一体なんでこんな事を？」

何か意図があつてやった事なのだろうが、その意図が全く掴めない俺としては、是非とも、こうなった原因を尋ねておきたかった。

ちよつと彼に対して怒っているとはいえ、やっぱり相手が相手なだけに強く言えず

に、いまいち定まらない言葉遣いになってしまっているのは、仕方の無い事だろう。

そんな俺を察してくれたのか、ジェイスは何故このような行動に出たのかを念話で語りだした。

といつても、長々としたものではなかったのだが。

「つまり、その薄紫色をした髪の女性が、俺を切ろうとする敵意があったからやった、と？」

俺の言葉を肯定として頷きながら、ジェイスはこちらに面と向かって対峙する。

——流れとしては、こうだ。

ジェイスの策敵範囲に、こちらに敵意を持った人物が一人近づいて来た。

その周囲には二人。

敵意は無いものの、同行する者が居た。

ならば不確定要素はまとめて排除だー、という案を実行したようだ。

見事に横たわる三人の偉人、と。

……内心で嫌な汗が止まりませんですよ。

ただ、いつもならば複数の魔法を同時に使っているようなのだが、永琳さん達の手が握があまりに難易度高すぎたらしく、使っていた思考リーディング魔法をカットしてまで、精神切断魔法に力を注いだ結果っぽい。

その理由は想像がつく。

というのも、この魔法を掛けた相手が規格外だったからだろう。

何せ、こちらにうつ伏せで倒れているお方達は約数百万年。永琳さんに至っては最低一億年も生きているらしい、と来た。

MTGにおいて、長年生きてきた者達でも数万年である事を考慮すれば、介入しなければならぬ思考の幅が段違い——どころか、もはや別次元の話で、本来一瞬で掛かる筈の魔法が、数分も効果が現れなかったようなのだ。

幸いにして、ゆっくりと近づいて来てくれた事で対処し易かったらしいのだが、あまりに強固な精神防壁だった為に、思考リーディングと精神作用魔法の同時行使をしている余裕が全く無かったが故の、この事態なんだそうだ。

逆に考えると、たった数分で億単位の月日を経験している相手にでも精神を掌握出来るとか、『PWってどんだけー』なんて思ったりもした。いや、この場合はジェイスを評価するべきか。

「とりあえず、彼女達を起ここしてもらえませんか？」

まずは事態を進展させねば。

これ以上問題を起こしたら、俺の首が飛びかねない。

こっこの意図は伝わったようだが、やはり先程の理由から、こちらに体を完全に向け

て『敵意を持ってたぞ？ それでも良いのか』と尋ねられた。

「大丈夫です。何となくその敵意を持たれた理由は予想は出来てるんで、永琳さんから起こしてもらえれば、多分いける筈ですんで」

多分、嫉妬とか地上人だから的な意味で。

心当たりがあるのは、綿月依姫の性格。

八意永琳の教えを勤勉に学び取り、誰よりも生かそうと奮起していた人……だったか。

好意の対象を奪われた、的に思っているのだと予想を立ててみる。

そんな彼女は、月に侵略して来た幻想郷の妖怪を防いだ……というより、ほぼ完封させた功労者の一人。

その戦闘力は無限大。

何かの説明書きで、『必殺ボムが無限にあるようなもの』と表記してあった気がする。

コミック版——儂月抄、だったか？ ——でもレミリアや咲夜、マリサを片手間

で処理し、霊夢との対戦に至っては格の違いを見せ付ける形になった、と言っても過言ではないだろう。

尤も、妖怪退治専門の霊夢にしてみれば、神の依り代たる綿月依姫は、全く真逆な属性を相手にしているようなもので、本編でも『専門が違うからやり難い』と漏らしてい

たのだが。

何はともあれ、やってしまったのだから、仕方が無い。

これから起こるであろう、胃の痛くなりそうな事態に、全力で回れ右をしたくなりながら、ジェイスに『じゃ、起こしちやって下さい』的なお願いを言おうとして。

ジェイスの胸から、一筋の閃光が生えているのを見ってしまった。

25 手札破壊

綿月依姫は、軍に身を置く者である。

それも一兵卒などではない、指示一つで幾人もの命を決められる立場の者。

月の建国に貢献した家柄というのは勿論の事、軍の指揮や管理が優れており、何より、
当人の戦闘力の高さが一番の要因であろう。

『神霊の依代となる能力』

森羅万象に存在する神々を呼び出し、その恩恵を行使出来るのだから、その力量は推して知るべしである。

(……駄目……意識、を……)

今、まさに消えようとする意識の中、依姫は自分に出来る最善を模索する。

しかし、意識を保つ云々以前の感覚に、これでは多少の自傷行為など行つても覚醒には程遠いと判断。

それならば神霊に助力を乞おうと考えてみるも、自我を強くする力を持っている者を、即座に思い浮かべる事が出来ない。

過去、この能力を使う時には、軍事関係——戦闘行為が主であり、その他ではあまり、この力に頼る事は避けていた。

自身を鍛えるつもりで付けていた枷が、今は逆に経験の浅さに繋がってしまったのだ。

だが、それを悔やむ時間は残されてはいない。

——ならば、未知のものへと思考を伸ばすではなく、今こそ、長年培ってきた経験を生かす時。

神霊の依り代となる能力とは、能力を借りるだけではない。

文字通り、自身の体に神霊を憑依させ、その力を代行出来る能力。

言うなれば、依姫という殻を被った、名立たる神々の降臨だ。

(建御雷之男神 (タケミカヅチ) よ……。我が依り代を使い……。目前の脅威を……。払い……。給え……)

呼び出したるは、“鹿島の神”の二つ名を持つ者。

刀剣、弓術の神とされており、武神とも呼ばれる、荒ぶる神々——悪神を数々鎮め、制圧した実績を持つ、八坂神奈子とはまた別の、生粋の軍神。

降臨させられたのなら、それは、その名に相応しい成果をもたらす事だろう。

だが、タイミングがやや悪かった。

自分を依り代にした神様というソフトのダウンロードは、使用者の意識が途切れた事で、安定性を欠いてしまった。

本来一瞬で行われる筈のその行為は、中止、とまではかずとも、効果が発揮されるまでに若干の時間を有し……。けれど、それは確実に依り代に憑依していく。

そうして僅かずつ、けれど、確実に依り代となりつつある自分の体に安堵感を覚え、依り代は自分の意識が暗転するのを実感しながら、それを手放した。

——幸いな事に、それが原因で、青き者の呪縛から逃れられた、と知るのは、また別の機会である、

——腰に据えられた刀に手が伸びる。

本人の意思など無く、けれど別の精神によつて、風のように速く、水のように滑らかに。

うつ伏せで倒れていた事など嘘のように体を起こし、攻撃態勢へ移行した依姫——
の体を持つタケミカツチは、術者の願いを叶える為……

背を向けている、青い者を刀で貫いた。

ああ——これはまるで、出来の悪い銅像を見ている様だ。

漠然と目の前の光景を眺めながら、それが自身に迫る危機だと察知するのに、僅かながらの時間が掛かった。

胸の下、腹の上。

嫌になるくらい、体のど真ん中。

左右にブレる事も無く、貫通した刀身自体には、血の一滴も付着していない。

PWは血が無いのか、なんて思考が、目前の現実から逃げ出そうとしているかのよう
に、本来考えなければならぬ事柄を拒否してしまっている。

だが、現実是不変ではない。

ジェイスが、背後から貫かれた。

召喚した時と同じ様に、やはり目元は見えないが、口が苦悶の形を浮かべているのが
分かってしまう。

耐える様にキツく口元を引き締め、込み上がって来るものを必死に堪えている、その
表情に……俺の意識は、やっと真実を受け止めた。

「ジェイス!!」

叫びと同時に、彼の体から銀色が消える。

引き抜かれた刀身と連動するように、支えを失った体が崩れ落ちた。

回復か、再生か。

傷を……致命傷を受けたであろう彼を助けるべく、呪文を使おうとするも、それに
構っている暇は無かった。

倒れたジェイスの陰から、それこそ光の様に、獲物をこちらに滑り込ませて来ている
影を見てしまったから。

あの薄紫の髪は、紛れもなく先程昏倒したであろう、綿月依姫。

一瞬だけ見えた、まるでこちらを排除する為だけの機械になったかのような、硝子の目に背筋が凍ると同時、俺は自身の守りを固めるべくカードを使う。

〔対象、俺！「死への抵抗」！〕

悲鳴に近い形で、脳内で呪文を唱えた。

発動に伴い、光の結晶が以前と同じ様に、「ダークステイル」の円盤を出現させる。

俺との盾になろうと、その円盤が依姫が攻撃してくる間に介入してくるが、彼女はそれに慌てる事も無く、抜刀攻撃中であつた刀を器用に軌道変更させて、まるで盾など存在しないかのように、その攻撃をこちらへと届かせた。

オートガード機能が備わっているのは永琳さんとの実験で分かっていたが、それを越す速度で攻撃を繰り返されたのなら、もう対処のしようが無い。

後一瞬もしない内に、俺は天へと召されるであろう。

——しかし、それは俺自身が破壊不可の効果を發揮していなければ、の話。

右の腹から左の肩に抜けていく、ただ表面をなぞっているだけの攻撃に、しっかりとカード効果が現れたのだと安堵する。

衣類だけ切り裂かれた後には、血の一滴どころか傷一つ無い。

触れている感覚すら湧かない状況で、ピリピリとすら感じない事から、例の浄化光線よりは威力が無いようだ判断した。

ただ、それも束の間。

依姫は、胴体への攻撃へは効果が薄いと判断したのか、瞬きをする間に何度も体中のあちこちを切り付けられ——たように見えた——または突かれる衝撃が、俺を襲う。

胴が駄目なら顔を、顔が駄目なら首を、首が駄目なら股間を。

人体の急所という急所を一瞬にして攻撃し終えたであろう依姫に、絶対破壊不可の効果にほつとする間など見出せず、すぐさま別の呪文——対象を無力化させる【お粗末】——を発動させようと、目標を改めて確認するべく、相手を見……ようとした。

（居ない!）

首を動かして、なんて時間は存在しない。

何かに殴りつけられる様に背後から力が加わるのを感じながら、俺の体は宙に浮き、そのまま横へスライドするかのようになり、壁へと叩きつけられた。

多分、一瞬にして背後に回られて……今度は背中を渾身の一撃つばい攻撃で狙ったのだろう、と。

壁から破片が飛び散る視界の中で、考えを纏め上げる。

幸いにして、倒れているジエイスや、永琳さん達の方に吹き飛ばされたのでは無かったのだが、それを謀っていたかの様に、依姫は連撃を背中へと浴びせて来た。

一撃一撃が恐ろしく重く、そして速く、さらには精密。

後頭部は勿論、太股から関節各部に、側面の動脈が通っている場所を絶え間なく何度も攻撃して来る。

壁へと体を密着させながら、それでも足りないとはかりに、メリメリと、奥へ奥へ押し込まれていくのを感じながら、指すら満足に動かせない中、こんな状況では【お粗末】での無力化は力不足だろうと判断する。

神奈子さんも、【お粗末】を受けた時には身体能力では効果は見込めたが、その神格……特殊能力方面での無力化は、あまり効果が見られなかった。

少なくとも、俺を即死に追いやるだけの力は充分に残っていたのだ。

最も押さえ込みたい部分は、身体能力ではなく、特殊能力の方。

だとしたら、一体この相手にはどう対処すれば良いというのだ。

（無力化系統……効果が思わしくないから却下。破壊系統……ますます却下。……弱体化路線——で何とか対処出来るか!?)

生憎と、能力の無効といった効果は狙えないが、現状の改善は見込めるかもしれない。

——ならばここは1つ、永琳さんの元での実験に付き合っていた成果を試してみよう。

あれは、月の頭脳とも呼ばれる彼女にも、一定の効果はあったのだ。

“思考や知識”が彼女より優れている人物など、月はおろか、東方プロジェクトの世界でも片手で数える程しか居ない筈だ。

だとしたら、少なくとも彼女以下であろう依姫が相手ならば、現状でも多少の好転を期待出来るだろう。

壁に貼り付けにされている——動き回っていない事も、今の状況では幸いする。

何せ、動いていると使えない【ソーサリー】呪文。

使うべきは、今。

そろそろ壁を突き破らんとするとする、バキバキとした亀裂音を聞きながら、俺は背後に居る存在へと呪文を行使した。

（発動！【暴露】!!）

『暴露』

4 マナで、黒の【ソーサリー】

対戦相手の手札から【土地】以外のカードを1枚選び、それを捨てさせる。数ある【手札破壊】系カードの中で、中々の汎用性を持つものの1つ。

手札から黒のカードを1枚【追放】する事でもプレイ出来る【ピッチスperl】を備えている。

『手札破壊 (Hand Destruction)』

ハンドデストラクション。略称でハンドデスとも呼ばれる。

手札からカードを捨てさせる、または、それに近い行為全般を指す。

カードゲームでは、相手に呪文を唱えさせた時点で利点が発生してしまう為、それらを事前に封殺出来る、このハンドデス系呪文は大変汎用性がある。

しかし、直接ゲームに影響を及ぼす呪文では無い為、そればかりに重点を置いておくと、痛い目を見る。

特性上、相手が何かをしてから対応する【コントロール】や、事前に必要な枚数を揃えておかなければならない場合が多い【コンボ】デッキに対しては極めて効果が高い。逆に、ガンガン手札を消費してしまう【ビートダウン】に対しては効果が薄い。

そのカード効果故に、ほぼ全てのタイミングに使える【インスタント】系には殆ど存在しない。

『追放』

通常、カードが破壊、もしくは手札を捨てさせられた場合には、それは墓地と呼ばれる捨て札場にストックされる。しかし、これらを行う効果が多い除去系の中でも、特に強力な追放系のカードは、それら墓地には送られず、特殊な領域にストックされる。これにより、墓地に置かれる事で発動する呪文や能力のカードや、墓地を利用するカードを封殺出来る。

これら追放の効果は「破壊されない」「再生する」といった除去耐性にも発揮され、除去系の究極とも言える。

簡単に表現するのなら、一種の消去と考えるても問題無いだろう。究極的な、クリーチャー対策の一つである。

弱体化とは、何も身体能力の低下だけを指すのでは無い。

現状より相手のステータスを下げられるのなら、それは須らく弱体化と言えるのではないだろうか。

正規のマナコストは支払わず、【ピッチスぺル】で【死の門の悪魔】を除外して、呪文を使った。

そうして唱えたカードは、手札破壊。

ゲームとしての手札破壊ではなく、この世界でこの呪文を唱えた場合は、一体どうなるのか。

(どれだ……今お前は何を「考えている」——!!)

手札とは、その時に選ぶことの出来る、選択肢そのもの。

今クリーチャーを出すか、相手の【アーティファクト】を除去しておくか。【インスタント】呪文を使い、相手のペースを乱しておこうか。——取れる行動は、殆どがそれに依存する。

ならばそれは、実際に当てはめるのだとすれば……喉が渴いたから冷蔵庫から飲み物を取ってこよう、歩き疲れたからあの木の麓まで行って休みたい。後であの道具を使うから用意しておかないと……、といった、「今考えている」思考に他ならないのではないか。

——この世界……俺にとっての手札破壊とは、リタルタイムで相手の思考を欠落させる行為。

欠落させる思考の容量が大きいと効果が薄かったりと、色々と制限があつて、咄嗟の

時には使い難い呪文だが、今はその条件を全てクリアしている。

浮上して来た選択肢は、『右肩から左脇に掛けての振り下ろし』『足の、第一、続いて第二間接に対して連続抜刀』『壁に貼り付けたままでいさせる為に、三度背中への切り上げ攻撃』等の、数十にも及ぶ思考の波が、俺の頭に流れ込んで来た。

一種の読心術のような効果だが、この呪文の欠点は、相手の思考の幅が広すぎる時には選別するのに時間を要し、次から次へと高速で考えを巡らせている場合、選択肢が出現した瞬間には、その項目は既に過去のものとなっていて、時が殆ど。

言い換えれば、思考能力に乏しい相手ならば効果は絶大で、尚且つそれが状況変化の遅い事態だったのなら、これらの呪文の運用性は格段に跳ね上がる。

だとするなら、相手の頭も良く、一瞬たりとも留まる事の無い戦闘などの現状は、手札破壊呪文に対して、完全に不向きではないのか。

その通りだ。単純に考えたのであれば。

(見つけた！)

もつと深い、これら思考の元になった意思。

何故、俺に攻撃を加えるのか。

様々な理由が考えられるが、今この状況下での相手の思考は単純明快。

“敵の排除”

(デイスカードだ、月の軍神様っ！)

転生前の癖で、思わずMTGをプレイしていた時の専門用語(デイスカード⇨カードを捨てるor捨てる)など使ってしまったのは、ピンチな状況に興奮していたからだろう。

今し方見つけた「目の敵の排除」という目的(選択肢)を消去させる。

同時、とうとう限界を迎えた壁が、その役割を終えて、俺の体を外へと吐き出した。

そういうヤッコは何階だったか、と、顔面蒼白になりながら、数百メートルはある高さから落下している最中に思った。

【死への抵抗】の効果が表れていたとしても、怖いもんはやっぱり怖いのだ。

このままでは器物破損……:だけならまだしも、最悪、下を歩いていたりする、見知らぬ誰かの命を奪いかねない。

自由落下する重量八十キロ近い物体など、凶器以外の何者でもないのだ。

やはりここは、残りのマナを使い、何とか回避するべきだろう。

「なっ——!?!」

背後に、背中を貫かれた筈のPWが出現していなければ。

落下中の背後に現れた者に対して、名前を呼ぶどころか、疑問に思う隙も与えられず、彼は俺の背中に手を当てて……

一瞬で、目の前の光景が切り替わった。

ワタシは混乱していた。

召喚者の願いに答え、〃何かの命を〃先程まで執行していた筈だった。

神速で振るっていた刀を滞納し、今し方、壁の向こうへと消えていった者を思う。

はて、何故、ワタシはあの者に斬撃を当て続けていたのだろうか。

青い人物を致命傷へ追い遣った後、〃ついでに〃そこに居た人物を攻撃し続けていたが……あれは一体何の妖怪だったのだろうか。

あれだけ斬り付けても傷一つ負った様子は伺えなかった。

これでは軍神の看板も下ろさなければならぬのだろうか、と、逡巡。

最近は行っていなかった修行でも、再びやり始めようかと思う。

さて。

破片が飛び散る室内を見渡しながら、現状を飲み込めるよう、頭の中を整理する。

けれどその答えは一向に出ては来ず、推測で“あの者を追い出す事が、自分の呼び出された理由だったのではないか、との考えに至った。

となると、ワタシの役目はこれで終わりだ。

外へと落下していった相手の気配は急に消えてしまったが——同時に、背後に居た青い姿をした者も消えてしまったけれど——知覚出来る範囲には居ない事は分かる。

安全を確保し、召喚者の願いにも、恐らくは応えられた。

これで問題は無くなっただろう、と思いながら、ワタシはワタシを呼び出した者に、その者自身である依り代を返した。

「……………うっ……………体が……………」

節々が痛む。

完全に体の支配権を譲渡した形になったが、その痛み具合から、どうやらかなりの戦闘を行っていたようだ。

決して楽ではない修行も行ってきたというのに、体中の筋肉が悲鳴を上げている。

唾を飲み込む事すらしていないのか、枯れる様な声に合わせて、ギシギシと軋む間接に鞭打ちながら、私はあれからどうなったのかを確認する為、周囲を見回す。

(いや、今はそれより……)

そうだ。今はそれよりも、永琳様や姉上がどうなったのかを確かめる方が先決か。

丁度視界に入ってきた二人は、崩れる様に床へ倒れており、体への影響は外見上、確認出来ないが、私が鹿島の神を憑依させている間に、何か変化があったかもしれない。

細々とした瓦礫を気にする事も無く、あのお方の元へと近づく。

少し見た限りですが、出血などの外傷は無さそうだが、一刻も早く気絶から回復させるべきだ。

よって、私は能力を使つての治癒を試みる。

「大国主（おおくにぬし）よ、数多にある奇跡の一つを、この場に示せ」

『大國主』

神々が集う出雲大社に祭神として存在している神で、武、農業、商業、そして医療などの多岐に渡る分野にて崇められている——日本神話の中でも、その神格の高さはトップクラスに入るであろう者。

数々の異名を持ち、様々な方面で活躍しているが、東方世界で特に関係しているのが、『因幡の白兔』だろうか。

嘘について、皮を剥がされてしまった因幡の白兔は、適切な治療法を教えてくださいました穴牟遲神（おこなむちのかみ）——その頃の大國主の別名——に感謝し、彼の結婚を助ける一端を担ったとされている。

そのような行為を示したせいかな、医神としての加護も与えられるまでになった。

依姫は、背後に現れる圧倒的な存在を感じていた。

医療の神など他にも居るといふのに、日本神話における重鎮を呼び出したのは、やはり相手が相手だからであろう。

その強大な力を借り、彼女は床に倒れている二人を目覚めさせるべく、集中する。

島国とは言え、一国の上位に君臨する神だ。

その効力は、計り知れないものがある。

……だがそれは。

決して、全てを解決出来る訳ではないのだ、という事実を、知ってしまう出来事にもなつた。

「何故だ！ 何故、永琳様と姉上は目を覚まささない!？」

体に異常な箇所は見受けられない。

ならば後は意識を取り戻させるだけだと言うのに、たったそれだけの事が出来ないでいる、この現実。

当り散らすように、依姫は背後に感じる大国主に尋ねてみると、『心は触れられない』という答えが返ってきた。

「ハハ、ろ……ろ……」

反射に近い感覚で口から漏れた言葉に、大国主は『そうだ』と肯定する。

今倒れているこの状態は、心の方に問題があるのだと。

外的要因で心を外側から形成する者は多々居れど、まるで「本人がそう望んだからこうなっている」といった状態だと、彼は説明した。

薬や毒ならば解毒しよう。神気や妖気が原因ならば、一瞬でそれを取り除こう。

だが、自分からそう望んだ心は、そう簡単には変わらない。

それも対話の不可能な……意識不明の状態では、尚更、と。そう付け加えて。

けれど、それでも手段が無い訳では無い、と言葉を続ける。

それに導かれる様に、出口の無い悶々とした思考が、大国主の助言を受けて解決した。

「そうか。永琳様達をこのようにした者ならば、あるいは……」

記憶の隅に残る、青の残滓。

恐らく、あれが永琳様の言っていた、九十九という人物だろう。彼女はそう判断する。

何故このような凶行に乗り出したのかは、理解が及ばないが、少なくとも好意的なものではない事は確かだ、と。

やる事は決まった。

まるで一分一秒が惜しいとばかりに、依姫は、手元に緊急連絡端末ディスプレイを即座に出現させ、行動を起こす。

『緊急事態発生。八意永琳、並びに綿月豊姫が昏睡状態に陥った。九十九なる人物が原

因だと思われる。特徴資料は各自確認すべし。見つけ次第殺……捕縛せよ。命があれば状態は問わない。繰り返す——』

月の技術は、地上の文明など軽く凌駕する。

ひと一人見つける事など、それこそ朝飯前にやってしまえるだけの、圧倒的なものが……それから数分後。

都市の外。

生命など存在出来ぬ筈の荒廃した土ばかりの場所で、その者は発見された。

それに伴い、月の偉人の一大事という命を受け、蓬萊国の上層部は、軍部の大半を動かす。

それは『月に手を出したらどうなるか分かってんだろうな』という、内外に向けての誇示が多分に含まれたこの騒動……一種のパフォーマンスだったのだが。

これが、後の東方プロジェクトにおける『幻想月面戦争騒動』に関わってくるのは、もう少し先のお話。

26 蓬萊の国では

理解不能の声を上げる間も無く、俺は目の前の光景が突然変わってしまった………と
いう事実を実感した瞬間に、固い地面へと叩きつけられる。

情けない事この上ない。不細工なゴム人形のように、ぎゃふん、と崩れ落ちた。

だが、それはジエイスも同じ様で、俺のように無様にではなかったけれど、ドサリと、
うつ伏せに倒れ込んだ。

自分の事など二の次にして、慌てて体勢を建て直し、彼の元へと近寄った。

慎重に彼の体を仰向け………ではなく、呼吸氣道を確認する為、横へと傾ける。

それが切欠になったのか、彼は咳き込みながら、血を鉛色の荒野へと吐き出した。

まるで刑事ドラマで殉職するキャラを見ているみたいだと、今まで見た事も無い光景
を記憶と照らし合わせながら、既に襤褸切れになりそうであった自分の服を破り、出血
している胸部へと宛がう。

「ジエイズ、どうしてこんな事を……」

声に出して尋ねてみると、途切れ途切れになりながらも、彼がどうしてこのような行動を取ったのかが念話で伝わって来る。

背後から貫かれ、痛みで意識が定まらなかつた事。

その後、何とか痛み以外に考えられる余裕の出来た思考で、あの場からの脱出を計つた事。

本当なら精神掌握で相手を無力化したのだが、掛かり難かつた相手&傷のせいで魔法が安定せず、仕方なしに今自分の能力で来れる、最も遠い場所まで俺と一緒に転移して来た事を教えてくれた。

(……通りで月の国が遠くに見えると思つたよ。周りは岩だらけだし)

歩きつかれた荒野の果てに、煌びやかにネオン輝くラスベガスの町並みでも見つけた旅人のような光景が連想された。

「ザ・月面」な場所に飛ばされていたので、普通の生物なら窒息で死んでるんじゃないかとは思うが、何の支障もなく生存出来ている事態に、答えてくれる者は誰も居ない。しかし、今はそんな事よりジエイズだ。

再生呪文を掛けるべく、カードを思い描く。

本来ならば、「プレインズウォーカー」である彼に、クリーチャー再生の効果を持つ

カードは無意味であるのだけれど、俺（プレイヤー）自身にも効果が適応されている事から、行使しても問題無いだろう、という思いはあった。

けれど、ジェイスはこちらがカードを使うより早く、俺の行動に『待った』を掛けて来た。

念話であつても、苦悶がこちらに伝わって来ているというのに、一体……………。

「……………そうか……………俺の残りのマナは……………」

俺の疑問に答えるべく、搾り出すように告げられた念話に、思わず納得してしまう。

今日を迎えてから、ジェイスの召喚で3、「死への抵抗」で1、「暴露」は「ピツチスperl」で解決したのでマナは使用していないが、使えるコストは残り2となっていた。

カードの種類は上限が9だから、残り5枚は使えるとしても、俺の現在の切り札レパートリーの中では、最もコストが低いものでも最低2から。

先に使用した、切り札その①「ハルク フラッシュ」は、丁度残りの条件を全て使い切る形で合致しているのだが、月の戦力相手には、呼び出すクリーチャーの特性も相まって、少し心許無い。

とてもじゃないが、穢れを嫌う蓬菜の国の兵士が、2/2の天使クリーチャーである【霊体の先達】の【プロテクション（黒）】に引つ掛かるとは思えない。

単体性能が未知のゾンビ、【屍肉喰らい】なら尚更戦力として考慮するのは危険。

つまりは、後1つでも何かにマナを注ぎ込んでしまえば、俺は残り数十時間、少し汎用性があるだけの、ただの一般人に成り下がる。

最も、現状で俺は破壊不可になっているようだが……守りが強固でも攻めが疎かであつては、とてもではないが、月の人達相手に立ち回れるとは思えない。

この場合の攻めとは、反撃としての手段であり、侵攻の一手ではないのだ。

縄文レベルの技術や文明ならばいざ知らず、ひと薙ぎで物質を粒子状にしてしまう武器を所持しているお方達が相手なのだから、完全無抵抗など、語るまでも無い。

何より彼らは『フェムトファイバー』と呼ばれる、特殊な物質——だったか——を糸状に作り上げる技術を保有している。

この糸は、何やら色々な説明があつて詳細は覚えていないのだが、永劫劣化せず、何者にも侵食されず、ある程度の幅で纏め上げれば、決して破壊されない、とされているもの。

月版の「ダークステイル」のようなものだろうか。

その効果は日本の最高ランクに位置する大国主を初め、主神であるアマテラスですら対処出来ないものだった筈だ。

俺が勝てなかつた神奈子さんより、さらにグレードの高い神々が封殺されているというものを相手に、どう対処すれば良いというのだろう。

万が一にでも、そんなものに絡め取られた日には……ガクガク。けれど、仮に惨敗したとしても、希望が無い訳ではない。

月の地での殺生は穢れとされている事と、月の民達が高度な文明を持っているが為、ある程度は俺の意見にも耳を傾けてくれるんじゃないかという事。

この二つの理由で、少しだけ樂觀出来る部分があるのはありがたい……と思った方が良いでしょうか。

とりあえずは、そう思う事でメンタル低下を防ごうと思う。

ただ、だからといって彼をこのままには出来ない。

ジェイスの考えも最もだが、それが、彼を助けない理由にはしたくはないのだ。

転生前の社会ならば『この男性の浅はかな考えが』『治療経験の無い人物が』云々と、マスメディアが挙つて非難を送つていた事だろう。

幸いな事にそんな場面ではないので、彼に向かつて元気な顔を見せて、『大丈夫だ』と返事をし、マナを使わなかった、先程の『ピッチスperl』系での方法解決を模索する。

(色的には白か緑……【ピッチperl】で再生か回復……は……条件が……あ)

そうだ。何も、その手の条件に拘り続けなくてもいいのだ。

俺の記憶のそれ系の呪文には、ダメーჯ輕減カードはあれど、再生系のカードは無い。ならば回復だ、となるのだが、これら呪文は好きな対象を選ぶことが出来ないカード

が殆どなのだ。

使ったとしても、俺自身が回復するだけであって、ジェイスが治る訳ではない。

そしてこのダメージ軽減が傷を癒してくれるかもしれないと一瞬考えたけれど、あれはダメージを負うのが確定している段階で、事前に発動させなければならなかった。

だとしたら、既に傷を負ってしまった状態での治療は、効果が見込めない。

あれならば、彼が懸念している状態にも陥らないので、予想した通りの能力が発揮されてくれたのなら、言う事なしだ。

という事で、過去に一度試そうと思った、例の呪文系を使ってみるとしよう。

「ジェイス、今何とかするからな。……名前なんだったか……【薬草の湿布】召喚」

『薬草の湿布』

0 マナの、アーティファクト

3 マナを支払い、これを墓地に送る事で、対象のクリーチャー1体を再生する。

「傷の清めには夜明けに、同じ傷を受けないためには夕暮れにオレンジの葉を当てよ。」

—— キスキンの迷信

本来ならば、これらアーティファクトは、それに見合ったコストを注ぎ込まなければ発動しない。

だがこの様に、コストを使用せずとも使えそうなカードは、一体どうなるのだろうか。例えるのなら、剣や弓、鈍器といった、そこに存在しているだけで、役目を果たしているとも言えるものは、新たにマナを使用しなくとも、効果があるのではないか、と考えた。

ただ……

(フレーバーテキストの最後が不安要素なんだよなあ……。何だよスキスキンの “迷信” っつて)

手元に、白い布に包まれた茶色い腐葉土っぽいものが現れたのを見ながら、そう思う。

「キスキン」とは、MTGで登場する、一メートル前後の大変小柄な、真っ白い肌を持つ人型部族の名前である。

彼らが言うには、通常は傷薬。その他応用技で、一度傷を受けた後で、指定された薬を特定のタイミングで使うと、耐性が出来るという秘薬になる、と嬉しい限りな品物のだが、それを素直に喜べない文が最後にくっ付いていた。

けれど、もうそんな真偽は確認する時間はないので、手早くジェイスの傷を塞ぐ行為に移る。

何にせよ、とりあえずは治療薬なのだ。

やらないより、やった方が良いに決まっている。

転生前の仕事の関係上、あくまで応急処置的な知識や技術しか分からないけれど、どうせこのままでは改善の見込みは無いのだ。やれるだけの事はやっておかなければ。

「ちよつと我慢してくれ。多分……効く筈だ」

効果を疑問に思っている俺に共感したのか、念話で苦笑されるといふ初めての体験をしながら、俺は彼の体へと湿布を宛がう。

漏れる苦悶の声。歯が折れんばかりに噛み締められた口。

それに臆して手を止める、という事はせずに、鬼手仏心の精神で作業を遂行する。

といつても、単に布を傷口に貼り付けるだけの事なのだが、これが中々に心を磨り減

らす。

ジェイスの押し殺した意思と、指の隙間からこぼれる血液が背筋を凍らせて、俺の精神値をガリガリと削ってくれるのだから。

（根性見せる俺！　こんなので怖気づいてたら、ますます悪化するかもしれないんだぞ！）

自分自身を叱咤しながら、前後に空いた穴を塞ぐ様に、細心の注意を払って湿布で封をする。

それをし終えて、ゆっくりと彼を横たえてやれば、心なしか、先程よりは顔色が良さそうに見えた。

だが、それでは全く足りないのだ、と、俺は焦りに似た感覚を抱く。

今までこの手の再生カードを使った際には、ものの一瞬で回復していた為に、それに準じない効果だったというのは、それだけで不満の対象。

それが世間で言うところの“普通”だとはいえ、今までMTGを基準にした“普通”を体験してただけに、この落差は如何ともし難い事態である。

（ああ、やっぱりmana注がないと能力を全て発揮される訳じゃないのか……）

ダメ元でやってみたらやっぱりダメだった、という無慈悲な現実に、歯の奥でギリギリと苛立ちの音が鳴る。

効果が無い、という訳ではないようだが、この微妙な事態は頂けない。

深呼吸を一つ。

混乱一步手前の頭を冷却し、再度、考えられうる限りのカードを脳内で検索。

『こんな時こそ俺がしつかりしなければ』という、使命感と罪悪感の混合された感情に突き動かされながら、今までに無い程に頭を回転させる。

……だが、俺は悔っていた。

今治療を行っている相手が「プレインズウオーカー」と呼ばれる存在であり、ことジェイスは、精神関係で右に出る者が居ないという事実。

動かすのも一苦勞、と思える動作で、彼は自分の胸部に、触れるか触れないかという位置で手を添えた。

そうして、その手が淡く光り出す。

こちらに何も告げずに動き出した事に、一瞬驚いたものの、即座に彼がしている行為への回答が想像出来た。

（あつ、治癒魔法！）

剣と魔法のRPGゲームのみならず、様々な作品で登場する、ホイミ、ヒール、ケアルといった名のついた、超王道魔法。

これが無ければ物語は始まらない、とばかりに登場する魔法なのだが、そんなもの、M

TGの能力を貰って連想する方が難しい。……というか、俺が出来ていなかった。

例えるのなら、どこぞの物語で最強魔法チートを貰った主人公が『銃使うかな』と言いだした感覚だろうか。強い光にばかり目が向けられて、その陰に潜む様々なものを把握していなかった。

目から鱗状態になりながら、何故「本来使えない」筈の魔法を使っているのかについての解答が、頭の中からこぼれ出る。

——彼の能力の一端。それは、他者の記憶を再現する事。

メインである精神操作とは若干異なるが、強力な能力である事には間違いない。

東方寄りに言うのなら、旧地獄の管理人、地霊殿の主である、古明地さとの能力が近いだろう。

あれは相手のトラウマを再現して相手を襲っていたが、ジエイスは相手が使う魔法や技術が自身で再現可能ならば、それをいつでも行使出来る。

ネクロマンサーや黒魔術師の呪文を使って悪夢を降臨させたり、優れた剣士の技を使うし、剣術の達人となった事もある。

何より、今回はMTG内にて「癒し手」と呼ばれる回復術に長けた者達の魔法を再現させ、自身の回復まで行っているというのだから、『え、彼が主人公ですか?』と尋ねたくなる様なお方であった。

ただ、一見万能チーターに見えるジェイス様にも、やはり制約はあって、それは自身の色から逸れていない【友好色】に依存する所が大きい。

『友好色』

特定の色に対して、相性の良い、別の色の事。イメージで言うのなら、陰陽やファンタジーモノRPGなどの、五行や属性関係がそれに近い。

MTGで使用するカードには、それぞれ固有の色が付随されており、白、青、黒、赤、緑の五色からなっている（無色は除外）。そして、それら色の組み合わせが多ければ多いほど、カード性能は上昇する傾向にあるが、それらに比例して使用条件が困難になる。

つまりは、色が混ざれば混ざるほど、強くもなり、使い難くもなる。

しかし、【友好色】に定められている関連性を持つ色のカードは、使用する際に制約が多少軽減される場合が多い為、デッキの趣旨に合うのなら、好んで投入される。

どのような色同士が【友好色】なのかと問われれば、理由も兼ねて、以下の説明が適

切である。

(以下MTG Wiki丸写し)

「秩序」「法律」の白の友好色は、「共生」の緑と「思考」の青。
 「思考」「狡猾」の青の友好色は、「法律」の白と「邪悪」の黒。
 「邪悪」「死滅」の黒の友好色は、「狡猾」の青と「混沌」の赤。
 「混沌」「衝動」の赤の友好色は、「死滅」の黒と「野生」の緑。
 「野生」「共生」の緑の友好色は、「衝動」の赤と「秩序」の白。
 これらの対義語として、「対抗色」というモノもある。

青のPWであるジェイスの友好色は、黒と白。

これは青の持つ「思考や狡猾」の特徴に、「法律」の白と「邪悪」の黒の特徴がマツチしている為だ。

これにより、他者の記憶から能力や経験を再現する力——今回の治癒魔法——に

追い風を加える形となり、その能力を一切損ねる事なく、魔法を使っているのだと予想する。

現にジェイスの手や口元の血行が良くなっているのが見て取れてきたので、自分の考えは外れていなかったのだと認識した。

(あ、あれ……何か……いつもより余計に体力が……)

だが、今度は別の問題が浮上する。

合計で使用したマナは4。

維持中のカードも、4。

けれどその維持には、今までに無い疲労感が襲って来ていた。

過去4マナ相当を召喚し続けていた時には感じられなかった現象だ。

体力もだいたい付いてきているとはいえ、このままでは先行きが不安になってしまうのではないか、と思える疲労具合。

原因を究明すべく思考に入る前に、俺は目の前で行われている医療行為を直視して、漠然と、何とはなしに、その理由が推測出来てしまった。

(もしかして、PWが使う魔法って、俺の体力からエネルギーが捻出されてる……のか?)

ジェイスが永琳さんや綿月姉妹に記憶操作をしていた時には、今の様な兆候は見られ

なかったのに。と、やっぱり間違ってるんじゃないだろうかと思う推測を出してしまつたが、今はそれを詳しく検証している時間は、残されてはいないだろう。

最悪、ジェイスや勇丸をカードへ戻す事も考慮に入れながら、俺は月の大地へと横たわる。

今出来る事は、極力体力の低下を防ぐ事と、永琳さん達を昏倒させてしまった事への対処。

ジェイスの傷が回復し次第、戻って謝罪をし……後は野となれ山となれ。

仮に死刑など言われようものなら、その時は、全力で抗う事にしよう。

地上の頃のように、誰かを治療しても良い。

金銀財宝が欲しいのなら、文字通り一山築けそうなほどの量を出そう。

だが、それでもダメだった場合。

俺は、例えばそれが月の人を殺める事態になつたとしても、最後の最後まで地上へ帰る事を諦めない。

……『相手を殺してでも』、なんて物騒な思考が出てくる脳内に驚きながら、それぐらいいにはテンパっているのだろうと自嘲気味に、薄く笑う。

(こりゃあ、別の切り札を使う場面が来るかもなあ)

大の字に寝そべて見上げた星空は、大気が存在しないせいなのか、星の光が刺すよ

うに零れ落ちてゐる。

月の国が、この天体の裏側に建国された都という事もあり、極寒の気温と地面がこちらの体温をみるみる奪っていく……筈なのだが、現状はせいぜい「肌寒い」程度に収まっていた。

先程まで、極限とも言えるほどにテンパっていた頭の熱を、段々と下げてくれているのは有難いが、これら様々な疑問に複数同時に思考出来る筈も無く、それら多数の疑問を全て切り捨てて、俺はこれから起こるであろう月の国との一悶着に備えて、如何に最小限の揉め事で済ませられるかを、考える事に勤めた。

「対象はたった一人。不可思議な能力持ちではありますが、何も……」
「依姫君。これは、一種のパフォーマンスも兼ねている。何も殺めようなどという愚かな真似をする訳ではない」

薄暗い室内に、幾人かの人影が点在している。

10人は收容出来ようかという、会議室の様な作りの部屋には、依姫を囲むように、中年く初老と思われる男性や女性が、幾人か長テーブルに寄りかかりながら、鎮座していた。

依姫と話した中年の男とは別に、今度は初老の男性が話し出す。

肩や胸に掲げられた勲章が、この黒く染まった室内であつても、なお自己を主張している。

眉間に刻まれた皺は、まるで彼女の苦難の歴史を物語るかのように、深く、そして幾筋も見えて取れた。

この部屋の中央に位置している事から、この場をまとめ切るだけの権限を持っている——月の軍部における、最高司令官がそこには居た。

「然様。我らがこの月に来て幾千年。既に民達の心には、生きるという目的すら失われつつある。日々を懸命に過ごすでもなく、ただ与えられた平和を垂れ流すように安穩と貪り、そしてそれが、さも当たり前存在するものと誤解し始めている。教育や祭事によつて抑えてはいはいるが、もはや目に見える形で、綻びは現れつつあるのは、君にも分かつてはいる事だろう」

月人が地上を捨て、こちらへと移り住んでから、数千万年。

終わりの無いような寿命を持つ彼らには、命を掛ける様な出来事は存在しなかった。

完璧に管理された社会体制には餓死者、失業者などはおらず、穢れの存在しないここでは病に掛かろう筈も無く、外傷などの怪我は、それこそ近場のドラッグストアに並んでいる薬で事足りる。

唯一幅を利かせているのが精神科だが、それでも、全体で見れば生きていく事へのハードルは、無きにしも等しくなっていた。

そんな中で、生き物は一体何の為に生まれてくるのだろうか。

定期的にその手の疑問が月では様々なメディアや学会で発表されてはいるが、明確な答えは未だ出ていない。

『生を謳歌する事が目的ではなく、死への回避の為に生きているだけだ』と唱えた者も居たが、この場にいる一同にその言葉を聞かせれば、表面的には同意せずとも、心の何処かで肯定しているであろう。

「確かに昨今の民達の状態は芳しくありません。ですが、だからといって地上人一人の為に、軍を『ほぼ全て』動かす理由には——」

「なる」

重みを持って発せられた言葉に、依姫は思わず言葉を呑む。

「犯行が行われた場所は、君も知つての通り、この国で最も安全性の高い場所である事は、周知の事実。そこで……よりもよって、月の頭脳たる八意君を意識不明にしたば

かりか、君の姉である豊姫君まで同じ状態にし、さらには完全に痕跡を絶つて、逃げ果せていると言うじやないか」

その発言を耳にして、部屋の隅で資料をまとめていた、白衣姿の女性が、手元の書類を読み上げる。

若干の緊張を含んだその表情は、こういった場には慣れていない——急遽ここへと連れて来られた様子が伺えた。

「兩名とも最新鋭の医療センターにて治療中です。……しかし、状態が思わしくなく、外的刺激から薬物に至るまで、全く効果がありません。恐らく精神面で何らかの負荷が掛かり、それによつて昏睡したのかと思われます」

裏返りそうな声を抑えて言い切った事へ安堵し、私の役目は終わったという風に、静かに深い溜め息を吐いた。

けれどそんな彼女とは裏腹に、依姫の苛立ちは段々と募っていく。

「ですから！ 私の能力を駆使しても永琳様や姉上の意識は取り戻せなかつたと、そう仰っているではありませんか！」

抑えようとして、けれど押さえ切れなかつた不満の表れが、言葉に混ざる。

彼女はこの場に出席する前から、その事について報告を上げていたのだ。

なれば今すべき事はこのような会議ではなく、一刻も早くいずこへと消えた、九十

九なる人物の搜索ではないのか。

今この場の全てをかなぐり捨てても任務に当たりたいというのに。

周りに座っている人物達が、息を呑んだり、体を竦ませる。

しかし、そんな叩き付ける様な言葉にも眉一つ動かさず、司令官は淡々と応答した。

「君はあくまで軍部の地位を持つている人物であり、医療や医術に対しての専門家ではない。我々だけならばそれで納得するだろうが、この事は民衆にも伝えねばならぬ。その時の為だ」

「そ、それは分かっております。ならばなおの事、私がこうしている時間は……」

「何事にも手順というものがある。無論、完全にそれに縛られていては、本来助けるべき相手すらも助けられずに終わるだろう。……だが、ここは軍だ、依姫君。戦というもの自体を忘れて久しいが、それでも、時には幾人もの命が消える部署なのだよ」

そこで一端言葉を区切り、意味あり気な視線を投げかける。

「本来ならば、こうした討論すらせずに終わらせるものなのだが……」

そうしない理由がある。

そう、言葉に意味あり気な印象を含ませる。

「……………私に何か、お望みなのでしょいか」

「話が早くて助かる。——といっても、既に用件は達成中なのだがね」

言われた言葉が飲み込めず、依姫は呆けた表情を浮かべた。

現状の、果たして何が彼の用件だったのかを推測するが、明確な答えは考え付かない。「命令だ、綿月依姫。以後指示があるまで、この建物内にて待機。それが今作戦における君の任務の大半だ。以上」

「ま、待つて下さい！ それに何の利理由が」

「……これ以上説明を求むのかね。上官への対応がなつて無いな。また士官学校からやり直したいのか？」

「理由を仰つて頂ければ、それでも構いません！」

脅しのつもりで言つてみた台詞が、何の効果も發揮していない様子に、司令官は深く溜め息をつく。

しかも暗に『喋らなかつたら力づくだ』と匂わせるような台詞まで言つていないではないか。

（八意様や親しい者達の事になると、途端に視野が狭くなるのは、中々改善されぬものだ……）

今に始まつた事ではない、依姫の強引さに、司令官は内心で頭を抱えた。

これさえ無ければ、ゆくゆくは自分の後を継がせたいと思えるほどの逸材なのだが、これがある限り、決して彼女に譲る事は出来ない。

通常なら、説明を求める時点で、軍規に触れるか触れないかの線なのだが、これも將來の部下を育てる一環だ、と判断し、彼は説明を始める。

「現状、君の戦力は圧倒的だ。一個人でありながら、その力は戦術級を超えて、戦略級に及ぶだろう。我が軍の切り札の一つとして換算しても良い」

「……今回の件では過ぎた戦力だと仰るのですか？」

「そうだ。現在、君の能力が突出し過ぎてしまっている。はっきり言って、周囲の鍛度が全く足りない。……気の抜けた訓練を指揮している君なら、良く分かっているだろう？」

それには依姫も、思わず顔をしかめた。

まるで、お遊戯の延長線上であるかのような、玉兔達の練習風景は、とても頭を抱えなくなるものなのだ。

だが、それがふざけるているのかと問われれば、それには否、と言わざるを得ない。

確かに玉兔……ひいては彼女の部下達には、気迫が不足——圧倒的に——しているだけで、決して不真面目な訳ではないのだから。

「……つまり、これは民衆への教訓と、軍の……訓練を兼ねた作戦であるか？」

軍の大半を動かす事になったこの出来事が、ただの訓練だとは言いたくなかったが、流石にこれが訓練でなく何だと言うのか、という結論に至り、澁々と言葉として形にす

る。

「情報を整理した結果、その八意様が迎え入れたという人物は『絶対に壊れない』能力を保持し、鳥や熊などの生物から、特殊な効果のある水——温泉か？——を出す能力が、研究の結果、確認されている。それに、対応した職員の話からは、対象に特別な破壊衝動や殺人趣向があるのは確認されていない」

「訓練の相手には最適だ、と。そう仰るので？」

「然り。……月の偉人に手を出した、凶悪な犯人の搜索。何も知らぬ者達からすれば、それはこの月の国建国以来、最大の脅威以外の何者でもなく、対処、または対応する為に、それこそ自分の命と現状を比較しながら事に当たるだろう」

「……仰る事は理解致しました。——綿月依姫。これより待機の任にあたります。以後、ご命令がある限り続行致します」

一息。

「……ですが、納得した訳ではありませんので、そこは覚えておいて頂きたい」

軽く脅しが入っている口調に、とやかく言う間もなく、依姫は踵を返して退出していった。

『何かあったら分かってんだろうな』と、立ち去る足音だけで判断出来てしまうのは、これは新たな彼女の才能なのかもしれない。

途端、司令官以外の席に腰掛けていた人物達から、姿勢を直す音や吐息が聞こえてくる。

それもその筈で、司令官が『待機』と命令を出した時から、依姫より漏れ出した憤怒の気が場に満ち満ちていたからだ。

「全く……。あれさえ無ければ、もつと責任のある立場に据えてやれるものを。武芸者としてなら素晴らしいが、軍人としては不合格だな。……君達、何を呆けた顔をしているのかね。各々の業務に復帰したまえ」

その言葉で我に返った者達は、慌てたように、自身のやるべき事の為に動き出す。

実際、医療センターから派遣された女性一人以外、彼らがこの場に居なければならぬ理由は無かったのだが、司令官が軍に属するものの心構えを「さり気なく」話す場として、意図的にこの場に残留しよう仕組んだのが原因で、当の彼らは、「明日は我が身」や「人の振り見て云々」といった心情になっている者が大半だ。

この場において地上での実戦を経験したものは、司令官、ただ一人。

他にも戦を経験した者は当然居るのだが、その他の者達は、また別の重要な役職へと就いてしまっており——前線や中間での経験者がほぼ皆無なのだ。

そんな出来事も含めて、司令官である彼は、他の若い者達への改善策の一つにでもなればと思ひ、この茶番劇を仕組んだ訳なのだが、

(ふむ、まだ青いとはいえ、悪くない表情になったな)

我先にと退出していく者達を眺めながら、こんな出来事でもなければ変わらなかつたであろう、彼らの心構えの変化に複雑な心境になった。

ある意味で、そんな彼らこそ、この月での平和が実現している象徴なのだが、それは一般人にのみ許された特権であり、戦を——防衛を生業としてゐる者には余分なもの。

その辺りの切り替えを、出来ていない者が多かつたが、恐らくはこの一件で、決して悪く無い方向へと進んでいく事だろう。

意図的に緊張感のある状況を作り出す事は出来ず、仮に強引に行つたのなら、それは軍という必要性を、ここ数千年、全くと言つて良いほどに感じていない月の民達への不満感へと代わり、最悪、消滅へと繋がりがかねない。

外敵が存在しないのならば、それでも良いのだが、地上の発展具合は、緩やかではありながらも、確実に向上している。

これで何かのエネルギー革命でも起これば、その伸び具合は一足飛びに行われるのを目に見えている。——かつて、地上で暮らしていた我々——月の民が、そうであつた時の様に。

その後は、恐らく地上との接点が出来る筈なのだ。

その時。手と手を取り合える仲になれば良いが、穢れの中で生きる彼らにそれを求めるのは、非常に危険性が高い。

だが、そんな事実を考慮にすら入れず、この国の民衆は、平和への交渉に乗り出すだろう。

信頼、信用、大いに結構。大変素晴らしい志だと感心する。

だが、同時に馬鹿な話だと呆れてしまう。

それが、どれだけ危険な行為なのかを、果たして彼らは、分かってやってくれるのだろうか。

個人でそれを行う分には、その結果は自身へと跳ね返ってくるだけなので、問題は無いとして。

これが集団、地域の枠組みや、国として見た場合、一体誰が責任を取ると言うのか。……いや、それは考慮するまでも無い事なのかもしれない。

それは当然、賛同した者達……否。

“強く”否定しなかった者達へと返って来るだけなのだから。

否定はしたが、ただ流れのままに身を委ねた者達も、賛同した者達と同様の責任を負うだろう。

(認める訳にはいかん……)

自分は軍を束ねる者。

自分は武を行使する者。

自分はこの国を守る責務を負う者。

——私は、この国を愛する者。

(私は私の持つ力の全てを以って、この国の未来を守ると誓ったのだ)

一個人で行える範囲など、そこまで広くは無い。

ましてや、自分はただの月人。

頭脳が優れている訳でも、家系が王族な訳でもなく、能力の開眼なんて兆しすら見せない、寿命が長いだけの、ただの個人。

そんな自分を無力だと呪った日もあったが、それをバネに、何とかここまでの地位に上り詰める事が出来た。

それを今使わずして、いつ使えば、この国の平和を維持出来るというのか。

(いつそ、政治家として進んでいけば良かったか……)

この騒動が起こる前から間々考えていた事だが、皮肉げに口元を歪めて、一笑に付した。

狐と狸の化かし合いの場が嫌いで、けれど何かこの国の為に何かしたいと思い、軍と

いう職に就いたのだ。

それを今更変えた所で、はてさて、成果が現れるまでに、一体何千年掛かることやら。「地上から来た者よ。怨むなら、月の象徴に手を出した自分自身を怨むと良い。……君には、建国以来、最大の罪人となってもらおう」

一体何の為にこの様な事をしたのかは未だに分からないが……。

恐らく、月侵略の糸口が切欠とするつもりか、こちらの何かしらの情報を仕入れる為の策だろう。

こんな事態を引き起こした犯人が、何も考えていない筈は無いのだ。きつと、いずれ、こちら側によくはない接触を謀って来るに違いない。

ならば現状不安定な戦力を見せて、油断を誘うと同時に、切り札でもある依姫の能力を隠せるのなら、一石二鳥以上の効果を生み出せる。

現状で思い浮かぶ策は、これで取り終えた。

後は、地上人が捕まるのを待つだけだ。

……欲を言うのなら、その地上人が少しでも抵抗してくれば、それだけこちらの世論や危機感を操作し易くなるのだが、あまり期待するのは、酷というものか。

『絶対に壊れない』能力を持っているようだが、それだけでは月の軍力には抵抗出来ない。

他にも雑多な生物や物体を出現させていた様ではあるものの、手元の資料を見る限り、脅威と呼べるほどのものは確認されておらず、仮にあったとしても、この国の技術で対処出来ないとは思えない。

地上にいる数多の神々の中でも——極一部の島国ではあるが——頂点に君臨する大神を、封殺する術を持つ月の文化に、どういう事態になったのなら、対処出来なくなるのだろうか。

犯行目的は不明。

しかし、現状で推測出来る事は限られている。

後は地上人を捕縛するまで待つ他無いのだが、頭を使う以外にする事が無い、というのは、何千年経っても自分にはもどかしく思えて仕方がないようだ。

「全く……一体何の理由でこのような馬鹿げた事を起こしたのやら……。月の首脳部が、誰も分からぬとは……」

前代未聞の愉快犯に、参謀や政治家達はてんでこ舞い。

誰もがその理由を突き止めることが出来ないまま、行動に移るしかない現状に、月の司令官は息を大きく吸い込む。

ゆっくりと吐き出された空気には、長年の疲労と、これで月も変わるだろう、という、僅かな希望の色が伴っていた。

(……そういえば、
依姫君の報告書には、
何故地上人を『青い者』と表記してあったのだ
ろうな……)

27 氷結世界に潜む者

(脳内BGM: “北の国から”の、あのイントロ)

——拜啓、諏訪子様、神奈子様。実家？ に置いて来た勇丸は元気にしているでしょうか。

私こと九十九は現在、月面でのトラブル——自分で撒いた種な気はしますが——に絶賛巻き込まれ中でした。

つい先程ひと段落して、さてこれからどうしよう、と、途方に暮れていたのですが、いやはや、やはりというか当然というか、月の方々は優秀な人ばかりのようでした。

よくもまあこんなだだっ広い月面で、体感ですが、一時間掛からずに見つけられるもんだ、と感心する訳で。

……この語りつて、時間無い時にやるもんじゃねえなあ。

「ひとつ、ふたつ……数えるのも馬鹿らしい数だよなあ、あれ」

固いものが土にめり込んで行く音がする。

定期的に発生するそれは、一つではない。

十、二十、……いやいや、それはもはや百を超え、さらに数を重ねながら、こちらに向かつてくるではないか。

『宇宙空間で音つて……』なんて突っ込みは、もはや思考に値しない。

問題は、現状をどう切り抜けるかの一点のみ。

「四速歩行の戦車……かあ。浪漫だねえ、格好良いねえ。後で乗らせてくれないかなあ。円盤っぽい浮遊物体は、飛行機の類なんだから……ダサイ……あ、でも慣れるとあれはあれで愛着が……」

既に考えはまとめてある。

決意もした。方針も決まった。

後は、相手がどう来るかで、それらの対応のどれかを行うだけだ。

それまではやる事が無いので、見えている現実を、どう自分の中で受け入れようか悩んでみれば、初めて子犬を与えられた子供のよう。ちよつぴりの恐怖と、好奇心が湧いてきた。

「ジェイス、具合はどうだ？」

ただ、現実逃避してばかりもいられない。

ここへと飛ばされてから、先にも思ったとおり、一時間も経っていないだろう。

それくらい迅速に、月の勢力はこちらの場所を探し当てて、こうして軍まで派遣して来てくれている。

このクソ広い、岩と砂しかない死の荒野の中で、どのように俺達を発見したのかは不明だが、こうして見つかってしまった今となつては、もうどうでもいい出来事だ。きつと超レーダー的なものでもあつたんだろう。

あの戦車や円盤が軍ではない、という可能性もあるのだろうが、SFちつくな銃を持つつウサミミが、その周りに幾人も配置されながらこちらに向かつて来ているのは、こつちをヤル気なんじゃないかと思えて仕方が無い。

というか、そういう気なのだろう。

見える範囲で確認できる人影には、皆が皆、殺気つばいピリピリした空気を纏つていらつしやる。

お陰で、こちらの心臓が一速ギアを上げてしまったようだ。

こりやあファーストコンタクトに失敗したら、絨毯爆撃の如く何かしらの攻撃が降り注ぐ事だろう。

【死への抵抗】による【ダークステイル】化の有効時間は後どれ位だったかな、と考

ていると、声を掛けたジェイスが呼び掛けに応じてくれたかのようになり、呻き声を上げた。その声から、あの時よりは幾分楽にはなっているようだが、苦しそうな彼の声（念話）から、やはり予断は許されない状況っぽいと判断する。

自分への治療を行ってしばらくして、彼は意識を失った。

恐らく傷口は全て塞ぎ終えて、修復が完了したからだろう。

彼の体力が回復するまで月側との接触は避けたかったが、こうして目前に展開している軍隊の皆様を見てしまうと、諦めざるを得ないようだ。

——あれから、確かそんなに時間も経っていなかったな、と、改めて思い出す。

治癒魔法を使い始めた彼の蕎麦で、極力邪魔をしないよう、そして協力出来るように徹しながら、こうして軍隊が目の前に迫って来るまで過ごして来た。

けれど未だに全快の兆しは無く、疲労困憊の男が二人。方や地面へと寝そべり、方や気だるく座り込んでいる状態。

（このまま普通に逮捕してくれば良いんだけど……）

『その犯人に告げるゝ云々』とか言い出したのなら、諸手を上げて投降する準備がある。

というか、むしろそれを切に願っているのが今の俺。

様々な事柄を無い頭使って絞った結果、ならもう、素直に謝るしか無いと考えたから

だ。

意図してなかった事ではあるが、悪い事をしたのなら、謝るべきだろう。

とはいえ、何も受身でいる必要は無い。

先にも言ったように、この緊張状態から投降へと漕ぎ着けるには、ファーストコンタクトが大事。

ならばここは一つ、自分から動く事で、向こうに誠意を魅せようではないか。

相手から言われてするよりも、自発的に行った方が良い方向へと進む場合が多い。

罪を犯した時だって、逮捕と自首では、刑の執行に色々と便宜を図れる可能性が生まれてくる。

「本当はもう少し近づいて来てくれるからの方が良かったんだけど……」

相手との距離まで、目測で……：ゆうに数百メートルはある。

ダルい体に鞭打ってあそこまで行くには、中々しんどい距離なのですよ。

(ま、これも自首への先行投資と思えば)

未だ横たわるジェイスに気を配りながら、潜んでいた岩場の陰から身を乗り出す。

今までチラチラとしか見ていなかったけれど、こうして体をさらけ出した状態で見渡す景色は、また格別だ。

……というのも、銃口とかそれに似たようなものが、一斉にこちらを向きましたから

ね（汗

あれだね。例えば自分が死なない（壊れない）と分かっているても、この光景には背筋が凍りますですよ。

害が無いと分かっているても感じてしまう、条件反射のようなものだろう。コンタクトとか目薬とか、それ系を使う時の感じ、と例えてみようか。

俺が姿を見せたことで彼ら（彼女ら？）はピタリと足を止め、目の敵でも見つけたかのように、怯え、あるいは殺意の籠った視線をぶつけて来る。

（……あー、そういうや永琳さんとか綿月の姉の方を昏倒させたままだったんだよなあ。そりやあ目の敵にもされませんか。仕方ないとはいえ、ホント、参っちゃうよなあ……）
何はともあれ、とりあえず降伏をしておかねば。

白旗フリフリ？ ジャパニーズ土下座？ いっそ月の大地へ五体投地？

どれもちよつと違うなという気がして、無難に万歳ポーズで行ってようと、両手に力を込めた時。

（あ）

光った、と、思う間も無い。

次の瞬間、俺の体は車にでも撥ね飛ばされたかのように、後ろへと弾かれた。

私の他にも、この任務が初めての实战、という人は多い。

そもそも軍に所属したのだから、お給料とか、他の職に比べて箔が付きやすいとか、そういう理由からだ。

結構厳しい訓練もあったけど、それだから我慢出来た。

——だって、命が掛かっていなかったから。

月人は寿命が長い。

決して不老という訳じゃあ無いけど、それに比べたって、数千年とか数万年は普通な部類。

一つの職に百〜千年単位で就いて、それから他の職に移るなんて、ココじゃあ当たり前。

そこで『私は軍に勤め〜』とか履歴書に書くと、相手側の受けが格段に違うので、自分の能力に自信の無い人達には、履歴に花を添える為、こぞってこの職を選ぶのだ。

きつくてリタイアする人も居るけれど、大体は歯を食いしばって耐えて、無事任期を

勤め上げる。

そういういった功績が評価され、さつきも言ったように、『軍で働いていたとは、根性があるんだな』という証になるんだと思う

……そんな通過点の一つであつた筈なのに、一体、なんでこんな事になつているんだろう。

月の都市建国以来、一度として実戦が行われなかつたから就職したのに。

誰かを守るといふフレーズは好きだし、実際感謝されたりもするから、割と好きな職だつただけだな……。

(やだなあ。死にたくないよ……)

怖い。

そんな思いで、胸が潰れそうになる。

哨戒任務が終わつたら、みんなで商業地区のメインストリートに遊びに行く予定だつた。

甘いお菓子を食べて、仲の良い友達と喋つて、最近八意様が訪れたという、超高級な洋服が売つてるお店に、勇気を振り絞つて行こうと思つていたのに。

……あの警報から、全てが変わってしまった。

二種や三種を通り越して、いきなり第一種の戦闘態勢。

使用武器の制限だって、本来なら4ランクの中から順番に引き上がって来るのに、いきなり『使用武器制限無し』。

与えられた任務は、九十九という名の地上人の捕縛。

しかもその人は、八意様と豊姫様に害をなした、凶悪犯だと言う。

幸いにして命に別状は無いらしいけど、未だにお二人はお目覚めにはなられていない、と聞いた。

月の技術を使ってもそのような状況になっている——状況にした犯人の逮捕というは、相手が一体どのような力量を持っているのか、全く判断が付かない。

与えられた情報では、相手は『絶対に破壊されない』能力を持ち、熊や鳥といった動物を召喚する事も出来るそうなのだが、それに加えて八意様達を重体に追いやった能力も付随しているのだ。

最悪、自分だってあの方達のようになるのかもしれない。

永遠に目覚めないというのは、詰まる所、死んでしまった事と同じ。

だから、怖い。

今まで『死』なんて遠い先の体験になると思っていた。

けれどどうだ。

今日の前には、それが、さも今まで自分の影に潜んでいたかの如く、当たり前のような

に存在している。

(この任務が終わったら……)

職歴に響いても良い。転職しよう。

何より、死んでしまつては元も子もないのは、今切実に感じている。

生きていれば、後はどうとでも。

だから、無事に戻らねば。

(あ……あれが……)

視界の先。

ゆつくりと現れた男が一人。

武装らしきものは何も携帯していないようだが、油断出来る相手ではない。

何せ、あの万全のセキュリティが備わっていた、月の偉人達が住む特別区画で事件を

起こしたのだ。

もはや、星が降つて来るかもしれないと思つていても、不思議な事態ではない。

それに、月の裏とは絶対零度の死の世界。

おまけとばかりに空気が存在しない中で、何故ただの地上人である目標は活動を続け

ているのだろう。

私達軍隊は、月側から出ているエネルギーフィールドで守られているからだというの

に。

何かの能力だろうが、驚愕や感心など思うわけも無く。

ただ純粹に、その在り方が恐ろしかった。

「全隊、指示があるまで待機！ 伝令、本部に通達！『目標を確認した。指示を請う』、送れ！」

部隊長が何か言ってるが、それは正確に耳へ入ってこない。

……引き金に指が伸びる。

大量生産の支給品。地上人一人殺める事など造作も無い兵器。

鼓動が早くなる。

銃と体が一体になったかのような感覚のせいか、目標が、こちらを睨み付けた様子が感じ取れた。

「気を緩めるなよ。相手は……、おい!? そのお前！ 引き金から指を外せ!!」
煩い。

自分の命が掛かっているというのに、何を律儀にグンタイゴッコなどしているのだ。
相手は一人。

防衛能力は高いようだが、攻性には向いていない、と、目を通した情報には載って
いた。

ならば、何を暢気に指示など待っているのか。

この一秒が、自分の命を失ってしまう時間なのかもしれないのに。

「誰か04番を止めろ！」

何を憤っているのか理解に苦しむが、私はみんなの命も助けようとしているのだ。

感謝されこそすれ、何故怒号に満ちた声で怒鳴られなければならない。

相手の防御性の優位点は、自身の能力であるからだ。

それが発動したのなら、情報通り、絶対破壊不可のスキルが現れる。

だとすれば、それを發揮させる前に行動を起こせば、相手はそれに対処出来ずに終わるだろう。

音よりも速く飛来する弾丸は、能力持ちとはいえただの地上人である目標には、逃れる術はない。

こうやって何もせずにいる事自体が、自分達の危険性を上昇させているだけだと、故気づかないのか。

——— 周りの隊員から手が伸びる。

けれどそれよりも僅かに速く、私の指先は行動を完了した。

こうする事で、恐らく穢れが生まれてしまうけれど、たった一つの生命からの穢れなど、フェムトファイバーでどうとでもなる。

低めの破裂音。肩に掛かる衝撃と、若干の手の痺れ。それとほぼ同時。

何かが何かにぶつかる鈍く大きい音と、目標が勢いよく仰向けに倒れるのが見えた。

空が見える。

青い方ではない。暗くて、所々で輝いている方だ。

満天の星空どころか、宝石箱の世界にでも迷い込んでしまったような錯覚を受けるが、そんな宇宙空間の素晴らしさを、充分に実感している暇も無い。

大の字にぶつ倒れた体には痛み一つすら無いが、心の方にはそれなりにダメージが入っている。

あまりに速い攻撃は、「ダークステイル」の円盤が反応する間すらもなかった。

(……撃つて来やがった……)

自分の覚えている範囲では、警告とか投降声明なんてものは出されていなかった。

ノーアラートの一発必中。

何かが光ったと思った瞬間に、これだ。

縫ろうと思っていた蜘蛛の糸は、垂らされる様子すらなく。

代わりに現れたのは、一発の凶弾でした、つてか。

(あいつら……人が負ける気満々だったつてのに……)

ゆつくりと体を起こす。

こちらからでは、相手の表情は伺えないが、あちらからは、俺が体を起こした事は見えていた筈だ。

次はいつ弾丸を受けても良いように、若干前へと重心を傾けながら立ち上がった。

こうなつてしまつては、後は行き着く先まで行くしかない。

……けれど、だからと言つて自分の非を認めない、というのは頂けない。

あれはあれ、これはこれ。

初志貫徹。悪い事をしたら、きちんと謝りましょう。

両親や社会から学んだものは生かすべし。

そうれば、俺は今後も自分のルールに乗っ取つて、胸を張つて生きていけるから。

(つて、あ……)

だが、ちよつと待つて欲しい。

俺だけならば、幾ら攻撃されようが屁でもないけれど、近くの岩陰には、ジェイスが横たわっていたのだ。

サーチ&デストロイを地でやってくる連中の前に、俺という的が現れた。

結果、先制パンチを見事に受けてしまった体が宙を舞う羽目になっている。

攻撃する意図があつた以上、こうして何事も無く立ち上がってしまったのは、それは、『お前らの攻撃なんて効かねえ』と同義。

予想するのは、さらなる猛攻。

この辺の地形が変わってしまったても、あの月の部隊が相手だったのなら、むしろ、それ位は普通に出て来そうな兵器を、使ってくるかもしれない。

そうだったのなら……

(やばい、このままでとジェイスを守れない)

気化爆弾とか焼夷弾とか……もしくはすつごいSFチックな爆発系のものとか。

そんな安直なものしか思い浮かばないが、その手の広範囲攻撃なんぞやられた日には、とてもじゃないが、意識の無い彼を庇い切れない。

投降という道が消えてしまった以上、選択肢は二つ。

全力で逃げ切るか、全力で捌き切るか。

だが、前者の案は即座に切って捨てる。

移動だけならまだしも、重体であるジェイスを労わりながら行動するなど、今の俺には不可能だ。

それに、瞬間移動やワープといったものでもない限り、彼ら月の軍の攻撃範囲から無事に逃げ切れるとは思えない。

(ノーダメージを維持しながらジェイスを抱えての移動……無理だ。思いつかない)

それをするにはカードの使用枚数も、何よりマナが足りない。

だとするなら、取れる方法は後者。

相手を信じてノーガード。なんて考えは、先に受け攻撃を考えるに、考慮にすら値しない。

行方は防衛。

それも一発の弾丸も通さない、鉄壁を超えた、絶対防衛。

【壁】系クリチャーの召喚か……？ でもあれはなあ……

『壁』

数ある「クリーチャー・タイプ」の一つ。

【防衛】と呼ばれる特殊な能力を持ち、この能力は相手への攻撃が出来ない、という、一種のデメリットである。

基本的にパワーが低く、タフネスが高めに設定されており、「マナレシオ」——コストパフォーマンスが優秀な傾向が強い。相手のクリーチャーの攻撃を防ぎ、足止めや延命をするのに、最適なクリーチャーである。

ただ、だからといって一方的な受身クリーチャーかと言われるれば、その様な事は無く、中には受けたダメージを相手へ返したり、攻撃して来たクリーチャーを破壊する効果を持つモノもある為に、一概に考えることは出来ない。

これらクリーチャーを展開し、その隙に高コスト、または超高コスト呪文に繋げて行くのが主な使い方である。

『クリーチャー・タイプ（以下・タイプ）』

文字通り、クリーチャーに存在しているタイプ——種族を表す。

クリーチャーには全て、これら【タイプ】が存在しており、様々な面でこれら項目がゲームに影響を与えてゆく。

よくカードゲームである、特定のカードのみを使用して【シナジー】を構築する——

―俗に言う部族（種族）デツキの場合に参照する。ドラゴンデツキ、天使デツキといったものが良い例。

一つのカードに複数〔タイプ〕を持つものもある。

総じて防衛に最適のクリーチャーではあるのだが、やはり受身メインなものが殆どな為&それ以外の優秀な奴を思い浮かべられないので、残念ではあるが、選択肢から外しておく。

……だって、他にもっと良いものを考えてあるから。

軍隊が到着するまでに考え付いて、ホント良かった……。あれならば、滅多な事では陥落する筈は無い。

（多少あつちを掻き乱してやれば、少しはこつちの話を聞いてくれるかもしれないよな）あれと敵対するのは馬鹿らしい、とか思ってくれたのならラッキー。

もしくは、ジェイスが回復するだけの時間を捻出できれば御の字……というか、目標

達成だ。

何やら遠くで隊員同士がガヤガヤやっているのは、きつと何か強力な兵器を準備でもしているのだろうか。

(ふふん、やらせはせん。やらせはせんぞお！)

先制パンチはくれてやったのだ。

後攻の利点、正当防衛は主張させてもらうぜ。

(コンボ発——つととと。どうせなら単発で行ってみるか。あのカードに描かれた光景が実現するんなら、動揺の一つでもしてくれるかも)

今使おうとしているコンボは、一枚一枚使おうがデツキ名を唱えようが、「ハルク フラッシュ」の時の様に、成果が出るまで時間が掛かるという訳ではない。

どうせこれを使ったら、マナストックは無くなるのだ。使える演出は多ければ多いに越した事は無い。

そこに気を取られて、平常心を乱してくれでもすれば、色々と付け込む隙が現れるだろう。

(交渉から始めなかつた事を、後悔するがいい！)

ぬははは、と内心でドヤ顔をかまししながら、使用するカードを唱える。

——ジエイスをカードに戻せば色々解決出来る問題があつたのでは、と。銃弾を受けて余裕が無くなつたのか、初コンボ使用による興奮からか。始めの頃に考えていた結論は、終ぞ出てくる事は無かつた。

「そいつを営倉にぶち込んでおけ！」

命令違反を犯した隊員を見送りながら、その部隊を纏め上げていた長は、深く溜め息を付く。

引きずられる様に離脱していくその隊員からは、『このままじゃみんな』『今やらないと』など、感情を最優先にしている節が多々見受けられた。

——何を当たり前の事を言っているのだろうか。

あまりに馬鹿馬鹿し過ぎて、頭を抱えてしまいそうになつた。

そんな気持ちなど、ここにいる殆ど全ての者は抱えているに違いない。

かく言う自分だって、その気持ちには同意する。

こんな悠長な事などせずに、一気に捕縛、ないし砲撃の嵐を降り注げられたのなら、どんなに楽だろう、と。

そして、だからこそ、そんな気持ちを抑え込んでいる皆の意思に応えなければならぬ。

だというのに先のは、それを踏みにじったなかりか、状況すら変えてしまいかねない事態を起こしてしまった。

ゆつくりと立ち上がった目標は、全身の力を抜いて、だらんと何も反応する事無く佇んでいる。

攻撃を受けた事で我を忘れていいのか、何か特殊な力でも使う気なのかすら分からないが、正常な反応だとは思えない。

恐らく頭部に命中したであろう弾丸に、報告書通り、何の損傷も見受けられない事から、例の破壊不可の能力は既に発動しているのだろう。その証拠に、対象の周りには、例の漆黒の円盤が浮遊していた。

一定の攻撃を弾く円盤らしいのだが、流石に音の数倍に近い速度で飛来する弾丸は防げなかったようで、何も出来なかった、と思わせるように、ふよふよと漂っている。

周りの色と相まって、あの円盤は目視では大変発見され難くなっているのも、例の隊員が攻撃を行った理由だろう。

この出来事は本部に連絡を入れるべきかと悩み始めたところで、
「た、隊長!!」

傍にいた隊員が、怒鳴るような……怯えるような声を上げた。

「一体なん……だ……」

余計な事に気を取られ、僅かの間、意識を、自分の中へと向けてしまったのがまずかった。

一瞬とはいえ、作戦行動中に目標から注意を逸らしてしまうなんて。

本来ならば、何の問題もなかったであろう、たった一瞬。

ただそれは、目の前の光景の前に、愚かであったのだ、と突きつけられる。

一面には、青く、澄んだ世界が広がっていた。

視界に広がるのは、無限の宇宙を地面に写す、合わせ鏡。

それは、途方も無い大きさの銀板。

目標の男を中心とした大地が、かなりの範囲に渡って、氷の土地へと姿を変えていた。

「各員、状況を報告!」

すぐさま指示を飛ばせたのは、やはり日頃の訓練と、心構えの賜物であろう。

「こつ、こつ、こちら02! 突如足元が凍り付きましたが、作戦遂行に影響なし!」

「こつ、こつ、こちら11! 02と同様!」

「こちら09！ 若干の足場の乱れはありますが、支障なし！」
それぞれ上がってくる報告に耳を傾けるが、やはり誰の目にも、この現実は見えてい
るらしい。

唐突に現れた、極寒の世界。

もつとも、光が届かぬこの月の裏側は元々が絶対零度であつた為に、違和感を覚える
話だ。

しかし、それ以外の言葉が思いつかないのも、また事実。

地上の資料で、太陽の光が届き難い地域で見られる光景であつたな、と、部隊長は何
処か自分を遠くに見ている視点で、そんな事を思う。

雪、という氷の粉末結晶体こそ見受けられないものの、その世界は穢れの大地の一部
と瓜二つ。

こんな雰囲気でなかつたのなら、いつそ幻想的ですからあるこの風景に、感動すら覚え
たかもしれない。

——まるで、何かの心臓が鼓動するような音を聞かなければ。

自分の体から今まで何度も耳にしている、均一なりズム。

ドクン、ドクン、ドクン。

赤子の子守唄のようなそれは、けれど、かつて耳にした事の無い程に大きな振動と

なつて、体のみならず、大地を静かに……とても静かに揺らしている。

音源は足元から伝わって来ていたので、必然、そちらへと目が向く。

一体何の音だ。

発生源を確かめようと、視界を星空の写り込んだ大地の……さらに奥へと目を凝らす。

幾ら氷とはいえ、この地面はそこまで明度は高くない。

……だが、見える。

無言で直立している、大罪人の足元に。

響く鼓動に乗せて、自己を主張しているかの如く、しつかりと。

星々の輝きで薄つすらと浮かび上がるその姿は……。

「ひっ——!?!」

誰かが驚嘆の声を上げた。

軍に関わるものとして、それは他の者から叱咤されても仕方のない反応だ。しかし、誰もがそれを指摘しないというのも、また仕方のない反応である。

空に輝く星の光に紛れる様に……けれど、それらとは一線を超えた、圧倒的存在感。

目と呼ばれるであろうその光源は、今まで見た何よりも恐ろしいものであった。

そして氷結の世界に沈むその光に導かれるように、霧かかった視界が晴れてくるかの

ように、全体像が見えてくる。

……その姿、何と形容すればいいのだろうか。

どのような存在にも当てはまらず、どこかの幼子が悪戯に描いたと言われた方が納得するかもしれない。

岩のような質感の巨体から、幾本もの太い木の枝を生やし、その一本一本が樹齢数百〜千年を迎えているであろう程もある。

それらの大本である体は暗闇に没していて確認出来ないが、数十メートルはゆうに超えている事は、霞みながらも輪郭で分かってしまう。

こんな姿をした存在など聞いた事が無い。

地上の悪魔や妖怪といった、通常の生態系からかけ離れた生き物ですら、動物や昆虫、魚介類などの形を多少なりとも模しているというのに。

「地下に巨大な質量異常！ 現存していた物質を塗り替えて出現しました！ 同時、生命活動を確認。数は……1！」

今更その報告に、何の意味がある。

誰もが呆気にとられていた中、自分の役割をこなした観測隊員には悪いが、この場にいる全ての者が、その事実を直視している。

何度も読み返した小説の説明を受けた時のように、『そんな事は分かっている』と言っ

てしまいそうになった。

だが、その報告で、意識が目の前の光景を受け入れようと動き出す。

装備、隊員、陣形、全てにおいて異常無し。

大地が氷に変わってしまった事が唯一にして最大の変化だが、こちらはまだ命どころか装備の一つすら失ってはいない。

（命令が変更されていない以上、やる事は変わらん。どんな事があるうと、目標の捕縛を遂行するのみ）

与えられた任務を再確認し、隊長は何とか自分を取り戻す。

「本部に到達！ 現在、犯人の攪乱能力と思われる現象に遭遇。被害は無いものの、その能力は未知数。過去の情報には含まれておらず、観測の強化を具申。送れ！」

未だ先程の指示への返答は無いのが、こんなにも憤怒しそうになるのだと、その隊長は身をもって実感した。

呼応して返事をする連絡員を意識の隅にやりながら、恐らくこの事態を引き起こしたであろう犯人を睨み付ける。

撃たれた直後と同じところに立ったままだが——彼の横には、今まで見た事も無い人物が立っていた。

「報告！」

同時、観測班からの連絡が入る。

顔をそちらに向けて、目先にいた対象——容姿からして黒衣の女性だろうか——の情報を求めた。

「たった今、目標の横に人型の生命体が出げ……ん……」

「……どうした。続きを言え」

「……消えました」

「……何？」

「目標、消滅。……現れた人型は光となって消えました。転移などの形跡も無し。——

——完全にロストしました」

もはや訳が分からない。

氷の大地が出現したと思った矢先に、これだ。

完全に理解の外側で起こっている現象に、頭がどうにかなりそうだ。

凍った地面が出てきて、そこには未知の大型生物が居て。人型が出現したと思ったら、正確に確認する間もなく、消え失せた。

一体何がしたくてこんな摩訶不思議な現象を引き起こしているのだろうか。いや、そもそもこの現象は、あの犯人が引き起こしているのだろうか。

いつそ、どこぞの神の茶番劇だと言われた方が、まだ納得出来るというものだ。

——そうして。

その理解は、さらに及ばぬ所へ向かう事になる。

28 Hexmage Depths 《前編》

状況が状況だけに大声は出していないが、いつものように、脳内カードを使用する。

俺にとってはいつもの事だが、劇的に、そして一瞬で世界の一部が変わってしまった事実には、その他大勢であるあちら側の人達は、それはもう蜘蛛の子を散らしたような……まではいかないが、目に見えてわたわたしてくれているのが面白い。

(おお、驚いとる驚いとる)

やっぱり足元が突然変化したとなれば、そのインパクトはかなりのものに違いない。遠目でも相手の動揺が手に取るように分かるのは、状況の緊迫感を差し引いても、少し愉快なものがあつた。

唱えたのは、とある【土地】。

【特殊地形】の一種であるそれは、けれど、土地らしからぬ存在でもあつた。

マナを一切生み出さないのである。

マジック・ザ・ギャザリングとは、マナを使つて呪文を使う。

【ピッチスperl】といった例外もあるが、基本はそうなのだ。

本来マナを生み出すべきものが、その役割を果たさない。

つまりは、それだけのデメリツトを抱えても価値が——有効性があるカードという事だ。……大概是。

その例が、過去に一度だけ使つた【隠れ家】という【土地】カード。

あれは、自軍のクリーチャーであるのなら、マナと時間を掛ければ、無限に【隠れ家】内部にそれらを内包出来る能力を有していた。

——ならば、今回使用したカードは、どういった性質のものなのか。

簡単だ。とあるクリーチャーを、一体だけ生み出すのである。

しかしその生み出されるクリーチャーは、若干の欠点こそあるもの。

極めて強力で、MTGでも1→2を争う攻守を備えており、さらに少量ではあるが、特殊能力を保持している。

だが当然ながら、そんなものがそう簡単に呼び出せる訳が無い。

それを使うには、3マナを使う事で開放される封印が、10も付いていた。

率直に考えるのなら、合計30マナも使用しなければ召喚する事が出来ず、そんな事をするくらいならば、他のカードを使つた方が戦術や勝算がある……と、ネタとして存

在していたカード。

(つしや。ビビっててくれる、今のうちに……)

けれどそんなネタカードも、あるクリーチャーの登場で一変した。

そのクリーチャーが、ある特定の要素のみを取り除く事が出来る能力を有していたからである。

この場合の要素とは——少々難しい為、要約すると——封印。

その【特殊地形】に存在する封印を、一瞬にして全てを取り払う事が出来た。

しかもそれは、たったの2マナ。

召喚した後、生贄に捧げなければならぬ故に実質一回しか使えないが……逆に考えれば、一回は相手に妨害でもされない限り発動するのである。

使い所の難しいカードではあるけれど、それが登場した当初から、その【特殊地形】カードとの【シナジー】は注目されており、そしてそれに答えるかの如く、一部大会では脅威を振りまき、コンボとして確立した。

唱えた瞬間、俺の目の前には黒衣に身を包んだ女性の後姿が出現した。

例の如く体力を奪われる感覚が襲って来て、過去の召喚と合わせてジェイスの魔法使用時の消費もプラスされ、ちよつと足元が覚束なくなつたが、そこは気合で乗り切る。

黒皮で出来た、背中全開のドレスを着ており、その体には何らかの意味合いがあるの

だろう……血で描かれた様なラインが幾本か見て取れた。

美しかったであろう黒髪を、細めのドレッドヘアにして纏め上げ、振り向いたその顔には、薄い黒紫で口紅が引かれていた。

【吸血鬼の呪詛術士（じゅそじゅつし）】
それが、このカードの名前である。

『吸血鬼の呪詛術士』

2 マナで、黒のクリーチャー 2 / 1

戦闘面で有利になるメリットを一つ保持し、それとは別に、これ自身を生贄に捧げる事で、特定の条件や制約を無効化する能力を有している。

暗黒の魔女、というフレーズが良く似合いそうなこの女性は、その容姿が先に召喚した【霊体の先達】よりも、別の意味で凶悪だ。

ボンテージドレスが体にピッタリと貼りついており、脚部のスリットから覗く太股と、その膨やかな異性の特徴を強調している。

(わあ……外人サイズやあ……)

吸い付くような肌の質感が——触ってはいないが——よりそれらを際立たせていた。

何と言うか……露骨にエロい。

特にその胸元。谷間に空いた握り拳程のその穴は、一体何の為に空いているというのだ。

デザインか？ デザインなのか？ MTG界ではファッションだとも言うのか？

……作った人、グッジョブ。

……喫茶……って柄じゃないから……キャバクラ『ぎやざガール』とかいずれ出店して……ゲフンゲフン……。

神奈子さんといい、永琳さんといい、グラマラス超美人達と生対面する機会が頻繁に

あるのは、男冥利に尽きるもの。

しかし、そんな俺の煩惱など、見知った良くある出来事だと言わんばかりに、「吸血鬼の呪詛術士」は妖艶に微笑した。

『しょうがない坊やね』と幻聴とか念話が聞こえてきそうな表情に魂を抜かれ掛かるが、何とか我に返って要望を聞いてもらおう事にする。

「すいません、あの……出て来てもらつたばかりで申し訳ないんですが……この大地に例の能力を使つてもらえませんか……？」

彼女単体でも、大和の国で相手をしていた雑多な低級妖怪なら楽勝の戦力なのだが、今回呼び出したのは、下で埋まっている存在を掘り起こす為だ。

具体的な名前は分からないが、こっちは念話という、言葉のみならずイメージすら伝えられる術を持っている。

あれ、とか、それ、と言うだけで、伝えたい内容がダイレクトに届くのは、とても便利だと実感出来た。

状況が状況だけに、あんまりうかうかしてもいられないのだが、どうも目のやり場に困って意識がバラ色に……と羞恥心が働くのは、しょーがないと思いたい。

ただ、そんな色気を醸し出しているお方は、俺の葛藤など何処吹く風。

微笑みながらこちらへとその手を伸ばし、俺の頬へと優しく手を添えた。

タイトルを付けるなら『あら、可愛い子ね』な感じだろうか。

いきなり何するんだとも思ったが、その優しい……悪寒を伴う楽しそうな表情に気圧されて、全く動く事が出来ず。

スツ、と。彼女の指は、俺の頬へと薄い切り傷を作った。

じんわりと浮かび上がる血液。

あれ、何か分かんないけどこれって俺ピンチ？　とも思ったが、どうやらそうでは無いらしい。

ゆつくりと彼女の顔が迫ってきて、そして……。

「——っ!？」

舐められた。

唾然としながら、自分の頬へと手を伸ばす。

一瞬だけだったが、それでも頬に残る暖かさと粘液は残っている。

そういうや前に、大和の国で似たようなシチュエーションを見た事があるな、とフラツシユバックした思考を慌てて掻き消しながら、どういう状況になったのかを考え直すとして、

(……あ、彼女の「タイプ」って、カード名にもある名の通り、「吸血鬼」だったか……)

何となく、彼女がこの行動に及んだのかが分かってしまった。

満足気に舐め取った血液を舌で唇に塗り付けるかのようになり、ペロリと一周させる。

堪らない色気と、ゾクリとするような寒気を同時に感じ取りながら、俺は今、どのよ
うな表情を浮かべているのだろうか、漠然と思った。

「あ、あの……それに一体何の意味……が……？」

確か能力の起動には、血液を必要とするコストは含まれていなかった。

東方世界で能力を発揮するにはそのような行為が必要なのかと思いつながら尋ねて
みると、

——『気分』と。

とても完結で……実に楽しいな感情が、念話と共に伝わって来た。

（き、気分つか……そうツスよね、吸血鬼ですもんね。トマトジュースと血液大好きは
デフォですもんね）

……って、ちよつと待て。

何故俺は傷ついている。

今俺は「ダークステイル」化している筈だ。

時間も、まだ半日すら経過していない。効果は切れていない……筈なのに。

「ギャグよ」

ああ、そつか。それなら納得だ。

あのコメディパートなら何でもかんでも許される……ん？

「おいこら！ お前喋れんのか!？」

疑問と理不尽の混ざり合った突っ込みを入れるものの、満足したのか、彼女は目を閉じ、楽しみで胸がいつぱいだと言うような表情を浮かべながら、風に吹かれて、光となつて足元——氷の大地へと溶けていった

……何でもありだなコンチクショウ。

ふざけてやるのか真面目にやるのかはつきりしてほしいですよ、全くもう……。

……いい感じに振り回されてしまったが、けれど、それに若干の心地良さを感じながら、再び意識を目の前の事へと集中させた。

——ま。

何はともあれ、気を抜ける時間はこれで終わりだ。

後は何処までいっても犯罪者と月の軍隊との、正義と悪との討論があるのみ。無論、言葉の入る余地は……既に、無い。

予想外ではあつたけど、良い気分転換をさせてもらった。

ジェイスを守ることと、自分の命を守ることと。

一つの事でもいっばいいいっばいどころか持て余してしまう自分では、その責任に……正直、ついさつきまで押し潰されそうになっていた。

テンション上げて何とか押し切ってしまったと思っていたが、いやはや、どうしてこう……呼び出すカードの方々は、俺に良くしてくれるのだろう。

(……)まで大勢の思ってくれる人達が居るつてのは……まあ、何だ……恥ずか……嬉しいねえ)

照れ隠しをしてみるものの、どうせ誰にも分からないだろ、と、素直に心中を洩らす。ツンデレツンデレ。わっはっは。そう、おちやらけながら、軽く短く、鼻から息を吐く。

丁度、「吸血鬼の呪詛術士」の効果も終わったのか、彼女は完全にその姿を消していた。そうして、光が地面へと吸収されていってから、数拍の間。

世界は——変貌する。

「」

言葉が無い。

それどころか、呼吸をする事すら忘れそうになった。

それほどまでに、この光景は圧倒的で……。

今までの人生の中で、これ程までに心震える出来事は無かった。

ひび割れ、亀裂の入った氷河から、その存在が姿を現す。

絶対零度の狭間から、一つ、また一つと、腕を、体を浮上させ、その全貌の一部を見せ付ける。

灰色がかった黒い躯体。

巨大な体に見合うその牙は、俺一人よりもさらに大きく、口を開けば海のギャングと呼ばれるシャチャや、陸上で最大の巨漢を誇る象ですらも、丸呑みに出来そうな程。

畏怖すら感じるその体から生えている触手——と言えばいいのだろうか——は、硬質な茨や鉄条網を無作為に植林した様な、もはや『あれだけには触れてはいけない』とすら催す程の禍々しさを漂わせている。

目と呼ばれるであろうそれは、過去に召喚した【死の門の悪魔】と同等か、それ以上の数があるかもしれない。

ただし、あちらが濡れるような血のような色だったのに対し、こちらは幾千光年の先から届く星々の光のような……鈍く輝く、底冷えのするような“寒”の色彩だ。

どの様な地球上の生命体とも比較は難しいが、あえて強引に例えるとするのなら……

大樹と——蛸と——鯨の頭を持った化け物……と、言えるのかもしれない。

全長、ゆうに数百メートルは達しているであろう、見る者の、魂を押し潰す、その存在。

今ここに。

この東方プロジェクトの世界に、MTG界においても最高クラスの攻守を備えた存在

——【マリット・レイジ】が息を吹き返した。

『マリット・レイジ』

黒の、【伝説】クリーチャー【トークン】 20/20

【飛行】と、【破壊されない】能力を有する。

【特殊地形】の一種である【暗黒の深部】より生み出された存在。

【トークン】である為、実際のカードとしては存在していなかったが、そのあまりの特有さからか、後にカードとして製造されてしまった代物。

とある世界の海底で眠りについていたが、氷河期の訪れと共に、そのまま封印に近い形で永眠する羽目になった——らしい——という経歴を持つ、うっかりさん。その存在の強大さに惹かれてか、いつの間にか荒ぶる神として祭り上げられていた存在でもある。

だが、そう呼ばれても当然だと思えるだけの能力を有しており、【ダークステイル】と同様の破壊不可効果を持ち、【飛行】能力を保持し、何より特筆すべき点が、その攻守の高さ。

20/20という、一瞬目を疑うような数値であり、これと比肩する存在はおらず、僅差である存在も居ない。2位以下を大きく引き離し独走するその力は、圧巻の一言に尽きる。

一応女性型らしく、“女神”とする存在でもあるようだが、真偽は不明。その余りの力量から、一説には【プレインズウォーカー】である、という者もいる。

『暗黒の深部』

マナを生み出さない【伝説の土地】と呼ばれる【特殊地形】の一つ。【伝説】故に、場に一枚しか存在する事が出来ない。

3 マナで一つ解除する事の出来る封印を10個持ち、それらを全て取り除いた時点

で、この【土地】を生贄に捧げる事で、【マリット・レイジ】【トークン】が召喚される。

「お〜……」

漏らした声は小さく。それはもはや意味を成さない、単なる雑音。

人間、あまりにショッキングな出来事に遭遇すると、声と言うより、ただの音に近い

—— 獣のような発音しか出来なくなるらしい。

あんぐりと口を開けた姿は格好悪いだろうが、今だけは見逃して欲しい気分だ。

数十メートルも視線の高くなった現状に加え、足元には荒ぶる神と比喻される程のお方が一人……一体？ どうカウントすれば良いんだこのお方。

ゴツゴツとした足に伝わる感触に、背筋がざわめき立つ。

仮にも神として扱われていた存在を、召喚したからとはいえ足蹴にしている現状は、どう捉えたら良いものか。

とりあえず謝罪か、挨拶か。

何はともあれ、まずは意思疎通をやってみましょうかね。

「い、こんにちは……」

問いに対する回答は、一言。『何?』と簡潔に返答を頂きました。

よ、良かった。一応対話は出来ましたよ。

思つたより声色が可愛い気がする……。見た目はあれですが。

「えつと……実は……」

現状の説明を簡単にして、今やつて欲しい——ちよつとやらかして月の軍に追われている事。ジェイスが瀕死で、彼が回復するまで攻撃を防いで欲しい事の、二点を伝えた。

その間、彼女——マリさん（暫定）は終始無言。

聞いてるんだか聞いてないんだか不安になったが、常に触手がゆつくりとウネウネしているの、意識はちゃんとあるっぽい。

初めて対面している……対面？

まあいい。対面しているお方なだけに、あのウネウネがいつこちらに来てベチン、とか蚊の如く叩き潰されるのではないかとヒヤヒヤしております。

そうして話し終えてから数秒。

マリさんは『分かった』と、これまた簡潔に返して下さいました。

二言しか彼女の意思を聞いていないが、何となく女性特有の暖かさ、さつきまで寝てました、な怠惰を感じさせる感情が流れてくる。

見た目ゴツイけど、結構愛嬌があるお方なのかもしれない。

一気に視線の高くなった視界に多少ビビりながら、改めてカードであった彼女の能力を思い返す。

【回避能力】の一つである【飛行】を有し、【ダークステイル】と同等の能力である【破壊不可】を備え、それらの能力が霞んでしまう程のパワーとタフネスを持ったクリチャー。

過去に出した最高値は9／9。だが今回は、それらを一気に置き去りにして、20／20という、『チート乙』とか付けたくなる数値である。

おまけ………というか、これが1／2を争う位に重要なのだが、こんなマリさんは【トークン】として召喚される。

コスト表記がゼロである事と、前に身に付けた『トークンの維持費の減少』スキルの効果によって、全くと言っていいほどに体力を消費していないのだ。

【土地】や0マナで使用した【葉草の湿布】は除外して、ジェイス3マナと【暴露】4マナ、そして【吸血鬼の呪詛術士】計9マナを消費している計算だが、遠くの地にいる勇丸と、現界し続けているジェイスを含めても、現在の維持費は4マナ相当。

辛いという感覚はあるが、それでもこれ位なら数時間は余裕で耐えられる。

召喚による土壌変化の規模が規模だけに、頻繁には使い難いだろうが、もつと早く思いついておくんでしたよ……。

これを諏訪大戦の時に考え付いていれば、また違った結果が見えてきたのだろうか。

一瞬、ありもしない未来を想像したけれど、現状の大和の国になんら不満は無いのを思い出して、

(なら、これで良いじゃん)

そう一言、内心で呟く。

自分で下した結論に満足しながら、自問自答を完結させた。

前に【ハルクフラッシュ】で出した30/30の……いや、30/30以上であった筈の【屍肉喰らい】はその性能を發揮しなかったものの、あれは【パンプアップ】と呼ばれる増強効果——ドーピングでの数値であったから、の可能性が高い。

だって、過去に召喚したカード達は、その数値通りの攻撃力やらを見せ付けてくれていたのだ。

0/1の【極楽鳥】だって、2/2の勇丸や【霊体の先達】だって、9/9の【死の門の悪魔】や、それ以上であったかもしれない【死の影】だって。

恐らく【パンプアップ】では上限が決まっているのだろうと思うが、そこを検討する

時間は無かった。

しかし、それでも俺は信じられる。

この存在が……足元で君臨している世界の強者が、今までのカードとは比較にならない力を持っているという事に。

鉄壁・ディフェンスどころか、虐殺すら可能にしてしまう戦力なのではと思ひ、『こりやアカン』と思考を切り替える。

行動を起こす前に言っておかないと、例え正当防衛であったとしても、やり過ぎたのなら過剰防衛の線でアウトになりかねない。

「マリさんマリさん……ちよつとやり難いとは思うんですけど、あっち側に一人も犠牲者を出さないで欲しいのですが」

いけますか？ と尋ねてみると、『やってみる』と短く返答が来た。

『出来る』と答えてくれなかったのは不安だが、象に、蟻を踏まずに歩いてくれ。と言っているようなものだ。

肯定的な返事が来ただけでもよしとしておこう。

……最悪、とある系統のカード達を使えば、対処出来る問題なのかもしれないのだから。

視界に広がる、地割れを起こし、その所々から触手が出現しているツンドラ地帯。

地平線を覆うように点在している戦車やら円盤やは、まるで最終面に突入した勇者達（数は多いが）を彷彿とさせる光景だ。

そう、気分はどこぞのRPGのラスボス。ただし、俺が弱点、みたいなの。

（剥き出しのクリティカルポイントとか、ボーナスも良いとこだな。何処かに隠れておこうか……）

……さて、意図せずラスボスの（弱点の）地位についてしまった訳だが、こちらにばかり意識を向けている訳にもいかない。

虎の威を借る狐さんの気分になりながら、月の軍を一瞥。

——正直、先程から興奮が収まっていない。

目を閉じ、大きく息を吸い込んで、腹に力を入れる。

自分の中で堪りに堪った感情を、言葉に乗せて叫ぶ。

今にも爆発しそうであつた感情は、人生で最大級の大声となつて、星の空へと放たれた。

「人が下手に出てりゃあ、付け上がりやがつて！ 地球人舐めんよ！ 単体戦力最強

候補”の一角、存分に味わうがいい！」

どうしてこんなに興奮しているのか自分でも明確な答えは出せないが、彼女が氷の大地から出現してから、まるで痙攣のように、いつ弾けても可笑しくないとばかりに全身

が脈動していた。

ジェイスを守る為？　自分が助かりたい？　圧倒的な力を持つ者を従えている事に酔った？

多分、それらの感情の全てプラス、この月での対応諸々の細々とした何かがミックスされ、合体事故でも起こしたせいだろう。

でなければ、何が悲しくて歌舞伎の演目を読み上げるような真似をしでかしたのか。一体自分がどういう感情で動いているのか、それこそ今の説明不可能な感情に任せるままに。

俺の切り札その2。

〔Hexmage Depths〕が、その全貌を現した。

『Hexmage Depths (ヘックスメイジ・デプス)』

名前はそれぞれのキーカード、【暗黒の深部／Dark Depths】と【呪詛術士

／Vampire Hexmage】の一部から流用したもの。

【暗黒の深部】にある封印を、【吸血鬼の呪詛術士】を使用して一気に取り除き、【マリット・レイジ】を召喚し、殴り勝つコンボデッキ。

MTGではプレイヤーの初期ライフ——HPは20と設定されており、20／20である【マリット・レイジ】の攻撃が通れば、事実上、一撃で相手を負かす事の出来るギミックであると言える。

そのキーカードの少なさから、【ハイブリット】デッキと呼ばれる、一つのデッキに複数のギミックを組み込む事が出来る。例えるならば、【ハルクフラッシュ】にもこの【ヘックスメイジ・デプス】は組み込める。が、それを行ってしまうと、大概のデッキは器用貧乏になり易く、中途半端にしか効力を発揮しない場合が多い。

MTGでは複数の道筋を作っておくよりも、一つの道を強固にする方が勝率が高い為、滅多な事では【ハイブリット】デッキを作ることは無い。しかしこの【ヘックスメイジ・デプス】は数少ない【ハイブリット】デッキの成功例でもある。

事実上、2しかマナを必要としない為、デッキの構成上、【ハルクフラッシュ】よりは若干劣るものの、その攻撃速度はトップクラスに位置している。

【マリット・レイジ】を対処されてしまうと途端に手詰まりになる為、勝率の安定性はやや欠けている、とも言えるので、それを上手く補えるかどうか、このデッキを使う者

の腕の見せ所である。

——【マリット・レイジ】が動き出す。

まるで世界を磨り潰さんとするかのように、静かに、静かに、ゆっくりと。

速さなど必要無いと体現するかのよう移動するその光景——自分以外の存在など考慮に値しない、とばかりのその動きは——まさに神と呼ばれる者に相応しい。

その様子に何かのスイッチが入ったのか、月の軍はキビキビと、けれど何処か慌てたように動き出した。

四足歩行戦車の砲身がこちらを捉え、大小の円盤達が、いつでも戦闘に移れるとばかりに、高く飛翔する。

歩兵の玉兎達は改めて銃口を構え直し、戦隊をしつかりと組んでこちらに一步踏み出した。

(上等!!)

俺の意思に呼応するかの如く、「マリット・レイジ」が、その巨大な顔を上げ。口元が開き、そこに真つ白な灯が燈る。

低音から徐々に高音へと聞こえる音は、まるで何かを……そう、あれは銀河の彼方へ放射能除去装置を取りに行く戦艦の主砲のチャージ音のようだ。

牙と牙の間から漏れる光は、彼女の頭上にいる俺ですらも視認出来る程に眩いものと増長して。

もうこれ以上、高音になり様が無いと判断した時。

「お前らのせいだかな！ 当方、土下座の用意ありいー！！」

恨み辛みと謝罪の言葉。

同時に放たれた、恐らく対極に位置するであろう言葉は、敵対者の耳へと届く事は無く。

【マリッド・レイジ】の攻撃力、20という数値。

それを目の当たりにした時。俺は――

無機質な、けれど何処か可愛らしい電子音が、控えめにではあるが、辺りに鳴り響く。本人の望むものでは無かった——しかし、姉が薦めたものだから、と、彼女のそれに登録されてから、一度も変更された事は無い、連絡端末。

そんな不本意なものながら、けれど愛着心のある音が耳を振るわせた時、彼女は１コールが終わろうとする暇も与えずに、その音を拾い上げた。

「私です」

簡潔で、それでいて有無を言わせぬ気迫の籠った声には、並みの月の民ならば息を呑み、言葉を失っていた事だろう。

「ああ、至急、郊外の××の、○○○ポイントまで向かってくれ」

だがそれに応答するのは、百戦錬磨の月の司令官。

全く気にした様子も無く、ただ淡々と報告をする。

「そこは——例の地上人が潜んでいた場所……でしたか……。捕縛の終わった兵達に、激励の一つでもしてやれ、と？」

少しうんざりするような口調で、彼女——依姫は答えた。

だが、これで事態は好転する。

あの青い者を捉えたのなら、後は如何様にも言う事を聞かせて、永琳様と姉上の意

識を目覚めさせるのだ。

自分の手で出来なかつたのは些か、ちよつと、まあまあ、それなりに、そこはかとな
く、少しだけ心がささくれ立つが、それも今後の月の為を思えば耐えられない事は無い。
どんな言葉を掛けよう。

こういつた場面で飛ばす檄とはどういうものだったか。と、頭を捻っていると、

「……いや、違う」

いつもの司令らしくない、酷く……歯切れの悪い言葉に、依姫は僅かに眉間に皺を寄
せた。

「では、何です。まさか事後処理をやれ、とでも仰りたいので？ 破壊されない能力だか
ら。と、盛大に大規模火力でも使用したのですか？」

自分の能力は汎用性が高い。

戦闘面のみならず、そういった、開墾事業でもその力を——

「もはや時間が惜しい。綿月依姫。至急指定された場所へ向かえ。——自身の最大戦
力を持って、だ」

通常の者ならば、ここで疑問の声の一つでも上げているだろう。

一体何故？ どうしてですか？ 理由を教えて欲しい。問いかける疑問の声は多々
あつてもおかしくはない。

しかし彼女は、月の軍における、単体最高戦力にして、最強存在。

それも、昨日今日になったのではなく、数千どころか、数万年単位での。

当然、それに付随するよう、教育は受けてきている。

——特に、ここ数百年からは、あの月の頭脳たる、八意永琳に。

「はっ!!」

携帯端末から、宝物庫へと連絡を入れる。

そこには歴々の品々が収められており——彼女の“本来の”武器である品も、封印

されていた。

強すぎたのだ。依姫は。

だからこそ自身の力に制約をかけ、鍛錬と称してはそれらを行つて来た。

——それを、今、解禁する。

向かうは転送装置の置かれた部屋。

そこへと例のものを持って来るよう、宝物庫を管理する者へ指示を出す。

距離が伸びれば伸びるほどに消費エネルギーの増すその装置は、しかし目的地——

あの青い者がいる場所へならば、そこまで負担にはならない。人一人だけ、となれば、尚

更だ。

……最も、それでも何の準備もされていない状態からの転送は、消費されるエネルギー

ギーは馬鹿にならないものなのだ。

「転送室！ 私が向かうまでに、これから送るデータの場所への転送準備を終えておけ！ ……何？ 民間世帯の一部がエネルギー供給不足になる？ 馬鹿者！ 優先順位を履き違えるな！ 最優先事項だ！」

事情が伝わっていないとみえる管制室を一喝し、足早に目的の場所へ。

もはや彼女の思考に、疑問など入り込む余地は無い。

あるのはただ一つ。目的の完遂のみ。

カツカツと、ブーツと床の固い音が連続する。

決して走る事はないが、時計の針の如く規則正しく響くそれは、自己の心を落ち着かせ、より先鋭な——研ぎ澄まされてゆく、一振りの刀のようになってゆく。

能力によって呼び出す神々を厳選しながら、彼女は細々とした装備品を転送室へと持ってくるよう、端末を使い、武器庫を管理する者に要請した。

誓うは必勝。

運命を操り、数百年規模で動乱の中世ヨーロッパを生き抜いてきた吸血鬼レミア・スカレットをはじめ、その従者である——時を止め、加速させ、それに付随して空間の膨縮も可能な、超絶的な異能を持つ、十六夜咲夜。

数百年後の話ではあるが、この兩名を片手間で完封してしまえるだけの実力を有する

存在だ。

それが今、たった一人の相手に対して全力を振るう。

粛々と、長い通路を絶対強者が進む。……ギリリ、ギリリと。床や壁、天井のみなら

ず、建物全体が軋みを上げ。

彼女が通った空間には、並々ならぬ闘気が漂っていた。

だから。

「…………お前が…………」

撤退していく兵達が、視界を通り過ぎていく。

依姫の事が視界に入らないとばかりに、無言か、あるいは敗走している、といった表現が適切であつてしまう姿で。

その屈辱をくれたであろう人物が見受けられないが、代わりに、この事態を引き起こしたと思われる怪物ならば、一目で分かった。

——山。そうだ。あれは、地上でよく見られる、山と呼ばれるものだ。

色と大きさこそ違えど、巨大な姿に禍々しい茨の木々が生えているそれは、彼女が何度か地上の資料で目にしてしているものに酷似していた。

「お前がやったのか……」

零れるように呟かれた言葉など、この悲鳴と怒号の飛び交う戦場では、相手に届く事など無い。

殆どの者が、同僚であり、顔馴染みであり、家族のようなものだ。

ここは軍で、鉄の規則があるとはいえ、ここまで散々たる結果に何も感じないなどありえない。

苛立ちや不満、煩わしさは何度も経験し、抑制する術を心得ているが……。

「——許さん!!」

感情が燃え上がる現象——怒りに対しては、全くといっていいほどに、耐性が無く。

「愛宕（あたご）の神よ、その神域たらしめる所以の灯火を、ここに再現し給え」ともすれば、味方すら巻き込みかねないものを呼び寄せた。

地球の内部温度に匹敵——あるいはそれ以上になるかもしれない超高音度の炎が、依姫の体を包む様に燃え上がる。

途端、彼女の足元が、赤く……否、白く色付いて来た。

あまりの温度に耐え切れず、地面が融解をし始めてたのである。

火の本質は、創造と破壊。

その後者を遺憾なく発揮する為に、彼女は腰に据えてある、一振りの刀へと集約させる。

山が、こちらに顔を向けた。

口……だと思われる隙間から、青白い光が漏れ、それが強まっていくのが分かる。

この惨状を造りだした者が、今、こちらを見据えている。

どうやら、こちらを排除の対象だと認識したようだ。

（上等だ!!）

奇しくも敵対者と同じ思考を有する事になった彼女には、もはや目の前の相手しか見えていない。

——抜刀。

渾身の力と技術を以って振りぬかれた刀身から、白熱した炎が放たれる。

赤白い道を造りながら飛来するそれは、まるで太陽が道を敷いているかのような光景であつた。

29 Hexmage Depths 《中編》

——轟音。

世界を震わす音に、この光景を遠巻きに見守っている——月の軍部——の誰もが息を呑み、誰とも知れない、無名の神へと祈る。

終わって。救って。助けて。

安堵を得たい者達の声は、方向性は同一であっても、目的地が明確に決まっていなかった。

それはそうだ。

有史以来、これ程の脅威を振り撒く相手を見た事がないのだから。それを鎮める為には、さて、誰に祈れば、この願いを聞き届けてくれるのだろう。

だからこそ、無名の神——存在しない、今し方作り上げたであろう、妄想の中でのみ息づく神へと、その祈りを捧げた。

赤、白、黄色。

童歌のように夜空を照らす花火達は、その一つ一つがとても大きく、輝かしく、綺麗で。

——何より、考えられないほどの破壊力を伴っていた。

威嚇として「マリット・レイジ」から発射された光線が、こちらとあちらの、丁度中間程を、一閃。

みるみる赤く、続いて白くなっていく大地が時間差で爆発炎上し、そこにマグマの川を作り上げた。幅数十メートルの、全長2〜3キロはあろうかという、大運河に届きそうな規模で。

天空の城なんちゃらで見た、ロボット兵が要塞を破壊していく様を思い出す。

最も、あれの数倍から数十倍の規模ではあったけれど。

その直後に、相手側の大地が光ったと思ったら、攻撃が一斉にマリさんの体を覆うよ

うに飛来。

轟音、爆音、メギドラオン。

銃弾の豪雨にさられた時、俺は辛うじてマリさんから伸ばされた触手にしがみ付き、吹き飛ばされるのを防いだ。

しかし流石マリさんというか、避けるどころか迎撃する素振りすら見せずに、淡々と触手や光線での攻撃で相手の戦力を削っていくのは、ワンサイドゲームどころかライニング工場のバイトでもしている気分させてくれる。

元々のタフネスに加えて破壊不可の効果まで伴っているのだから、当然といえば当然の姿勢だろうが、こうも一方的な光景を……

(あ、また一機)

戦車が切断レーザーみたいなのを受けて、一瞬にしてバラバラ分解な行動不能状態に陥った。

先程の極太ビームでないのは、やはり爆発してしまつたら人命に関わるから、なのだろう。

慌てて脱出している、五体満足の兵隊さん達を見るに、マリさんは俺の言う事を実践してくれているようだ。

(あれ幾らするんだらうなあ。自衛隊が持ってた戦車って一台十億位だし……)

あれは純国産価格だったからなのかな。

海外からある程度の部品を輸入すれば……。

ま、もういいや。

何はともあれ、これでジェイスが回復するまでの時間は稼げるだろう。

こんな事態になっているんだ。今更戦車の一台や千台程度……。

マリさんが直立する俺に考慮して、体を固定させる為に撒きつけられた、比較的ドゲドゲの少ない触手を握り締めながら、事の成り行きを見守りつつ……数刻。

ものの見事に、視界内で脅威になる対象が沈黙なされました。

「流石マリさんだ！　そこに痺れる憧れるう！」

一度言ってみたかったんだよね、この手の台詞。

『ん』と一言。

簡単ではあるが、そのたった一言から、『どんなもんだい』と、満足気に返答しているのだと気づいてしまえる音調だった。

な、なんか可愛いかもしれん。

一人で胸がときめき掛けていると、触手の一本をこちらの顔の前に持ってきて、それをピンと垂直に伸ばす。

(……？　……ああ、これ「グツ」って親指立てるあれのつもりなのかな)

MTGでは、その手のコミュニケーション方法は既にあるものなんだろうか。

こちらでも負けじと親指を立ててみれば、答えてくれたのが嬉しいのか、彼女から『♪』と、言葉にならない楽しげな気持ちだが、こちらに伝わって来た。

「あ……（きゅん）」

俺よ、さっきの言葉は訂正するぜ……。

可愛いかもしれない、じゃない。マジ可愛いわ！ 見た目なんて些細なものなんだZ
E！

思わず足元にいるマリさんへ頬擦りでもキメようかとしやがみ込もうとした時、彼女の口から、また例の光線が出る前兆を感じ取る。

確か敵は全滅した筈だが、また残っていたのか、と目を凝らしながら前を見ると、
（……あれって……依姫……か……?）

星の光と燃え盛る炎に照らし出されて浮かび上がるのは、薄紫の髪を持つ者の姿。

それが、周りの光源など必要ないと主張するかのように、その輪郭をハッキリと浮かび上がらせて来ていた。

一体いつ現れたのだと疑問に思うが、それに思考を裂く間も無く、おぼろげに、彼女の腰辺りへと光が集まり――

「げえ!？」

光が走る。

炎ではない。もはや粒子の激流とでも呼ぶべき白い何か、こちらに迫って来る。

効果は薄いと分かっているのに、それらを防ごうと、思わず両手を前に突き出した。

世界が白く染まる。

刹那の時間も与えず、俺も、「マリット・レイジ」も、全くの無抵抗のままに、その奔流に飲み込まれた。

何撃目になるだろうか。

幾度となく打ち込んだ攻撃に、相手はその体を地面から放すことすらしない。

……いや、そも、あれは防御と呼べるだけの行動を起こしただろうか。

無造作に、まるで群がって来る羽虫を追い払うかのような、緩慢な動き。

最も、それが特殊装甲を用いた兵器を容易く圧壊させ、大地を粉々に吹き飛ばしてしまふのだから、何とも手に負えない。

他の者では難しいかもしれないが、私にとっては、行為自体は眼を瞑っていてもかわせる程に遅い。

しかし、その数が多いのだ。

巨大な触手は言わずもがな、細めのものですら、掠っただけで体の一部どころか、五体がバラバラになり兼ねない脅威を振り撒いている。

かわして、かわして、かわして。

時折は刀身で受け流しながら、様々な攻撃を当てていった。

灼熱の炎。万雷の閃光。白銀の吹雪。超威力を伴った物理的抜刀。

場所が場所だけに大気系の事象は扱えないが、先に行つた攻撃の、そのどれもが、全く効かない。

そう、全くだ。

少しは動きが鈍る位のダメージを与えていても——いや、そもそもこの攻撃は、どれもが神域と呼ばれる者達から借り受けた現象だ。肉体どころか、魂までにすらダメージを与えていても不思議ではないもの。

では、そんな猛攻を、何のことも無く耐えている、この存在は何だろうか。

月の民がこの地に根付いて、優に数億年。

まだ青き地上が一つの大陸であつた時ですら、この様な化け物は居なかつた。

故に、自然と思考がそこへと辿り着く。

(……あれが、学者達の考慮していた「外なる者」の可能性の一端か)
宇宙は広大だ。

それこそ、月の科学力を以ってしても、殆ど解明出来ない程に。
だから、夢という名の可能性を見る。

あの果てには何があるのか。その先にはどんな事が待ち構えているのか。

そして、それらの中に必ずある、『自分達が認知する以外に、全く知らない知的生命体
がいるのではないか』という、よくある想像。

得てして、月の科学力を以ってしても対処出来ない、超高度な技術力を持っていたり、
星々など瞬きをする間に破壊されられる力を持っていたり、と、際限が無い。

自分達の思考の外……理解不可能な存在に、何らかの夢を見出す。

やれ浪漫だ妄想だと騒ぎ立てる者も居たが、私は否定もしなければ肯定もしない、半
信半疑な感心しかなかった。

そんな事を考えているのなら、少しでも何かの形で永琳様の教えを吸収し、月を繁栄
させる方が良かったものだから、もつと学者達の話や論文は真剣に目を通しておくの
だったと、後悔……とまではいかないが、少し、残念に思う。

最も、その可能性という名の夢が、実のところ脅威や絶望に近かった、という現状は、

とても皮肉が効いているものだと言感する。

軍も壊滅。私自身の攻撃も、全く意に介した様子が無いのだ。

これでは苦笑どころか、笑い話にもなりはしない。
ならば。

(あまり懇意では無いのだが……)

その思いを打ち払うかのように、私は能力を使う。

様々な八百万の神を呼び出し、力を借り受け、行使した。

しかし、それでも届かない相手となると、「そちら」の方へと手を伸ばさなければならぬ。

ともすれば自壊、あるいは自身を供物として捧げてしまいか、体を奪取され兼ねないが、現状では致し方ない。

そうでなければ、あれには届かない。

届かないとなれば、永琳様は救えず、姉は一生目覚める事は無い。

それだけは、自分が自分である限り、何があつても許せるものではなかった。

「……——だよ、我が声が聞こえたれば、その威光を、この場に示せ。眼前の脅威を打ち払う力となれ」

心の中で、絆とでも呼べるような感覚が、遠くの何かと繋がっていくのを感じる。

この様子では、どうやら成功したようだ。

体に、今までにないモノが宿っていくのが分かる。

今まで降ろした神々が、霞んで見えてしまう。

愉快だ。

くつくつとした、腹の底から来る笑いが止まらない。

これは凄い。これは素晴らしい。これは最高……だ。

——だからこそ、……を……してしまう前に、早く……

瞼を閉じて、閃光が目を焼く。

それほど眩い光の攻撃は、それに見合うだけの威力を発揮していた。

大地を掠れば溶解し、空間を通過すれば僅かに存在する空気が四散し、直撃すれば、ま

さに月の軍最強の名に恥じない、馬鹿げた現象を引き起こす。

爆音。衝撃。熱風に、何かが炭化、あるいは炎上したような臭い。

それら全てを同時に感じながら、雷鳴轟く天候に怯えた犬のように、ただただ事が終わるのを祈り、身を震わせているしかなかった。

何せ今の俺は、壊れないだけの、ただの人間なのだから。

「マリさん!?!」

何かの攻撃が、俺の体を舐め回すように、すり抜けていった。

熱風なのか爆音なのか、はたまた猛吹雪か雷か。

どのような攻撃をされても、普通ならば即死コースである事は間違いないのだが、今の俺には「ダークステイル」の加護がある。純粋な破壊ダメージは、完全にシャットアウトしていた。

……けれど、だからといって俺の心までは強化されてはいない。

何かとてつもない音が響く度に、『わー』だの『きゃー』だのと、情けなさMAXな悲鳴を上げていた。

すると、そんな俺の願いが届いたのか、マリさんが『何?』と、これまた簡潔にお返答して頂く事が出来ました。

「今っ! 何がっ! どうなってるんですかー!?!」

大回転をきめているジェットコースターで、隣の人にモノを尋ねるかの如く、問い掛ける。

『えつと……』そう答える彼女は、今までの問答と一緒に、簡潔だった。

「何々……ふむふむ……『攻撃されてる』と……な、なるほど……」

大変良く分かりました。

分かりすぎて、その過程にあるものが、色々と置き去りになってしまったけれど。

（——— 分かんねえよ！ いや、分かったけど、分かんねえよ！）

周囲に轟く爆音のせいで、アゲアゲなテンションとの相乗効果で、内心の声ですら大音量だ。

対して、足元のお方は、実にマイペース。

どうやって倒そうかなあ、怪我させずに。といった思考が、ちよろちよろ漏れてこちらに伝わってくるのは、ダメーヅらしいダメーヅを、何一つとして負っていないせいだろうか。

依姫の能力は、神の依り代となり、その力を借り受けるもの。

本来ならそれは、まさに神にも等しい存在となつて、絶対的なものとして君臨するだろう。

燃え上がる炎も、降り注ぐ落雷も、吹き付ける吹雪も、地面が捲れるほどの威力を伴っ

た抜刀も、そのどれもが通常の生物であれば必殺であり即死。決して逃れられぬ、運命と呼べるものにもまで昇華していたであろう筈のもの。

その全てが、小春の風が体を通り過ぎていくだけ、のような状態だったのだから、一体何に対して脅威を感じればいいのかのやら。なんて考えなのかもしれない。

(……………?)

ちよつとは手加減してやれよ、的な完全上から目線で考え事をしていると、連続攻撃を仕掛けて来ていた依姫の動きが止まっていた。

それに気づいたのは、あの烈火の如き猛攻が止んでいた事もそうだが、何より、彼女の体から、光り輝く赤黄金の羽が生えていたからだ。

「……………何、あれ」

炎の羽とか、もこたんINしたお！ とでも言うつもりなのか。

大方、不死鳥は攻撃力など無きさうだから、八咫鳥でも呼び出したのだろうと思うのだが、それよりも上位の神々の力を行使しても、傷一つ負わせられなかった相手に、一体何をどうしようというのだろう。……………八咫鳥って神の部類だったかな……………。

聡明である筈の彼女が、酔狂でそんな真似をするとは思えないから、何か奇抜な策でも思いついたのかもしれない、と、警戒しながら様子を伺う。

すると、刀を鞘に収め、無手となった依姫は、一直線にこちらとの距離を詰めてきた。

炎の羽を生やして、滑るように接近してくるゴットバードアタック（仮）を打ち据える為、マリさんがその触手の一本——取り分け大きめなヤツを振り下ろす。

巨大な樹木でも倒れてきている事を連想させるその攻撃は、一撃で、月の大地に大穴を空けてしまえるものだ

……明らかにミンチコースだよな（汗）

「マリさん！ 手加減！ 手加減大事アルヨ!!」

弱めだが必殺の威力を持つそれに、多少なりとも手心を加えて貰うべく、助言する。

まあそれを言うならガチり始めた序盤から言えと思うのだが、状況がいきなりのドツカンバツコン擬音満載な展開だっただけに、あの時は無理だったと弁解しておきたい。

それに、どうせ今まで通りに避けるか往なすかして対処するのだ。

今更過ぎるやり取りが眼に見えているとはいえ、俺には口を出す事しか出来ないのだから、これ位のお小言は……

「あれ？」

……仕方ない、と言葉は続かなかった。

俺と彼女の声がハモる。

正確には、俺の声とマリさんの心の声なんだが、それは今はどうでもいい。

同時に上げた疑問の声は、依姫の起こした行動によって、発せられたものだ。

だってそうだろう。

今までは全くの——兇戯に等しく相手をしていただけだった者が、手加減をしているとはいえ、「マリット・レイジ」の一撃を受け止めたのだから。

避けるでもなく、往なすでもなく。

真正面から、両の手を頭上へと突き出し、その必殺を受け止めた。

(……………も………たんつて実は超強い……………?)

いやいや、あれは妹紅じゃない。似ているのは火の羽だけだ。

普通を装いながら思考した結果、俺は結構テンパっているらしいという、全く見当違いな結論に達する。

しかし、何故今になって、このような有効そうな戦法を披露したのか。

よくある戦隊ヒーローものの、必殺技は最後に取っておく感覚で戦っていたのかもしれない、と当たりを付けてみるが、この光景を裏付ける理由にはならない。

……………だとするなら、制限付きの能力だと考えるのが妥当か。

制限時間があったのか、使用条件をクリアしたのか。それとも、使った時点で、あるいは、使えば使うほどに何かしらのデメリットが発生するものと予想する。

(二体何の神だ。「マリット・レイジ」の……攻撃力20の一撃を防ぐなんて、例え手を抜いていたからだとしても、そうそう出来るもんじゃない筈だぞ……………)

怪力で名の知れた神といえ、天照が引き籠もっていた岩戸を開けて、中に居た彼女を引きずり出したときされる、天手力男神（アメノタヂカラオ）しか思い浮かばないが、あれは決して背中に火の羽なぞ生やすような神ではなかった筈だ。

では一体何なのだと問われれば、不明、としか答えようが無く、現状では全く役に立たない自分だと情けなくなるが、それでもこの場の有利性は変わらない。

「つて、嘘……」

……訂正しよう。

変わらない……から、変わってしまった、へ。

グラリと、自分の体が揺れたのが分かる。

今までに無い、自分の立っていた地面が動いていく感覚は、その実感が間違いではないと示すように、まざまざと現実を見せ付けていた。

——依姫が、受け止めた触手を引っ張っていた。

足は地面へとめり込み、その手は破壊不可である【マリット・レイジ】の触手を握り潰さんとばかりに、しっかりと掴まれている。

こちらの体が、地震を体験している時のようにユラユラと不安定なのは、この数百どころか千の位までであろうt級の巨体が、引き摺られているからに他ならない。

しかも、マリさんはただ大地へと立っていたのではない。

亀裂やら何やらで色々と破壊されてはいたが、体の幾許かを、氷の大地へと埋もれさせていた。

木が大地へ根を張っていたようなものだろう。

それを、動かしている。

どれだけ途方も無い力が働いているのか不明だが、その怪力は疑いようも無い。

何の神様ならばこの様な事態を引き起こせるのか首を傾げるばかりだけれど、それに答えてくれる者は、俺の周りには居なかった。

だが、そんな思考に耽っている間にも、ズルリズルリと、「マリット・レイジ」の巨体は引き抜かれようとしている。

「あ……。マリさん、今なら依姫……。今引つ張つてるゴットバードな彼女を捕獲出来るんじゃない？」

何もせず、唾然としているのは拙い。

いい様に混乱状態へ陥ってしまったが、よく考えてみれば、引つ張られているだけであつて、何かしら致命的な攻撃を受けた、あるいは、有効打を見舞われた訳ではない。

だから何かしら大きな変化が起きる前に、と、思つて捕獲案を進めてみたのだが……。どうやら遅かつたようだ。

『浮く』と。彼女から唐突に、それでいてこれ以上無い位に、はつきりと分かる言葉を言

われて。

「へ？」

臓腑が浮き上がる感覚がする。

そも月面だから重力が低いのは当たり前なのだが、それを差し引いても、足の裏に全く重さを感じない。

それら刺激と「マリット・レイジ」から聞かされた言葉を照らし合わせて出した結論は、文字通り、俺達[〃]が浮いている事に他ならなかった。

「なんとー!？」

フィツシユ。マグロの一本釣り。

そんな言葉が頭を過ぎった。

『お〜』なんて、まるで他人事のように漏らすマリさんに突っ込みを入れたい気持ちが湧き上がったが、今はそれよりも他にすべき事があるだろう、と考えを改める。

流石に、こうを描いて、とはではいかないが、波によつて陸に打ち上げられた鯨の様に、その巨体のほぼ全貌を晒す事になった「マリット・レイジ」。

見える範囲では、その末尾すら確認することは出来ないほどに巨大な体。

『これって全長kmいってるんじゃないや……』と思うが、だとするなら、これを釣り上げた依姫の力がますます理解不能な恐ろしさとなり、俺の心に襲い掛かり、それを打ち払って

くれる筈だと祈りながら、何とかマリさんをお願いしてみろ。

具体的には、手加減数値の減少という案で。

「マリさん、少ずつ、手加減を止めていってみて下さい」

手加減つてのは、余裕のある時にやるもんだ。

現状がそれに当てはまるかと問われれば、首を傾げざるを得ない。

俺の言葉に肯定する意識が返ってきて、それに合わせて、引つ張られているやつ以外の触手が、依姫に殺到する。

ゆうに二桁に達している、一撃必殺達か、彼女のみならず、その周囲全てを圧壊させる勢いで迫る。それも、先程よりも、明らかに速く。

ちよつと不安な攻撃方法だが、きつと依姫なら何とかしてくれる、と、他人任せの信頼を実感しながら、結果を見守った。

そして、大地震が発生したような地響きが起こる。

一本の上からまた一本。それでも足りない、さらに数本。

巨大なビルが倒壊していく様を思い起こさせる。

線で面を埋めるかの如く浴びせられる触手の攻撃に、殺してしまったかという気持ちと、これでもダメだったら、という気持ちの二種類の不安と、ほんの少しの安心感が入り混じる。

これなら多少なりともダメージは与えただろうから、大人しくなるだろう。沈黙が続く月の大地をざっと一望し、安堵の溜め息をつこうとした時。

『まだ』

たった一言。

その二文字を聞いただけで、俺の心臓は止まりそうになった。

幾重にも折り重なった触手が振動する。

噴火の予兆を示している火山を連想させるこの光景に、思わず息を呑む。

嫌な予感とは、かくも良く当たるものなのかもしれない。

火山に例えた表現が正解だと言わんばかりに、重なっていた触手達が噴火と共に吐き

出された火山弾にでもなったかのように、*“全て”* 吹き飛んだ。

「おいおいおい！ 何だその力！ あなたはどここのサイヤ人ですか!」

弾け飛ぶマリさんの触手達を視界に入れながら、この世界では誰も分かる筈のないネタを口走る。

流星の「マリット・レイジ」も、この状況には驚いたのか、無言。

流れ込む意思すら皆無で、この信じられない展開に、何かしらの思うところでもあるようだ。

眼前に望むは、金色の羽を二対広げる、月の最強。

対するは、異世界で荒ぶる神とされる、攻守最強候補。

しばし睨み合う二つの存在と、それを怯えるに伺う、一人の傍観者。

唯でさえ極寒の世界だというのに、それをなお上回っていくかの如き冷たさを現しながら、空間が軋みを上げいく。

そのまま世界が凍り付こうかという刹那——先に動いたのは、依姫だった。

突撃列車ばりに土砂や土埃を巻き上げながら距離を詰めて来たのに対し、「マリット・レイジ」も触手を使って迎撃を試みる。

先程までとは違い、叩き付けられる茨の樹木達を物ともせず、かわして、往なして、それでもダメならば、弾く。

あの細身の何処にそんな力があるのか不明だけど、

これでは拉致が明かない、と、ビーム砲を撃とうとチャージを開始するマリさんだったが、何せ距離が近すぎた。

発射される前に、完全に懐に入られた。

ならばと、持ち前の巨体を使って押し掛かりを敢行するものの、あの異常とも思える力を侮っていたツケを払う事になる。

巨大な何かを殴り付けたような、重低音。

「マリット・レイジ」が、僅かにではあるが、宙に浮いた。

さっきのは、単に軽く引つ張られたただだったのに対して、今度は丸ごと、キロメートル単位の図体が上空へと飛ばされた形になった。

それは鈍く、連続で。

重い音が、定期的に発生する度、少しずつ、少しずつ。

俺と「マリット・レイジ」の体を揺らし、上へと持ち上げる。

一撃一撃が、この巨体を浮き上がらせるパワーを発揮して、格闘ゲームの空中コンボでもされているかのような浮遊感に、焦燥感が募っていく。

しかし、足元の彼女からは、持ち前の20というタフネスに「破壊されない」能力も相まって、苦悶の声や痛恨の表情といったマイナス感情は一切伝わって来ない。

ただやはり不満はあるようで、ぼそりと、言葉を漏らす。

『ちよつと……』そのまま言葉を繋げ様とした彼女の言葉は、俺達の頭上に現れた依姫によつて、中断させられる事になる。

抜刀。

何度も目にした……いや、目に残像として残っていたその攻撃方法は、宙に浮いた俺達の体を、再び大地へと縫い付ける。

丁度「マリット・レイジ」の頭部——俺の目の前に打ち付けられた斬撃は、一撃で、地上から切り離された超重量級を、再び下へと叩き落した。

世界を震わす重低音。

硬い筈の土と氷塊の地面が、薄氷でも出来ているかののように、容易くその形を崩す。
「!？」

しかも、攻撃はそれだけに留まらない。

俺の首筋に、今にも触れそうになる位置。

「ダークステイル」の円盤が密着しそうな程に近づいており、そこには、日本刀……の
ような形状をした、化け物が居た。

中央からパツクリと二つに裂けた切れ目から、それはそれは鋭利な乱杭歯が覗いてい
て、それがガシガシと「ダークステイル」の円盤に突き立てている。

宛ら、某ゲームに出てくる、ひどくいサーベルを思い起こさせるそれは、今にもこち
らを噛み切り殺さんと、ギリギリと耳障りな音を、俺の前から響かせていた。

「何だよこれ……どんな能力使ったらこんな事が出来るってんだ!？」

目の前に迫った恐怖から、内心を表現した言葉が、意識せずに漏れる。

「マリさん! …これ!」

どうにかしてこの恐怖を取り除こうと、足元にいる人へと懇願する。

触手で難いでくれれば、この程度の脅威など、粉々にしてくれる筈だという思いを乗
せて。

……しかし、彼女は動かない。

「マリ……さん……？」

金属同時の擦れ合う音に、耳を覆いたくなる。

だがそれよりも、「マリット・レイジ」が呼び掛けに答えてくれない方が、今は何よりも気掛かりだ。

さつきまでは、言葉少なくではあるが、それなりに応えてくれていたというのに、今の彼女からは、返答への字すらも、反応してくれる様子は無い。

それに、よくよく周りを見てみれば、あれだけ迎撃や拿捕の為に動いていた触手達が、全て沈黙していた。

無音の世界を取り戻した月面は、その本来の静寂を、恐怖という形で、隙間に入り込む冷水のように、こちらへ語りかけてくる。

「何だよ……」

誰も、何も応えてくれない。

ポツンと一人。星の光の降り注ぐ場所に、取り残されてしまった。

まさか、「マリット・レイジ」が何かしらのダメージを受けてしまったのかと不安に駆られるが、それを確かめるには、金属音を発している、目の前の脅威を取り払わなくてはならない。

動かない【マリット・レイジ】。

ギチギチと不快な音を立てている、円盤と日本刀。

そして、この要因の一端を担っていたであろう、もう一人の人物は、上空で、未だかつて無い程に巨大な光球を作り出していった。

(はっ……必殺、二気玉で倒そうってか……)

手詰まり。

今の状況が示すのは、そういう事。

残りの手札が無い訳では無いが、それでも、使用出来るマナは無し、カード枚数だつて、残り2枚。

現状を全て打破出来るカードの組み合わせは、今の俺には……無い。

血の気が失せる。

急に膝から力が抜けて、絶望の色に顔色が染まっていくのが分かる。

膝を折るような自体にこそならなかったものの、八方塞の事態に思考が停止しかけてしまう。

ただ、そんな無力な俺の考えも、【マリット・レイジ】から、僅かに感情が流れ込んで来た事で、回避された。

乾いた砂に水が染み込むかのように、じんわりと伝わってくる、意思。

「マリさん！ 無事だったん 『私を……消して……』 ……だ……っ……て……え？」

しかし、告げられたそれに答えを返す事は出来ず、疑問で問いに応える形になる。先程の攻撃の影響で、深刻な状態になって苦しんでいるのだろうか。

絶対破壊不可があるとはいえ、彼女が召喚キャンセルを願い出ているというのは、何かしらのダメージを受けてしまったのかもしれない。

けれど、それならば残りのカードを駆使すれば、再生位は「ピッチスperl」で補える。だから、とりあえずは何があつたのかを尋ねてみようとするが、ぐぐもつていて正確に聞き取れない。

「マリさん、何処か怪我したのか？ だったら再生系の『——もう』……？」

またも遮られる、俺の言葉。

ただ、奇妙な事に、伝わってくる彼女の意思は、複数存在していた。

一番強い意志は、それこそ文字となつて脳内に感じられるのだが、それよりも弱い思いは、微かに感じられるだけの柔らかさ……とでも例えられる感覚で、こちらの耳へと、鼓膜を震わす事無く、届いてきた。

『私を消して』

—— 『許さない』 ——

『今のうちに』

——『脆弱な存在の癖に』——

『迷惑掛けちゃう』

——『煩わしい』——

『意識が』

——『何で耐える必要がある？』——

『もう——』

——『もう——』——

ただそれは。

——もう——がまん——デキナイ——

地獄の門の封印が、外れてしまった事を意味していた。

何故、荒ぶる神などと呼ばれていたのか。

何故、氷の大地へと沈んでいたのか。

何故、依姫は「マリット・レイジ」と直角以上に渡り合えたのか。

——体から、急速に熱が奪われる。

外的な要因——寒さから、といった感覚ではない。

熱そのものが、勝手に外へと……否。足元の存在へと流れ込んでいつている。

それと一緒に、疲労感が一気に俺へと襲い掛かってきた。

いや……これも、否だ。

疲労、というよりも、活力とでも言うべき力の源が、強制的に、大概へ排出されてしまっているのだ。

結果、疲労したのだと認識するに至るが、ギャザの能力を使い、この手の疲労と酷似した症状に慣れた俺にとっては、これらの差はしっかりと分かる。

熱と活力の二つが、「マリット・レイジ」に奪取されていた。

それは俺以外にも作用しているようで、何とはなく周りを見回してみれば、赤々と滾っていたマグマの川は、急速に冷え固まり、色褪せていく。

そして、それだけじゃあ、終わらない。

今の今まで怪異な現象として割り切っていた、化け物と化した日本刀すらも、ただの鉄の棒切れになってしまったののように、力尽きた姿で、カタカタと、僅かに鏗を鳴らすだけの置物へと変わっていた。

（猛烈に寒いし、めっちゃダルい……。影響受けてるものに差があるみたいだけど、ほぼ無差別の広範囲能力……。か。【マリット・レイジ】はこんな能力を持つてたのか……。）

彼女は、限界まで我慢をしていたのだと、伝わってくるイメージで感じられた。

何を我慢していたのかと言えば、攻撃に耐える訳でも、体を動かす事に苦痛を伴っていた訳でもなく、ただ単に、力のセーブ加減を、細心の注意を払って行っていたのだと考えられる。

故に、広範囲効果のある、この現象を使わずに、光線と触手のみで月の勢力に対処していたのだ、と判断出来る。

でなければ、手間が掛かる事が苦手そうな彼女が、今の今まで、この能力を使わずにいた事が説明出来ない。

淡い光。

目線を下に向ければ、赤く発光している川が流れている。

ボウと、仄かに輝くそれは、「マリット・レイジ」の体から発せられている何かに他ならない。

恐らく、今も続けているエネルギードレインの影響で、このような姿になっているのだろう。

体中の表面を溶岩が流れている印象を受ける光景に、俺は、ただただ何も出来ずに、寒

さと、活力の抜けそうな体を抱き止めている事で精一杯。

今の【マリット・レイジ】の姿から、某狩りゲーの恐暴竜が、煤けて見えた気がした。しかもその幻想は、消え去るところか、ますます色濃く、現実を侵食し始めて来た。呼応して、足元の彼女から、今から行おうとしている出来事が、一体どういふものなのかを、イメージとして感じられた。

——ただそれは、最悪といっても過言ではない事実を、垣間見てしまう事にもなった。

流れ込んでくる彼女の思念から、これから起こる破壊の規模が、脳裏に映像として、投射される。

（洒落にならん!!）

これが現実を起こってしまったのなら、真の意味での攻撃力20を、実体験する羽目になる。

絶対回避の文字を打ち立ててみるものの、一番有効な、そして確実なのは、先に頼まれたとおり、【マリット・レイジ】をカードへと戻す事。

次点で【ピッチスperl】による対処だが、これは……

（いや、これしかないか）

【マリット・レイジ】は生命線だ。

段。 我を忘れ、荒ぶる神の名に相応しい存在へとシフトした彼女を止めるのは、最後の手

彼女が居るか居ないかで、自由度の差は明白だ。

出来得る限り、現界していてもらわねばならない。

つまり。

(これで本日は打ち止めです、つてな！)

【ピッチスperl】で、カード枚数のストックを全て消費し、能力を行使する。

此岸の世界に広がる、静かな歌声。

何処からともなく聞こえてきた音に、カードが発動した事を実感した。

正真正銘、これで俺の持ち札はゼロ。何が起こつても、俺自身で対処しなければなら
ない、ただの一般人になってしまった。

気力、体力共に、大幅に落ち込んでいたところでの、この行為だ。

何とか踏ん張っていた足腰は、完全に力が抜けきつてしまい、倒れ込む勢いで、体が
崩れ落ちる。

マリオネットの糸を、急に切断したかのように、だらしなく座り込む羽目になった。

マナ、カード枚数、共にストック切れ。

オマケとばかりに、体力まで、すっからかんになりそうだ。

後何分、この状態を保てるのだろうか。

若干の焦燥に駆られるものの、彼女から伝わって来た、あの脳裏に再現された光景を思い浮かべて、徒労に終わる可能性が高い、と気分を入れ替えた。

(あくあ……今度こそは、俺TUEEE出来ると思ったんだけどなあ……)
顔を上げることすらも億劫で。

安堵感も相まって、頭上に居るであろう依姫を、確認する気にもならない。

ふと、目線を下へと這わして見れば、僅かに動く日本刀が、未だにカタカラと、最後の抵抗とばかりに、刀身を震わせていた。

対照的に、俺は健在だ、と主張するように浮遊している「ダークステイル」の円盤が、印象に強く残る。

はは、可愛い奴め。

「……俺、振り落とされて死なないよな……？」

今までと比較にならない事態を引き起こすであろう存在に、もはや言葉は通じないと知ってはいても、つい愚痴のように、不安の形が零れてしまう。

地面が、赤く呼応する。

初めは赤々と流動していた、彼女の表面に流れる川が、白に近い輝きになっていた。

これはそろそろか、と、色々な方面での衝撃に備えて、深呼吸。

岩壁にしがみ付くロツククライマー宛らに、俺は彼女の表皮をしつかりと掴む。

体の熱も、体力も。若干緩くなったものの、順調に「マリット・レイジ」へと奪われている事に苦笑しながら、一応は、使ったカードの効果は現れているのだ、と実感出来る。

『さてどなるかねえ』なんて他人事のように思いを呟きながら、これから発生する大嵐に備えるべく、力の抜けた指先に、か細く力を込めるのだった。

30 Hexmage Depths 《後編》

体が、内側から弾け飛びそうになる。

手足など、もはや感覚は無く、繋がっているのだろうな……という思いのみで動いている状態だ。

手に持つ刀は、握っているのかどうかさえ分からない。

一振り腕を動かす度に、体と魂が乖離していく様を実感出来た。

——ああ、これは。何と素晴らしく、恐ろしいものなのだろうか。

借り受けたる神の名は、ガルダ。

普段懇意にしている島国から、西へと進んだ大陸——インド、といったか——に君臨している、彼の地の主神よりも強き、神鳥である。

私の能力は、一部の島国の神々からの拝借を主としているだけであり、という事は、今更、語るまでも無い。

そこに居る彼らが生まれる以前から、あるいは現在留まっている者達とは既に顔見知りであり、交友も、それなり以上に行ってきた。

故に、あの共存共栄の根付く島国の神々は、神格を借り受ける際にも、私にとても良くしてくれていた。

しかし、それ以外の地方は、とんと疎遠だ。

一箇所に留まつて生活していたが故の弊害、とも言えるだろう。

然るに、その力を借り受けるには、それなりの代償を伴う。

それは、力の差が開けば開くほどに大きくなり、今回の例で言えば、少し足元を見られたとも思うが、私自身の心を少しずつ、供物として捧げている。

使えば使うほどに自分が奪われていく、恐ろしいほどの喪失感、使えば使うほどに高揚していく気分の陰に隠れて、その力の行使に歯止めを掛け難くなっていた。

極一部の説には火の鳥、フェニックスの原型とも呼ばれるそれに類似するこの者は、数々の異名を持つていた。

『鳥の王』『赤い翼を持つ者』『水銀のように動く者』など、呼ばれる名称は数多く。

そして、最もその力を如実に現しているものが、スレーンドラジツト——『インドラを滅ぼす者』だろう。

主神であるインドラが保持する神器、ヴァジュラの一撃を受けても、全くの無傷であつた事から、事実、主神よりも強い存在であつた彼は、『インドラの百倍強くあれ』と願われて、生まれてきた者。

確かにそれは脅威に他ならず、無双の名を聞しても、間違いの無い存在だ。

しかし、本当の力はそこではない。

『インドラより強くあれ』と望まれて生を享けた彼の者は、信仰の果てに変容していた力を、依姫へと貸し与えていた。

その力とは、『敵対者よりも強くあれ』

【マリット・レイジ】よりも強大な力を持つ事になった依姫は、能力を与えたガルダでさえも経験した事の無いほどの、唯一無二の力となつて、遺憾なく効果を發揮する。

怪物の頭上に乗っている人物がそれを知れば、『お前はどこのアルテミット・ワンダ！』と激昂しそうな能力であつたそれは、敵対者を氷の大地から引きずり出し、攻撃を跳ね返し、宙に浮かせ、完全に手玉に取れるまでのレベルになつていた。

———されど、そんな力を發揮し続けられるのか、と問われれば、首を横に振らざるを得ない。

拳銃が、大砲の弾を撃てるだろうか。

不可能だ。

一発だけならば、どうにかなるかもしれない。

しかし、どんなに弾丸が強力になろうとも、発射し続ける為には、それを支える砲身が無事であり続けなければならぬのだから。

かつて無い力が体の中を暴れまわり、刻々と自壊していく自分の体に、何故未だに形を保っているのか、不思議な位なのだ。

肌の所々から、赤黒い斑点模様が浮き出ており、口からは、塩辛い液体が込み上げて来て……歯と歯の隙間から、それが零れ出て、衣服を徐々に染め上げる。

後一撃。もう一撃。最後の一撃。

これで終わりにしなければ。

そう思いながら——最後の力を振り絞り続けながら行われる、終わりの無い、自傷行為。

そうしてとうとう訪れた、最大のチャンス。

“相棒”に頼み、少しでも多くの時間を稼げるよう、願いを伝える。

刹那、雷の煌きの如く、怪物へと飛来していく相棒を見ながら、これからする行為のために、不安定になった精神を、可能な限り、研ぎ澄ます。

相手には、外傷らしいものは何一つとして確認出来ない……。愕然とする事実を気力で捻じ伏せて、ガルダの能力を最大限に生かした、神気を極限まで集めた一撃を見舞う為に。

恒星の誕生を思わせる手応えを感じながら、同時に恐怖する。

相手が強ければ強いほどに、今の自分は力を増す。

だとするなら、これほどのエネルギーが自身に集まってきている、この事実が示す事は……。

内心で、首を振る。

依姫は、切実に。一縷の望みを掛けて、『これで終われ』と願いを込めた。

しかし、数十秒で終わるであろう行為が、予想以上に長く感じられる。まだか。まだなのか。

焦る気持ちとは裏腹に、かの者にダメージを与えられる筈の威力には、中々に到達し
てくれない。

今までの疲労の色が一気に吹き出してきて、とうとう、体温を保つだけの力すらも失
われてしまっているようだ。

芯から凍えてしまいそうな寒気に、今まで激しい戦闘を行ってきた出来事を重ね合わ
せて——ふと、一つの疑問が生まれてきた。

単純ではあるが、理解に苦しむ出来事。

(……何故、私ハ凍えてイるのだ)

これもガルダの力を行使しているせいなのかとも考えるが、そんな筈はない、と、即
座に否定する。

ならば……一体……。

他にも変化が現れている事があるのではないかと、自身の異常を確かめながら、辺り
を見回す。

体力の低下と、寒気の増加。そして自己の喪失が続いているものの、他の何もかもが、
変わらずにいる。

——より強大になっていく筈である、頭上に輝く、光の玉ですらも。

だが、その認識は、改めなければならなくなった。

逆だったのだ。

ゆつくりとはあるが、それは段々と縮小していつているのである。

比例していく様に、怪物が発光していく。

まるで、こちらから奪った力が、そのままあちらへと流れ込んでいくかのよう。

——いや、待て。

先程までは、生と死の狭間で踊る享樂を味わっていた筈だ。

それが、一体いつから、冷静に自分の体の変化を察しているのだろうか。

(……何ダトいうノダ、コノ相手ハ)

活力を奪い、熱を奪い……恐らくではあるが、思考の熱すらも搾取されている、この

現状。

頭が興奮状態から醒めてしまった事で、体に生じていた様々な負荷が、脳へと一気に

伝わって、悶絶してもおかしくない感覚を伝えて来る。

むしろ、高揚が無くなってしまった事で、悪い方向へと意識が傾き始めている。

先程までの、死へと歩みながら、けれど満たされていく感覚とは程遠い——何を

やっても無駄にしか思えない、絶望という名の道を歩かされている。

自分の行く道が既に決まっていたかのような感覚に、運命という単語の一端を垣間見た気がした。

あらゆる物事が陽から陰へと変容していく、希望が絶望へと侵食されてゆく、この現状が指し示す結論とは……

(……閉塞サレタ、トイウ……状況……ナノ……da ro un a……)

崩れゆく心には、もはや、何の思いも抱かない。

もし次があるのなら、いつそ捕縛や代償の支払いなど考慮せずに、魔神バロールを呼び出してみようか。

苦笑に染まった考えだったが、そうしておけば、とも思ってしまうのは、今の状況下では、致し方ない事だろう。

眩い光。

私が作り上げたかった技が、あの化け物から放たれようとしていた。しかも、私以上の威力で。

何とも癪なことになってしまったが、それに対してどうこうするだけの、気力も体力も尽きた。

諦めてなるものか。

そんな気持ちでさえ、あの化け物へと奪われていつてしまっている。

どうやらアイツは、感情を——喜びや怒り、希望といった、熱を持った感情を吸収するらしい。

通りで。

生きる術の大半を占めていた、あの永琳様を助けなければならない、今のこの時ですら。

私は、激昂する事も、慟哭する事も、成し得ないでいた。

口元だけに、僅かな乾いた笑いの形を作る。

面白い事など一つも無いが、今の私に出来るのは、もはやそれくらいか。

どうにもならないと分かっているながらも、それでも足掻こうという意思だけは、潰えない。

吹けば消し飛びそうな位に、意思としての強さは欠落しているのだけれど……。

こんな状況下においては、むしろそれだけ出来るのならば、及第点を付けても良いだろう。

閃光が迫る。

そこに居るだけの存在となってしまうた私が、最後に見た光景は、自身の体が暖かい何かに包まれたかのような——恭しい歌声だった。

「マリット・レイジ」からの凝集光線を浴びせられて、依姫が、天から地上へ落ちてきた。今回も口から発射された光線だったのだが、その威力が尋常ならざるもので、斜線上にあった空間が、何だかゆらゆらと陽炎の如く歪んでいらつしやる。

思考の伝達から来る映像。

彼女の記憶では、それは、陸地を丸々一つ、消し飛ばせるだけの力が秘められていた。『陸地って、どこのよ』とも思うのだが、彼女から伝わって来たイメージから考えるに……。

多分、佐渡島なら余裕で。四国ならまあまあ。北海道なら、チャージの時間次第、つてとこだろうか。もしかしたら、本州丸ごと——あるいはそれ以上も、いけるのかもしれないけれど。

今回は、上空に居た依姫に向かって放たれたから良いものの、それでも、破壊の爪跡

は残ってしまった。

クレーター。

月では良く見られる、隕石がぶつかる事で出現するそれが、まさか // 発射した側にも
“ 出来てしまうとは、夢にも思わなかった。

発射の反動、という奴なのだろう。小型ではあるが、深さ一〜二メートル、直径数百
メートル範囲の窪地が誕生してしまいました。

よくあれで依姫が消し飛んでいなかったな、と思うが、その辺は使ったカードの効果
が、しっかりと表れていたからだろうと思う。

【恭しきマントラ】

4 マナで、白の【インスタント】カード。

手札にある白のカード一枚を追放する事でも使用出来る、【ピッチスベル】を備えてい
る。

全てのクリーチャーは、ターン終了時まで、あなたが選んだ一色に対しての「プロテクション」を得る。

白のカードである「霊体の先達」を取り除き、このカードを使用した。

俺が選んだ色は、黒。

それは「マリット・レイジ」の色であり、故に、「プロテクション」効果の一部である、ダメージを受けない、が現れていたのだ。

でなければ、幾ら強大な力を持っていようとはいえ、依姫が無傷でいよう筈がない。ただ、エネルギードレインの能力は全体効果である為に、個別効果を非対象にする「プロテクション」では完全に防ぐことは出来なかった。と、自身を以って体験した。

それでも、多少なりともドレイン効果は軽減されていたのだから、本来のMTGのルールではありえない”という事実から考えると、及第点を通り越して、拍手喝采の領域だ。

——最もそれは、メリット・デメリット共に、判明した……してしまった、という事になるのだが、それらルールブレイカーは、今更感が強い、と考え直し、深く思索するのを放棄した。

揺れる、揺れる。色々揺れる。

頭も、体も、心も、視界も。

そんな震源地から眺める映像には、炎の翼を失った綿月依姫が、月の大地へと叩きつけられようとしていた。

善悪の立場なく言えば、この騒動の、一端を担った人物。

俺からしてみれば、敵であったのだから。と、無視する事も出来たが……

(間に合えー)

ただ今、全力疾走中。

【マリット・レイジ】の上から飛び降りる時には、それなりに勇気が要りましたよ。

何故かは分からないが、興奮によって気持ちを奮い起こさせる事が出来なかつた為、かなりの恐怖が襲って来たのだが、それに打ち勝てたのは、自画自賛しても良いレベルだろう。

お陰で——なのだろうか——内心の掛け声すらも、抑揚が無い。

生まれて初めての体験に、この状態をどう表現すれば良いものか、言葉を纏める事が出来なかったが、今はそれどころではない。

過去に使用した「ジャンプ」である程度慣れていたとはいえ、バーサーカーモードの彼女の攻撃範囲内に飛び込んでいったのだから、勇猛なのか蛮勇なのか、一瞬自分自身に尋ねてみたくなった。

依姫が、地面に無抵抗激突なんぞされた日には、赤や桃色がメインのスプラッター映像が、フルハイビジョンで俺の網膜と脳内に焼きつくのは確実。

建前は戦死者を出さない為であり、本音は余罪を増やしたくない為。

荒ぶる神の射程内に躍り出てまで、彼女を助ける為に並べ立てた理由は、そんなところか。

——なんて。

それらの理由すらも後付けだ

ただ単に、『あの人を助けないと』という、反射に近い気持ちに突き動かされて、普段の三割も速度の出ない足取りで、翔け出している。

『誰かを助けるのに理由が要るかい?』

一度は言ってみたい台詞の一つが現状とマッチするが、生憎と、自身が高揚している

時を除いて、その台詞を聞かせる相手がいないのであれば、どんなに適切な状況であっても、虚しいだけである。

段々と、小豆粒であった依姫影が、本来の、人間大へと膨らんでくる。

重力の関係か、落下速度はそこまで出ていない事が分かったとはいえ、それでも、無事では済む保障はない。

(牛歩並みの、この速度……あまりの遅さに、俺の中の不満ゲージが爆発しそうデス)

座右の銘・他力本願、な俺だったのに、余裕のない場面が多すぎだ。いや、むしろその銘だから、この状況なのだろうか。

不満と憤り。そして、彼女を救わなければ、という気持ちを、腑抜けた足腰に、力として供給する。

これを持ち越えられたのなら、きつとレベルアップしている————していてくれ、と願いを込めながら、

「つしゃおらー!!」

ダイビングキヤツチ宜しく、依姫の体を受け止めた。

「重っ!」

声だけは高らかに、冷め切った内心で、大声を出す。

何とも不思議な心境の中、頭の中で『1ゲッター（ズザー）』とか叫びながら、土埃を上げながら、二人で大地を削り滑る。

【ダークステイル】化の恩恵で、俺は全く問題ないのだが、依姫には多少、被害が出てしまった。

頭だけは、何とか地面への接触を避けられたものの、他の箇所は、多少、打ち付けてしまったようだ。

彼女の体のあちこちに、赤黒い痣が出来てしまっている。

『あれ、落下だけで、こんなに酷い状態になるのか？』と思いながら、姿勢を直しつつ、辺りを見回してみれば、

「……おーい、マリキーン、何処行くんだー……」

声は届かないと分かっていたので、音量は小さかったが、それでも尋ねずには居られなかった。

ズゴゴゴ！ とか擬音が聞こえてきそうな光景を見てしまった。

浮いているような、這っているような、不思議な方法でホバー移動している【マリッツト・レイジ】。

一体何処に向かっているのかは知らないが、正直、今の俺じゃあ、追いつく事も、止める事も出来ない。

（そろそろ……彼女の送還も視野に入れないとダメかなあ）

遠ざかっていく巨体。

灰色の山が移動している姿を連想させる。

もうどうしようもないな、と、気持ちを入れ替え、これからの自分の行動にいつて、考える事にした。

（つて、依姫さん、超青ざめてきちゃってるよ）

【マリット・レイジ】の効果で、じわじわと熱やら活力やらが奪われているのだろう。

彼女の表情が、徐々に曇って来ている。

カードは使ってしまったし、後はもう、ジェイスの傍に置いて来た【薬草の湿布】の残りを使うか、ジェイス本人に頼んで……

「あ……ジェイス……（汗）」

うわーい、完全に当初の目的を忘れていましたよ。

怪獣大戦争をやらかして、エネルギードレイン空間を発生させている本人が遠ざかって行っているとはいえ、未だにこの結果が展開されている現状は、実はかなりヤバイんじゃないだろうか。

（ジェイスさん、聞こえますか……。意識戻りましたか……？）

今も尚、マナの供給が続いているという感覚はあるものの、彼本人からの応答は無い。

消えてはいないが、完全回復もしていない、と考えるべきか。

とりあえず、依姫を抱えて、彼の隠れていた場所まで移動する体力を作らねば、と思いい、丁度腕の中に納まっている、温めの抱き枕（仮）を、再び胸へと、強く引き寄せた。うう、寒い。

いつもなら『うひひひ、姉ちゃん良い体してまんなあ』と生唾でも垂らしながら、欲望全快で色々と妄想に耽つたり、実行に移したりするのも吝かではないのだが、激・疲労状態の体では、そこにまで思考が割かれる事はない。

『髪サラサラ』とか『細い体だな』とか、そういった感想しか沸いてこなかった。

（これが……綿月依姫……ねえ……）

八意永琳の忠臣？ 愛弟子？

兎も角、彼女に酔狂——のレベルにまで達しているかは分からないが、人生の方針を大きく決定されたであろう、東方キャラの月の民。

神降ろしのチート能力を持ち、その力量は鎧袖一触。

東方プロジェクト内で最強論を上げたのなら、必ず上位の三本指に入るお方なのは、先の戦いを見ても、疑う余地が無い。

こうして眠っている——意識を失っている分には、全く信じられないのだが……。

（うん。今更だな）

一言でバツサリと、自分の前提意識を切つて捨ててしまえるのだから、俺は大分、この世界に馴染んで来たのだと思う。

(そういや、あの日本刀、どうなったんだ?)

依姫が呼んだ神の名も分からないが、襲つて来た刀の能力も分からない。

それら分からないと定めた片方は、どこぞに進行していく荒ぶる神様の頭上へと、置き去りにされていた。

例えカードに戻したとしても、地面に落ちた後、あの位置まで取りに行くのは面倒だと、そう思う。

「マリット・レイジ」を帰還させた後の事を考えるだけで、色々憂鬱になりそうだ。

溜め息が重くなる。

嫌な気分を払拭させるように、絶賛移動中の彼女へと、顔を向けてみた。

さて何処まで進んだか、と目を凝らしてみると、あまり先程の位置から移動していないように見えた。

(遠くに行けば行くほど、遠近感が狂ってくるなあ。目印らしい目印のない月面じゃあ、仕方ないか)

今だって、唯一の目印は、先程「マリット・レイジ」が撃破した、月軍の円盤位のものだ。

遅さには定評（俺が評価）のある彼女ただけあって、その歩みは、酷く緩慢。今に限ってはそれが大いに助かっているのだが、今度のこのコンボの有効性を、少し狭める気がした。

影が遠ざかっていく最中は、凄まじい——地響きすら災害へと発展させるような音を辺り散乱させている。

それらが小さくなっていく中、モゾモゾとした彼女の背中を見て、さて、どうやってこの場を収めようか、と考える。

——顎に手を当て、下を向く。

けれど、しばらく考えてみるも、結果が出る事は無く。

疑問は疑問のままに、そろそろ突撃進行中な彼女を戻すか、と、再度顔を上げた。

「御機嫌よう、地上から来た者——九十九」

けれど、目の前に見えるものは、彼女ではなく。

「……お前、は……お前、は……お前、は……お前、は……お前、は……お前、は……お前、は……お前、は……お前、は……」

あの時は……さて、何をしてたのだったか。

確か、月の首脳会議を行っていたような。

いつも通りの、代わり映えない、無駄とも思える雑音の中で——突如、それは起こった。

警戒警報。

訓練以外で耳にした事は無かったが、あれは最高位の警鐘を知らせる音調だった筈だ。

弾かれた様に、席から立ち上がる、お歴々。

誰も彼もが焦燥の色を——などだったのなら面白かったのだが、淡々と、慌てるでもなく焦るでもなく、それこそ普段通りの軽快さで、退出していった。

伊達に数千万年は生きていない、という事なのだが、ここまで反応が薄いと、退屈を通り越して、落胆に近い感情が湧き出てくる。

でも、まあ、それだって、今に始まったことではない。

何かを知れば、隅から隅まで調べ尽くし、飽きる。

何かをすれば、頂点と呼ばれる場所にまで登りつめ、飽きる。

何かを見れば、色彩の分子に至るまで記憶し、飽きる。

山頂に辿り着いたのなら、後は滑るだけだから、とでも例えてみようか。

もしくは、興味と倦怠の、終わらない2ステップダンスを踊っているかのようだ。

「……様」

足早に避難通路を進んでいると、私の横から、専属の諜報員——玉兔——の一人が、情報をもたらした。

「穏やかではないわね」

「はい。八意様のご自宅で、ツクモなる地上人が、八意永琳様、綿月豊姫様の二名を昏倒させた模様で——あ」

玉兔の言葉が詰まる。

けれど、それは仕方がない事だ。

報告をしていた時、『昏倒させた——』との台詞の辺りから、その諜報員は、声の主が放つ気——殺気と怒気の入り混じった——に当てられ、自身の心が体から離れていくような錯覚を覚えた。

「——あら、御免なさい。少し——気持ち昂ぶってしまったわ。……それで？」

そのツクモという者は、今は何処に？　とても面白い騒動を起こしてくれた御礼がしたいの。是非、我が家にご招待したいわ」

「ち、地上人は……現在——逃亡して……おり……」

喉が、口が、舌が渴く。

何より、心が水分を——安息という名の雫を求めている。

何とかそれらを押し殺し、任務を果たそうと言葉を紡ぐが、しかしそれは、困難を極めた。

たった一つ。

何か一つの僅かな粗相が、自分の命の灯火を、消してしまいそうになっている。

その事実が、彼女が二次の言葉を口に出せずにいた。

「良いわ。続けなさい」

言われ、やっとの思いで口を湿らせ、自分は伝えるだけの機械だ、と暗示に近い脅迫概念を以って、自身の口を動かした。

「は、はい……。現在、逃亡しており……軍部が総力を挙げて、探索を開始しました。……恐らく、後数十分以内には発見、そして、軍が派遣される事でしょう」

目線すら向けず、彼女——蓬萊山輝夜、は浅く息を吐く。

カツカツと進める歩みに淀みは無く、むしろ、道を空けると自己主張しているかのよ

うだ。

その雰囲気に気圧されて、報告をした諜報員は勿論、周りに居る誰もが、彼女を遠巻きに眺めるのみに留まっている。

この程度で。情けない。

侮蔑と諦めの思いで、輝夜は周りの人物達を、横目で流し見る。

比較的若輩者である自分にすら気圧されているこの者達では、自分から何かをする、という選択肢が欠落しているのだろう。

行動は自分達より下の者に任せ、自らは話し合い、考えて、机上の空論で物事を推し進めて来た弊害か。

あんまりとも言える対応に、輝夜は溜め息……とまでは行かずとも、内心は、呆れ果てていた。

ただ唯一の救いは、この事態を担当している者——軍部の最高司令官——が、地上に住んでいた時から豪傑として名の知れた者だ、という事だ。

過去に幾度か、互いの立場を通して接する機会はあったが、中々どうして。

この倦怠の水面に半身を沈めている世界では、珍しい程の人格者だと思っている。

(……まあ、なら、我慢してあげても良いかな)

腹に据えかねる問題ではあるが、それならば、と、心を鎮めて、成り行きを見守る事

にしよう。

そう判断した彼女は、通路の先にあつた特別シエルターへと、入っていった。

——それから、幾許かの時間が経ち——

「それで？　いつ、九十九とやらの身柄を、こちらに渡してもらえるようになるのかしら」

移動中の車内。

一先ずの安全を確保出来たことで、今日の議題は後日に繰り越しとなり、解散となった。

体軀極まりない会議が無くなった事は喜ばしいが、だからといって、空いた時間を有意義に過ごす方法も、思いつかない。

不幸の反対は、幸せ、ではない。

不幸の反対とは、“不幸ではない”であり、幸福の反対とは、“幸福ではない”なのである。

学校や仕事が早く終わったからといって、そこから何かしら、飲んだり遊んだりしなければ、不幸にはならずとも、幸せにはなれない。

つまりは今、輝夜は不幸からは開放されたものの、幸せにはなっていないのだ。

おまけとばかりに、

「それが……」

未だに、今回の騒動にいついての朗報が届いてこない。

今し方、車に搭乗する際に便乗してきたこの者は、しかし、輝夜が最も知りたがっていた情報をもたらさずにいる。

焦らすのは好きだが、焦らされるのは嫌いだ。

無用な会議から開放され、後は、この元凶となった人物へと私刑を行うだけだとなれば、尚の事に。

だから、意図せず語彙が強まる。

車内の空気が凍っていく様な感覚に、事の成り行きを報告しようとする——吉報ではない——に、カラカラになった喉へと唾液を何度か送り込む事で、漸く、事の次第——

—現状報告をする決意を固めた。

「何？ 別に焦らす必要は無いのよ？」

「はっ……」。報告します。地上人の捕縛作戦は……失敗。現在、綿月の依姫様が、最大

戦力を以って、事態の收拾に当たっている筈です」

輝夜からの反応は無い。

気だるげな目線で、刻々と車外に映る景色を眺め続けていた。

——いや、違う。あれは、固まっているのだ。

諜報員は、そう判断する。

瞬き一つ行わず、呼吸音すら聞こえないこの女性は、今完全に、与えられた情報に、思考が全て、停止していたのだった。

「……尋ねるわ。月の軍は、ほぼ全力で、今回の事件に対応していた。……そうよね」

「はい」

「作戦失敗、というのは、相手が遠くへ……地上へでも、逃げてしまったのかしら？」

「いいえ。探索機器の情報では、軍は壊滅的な打撃を受け、撤退を開始。相手は、どの資料にも記録が無い、超巨大な怪物を召喚、使役し、それらの惨状を引き起こしました。——そして、彼らは未だに健在です」

「……相手は地上人……なのよね？」

「そうです。八意様主導の実験の結果、名称をつけ難い能力を有しており、細部で間々違いが見受けられたようですが……。真正正銘、地上人です」

輝夜の方が度合いは強いが、諜報員と二人……どちらも等しく、この事実には、驚き、と

いう言葉では言い表せない程の、心の揺らぎを起こしていた。

ある島国の、下級の神々程度ならば、一撃で沈黙させられる威力を有している戦車。一瞬で音よりも素早く動き、攪乱し、任意の場所に、直接火力を叩き込める円盤。

この主力の二機を、軍は四の桁に届く数を保有していた筈であり、その大半以上を、今回の任務に当てていたのは確認している。

(……それが、たった数刻の間に壊滅……?)

考察が追いつかない。

ただの地上人……かどうかも怪しくなつて来たが、それでも、個人という単体生物に、あの軍勢を打破出来るとは考え難かった。

(その怪物というのが肝のようね……。何処ぞ、名のある神か魔神でも呼び出したのかしら)

ならば一体、何の神が。

輝夜が、熟考してみるも、そちら方面の知識にはほとんど疎く、結論は出ない。

輝夜が幾ら考えようと、起こってしまった事実は変わらない。

全ての攻撃が通用していなかった事に加え、鉄壁を誇っていた戦車部隊は、触手による圧潰か、切断性能の高い光線でバラバラにされ。

同じく、目で追うことも困難であった数多の円盤は、二桁に届く「マリット・レイジ」の、目という策敵器官から逃れることは出来ずに、戦車と同じ運命を辿っていた。

一切のダメージを受けず、不沈艦の如く君臨していた荒神について理解を深めようなど、実際に起こった出来事を直視でもしない限り、この月の都で暮らしていた者達からすれば、どだい無理な話なのであった。

(……つまり何？ このままだと、永琳や、豊姫が目覚めずに終わる可能性があるって事？)

輝夜は、彼女らに対して、一定以上の愛情を寄せていた。

態度にこそ出さないものの、それは彼女の中で、決して譲れないものの一つとなっている。

のほほんとした雰囲気の中で戯れあう豊姫が好きだし、自分の全力に勝るとも劣らない、愚直とも言える誠実さを持つ、依姫も愛おしい。

何より、周りと比べれば、酷く我侷な自分を、放り出したりせず、むしろ、これから必要になっていく知識や技術、教養を、今まで教師役として訪れた誰よりも的確に、興味を引かれるように、教えてくれていた。

それが、失われるかもしれない。

(——冗談じゃない)

整った眉が歪む。

月でも五本の指に入る造形を誇る彼女の表情は、憤怒の色彩に彩られた。
熱が滾る。

故に、その行為に及ぶのは、必然。

「……行くわ」

「は？」

「その、九十九とやらのところへ。確か、家に高速艇があつたわよね。準備させなさい」
「お待ち下さい！　そ——」

それはいけません。

諜報員が言葉にしたかつた考えは、輝夜から漏れる怒気によつて、口の中へと押し戻されてしまった。

じわりと、体から嫌な汗が滲み出る。

目の奥が点滅し、気を抜けば、意識を手放しそうだ。

「——良い？　私は判断したの。そうしたいと。そうするべきだと。そこに、貴方の考えは必要無いわ。あなたは、情報を調べ、伝えるのが役目。違う？」

「……はい、そうです……」

「ならば余計な真似はしない事ね。これでも、私。大概の事なら笑つて許してあげられ

るけど、今回ののは無理よ。——分かるでしょ？ 私——怒ってるの」

背後に阿修羅が——否。それ以上のなにか見えた。

後に、そう語る諜報員は、弾かれた様に、手筈を整える。

当然、それを知った蓬萊山の家系に連なる者達が、すぐさま冷静になるよう、言葉の撤回を求める映像や音声を届けてきた。

しかし、というか、やはり、というか。

怒髪天を突く勢いの輝夜の進行を止められるものは、皆無であった。

目的地に向かう、高速艇の中。輝夜は、その映像に、魅入られていた。

浮かび上がったディスプレイから、目が離せない。

そこには、大地を薙ぎ、空間を押し潰す、色とりどりの世界が展開されていた。

「何よ……これ……」

この光景は、見た事がある。

確か、数年前。未知の月外生命体と、月の軍が威信をかけて戦う、といったコンセプトの活動写真だったか。

そこで出て来た、超巨大怪獣があれ位の大きさだった。

——ただしそれは、月の剣、と二つ名の付いた、主演・綿月依姫によって撃破されていた。

(赤面する位なら、主演断ればいいのに)

……違う。そうじゃない。

今しなければいけない思考は、もつと別の事だ。

(依姫の攻撃が一つも効いた様子が無い……。おまけに何？ あの攻撃力。一つ一つが、準大量破壊兵器並みじゃない)

どれも依姫には当たってはいいないが、その触手には、特殊合金で覆われた戦車を、一撃の名の下に圧潰させるだけ威力が伴っている。

空間ごと攻撃しているかのような攻撃に、その暴力性が垣間見えた。

依姫はそれを、舞でも踊っているのではないかと思わせる動きで、交わし、往なし、避けてゆく。

隙を見つけては、能力を駆使して様々な方法で攻撃を当てている。

けれど、そのどれもが相手に対して、微塵も動きを止めるものではなかった。

そして、いよいよ埒が明かない、と依姫は判断したようだ。

距離を取り、背中に炎の羽を生やす。

(あの子、本気ね。あれって何の神だったかしら)

過去に一度だけ見たような気がする。

確か、島国のものではなく、それらよりも外にいる神であった筈だ。

ああなった彼女を止められる相手など、三本の指に入る程も居ない。

安定性を捨て、世界の神へとその能力を広げた彼女は、自分でも、何とか食い下がるのがやつとだろう。

(本気の依姫に勝てるのは……永琳くらいかしら)

ともあれ、これで勝負はついた。

自分の手で解決を図れないのは不満が残るが、それでも終わってしまったのなら、仕方ない。

どうやってこの鬱憤を晴らそうか。

帰りは乗員が一人と、荷物が一つ増える事を考慮しておかなければ――

――体中に走る悪寒。

唐突に。輝夜は、全身が冷えていくのを感じた。

(な――!?)

空調機器などの、故障ではない。

体の心から冷えてゆくこの感覚は、今までに味わったことのないものだ。

「輝夜様！ 緊急着陸します！」

同時、高速艇の操縦士が叫ぶ。

どうやら、体が冷えてゆくだけでは無いようで、何かしら、機体にトラブルが発生したようだ。

（何?! っこの寒気は!）

それだけではない。

気力……とも違う。

そう、生きる上で必要不可欠なスタミナ——体力が、徐々に外へと零れていった。

しかもそれは、秒毎に、吸引力が上がっていつているようだ。

今はまだ良い。

けれど、あの怪物のところへ到着した時には、それこそ疲労困憊状態になっているだろう。

緊急というだけあって、地面を擦りながら、高速艇が着陸していく。

数十秒の後、何とか無事停止した船から、輝夜は降りた。

搭乗員、全二名の船内には、もう一名の乗員が、力無く、震える体を抱き締めながら、操舵席の上で蹲っている。

どうやら、この寒さと脱力の元凶は、漏れ出す程度に、差があるらしい。

(全く……一体どうなってるのよ……)

墜落したのは、この寒気が原因か。

段々と活力が失われていく最中、このままでは、何とは言わずも、色々と問題が出る事は必須と考えた

なれば、迅速に事に当たるべきだ。

目的を達成するべく、能力を使おうと、意識を集中させる。

——同時。

(なっ——)

世界が純白に華やいだ。

太陽がもう一つ出現しても、このような光源には及ばないかもしれない。

解決の糸口を求めると、視線を空へと這わす。

(白い……柱……?)

漆黒の空間を分断でもしているように、白い道が、星空へと敷かれていた。

(違う。あれは……)

そうだ。今し方まで、高速艇の中で目にしていた映像と重なる。但し。それは、映像のものよりも、数十倍の輝きであった。

このままでは、何もかもが手遅れになる。

根拠の無い。けれど、確認に満ちた感覚に、輝夜は自身の能力を発動させた。

(うつろいの間なんて与えないわ)

世界が止まる。

それは、輝夜だけに許された聖域。

何者にも侵食されぬ、絶対の力。

『永遠と須臾を操る能力』

それを如何なく發揮して、輝夜は大地を駆けた。

周囲の須臾を操り、自身のものとする。

それだけで、彼女は誰にも認知される事のない存在となった。

そして。

(あれ……ね)

輝夜の眼前に、厳かに聳え立つ灰色の茨山。

顔と思わしき箇所には、いくつもの眼光が底冷えするような色を発しながら備わって

いる。

それらのやや下。

並び立つ牙という牙に、冥界へと続く入り口を垣間見た気がした。

（依姫は、これを相手にしていたというの……？ 肝が冷えるわ……）

彼女でも攻撃が効かないとなれば、自分能力でも怪しいものだ。

——いや、そもそも、だからといって、それに固執する必要など無い。

高速艇で見た映像を思い出す。そこには、この化け物は地上人が召喚したもの、という可能性が濃厚であつた事が、示唆されていた。

なれば、この怪物を相手にするよりも、狙い易い、そちらを優先して対象にすれば良いだけの話。

何も、好き好んで苦行の道を行かずともよいのだ。

（彼女らしくも無いわね。怒りで我を忘れたのかしら。それとも、地上人の呼び出したものなど、と侮っていたのかしら）

どちらの線もありそうだが、後者の理由ならば、自分の場合でも起こり得る。

月へと移住し、幾星霜。

地上の文明や技術、脅威の度合いは、調べ尽くしていた。

その度を知る事となる、*“脅威無し”*の情報。

数千万年も行ってきた、観測という名の脅威偵察で得られた結果を、そう易々と覆して考えを纏められる者など、居よう筈もなかった。

それが例え、あの八意永琳であつたとしても。

そういうえば、この怪物の頭上に、目標たる九十九という地上人が乗っていた筈だが、今見る限りでは、それらしい人影は無い。

何処かへ逃げたのだのだろうか。

辺り一面は極寒の荒野なのだから、おいそれと逃げ切れるものではないとして……

(見つけたっ！)

僅かに窪む、瓦礫の影。

恐らく軍の戦車の残骸であろうその横に、純白の衣装をまとつた地上人、九十九と

(っ！ あの子！)

眠るように横たわる影。

月の軍神として無双を誇っていた、綿月依姫である。

時の流れが緩慢になつている中、輝夜は駆ける。

彼女にしてみればほんの数分だったが、彼女以外のものからしてみれば、それこそ一

瞬。

今にも倒れんばかりにへたり込んだ地上人と、それに体を預ける兩名が、視界に入つて来た。

それは、男女の逢引の様子とも見て取れる。

……しかし、ここは戦場。

よくよく目を凝らしてみれば、見えてくるのは、むしろ間逆。

疲れた顔で、女を抱く男。

青ざめた表情で、力無く横たわる女。

色恋の雰囲気など、微塵もありはしない。

よって。

「御機嫌よう、地上から来た者——九十九」

輝夜は自分の能力を解き、目の前の人物に姿を晒す。

即座に能力を使い、地上人の思考を循環させ、永遠のものとする。

「……お前、は……お前、は……お前、は——」

呆気ないほどに効果の現れた地上人に、拍子抜けすると同時に、今まで抑えに抑えてきた黒い感情が込み上がる。

「よくも永琳達を……」

知らず、拳に力が籠る。

何も掴んでいない手の平を、相手に向かって叩きつけるように振るう。

当然、その手の中には何も存在しないのだから、せいぜいそよ風の一つでも起こる程度が関の山。

おまけに、ここは月の都市の影響下とはいえ、宇宙空間。

本来なら、僅かな気流すら起こる事は無いのだが、そこを彼女は能力を駆使して対応する。

青白い光。

九十九の肩付近から外の宇宙へと軌跡を描くそれは、通常なら何の影響もない……塵芥と呼ばれる、極小物質。

それを輝夜は須臾を操り、極限まで加速させ、レールガンか、あるいは荷電粒子砲以上の威力を発揮させ、ぶつけたのである。

腕の一つでも飛ばしてやろうと目論んだ攻撃は、けれど、彼の衣類が破けただけで、漂う様に浮かぶ、小型の黒い円盤に阻まれた。

例えば出血で瀕死になろうとも、能力を使い、状態を保存して月の都へ運び、治療を受けさせようと考えていた為に、手加減無しの一撃であったのだが。

ただ、完全に防ぎ切れはしなかったようで、男の左肩の衣類が、爆散したかのように吹き飛んでいた。

「ふ〜ん……。これが例の絶対には壊れない能力、か」

面白くないとばかりに、眼光を強める。

それとは対照的に、黒い円盤は、実に優雅に漂っていた。

幻聴の類か。『汚名返上』の文字が脳裏を掠めるが、それは然したる問題ではない。

思考の操作は簡単に行えたというのに、破壊不可能の能力は、しっかりと機能しているようだ。

実験の結果は、輝夜も知っている。

自動で防御を行う円盤が一つと、それ同様の硬度を持つ体。

しかし、物理的な衝撃や欠損などの、ダメージによらない攻撃は、効果がある、というのは今現在で実証出来ている。

絡め手に弱い。と評価を下し、ならばいつそ、頭部はそのままに……。意識を戻させ、それから下の時を加速し、体が腐っていくのを眺めさせようか。

食材を前にして、料理を決める調理師の如く、様々な調理法が頭を過ぎ。

じゃあ、まずは——足から。

傾国の美貌を持つ者は、それはそれは楽しそうに残忍な笑みを湛えていた。

31 一方の大和の国

澄んだ声が、冷たく乾いた空へと広がってゆく。

太陽が地平線から顔を出し、さて、これから登ろうか、という時刻。

音源は一つではなく、五十、六十と、仕舞いには、百に届くであろう数が聞こえてきた。

それぞれが、老若男女問わず、同じ内容の言葉をお口にします。

「ににんがしー。にさんがろくー。にしがはちー」

木枯らし吹く季節に木霊する、数え歌の一種。

それは、とある神に仕えている全身を白い衣で着飾った者が発端であったとか。

場所は変わり、声の音源からやや離れた、社の一角。

いつものように幾人もの人々が頭を垂れ、いつもの光景が始まる。

大広間に集まる凡そ三十程の人々。

その視線の集まる場所に、二人の神が鎮座していた。

中央には注連縄を背負った、僅かな笑みを湛えている八坂神奈子。

その少し横の手に、胡坐をかき瞑想するように両の目を閉じている洩矢諏訪子が。

今日は月に一度の集会の日。

各村から長が集まり、それぞれの近況報告を口にする。

『染物を作りたい』『田畑を活性化させる葉が欲しい』『開墾の技術を譲っていただけないか』云々。

状況報告というよりも、むしろ、少しでも何かの技術や知識、文化を取り入れんが為の会議だとも言える。

誰も彼もがこの度文化統合と相成った、洩矢の地の様々なノウハウを欲しての会議――

——という名目の、話し合いでもあった。

そして、その知識や技術の譲渡の有無を決定するのが、最近の彼女達の仕事である。

「んーっ！ やつと終わったあ！」

小さな体をうんと伸ばし、拳を握り、両の手を空に突き出して伸びをする。

肩が凝った、と体で表現する諏訪子に、神奈子が呆れた様に話し掛けた。

「最近のお前はいつもそれだな。始めの頃の、威厳と風格に満ちた態度は何処へやったのだ？」

脳裏に映るのは、初めて出会った頃の凛とした態度。

神の名に相応しい厳かな貫禄のある姿はなりを潜め、今ではあの九十九と接している時の状態で、神奈子と接するようになっていた。

「ちゃんとケジメはつけてるつもりだよ。私の信仰着実に増えて来てるの、神奈子なら分かるでしょ？」

ならばこれで大丈夫。

満足げな顔でそれを言い終えて、どうだ、とばかりに神奈子へと向き直る。

「確かに……な。態度で信仰の度合いがこうも変わるものなのか……ふむ……。あ、いや、お前はそちらよりも、今は別の信仰が育ってきていたのだったな」

羨ましい限りだ。と、神奈子は羨望の念を含んだ、柔らかな笑みを浮かべる。

——九十九がもたらしたものは、知識、技術、文化など、大小挙げてみれば数知れず。

大概は概要すら曖昧なものが多かったが……それでも、そのどれもが今までのものとは一線を画く考えであった事は、疑うべくも無い。

間接的だけではなく、直接的にも、一瞬で大地を創造したり、様々な生物を駆使して開墾を行いながら、この国の——諏訪子の為に尽くしていたのだ。

今にしてもそうだ。

外から聞こえてくる、“九九”と呼んでいた数え歌は、恐らく彼の名前が含まれている事から、当人が、独自の理論で構築したのだと神奈子は考えた。

始めこそ暗記する内容の多さに、大和に住む誰もが呆気にとられたものだが、今ではそれを実践出来る者は、この国でも有数の行政者としてその手腕を振るってくれている。

九九を活かそうと学び応用させる姿勢が、返って、それらの知識を吸収し反映させられる土台を保持していた人々の選別にもなっていたのは、それらを教えた彼にも、全くの想定外であった。

一種の登竜門。九十九風に例えるのなら、採用試験と言えるだろう。

そして、その能力を最大限に生かした演算装置“算盤”なる機器の導入で、恐らく大

和の国は、この大陸でも上位の演算処理能力を誇る実力を身につけ始めていた。

最初の方こそ、慣れぬ——いや、初めての算盤の製作に悪戦苦闘していた九十九や職人達だったが、何とか完成には漕ぎ着けた。

今は量産こそ出来ないものの、いずれは大和での特産品としての面も見込める。

一抱えほどあるこの品は本来もつと小型なものなのだそう、しかしそこまで小型にしたら使い難いだろう、と、現在の大きさを保って作り続けている。

組織が大きくなればなるほどに重要となってくる、数字。

それを、今までと比べれば圧倒的とも言える速度で処理出来ているというのだから、内心で笑いが止まらない。

九九、算盤、そして、財務諸表——決算書とあやつが呼んでいた、物事の損得を凶にして表した方法。

決算書はまだ私と諏訪子を含む数人しか会得していないが、それでも効果は絶大、と言つてもいいだろう。

一瞬にして物事の損得が判別出来、しかも、それが分かり易い。

神である我らにとっては大した事は無いが、人間達にはそれは何より有難く、目に見える形で自分達の成果を確認出来るというのは、万人に遍く伝えなければならぬ事への、答えの一つになっていた。

文字にして数千を超えるであろう報告は、この書式を利用して作り上げた図で表せば、説明は簡単で、理解も早まるときたものだ。導入当初は、内心で諸手を挙げて歓迎してしまつた程だ。

凄いなのだと賞賛してやると、『簿記三級だから』とよく分からない言葉を口にしていたが、理解に苦しむ言動は今に始まつたことではないので、気にする必要は無い。

すぐに効果が現れるものではないが、数年、数十年先では、きつと国一つが動くだけの資源を捻出している事だろう。

それら効果も相まって、僅か一年程しか経過していないというのに、諏訪子は当然として、私自身にも、諏訪へ侵攻を仕掛けた時に予想していたよりも多くの信仰が蓄積されて来ているのが分かる。

——そして、それを手中に収めたいと思うことに、何の疑問の余地があるう。

「なあ、諏訪子。やはりここは一つ、あの者は私が……」
「嫌」

竹を割つたように、バツサと言葉を否定する。

口調こそ明るいものの、そこにはしつかりとした拒絶の意思が現れていた。

「それに、九十九は私の家臣でも家来でも、ましてや下僕でも無い。つてのは、よく知つてるでしょうに」

「ん、まあ……そんなだが……。お前の口添えでもあれば、変わるかと思つてな」
神奈子は残念とも思えないような声色で、諦めの台詞を口にする。

「そういえば、あれからしばらく経つな」
もう気分は変わったと。

一緒に話題も変えて、神奈子は今ここに居ない者の姿を思い浮かべた。

「今頃は、○○○の村で宴を催しているのだろうな」

遠くの地で行われているであろう宴を想像し、その内容に、思いを馳せる。
羨ましい。

口には出さないが、諏訪子は、神奈子の言葉の隅からその感情を感じとつた。

しかし、それについては彼女も同意するところであつた。

「良いよねー。私達なんか、彼処ばつた席じゃないと、宴なんて味わえないっていうのにさー」

「全くだ。それが嫌いとは言わんが……。出される品々が、あれではなあ……」
うんうんと同意するような、唸るような声を上げる、崇神の統括者。

九十九が用意する至高とも言える料理の数々は、単調な味付けしか存在していなかつたこの国において、まさに天にも昇ると比喩出来る品であつた。

必然、それを摂取し続けた事で、舌が肥えてしまった。

以後のそれ以外の食事は、たいそう味気ないものになっていったのだ。

先程まで会議をしていた面子がこの光景を見れば、威厳と威信に満ちたあの二人のギヤツプから、首を傾げ遠い目をするか、自動的に脳内から削除されかねない態度である。

「酒肴品だつて、あれだけじゃあ、足りないよ」

「あやつめ……。しばらく離れるのを良い事に、手を抜いていたのではないか？」

『同感』と、諏訪子は意思を、声にする。

しかし、この場に九十九が居たのなら、『(真空パックやら保存の効くものを)二ヶ月分は出しておいた筈だ!』と声を荒げて抗議していた事だろう。

一応多めに見積もつて用意はしておいたのだ彼だったが、結果、見事に読み間違えてしまったのだ。

普段、彼女達が酒の席を催す場合、それは、一週間に一度程度のもの。

だがそれは、疲れる九十九の顔を見たくない為に、頻度を落としていたのでもある。

故に、その気遣いストッパー兼、良心リミッターの彼——というより勇丸か——が、居なくなつた場合、僅か数日で枯渇するのは、当然の流れと言えるだろう。

我慢が効かず、九十九へ酒肴品を強請りに行こうとすると、さて、どうやって判断し

たのか。

いつの間にか無言で佇む忠犬の眼光に、背筋を振るわせる日々が、幾日かあったのだ。彼女達には。

そして、その外付け自制心機能・勇丸が、その役割を果たせない、となれば、結果は日を見るより明らか。

——羽目を外した子供のように飲み食いする神々は、それはもう凄惨状況だったらしい。

村中に木霊する笑い声を耳にした者達は、口々にそう答えた。

良くも悪くも、九十九は所詮、物事の尺度は人間であったのだから、たった1〜2年一緒にいようと、神々の本来の自力など、そうそうに分かるはずも無いのだった。

「調味料くらいは残ってた筈だけど……」

「ああ、味噌と醤油、だったか。あれは良いな。こう、魂を惹きつける何かを感じる」

「そうだね。ただ、私としては、餡子をもつと用意しておいて欲しかったんだけどなあ」
「あれは保存が効かぬであろうに。もって、3〜4日くらいか？」

「いやあ、それがね。風味だけなら、お湯を注いでしばらく待てば味わかる……え〜と……ふりーずどらい……? だったかな……そんな名前のを貰ったことがあるんだ」

そう言つて、虚空に指で、漢字をなぞる。

そこには、軌跡を辿れば達筆な『無印良品』の文字が、確かに浮かんでいた。

「何だそれは。乾燥させた餅のようなものか？」

「うくん。よく分かんない。完全に水気を飛ばした食品……とか何とか。見た目は赤黒っぽい泥だけど、味や風味は餡子のそのものだよ。水に溶かした餡子みたい」

「ふむ……。話を聞く限りでは、全く食指が動かん代物だな」

「私も始めはそうだったんだけど、『食わず嫌いは罰が当たりますよ！』って九十九に言われちゃって」

「馬鹿な事を。我らは当てる側であらうに」

「私もそうは言ったんだけど……。まあ、あいつ、変な拘り持つてるじゃない？ 仕方ないんで食べてみたんだけど……ありやあ、悪くないね」

「ほう。お前が言うのなら、間違いはなさそうだ。今度、私も試してみるとしよう」

本当、あれは何者なのだろう。

神奈子は、胸に抱えていた疑問が、どんどん膨れ上がっていくのを実感していた。

知性の神だとしても、何処か違和感が残り、言霊の神だとしても、やはり違和感が残る。

どんな結論に辿り着こうと、決して疑問が解消する事は無いのだ。

あの頃から些かも進展しない問いかけは、今日も今日として、一歩も前進せぬままに、

また一步、後退してしまうのであつた。

疑問に答えてくれるものは誰もおらず、募るばかりの想いに、湿気を含んだ吐息が漏れた。

「さ、て……」

言葉短く、諏訪子は話を中断させた。

「気分転換には無かつたかな？」

「ああ。国が大きくなれば、利益は勿論、不利益も増えるのは覚悟していたが……」

「うん、今までの奴らとは違うね。あれは……人間には、太刀打ち出来ない」

「そうだな。あれは——鬼だ」

二人の眼光が鋭くなる。

見つめる先。社の壁のさらに奥。遙か彼方のその向こう。

そこに、二神が見つめるものが居た。

「数は……三、かな」

「遠すぎて私も不明瞭だが、それで間違いは無いだろう。もう少し時間を掛ければ鮮明に分かるが……今は時間が惜しいな。力の程は——準大妖怪ほどが一、中級の妖怪が

一、……微塵の脅威も感じないものが一、か。ふん、この国に乗り込んでくるとは、豪気な——いや、無謀な奴め」

「へえ、そんなに詳しく分かるんだ。便利だねえ、神奈子の能力」

「二長一短だ。私からしてみれば、お前の方が脅威を感じるがな」

「何言ってるのさ。一度は私を貫いた癖に」

胸元をトントンと指差し、ニタリと不適な笑みを作る。

それに呼応して、神奈子が薄く、口元を歪めた。

「お前の本質の一端は『怨』。それを前面に出さずに終えた勝負に、何の意味を見いだせと?」

「ん、確かに、負けた後が私の本領発揮なんだけど……。今更、だよ」

「そうだな。今更、だな」

もう、全て終わってしまった事だ。

『そうそう』と、気軽に諏訪子が返事をする。

そうして、今までの朗らかな空気が全て四散していき、変わりに、神気が周囲へ埋まってゆく。

「——それでは参ろうか。天の軍神よ」

「然り。大地に秘められし怨恨の力。存分に振るわれよ、崇り神の統括者」

—— 一体、誰が止められようか。

この時代、この島国の人口が十万とも二十万とも言われる、この時に。

実に十分の一、あるいはそれ以上を抱えている国の信仰の力。

それを束ねる、天と地の神々を。

霞のように空気に溶ける八坂神奈子と、崩れるように、床——大地へと同化する洩矢諏訪子。

一陣の風が、社の中を吹き抜ける。

既にそこには、人っ子一人、存在するものでは無かった。

影が三つ。

大、中、小のそれらは、それぞれ進行方向準に、先頭から、小、大、中の順番で、獣道に近い山林を踏破してた。

「なあ、勇丸よ。本当にこっちの道で良いのか？」

そう答える大の影——鬼の一角は、黙々と前を歩き続ける小の影——白い獵犬、勇丸へと質問を投げ掛ける。

しかし、それに答えなければならぬ相手は、チラとこちらを見ただけで、再び黙々と歩みを再開した。

「良いらしいな」

「そうなんかねえ。おいらはもつと、愛想良く接したいんだが……ところで太郎よ」

「ん？」

「こう言っちゃなんだが、お前さん。疲れてないのか？」

唐突な台詞だが、一角の疑問は最もだ。

陸路の走破に最適な四肢を持つ勇丸は当然として、二足の一角は、鬼である為、殆ど疲れ知らず。

しかし本来、二足は超距離の移動には、どちらかといえば不向きな方で、それをただの人間である彼に尋ねるのは、至極当然の流れであった。

最も——それを尋ねるのが、かなり遅かったという突っ込み箇所があるのだが。

どうなんだ、と疑問を投げ掛ける一角に、中の影の者——浦島太郎は答えた。

「ああ。正直、いつぶつ倒れてもおかしくない」

「何!？」

驚愕を露にする一角に、太郎はケロつとした顔で、返答をした。それはそうだ。

方や無尽蔵とも言える体力を持つ、八咫鳥さえ落とした猟犬。方や理不尽の権化、妖怪のまとめ役である鬼。

それに今の今まで付いてきた事の方が、賞賛に値する。

「ば、馬鹿野郎！ だったら始めつから言えつてんだ！ 俺や勇丸だって、人間一人担ぐ事くらい訳無いつてのは、分かつてるだろ!？」

一角は、慌てて太郎を地面へと座らせる。

初めから座るつもりでも居たかのように、すくと地面へと座り込んだ太郎は、反論する素振りすら見せない。

表情は先程と変わらずに疲れは感じさせないが、あれは違う。と、一角は思う。

(ありやあ、疲れで表情が固まっちゃまってるんだな……)

疲れを表す表情すら浮けべられない程の疲労なのだと判断し、背負っていた水用の瓢箪から、彼に水を飲ませた。

二メートルを超える男が、胸ほどの身長が無い者に施しを与えるのは不思議な光景であったが、この場にいる誰もが、それに問いかける事はない。

太郎の体力回復を図るべく、近場の木陰で休憩をする一同。

人、犬、鬼と、第三者から見れば、どう表現したら良いものか悩む構成ではあったが、とうの彼らは至つて暢気に、空を流れる雲と、風に揺れる木々の葉を眺めていた。

「あれから、何日経つたかな」

しばらくして、ある程度の疲れが抜けたのか、太郎は誰に語りかけるでもなく、ぼそりと呟いた。

「あゝ、今日で丁度、八日だ」

一角がそれに答え、『そうか』太郎がと反応し、それつきり、互いにまた、無言に戻る。そう、八日。

——それは、九十九が勇丸を置いて、消え去つてしまつてから、の期間でもある。

あれから、村中が騒然となつた。

消えてしまつた九十九を探すべく、鬼と村人達が周囲を探そうとした。

それを止めたのは、彼の一番の従者でもある、勇丸だつた。

一声吼えた後、動かさず、無言を貫く獵犬に、誰もが近くにいた者達と顔を見合わせ、疑問を抱える事態になつたのだ。

『何故、勇丸が搜索に動かないのか』

この一点に尽きる疑問に。

結果、それら疑問を置き去りにし、彼が元の場所——大和の国へと戻ろうとしてい

るのを察した者達が、代表を決め、事情を説明する為、同行する事と相成った訳である。鬼と人とのリーダー二人の同行という事態に、残る者達は不安の声を上げるものも居たが、代表とはそういうものだ、と、一角と太郎の兩名は、口を揃えて言った。そうして旅を始めていく内に、この兩名は、互いに、知人以上の間柄へと進展していったのは、余談である。

そして、ここからが本題——

『止まれ、その者共よ』

厳かな声が、肅々と。

大気を振るわせる神託が、辺りの獣や鳥のみならず、草木の一本に至るまで浸透し、世界はしんと静まり返る。

一瞬の静寂は、しかし、我先にとその場から逃げ出す生物達によって打ち砕かれた。木枯らし吹き付ける森林を歩んでいた、二頭の鹿の親子が。

これから来る季節への備えを万全にすべく働いていた狐達が。

峙（ねぐら）を補強していた駒鳥の夫婦が。

誰も彼もが、直感にも似た危機感を感じ、一目散に方々へと散っていった。

「——穩やかじゃねえな。太郎……」

「……すまねえ、世話になる」

震える足に活を入れ、何とか立ち上がった太郎は、一角の背後へと身を寄せる。

——正確には、立ち上がった太郎を、一角が自身の背後へと誘導した、という流れではある。

「ほう、道中の昼食用にでも捕まえていたのかと思えば、何とも、摩訶不思議な光景よな」
彼らの頭上。

太陽を背にして、見えぬ神輿に胡坐で座るかの如く浮遊している、軍神が。

「——だが、それ以上の進行は許さん。早々に立ち去るのなら良し。さもなくば……」
彼らの正面。

黒い水が、地面から柱となり湧き上がる。

それは人の形を成したかと思えば、途端に色づき、一人の少女——土着神の頂点に鎮座する者が現れ、神奈子の話の続きを、神気の籠った言霊と共に送った。

「——その命。百度輪廻の輪を潜り抜けようとも、我が怨恨は尽きぬものと「わん！」
知……れ……？」

誰もが存在を忘れていた……否。視界に入らなかつた者が、己を主張するように吼える。

吼えた者には申し訳ないのだが、しようがないのだ。

他の同種と比較すれば巨体だとはいえ、横の大きさはさておき、縦の長さが不足している。

特に、草木の生い茂る今この場においては、尚の事。

「いさ……まる……？」

「うん？ どうした、諏訪……」……」

一陣の風。

呆気にとられる、軍神と崇り神。

訝しげに眉を寄せる、鬼と人間。

飄々とした顔で佇む、純白の獣。

さてこの場合、どう流れを作り出したら良いものか。

この時の止まった空間が動き出すには、今しばらくの猶予が必要であった。

「勇丸……」

足元へ擦り寄ってくる存在に、私は手を伸ばし、優しく頭を撫でる。

普段ならばこのような行為には及ばない者なので、自然と、自分がどれだけ動揺しているのかが分かってしまう。

頭上には、満天の月。

社の縁側から覗く夜空は、いつもと変わらず、光り輝いていた。

幾年経つても変わる事の無い光源に、安心すると同時に、その、ずっと居続けてくれると思っていた存在が消え去ってしまった事実が、些か以上に胸を締め付ける。

—— 太郎と一角、そして勇丸から、九十九に何があつたのかを聞いた。

行く町を間違えてしまった事。

そこで鬼と戦い、打ち負かした事。

—— そして、太郎を庇い、消え去ってしまったという事。

本当に居なくなってしまった——この世から——のなら、勇丸がこうして、私と会っているというのはおかしい。

つまり、この忠犬が認知出来ない、遙か彼方へと移動した、と考えるのが妥当だろう。あれから、私はすぐに自分の能力を限界まで使い、彼の行方を追った。

陸続きであるところは全て確かめて、海で隔たった先からは、神奈子が調べてくれた。

私の能力の使用によつて、領地を侵略されたと勘違いした幾人かの神々と剣呑な関係になりかけたが、そこは神奈子が顔の広さを活かして、治めてくれた。

だが、居ない。

調べられるところは全て探り、後はこの大陸の外——さらなる大陸である、中つ国や、その先にある、西洋の神々が支配する国々にも、手を伸ばそうかと思つたものだ。

けれど、それを行つてしまえば、ここは戦火に巻き込まれる事になる。

同じ大陸内でも、少し探りを入れただけで険悪な状況になつたのだ。

これが全く見ず知らずの相手ならば、こちらは命を賭しても飽き足らず、配下の下々達をも振り回してしまふだろう。

「ここに居たか」

考え込んでいる内に、行事を終えた神奈子が、手に何か、月の光で輝いているものを握りながら、こちらに歩んで来た。

「それは……」

「なに、いざという時の為に、幾つか残しておいたのだがな。こういう時に開けるものだろうか？」

何かと思ひ凝視してみれば、彼女の手には、九十九が出したのであろう、取つて置きと思われる、酒瓶が見て取れた。

「酷いよ、神奈子。いつも『酒はお前が出せ』とか言ってる癖に。良いもの持ってるんじゃない」

「何を言う。お前は九十九からいつも出して貰っているだろう。一応、私はお前ほど九十九と親しい訳ではないからな。そう頻繁に酒は頼めん」

「……え〜」

「『いつも宴会で頼んでいるだろう』という顔だな。あれは、お前と一緒に居るからだ。個人的な頼み事は、一度も無い」

「ありや、一度も?」

「そっこだ」

意外だ。

何度も彼と接する機会があったというのに、まさかあの神奈子が、全く彼に強請っていない、というのは。

「この酒だつて、あいつが自分から『今日は気分が良いから、高めの出すぜ』などと言って、私に押し付けてそのまま寝てしまったものだ。……あいつは何だかんだといって、我や大和の下々には、一定の壁を築いているからな。……諏訪の者達や、お前が羨ましい」

何となく、それを裏付ける理由は思いあたる節がある。

些細な事だ。

酒を注ぐ順番であつたり、一番に話し掛ける相手であつたり、笑顔が多くなる席であつたり。

上手く隠しながら振舞つてはいるが、細かく見てみれば、それは如実に現れていた。

「ふむ……はやり諏訪の者達やお前、九十九を『ふるぼっこ』にしたのが不味かつたか」
「おお、神奈子も九十九語、使うようになったんだね」

「気分だ。あいつの前で言い、きよとんとさせて驚かせるのは楽しいが、頻繁ではいかん。年に一度程度、と思ひながら、酒の肴にしているよ」

私の左隣に腰を落とし、胡坐を組む。

それを見て、勇丸が席を外した。

その事に、私も神奈子も何も思うところは無い。

あいつはいつだって、こちらの雰囲気や場の流れを呼んで、いつの間にか最も適しているであろう行動を起こしている。

本当、あいつは犬なのではなく、どこぞの神の依り代なのではないかと疑つてしまうほどであつた。

「あの二人はどうした」

「一角と、太郎、だっけ」

ああ、と頷く神奈子が、こちらに寄越した杯に、酒を注ぐ。

それを受け取り、唇を湿らせる感覚で、一口飲んだ。——うん、美味しい。

「太郎は限界だったみたいで、社の一室で熟睡中。神気が多く集まる場所に寝かせておいたから、きつと明日の朝はピンピンしているよ」

「では、鬼の方は」

「それは——」

ミシリ、と。かなりの重量が、木製の床を鳴かせる。

「——呼んだか？」

ビリビリと、重低音を響かせながら、たった今話題に上がった者がぬるりと現れた。

「呼んじやあいないけど、お前が今、どうしてるのかと思つてね」

身長二メートルを超える巨漢。

額から伸びた白銀にも似た輝きを持つ角が、月下に爛々と照らし出されていた。

その手には、酒の肴である、木の実や穀物、海や川の幸が抱えられており、その後ろには、勇丸が控えていた。

行動の早い事だ。彼が立ち去ってから、僅かの間しか経っていないというのに。

「こいつに頼まれて、酒の肴を持って来てみれば……。何だな、この国の主神達との会合に出くわすとは思わなかった」

どかりと持ち物を床に置き、私の右に、神奈子と同様、胡坐をかいて、座り込む。左から、神奈子、私、勇丸に、一角と。

神が二人、妖怪が一人、賢狼——いや、犬だったか——が一匹。

一同に集まった顔ぶれに、変なものだという感想が沸き起こり、軽く笑いを誘う。

大概のものならば、一緒にいるだけで尻込みする面子だと思ふのだが、それを全く気にする風もなく、一角は、こちらの酒を強請る様に、自前の杯を掲げて来た。

そして、それに反応した神奈子が、小さな、けれど良く透つた声で、鬼に向かって話しかけた。

「凶々しい奴だ——まあ、お前には慣れたものか。西の末鬼、ピンガール」

「……今の俺は、ただの“一角”だ。——お前、何処でその名を知った」

並みの者なら意識が途絶えてしまう眼力を、鬼が向けてきた。

だが、生憎と、ここにはその程度で怯む存在など居ない。

「何、神奈子、こいつの事、知ってるの？」

「お前もつと、神有月の出雲に顔を出せというに。……はあ……まあいい。数年前か。西の大陸の神々から連絡があつてな。ある息子がそちらに向かつているかもしれない。見つけたら、戻るように……連れ戻すように動いてくれ、とな」

「それがこいつだって？」

一角は、好きにしてくれ、と言わんばかりに、夜空を見上げて、こちらに壁を作り、隣に居た勇丸の頭を撫でる。

だが、それはあまりお気に召さなかったらしく、とうの勇丸に軽く睨まれ、『ああ、すまん』とその手を引つ込めた。

少し不貞腐れた鬼の表情に、真新しさを発見しながら、私は神奈子の言葉に耳を傾けた。

「何でも『耐性ができる』、あるいは『二度と通用しない』という能力持ちだぞうでな。一度受けた攻撃は通らず、一度対処した攻撃は、二度と防げんぞうだ」

「げ、なんだいそれ」

「その能力故に、立場の逆転を恐れた神々達が、半ば幽閉に近い形で閉じ込めていたぞうなのだが……」

神奈子が、ちらと一角に目を向ける。

目線向けられた、その鬼は、首を竦め、『ぞうだ』と肯定する仕草を試みさせた。「力が発揮されるまでには、少し時間が掛かるぞうだけぞな」

そう言って、少し遠くに目線を送りながら、この鬼は、自らの経緯を話し出した。

「幽閉もぞうなんだが、おつかあが、二度と釈迦にさらわれるつてのはごめんだ、つて具合ぞな。生まれてこの方。幾年も、監禁生活よ。相当、おいらを失うのを恐れたんだぞう」

うな。……我ながら、可愛がられて育ったもんだから、能力の方が殆ど育たなくてよ
「おつかあ？」

それに、釈迦？ あの、天上天下、唯我独尊とか言いながら生まれらつていう？

そんな事を考えながら、その『おつかあ』とやらの事を訊ねてみると、

「ああ……こつちじゃ、鬼子母神つて名で通つてるんだつたか」

「——そりやまた、九十九は面倒な相手を打ち負かしたもんだねえ」

最悪、鬼子母神が乗り込んできたかもしれない事態であつた事に、私は背筋を凍らせ
た。

齧つた程度の話を真に受けるのなら、恐らくそいつには、私も神奈子も、負けはしな
いだろうが、太刀打ち出来るものではない。

呆れ顔で呟く私に、一角はその時の光景を思い出したのか、口元を吊り上げて楽しそ
うに語り出した。

「ありやあ凄い光景だつた。確か、西洋の神に仕える僕……天使、つつつたか。そいつら
が唐突にわんさか出てきてよ。こつちの攻撃は通らねえわ、気孔弾みたいなもんは撃つ
てるわで、てんやわんやつてやつよ」

体全体が振動するほどの大声で、隣の妖怪が笑い出す。

五月蠅いったら、ありやしない。

けれどそんな迷惑も、外の下々には届かない。

伊達に九十九との宴会を楽しむ為の、私と神奈子合作である、防音結界は整えていないのだ。

しかし、天使と来たか。

純白の鳥の羽を生やした者達だと聞いた事があるが、悪魔なり天使なり、それら対極の者を呼び出し使役しているあいつは、一体何の能力ならば、それを可能にするのだろうか。

神力とも、魔法とも、呪術とも、どれとも部類出来て、けれど、そのいずれも関連性が見出せない。

神奈子ではないが、これでは私もゆくゆくは、あいつに事の真偽を問い質してみたくなるといふものだ。

「本当、外界つてのは面白いな。いい加減、神界にも飽きたんで——ごほんっ——今まではおっつかあの顔を立てるつもりで従って来たんだがな。数百年は長過ぎだろ。と、思った訳だ。それに、そろそろ親離れしねえとな。……嘘は言つてねえぞ」

気にする位なら、言い直さなけりや良いのに。

「……で、こんな東の彼方の地まで来た、と？」

「……には、おいらの種族が結構居るって聞いてな。いっちょ、その頭になつてみよう

かと思つてよ」

「……まあ、こつちを害さない分には良いけどね」

「どうだろな。約束はできねえ」

全く、鬼つて奴は。

「……はあ。正直なのは良いけどさ。せめて口に出さない、つて選択肢は無いのかい？」

「口に出さない。なんて、言つてないだけの嘘と変わらんだろ」

なるほど、そういう考え方もあるな。と歎心していると、一角が、今の言葉に続きを足してきた。

「——と、ついこの前の宴の席で、九十九に言われたんだがな。それを言われるまでは、おいらも、その選択肢つてやつを選んでたクチだ」

面白いものが聞けた、と、神奈子の瞳に愉悦の色が混じる。

「いつの間にか、一丁前の口を効く様になつたではないか。これなら、戻つてくる分には地方の領主か、千人隊長の地位でも与えられるかもしれんな」

「ああ、そりや無理だ」

「——ほう？ それはまた、何故だ、と訊ねても？」

「だつてなあ……」

樂しげな軍神の言葉に、一角は顔を顰めながら答えた。

「あいつその後に『ただし俺は例外な！』とか言つて、すつげえ自慢顔しながら思いつきり逃げの一手打つてたからな」

「ええー……」

カツコ悪過ぎだよ九十九……。

溜め息と共に、私の中では、九十九に対する何かが幾つか零れていったような気がする。

「はははは！　そうかそうか！　鬼に打ち勝つたというから、何かしら、一皮向けたのかと思えば！」

堪らなく面白い。

そう、大声で笑いを木霊させる神奈子に、少しだけではあるけれど、勇丸が尻尾と耳を垂れさせている。

神奈子、少しは気にしてあげようよ。勇丸が可愛そう。

九十九は……ま、別にいいか。

「……しかし、何はともあれ、あいつは己の信条を守ったのか」

「……ん、まあ、そういう事になるのかね」

「おいら達はボコボコにされたけどな」

互いに、星空へと視線を向けた。

本当、変な奴だ。

私に妖怪だと啖呵を切り、神奈子に立ち向かい、鬼と渡りをつけて、そして、それら気概を微塵も感じさせる事が無い。

意識してそう見せているのだとすれば、天下一品の役者か大道芸人にでもなれるだろうが、多分、九十九は本当に、ただそんな威厳と気品に満ちた行動が出来ないだけだ。

また、溜め息。けれど胸の奥から込み上げて来る温もりに、自然と笑みが零れる。
ホント、なんでこんな奴を——

——突如、夜空が白く、瞬いた。

星達の輝きとは全く違う。

夜に太陽でも昇った様な光に、私達の誰もが息を呑み、その光源——月へと視線を向けた。

国の者達も気づいたようで、少しずつ、けれどそれは大きな波紋となつて、人々に動

揺と伝播させていつている。

「諏訪子」

「ああ」

最大の警戒を以つて、上空の月に意識を集中する。

一瞬だけ見えた、光の柱。

月からまつすぐこちらの大地へと伸びていたそれは、段々とその光を弱めながら、ついにには夢か幻のように輪郭を失いながら、元の静かな夜へと溶けていった。

かなりの距離であつたというのに、否応なく、私達には分かる。

肌を焼くような力の本流とでも呼ぶべき何か、一瞬だけではあるが、私達を通り過ぎていった。

この分ではこの地にいる者だけに留まらず、大陸に居る者は勿論、その外の国々ですら気づいた事だろう。

「おいおい……何だよありやあ……」

神奈子は既に、この場には居ない。

この騒動を治めるべく、逸早く広場へと向かつていった。

「知らぬ。我はいつ事が起きてもいいよう、神気を巡らせる。妖怪たる汝には心地悪からう。早めにこの地を去る事を奨めよう」

自然、口調が過去のものへと。初期の頃に民達に望まれたものへと変調していく。

「おいおい、おいらは鬼だが、住んでた場所は神界だぞ。とつくに耐性は出来てらあ。……というか、お前の気配はこつちが本当か。神気が数十倍も膨れ上がってるじゃねえか」

「戯け。口調の変化如きで、我らを計るでない。どちらも本当の我の姿だ」

「ああそうかい。あれか、平常『モード』と戦闘『モード』ってやつかい」

「……九十九か」

「ああ、だが、『モード』って言葉は、西洋の神々が統べていた土地での言葉の一つだ。それをあいつが広めたのか、元から使っていたのを使っているだけのかは、知らねえがな」

「……ほんに、あやつは何者か分からぬ存在よな」

「全くだ。——さて、一宿一飯、つて訳じゃあねえが、お前は九十九の『良い人』で、ここはあいつのお気に入りのお場所だつて言うじゃねえか。友達の好だ。一つ、おいらも角を貸すぜ」

一瞬、万人の声を余すことなく聞き入れている事の出来る、我が耳を疑った。

「九十九の……『良い人』、だと?」

「ああ。九十九がな、お前に接吻されたのを、心底嬉しそうに、涙流しながら語ってたもん

だから、てつきりそういうもんなのかと……。ん？ 涙を流したのは違う理由だったか……？」

むんむんと唸りながら、首を傾げる大男を尻目に、我は、異様な熱に浮かされる羽目になる。

そうか……。九十九が、我の事を……。

「はははは——うむ、やはりこの感覚は、心地良い」

誰に聞かせるでもなく、自然に口から、思いが零れる。

季節の一巡など、神たる我からすれば、刹那にも似た時間であるというのに、今はその刹那の中の刹那ですら、一日晩秋の思いに似て。

我は——私は、彼を好ましく思っている。

その事実、酷く心を掻き乱されながら、それがとても素晴らしいものだと思信出来た。

「民達は抑えて来た。また何か起きぬ限り、これ以上動揺する事は無いだろう。——お前達、何をやっているのだ？」

事を終えた神奈子が一角と勇丸、そして諏訪子の居る社へと戻ってみれば、低い唸り

声を上げながら考え込む鬼と、目を大きく見開いて、何かに対して満足気な笑みを浮かべている諏訪子と。

それらの出来事を全く意に返さず、一人で月を睨み——否、見据えるように、観察し続けている、勇丸であつた。

「なに。幸福を噛み締めていたところだ」

「こんな状況でか？」

「こんな状況で、さ」

諏訪子は、既に神気を国中に展開し、いつ何が起きても良い様に準備は終えている様子だったが、若干何かに呆けている表情なのは、一体何があつたというのか。

疑問に思う神奈子であつたが、それを訊ねるよりも早く、逆に諏訪子に疑問を投げ掛けられた。

「それで、そちらの方では何か判明したか？」

「全く。何も」

神奈子が、成果を完結に述べた。

少し眉をひそめる諏訪子であつたが、彼女が分からないと言つたのだ。

これ以上、何を聞いても、進展は無いだろうと、諏訪子は判断する。

「……そうか……一角、お前も唸ってないで、何か考えを述べてみよ」

「……ん？ ……そうしたいのは山々なんだが、おいらもそこな軍神様と一緒に。月で何かあった、位しか思いつく事はないな」

言われ、先程と何一つ変わらず浮かんでいる天体に、彼ら三人は再び視線を向けた。数刻前と色褪せる事無く輝き続けている夜の太陽が、つい今し方の出来事を、まるで何かに化かされた印象を感じさせた。

「狐や狸の仕業……な訳はねえか」

鬼の呟きに、軍神が答える。

「幾人もの人間のみならず、我ら神や、大妖怪に部類されるお前を欺く力があるのなら、既に力関係は逆転している筈だ」

「その逆転の発端が、今の光景だったやもしれぬな」

神奈子の言葉に、諏訪子が自分の考えを付け足した。

しばらく考え込む筈だったが、やはり結論は出ないまま。

お手上げだ、と言わんばかりに諏訪子の態度が崩れ、つい先程までの、親しみやすい空気を纏い直した。

「あく、さっぱり分からないね。一角も神奈子もお手上げじゃあ、この国で分かりそうなのは誰も居ないじゃないか」

「困ったな……。そうだ。あまり遠くへ呼び掛けるのは出来ないが、他所の国の者達に

も尋ねてみよう。この光景を見たのは我々だけでは無い筈だ」

「分かったら、おいらにも教えてくれ。そこから何か手繰れるかもしれねえ」

うむ、と頷く神奈子が、それを行おうと神気を纏う。

自分もやるか。と、それに習って力を集中させる諏訪子に。

——今まで沈黙を保っていた勇丸が、遠く、遙か遠くの、あの月にまで届きそうな遠吠えを発した。

冷え切った夜空に響くその声は、何かを懐かしむような、誰かに呼びかけるような、そんな音色であった。

神奈子も、諏訪子も、一角も。

誰もが彼を、心の何処かで『この件では力にならないだろう』と割り切っていただけに、その彼の行動には、思わず息を呑むものがあつた。

「勇丸、どうした」

気高く吼える者の横に腰を落とし、一角は訊ねた。

この鬼に犬である勇丸の言葉は分からないが、けれどそれが分かるものが、この場において二人も居る。

「……居るって」

「あん？」

か細く声にした土着神の言葉に、一角が懐疑の声を上げる。

「九十九が、あそこに居るって」

そして、唯でさえ大きなその目を、はちきれんばかりに見開いた。

「あそこって……あの月に、か？」

「うん」

「だってお前……あそこは……」

そこで、この鬼は、ふと疑問に思った。

一体、あの月という空に浮かぶものは、何なのだろう、と。

自分がこの世に生を受けて以来、ずっと変わらず、あそこに存在していたもの。

そこにあり続けているものだったから、例え疑問に思ったとしても、大して追求する気など起きなかった。

そんな場所に、あいつは居る。

信じがたい事だが、誰よりもあいつを分かっているであろう、忠犬が、そう言うのだ。

それは真実なのだろう。

「……思考が及ばぬな……一角、諏訪子、あそこには——月とは一体、どのような場所

であつたか」

それは、空に光り輝く星々に『あれは何?』と問い掛けているようなものだ。

誰もがそれに疑問を持たず、仮に持ったとしても、本当にそれを調べるような物好きは、この場にいる誰もがそんな人物など知らない、と答えられる。

この大陸——島国では、兎とも。他の大陸では、棍棒を持つ人間とも、両の爪を振り上げる蟹が住んでいるとも言われているその優しく光り魔的に輝く存在は、誰もが幻想と信仰と様々な思いや考えを巡らせながら——けれど誰もが、それを真剣に調べようとはしなかつた。

故に、分らない。

文献などある筈もなく、それを調べる術も無い。

当然……それを知っている者など、それこそ、あそこに住まう者達だけだろう。

何かの生き物が居れば、の話ではあるが。

「そつういえば……」

神奈子はふと思ひ出した。

「過去の出雲の集会の折、愛宕の者や他の幾人かが、魂を天へと向かわせた事があつた、と言つていた」

その言葉に、諏訪子が反応する。

「天？」

「うむ。綿月の神々に呼ばれた、と言っていたが……」

「綿月……の神々？ そんな同属居たけ？」

一瞬眉間に皺を寄せ、神奈子は目を伏せる。

「……まあお前は生まれてきたのは民達が営みを持つようになってからだったから、知らぬのも当然か」

「何だ、結構有名なのか？」

そんな奴居かた、と一角が唸る。

「釈迦様やインドラ様辺りならばお詳しいだろう。かつて彼らと共にこの地に住まわれていたそうだが、かなり昔の話だそうだ。私も見た事は無い。時折我らをいずこへと呼び出している、とは聞くが——」

そう言つて、神奈子は顔を上げて月を見据える。

「九十九……」

黄金色の髪を持つ、小さき者の思いが零れる。

泣くように木霊する純白の獣の声に重なつて、その眩きは、煌びやかに瞬く星空へと消えていった。

32 移動中《前編》

「……で、これどういう状況なの？」

不満とも諦めとも取れる、か細い声。

『僕、やる気ありません』と体言するその姿は、左肩の服が千切れ飛んでいた。

それどころか、衣類なんて、所々……どころか、既に全体がボロ雑巾の様で、新手のダメージファクションなのか、と錯覚してしまいそうになる。

じと目で暗き虚空を見つめながら、その男——九十九は、隣にいた青き者に、大雑把で投げやりな感じで、説明を求めた。

少し前ならば、幾許かの羨望と尊敬の念を込めた言葉遣いをしていたというのに、どうやら、それらは体力や精神力と一緒に、何処かへと飛んでいってしまったようだ。

彼が見た光景。

遠ざかってゆく灰色の山は相変わらずで、手を伸ばせば届く距離に、月のお姫様——

—地球に降りない方——が倒れている。

で、さらに意味が分からない———というか、誰かに今の状況を尋ねたくなつたもつともたる原因が、そこには居た。

「……なんでお前が居るのよ、蓬莱山 輝夜」

その表情からは何も読み取れないが、全くこちらに反応せず、声どころか目線——
—眼球すら動かさずにいる、優雅に佇む女性が一人。

月のお姫様——地球に降りる方———こと、竹取物語の主役、かぐや姫その人であつた。

話は、ほんの少し遡る。

輝夜が九十九に攻撃を仕掛け様とした、その刹那。

彼女は一切の能力行使を止めて、その場へと、糸の切れた操り人形のように崩れ落ちた。

それから数秒。

遠くの岩場の影から、ゆっくりと、長身の男が歩み寄つてきた。

疲労感を滲ませながら、足を引きずりつつ、何とか歩行を成立させているその姿は、満身創痍の言葉を体言していた。

「プレインズウオーカー」「ジェイス・ベレン」その人だ。

外傷は綺麗に塞がっているようだが、その分、体力がごっそりと奪われているらしい。本来ならまだ休んでいなければならないのだが、彼がたまたま意識を取り戻した時——それが、輝夜が九十九へ攻撃を仕掛け始めたのを、強力なテレパスで感じたのだ。た。

彼は即座に、あの八意永琳にも有効であった、精神掌握を開始する。

どうしても若干の時間は掛かってしまったが、それでも輝夜といえど例外では無く、PWの力の前に、その心を喪失してしまった。

木偶と化した彼女の表情には、一切の抵抗の名残すら見受けられない、あまりに鮮やかな手並み。

疲労の極みであるとはいえ、ジェイスの力は、紛れも無く本物であった。

そして輝夜の記憶を読み、事のあらましを察したジェイスは、まずは思考がループしている地上人を目覚めさせようと、彼女に能力を使わせて、解除させ、現在に至る。

「……と、そういって？」

頷くジェイスを見て、九十九は再度、放心状態となっている輝夜と、進行中の「マリット・レイジ」を視界に収める。

どうしたもんかと満天の星空を眺めてみるも、『星、綺麗だ』とかどうでも良い考えし

か浮かんでこない。

……いやもう、結構ギリギリだったっぼいね。

ダメージ系なら無効出来る現状だが、思考操作とかはノーサンキュー。ものの見事に効果覷面でした。

彼が助けてくれなかったら、俺は一体どうなっていた事やら。鉄格子付きの個室に移住させられてたかもしれん。月にそんな場所があるかどうかは知らないが。

(はあ……何から考えたら良いもんか……)

妙案が出るまでには今しばらく時間が掛かるだろう、と、疲労困憊の体を大地に横たえて、仰向けで大の字になった。

決めの細かい月の砂を触りながら、まずはもう一度、今までの出来事を順番に思い出してみようかと、目を閉じようとする。

が。

「……ん？ どうした、ジエイス」

念話で呼び掛けて来る方に顔を向けると、彼は一つ、ある事の予想を話し出した。

怪訝な声色。

不安と疑心が混ざり合っているそれは、彼の心情をよく表していたのかもしれない。

「え……月の都……？」

「マリット・レイジ」が進む先。まだかなり距離はあるものの、いずれはそこへ辿り着くだろう、との考えを聞いた。だから、考える前に、まずは彼女を止めるべきだと。そう、ジェイスに進言されたのだが……

（ああ……そういうや暴走しているつてのは俺くらいしか知らないのか……つてか、なんでそつちに向かつてるんだ……）

輝夜の記憶を読んだからとて、それが全ての事態を把握するには至らないのだ。

その結論に行き着いた九十九は、改めて、今までに経験した出来事を話す。

依姫と戦った事。

「マリット・レイジ」が暴走した事。

輝夜が現れ、精神を弄られた事。

話し終えた時、彼は合点があったとばかりに、うんうんと頷く。

『だから活力が奪われていたのか』とジェイスが締め括った言葉で、そういえば、と、十九は彼女の——カードとしての、「マリット・レイジ」を思い出した。

そうして、点として浮上して来た疑問や案が、線で繋がった時。

彼の脳内には、一枚のカードが思い描かれ、一つの構図が出来上がった。

『マリット・レイジの怒り』

5 マナで、青の【エンチャント】

これが場に出た時、全ての赤のクリーチャーを【タップ】する。

赤のクリーチャーは、そのコントローラーの【アンタップ】ステップの際に【アンタップ】しない。

『タップ&アンタップ』

MTGの基本ルールの一つに、【タップ】【アンタップ】と呼ばれる行為がある。

これらはカードを横（タップ）にしたり、横になっているカードを縦に戻したり（アンタップ）する行為を指す。

これによって、クリーチャーの攻撃の有無が一目で判断出来たり、土地がマナを出したかどうか分かるのである。

例えば、クリーチャーが攻撃を宣言した時、攻撃を宣言したクリーチャーは、【タップ】される。

これは、【アンタップ】状態——カードが縦になっている状態で行えない。

そのクリーチャーは、一ターンに一度だけ来る【アンタップ】ステップと呼ばれるフェ

イズが来なければ、基本は元に戻る事が無い。

つまりは、「タップ」を要求される能力を持つカード——行動の基本となるマナを生み出す「土地」や、攻撃の主力である場合の多いクリーチャーの攻撃が行えなくなるのだ。

そして、クリーチャーはこの「アンタップ」状態でなければ、相手のクリーチャーをブロックする事が出来ない。

それら「マリット・レイジの怒り」のようなカードを、何と呼称したらいいものか。MTGでもそうそうあるカードではないので、仮として、派生カードとも名づけておこうか。気分で呼称が変わるかもしれないが（あ

本来ならば、俺がカードを使わなければ起こらない効果である筈……なのだが、当然といえば当然で、当人が怒るだけで済む効果ならば、それを本人が使えない筈が無い。

この「マリット・レイジの怒り」と呼ばれるカード効果は、要約するのなら、赤のクリーチャーの行動抑止。

赤とはつまり、激情や憤怒といった、感情の爆発を司っている面がある。

そして、「タップ」クリーチャーを「アンタップ」する行為。

ギャザでは、「タップ」した各カードは、自分のターンに訪れる「アンタップ」出来る間が存在する。通称、「アンタップ」ステップと呼ばれるフェイズだ。

それは一ターンに一度しか訪れず——あたかも、疲れを知った者達が、休息の時間を必要としたかのように。

だとするのなら、これは恐らく、「タップ」が体力——……エネルギー？——を使う行為。「アンタップ」が体力を取り戻す行為なのではないか、と憶測を立ててみた。

この仮説なら、さっきの出来事——体力が極端に奪われ、感情が一定以上のテンションにならない理由も、説明が付く。

ただ、体力と感情の熱を幾ら奪われたとはいえ、溶岩地帯まで冷却されていた理由には——

（あ、そういうえばあいつのカードの絵柄って……）

【マリット・レイジの怒り】に描かれた光景には、逃げ惑うクリーチャー達が、一瞬にして凍り付いていたかのような姿が写っていた。

カード効果つてのは、文面や名称以外にも影響される部分とかあるのだろうか、とでも憶測を立てておこう。

……また、ギャザの不透明なルール解明の糸口が見つかった気がする。でも、これは

これで、また戦略の幅が広がったといっても過言ではないんだ。喜ばしい事だろう。しかし、「タップ」と「アンタップ」のこの効果。

もしかしたら……

(これって、計らずも俺の体力制限も解除の兆しが……?)

仮にこの説が正しいとしたのなら、「アンタップ」効果を自分に使用すれば、俺の体力は回復する事になる。

うまい事これを利用して、「アンタップ」効果を永続——あるいは一回でもその効果が現れてくれたのなら、こちらの戦略は、さらなる広がりを見せることになる。

(夢の二桁台マナの召喚も……)

いける。きっといけるぞ。

今まで『出しても維持出来んしなあ』と諦めてたクリーチャー達が、戦力として期待出来る筈だ。

グヘヘ的な悪い笑みでも浮かべていしまっていたのか、ジェイスが窘めるような視線を向けて来た。

慌てて表情を取り繕ったところで、『今後はどうする』との相談を持ちかけられる。

そうそう。今はギャザ能力の可能性より、起こってしまった出来事への対処だ。

それには。

「ジエイスキ、あの子、正気に戻せる？」

こちらが指差す先に、轟々と音を立てて動く、灰色の茨山が一つ。

彼はしばらくそれをじっと見つめ、『やってみよう』と、成功率が不確定であろう返答をする。

彼の十八番である精神掌握がどちらかといえばショートレンジな射程なのだから、こればっかりは仕方が無い。

……と、本人の言葉を要約した結果を反芻する。

（映画とかアニメとかだと、記憶操作系の能力って、頭とかに直接触れて何ぼ、つて印象だしなあ。……別階層に居た永琳さんとか綿月姉妹に仕掛けられるっただけでも、俺T U E E E 宣言しても問題ないレベル……だもんな）

というか、遠距離精神掌握とかチートじゃなくてバグ技の類では……。

記憶の中にあるそれらの知識の大概は、相手の耐性が高くてミスしたり、気合とか根性とか仲間の声的なものですぐに復活したりするものだが、八意永琳にも効果のあった、そして、今現在も効き目が続いているであろう彼の能力は、もはや……

（うん、バグだな。彼は。流石ジエイスキ）

実に良い笑顔で、今俺のMVP候補N O 1であるマリさん直伝、親指グツ！ を披露しながら、満足な心境を伝える。

一瞬、彼の口元が若干の「へ」の字になったものの、『君は楽しそうだね』的な意思を返してくれた。

どうやら、今のこちらの思考は読んでいなかったようだ。

そんな彼が、マリさんへの効果の程が分からないのだから、神ならざる俺には、分かるはずもなく。

ただ、ジェイスの射程圏にマリさんを捉えるまでに、結構な距離を移動しなければならぬのは、この先の苦勞を思うと、ガクンと、心と体が重くなつた。

ゆうに数キロは移動しているであろう「マリット・レイジ」が恨めしい。
と――。

「ん？ どした？」

ジェイスが、先程とは対照的に、不適に口元を釣り上げる。

……おお、そういや元々は地球へ帰還する為に、彼を召喚したんだつた。

きつとこれ位の移動距離なら余裕でどうにかなるって意味なんだろう。

「え、違う？」

こちらの考えを補足……訂正するように、『そうじゃないんだ』との念話を受け取り、俺は、はて、と首を傾げる。

分からん。ならばどうして、そんな表情をしているのか。

その疑問に答える様に、彼は腕を持ち上げて、あるところを指差した。

「……………あゝ」

なるほどなるほど。そういう事か。納得がいった。

「じゃあ、お願いしますね。ジエイス——いや、かぐや姫様」

俺の言葉に反応し、すい、と優雅な一礼をする、月の姫。

ははは、対人無双万歳だ。

問題山積みには違いないが、それでも、人質兼、戦闘要員な状況にある蓬莱山輝夜という手札が、今の俺にはある。

客観的に見たら悪役そのものだが、それでこつちの命が助かるなら安いものだ。喜んでその役を買って出よう。

(もうこの切り札は手放せない……………。仮に手放すんなら、せめてもう少し事態の好転が見込める段階になったら……………だな)

具体的には、マナストックが回復する二十四時間後。

強キャラ一人確保した事で、戦力的にも選択肢的にも段違いに跳ね上がっている。先程まで死と隣り合わせであったのが、嘘のようだ。

これでは多少なりとも気分が高揚するもの——だと思ったのだが。

(テンション上がんねえ……………。マリさんの能力のせいで、変な心境だなあ)

イマイチしつくり来ない展開だが、諦めよう。

輝夜がゆつくりと目を閉じた。恐らく、能力を使うのだろう。

さて、これからどうなるか。

あまりに多過ぎる解決事項に膝をつきそうになるが、『なるようになるさ』なんて半ば投げやりな考えで、これからの事に対処していこうと思った。

木霊する地響きの中。

代わり映えない風景にも飽く事無く見続けて、はや数刻。

あれから……大体一日位は経っただろうか。

体力の消耗を補おうと爆睡してしまっただが、それでも目的地には到着していないようだ。

のんびりと移動する「マリット・レイジ」の背中に座り、昨日の反省点を挙げてみる。

といつても、一番やばかったのは輝夜の能力に掛かってしまった、あの時位のものだ
と思うが。

ホント、ジェイスが助けてくれて良かったですよ。

蓬萊山輝夜の——永遠と須臾を操る能力。

つまりどういう能力なのよ？ と思っ、大分前に調べてみた時の記憶から、引っ張り出してきた情報だと、結構難解な長文解説を、あつきゆん（稗田阿求）が『時間を操る能力だ』とまとめていた気がする。

咲夜さんと能力被ってんじゃない。とも思うのだが、そこは色々差異があるのだろう。俺には分からんけれど。

で、その能力を使ってジェイスの時間を加速させ、「マリット・レイジ」のところまで一気に詰め寄ったんだそう。徒歩で。

時間が止まっている中での移動だから、それは瞬間移動やらワープやらと言っても、過言ではない。

元々マリさん、物理系のダメージに対しては完全無敵っぽいキャラだと思うのだが、搦め手——精神系とかに対しては、時間も無限大に活用出来た効果も相まって、ジェイス曰く、そこまで苦労はしなかったらしい。

ジェイスもそうだが、ぐーや様、マジバグってます。

元々怒りで我を忘れていただけだったので、少し落ち着かせる様に精神の波を抑えてやれば、後は自然と落ち着いていったそう。

(そーいや、ゲームでのマリさんも絡め手に弱かったなあ……)

というか、正攻法で「マリット・レイジ」に対抗出来るクリーチャーがほぼ居ないだけなのだが。

破壊不可で、飛行能力を有する彼女ではあったが、除去耐性には疑問が付きまといたのを思い出す。

ギャザに限った話ではないが、MTGのクリーチャー対策とは、それを破壊するだけではない。

ゲームから除外してしまったり、手札に戻されてしまったり、相手プレイヤーに奪取されてしまったり、行動不能の木偶人形にされたり。

むしろギャザでは、ガチンコな大会だと、単純な破壊系は少ないくらいだ。

(良かった……依姫がそんな系の能力使ってこなくて、本当に良かった……)

そーいや神様って搦め手使ってくる相手って何か居たか？

クトウルフさんは除外するとして、俺の知っている神話の主神クラスは、どれもこれもがパワーⅡジャステイスⅡそいつの全力、みたいな奴しか居ないんじゃないだろうかと思う。

記憶している中で最も厄介だと思ったのは、睨むだけで即死する邪眼を持った魔神様だが、それとかが出てこなくて助かった、と、胸を撫で下ろす。呼べるのかどうかは知

らないが。

——そんな、結構綱渡りだった戦闘結果を省みる、月面でのひと時。

マリさんの能力である【マリット・レイジの怒り】も解除……というか怒らなくなったので、それなりに体力は戻って来ている。

俺達は、ゆっくりと進行中の【マリット・レイジ】の背中に、瞑想するジェイス、人形のように佇む輝夜、未だ昏睡状態の依姫と一緒に、ゆっくりと月面都市へと向かっていった。

マリさんは維持費を考慮しなくて良いので大変ありがたいのだが、ジェイスと勇丸を合わせて計4マナの維持というのは、決して楽なものじゃあなかった。

ただ常に横になれるし、ジェイスもいるし、始めの頃と比べれば持つていかれる体力も大分軽減されているのだと実感出来る。このままぶっ倒れる、という事態には陥らなさそう。

そして依姫は未だに目覚めていないが、輝夜が無表情で後ろに待機している状況なので、ちよつと居心地が悪かったり。早く現地に着いてほしいツス。

しかし、月の都市は結構離れていたようで、まさか一日近く移動に掛かるとは思っていなかった。

ま。その間、俺は殆ど寝ていただけだったんだが、気づけば一日近く経っていたとい

うのは中々に体力を消耗していたようだ。昏睡というよりは、昏倒に近かったんだろうな。きつと。

こんな状態じゃあ、移動手段が徒歩だけとかになつていたのなら、目的地に着くまでに、一週間以上掛かつていたんじゃないだろうか。

「いやホント。マリさんが正気に戻ってくれて良かったよ」

足を伸ばして座る俺は、体を支える手を用いて、そのまま彼女の頭を撫でる。

ゴツゴツのお肌なもんだから、これじゃあ触っている事すら分からないかな、とも思ったんだけど、音にも声にもならない『♪』とした感情が伝わって来た。どうやら、ちゃんと分かるらしい。

いやあ、癒されますなあ。

あの時はどうなるかと思つたが、正気に戻つて本当良かった。

正気に戻つた時に『ごめんなさい』と言われたんだが、小さい子が親に叱られて謝るシーンが脳裏を掠めたもんだから……。

いやもうね、『よーしパパ（略）的な気持ち湧き上がつてきまして。

だからといって何かするという訳ではないのだが、もう色々とたまらん出来事でした。ええ。

で。

「第一回、月の都市との交渉……謝罪……恐喝……？ ……仲良くしよう会議ー！」
 即興で良い題名が思いつかなかったので、強引に押し通す。

マリさんは結構ノリノリな感情なのが伝わって来るが、内容は分かっていないっぽい。

ジェイスはジェイスで『そんなノリはもう出来ない』と、大人目線で拒絶された。

くそう、大人ぶりやがって。こういうのは楽しんだもの勝ちなんだぞー。ぶーぶー。

【マリット・レイジ】という存在の上で、ジェイスと俺が互いに面と向かい合い、話し合う。

その横には、意識を失っていようとも精神を奪われようとも、何一つ色褪せる事の無い美貌と容姿、品性を持つ、月の姫君が二人。

一人は無言で正座をし、無表情。

もう一人の状況は変わらず、あれから一度も目覚めてはいない為、体を横たえている。
 (依姫は寝てるから良いけど、ぐーやが無表情つてのが怖いんだよなあ……)

不満と冷や汗タラタラな俺に苦笑しながら、ジェイスはこちらの続きを促して来た。

むう。完全に、子供の遊びに付き合っただけだ。

うーん、流石にいきなりこのテンションでは厳しかったか。以後気をつけねば。

「おほん……。で、今回の目的は、月の都市との今までの諍いを清算する事にあります」

そう切り出して、俺は今回の目標を、彼らの前で掲げた。

一つ。月と和平交渉を結んで、今回の事を許してもらおう。

(意識) 今後俺にちよつかい出すんじゃないぞ。

一つ。今回の被害についての補填は、こちらに害の無い限り、積極的に協力。

(意識) 気分が乗ったら弁償してやる。

この二点位だろうか。ううん、上から目線万歳。

そしてここが最大の——というか、交渉以前の、まず第一に行おうと思っていた事なのだが、ジェイスが俺を守る為にしてくれた、永琳さん、綿月豊姫の意識回復。

これをしなければ、俺の交渉は始まらない……というか、何より、俺がそんな状態ではいたくない。

僅かの間とはいえ、同じ屋根の下で同じ飯を食べ、笑顔を向け合った仲である。一刻も早く起こしに行かねばならない。

「そういえば……戦死者って、出てる?」

マリさんに念話で尋ねてみると、『分からない』との返答が。

それもそうか。幾ら彼女が強力な存在で、手加減してくれていたとはいへ、あの千に届く勢いの軍勢相手に、一つ一つ安否を確認などしていられたのだろうか。

「ん……あ」

「そうだよ、今こっちの手札には彼女があつたんだつた。」

「かぐや姫。そちらでは何か情報掴んでますか？」

「いいえ、私が知り得た情報の中では、それらしい項目はありませんでした」

「何ともはや……。機械と話している心境だが、下手に自我が戻つて殺されるよりは断然マシだ。諦めます。」

「死者は居なさそう……。まあ仮に居たとしても……。おほん。後は永琳さん達を起こせば、交渉の前提条件はクリア出来そうかな」

月側は、それが原因でこちらを殺害しようとして来たのだ。

それを取り除かずして、和解という目的には辿り着けず、対話という席には着けない。

「……………」

横から声がある。

それに反応し、ジェイスが『そろそろだ』と進言して来た。

何がそろそろなのかを普通なら疑問に思うだろうが、聞こえてきた声からして、既に予想はついている。

「(ト)(ト)……………」

綿月依姫、ご起床です。

「おはよう」

「…………… あ、ああ……………おはよう……………」

どんな相手でも挨拶は忘れない。

……………状況に余裕が出来てたまたま覚えていただけなのだが、それは俺だけが知っていれば良い事だ。

まだ状況が掴めてないんだろう。反応がポケポケしてて、可愛い気がする。

「君、（こ）は……………何処……………痛つ——」

ああ、急に起き上がろうとするから。

「まだ安静にしておいた方が良い。心体共に、結構ボロボロになってたからな。後少しで月の都に着く。それまでは寝とけ」

「そうか……………すまない……………」

そして、俺の言葉に従うように、再び体を……………

「……………？」

横たえる前に、俺の顔をじつと見る。

「……………」

ニコリと返す仲でもないのです、じつと見つめ返す。

ふふふ、美人にマジマジと見つめられると……………あれ、何とも思わないな。

何だ、ガチンコし合った仲だから、神奈子さんの時みたいに気持ちの何処かでストツ

パーやらブレーキやらが掛かっているんだろうか。

——そのまま、数秒。

視線をゆつくりと俺の前——ジェイスへと移す。

時に気にした様子も無く、彼は無言で佇んでいる。

相変わらず、フードに隠れて目元が確認出来ない状態で、見詰め合う二人。
と。

「——疾ッ!!」

依姫の体が馳せて、佇むジェイスに向かってその手を突き出した。

辛うじて分かるのは、その手が握り拳などではなく、五指を真っ直ぐに伸ばした、手刀と呼ばれる形であった事。

局部破壊に優れているその攻撃方法は、こちらの戦力——ジェイスを無力化し、状況を打破しようという道筋がありありと読み取れた。

だが、

「ぐっ!」

彼女の体は、彼女自身が思うよりも遙かに限界に達していたようだ。

勇んで立ち上がり、肉薄する姿勢を象つたは良いものの、そこから空気の抜けた風船人形のように、その四肢を弛緩させて、再度「マリット・レイジ」の頭上へと崩れ落ち

た。

「あくあく……だから言つたじゃないか」

苦悶の表情を浮かべた依姫の体を押さえつけて、強引に仰向けに寝かせる。

抵抗と言えなくもない抵抗があつたものの、それらは微力なものだ。過去に【お粗末】を掛けた神奈子さんよりも劣る。

よほど節々が痛むのだと思われた。

「き……」

「うん？」

「貴様……達は……」

「多分、お前の思っている通りだと思うぞ」

少し含みを持たせて答え、何の感情も表していない顔で、

「初めまして、綿月依姫。——地上からやってきた、九十九だ」

あんな光景を見た後では、とてもじゃないが握手なんてする気にはならないけれど、一応は自己紹介を試してみた。

鳩が豆鉄砲。な顔で固まる依姫だったが、少しの間を置き、その表情を憎々しげなものへと変貌させる。

体が動かないから良いようなものの、そうでなかったのなら、その先の展開は容易に

想像出来るものだろう。

「……既知か。大方、永琳様から聞いたのだろう。——こちらの名を知っているのなら、紹介の必要はあるまい？」

理性と感情のせめぎ合いの中から作り出される言葉に内心で怯みまくるものの、俺はそれを御くびにも出す事は無い。

何せ、こいつはこちらの命を狙って来た敵対者。

今でこそこうして何気なく言葉を投げ掛けていられるけれど、眠りに着く前までは、——例えその心臓を引きずり出そうとも排除する気概があつた程だ。こちらの弱みを見せる必要が無い。

などと我ながら物騒な事を思っていると、依姫は痛みを押し殺しながら言葉を続けて来た。

「何が望みだ、外なる者。何を偽っているか知らんが、今更お前を地上人などと思えるものか。……こうして私を生かしているんだ。私に何を期待している」

……過去にも正体について色々言われてきたが、それらはとうとう太陽系を離脱してしまつたっぽい。

俺からしてみればお前の方が宇宙人だつーの。

ううむ。今のお話にはどっちの質問から答えたら良いものか。

前者はあれだ。面倒だからパス。

解決したからといって何が変わるとは思えないし、今は他に優先して対処していなければならぬ話もある事だし。

(……まあ、いいけどさ。俺自身の事で疑問に思われる事なんていっぱいあったし)

内心で、諦めと共に眩きが漏れた。

土着神の諏訪子さんなり、軍神の神奈子さんなり、鬼の一角なり。

はたから見たら、俺の正体は意味不明な者に写っている。

こつちとしては『種族・魔法使い』的なもんだと思うのだが、クリーチャー召喚や各種呪文を唱えたりするのはまだ分かるとして、「土地」を一瞬で創造したりするレベルのものが、俺の場合は何のデメリットもなく実行出来るのだ。それも、ほぼノータイム。

MTGという存在を知らない者からすれば、俺の能力はどの事前知識にも該当しない——全く別の理に生きる者として写る事だろう。

——さて。

では、仲良くなる気があるんだか無いんだか分からない対話を始めようか。

仲良くなれるに越した事は無いが、話す相手は少し前まで命のやり取りをしていた間柄。多少なりとも、感情はささくれ立つというものだ。

落ち着きを持って冷静に進めなければならぬ、とは分かっているけれど、それを貫

徹出来るかどうかは、それこそ気分一つなものである。

「お前を助けたのは、今でこそ月との交渉に役立つてもらおうと思っちょいるが、初めは何か目的があつた訳じゃない。……何となくだよ。気づいたら、体が動いてた」

横でジェイスが苦笑しているのが分かる。わざわざ自分から不利になりそうな発言をしなくても。と、思っているのだろう。

うん、その、それはそれで良く分かるんだが、生憎と俺は頭の出来がよろしくない。

色々と有利な言葉を並べ立てるのも吝かではないんだが、偽りはいつか、俺自身へと返つて来る。

どうでもいい相手ならそれこそどうでもいいんだが、今回は相手が相手だ。出来ればきつぱりと関係を清算しておきたい。こつちの気持ち的にも。

……ただ、我ながら何とも言い難い受け答えをしたものだ。

『助けたいと思つたから助けた』など、あれだけの事をやらかした後で、ただただ虚しく響くだけの綺麗ごとには聞こえるだろう。

胡散臭く答えてしまったと後悔し、それを聞かせた依姫は、

「――」

眼を皿のように見開いて、大層驚いたと言う風な顔をした。

(信じられるわきゃねえか……自分でも嘘くせえって思うし)

拳銃乱射しながら『私ハ博愛主義デース』とかのたまつてる気分だ。

言つてる事とやつてる事がもの見事に乖離しているんだから、逆にこれを信じる奴には何か欠落してると考える方が自然だろう

「信じるか信じないかは」

「分かつた、信じよう」

……つてヲイ。

欠落者一名発見だ。

今までの俺の思考を全否定しやがりましたよこのお姫様は。

「……自分から言つておいて何だが、何を根拠にこんな胡散臭い話を。……それともあれか。こつちを油断させる為の口当たりの良い虚言か？」

あまりにあれな展開に、今度はこつちが疑心暗鬼に掛かつてしまう。

尽きぬ疑問にジェイスへと確認の意思を送ると、僅かに頷き、今の言葉が本意であった事の裏が取れる。

……だから、ますます分からなくなる。

一体今の話の何処に、こちらの話を信じられるだけの何かがあるというのか。

「根拠、か」

小さな眩き。しばらくの間。

「光に飲まれる直前、歌が聞こえたよ」

何かに思いを巡らせながら、一つ一つ答えを積み重ねるように、依姫は言葉を続けた。
「今まで聞いた事も無い。暖かで、優しく、こちらの全てを包み込んでくれたものだった……。あれはお前の仕業だろう？」

「……ああ。（あく【恭しきマンドラ】か）」

その場に居るクリーチャー全てに、こちらが指定した色の【プロテクション】を付与する魔法カード。

実際に使ったのはあれが初めてであったが、あの時は気持ちに興奮状態であったので余裕が無かつたけれど、今こうして思い返してみると、影響力的に、実に壮大なカードを使ったのだと実感出来る。

効果云々はさて置き、あの何処からとも無く聞こえてくる歌声は、万人の魂を振るわせるのには十分な影響力があった。……誰が歌っていたのかは知らないが。

「あの時、私は光と共に消え去っている筈だったが——分かる。あの歌声で、今私はこうして、痛みを感じられる。生を実感出来ているのだ。貴様のお陰などと言うつもりは毛頭無いが……」

軽く咳払いをし、一旦言葉を止めた後、

「何より、私は敗者。あれだけの事をお前にしたというのに、満足に体を動かさせないとは

いえ、こうして何の拘束もなく、何の恥辱も受けていない。あんなものを体験しては、少な。少しは耳を傾け、信じてみようという気にもなるというものさ」

「……そんなもんかねえ」

要らん事まで言葉にしていた気もするが、いちいち腹を立てるのも何だ。スルーしておこう。

歌の影響なのか。「プロテクション」効果の影響なのか。それとも、それらの流れを作り出した俺達の影響なのか。

どれがどう彼女の琴線に触れたのかは今ひとつ分からないが、本心でこちらの話を信じてくれた……と、判断して良いんだろう……か……？

少しは交渉の余地はある、と思つて良いのだろうか。

一応はこちらを理解しようとする姿勢は見受けられるのだから、皆無つて訳じゃないだろう。

「それで、そんな気紛れ一つで私の命を弄び、あまつさえ交渉材料の一つとして扱おうとしてくれている下種な貴様は、これから何をする気なんだ？」

——前言撤回。やっぱり無理そうです。

そうだった。こいつ今、超怒ってるんだった。

……というか、こいつ自分の置かれてる状況を理解してるんだろうか。自分の行動一

つ、言葉一つで、自分の命がどうともなる状況下だというのに。

——と。ジェイスから、今の俺の疑問への答えが伝わって来た。

……なるほど、そういう考えならば、今のような態度も頷ける。

「……無駄だ、綿月依姫。幾らこちらを挑発したって、俺達はお前を殺さない。……というか、それだけで挑発だと思ってるのはお前位のもんだ。あれ位、ちよつとイラつとずる程度のもんだぞ」

「何?」

驚きで大声を上げたかと思えば、口元に片方の握り拳を当てて、こちらを無視して考え事を始めた。

——彼女は、自分が交渉材料になると分かった瞬間、即座に自害を考えたんだそう
だ。

けれどそれを行うには体力が足りず、状況も許してくれそうに無く、こちらを刺激する事でそれを達成しようとしたらしいんだが……流石にあの程度じゃあなあ。罵詈雑言のスキルがほぼ皆無だと思われる。

というか、自害の方法など他に幾らでも考え付くものだと思うのだが。舌を噛み切るとか、そんなのが。即死系でも狙ってたんだろうか。

(育ちが良すぎるんかねえ。月つてのは穢れの無い場所だつて聞いてたけど、それも影

響あるんだろうか……。あ、そんな環境を考えれば挑発スキルが上達する筈も無い
か)

アメリカ海兵育成マニュアルばりの下品な言葉遣いを教えてやりたくなるが、今は自
重。

こいつ、あれだ。俺でも分かるくらいに性格真っ直ぐです。

誰かの為に怒り、自分の気持ちに正直で、信じられる事——認めるところは認める。
そして、自分の命よりも大事なものがあるときだ。

ともすれば意固地なだけの印象しかないが、美人は得なものだ。多少の我が侷など
は、むしろチャームポイントにすら見えてくるかもしれない。

——まずいな。

演技ではない、というジェイスのお墨付きを貰ったせいで、依姫の行動全てが、全て
彼女自身の本質を表現しているのだと分かってしまう。

向こう見ずなところも、感情的なところも、殺そうと思っていた相手にすら素の自分
を見せる愚直なところも。

どう育てばこんなアンバランスな性格になるのか不思議でならないが、多分こいつ
は、敵がいる、という仮定をあまり考慮せずに、自身を鍛えてきたのだろう。

力の方向性の細部に、俺でも分かる位の無駄が感じられた。

彼女が折角培ってきた経験は、 “ 相手を有利にしてはならない ” という感覚や感情が欠落している印象を受ける。

敵を——相手を蹴落としてでも。という思考を失った相手が居るとするなら、それがこの綿月依姫という人物なのだろう。

でなければ幾ら神々の依り代になる能力が強力であるとはいえ、毒やら睡魔やら麻痺やら。こちらのステータス異常を引き起こす技などを使つて来てもおかしくなかつた筈なのだ。

今まで喋つていた内容を統合するに、私怨がチラチラ見え隠れするものの、こちらを攻撃してきたのは、あくまで八意永琳と綿月豊姫含む月の民を守ろうとしての事。

使つていた能力故に洒落にならん事態になつてしまったものの、根底にあるのは殺意ではなく、守らなければ、という気持ちのみ。というかお前本当に俺を捕縛する気あつたのか。下手したら消し炭か塵芥になつてたぞ。と突つ込みたい。

視点さえ違えば、一般で言う正義そのものではないか。

——しかも、こいつはそれを免罪符にしていない。

あくまで自分の判断で行動し、自分の意思で引き起こした結果だとしている。

『○○の為に』

良い言葉だ。自分の意思でなく、誰かの——何かの為に動ける事は、捻くれた考え

方なら幾らでも出来るが、俺はとても尊い考えだと思う。

ただ、それは「自分で」示した途端、最低の行為へと変貌を遂げる。

『○○の為に』と。そう宣言する事で、全ての責任はそちらへと向かう。

金を盗んだのも、物を奪ったのも、誰かを殺めたのも、ともすれば『○○の為に』という呪文さえ唱えれば、まるで行動を起こした本人には非が無いかの様な台詞ではないか。

大概の場合はその台詞を口にした瞬間、そこには「だから許してくれ」という言葉と「俺に責任は無い」という意思が付随する。

——それを、こいつは口にしない。

(ああ……こいつもか……)

……また、俺の中で恨み辛みを滾らせる燃料が切れてしまった。

状況は圧倒的にこちらが有利。

俺の頭に一発見舞ってくれた月の兵含む主要な戦力は潰し、完全に上から目線でも誰も俺を咎められる者は無し。

命を狙われる心配もなく、何かを奪われる心配もない。

唯一の懸念はフェムトファイバーくらいだが、もしそれを頼りにしていたのなら、軍隊が壊滅する前から使っていた事だろう。そこまで脅威に感じる事は無い……筈。

後はこちらの要求を通すのみという、絶対優位。

これでは油断するなという方が、どだい無理な話ではないか。事の始まり思い出す。

ジェイスも依姫の殺気さえ無かったのなら、事に及ぶなどしなかつただろうが……

(発端はともあれ、初めに手を出したのはこっちだしなあ)

PWの昏倒魔法的な意味で。

永琳さん達を昏倒させたのはジェイスで、そのジェイスを呼び出したのは、他の誰も無い、俺だ。

……言い方は悪いが、道具に罪は無い。

悪いのは、それを扱う者。

そして俺は、その使い方を誤った——かどうかは別として、少なくとも、今回の事態の発端を作った要因は……少しはある。

その後の月側の猛攻で大分薄まってはいるけれど、未だに心の隅で燻っている、ほんの少しの罪悪感。

この気持ちを抱えたままというのは、酷く気分が悪くなる。

それに、例え銃弾を受けた直後であったとしても、怪獣大戦争が起こる直前までは、俺は謝罪の意味があつたのだ。

それもジェイスの安全が確保出来ないから、との理由で「まずは謝罪」の自分ルールを退けて、嬉々として「マリット・レイジ」の力を行使した。

それを間違いであったとする気はさらさら無いが、だからといって、俺が全部正しいと押し通す気概も無い。

前後逆になつてしまつたが、初めにやろうとしていた事を、今やる羽目になつただけだと。そう、自身に言い聞かせた。

その場その時の判断と感情に任せてここまで来た。

後は、それらの行動に対してどう責任を取るか、だ。

これはその取っ掛かり。一つ一つの出来事を解決していき、一つ一つの結果に責任を果たそう。応えられるかは、別として。

——よし。まずは、永琳さん達を起こす事から始めようではないか。

「あの、だな」

喋る言葉に覇気が無い。

口調が弱気になつてしまつたが、あの考えの後で強気に出れる要素など、今の俺には無いのだから。

色々と横道に逸れてしまつたけれど、もうそろそろ、本線に合流しても良いだろう。

「単刀直入に言うぞ。——八意永琳と綿月豊姫を起こしたい。協力するか？ 綿月依

姫

今までの空気が四散する。

こちらを睨みつけていた憎しみの感情よりもさらに強力な、意思の力の籠った視線が俺を貫いた。

それは「マリット・レイジ」と相対した時か、それ以上の張り詰めた空気になっている。

(しまった……俺のメンタル削られる……)

態度にこそ出さないものの、ともすれば、すぐにへたり込みそうになる体に活を入れる。

あの時は依姫の気の方向性がマリさんへと向けられていたから良かったようなものの、今はほぼゼロ距離で、視線は完全に俺へと向けられている。

自分の中にある危機センサーのメーターが、振り切れそうになっていた。

ぼんやりと、かつて初めて諏訪子さんと相対した時の記憶が蘇るのは、走馬灯の一種だろうか。俺の魂カムバック。

この手の威圧感には大分慣れたと思ったのだが……いやはや何とも。上には上が居るもんだ。

それに反応し、またも行動を起こそうとしてたジェイスを今度こそ牽制し、今回は最

悪の事態を回避した。

参った。こういった対処法は、常に生死と隣り合わせで過ごして来たジェイスの中で当たり前なんだろうが……、

(という訳で、次回からもう少しマイルドな対応をお願いします)

マイルドな対応ってどんなんだろうか。言った自分でも疑問に思うが、渋々ながらも了解の意を返してくれたジェイスを見るに、こちらの意図は伝わったようだ。

こちらを助けようとした彼に感謝をしながら、現在進行形でSAM値が減少している現状を進展させるべく、削っている当人へと返答を促がした。

「黙ってちゃ分からね。言葉ではつきり言ってくれ」

「——望むところだ。それならば、どんな協力も惜しむつもりは無い」

瞳の奥にメラメラと燃える意思的な何かが見えた気がする。

そして、今の台詞は正直ありがたい。

解決を目論んでいた問題の内の一つは、この綿月依姫との関係の終着点を探る事。殺し合う仲になるにしろ和解するにしろ、区切りは必要だろう。

そしてその結果は、今の台詞を聞くに少なくとも殺し合う仲では無くなった……と判断して良い筈だ。

「じゃあ、早速なんだが」

視線を、目の前の依姫から——その後ろ、ジェイスの影で隠れていた、蓬莱山輝夜へと向けた。

「……この人説得するの手伝って」

「——えっ？ ……なっ!? 何故輝夜様がここに!？」

ジェイスの後ろ。陰に隠れるような形で佇む月の姫がそこには居た。

やっぱり見えてなかったか。

そうでなければ、初めにもっと慌てていた事だろう。——そして、話がややこしくなっていた事だろう。

解決しなければいけない問題は山のように。

けれどもこうして、小さいながらも一歩進めた事が、これから先の長い道のりも何とかやっつけていけそうな気分させる。

コツコツ積み重ねた結果がどうなるのか。

吉と出るか凶と出るか。未だに先行き不安の視界ゼロ状態で。

それらが分かるのは、もう少しだけ、先になりそうだ。

33 移動中《後編》

「ねえ」

「……はい」

「他にもまだあるんでしょ？」

「ええ……まあ……」

「見せなさい」

「いや……あの……これ以上はちよつと……」

「何、あなた、私を奪っただけじゃ飽き足らず、ポイ捨てまでした拳句は用済みで一切関知しませんって事？」

「奪ったって……。その……ですね……。こつちにも色々命綱的な保障が欲しい訳です……」

ぶちっ

「——つてやる」

「……えっ?」

「永琳に言い付けてやる! 『あなたが呼んだ地上人が私の初めてを奪った』つて!」

ぷちっ

「てめえ! それ言い掛かりじゃねえか!」

「何よ! 嘘だとも言うつもり!?!」

「無罪とは言わねえが、一部に悪意ある曲解があるだろ! それだけで罰金二十万か禁

固二十年かぐらいの差だ!」

「うっさい馬鹿! あんな事されたの初めてなんだから! 後、何が二十万なのよ!

意味分かんない!」

「ばっ——初めてくらい誰にでもあるわ! 別にいいじゃねえか減るもんじゃなし!

それと、二十万はジャパニーズ通貨だこの野郎!」

「通貨? 何処よジャパ何とかって! 私女だもん! 野郎じゃないわ! 何も無かつ

たからまだ良かったものの、あんたがちよっとでも変態だったら色々失くしてたのよ!?

その事実が消えた訳じゃないでしょ!」

「何も無かつたなら良いじゃねえか! そもそも命奪われなかつただけマシだろ! 少

しは俺の立場考えてからモノ言え!」

「ごめんで済んだら世の中もつと平穩よ！ それに『何も無かったから』で済むんだつたら、あんたピンピンしてるじゃない！ こっちは軍隊丸々一つ失つてるのよ？ あんたの理屈に合わせるなら、月との交渉、とかじゃなくてそっちの土下座から入るのが筋つてもんでしょ！」

「知るか！ それはそれ！ これはこれだ！ 大体、命かかってたんだぞこっちは！」
「こっちだつてかかってたわよ！」

——ぶちっ

「——いい加減に……」

抜刀。

「しないかつ!!」

どっかーん（物理）

——

——

——

「……双方、熱は下がったようだな」

「……………」

静かに怒りの形相を浮かべている依姫は、元の造形も相まって何ともさまになっており、マリさんやジェイスは分からないが、場にいる俺や輝夜は完全に彼女の空気に飲まれてしまっている。……お前、体の痛みはどうしたのよ。

少し前までならばそんな事は皆無だったのが、戦闘による熱が冷め、彼女に対してそれなりに情が移った為に、女性経験ゼロスキルが鎌首をもたげて来てしまっていた。

会話の流れは支離滅裂。大声を出す事が第一で、話の内容なんて二の次だった。今思い返しても、子供の喧嘩の方がまだ中身があつたのではないかと思えてしまう程だ。

荒ぶる神「マリット・レイジ」の上で正座させられ説教を受ける地上人と月の姫。それを見守る「ブレインズウォーカー」。……どんな状況だこれ。

下手すれば俺の五体がバラバラになっていた攻撃が脳天を直撃したマリさんだったが、当然というかやっぱりというか、こちらをチラと見ただけで特に気にした様子もなく、今もこうして悠々と月の都市へと移動し続けている。

（つてかジェイス、何よその微笑ましいものを見る目は。……何？ ……『若いね』つてあんた……）

彼が行動に移さない、というのは脅威が全く無いと判断して良いんだろう。

……良いんだろう……が……

（俺に『若い』ってのは間違いないが、この二人はどっちも、お前より年上だぞ）
それはもう圧倒的に。具体的には最低数百倍。

一応その辺の事実を伝えてみるも、『心の問題さ』との返答が。

PWとしての基準……なんだろうか。まあ、君がそう思ってるんならそれで良いんですけどね……。

「輝夜様。初めに申し上げました通り、九十九はこれから永琳様と姉上を起こしに行くのです。その【雲のスプライト】だけで我慢して下さい。何もこれで終わり、という訳ではないのです。事が終われば幾らでもお頼みなさいませ」

輝夜の精神掌握を解いてもらい、素に戻った彼女を依姫が説得。

混乱する彼女に、何はともあれまずは昏睡している八意永琳と綿月豊姫を目覚めさせるのが先決。と言いつ聞かせ、この度の出来事のあらましを説明した、依姫。

それを全て説明し終えた後に、俺は、俺の視点から見た今回のあらましを彼女達へと語って聞かせた。

そもそもは依姫の殺気に反応したのが発端だが、先に手を出したのは俺の方であり、けれど謝罪の機会は一発の銃弾によって打ち消され、後は輝夜の知る一連の流れになった、と。要約すればこんなところだろうか。

輝夜が持っていた連絡端末によって、既に月側には連絡を入れてある。

謝罪する気なんて初めから無かったのでは、というのが疑わしかったらしいのだが、戦闘直前、俺が『土下座の用意あり』と絶叫していたのがモロに記録されたようで。一応、その辺りは改善の余地あり風に納得してくれたようだ。

口は災いの元とも言うが、今回は幸いにも好転の機会を得るに至ったという訳だ。恥ずかしい。

それから、大体二時間位だろうか。

のんびりと月への道中を進んでいると、手持ち無沙汰になったと思われる輝夜が、こちらへ接触を試みて来た。

『そっさいえば……私、あんたの事殆ど知らないわ』で始まり。

機嫌——敵意よりは薄い印象の——を隠そうともしないままに自己紹介を済ませ、ジェイスや俺の事について聞かれ、『何が出来る』↓『色々出来る』との俺的テンプレ解答の後、『何かして見せてよ』と、少し拗ねた様な口調でお願いされた。

若干の罪悪感もあったので、色々悩んだ末、カード枚数もマナも使用しない「ジェイス・ベレレン」としての能力で、最も楽なクリーチャーを呼び出してもらったのだが、それが大層お気に召したようで。

能力的には特筆する点の無い、青のーマナクリーチャー、タイプ【フェアリー】。

青い肌に透き通る薄羽と、濃い金色の髪。

体長二十センチにも満たないMTG世界の妖精、「雲のスプライト」が光の四散と共に現れ、その光の残滓を纏いながら宙を舞う光景は、彼女の存在が既知であった俺でも見惚れた程だ。

まるで幼少期に何度も夢見た童話の世界へと来れたかのような出会いに、俺や輝夜のみならず、依姫ですらも、「雲のスプライト」が周りの事など知った事かと言うように楽しんで踊る姿に、目を奪われていた。

東方世界なら妖精なんて見慣れている筈じゃあ、と思つたんだが、ここ月では妖精達はおらず、地上から移住して来た古参でも無い限りは、妖精はおろか、動物ですら数種類程度しか実際に目にした事は無いんだそうだ。

気分は子供の初めての動物園デビューを見守るお父さん。

それならば、こういったクリーチャー……生き物は、完全に未知の領域の存在である事だろう。目を見張るのも仕方ない。

だが、それも一時間ともたなかつた。……輝夜が。

後は月へと向かうだけだ、と、これからの出来事に考えを巡らせていた俺へ『もつと見せろ』と言つてきたのだ。

『ねえ』と呼ばれた時に嫌な予感がし、案の定の展開に、初めこそ俺の口調も穏やかだったものの――。

まあ、そんなこんなで、今に至る。

(……)まで自己主張の強い奴だったとは……)

断言しよう。

今のまんまじゃ、コイツに敬語どころか丁寧語すら使う気は無い。

……見た目はそれこそ月の至宝と言える容姿。

真っ白な肌は真珠を連想させ、月光を反射する黒髪は黒い金剛石。幾千もの人形を作り上げてても可能であるのか疑わしい程に、なるほど、美とはこういうものかという芸術が集約されていた。これで体にメリハリがあれば永琳さんに勝るとも劣らない存在へと昇華していた筈だ。

(そういう時代によつて美の基準つて変化してたんだよなあ。中世ヨーロッパなんかじゃ胸の大きな人は、それだけで醜悪つて認識だったらしいし)

だからコルセットなんかで思いつきり締め上げていたとか何とか……？ あれ、コルセットつて腹にするもんだつたか。記憶が曖昧だ。

もしかしたら、コイツが地上へと降りた時にはスレンダーこそ美人という共通認識があつたのかもしれない。

ま、それを抜きにしても素晴らしいと思えるのは、本当女性として最大限の武器なのではないかと思えてならない。

何の事前知識もなく会っていたのなら、竹取物語に出て来た者達よろしく、俺も我を忘れて求婚を申し込んだ幾人の男達の仲間入りをしていたに違いない。

だが、それら想像をバツサリと切り捨てるコイツの性格は、ある意味でとても希少なもののなんじやないかと思えてならない。

勿体無い。

俺は今、心からそう思っている。

「……で、そっち側としては、俺にどうして欲しいと思ってるんだ？」

思考が変な流れになったので、本来の目的である路線へと話を戻す。

今からの行いで、月を敵に回すか否かが分かれるのだ。決して手を抜いていいものは無い。

「私としては、お二人を起こした後ならば、一撃くれてやる程度で構わないと思っ
ているが、月の国としては……どうだろうな」

……ちよつと突つ込みを入れたい箇所もあつたが、ここは俺が自重しよう。

一端言葉を切り、依姫は真剣にこちらへと目を向けた。

「原因の一端は私にある。最大限の便宜は図らせてもらうが、民達の感情の方向性までは保障出来ない。……すまない」

こちらも意固地になっている部分があるとはいえ、それでもまだ相手の方に非があ

る、と俺は思っている。

けれど、それはあくまで月の上層部に対してであり、依姫個人に対してはさつきボコボコにした事も相まって、皆無とは言わないが、殆ど無くなっている。

そんな彼女に一方的に謝罪をさせて、澄ました顔をし続けるのは男としては、まあ、思うところがあり。

軽くではあるが頭を下げる依姫に、思わずたじろぎながら、言葉を返す。

「え、つと……その……だな……」

一息。

深く息を吸い込んで、声が小さくならないよう、尻すぼみしないように意識しながら、言葉を発した。

「——こつちこそ、先に手を出して悪かった。不用意に能力使って、周りに及ぼす影響なんてこれっぽっちも考えてなかった。……すまん」

依姫から完全に視線を切って、頭を下げる。

屈む直前。チラと視界に入ってきた輝夜は、目を細めてこちらを見つめていた。

彼女は彼女で思うところがあるんだろうが、今のが、俺の現状の偽りの無い気持ちだ。納得しようがしまいが、そこはまた別の問題である。

……尤も、軍隊を壊滅させた事に関しては、謝罪するつもりは全く無い。あれは銃弾

さえ無ければ、手を出すどころか完全に投降する気満々だったのだから。そのまま数秒。

屈めた姿勢はそのままに、互いが同時に顔を上げ、再び視線が交わった。

少し屈んだ姿勢のまままで交差する目線に……僅かながら、可笑しさが込み上がって来た。

「——ふ」

「——は」

互いに鼻で笑い、口元を吊り上げる。

「不思議な気分だ。数刻前までは、私は我を忘れ、全力でお前を拿捕しようとしていたのが、この様か」

「あれが拿捕のレベルかい……まあいいか。不思議な気分について、同感。ちよつと前までは命が掛かってたつてのに、今じゃあそれが嘘みたいだ。……まあ、まだ油断出来ない状況つてのは変わりないんだが」

「安心しろ。もし仮に、お前に危害が及びそうになったら、全力で防いでみせよう。まあ、上の決定でそういう行為に及ぶ場合ならば諦めてくれ。——ただし私がお前を守るのは、永琳様達を目覚めさせてくれるのなら、だがな」

「そういう事なら、それこそ安心してくれ。そこだけは絶対に違えない。例えお前らが

またこつちの命を狙ってこようが、立ち塞がる奴全員ぶつ倒してでも起こしてやるさ」
「ああ、それは安心だ。……しかし、物騒な物言いだな。もう少し穏やかに出来ないものか？」

「何言つてやがる。命掛かってたんだからな、それくらい当たり前だ。怨んだら最後、俺の中で燃料が切れない限りは相応以上の行動に移る性質だから。怨み辛みつてのはそんなもんだろ？ ……こうして話して、お前達の事情が分かってなかったら——ぶつちやけ、月の都市、壊滅させてたかもしれないねえし」

……あ、今のは言わなくてよかったのに。

余裕の出来た心境であったが故に、迂闊にも変なプライドが出てきてしまった。

常に何処かで優位に立とうとし、それを実行に移してしまう思慮の浅さが、少なからず自己嫌悪を引き起こす。

けれどそれに反応したのは目の前の依姫ではなく、横で聞き手に回っていた輝夜である。

「確かに、永琳も豊姫も居ない。私も依姫の力も殆ど通用しない。軍隊も壊滅。となれば容易だったんでしようけど……。あゝあ、ちよつと納得いかないわ」

「……すまん、考えが足りなかった」

「いいわよ別に。理屈はどうあれ結果はこちらの完敗。こうしてある程度の方が保障

されているだけでも驚愕ものだしね。……そりゃあ、さつきも言ったとおり納得出来るものじゃないけど、今はこうして、この経験を次へと生かせる機会が与えられただけで良しとするわ」

「……そう思うなら、さつきはもう少し自重しても良かったんじゃないか？」

「それはそれ。これはこれよ」

さいですか。

「けれど……凄いわね、この「マリット・レイジ」は。こちらの攻撃を全く受け付けず、その攻撃力は目を見張るものがある。おまけによく分かんない能力まで持つてるし……外殻ゴツゴツね……冷たくて気持ち良い……。これ、何処の神様？」

輝夜が正座しているマリさんの頭部を撫でながら、そう問いかけてきた。

MTGの神様……っぽいポジションにいるお方です。……なんて言えたら楽なんだから。

確かにその辺は疑問が尽きないだろうが、ううん、何処まで答えて良いもんか。あんまり詳しく話すと不利な要素が増えて嫌だなあ。

——と。

唐突に、「マリット・レイジ」がその歩みを止めた。

地響きと共に不時着する茨山に何事かと動揺していると、

「あら……効いちやった……」

この場に居た誰よりも、蓬萊山輝夜が困惑の声を上げた。俺からしてみれば、その声の内容は実に不吉な台詞である。

「ちよ!?! お前何した!」

「えつと……何しても効かない神様ならと思つて……ほら、あんたと初めて会つた時に私、能力使つたじゃない? あんな感じの応用で思考を停滞させてみたんだけど……」
まさか効くとは思わなかつた。

感心と歓喜の声を上げながら、モロに効果観面であつた事実満足するように頷く輝夜に、俺や依姫——のみならず、ジエイスマでもが薄く口を開いて啞然とした表情を浮かべていた。

彼は彼でしつかりと思考リーディングはしていたらしいのだが、完璧に不意打ちな、唐突過ぎる思いつき&行動であつた為に、何も対処出来なかつたのだとか。

「……とりあえず、能力解いて。じゃないとまたお前の精神奪取する羽目になる」

「これくらい冗談と受け取りなさい。余裕の無い男は嫌われるわよ?」

「マリさんは俺の生命線その二だぞ! そんなの余裕とは言わねえ。慢心つてんだ! 死ぬよりはマシ!」

その一は、当然ジエイス様。

困惑しながらも表情の隅に愉悦の色が見て取れる輝夜に、『やっべー弱点ばれた』と内心で汗を掻く。

少し前にも思ったとおり、マリさんが有利なのは馬鹿馬鹿しいまでの力押しの場合であつて、搦め手にはとことん弱い。

それが原因で、MTGにおいてのコンボデッキ〔ヘックスメイジ・デプス〕の戦績は安定しないのだ。

〔ハルクフラッシュ〕の時に懸念していた、パワーキャラへの対処法が確立したものの、今度はトリックスターのなキャラへの対応策を考えておかねば、との案件が浮上してしまった。スキマ妖怪とか、亡霊姫とか、一人百鬼夜行辺りも危ないだろうか。

今のところは即座に「プロテクション」か「被覆」を持たせることで凌ごうと思うが、さて……

「とりあえず、これで月の都市が壊滅しそうになる展開を防ぐ手段が見つかったわね」
能力が解除されたようで、不時着していた事に『?』と疑問の念は思ったようだが、特に気にする風でもなく「マリット・レイジ」は再びホバリングを開始して、ぼんやりと移動し始めた。

さつきといい今といい、良くも悪くも色々と気にしなさ過ぎですマリさん。大らかにも程がある。

ニマリと笑う月の姫に頭を抱えそうになるが、コイツの前でそれをやってはいけない
 と思ひ、俺の月対策がそれだけではない事を匂わせるように——はたから聞いたら負
 け惜しみや負け犬の遠吠えレベルで——ぼそりと呟く。

「……別に、都市をどうこう出来るのはマリさんだけじゃないし」

「またまた。そんな事言っちゃって〜」

こちらの頬をプニプニと突きながら、輝夜は余裕の笑顔を浮かべる。

……おいこら。俺らはいつからそこまで親しくなったんだ。ちよつとドキつとした
 ぞコンチクショウ。

「うっせ！ こちとら月をどうこうする手段なんて幾つもあるんじやあー！」

「ひゃわっー！」

癩に障るので、お返しに彼女の頬を両の手で引つ張つてやる。

むにむにと柔らかな感触が伝わり、いつまでもこうしていたい感覚に囚われそうに
 なった。

……ほう……これは中々……。

「ふふふ、男を離さぬ魔性の体（頬）よのう」

「にやに言つへふのひよ！ はにやしにやしやい！」

抗議を無視して上下左右と自由時際に頬を操る俺は、手に伝わる心地良い感覚を更に

味わおうと、その行為に没頭しそうになる。
が、

「——そこまでだ」

俺の首筋。

触れるか触れないかの位置で、いつの間にやら抜刀していた獲物を宛がつている依姫と、それを静止せんと、彼女の頭部に片手を突き出しているジエイヌ&依姫の足元を切断せんほどに鋭さを増した、幾本かの「マリット・レイジ」の触手があつた。

立ち上がるのも困難であつた筈の依姫が抜刀している事実には鬼気迫るものを感じて、大人しく行動を取り止める。

「……あれ、お前、体痛むんじゃないかねえの？」

「もうそれなりには回復している。無理な運動はきついかな」

素直にお答え頂きありがとうございます——というかもうある程度まで回復してんのか。

(何という回復力……依姫、恐ろしい子！)

敵とも味方とも取れない相手だけれど、もう少し自分に有利になるような発言をするべきなんじゃないだろうか、と思えてならない。

依姫は言葉に頓着しない奴。

そんな印象が、俺の中では膨らんでいた。

輝夜から手を離し、依姫が刀を降し、ジェイスが手を下げ、マリさんが触手を引つ込める。

不満気な視線を向け自身の頬を擦る輝夜に何とも言えぬ心境になりながら、ちよつと羽目を外し過ぎたかと自身を諫めた。

（未だに一触即発状態は継続中、か。……エアリーディングの精度低過ぎだな、俺）
とうか依姫のメンタルが未だに読み切れないのが一番ウエイトを占めている。

蓬萊山輝夜や姉の豊姫、そして八意永琳にかなりの信頼と忠誠心があり、生真面目で、竹を割ったような性格。だが、それ以上に優先されるのが輝夜や永琳さんといった仕えている者の命を守る事……といった感じなのだろうか。

あれか。職務や忠義、自己の意思、と見ておくのが妥当な線だろうか。

「あれ、そーいやその刀っていつの間に回収したんだ？」
ならば今のところは輝夜に害を及ぼさなければ問題は無いだろう。

空気を変える意味も含めて、ふと疑問に思った事を口にした。

亜空間的な場所から予備の武器を取り出したんだろうか。それとも呼べば来る的なもんなんだろうか。もしくはは能力の応用とか。

今し方まで俺の首に添えられていた獲物についての謎について、聞いてみた。

「ああ、『マリット・レイジ』殿のエネルギードレインが切れたから呼び寄せたんだ。思ったよりも時間が掛かってしまったがな」

「呼び寄せた……ねえ……。落し物なんかを拾ってくれる神様の力でも借りたのか？」

「居るには居るが、そんな真似をせずとも問題はない。それはこの者のお陰だ」

そう言つて、腰に据えてあつた刀——日本刀を鞘ごと引き抜き、こちらへと放る。

(この者つて……何、刀の事……?)

面食らいながら何とかキャッチしたものの、仮にも武器の一つをこちらに投げて寄越す行動の意図が読めずに困惑する。

「気をつけろよ九十九。——噛み付かれないようにな」

「……はい？」

なにやら嫌な言葉を耳にした。

不安と共に今し方ゲットした長刀へと視線を向ければ……

(げえ!! 人食いサーベル!)

某虚無の使い魔の武器宜しく、いつの間にか勝手に鞘から刀身が露出していた。

そこから本来見える筈の刃の部分と一緒に「マリット・レイジ」の戦鬪で俺の思考を混乱の極みへと到達させてくれた鋭利な牙を持つ口が、再び開いてケタケタとその存在をアピールしていた。

「ちよいやつー！」

流れるような動作で投球フォームへと移行。そのまま刀を投げ返した。

「こりや洒落にならんばい！」

「ぬ、人のものを全力で投擲するのは感心せんぞ」

「そんな危険なもん寄越すからだ！」

相手が怪我人どころか重傷な人かもしれないのを完全に無視して、ピッチャー返し。

「こちらのフルスイング投球（刀）を余裕でキャッチする依姫に睨みを利かせ、『説明しろ』とのニュアンスを持たせて抗議の目を向ければ、先程と同じように、完全に鞘に収まった状態の武器を目の高さまで上げて、説明を始めた。

「私の神々の依り代となる能力が判明した時に、父上と母上から頂いたものでな。別に
どういう事の無い単なる剣だったんだが——」

そうして、こちらの質問に答える形での応答は、しかし、段々と依姫から伝わる印象が、説明から思い出を懐かしむ様なものへと変化していった。

得々と語られる、彼女が持つ剣の経歴。

それを聞く内に、俺は何故自分が彼女に勝利出来たのかが不思議でならなくなつた。

『十拳劍（とつかのつるぎ）』

十束劍、十握劍などとも呼ばれている、握り拳十個程の長さであるという意味の劍。

固有の名詞などではなく、長劍、長刀といったカテゴリーの名称として呼ばれている日本固有のそれは、草薙や叢雲といった有名な劍から、名も知れない数々の日本刀の代名詞とも言えるだろう。

これもその十拳劍なのだが、彼女が持つそれにはある能力が付与されていた。

それは『十拳劍である能力』。

何を当たり前の事を——と、侮る無かれ。

その劍とは拳十個程の日本産の劍全てを指し……詰まる所、そう呼ばれていた時代

の刀であれば——もとい、『刀であれば何にでも成れる能力』を所持しているのだ。先に言った、叢雲、草薙の剣は勿論の事。

ヤマタノオロチを倒した『布都斯魂剣（ふつしみたまのつるぎ）』、農業の神であるアヂスキタカヒコネが持っていたとされる『大量剣（おおはかり）』など、多種多様。

西洋風に言うのなら、デュランダルでも、エクスカリバーでも、グラムでも、といった具合に。

それが日の出ずる国で作られた剣ならば、その姿を、能力を、何もかもを、自身に宿らせ行使する。

そのあまりの汎用性の高さには、目を見張るものがあるだろう。どこぞの赤い弓兵に持たせて上げたくなる代物だ。

——そして、依姫はその十拳剣をととても大切にしている。十年、二十年の話ではない。

それこそ、百を優に超えて、千で飽き足らず、万年単位で使い続けているそれは、物であるにも拘らず、もはや彼女の体の一部だと言っても過言ではない域へと達していた。

故に、それには神が宿る。

奇しくも近年、名を授かった名無しの某俺と同じ名前である、九十九という神。

人工物、自然物問わず、幾年も月日が流れ、それでも残り続けた物に宿る、神や靈魂の総称。

大切にし、感謝の心を持って接していけば、座敷わらしやお稲荷様などの幸せをもたらす存在となり。

ぞんざいとし、無碍に扱っていけば、災いを振り撒く祟り神や九尾の狐のような不幸の権化になると言われている。

これら神々は程度の差はあれど、周りに影響を与え、良かれ悪かれその存在を誇示して来た。

この十拳劍は、紛い物などではなく、多種多様な意味での「つくも」と、物に憑く意味での「つくも」の二つの意味を併せ持つ、まごう事なき「つくも」神であると言える。

何ともまあ厄介な武器であつたものだ、と考えをまとめた。

「九十九神つてのは、宿ると牙が生えるもんなのか？」

一通りの話を聞き終えて、『そーいやあの時……』と、そこから再び疑問に思つた箇所を訪ねてみる。

「いや、それは刀本来の能力だ。小さな雪国の刀で『マツネ・モシヨミ』といつてな。山に巢食っていた魔神へ刀を投げたなら、たちまちの内にそれを食い殺し、そのまま山へと封印されてしまった妖刀だった筈だ。本来なら自立行動の後、例え金剛石であってもそれを食い破り、対象へと喰らい付くものだったんだが……」

いやあの円盤は硬いな、と。

照れ臭そうに自分の失敗を語る彼女の心境とは裏腹に、下手すれば鮫やら鰐やらピラニアやらの群れの中へと放り込まれた生肉状態になっていた可能性があつて……俺は青褪めた。

「てめえ！ 拿捕とか言っておきながら、絶対俺の事、殺す気だつただろ！」

ふざけん的な声を荒げて抗議をぶつけてみる。

けれどぶつけられた張本人の表情は、何を馬鹿な、と言わんばかりの疑問が浮かんでいた。

「あの程度では足止めくらいしか見込めない、との判断からだ。現にお前は足止めどころかあれを歯牙にもかけずに、私を打倒したではないか。……せめて後一日か二日、時間があれば良かった……のかもしれない……」

「……時間があれば俺に勝てます。つてか」

「どうだろうな。あの時私は憤怒の炎に思考が焼かれて冷静な判断が出来ず、力押しの手

段ばかり取ってしまったからな。次があるなら真っ先にお前自身を狙う事にするよ」

それはまずい、勘弁して頂きたい。

「それに……」

少し躊躇った後、一言。

「時間があれば、この者が目覚めてくれただろうしな。——少なくとも、あの時よりは

こちらを倒すのは手間だぞ」

腰へと戻した刀へ目線を落としながら、残念だとの言葉と共に、依姫は苦笑した。

「目覚め……え？ 何？」

「あまりに久々に宝物庫から出したせいで、まだ九十九神が起きてないんだ。早くて一日二日。遅ければ、後一月は目覚めないだろうな。過去に起こした時は……覚醒までに、十日は掛かったのであったか」

「じゃあどうやってそれ呼び寄せたんだ。九十九神、起きてたなかったんだろ？」

「それはさつきも言ったように、『マツネ・モシヨミ』の力だな。自立行動位ならば、九十九神に頼らずとも刀の力でどうにか出来る」

そのまま、俺と依姫はその刀を中心とした話を膨らませた。

本来、依姫の戦闘スタイルは、自身に降ろした神と、その神が持つ剣のセットで完成するものなんだそうだ。

剣を使わない神であれば、十拳に宿る九十九神が自分の判断で行動し、遊撃手となり手数を増やすらしい。何というフラガラツハもどき。

もしも健在だったならば、変幻自在の二つの存在に翻弄されながら、相手は何も出来ずに屠られる事になる。

ただそれではあまりにワンサイドゲームであつた為、微温湯に浸つていては拙いと自分を鍛える意味で、依姫はその片方の手段——十拳剣を封印していたんだそうだ。数千年間も。

そりゃあ九十九神も冬眠？　するわ。というかよく冬眠レベルで済んでいると言いたい。並の存在なら『そうして○○は考えるのを止めた——』とか台詞が流れそうな年月だつてのに、その辺りは流石神様、というところだろう。

「思い出した。永琳と一戦した時に、実験区画丸ごと粉微塵にしてたわよね。その剣も使つて」

今までの話を横から聞いていた輝夜が、ぽんと手を叩く。

過去の出来事を思い出したようだ。

「そうですね。……懐かしい。もう数万年前になりますか。出来ればまた、もう一戦行つてみたいものです」

「ダメよ。永琳ったら身内には結構甘いんだから。あの時にあなたが勝つていれば再戦

もあつたんでしようけど」

「……完敗でした」

「でしょ？ だから、もう永琳は闘わない。あなたの命を奪いかねない行為には、余程の何かでも無い限りは及ばないでしょう」

……待った。

今何か、本来当てはまる箇所——人名——の単語がおかしかった気がするぞ。

誰が——誰に負けた……って？

「……ちよつと待て。今の話だと、依姫は永琳さんに負けたつてののか？」

聞き捨てならない台詞に面食らいながらも、何とか質問を試してみれば、何言ってるんだコイツ的な顔をされた後で、

「そうだけど？」

「その通りだ。あの方に勝つには、私と姉上、そして輝夜様の内二人が連携しなければ困難だな。下手な共闘は、返ってデメリットになる」

なんて事を、さも当たり前のように答えてくれた。

「……あれか？ 学力テストとかそんな方面で？」

「まあ、ピンと来ないのも分かるけど、ちゃんと戦闘面での話よ」

ピンと。どこの話じゃなくて、単純に信じられないんだつうの。

その後、永琳さんの戦闘方法を聞こうとしたのが、刀の能力をさらつと言ってくれた依姫ですらも口を噤み、『それは秘密だ』と笑顔で拒否された。

だが甘い。

こつちにや君達の思惑なんぞ筒抜けよ！ と内心でほくそ笑みながらジェイスへと事の次第を尋ねてみた。

しかし——

(え……『分らない』って……)

彼女達の思考に永琳さんの戦闘が思い浮かばれていないだけなんだろうかと思つたが、何やらそういう事では無いらしく、話を聞いている内に、どうも彼の力——「ブレインズウォーカー」としての力は勿論、魔法含む、一切の能力が使えなくなってしまっているようなのだ。

あまりに唐突なトラブルにこちらの思考が真っ白になり掛けるものの、表面上は何とか平静を取り繕う。

「……どうした九十九。顔色が悪いぞ」

取り繕えてなかったようだ。

眉の上げ下げやら目元口元の力加減などといった表情の差異なら力技でどうにかカバーしていたのだが、顔色だけは無理だったようだ。

心配している、と他意の一切無い視線を向けてくる依姫に、便乗する形で、

「……あら、そういうえば、『雲のスプライト』は何処へ行ったのかしら」

少し前まで「マリット・レイジ」含む俺達の頭上をふよふよと飛んでいた存在を思い出した輝夜が、疑問の声を上げる。

ジェイスが出した存在は、ジェイスがその力の源であるのは当然。

よって、こうして彼の力が使えなくなってしまった結果が、こうして目に見える形で彼女達に示されてしまった。

まだ感づかれてはいないようだが、何とかバレないようにしなければならぬ。こちらの生命線やら命綱やらが消えかねない。

「雲のスプライト」は還した。顔色は……まあ、あんな事があつたからな。多少なりは疲れるさ」

壊れ掛けた橋を急遽舗装しながら横断するかの如く、その場凌ぎの返答をする。

一応、嘘は言っていない。まあ、嘘を言っていないからといって、何がある訳でもないのだが。

……彼女達や月側が何か仕掛けてきた様子は無い。

これはつまり、問題がるのは、こちら側。

(やばいな……原因が分からんぞ……。これ以上事態が悪化しない内に色々進めておか

ないと)

最悪、永琳さん達を起こすまではこちらの優位性を失いたくない。月側との交渉は二の次だ。

チラとジェイスを見てみれば、念話で感じた焦りの感情など微塵も感じさせずに、先程と同じ様に無言の存在へと徹している。

この辺は見習わないと、と思いながら、状況を進める為に「マリット・レイジ」——ではなく、俺の横で消えた「雲のスプライト」の軌跡を探していた輝夜へと言葉を投げ掛けた。

「なあ」

「何よ?」

「お前の力を使って、すぐにでも月の方へと行けないか?」

「……どうして急にそんな事を言うの?」

その疑問はご尤もなんだが、今は正直、その質問はこっちにとっては最悪の部類です。何とかそれらしい返答を考えるものの、何処まで通用するかどうか……。

「疲れて来たんだよ。精神的にもそうだが、体力的にな。面倒な事はとつとと終わらせて、枕を高くして寝たい」

「それって私達からしたら絶好の反撃のチャンスじゃない。何でわざわざそんな事を」

そりやそうだ。

だが、そこで頷いてしまつては状況の好転は見込めない。

輝夜だつて、俺が本当に疲労の極みに達しそうになつておもうと思つてないが故の、今の言葉である筈だ。今の段階ならばせいぜい、疲れたからとつとと終わらそうぜ、程度のニュアンスにししか聞こえていない事だろう。

そんな迷惑の中、無い頭振り絞つて即興で思いついた言い訳……というか虚言が、

「……あんまり時間が経つとな、永琳さん達を目覚めさせられなくなるからさ」

「なっ！ 何故それを早く言わん!？」

依姫の尤もな怒号に内心でビビリながら、あながち間違いでもないグレーゾーンの受け答えで対応する。

「まだ大丈夫かと思つたんだが……予想以上に疲労が溜まつてたみたいなんだ。一応、休めば回復するんだが、仮に今寝たとして、次に起きるのが数時間後、なんて保障が出来ねえ。数日間昏倒する、なんて場合も考えられるんだ。今ならまだ余裕があるからな。……出来ない状況になるまで黙っているつもりも無い」

真偽の配合を加減しながら、尤もらしい理由を話す。

先程と違和感の無い程度の誤差を含ませた疲労声で、最後の一押しを口にした。

「——頼む。お前の力なら、あつという間に移動が出来るだろ?」

「……仕方ない、か。良いわね、依姫」

「元より」

「都市へ連絡を入れておきなさい。『すぐに行く』ってね」

「はっ！」

テキパキと動き始める二人を他所に、こちらの提案を受け入れて貰った事に安堵したと同時に、徐々に思考の熱が冷め切っていくのが分かる。

——永琳さん達を起こすのは、ジェイスの力が必要だ。

あまりに根本的な理由であつた為か、選択肢としてすらも微塵も思い出される事が無かつた。

その彼が力を使えないというのは、それが不可能だという事実にはイコールで結ばれる。

（やばいな、判断間違えたか）

地上から発見し後は回避するだけとなつた地雷原へ、進路も変えずにわざわざ加速までして向かつてしまったようだ。

その場を凌ごうとした事が原因で、一気に現状がスライドし、結末へと辿り着こうとしている。

準備なり精神統一なりの理由を言って、後で一人になる時間を貰おうと画策してみる

か。

しかし、ジェイスの行動に制限が掛かった事で自ら自爆しそうになっている現状を何とか回避しようとしたこの行動は、最悪への第一歩などではなく。

むしろ、俺にとっては最善に近い行動であったのかもしれない。と。後々思う事になるのだが――

能力、という代物は本当に便利である。と実感出来た。

痒いところに手が届く的な安っぽい意味合いだが、事実そう思ってしまうのだから仕方が無い。

「輝夜く、生きてるか〜?」

「……あんた、後で覚えてなさい」

顔すら起こせない程に疲労した蓬萊山は、それでも怨嗟の声を上げる気力は残っていたようだ。

比喩抜きで、一瞬。

月側の体制が整った、との報告を受けた輝夜が能力を行使し、「マリット・レイジ」含

む俺達を一瞬で月の都市付近へと連れて来た。

ただやはり輝夜の能力にも限界があるようで、全長一キロを超える躯体をここまで運ぶのは、かなりの力を使ったようだ。

精神だか体力だか何のエネルギーを使ったのかは分からないが、着いたと同時に、捨てられたヌイグルミ（うつ伏せのたれパンダ）のように「マリット・レイジ」の上で伸びている彼女を見るのは、場違いながらも少し可笑しい気分になった。

（あー、体制が整った、って、やっぱそういう事か）

念の為にと、もう一度「死への抵抗」を使う。

遠目であるが、しつかりと分かる。

目前数百メートル先には煌びやかな月の都市が視界いっぱい広がって、その手前には、恐らく最後の力を掻き集めたかのような月の軍隊が集まっていた。

恐怖を顔に貼り付けた兵隊達の中には、顔や体のどこかしらを包帯だと思われるもので巻いている者が疎らに見受けられた。きつと、「マリット・レイジ」の会戦時に居て撤退して来た戦力をこちらに当てて来たのだろう。

人手不足というか戦力不足を何とか補おうとした結果なのかもしれないが、敗残兵とも言える者達を送り出さなければならぬ事態になっているとう事実が、チクリと、こちらの心を突き刺した。

数台の四脚戦車と、同じく数台の円盤。

都市を守るよう、扇状に展開している二百を僅かに超える程度の兵達の最前線に、その者は居た。

純白の軍服をキチリと着こなし、胸には煌びやかな勲章が。

両の手は水平よりもやや下方に伸ばされて、手の平を合わせるように重ねられている。そして、その手の平で一振りの剣——だと思ふ——を支え棒のように持ち、その場に直立に構えていた。仁王立ち武器持ちバージョンといったところか。

白髪は見事に整えられて、その顔立ちには、その者の歴史が皺となって眉間や目元に刻まれている。

(分っかかりやすいねえ……。親玉登場ですか)

地鳴りと共に、彼ら月の軍の少し手前に着陸する茨山。

これほどの距離に近づいたにも関わらず、誰一人として逃げ出す者は居ない。

けれど、皆恐怖で顔を引きつらせて、今にも崩れ落ちそうになる四肢に鞭打っているのが、手に取るように分かってしまう。

唯一の例外は例の白髪の親玉モドキだけだが、あれは瞑目していてその感情までは読み取れなかった。

——こいつらを見たら、額に受けた銃弾の感覚が蘇って来た。

交渉に來たというのに、再び灯る憎悪の炎。

「ダークステイル」化で全く効果が無かったとはいえ、それが無ければこちらの頭部には新たに穴が一つ完成していたか、あるいは見事に消え去っていたのだ。

否応無しに燃焼を開始した怨恨の灯火を、何とか鎮火、ないし低音を維持するように調整するが。

(てめえらが一発入れなけりや……)

それでも理性とは別の力によって、段々と熱が上がっていくのが分かる。

「君が、地上から來た者で相違無いかね」

低いながらも、良く通る声。

相手の親玉は、見た目通りの声色であった。

「……どいつだ」

無意識だった。

親玉からの台詞を完全に無視して、こちらの言葉をぶつける。

「……何のことだね」

「俺を撃つたのは、どこのどいつだって聞いてんだ」

明らかに先程の空気とは違う。

それを感じ取った輝夜や依姫は、けれど、同じく空気の変わったジェイスや「マリッ

ト・レイジ」に牽制されて、動くに動けないでいる。

月の大地から見上げる者と、その遙か頭上から声をぶつける者。

互いの立場を言葉にするなら、それが尤も当てはまる。

「その者は、営業にて拘束中だ」

「連れて来い」

その言葉で、こちらの言わんとする事を理解したのだろう。

刻まれた眉間の皺をより一層深くした後、月の親玉は、こちらの質問に答えた。

「殺すか？」

「さあな」

曖昧な返答だが、こうして絶対優位を貫いている今の立場では、正直、今の感情は誰かの命を奪うまでには至っていない。せいぜいボコボコにぶん殴る程度のものだ。

尤も、それを素直に言う気はサラサラ無い。

「……自己紹介が、まだだったな」

「はあ？」

あまりに唐突な台詞に、思わず素つ頓狂な声を上げてしまった。

お前は何を言ってるんだ。今はそういう話じゃない。

だがこちらの疑問の視線を無視して、その者は言葉を続けた。

「月の治安維持——軍を指揮してる。高御産巢日（たかみむすび）だ。今回の出来事の全権を預かっている」

「……へえ」

おにぎりかお相撲さんっぽい名前だ、と。場違いながら思った。

何かの神様だった気はするが……そんな奴など全く知らない。少なくとも、東方プロジェクトの中には出てきていなかった。つまりは、俺にとっては数日後にでも忘れてしまいたいほどに、どうでもいい存在。

……今の流れでその話を切り出す。

それは意図と辿れば、この度全ての結果は自分の行いによるものだ、と宣言しているに等しい。

「それで、その軍のトップ様が何の様ですか？」

おちよくる様に、ですます口調で問いかけた。

繭一つでもピクリと動かししてくれたのなら愉快的気分になれる筈だったが、けれど、相手はそれを気にする様子は無い。

何の感情も表さないままに、淡々と応答する。

「何、些細な用事だ。すぐに済む」

そう言つて、両の手でしっかりと持っていた剣を鞘から抜き出して——こちらに向

けて構えた。

「なっ、司令！」

信じられないという風に、動けなかった依姫が驚愕の声を上げた。

こちらはジェイスの力は使えないものの、破壊されない20/20の要塞は未だ健在。

スタミナこそ心許ないが、マナもカード枚数も満タンに近い状態で、今の俺には「ダークステイル」化に加え、事が起これば即座に「プロテクション」か「被覆」を発動させる準備がある。

それに、あの依姫が声を荒げているのだ。

それはあいつが何かしらの切り札を持っていては訳ではなく、むしろ、丸く収まりかけていた事態を悪化させ兼ねない、という懸念からの叫びだろう。

なるほど。そういう行動に移る相手ならば、今回のような事態になったのも理解出来る。

【マリット・レイジ】を召喚する前。月の兵から銃弾を受けた時の心境に似て。

またも謝る気があったというのに、それを反故にされようとしている事実。

月の軍のトップとは単なる老害であったか、と。侮蔑を込めて睨みつけてみれば。

「——あ」

その老害は正眼に構えた剣を一瞬で反転させて、自身の首へとその刃を向けた。彼の腕が動く。

その者以外の時間が止まってしまったかの様に、俺を含むその場に居た全員が、限界まで己の眼を見開いていた。

——誰かの悲鳴。

近くから、というのが分かる音源だというのに、何処か遠くで聞こえている感覚に襲われる。

自分の頭と体が完全に乖離して、瞬き一つ、呼吸すらも出来ないその最中——

34 対面

俺が使うカードの種類には、「エンチャント」と呼ばれるカードタイプのものである。全体に効果を及ぼすものや、個別に効果を発揮するもの。加護や聖域、結界や呪縛を作り出す。対象の強化や弱体化、ルールの追加が主な効果のカード達。

過去に使ったのはダメージを無効化する【不可侵】と、【被覆】を持たせる【鏡のローブ】位だったか。もう、随分と使用していなかったのだなと思いつ返す。

——今使ったのは、そういった【エンチャント】の中でも、MTG界では上位に入る知名度を持つもの。

自分の首に剣を当てて、今にも頭を跳ね飛ばさんと力を込めていた状態で、白髪の者は停止していた。

閉じられた目は未だ開かれる事はなく、それと連動でもしているかのように、俺やジェイス、【マリット・レイジ】以外の誰も動く気配が無い。

……と、軍のトップと名乗った老人は剣を無造作に地面へと落とし、脱力を体言するかの如く崩れた表情には、安堵以外の言葉が見当たらないほどに安らぎに満ちていた。

幼子がクレヨンで絵に描いたような、この世に暗きものなど存在しないと示す平穏な表情は、俺の能力が嘗て無いほどにしつかりと効果を発揮してくれたのだと実感出来た。

【エンチャント】呪文だというのに洗脳やら精神掌握を連想させ、そしてそれが強ち間違いではなく、これが2マナならば青きPWが使う力は一体何なのだと、ジェイスの凄さを俺の中でさらに上のランクへと押し上げる。

あいつの自殺——だと思われる行為を止める必要など、それこそ皆無。

だというのに能力を使ってまで静止したのは、これ以上の事態の混乱で面倒を起こさない為か、それとも、良心的な何かはまだ残っていたせいか。

止まった時が動き出す。

一人、また一人と。各々がそれぞれの行動を起こし、気絶した老人へと駆け寄る月の兵隊達。その誰よりも早く、依姫は老人の元へと駆け出していった。

痛む体を引き摺ってその者のところへと向かった依姫と、「動」で示した彼女は対照的に、「静」の態度でその光景を眼光鋭く観察する輝夜。

正反対の動きを示した二人に、ゲームキャラとしての設定ではなく、人間性的一端を

見た気がする。

過去に使った【お粗末】よりも捕縛系のスペルとしては向いているのでは、と思い改めたこの呪文（カード）こそ、MTGで幅広いプレイヤーから親しまれている、白の対クリーチャー呪文の決定版候補、【平和な心】である。

『平和な心』

2 マナで白の【エンチャント】

これを付与されたクリーチャーは、攻撃にもブロックにも参加出来ない。白に多く見られる、破壊によらないクリーチャー対策の内の一つ。あの【マリット・レイジ】ですらも、これの前では無力と化す。

これを貼り付けられたクリーチャーは、その場に居るだけの木偶の坊と化す厄介な呪文の一つだが、能力の使用は封じていないので、【システムクリーチャー】と称される、攻撃やブロックを期待されている訳ではない、その場に居るだけで価値のあるクリー

チャー相手には無力である。が、逆にクリーチャーの維持にデメリットが発生するタイプに対しては、通常の除去カードよりも断然厄介なものである。

対クリーチャー呪文としては悪くない水準で性能が纏まっており、初心者からベテランまで幅広いプレイヤーが一度は目にし、使用したであろうカード。俗称として『平和なベ』という呼び方もある（英語版から日本語版へとカードが印刷される際に、平和な“心”が平仮名の“べ”に見える者が続出した為にこの呼び名が広まった）。

あの状況を止められそうなカードなんて、他に幾らでもあった。それこそ、もっと軽く、もっと確実なものが、ごろごろと。

けれど人間、反射に近い速度で行動しなければならぬ場合には、長年の経験がモノを言う。それが俺の場合はこの「平和な心」だったというだけの事。初めてMTGで遊び始めた時に、幾度となくお世話になり、あるいは相手に使われ苦渋を舐めさせられた代物だ。忘れたくても、誰が忘れられようか。

「インスタント」や「ソーサリー」と違い、「エンチャント」は場に残る——効果を永続的に発揮し続けるタイプのものである。

本来ならそれだけの説明で終わるのだが、生憎と、残り続けるカードには俺の体力が使われており、殆ど使ったことが無かったので意識していなかったんだけど、それはこの「エンチャント」として例外ではないようだ。

クリーチャーやPWに比べれば消費される体力が少ない感覚はあるものの、勇丸とジェイスの4マナを維持し、そこで先の「平和な心」の発動&維持という行為に及んだ事で、まだ交渉のテーブルにすら着席していないのに、まだまだ余裕はあるとはいえ、スタミナの限界点が見えてきてしまっていた。

意識を失った老人を、依姫先導で何処かへと運ぶのを見届けて、輝夜は俺へと話し掛けて来た。

「あんた、何したの」

「能力使って止めた……だけ……なんだが……。というか一体どんな状況だよこれ」
「さあ。私も混乱しているところよ」

その割にはさらつと言いつつ疑念が募るが、輝夜は俺の不満など何処吹く風状態である。こちらを全く意識していなかった。

一応解答を求めジェイスへと顔を向けてみるものの、静かに首を横へと振りながら、

『分からない』との意思を伝えて来た。

理解不能な出来事の最中だというのに、チラと見た月の兵達の表情に、先程は無かった、恐怖以外の色が滲んで来ていた。

怒り。

大切な者を傷付けられたと判断したのか、今し方まで「マリット・レイジ」の恐怖で敗走一步手前であった軍隊は、ともすればこちらへと飛び掛らんばかりのものへと豹変していた。

それだけで、今の者がどれだけ周囲から慕われていたのかが分かる。

だが、

「なあ、今のは俺関係無いぞ。むしろ助けた側だろう」

横で無然としている輝夜へ、暗に『助ける』との願いを込めて、言葉を掛けた。

「だってあんた、月の敵だもの。少なくとも味方じゃ無いわ、今のところは。一応弁明はしておいてあげるけど、私の言葉だからって何処まで聞く耳持ってくれるかどうか……」

声を窄めないで。お前の自信が今の俺の生命線に少なからず繋がってるのよ。

「がんばってくれよ。じゃないとこっちの目的も果たせなくなりそうだ」

しばし悩んだ後、『それもそうね』と、分かったのか分かってないのか微妙な受け答え

をした後で、輝夜はこの場を収めるべく、ふわりと「マリット・レイジ」の頭上から飛び降りて、月の兵の方へと向かっていった。

しかし、一体何だったんだ。

いきなり自殺とか、マリさんを目の前にして死ぬ方が楽だとか思ってたんだろうか。

……あるいは自殺に見せかけた攻撃手段だったんだろうか。こう、キリストの杯を奪い合う戦いに出て来た、鮮血神殿持ちの騎乗兵的な。もしくはアベさん。

「……おい……誰か、俺はどうすれば良いのか教えてくれ……」

というか永琳さん達のとこへ案内して欲しいんですが。

こんな腑抜けた台詞など、とてもじゃないが怒り心頭な月の側には聞かせられない。

それでも口にしてしまったのは、俺の脳味噌の把握能力が匙を投げたからに他ならないだろう。

尻すぼみな言葉は、マリさんとジェイスにしか届かず、そして、それが届いた彼らは何も答えない。答える必要が無いのだから、当然といえば当然だ。俺の寂しさが増すばかりではあるけれど。

ある一面から捉えれば、ただただこちらのカードとマナと体力を消費させられてしまった現状は由々しきものだが……。

何から考え始めれば良いものか。

視界から老人が完全に消え去るのを見届けて、『もう止めても良いか』と、俺は「平和な心」の継続を解除した。

あれだけ周りに人が集まっていたのだ。もう、今のような行動に及ぶ事も、仮にしたとしても、周りの者が頑としてそれを止めるだろう。

これで何か事態の一つでも好転してくれば良いのだが。

光り輝く宝石を散りばめた夜空に、願いを託した。

この光景を次はいっつ見られるようになるのだろうかと思ひながら。

歩く通路は、ワゴン車一台が何とか通過出来るか否か程度の幅がある。

煌々と照らされる真っ白な通路を黙々と進む。一体何が光って明るいのか分からな
いが、ここ月で一々疑問を持つていたら、数年は新鮮さの絶えない生活が続く事だろう。

道行く船頭の舵を預かるのは、綿月依姫。

ボロボロであつた衣服は既に着替えて、何かしらの治療によつて回復したであろう体をずんずんと通路の奥へと進ませていた。

左手にはいつでも抜刀出来るようにと、既に腰から引き抜かれ鞘に収められた十拳剣を握っている。

相変わらず九十九神は目覚めていないようで、その存在は何処からどう見てもただの刀以外の何者でもない印象を受けた。

その後ろを、俺が行く。

こちらはこちらで、依姫と同じくボロボロであつた衣服を月側が用意した新しいもの——Gパンと白いシャツ——へと着替えて、完全に手ぶら。今からコンビににでも出掛ける格好だ。

疲労感の中々に蓄積されて、このままでは後数時間もたないだろうという予感が脳裏をチラつく。

……ただ、体の疲労とは別に、さつきからメンタル面での疲労が由々しき事態になっている。

というのも……

「なあ」

「何よ」

俺の背後。

良く知った桃色の和服モドキよりも、若干の装飾品を取り除いた格好で、蓬萊山輝夜が追隨していて、こちらの声に応えてくれた。

ちよつとだけ振り返って見てみれば、その表情……どころか行動全てに一切の油断が無い。

それは目の前を歩く依姫も同じで、むしろ何か一瞬でも変な行動を起こそうものなら、「ダークステイル」化など知ったことか、的に一太刀で俺の体は縦か横に二等分してくれる、という気概が見て取れた。

「あのさ……もう少し緊張解いて欲しいな……なんて」

「あんた、それ本気で言ってる？」

「……すみませんでした」

先程までの上から視線など放り出して、こうも下手に出ているのは、輝夜に言われた事が、実にその通りであると思ってしまうからだ。

輝夜の前。俺の後ろ。

丁度俺ら二人に挟まれる形で、これから行う事に欠かせない人物が、その長身を悠々と進ませている。

今更語るまでも無い存在となった青きPWジェイスは、だが、少し前まで苦楽を共に

した彼とは何処か変わっていた。

衣類は所々に擦り切れ、フードから覗く眼光はより鋭さを増し、肉食獣の前に投げ出された餌。あるいは、狙撃手のスコープで見られているかのようだ。

まるでそのボロボロの衣装が彼の心を現しているのだと語っているかの如く、輝夜や依姫のみならず、俺の心ですらも、意識をしつかりと持たなければバラバラにされ兼ねない。

名をジェイス。けれどその者のカードとしての表記には、一言追加されていた。
精神を刻む者、と。

『精神を刻む者、ジェイス』

4 マナで、青の「ブレインズウォーカー」

カードゲームとしての面では、数あるPWのカードの中でも、トップクラスの汎用性を誇る。しばらく後に、あまりの採用率の高さと、かなりの確立でゲームを終わらせる

力を発揮してしまう為、特定のルール下の大会での使用は禁止となった。当初このカードが大会で登場した時期には、刻みゲー、ジェイス無双、などの皮肉を込めて呼ばれていた事もある。

ストーリー面での正確な記述は確認できないが、とある大決戦を終えた後のジェイスがこのカードである、とも、他の命を散らすことに全く抵抗の無くなった自身の心に戦々恐々としている時のもの、とも説がある。

当初召喚した「ジェイス・ベレレン」ではない。

あれから彼の能力が使用不可能になっている現状を改善しようと試行錯誤を繰り返した結果、「精神を刻む者、ジェイス」を召喚するに至った。

彼が一步足を進める度に、何かしらのものが軋みを上げて、自壊してしまっているのではないかという錯覚に囚われる。

常に死が背後にあるという感覚の中で『緊張を解いて』とは、自殺願望があるのか、精

神破綻している者に他ならないだろう。

「それ言うなら、むしろこつちがあんたに言いたいわよ。そのジェイスって奴に命令して、その気配を収めさせなさい。疲れるつたらありやしない」

そう言つて目線を俺からジェイスへと向ける輝夜だったが、当の本人は気づいていない筈は無いというのに、輝夜に意識すら傾けようとしない。初めから存在していないかの如く振舞っている。

それが甚くお気に召さないようで、月のお姫様は、ふんと鼻を鳴らして視線を切った。彼を呼び出した当初、この針の筵な空気が堪らないもんだから、輝夜は今のような口調で。依姫は『その闘気を収めてはもらえないだろうか』とお願ひする形で頼んだものの、ものの見事にガン無視。彼と彼女達——主に輝夜——の間にグランドキャニオンやらマリアナ海溝ばりの溝が完成した。

その時には日本サラリーマン固有スキル “なあなあ空間” を発動させて事なきを得たものの、あれから輝夜は一切ジェイスに向かつて話し掛けていない。依姫が時折、恐る恐るといった感じで単発の質問などを繰り返すばかりだ。

依姫が彼と接する態度から察するに、ジェイスの力を感じてどこぞの名のある存在と認識し、偉人やら英雄やら神やら、目上の人と付き合うような感じでコミュニケーションの成立を図っていた。

尤も、それにジェイスは応えているのかと問われれば、首を横に振らざるを得ない。彼、頑なに周囲との関係の成立を拒絶していた。というか『こつちに踏み込んできたらどうなるか分かってんだろうな』的な空気を撒き散らしていらつしやる。

せめてもの救いは彼が俺の話に耳を傾けてくれている事だが、『ジェイス・ベレレン』としての反応と比べると、あまりに素っ気無い。

その辺の疑問を投げ掛けてみると、微かにだが、苦笑とも白虐とも取れる感覚が伝わって来る。語りたくない内容なのだと判断して、追及は避ける方針にした。

先程終わったと思っていた一触即発状態が、またも誕生してしまった事に現実逃避をしてみたいなくなるけれど、今、俺がそれをしてしまえば、火に油……どころか爆弾を投げ込むようなものだ。必ず何かしらの、最悪の方面で事件が勃発するだろう。

(まさか上司や得意先に怒られてる時の方が楽だったなんて……)

あれはあれで脂汗やら胃のストレスがマツハであったが、今この一触即発空間を経験している身としては、あの程度の仕事などはもはや、全て鼻歌交じりで対応出来る自信がある。

比べる対象があれなのだが、こう、板ばさみ的な状況の比較対象がそれくらいしか無いので仕方が無い。

常に首筋に刃が突きつけられている感覚になりながら、既に穴でも開いたんじゃない

かと思つてしまふ胃を腹の上から押さえつつ、俺達は無人の通路を移動していった。

まっすぐ進む事、約二分。

壁と同様、真つ白な扉を抜けたその先には二つのベッドが現れ、それと同数の眠り姫がいた。それぞれに目を閉じ昏々と夢の世界へと旅立つてるのが分かる。

中央に居る二人以外、室内には誰も居ない。

パイプ椅子的な安物ではなく、純白の大理石を思わせる寝台には、赤や緑、黄色といった電飾が点灯や点滅を繰り返し、所狭しとケーブルやら何やらの機器達が、その中央へと伸びていた。

「もつたいぶるなんて事はしないよね。やるやら、とつととやつて頂戴」

急かす様に輝夜が言った。

表情こそ面倒臭さを装つてはいるが、俺ですら隠し通せていない程に、彼女の周りに“必死”の二文字が透けて見えた。

対して依姫は、形相こそ無を表現してはいるものの、阿修羅の如き雰囲気か辺りに漏れ出して、そこまで広くない病室を、より一段と小さくさせている。もはや眉一つの動きですらも、異常と判断すれば斬って掛かつて来る勢いだ。

横たわる二名が、普段どれほど思われているのかが分かる光景を目にしながら、後ろ

に居た刻む者へとお願いをする。

「ジェイス、頼む」

硬い表情の輝夜と依姫は、自ずとジェイスへ道を譲る。

それを当然。と二人の間を突き進んで、彼は意識の無い八意永琳と綿月豊姫の横に立ち、歩みを止めた。

3 マナで呼び出した時の彼とは、文字通り一つランクが上になった事によつてなのか、その動作は一瞬。

ベッドにいる者達の頭上を撫でるかのように通過させたかと思えば、

「……………」

「……………」

場違いだと分かっているのに、漏れる吐息が男としての性を掻き立てる。

多分、普通の流れだったなら、輝夜やら依姫やらが『そんな目で見るな!』とか言つて、直接殴打とかは無いにしろ、罵倒なり絶対零度の目線なりが飛んでくるものだと思っていた。

「……………」は

「……………」あら……………私……………。依姫ちゃんや永琳様と一緒に……………確か……………」

だというのに。

「永琳様！ 姉上！ ……良かった……本当に……」

「おはよう、二人とも。気分はどう？」

輝夜が気にした風も無く、けれど、隠し切れぬ安堵の表情を浮かべながら。

依姫は感極まったように自分の顔を両手で押さえ、声を押し殺しながら泣いている。

——良かった、本当に良かったと。顔に添えられた手の隙間から、ほろほろと雫が零れ落ちていた。

(……なんで……あんなに泣いてるんだ……)

ただ寝ていただけだろうに。どうしてそんなに感極まっているというのだ。

静かに涙する依姫と、目元に薄く光を湛えた輝夜。そんな二人を見て、事態が飲み込めずにいる綿月豊姫と、冷静に周囲を観察し状況把握に努めている八意永琳に、それぞれの個性が如実に現れているのを実感した。

とても感動的な光景だ。思わずもらい泣きをしてしまいそうになる。

——俺が、関わっていなかったのなら。

この光景を作り出した原因の一端は、間違いなく俺にある。

月の軍を壊滅させた事も、依姫を気絶するまで追い込んだ事も、輝夜の上乗せに乗った事も。今のところは、どれ一つとして謝罪する気は無い。

けれど、これだけは別。

百歩譲って殺気を放っていた依姫が悪いとしても、それを理由に完全に無関係であったその姉である綿月豊姫や、衣食住から地上への帰還の手続きまで、全ての面倒を見てくれていた永琳さんを昏倒させて良い理由にはならないし、したく無い。

だからそれだけは謝ろうと。

良い所はそのままに、悪い所があれば改善するという自分ルールに則って、こうしてここまでやって来た。

けれど、とてもではないがこの光景を前に『ごめん、それだけは謝るわ』などという、自分ルールを通す事など出来ない。

それをしてしまえば、それはもはや謝罪や反省などというものではない。謝っているようで性質は正反対という、悪質な嫌味の域だ。恩を受けた相手に行うものでは、決して無い。

一歩、後ろへと下がる。

これは受け入れられない。これは俺が望んでいない光景だと。

一歩、後ろへと下がる。

この場に居てはいけない。すぐに離れてしまおうと。体が後ろに振り向いた。もう耐えられない。一刻も早くここから――

「――待って」

体は出口へと向けたまま、顔を少しだけ横にして見た。

未だに体はベッドへ横たえたままだったが、そこには上半身を起こし、患者が着る薄い水色のガウンのような診察服を身に着けた八意永琳がこちらを見ていた。

「何処へ行くの？」

「……」

何も言えない。

逃げ出したいくてたまらない。今彼女の顔を正面から見ると事など出来ない。

あの人の故郷でこれだけの事を仕出かしておいて、今更どんな面下げて話せというのだ。

「永琳様」

横から、依姫が彼女に向かって話し掛ける。

耳が拾う単語から、今までの出来事を説明しているのだと分かる。

嫌な気分だ。胸が締め付けられる。

気分は裁判官を前にした罪人の心境に似て。今か今かと審判が下されるのを、ただ待つばかり。

そこに被告の証言は無い。今更、何を取り繕ったところで言い訳にしか感じられないのだから、言葉の一つとして発しようとは思わなかった。

「——そう」

五分か十分か。

もしくはたった数十秒だったのかもしれないが、今の自分に時間の感覚が曖昧になっていた。

それでも依姫の説明は終わったようで、一通り聞き終えた彼女が、言葉短く頷いた。

「九十九さん」

俺への呼称の変化は無い。

彼女からは罵倒の一つでも飛んでくるものだど覚悟していたというのに。

「——御免なさい」

紡がれた言葉は、真逆。

「私がつと早くあなたを地上へと還していれば——いえ、そもそもあの実験にあなたを巻き込んでいなければ、こんな事にはならなかった」

……待ってくれ。俺はこんな展開は望んでいない。

それを言うのなら、俺が調子に乗って「稲妻」など使わなければ、このような事にはならなかった。

それがどうだ。

よりにもよって、どうしてこの人に謝罪の言葉を口にさせているというのか。

「ごめんなさい九十九さん、私に出来る事なら——」
「待つて下さい」

それ以上は、ダメだ。

頼むからその先を口にしないで欲しい。

「違います。違うんです。そもそも原因はあなたじゃない——俺なんです」

依姫でも、輝夜でも。正直、無関係に巻き込んだ豊姫であつたとしても、謝罪する意思はあつたにしろ、ここまで自分が不利になる言葉など口にする気は無かつた。

けれど彼女だけは——八意永琳という人物だけは。

たつた数日であつたけれど、発端はどうであれ、内心はどうであれ。彼女とは笑い合つて過ごして来た。

そんな人が、一方的に謝罪をしている。

私が悪いと、こちらが悪いと。誠心誠意、謝つていた。

——とてもじゃないが、許容出来るものではない。

事の始まりを話す。

とある漁村。名前は浦辺の戸島村。

鬼へ向けた威嚇行為に託けた、自分自身の驕りから発生した結果だと。

ここに至るまでの過程を説明した。自分の気持ちに偽り無く、何をどう感じ、どうい

う行動に移ったのかを。

そのまま数刻。

「——依姫」

「はっ」

全てを聞き終えた八意永琳は、控えていた依姫へと指示を飛ばす。

「軍部へ通達。今回の事態を指揮した者に連絡を取れるようにしなさい。それと、彼を狙撃したという人物も。——大至急」

「はっ」

視線を変えて、次は隣に居る人物へ。

「豊姫」

「はい」

「目覚めたばかりで申し訳ないけど、上層部へ掛け合って、今回記録した全ての資料を集め、すぐ私の所へ提出させなさい」

「畏まりました」

そして最後は、目の前に佇んでいる者へと。

「輝夜様」

「……何?」

「大変恐縮ではありますが、その者達の先達を務めて頂きたく」

「……構わないわ。九十九——ジェイス、こっちよ」

その場にて、空中に浮かび上がる光学タッチパネルを操作し始めた綿月姉妹と、病室の出口へと向かう月の姫。

その後をとぼとぼと、完全に魂の抜け切った状態で後を追う。

……先程自身が言った例えが、まさに的中しようとしていた。

裁判官。

彼女達に背を向けて退室する最中、耳が拾う単語を並べ立てて思い描くのは、証拠を揃えて判決を下す月の頭脳姿。

自分の事ながら、彼女ならば公平な判断……とまでは行かずとも、それなりに釣り合いの取れた判決をしてくれる事だろう。

言うべき事は偽り無く伝え切った。後は、それを材料に彼女がどう判断するか、だ。

「しばらく——待っていて頂戴」

扉の閉まる僅かの間。

開閉の音に紛れて耳にした永琳さんの声は、さて——暖かかったのか、冷たかったのか。どちらだったのだろうか。

それによって俺の扱いが決定されると言っても過言ではないというのに、肝心なところ

ろが聞き取れずに、けれどそれを後悔する事も無くただ呆然と、俺とジェイスは輝夜に連れられ部屋から出て行った。

ここまで睡眠欲を貪り尽くしたのは、いつ以来だったのだろうか。

あまりに寝過ぎて体の節から『もつとゆっくり動いてくれ』という抗議が聞こえてくる。

「……………は、は」

ギシリと音を立てるそれを無視して上半身を起こしてみれば、部屋一面真っ白な——
——ここは確か、中央病院の集中治療室ではなかったか。

「永琳様！ 姉上！ ……良かった……本当に……」

「おはよう、二人とも。気分はどう？」

声につられてふと横を見れば、こちらと同じように豊姫が上半身を起こして、『ここは何処？』と、彼女の周囲に居た依姫と輝夜に問い掛けていた。

何か不調があったのか、病衣を纏っていつも目にするぼけぼけとした反応をしているのだが、それは自身にも言える事。

豊姫と同様の病衣を身に着け、同じく寝台に横たえていた。

けれど、自分でこのような事をした記憶は無い。

まさか夢遊病の気があったのかとも思うが、数万年前ならばいざ知らず、現代においてたかだか夢遊病の一つや二つなど、ドラッグストアに行けば解決出来る問題だ。

そこまで心配する必要は無い。

……筈……なの……だが……。

(一体、どういう事なの……)

誰に聞かせるでもなく内心で呟いた。

自分の記憶を辿る。

何処まで繋がっているのかと記憶の糸を手繰り寄せてみれば、存外あっさりとして、目的のところまで——記憶が途切れた場面まで思い返すことが出来た。

——だから、ますます分からぬ。

(何故、あなたがここに居るの、九十九さん。……その、青い者と一緒に)

脳裏に焼き付いた最後の映像では、もう少し小奇麗な格好であった筈なのだが、こちらが目覚めるまでに何かしらあったのだろう。その衣類は所々に綻びが見受けられ、そ

れとは対照的に、九十九が着ている服は、新品同様だ。皺一つ、染み一つとして確認出来ない。

しかも彼らは、一歩、また一歩と後退し、ついには背を向けてこの部屋から出て行くとうとするではないか。

「——待って」

こちらに背を向けたまま、彼の体がビクリと震える。

何かに怯えているとしか思えない行動に困惑するが、

「永琳様」

状況を把握し兼ねている私に、依姫が顔を近づける。

そうして語られたのは、今、こうして私がここに横たわるに至るまでの経緯。

彼が呼び出した者が、その青き衣を纏ったジェイスであり、その彼が使う精神魔法によつて、私と豊姫、そして依姫は昏倒させられてしまったのだと言う。

しかし、不可解だった。

何故九十九さんが私達にそのような行為に及ぶのかが謎であったのだ。

もしや今まで月への侵略の糸口を見つける為に自身を偽っていたのかという考えにも行きついたらけれど……

「そして……その……」

説明中であつた依姫が言い澀む。

何かこの場では言い難い事でもあるのかと思ひながら続きを促してみれば、

「どうしたの？」

「……ジェイス・ベレレン殿は……私の……殺気……に反応し、それが原因で我らを敵と判断。永琳様や私達姉妹を昏倒させたようです」

「……え？」

殺気？ 誰が？ 誰に向かつて？

「依姫。あなた——九十九さんを殺そうとしたの？」

「決してそのような事は！」

口数少なく状況を語つていた時の表情とは打つて変わり、自分の言葉に偽りは無いと言ひ切つた。

殺気を感じた者と、殺気など出していないと言う者。

その辺りに今回の騒動の原因があるのかもしれない、と目星をつけたところで、

「永琳様」

今まで横で口を噤んでいた豊姫が話し掛けて来た。

「何かしら」

「あくまで私の判断、としてお聞き下さい。——前提として、私達月の民は彼ら地上人

よりも遙かに長寿です。さらにその中でも、我ら姉妹と永琳様との付き合いは長い。……それらを踏まえた上で先に結論を申しますと、そもその解釈の尺度に差があるのではないかと」

つまりは、こういう事。

依姫が、死なない（破壊されない）事を前提として全力で斬撃を与えようとした気概を、彼の者はそれを亡き者にする為だという意図を感じ取り、それを防いだというのだ。能力持ちの中でも特に戦闘能力が高い依姫の気迫は、それこそ精々百年にも満たない程度しか生きていない者達にとって、生死に関わるものであつたのだろう、と。

——そうして、事態是最悪の方向へと転がり落ちる事になる。

青き者を迎え撃とうと依姫が応戦し、胸部を一閃。

これは不味いとその場を離脱した九十九とジェイスだったが、それでも事態を收拾する為投降しようとした矢先、死の恐怖に耐え切れなかつた兵の先走りによつてそれはご破算となり、結果は軍の壊滅。

それを見た依姫が怒りに我を忘れ、負の連鎖に身を落とす。

その後、その連鎖に巻き込まれる様に輝夜も参戦し、敗北。

それでもこちらの昏睡状態を回復させようと、こうして戻り、今に至る。

輝夜の精神を弄つた事には考えさせられるものがあつたが……当の本人がそれをさ

して気にした様子が無いので、流すことにした。

怠惰に身を委ねているあの子から発せられる、薄い嫌悪に覆われた、強い好奇心。

『面倒臭い』『飽きた』『詰まらない』が口癖であったあの子が、ああも自分の感情を剥き出しにしている様子など、ここ幾年も目にした事が無かった。

あれはあれで、ある程度の自覚の元で現状を楽しんでいる節が見受けられる。何とも分かり難い性格だと思つた。

——— 今までの話を反芻する。

するとそこには、一つの疑問点が見つかった。

「自分の立場は把握しているつもりだけれど……それにしたつて、一応地上人として知っていた者を相手に、軍のほぼ全てを動かすのはどう考えてもおかしいわ。様々な実験を行つてきたけれど、その時には直接的な戦闘能力のデータは皆無だった筈よ。月の脅威に値する、と考える筈が無い」

「それについては、私から」

そうして聞いた依姫からの言葉に、私は耳を疑つた。

「高御産巢日———」

月の民の中でも、特にこの国の行く末を懸念していた者。

私と同様の古参である彼は、建国の際にも助力を惜しまず、身を粉にして働いていた

のを思い出す。

誰よりもこの国を愛し、誰よりも今の月の現状を嘆いていた事も。

私にとつての第一が蓬萊山輝夜ならば、彼にとつての第一がこの国だ。その気持ちは、それなり以上に理解出来た。

「はい。司令はこの現状を打破するべく、今回の件を実行したのだと仰っていました」
だからといって、一を指摘して十の罪を償わせるような行為など、認められる筈が無い。

——と、そう言えたのならどんなに楽であつたか。

私も、彼の事は言えない。

もしも月と輝夜のどちらかを選ばなければならぬ状況になつたのなら、私は後者を選択する。

たまたまそういう状況が訪れていないだけで、いずれその時が来たのならば、彼と同じ様に、最も大切なものを守る為には他の全てを犠牲にするだろう。

気持ちがかかる故に決断に迷いが生まれる。

結論を出すには今の段階では決定打に欠ける、と思つていると。

「永琳様」

こちらの思考を中断させるように、依姫がこちらの名を呼んだ。

「全ては私の未熟が招いた事。司令にそう決断させてしまったのも、九十九をあのよう
な戦火に巻き込んでしまった事も、全て。——とうに覚悟は出来ております。後は、
如何様にも」

そう言つて、頭を垂れた。

——だが、違う。責任を負うのはお前だけではない。

「——分かりました。ただ、今はそれよりも」

視線の奥。

先程から微動だにしない外なる者へと言葉を掛ける。

全ては、こちらの不備が招いた結果。

後は、それを何処まで償えるかどうか……。

「——御免なさい」

反応は無い。

「私がつと早くあなたを地上へと還していれば——いえ、そもそもあの実験にあな
たを巻き込んでいなければ、こんな事にはならなかつた」

そもその原因は、高御でも依姫でもない。

彼をこちらの実験の失敗によって招き入れた私にある。

「ごめんなさい九十九さん、私に出来る事なら——」

何処まで償えるのか分からないけれど、だからといって何もしない訳にはいかない。そう思って謝罪の言葉を口にした。

「待って下さい」

けれど、彼に止められた。

「違います。違うんです。そもそもの原因はあなたじゃない——俺なんです」

別視点から語られる出来事は、ただただ淡々と記憶を言葉にしているだけ、という作業を見ている気分させる。

懺悔のようだ、と。彼の話す姿を見て思った。

こちら側からの視野ではなく、彼から見た、彼の思考や気持ちの含まれたそれは、私からしてみればあまりに荒唐無稽な話であった。

そもそもの発端。彼の言う「稲妻」が原因だと言っていた。

しかしあらゆる文明がこちらと桁違いである場所において、そも、転送装置付きの擬態した生物調査機器が存在する、という可能性を考慮しろとは、神でも仏でも不可能だ。どうして存在しないものにまで配慮出来ようか。これではまだ、竹に花が咲く方の率が高いと言えるだろう。

事実だけを見れば彼が引き起こしたという天災が切欠だが、それを懺悔する理由とするには、無理に因縁を吹っ掛ける詐欺師にすら見えてくる。

(私がここで説明してあげても良いけれど……)

彼は今回の騒動に、幾許か以上の負い目を感じている。

これでは私の言葉は付け焼刃にしかならず、表面上は理解を示すだろうが、内心では依然として自負の念に囚われ続ける事になるのは目に見えていた。

少しだけ。今の私では彼の絶対に足り得ないのだという事実を突き付けられ……胸が痛んだ。

(はつきりさせないといけない、か)

個人の判断ではなく、もっと大勢の視点から。

自分だけではない。全ての者達がそれで納得——はしてなくとも理解はしているのだと伝えなければならぬのだろう。

彼は弱い。

能力面での多様性は依姫に勝るとも劣らず、戦闘面に至っては、それを圧倒……どころか歯牙にも掛けていなかったと聞く。

けれどそれを支える心が、あまりに脆弱。

——いや、そもそもが、彼は何かを支えようなどとはしてないのかもしれない。精々が自分の命を守り、その延長で関わった者達を順々に助けられれば、それで。

確固たるものが無く、強固たる何者も無く。黒にも白にも。善にも悪にも。極論から

極論へと容易く染まるであろう、その心。

よくもまああれだけのもの（能力）を持ちえながらも、こうも色々と欠けているとい
うのだろう。疑問が尽きない。

答えを一步間違えば、私は大切に思う人に仇す存在へとなってしまうどころか、月の
最大戦力の悉くを一日にも満たない時間で殲滅してしまう戦力を相手にする事になる。
考えろ。

最善の結果を。最良の未来を掴み取る為に。

その為には——その為に必要なのは、これら出来事の落し所。感情の終着点。

「——依姫」

彼の望むように。皆の望むように。何より、私が欲する結末を求めて。

事実を、感情を、統合し、最も均衡の取れた答えを導き出そう。

皆に指示を飛ばし、それらの確認を行う時間を作る。

依姫に、関わりの強かった人物を呼び出してもらい。

豊姫に、重要だと思われる記録の選定と提出を。

主である輝夜にすら、彼らを落ち着ける場所へと案内させる為の船頭を頼んでしまっ
た。

先を行く輝夜に連れられて、彼らは無言で追隨する。

一瞬、青き者が鋭くこちらに視線を向けたものの、何をしても何を伝えるでもなく、すぐさま視線を切つて、後を追つていった。

「しじばらく——待つていて頂戴」

あなたの——私の望む結末を。

それらを導き出す為に、今しじばらくの時間が必要であつた。

——僅か三時間。

部屋を出る時に見た、壁に貼り付けられていた時計の針が刺し示す数字からは、そう読み取れた。

精神面と体力面の両方の理由から気だるい体を引き摺つて、少し気を緩めれば夢の国へと旅立てるであろう意識に活を入れつつ。

俺は、とある扉の前へと来ていた。

暗めの木造。重厚な作りであると伺えるそれは、俺が良く知っている、司法の場に良く似ていて。月の国だという事を忘れて、日本の裁判所にでも訪れている錯覚に囚われた。

触れてもいないというのに、扉が開く。

先頭を俺が、後方からジェイスが。歩幅は小さく、けれど止まる事は無い。

開けた室内。左右に幾つも設置されている椅子。

けれど百を超えるであろうその席には数人しか座っておらず、この場に居るのは、今回の騒動に大きく関わったであろう人物のみ。

綿月依姫。綿月豊姫。蓬萊山輝夜と、俺の視線の先。この場においての裁決権を握っているであろう席に腰掛ける、八意永琳。

そして今入場した、俺とジェイスと——後ろ姿しか確認出来ないが、紫色をした髪の毛の長い者が一人、右端の席に座っていた。

軍を指揮したと言っていた老人は見受けられないが、なるようにしかならないのだから、と。もはや誰が来ようが居ようがどうでも良かった。

数メートルの先に見える、小さなお立ち台。幾度かテレビで見た最高裁判所の法廷にとても酷似しており、何もここまで日本のものと似通っていないくても良かったのに。

と、時間を置いたことで生まれた余裕からのせいか。今にも逃げたしたい気持ちとは裏腹に、周囲の状況くらいは頭に入ってくるようだ。

台へと立つ。後ろに控えるジェイス。

刃物一つ、銃口一門。殺気も、怒気すら向けられていないというのに、俺の心はかつて無い程に押し潰されそうになって来た。

「この度の『月面騒動』から始まる、全ての責の所在を明らかにしましょう。——開廷」
 粛々とした声。

この荘厳な空気は月の都市固有のものか。雰囲気は勿論、思考すらも一切が澄み渡っているような気がした。

——外で待機させていた「マリット・レイジ」が忽然と姿を消す、一時間程前の出来事である。

35 高御産巢日

「性格は温厚。思慮の浅さや行動の短絡的な箇所は目立つが、突出した欠点は無し。こちらの文化にもすんなり適応し、所々で非常識とも思える行動や言動はあるものの、僅か数日で一定以上の理解を示している点は素晴らしい——と。そういう結論だったののだがね」

「……含みのある言い方は好きじゃない。本音を隠しながら、つてのは、お偉いさんの中で過ごすには便利なもんなんだろうが、面と向かってそれやられると結構不快になるぞ。……お前は日本の政治家か。胸糞悪くなるもん思い出させんな」

「二ホン、というものが何かは分からないが、生憎と私は軍人だ。立場上、政治家の真似事くらいは出来るがな。それに、その二ホンの政治家とやらは、自分の職をこなしているだけではないのかね？ 上に立つ者は文字通り、誰かを踏み台にしてその地位に就いている。その足蹴にしている者達に應えるのが責任であり、義務だ。そうでなければ、

そうしなければ、まさに足元から崩れ去っていく。逆に言えば、どれだけ損失を出そうとも、その支えている者達が健在ならば、幾らでもそこに居続けるという裏返しでもある訳だが……」

逡巡。

「……君のその口ぶりでは、ニホンの政治家とやらは、君に利益をもたらししていないどころか、不利益を与えているようだね」

「見えないところじゃちゃんどやってるのかもしれないけど、それをこつちが知らなきや一緒にさ。『分かってもらおうと思うな、分からせろ。何の為の目だ口だ。体は有効に使え』ってね」

「誰の言葉だね？」

「……覚えてない。遠い昔の話さ。……話、はぐらかすなよ」

「君の質問に答えて上げたまでだ。その様な意図は無い」

「そりゃ失礼。……じゃあ、さっきの話の続きといこうか。但し……」

そう言って、改めて目の前の者を見る。

「長い。箇条書きみたいにして、さっきの話と今からする話を要約しろ」

「……」

それに答えるべき者は、その目を細めた。

「そんな目で見るなよ。言っちゃ何だが、おつむの出来は宜しくないんだ。消防試験落ちたしな」

「試験の程度が分からないが、ご愁傷様、と言っておこう。——要らぬ世話かもしれないが、もう一度、色々な分野を学び直してみてもどうかね。君という存在を見てみると怪しくなって来るが、ここには地上のどこよりも充実した教育機関があるものと自負しているよ」

「……勉強は……苦手だ」

「そういう考えの者用のプランもある。誰しも学ぶ喜びは持ち合わせているものだ。学び活かしを繰り返し自己を高めていく行いは、とても素晴らしいものだと思うがね」

「そりや俺もそう思うけどな……ってまた話が……」

「……こう、目的のない無駄とも思える会話をするのは久しく無かったな……」

「また話逸らす気か」

「年寄りのささやかな楽しみさ。少し位は大目に見ても罰は当たらんとするがね」

「……」

「分かった分かった。——あの時、私が自身の首を飛ばそうとした理由だったな」

静かに目を瞑り、その時の状況を脳裏に描く者——高御産巢日。

「簡条書き、とまではいれないが、なるべく簡潔に済ませるよう勤めよう。遠まわしな発

言を止める程度だがね」

コホンと軽く咳をする。

「——君の思考には波がある。一定上の倫理を持ち合わせていると判断し、あの場で宣言した通り、この度の指揮を取った私がああして責任を取れば、君がこれ以上、事に及ばないという答えになったからだ。ここ数日に及ぶ君の言動の記録から、そう結論付けた」

「それで、その意図を一切俺に説明しないで自分の首を飛ばそうとしたのか。味方にすらも、それを告げずに」

「もうこちらには手段が無かったからね。力で敵わず、交渉という名の不平等条約の締結では、一戦した手前、何処まで弱みに付け込まれるか分からない。もし仮に君がこの国を支配しようものなら、あの戦闘で養ったであろう怨恨が、ここの民全員へと波及していたかもしれない」

「それこそ憶測の域を出ない、完全な賭け状態じゃねえか。何でそんな曖昧な要素に頼ろうとしたんだよ」

「だが、現に君はこうして私との対話に応じ、その目の奥には怨嗟の色は見受けられない。せいぜいがイラつき程度の感情だ。——君は初めこそ烈火の如く思いを爆発させるが、時間が経てば、その熱が冷め易い傾向が見受けられた。良くも悪くも相手を知

ろうとする行為の成せる業だな」

一息。

「——つまりは、出鼻に一発かませば、君の行動を大きく抑制出来る、という結論に至った訳だ。強ち、的外れではないだろう？」

「……当人の前でそれを言うかねえ」

「君が望んだ答えだ。それを言わずして先へは進めない。それにそう答えた方が、君への印象が良くは為らずとも、悪くなる事はあるまい。後は君の中にこちらの及びもつかない琴線でもなければ、この国は平穩を保てるかと確信している」

「……OK、自殺の理由はよく分かりました。で、次。今後、俺はどうなる」

「私の憶測で言うのなら幾らでも思いつくが……何せ今までこのような事は無かったからな。今頃はルーチンワークばかりしていた政治家が、血の汗でも流しながら話し合い、知恵を振り絞っている事だろう」

声にも表情にも出していないというのに、俺には目の前の老人が静かに口元を釣り上げて、くつくつと笑っている気がした。

「……何だか楽しそうだな」

「そうかね？ ……まあ、そうなのだろうな。立場は分かっているつもり……ではあるが、やはり実際に行動する者と、卓上で討論する者達の認識の差が……な。……あの石

頭共め。せいぜい苦勞するが良い」

「……分からんでもないですけどね……はあ」

——何やってんだか。

誰に聞かせる訳でもない意思が、真つ白な天井へと溶けて消える。

こういう状態になって少なくとも一時間以上。そろそろ話題も尽きるかと思つていたのだが、流石に積み重ねたものが違うのか、営業トーク顔負けの矢継ぎ早に繰り出される言葉の嵐に、俺は参つてしまつていた。

(あれは……確か……)

ことの発端は、お目覚め主人公のテンプレのように始まつたのだつたと、その時の様子を振り返つた。

窓から吹き込む風が心地良い。

真つ白な天井を見上げ、寝心地の良いベッドへと体を横たえていた俺は、ぼんやりと、全く他意の無い感想を思つた。

窓の外から差し込む日光は、暖かな春の麗。

これで小鳥の囀りでも聞こえてくれば完璧なのだが、生憎と、ここ地上数百メートルの高さでそれは期待出来そうになかった。

辺りを見渡せば、何処も彼処も真つ白な面ばかり。

窓——つばい、片面全てが無色の壁は、初めの頃は恐怖以外の何者でも無かつたんだが、数時間も見ていればある程度は慣れるもので、今では良い暇つぶしの一つへと落ち着いていた。

ぶつちやけ、病室（高級らしい）で缶詰状態です。つてなもんで。

それも、何故か月の軍隊のトップのお方と同室———というか二人きり。周りには兵隊さんどころか看護師の一人も居なかつた。

目覚めた瞬間。『おはよう』と二つ並ぶ純白のベッドの片側に、切腹ならぬ切首をやるうとしていた月の軍のトップが本を読みながら挨拶して来た時には、再び安眠を貪りたくなつた。

そこから、あちらとしてはサバサバとした感じで、こちらとしてはギクシヤク……どころか雲をも掴むような手探り状態の会話を行った。

———何でも俺、裁判が始まってすぐにぶつ倒れたんだそうだ。

おぼろげながら覚えている。

倒れ込む最中に見えた、ジェイスのフードから僅かに覗く、寂寥感と、感謝の視線。それに一体どんな意味があったのか……。

後悔先に立たず。それを知る術は失われてしまった。

(PW、再度召喚出来ないってどういう事だよ……)

永琳さん達を起こす試行錯誤の内に判明した、新たなルール。

漠然と判明したそれは、二つ。

●プレインズウォーカーの力は一日しか使えない。但し、同名の者であっても別カードであればその限りではない(例:「ジェイス・ベレン」と「精神を刻む者、ジェイス」は同一人物であるものの、カードとしての制限は別である)

●プレインズウォーカーは一度召喚した場合、再び召喚する事は出来ない。

というもの。

内政チートや対人無双が出来なくなったというものあるけれど、何より、彼を散々戦わせ、巻き込み、ただただ良い様に使い潰してしまった後悔が、今も俺の心に残っている。

る。

全てが終わったら、彼と一緒にもう一度、心行くまで酒を酌み交わし、話し合つてみたいと思つていたのに。

おまけとばかりに、外に待機させていた「マリット・レイジ」の繋がりが感じられなくなっている。ジェイスと同様、彼女も還してしまったようだった。

不幸中の幸いなのは、勇丸との繋がりは未だに感じられるという事。これは「マリット・レイジ」……というより「ヘックスメイジ・デプス」——コンボに何かしらの制限が掛かっていると判断すべきか。

あまりの展開に笑いすら込み上げて来そうな精神状態であつたというのに、この横に居る高御産巢日を相手にしなければならぬせいで、幸か不幸か、その事に悩む時間与えられないでいた。

「で、また話が反れたんですが。お前どんだけ雑談好きなんだよ」

「そういう気概は無いのだが……。ふむ。こうして第三者からの意見に耳を傾けてみれば、自己のまた違った一面が見えてくるものだな」

「そういう感想はいらぬから」

先ほどと表情こそ変わらないものの、何処と無くシユンとした雰囲気醸し出している気がする。

「では、裁判の結果を話そう」

「……ちよい待て。お前、さつき俺がどうなるのか分からない的なニュアンスで話してなかったか」

「それは君が誤解している。私はあくまで私の感想と判決の結果を述べただけで、一度も未定等との言葉は発していない」

「……じゃあなんで自分の感想、とか言ったんだよ。それこそ、その仮決定の話をするれば良かったじゃねえか」

「——さて、君の仮決定の話だったな」

「自覚あるんか!」

こ、こんにやろ……。スルースキル完備ですか畜生め。

「もう一度言っておく。これはまだ仮の判決だ。君が不服と思うのであれば、上告も可能である。八意君以下、綿月豊姫と依姫、蓬萊山輝夜様が最大限の便宜を図ってくれるそうだ」

「……そりやまたえらい豪勢な方々がサポートしてくれるようで。……豊姫……さん……は何でこっちの便宜を図ってくれる事になったんだ？ 自分で言うとなれんなんだが、あの人、俺を弁護するどころか訴える側だろう」

「何でも依姫に説得された、なんて話は耳にしたがね。生憎と私も真相は把握していな

い」

何せずと寝てたから。とは本人の弁。

どうも、「平和な心」を受けてすぐにここへと運び込まれ、精神安定剤やら何やらの治療を施されたのだとか。

考え抜いた結果のあの行動なのであって、異様な精神状態から来る自殺ではなかった。で、当の本人は良い迷惑だったらしい。

「地上人、九十九殿。暫定ではあるが、君には二つの選択肢がある」

ベッドに腰掛けたまま、彼は片腕を持ち上げて、こちらに向けて人差し指と中指を立てた。

「一つ。君の当初の提案通り、すぐさま地上へと送還させる。一切の責任を取る事無く、体調が戻り次第、迅速に」

「……とつととお帰り下さい疫病神様。つて聞こえるな」

「君は、君が思うよりもお頭の出来は宜しいようだ。間違いではないよ。月の——特にあの戦闘に参加していた者達やその記録を閲覧した者達から見れば、君の存在は脅威以外の何者でもない。そのような不穏分子、一刻も早くどうかしたいと思うのは仕方無い事だろう」

「その通りかい……。で、二つ目は？」

「君がここに永住し、治安防衛を主とした職務に従事する事だ。無論、待遇は保障させてもらおう。先にも言ったとおり、君の力は脅威。それを味方に引き込めるのなら、これほど素晴らしい事はない。……という流れから来た案だな」

「永住却下」

「即答か……。以上が君に下された判決だ」

あれ、思ったよりも何も無い。

もつとこう『死ぬまで奴隷だ！』とか『解剖を始める。メス』とかも考えていたんだが。

……そういう流れになったら今度こそ、とも思っているけれど。

「そして、君にとつてはここからが本題となるだろう」

「……は？　もう判決がそう出たんだろ？」

「ああ。君の“判決は終了、と言ったんだ”

……なるほど、そういう事ですか。

というか裁判ってそういう方式だったかな。月だから特殊なんだろうか。分からんです。

「まず、八意永琳、並びに綿月豊姫へは殺人罪一歩手前。症状としてはただの昏睡状態だったが、それを改善出来るのは君——が招いたジェイス殿だけであり、眠りに着い

た彼女達の意味は著しく無視された。それも立場が立場な者であった為、場合によっては国家侵略罪の適応を求める声もあつたが……」

(うわ最悪……)

分かつてはいたが、今更ながら自分の仕出かした事の重大さを実感出来る。

やらかした側が言う台詞では無いけれど、本当に彼女達を起こせて良かったと思う。

「それについては二人が告訴を棄却した為、無効。その結果として、彼女達の空いた穴を埋める為に掛かった費用や治療費。精神負担を含めて、金二百四十億のみが現状の君が追うべき責任となっている」

「……その『金』ってのは通貨の単位か？ 恐ろしい値段だ、ってのは何となく分かるんだが、イマイチどれくらい凄いのか……」

ジンバブエ通貨とかだったらありがたいんですが……。

「一般の民の平均年収が金四百万前後、と思つてくれれば良い」

「よく分かりました……」

日本円基準と考えて良さそうですね。……ぎやふん。

(あ、でも金銭で解決出来そうなのはありがたい……の、かな)

金銀財宝ならば、文字通り一山程度は出せそうなカードが幾つかある。

貴金属系に価値を見出してくれなかつたら困つたものだが、それはそれでどうにか出

来そうだ。

何かをプレゼント系は、俺にとって歓迎すべき——やり易い罪滅ぼしである。

……大分前に何処かの祟り神様と会った時にそれで地雷を踏んだ気がするが、多分、気のせいだろう。

「何、君がこちらの第二案である治安防衛の職に就いてくれるのなら、九十年以内には返金し終えるだろう」

さり気無く俺を一般人扱いしていない発言（年数的な意味で）が見受けられたけれど、あれだけの事を仕出かした後では、その発言も虚しいだけな気がするので黙認しておく。

（九十年って……収入全部返済に回して、としての過程だったら……大体年収三億超えない程度にはあるって事か……？）

一般的な日本人の生涯年収が大体二億と聞いた事がある。そう考えると恐ろしい額という事になるのだが、国防費の一環として考えると、日本を基準に考えるのなら億という桁を超えて、それは兆の位に突入する。

安く使われているのだな、と思う反面、それでも約三億という数字は半端ないものに変わりは無い。毎年、年末ジャンボが当選しているようなものだ。

状況が状況なら歓喜どころか狂喜乱舞レベルの報酬だが……今の俺には生憎と金銭

系での誘惑は効かない。

恐ろしく贅沢な選択肢が転がっているというのに、それを大して意識する事無く蹴る気んでいるのは、ある意味で自分の能力に慣れてきた影響だろう。

「そして、彼女達二人からの追加要望がそこに追加される。国家侵略罪の適応を取り止める代わり、と思つていいだろう」

……それつて実質、永久奴隷フラグは消えていないどころか濃厚に残っているっぽいんですが。

ふと、俺の能力の検証を嬉々として行つていた永琳さんの笑顔が思い出される。

第三者から見れば見惚れる様な表情だったのだが、当事者からすれば、まさに黒い笑顔。前にも思つたような気もするが、漫画で描写するなら背後に『ゴゴゴゴ!!』とか表記してある事だろう。

「さて、では次だな。……私にとっては、ここからが本題だ」

「うん?」

何だろう。

大体の説明は聞いたと思つたが。

「……私、高御産菓日はこの度の軍壊滅の責任を取り、辞任。また、過剰な人員投入により場の混乱を招いた原因として禁固三十年、執行猶予五百万飛んで二十年。それとは

別に、破壊された軍備の一割を負担する事とする。——以上が私に下された命だ」
「……同情なんてしねえぞ」

「構わないとも。全て自分が招いた結果だ。……ある意味、これで肩の荷が降りた、とも考えられるさ」

一瞬、あまりにぞんざいな物言いに再び気持ちがささくれ立ったが、彼の表情を見ている限りでは、とても言葉通りの感情を抱いているとは思えない。

……いや、一見すれば、相変わらざるの無表情ではあるのだけれど、この短い付き合いの中で、何となく彼に心残りがあるんじゃないかと、薄っすらではあるが察する事が出来た。

……だからといって、今言ったとおり、同情する気持ちは持ち合わせない。

あれはあれ。これはこれ。

やってしまったのはこつちで、それを利用しようとしたのはあつち。

どちらがどう転んでも、妥協点など見出せる筈は無かつたのだから。

故に、この話はここで終わり。

後はただただ、勝者と敗者が居るのみである。

……しかし、禁固やら執行猶予やらの年単位が俺の常識と掛け離れ過ぎててピンと来ない。月の平均年齢としては短いんだか、長いんだか。

「次は……彼女か。綿月依姫。この度の騒動の原因の一端を担っていたと考えられる為、地位剥奪。一兵卒へ降格の後、以降二千万年間は最低賃金にて軍務に従事。また、私生活に支障の無い範囲で九十九殿の要望を可能な限り受け入れ、これに応える事とする。ただし、生命や人としての尊厳を著しく無視する行為などは依姫君に拒否権が発生する」

依姫の場合は、そういう方向性になったのか。

てつきりこのおつちゃんと同じ様に、内々で片付けられるもんだと思ってたが、俺の方にも裁量権的なものがあるらしい。

「恐らく、後半の君の意思に服従、という命には、彼女の姉である豊姫が君に対して持っている権限——先程の殺人未遂の告訴分を使い、殆どを軽減、あるいは無効化させる事だろう」

「……それくらいで済むんだったら、むしろ俺が心苦しいと思う位だ」
下手をすればあのまま昏睡状態のままであつたのかもしれないのだ。

むしろこれくらいで済んだのは僥倖であつたと断言できよう。

この辺りは判決云々ではなく、俺個人として豊姫に贖罪をしていく方針を固めた。

「次、蓬萊山輝夜様。……なん……だが……」

「……えらく歯切れが悪いな」

何だろう。嫌な予感がする。

「……君、あのお方に何をしたのかね」

思い悩んだ末に、高御産巢日はこちらへと質問を投げ掛けた。

「何って……俺は嘘なんて言つた覚えはないぞ。あいつが攻撃を仕掛けて来たから精神乗っ取つて傀儡にしただけだ。指一本触れちゃいない」

自分で簡単に言い切つたわりには、どこぞの悪役のようなやり方をしていたのだなと思える発言に、内心で頭を抱える。

こりや何言われてるか分かつたもんじやないと思いつながら、でもあいつが先に手を出してきたんだし、という気持ちもあつた。

仮に俺が悪いと判決が出ていたとしても、今のままでは素直に謝罪する気など無い。本当に謝るところまでするのなら、せめて説明を受けて……それに俺が納得してからだ。

要求次第では実力行使も。と考えていると、

「……簡単に言うとは、だな。『一生奴隷』だそうだ」

「断固拒否!」

話す声が男のものだというのに、発言があいつの声で脳内再生されてしまった。

まず間違いなく『一生奴隷』の後ろは『♪』の記号が付属されていた事だろう予感と

共に。

おいおいちよつと待ちやがって下さいべらんめえ。あの野郎、一体どんな裁判やらかしたつてんだ。

「どういふ流れでそうなったんだよ！ 今までの公平感が一気に崩れたぞ！」

「うむ。私見で言わせてもらえば、輝夜様の要望に、裁判長であつた八意君が折れた、という印象だな」

何だかんだであのお方には甘いのだ。と締めくくる元司令官殿。

「……あんの蓬萊ニートオオオ!!」

寝起きにしては、我ながら良い声出ていたと思う。

「(にーと?) ……尤も、その件に関しては輝夜様他、一名を除き、永琳君や依姫君などが再審を求める声を挙げている。君が上告するのであれば、容易く覆る筈だ。……半分は本気であつたのだろうが、もう半分は遊びだな」

あ、あんにやろ。こんな状況だつてのに楽しんでやがるな。

こちらら永琳さんや豊姫さんには負の念があるが、お前にや現状サラサラ無いんだぞゴルア。

「ただ、それに関しては君は幸運ではあると言えるだろう」

「……何処が？」

死刑にならなかつた云々、という意味だろうか。

「今の通り、輝夜様と八意君、二人が黒といえ、あの太陽ですらも黒くなる程の権力があるのは分かってくれただろう？　それが、あれだけの事をしておきながら奴隷程度で納まっている事が奇跡に近い。まだ輝夜様だけがそういった発言をするのは分かる。面白ければ万事良し、と考えている節があるからな。……だが、あの八意君が輝夜様に危害を加えておいた相手を、尚も何もせずに居ることが不可思議だ」

その辺は……確かに疑問が残る。

輝夜第一主義っぽいところがあるのは、原作にて、輝夜を迎えに来た月からの使者を皆殺しにしているところから察せられるが、だというのに俺に対しては、温情と断言出来る判決を下している事に、こうして高御産巢日から言われた後となつては、疑惑が募るばかりだ。

「……分からない。哀れみとか、同情とか、便利な実験体とか。そういった理由くらいしか思いつかない」

「そうか、君にも分からないか……。後ほど彼女と会う機会がある。その時にでも聞いてみると良い」

疑問が解決せぬままに、何ともいえない空気が漂う。

唯一外から吹き込む風だけが、音らしい音を立てているだけあつた。

「そして、ジェイス殿につてだが……。改めて確認しよう。彼は君が呼び出した存在で、その彼は依姫君によつて腹部と胸部の中心を一突きされていた、で相違無いね？」

「あ、ああ。詳しくは言えないが、間違いない……。ぞ」

「そうか……」

しばしの沈黙。

「申し訳ないが九十九君。この国には式神の類に、権利は認められていない」

「……つまりジェイスに対してやった事は無効だつて言いたいのか」

「違う。あるにはるのだ。但しそれは人権としてのもものではなく、あくまで器物破損の範囲に収まるものではない。この場合、保障する相手はジェイス殿本人ではなく、あくまで召喚者である九十九君、君自身へと還元される事になる」

ジェイスが物……。か。

言いたい事は理解したつもりだが、納得するには……。些か……。

「しかしその判決とは別に、ジェイス殿への贖罪は、依姫君が個人で補うそうだ」

「……ほんと、馬鹿になる位にしつかりと出来たお人だことで」

口にした言葉とは裏腹に、俺の言葉には暖かさが伴っていたんじゃないだろうか。

法で決まっている、とこいつは言った。それは、今までの常識がそうであるという意味になる。

今までの価値観を壊してまで相手に対して謝罪する意思が見受けられた事に、驚くと同時に、少しの当然という心と、感謝の意が燻った。

ただ悔やむのは……彼を再び呼び出すには最も確実な方法として、後1マナ出力を開放しなければならぬ。

現在、一度に使えるマナの上限は4。

3マナであった【ジェイス・ベレレン】、4マナであった【精神を刻む者、ジェイス】、そして、俺の知る限りの最終形態であった、5マナのPW。

同じカード名のPWは二度召喚出来ない、と思われる根本的なルールが改正されない限り、俺は新たにもう1マナ出力を上げなければならぬようだ。

これだけドンパチ仕出かして分かった事が出力開放のみだとは思いたくないが……ううむ。先は長そうです。

「……さて、では次で最後になるかな」

「ん？ もう全員の話は聞き終わったんじゃないのか？」

綿月姉妹、八意永琳、蓬莱山輝夜に、この高御産巢日。それに【ジェイス・ベレレン】。主要な人物への判決は全て聞いた筈だ。

だがそんな俺の疑問にも、高御産巢日は真面目な顔をして、しっかりと答えた。

「目覚めて早々、君が真つ先に尋ねて来た人物だ」

「……？」

ダメだ。そう言われてもさっぱり心当たりが無いです。

……しばらく無言でいたからか。

こちらから答えが上がる事は無いと判断したようで、白髪の老人は、これまた一言一句綺麗に聞き取れる声で、俺に答えを教えてきた。

「今回の騒動の、幾つかあった分岐点の一つに関わっていた、玉兔の先遣隊で軍曹を務めている……いや、いた者だ。——名をレイセン。誰よりも先に君に引き金を引いてしまった、張本人だよ」

36 病室にて

戦ぐ風の心地良きかな、春麗かな木漏れ日よ……なんて。

……どんな意味なんだろ。思い付きでポエムなんぞ考えてみたものの、全く意味は無いです、はい。

病室で高御産巢日にレイセンの名を告げられてからの俺は、堪らず頭を抱えてしまっていた。

ここまで来て有名人物が登場するとは思っておらず、この分では、出身地が地上の筈の、白くてちっこい兎詐欺様も出てくるのではないかと考えを巡らせる。

(ここでレイセンって事は……よりもよってあのレイセンか?)

こちらを怪訝な顔で見ている高御産巢日に顔を向け、そのレイセンなる者の資料を見せてくれないかと尋ねてみる。

思い違いであったのなら対応は半殺し……かどうかはさておくとしても、それなり以

上に酷い目にはあってもらう。

「少し、待ちたまえ」

空中に現れた光るパネルを操作して、数十秒。

思ったよりも早く、それは見つかった。

「これだ」

滑らかにスライドさせながら俺の前へとパネルが移動して来た。

思っていたよりも大きなA3サイズのそれは、左に顔写真。右に詳細データが記載されており、誰がどういう人物であるのかが一目瞭然であった。

（薄紫の長髪に……真紅の瞳……。ウサミミは付けてないけど……。どう見ても二号の方じゃねえな。……超本人くせえですよこれ）

鈴仙・優曇華院・イナバ

月生まれの玉兔であり、綿月姉妹に飼われていたペット的な存在。

《幻想月面戦争騒動》にて地上の勢力に恐怖を覚え、しばらくの後、アポロ計画浮上の際に心折れて、地上へ逃亡。

紆余曲折を経て永遠亭にてご厄介となる身であり、地上に来る際に擬装用の名としてレイセンが鈴仙になり、永琳が優曇華院を付属し、輝夜がイナバをドッキングさせた——んだったか……。逆か？——という不憫な名称を持っている印象を受ける。お

前は何処のイツパイアツテナだ。

(そーいやあの作品つて、主人公のルドルフがゴミ捨て場の筆記用具を使つて執筆して、作者はそれを出版社に持つて行つてるだけつて話だつたなあ)

懐かしいなあ……、つてそうじゃない。

どうするよ俺。

完全な赤の他人だったら当初の予定通り酷い目にあわせるつもりだったが、これまた東方キャラの中でも中々の知名度を持つお方と面識を持つ事態になりそうだ。

現在の俺から見た親愛度は、永琳さんがぶつちぎりで、大分開いて依姫。後は軒並み同一な感じだが、ここでレイセンが出張してくるとは思わなかつた。

二次創作でしか知らないが、経歴故に争いごとには臆病で、永琳や輝夜、てゐ達の間には挟まれ気苦労が多く、地上人との間に壁を作り、それでもおつかなびつくり生きようとしている苦勞人。

完全にお咎め無しという訳にはいかないが(気持ち的に)、手心を加える場所は過分に残っている。

(どう区切りを付けたもんかなあ)

他人が自分の飯を横から掻つ攫つていったのなら鉄拳私刑バツチコイだが、友人なら『何すんだてめえ』程度の罵倒で済まず程度のような。

もしくは不法侵入して来た相手が見ず知らずの者なら通報、知り合いなら『何してんの』という言葉だけで済ます感覚のような。そんな感じ。

自分の中で黒く滾っていた怨恨が一気に冷めるのが分かる。

高御産巢日が言っていた、出鼻に一発かませば云々、という言葉はもの見事に俺の心情を捕らえていたようで、しつかりと憤怒の炎が鎮火気味になっている。

神奈子さん相手にしていた時は諏訪子さんを殺めてしまったと思っていたので、今こうして思い返してみても、神奈子さん当人は勿論の事。例え相手がスキマ妖怪だろうが紅白巫女だろうが殺めるくらいの気概はあった。

けれど今回は被害者は俺であり、頭部に一発受けたという事実が残っているものの、俺自身手遅れになっているあれやこれは一切無い。

(……当人を前にしたら何か思いつくかなあ)

意図せずにして手元に転がり込んで来た、他人の命を左右する命令権。

自分で勝ち取った代物で、尚且つそれを望んでいたのなら諸手を挙げて喜んでいるところだが、正直これは嬉しくない。

あざとい話だが、能力持ちとはいえ、ただの玉兎である彼女に何を期待すれば良いというのか。

権力でも資産でも、こちらの罪名の軽減を図れる可能性は薄そうで、能力か戦闘面位

でしか今のところは期待出来そうに無い。
それに。

(女の子への絶対命令権って……俺は何処のヘンタイ貴族だよ……)

自己判断だが、大分この世界に慣れてきたとはいえ、それでも生前の倫理を基準としているところは、まだある。

そりゃあ俺も男だし、色々と溜まっているものがあるにはるが……。だからといって……なあ？

「どうした？」

「……いや、何でもない」

高御産巢日が不思議そうな顔をして尋ねてきた。

そもも顔に出ているのかと思うと同時に、とりあえずは会うだけ会ってみるか考える事にした。

「永琳さんと、豊姫さんには賠償を。お前は内々で判決が出て、依姫が俺の要望に可能な限り応える事になって、レイセンって奴が俺の……その……何だ。……奴隷って事で良いのか？」

「そこに抵抗を覚えてくれるのなら、依姫や、そのレイセンという者にはまだ救いはありそうだ。——然様。白々しく聞こえるかもしれないが、彼女は私の失敗を加速させた

責がある。私はあくまで君を捕縛する為に動いたのであって、殺害する意図は無かったのだ。結果としてそうなってしまったのなら仕方ない、とは思っていたがね」

「……やっぱりお前ムカツクわ」

「君も、譲れないものが出来たら分かるかもしれないな」

「そこは分かるさ。共感出来る。——俺に害が無い限りは、な」

我ながらいい睨みを効かせていたんだろう。

今までの飄々とした老人の表情が一転して歪み、真剣なものへと変貌していた。

「……これ以上は藪を突かぬ方が良さそうだ」

「そうしてくれ。あんたのお喋りは心臓に悪い……」

下手な事になろうものなら、一気に感情が沸騰してしまいそうで。

その時は自制出来るかどうか怪しいものだ。

もうやだ、と思いながら、柔らかなベッドへと再び体を沈めた。

永琳さんの家の物とは一味違う寝心地に心地良さを感じながら、とりあえずそのレイセンという人を呼び出してもらおう事にした。

横たわったまま、俺は顔だけ隣へと向けて、話し掛ける。

「今からこのレイセンって奴、ここに呼び出す事は出来るか？」

宙に浮いていたパネルを見ながら、高御産巢日へと尋ねた。

「可能だ。……もうこの者の扱いが決まったのか？　言い淀んでいた割には早いものだな」

そう言いながら、新たに手元にパネルを出現させて、何やらピコピコ指を動かしている。永琳さんの時に見た奴はブラインドタッチすらしていなかったのだが、人によつてその辺りは違うものを使っているんだらうか。

そんな彼が行っている行為とはつまり、もうこちらの言つた事を実行に移しているのだらう。早いものだ。

「違う。会つてから決めようと思つただけだ」

「そうか。だが、君はまだ安静にしていた方が良く。今はこのベッドの上だから良いよ。うなものの、降りれば疲労が一気に吹き出る事だらう」

「……このベッドつて何か特殊なものなのか？」

「ここに運び込まれた時、君は極度の疲労が蓄積されていた。通常ならば一日や二日ですごうなるものではないが、ここは病院。幸いにも疲労回復や細胞の活性化を促す装置は充実している。その一つが、このベッドだ。呼吸一つ取つても楽とは感じないかね？」

君がただの地上人であれば、と切り結んで、元司令官は言葉を止めた。

言われてみれば……そうなのだらうか。

ピンと来ない、というのが正直な感覚だが、まあ月の人がそう言うのなら実際にそういう効果があるのだろう。

「何にしてもしばらくは安静にしている事をお勧めするよ。君が我が国の法を遵守する限りは、自由と安全を保障しよう」

「嘘くせえ。たった一人相手に軍隊一つ差し向けて来た奴の台詞としちやあ、二枚舌もいいところじゃねえか」

それもそうだ、と。

自分で全く気づいていなかったのか、高御産巢日は声低く、けれどとても愉快である
とくつくつと笑う。

「———そうか」

不意に、悟りを得た者のみが言える口調で、初老の者が呟いた。

「どうしてこんな単純な事に気づかなかった……。何も、君を完全な敵役として仕立て上げなくとも、君と口裏を合わせるだけで良かったのだ」

「……何が？」

彼と俺との直線距離は二メートル前後。

話し声がしなければ、聞こえるのは風の音のみという室内だ。

独り言の類ですら、嫌でも耳に入ってくる。

何やら勝手に納得して自分の中で話題を進めているようだが、こちらにも関係のありそうな内容に、完全無視するのも気味が悪い。

「いやなに。ありえたかもしれない未来を思つて、自身の浅はかさを嘲笑しただけだよ」
そのまま、否応無しに彼の話を聞く流れになつてしまつた。

月の現状を悔いている事。

意識改革の為に俺を生贄にした事。

そうしてそれに失敗し、今こうしている事。

……今更俺にそれを言つたところで、焼け石に水どころか、火に油なのだ気づいて
いるのだろうか。

「そうだな……。君へ事前に、私や依姫が軍事訓練に付き合つて欲しいと頼んでいたら、
受けるにしろ断るにしろ、少なくとも悩んではくれていただろう？ 勿論、使用武装の
制限などで極力君に害の無いよう調整を計り、事後の保障の一切を、こちらで責任を取
る事が前提だが」

何だか突拍子な会話の方向性に思考が追いつかなくなつたものの、彼の言いたい事は、
「事前に悪役として振舞う事を了解していたら」というニュアンスの会話なのだと思ふ。

つまりは出来レース。

主催者と囃か敵かの役を担った俺だけが知っている、当事者から見れば本物の、命を掛けているかに見える軍事演習。全てが終わればネタバレよろしく打ち明けて、何だそうだったのかと笑い合う大団円コース。

当然、俺に害が無いのが前提であるが、そこは【ダークステイル】化やら【プロテクション】。という事らしい。

「無理だな。第一、お前や依姫に急にそんな事を言われても頷く理由が無い」

「しかし、それが八意君ならばどうかね」

……それは……まあ……考えなくもない……が……。

「それこそ無理だ。あの状況じゃあ、その永琳さんが頼み込むっていう前提が不可能じゃねえか。……その……俺がやらかしてた訳だし」

意図せずにブーメラン発言をしてしまった事で、口調が弱腰になる。

「仮に八意君の頼みでなくとも、君の帰還を最優先にする事を条件として付け加えたり、金銭や物品などの提供も交渉材料にはあった。——九十九君」

「お、おう」

急に体を乗り出して、ずいところちらに迫ってくる。

「君——夜の営みに不安は無いかね？」

開いた口が塞がらないとはこの事か。

……あれ、おかしいな。

今の空気は、取り戻せないあれやこれの後悔を胸に秘めつつ、哀愁漂わせながら会話する雰囲気ではなかったか。

「ん？ まさかその手の行為を知らん訳ではあるまい？」

「い、いや。とてもよく理解している……とは思……が……」

ドーテー デスガ ネ。

「かつて地上に居た頃には、我らは様々な悩みを抱えていた。生え際の後退、体臭の悪化、生殖機能の減退、等々。どれもが決して避けられぬ問題であり、けれど出来る限り回避したい変化であった」

うっ。

どれとは具体的に言いたくないが、心当たりのある項目がチラチラと……。

そんな俺の内心を見抜いたのか、高御産巢日は手に力を込めて拳を作り、熱く語り出す。

「しかし！……この月に来て我らは研究した。そして、克服したのだ！」

——なん……だと……?!

「っ、まじか!？」

「そうとも！ 君が女性ならば月に一度訪れる日の不調の無効化や、肌や髪の艶を保つ方法などを提案したが……」

さらに顔を寄せ、とうとう彼の顔はこちらの耳元にまで寄っていた。

「……君、婚約はしているかね？」

「……相手すらいません」

どうやら立場まで逆転してしまったようだ。

喋る口調が反転してしまっているというのに、それを戻そうという気にならない。

それだけ、こいつ……この人が話す事は、俺にとって無視出来ない内容なのだから。

「ふむ……。なら、意中の相手はいるかね？」

「……一応」

今のところは……諏訪子、さん……になるのだろうか。

『責任を取る』とは言ったが、それがお付き合いとイコールで結ばれるのかと捉えていいのか踏ん切りがつかないでいた。

一緒に居続けるという意味合いの『責任』なのか、一生を添い遂げるとしての意味な

のか。

あれから何度も考えてみたけれど、かなりの確率で添い遂げる方面の意味だとは思っている。

……ただ、そうだ。と、断定出来ないのが女性経験の浅さと直結している問題ではあるのだが、そこはもう腹を括って直接本人に尋ねる事に決めた。

我ながらウジウジしていると分かつてはいる。分かつてはいるのだが、それを全て無視出来る程に、俺が諏訪子さんを思う意思是強くなっている。

それを、下手すれば失うかもしれないのだ。
臆病者と笑わば笑え。

あの思いを。あの絆を。絶対に無くしてなるものか。……カツコ悪いなあ俺orz
ふむふむ、と頻りに何かに納得しながら、高御産巢日は頷いた。

相手は月のお偉いさんだというのに、どうも親戚のおじさんやおばさんを相手にしている気分にさせるのは、一体どういう事なのか。

「ならば、そんな相手により良い自分をアピールしたいだろう。最高の自分を、最良の自分を。そして男なら、最強の自分を。いつまでも！ それを叶える……とまではいかないかもしれないが、かなりの面で手助け出来るあれやこれといった方法がこちらには整っている」

白髪の老人は目を細める。

その瞳の奥に見える光は、何かの確信に満ちていた。

「——どうかね九十九君。まずはこちらの話を聞いてみて、嫌ならば当然断つてくれ構わない。仮に何か望みのものがあつたのなら、それらを全て提供しよう」

会話の方向性が変わってきているというのはひしひしと感じるが、今の俺にはそれを止める気は無い。

むしろもつとその手の話をしたくたしようがなくなかない気分だ。

「し、仕方ないな。そこまで言うなら話くらいは聞かない事も無い……ぞで？」

「ああ、是非そうしてくれ。何、先程も言ったように、条件が嫌ならばすぐ拒否してもらつて結構だ」

ベッドの元の位置へと戻り、後ろに後光でも見えている気分させながら、高御産巢日は悪魔の如く問い掛けた。

「——さあ、九十九君。何が聞きたい？ 何が欲しい？ 人として……何より男としての悩みの悉くを、叶え、取り除いてあげようではないか」

悪魔との契約、などというものは断じてない。

比喻でも誇張でもなく、今、俺の目の前には神が居る。

気分は水戸のご老公——の敵役。

横になっていた体を起こし、膝を折り、手を伸ばし、彼に向かって頭を下げる。この世界に来て何度目かの土下座は、全く予期せぬ場面で行う事になった。

何かが床に打ち付けられる音で気がついた。

重量のあるものと分かったと同時に、皆がその方向を見てみれば、あの地上人が意識を失っていた。

腰まで崩れた九十九を、ジェイスが抱き抱える様に両腕で支えている。

完全に力が抜けているのだろう。彼の四肢は芯の抜けた人形のように、床へと向けられていた。

「九十九さん！」

永琳が叫ぶ。

皆の視線が一斉にそこで集中し、依姫と永琳が急いで駆けつけていた。

だが、

「——つ、ジエイヌ……殿……」

依姫が、嘯み締めるように難色を示す。

駆け寄った両名は、けれど目的を達成する事が出来ない。

恐らくこの月で最も長身であるその青き者が、九十九を床へと寝かせ、それを守護するように立ち塞がったのだ。

その意図を、今更考える必要もない。故に分かる。

ジエイヌが、こちらをまるで信用していないのだという事が。

凍った時の中に居るように、誰もが動けず、誰もが言葉を発しない。

「——ふざけんじやないわよ」

しかし、それも長くは続かない。膠着を崩す者がいた。

傍観に徹していた者の一人、蓬萊山輝夜が口を開く。

席から立って、彼を睨みながら近づいていった。

殺気すら伴いそうなその眼光にも怯む様子を見えないジエイヌだったが、彼女は構わず言葉を続けた。

「確かに私達はこいつに害を為した。それは変わらないし、誤魔化す気もないわ」

目を閉じ、呼吸を整える。

再び開いた瞼を吊り上げ、今度こそ怒気の籠った言葉をぶつけた。

「——だからってそのまままで良いなんて思う訳ないでしょうが！ 謝らせなさいよ！ 償わせなさいよ！ ごめんなさいって。すまなかつたって。あんた、私達にこいつと一生敵対してろとでも言うつもり!?!」

とうとうジェイスの真正面へと、月の姫は辿り着く。

見下げる者と、見上げる者。

視線と視線が交わり、何かの軋む音が聞こえてくる。

それでも彼女はその眼力を緩めない。

「そりゃこつちだつて打算は幾つもあるわ。気持ちの整理を付けたいだとか、こいつが月に牙を向かないようにだとか。……あなた、心を操る存在だったわよね。九十九から聞いたわ。なら、こつちの考えてる事なんてお見通しでしょ。——だったら察しなさいよ！ こつちはあいつを助けたいと思つてるの！ 利用云々は後よ後！ まずは救わせなさい！」

息を吐く。

完全に肺の中が空になった時、輝夜は静謐のままに、胸へと息吹を取り入れた。

——空気が変わる。

熱気を帯びていたそれは一転。優雅な大河を思わせる静寂へと。

そこには、月を従える者として君臨する存在が一人、その片鱗を覗かせる。

「——退け、青き神よ。その者を守りたいと思うのならば。我は蓬莱山。この月を統べる者が一人。汝が何者であろうと、我が意思を、九十九への助力を阻もうというのなら。——久遠の果て。自身の眼で確かめる事になろうぞ」

硝子玉の眼球に、漆黒の瞳を以って、障害物を見据える。

感情の色は無い。

そこに居るのは——否。そこに在るのは、幾千万年の時を経て、尚も成長し続ける、力の具現化。

PW達ですら安易に手を出せるものではない。"時"という絶対軸を、意図も容易く支配下に置く超越者。

幾ら心を読むジェイスとて、油断すればすぐにでも悠久の彼方へと追いやられてしまう存在である。

見誤ってはいけない。

青き者と月の姫は、互いが互いの、死、足り得るのだ。

月の姫君に習うように、依姫と永琳が後ろで闘気を高め、いつ事が起こってもいいように構えている。

輝夜はそれを従えて、雄大な態度を崩さず、深く静かに見つめ続けた。

沈黙が支配する世界。

均衡を崩したのはジェイスであった。

剣山の如き視線は薄れ、その姿が徐々に光となって消えて行く。

彼の口元には薄い笑み。

それを知るのは、誰よりも彼の近くにいた蓬萊山ただ一人である。

啞然とする一同を他所に、とうとうその者は、輝く粒子となって幻のように霞み、消えていった。

事態を把握するのに幾許かの時間を要したが、我に返った月の者達は、淀みなく己がすべき事を行う。

「……永琳」

「はい」

倒れた九十九の元へと駆け寄る。

脈を取り、呼吸を確認し、瞳孔をチラと見た彼女は安堵した様子を皆に見せた。

「大丈夫。極度の疲労状態になっているだけのようだわ。……あ、いえ、これも危険といえば危険な状態なのだけれど」

それでも、彼女が思い描いていた最悪と比べれば、大丈夫と断言出来る部類である。

玉兔に連絡を取り、病室の手配と、移動の手段を確保する。

「——ええ、そう。自然治癒機能の向上と、疲労回復を図ります。それ用の医療ベッド

があつたでしょう。それを使うわ」

受諾された事を確認し、永琳は傍へと佇む豊姫に声を掛ける。

「まだ余裕はあるけれど、早いに越した事はないわね。豊姫、悪いけど」

「畏まりました」

目を閉じ、彼女は自身の力の循環を確認する。

数秒も無い。

九十九の体が揺らいだかと思えば、忽然と姿を消した。

驚く者は誰も居ない。

それがこの者、綿月豊姫の力なのだから。

「確認しました。無事収容されたそうです」

依姫が手元の光学パネルを見ながら答える。

「……色々と言いたいけど……いいわ。全部終わってからにする」

整った顔を歪めながら、輝夜は元居た席へと戻ってゆく。

先程の面影はまるで無く、今はただただ『面倒臭い』の文字の浮き出てきそうな態度をするのみであった。

それに習い、それぞれが元の場所へ着席したのを見届けて、永琳は一つ。深い溜め息をついた。

「困ったわ。一番重要な人が居なくなってしまうなんて……」

「あの様子では、意識を取り戻すのに今しばらく時間が掛かるかと思われま。それまでは休廷になされますか？」

悩む永琳に、これではどうか。と、依姫が案を持ちかける。

「……いえ、このまま始めてしまいましょう。但し、これは仮のもの。下された判決に十九さんが不服に思うのならば、再び開廷します」

ここ月でも最上位に入る者達を拘束し続けるのは、唯でさえ平常時ですら難しいというのに、これだけの事を仕出かした後では、死活問題に繋がってくる場面もある。

ここで一度道筋を整理しておけば、仮にもう一度裁判を行う場合にも、判決がスムーズになるだろう、との判断からであった。

けれど最大の理由は、永琳自身が己の気持ちに整理をつけたい。と思っている節があり、それは心の決して少なくない部位を占めているのだが、当人にその自覚は無い。

一番冷静で居るように見えて——事実冷静なのだが——、唯一彼女だけが自身の心を把握出来ていないでいた。

方針を決めた永琳に対して、輝夜の意識はもはやそこには無い。

席に着いた彼女は、静かに息を吐き出した。

肺の中が全て空になった時点で停止。思い出したように、静かに空気を中へと取り入

れる。

(『頼む』……ねえ)

ジェイスが消える直前に、輝夜の頭に届いた意思。周りの者達の様子から察するに、自分へのみ届いたのだと判断すべきか。

何一つこちらとの接触を断つて来た青き者が最後に示した感情は、一体どのような思いかから告げられたのだろうか。

(頼まれなくつたって、やってやるわよ)

そもそもがおかしかった。

心の機微に熟知しているであろう者が、己が主の変化を見抜けぬ筈が無い。

仕組まれたのだ。

こちらの心情を察し、それを公言させる為に。

所詮思考など、口に出さなければ存在しないも同じ。

それを誰よりも理解しているからか。こちら側の選択——意思を、明確なものへと、確固たるものへとする事で、決して無碍に出来ぬ存在へと、自身の主の安全を確保した。

(心が読める癖に、嫌になる位にこつちを信用しないんだから。いい根性してるわ)
人の心など、些細な事一つで容易く変わる。

心が読めるが故に、それを誰よりも身に染みている者らしい行動であったのかもしれない。

既に消え去っているからか、我ながら何とも好意的な解釈だと、輝夜は声無く自虐的に笑った。

永琳の粛々とした声が聞こえる。どうやら始まったようだ。

姿勢を正し、表情を引き締める。

さて、我が師はどのような判決を下すのか。

何が楽しいのか、自分の気持ちが高揚している。

それを決して表に出さず、意思の力で押し留めた。

時間の関係もあるが、何より月の頭脳が裁判長なのだ。

かつて無いほどの事件だというのに、かつて無いほどに時間の掛からぬ裁判になるだろう。

そんな思いと共に、輝夜は自分が示すべき答えを、脳内で組み立て始めるのだった。

日も昇らぬ内から始まった裁判は、事件の規模とは反対に、正午には終わりを告げた。永琳達と別れ、寢所へと戻った輝夜の中は、『面倒』『詰まんない』等のネガティブな言葉で埋め尽くされている。

—— 筈だった。

胸の鼓動が止まらない。

あれから幾らか時間も経っているというのに一向に衰えないそれは、未だに消えぬ感情の揺らめきを訴えかけてきているかのようだった。

「九十九……か」

握る拳から、骨の軋む音が聞こえる。

今思い返しても心が沸き立つ。

この地に生まれて、もう数えるのも馬鹿らしい程に過ごして来た。

頂点に立つ者としての教育。

初めこそその習得に寝る間も惜しんで取り組んだものの、修めてしまつてからは世界は一片。色鮮やかな景色はモノクロへと変貌した。

何をするにしても自分よりも劣っていたあれやこれに落胆していた頃と比べれば、永琳や綿月姉妹と出会つてからは、少なくとも退屈はしなかった。

(ちよつと前までは……ね)

ベッドの上で寝返りをうつ。

顔に掛かった髪を梳かすように退けて、真つ白な天井をただ見つめた。

着崩れて肌も露になっていいる事など気にもしない。

そも自分の部屋なのだ。あの口煩い永琳ですら、そこまでは口を挟まないだろう。

永琳の博識さに舌を巻いたのも、依姫の能力の多様性に心躍らせたのも、今は昔。

今ではそのどれもが日常になってしまい、私の心はかつての倦怠の海へと沈んでしまっていた。

「はあ……」

また転がる。

枕に顔を埋めて、誰にも吐息が聞こえぬように。

漏らした熱は、さて、どういう感情が籠っていたのだろうか。

自信はあった。

未だに永琳には敵わないものの、ここ月で三本の指に入る個人戦力を誇る依姫相手の戦績は、五分。

勝てると思った。

軍を相手にし、依姫を相手にした後の相手など、幾らそれらを打ち負かしたとはいえ、

疲弊や困憊をしているだろうという……何の根拠も無い、樂觀的な憶測で。そう……思ってしまったのだ。

だというのに結果だけを見れば、攻撃は効かず、こちらの精神は奪われ、見事に傀儡と化していた。

しばらく後に意識が戻った私が見た光景は、慌てながらもこちらを心配する依姫と、何食わぬ顔でこちらに目を向ける異能の自称・地上人。そして、無言で佇むジェイスという名の青き神であった。

混乱する私に、事のあらましを依姫が説明した。

永琳や豊姫を回復させるのであれば。と、すぐにでも消し飛ばしてしまいたい者達の前に——本気で事に及ぼうとする度に、ジェイスの視線によって牽制され、不発に終わっていただけなのだ——自身を諫めながら、事の成り行きを見守っていた。

(まあ。我ながら我慢の利かない性格よね)

何の変化も無いのは、私にとって忌み嫌う事。

故に例え相手が憎き者であっても、倦怠の海へ沈んでしまうよりは幾分かマシかと思ひ、話し掛ける事にした。

——世界は変わる。

まずは相手を知ろうと思ひ、名前を聞くところから始めた。

出生から地上への話題が移っていく最中、自身の気分が高揚していくのが分かる。そこには何があるのか。何をしているのか。どんな場所なのか。

報告書や画像データでは決して分からない様々な情報を、あいつは持っていた。

全く知らない光景を想像し、胸躍らせながら、しかし表面上は何食わぬ顔を取り繕う。政治家相手にはこのスキルは重宝していたけれど、それがこんな場面で役に立つとは。永琳の言う事をよく聞いておいて良かったと思えた瞬間でもあった。

モノクロがカラーになるなんてものじゃない。姿形の全く違う、目前に広がった新しい世界。

そして目の前に居る、異常とも言える力を持った名の知れぬ神を呼び出す、正体不明のヒトガタ生物。

私の行動を奪い、私の意思を奪い、私の未来を奪い。

それでも、そのどれも要らない。と言わんばかりに、全て返された私の気持ちを考え、た事があるだろうか。

(……あるわきゃ無いわよね)

それでも月の至宝と呼ばれる容姿であった筈だというのに、それをあいつは拒否したのだ。

男色の気がある訳でも無く、美的感覚が違うのかとも思ったが、こちらが体を摺り寄

せてやれば頬を赤くし、幼子のようにムキになつて意地を張つていた。少なくとも異性としてこちらを意識していたのは間違いない。

あいつに抓られた頬に手を当てる。

ぐにぐにと自由に弄んでくれたこの場所は、今まで誰にもそのような行為を——両親や永琳、綿月達ですら——許した事など無かつたのに。

(あいつめ)

自分でそこを引つ張つてみる。

我ながら面白いように伸び縮みを繰り返すそこは、少しだけ誇らしい気分になされてくれた。

(『魔性の体』……ねえ)

艶がかった吐息。

自分の体にそんな感想を、それも、面と向かつて言い放つ奴など居なかつた。

改めて自分で自分を観察してみるが……うん。永琳や綿月姉妹と比べても謙遜の無い出来栄えであるのではないかと思う。一部を除いて。

「こればかりは……ちよつとねえ」

溜め息に似た独り言が宙に溶けた。

両の手で自らの膨らみを掴む。

程よく手に収まり、少し握ってやれば、それは指の間から零れるくらいはあった。下半身の箇所も同様で、自分としてはここはすつきりと纏まっついて好ましいと思うのだが、やはり異性からしてみれば、ここもふくよかな方が魅力的なのだろうか。

上も下も同世代よりは出ていると思うけれど、それでも完成系（綿月姉妹）や究極体（永琳）と比較してしまえば、やはり悔しい気持ちが入り込んで来る。

後何万年過ぎせば、あれらに追いつけるのだろうか。というか、追いつけるのだろうか。怪しいものだ。

月の技術を使えば、身体の操作など如何様にもなるけれど、私は自然体でありたい。仮初の自分など、何が悲しくて、自分も他人も偽らなければならぬというのか。

他人に対してならば、相手にも色々と思うところもあるであろうから、そんな事など口にはしないが、他ならぬ自分の事だ。気の済むまで己を通すと決めている。

「……」

思考が止まる。

頭が完全に考える事を放棄して、整理の為の時間を欲していた。

それから幾ばくかの間。

何秒か何分かは分からない程に時計の針が動いたのを確認した後、

「——むかつく」

心からの一言は、とても単純で。

そう眩いた瞬間に、私は行動に移っていた。

「ああ、私。高速艇まだあったわよね。用意して頂戴。……え？ 謹慎中？ 知ってるわよそんなの」

部屋に備え付けられている通信端末を通して指示を出すものの、こちらの要望を聞き入れる気は無いようだ。

融通の利かない家政婦達だ。

私がこうと決めたら、それを如何に確実に素早く実行出来るかを模索するのが仕事だろうに。

……まあ、私が名実共に月の姫となったら、そこをよく遵守させよう。

そのまましばしの押し問答が続いた。

—— 出さない。

ダメです ——

—— 出さないってば。

ダメです ——

—— 出せつつつてんのよ。

ダメですつてば姫様本当勘弁して下さい ——

——ぷちっ

「良いわよ……そつちがその気なら……」

彼らの顔を立ててわざわざ言葉にしてあげたのに、そうまでしてこちらの意思を無視するというのがなら——

（対象はここから高速艇に至るまでの直線上。——一切合財、悠久の時の中で塵芥と化すが良いわ）

どうせ今回の騒動で人手は殆ど出払っている。巻き込む可能性はまず無いだろう。

「——そこまで」

けれど、それを決めた直後には、部屋の扉の前に、私の師である永琳が呆れ顔で目を伏せていた。

「何よ、邪魔する気？」

「邪魔も何も、あなたはしばらくの間、自宅謹慎だと判決の後に告げておいたでしょう」
「じゃあ、あれよ。あの中央病院。あそこが今から私の自宅」

何よ大きな溜め息なんてついて。

我ながら良い案だと思っただけけれど。

「あなたの事だからいずれはこうなるんじゃないかと思っただけど、思っただけでもずつと早かったわね。……『輝夜様が限界です』って切羽詰った声で連絡が来たからこうし

て飛んできてみれば……能力まで使って彼に会いに行きたい訳？」

「良いじゃない。減るもんじゃないでしょ？」

「順序という言葉を知り、そしてそれを遵守しなさい。月の代表になる者がそのルールに従わないでどうするのよ」

「だって今、まだ代表じゃないし」

屁理屈だな。と我が事ながら思うけれど、それでもこの感情は収まらない。

止まらぬ感情は行動を後押しし、ほぼ全てにおいて私を上回る永琳相手にすら後退の二文字を示さない。

「……そうまでして彼に会いたいなの？」

「そうね。会いたい、という言葉は正確じゃないけど」

「……会った後でどうしたいの？」

問題は、そこ。

「……さあ。それこそ、会ってみるまで分からないわ」

「——殺す気？」

彼女の気配が変わる。

師である者とはまた別の、絶対者としての彼女がそこには居た。

「まさか。あんな面白いもの、そう簡単に失ってたまるもんですか」

そうだ。

あんなに私の心を揺さぶった相手を、容易く逃がす訳が無い。

何に手を出したのか、その身、心に、魂に。

しつかりと教え込まねば気が済まない。

「……それに、永琳だって本当は、今すぐにも彼の元へ行きたいんでしょ？」

「……」

いつもなら間髪入れずに何かしらの返答があるというのに、無言でいる彼女を見るのは久しく無かった。

滅多にない機会故か。それがこちらのいじめ心を刺激する。

「そうよね。あなたとの実験で……彼、全然本気じゃなかったんだもの。こちらの技術をものともせず、こちらの戦力を歯牙にも掛けない者達を呼び出した。心を操る神に、破壊神たる者。それを『ただ疲れるだけ』で呼び出せるというこの異常さを、あなたは誰よりも理解し、危惧し、興味を掻き立てられている」

扉の前に立つだけとなった永琳の横まで行き、止まる。

彼女は前を向いたまま、こちらに視線を合わせない。

「既存の何よりも、残存のどれよりも理解の及ばぬ存在。地上人——いえ、もう九十九で良いわね。その九十九は、誰も目にした事も耳にした事も、ましてや考えた事すら、

思つた事すらない力を——能力を持つてゐる。あなたが生まれて、もう億は経つてゐるわよね。それでも未だに知らぬ何かがある、というは、何にも増して魅力的なのではなくて？」

自然に垂らされた手を握る。

一瞬ビクリとした永琳を他所に、私は言葉が続けた。

「かつてあなたが言つたのよ。こういう時の為に、常日頃から仕事を真面目にこなして来ているのでしょうか？ だったら、その成果を貰わないと。今しなければならぬ事は何か？ 事後整理？ 情報統制？ 違つてでしょう、八意永琳」

気分が乗つて来た。

普段なら口ですら彼女に勝つことは無いというのに、現状では手に取るように彼女の心がかかる。

それが何より楽しく、今の願いが叶つたのなら、それはさらに愉快な事になる。

「今しなければならぬのは、建国以来最大の脅威となつた者に対する策を練る事。現状では「マリット・レイジ」も「ジェイス・ベレン」も居ないとはいへ、彼はいつでもその者達を呼び出せる。——いえ、あれだけの存在をいとも簡単に招くのだから、もつと上位の……私達の手に終えない存在だつて居る筈だわ」

だから……ね？

「一緒に行きましょう。私もあなたも、時は無限に等しいかもしれないけれど……」
焦らす様に。もつたいぶる様に。

今ここで逃しては、次の機会は無いと匂わせながら。

「彼の時は有限よ。こちらが瞬きする間に、九十九の生は終わる。——流石のあなたも、失った時や命までは取り戻せないでしょう?」

尤も、彼が見た目の通りの寿命かどうかは怪しいけれど。

——これで、詰み。

結局、誰も彼もが利己的であつただけ。

味方になつた月の頭脳ほど、頼もしい存在はいない。

法も権力も何もかもを捻じ曲げながら、永琳は私と共に、九十九の元へと辿り着いた。積み重ねた力というのはこうも強いものなのかと、地上にある海を割るかの如く人が避けていく光景を見ながら、これなら永琳のように権力を己がものとするのも悪くない、と思えて来る。

目の前には、扉。

最上階に近いこの病室は、心や体の疲労を除去する事を目的として作られた部屋なのだという。

「……ね。この先に九十九さんと高御様は居るわ」

「そういえば、何であの方は九十九と同じ病室に居るの？ 一応禁固刑になったわよね？」

「あの方なりに思うところがあつたのよ。……高御様が今回の騒動の一端を担つた理由、聞いた？」

「今の月の現状に不満があるんだっけ？ 因果な話よね。あなたに並ぶか、あなた以上にこの国を愛しているが故に行動を起こし、結果として、過去最大の……事件扱いよね？ ……を招いてしまった。嫌だわホント。子離れ出来ない親って」

「そういう意識は無いんだけど……そういうものなのかしら……」
元司令へと向けられた私の言葉が、永琳の胸へ刺さつたようだ。

その事に、ちよつとだけ愉快的気持ちになる。

「そうよ。結末には出張つてきても良いと思うけれど、途中で手を出しちやダメ。手助けするのも責任を取るのも親の勤めだけれど、何にしても一定期間が過ぎたら距離を置くべきだわ」

目を閉じこちらの言葉を思案する永琳だったが、ふと臉を持ち上げたかと思えば、私を見て目を細め、じつとりとした視線を向けて来た。

「……言っている事には共感する面はあるわ。でも、私にはあなたが、あなたの教育に手心を加えろつてニュアンスが含まれているように聞こえるのだけれど」

「——気のせいよ」

やはり、そういう方向への思考の誘導は無理か。

前々からこちらに構い過ぎな気はしていたので、これを機に。とも思ったのだけれど、それをするには今しばらく時間が掛かりそうだ。

「で、何だっけ？ 結局おじ様はどうしてあいつと同室しているのかは分からないの？」

「またそうやって話を逸らすんだから。はあ……まあ良いけど……。あの方の持論を実践する為と、責任を取る為だそうよ」

「責任を取る、というのもあれだけど……何？ 持論って」

「九十九さんの性格を把握したから、今後の為にこちらをアピールしておいて、譲歩させる余裕を作っておくんだそうよ。こちらの内情を伝えれば伝える程に、彼はこちらに理解を示し、我が事のように思ってくれる。それを試すから、と」

「思いつきり泣き落としじゃない。あいつがその程度の事……あく……ジェイスが居たなら無理だったかもしれないけれど、あいつ単体なら可能かもしれないわね」

「病室には既に感情の起伏を図るセンサーも備え付けてあるから、彼が不快に思ったのならすぐに高御様は把握なさるわ。最悪の事態には……ならない筈よ」

「だと良いけど。でもあの方って腹芸苦手じゃない？ 大丈夫なの？」

「何でも秘訣は、誠心誠意話し合う事、だそうよ。自分を偽らず、言葉を偽らず、真実を

偽らず。……まあ聞かれなかったから答ええない、程度はするでしょうけれど」

「誠心誠意……ねえ」

軍隊一つを丸々個人へとぶち当てた者の言う言葉では無いと思うが。

「それに……ね」

永琳の声のトーンが落ちる。

「高御様は……最悪、九十九さんの手に掛かっている可能性があるのよ」

「……何、責任を取るってそういう事？ 贖罪は裁判で禁固刑と罰金の両方を科されて

終了したんじゃないかった？」

「確かに、月の法ではそうだった。でも九十九さんはこの国の者じゃない。少なくとも、自分の意思で訪れた訳ではないわ。それを一方的に納得させるような真似は、彼の感情を逆撫でする。それを可能な限り抑えようとしているのが、今の高御様、という流れなのかしら」

「ふーん。……おじ様に関しては、あなたは何も思うところは無いの？」

「……あるにはあるけれど、あなたや綿月達と比べれば然したるものではないのは確かだね。地上に居た頃からの付き合いではあるけれど……どうも、ね」

「……永琳って年下が趣味なの？」

「どうしてそうなるのよ。……でも確かにそう考えるとまた新しい一面が見えてくるわ

ね。参考にさせてもらおうわ」

「はいはい、お役に立てて嬉しく思うわ。……さて、と」

改めて扉へと向き直る。

急遽補強された完全防音&フェムトファイバー製の合金であるこの一角は、例え戦車の砲撃を受けても無音&無傷を保てる性能を誇る。

「……扉を開けたら一面の赤い世界、というのは勘弁して欲しいんだけど。私、それなりにおじ様の事気に入っているのよ？」

「それがあの方の望んだ事だもの。——このような事態を作り出した一端を担った者が、目の前に居るんだから。仮に私が九十九さんの立場だったら、殺める事は無くとも、内臓の何箇所かは抜き取ってるわ」

「……そこで腕の一本や二本、って言わないのが、あなたらしいわ」

それから数秒。

互いに無言になりながら、ぼそりと呟き合う。

「……無事で居てくれると嬉しいんだけどね」

「……ええ。私だって、好き好んで誰かが居なくなるのは望まない。……覚悟しておいてね、輝夜。最悪、九十九さんは殺害を行った影響によって、感情が高ぶっていたり、精神が不安定になっていて、臨戦態勢になっている事態が考えられるわ」

「その時は全てを止めて、どうにかするわ。——もしそうなら、あなたはどうするの?」

「……出来る限り捕縛を試みます。……しかし、それが叶わず、万が一にもあなたに危害が及ぶようなら……」

目を瞑り、一息吐く。

「——殺します」

「……ほんと、私は良い師を持ったものだわ」

首を軽く左右に振りながら、意を決して扉を開けた。

音も無くスライドして、この視界が捉えたものは……。

真っ白な病室であった筈の場所は、床一面が色鮮やかな模様彩られていた。

どれもこれも見覚えの無いものばかりだけれど、何かの可愛いキャラクターが描かれた小袋や、無色の一升瓶が何本か。

真つ白な大皿には粘度の高そうな茶色い液体が付着していて、何かのソースカタレであつた事が伺える。

「……酒臭」

輝夜が呟く。

——宴会の真つ最中。

それ以外の言葉が思い当たらなかつた。

「幾らでも飲み給え！ 君の酒だがな！ 二日酔いなどという過去の症状など、我々は当の昔に克服しているのだから！」

「すげえ！ マジすげえ月の技術！ こりやアル中になるのも時間の問題だぜ！」

「問題ない！ それすらも解決済みだとも！」

「うひょー！」

二つあつたベッドの内、片側はもぬけの殻。——いや、そこには永琳が最近よく見るものとなつた、『ジャンドールの鞍袋』が無造作に置かれていた。

そしてもう片側には人影が二人。

それぞれに胡坐を掻き向かい合つて、片手にカップを。もう片手には何かの食べ物と思わしき品を持つて談笑し合っているのは、さて、一体誰であつたか。

「……永琳。何これ」

「……さあ」

こちらに気づく素振りすら見せずに話し合う男二人を前に、私達は現状を飲み込む事が出来ずにいた。

「……これで輝夜様がもう少し姫としての自覚を持つていただけのなら、私としても嬉しい限りなのだが……」

ふと、そんな会話が聞こえてきた。

どうも話題の中心は、身内の愚痴であつたようだ。

気落ちしながら、高御産巢日が内心を漏らす。

それに頷き同意の意を示しながら、九十九は手に持った酒を煽る。

「……まだ厳しいんじゃないか？ だってあいつ、完全に受身だろ。詰まんない、とか、退屈だ、なんて言っちゃいるが、自分から何かをしようとしてないだろ？ ただただ与えられた事をこなして、それだけで判断してるんだ。——楽なもんだよな。自分は何も生み出さず、気に入ったか気に入らないかの批判をすれば良いだけなんだから」

唐突だった。

あまりに脈絡無く告げられた私の悩みは、何よりも的確に不満の原因を貫いた。

立場故に、と言えば許されるかもしれないが、自分から何かを作り出すなど微塵も考へたことが無かつた。

居るだけで全てが転がり込んでくる現状を当たり前ものとし、そこに疑問を挟むことも無い。

これでは親離れ出来ていないのは誰なのか。

数刻前。永琳へとしたり顔で話しをした過去の自分を笑い飛ばしたくなった。

「……ふむ。君はあの方と殆ど面識は無い筈だが、どうしてそこまで考えるに至ったのかね」

「んなもん転……黙秘させてもらうわ。こればかりは今のところ誰にも話す気はねえし」

手に持った串に刺さる、焼いた肉片——焼き鳥——を頬張りながら、九十九はもしやもしやと口を動かした。

疑問に思いながらも、高御産巢日はそれを追求しない。

互いに思い思いの品を口に入れた後、全てをまとめる様に、九十九は言い切った。

「それに、あいつお子ちゃまだしな！」

——ピクリと。

何者がコメカミに筋を立てている。それに連動して部屋の温度が僅かに下がったのだが、それに気づく二人ではない。

「ほう！ 飯にもいずれ月の頂点に立つお方を子供だとは、また大きく出たものだ！

神をも恐れぬ所業、恐れ入る！」

どうやらツボに入ったようで、高御産巢日は声高らかに短く笑う。

「いやだつてよ、どう見てもあれ駄々っ子だぜ？」

「二応、公の場では見事に振舞つてみせているのだがね——ぬ」

ここで漸く、初老の者は輝夜達の存在に気がついた。

しかし、それを目の前で酒を酌み交わす人物には伝える様子は無いようだ。

しばし悩んだかと思えば、

「——輝夜様の何処が子供のように見えるのか、君の意見を聞かせくれないか？ 参考にさせてもらおう」

ちらと輝夜達に顔を向け、一瞬だけ底意地の悪そうな笑みを浮かべた。

「ああ〜？ ……何処が、つつつてもなあ……さつき言つた通りの内容なんだが……」

うくむ、と声を上げて九十九は悩む。

それを永琳と輝夜、そして高御産巢日の三人は無言のままに見守っていると、

「——だつてあいつ、貧相な体だしな！」

——着痩せするタイプだ。とは永琳の弁。

尤も、彼がそれを知るには幾つもの難題をクリアしなければならぬのだが。それを無くして理解しろ、とは困難な話である。

その瞬間、元司令官は、自分の体が震えているのをしつかりと自覚した。今の今までアルコールによって体が火照っていたにも関わらず、だ。

調子に乗った自分に後悔するが、それを悔やむ暇は訪れるのだろうか。

特に近くにいた月の頭脳は表情が完全に固まっており、抜き身の刀を連想させる。

忘れてはならない。彼女は、月の頭脳は、蓬萊山輝夜の師であり、従者であり——彼女を親愛しているのだと。

最愛の存在を貶された者がどういふ感情を持つか。推して知るべし。

「雰囲気だけなら十点満点で十二点とか余裕なレベルなんだけどなあ。……あく、いまいち男心つてもんを分かっちゃいねえ。あの我侭全開モードも人によっちゃやあ甘えてくれると受け取って好感触に繋がるんだろうが……。限界があらあな」

贅沢な感想だよなあ、と後に続けて呟いたものの、残念な事にそれは誰の耳にも届くことは無かった。

「九十九さん——」

そんな場に発せられた声は、輝夜のものではない。

その隣。

無の能面を貼り付けた表情のままに固まっていたと思われた八意永琳は、顔を変えることは無く九十九へと声を掛けた。

死神が見えた。

後に九十九は、永琳の姿を見た時の心境を、そう述べたと云う。

「ん？ —— あ……え……永琳……さ、ん……」

気まずさや情けなさや嬉しさがミックスされた感情が表れるかと思えば、九十九が第一に感じ取った気持ちは、恐怖。

彼の耳には自分の血が引く音が、しっかりと聞こえていたに違いない。

「元氣そうで良かったわ —— 心配していたのよ —— ？」

「あ……あり、いや、あ、……ご、ごご、ご心配をお掛けしまして……」

「ええええ。構わないわ。あなたが無事で居てくれたのなら、それに勝る喜びは無いもの。 —— ねえ、輝夜？」

自称・地上人の体が一瞬痙攣した。

そうして振り向いた彼の瞳には、月の姫君の姿がしっかりと写り込む。

油を差していないブリキの玩具のように固定された首をギリギリと回しながら、その顔にはもはや喜びや楽しみといった暖かな感情は見取れない。

言葉もなく固まった彼の顔からは、誰から見ても、段々と血の気が引いているのがありと分かってしまう程であった。

「そうね。私としてもこれほど喜ばしい事は無いわ。 —— あなたには色々どご高説を

聞かせて頂いたのだから、蓬莱山として、月の姫として、何より私自身として、あなたにお礼がしたいの」

こんな貧相な体でもよければ、と。

そう付け加える輝夜に全部聞かれていた事実を知らされ、とうとう九十九は気絶一步手前の精神状態へと陥った。

「あ……あ……」

辛うじて言葉を発するものの、それは意味を成さない単語にしかならず。

「あら永琳。九十九さんは目覚めて間もないせいで、未だに精神が不安定のようよ」

「そうそれは大変ね。なら体を動かして気分転換をしましょう。血流が巡れば意識もはつきりしてくるでしょう。——幸いにも兵器実験場が空いているわ。そこなら、幾ら体を動かそうと影響は少ないわよ」

体を動かすだけならば、そんな場所など不要。

頭の片隅でそんな事を考えている九十九であつたが、それを言葉にする……勇氣が無い。

「九十九さんは体を動かさなきゃいけないんだもの。能力を使って何かを呼び出すなんてしたら、意味が無いものね」

月の頭脳が天使の声色で囁いた。

もはや王手。後はただただ、処理を待つだけの家畜が一匹。

彼に許された選択肢は、焼肉か、燻製か、腸詰か。何をとっても絶望からの死しか待ち受けていない。

美女と美少女二人に思い——何の思いかは言わずもがな——を寄せてもらえるとは何と幸運なのだろうと。

襟首を掴まれ、ずるずると輝夜に連行されてゆく者を見ながら、高御産巢日は残った酒を一気に煽る。

しかし決して自分はそうはなるまいと思う彼を、誰が責められようか。

——これにて、元月の軍司令官の役目は終わり。

後は彼女達が蟠りを残さず、打ち解け合ってくれるのを願うばかり。

結局、彼からしてみれば、九十九も輝夜も子供なのだ。

子供の仲裁方法など、古今東西たった一つ。

そう思い、彼女達が入室した際にそれを仕組んだのだが、存外うまくいったようだ。

……もう、二度とやりたくないが。

これで月の最大戦力を比肩、ないし上回る人員が月の姫の味方になってくれたのなら

御の字。最悪、敵にはならず居てくれるだろう、と。

そんな確信めいた思いが、彼の胸にはあつた。

「———こんな私にも、久しく忘れていた安らぎを与えてくれた事……。感謝する、地上から来た者よ。後は君の自由だ」

自害を決意した時に訪れた、かつて無いほどの安らぎに、初老の者は思いを馳せて、えもいわれぬ安堵と平穩に満ちたあの時の心境を思い返す。

どうにも自分は気張り過ぎていたようだ。

そう思えるのは、あの時、冷静に自分を見つめる機会があつてこそ。

……こんな老いぼれでも、また始められるだろうか。

ゼロどころかマイナスからの再スタートになったというのに、何処か彼の心は晴れ晴れとしていた。

———だが、忘れてはならない。

彼の者は軍において長を務めていた存在。それは、決して伊達や酔狂、ましてはただの努力程度で到達出来る地位ではないのだ。

地上人が帰還を果たした後。

彼との繋がりを仄めかせ、とある妖怪の月の侵略計画を利用し、再び軍部のトップに返り咲いてしまったのだから。

それを知る機会を得た九十九は、『ありえないんだぜ』と言いながら昏倒したという。

37 玉兔

私は今、しっかりと歩いているのだろうか。

何処か自分を第三者のような視点で観察している気になりながら、よく整備された路上を歩いていた。

いつもは何の意識もなく通っていた道が、やけに長く感じる。

私の後ろには二人。私と同じ色、同じ形状をしたブレザーとスカートに身を包み、接近戦用のナイフや拳銃。合成繊維ベストや強化ヘルメットなどの装備を整えた玉兔が油断無くついて来ていた。私がおかしな行動をしようものなら、即行動に移れるように。

行き先は……とある施設。

八意様が良く使う、主に兵器の試験運用を行う場所であったか、と霞掛かった記憶を読み取る。

普段訓練を行っている真横にあるそこは、度々、新兵器の爆発音や地響きが届いて来ていた。

故に、分かる。

恐らく私は死ぬのだと。

建国以来、数十万年に一人か二人、死刑となる者が居るのは知っている。

穢れの問題と聞いているけれど……、殆どは生きたまま太陽系の外へと送り出される宇宙葬だが、その際には全ての報道機関が挙つてその問題を取り上げ、ある者は面白おかしく、またある者は戦々恐々と、死者への配慮など在于つて無いように、自由気ままに記事を書き立てていた。

まさかその乱痴気騒ぎを飾る一面に、自分が混ざる事になろうとは夢にも思わなかつた。

後ろの玉兎達が止まる。施設の入り口に到達したのだ。

重厚そうな銀色の扉が開き、鉛になってしまったかのような足を何とか持ち上げて、前へと進んでいく。

閉まる扉。真つ暗な通路。

それでも足元には淡くライトが灯っており、こちらの意思など無関係に、私の行く道を指し示していた。

もう、逃げられない。

あの判決において、全てが決まってしまった。

命令無視。それが原因で軍のほぼ全ての戦力を喪失させてしまったという結果……数千万年働いても返せるかどうか分からない負債と、何より、他の全ての者の命を危険に晒してしまったという事実。

今更、もう戻れはしない。

例えば社会復帰出来たとしても、そのような者と関わりを持つとうなどという者など、居よう筈も無く……。

もはや自由など無い。死、しかないのだ。

だというのに、それでも今私はこうして生きている事へと縋ろうとする。

生きていればどうとでもなると思っていたのに、こうしてみれば、あのような行動に移ってしまった時点で、死しか待ち受けていなかったのだと気づかされる。

いつそ地上にも降りればまだ延命は出来るかもしれないが、既にその手段も段階も、失われてしまった。

仄かに照らし出される、鉄塊とも言える堅牢な壁……に見えた扉。

この先に、居るのだ。

この騒動の一端を担っている人物。

八意様に拾われ、害をなし、軍を壊滅させ——今、私の命を消そうとしている者が。『玉兎、レイセン。この者、軍の規律を乱し、危険に晒し、壊滅の一端を担った者。何より無許可で命を奪う暴挙に走った。一般人であれば弁明の余地はあるが、軍に所属する者としてその行動は見過ごせない。故に——』

判を下す八意様の言葉は、今も脳裏に残っている。

普段モニター越しで見ると温かな表情は見る影も無い。

法の番人とはこういうものかと。そう思わせるお方であった。

初めて会う事が、あのような状況になろうとは……

(やな人生だったな……)

心臓が痛い。

これから死ぬと分かっているのに、それでも胸の鼓動は『生きているんだ』と自己主張を繰り返す。

けれど、それももう終わり。

一瞬で終わらせてくれたのなら御の字。

長期に渡って、であったのなら……。

考えるのはよそう。

どうせ……これから嫌でも分かるようになるのだから。

「先遣隊所属、元軍曹、玉兔、レイセン。——九十九様のご意向に従うべく、参上致しますました」

恐怖で声も出ないと思つていたのに、口から出た言葉は、思つていたよりもはつきりしていた。

——判決の最後。

下された命は、月に害のない限り、地上人の意思を全て受け入れる事。

一生奴隷か、陵辱の限りを尽くされ打ち捨てられるのか。

あるいは私がやったのと同じ様に一瞬で頭部を撃ち抜いてくれるのなら、きつとすぐ楽になれるだろう。

(もう……疲れちゃったよ……)

今更ながら思う。私には、争いごとは不向きであつたようだ。

今なら、夢物語と馬鹿にしていたとある一説も信じられる。

輪廻転生。

死んだ者は別の肉体に宿り、再び新しい生を得るのだと聞く。

尤も、生前の行いによつて、生まれ変わる肉体は変化するらしいのだけれど。

(今度は……そう……。お医者さんなんて……素敵かな……)

あんな出来事を経験したせいだろう。誰かの命を助ける職が、とても素晴らしく、輝

いて見えた。来世というものになら、少しは希望を見出しても許される筈だ。

扉が開く。

鈍重そうな見た目とは裏腹に、音も無く開くその奥には――

「クラブツイストオー！」

――は？

「てめえコラ蓬萊山！ 力技なんて卑怯だぞ！」

「あはーっ♪ たつのしー！ 永琳！ これ幾らでもやっていいのよね！」

「構いません姫様。関節程度でしたら幾らでも、思う存分為さして下さい。――壊れ

「たらずぐ直しますので」

「永琳さん口調が丁寧過ぎマジ鬼畜！　そこにしびつ……てえー！　マジ関節いてえめじゃねえか基本スペック高すぎだこの野郎アダダダッ！」

「また『野郎』って言った！　私、女だって言ったじゃない！　あんた物覚え悪過ぎよ！」

「能力使って破壊不可なのは何で痛いんだよ！　関節は守れませんか!?　それともギヤグか！　後、こんな状況で前後の記憶なんか繋がるわきやねえだろおー！」

「あーもうっ！　能力だの何だのまた訳分かんない事言っ！　だから少しは自分の能力説明しないさっ！　よっ！」

「いーやーだあーだだだだっ！」

——私の記憶はそこで途切れた。

「ごめんなさいね。騒がしくて」

絨毯の紅、椅子やテーブルの茶色を基調とした室内。

四方の壁の一方にはフェムトファイバー製の無色壁が備え付けられており、その先の光景……そこで行われる多種多様の実験をマジマジと観察できるように設置された部屋であった。

実験場に隣接して建造されていた高級そうな調度品に囲まれたそこは、貴賓室と呼ばれるところである。

「い、いえ……ありがとうございます……」

借りてきた猫のように丸くなり、一向に事態が飲み込めないでいる元軍曹——レイセンは、目の前に差し出された湯飲みを手に取り、両手で優しく包む。

彼女自身いつこの席についたのか記憶にないが、どうやら昏倒する事態だけは避けられたようだ、との安堵はあった。

(良い香り……何の飲み物だろう)

そんな湯飲みを差し出した人物——八意永琳は、裁判で見た時とは一転し、いつも

彼女が目にしてゐるモニター越しの温和な表情になつてゐた。

永琳が差し出したジャスミン茶は、ここ月では生産不可能な代物である。数万年生きてきた彼女が知らずとも当然のもの。

勿論、それは某地上人が数日前ストック用に、と出してゐたものである。

「輝夜がどうしても、つて言つて聞かなくて。あのままだと部屋どころか自宅ごと塵にされそうな勢いだったから、連れてきちゃったわ」

そう気軽に言われてもどう返答すれば良いのか分からないレイセンは、『はあ』と一言相槌を打つだけで精一杯であつた。

「あ、あの」

「んっ」

あの時出会つた人物とはとても思えない、木漏れ日のような笑顔で反応され、一瞬レイセンは戸惑うものの、意を決して質問を続ける。

「私……あの……。九十九……様、の指示に従つてここまで来たのですが……」

それが何であんな状況に？

続く声でそう言おうとしたのだが、その先の流れをすぐに察した永琳が、苦笑と共に答えてくれた。

自分の手元に置かれた湯飲み、レイセンと同様のジャスミン茶を注いでる。

そうしてレイセンと丁度対面となる形で席に着き、少しの溜め息を付いた後、ぼつぼつと話し出した。

「そうね……まずは現状に至るまでの話でも——」

閉廷の後、綿月姉妹はそれぞれの職務を遂行する為、すぐさま奔走する羽目となった。豊姫は世論調査と操作を。依姫は役職の引継ぎと、除隊の後に再度一兵卒として入隊する為。

そして永琳も、僅か数日とはいえ溜まりに溜まった仕事を消化すべく、何から手をつければ最善かを模索している段階に事は起こった。

自宅謹慎となっていた筈の輝夜が『会いに行く』と呟いたのだ。

今更誰に、とは言うまい。

実力行使も何のその。

何より能力まで使って外出しようとしていたので、従者がすぐさま永琳へと連絡を入れた。説得してもらおうと思っただろう。

だが悲しいかな。その時の永琳には輝夜の行動を阻害する思考がとても薄かった。

むしろ逆にその展開を望んでいたとばかりに輝夜に絆されたように見せかけながら、大手を振って九十九の下へと向かって行った。と、後で分かった輝夜は憤慨したそうだが。

お目付け役と思われる者は容易く手の平を返し、反対勢力へと鞍替えしてしまう事態は、彼女を説得した輝夜以外の誰にも予想出来なかった。

月の姫君と月の頭脳の二人の意思は、もはや誰にも止められぬ絶対権力。

そうして意気揚々と高御産巢日と話をしていた病室へと乗り込み、『ちよつと顔貸せ』的な流れで実験場へ拉致してしまった。

その少し前に、九十九はレイセンへ自分の下へと向かうよう指示を出していた。

第三者——高御産巢日——を通しての要望であったが、彼女への絶対命令権にまで昇華していた九十九の発言は、あつという間に営巢にて拘束されていたレイセンの元へと届き、けれど、それを指示した張本人は、荷馬車で植わられて行く子羊の如く連れ去られており——移動していた地上人と月の姫達は、既に病室には居なかった。

結果として、突如変わった移動先である実験場へと、こうしてレイセンは訪れる事態になったのである。

「——と、周りからの情報を統合すれば、そういう流れが見えてくるわ。彼があなたを自分の下へ呼び寄せたと知ったのは、今さっきだけだよ」

こんな感じかしら。と、永琳は小首を傾げながら憶測を口にする。

そうなんですか、としか答えられないレイセンが、それでも何とか口を動かして尋ねた事と言えば……、

「あの……それで、私はどうすれば……」

話を聞き終え、色々と尋ねたい事はあつたが、まずは自分の行く末を聞かなければおちおちお茶すら飲んでいられない。

湯気を立てていたジャスミン茶が温くなっているが、それでも未だに口を付ける気にはならないでいた。

「そうね……」

顔を俯かせた後、すぐ元に戻し、

「輝夜、そろそろ止めて上げて」

喋る声は集音機か何かに拾われているようで、遠くに居た輝夜の元へと、一言一句しつかり聞き取れるだけの音量となつて届いた。

「えー、やつと何も言わなくなつたのよ？ これからが弄りがいがあるのに」

その条件は輝夜も同じ。

二人の間の声は拡大され、互いにはつきりと認識可能な程に大きくなつていた。

「はいはい、人形遊びは後に幾らでも出来るでしょ？ 先は長いんだから、今度こそ優先

順位くらい守つて頂戴」

不満そうではあつたものの、間延びした返事をした輝夜は、その場——実験場から

出て行つた。

人形遊び、との言葉には誰も反応しない。

後はただ一人。ボロ雑巾のようになり果てた地上人が、物言わぬ軀となつて横たわるのみである。

ドアが開き、輝夜がホクホク顔で入室した。

楽しんで弾む胸や肩からは、彼女がどれだけ体を動かしていたのかが見て取れた。

「あーすつきりした。良いわね権力つて。こういう時は本当に。……これからはもつと行政の方に力を入れようかしら？」

「あなたの場合は何が切欠であっても構わないから、少しは姫らしい振る舞いをしてほしいわ」

「公私混同は避けてるわよ。もう」

「普段からそうして。と、言っているの。あなたの場合、またいつ何時にもその猫かぶり
が剥がれるとも限らないんだから。九十九さんを相手にした時みたいに、ね」

うっ、と表情を曇らせて、輝夜は永琳やレイセンが腰掛けているテーブルへと着席した。

永琳が配膳したのだろう。既に彼女の目の前には茶が置かれている。

それに軽く感謝の意を述べ、一口啜った後で、輝夜はレイセンに口元に笑みを湛えな

がら顔を向けた。

「それで——玉兔が私に何の用かしら」

本人は気軽に喋っているつもりなのだろう。

事実声色だけを聞けば、それは友人にでも話し掛けるかのように気軽なものであった。

だがそれを言うは蓬莱山。

武にて綿月依姫と並び、知にて綿月豊姫と比肩し、師に月の頭脳を据える者。

自力が並ではない故に、ただの玉兔であるレイセンがその威圧感の前で平然としていられる訳が無い。

「え……………あ……………」

ただでさえ今は心が崩れ去りそうな程に弱っているのだ。九十九風に言うのなら、
『こうかはばつぐんだ！』と合いの手を入れていたに違いない。

辛うじて話せた言葉は今言った、たった一言。

消えてしまいうるような小声。意味の無い単音。

これでは流石の輝夜も少し気を使う。

「……………はあ。あなた、ちよつと気負い過ぎね。というか私にじゃなくて、あいつに用があるんだっけ。——じゃあ、とりあえずその懸念から払拭しちゃいましょうか」

輝夜も知っている。

これがあの九十九への狙撃を行った者だど。

然るに、彼女が何故ここに居るのか。どうしてこうも諦めの境地に近い程に怯えているのか、過去の見聞きした情報と統合され、今レイセンに必要な言葉を弾き出す。

「永琳」

「はい」

月の姫に名を呼ばれ、その意図を察した彼女の師は退出する。

しばらくすると、外の物言わぬ軀となっていた地上人を軽々と担ぎ、そのままこちらへと連れて来た。

肉塊を柔らかな絨毯へと、仰向きに寝かせる。

変わらず意識を失っている九十九の体を、その白百合のような両の指が這い回り――息つく暇も無く、全身に何かを施した。

全身のツボを突いたのか、外れていた関節を繋ぎ合わされたのか。

あまりに一瞬であった為にレイセンの目には何を行ったのかが殆ど分からなかったが、ペキパキボキという快音が聞こえたかと思えば、九十九が二度三度体を痙攣させた後、

「――がっ！ げほっ、ごほっ……はっ!? ……死ぬかと思った」

本当に関節があつたのかも怪しいほどに捻じ曲がつていた体は元の形を取り戻し、安堵の吐息と共に、よく自分が生きていた、という感想を口にした。

軟体生物一步手前になっていた筈であつたが、どうやらしつかりと人型生物としての機能は取り戻したようだ。

「おはよう、九十九さん」

「……お、才早ウ 御座イマス。永琳サン」

表情が硬い。口調も固い。汗が止め処なく吹き出ている。

何より、彼女を見る九十九の目が恐怖に染まっていた。

「輝夜の相手をしてもらった後で申し訳ないんだけど、あなたが呼んだ玉兔が来たわよ。用件を伝えて上げてもらえるかしら」

「え？ ああ……」

一転、何処かふ抜けた空気はその温度を変えて、徐々に低下していくのがレイセンには分かった。

とうに覚悟して——諦めていた筈だった生への執着心が顔を覗かせる。

姫様が居て、八意様が居て、こちらの殺生権を握っている地上人が居て。

例え今、全てをかなぐり捨てて逃げ出したとしても、無駄な足掻きの何者でもない結果にしかならない、と分かる力の差。

戦闘訓練において玉兎の中では平均以上の成績を出し続けてきたが、そんなものの、この場においては何の役にも立たないのだと悟る。

「来い」

動かない彼の近くへ移動する。

足が竦んで動かなくなるかと思っていたのに、自分の意思とは裏腹に、何者かに操られていたみたいにフラフラと、緩慢な動きで側へと辿り着く。

ゆっくりと、地上人の手が伸びる。

こちらの顔へと向けられたそれは、何かを掴むように、だらんと開かれた五指が、まるでこちらの魂を抜き取ってしまう死神の鎌に見えて――

「っー」

目を瞑る。

生が終わるのか、地獄が始まるのか定かではないけれど、きつと私の何かが終わるのだと思う。

過去の出来事が思い返される。走馬灯という現象であったか。

全ての人生を思い起こしながら、ああこれで、と達観に満ちた気持ちの中――

ずぼっ

「ふあへ!？」

レイセンは思わず目を見開いた。

想像していたものの、どれも違う感覚に疑問が沸き上がるのと同時、彼女の顔面——鼻の穴に、地上人の指が二本、突き立てられている。

ただそれは口径の差異のせいで、実際には入り口を塞ぐ程度のものでしかなかったのだが、それを行った張本人である者は、実に楽しそうな——『ヒヤツハー! 汚物は（ry』系のものではなく、『デュフフ、コポオ』方面の、ガンジーでも助走つけて殴るレベルの憎々しい笑みを浮かべていた。

少し前までボロ雑巾のようになっていた面影など無い。

輝夜が手加減していたのか、九十九の自力が凄いのか、それとも永琳の治療が優れているのか。

色々と投げ出したくなって来ていた精神状態に王手を掛けたその行為に。

とうとうレイセンの心は限界を超えたのだった。

やらかした。

感想はその一点のみ。

軽いジョークのつもりだったのに。これはイケメン限定で効果を発揮する行為だったかと悔やむ。

我ながら子供じみていると思ったが、痛くも痒くもないから良いだろうと思った報復は、どうにも精神面で限界であった彼女の最後の一押しを手助けてしまったようだ。

「あ……その……すまん……」

立ち尽くしたまま顔を伏せて、両の手で覆っている。

声無く涙を流すレイセンに、本来ならば張り手やら罵倒やらの反応を求めていたというのに、よりにもよってただ涙を流させていた。

(勇丸に足ペロさせた後の神奈子さんとか、感情爆発してた輝夜みたいな反応期待してたんだが……マジ泣きか……)

全く相手を知らないが故に、殆ど謝罪する気持ちは持ち合わせていないが、それでも見ず知らずの子供を泣かしてしまった心境に似て、内心でオロオロと右往左往する羽目になっており……。

何より、体に突き刺さる視線が痛かった。

鉄の処女、アイアンメイデンもかくやと言わんばかりの輝夜と永琳さんの無言の圧力は、それだけで、どんな言葉よりも雄弁に彼女達の意思を感じられた。

「どうして……どうして私がこんな目に合わなきやいけないの……」

嗚咽交じりに聞こえるレイセンの声に、『そりやお前が撃つて来たからだ』と言えたのならどんなに楽だったか。

しかし悲しいかな、今この場において俺は孤立無援。

おまけとばかりに相手には援軍がおり、それは月の姫と月の頭脳。

仮にこの状態で裁判でもしようものなら、俺が生きているだけでも、わいせつ罪などの名目から無期懲役か死刑かに持つていかれそうだと断言出来た。

「可愛そうに。命が掛かっているからと健気に勇気を振り絞った結果があれじゃあ、悔やんでも悔やみきれないわよね」

「九十九さん……流石に今のは……どうかと思うわ……」

輝夜がゴミを見る目で睨み、永琳さんが弁護出来ないと言いつつ諦めながら、それぞれの思いを口にした。

「いやもうホント、その辺は今ヒシヒシと実感してますんで勘弁して下さい。謝りますから」

「……あんた自分がやらかした事分かつての？　よりにもよつて、あんな形でうら若き乙女を身も心も穢したのよ？　その謝罪が『勘弁して』？『謝りますから』？」

「……大変申し訳ありませんでした」

深く頭を下げた。

何この魔女裁判。いや、俺は男だから魔男か。……語呂悪いな。

というかお前ら歳幾つだよ。どこまでが『うら若き』なんだつてんだ。

「——ま、冗談はこれくらいにして」

ヲイ。

「レイセン、と言つたわね。安心なさい。こいつはもう、あなたをどうこうする気概は無いわ。奴隷するでも苦痛を与え続けるでもない。今ので全部チャラだそうよ。——

そうよね？　九十九」

「いや、何でお前が仕切つてるんだよ。それは俺が決める事であつてだな」

と、永琳さんが哀しげな顔を向けて来た。

「……九十九さんは、これ以上彼女に何かしようと言うの？」

白旗だ！　白旗を用意しろ俺！

「いえこれで全部終わりですあんな事したんですもんもう充分ですともはい」

……もういいッス。別に始めから望んでたもんじゃありませんでしたし。

元から無かったもんなら、今無くなったって問題ないツス。

……一度くらいは何か命令してみたかったんだけどなあ。

「あんた今何か思った？」

「……いえ何も」

何だよ「思った」って。「言った」じゃねえのかよ。

「で？」

「ん？」

何、その疑問系。

まだ何かしろとでも言うつもりか。

ジト目で見やがってからの。ちよつと、ときめいちまったぞこの蓬萊野郎。

「あんた、これからどうするの？」

……ああ、そっちの疑問ですか。

「……どうするって言われてもなあ」

怒涛の展開に対して舵を取ることに必死になっていたせいで、目的地への操舵など二の次になっていた事を実感する。

最終目的は、当初の予定通り、地上への帰還。

だがこうして色々と経験した身としては、このまますんなり帰るのも胸が痛む。とい

うか、まだ永琳さんと豊姫さんへの贖罪が完了していない。金銭面としても。

「そりやお前、永琳さんと豊姫……さん……に、謝るまでは帰らないつもりだが……」
「ふうん。一応罪悪感みたいなのはあるのね」

「お前にや欠片も無いがな！」

睨む俺。睨む輝夜。困る永琳さん。

段々と嗚咽も落ち着き、軽く達観モードに入っているのか、何をするでもなく赤い瞳を濡らしながら、こちらを観察し続けるレイセン。異様な空間であるのは疑いようもない。

「遅くなりました。綿月依姫、並びに綿月豊姫。到着し——」

そんな異世界へと脚を踏み入れてしまった者が居た。

はたと気づいて出入り口へと顔を向ける。

そこには『一体何これ』との文字を額に貼り付けた依姫と、柔和に微笑む——何を考えているのか分からない豊姫が並んで立っていた。

「ああ、ごめんなさいね。忙しいのに時間を取ってもらって」

「い、いえ。それは構わないのですが……」

「永琳様。私共は用件を全くお伺いせずにいるものですから……その……」

「こちら——この光景をサッと見て、豊姫が怪訝な表情を作る。」

「これは一体どういう状況なのですか？」

彼女の尤もな疑問に答えるべく、永琳は事のあらましを話し出した。

重厚な木製のテーブルに座りながら、各々が意見を交換し合う。

数十分前から始まったそれは、もうそろそろ分から時への単位へと移行しても良い程に増えていた。

「じゃあ、九十九さんはそれで良いわね？」

机の中央へ鎮座している永琳が自然と進行役のポジションへと収まっている。

それに誰も異を唱える事などせずに、むしろその役を引き受けてくれた事に感謝していた。

「はい。それで構いません」

頷き同意する九十九の目は真剣なもの。

それを察してか、輝夜ですら茶々を入れるような真似はしていない。

「では、九十九さんが依姫に対して保有していた命令権は、同じく九十九さんに下された豊姫への賠償と相殺。無効となりました」

一応の一段落。

個人的な謝罪は別として、定められた贖罪の清算はこれで完了した。

「九十九」

今まで必要最低限の言葉しか口にしていなかった依姫が、こちらへと声を掛けてきた。

「その……ジエイズ殿は……」

「ああ……」

なるほど、確かに彼女からしてみれば、それも気掛かりの一つだろう。

「今は呼ぶ気は無い。……安心してくれ。別にお前と会いたくないだとか、会わせたくないだとか、そういう理由じゃあ無い。怨恨じゃない。そういう状況だっただけ、だからな」

「ならば、何故……」

切り札に使用制限あったんだ、なんて口が裂けても言えない。というか口が裂けたら言えない。

ポンポンと頭が回ってくれたのなら良かったのだが、情けない事に、これに対して明

確な答えは出て来なかった。

「秘密だ。いずれ、な」

何か言いたい言葉があつたのだろう。

それを言い掛け、最後の一步を踏み出す事無く飲み込んだ依姫には罪悪感を覚えるが、いずれ5 マナ域が開放されるまでは待つて頂くしかない。

「では、後は永琳様の件で終わりになりますわね」

手に持った扇を弄びながら、豊姫がそう告げた。

……やはり依姫へ色々とやらかしたせいかな、彼女が俺に対して抱いている印象はかなり悪そうだ。

出会つてからすぐ軽く自己紹介をしたのだが、事務的というか機械的というか、ニコリともせずの名乗りを終えた彼女に対して、俺は内心でビビりまくつた。

怒りとも殺気とも嫌悪とも。一体どういう感情なのか全く分からない彼女に、ぼやぼやく、な原作のイメージは完全に払拭されて、脳内にて、『読めない女』のレットルを豊姫に対して貼り付けていた。

「そうね。では——私、八意永琳は、九十九に対して、戦力の提供を要求します」

「……提供、ですか」

何が言いたいのか何となく分かるのだが、さて内容はどのようなのだろうか。

「そう。高御様から聞いたわ。こちらに永住する気は無いのでしょうか?」
「そう、ですな……」

地上と比べれば、それこそ楽園とも言えるここ月の都市への永住を希望しない。

エアコンテレビ冷蔵庫云々ではなく、そも電気どころか、屋根がある状況すら幸せである世界へ戻る。普通に考えたのなら、刑罰にも等しい環境なのは間違いない。

初めて降り立った場所がここであつたのなら、むしろ頭を下げて何とか住まわしてもらえるように努力しただろう。

しかし……。

(……別れたくないもんな)

脳裏に写る、ここ数年の出来事。

経験する全てが新鮮で、そんな素晴らしい日々の一部である村人達の優しさと、それをまとめる小さな神様を思い出す。

離れる事に苦は無いが、離れ続けるのは我慢し難い。

あれらは、それだけ自分の中で譲れないものであつたのか、と改めて実感した瞬間でもあつた。

「出来ればずっと。と言いたいんだけど……」

何かを思案した後、永琳さんは具体的な項目を述べた。

「こちらからの要望があった場合に戦力を提供してくれる、というのが妥当な所かしら。最低でも、こちらの軍の補填が終了するまでは常勤出来る者や物をお願いしたいんだけど」

どうかしら。と尋ねてくれるのは、一見選択肢があるように見えて、そんなものなど存在していないのが実情。

出すものによるんだろうが、出来れば勇丸以外にずっと維持するものが無いようにしたいのが本音ではある。

というか、俺は地上へと戻るのが前提なので……、どうやって何かあった時に月へクリーチャーやら何やらを送り出せというのか。転送装置でも持つ羽目なる……んだろ
うか。嵩張らないと良いんだが。大きいと嫌だなあ。

「分かりました……。ちなみに戦力って、どんな感じのを？」

多分、ジェイスやマリさんのどちらかだとは思うのだが、一応確認しておかなければ
ならない。

誤解は宜しくない、というのは今回の件で身を以って実感したのだから。

失敗は活かしてこそ、だ。

「そうね……」

それに対して永琳さんだけではなく、綿月姉妹や輝夜までもが何やら考え出した。

あれ。てつきり、既に答えは決まっているものだとばかり思っていたのだが。

「逆に尋ねるわ。——九十九さん。あなたは何を呼び出せるの？」

そ、そう言われても……。

「すいません。質問の幅が広過ぎて、ちよつと正確にお答えし兼ねます」

反応は様々だった。

愉快そうに頬を吊り上げる輝夜。真顔に考え込む永琳さん。口元に扇を覆い鋭い視線を向けてくる豊姫に、永琳さんと同じく、口元を握り拳で隠しながら思案する依姫。

そして、もうやだお家に帰して。と顔に書かれているレイセンであった。

(レイセンの反応がころころ変わって……)

大変申し訳ないのだが、ゆくゆくは彼女をからかう事になるのであろう、永琳さんや輝夜、てゐの気持ちが良い分かる。

……あれ、その設定は二次創作の中だけだったか。誰か教えてプリーズ。

「その……何だ……レイセン」

呼び方に迷ったが、結局そのまま呼ぶ事にした。

「は、は、……」

何かに縋る様な視線を周りに向けた後、その縋るべき何も無いのだと諦めた顔をこちらに見せる。

俺が仕出かした事など棚に上げ、ちよつと過剰なのではと思う反面、こんな性格だから原作でも地上へと逃げ出したのかと思う。

そも他の兵隊——玉兎達は動いていなかったのだ。

一際臆病な者なのだと思う事に、何の疑問を挟めというのか。

「気休めな言葉だが……俺はもうお前を狙わない。むしろ何かあつたら守つてやる。だから、もう少し肩の力を抜け」

銃弾受けたとはいえ、恨みの炎が鎮火してしまった今となつては、見ず知らずの相手に高圧的な態度は違和感が残る。というかやりたくない。せいぜいタメ語が良いところ。

偉そうな口調で守つてやる、など俺は何様だと内心で呟いた。

もつと別にうまい言い方はなかったのかと後悔しながら、それでも未だに怯え続ける彼女に、ふと、ある事に考えが向かう。

「永琳さん」

「何かしら」

「そのレイセンなんですけど……。彼女はこれからどうなるんですか？」

「……あなたが命令権を破棄したとなれば、後は本人が全てを決めるだけになるわ」

「……その決める自由……つていう奴は、今の彼女に対して、どれくらい残ってますか

「？」

こちらの言いたい事が伝わったようだ。

少し目を伏せ考えた後、永琳さんはレイセンが知りたくなかった——知っていても認めたくなかった事実を口にする。

「現状、今の彼女は死罪と同等以上の刑罰を受けている。社会的には——既に死んでいるのよ」

レイセンの瞳が閉じられた。

声無く流す涙に、彼女のテーブルには雫が一つ二つと記される。

ああもう、涙のオンパレードだな今日は。

「俺が言えたもんじゃ無いが……」

そうもずっと泣かれると、こっちまで悲しい気分なってくる。

「依姫。こいつ、そっちで使ってやってくれないか？」

その時、この場にいた俺以外の誰もがギョっとした顔を浮かべた。

な、何だ。確かに突拍子も無い言葉だとは思いますが、そこまで反応するもんだったか。

「……それは構わないが、何故私なんだ？」

「いやまあ、我ながら唐突だなあとは思うんだが……」

頭を掻く。

刺さる視線が妙に痛いのは何故なんだろうか。

ただ、泣き濡らした赤い瞳をまん丸と見開いたレイセンの反応が楽しくて。それだけが唯一、俺の心に愉悦の色を着色する。

ジェイスが居たのなら、きつとこんな選択肢は無かった筈。思い入れがある。

理由はきつと、それだけだ。

その過程が無かったのなら俺はきつと、今こうしているレイセンに対して心は痛めても、それを手助けしようとは決して思わないだろう。

理由が理由だけにぶつちやける訳にもいかず、仕方ないので『何となく』路線で通す事にした。

ほんと。学が無いと、こういう時に困ったものである。

「何なんだろうな。———そうしたかったから。……って事で納得してもらいたいんだが」

どうだろうか。ダメだろうか。

確か原作では、初めは綿月姉妹に飼われていた筈だった。

それだけが理由で永琳さんでもなく輝夜でもなく、彼女達———声を掛けやすかった依姫へと頼んだだけなのだが、これ以上突っ込まれたら言い逃れ出来ないですよ、俺。

「……分かりました。その者は我ら綿月家が受け入れましょう」

しかし俺の提案に答えたのは、依姫ではなく、その姉である豊姫だった。

「姉上、宜しいのです？」

「ええ」

それつきり俺を視界に入れることもせず、またも無表情の鉄仮面へと戻る。

うう、嫌われるなあ。謝るところか、むしろ借りが増えちゃいましたよこれ。

「……どうして」

と、驚きの表情をしていたレイセンが言葉を掛けてきた。

いや、それともこれは、ただの眩きだったのだろうか。

スルーした方が良かったというのに、KYスキルの高い（悪い方に）俺は、それに答

えてしまった。

「さつきも言った通りだ。何となくだよ、何となく」

「……分からない。私はあなたを殺そうとしたのよ？ それなのに、どうしてそんな事

が言えるの」

そりや尤もな疑問なんだが、さつき思ったように、生憎と具体的には答えられん質問

です。

「何だ、死にたかったのか？」

「——そんな訳ないじゃない！」

感極まった声に面を食らい、そして、分かった。

今、彼女の心は限界を迎えているのだ。

崩れた日常。いつ消えるとも分からない自分の命。そしてそれを容易く弄ぶ俺の存在。

人間、三つ以上環境が変わると、かなりの負荷を伴ったストレスを感じるという。人間関係、活動地域、口にする食べ物、職場。考えられる要因は様々だ。

彼女の場合はそのどれもが当てはまるであろう事が容易に想像出来て、何よりも生きるか死ぬかの瀬戸際であった。

黙っていれば良いのに。とも思う反面、仕方ないか、とも考える。

「そうだなあ……。お前がどう生きていくのか興味があった。……じゃ、ダメか？」

「……落ちぶれてく私を見て楽しもうって言うの？」

「……俺もお前の立場なら、そういう考えをしているだろうから、共感出来ますが。」

「だってお前、中々の能力を持つてるからさ。そのまま育つたなら、どうなるかなって」

——ちよつともう限界。

なので、転生者の利点。アカシックレコード（原作知識）を活用する事にしました。キ

リッ。

詳細は話せないので、強引に押し通す方針で。

「……能力？」

不満と疑問の合わさった声を上げて、レイセンが慥然と答えた。

ぬ。その様子じゃあまだ能力は開眼してないっほい。ちよつと先走り過ぎたようだ。

「まあ良いじゃないか。何はともあれ、これで食いつばぐれる事は無くなったんだ。とりあえず満足しておいてくれよ。何せあの綿月家だろ？ んで、この人達だ。決して悪いようにはしないさ」

綿月の性を持つ者がどの程度の家柄なのかは知らないが、上流階級に位置しているのは間違いないだろう。少なくとも中流以下の者達に比べても、色々と融通が効く筈だ。

人柄としても、姉の方は俺に対する印象は最悪だとしても、レイセンになれば多少の温情は示してくれる……と信じたい。

それに、依姫は厳格ながらも面倒見の良い性格であった筈だ。

全くの見ず知らずの相手よりも、まだ信頼出来るというもの。

これ以上突っ込まれる前に、話題を終わらせる。

まだ何か言いたい様子ではあつたけれど、こちらの態度を見て察したのだろう。口を

喋んでくれた。

「ん。すいません。話が逸れてしまいましたね」

流れをぶった切つてしまった事を永琳さんに謝罪する。

「……ええ。良いのよ。面白いものを見れたし」

何と。レイセンが切羽詰っている状況を楽しんでいたとな。

……絶対違うんだろうが、それ以外に俺はどう考えれば良いのか分からんですよ。

「戦力提供の件は、もう少し待つて頂戴。要望を纏めておくから」

俺達を見渡した永琳さんは、一息ついてこの話の流れをまとめ始める。

「では、これで全ての話しは纏まったとします。後は九十九さんが何処までこちらの要

望に応えられるかのみ、という事で——解散しましょうか」

誰も異論は無かった。

今までの混沌とした場が嘘のように、波引く砂浜の如く、一人二人と退室していく。

「じゃあ、九十九さんは、また病室の方へ送っておくわ。外に玉兔を待たせてあるから、車に乗つてくれれば、すぐよ。結果は……そうね。明日か明後日にでも報告させてもらうわ。それまでは休息に専念しておいて」

「げ、またあの爺さんと相室か……」

まあそれはそれで構わないか。と思ひ直す。

弱味に漬け込まれたような関係だが、あれはあれで楽しかったのも事実。またあの時のようになれたら、と淡い期待を抱きながら、未だに輝夜からのダメージの残った体を引き摺って部屋を出た。

「……さて、もう良いかしら」

九十九が退出してから、しばらくの後。

永琳とレイセンが残るのみとなった部屋には、再び人気が増え始めた。すぐに退室した綿月姉妹を始め、輝夜までもが戻っている。

理由は一つ。

今の今までここに居た人物に対する会議であった。

「しかし、参ったわね」

溜め息と共に漏らした輝夜の言葉に、誰もが内心で同意した。

「聞いた？ あいつ、永琳が何を呼べるのかって聞いたら、『質問の幅が広過ぎて』だって。そりゃ、呼び出せる種類は多いんでしょうけど、例えあいつが馬鹿だからって、こつ

ちがああの「マリット・レイジ」や「ジェイス・ベレレン」を基準としているのを理解出来ない奴じゃないわ」

つまり——。

「彼の者達と同等か……それ以上の者達を召喚出来る。と言っているようなものです」
「実際、如何致しましょうか。可能であれば、常時防衛の任に就いて頂きたいものではありませんが……」

輝夜の台詞に追隨する形で言葉を足した依姫に、豊姫が続く。

彼女の脳裏に、何かに悩む九十九の姿が映し出される。

永住を拒否した後のあの様子を思い浮かべれば、郷愁の念は当然として、常時召喚は難しい事が予想される。

それは然るに。

「あの者達は、彼によってこちらへ現界している、と思つて良いわね」

永琳の考えは、まさに適切であつた。

消したのか還つていったのかに疑問は残るが、それでも彼が気絶してすぐにジェイスや「マリット・レイジ」が消えた、というのは、関連性としては無視出来ない。

「万が一の事態になつたら、次は、即あいつ本人を狙うとして……」

「その場合は、九十九に思案の時間を与えてはなりません。色々と制約があるようです」

が、あやつには輝夜様の能力ですらも対抗策がある様子。確か、『プロテクション』があればどんな能力だって』と。『マリット・レイジ』の頭上にて、そんな単語を漏らしておりました」

「【プロテクション】……ねえ。依姫がそう判断したんだつたら可能性は高いんでしょけど……。最悪の場合になったら、どれだけ早く対処出来るかが鍵になりそうね」

「その場合には私の『海と山を結ぶ』能力を使う事も考慮致します。……依姫ちゃん。我が軍が元の状態にまで回復するには、どれくらい時間が掛かりそう？」

「最低でも二十年。皆様ご存知の通り、元々兵器の稼動ラインは一本しかなく、それすらも数千年は未稼働など当たり前。そも我らは、早さに疎い。悠久に等しい時の流れの中で、時間さえあればどうとでもなる、という考えが定着している為、一括生産に関する知識や技術、経験がほぼ皆無。全てが手探りで始めるしかないのが現状だと考えます」

「二十年、か。普段ならあつという間に過ぎていく年月が、今この時は何にも増して、もどかしく思えてならないわね」

「永琳様、如何致しましょう。あなた様のお言葉であれば、彼の者からの譲歩は、かなり引き出せるかと。軍が回復するまでの間のみ、という条件で再度交渉してみても。如何様なモノでも呼び出せる、との意味を匂わせていたのです。自身の能力を詳細に説明する気概が見受けられない以上、それこそ状況によってそれを把握してもらおう為、こちら

に縛り付けておかなければならないのでは」

「豊姫……。そうは言うけれど、九十九さんの寿命は我々とは違うのよ？ 地上の者なんて、良くて百年に辿り着くかどうか。幾ら穢れのないここ月での生活で、こちらの技術である程度の延命は可能だとしても、それでも三百年はいかないでしょう。地上に戻るのが目的であるのに、それを遅延させる要望は、幾ら彼とはいえ難色を示す筈よ」

「ですが、それでも受け入れるのでは？」

「……彼がああ青き神を呼び出す前だったら、そう思えたのだけれど……」

彼を呼び出した目的は、地上へ帰る為だったという。

それは、こちらの対応の遅さに不満があり——こちらの対応など待つてられないと言っているようなものだ。

「彼はいつでも帰還出来る。それでもここに残っているのは、倫理と情によるところが大きい。その情に漬け込んだ行いは、九十九さんの中で、こちらとの決め事を反故にする理由としては充分。」と思えるのよ」

「……悩ましいものです」

豊姫は目を伏せて、諦めの声を零した。

「今までは無駄だ無駄だと思っていた『時』も、こうしてみると短過ぎね。ホント、穢れなんて面倒なものが無ければもつと楽しめるんだけど……。じゃ、とりあえず九十九に

は何かクリーチャーを貸してもらおう方針で良いわね」

輝夜は「マリット・レイジ」の上にて移動していた時に、ある程度、九十九が使う用語を理解していた。

一応の方針をまとめた彼女の言葉に、反論する者は誰も居ない。

「で——レイセン」

月の姫の言葉に、今まで無言——萎縮し過ぎて何も反応出来なかったレイセンの体が震えた。

「あなた、本当に何の能力も無いのよね？」

「は、はい。これといった実感も兆候も無く……」

ふむ、と輝夜は考えた。

能力持ち。

それは一種のステータスであり、それを所持する者を一段上の存在へと引き上げる鍵。

当然、月においても能力の研究は行われているが、その能力の開眼は未だに解明されていない謎の一つとなっている。

あそこで『能力があるから』と九十九が言ったのは、決して数値的な意味での能力ではなく、スキルとしての能力のニュアンスだろう。

でなければ、あの異常な存在が、他者をあも気に掛ける理由が考えられない。

「本人にも自覚無し……ねえ。……それを何？ あいつは『中々の能力がある』って。——あいつはあなたの中に何を見たのかしら」

「それも九十九さんの能力によるものなのかしらね。これでもし本当に能力が発生したのなら——私は本当に面白いものが見れたと思うわ」

永琳が九十九に対して『面白い』と漏らしたのは、それが理由である。

その能力の解明には、かなり昔から永琳も関わっていた。

けれど、それでも解析不可能であった不可侵領域に達していたものを、サラリと覆すあの発言。もし本当であるのなら、誰もが驚嘆するに値するものである。

「豊姫は、それを見越して九十九さんの提案を受け入れたの？」

「……いえ。私はただ、あれだけの事を仕出かした彼が気に掛けた者——レイセン、あなたがどういった存在なのか、興味があっただけです」

「わ、私なんて……そんな……」

「ふむ……。軍に居た頃の記録を見る限りでは、優秀な結果を残してはいるが、突出した才能がある訳でも無いようだ。……やはりあやつは、お前に何かを感じ取ったのやもしれんな」

萎縮の境地に達しているレイセンを他所に、依姫が宙に表示された彼女の経歴を見直

した後、感想を述べた。

それを輝夜や豊姫も閲覧し、同様の感想に至る。

永琳だけは裁判の前に目を通していたので、それを気にする様子は無いものの、その表情からは感情の一切も読み取る事が出来ない、能面のような表情をしていた。

「私や輝夜にはなく、依姫。あなたに託したのも何か理由があるのでしよう。恐らく、あなたの『神々の依り代になる』能力が関係しているのでしょうね。……改めて確認するけれど、二人とも、それで構わない？」

その二人に、レイセンは含まれていない。

綿月依姫——ひいては綿月姉妹が面倒を見る、という事に対して意思確認であった。

「はい。これが贖罪になるかどうかは分かりませんが、ジェイス殿——いや、九十九の意思には可能な限り応えてやりたいと思っておりますので」

「私も、問題ありません」

同意する二人に対して、輝夜が疑問の声を上げる。

「依姫は分かるけど……豊姫。あなたがあいつに対して協力的なのが不思議なんだけど。一体どういう風の吹き回し？」

「……一言で言ってしまうえば、興味があるからです。この月でこれだけの事をした力も

そうですが、何より依姫ちゃんをボロボロにした相手ですもの。思うところは幾つもありますわ」

「……出会った瞬間に殺さなかっただけ良かったのかしら」

笑顔のまままで言い切った豊姫の裏に、彼女の意思が見て取れた輝夜は、額に手を当てながら溜め息をついた。

興味がある、というよりもむしろ、利用し尽くしてやる、という意図が煤けて見えた。

「——それに、彼には責任を取って頂きませんと」

その言葉に一同は首を傾げた。

残りの問題は、九十九がどう月の防衛戦力として機能させるか。という話題のみであつた筈だが、やはり彼女個人としては納得出来ない部分があるのだろうか。

「輝夜様」

「何？」

「九十九という人物。ずっと手元に置いておきたいと思いませんか？」

「……思うわね」

輝夜が九十九に対して抱いている感情は、少なくとも単なる暇つぶしの道具程度では

ない。

豊姫は満足気に頷く。

輝夜の意思さえ確認出来れば、後はどうともなると考えての事だった。

「依姫ちゃん」

隣にいた依姫と声を掛ける。

「あなた、彼に対してどう思ってるの?」

「……そうですね。今まで周りに居なかつた性格なのでうまく言葉に出来ませんが……
退屈はしないだろう、と。そう思えます」

そこで、輝夜と永琳は理解した。

彼女が行おうとしている、責任を取らせる、という言葉の真意に。

それに気づかないのは言われた当人と、もはや魂が抜け掛けているレイセンの二人のみであつた。

「豊姫……その、あなた……。あいつの事、結構憎いでしょ?」

「ええ」

おそるおそる尋ねた輝夜にも笑顔で答える豊姫だったが、その答えは尚更理解出来ないものであつた。

「だったら何故? 敵に塩を送るような真似を。大切な妹なんでしょ?」

依姫は話についていけず、額に皺を寄せながら事の成り行きを見守っている。

「それこそ、大切な妹だからです。出来うるだけ役に立ってもらいます」

淀みなく言い切った彼女に、永琳は彼女の意図を完全に理解したようだ。

既に共通の認識がある者同士の会話は、はたからみれば理解の及ばぬものであろう。

「私から言わせて貰えば、依姫はそこまで地位に固着する心は無いでしょうに」

「今はそうかもしれない。ですが、ゆくゆくは分からない。地位は剣でもあり、盾にもなるのはよくご存知でありましょう。お恥ずかしい話ですが、今のこの子は剣はあれど盾は無い。——アレに綿月の姓を名乗つてもらえば、周りの者から見ればそれは、我が家が彼の者を傘下に収めた風に写る。あのような出来事の後です。男女の関係など、誰も額面通りには受け取りません。別れる場合にも、禍根は少ないと考えます」

「でも、だからと言ってそれで縛れるかしら」

「それこそ、永琳様の仰られた倫理と情が強大な楔となつてくれるでしょう。今までの言動を鑑みるに、彼の者に契約者はおりません。一度決めてしまえば、彼はそれを遵守する可能性が高い。今が絶好の機会ではないかと」

「……虎の衣を借る狐、という言葉を思い出したわ」

「その狐は、元は虎でありますれば」

二人の間でトントンと会話が進む中で置いてきぼりを食らった依姫が、とうとう耐え

切れずにその疑問をぶつけた。

「あの……一体どのようなお話をされているのですか？」

優しく微笑む豊姫と、真剣な表情で熟考する永琳。

そして、やれやれと首を振りながら、輝夜だけが依姫の言葉に答えてくれた。

「だからね——九十九とあなた。夫婦の契りを結びなさい、と。あなたの姉は、そう言ってるの」

金糸の髪を持つ者は微笑み。

銀糸の髪を持つ者は考える。

それを見て月を統べる者は呆れ。

闘姫たる者は思考を放棄した。

後はただ、既に魂の抜けた者が、一人。

それが、この場に居る者達の全てであった。

38 置き土産

「次……は……。これか？ はいはい、今持つてきます——よつとー」

今度のは中々に重量があるようだ。両の手にズシリと手応えを感じる。

重さに抵抗しながら、力士の摺り足を数段かつこ悪くした移動方で彼の元へと近寄つた。

その姿は、やはり変な格好だったようだ。

こちらを見て愉快な声を上げて笑われるのを、『ひでえ』と悪態を付きながら、釣られて笑う。

振り上げる金槌。

特殊な素材で出来ているのだと聞いたそれは、真鍮のようなくんだ黄金色をしてい

小気味の良い音を響かせて、時折打ち所を変えながら、トンカン、トンカン。絶えず叩き続けている。

今日で四日目。

これはこれで充実した日々を過ごしているという実感と共に、今日も額に汗して労働に従事する。

日々仕事をがんばる自分。というフレーズが思い浮かび、少し、転生前を思い出した。今この場には、俺の他に、彼一人しか居ない。

小型の船舶が丸々一台収容出来そうな大きさのあるここは、様々な造形の機材が所狭しと陳列されていた。

広さに比べて使用している面積が小さいからか、ちよつと勿体無いとも思うけれど、今の俺はただ彼の助手に徹するだけだ。ずぶの素人が口を出すもんじゃやない。

一体何の作業をやっているのかはサツパリと分からないが、それでも、目の前で着々と完成しつつある代物に、思わず硬く拳を握る。

この試みが成功したのなら、また一步、俺の能力の可能性を見出せるのだ。興奮せずにはいられない。

「あ、悪い。次だな」

自分の世界に入ってしまったせいで、彼の念話を聞き漏らしてしまったようだ。

指示通りのものを探すべく、彼から伝わって来たイメージを反芻しながら、いそいそと表へと出る。

本来ならただ広大な死の大地が見えるだけであつたそこには、今や目を疑うばかりの光景が広がっていた。

いつもは突起物の無い、完全な平面であつたであろう場所は今や打つて変わり、幾筋かの切れ目——クレバスみたいな溝が幾つも出現していた。

人一人が何とか、といったところや、それこそ大型トラック一台楽々侵入出来そうなものまで、数々と。

そしてそのどれもに、所々、大小様々な光る何かの存在を確認出来る。

トパーズ、サファイア、アメジスト。挙句の果てにはダイヤモンドまで。

九十九が呼び出したこの場所——この「土地」は、それが価値あるものであり続ける限り、彼が貴金属類、ひいては金銭面において、決して不自由する筈などない事を裏付けていた。

『宝石鉱山』

【特殊地形】に部類される【土地】の一つ。

全ての色のマナを生み出す事の出来る【土地】で、使用するデツキに使われる色が増えれば増える程に、その汎用性の高さは目を見張るものがある。

当然、そんな便利なものが無条件で存在する筈も無く、三度マナを生み出せば消えてしまうという性質を持つ。それを少ないと取るか、充分と取るかは、使用するデツキに依存する事になるだろう。

まるで、あたかも宝石を掘り尽くした後の鉱山が廃坑になるかのようなこのカードは、登場当初から複数の色を使用する数々のデツキを支え続けている功労者である。

マナが出せない、という縛りの中では、本来の目的として呼び出す訳もなく。

名前＋絵柄の通りの【土地】が出るのなら、それはもう大富豪ラインキングの上位トツ

プ三辺りに名を連ねても不思議ではない効果を期待出来た。

初めてこのカードを使った時、きちんと効果が現れた事に狂喜乱舞したものの、『あ、宝石、殆ど埋まつてるわ』なんて愕然とした感想も同時に込み上がって来たものだが、とりあえず幸先は良いかな、と前向きに考える事で済ませた。

クレバスみたいな道の一本。

一番近い溝の間に体を滑り込ませ、地底を目指しながら、目的の物を探す。

あれも違うこれと違うと視線を泳がせていけば、視界には既に見たれた人物達が。

月の軍隊標準装備、スカートにブレザーの高校生ルックである。

ウサミミの飛び出したヘルメットに、収納箇所が多く見て取れるベストを身に着けており、彼女達が今は軍務として働いているのだと分かった。

光線銃のようなモノで掘削する者。重機を操る者。掘り出した鉱物を運ぶ者。

一同、全身から汗を滴らせながら、鉱山仕事に精を出している。

「――あなたですか」

その見慣れた人物達の中で、ただ一人、異なつた姿をした者が居た。

その者は指示する手を止めて、こちらに向き直る。

手を体の前で軽く組み、自身を抱くような姿勢で佇む姿には、そのまま額縁に入れて飾られていてもおかしくない程にさまになっている、と思つた。

「豊姫、さん」

……ただ、俺は彼女の事が苦手だ。

……その、何と言うか……。正確には、苦手というより、彼女に対する負の念を未だに返済出来ずにいるから、という理由からなんだけど。

正直、目線すら合わせるのも気まずいんだが、それをしてしまうとますます溝は広がるばかり。絶対にしてはならない。

「……まさか、もう消してしまおうので？」

「え？」

「ご自身で仰っていたではありませんか。『そちらが満足するまでここを維持し続ける』と。それを反故になさるお積もりですか？」

「っ！ いえいえいえ！ 私は単にここに欲しいものを探しに來ただけです！ 決して約束を破るような真似はしません！」

「……そうですか。それは失礼しました。では、作業の方に戻らせて頂きます」
取り付く島も無い、とはこの事か。

こちらの答えも待たずに、そのまま踵を返して戻っていく。

宙に幾つもの光学パネルを出現させて、目を通し、声を上げて周囲の玉兎達に指示を出す。

その後姿にはしつかりと、『話しかけるな』の文字が浮かび上がっていた。

(……相当嫌われてんなあ)

気が重い。胃に穴が開きそうだ。

数日前に、多少のストレスならバッチコイだぜ、と思っていた事など、夢か幻でも見
ていたんじゃないかと思わせる。

今すぐにも逃げ出したい気持ちに囚われそうになるものの、かぶりを振って弱気を
払う。

「……頼まれてたものでも、探しますか」

先程までの充実した気分など何処へやら。気分を入れ替えるつもりで、独り言を呟い
た。

前途多難の言葉をまじまじと実感しながら、俺は再び、煌びやかに輝く溪谷の間を、と
ぼとぼと足取り重く歩いていった。

指示する声にも力が入る。

あれから大分時間も経つたというのに、未だにこの感情は収まるところを知らないようだ。

感情の機微に敏感な玉兎達が怯えながら作業をしている。どうも自分で考えている以上にこの思いには熱があるようだ。

「姉上」

聞き慣れた声。けれどずっと聞いていたい声。

自分共々、同じ仕事に就いているものの、その役割は異なっていた。

片や指揮官。片や雑用係と言っても差し支えの無い者。

かつてならばどちらも前者であったというのに、今はそれを懐かしむだけの過去になつてしまった。少し、悲しい。

最愛の妹の声が熱を奪つてくれたのか、先程よりも少しだけ、冷静になれたと思う自分がる。

「どうしたの?」

「はい。予想よりも作業が遅れています。発掘の方は問題ないのですが、それを運ぶ手段が思うように確保出来ず……」

「そう……。保管場所の目処はついた?」

「それは「マリット・レイジ」との交戦時に発生した地形を活用しております。大きさは申し分なく、少し手を加えてやれば、立派な倉庫になるでしょう」

遠くから何かを知らせるような声が届く。

しばし後、轟音と共に視界の一部が欠落していった。どうやら、新たな鉱物を採取する為に、地形を切り崩したらしい。

「……依姫ちゃんは……」

「はっ」

「……依姫ちゃんは、何とも思っていない？」

僅かの沈黙。

依姫は目を伏せて、姉の言葉を自分の中で反芻した。

豊姫自身、何とも馬鹿な問いをしたものだと思っている。

けれど口を突いて出た言葉は変えられず、妹の反応を待つことにした。

次に眼を見開いた時、彼女は悩んでいた素振りも無く、姉の予想とは違ってしっかりと答えを口にした。

「残念だ。とは思っています」

「……それは、何処から生じた感情かしら」

「そこまで細部に渡って把握している訳ではないのですが……」

視線を宙に投げ、またすぐに姉へと戻す。

「恐らく、全て、です。月に住まう者としても、軍に所属する者としても、綿月家の者としても、依姫としても。そして——」

女としても、と。

とてもそうは思わせない表情で、真逆の意思を伝えて来る。

「それに關しては、むしろ姉上の方にご言いたい事が山ほどあります」

「えっと……それは……」

姉の目が泳ぐ。

けれど、それを逃す妹ではない。

戦姫が槍で刺すように鋭く見つめれば、それは、相手の精神を削る攻撃に他ならない。

目を背けているのだが、じんわりと額に汗する姉に対して、自分の意思はしっかりと

届いているのだと実感と共に、妹の詰問は続く。

「あの時ほどあなたの妹であった事を悔やんだことはありません」

「御免なさい。つい……」

「つい、で契りを結ばされそうになった私の身にもなつて下さい」

あの時。

豊姫が、九十九と依姫に政略結婚を仕掛けようとした事に、とうの依姫は完全に思考

を放棄していた。

綿月家は、ここ月において上位五本の指に入る程の地位を占めている。

その家柄の者にとって結婚とは、いわば御家の為の義務だ。そこに愛だの恋だの入り込む余地は欠片ほどこか無い。

そもそも、入り込むだけの余地がある時点で、御の字と言えるレベルである。

そういったものについて何度か考える機会があったが、依姫は、それを不幸だとは思わない。

好いた惚れたという感情には興味はあるものの、それで結ばれた相手というのは、つまりその感情を失った時点で完全な他人となる。

否定する気はないが、それでも感情とは移ろい易いものだ、とも思っている節のある彼女には、それは酷く曖昧な、吹けば消えてしまいそうな幻に他ならなかった。

故に。

「万能型四脚戦車510台、高機動型空挺戦闘機170台。対制圧装備の歩兵3050人。そして、私や輝夜様を相手にし、これを悉く撃破するだけの力。これだけでも我々の常識から考えても常軌を逸しているというのに、それを行ったのが一日にも満たない時間だという事実。それに加えて、これです」

目の前に広がる【宝石鉱山】を見渡しながら、依姫は、ここに至るまでの過程を思い

返す。

「マリット・レイジ」を呼び出した時に、ある程度こちらの常識が通用しないと分かっているだけではいけない……これは……」

「この砂しかない大地を、一瞬で作り変えてみせる。……私も分かっていたつもりになつていましたが、聞きしに勝る、とはまさにこの事でしょう」

「——【寶石鉱山】、と言つていたわね。総称なのか、固有名詞なのかは分からなかったけど、それにしたつて……ねえ……。知つてる？ アレ、ここに私を連れてきて開口一番が、『これである程度弁償出来ませんか？』つて言つてきたのよ。今思い返しても、開いた口が塞がらないわ」

九十九をアレ呼ばわりする豊姫だったが、それを指摘する者は誰も居ない。

軽く調査しただけだというのに、軍備全てを買い換えられるだけの資源が蓄積されている事が判明している。

尤もそれは、億に等しい歳月をこの土地で暮らしていた事によつて、あらかたの資源を取り尽してしまつた事による希少価値もあるのだが、それを差し引いたとしても、月の誰もが及ばない程の財であるのは疑う余地も無い。

それを、道の端におちていた小石だと言わんばかりに扱うのだ。アレは。

上層部では、これを如何にして混乱を招く事無く活用出来るかを、寝る間も惜しみ、目

を爛々と輝かせながら考えているようだ。

現金なものだ。

少し前までは、決して侵してはならない領域を破ってしまったかのような状態であったというのに。

「何でも初めからその意図があつた訳ではなく、九十九の言うところの【土地】を出している最中に思いついたのだそうです」

【土地】？」

土地は土地だろう。何を当たり前の事を。

そう思う豊姫であつたのだが、それが分からぬ妹ではない。

その真意を知るべく、オウム返しのように言葉を返し、解答を待つ。

「はい。どうもこれらの能力は、先にも言いました通り、大地を作り変える事で実行しています。……多少外れているものもありますが。……あやつの正体。可能性の一つに、大地母神の類なのではないかとも考えましたが、彼の者ですら、こうも易々と自然を變化させる事など不可能でしょう。仮に出来たとしても、あの【マリット・レイジ】のような存在を呼び出せる筈も無いでしょうから」

「……それで、その各地に居る主神クラスの者達を上回るであろうアレは、今日も今日とて工房に籠りつきりで、何をしているのかしら」

「異形の者——ゴブリン、という種族のようです。それを呼び出し、何やら作り上げているのは分かっておりますが、それが未だに何なのかは……。聞いた限りでは、武具の類のようですが」

こちらの常識が通用しない相手だ、と学んだばかりであるが故に、その言葉を素直に鵜呑みにする事など出来そう筈もなく。

——と、思っているのは豊姫だけであり、九十九より直接聞いた依姫は、疑う素振りすら見せない。

答えを得た妹とは逆に、未だ確信を得られていない姉は、悶々と九十九の行動について悩む羽目になる。

「……だから、でしうか」

続く依姫の言葉に、豊姫は、そういえば九十九に対する妹の意思を尋ねていたのだっただと思ひ出した。

「輝夜様や永琳様は当然として、姉上や私も、お家の繁栄に繋がる事を第一とし、契りを結ぶ相手を選ぶものだと思っていた。それ自体に不満はありません。祝言を挙げるとしても……恐らく、蓬萊山や八意の家と比肩するか、それ以上の意味を持つ」

どちらもここでは支配階級の最上位である。王族、と言って良い。

それと同等か、あるいはそれよりも好ましい条件という選択肢は、一度足りとも考え

た事が無かった。

何か突出した才を持つ者か、大企業の家柄か、幅広い人脈を有する者か。夫婦になる相手というのは、そんな漠然とした印象しかなかったのだが。

「そちらの方面に疎い私でも分かります。九十九と契りを結べば、我が綿月家は蓬莱山、八意家に続く、三本の指に入る名家となる。資材において無限に等しく、戦力においては状況次第でしょうが、それでも単純な破壊力は私すら及ばない。そんな存在を無碍に出来る筈もなく、結果、黙っていても地位は上がり、支持は増えて——」

「手間が増えるばかりなり。そんな顔してるわよ？ あなた」

「……姉上。確か私は、刑罰により一兵卒——二等兵へと降格しましたよね」

突然話を切り替えられた事を疑問に思うものの、沈黙を以って続きを促した。

「今朝、連絡がありました。『綿月依姫、本日より兵長へ昇進するものとする。より一層勤めに励むように』と」

「……何とも露骨な話ねえ」

二等兵から兵長へ。

二階級特進を通り越し、三階級の昇格というのは、数千万年の彼女の経験どころか、月の有史以来、一度たりとも無かった事だ。

しかも、この土地において寿命とは有って無いようなもの。

定年や転職くらいでしか人が入れ替わらず、戦死など以ての外。結果、上から下まで官位の引継ぎ順がギツチリと詰まっている。

階級一つ上がるのに良くて数百年。普通は数千年。というのが常であるというのに、降格から片手で数えられるだけの日数しか経っていないにも関わらず、これだ。

「婚姻に失敗した、という話は既に広まっていると思うのですが……」

「あの者に近い存在であるのには変わりない。と、周りの者は考えているのでしよう。下手に機嫌を損ねれば、『月面騒動』を再び引き起こしかねないから……。なんて考えが、透けて見えるわ。しかも今度はそれを止められる手段が無いのが分かり切っている。故に。……と画策した結果じゃないかしら」

「……そう言われると……。ふむ……。知らぬ者達からすれば、仕方の無い事……。なのでしようか……」

唐突に現れた価値ある者に、彼女は選択の自由という道が用意される事となる。深く息を吐く。

余計な考えを息と共に吐き出して、依姫は言葉を纏めた。

「お家の為にもなり、月の更なる発展にも可能性を見出せる者。そしてそれは、強制ではない。——人柄のみで付き合う相手を選ぶという機会が訪れた。……あの時ほどに、異性というものを意識した事はありません」

手に入れたい人材は、しかし月を相手に大立ち回りを演じた、こちらのルールに縛られない者。否、通用しない者。

一体誰が月の軍を丸々相手にし、これに打ち勝てるだけの者の気分を害そうというのか。

あの者は実力を示した状況が状況である為に、彼を殆ど知らぬ者達からすれば、何処まで月の法を遵守してくれるのが全く分からない。

然るに、手に入れられればこの上なく有利になれる存在であるにも関わらず、地位のある者はその立場の崩落を恐れ、誰も彼もが二の足を踏んでいる状態であった。

手を出すべきか、出さざるべきか。そのどちらかを選べた者は、あの時から今に至るまで、政略結婚を仕掛けた、綿月豊姫ただ一人であった。

そして。

「それが見事に失敗とは、ね。今にして思えば、依姫ちゃんって、相手が誰であっても一度夫婦の契りを結んだのなら、それを自分から反故にする訳ないものね。もしアレが居なくなっても、きつと操を立てて、一生未亡人みたいになつていた事だわ。危ない危ない」

妹が目を細めて睨む中、姉は玉の汗を一筋垂らしながら、口元を扇で隠して誤魔化すように喋った。

妹の為にと思つてやった事は、妹の心まで考慮に入れていなかったのだ。

後からそれに気づいた豊姫は、御家の為ならばと九十九へその意思を伝えに行つた依姫を止めるべく、わざわざ能力まで使つて会合の場まで乗り込んでいた。

もし夫婦になつてしまつたのなら、取り返しの付かない事になる。

だがそこで見た光景は、彼女の予想とは全く違ふものであつた。

向き合う二人。

普段通りの格好であつた依姫と、これまた初めの頃と変わらないズボンとシャツを身につけた九十九の兩名は、片方が直立したままで、もう片方は、僅かに頭を下げて、微動だにせずに居た。

頭を下げられているのは依姫であり、頭を下げているのは九十九である。

一瞬『宜しくお願ひします』と、婚姻の受諾を示したかとも考えられたが、妹の顔が能面のようになつてゐるのを疑問に思い、これはまさか。と、思つた。

断られた。

状況から判断出来るのは、そういう事。

そこに思い至つたのは、有無を言わせず依姫を転移させた後の事だつた。

「小さく一言、『ごめん』と言われましたよ。その後はただ頭を下げて、全身に行き場の無い力を込めながら、沈黙するばかりでした」

拒絶の意思を現した。

心の何処かで、この契約は成立するものだろうと思つていたからだろうか。

彼の意思を知った時、依姫は自分でも考えられない程に混乱して——何も考えられなくなつていた。

「未練もあつたのでしようが、純粋に疑問に思つたのです。だから尋ねました。何がいけないのか、と」

女としての自分を磨いて来なかつた自覚はあつた。

けれど、理由をはつきりと聞かない事には、この沸き立つ感情を抑える事は出来そうもなく。

そこで漸く——依姫は、その者に対して好意を寄せているのだという自覚が芽生えたのだつた。

尤も、それが愛や恋といった感情なのかは、未だに分からないでいる。

唯一はつきりと分かるのは、彼に拒絶された事に、酷く心が気づいたという一点のみ。九十九がこちらにした光景は、今でも依姫の脳裏に焼き付いていた——。

「確かに私は女としての自覚があまり無い。永琳様のようにも、輝夜様のようにも、姉上にも劣る。……聞かせてくれ九十九。私は、何がいけないんだ？」

我が事ながら、それを口にしてる最中に、よく声が震えなかつたと褒めても良いだろう。

一体何がいけなかつたのか。

尽きぬ疑問は口をついて溢れ、言葉静かに、彼への問い掛けとなる。

「なつ、馬鹿な事言うもんじゃねえ！ 誰がお前に魅力が無いって言った！」

「——慰めは良い。だから教えてくれ。遠慮は要らない」

その言葉に九十九は頭を掻き耷る。

ああ、だの、うう、だの呻いた後で、

「——お前は美人だよ。言葉に頓着しなかつたり、猪突猛進な所もあるが、それを差し引いたつて、高校とかに居たら、依姫親衛隊とか、お姉様ファンクラブとか余裕で結成される位の人気者になれる。毎日十人はお前に告白する男が——女も居そうだが——居るに決まつてる。靴箱がラブレターで埋まる、なんて伝説級の光景だつて見れそうだ。……あれだけやらかした俺に対しても誠実に向き合つて、誰かの為に命すら投げ出せる。お前レベルの人格者なんて、殆ど見た事ねえわ。嫁さんにしたら、そいつは最高の幸せもんだ」

予想していない言葉に、彼女の頬が朱に染まる。

けれど、それを言った相手が自分を拒否したという事実を思い出し、依姫の心から熱を奪っていく。

もはやそこには『高校』という未知の単語に、疑問すら持つ余裕など無かった。

「……ならば、何故だ」

「……居るんだよ」

苦しうに、恥ずかしそうに、自分の手を弄びながら、たどたどしく。

依姫は、その意図をおぼろげに察した。

「恋人、か？」

「……いや。まだ全然そんな関係じゃない」

「……まだ、か。……片思い……というやつか」

自分の体から力が抜けていくのを感じながら、それでも依姫は続きを聞かずにはいられない。

「……どうなんだろうな。変なタイミングで別れちまったから、自分の感情が整理されてないんだ。ただ……その……一緒に居たい……とは、思ってる。ずっと笑顔でいさせたい、とも」

消え入りそうな声で、それでも九十九は話を止めない。

自分の経緯を話し出す。

とある神に拾われて、その者に名前を貰ったのだと。

過ごして行く日々の中で、決して失いたくないと思うようになり、それはある旅立ちの日を切欠に、心の絶対を占める位置へと昇華している事に気づいたのだと。

——残酷にも程がある。

言葉一つが心を切りつけ、表情一つが体を凍てつかせる。

すぐにでもこの場から逃げ出したい。

それでも留まり続けているのは、依姫の中の何かがそうさせているからか。それとも、既に体に力すら入れられなくなった為か。その真意は、誰に理解される事も無く。

「——あ」

そして、とうとう九十九がそれに気づいた。

あまりに愚かであつた自分の行いに、頭を下げ、『ごめん』と小さく呟くの精一杯で。無言の支配する空間。

それを打破したのは、他ならぬ彼女の姉、綿月豊姫。

次元断層でも引き起こしそうな雰囲気を訝しげに思いながらも、すぐにでも依姫をこの場から連れ出そうと、能力を使って、妹共々、消えるように移動した。

依姫の何度目かになる放心は、過去経験したどれよりも辛いものであつた。

「あの時はどうなる事かと思っただけ……」

姉の呟きに、依姫は眉を顰めながら応える。

「なにぶん、初めての事でしたので。力でも技術でも知識でも、解決出来ぬ事もあるのだ。と分かったのは、良い経験でした」

あのまま闇の一部にでもなりそうであつた妹が立ち直ってくれたのは嬉しいのだが、この手の感情は酷く暗く重く押し掛かるものだと考えていた姉にとっては、どうしてこゝうも早く気力を取り戻してくれたのが不思議でならかつた。

『姉上、行つてまいります』

そう言つて普段通りの様子で、翌朝から仕事へと出かけていった依姫を見た時には、豊姫は開いた口が塞がらなかつた。

理由を聞くのが怖くて、結局数日経つた今こうして聞いてみたのだが……、それでもまだ疑問は尽きない。

「そういえば、九十九も次の日に挨拶をしたら嘩然としておりましたが」

「それはそうよ……」

人によつては好意が悪意に変わつてもおかしくない出来事であつたのに、依姫はそれを微塵も現すことも無く、何事もなかつたかのように、九十九と接したのだ。

我が妹ながら、何処で育て方を間違えたか、と思えてならない豊姫であつた。

「？ 何か不思議な事でも？」

「……いいの。あなたが気にしないのなら、私も気にしない事にしたわ」

過ぎてしまった事は仕方が無い。今後それを気をつけなければ良いのだ。

そういうえば、自分もその手の経験は皆無であったと思う豊姫は、どうすれば妹の力になれるのだろうかと頭を抱える事になる。

（……あれ、そういうえば、私や依姫は兎も角として、永琳様にもそれらしい話は——）
恐怖。

悪寒どころの話ではない。彼女は一瞬にして、身体を舐め尽くす様な死の幻影に襲われた。

堪らず両の手で自身を抱き、その場に蹲る。

「姉上、如何なさいましたか」

心配する妹に、大丈夫だからと、とりあえずの返答をした。

止めよう。

もはや何を考えていたのかも思考から消去した豊姫は、未だ冷え続ける身体に鞭打つて、何とか立ち上がった。

「……大丈夫よ依姫。お姉ちゃん元気。超元気。今なら一回目で最大難易度の金閣寺をクリア出来そうなもの」

「は、はあ……う？ それならば良いのです、が……う？」

上手く笑顔を造れていると良いのだが。

自分でも何を口走ったのか覚えていない発言は気に留めず、妹の反応を見るに、とりあえず話を流す事には成功したようだ。

今ひとつ納得しない妹を置き去りにし、姉は何とか気分を入れ替えた。

「……——よ、依姫様あ〜！」

と、後方より名を呼ぶ声が聞こえる。

周囲で働いている者達と良く似た格好をしたその者——レイセンは、パタパタと足音でも聞こえてきそうな足取りで近づいて来た。

「おおー！ レイセン、こっちだー！」

「あら、あの子の事、もう使ってあげているの？」

手を振りレイセンの声に応える依姫に、姉が話し掛ける。

未だ距離は遠い。

少しだけならば、彼女に聞かせたくない会話にしても、問題は無いだろう。

「はい。今は人となりを把握する為に、様々な方面で働かせ、観察しています。完全に綿月家の私兵のような立ち位置になってしまいました。存外悪くはなさそうです」

「あのままだったら、死んでいたでしょうね。……どう？ 使えそう？」

「そうですね……。飲み込みが良く、機転も利きます。軍曹にまで上り詰めていただけあって、体力面でも優秀な部類、と考えて良いでしょう。多少、他人との関わりに壁を作る節がある事と、例の件の原因にもなった、命の危険に晒された場合は途端に弱腰になります……。それ位でしたら、矯正出来る範囲かと」

「なるほど……。それで、アレが言っていた事は？」

「能力開花の兆しは、まだありません。もう少し時間が取れましたら、戦闘訓練を実施しようかと思っています」

「そう……。やはり、あなたの力を使つて？」

「いずれは」

レイセンが聞けば恐怖で顔色が変わっていたであろう話し合いは、幸か不幸か、彼女の耳に届くことは無かった。

息を切らしながら何とかこちらへと到着したレイセンを、依姫は優しい表情で出迎えた。

「お、お待たせしました。指示された物は、全て運ぶ準備が完了しました」

「ありがとう。来てすぐで悪いが、早速実行してくれ。九十九に宜しくな」

「は、はい。……では」

玉兎は苦渋の表情を一瞬浮かべ、同じく一瞬でそれを飲み込んだ。

世話しなく遠ざかる後姿を見つめながら、豊姫は、一体何の事かと尋ねた。

「何をさせているの?」

「九十九に、鉱物系の収集を頼まれて。先にも言いました、武器を作る材料にするのだとか」

一体、何が仕上がるのだろうか。

武器と言うからには戦いの為の道具であるのは間違いないだろうが、それが一体、どのような効果を発揮するのか。知る者は九十九と、その彼に呼び出された異形の者の二人のみ。

『絶対に害は為さない。むしろ月の為になる』という彼の言葉を永琳と輝夜の二人——主以後者——が受諾し、最新の機材の揃う施設と、実験場として、荒野の一つを開放した。

その荒野は「宝石鉱山」の他にも、様々な施設や建造物が突如として出現した魔窟と化し、これまた何の痕跡も残さずに消え去るのだ。事情の飲み込めぬ者達からはたいそう気味悪がられ、あるいは恐れられているのは知っている。

反対意見など、それこそ無数に挙がった。

だが、蓬莱山の勅命と月の頭脳の意志が絡むそれに、誰も抵抗出来ず、今に至る。

そんな魔窟で、これらを作り出した張本人の負債を回収するべく、訓練の一環も兼ね

て発掘作業に精を出している月の軍と、その指揮に勤しむ綿月豊姫は、今日、初めて溜め息をついた。

こちらの不快感を真に受けて右往左往するアレを見ると、少しだけ心が軽くなるのだが、その様子を冷静に思い返してみると、何とも幼稚な嫌がらせレベルの仕業ではないかと、自身の幼さが情けなくなつた。

永琳様も、輝夜様も、預かつた玉兔はそこまで気に掛ける存在ではないが……、あの妹でさえ、もう既に思考を入れ替えて、これから為すべきことに邁進しているのだ。

いい加減、こちらにも心を改めて、建設的に過ごした方が良いのではないだろうか。

「分かりました。では、あなたは引き続き、作業に戻りなさい」

「はっ」

恐らく、我が妹が玉兔達と一緒に働くのも、これが最後になるだろう。

本来ならば支給品の軍服に身を包まなければならない立場になつた依姫であつたが、初日から周囲の懇願によつて普段着とも言える着慣れた衣類にて業務をこなす羽目になり、あつという間に兵長になつてしまった。

これでは何の為の降格なのかと当人は不服を漏らすだろうが、姉としては不安に思うと同時に、安堵も込み上げてくる。

近い将来、依姫は上層部の意思に巻き込まれる事になるのは確實。

今は事態を把握出来ないが為に静観を決め込んでいる彼らだが、しばらくすれば、絶対に行動を起こすのだ。

その時に、我が妹は良い様に使われるに決まっている。

面白くない。むしろ、不快だ。回避せねばならない。

「永琳様にも、ご指導を頂ければ……」

庇護とは、いつか巢立つ為のもの。

自由に羽ばたく為に、今の内に学べる事は全て学んでもらう他は無い。

戦闘面では問題は無いので、政略や知略といった方面を重点的にしなければならぬだろう。

月の姫の指南役に助力を請う事も考慮しながら、豊姫は軍務に精を出す者達の中に加わった。

手を動かし、指示を飛ばし。

一切の無駄を発生させぬように、神経を研ぎ澄ます。

このペースでは、存外短期間に目標量の鉱物を回収出来るだろう。

それが、アレの地上へ戻るまでの時間。

だが、もつと作業を早められないか、と思う。一日でも早く、一秒でも早く。迅速に。……どうにも、嫌な予感がするのだ。

何、と具体的な根拠の無い、全くの直感。

具体的には女の感。更に言うなら姉としての感。

妹が奪われる。

もはや誰とは言うまい。

予言めいた確信によつて、その姉は一刻も早く作業を終わらせなければという決意を固めるのだった。

——だが悲しいかな。嫌な予感ほど良く当たるジंकクスは、穢れの無い、ここ月においても健在のようで。

何故依姫は、すぐに立ち直れたのか。

ここを良く確認しておけば良かった、と。

後悔先に立たずの言葉を噛み締めながら、豊姫は口惜しげに呟く日は——近い。

39 力の使い方

荒い息が周囲を満たす。

一直線に伸びる、赤白の道。陽炎の幻影。空間の歪み。

それになぞる形で地面は抉れ、捲り上がり、溶解し。歪な岩山のオブジェを幾つも突き立てていた。

音源の主たる者は、滴る汗を拭いもせずに、大の字になって、ひんやりとした地面に熱を奪わせている。

上下する胸は平均以上にその存在を主張しており、その者が女性であるのだと、これでもかと言わんばかりに誇示していた。

薄紫の髪を顔に張り付かせて、荒々しく呼吸を繰り返すその者——依姫は、手にした刀を最後の力を振り絞って鞘に収めた後、『もう動けない』と、再び大の字を体で表現した。

「……やはり……ありえんな、これは。彼の世界を薙ぐという炎の魔剣ですら、これに及ぶまい。……よく私はこれを受けて無傷だったな……。今更ながら、悪寒が止まらんぞ」

それでも何とか話す気力は残っていたようで、息を弾ませながら、話す言葉とは裏腹に、彼女は楽しそうに。

呆気に取られている——この事態を仕組んだ一人へと話し掛けたのだった。

「お前さんだけ全力なんだよ！ 初めは徐々に慣らしていくもんだろうが！」

「そうは言うがな、九十九。こう……込み上がる力を抑え切れなかったのだ。年甲斐も無くはしゃいでしまったよ」

「知らんがな……」

頭を抱えるこちらを気にもせず、依姫は愉快だと笑い飛ばす。

(やりすぎだぜ、よっちゃん……)

これも贖罪の一種なのだろうか。何だか骨の髄までしゃぶり尽くされている気がしないでもない。

内心で、既に渾名レベルの呼称へと変化していた月の軍神様に、俺は失敗したかと後悔の念に襲われ始めていた。

工房に籠つて幾日か。

いい加減、俺に手伝える事もなくなつて来て、ぼんやりと、邪魔にならないよう遠巻きに、玉兎達の発掘作業を眺めていた。

朝から学校をズル休みするような気分には浸っていると、唐突に、依姫がこちらへやつて来た。

正直、顔を合わせずらい。彼女の姉以上に。

誰が好き好んで、婚約を断つた相手と会いたいというのか。

しかし、そんな俺の葛藤など知つたことかという風に、依姫は、何事も無かつたかのように話し掛けて来た。

まさかの政略結婚——依姫本人が暴露——を持ち掛けられた時には、色々と考えたものだ。

依姫の旦那、という言葉を連想した直後の彼女を見る俺の目は、さぞ欲情に染まっていた事だろう。

『我が世の春が来た』あるいは『桃源郷を見つけたり』的なものが戦隊組んで一個小隊分くらい突進して来たようなものだ。

イヤらしい視線を向けてしまったが、それ以上に及ばなかつたのだから、何とかその

辺は許して欲しいと思いたい。

『——暇か?』

あまりに完結に用件だけを伝えられたせいで、うん、と即座に頷いてしまった。

『そうか』と言つて、黄昏少年になつていた俺をズルズルと引き摺つて辿り着いた場所は、工房や〔宝石鉦山〕からは幾許か離れた、荒れた大地であつた。

何でも、俺に負けてしまった事を教訓として、自分を鍛えたいのだという。

だが、自分で行える鍛錬に限界を感じていたらしい。こと目指す目標がジエイスやマリさんやらの打破なのであるから、仕方の無い事だろう。

『付き合つて欲しい』とストレートに言われた時には胸の鼓動が一足飛びに上昇したが、話を聞いていく内に、ああそつちの付き合うね、と理解出来たのは、幸いだ、と思つた方がいいのか悩むところだ。……このフリーズは前にも何処かであつた気がするが、さて……。

夕日をバックに自主トレに励む野球部エース……を見つめる女子マネ宜しく（勿論、女の子ポジションは俺）。

様々な神を呼び出し、能力を借り受け、行使する彼女は、それは美しく、恐ろしく、純粹に、いつまでも見続けていたいと思つたほどだつた。

で、そこで、ふと思つたのだ。依姫の能力は、何処まで解釈の幅があるのか、と。

大層に考え付いたものの、俺が思いついた事は二つだけ。

一つは、行使出来る神の力は一度に一神だけなのだろうか。という事。

これは当人によって、すぐに答えが分かった。

やはり二体以上の同時使役は難しいらしく、

「今は無理だ」

との事。

(……今は……ねえ……)

発展途上ですか、そうですね……。無限進化とか主人公の必須スキルじゃないか。羨まけしからん!

で、もう一つの提案は、見事に成功したのだ。

俺の目の前の光景……というか惨状が、それをしっかりと教えてくれている。

「依姫の『神々の依り代』になる能力によって、あんたが召喚した【マリット・レイジ】の力を引き出す。面白い試みだなあ、と思って許可しちゃったけど……」

隣で俺と同じ様にしていた月のお姫様が、ぼそりと漏らす。

《月面騒動》もかくやな戦災跡に、啞然としながら傍観していた輝夜だったが、それは最後まで言葉が続かない。

少し離れた場所で、その【マリット・レイジ】は「未だに」凍土の大地へと封印され

ている。

永琳さんの戦力提案案によって、マリさんに順ずるくらいのクリーチャーなりを言われたので、『じゃあマリさんを』、という感じで、全ての問題に答えが出た形になった。

色々考えた結果、マリさんが「トークン」である事から維持費など有って無いようなものであり、全長キロに届きそうな「マリット・レイジ」を地上ではホイホイ使う訳もいかないだろう、と、月防衛を手伝ってもらおう方針を固めたのだ。

……ただ困った事に、PWの制限に加えて新たに判明した制限が、どうもデツキ名を唱えて呼び出した存在は、PWと同様に一日しか滞在出来ない＋一度しか呼び出せない、との制約があるようだ。

●デツキ名を唱えて呼び出したカードは、一日しか滞在出来ず、二度と同名のデツキを使用する事が出来ない。

絶句に近い衝撃だったのは記憶に新しい。

結構勘弁して欲しい制限だと思っただが、通常の事態ならデツキを使わずとも対処

出来る場面の方が多いのだから、と自分を納得させた。

そういう事態になってしまったので、仕方なしにコンボなどではなく、普通に【暗黒の深部】をセットして、徐々にマナを注いで封印を取っ払っていつているのだが……。

「まさか封印解けてないのに呼び出せるとは思わなかったもんよ……」

だってさー、マリさんって神と呼ばれているだけであって、神じゃあなかつた筈だもん。

MTGでは、クリーチャータイプにゴッドとかそんなもんは無い。

似たようなもので【アバター（化身・象徴・権化）】みたいなものならあるが……あれか。【伝説】が神として該当でもしているんだらうか。

……あれ、そういうや神の定義って何だろ。信者が居る時点でそうなのなら、マリさんはまさに神だと言えるということか。

「あんたが呼び出したんでしようが。無責任な事言つてると、また《月面騒動》の切欠が生まれるかもしれないわよ」

「……そうでした。考えなしに色々やった原因の一端があれでした。すいません」

「うん、分かれば宜しい」

「……というか、だな」

気だるげに、顔を横へ向ける。

そこにはゲームの中でよく見る十二単モドキのピンクな服に身を包んだ輝夜が、俺と同じく月の大地に足を投げ出して、腰を下ろしていた。尻、汚れるぞ。

何だか、川原でやってる草野球を土手から観戦する通行人みたいだ。

ただそれと違うのは、観戦対象が一人軍事演習な依姫である事と、一人ではなく月のお姫様が隣に居る事。後は空が青いかかそういう次元ではなく、星空である、くらいが違和感の正体だろうか。

「お前、ここのお姫様だろうが。何でこうして依姫の練習眺めてんだよ。仕事しろ、仕事」

「こうしてボケっとしてるあんたに言われたくないわ。それに私、まだ姫じゃないもの。近い内には即位するでしょうけど」

聞けば、やらなければならぬ事は全部終わらせてきたそうさ。ぬう、しっかりやる事はやったのか。

久々に全力を出した、という事らしいのだが、一体どう全力を出したのかは、生憎と俺には分からない。

「永琳さん嘆いてたぞ。『普段からそれくらいしてくれれば』って」

「嫌よ面倒臭い。新しい事だったら構わないけど、ただの反復なんだもの。変な話よね、一度やった事なんだから、忘れる訳ないじゃない」

「……今、お前はほぼ全ての人類を敵に回す発言したぞ」

何が？ と小鳥が首を傾げるような仕草を見るに、本当に分かっていないっぽい。

天才め！ この弩畜生が！ お前に勉強に励む受験生の気持ちがあつたまるか

！ 主に俺の気持ちがあな！

「んで、そんな鬼才を持つお方は何故にここにいらつしやるので？」

「楽しいから」

ああもう、この我が仮娘め。

神奈子さんに続く唯我独尊なお方に眉間に皺を寄せていると、体力が戻った依姫が、こちらへ近づいて来た。

まだ足取りは不確かなようだが、それでも体からは気力が満ち満ちているのが分かる。楽しそうで何よりです。

「如何でしたか、輝夜様」

「素晴らしいわ。継続力に疑問は残るけれど、それを差し引いても及第点でしょう。ただ、もう少し小回りよく出来ない？ あれでは使いどころが限られ過ぎてしまうわ」

「今しばらくお時間を頂ければ可能です。現在は、今にも体が弾け飛びそうな程に力が漲っておりますが、もっと彼女の事を知れば、大分馴染む事でしょう」

「お前が『凄いなこれは！ 我慢出来ん！』とか嬉々として言った時にやあ、マリさん還

そうかと思つたくらいだぞ。もう少し落ち着いてやつてくれよ」

「そうは言うがな、この今にも溢れ出しそうな程のこの力は、かつて降ろしたどの神にも勝るものだ。……その、だな」

顔を伏せて、依姫は上目遣いでこちらを見た。

「……初めてだったんだ……許して欲しい……」

「ぶっ！」

コーヒー飲んでなくて良かった。危うくコーヒーファイタ状態になるとこだった。

『うわ汚』と輝夜が嫌そうにこちらを見る目線すら気にならない。

普段の俺ならそういう方面には捉えないのだろうが、一応は婚約する可能性があった相手の言う台詞だけに、要らん妄想で、脳味噌がピンクよりになっているようだ。

こいつはホント……。

「まあ次からは大丈夫そうだから良いけどさ……。マリさんの力を使えてるようだけど、それって今の破壊光線みたいなものだけなのか？」

「いや、後は、例の絶対硬度の域にまで達した体と、周囲の感情やら温度やらの熱を篡奪する力のようなのだ。そして……」

不意に、依姫が地面へと優しく添えたかと思えば……。

——突如、彼女を中心に大地が陥没した。

浅く、広く、一瞬で。

こちら側にも亀裂が走り、僅かにではあるが、所々の地形が隆起している。半径数メートル四方の地面が、とても愉快的状況になっていた。

「これが彼女の基本性能なのであろう。『ガルダ』も驚く筈だ。この力は『アトラス』と、どちらが上であろうな」

『ガルダ』はインド辺りの神様で、『アトラス』は……何処だったっけか。天上を支えていた神様だつて記憶はあるんだが……。

つまりあれか。今依姫は、第二の「マリット・レイジ」と言っても良い存在になっているのか。

20/20の圧倒的基本性能は勿論、「ダークステイル」化と、「マリット・レイジの怒り」を使えるという。

本来ならあまりに強大な力は自分を削る諸刃の剣になるようなのだが、「ダークステイル」化の恩恵で、それも大分軽減されているようだ。何その反則「シナジー」。

依姫の力が何処まで性能を発揮するのか興味が尽きないが、これはまた、意図せずしてMTGの新たな一面を垣間見る機会が訪れたものだ。

(これって、下手すると他のクリーチャーやらの力も使えるって事じゃねえか)

この場合は『上手くいったら』と捉えるべきだろうか。……どっちでもいいか。

依姫曰く、事前に「マリット・レイジ」と顔見知りであったのが、実に簡単に力を借りられた要因であるようだ。

未だ氷の大地にて熟睡しているマリさんに呼び掛けて、『あ、あなたはあの時の……』みたいな遣り取りの後、こうして無事、よっちゃん的能力が発動するに至った訳である。ただどうも、俺がカードとして呼び出していないとそれは実行出来ないようで、「暗黒の深部」を展開する前の段階では、呼び掛ける相手が見つからなかったそうだ。

「上手くいったらダブル「マリット・レイジ」とか出現するって感じになるのか……」
【伝説】ルールによる対消滅とか制約はありそうだが、もしそれをクリアしたのだとすれば……。

恐ろしや、東方プロジェクト。恐ろしや、マジック・ザ・ギャザリング。

——「マリット・レイジ」様・二人。……とか、何処の緋色の蜂様だっつーの。

例の【コンボ】、「ヘックスメイジ・デプス」ですら2マナを使って【暗黒の深部】の封印を解かなければならないというのに、依姫の力を使えば、そのマナすら要らなくなるも来たもんだ。

いやいやいや、それを言うならPWたる【ジェイス・ベレレン】二人、なんて可能性もあるのだ。

(そういう方面でのカードの活用法は考えてなかったなあ)

MTGと東方キャラの「シナジー」。

……ちよつと奥様。ワタクシ、これだけでご飯三杯頂けますことよ。

「……ねえ」

不服そうな顔をして、輝夜が俺に話し掛けて来た。

「何だよ」

「あれ、私もやりたい」

……はい？

「あれって……あれ？」

「そうよ」

指差すは、破壊され尽くした月の大地。

怪訝な顔をする依姫だったが、お前は人のこと言えないんですよと突っ込みたくなる。

この場合のあれとは、つまり、「マリット・レイジ」に他ならず、したい、という言葉
を彼女の正確から考えるに……。

「俺の能力を使ってお前を楽しませろと？」

依姫のような、助力や力の上乗せ——仕事に役立たい系では無いのがミソです。

「だってずるいじゃない。依姫だけ楽しんで、私には何も無いんだもの」

「そりやそうだろ。今のはたまたま俺の思い付きが成功しただけで、別に、初めからこれが目的で能力使ってた訳じゃないし。というか別に楽しむ目的でやった訳じゃねえですよ」

「じゃあ、今から（私が）楽しむように考えなさい」

「ヤダ」

交差した視線が火花を散らさず、どちらからともなく、疲れたように、俺達は顔を下げた。

不毛な事この上ないのは、互いに良く理解……してしまつた間柄であるが故に。

「……あんたさ、一応、私は月の姫なのよ？ それを何？ 誠意の欠片すら見せないで接するなんて。少しは敬うって言葉を知らないの？」

「……姫『予定』だろうが。自分で言つた癖に都合の良い時だけ、都合良く使い分けやがってからに……。それに、お前が敬われる存在かよ。我が佢全快のはっちゃけ娘にか見えねえぞ」

「——口煩し、そこな者よ。我は蓬莱山なるぞ」

……おおう。神々しさMAXです。

「……いやね、だからって急に威厳に満ちた態度されても困るんだが。というか今の流れて何で厳かな雰囲気を纏えるんだよ。普通はギャグにしかならねえ筈だぞ」

「積み重ねてきたモノの、桁が違うわ。……でも、これ詰まんないのよ。こんな態度取ったって、面白かった事なんて殆どありはしなかったんだから」

「……基準が面白いか否か、つてのが、俺としてはビツクリなんだがなあ」

やっぱりある程度の水準が揃っている者にとつては、最終的には自分の好みが行動を左右するようだ。

食い扶持を稼ぐ為に汗水垂らしながら、嫌いな事の方が多かった仕事をこなしていた日々を思い返すと、何とも言えない気分になってくる。

「ま、あれだ。機会があったら、一人暮らしとかしてみると良いかもな」

「一人暮らし?」

え、何その反応。

「依姫は知ってるだろ? 一人暮らし」

「……単独で生活を送る、という事か?」

「……」

月が異常なのか。こいつらが異常なのか。それとも、そういつた単語や言葉が無いだけなのだろうか。

てめえらにモヤシ殿下とパスタ閣下のコスパ最強伝説を教示してやろうか。

……ああでも、こいつら何だかんだでパラメーターの数値が色々とチートだから、食

うには困らないんだろうな。仕事無かったら、自分で会社とか立ち上げそうなお人だもの。泣けるぜ。

「あ、あの……」

ふと、視界に写るは、ウサミミ姿の女の子。いつの間に。

声を掛けられた依姫が、彼女に向き直る。

「レイセンか。どうかしたのか？」

「は、はい。例の品の準備が完了しました。特設工房の方に用意してあります。その——」

「……ああ、分かった。すぐ向かおう。輝夜様は如何為されますか？」

「丁度良いから私も行くわ。九十九が呼び出した者にも会ってみたいし」

ここで待っていて。と、そのまま二人は居なくなってしまった。

残される俺と、呆けるレイセン。

我に返ってこの状況に気づき、居心地の悪そうにそわそわし出すウサミミ娘の気まぐさが俺にも伝播し、堪らず声を掛ける。

「あのやい」

「っ！ は、はい」

未だに警戒心MAXですか。ちょっと悲しいですよ。

「だから、もう何も言わなくて済むんじゃないか。すぐに信用するのは無理だろうが、そうも露骨にやられると、結構くるもんがあるぞ」

「すい、あ、も、申し訳ありません……」

ダメだこりや。

こども怯えられると、俺の対人スキルでは対処し難いことこの上ないのだが、だからといってここで会話を終わらせても、それはそれで沈黙の中で溺れてしまいそうだ。

対話を諦めて、質問形式に切り替えよう。

返事は少ないだろうが、それでも言葉を交わす行為にはなる。

そこから何か切欠で、少しでも状況の打破に繋がれば良いんだが……。

「ん、つと……。綿月家はどうか？ 何か不自由は無いか？」

「あ……はい……。豊姫様も、依姫様も、大変良くして頂いて……」

「そっか。豊姫さんもか……。良かった……。あの人達は良い人だからな。もし辛い事やら何やらがあったら、相談してみると良い。得に依姫なんかは立場とか関係無しに、親身になってくれる筈だ……。ぞぞ？」

「……分かりました」

……つ、続かない。続かないぜ、こりやあよお。

何か話し終える度に俯き、顔は勿論、視線すら合わせようとしないレイセンに、二三

しか遣り取りをしていないというのに、脳内の俺は既に膝を折っていた。

(くっ、根性だ俺！ こんな時こそ馬鹿になるのだ！)

何か違う気もします。

というか。

彼女は一秒でも早く、俺から離れたがっているだけなのだろうと想像出来る。

根本にある目的が噛み合っていないのだから、最初の一步から躓いた感拭えないものの、それでも俺が関わりを持つとうとするのは、東方プロジェクトという括りの中でも比較的愛着のあるキャラであるから。という理由もあるのだが……。

(そんな辛そうな顔されてちゃあ、なあ……)

怯え、竦み、縮こまり。

前に組まれた手は硬く結ばれて、今にも爆発してしまいそうな感情を必死に抑えながら、それでも、今度こそは失敗するまい、という決意を胸に、どうにかこの場に踏み込まっているのだと、横から見えた彼女の瞳から読み取れた。

彼女は今、必死の覚悟で失敗を取り戻そうとしている。

何となく、分かる。彼女の中には、俺への謝罪の気持ちは殆ど無いのだと。

現に、何度かこうして話す機会があるというのに、一度たりとも謝罪や、それに順ずる行為を受けていない。

お前さえ来なければ、お前さえ居なければ。

そう思っているのだろう。

けれど月に生きる者として、既に決定されたルールに従う他、レイセンが生活出来る選択肢は無い。

受け入れるしかないのだ。それを。

(苦勞人……自業自得……ふむ……)

脳内会議を開廷。

対象はレイセン。一発ぶちかましてきた張本人。

既にある程度の考慮をし、綿月家に預けるといふ形での助力を行った。

これ以上の手助けは不要か、否か。

——ふむ。

——ふむふむ。

——ふむふむふむ。

——よし。

「なあ」

「……はこ」

苦痛だ。と、表情からありありと読み取れる。

だからそれを止めれ、つちゆーに。

腹芸苦手そうだなあ。出世、出来ませんよ。したいかどうかは知らないけれど。

「ちよつと、目、閉じて」

「っ！」

ちよ、ビビるな！ 引くな！ 一歩下がるな！

「そうじゃねえから！ 本当にも何にもしないから！」

涙腺崩壊、秒読み段階です。

何でこんなに臆病なのに、俺への先手は誰よりも早かったんだろうか。それとも臆病であつたからこそその、あの行動だったんだろうか。

一歩下がつた場所で、震えながら言われるがままに何とか目を閉じる彼女に、これです。少しは気分が晴れてくれれば良いのだが。という思いと共に、とあるカードを使用する。

依姫が世紀末世界へと変貌させた場所だ。

今更、何をどう弄つても大して変わらないだろう。

(んじや発動つと)

そういえば、このカードを使うのは、何気に初めてになるのであつたか。

MTGでも基本中の基本なカードであつたのだが、まあ出た場所がそれを必要とする

場面の少ない土地であったのだから、当然といえば当然か。

今から使うカードは、何十……いや、何百にも及ぶ種類がある為に、どれを出そうか迷ったものの、とりあえず、何となく思いついたものを出す。

荒れ果てた大地を一瞬で光が包み込み、瞬く間に世界を作り変えた。

我ながら、相変わらず凄い力だと再認識。

同時、これで少しは気分が変わってくれば、との思いと共に、レイセンへと声を掛けた。

「目、開けていいぞ」

恐る恐る開かれた赤い瞳は、僅かに涙で濡れている。

絶望を目の当たりにするのが怖いとも言える風に、ゆつくりと瞼を上げた彼女であったようだが……一転。

レイセンはあらん限りにその目を見開き、言葉も忘れて、ただ見入る。

空気を欲する魚の如く、声にならない声をパクパクと口を動かす事で、表現しているかのような。

この様子では、とりあえずは驚いてくれたようだ。良い意味で分かる意味でかは、も少ししたら当人に尋ねてみるでしょう。

——と。

「九十九、今戻った……」

「結構重いかと思っただけど、それでも無かったわね。ってどうしたのよ依姫……え？」

丁度、輝夜と依姫が戻って来たようだ。

ふむ。ナイスタイミング。

誰もが啞然とする中で、俺はそんな彼女達の、三者三様の反応を楽しんだ。

「……九十九。これは」

「説明しなさい。今度は何をしたの、あなた」

依姫の言葉を遮って、輝夜は説明を求めて来た。

「あれ、もしかしてこの場所って弄っちゃ拙かったか？」

「そうじゃなくて！ 何でこんな事をしたのかって聞いているのよ！」

「大した意味は無いんだが。ちよつと……だな……。レイセンに喜んで貰おうかなー？

って」

「……呆れた」

目を瞑って、輝夜は首を振る。眉間に皺寄ってるよー。

「九十九、……あれは……その……触っても大丈夫なのか？」

驚き状態から復帰した依姫が、何やら興奮気味に尋ねて来た。

「ん、ああ。俺も出すのは初めてだから断言出来ないが、多分大丈夫だろ」

聞くや否や、依姫は徒歩と小走りの間のような速度で、そこへと踏み入っていった。だが、残念。

生憎とそれを許した覚えは無い。

「待て！」

「っ！ ダメなのか!？」

悔しそう、つてか残念そうな顔だな。お預けくらったワンコみたいだ。

……犬属性？ アリだな！

「少し待ってくれよ。一応、こういうのは初めが肝心なんだから。多分」

そう言つて、不満気な依姫から視線を切り、未だに啞然としているレイセンへと顔を向ける。

仮にもレイセンの為に召喚したのだ。

まずは彼女に味わってもらわなければ、その意味も薄れてくるというものだ。

「さ、レイセン。どうぞぞ」

「ど、どうぞつて……」

ふむ、これは中々。

悲しげな顔も、涙で濡れる表情も、それはそれで……。とも思いうけれど、やっぱりダウナー系の感情維持は宜しくない。たまにで良い。たまに、で。

「お前の為に出したんだ。好きにしろ嫌いにしろ、とりあえず感想を聞かせてくれよ。つてことで、まずは体験してきて下さいいな、つと！」

「きやつ！」

依然として突っ立っている彼女の背中を軽く押す。

軽い。

こちらの腕力に簡単に屈して、その身を前へと躍らせた。

元々の立ち位置が小高い丘であった為に、坂の勾配になぞつて、レイセンはその足を進ませる結果になった。

「今なら便利な足付きですよ、つてな！ カモン「ターパン」！」

かつてお世話になったマナの緑クリーチャーを呼び出し、レイセンの付近へと出現させる。

突如として現れた馬に、再度驚愕を表す彼女であったが、それを気にする俺でも、【ターパン】でも無い。

『久しぶり』と念話で【ターパン】に軽く挨拶し、すぐに呼び出した目的を遂行してもらうべく、お願いをした。

「そいつの足になってやってくれ！」

「え、何、あ、わっ！」

既に念話で詳細な意図は伝えてある。

軽く嘶き、「ターパン」はレイセンの襟首を加え、自らの背中に器用に放る。

くそう、俺も最初はああして貰えば騎乗する時は楽だったか。今度からは、そうしてもらおうと決めた。

そのまま慌てふためく彼女を他所に、こちらの指示通りにカツポカツポと踏み入っていく「ターパン」とレイセンを、依姫が何とも口惜しげな表情で見つめ続けていた。

「九十九」

輝夜が俺の名を呼んだ。

声色から察するに、詳細に事情を説明しろつて事なのかとあたりをつけながら、返事をする。

「何だ」

「あんた、今度は何の力を使ったの」

「ターパン」の事では無いだろう。

然るにそれは、目の前に広がる「土地」の説明に他ならない。

「これといった名称は無いんだ。単純明快、これは「森」だよ」

死の大地は変貌し、生命を育む土地へと変質していた。

立ち並ぶ木々の幹は太く、それらの足元を埋める草木は所狭しと生い茂る。

時折聞こえる泣き声は、鳥か。

それは地上にて、決して欠かせぬ命の循環の一端を担う役割を持つ地が、ここ月の大地に現れたのだと誇示していた。

『森』

【基本地形】に部類される【土地】の一つ。【タップ】する事で緑のmanaを一つ生み出せる能力を持つ。五色の一角、緑を代表するカードである。

MTGにおいて【基本地形】とは、まず欠す事の出来ないカードであり、それは幾年にも渡り、様々な絵師の手によって描かれて来たものである。

ある時は冬の情景と共に。またある時は、荒廃した世界を覆う生命として。

多くのテーマや世界観を元に表現されているこのカードは、緑使いのプレイヤーにとって、最も馴染みのあるカードである事だろう。

「森】……ねえ」

「何だよ。それ以外の名称なんて無いぞ」

やけに時間の掛かる長考。

その割には返って来た言葉は呆気ないものだった。

「……ま、別に良いんだけど」

良いんかい。

「ねえ九十九」

「うん？」

「あんたさ、ここで——月の都市って、見て回った事、ある？」

「そんなには。永琳さんの実験場やら研究所やらに行く途中の道くらいだな」

「そう……」

「何だよ、喉に物がつかえたような口振りは」

「あんたが規格外つてのが、また一つ分かったからよ」

「おお。なら、もつと丁寧な対応を俺にしてくれても良いのだぞよ」
偉そうな口調ってこんなだったか。

ふふん。慄くが良い。これが俺の持つ（貫い物の）力だ！

ドヤア……

「嫌」

て、てめえ（ピキピキ

「九十九」

少し遠くから、何かを堪える様に声が発せられた。

忘れてた。

そういや依姫にお預けしたまんまだったんだ。

「あ、うん。もう良いかな」

レイセンも先行した事だし、一応、これで義理立ては出来ただろう。

こちらの返事も待たずに、そのまま目を輝かせて、「森」へと突貫していく戦女神。

どつちかつて言うのと、それは輝夜がやりそうなもんだと思っていただけに、横で例の光パネルで何処かに連絡をしている彼女を見るに、若干の肩透かしを食らった気分になつた。

久々に嗅ぐ、濃厚な木と土と木漏れ日の匂いに、郷愁の念が頭を過ぎる。

時間も余っていて、俺を呼び出した依姫は、森林浴にでもしに行ってしまった。そのままトト□にでも出会いそうな雰囲気です。

このまましばらくは戻る事は無いだろう。

出来るだけ早く帰りたいな。と思いながら、俺は気分転換に昼寝でもするかと、寝心地の良さそうな場所を探すべく、【森】の中へと踏み入って行った。

こうまで露骨に見せ付けられると、一種の諦めの境地に至るようだ。

達観、という言葉を実感しながら、それを実行した当人に気づかれる事なく、目の前の光景にただただ見惚れ、言葉を忘れた。

映像としては幾度か見た事はあった。

ここ月にも、単体や、数えるほどの集合体としてのソレならば点在しているし、格別珍しいものではない筈なのに。

言葉が出ない。

それほどまでにこの光景は感情を激しく揺さぶり、記憶や思考などのレベルではなく、やはり自分達は地上より生まれ育つたのだと、魂の部分で理解出来るものであった。

大気の循環を助け、あるいは雑多な生命を育む機能の一端を担う、木の集合体——
【森】。

視界一杯に広がるそれは、私や依姫、レイセンにとつて、月で生まれたからには一生見る事の出来ない光景であるのは間違いないものである。

月でも当然、研究が郷愁の念からかは知らないが、これらの光景を再現すべく研究が行われてきた。

けれどそれは、生み出すだけならいざ知らず、土地の——地上との成分の違いによつて、広範囲に分布されるのは困難だと結論付けられていた。

私や永琳、綿月達の家にも、ある程度のものならある。

けれどこれはその数百倍……数千倍……いいえ、比べるのもおこがましい程に、命の営みを感じられた。

地上と月の大地では全く環境が違うのだから当然だとして、木、だけならず、これらを見るに、土すらも出現、ないし変質させてしまったようだ。

この環境を構築するには、月の民の感覚を以つてしても、決して短くない年月が必要であると思つていたので、今こうして目に行っている現実を見るに、それも疑わしく

なってくる。

(永琳やおじ様なら、懐かしいって思えるものかもしれないけど……)

我が師や、それに順ずる者達はかつて、これ程の存在の中で過ごしていたのか。

命というものを、言葉でも思いでもなく、肌で感じるとはまさにこの事。

(夢か幻か。【寶石鉞山】だけじゃなくて、生命すら自由自在って言いたい訳?)

漂う濃厚な生命の香りに、えも言われぬ感動が湧き上がる。

叫び、走り、がむしやらに体を動かしたい衝動を懸命に抑えながら、レイセンや依姫の後を追うように【森】へと入ってゆく九十九を眺めていると……、

(え、寝るだけ?)

一本の巨木の陰に横になったかと思えば、そのまま目を瞑り、動かなくなってしまう。

疲労困憊である様子もなく、ただ純粹に寝入っているだけなのだと分かる。

……ふと、先程の九十九の発言を思い出した。

『【森】……ねえ』

『何だよ。それ以外の名称なんて無いぞ』

それはつまり、【森】を——少なくともあいつ以外の複数名が知っている事になる。

そしてあの口振りから、それは決して特別な事ではなく――

(……もう、止めよう。あいつについて考えるの)

少なくとも、今は。

新しい事は大好きだが、こうも常識から掛け離れている事態が連発すると、思考がストライキを起こすのだと判明した。貴重な体験だ。

初めて目にする、森。

月に居る限りは、決して訪れる事の無かつたであろう場所。

そしてそれは、ここ月においてはどんな金銀財宝などよりも価値のある、楽園の出現に他ならなかつた。

あいつの事だ。きつとこれにも、穢れは一切無いのだろう。

誰もが望み、けれど誰もが諦めていた、我ら月の民の魂の戻る場所の一つ。

……これを手に入れるには、さて。月の国家予算の何年分を注ぎ込めば良いのやら。金銭では決して解決出来ないものが、今、私の目の前に広がっていた。

「ま、悪くないわね」

喜びに満ち溢れている内心を隠し、何食わぬ顔で言った。

別に誰が聞いている訳でも無いのだが、あいつがこの感情を引き起こしたのだと思うと、途端に素直に驚いてやるものか、と思えてくるのは、やはりムカツクから。の一言

に尽きるのだろう。

レイセンと依姫に習い、【森】へと入る。

「ふっふっ」

ダメだ。思わず漏れてしまった笑い声だったが、既に自制する気など無くなっていた。

一步、また一步と踏み出す度に、徐々に足取りが軽くなり、徒歩は早歩きになり、駆け足になり、ついには全力で駆け出した。

「ふっ、くっ、あはっ、あはははは——！」

初めてだ。この感覚は。

楽しくて仕方が無い。

もういい。誰に聞かれても構うものか。

靴を脱ぎ、素足で草の大地を踏み締める。

柔らかい。優しく熱を吸収する緑の絨毯。

全く根拠の無い、私はここに居るべきなのだという感覚に従って。私は声高らかに、深緑の命の中を駆け抜けて行つた。

——これですますます手放せなくなつたという、思いと共に。

綿月様達の下で働き始め、幾日かが経った。

初めこそ命を削る思いで自分の出来る事をこなしていたのだが、豊姫様や依姫様だけならいざ知らず、綿月家で働く誰も彼もが良くしてくれる事に疑心暗鬼に囚われ、とうとう耐え切れずに依姫様へ直接お伺いをしたのだが。

『…………… 逆に問おう。何故、罪を償おうとする者を虐げなければならない』

何を馬鹿な、といった表情でそう言われた時、私は自分の中に渦巻く感情が、全て流されて心穏やかになっていくのを実感出来た。

こういう人だからこそ、この人に仕えている者達が、その意思を自らの中の心情として組み込んでいるのだと分かる。

—— ああ、このお方の力になれたのなら。

そう思った後は、簡単だった。

無我夢中で働いた。

その意思に応えようと、ただ生きていく事に執着していた時とは違う。

誰かの為に、何かの為に、一生懸命になる理由を自分以外のものに見出した。

この感覚。自らの命を守る時とは似て非なる行動理念。

軍に所属していた時に好きだった、誰かを守る、という言葉を、私はその時、初めて自分のものとしたんだと思う。

……ただ、それでも……

(何でコイツと一緒に居なきゃいけないのよ)

この場は私とコイツの二人きり。

自分の命を狙った相手に、心穏やかに居れる訳が無い。

いつコイツの気紛れで自分の命が消え去ってしまうのかと、怯えながらに何とか関わりを避けようと努力していたのだが。

「ちよつと、目、閉じて」

嫌な予感は良く当たる。

誤解だ、的なく口調で何やら喚いているが、ならば何故、こちらに目を瞑れなど言うのだろうか。

きつと何か、こちらの想像も付かない残酷な何かをされるに決まっている。

——現に私は一度、その……小さな穴……に……、しかも二つ同時に……あんな大きなものを……初めてなのに、無理やり……

依姫様の下で働き、やっと自分も何かが変われると思っていたのに。けれど、もう逃げない。

今の自分には、綿月家の名を背負っているようなものなのだ。

例え何をされようとも、決して無様な醜態など晒すものか。

硬く目を閉じ、全身に力を込める。

だが、

「目、開けていいぞ」

体に異変は感じない。

もしやこちらが気づかない内に、既に何かされてしまったのではないか。

《月面騒動》を引き起こせる存在だ。

例え今、体が魚か鳥にでもなっていたとしても、コイツなら遣りかねない。

一体どのような絶望が襲って来るのだろうか、覚悟を決めて、ゆっくりと瞼を上げて、見てみれば、そこには――。

「ねえ、あなたのご主人様は、一体私に何をさせたいの？」

初めての乗り心地……というか初めて実際に目にした存在に、最初こそ緊張に体を強張らせていたものの、今では普段見える視界よりも一段高くなった事に、心が弾んでいた。……す、少しだけ。

目を開けたら緑が広がって、依姫様や輝夜様を差し置いて、あいつは私を先へと行かせた。

事態が飲み込めないままに、こうして「ターパン」と呼ばれた……動物？ に跨って、木々の間を散策しているのだけれど、この、今乗っている生き物は、かなり昔の映画の中で登場し、人が乗っていたような記憶がある。

名前は忘れてしまったが、移動手段の一つとして描かれていたのだったかと、記憶の底に沈んだ知識を手繰り寄せた。

「ターパン」は、まるで私が行きたい方向が分かっているように、右へ左へ動いてくれている。

体に染み込む、生命の息吹。

今まで嗅いだ事が無い匂いだというのに、それは私の心の奥底にあった何かを、確実に刺激し続けていた。

一本先の木に到達した時には感動が。二本先の木で涙が。三本先の木では……。周

りに誰も居なかつた事が、唯一の救いだつたと思う。

「ご、ごめんね。首……（……首よね？）濡らしちゃって……」

声を押し殺し、咽び泣く音を「ターパン」に口を押し付ける事で堪えた。

その時には、この生き物はただ黙って、私の嗚咽が止まるまで、ずっと動かずに居てくれた。

少しだけ頭を振ってくれた事に、まるで『大丈夫だ』と言われた気分になった。

言葉を交わせないのが寂しいけれど、それでも、「ターパン」は私の事をとても気に掛けてくれているのだと分かった。

それで何かが吹っ切れたのか、私は、なるようになれ。と現状を楽しむ方針に気持ち切り替えた。

こちらの意思が伝わったのか、彼の歩く速度は上がり、とうとう体中で風を切るほどになっていた。

木々の間を颯爽とすり抜けていく「ターパン」の上で、私は『わっ』とか『きゃっ』なんて声を幾度となく挙げてしまった。

でも、楽しい。

普段なら羞恥心の一つでも込み上がって来ている筈なのに、全く気にならない。

「本当……アイツは私に、何を期待しているのかしら……」

「ターパン」にはではなく、今度は自分自身へと問いかけるように、呟いた。

アイツの真意が分からない。

私の成長を期待しているのだとは言っていたけれど、ただの玉兎である自分の成長など、暇つぶしにすらならないであろうに。

「能力……か。……ねえ、あなたは私に、何か特別な力を感じる？」

自分よりも体温の高い生き物の首を撫で、暖かい、と思いながら、返って来る事は無いと分かっている問いをする。

あいつは私に、能力があるのだと言った。

あれだけの事を仕出かした相手なのだから、もしかしたら、それは当たっているのかもしれない。

……もし。

もし仮に、本当に何かしらの能力を持つてしまったのなら、私はどのようにしたら良いのか。

能力持ちとは、ある意味、宝くじに当たるようなものだろう。

一般と称される者達の中で、一線を敷く存在へと昇華させる、異能の力。

どんなに望もうとも、それを持たぬものは生涯持つ事は出来ず。逆に、持つものは、どんなに否定しても取得てしまう。

「便利なものだったら良いんだけど……」

どうせなら、依姫様や豊姫様のような、応用が利き、それでいて強大なものなんて楽しそうだ。

そうすれば今よりも一層、あの方達のお力になれる。

それはとても、喜ばしい事。

「花を操る能力……とかだったら、嫌よね」

唐突に、あつたら嫌だな、と思う力が思い浮かぶ。

仮にそんな力を持つ者が居るかもしれないのなら、その者はさぞ落胆する……あるいは、している事だろう。

花なんて操ったって、園芸を手助けするのが関の山。何て可愛い兎戯なのだろうか。

「ま、それで食べて行く分には、重宝するかもね」

私はそうはならないように、今から願掛けでもしてみようか。

【ターパン】が嘶く。

何となくだが、彼が何を伝えたいのが分かって来た。

どうやら、もう戻らなければならぬようだ。

「……ありがと。ちよつと、気持ちが悪くなったわ」

再び小さく鳴く【ターパン】を撫でながら、私は感謝の言葉を口にした。

では、あの人外の存在の元へと戻ろうか。

別に能力など宿さなくとも、私の中で、綿月家への恩返しをする事には変わりはない。仮に、もし本当に能力を手に入れてしまったのなら、

「少しは……アイツの事、信じた方が良い……のかな……」

自分自身に言い聞かせるように。

すべき事が定まらない事への解を出すべく呟いた言葉も、効果は無い。

(私は……私はどうすれば良いの……。命を奪う気でいた私を、あんな意味の無い行為で手打ちにした挙句、昔よりも断然過ごし易い環境に放り込んで……。気にしていないとでも言うつもり？ 何で？ どうして？ 死ぬ事はこんなにも怖い事なのに。恐ろしい事なのに。……分からない……分からないよ……。私はどうするべきなの？ どうしたいの？ あいつは一体、何を考えているの……?)

防衛手段の選別も終わり、金銭返済の目処も立ち、例の緑の小人妖怪——ゴブリンと言っていた種族の者が作成した武器も完成した。

後は、その武器の説明をし終えれば、アイツは地上へと帰るだろう。

「スロバッドさん……だったっけ……。気さくな良い方なのは分かるんだけど……」

あの地上人が呼び出し、今こうして武器を作り終えたゴブリン——スロバッド。

何度か一緒になる事があった。

何故か共通言語機能を使っても言葉の疎通が不可能であったのだが、それでも、こちらを気遣い、また、尊重してくれていたのは感じていた。

過去にあのような異形の者と接した事が無いレイセンにとって、九十九とはまた違った苦手なタイプの人種である。

未だに答えの出ぬままに、彼女は暖かな存在と共に、この【森】を抜けて行った。

40 飲み過ぎ&飲ませ過ぎ 《前編》

「お疲れ様、お陰で無事に完成したよ。……どうもありがとう。助かった」

自分の半分ほどの背しか無い、彼——スロバッドであった。

頭を下げるのにも限界があるので、自然と手を取り、しっかりと包み込みながら、力強く握る。

咄嗟に思いついた頭を下げる以外の感謝の表した方が、それであった。

そういえば、こんな事をするのは生まれて初めてで。

自分でも恥ずかしいと思うのだが、どうやら彼も恥ずかしいようだ。

手を離れた後、照れたように鼻を掻いて、そっぽを向いてしまった。

シャイな所はあるものの、情に厚く、涙脆く、仲間を大切にする人物。

それが、こうしてやり取りをする中で彼に対して思った感想である。

「はいはい。友情を深めたいんなら、もう少し待つてからやつて頂戴」

手にグラスを持ったまま、輝夜はこちらを見て、そう言った。茶化すような声ではない。

純粹に、それは後でやるべきだと言ってきているのが分かる。

「ん、すまん」

そう理解した為、素直に彼女の言葉に従った。

中央へ立つ永琳さんへと姿勢を直し、向き直る。

「面倒な話しはやめましょう。今は楽しむ事に一分一秒を惜しむ時。———それでは、九十九さんの無事を祈って」

彼女の背後には、やけに達筆な文字で『祝！ 地上への帰還決定！ 九十九！』と、一体どんな心境で書いたのか疑問の尽きない垂れ幕が、壁の上一面を横断していた。というか書いたの誰よ。

それぞれがグラスを手に持つ。

座して待つ一同は、数えるほどしか、この場に居ない。

司会進行役だと思われる八意永琳。

何が面白いのか、目を輝かせて周囲を見回す蓬萊山輝夜。

高御産巢日は禁固刑で参加出来ず。

『俺って場違いじゃ』と恐縮気味になっているスロバッドと、同じく、『私って場違い

じゃ』と恐縮……どころか萎縮してしまっているレイセンに。

静かに周りを見渡している綿月依姫と、目を閉じて瞑想でもしているかのような印象を受ける、その姉。綿月豊姫であつた。

「では——乾杯」

皆がジョッキやらグラスやらを頭上へと掲げる。

あれからまだ一ヶ月も経っていないのに、こうして地上へと帰る俺の返済の目処……あ、いや、もう既に返済分は終えているのだそうだ。

これも【宝石鉱山】の影響によるところが大きいのだが、何より問題の解決の決め手となつたのが、レイセンの為に出した【森】であつた。

『あの【森】……是非、調べさせて頂きたいのだけれど』

そう畏まつた口調で永琳さんから言われた時には、『何事!』と焦つたものだが、事情を聞くに、そも自然と呼べるものがここの月では稀な存在であり、広範囲に渡つて繁殖させるにはコストが見合わず……とか何とか色々言われたが、詳細は覚えてないです（汗とりあえず、決して金では買えないものの一つであつたようだ。

それが大層、月の人達の興味……どころか『今月で最も熱い場所!』なんてマスメディアが取り上げたらしく、市民や軍人のみならず、貴族達ですらも、

『頼む! あそこへ連れて行つてくれないか! (要約)』

と。

永琳さん……は思ったよりも少なかったようだが、八意や蓬萊山の性を持つ者よりは比較的話し掛け易かった綿月家へ、あらゆる者達が連絡を入れてきたそうだ。

俺が、ここ月でやらかした事態は、貴族や軍隊の間に留まらず、市民や玉兎達の間でも恐怖の対象であったそうなのだが、それが切欠で、どうも弁護する意見が巻き起こっているのだと、輝夜から聞いた。

そういう民衆などの周囲の声は一度も聞いた事が無かった。と、その時初めて分かったんだが、俺の与り知らぬところで全ての片が付きそうになつていたのは驚いた。

それでも一応、悪い流れではない事から、終わり良ければ（略、と自己完結する事にした。

（いやでも……森つて原作じゃあ存在してなかったか？ 林レベルっぽかったけど。後、海とか）

きちんと月の土地を見て回った訳ではないので、その辺りの知識の誤差が俺を悩ませる。

（しっかし……）

今俺を最も悩ませているのは、そんな蚊帳の外で巻き起こっているあれやこれではなく、今居るこの「場」自体に他ならない。

帰還記念的な打ち上げを開いてくれたのは嬉しい。

高御産巢日は来ていないが、それでも身内だけの集まりっぽい場所に、理由や経緯はともあれ、こうして参列しているのは、何となく彼女達月のメンバーとの距離を一步縮めた風を感じられるから。

料理も良い。俺の知識外の、月で振舞われているであろうあれやこれの様々な酒肴が、所狭しと足の短いテーブルへ並べられている。

酒だつて、独特の風味があつて、初めて飲み口あつて驚いたけれど、これはこれでどんどん体が欲してしまうような絶品だ。

問題は、それらを行っている場所。

この室内——の造りだ。

(これつて……何処の飲み屋だよ)

この狭いスペースを如何に安っぽさを隠しながら豪華に見せるか、というセンスは、決して月の人達じゃあ考えられないだろうと思う。

だとするなら、新しく造つたに違いないのだが……。

和○か、月○雫か、それとも金○蔵か。何を参考に造りやがったんですか。馴染み深すぎて、ちよつと涙腺緩みそうですよ。

屋形船を丸々借り切つて宴会でもしているような錯覚に襲われながら、ちらつと、こ

れを仕上げたであろう異種族の緑色の小人へと、目を細めながら訴えかけた。

え、何、断れなかった？ 誰に？

「私がお願ひしたのよ。あんたの故郷のような宴を催したいってね」

疑問が顔に出ていたのか、その原因が犯行声明を出してくれた。

声のする方に顔を向ける。

酒や料理こそ、全て月独自のものであったが、せめて内装くらいは、と、出来る限りの郷土を再現した結果のこれらしい。

ビックリしたのが、これが輝夜の発案だと言う事。

大体の理由は察する事が出来るが……これが嬉しくない訳がない。

既にグラスは手から離れ、代わりに漆塗りの雅な杯を片手に微笑む輝夜に、俺は内心で熱い吐息を漏らすものの、それを決して表に出す事はしない。

くそうこの残念美人め。俺の心を弄びやがってからに……。

今なら竹取物語で帝すら、輝夜の居ない永遠など要らぬ、と蓬萊の薬を焼き捨てた気持ちが分からんでもない。

例えそれは、弄ばれていると分かっているにしても、なにものにも変え難い甘美な一時であろう。

それと比べてしまえば、ただ安穩と生きていくだけの人生など、死んでいる様なもの

だ。

だが、

(甘い！ 俺はお前クラスの超絶美人を、たんと知っているのだ！)

名を上げればキリが無い……というか、逆に、出来の宜しくない顔、というキャラは、東方世界には居ない。少なくとも、俺の感性においては。

今はまだ見ぬ、あれやこれのキャラ達の事を思えばこそ、俺は、こいつが取得しているであろうスキル『傾国の美女』を食らっても無事なのだ。

ふふふ。伊達に頼っぺたにチューしてもらっちゃいねえんだぜ！ 俺だつてちよつとは耐性も出来るわい！

……最低でも『傾国の美女』スキルを持つてるっぽい奴、後一人居るんだよなあ。尻尾がいつばいあるお方が。今でさえこんな动摇してちゃあ、もし出会っちゃったらどうしたものか。

「ちよつと、何か言いなさいよ。つまらないじゃない」

ぬ、こつちが置いてけぼりでしたか。

俺の何かしらの生意気な反応が欲しい様子が、その表情からしつかりと読み取れる。しかし、これに関してこちらはムキになる要素が皆無なのだ。

幾ら発案者が微妙に気に入らないとはいえ、こうして故郷の風土を再現してくれた事

に対して沸き起こる感情など、一つしかない。

「ああ。……ありがとう、輝夜。スロバッド。これは……その……結構嬉しいわ」
「っ！」

自分の緊張を自覚する前に、感謝の言葉と共に笑顔を向けた。

『そう言つて貰えるなら、がんばった甲斐があつた』と照れ臭そうに酒を飲むスロバッドとは対照的に、輝夜は反対側を向いてしまった。

くそ、何だよも。

結構恥ずかしかつたんだから、それなりのリアクションしろつてんですよ。このボケ殺しく。芸人としてやっていけないぞ。

『今のはやばかつた』つて、何がよ。声が漏れて聞こえてくるが、俺の笑顔はそんなにキモかつたか。

へんっ！ お前に認めてもらわんでも良いもんね！ 俺には諏訪の！ 洩矢の！
大和の人達が居るんだから！

……ちよつと一人になりたいなあorz

「スロバッドさんと色々話したのでしよう？ 日本という国の出身で、たまに仲間内で酒を酌み交わしていたと聞いたの。それで、どうせなら九十九さんの馴染み深い雰囲気だけでも、つて、皆で考えたのよ」

そう言つて卓の前で、永琳さんは僅かに頬を朱に染めながら、優しく語り掛けてきた。そういうや、スロバッドと雑談に花を咲かせていた折に、そんな話もしたような。

料理だけは月オンリーなのだが、基準がアジア系なせいか、殆ど違和感なく長テーブルな食卓に溶け込んでいる。

「ありがとうございます。すつこい嬉しいです」

こちらの言葉に満足したように頷く彼女はとても綺麗で、ともすればそれを見続けるだけで、日が暮れてしまいそうである。

と、永琳さんが姿勢を改め、少し真剣な様子で尋ねて来た。

「けれど、本当に良いの？ 提案した私が言う台詞ではないのでしょうか、あの「マリット・レイジ」さんを常駐戦力として提供してくれるというのは」

「ええ。というか、彼女でないと少し厳しいと言いますか（体力的に）。むしろ彼女である事が救いだと言いますか（「トークン」的な意味で）」

「本音を言っていると、彼女が味方になつてくれるのは有り難い。あの力が味方として働いてくれたのなら、これほど頼もしい事もあるまい」

白い徳利と手に持った依姫が、俺の声に応えた。

「そりやお前、マリさんの力を拝借出来るんだから、単純な力技なら彼女ほど向いているクリーチャーも居ないしな」

「そういうえば、もう封印っていうのは解いたんでしょ？　なら、今彼女は何をしているの？」

疑問に思った輝夜が尋ねて来た。こいつはその辺りの経緯を知らない。

それに答えたのは永琳でも依姫でも、ましてや俺でもなく、琥珀色の液が注がれているグラスを持ったレイセンであった。

ビクビク……としてはいなかった。

酒が入った事で、少しだけ心の壁が取り払われたようだ。

得に気負った様子もなく話す彼女を見るに、いずれは素面でもこうなってくれれば、と思わずには居られない。原作を知る立場からして。

「今【マリット・レイジ】様は、四方を氷に囲まれた窪地にて熟睡……冬眠……？　えつと……お休みになっておられます。心音が大地を僅かに揺らすだけで、寝息すら聞こえません。安眠出来るように視認不可の結界を張りましたので、地上からは勿論、月からですら、光学に頼った方法では、あの方の存在は確認出来ないでしょう」

「分かったわ、ありがとう」

ニコリと笑みを向ける輝夜に、照れた様にレイセンは俯いた。

うむ。可愛いのを。心が洗われるようだけ。

……あ、こつちを向いたと思ったら微妙な感じで睨まれた。

俺にはツンオンリーか。終いにや泣くぞゴルア。咽び泣く男の見苦しさを思い知らせてやろうか。自爆技だが。

「九十九。彼女って普段は何を食べているの?」

……え、何だろう。分からん。

唐突に投げ掛けられた質問に、ちよつと呆けてしまった。

食べ物って……それは……俺も知りたいかも。

ただ、あの巨体なのだから、生半可なものじゃあ満足はしないだろうが……。

一応、何でそんな事を言われたのか、の理由が思い当たるので、そういった疑問だな? との当たりをつけながら、質問に答えた。

「何も要らない筈だ。ものが食べられないって訳じゃないが、俺が無事な限りは、衣食住の住だけ用意しておいてくれれば問題ない。と思う」

「そう。それならこつちとしては助かるけど。彼女を防衛戦力として提案された瞬間、食料生産プラントの数を倍にしようか。って考えてた位だもの」

あれだけの躯体を維持するのは決して楽なものじゃないだろう。

言われて、俺も気になったので念話にて彼女へと確認してみる。

距離的に大丈夫かな? とも思ったが、一応は連絡が付いた。

付いたのだが……

〔ZZZ……〕……うむ。超寝てる

まあ無理に起こす事も無いかと、疑問を無かったものとした。

「もし起こす時には、それなりに派手にやってくれ。じゃないとマリさん、気づかないっぽい。……けど、遣り過ぎるなよ？」 最悪、寝起きの不機嫌さMAX状態になって敵味方関係なく……なんて展開も。うん」

「永琳！ 本当に彼女で大丈夫なの!？」

「こりやまずいんじゃないか。との考えが透けている輝夜が、堪らず永琳へと尋ねた。

「ええ。最終手段は、九十九さんに直接起こしてもらおう手筈だから」

……あら初耳。

俺、地上に戻る予定なだけ………発信機とかそんな感じのもんでも付与されるんだろうか。下手したら強制転移？ こっちに来た時と同じ様に。

えく……。いざとなったら俺こっちまでワープしに来るんですか？ プライバシーガン無視じゃない？ ねえちよつとそこの美人なお姉さん。

「九十九」

「ずいところちらに身を乗り出して、我慢出来なくなつた、と言わんばかりの依姫が近づいて来た。

「どした」

「もういいだろう。いい加減、もったいぶらずに教えて欲しい」

そう言って、視線を部屋の隅へと向ける。

鈍く反射する光沢は、それが金属のようなものであると教えてくれる。

別にもったいぶってたつもりは無いんだが、興味の比重が違うんだろう。

全部で三点。

それぞれが兜。盾。剣の形をしているそれは、MTG界の武器の一つ、「カルドラ」シリーズ達である。

『カルドラ』シリーズ

【伝説】の【アーティファクト】であり、【装備品】と呼ばれる、これ自身を破壊しない限り場に残り続ける代物。

それぞれ、

装備した者と盾自身を破壊不可能にする【カルドラの盾】

装備した者に＋5／＋5の修正を与え、ダメージを与えた相手を【追放】する【カルドラの剣】

装備した者に幾つかの特殊能力を付与する【カルドラの兜】
の三種からなる品。

これを使用して名を残したデツキは無いのだが、それでも【伝説】の名は伊達ではないようだ。

無造作に立て掛けられた【伝説】の武具達。

カードとしてのイメージが強過ぎるのだが、少し視点を変えてみれば、エクスカリバーやら草薙の剣やらが飲み屋の壁に並べられているようなものだろう。

ただそんな浅い考えも、こうして実物をまじまじと見つめてみれば、その考えはとも愚かであったのだと実感する。

鈍い輝きは畏怖を、溢れる存在感は荘嚴を。

あれは決して、有象無象が造り上げられるものではないのだと思わせるだけの力を纏っていた。

——カードを消した場合にも、そのカード達が巻き起こした現象や爪痕は消える事はなかった。

【ジャンドールの鞍袋】から取り出した食べ物が消えないように。

【マリット・レイジ】誕生の地である、【暗黒の深部】の氷の大地の窪地が、未だに残っているように。

【宝石鉱山】から切り出した貴金属が存続し続けるように。

それらの理由から、ゴブリン種である彼、スロバッドが造り上げた品も、残り続ける事になる……咎だ。多分。

本当はきちんと発表する前に何度か実験をして、『やつぱりダメでした』といった肩透かしを回避したかったのだが、『月面騒動』の一端を担った俺が、ただ『場所貸して』、なんて言っても通る訳がない。

永琳さんや輝夜に事情を話し、何度も『失敗するかもしれないからね!』と弱腰M A Xでしっかり逃げ道を用意しておいたのだが、それは杞憂に終わった。

こうして完璧に仕上げてくれたスロバッドに対して、疑って悪かった、と謝ったものです。

『ゴブリンの修繕屋スロバッド』

2 マナで、赤の【伝説】【ゴブリン】のクリーチャー 1/2

やや珍しいタイプ【工匠】を持つ。

【アーティファクト】一つを消費し、一ターンの間、他の【アーティファクト】一つを破壊されないように出来る能力を有する。

カードゲームとしての性能はそれ程でもないが、原作の彼は、過酷な運命を切り開いていった勇氣ある者である。

『槍の前と後ろが分かれば昇格する』と、あまりに（頭が）壮絶な種族であるゴブリン族に対して、あるまじき有能さを秘めており、自分の非力さを人一倍理解していたので、それ以外の方面で、ゴーレムや武器などの、様々な【アーティファクト】を使用し、活躍した。

ここは月。

東方プロジェクトの世界において、ここより進んだ文明は無かった。

転生前の文明よりも遥かに進んだ、科学の真髄とも言える技術の数々を目にしていくなに、思ったのだ。

——既存の技術や材料を使って、この世界に、MTGのモノを作れないか、と。

ここで作ったものなら、当然、維持費など発生する事も無い。

それらの前提には、まずそれら「アーティファクト」なり何なりを作らなければならぬのだが、そこは月の科学と、スロバツドの知識と技術によって解決した。

彼、スロバツド——の種族、ゴブリンは、MTGでも知能の低い種族して扱われる存在なのだが、彼に対してそれは当てはまらない。

この「カルドラ」シリーズには製作にこそ携わっていないものの、これの仕組みを理解し、隠された能力を発動させるまでに至る経験を持っている。構造の殆どは、既に理解しているらしかった。

他にも幾つか、強力な「アーティファクト」の作製に関わっており、何より大切な者達には、時に自身の命すら対価にするだけの信念を持つ者。

造れる武具の性能を初め、その人柄も、彼をこうして呼び出した理由の一つとなっている。

ここでは入手不可能である材料——MTG界にあるもの——は、俺が【宝石鉱山】やら様々な【土地】を出し、そこから採取する事でクリア。

他に用意出来るものは月に……というか綿月家やら八意家やら蓬萊山家の人達の勅命に近い形で発注して貰ったものを使用して、難なく補填。

そうして、たった数十日程度で、ものの見事に【装備品】の中でもかなりの性能を誇る【アーティファクト】がこの世界に蘇った。

もう少し余裕が出来たら、他の何かも造ってもらおうかな。

「これは【カルドラ】シリーズ。名前はまんま【カルドラの剣】【カルドラの盾】、んで、【カルドラの兜】だ」

それも聞きたい事ではあるが、もつと聞きたい事は別にある。

そう依姫の顔に書いてあると分かるのは、彼女が分かり易過ぎるからだと思う。うむ、俺が作った訳でも無いのに、結構優越感に浸れるもんだな。割と楽しいぞこれ。

「まずは盾からいくか」

置いてあった盾を手を持つ。

小型ではあるものの、ズシリと手応えを感じ、思わずそのまま倒れてしまいそうになるほどの重さはあった。

「これは『カルドラの盾』。所持した者のダメージをほぼ確実に防いでくれて、これ自身も同様の効果の効果が掛かっている。……あれだ。俺が『ダークステイル』の円盤を出してた時の状況と同じになる。と考えてくれて良い」

食い入るように『カルドラの盾』を凝視する依姫を、一步引いた状態で見守る永琳さんや豊姫さん。そして、輝夜。

レイセンだけは、緊張で顔を引き締めていた。強張っていないところを見るに、どうやらある程度の肩の力は抜けてきているようだ。良かった良かった。

本当はそれなりにリアクションは取って欲しいもんですが、仮にも今後の月に何らかの一石を投じる品物なのは間違いない。

んなもんだから酒が入っているこの場とはいえ、こうして真面目に話を聞いてくれているんだろうが、

(ちよつと怖いなあ、この視線)

猛禽類に囲まれた兎のようだ。

……レイセン、お前ちよつとこつち来い。兎のお前さんにやピッタリだ！ ポジショ

ンチエンジンしようぜ！

「で、次は？」

「お、おう」

おお、よつちゃん急かし過ぎ。

「じゃあ次。【カルドラの兜】。こいつは使用者に様々な能力を付与してくれるもんだ」

「様々な……。具体的には？」

「……それはこれから試す」

あ、輝夜の頭がガクつと下がった。

「とりあえず戦闘面で有利になる力を持たせてくれる兜、とても思っておいて」

ごめん。その辺りを試した後で発表したかったんだが、何せ時間無くて。

「んじゃ、最後は、これだな」

最後の一つ。

鈍い光沢を放つ剣へと手を伸ばす。

「（あれ？ 重い……）これは【カルドラの剣】。所持した者に力を授けて、これによって

ダメージを与えた……傷付けられた者は——」

「……者は？」

「者……は……」

そういや【追放】ってこういう場合にはどう作用するんだろうか。

除去系の究極に位置する【追放】。

【暴露】を使用した時には対して気にしなかった問題なのだが、実際これをクリーチャー

……対象に使ったらどのゆな事態になるのだろうか。

「ちよつと失礼」

近場にあつた、魚の焼き物に手を伸ばす。

皿ごと足元へ置いて、スイカ割りの時みたいに【カルドラの剣】を構えた。

僅かな緊張。

この気持ちを皆が共有でもするかのように、ゴクリと生唾を飲み込んだ後、

「よっ」

ケーキ入刀よろしく、ゆっくりと【カルドラの剣】使つて魚を切つた。

しかし。

「……あれ?」

何の変化も起こらない。

真つ二つになった焼き魚に、俺は効果に対しての疑問から首を捻り、月の人達は『何

やってんの』的な様子で首を傾げた。

「……それが、どうかしたのか?」

「えーと……もう少し色々と驚く現象になるって思ってたんだけど……」
って、あ。

(これって【装備品】だったじゃんよ)

この【装備品】という代物は、自軍のクリーチャーを対象に付属されるもの。

そして、取得させる——クリーチャーへと装備させる為には、殆どの場合、マナという対価を払わなければならない。

場に出す事と、それを対象の存在に所持させる事は別扱いなのだ。

(【カルドラの剣】……本来なら4マナで召喚出来る【アーティファクト】で、それを対象に装備させるのに必要なマナコストは……確か、同じく、4)

その理屈で言うのなら、この【カルドラ】シリーズに対しても同様に、マナを支払わなければならない事になる

造ったのがスロバッドである事による所有権問題やら何やらに色々疑問が浮かんで消える。

(ええいままよー！)

けれど、既に若干のアルコールの混入した頭では、長考という選択肢は消え去ってしまった。

よって、強引に4マナを使い装備させる感覚を巡らせながら、再度この剣を握る手に

力を込めた。

（あ、ちよつと力抜ける……）

どうやら成功したようだが、カードの能力を使う場合にも、やはり体力は奪われるみたいで。

4 マナ使った割りには体力を奪われ難くなったのは、何かしらの進化なのか、制限の緩和なのか、悩む所である。

途端、手にした「カルドラの剣」が軽くなり、羽の如き存在となり、先程までの重量感は嘘のように取り除かれていた。

この分では、しっかりと効果を発揮しているようだと実感出来た。

（うっし、リベンジ）

真つ二つに切り分けた焼き魚を再度捉え、もう一度。今度は四分割にする勢いで、ゆっくりと剣を落とす。

すると、

「げっ」

スロバッド以外の全員が驚き、戦いた。

焼き魚は当然として、下にあつた皿にまでも、その刃の餌食となつてしまったからだ。だが、それだけでは終わらない。

切断と同時。

一瞬、刃で切断した箇所揺らめきを見たかと思えば、まるで夢か幻か。魚も皿も、霞のように消え去ってしまった。

「……九十九」

「……うん」

依姫の声色が強張っている。

そして、俺もその意図するところを察する事が出来た。

細心の注意を払って、「カルドラの剣」を、そつと床へと寝かせる。

この刃に何者も触れられないように、その上から、近くにあった座布団を何枚も被せた後、俺はその場にへたり込み、

「——めっちゃ怖え——」

騒ぐように声を出した。

「あんたが造らせたんでしようが！」

輝夜の突っ込み（豪腕）が俺の後頭部に振り下ろされる。

だが、

「甘いっ！」

かぐやのこうげきははずれた！

「なっ」

「よっ、つとー!」

俺が避けるとは思わなかつたんだろう。

スカした腕が空を切り、輝夜はバランスを崩した。

それを好機と取つた俺は、無造作に振るわれた腕を掴み、関節的にこれ以上曲がつたら拙い位置へと固定し、背後へと回る。

これでも高校の時には体育の成績は中々良かったのだ。その頃は持久力が無いので、スポーツの試合なんかでは戦力外な場合が殆どだったけれど。たまに人数合わせに狩り出されたのも良い思い出になっている。

ただ、こうしたんなら体が密着する流れになるのをすっかり失念していました。ちよつと感情が揺らぐのだが、何せこいつは残念美人。思うところは間々あるが、全て意思の力で抑え付けられる範囲のものだ。

「甘い! 甘いぞ、ぐーや!」 その手の突つ込みなど俺は既に予想していた! 二次のテンプレのようなものだからな! 突つ込みは、愛なくして成り立たん! 俺は基本受身だが、ただの暴力には頑として抗議するものであります!」

「ちよ、ぐーやって私の事!?」 後、そんなカミングアウト要らないわよ! それはいいから、この手を離しなさい!」

「ははは！ やだね！ お前にやあの時（兵器実験場で）のお礼をしなきゃならんしな！」

「——あんた、たかだか間接一つ極めたからって、私が対処出来ないと思ってるの？ 技は勿論、力のみでも脱出出来るのよ？ あんまり怪我させたくないから言っただけなの。……そう。そういう態度に出る訳ね」

「ふふふ……抜かりは——無い！」

言つて、背後から彼女の顔へと、もう片方の空いた手を伸ばす。

顔面で静止した俺の手を疑問と不安で見つめる輝夜の横顔に満足しながら、俺は切り札をチラつかせた。

「——レイセンの時には鼻の入り口を塞ぐだけだったかな……」

「……なつ、あんたまさか」

ふふん。やつと理解したか。

しかし遅い！ 今なら何をやっても間に合わんぞ！

「動くな蓬萊山輝夜。さもないと——お前の顔面鼻フック姿をこの場の全員が見る羽目になるぞ！」

初めて聞く単語である筈だが、言葉のニュアンスで、何となくどんな状態になるのか予想が付いたのだろう。

多分、彼女の頭の中ではレイセンにやった鼻の穴に挿入事件がより醜い状態となって再放送されているのではないか。

顔を青くさせたかと思えば、憎々しい程の目線をこちらに向けて来た。

うんうん。今はその視線も心地良いぞよ。

「月の至宝、敗れたり。……ぐふふ。美しいものが穢される様は、実に愉快なものよのう」

「キモツ！ 今の声何処から出したの?! あんたの背後に肥満体の脂ぎったブタ男が見えたわよ!」

……結構傷つくなそれ。急に酔いが醒めて来た気がする。

「——はい。そこまで」

俺の背後に、先程まで座っていた筈の永琳さんが、こちらの首筋に手刀を突き付けていた。……え、首?

肌を感じる熱は確かに温度を持っているのに、それが堪らなく冷たいと思えてならぬいのは何故なんだろうか。

「ごめんなさいね、九十九さん。仮にもこの子は私の教え子であり、月の主になる役目を担っているのよ。もしやるなら私の眼の届かないところでやって頂戴」

他でならOKよ。な台詞な割りには、声が冷たい。

というか、あなたの場合、眼の届かない範囲というのがあるのかどうなのか、是非尋ねてみたい気がします。はい。

何とか事無きを得て、元の場所へ戻る。

不満気に元の席に着く輝夜を横目に、同じく席に着きながら、俺は内心で『助かった』と思つた。

よく考えてみれば、輝夜は能力使えば時を止めるような効果があつたのを、すっかり忘れていた。

全然優位でも何でもなかったんだが、その辺りはあいつがこつちに合わせてくれたんだらうか……。だとしたら、結構ノリの良い奴なのかもしれない。

「それで、九十九さんとスロバッドさんは、これを造り上げた訳だけど……」

永琳さんが、目線で「カルドラ」シリーズを指しながら、酒で唇を湿らせながら話す。『これどうすんの?』と言いたいんだろう。

……んじゃ、当初の目的を果たすとしましょうかね。

「それはですね。——豊姫さん」

「……何でしょう」

我関せずを貫いていたお方に声を掛けるのは、非常に勇気が要るもんだ。

「これ、あなたに差し上げます」

「……はい？」

あ、その驚いた顔は綺麗です。見惚れそう。

——正直、出来れば他の人達には聞いてほしくない。

あまりに恥ずかしい……というか、情けない事を言おうとしている自覚はあるから。グラスの中にあつた酒を一気に煽る。

酒の力を借りなければ言えない弱気が情けない。

だが、だからといって何もしないでいられるものか。

もう切欠は作ったのだ。

後は野となれ山となれ。

「自分なりに考えたんです。でも、俺、豊姫さんが何を望んでるのか全然分からなくて……」

俺に対して腹を立てているのは手に取るように分かるのだが、それ以外では殆ど接点も無いせいで、趣味趣向の類がサツパリ理解出来ないまま、今に至る。

時間を掛ければ解決出来そうな問題ではあるものの、一応、俺の帰りを待つてくれて
いるであろう人達の顔がちらついで。

すぐに帰りたい。贖罪をしたい。

この二つの間で揺れに揺れた結果——

「ただ、一つだけ。永琳さんや依姫。そして、輝夜の事を大切に思っているのは良く分かりました。それに対して奔走している事も。……俺は、ここでの人間付き合いのイロハは分かりません。だから、もう単純に、例え何があっても身を守ってくれるものを用意したつもりです」

「……それが、この『カルドラ』シリーズだと仰るのです?」

「はい。俺が使う相手を決めない事には、ただの金属の塊みたいなもんですが、一度契約してしまえば、効果は先程みてもらった通り。攻撃においては全てを貫く矛となり、防御においては決して傷つく事の無いであろう盾になる。戦闘においては、まず命を落とす事は無いでしょう。また、もしそれが嫌だと言うのなら……」

床へと置いてあつた武具達が宙に浮く。

驚く一同を他所に、それらは空中で固定されたかと思えば、一瞬にして形を持つ存在を呼び出した。

二メートルをゆうに超える——ジエイスに勝るとも劣らない身長、青く薄みがかつた体は、幻想のように揺らめく。けれどその存在は屈強な戦士以外の何者でもないと思わせるものであつた。

スパルタ人の戦士を幻影と成したら、このような姿になるであろう予想図の具現化が、そこにはあつた。

盾、剣、そして兜。

この三種の神器、「カルドラ」シリーズが出揃った場合にのみ発動出来る能力。それを、今ここで起動させた。

この三種が場に存在している場合、1マナを使用する事で4/4の【伝説】【アバター】【トークン】を生み出し、それにこの三種の装備品を所持させる事が出来る能力を持つ。「——【カルドラチャンピオン】。そこいらの妖怪を歯牙にも掛けない圧倒的な力を持ち、破壊されず、攻撃を与えた対象を消滅させる、伝説の戦士です。彼に掛ければ、あの【マリット・レイジ】すらも——」

ここまで言えば分かってくれるだろう。どれだけ有効性があるのかを伝えるのには、これが一番だと判断した。

実質9/9。破壊されず、ダメージを与えたクリチャーを【追放】し、その他各種、戦闘面において有利になる力を保持した、恐るべき存在。

力では【死の門の悪魔】と同等だが、その他の性能が違いすぎるほどの高性能である。青き陽炎の如き体に繋がれた兜、剣、盾の三つを構える存在を前に、一瞬、俺とスロバッドを除く誰もが顔を強張らせた。

念話で彼……？　へは説明済み。

物の様に扱ってしまうというのに、それでも快く引き受けてくれて、むしろ【アーティ

「ファクト」に気配りをする俺に珍しがられ、面白い奴だと、何故か気に入ってもらえたのは幸いだった。

「私が提案するのは、この二つ。拠点防衛、拠点破壊、殲滅戦に向いている【マリット・レイジ】と、小回りの効き、汎用性に富んだ【カルドラ】シリーズ含む、一騎当千の実力を持つ【カルドラチャンピオン】。——以上が、俺が永琳さんと、豊姫さんに対する……謝罪の気持ちです」

物で釣る。

そんな言葉が頭を過ぎった。

(……何を今更。スロバッドを呼んだ時から、分かり切っていた事だろうが)

既に大いに嫌われているのだ。もう、中途半端に好かれようとするんじゃない。

無い頭振り絞って考えた結果の、これだろう。

相手の大切なものが守れるのなら、俺がどう思われようが関係ない。

もし間違っていたのなら、その時に改めろってんだ。何もしないままにいるんじゃない。
い。

実行あるのみ。

駄目な男は駄目な男なりに、最後まで——。

「……その【カルドラチャンピオン】……さん、は、こちらの指示は聞いて頂けるのかし

ら

豊姫が訝しげに尋ねて来た。

「はい。俺……私が指示すれば」

優先順位は俺だけれど。

沈黙が続く。

瞳を睨り、何かを考えているような、心を落ち着かせているような静寂の後で。

「——分かりました。私、綿月豊姫は、あなたの謝罪を受けます。以後は禍根なく、幾久しく、我が綿月家含む、この月の友として、友好を築ける間柄となりましょう」

深く息を吐いた後、豊姫はその目を開く。

俺の正面へと周り、互いに直立で向き合う形となった。

永琳さんも、輝夜も、レイセンも、スロバッドも。これを見守るように眺めていた。

「全く……。意固地になり続けている私が馬鹿みたいじゃない。あなた、仮にも被害者なのですよ？ 裁判での決着も付いたし、こうして贖罪する必要も無いのですのに」

「そうかもしれないませんが……。大切なものを傷付けられた時の感情は、裁判とか法律とかで整理の付くものじゃないと思いますから」

「——っ」

豊姫が目を見開いて、驚いた表情を作る。

ぐふう、胡散臭過ぎて引かれたか。

このままビンタでも飛んできたらどうしよう（汗

と。

彼女は、すつと、片手をこちらに差し出して来た。

「ここまでお人好しなのに、どうしてあの時にはそれが現れてくれなかったのかしら。演技だとしたら、この月でも最上位の役者になれますよ?」

困ったような……それでいて、何かがスツキリしたような、不思議な表情。

「それじゃあ、蟠りも取り払われたようですし……主に私の……な気はしますけれど……。今宵は無礼講、という事で。精一杯楽しむと致しませんか? ——九十

九、さん?」

途中でボソボソと言っていた事は聞き取れなかったが、全体で見ればそれは、俺に対する印象の変化があつたのが伺えた。

初めて名を呼ばれた気がする。

正確には何度も呼ばれてはいるのだが、それはこちらの名などではなく、単なる固体名称——番号や記号としての意味合いでしか無かつたのだから。

「——はいっ!」

その手を握る。

両の手でしつかりと掴んだその手は、凄く——ただの温度などではない暖かさを伴っていた。

——で。

「あの……依姫、さん？」

「如何しました？」

「（如何……しました？）……えつとですな……何か近いな？　と思いまして」

「これくらい傍に居りませんと、九十九さんのお世話が出来ませんので」

「おせつ……。……いえ、あの、もう充分にして頂きましたんで」

「……もしや」

潤んだ瞳。

「お嫌でしたか？」

「いえいえいえ！　こうして至れり尽くせりな状態なんて初めてでしたから！　依姫さ

んも俺の世話なんて気にしないで、今を楽しんで欲しいなって！」
よっ！

我ながら良い方向に回避経路を見つけたものだ。

「それでしたらお気になさる心配はありません。私は、今こうしている事が楽しみでありますので」

しかし まわりこまれて しまった！

「——九十九さん」

「と、豊姫さん……」

挟撃!?

「あなた、依姫ちゃんの何処が気に入りませんか？」

「近い近い！ もう少し離れて下さい！ 完全に酔ってるでしょう!?!」

「いえいえ、そんな。まさかまさか。ただのアルコール如きで私達月の民が屈する訳ないじゃないですか」

その割には目元がとろんと垂れているのは、それがデフォルトなのか酒の影響なのか、大して付き合いない俺には判断が付き難い……のだが……。

というか、それなら高御産巢日が酔っ払っていたのは、何と説明してくれるんだろう

か。

（ぜってー酔ってるもんよ。足腰に力入らなくなってるんじゃない。立ててないじゃん。這ってるじゃん）

何だかどつかの呪いのビデオから出て来た幽霊みたいにくっちへと擦り寄ってきた豊姫は、どうやら絡み酒を嗜んでいるらしいと分かった。

—— 思えば、輝夜が余計な一言を言ったのが原因だった。

『あんたのこの酒飲みたい』と、ほろ酔い状態で言ってきたまでは良かった。

永琳さんの家でお世話になっていた頃に、乗り気で俺の出した料理……というか食材やらを自慢げに話す永琳さんに、皆、何度か付き合わされていたらしく、前々から興味はあったようだ。

んで。

折角だからと、こうして全員に振舞ってみれば……。

何か変な物質でも入っていたのか、先程の楽しい宴は何処へやら。

永琳さんはスロバッドと談笑し……時折笑みが黒いのは見なかった事にする。翻訳機器を使っても会話不可能であった筈なのだが、どうやって会話しているのか……。は、もはや聞かない。

輝夜は酒豪の部類に入るようで、実に美味そうに、微塵も気品が崩れる事無く。手にした酒を煽り続けている。

意外であつたのは、あのレイセンもその部類であつたようだという事。

輝夜に付き合つて酌をし、時に返杯を受けて、それを顔色一つ変えず、事も無げに一気に飲み干すのだから、見掛けに騙されちゃあいけないと、マジマジと見せ付けられている。

今度飲み比べとかする機会があつたら、絶対に回避すべきであると決めた。

……で、一転して変わってしまったお方が一人。綿月の妹さんこと、依姫である。

何と言うか、幸せに恐ろしい。

変な言葉なのだが……とりあえず順序立てて述べると、だ。

ほろ酔いの依姫が俺の出した酒を飲み、一定時間が経過した後、ふと気づけば俺の隣で静かに鎮座する存在となつていた。

ここまでは良い。

恨みがましい目をしていた訳でも、不満を溜め込む存在になつてはいる訳でもなく、本当にただ、そこに自然と、空気の如く佇んでいただけだったのだから。

だが、グラスが空になれば酒を注ぎ、各種大皿に盛り付けられていた品々を摘もうとすれば既に小皿に装われて手元にあり、手を拭こうと思えばお手拭を渡されて、テーブル

ルの上には零れた料理の欠片どころか、水滴一つとして存在していない。

(……何でこんな高待遇されてんの)

行った事は無いが、多分、毎夜数百から数千が使われてるといふ銀座やら日本橋やら薄野やらのキャバクラですら、ここまでのものではないだろう。

この分では廁にすらついて来そうな雰囲気である為に、膀胱に只ならぬ違和感を覚えながらも、こうして席を立てずに居る。

流石にこのままでは色々和不味い。と声を掛けてみれば、先程の台詞が返って来た。

『それでしたらお気になさる心配はありません。私は、今こうしている事が楽しみでありますので』

楽しい? 楽しいって何が? 俺の世話が? 何で?

初めて会った時の凛とした武人のような姿など見る影も無く、どちらかといえば彼女の姉のような、良妻賢母ってこんな感じか? とか思えるだけの人格と言葉遣いに豹変していた。

俺の後を三步離れた距離から、影を踏まずに両手の掌を静かに重ねつつ、ついて来そうな雰囲気である。

(……そういえば、原作の口調って、どっちかといえばこつちよりだったか?)

少なくとも『だぞ』とか『だな』とか語尾にはついていなかった。

となるとあれか。

いずれはこつちの方にその辺が変わっていくんだらうか。

「九十九さん」

豊姫さんが唐突に呼び掛けてきたかと思えば、

「は、はい。何でしょガボア」

口には何か硬い物が。

俺の胸には、それはもう柔らかな物体が押し付けられているのだが、それを楽しむだけの余裕などある筈も無く。

「あなた、まだ正気なのですね。——つまらないです。我を忘れなさい」

「がぼごぼ……ごぼぼっ！（それって俺が出した一升瓶『月の輪 大吟醸』……って、体が動かねえ！）」

ここは月で、仲良く“輪”になってハッピーだね。的な名前としての“和”と掛けてみたのだが……何とも嫌なワになってしまった。

ガツチリと両腕を肩からしっかりホールドしてくれやがってるのは、獲物を見つけた目になっている輝夜と、今がチャンスとばかりに赤い瞳を滾らせているレイセンである。

（お前らいつの間にな！）

豊姫さんもそうなのだが、何より微妙だにしない程に腕を体へ押し付けられているので、必然、こちらも男の浪漫を楽しむ機会が巡って来ているのだが、秒単位で毒素（アルコール）が流し込まれている脳内には、それを味わうだけの感覚が麻痺していた。

……というか、実際に血流が止まって腕が麻痺していた。

あれ、おかしいな……俺の腕ってこんな青い色してたっけか。

（そ、そうだ。「カルドラチャンピオン」！ ちよつと——）

ってダメだー！ 『ちよつと僕対処出来ないよ』ばりに手を前へと突き出した状態で首を左右に振っていらっしやる!?

（え、何？ 『私は空気が読める』？ —— 違うから！ じゃれてるように見えるかも

しれないけど、微妙にヤバい状況だから！ どうかお前関わりたくないだけだろ!?

一升瓶を一気とか死ねますよ！）

……あ。

（——あれか！ さつき『和室にスパルタ人っぽいやつとか違和感バリバリwww』とか言ったからか！）

あ、薄く笑いやがった。その通りかよ！

すまんかった！ あれは酔っぱらってからなんだ！ 普段はそんな事、口が裂けても

言わない男ですよ俺は！

（『思うには思うんだな』って……そりや……ねえ……?）

今のは嘘を突き通すべきだったか。……正直過ぎるのも考えもんだぜ。

あかん。こつちを助けてくれる気が微塵もねえ。自業自得だが。

（じゃ、じゃあスロバ——）

——熟睡しておられる。——ははは、こやつめ（笑）

……駄目じゃん！ マリさん……は無理だ。助けを求めた時点でこの空間消滅する。

……MTG勢の味方全滅!!

くつ、背に腹は変えられんか！ なら、何故かこつちに優しくしてくれてた依姫に

……

「良い？ 依姫。良い女というものは、男性の顔を立てて、見せ場やコミュニケーションの邪魔をしてはダメなのよ？」

何、楽しそうに吹き込んでるんですか永琳さん！

（なら最後の手段！ 【プロテクション】使ってアルコール耐性を……）

……アルコールって色に部類するなら何なのよ。

いやいやいや、そもそも【プロテクション】でアルコール防げるんだらうか。

もういつそ、何か別のカードを使って……。

（つて、あ……ダメだ……意識が……）

勇丸よ。お前さえ居てくれれば……。

新入社員歓迎会で馬鹿やった時以来か。

あの時は同僚に迷惑を掛けたなど思いつながら、ミスター・リバーズ。あるいはザ・ハイドロポンプの称号を冠しないようお願いしつつ、俺の意識は頭から離れていった。

4 1 飲み過ぎ&飲ませ過ぎ 《後編》

——本當、憎らしい存在だこと。

他の事はどうでも良い。

私にした事だつて、月で巻き起こした騒動だつて。

けれど、あれは妹に手を出した。そして、永琳様にも。

原因は分かっている。過程はともあれ、切欠は自分の妹であるのだから。

……だからといって、それで感情が落ち着く筈も無い。

罪を犯した家族を、一瞬で手の平を返せる者達など居ないように。

勿論、その不快感を前面に出す事はしない。

やる事はやる。

彼が地上へ帰れるように、しっかりと、きっちりと。一文字たりともミスの無いよう、仕事は進めた。

後は極力、彼に関わらないよう過ごして来たというのに。

(……謝られた)

それだけではない。

言葉だけでは足りない、形としてまでその意思を示したのだから。

何故ああも、愚かな程に下手に出れるのだろうか。

理解出来ない。自分なら、その選択肢は無い故に。

命まで奪われそうとしたというのに、それを無かったかのように振舞う、その行い。

そしてトドメの、あの一言。

『大切なものを傷付けられた時の感情は、裁判とか法律とかで整理の付くものじゃない
と思いますから』

そう言い放った言葉の裏には、何の意図も見受けられなかった。

あれは本当に、心の底からそう思っているのだ、と。

これでは一体、どちらが愚かであるというのだろう。

(……敵いませんわ)

負けた。完全に。

こうまで格の違いを見せ付けられては、認めざるを得ない。

政治に携わる者として、常に優位に立つよう心掛けて来たのだけれど。

感情を利用し、背景を汲み取り、心情に訴えかけて、それを……あの者を飲み込もうとしたのだが。

——それを、全て諦めた。

(私は……)

そう思つてしまえば、後は否定的な気持ちで否定する要素は無く。

自然と、彼に対して何処まで恩を返せるのが、頭に浮かぶ。

(私は、彼に何をしてあげられるのでしょうか……)

尤も、それは結論の出ぬ案であつた。

こうまでしてくれる存在を、豊姫は知らない。よつて、それに報いるべき方法を知らない。

自分の師が、彼へとプレゼントを作製していたのは手伝つたが、それはあくまで師の行いであり、自分はそれを少し手伝つただけ。

——何かしなければという思いは、答えが出ぬままに。

そうして宴会は続き。

浮き立つ思考に流されるままに行動していると……。

……気づけば、その原因たる者は完全に意識を失つていた。

「……あらっっ」

自分の手には一升瓶。

この国で造られた物ではない。九十九が出した酒であった。

どうもこの者の出す品々は、我ら月の民にとつての琴線に触れるものが多く、今もこうして我を忘れて気の向くままに行動してしまつたようだ。

(これは……ダメよねえ)

力を使つて空間を繋ぎ、自宅の棚に陳列されていた対毒物の錠剤を取り寄せて、彼の口へと流し込んだ。

毒物にはほぼ万能であるそれは、勿論、アルコールにも効果靦面。

壊れ物でも扱うように、優しく、優しく。

——ふと。

これでは飲み難いだろうと、彼の頭を自身の腿へと移動させる。

苦しくは無いだろうか。

腿同士を擦り合わせるようにして、頭部の位置を調整した。

何と手間の掛かる存在か。

自分で作り上げた結果を棚に上げて、都合の良い様に思考を進める。

けれど、彼に対して何か出来るという行為に、心が喜びを感じていたのも自覚している。

……不器用だ。妹の比ではない程に。

自分で彼が困るように仕向け、そしてそれを、自分が助ける。

このままではいけない。これは、正常な思考では無い。

すぐにでも改めなければならぬというのに……この行いは、とても心地良くて。

これは不器用などでなく、歪だと。そう結論付けるのに、さして時間は掛からなかった。

(でも……今だけは……)

最後にゆつくりと、口元へ水を注ぎながら、ゴクリと薬を飲み終えた彼を見届けて。

「なくに良い雰囲気出してるのよ」

「……はい？」

良い感じに目元の緩んだ輝夜様に指摘されて、今の一連の思考と行動に、漸く認識が追いついた。

……自分は、何をやっているのかと気づく。

今まで一度として、異性にこのような行為をした事など無かった事も、同時に。

(膝枕……。旦那様になったお方に、最初にやってあげるつもりでしたのに……)

自分の考えを表に出さず、豊姫は輝夜へと問い掛けた。

「輝夜様」

「何?」

依姫であつたのなら、動揺の一つでもしたのだろう。

だが、仮にも政治方面でその手腕を發揮する人物である。ポーカーフェイスは大得意だ。気づかれてなるものか。

—— 思考を切り替える。空気を切り替える。そして……話題を摩り替える——
輝夜様の相手をしていたレイセンは、既に壁へと寄り掛かり、静かな寢息を立てている。

何だか無償に苛めたくなる感情が沸き起こるけれど、今はダメだろうと、気を鎮めた。
「依姫ちゃん……フラれてしまいましたわ」

何処に出しても恥ずかしくない、どころか、むしろ誰に対しても自慢出来る、最愛の妹であつたのに。

盗られなくて良かったと思う反面、どうしてダメなのだという気持ちも湧き上がつていた。

「そうね……。そういえば、ある意味で私もフラれたようなものだったわ」

「輝夜様も……ですか?」

「だって、九十九つたら、私の自由を奪つた挙句に、何一つそれを惜しむ事なく手放したのよ?」

「そういう考え方も出来ますわね……」

視線を落とせば、不本意に意識を失った割りには、やけに幸せそうな寝顔がそこにはあつた。

「変な奴よね。こうして見ているだけなら、ホント、何処にでも居る地上人だつてのに。何で気持ちいが傾かないのかしら。よっぽど変な趣味か、かなりの美人達に囲まれながら育つているとでも言うの？」

ぐにぐにと頬を引つ張る輝夜は、何処か満足そうだ。

楽しみにそれを繰り返す彼女を他所に、豊姫も、頷く事で同意した。

「何でも……地上に思い人が居るのだそうです」

ついこの前知りえた情報。

何を思うでもなく漏らした言葉に、輝夜が目を大きく見開いて、驚きの表情を作る。

「……それ、本当？」

「え、ええ。依姫ちゃんが断られた理由が、それであつたとかで……」

何やら真剣に考え込んだ後で、

「……ま、でも時間が経てば解決するわね」

輝夜は、そう結論を下した。

「どういう事です？」

「九十九についての実験の結果が、少し出たのよ。あいつ、寿命が無いみたいだわ」

「私達のような存在であるので？」

「いいえ。それよりも上。完全な不老よ」

不死ではないようだけれど、と。

また一つ、驚異的な——けれど、その程度ならもはや驚く気すら起きなくなっていた兩名は、横からやって来た永琳に顔を向けた。

「依姫ったら、あんなにお酒弱かったかしら」

「あれよ。九十九の出した酒だからだわ。とつても美味しいんだけど、どうも色々と感じの籠が外れやすくて敵わないわ」

なるほど。と同意する永琳だったが、既に外れていた結果の、この膝にて昏睡する男なのではないかと。

そう、豊姫は突っ込みたい衝動を堪えた。

「それで」

永琳が、確認するように、輝夜へ声を掛ける。

「何が時間が経てば解決するのかしら？」

「だって、九十九の相手の寿命が尽きるまで待てば、その問題は解決するじゃない？ その時にまた声を掛ければ、あいつが拒否する理由が無いわ」

これで万事大丈夫。

そう顔に表れている輝夜だったが、永琳が溜め息と共に、その言葉を否定した。

「確かに、それなら問題は解決するでしょう」

「でしょ?」

「でもね。その相手が、寿命のある者だとする根拠が何処にあるの」

「あ……」

その考えは無かったとする輝夜とは反対に、豊姫は納得の意を示す。

「そうですね。あれだけの力を持っている者ですもの。他の力ある者が、放っておく筈がありません。穢れの蔓延する地でありますけれど、九十九さんを見れば、その理由も参考程度にもなりませんわ」

「あくあ。良い手だと思っただけだなあ」

ダメだったか。と九十九の鼻を摘んで、嫌そうに眉を顰める反応を楽しんだ後、輝夜はその手を離して、畳へとその身を横たえた。

「……………いつ、本当に帰しちゃうの?」

唐突な言葉だったが、それは、この場にいる者が皆、抱いている考えでもあった。

「そういう約束でもあるし、こちら側のミスが原因でもあるのだし。何より、彼、弁済どころか過剰とも言える利益をもたらしてくれているじゃない。これで契約を反故にし

てご覧なさい。私達は畜生以下に成り下がらるわよ？」

そう言う永琳であつたが、内心は輝夜に同意している。

「それについては、依姫ちゃんに何か案があるようです」

「あの子に？ 何かしら。フラれた理由を盾に、永住でも持ち掛けるとか？」

「それが、詳細は話してくれなくて……」

それを提案した本人は、幸せそうに寝息を立てている。

ぬぼつと佇む「カルドラチャンピオン」だけが、石像のように無言で佇んでいるものの、初めの頃の威圧感、慣れてしまえば気になるほどのものでもなかった。

雰囲気の緩和に拍車を掛けているのは、その存在の足元で寝息を立てているスロバツドである。

すやすやと眠り扱けるその小さな姿は、何処か愛らしさを感じる。

「で、永琳は、そんなもうすぐ帰る奴の為に、何を寝る間を惜しんで造っているのかしら」
知ってるわよ、と暗に秘めながら、輝夜は尋ねたものの、当の永琳はそれをこれっぽちも気にした様子はない。

結果的にこそそこそやってるように見えていただけで、別に隠すほどのものでもないと思つているからだ。

「【宝石鉾山】もそうだけど、【森】が出現した事によって、首脳部が本腰を入れて彼との

友好を結べないか、と打診があつてね。高御様も似たような事は行つたけれど、あれはあくまで個人同士の関係が大きい。よつて、上のやんごとなき方々は、かつて失つた故郷の再誕を夢見ながら、けれど自分達での案は全て無理だと判断して、私に依頼して来たのよ」

「……方針を決めるのが上ではありますけれど、それも丸投げされてしまいますと、溜め息しか出ませんわね」

永琳に同意する豊姫であつた。

「金銭でもダメ。権力は興味が無さそう。物品系は、この「カルドラチャンピオン」さんや「森」「宝石鉾山」などを見ていても絶望的。後は異性くらいのものでしたんだけど、依姫とのやり取りを聞くに、その辺りの貞操観念は強い。……あれだけの力を持つてゐるのだから、それを可能にする力を持つ彼なら、欲望に忠実であると思つただけだけど……。余程面白い環境で育つたのね」

「はいはい、前提条件は察しが付いたから」

早く結論を。と急かす輝夜に、詰まらなそうに永琳は答えた。

「彼は彼自身の力の制御に興味があるようなのよ。私との実験に付き合つて貰つていた時から、そういう兆候が見受けられた。本人は別に隠している様子も無かつたようだけれど……。まあ、そういう訳で」

懐から何かを取り出して、それをテーブルの上に置く。

彼が身に着けていた、滑る様な白い外套に、とても馴染む色をした純白の大理石のようなそれは、コトリと見た目通りの重さである音を鳴らした。

「腕輪？」

「要約すると、ワームホールの発生装置。もしくは、パイプラインね。豊姫の力を応用したもので、豊姫との距離が開けば開くほど安定性に難が出てきちゃったから、安定性優先で造ったのだけれど、そのせいで色々と組み込みたかった機能が全て破棄になっちゃったわ」

「……何を組み込む予定だったのよ」

「通信端末としては勿論、いつでもこちらに來れるような転送装置に、彼の力を使った局所的な次元断層や空間断裂を引き起こす——」

「分かった。もう分かったから。……一つで無理なら、腕輪を二つ三つ造って送れば良いじゃない。そんなに大きなものでも無いのだし。嵩張るものでもないでしょう？」

「二つ目の機能が周囲に及ぼす影響が強過ぎてね。互いに干渉しあっちゃって、断念したわ」

「もう試してたのね……。……それで？ その組み込みたかった機能を全て省かなければいけない程重要な機能——ワームホールを作り上げて、何のやり取りを行おうと言

うの?」

空間操作系の機能はかさ張るとはいえ、通信機能など、それこそ豆粒一つ以下程度の容量で事足りる筈なのだ。

そう訝しむ輝夜に、永琳はきつぱりと、

「エネルギー供給」

そう答えた。

「知らなかったわ。あいつってアンドロイドなんかの機械の類だったのね」

「違うわよ。純粹に、活力や体力の元となっている物質を精製して、彼へと流し込むの」

一端言葉を止めて、永琳は二人の顔に目をやった。

「彼が、彼の言うクリーチャー達の基点になっているのは知っているわね?」

「はい。次に何か事が起こる場合は、彼に考える間を与えず、速やかに意識を刈り取るなどするように、との結論でありましたわよね」

「過去の出来事のデータを見るに、彼が何か一つ行動を……能力を使う度に、彼は大小の差はあれど、それが大きければ大きい程に、彼のエネルギーは消費されている。まあそれは万事全ての事象に当てはまるけれど。出した後で色々するのは得意のようだけれど、出す前の段階であれこれするのは苦手のようなのよね。そして——」

「あの、永琳様、また……」

「またも話が横道に逸れそうであったのを、今度は豊姫が恐縮そうに呼び止めた。この師の悪い癖である長話は、依姫は兎も角として、その弟子の姉にとつては、可能な限り避けたいものであった。」

「輝夜はあれだとしても、まさかあなたから止めに入られるとは思わなかったわ。——やっぱり、その膝の重みのせいで、腰が据わっているからかしら？」

——しかし、元の会話に戻そうとした行いは、その言葉によつて失敗する事となる

足を崩している輝夜に、永琳と豊姫は正座。

「ただしその豊姫の膝には、先と変わらず、意識を失わせたままの体勢で、九十九の頭が乗ったままである。」

「自分でも不思議なのですけれど……。一度認めてしまえば、また新しい視点から物事は見れるものなのですわね。……どうにも、こう、出来の悪い弟の世話をしている心境でして……」

「あなた弟なんて居ないじゃない」

「例え。ですよ。輝夜様も、ちよつとやられてみます？」

「あ、それ良いわね」

呆れる永琳を他所に、輝夜が豊姫の位置と入れ替わる。

異性の上半身はそれなりに重いものの、豊姫は兎も角として、輝夜にとってはその重さなど有つて無いようなものだ。

静かに自分の膝の上に、重みを加える。

何とも安らかな寝顔をしているその者は、建国以来最大の混乱を招いた一端を担っているのだから、何とも変な印象を受けた。

「……………こうして眠っていれば、ホント、あれを引き起こした張本人だとはとても思えないわ」

そうして、豊姫に習つて頭を撫でた。

手入れなど度外視だ、と主張する、やや強張つた髪を触りながら。

「乱雑な髪の手入れだ事……。この辺が男の子、なのかしら。……………永琳もやってみなさい」

呆れつつも、何処か興味深げに目線をくれていた師に対して、その弟子であり上司は、面白そうに命令した。

「……………え？」

「あなたよあなた。そんなに興味があるなら、やってみれば良いじゃない」

「え……でも……それは……」

「……何でそんなに躊躇しているのよ」

言われ、何故だろうという疑問が沸き起こるものの、その結論を出す前に、

「はっ、(ハッ)」

ぽんぽんと自分の座る位置を叩き、来い、と指示された。

どうしてこうも尻込みするのだろうかと自分で自分に疑問を持ちながら、言われるがままに、場所を変わった。

「……」

膝の上に乗る顔を見続け、

「……」

見続け……

「……」

「……あの、永琳様……?」

「永琳、どうしたの、戻って来なさい」

おい、と顔の前で手を振って、放心していた彼女を起ここそうとする輝夜であったが、それでも何の反応も示さない対象に、首を傾げる。

別にこいつにそんな魅力など無い筈だが、と思考する輝夜であったが、

「え？」

永琳は、膝の上の頭を包み込む様に抱きついた。

誰もが言葉を発せられない中、月の抱擁は続く。

一秒か、一分か。

どれだけ時が経ったか分からないけれど、何の前触れも無く、その抱擁は終わりを告げた。

「永琳……あなた……」

「永琳様……」

我に返った二人が、口々に理由を尋ねる声を上げた。

「……これで、最後だから」

何が、と追求する二人では無かった。

この月の中で最も付き合いの長かった彼女は、誰よりも自分の役目を心得ているばかりに感情を前面に出す事なく、こうして別れの時まで……いや、この機会が無ければ、このままずっと心中を吐露する事は無かったのだから。

「良い相手を見つけたと思っただけだね」

「あら、永琳、あなた、やっぱり歳下が好みだったの？」

「そういう意味では無いわ。今こうして改めて自分の気持ちと向き合ってみても、心が

燃える様な感情などではない。あえて言葉として一言で纏めるのであれば、さつき豊姫が言っていた、出来の悪い弟。というのが最も適切かしら。異性としては……どうかしら？ 今ひとつ実感が持てないわ」

「あら。永琳様も、ですの？」

「たった一週間程度ではあつたけれど、とても心地良かったのよ。家族という付き合いは、時間が取られるだけで手間の掛かる関係だと思つていたけれど……。こういうのも存外悪くないと。そう、思えた」

「弟……弟かあ……。私の場合はなくんか違うのよねえ」

「あなたの場合は暇潰しの道具、みたいなものじゃない？」

「始めはそうだったんだけど、それもちよつとしつくり来ないのよねえ」

自分の弟（仮）を物呼ばわりする永琳だったが、輝夜はそれを気にしない。

豊姫だけがそこに疑問を持つものの、それに対して口を挟む事はしなかった。

「———そうね。こいつの言葉を借りるなら……」

永琳の膝で幸せそうに熟睡しているものの頬を、ちよんと、突く。

「九十九曰く、『友と書いて、ライバルと読ませる』といった感じかしら」

「なに？ それは」

「さあ? 『敵と書いて友と読む場合もある!』とかも言っていたけれど」

「……危険対象をこちら側に寝返らせる為の戦術かしら。ジェイスさんの力を考えれば、彼に対しての敵は、敵足り得ない、と」

「それ最悪ね。もしかしたら、私と永琳と、豊姫や依姫が四つどもえのデスマッチを演じていたかもね」

「彼の性格かしてその線は薄そうではありますけれど、ジェイス様でしたら、それ位は行いそう、と思わせるだけのお方ではありませんわね」

しばし彼女達の雑談は続き、当初の目的は誰もが意識していたものの、それに戻る事はせず。

テーブルに置かれたグラスに残った氷が解けて、澄んだ音を立てた頃に漸く、一通り言い切つて満足した永琳が、話を戻した。

「ええと。それで、何処まで話を進めたのだったかしら。『カルドラチャンピオン』さんの武器である『カルドラの剣』を豊姫の扇子に応用する話?」

「九十九がクリーチャー達の基点になっている、というところまでよ。……あなた、そんな事やろうとしていたの?」

「まあそれは追々ね」

そこはあまり深く話す気は無いようだ。

「こほん」と一つ咳払いをし、姿勢を正して——九十九の頭を膝に乗せたまま——人差し指を立てて、漸く話を纏めた。

「彼がクリーチャーやジエイスさん達を呼び出し、維持し続けるのにはエネルギーを消費する。法廷で、ともすれば過労死——とも言える死因になってしまふほどの疲労をして昏倒してしまつていたわね？ それは言い換えれば、そのエネルギーを補填出来るのであれば、幾らでも強大な存在をこちらへと招き入れられるのよ。……まあその基準が今ひとつ良く分からないんだけど」

「【マリット・レイジ】や【カルドラチャンピオン】は難なく維持出来ていて、【ジエイス・ベレレン】やその他のクリーチャー……何だったかしら？」

「【極楽鳥】に【ターパン】。後は、クリーチャーではないけれど、【ジャンドールの鞍袋】が最もなものね」

「そうそれ。それに対しては、大小の差はあれど、前者二つと比べれば、疲労具合が飛び抜けて高くなつている様子が見て取れた。存在の強大さとかが関係しているのかと……というよりそれが通常である筈なんだけど、あいつの場合、やっぱり何かしらの基準に沿つて、その疲労具合が決まつているのね」

「いずれ、九十九さんはその事を話して頂けるのでしょうか……」

「どうかしら。余程親身になれば可能だとは思うけれど。あいつの場合、一度、信頼とい

う名の懐に入ってしまったえば

、幾らでも助力を得られそうだもの。じゃなかったら、豊姫に対してあれだけ過剰とも言えるプレゼントは無かったでしょうし」

輝夜は横目で、そのプレゼントたる青き幻影の戦士を見つめた。

これといって反応する素振りも無い。無言&無関係を貫く姿勢のようだった。

「いつかは、このお礼は致しますわよ……。輝夜様、そうやって人の過去を穿り返すの、やめて頂けません？　我ながら何とも意固地であったと思つていますし、反省もしていませんから」

「良いじゃない、ちよつとくらい。こういつた失態を犯したあなたを弄れる機会なんて初めてなんだから」

「あら。じゃああなたが地上人（仮）にコテンパンにされた挙句にポイ捨てされた、という話で、私はしばらくあなたを弄ろうかしら。何せ初めての事ですから。教え子の矯正は徹底的にしておいた方が、後々楽ですもの、ね」

「……悪かった。もう言わないわ……」

他愛のない会話で、彼女達は盛り上がった。

話題は主に、月の頭脳の前で眠り抜けている存在について。

良かった事、悪かった事、色々あったものだど一頻り話していく内。

月の夜は緩やかに更けていった。

(ま、素直に帰す気は無いんだけどね)

とか思う者と。

(あの子がこんな存在をみすみす見逃す筈が無いわ。……はあ。九十九さんの帰還の時の為に、何手か打っておかないと)

なんて頭を抱える者。

(そう永琳様は考えていらつしやるでしょうから、それを考慮に入れつつ、あの方の手助け致しませんと。……もう、唯でさえ通常業務にすら差し支えが出始めていますのに)

そう思考を巡らせる者に。

(……うわあ、不味いところで起きちゃった……。聞かなければ良かったかなあ……。でも綿月様達のご恩と——一応、彼にもお礼……。は、しないとイケない……。うう、輝夜様相手に何秒持つか……)

人知れず、この場で最も苦悩する者が一人。

後は、この場を無言で見守る「カルドラチャンピオン」

それぞれの思惑の中。

月の夜は穏やかに――表面上は――更けていった。

4 2 地上へ

クラシックな楽器達が、盛大で荘厳な音楽を奏でている。この手のものは、地上と月の双方に、あまり差は無いようだ。

美術や芸能方面にはとんと疎いのだが、それでも今流れているこの曲が、とても洗練されている事だけは分かった。

こちらに来て何度も目にした月の大地。何処までも続く砂の絨毯。

本来なら何人たりとも生物の存在を許さぬ、日の届かぬ内は極寒の、日の届く内は灼熱の入り混じる世界。

けれど今は、ともすれば千にも届くであろう人々の影が浮かび上がっていた。

ウサミミの付いたヘルメット。落ち着いた色の防弾ベスト。そして、やはり構えられているライフルやら何やら達。

残念な事に、知っている顔で見送りに来てくれているのは、依姫だけだ。

何でも、他の人は溜まりに溜まったあれやこれの雑務を処理し始めているのだとか。豊姫さんの力を使って戻されるのかとも思ったのだが、どうやらそうでは無いらしい。

地平線に映える青き星を背に、俺は見送りに来てくれた……のか警戒されて配備されたのか悩む大勢の軍隊に見られながら、直立している。

思い返せば、あつという間。

ここに来て、色々な人々と付き合つて、怒涛の如く過ごしたかと思えば、今こうして、元の場所へと旅立とうとしている。

永琳さんから選別にと受け取った、白い大理石のような細い腕輪に目をやった。

何でも、疲労が一定以上になると、自動でこちらの体力を回復させる機能を持つているのだそうだ。折角なので、八意の腕輪とか名付けてみようか。

【タップ】【アンタップ】に頼る事無く、図らずも【ファッテイ】召喚の制限が薄れた事に歓喜した。

……ただ、そんな彼女も色々忙しいらしく、この式典？には出席出来ないらしい。残念である。

けどまあ、いつかは地上に降りて来る……かもしれない方々であるのだ。

場合によってはこちらから自力で会いにも来れるのだし、そこまで気落ちする程でも

無いだろう。

「九十九……」

「依姫」

俺の目の前には月の軍神。

ただしそんな彼女は、さして明るくないこの月面であつても分かるくらいに、頬が少し赤い。

それに心当たりのある俺は、釣られて自分の顔に熱が集まつていくのを感じる。

「お、お前赤くなるなよ。こつちまで恥ずかしくなつて……」

「ええい思い出させるな！ 第一あれはお前にも原因があるだろう!？」

思い出させたのはそつちだろうが。

彼女が恥ずかしがっている理由とは、昨夜、世話焼き女房の如く変貌した事ではない。

泥酔した翌朝。

明るくなった外の光に起こされて、鈍い意識を無理矢理覚醒させかと思えば、俺はパ
ンツ一丁になっていた。

そこまでは良い。

……いや、良くはないのだが、まだその段階でなら、色々と被害は抑えられたのだ。一

応、最後の砦（パンツ）は残っていた事を、寧ろ褒めるべきだろう。

あの時ほど鍛えていた自分の体を誇らしいと思った事は無い。

適度に引き締まった体は、自己判断ではあるものの、誰に見せても恥じる要素の無いものだと自負出来たからだ。転生前の、二の腕ぶるぶる&二段腹状態でない事に安堵した。

——問題は、俺の左右。

着崩れた衣類を辛うじて体に引っ掛けて、その柔らかな肢体をこちらの腕へと絡ませている依姫と、衣服こそきちんとして着こなしているものの、こちらの胸を枕代わりに、すやすやと寝息を立てている豊姫であった。

……訂正しよう。

ここだ。ここまでは良かったのだ。

既にマスターズパークやらマリさん砲やらが飛んできてても可笑しくない状態ではあったものの、ここまではまだ、弁解の余地が残っていたのだ。

だが普段、色恋沙汰など微塵も無かった俺であったから、それを夢だと思い込んでしまった。

具体的にどう思ったのかは記憶に無いが、とてもハッピーな脳内であった事は間違いない。

そうして導き出された行動が、この状態をもつと味わおう。的なものとなり。両手に花束。

左右で寝ていた彼女達を、自分の胸元へと引き寄せた。

ふにゃん、とした表情の依姫は、『暖かい……』と呟きながら、更に体を密着させて。えへへ、と声の聞こえてきそうな優しい顔で、こちらの体を愛おしげに撫でてくる豊姫に、夢の事だと思いつながら、いつ死んでも良い、とすら思った程だ。

ぬぼつと。【カルドラチャンピオン】が、俺の頭上から覗き込む。そろそろ時間だ、という事らしかった。

そこで俺は漸く意識が覚醒し……同時、左右で寝ていた彼女達も覚醒した。

……後は、ひたすら無言。

騒がない。慌てない。目線すら合わせない。

俺と依姫と豊姫は、もうそこには自分以外の誰も居ないと言わんばかりの完全な無表情を貫いた。

何事も無かったかのように互いから離れたかと思えば、いそいそと服を着込み、全部着終えたところで、俺は、同じく寝入っていた永琳さんと、レイセン、輝夜と、スロバツドを起こす。

永琳さんと輝夜は、壁にもたれ掛かりながら、二人で支えあいつつ夢の世界へと旅

立っており、その永琳さんの膝に、レイセンも頭を置いて静かに寝息を立てていた。これであと一人。

小さな白き者が混ざっていけば完璧であつたか、と。ふと思つた。そうして。

写真の一枚でも撮りたい光景であつたと悔やみながら、自分の状況を逃避するように思考を逸らしつつ、こうして月の人達——主に軍隊——に見送られながら、式典っぽい現状にまで漕ぎ着けるに至つた訳である。

「しかし、お前は永琳様を起こす事に躊躇無かつたな」
暗に自分には出来ないとのニュアンスを含ませる。

「短い付き合ひとはいへ、何回か起こしてるからな。コツは、揺するなりして体に刺激を与える事だ。声だけだと、ちよつと厳しい感じ」

「なるほど。機会があれば試してみよう」

そして、両者は今までの流れを思い出す。

「と、とりあえず、次からは飲酒には気をつけましょうつて事で……」

「う、うむ。肝に銘じよう」

既にスロバッドは還してある。

ジェイスともいずれ、このような場を設けたいと思ひながら、目の前に広がる光景に、

ただ息を呑む時が続く。

音楽隊の演奏が終わり、こうして依姫が何かの挨拶をするだろうと思っていたのが思わぬ方向に逸れてしまったけれど、何とか方向修正は出来たようだ。

「——行くのか」

思い出したように、依姫の口から言葉が漏れた。

「……そりゃあ、な」

「そうか……」

ちよつと気まずい。

周りにはかなり人が居る事と、会話のメインが例の件でない事が、唯一の救いだらう。

「——くっ」

依姫の顔色がころころと変わる。

それに合わせて頭を抱えたり、眉間に皺を寄せたり、両手で顔を覆ったり、何やら凄まじい勢いで考え事をしているのは察する事が出来た。

「九十九っ！」

「はいっ！」

とうとう気持ちに整理が付いたのか、吹っ切れたように、俺の名を叫ぶ。

「未だに私は、お前に対する気持ちが良く分かん」

「……は、はあ」

ドリフよろしく、俺の衣類がズルつと着崩れた。

散々悩んだ末の答えがそれですか。お前らしいとはいえ、ちよつと体の力が抜けましたよ。

「ただ、お前が好意を寄せる相手が居る事に、酷く感情が沸き立つんだ。永琳様の時とは似て非なるものだ。皆はこれを、愛だの恋だのと呼んでゐるらしい」

……今、何と言った？

(……まじかよ)

テモ期到来だぜ！ ヒヤツハー！

これで俺も……。

なんて。

——そんな感情は、一切沸かなかつた

馬鹿だと思った。酷く、馬鹿だと思った。悲しみにも似た感情の方が先に湧き上がっていた。

何で、よりにもよって俺なのだ。

他に良い異性など山ほど居る筈だ。

顔が良かったり、性格が良かったり、家柄が良かったり。

それに比べて俺なんて、唯一、能力だけが取り得の……それこそ神か悪魔か。な程のものがあるとはいえ……。

「——落ち着け」

彼女の言葉を遮る。

東方プロジェクトにおいて、最強の存在を討論した際には必ず候補に挙がるであろう者、綿月依姫。

高潔にして無垢。

瀟洒にして可憐。

この世界で、一騎当千の名がここまで似合う奴もそうそう居ないだろう。

諏訪子さんの時のように、時の流れと共に互いを理解しあつた訳でも、彼女の為に死力を尽くして何かをした訳でも無い。

……それが、ただの力を貰った存在に対して感情を揺さぶられている、とも思える行

為が、とても心を掻き立てる。

——話し、理解していく内に、俺は依姫に、一種の憧れを抱いていた。

竹を割ったような裏表の無い性格は、付き合っていけばいくほどに、その愚直さに、その素直さに敬意を感じ、失態にも全身全霊を以って応えて謝罪するあの姿勢は、いつも逃げ道を確保して、時に空回りをし、被害を抑えようと足掻く俺には無いものであった。

鬼とは違う。

あいつらは、物事はそういうものだから。と割り切った上での言動である。

けれどこいつは、思い、悩み、失敗し、挫折し、それでも次こそは、と。何度後悔の海に溺れようが、その足掻きを止めようと思わない者。

馬鹿だろうと思つた。阿呆だろうとも思つた。そして——羨ましいとも思つた。

そんな行いをし続けければ、自分が傷つくだけだというのに、それを決してやめようと思わない。

それを是とする者など、俺の周りには居なかつた。

だから思う。

お前にはもつと相応しい、運命とも言えるだけの相手が居る筈なのだ。

諏訪子さんに気持ちの傾いている俺などではない、もつと自分を……依姫だけを見続けてくれる存在が。

原作ではまだ出現していなかったが、こんな魅力的な女性が、いつまでも放つて置かれる筈が無い。

……俺は、綿月依姫に対して、好意を持っている。ただそれは、愛とかそういうものかと問われれば、素直に頷くものではなかった。

一言で纏めるのなら、気に入ったのだ。

だから、そんな者が……信頼した相手が不幸になりそうな行いを、ただ黙って見過ごせるものか。

「お前は一時の感情に流されてるだけだ。誰も目にした事の無い力を前にして。……この力が欲しいってんなら、あげる事は出来ねえが、幾らでも貸してやる。だから、もつと自分を大切にしろよ。こんな訳分かんねえ優柔不断な男じゃなくて、もつとお前だけを見てくれて、お前に対して命を賭けてくれるような相手が絶対居る。惑わされんなよ月の軍神様。お前はもつと——」

言葉の続きは何と言うつもりだったのか。

頬に受けた鈍い痛み。

顔が横へと強制的に向かされて、口の中に不快な赤い味が広がっていく。

依姫の振り抜かれた拳が、俺が何をされたのかを雄弁に物語っていた。

月の者達が身構える。

何があつたのかと。何が起こつたのかと。

和やかに見送る筈が、一転して目の前の二人から、緊の一字が浮き上がっているのだから。

そして何も出来ずに……ただ、こちらを見続ける。

「……何すんだ」

「落ち着け、九十九」

そつくりそのまま、台詞を返された。

「何を気持ちが高ぶっているのかは知らんが、過度な評価は不愉快だ。止めるがいい」

「なっ、過度つてお前「……あのなあ」——」

呆れた、と。

溜め息をする彼女の顔には、その一言がありありと浮かんでいた。

「お前、私が何年生きてきたと思つている」

「……めつちや長い、位には」

「そうだ。そして、私の姓は何と言う？」

「綿月」

「……ここまで言つても分からんか」

逆に、それで何を分かれと言うんだ。

「お前、こちらの事情に詳しいようで無知なのだ。……我が綿月家は、ここ月において五本の指に入る程の名家だといつても過言ではない。縁談など、それこそ笑みを浮かべた頬が石になってしまふのではないかと思える位には行つてきたさ」

「破談しまくつてゐるつて言いたいのか？ そりやお前、結婚の条件が厳しかっただけだろう。……俺には申し込んで来た事を思い返すに、だ。最低でも、月の軍隊丸々手玉に取れるだけの戦力やら【宝石鉱山】やら【森】やら出さなきゃいけないんだからな。理想高過ぎだぞ」

「そういう理由があるのは否定せん。だがな、《月面騒動》の判決が出た直後、我ら綿月家に対して取り入ろうとした家々の、何と多かつた事か。思い返すだけでも癪に障るので要約するが、『復権したければ我が家に入れ』との連絡が引つ切り無しであつた。……私は勿論。姉上にすらもな」

「……そりやまた、何とも胸糞悪くなる話だな」

「だろ？ しかし、まさかお前との関係が良好なものである、とは予想出来なかつたのだろう。我ら綿月家を利用しようとした者達は、その恨みが我らを返してお前へと伝わるのではないか。と思つたらしくてな。……まあ、それが権力者というものだ。打算無くて家は栄えん。それをせざるは、ただの無能者だ。理解はしているさ」

そう纏める依姫に今ひとつ釈然としないものを感じるが、特権階級の人々の気持ちは

理解の及ばぬところがあるので、黙って聞く事にする。

「それで、だ」

依姫の眼が、再びこちらを捉えた。

「お前、私の力や家柄を欲した事はあるか？」

「……手に入るってんなら、すんごいメリットではあるな」

「そこだ」

ズビシッ。な効果音と共に、人差し指を向けられた。

「我ら綿月家と友好を結ぼうとする者は、まずそこから入ってくる。それを悪とする気はサラサラ無いが、決して何も思わない訳ではない」

「そりゃ、家柄やら立場やらのせいだろう。そういつた要素を省いた……そうだな。一般の人達なんかだったら、素のお前自身を見てくれてるんじゃないやねえのか？ 一人で街中うろうろしてれば、何かの恋の予感でも始まるかもしれないねえぞ？」

「そうかもしれない。だが、私は綿月の姓を名乗っているのだぞ？ 何の取柄も無い者との婚約など、御家の為には一利も無い。せいぜい私の気持ち満足する程度の範囲だ。人々の上に立つ者として、それだけでは、な」

……ようやく分かった。

こいつは、自分の感情は二の次なのだ。

御家の為に、月の為に、自分が出来る最善を行う事を是としている。

好いた惚れたの感情は、あくまでそれらが成立した後に付随するものであり、それが成立しなければ、本人の意思は含むに値しない。

「だから、だ」

今までの様子とは一変し、何処か不安げな瞳をする。

「お前が言ったように、お前の力を取り込められたのなら、御家の為……ひいては月の為、という条件は難なくクリアしている。そこには誰も疑問の挟む余地は無い。……十九よ。私は数え切れぬほどの縁談を受けて来たと言ったな」

「……ああ」

「それはお前の言う通り、私が気に入らぬから云々で破談になったのではない。契りを結んだところで、大してメリツトが発生しなかつた事が最大の原因なのだ。家柄において我らと並ぶ存在は少なく、力においては、それこそ、姉上と輝夜様。そして、永琳様の三名しか、な。……選択肢の悉くが、自らの水準よりも下なのだ。婚期が迫っている訳でも無いので自然と、こうして浮いた話の一つもなく過ぎ去って来たしまった訳だが……」

少し言葉を濁した後。

「……お前が初めてだったんだ」

俺にでも聞こえるかどうか怪しいくらいに、小さな声で。

「名も力も関係無く、私という個人を見て、何一つ飾るでもなく付き合ってくれる異性は。そして、そんな相手は過去最高の好条件であるのは疑いようも無い。打算もある。思惑もある。だが、そんなものは私の中では後付けでしかない。……なあ、九十九」

「……おう」

「お前、私が困っていたら……どうする?」

「どうするって……」

逡巡。

「とりあえず、駆け付ける」

「その後は?」

「何が出来るか考える」

「命が危うかったら?」

「まず助ける」

「それが『神々の依り代』たる能力でも太刀打ち出来ない者であつてもか?」

「悠久の時の中に思考が腐り果てるまで置いておくでも、何一つ感覚の無い絶対隔絶した空間へと飛ばすでも、無慈悲な一撃を以つてその土地ごと塵芥になつてもらうでも、如何様にも。そんな相手が居たら、の話だけだ」

「……お前、そんな事も出来たのか」

「冗談だ。そこは流せよ」

今はまだな、と。心の中で呟いた。

互いに苦笑。疲れたように声を漏らして、すぐ止まる。

テンポ良く会話が続いた事に、何処か可笑しさを感じながら。

僅かに笑みを向け合った後、息を整えて、再び問い掛けて来た。

「……それで、それは私が綿月家の者だからしてくれるのか？ それとも、『神々の依り代』たる力を持っているからか？」

「綿月じゃ無くなるうが、能力失おうが、別に。——お前が、お前だからだ」

何だか乗せられて会話している気もするが……まあいいか。別に嘘を付いている訳ではないのだし。

その言葉に、彼女は満足そうに深く頷いた。

「初めて出会ったのだ。契りを結ぶ事に問題が無いどころか、むしろそうすべきである、と思わせる相手は……。お前は数百万年の私の人生の中で、初めて出現した優良物件という訳だな。同じだけの時を過ごしたとしても、このような条件の相手と出会う可能性は、不変が常である月の都市では困難……違うな。不可能だ」

「……そこは、『あなただけ』的な台詞で通せよ。他に同条件の物件があつたらそつち

に行く、みたいな台詞になつてゐるぞ」

「そう言つてゐるのだ。間違ひではないぞ? ……お前とて、先に出会つた者が永琳様や姉上、輝夜様だったのなら、今お前の心を占めてゐる者に対して、同じ感情を抱き續けていられるか?」

好いた惚れたは先手必勝。

少し違う気もするが、誰だったか、そんな言葉を思い出す。

「……酷い言い方だ」

——ただその時は、俺は「九十九」などという者ではなかつただらうけれど。

「ん? その通りであると思わんのか?」

「黙秘する」

「はっ、酷い台詞だ」

またも、言葉を返された。

「全ての条件がお前との契りを結ぶ事に可を下し、そこでようやく、私はそれら柵のフィルターを通さずに相手を見る機会を得た。初めての事で色々と困難ではあつたが」

一息。

「……お前だからだ。九十九。意図も容易く何かに流される姿も、愚かとも思えるほどに浅はかなところも。そして、心を許した相手に対して愚直なまでに親身になつてくれ

るところも」

「……後半のところは理解出来るが、前半二つは、むしろ断固拒否するところじゃねえか。むしろ逆だろ、逆。その反対を好めよ」

「そんなものは私一人で充分だ。何が悲しくて自分と似たような相手と契りを結ばなければならぬんだ。ならば元より私一人で構わんだろう。違うからこそ楽しいのではないか」

そういう考え方もある……の、か？

「……あれか、お前、最高とか完璧とか無敵とか、そういった単語から真逆な相手が好きなのか」

「否だ。私は、私に無いものを持つ者が好ましいのだ。ただ、そういう者は最初の条件——月の為に何かしらの利をもたらず——から悉く外れてしまっているのだ。だから……うむ……」

自分の中で渦巻いていた言葉が纏まったのだろう。

少し唸った後で、ポンと手を打ち、こちらへしっかりと向き直り。

「お前が私の持ち得ないものを持つが故に、私はお前を好んでいるのだ。この心の温かさは、今でも胸に灯っている。——この熱が、間違いである筈が無い」

先程の、恥ずかしげに悩んでいた素振りは何処へやら。

これでお前も分かっただろう、と。

何一つこちらの反応を確かめる事無く言い切るその表情が、雄弁に彼女の気持ちを語っている。

無色。

魂の有り方全てが手に取るように分かる感覚は、何一つとして偽りの色の付いていない、純粋な本心から発生したものだからだろう。

ここまで言われて、黙っていられる訳が無い。

……但し、その沈黙を破る行為が、決して良い方向に転ぶ訳ではない。

「……それでも、だ」

否定の言葉。

突き放す様に、俺は拒絶を口にする。

思考の纏まらない頭では、もはや彼女に対して口論で説得出来る気がしない。だから、もう、最後の手段。

駄目なものは駄目なのだ。ただの情の赴くままに、子供の我が侷の如く、気持ちのみで押し通す。

好意を寄せてくれるのは嬉しい。それこそ、天にも昇る気持ちだ。

時と場合が合えば、諸手を挙げて、受け入れていた程に。

——だからこそ、それを認めてはならないというのに。

「だろうな」

それは相手にとっては織り込み済みで。

今までの重々しいやり取りは消え失せて。

その態度に、訳が分からなくなる。

「困らせて悪かった。——さて、では本来の目的を果たすとするか」

不意に、彼女の表情は優しげなものから一転し、真剣なものとなる。

「名前を貸して欲しい」

告げられた言葉は、言い方は悪いが、腐っても彼女は綿月家の者なのだと認識するに

は充分だった。

鈍い俺の頭でも分かる。

変な話、仮面夫婦になれ、と言っているようなものだろう。

「……力を貸すとは言ったが、名を貸す事態になるとは思わなかったぞ。……別に良い

けどよ。こつちには何か影響は？」

暗に、面倒ごととは御免だ。とのニュアンスを含ませる。

協力するとは言ったが、全てに肯定している訳ではないのだから。

「特には、無いな。お前が契りを結ぼうとしている相手との間に誤解が生まれるかもし

れない……くらいか。まあ黙っていけば、月での事情など知る事もあるまい。仮にもし知ってしまったのなら、我ら綿月家はその者と直接話の場を設け、説得してみせる。無論、その他月での面倒ごととも、全てこちらで対処する。書面上は夫婦だが、綿月家、蓬萊山家、八意家の三家にとつては、その婚姻は名ばかりのものであると理解した上での、これだ」

自身の長い髪を手櫛で梳かしながら、彼女は、今度はメリツトの方を話し出した。

「とはいえ、それでも夫である事には変わらない。お前が望むのなら、我が家を自由に使ってくれて良い。資産、人材、そして、私も。全てを、だ」

月に害の無い範囲で。と言葉を纏め、そう提示する。

「もしあれなら、九十九の思い人に、初めから説明しておこうではないか。『我が家を救って頂く為に名前をお借りしたいのです』といった風に。どうだ？ これならお前も後ろめたい気持ちは起こるまい？」

「あ、ええ………んん？」

俺が拒否している最大の理由は、依姫が不幸になりそうである事と、何よりも、諏訪子さんに対しての背徳心。

よつて、依姫が幸せになり、諏訪子さんにも恥じる事の無い………筈の行いならば、むしろ協力してやるべきなのではないだろう………か………？

そう、考えていると……。

「——我が侂なのは分かっている。ずるい女だ。相手の事を思うでなく、自分の感情を優先するのだから。……故にこれは、愛でも恋でもない。単なる独り善がりの自慰のようなものだ。……まあだからこそ、この気持ちに何と名付けたら良いものか分からないのだが……」

——毅然とした態度は見る影も無い。

俯く顔は、一体どんな表情をしているのか。

一步こちらに近づいて、もう一步踏み込めば、体が密着する距離まで縮まった。微かに体は震え、声は上擦り、十拳剣の握られた手は、強く握り込まれている。

「……頭では理解している。それでも、感情が現実を受け入れてくれない。お前が地上へと戻れば、私はこちらに行く事は出来ない。それは……とても……嫌だ……」

顔を上げてこちらを見る目は濡れていた。

理性と感情の闘ぎ合いの中で、それでも自分の感情を優先させた事実を悔いているよな。

「——名前を——くれないか——。お前との関係を諦める為に。自分の心に区切りを付ける為に。かつてお前は私と同じ名の下に居たのだという事実を。——頼む」
形としてだとか、思い出としてだとか。

けれど、彼女はそのどれでもない——名前という、ある意味で、存在そのものを指すものを欲した。

そこには一体、どのような思いが込められているのか。

“貸して”から“欲しい”に変わっている事には、もはや口を挟むつもりは無い。

「依姫」

「……何だ？」

顔を背けず、今にも涙が零れそうな瞳であるというのに、真つ直ぐこちらを見つめている。

本当に……嫌になるほど良い女だことで。

「ごめん……な」

受け入れる為にはなく、これで終わりとの意味を込めた抱擁。

包み込む暖かさは、こちらの背にも手を回す。

強くもなく、弱くもなく。

男は僅かに腰を落とし、女は僅かに爪先を立てる。

互いの頬が触れ合い——。

今生の別れにも似たそれは、どちらともなく終わりを告げて。

再び二人の間には、少しの——それでいて、決定的な距離が空いた。

「——酷い男だ。これから別れるというのに」

「……一度、言われてみたかった、かな」

「阿呆。そんな台詞は、もつと格好を付けられるようになってから言うがいい。冗談にしては……いや、本気であれば尚の事に、質が悪過ぎだ」

不適に笑う彼女の顔は、一点の曇りも無いもので。

「さて——そろそろ時間か」

俺と彼女の距離が空く。

一步二歩と開いたそれは、五歩目を数えたところで止まる。

「名前。好きに——ああいや」

口を噤んで、言い直す。

「俺の名前、お前に貸す。生憎と大切な人から貰ったもんなんだから、それくらいなら……お前だったら、構わない」

「……そうか。有り難く受け取らせてもらおう。——九十九！」

「ん？」

依姫から何かが放られる。

黒くて長いそれを、片手で掴んだ。

「これって……」

彼女の武器である、『十拳の剣』であった。

「お前は何かと抜けているからな。剣術が使えずとも問題は無い。腰から提げておくだけでも、自動で危害を加えてくるものを駆逐してくれるだろう」

何という光剣フラガラック。

思い入れどころか、それが行き過ぎて九十九神まで宿つてしまっている大切なものを、俺に託す。

……一瞬、付き返そうかとも思つたけれど、ここは素直に受け取る事にした。

「——ありがとう」

感謝の言葉と共に、受け取つたそれを、高く掲げてみせる。

それを満足そうに見つめた依姫は、片手を上げて、後ろに控えていた月の軍隊——の誰かに、転送装置の起動を合図した。

光に包まれる、との表現が似合う現象に晒されながら、手にした刀を腰へと挿す。

「それでは、な。お前に、月の光の加護のあらん事を」

足元が光へと溶ける。

今度の転送は、きちんと生命体を送るものだと聞いたので、「死への抵抗」によつて自身を強化せずとも安心出来るものだと聞いた。

心残りなら、それこそ山のように。

いつかは自力でこの月と往復出来るようになればと思いつながら。

「ああ。そつちこそ、【マリット・レイジ】や【カルドラチャンピオン】と仲良くな
ここで学んだ事を、どれだけ生かせるだろうか。

出力マナの上限開放、ストックマナとカード使用枚数の容量増加。

帰ったら、しばらくはそれらに加えて何か獲得したスキルはないものか、確かめて過
ごそうと。

「——じゃあな、よつちゃん」

「——ああ、さらばだ。九十九」

何気に、そう渾名を呼んだのは初めてであった。

変な呼び方だ、と表情が物語っているものの、律儀にこちらに返答してくれているの
だから、やはり真面目なんだなと思うのだった。

——その言葉が、そこで終わっていたのなら。

「——ああ、さらばだ。九十九。——正室に宜しくな。側室の管理は、私に任せるが

良い」

「……え、何？ 聞こえない。」

「……よつちゃん、わんもあぷりーず」

「？ 正室に宜しく頼む。側室の管理は、私が行おう」

聞き間違い……じゃ、ねえ……!?!

「ちよい待った！ どういう事だそりゃ!?!」

「どうも何も、言葉通りだぞ？」

言葉通りって……こいつが言うから、事実、言葉通りなんだろうな。

「百と、飛んで八」

「……何の数？」

既に確信はあるものの、尋ねずには居られない。

「お前への求婚相手だ。これでも大分減らしたのだぞ。十分の一以下に」

……側室って、やっぱりそういうところから来たのか。

というかそもそも、俺の了解無しに何でそんな存在が……。ん？ その為の俺の名前

なのか？

……そして、さらっと煩惱の数だけ居るのは、マジで何かの当て付けなんだろうか。

「八意家、並びに蓬萊山家がそれらを全て止めていてな。お前が知らぬのも無理は無い。

百八も漏れてしまったのは、ある意味で八意家と蓬萊山家にとつて、何かしらの恩か、重要な役割を果たしている御家だな。——その二家が止めなければ、今頃お前は十二人同時に寝る間を惜しみ、それを果たしても、数十日間は終わらぬ見合いを行っていた事だろう。……今更何だが、お前はそれを望むか？」

「それ何て聖徳太子……。……モテ期到来なのは確かに嬉しいんだが、明らかに政略結婚以外の文字が見えないお付き合いつてのは避けたいところです。……そんなのする位なら、とつとと帰りたいしな」

東方キャラ以外の奴らなんて全く知らねーですよ。高御産巢日とか。

どんなに可愛かったり綺麗だったりしても、素性の把握出来ない奴らは出来るだけ相手にしたくないのが本音です。

何せ、知らない相手は、存在しないも同じなのだから。

「そう言つて貰えて助かる。繰り返す様だが、永琳様と輝夜様の名を以つてしても、百八もの家々の申し込みを取り消せなかったのは、お前の政治的利用価値の高さが良く分かる、一種の物差しだな。……まあ正直、我ら御三家でお前を独占しないが為であるのだが」

言わなくても分かっているというのに。律儀過ぎるのも……。まあ、だからこそその依姫であるのだけれど。

そう言いながら、何かを思い出すような動作をして、こてんと小首を傾げる。

「我らほど、とは言わんが、中々の名家が揃っていたぞ。まさに選り取り見取りだ。もし全員娶ったのなら、この国の王となる事も可能かもしれん。内、何人かは男だが」

生物学上の同性ですかあ!?

「どういう理屈だ!」

「勿論、お前が男色の気がある可能性を探つての事だろう。自慢ではないが、私の容姿はそれなりに人気があるようだな。そんな私との婚約をバツサリと断つたお前に、皆が懷疑の眼を向けたのだ。好みが合わなかったのでは、というところから始まり、まだ年端も行かぬ子から、妙齢の者まで。そしてその可能性の中の同性、という事だな。私から見ても、中々悪くない者であつたぞ?」

「だからって、生えてる奴相手に何しろつてんだよ!」

「生え……生殖器の事か? 知らん。私は女であるからな。お前の好きにすると良い。ただ、男女共にだが、幼子にはあまり無茶をしてやるなよ。先にも言つた通り、中には変声期も終えていないような者もいるようだしな」

「だから、そういう気は皆無だつーの!」

「お前が普通ではないのは重々承知している。愛の形は星の数ほど、だ。節度の範囲内であれば、ガンガンいって構わんぞ。私は理解のある女だからな」

「そんな理解捨てちまえてんだコンチクショウ！」

こいつやつぱり人の話を聞いて無い——って、あ、もう腰まで消えてやがる！

「地上での側室をこさえた場合には、後からで構わん。いずれこちらに話を通せ。うまく纏めておく」

「何でお前が仕切ってるのさ！ さつき諦めたとか心の区切りだとか言ってたじゃん！」

とりあえず突っ込みを入れながら疑問の解決を図るものの、それでも限度というものがある。

それでも何とか弁解の言葉を並び立ててみると、

「正室を諦めたのだ。——本当なら……お前の一番でありたかつたのだがな」

……小さな声で、依姫の零した本音だと思われる台詞まで聞こえてしまったのは、男冥利に尽きると思え、男として最低だとも思えた。

ああ、諦めるって、そういう意味だったのか。

……不覚にも、ちよつと心が動いてしまった。

「何も、大事なものは一つであらねばならない訳ではないだろう」

そう言つて、依姫はその心中を話し出す。

「……そうだな。お前は最も大切なもの意外は、全て無用だと切り捨てるのか？ 違う

であろう。親が一人だけでは無い様に、友が一人だけでは無い様に。大切な者が複数居る事に、何の問題がある。突き放すでなく、こちらに謝るくらいならば、全て守つてやる、くらいの気概を見せろ。でなければ、謝罪の言葉など口にするでない」

しつかりと。揺るがぬ意思を以つて。

「勝手に人の幸せを判断するな。愛想が尽きたのなら、勝手にこちらから離れていくだけだ。……それくらい、好きにさせろ」

不適に口元を歪めて、こちらにニヤリと笑みを向けた。

「さらばだ。いずれ、正室には挨拶に向かおう」

—— なっ!?

「さらつと爆弾投下するんじゃないねえー!」

というかあの表情からして確信犯か!?

さつきから叫びっぱなしで喉が限界迎えそうだってんですよ。

—— 意識が暗転する。

最後に見た彼女の表情は、実に楽しそうなものであり。

「—— 楽しかったぞ、九十九。出会いこそ最悪であったが……。お前との思い出は、どれも決して忘れる事の無いものであった」

—— こうまで言われては、去るものは追わず、であり続けるなど居られようか。

潔い結果は、もう求めない。

足掻いてやる。

徹底的に足掻きに足掻いて、こちらから切るのではなく、あちらが俺に愛想を尽かす、その時まで。

そして。

——決して、そうはならないように。この下らないプライドを、信念の域にまで高めてやろうではないか。

ただ……とりあえずは。

(諏訪子さんに何て言おう……)

そこを考えてからでも、遅くはないだろう。

振り返って見た星は青く。

無事に辿り着ければ良いな、と思いながら。

俺は月に、別れを告げた。

緊急アラートが鳴る。

とうとう来たかと思う。そして、間に合ったか、とも。

同時、玉兎達の何人かが宙を舞った。

わーきやー悲鳴を上げながら次々と打ち上がり、それでも何一つ傷つかない彼女達を見るに、これが九十九の言う「こめでいぱーと」なるものなのか、と、依姫は興味深そうにそれを見つめた。

自分の通信端末が音を立てる。

操作して、通信可能にしたと同時に、

「……………依姫様！ もう限界ですー！」

用件を伝え終えた直後に、何かの爆発に巻き込まれる様に砂嵐の音が混じる。

そうしてそのまま、通信は途絶えてしまった。

(……………レイセンよ。次からはもう少し早く言うが良い)

せめて玉兎達が、宙を舞う前に。

けれど一応は、役目は果たしたようだ。役に立ったかどうかは別問題であるが。

「皆、重荷となるものは全て破棄して構わん。撤収だ。即座にこの場から離脱しろ」

よく通ると評判の声で、皆へと指示を出す。

一瞬、近場に居た同僚の顔を見合わせた玉兎達は、まさに脱兎の如く、爆音鳴り響く

地点から撤退を開始した。

良い逃げっぷりだ。いずれはこれを何かに生かせないものか。そう、人知れず思案する依姫であつた。

依姫の視界に映るのは、人。

全部で三人。

一人は我が姉、綿月豊姫。

もう一人は、月の頭脳たる八意永琳。

最後の一人が、この月をいずれ統べる、蓬萊山輝夜その人であつた。

しかし、その蓬萊山の手には、何かが握られていた。

「……………む、まさか」

木の枝。……そう、木の枝だ。

ただしその枝には幾つかの大小異なつた玉が取り付けられており。

それは金の枝と銀の根を持つ——

「『蓬萊の玉の枝』まで持ち出したというのか!？」

蓬萊山輝夜の結構やば気な状況に、依姫の鼓動が一速上がる。

これは不味いと、不動を決め込んでいた彼女は、即座に駆け出した。

——やつと手に入れた一時の静寂は、いつそ不気味な程であつた。

輝夜を押し留める様に対峙する豊姫と永琳の二人は、一寸の油断も無く本来仕えるべきの筈の相手を見据えていた。

そこに馳せ参じた依姫を見た二人は、溜まりに溜まった安堵の溜め息を漏らした。

「——依姫」

しかし、それに反して怒気が高まるのは輝夜である。

「はっ」

「九十九は——?」

レイセンや玉兎達であるのなら、それだけで気絶してしまいそうな視線であつたが、それを平然と受け流し、

「今し方、帰りました」

輝夜にとつて、最も聞きたくなかつた言葉を口にした。

一瞬で空間が沸騰する。

誰から見ても、火口からマグマの噴出す寸前の火山において他ならないのだが、この場にいる輝夜以外の三人は、それを気にした風も無く。

「はあ——……」

盛大な溜め息と共に、輝夜はその場へとへたり込んだ。

「お疲れ様です永琳様。姉上。無事、目的を達成出来ました」

「それは何よりです。ありがとう、依姫。……そういえば——あの玉兔……レイセン

だったかしら。彼女は？ 輝夜の足止め第一防衛ラインを担当していた筈だけれど」

「……ええ、最後に一報。こちらに届けてきました。……惜しい人材を亡くしました」

「よ、依姫ちゃん？ あの子、まだ生きているからね？」

樂しげに語らう三人に、不満な目を向ける者が一人。

「何よー、別に良いじゃないの。減るもんじゃなし」

この場合の減るとは、先に星々の藻屑となった玉兔ではなく、今し方青き星へと旅立っていった人物の方である。

「あのねえ輝夜。あなたの我が侘は大概だけれど、流石に今回は限度つてもものがあるわ」

「……それを、私の意識を一瞬で刈り取った者が言うかしらねえ」

「本当だったら十日は目覚めない筈だったんだけど、無事成長してくれているようで、師としても、いずれあなたに仕える者としても、頼もしく思うわ」

「……だから何の拘束もされずに寝室で寝かされていたのね」

「まさか一日も経たずに目覚めるとは思ってたんですもの。……それを言うな

ら、あなたの方よ。蓬萊の玉の枝まで持ち出して」
もうどうでもいい、と。

月の至宝である蓬萊の玉の枝を無造作に放り出して、輝夜は九十九が帰っていった、青き星を見つめた。

「あくあ……間に合わなかったか……」

「気休めだけけれど……。またいつか、会う時もあるでしょう。力ある者とは、それだけ動乱に巻き込まれるのだから」

「何それ。永琳の経験則？」

「ええ。これでも私、結構長生きなのよ？」

それは頼もしい、と。

疲れた笑いを零しながら、そう答えた輝夜は、依姫へと問い掛けた。

「それで、あなたの言っていた案というのは、成功したの？」

「はい。彼の名を使う許可を取りました」

「……あなたの役職が更に上がるのは決まったわね」

「そして、側室の管理はこちらに一任する許可も」

それぞれが大なり小なりの反応を示すものの、彼女の姉だけが、過剰とも言える反応を現した。

「——なにそれ！ 私、聞いてない！」

「姉上、落ち着いて下さい。語彙がおかしくなっております」

「それはどういう事なの依姫ちゃん！ 側室って、あの側室!？」

「姉上、ですから——」

「私の可愛い妹が……最愛で最強の妹が、自分を振った男の側室の管理……何て事……」

あの愚弟……」

もはや誰の姿も目に映ってなかった豊姫の首に、輝夜の手刀が綺麗に突き刺さる。

『あう』と小さく息を漏らして、彼女の意識は刈り取られた。

「愚弟って……」

「輝夜。突っ込みどころはそこなの？」

「……あの分では私が言っても聞く耳持たないでしょう……。あの、永琳様。恐縮なのですが……」

「構わないわ。流石にあれば、私も驚いたもの。目が覚めた時には、私から話をしておきます」

永琳が、依姫へと向き直る。

「——決めたのね」

「はい。……お分かりになりますか」

「仮にも、あなたの師であるのだもの。でも、良いの？　ともすれば、今度は一緒に居るだけで苦痛になる事もあるのよ？」

「後から育む愛というものもあると耳にします。まずは形から。後は……精一杯、やってみようかと」

そう、と。

成功すれば御の字であるし、失敗しても、人生の糧となつてくれるだろう。

何せ、嫌になるほどに、人生は長いのだから。

瞳を閉じて、深く頷きながら、そう思う永琳に、

「永琳。九十九はあれの何処に降りたの？」

青い星を目で指しながら、輝夜は尋ねた。

「ええと……。ほら、あそこ。雲の切れ目の隙間に見える、あの小さな島国よ」

他と比べれば確かに小さいのだが、それでも比較対象が悪過ぎる解答である。直線横断距離が二千キロとも三千キロとも言われるものを小さい、などと。ここ月ならでは答えだろう。

そう答える永琳に、輝夜は一言合いの手を入れて、沈黙した。

(……この子、もしかして)

何やら嫌な予感がした永琳だったが、彼女の予感はずっと別の方向で当たることとな

る。

「……永琳様、今なんと？」

その声は、依姫であつた。

「え？」

「九十九が降りた場所です。あの雲の切れ間の島国だと、そう仰りませんでしたか？」

「え、ええ。間違い無いわよ」

それを聞くや否や、彼女は眉間に皺を寄せて、その表情に『拙い』の二文字を浮かび上がらせる。

「……依姫、まさか」

何となく察しの付いた永琳が、おそるおそる声を掛けた。

依姫はそれに反応する事なく、自問自答の様な呟きを洩らす。

「そうか……あの探索機器は故障していたのであつたか……」

「何処か間違つたところにも送つたの？」

永琳に続く形で、輝夜が依姫に問い掛けた。

「はい。帰還データは、あの擬態探索用の中から抽出した座標を元にしました。転送する前の場所へと送り届ければ良いものだと思つておりましたが……」

「……そのデータ、壊れているのよね」

「のようで……」

亀を模った探索機器は、九十九の発した「稲妻」によって、いつ壊れても不思議でない程のダメージを受けていた。

それは、地上に月の証拠を残さない為に、最重要機能として据えられた帰還用の転送装置すら発動するかどうか怪しいものであったのだから、それ以外の機能やデータが破壊していたとしても、格別不思議な事ではなかった。

彼の意思を尊重すべく、発信機や、彼の位置を確認する手段は講じていない。

転送した座標を逆算すれば居場所は特定出来るだろうが、月の転送装置は、生物の安全を考慮した場合の転移は膨大なエネルギーを消費する。

そして、その問題点をクリアした唯一の力を持つ綿月豊姫は、現在、意識を失っていた。

——完全な手詰まり。

この状況が示す事とは、そういう事。

三者三様の『参った』を体現した後、依姫はふと、視界の隅に見慣れたものを発見した。

その場所——九十九の帰った転送位置には一本の——。

空が青い。

そんな当たり前な——暗い空ではない、完全な蒼穹の世界が俺の頭上に広がっていた。

頬を撫でる風は木々と大地の香りを運び、否応無く俺が地上へと戻って来た事を伝えて来る。

小高い丘は草原が広がって、照り付ける太陽が暴力的。どう見ても真夏です。本当にありがとうございました。

あっちへぶっ飛んでいった時には、確か季節は秋と冬の間くらいだった筈だが、南の方へと飛ばされたのかもしれない。

どうやら浦島さんが居た場所——戸島村とは違うけれど、一体ここはどの辺りなんだろうか。

(久々の地上だ……。よっし、今度は【飛行】でも試してみるとしようかね)

空中を移動する手段として考えたものの内、他の動力に頼る【羽ばたき飛行機械】と、

上下アクションを繰り返した「ジャンプ」とは違う、名前もそのまま「飛行」。

多分「ジャンプ」よりは使い勝手は良さそうだと思いつながら、腰に刺した、依姫から受け取った十拳剣へと手を伸ばす。

新しくゲットしたニュー装備は、全部で四つ。

一つ目は機能性を重視した衣類一式（Gパンとシャツ）。

特殊な能力こそ無いものの、日の光さえあれば自動で破損を直し、汚れを取り除き、補修&洗濯要らずな絶品。諏訪子さんに貰った外套と合わせて装備していて、ちよつとこのままなんちゃらクエストな勇者の如く、モンスター退治に出かけていけそうな格好。

二つ目は、永琳さんから貰った、名称不明の腕輪。一応、八意の腕輪とか名付けてみようか。

何でも一定以上の疲労に達すると、体力を常に元に戻してくれるんだとか。「タップ」やら「アンタップ」の力を使わずに維持コストの解決が出来た事に、貰った時には頭を下げて感謝した。

三つ目は、同じく永琳さんから貰った、小さな青い宝石のついたネックレス。

バベルの塔が崩れる前の機能を云々、とか言っていたのだが、嬉しさに流されて詳細は覚えていない。とりあえず、これで全ての言語が分かるらしい。勿論、伝えるのも可能だとか。

(で、最後がこの……)

依姫より渡された、九十九神の宿る十拳の剣である。

伝説級の装備品とか、男たるもの、憧れない筈が無い。おまけにそれが上位の力を
持っているとすれば、尚の事。

傍から見たら気持ち悪いであろう笑みを浮かべつつ、確かめるようにその感触を――

――すかつ

「……あん？」

その感触を――

――すかつ

「……んんん？」

……おかしいな、さつきまであつた感触が無い。

疑問を解決すべく、そこへと視線を落とす。

「――無い」

綺麗さっぱり。

そこには俺の腰以外、何も確認出来ない。

……え、何で？ どうして？ ソツコーで失くした？ マジやばいぞこれ。

(本気で不味い……。あんな大切なもの無くすなんて……。少し探してダメだったら、何かカードを使って……)

顔に縦線どころか、間違いなく今、俺の血の気は失せている。

転送時にどっかやったかと辺りを見回しながら、これがダメなら何のカードを使おうか悩んでいると。

——青々と茂る草原に、一つ、真つ白な色が現れているのを捉えた。

メモ用紙くらいの大サイズのそれは、俺の足元に落ちており、そこには何やら文字が書かれていた。

色々疑問に思いつつも、拾い上げて目を這わせる。

達筆過ぎて読み難かったものの、永琳さんから貰った言語翻訳機能付きのネットワークスの効果で、何とか読み解けた。ああ、これって文字系にも対応してるのね。

そこには、僅かに一言。

『オマエ キライ』

……もう大よそ察しは付いた。

何でメモ用紙があるのか、とか。どうして文字書けるのか、とか。その辺りは、うん。もういい。流す。

まだ書置き残してくれていっただけ、御の字というものだろう……。か。

というか依姫様。このご様子では、九十九神様にはご説明されていなかったのですね。

足に、腰に、腹に、腕に。

全身に力を込めながら、大きく息を胸に入れる。

そういえば、あの時も全力を振り絞る様に発したんだったか。

「やってられないんだぜえええええ………!!」

実はこの台詞、結構気に入っているんじゃないだろうか。

そう思いながら、一度も使う機会無く終わった最強候補な武器に、俺はさめざめと涙を流すのだった。

——と。

何か——柔らかな感触を、足の下に感じた。

「ん？」

ガムを踏んだ直後に足の裏を見るような、そんな感じで足元に目をやれば。

「——きゆう」

小さな人型。

全体的な色は白よりのグレー。お尻から出ている尻尾が実にキュート。頭からは真ん丸の耳が二つ。通常はピンと伸ばされているのであろうが、意識を失っている事によつて、へたりと垂れ下がっていた。僅かに漏れた声は実に愛らしく、何か歌でも歌わせれば、オリコン上位は確実だろう。

なーんか見たことあるなあ。何だったかなあ。何処だったかなあ。

「ぎゅ」

あ、変なトコに足が入ったっぽい。おかしな声が出た。

……。

「……やべー!! 女の子マジ踏みとか鬼畜以外の何者でもねえー!!」

慌ててその場から足を退かし、倒れている存在を腕に抱えた。

白のような灰色よりのワンピースは記憶の中のものど若干異なっているものの、全体的なイメージは似通っている。そして、倒れていた付近には、彼女の物であろう長めの木の枝が転がっていた。

睨られた目はすつきりと一線が取れており、小さく結ばれた口はから、この者の感情が表れている気がする。

「……医者、医者だ！ ……永琳さん！ そうだ、あの人だよ！ えーりん！ 助けて！ えーりん!!」

月で自重しまくっていた台詞がとうとう言えた事に、何処か満足しながらも。

腕の中でくるくると目を回している存在に、出会いが唐突過ぎると内心で愚痴を零しながら、俺はしばらく、ただ我武者羅に叫び続けるのだった。

四章

43 小さな小さな《前編》

日光の脅威から避難した一本の木陰。大きな日陰を作り出していたそこに、彼女——ネズミの賢將、ナズーリンは腰掛けていた。平たい岩の上にちよこんと座っていることで、何とも愛らしい印象を抱かせる。

所々に差異はあるものの、昔の記憶と瓜二つ——と表現しなかったのだが、あれよりも若干幼いイメージであった。覚えている外見の年齢が十歳前半だとしたら、今の前にいるのは十を超えるか超えないかといったところか。

外見年齢を除いた中で最も違和感を覚えたものは、彼女の尻尾に居た筈の、バスケットに入れられたネズミが居ない事。というか、そもバスケット自体が無い。いずれ装備するんだろう。

何かもう、女の子だとか何だとか思う前に、もふもふしてる耳やら尻尾やらのせいで、

ただのちっちゃな愛くるしい何か。にしか見えない。

この分では、他のキャラ達——尻尾が九本あるお方であったり、それが初めて式神にした妖怪であったり、妖怪の山の警備隊に属するあのキャラであったりと、実に誘惑が多い未来に涎が……ゲフンゲフン……期待が膨らむというものだ。レイセンのなんちゃって付け耳とは違う。完全に彼女の体の一部であるそれは、一喜一憂に反応して、へたつたり、ピンと伸ばされたり、世話しなく動いたり、実に良い動きをしなさるのです。

超頭撫でたい。ハグしたい。頬擦りしたい。勇丸とは別方向の愛くるしさが、そこにはあった。

鎮まれー。俺のソウルよ、鎮まるのだー。そのままだと国家権力のお世話になるぞー。あるかどうかは知らないけれども。

そんな容姿の為か。諏訪子さんの様に威厳や神格が溢れている訳でもないので、敬語を使うのには疑問が残り、元々のイメージも、そういった言葉遣いを当てはめるのには違和感があつて、どうにも年下を相手にしている対応になってしまう。

……まあ……その……何というか……そのせいなんだろう。

彼女のこちらを見る目は疑惑の念で満ちており。

「いめんなやこ」

「……」

やや眉間に皺を寄せながら、薄く開いた瞼の隙間から眼光を発しております。じとー。つてな具合で。こちらの謝罪にも無反応。実に気まずいのです。

ただちよつと気になるのは、嫌悪とか怒気寄りではなくて、戸惑いの感情に比重が置かれていようだ、という事。

そろそろ正座も痺れて来たんで、何かしらのアクションが欲しいところ。足、崩しいッス。

何だか最近、謝ってばかりだな、と、内心で自嘲気味に毒づいた。

「君は……」

お、反応あり。

「君は……僕が怖くないのかい？」

ああ、疑念はそういう方面か。

……彼女つて僕つ子だったっけか。私口調で喋っていた気がするんだが。

「いんや全く」

怖いというより、超愛らしいです。

「だって、この尻尾だよ？ この耳だよ？ ……妖怪……なんだよ？」

「ちよろちよろ動く尻尾、超触りたい。ピコピコ動く耳、超もふもふしたい。妖怪？ ど

うでもいい問題です」

「そ、そうか……（も、もぶ？）」

少しは表情を崩してくれるかと思つて、ちよろつと本音を含ませて喋つてみたのだが、予測した反応とは違い、戸惑いを与えた程度に留まつた。

けれど、効果はつたようだ。

表情から硬さが抜けてゆき、何となく空気が和らぐ。

それに合わせた様に、彼女の体から、空腹を訴える可愛らしい主張が告げられた。

ぽんと頬が染まるナズーリンに、俺の直感が働き掛ける。

……そう、これは——餌付けタイム！

「出番だ！ ジャン袋ー!!」

「——っ!？」

突然声を出してしまった事で、驚かせてしまったようだ。両手を胸の前で固く結びながら、体を縮み込ませてしまった。

少し申し訳なく思いつつ、突如として現れた煌びやかな鞍袋に目を丸くする彼女を他所に、例の如く手をつ込んで、中を漁る。

（ナズつちつて何が好きだったかなあ。王道にチーズか？ 原作でもそれらしい描写

あつたし。でも赤の色の薄い物は何たら。とかも言つてたような……）

肉好きなんだったか。それは手下のネズミ達だったか。記憶が曖昧だ。

というか、ネズミがチーズを好きだという通説は、チーズの王様との代名詞もあるエメンタルチーズが醗酵によって穴だらけになってしまふという現象から由来したものであつて、彼ら小型哺乳類は雑食であつた筈だ。そもそも、ネズミつてあんまりチーズ……乳製品全般を口にしないのではなかつたか。

(中学の時に、理科の先生がそんな話してたっけかなあ)

……まあいい。別に一つしか出す訳ではないのだ。下手な鉄砲なんちゃらほい。幾つか出せば問題無いだろう。

袋から手を抜き、持ったそれを差し出した。

彼女の小さな鼻がすすんと動く。

俺にはそこまで匂いとかは分からないのだが、少なくともこちらよりは、嗅覚は鋭いのかも知れない。

「……それは？」

「食べ物。サンドイッチ」

「さ……い……ち……？」

おおう、まだ発明されてないのか？ それとも知れ渡っていないだけなのか。サンドイッチ伯爵が名付け親つてだけで、物自体は結構昔からあつた筈なだけだ。どうせな

ら好みの奴が全部一緒になつてゐるものを。とか思つたんだが……。これなら手も汚れなくて良いし。ううん、ハンバーガーの方が良かったらどうか。

「中身はハーブレモンを良く練り込んだチキンとチェダーチーズ。んで鮮度抜群なレタスと……後、実が簡単に崩れなくらいに固めのトマト。それをトーストにしたライ麦パンで挟んだもんだ。BLBとはちと違うが、ベーコンよりもチキンの方が食べ応えあつて良いかなー?」と思つてさ」

「……?」

色々と未知な単語を使つた為に、彼女は不思議そうにサンドイッチを見つめている。これは食べ物です風に、自分で一口齧つて無害な事をアピールしつつ、再度それを差し出した。

(うむ、美味しい)

未知過ぎて失敗したかな。もう少し馴染みのある……。それこそ、まんまチーズや、焼いた肉の塊なんかを出しておけば良かったか。

そんな葛藤をしていると、おずおずと彼女は手を伸ばし、俺からサンドイッチを受け取つた。マジマジと眺めたそれを、毒でも警戒するように慎重に一口齧る。目線はこちらを向いたままに。

上目遣いで食べ始めようとしている事に、かつて「極楽鳥」……バツパラを呼び出した時のような、衝動に任せて撫でくり回したくなる感情を強制スルー。気づかないふりをして、結構必死に堪えた。くっ、俺の右手よ鎮まるのだ！ 的確な。

（ああ、それじゃあパンしか食べれてない……全部一緒に齧らないと……）

あんぱん買って餡子に届かないような、鯛焼き買って、餡子に届かないような。そんな光景を目撃中。

何故発想が餡子なんだろうと思っていると、彼女の眉がピクリと動く。そして意を決したように、がぶりと——といっても口径の大ききで、濁点なぞ付かない、かぶり、程度にしか見えないのだが——サンドイッチに挑みかかった。

何とか全ての具材を一口で噛み締められたようで、一生懸命もぐもぐと口を動かす姿が微笑ましい。

「——っ!!」

お、やっとサンドイッチの真価である、全ての具材の味を同時に楽しむ域に達したらしい。

今までの様子見が嘘のように、一生懸命口を動かす姿に程良い満足感を得ながら、彼女の手に持ったそれが無くなるまで、俺はそれを眺め続けた。

荒んだ心に一服の清涼剤。

そのまま、和やかに。

真夏の暑さを頭上に感じながら、時は過ぎて行き……。

「——ご馳走様。こんな美味しいものを食べたのは初めてだ。それこそ、貴族達でも食べた事が無いだろうね」

「お粗末様。そう言つて貰えたのなら何よりだ」

有名という訳ではないが、俺自身が気に入つていた店、喫茶店ルノアールの代物。ファーストフードと侮ること無かれ。あれはあれで、値段の割りに結構良い味出していると思うのだ。これで不味いと言われた日には、俺にはもはや、好みの差としか言えない。

ただまあ、出来立てを出されている、という理由が一番大きいとも思うけれど。大概の食事は、出来立て新鮮なものが一番美味しいのだから。

「んじや、落ち着いたみたいだし、改めまして」

そうして、俺は再び、頭を下げる。

「済まなかった。許して欲しい」

「あ、ああ。……こちらこそ怪訝な態度で接してしまつて済まない。見ての通り、僕は妖怪だからね。……その……人間にこんな事をされるとは思わなかったから……」

それもそうか。

彼女はネズミの化身……化身？　であるのだし、ネズミは人間にとつての害獣であるところが大きいのだから、当然だ。

俺も何度か実家であの姿を見かけた事があるが……あまり気持ちの良い出会い、というか、光景ではなかったのは覚えてる。

少なくとも、謝ったり食事を出したりする間柄では、決してない。

(でもこの子は別な！)

我ながら何とも露骨なダブルスタンダード。

でも良いんだ。可愛いから。——俺に危害を加えた訳では無いのだし。むしろ逆だし。

「俺は、九十九。……あく……ちよつと空の上に行つてたんだが、今さつき帰つて来たところだ」

「空？」

「ああ、〃空の上〃さ。……君は？」

少し考える素振りをした後で。

「……リン。察しているとは思うが、ネズミの妖怪だよ」

……はい？

「ごめん。もう一度お願い」

「ん、聞き取り難かったかな。——リン。リ、ン、だ。前後は無い。それが僕の名前だよ」

……ええ。

（え、何、どういう事？ 確かにチビつちやくて尻尾のバスケットも方角ロッドも無いけど、どつからどう見てもナズーリンじゃん。……でも、ナズーリンじゃないじゃん？）
まさかの別人の可能性が垣間見えた事に、俺の思考は一気に混乱に陥った。

姿、格好、そして、ネズミの妖怪。

先に考えたとおり、尻尾に付いている筈の仲間に入ったバスケットや、例のNやらSやらの方角を模したダウジングロッドは無いもの、それ以外の全体像は、更に幼いとはいえ、どう見ても記憶の中にある彼女のそれである。

「えっと、姉妹とかって居る？」

「それなりにね。これでも——」

リンは自分の耳を触りながら。

「———こういう種族だから」

……そりやそうだ。

ネズミの繁殖力など語るべくも無い事実であつた。何とも馬鹿な質問をしてしまったのものだと後悔する。

「ごめん、そうじゃなかつた。……妖怪になつた姉妹つて、他に居る？ 似た様な容姿の」

「いいや？ 僕はまだこの姿になつて日が浅いが……。姉妹の中では僕だけだろうね。妖怪になつたのは」

……姉妹フラグは消えました。少なくとも、今のところは。

となるとマジで別人か、はたまはた改名の後の『ナズーリン』何だろうか。丁度、ナズーだけを付属させれば、既知の名になるのだし。

ナズーリン、という名になるのは、虎のご主人様辺りとの出会いからなんだろうか。でも姉妹は多いって言つてたから……だつたら似たような名前の兄弟———例えば、一郎、次郎、三郎、的な名付け方である可能性も高い。だからどうした、という案だが。（東方キャラの名前の由来なんて、色に関係していた八雲家の面々くらいしか知らねえですよ……）

ただ、それすらも曖昧な記憶ではあるのだけれど。

この辺はもう、幾ら悩んでも解決するものではなさそうだ。深く考えるのは止めておこう。

偽名を言っている風でも無さそうだし——嘘を付かれても能力使いでもしない限り、俺には見抜けないんだが——これ以上の追求は避ける方針で行く。分けが分からなくなりそうだ。

折角会話が進み始めたのだ。序盤で下手に拗れさせる事もないだろう。

「あのさ……。ちよつと聞きたい事があるんだけど、良いかな？」

「ああ。僕の知る限りで良ければ」

色々と聞きたい事はある。

特に、相方……というか、虎なご主人様であつたり、ガンガンいく僧侶やらの、その他で一括りにしてしまうお仲間であつたり。

でもここは、自分の置かれている状況から整理してみようと思ひ直す。

そうして発した第一声が。

「……、何処？」

「……え？」

——予想していた反応だけれど、やっぱり寂しいものは寂しいんだな、と思つた一

時であつた。

よくよく周りを見渡してみれば、ここが俺の知つている場所から掛け離れているのは予想が付いた。

あの森と山に囲まれた筈の島国は、このような四方がほぼ全てだだっ広い草原である場所は希少だし、何より、かなり遠くではあるものの、富士の山以外に、この猛暑の中で、僅かとはいえ山頂に雪の被っている山などある筈も無く。ホータンつて何処よ。地名か？ 国の名前か？ そもそも何処の大陸なのかすら分からんですよこれは。

月の技術の問題を考慮して、最悪、別の惑星である可能性も考慮しつつ達した結論が。「話を聞く限り、どう考えても日本じゃありません。本当にありがとうございました」溜め息にも近い口調で言い切る。

とりあえず、諏訪子さんや勇丸、神奈子さん達の住んでいる国ではない。という消極的な答えでありました。ぎゃふん。

「?」言葉の意味がよく分からないが、お礼なんていらぬよ。……こうして、仲間にもご馳走を振舞って貰っている事だしね。むしろこちらが感謝したいくらいさ」

ネタのテンプレ回答を素で受け止められると気恥ずかしいのだが、俺がそれを態度に出さなければ、流れる問題ではあるので、無反応で対応する。

あれから、彼女と幾度も言葉を交わした。

明らかに口の動きが日本語のそれじゃ無いんだが、そこは永琳さんから貰った言語翻訳機能の宝石、八意の石。な効果で、見事にカバー。カードの力を使わずに済むのは色々な面で助かります。

既に能力である『探し物を探し当てる』力はあるらしく……と言っても、『探し物はかなり得意なんだ』との台詞を深めに解釈しただけなのだが。

詳細は秘密との事だったのだが、何やら探し物をしていて最中に、ジャスト俺の出現位置の足元に居たという流れらしい。いやホント、怪我させなくて良かったです。

んで、その謝罪も兼ねて何かして欲しい事は無いかと尋ねてみたんだが、ジャン袋の効果を見ていたせいとか、もつと食べ物を出せないかとせがまれて。

それくらいなら幾らでも！ と、何が欲しいのかりクエストを聞いてみると、

『そうだね……。肉、が良い。部位、種類は問わない。兎に角、量が欲しいんだ』
腐っていないものを。との事。

出すのは良いけど、そんな大量のものをどうするのだ。と聞いてみたんだが。

(まあ、その疑問は、この光景を見れば解決されますわ)

ぼーい。

がつがつ。

ぺろり。

こんな擬音が最も確だろう。

既に何度目かも分からない行為を、俺は飽きもせず繰り返す。

枕大ほどの血の滴る生肉のブロック(牛の安物)を取り出しては無造作に地面へと放るのだが、それは瞬く間に黒やら灰色やらの色によって埋め尽くされて、しばらく後には消え去ってしまう。何かの映画で見たなこれ。結構ホラーです。

「喜んで貰えて何よりなんだが……これ、いつまで続ければ良いの?」

今も俺の足元には、首を長くして待つ彼女の同胞……なのか下僕なのか分からないが、無数のネズミ達が今か今かと世話しなく駆けずり回っている。

こちらが放る肉塊の下敷きにならないように、着弾地点から一瞬で離脱して退け、すぐさま反転して貪り食う様は、とても見事なものだ。余裕があれば拍手でも……あ、やめて。微妙に足を登らないで。ゾワゾワします。怖いです。

少し前まで緑色であった大地は、リンを中心に数十メートル(範囲に俺含む)を変色

させる程に、小さな命達で埋め尽くされていた。

現在進行形で、神奈子さんや諏訪子さん、そして「マリット・レイジ」などとはベクトルの違った恐怖が全身を舐めているので、出来れば今すぐにでも逃げ出したい。

「後、もう少しがんばって欲しい。……その……恥ずかしい話ではあるんだが、今君が食べ物を出す手を止めてしまうと、この子達の食欲が君へと傾いて——」

「OK分かった。全力でがんばります」

最後まででは言わせない。聞きたくないから。

場合によっては「死への抵抗」か、「ジャンプ」や「飛行」での離脱も考慮しながら、俺はその後、百に届こうという数の肉のブロックを出現させる事になった。

「ありがとう。お陰でこの子達も満足したようだ。……初めてかもしれない。全員が満腹になるのは」

「……うい。それは何よりです」

体力的にはまだ余裕はあるけれど、正直、もう動きたくない。肉ブロックを放り投げ

続けた事で、それなりに鍛えていた筈なのに、腕がパンパンになっている。

じつとりと汗を掻いてしまったのだが、それでも、湿度の高い日本とは違う、気持ちの良い汗の掻き方である。ベクトルは真逆だが、例えるなら、ずつと水の中に居る感じだろうか。汗掻いても分かりません。みたいな意味で。母国は誇りに思っているけれど、これだけはちよつとこつちの方が羨ましいと思えてならない一面であった。

落ちついて周りを見渡せば、ネズミ達の数は千に届いているだろう。

どいつもこいつも、目を細めて幸せそうにシエスタ中。気持ち良いもんなあ。食後の昼寝つてのは。

「こいつらは全員、リンの仲間なのか？」

「ちよつと違うけど……概ね、そう思ってもらつて問題は無いよ。そんなに数が居る訳じゃないが、皆中々優秀な者達さ。……食欲が高い事を除けば、ね」

「(この数で “そんなに” ……か) ……慕われてる、のか？」

「そんなところかな」

何処か誇らしそうに話す彼女は、見ていて微笑ましい。一仕事終えた事だし、何よりも、頭がストライキを起こしそうな気配もある。ちよつと横になれないもんかと思いつつながら、押し殺すような欠伸を噛み締めた。

「……疲れたのかい？」

ん、バレたか。ちと恥ずかしい。

こちらを氣遣つてくれていたのか、彼女はそう尋ねて来た。

「少しな。こんなに食べ物出したのは初めてだったから。まあ、良い経験だな……と
……ふあ……」

もう隠すのもあれなので、口元を手で覆いながら、普通に欠伸をする。

ううむ。疲れもそうだが、久々の地球というのも相まっているせいか。体が貪欲に睡眠を欲し始めた。折角だ。しばらく休んだ後で、日本へ戻る手段を考えるとしよう。

一、二時間で目が覚めるだろうし。

と、リンは何やら少し悩む素振りを見せる。

その後に俺の後ろにある一本の木を指差して。

「そこに木陰もある。この季節だ。この場で寝るのには寝苦しいだろうから、そこで休むと良い。彼らには退く様に言っておこう」

そう言つて手を挙げたかと思えば、その、彼女が言った木陰の部分で寝ていたネズミ達がサツと動く。

黒い絨毯が一齐に方々に散り、数分前までは緑であった筈の、既に殆どが土色と化した大地が露出した。うへえ、さつきからビビリ過ぎだが……感想はやっぱり同じものしか出てこない。結構怖いツス。

何とか木の周りの芝生は残っていたので、これ幸いと、そこへと足を進めた。

「んー、じゃあ、素直にお言葉に甘えさせてもらう。ぶっちゃけ、眠くて敵わんでした」
「そうか。それじゃあ、僕もご同伴に預かるとしようかな」

「……はあ。……妖怪とはいえ、女の子がそう簡単に、男と一緒に寝るなんて言っちゃいけませんよ?」

「おや? 君は僕に何かするつもりだったのかい?」

リンの口持ちが釣り上がり、ニヤリと愉悅を浮かべる。

「ちやうわい。忠告みたいなんだ。……ふあ……あ……。子供は素直に大人の言う事聞いとけえ」

妖怪である彼女では、見掛け通りの年齢である可能性は低い。という可能性を思い浮かべた事に釣られ、そういうえば、外見通りの年齢のキャラって少数であつたかと、ぼんやり思つた。

一度寝ると決めたからか。眠気も良い感じに襲つて来ているので、話し掛ける言葉も、自分で分かる程にいい加減なものだつた。

「そうだね。妖怪に対しても律儀に対応してくれる君の事だ。聞くだけなら全く問題は無い。それに、もし仮に君がそういう趣味の人物であつたとしても……」

千に及ぶであろう、寝ていた筈の周囲のネズミが、一斉に首を起こし、こちらを睨み

付けた。

【死の門の悪魔】を連想させる紅の光が、彼らの眼球へ無数に灯る。それは宛ら、どこぞの谷の何たらに出してきた、怒り狂う蟲の王達が大地を埋め尽くした光景であった。

「これで理解してくれると嬉しいかな」

実に面白そうに、彼女はそう言った。

「……そういう台詞は、体に凹凸が出て来てから言いなさい」

何で脅されなきゃアカンのだと思いつながら、良い感じに瘤になっている木の根へと頭を乗せた。

これは良い枕だという思いの中で、草木が擦れ合う音と共に、リンも横になる気配を感じた。

——俺の真横に。

「……」

「おや、何か言いたそうだね」

ニヤニヤ。ニヤニヤ。

この辺はやっぱ妖怪なんだろうか。人をからかうのは実に大好きそうです。

しかし、月でのあの面子と少し前まで一緒に居た俺からしてみると、完成度の点で言えれば劣っている訳では無いのだが……うん……まあ……ねえ……？

「……べつにー」

ごろんと反対側を向く。

背後であるというのに、実に楽しそうに笑っている彼女の姿を感じてしまうのは、どういふ感覚が働いている為か。

直射日光が厳しかったけれど、この木陰は良い具合にそれを遮って、草原の涼やかな風のみをもたらしてくれた。

月とは違う。見上げた空は、とても青く。とても雄大で。

それでも何処か物足りないと思うのは、ここが日本では無いからか。それとも、大和の地で無いからか。

まどろむ意識の中で、ふと、こちらを覗き込むリンの顔が見えた。

——その顔に喜びは無い。

直前までの楽しげな雰囲気は、夢か幻か。何かを悲しんでいる、そんな顔。けれどそれも一瞬で。疑問に思う前に、その顔から感情の色は抜け落ちていく。

——見間違い、か

寝惚けていれば、記憶違いなど良くある事だと。

暗転する視界。とうとう瞼の落ちきった段階で考え付いた結論は、それであつた。

規則正しい寢息。静かに上下する胸元。目は完全に閉じられており、再び開くまでには、まだ時間が掛かるのだろうかと思出来た。

片手を挙げて、部下達を戻らせる。

集まつた時とは一転。音も無く緑の絨毯から撤退していくその姿は、他の雑多な同族よりも優れているものだと自負出来るものであつた。

「……起きている、かい？」

念には念を。

確認の為の問い掛けは、真夏の草原に吹く風に散らされて。この分では、どうやら本
当に寝ているようだと言断する。

幾つか言葉を交わし、彼がこの土地の人間では無い事は確認している。

魔法か能力を持っているものの、そこまで力は無さそうだ。でなければ、妖怪とはい
えネズミである僕に対して、こんなにも友好的に接してくれる筈は無いものだから。

その割には、彼の態度からはそれらしい……ネズミに対する侮蔑の様子は見られな
かった。こちらを見る目は楽しげで……まるで、僕の事をとて大切に思ってくれて
いるかのようなであった。

思わず本心からの笑みが零れそうになるものの、今までの経験を思い返して、自身を
諫める。それに、時折、部下達の姿に怯えていたのが、彼の僕達に対する認識を如実に
語っていた。

(……もう、馴れっこじゃないか)

これは一時の夢。夢は夢のままに終わらせるのが、一番都合が良いのだ。
そして僕は、彼の持つ魔法の袋を、部下達に命じて移動させた。

——それを、奪う為に。

(ごめんよ……)

怨んでくれて良い。すぐにとはいかないが、機会があれば、死後の世界にでも償おう。(ネズミである僕達に、そんなものがあるのかは怪しいけどね)

無音のままに、宝石袋が持ち運ばれる。

この袋、ジャン、と言っていたそれは、その使用者の体力と引き換えに、何でも好きな食べ物を出現させる力があるようなのだ。

本来の目的とは違うものの、それでもこれからの事を考えれば、かなりの面で役に立つものだ。

これならば、少しはあの人に――。

眠り扱ける彼に背を向ける。

同族と、あの人以来、初めて自分と友好を結んでくれそうな相手であった事に、後ろ髪を引かれるものの。

(……もう、決めた事だ)

全てを断ち切る覚悟で、それを振り切った。

場所は遠い。そして、妖怪たる自分の率いるネズミ達が、人間相手にあざとく痕跡を残すことはしない。例えばそれが魔法使いの類であったとしても、証拠を残さない自信は

あつた。

何せ、これから戻る場所は、ここから十数キロ先。おまけに、今の場所と比べれば、砂しか無い死の大地であるのだから。何の変化も無い広大な砂漠は、方向感覚を容易く狂わせる。故に、彼があそこに辿り着くことはないだろう。

「——さよなら……ツクモ」

その発音は、何処かぎこちなくて。

けれど一瞬懸命形にしようという意思が感じられるものであつた。

次の瞬間、青い空の下に広がる草原には、何の影も映る事は無く。

ただ一箇所だけ。大きな木と。その木の根元で、イビキを掻きそうなほどに熟睡している存在だけが、夏の風に吹かれながら、ぽつんと残されるのみであつた。

——それから、二日。

男と少女の遭遇より、とある場所にて——

極東の島国に住む者達の数分の一程度が暮らすこの地は、熱砂に覆われ、地上を焼く日の光が世界を創り上げていた。

大地には緑が極僅かに生息するだけであり、やや遠方に見える長い水色は、この地で生きる者達の生命線。

ヤシの木が申し分程度に生え並び、道の存在を示し、立ち並ぶ家々は簡易コンクリー托のような白亜の正方形を削り貫き、それを一つか二つ、繋ぎ合わせた造りをしていた。道行く人々は白い布——サリーと呼ばれる、長い一枚布を纏ったような衣服は、この灼熱の世界で如何に快適に過ごせるかを追求した形状である。

女性には口元を布で隠し、男性は頭を幾重にも巻いた頭巾、ターバンを被っている。

間々吹き荒む砂嵐に、着込んだ衣類を強く身に寄せたり、目を細め、あるいは瞑りながら、皆は自身の生活を送っていた。

「来たぞ……」

「ああ……」

それなりに大きな家々が立ち並ぶ、馬車が一台通れるほどに幅のあるやや曲がりくねった砂利道を、薄いグレーの衣服に身を包んだ少女が歩いていった。

玉の汗の吹き出る炎天下だというのに、それを全く意に返さず、黙々と。周囲の様子には目もくれず、ひたすらに歩き続けるその影は、陽炎の中に浮かび上がった幻影のようでもあった。

「不気味な姿。なんて気持ち悪い……」

「ほんと。早く何処かへ行ってくれないかしら」

その少女が通り過ぎる道の端。普段は賑わいを見せる時間帯であるというのに、そんな事実など無いと言わんばかりに、今は見る影もない。

少女の姿を見た途端……いや、少女が来るぞと話が上がった瞬間に、誰もが自宅に引き籠もり、あるいは、あらん限りの嫌悪と侮蔑を伴った視線を隠そうともせず、一振りの木の枝大袋を持つ、灰色の着衣を着込んだ者へと向けていた。

鬼か悪魔か。少女を見る目はそれ以外の何だと言うのだろうか。

誰もがその者と目を合わせず、しかし、誰もがそれを睨み付ける。

石が飛んでくる事も、腐った卵が投げられる事も、幾つもの鋤を向けられる事も、今は無くなったにしろ……。

その人間の奥底に潜む黒き感情は、今も抑えられる事も無く、こうして溢れ続けた。

悪意の渦巻く家々の間を抜けた少女は、道の終着点へと辿り着く。

他の家とは違う。いや、それは家などというものではなかった。

うす高く積まれた石灰岩は、町の中心に白い山があるのだと見間違えてしまう程に。規則正しく、幾つもの四角形を積み重ねたそれは、城壁。最大で万に届く人員を収容出来る程の巨大なその施設である城は、この辺り一帯を統べる者が住んでいるのだと理解させられるものであった。

少女の終着点であるそこには、抜け道を除く唯一の通路である、巨大な門。彼女の視界には、身長の数倍ほどの槍を肩に担ぎながら、軽蔑の視線を向ける門番達が居た。

ここも、同じ。

向けられた悪意を思考の外に追い遣りつつ、少女は門を抜け、庭を抜け、城の中へと入って行く。

そこで耳にするのは、絶え間なく響く音の波。鼓膜を震わす振動はどれも緊張感を伴っており、ここで働いているであろう世話しなく動く者達の顔には、余裕の色は見取れない。誰もが必死に何かを行いながら、一秒も惜しいと動き回っている。

皮製の鎧を着込んだ者が、劍や槍や、地形の描かれている薄汚れた地図を手に。従者だと思われる者は、食料や医薬品を持てるだけ持ちながら、何処かに運び出している。

室内であるとはいえ、ここは城。万の人を収容出来る空間である筈だというのに、今は緊張に押し潰されそうな空気が逃げ場を失って、窒息してしまいそうな雰囲気立ち込めていた。

その中を、妖怪の少女は歩く。極力誰にも見つからないように、静かに、迅速に。

けれど時折、その姿は城内の者の眼に止まる。夜でもなく、人数も少ない訳ではない。ここでは、それは当然の事であった。

少女の姿を捉えた者は、僅かにその表情を、負のそれで染める。

しかしそれも一瞬。次の瞬間には、道端に落ちていた汚物から目を背けるように、自身の成すべきことをすべく、行動を再開する。

城下の道中や、門番達と同様の視線を間近に受けたその者は、態度にこそ出さないものの、内心で誰にも悟られる事なく涙を流す。

——何故、自分がこんな目に。

感情が瞳から零れ落ちそうになる現象を、他に意識を向ける手段で回避しながら。今

やるべきことは、悲しみに暮れる事ではない。手にした木の杖と、この国では極一般的な、大きな麻袋を握り締め……しばし。

長い廊下を抜け、曲がり、階段を上って。かの国の隠密の如く、唯の移動しかしていない筈だというのに、やつとの思いでこの城の最上階へと辿り着いた。

丁度、王座の真上。それが意味する事とはその先に居るであろう者が、王と同列か、それ以上の存在と示している。

当然、通常ならばそんな場所においてそれと入れる筈も無く、城の入り口の時と同様。扉の前にはそれを守護する者達が待機していた。真紅の頭巾を被り、軽装でありながらも、気品と威厳を感じさせる皮の鎧に身を包んだ男が二人。この城の中でも精鋭と呼ばれるだけの実力者である。腰に下げた曲剣ファルシオンは、一撃の威力でも、射程でも、耐久力でもなく、如何に素早く対象を何度も切り裂くかに特化している剣である。この地ならではの洗練された——されてしまった武器であった。

彼らは少女の姿を見た途端、その死神の鎌へと手を掛けて。抜き放とうとした矢先……何か思い止まった様に、その手を柄から離れた。

深い溜め息。そして、深呼吸。後は再び己の務めを果たすべく、剣たる存在から、扉の守護者へと戻る。無表情を貫きつつも、その瞳には、少女に対する負の感情が灯っているのが見受けられた。

この国に居る限り、誰であつても変わることに無い反応は、少女が、この世には悪意しか存在しないのかと思わせるには充分なものであろう。

けれど、それを覆す理由が、この扉の奥に居る。

守護者達の間を潜り抜け、チヨコレート板のような、幾つかの四角形の紋様が重なつた装飾を施してある扉へと手を掛けた。木の鳴き声が木霊して、静かに人が一人通れるだけの空間を開放する。

その中に少女は身を滑り込ませて、再び扉を閉じた。外界の悪意から、自分を守るかのように。白亜の壁などに反射して、太陽の光が室内をこれでもかと浮かび上がらせる。

「——お帰りなさい。リン」

白いヴェールで覆われた寝台に横たわる枯れた躯体。上体を起こし、目を通していた書物を閉じ、顔を上げて、微笑みを零す。

かつては瑞々しいほどに張りのあつた小麦色の肌は、今は、干上がった泥土のように。品の良い黒水牛の皮に勝る色艶を誇つていた筈の髪は全て色素が抜け落ち、無色とも白とも取れる色合いを、腰まで届くであろう長さに宿らせているのみ。

しかし。

所々で死の影を落としているというのに、その表情には慈愛の女神の如き優しさと、全てを包み込む母性が両立していた。

齡、実に六十五。五十を迎える前に、大多数の者がその生涯を終えるこの時代においては、奇跡と言ひ換えても良いであろう年月を重ねて来た者である。

「——ただいま。ウイリクお母様」

灼熱の太陽が照り付ける為に起こる熱ではない、*“暖”*の感情で満たされた部屋。ベッドから上半身を起こし、縋る様に近寄るリンと呼んだ少女を、自身の腕の中に暖かく向かい入れる。

何と優しい抱擁である事か。目を閉じて、この世の全ての悪意から解放された表情を浮かべた少女を、何も言わず、何も聞かず。優しく、ただ優しく撫で続ける。

僅かな緑と熱砂の入り混じる、少女にとつては地獄であるこの地において。今この時だけは、刹那の間だけ存在する、オアシスであり、天国であった。

気づいた時には、僕は、僕の形をしていた。色々な場所の、様々な隙間から、その日の生きる糧を探し続ける毎日だったと、今なら思い返す事が出来る。内容はさて置き、

それなりに充実し、楽しくやっていたような日々であった気もする。
けれど。

「こいつめっ！ 村から出ていけ！」

「近寄るな、妖怪め！」

「誰か！ 憲兵達に連絡を！」

前と変わらない——否。前よりも断然、その敵意を剥き出しにして、人間達は僕にぶつけて来ていた。

日も暮れかかった村の一角。大地へと落ち掛けた真つ赤な太陽は、村人達の心ように、ギラギラと、暗く、赤く、黒く、こちらを照らす。

何処かの民家の壁に退路を断たれた僕は、目を閉じ、体を縮こまらせ、既に救いなど残っていないと頭の一部が理解しているのに、それから目を背けて、一心に耐え忍んでいた。

「この……化け物めっ！」

また、腕に鈍い痛み。今度の礫は中々大きかったようだ。

必死に頭を守っていた腕が強引に弾かれて、それに釣られて姿勢を崩してしまふ。血の味に混じり、今度は土の味が加わって来たというのに、それを気にしている余裕など……。

固く閉じられていた瞼を、薄つすらと持ち上げた。地面へと転がった僕を見る人間達が目に入る。

——何と禍々しい形相である事か

男も、女も、老人も、僅かとはいえ、子供までも。これでは一体、どちらが化け物だと言うのだろう。そして、視界の一部に、彼らの生業の一部である、本来ならば農具として利用されているそれ——鋤を見た。

——ああ、これはもう助からない。

確かに人間達の害になる事をした自覚はある。けれどそれは、ここまでのものであったのか。

少なくとも自分は、誰かを殺めた訳でも、誰かを傷付けてた訳でも無いというのに。むしろ人間達の方が、牛や豚、鳥を、食べる——殺す目的で飼っているのは、この世に神など存在しないのではないかという証明に……

(違つた……。神は居る。でもそれは……)

人間達の神であつて、僕達、ネズミの神ではないのであつた。

同族の間で、実しやかに囁かれていた噂を思い出す。海という、途方も無い大きな水溜りを隔てた向こう側には、万物に神の宿る地があると聞いた。

(行つてみたいなあ)

そこにはきつと、僕達みたいな存在にも、等しく優しく。慈愛を以つて接してくれる神様が居るかもしれない。

村人達がそれぞれの手に武器を持って、自分の体に突き立てようとする様を、何処か他人事の様に見えるながら――

「――お止めなさい」

自分を取り囲んでいた住民達の後ろ。いつの間にか、この国の軍隊の列が並び立っていった。

その中の一箇所。列の中心に位置するそこには、一台の馬車が。

一人の老人が、そこから降り立った。しわがれた……けれど、とても綺麗な声。身に付けた真紅と黄金の文様が織り成した絹はとても上等なものであり、それだけで、少なくとも雑多な豪族以上の存在であるのは理解出来た。

艶の失われた肌は、小麦色。白銀に近い色素の抜け落ちた長髪を束ねる人間の後姿に、僕の思考は止まり掛けた。

「ウイ、ウイリク様！ どうしてこのようなところに」

「視察です。籠りきりでは詳細は分かりませんからね。そろそろ戻ろうかと思っていたのですが……」

ウイリクと呼ばれたその者は、今まさにその命を摘み取られようとする少女へと向け

られた。

「……これは、どういう事です?」

向けた目を、偽りなど口にしようものなら首が体と泣き別れるだろうものへと変えながら、少女を取り囲む民衆へと問い掛けた。

その本意は、とても単純明快。今すぐその行為を止めよ。そう言っているに他ならなかった。

「し、しかしウイリク様! これは妖怪です!」

「そうです! 見て下さい! その頭から出ている異形な耳と、後ろから覗く尻尾を!

何と恐ろしいことか!」

「今やらねば、いずれこの国に禍根を——」

口々に、目の前の存在を説き伏せようと、言葉を投げ掛けるも。

「この子は——私の娘です」

その一言で、言葉を発した本人以外の誰もが一瞬思考を放棄し、『信じられない』『そんな嘘を』と。そう叫びたい衝動を押し殺し。遂には、彼女に何も言えずに押し黙る事となったのであった。

「——そう。また、砂丘の向こうのオアシスまで行ってきたのですね」

「そうなんだ。あそこは今の季節でも、良い風が吹く。涼しくて見晴らしも良く、辺鄙だから人もあまり来なくて。ゆっくりするなら最高のところさ。……そうだ。今度、そこへ行かないか。お母様一人くらいなら、何とか担いでみせるよ」

オアシスなど行っていない。向かったのは、危険とされる草原地帯だ。

この嘘も、これで何度目か。けれどそれも、目の前の存在に不安を与えたくはないが為であった。

砕けた口調は、意図しての事。始めこそ畏まった言葉遣いをしていたのだが、それは、言われる側であるウィリクがとても悲しげな表情を作ってしまう為に、段々と現在のような物言いへと変化していった。

「ええ。そうね。それは素敵だわ。——今度……時間を見つけたら、行ってみましよう」

その今度は——来ない。

リンは聴く理解していた。けれど、それでも思わずにはいられなかった。

人間は脆い。妖怪である自分とは違う。後数年——ともすれば明日にでも、この最愛の相手は自分の前から居なくなってしまうだろう。

自身の肉体に引き摺られる様に、心も色を失ってゆく。

ただ、そのような理由など、本当は些細なものであった。本当は、今彼女が——この国が直面している問題に粉骨碎身している影響が強いのだ。

それでも元気になってもらおうと。満足に動く事すら困難となった彼女の眼となり耳となり、少しでも事態の改善になれば。そんな思いに突き動かされながら、今の今まで過ごして来た。

そしてこれも、その手段の内の一つ。

「——そうだ、お母様。良い物があるんだ」

隠し持っていた、大きな麻袋——「ジャンドールの鞍袋」の入ったそれへと手を伸ばす。袋を二重にして使用しており、外観はただの小汚い袋である。

「こうも連日、日照りが続くと、食欲も乏しくなって敵わないからね。知り合いから、美味しい葡萄の果実酒を貰ってきたんだ」

小さな手が、袋の中にある袋の中を漁る。案の定、何も存在しないその中身であったが、彼女がその欲しい物を想像したと同時——

「……あれ？」

同時……

「……リン、どうしたの？」

心配そうに尋ねる婦人に悟られまいと、少女は平淡な声で答える。

「……参った。どうやら、置いてきてしまったらしい」

内心で動揺を押し殺しながら、失敗したなど、苦笑いを浮かべた。

(しまった……この袋は普通には使えないのか)

これの持ち主は体力を消費するだけで何の気兼ねも無く使い続けていた事から、その辺りを失念してしまっていた。

これでは、ただ恨みを一つ買ってしまっただけではないか。

一応、装飾品としても一級品に近い代物ではあるのだが、これを贈り物として差し出すのは、その経緯を説明しなければならぬ。

(無理だ……お母様に心配を掛けるような真似だけは)

今からすぐに戻ったとしても……彼がまだ居る可能性は低い。部下達に指示をして、再びこれを奪った場所へと、袋を戻したとしても、あの者が居なければ話にならない。

まだあの黒き髪の者、ツクモは、あそこに居るだろうか。既にあれから一日以上は経過している。余程この袋に思い入れでもない限り、あの場からは移動してしまっている事だろう。

——もしくは、この袋を血眼になって探しているのだろうか。

「……あら、どちら様？」

しかしそんな考えも、ウィリクの言葉で掻き消される事となった。

一体誰に話し掛けていいのか。部屋の前には、二人の親衛隊が神経を尖らせて待機している。

この部屋に、来意を知らせずに入室出来る者は、それこそウイリク本人か、彼女の娘という立場になっている自分くらいのもの。それ以外の者が訪れれば、何かしらの声が掛かる筈であつた。

けれど、それが無い。疑問が焦りへと変わる間に、事態は進展する。

その声の向けられた方。自分が入ってきた扉の方へと、顔を動かした。

「——なっ!？」

馬鹿な。

馬鹿な馬鹿な馬鹿なっ——!

滑る様な純白の外套。下半身は生地硬そうな紺色のズボン。上半身は白いシャツ。乱雑に切り揃えられた頭髮は漆黒の如き闇の色を伴って、衣服との差別化によつて、より一層その色を強調させていた。

衣服、背格好、そして何より顔の造りが、何処か近しいものを表しながらも、この辺りの生まれではないことを如実に語っている。

「お初にお目に掛かります。ウイリク様」

深く一礼。優雅というよりは、何処か労働の延長線上の作法のような錯覚を感じさせ

るその男は、会釈をして、こちらに歩み寄ってきた。

一般的な部屋より広いとはいえ、大した距離がある訳でもない。考える間も無く少女の隣へと並び立ち、その手に持った袋を奪い去る。

実際には、男を見たことで同様したリングが、袋を手に持つ力が非常に弱まっていた為に、簡単に手元から離れてしまったただけなのだが、少女にとってみれば、差は有つて無いようなものだろう。

——終わった、と。

今まで一つとして恩を返せなかったばかりか、逆に、迷惑を掛ける事となつてしまった。涙すら溢れそうになりながら、何を考えているのか分からない男を複雑な心境で見つめた。

男が袋へと手を入れる。

『これは私の物だ！』『この泥棒ネズミめ！』

彼から盗んだ宝石袋を掲げながら、次の瞬間には、そんな言葉が出てくるのだろう。

(ああ、これで——)

暖かな一時は終わりを告げた。悲しみの始まりを直視しながら、少女は目の前の光景を……

「こども暑いと気分が滅入っていきません。人間、腹に何かを入れずに、動く事も、考え

る事も困難だと思ひますので」

袋から手が抜かれる。けれど少女が予想していたものは、その手には握られていなかった。

変わりに見えるのは、白く曇つた水色の宝石板。それは周囲に白い靄を纏つており、それなりに博識であつたリンには、それがあまりの温度差によつて発生した現象であるのだと理解出来た。

レンガのような、けれどその半分以下の大きさの、水色の氷の凝縮体。それに突き出た薄い木の棒を、老婆に差し出す仕草をして。

「東方の地よりやつて来ました。短い名ではありませんが……。九十九、と申します。彼女の——リンの友人です」

その意味が飲み込めず、やつと理解した頭で出た結論は、現状に対する感想、たった一言。

信じられない。

限界までその目を見開くリンを他所に、老婆は冷気の漂う青い宝石を受け取りながら、大層驚いた表情をしたという。

——後に聞く。

『あれか？ あれはガリガリ……ア、アイス！
うん！ あれは棒アイスの種類です！』
それは、氷の名を冠した甘味であるのだと。

4 4 小さな小さな《後編》

久々に熟睡出来た気がする。

日が傾き、木の陰からはみ出た腕が西日によつて焼かれた事で、俺は目が覚めた。

「…………ふあ…………いてて…………。——よ！…つと」

木の瘤を枕代わりにしていた事で、体が妙な形で固まっていたらしい。体中が異音を奏でるのを強引に無視。無理矢理動かす事で、何とか稼動域を確保。

視界いっぱい広がる紅。それは、地平線に沈む夕日が世界を燃やしていた。

赤一色に染め上げられた大地は、こちらの心を動かすのには充分なものであった。言葉もなく、動きもなく。大自然の脈動に、ああ、とか、おお、とか。内心で感嘆の声を上げながら。

時間を忘れ、目的を忘れ、思考を忘れて——幾許か。黄昏の時間が闇に沈み、瞬きを持った星々が天井に灯る刻限となつて、ようやく俺は動き出した。

寝起きと同時に座り続けていた事で、またもや体が固まってしまったらしい。立ち上がろうと背筋を伸ばしただけで、良い感じに関節から音がした。

「んーっ！」

尻の砂埃を叩いて落とし、上体を反らして節々を解す。全身バツキバキ。体が楽器になつた気分だ。

真つ暗。とまではいかないものの、完全に日没してしまつた今となつては、星の光が強いとはいえ、良好な視野を確保するのはやや難しい。

さつと周りを見渡して、耳を澄ます。鈴虫の音と微風の感触が俺の頬を撫でていた。

(ナ……リンは……居ないか)

彼女どころか、夜の暗さを差し引いても、一面を覆い尽くしていたネズミの一匹すら発見出来ない。

少し寂しいけれど、別れを惜しむまでの関係でも無かつたと思う事で、気にしない、の方針を取る。

何も告げられずに居なくなつてしまつた事は悲しいが、そこまでの間柄ではないのだし、こんなものか。と割り切つて、これからの事を考え……

(あれ、ジャン袋は?)

……る事には至らなかつた。

寝る前に、体の横辺りにほっ放り出した筈のものが消えている。寝ぼけて消してしまったかとも思ったのだが、未だに僅かな体力の消費は感じられる。袋は未だに出現中だ。

二度寝も辞さない脳味噌に何とかがんばって貰いながら、今自身が置かれている状況を整理する。

アニメ描写であれば、きっと今のBGMは、時計の秒針がカチリカチリと音を立てているシーンかもしれないと思いつつ、頭上に擬似豆電球が灯った……気がする。

これからの行動が決まった。

それは。

「寝る」

枕代わりをしてきていた木を見て、「隠れ家」を呼び出した。安全地帯確保です。

中に入れば、かつての如く真っ暗な無限の奥行きをみせる室内が広がっている。

これで勇丸でも居れば、あの時の再現になるなどチラと考え、すぐに破棄した。今は感傷に浸る気分ではない。もっと他の事に意識を回すべきだ。

無くなったモノは「ジャンドールの鞍袋」のみ。けれどそれは、いつでも消せて、いつでも出現させられる代物である。生き物ではないのだし、別に拘る必要は無い。

けれど、もし仮にこれが消えてしまった云々のものでなく、他者によって奪われたモ

ノであつたとしたら。

今までの流れから導かれた答えはあまり気分の良いものではなかつた。それを行つたのは、かなり高い確率で、あの妖怪の少女であるのだから。

だとしたら――

(まだ確定じゃないけど……。もし彼女だとしたら……。何でだ？ 何で態々、人様の物を盗む真似を……)

大事なものに変わりは無いとはいえ、それは幾らでも取替えが効くもの。

何をされても……。まあ問題は無い、と。その心の余裕も相まって、怒りよりも、疑問の方が先に立つ。

一番有力そうな理由は、彼女が漏らした、満腹になるのは初めて云々、との言葉から、ネズミ達の食料源確保の為だろう。

普段から腹を空かせていた仲間達の欲求を満たす代物を見せたのだ。無限に湧き出る食べ物袋。それに興味を持たない筈が無い。

ただ、だからといって窃盗は宜しくない。

今、供給を断つて消しても良いが、それでは面白く……。ゲフンゲフン。教育上いただけないので、直接会つて、今後は止めるよう懲らしめ……。指摘しておこう。

当人了承の元、踏んづけてしまったことが発端の出来事は、既に貸し借りは終わって

いる。その上でこちらに害を成したというのであれば、もう手心を加える必要は無いのだから。

(という訳で、お休みなさい)

敷き詰められた、藁の布団の上で横になる。ミシヤクジの外套と月の衣類の効果で、あの時ほど……というよりは、むしろ格段に寝易くはなっているのだが、それでも違和感を感じずには居られないのは。

(月に戻りてえ……)

空調の効いた部屋。ふかふかのベッド。何に襲われるでもない、安全で清潔な環境。美人な同居人。ああ、寝る時だけ月の生活空間が欲しいです。

早くも逆ホームシック？ に掛かった俺は、数日で慣れるさ。と、過ごし易かった生活環境を思考の外へと追い遣りつつ、目を閉じた。

「おはよう(ぎ)いませーすー！」

新鮮な空気を胸いっぱいに取り入れて、日の出と共に、元氣ハツラツ挨拶一声。誰に聞かせる風でなく、世界に向けて自己主張。……誰か居たら絶対しませんが。

【隠れ家】の扉から這い出た俺は、眼下に広がる緑の大地に向けて声を荒げた。

夜更かしする理由が宴会以外で皆無となっていたので、朝日が昇るか否か。な時間帯で起床する癖が付いていた。

起きてたつて娯樂が無いんです。天体観測くらいしか。……それはそれで楽しかったんですけどね。夜な夜な星を観察しに繰り出す方々の趣味が何となく理解出来る経験でした。機会があれば、天文学に詳しい人から夜空の下で、色々な話を聞いてみたいものだ。

月の頃との時差で生活のリズムが狂うかとも思っていたのだが、どうも良い感じの内時間とマッチする緯度……経度だけか……？へと降り立つ事が出来たようだ。

ラジオ体操よりも簡単な軽い運動の後、日課となっていたあれを、昨夜はし忘れていた事実を思い出した。月の服によって、今は自動で体を清潔に保ってくれているのだが、あれは汚れを落とすだけではなく、心や体の疲労を取り除いてくれるもの。

幸い、【隠れ家】——【土地】は残したままだ。これならば問題なく使用出来る。

(いつもは秘湯、諏訪に入浴してたからなあ)

洩矢から守矢になる以前から、考えてはいた。そして月にての初使用の際には、俺含

む、周囲の誰もが目を見張る展開になったのを思い出し、あれは気分が良かったなど記憶が蘇り、笑みを浮かべる。

残念ながら、永琳さんの実験との名目であつたので、それを堪能するまでの段階には至らなかつたのが心残りであつたくらいか。名前が何の捻りもないものではあるけれど、すぐさま思い出せる、という点においてはそれ以上望むべくも無いカードであつた。(丁度、周りには雪も被つてたし)

もし熱さで参つてしまうのであれば、そこで体を冷やすのも良いかもしれない。というか、むしろ至れり尽くせりではないか。

「んじやいつも通りに、っと。……おほん。——召喚！「温泉」！」

【隠れ家】の側面にあつた大地が発光し、数瞬の後に輝きを失つた。早朝であるのに暑さを感じる一帯に負けないよう主張するかの如き、濛々と立ち込める湯気は、それが高い温度を保有しているのだと理解させられるものである。

絵柄の通り、【温泉】の縁には降り積もつた雪が残つていた。この辺りは製作テーマの影響が強いのだろう。真夏の草原に雪の彩りが添えられている温泉。という、例えに困る現状であるのだが、一応、温泉は温泉だ。そこまで深く考える必要も無いだろう。

『温泉／Hot Springs』

2 マナで、緑の【エンチャント（土地）】

本来は、全体に影響を与えるか、クリーチャーの強化、弱体化が主な使い方の【エンチャント】ではあるが、これは【土地】に付与するもの。

これを付けられた【土地】は【タップ】する事で対象のクリーチャー一体かプレイヤー一人に与えられるダメージを一点軽減する能力を得る。

出来れば日本の山間なんかで使いたかったな。と思いながら、さつと周りを見渡して
人気の無い事を確認すると、俺は着込んだ衣服を乱暴に脱ぎ捨てて、快樂の泉へと突貫
していったのだった。

——湯温を微塵も考慮しないままに。

直後、絹を裂く男の声が木霊する。『アチョー』とも『ホアター』とも聞こえるそれは、宛らカンフー映画の気合の掛け声のように。【温泉】の縁に積もっていた雪の上で、軽度の火傷一步手前まで陥った体を冷やしながらのたうち回る全裸男の姿は、それから数分の間、見られたという。

そして、一芝居も終わりを告げて、日も高々と登り、等しく全てを焦がす時間帯となつた頃。

「地味にヒリヒリする……」

【隠れ家】を消し、【温泉】を消し。

衣服を着込み、その隙間から覗く、日焼けとは違う風に薄紅となつた表皮を優しく擦りながら、白い外套を羽織つた男が、草原の上で突つ立っていた。

じくじくと痛覚を刺激している、赤肌からもたらされる不快感を、何かカードを使って回復させようかという思考と共に、頭の隅に退けておく。今度からは水温が低い……冷たい奴を出そう。最低でも、火傷しない温度のを。折角、常時常夏な場所にやつてきたのだ。水泳という酷暑対策の風情を楽しむのも一興だろう。……決して、再び熱い思いをしたくないから、ではない。密かに決意しながら、これからの行動を改めて思い返

し、その手始めとなる力を行使した。

「あーい、きゃーん……フラァーイツ!!」

脳内イメージ。時を○る少女の、あれ。

軽快に一步を刻み、その体は——宙に浮いた。大か小かの放物線しか画けない【ジャンプ】とは違う滞空模様。他の力を利用した手段【羽ばたき飛行機械】とも違う。空中移動手段の最後の一つ。青のーマナ【エンチャント】であり、名前もそのままである【飛行】だ。

効果は当たり前の様に発揮されていて。一秒、二秒と足が地面に着く事は無く、今も尚その記録を伸ばし続けている。

(……成功だ……)

内心で呟いた感想は、その一言では終わらない。

(成功だっ!)

とうとうそれは、外へと漏れる。

「——うおおおお!! (俺、飛んでるぞ!!)」

言葉よりも先に、感動の声の方が先に突いて出てしまったようだ。

忘れていた、昔の記憶。誰もが一度は夢見た筈だ。そして、現実を突きつけられ……諦めた、夢。

「……………」

歯を食いしばり、歓喜の声を、笑みへと変える。

忘れ去ったかつての願いが実を結び、埃を被つて……埃に埋没していた好奇心を再び目覚めさせた。

(そうだった……空を飛ぶ事なんて、昔は何度も夢見た事だったじゃないか)

自らの意思によつて、縦横無尽に宙を駆ける。

【ジャンプ】を使った時には、楽しさよりも、滑空に対する恐怖と、早く慣れて目的地へ行かなければという使命感が背景にあつて、好奇心を満たす方に比重は置かれていなかった。

故に今回の【飛行】は、それら心の制限が殆ど無い状態で体験する訳で——。

速度こそ地上を全力疾走する程度のものだが、何の制約も受けずに移動出来るという体験が、より一層俺の心を沸き立たせていた。

鳥のように素早くも、蝶のように優雅でも無いけれど。十、二十メートルと高度を稼ぎ、恐怖を覚え始めたところで力を抜く。

【ジャンプ】の時に体験した擬似無重力を再び感じながら、地面に激突ギリギリ……は怖かったのだ、ある程度のところまで落下した後には、もう一度意識を集中し、空中にピタリ停止した。

僅かなブレーキによって、突如発生した引力に全身を襲われ、少し咽る。急発進、急停止は通常状態では結構厳しそうだと理解するけれど。

(もつとだ。もつと、もつと、もつと——!!)

多少の無理など気にも留めず、全速力で大空を味わう。

自由とは、こういう事だ。

虫も、鳥も、飛行機も。あの、空を泳ぐ雲にすら。幼き頃の俺が、空行く者達に向けた羨望の眼差しは、間違いではなかったのだ。

無心で空を駆けた。ただ只管に。ただ我武者羅に。平衡感覚を維持する為の三半規管へのダメージなど、まるで気にもならない。

全身を焼く太陽の熱に浮かれているのか。

「おおお——!!」

今はただ、叶った夢に突き動かされて——。

「丸一日遊び続けるとは思いませんでした」

我に返ったのは、次の日の明け方であった。【エンチャント】である【飛行】の維持もそうだが、飛行能力の行使自体にも、そこまで体力は使わなかった。

それでも、使い続ければ減るものは減るのだと。ぼやけ始めた視界から、自身が熱中症に掛かる一歩手前になっていた事を察した。

死んだら元も子もない。と、慌てて休憩。そのまま、体調の回復を図った安息は睡眠へとシフトしてゆき、朝日を拝むまでに至ったのだった。

（結構、体力減ってた筈なんだけどなあ。永琳さんに貰った腕輪、一体どの程度で効果を発揮してくれるんだか……）

まさか壊れちゃいないだろうな。と不安に駆られるものの、あの人がそんな軟な代物を造る訳も無いと思ひ直……思う事にする。頼りの道具路線から、もしかしたらのお守り程度の認識には変更したけれど。

とりあえず、かなり体力を使わないと効果を発揮してくれないのだろう。と思う路線で、この懸念事項は終了させる事にした。

丸一日中遊び倒して見上げた青空は、とても清々しい気分にかけてくれる。息も絶え絶え。体バテバテであるというのに、実に心地良い疲労具合です。

既に太陽は高々と。再びお世話になる木の陰にお邪魔しつつ、マナと体力の回復を兼

ねた休憩を取る。

外側にでなく、内側に意識を向けてみれば、今までに出した各種【土地】や、クリーチャー達との繋がりを感じられた。

その中の一つ。意識した時のみであり、加えて大雑把にしか感じられないのだが、行方知れずとなったジャン袋の方角が分かった。

「……西、か」

方角なんて全く分からん眩きですが。気分です、気分。

太陽や星の位置から自分の場所や方角を割り出す、なんて、理科の講義で習った筈ではあるのだが、完全に記憶から抜け落ちている。覚えてるのはそれを習っただけの記憶であり、それをどう割り出すのか、なんて情報は、これっぽっちも残っていないかったのだった。

仮にジャン袋のある方角が西だとして、勇丸や【水没した地下墓地】等々を感じる方向は、殆ど対面。反対側。目的地とは逆の方面である為に、面倒臭さが込み上がる。

（別に追わなくても良いかな……いずれは日本……場所は何処からは知らんが……幻想郷で会えるんだろうし……）

その時に問い詰めれば良いか、と。いくら東方キャラとはいえ、出会って僅か数時間。一方的に踏み付けてしまったけれど、それは既に謝罪済み。そこまで気に掛けていた者

でもない。

……そもそもが、俺が幻想郷に行けるのだろうか。という問題は置いておく。ただ。

(……何なんだよ、あの悲しそうな目は)

睡魔に負ける直前。見間違いと判断したその表情が、今は妙に、思考の隅でチラつく。一分が経ち、二分が過ぎ。

「——あゝ、もう」

すぐに用事を済ませれば万事解決。三度、頭を掻き毟る。

大和の国から離れて、大体二ヶ月前後。もうここまで来たら一日二日など誤差のようなものではないか。……戸島村でもそんな事思った気もするが、スルーします。

まるで、『明日からやる！』と宿題に手をつけない子供のように。

一瞬、不満そうに口を尖らせる諏訪子さんと、眉間に皺が寄る神奈子さんと、態度こそ凛としているものの、尻尾が垂れ下がった勇丸のイメージが脳裏を掠めた。

(すみません。帰ったら穴埋めはしますんで、許して下さい)

大和で行っていた事。妖怪を退ける。という仕事は常にあつたのだが、旅立つ前の段階では、人間の手によって大分補えるようになって来ていた。伊達に、鉄精製の技術を獲得してはいないというところか。

神奈子さんからも、徐々に前線から退くように指示は受けている。俺ががんばればがんばる程に、民達が育たなくなるから、と。その分、事務仕事の割合が増加傾向にはなっていたが。

……あ。

(……やべえ。諏訪子さんに何て言うか考えてなかつた)

月に居た時は『出たトコ勝負!』という気概があつたのだが、こうして地球へと降り立ち、帰還が現実味を帯びて来た事で決意が揺らいで来ていた。

喉元過ぎれば何とやら。とある諺を体言しそうになつたので、頭を振って、雑念を払う。

再度熟考。数分間、知恵熱が出そうな程に思索して。

「――よし! それを考えてから戻ろう!」

……ごめん俺嘘ついた。

頭を振って払った筈の雑念は残っていたらしく、熟考を経て、ヘタレと名を変えて結晶化してしまっていたようだ。

人それを、現実逃避という。

(リンを探している間に何か参考になる案でもあれば……)

おぼろげに感じられるジャン袋の方角へと、【飛行】ではなく【ジャンプ】による跳躍

力を前方に傾ける事で高速移動を果たす。

視界の先には白茶色な地帯、砂漠が広がっている。精々が自分の全力ダツシユな速度しか出せない【飛行】では、砂漠の脅威その一である熱中症の危険と、単純に、移動速度で疑問が残る。

その点【ジャンプ】は電光石火な速度を出す事も可能であった。何せ、一瞬で地上から上空へと打ち上がる力を持っているのだから。目が慣れ、体もその速度に順応出来たのであれば、彼の新聞記者な鴉天狗にすら勝るとも劣らない次元に到達出来るのではないかと思える程に。

緑を抜け、砂のみの大地を飛び跳ねる影が一つ。

兎のような、陽炎のような。それを見る者が居たのなら、きつと、そう例えていたかもしれない。

しかし、死の大地に態々赴く物好きなど居らず、唯一の物好きは飛び跳ねている者のみ。

結局、跳躍を繰り返す者が土壁で作られた町並みを発見するまで、その姿を見た者は空を流れる雲と、灼熱の世界を創り上げている存在のみであった。

太陽が地平線へと没する少し前。砂漠で営みを築く者達が住まう場所に、俺は来ていた。

〔ジャンプ〕による遠距離上空視察で、大雑把な全体の町並みは把握している。十字に敷かれたメインストリートと、そのバツテンの中央にそびえ立つ、白亜の城。

といつても、豪華絢爛な代物というよりは、箱を幾つも継ぎ足し積み重ねただけの印象を受ける造りになっていた。少し見方を変えれば、要塞か砦か。と言えるだろう。

（何だろなあ。テレビでやってた中国辺境の……ウイグル自治区だっけ……紹介番組なんかでこんな衣装見たような……いや、あれはインドだったか？）

白い布を着崩した和服のように身に着けた服装の男性と、色褪せた赤やら黄色やらの布で着飾った女性。前者は、大きさ、形、色、がどれ一つとして同じものを発見出来ない程に多種に渡って見られる帽子を、被る、というよりは乗せた姿で歩き回っていて。

後者は、服同様に様々な色合いのスカーフを、頭に被せたヘッドスカーフとでも呼べ

る格好で、炎天下の道を進んでいた。そのまま頭に籠やら壺やらを乗つけてくれれば、まさにテレビで見た人達そのものである。

土壁で作られた家々が、出来の悪い積み木を積み重ねたような造形で、道に沿って立ち並ぶ。数頭に連なって進む、背中にジャン袋並の水袋を幾つか背負うラクダの列。少し離れて、ロバの列が後に続く。

まるで、インドと中国の合いの子のような場所。それが、この町に来て思った感想だった。

諏訪子さんから貰った外套を、彼らに習って体に巻き付ける。大和では神様の従者のようなポジションであったので、『まあそんな格好も普通だよ』なんて思われたのだが、ここではそれも行く筈が無いだろう。郷に入れば郷に従え。習慣なんぞ知る訳も無いので、せめて服装くらいは。と、思ったのだ。

とはいっても、所詮ずぶの素人。どうにも、湯上りのオヤジが腰にタオル巻いているだけな気がしてならない。これあれだ。古代ギリシャとかあの辺の衣装……キトンだったか……みたい。そういう外見になっている筈だ。

だからだろう。道行く人達の視線が結構刺さる。身長が他の人達と比べても、頭半分くらい出ているのも原因ではないだろうか。

お陰で眉間に皺寄りまくり。勘弁してほしいツス。

「まあ。なんて綺麗な外套」

「あら本当。白いだけじゃないわ。水面に光が反射しているかのような光景ね。……素敵。何処で仕立てたのかしら」

「きつと名のある豪族の……それも戦士に違いない。見ろ、あの顔を。一切の油断の無い眼をしてやがる。ありやかなり腕の立つ奴だぜ。きつと名のある国の……そうだな。將軍に違いねえ」

何やら外野が言っているけど、聞きたくない……聞いたら羞恥の炎で焼け死にそうなので、極力耳には入れないようにする。アー、アー、ワタシ、ニホンジン、ガイコクゴ、キコエナイ、キコエナイ。

……早いところ、本来の目的を果たしてしまおう。

(リンが居るのは……)

ジャン袋がある方向へと目を向ける。恐らく、そこにあの少女も居る筈だ。

……でもね？

「……感覚が郊外なんです」

町とは正反対。つまりは真後ろ。

あれだ。どう見ても砂漠——ひいては、彼女と出会った草原地帯に続いている方角

であった。

……と、いうことは、だ。

「——通り過ぎた！」

超ガツテム。

視線を更集める結果になったが、構わず天を仰いで心中の苦悩を発散。少し気分が楽になったのだが、今度は別の苦悩が全身を突き刺している。……周囲からの視線を一身に集めておりますです。

おつかしーなー。移動中にそれらしい影は無かったんだけどなあ。探す対象が小さ過ぎて見逃したんだろか。

「うう、撤収撤収」

チャック全開であったのを公然の場で気づいた時の行動みたいにな、可能な限り体を小さくしながら、人混みから遠そうな路地裏へと足早に退避した。

そして、完全に日が没した町に、幾つもの火が灯り始める。

家々の間から零れるその一箇所。取り分け大きく光る、歓談と喧騒の声が入り混じり漏れるその家——店は、耳にする声や物音を肯定するように、人々が席に着き、飲めや歌えの宴を作り出していた。

色々な料理。様々な飲み物。多種の人種。瓶詰めのジュエリービーンズのような、小さな世界。そんな世界の一角。カウンター席にも似た場所の隅。

出された酒や料理を黙々と咀嚼しながら……

「……お、結構イケるな。カクテルみたいなものか。リンゴ……が原酒かな？　そこに砂糖でも入れて造ったのか……味に角はあるけど……ジャン袋のレパートリーに追加しとこうかな」

「それはムサツラーと言う果実酒でして。ここじゃあ鼻垂れのガキから耄碌した年寄りまで作れる、ごく一般的なものでさあ」

「ふむ、ふむ。……飲み口は甘くて柔らかいけど、結構度数強そうだな……程々にしておかないと」

店内の誰もが白い外套に注意を引かれて一度は目を向けるが、ただ飲食を口にするだけで大して動きの無い様子に興味を継続させられなくなり、視線を切る。

「こっちは……炒飯？　ドライカレーのカレー無し？　何だろ分からん。……で、こっちが具沢山スープ、と。色、赤いなあ……。でも、香辛料の香りが良い感じに腹に染み

る。空きつ腹には堪らんですよこれは」

「(どらいかれー?) 飯はポロと言つて、羊の肉と玉葱や人参を炒めて蒸したもので、スープはダバンバンジー。最近、お隣さんから入ってきたバンバンジーっていう料理にヒントを貰つて造つたんですがね、これが結構上手くいきまして。鶏とジャガイモ、トマトなんかを唐辛子入れて煮込んでみたもんでさあ。もし腹に余裕がありましたら、残つたスープに平麺入れてお召になるのも良いですよ」

「そりや良い事聞きました。これでもそこそこ食えると自負してますんで。是非お願いします」

「分かりやした。……しかし、これだけ食べて頂いて貰つてあれですが、お客様みたいな貴族にやあ、うち等庶民の味は合わんでしよう」

「いえいえ。郷土料理つてのは美味い不味いも確かにありますが、一番はその土地で食べられてるものを食べる事に意味があると思えますから。それに、酒も料理も美味しいですよ? ……というか貴族じゃありませんよ俺。……えーと……旅人とも思つておいて下さい」

「そういうもんですかねえ。あ、別にお客様の素性を探ろうつて訳じゃないんでさあ。ただの好奇心。お代もしつかり頂けておりますし、他意はありません」

やはり金は力か。まあ見ず知らずの他人をいきなり信じろというのが土台無理な話

でもある。そういう意味だと、簡単に理解し合える……かどうかは別として、互いの信用の構築を一気に楽にしてくれる、この金という代物は、やはり凄い発明なのだ実感するのだった。

カウンターの奥で酒の補充をして来た細身の男と二三の言葉を交わした後、俺は黙々と料理を咀嚼し——店内の会話に耳を傾けるのだった。

こちらスネ……九十九。現在、潜入ミッションを観光……もとい、敢行中だ。

リンの後を追って、通り過ぎた。これつてつまりは、しばらく待ってれば彼女は後からやってくるのではないかと、いまいち信憑性の無い答えを信じる事にしたのだった。

(折角色々見て回るって決めたんだ。少しは経験値積んでおかないと)

視野を広げて柔軟な発想を——うん。そういう事で。

基本は東方プロジェクトのイベントを観察するところだが、興味があるのは、出来事だけではない。場所、建造物、サブキャラ等々。別に、事象だけしか見なければいけない理由など無いのだ。

(海外旅行とか行ってみたかったし)

何処まで生前の世界観を引用したら良いものか判断は付かないものの、あつちにしてもちこちにして、一度も日本から出た事は無かったのだから、どちらも未知であると

いう意味では、両者に大した差はない。

むしろ、これからこちらで生きていかねばならないという点では、こちらの常識が今後の常識になる。知っておいて、損はないだろう。

(それが日本で役に立つかは怪しいとこだけどなー)

結局は、初めての海外旅行。というフレーズを正当化しただけだったのかもしれない。

でも、出来れば最初はヨーロッパ辺りを見て回りたいと思ったがなあ。それなりのツアー組むと、お値段が二十万行きそう……というか余裕で超えそう、仕事が一週間後の休みが取れなかつた為に、昔は諦めていたのだった。

何せ今は、個人的に最大の問題点であった言語の壁、という点をクリアしている。次に金銭面。トドメで、船やら飛行機やらといった、移動手段を模索しなければならぬ……どころか、既に現地入りしている現状。昔に諦めていた理由の悉くが、既に取り除かれているのだ。自重する理由はかなり薄れていた。

で、待機&観光目的で、宿を見つけ——

『お客さん、うちは結構高いが大丈夫かい?』

一目で町の者じゃないと看破され、男の言葉で、現地の銭なんぞ持っているわきや無い。という事実を突きつけられた。

背中に一筋。嫌な汗が流れていったのだが、そこはほら。俺は金銭面では不自由する事はないのだった。寶石が、価値のあるものである限り。

Gパンのポケットに突っ込んであったそれを店主に見せる。

小指の爪程のそれ——恐ろしい程に精巧な細工を施されたサファイアを見た途端、相手の疑惑の目が一変し。

『ようこそお客様！……滞在は二週間？ 三週間？ いやいや一ヶ月でございますか？

お気の済むまでごゆるりと！ おおい！ お客様を一番良いお部屋へとご案内しなさい！』

何と見事な変わり身。ビフォア、アフターの二者比較画像で見比べてみたくなる。

今にして思えば——当然物によるんだろうが——BB弾くらいの大きさの寶石が数十万なんぞザラな価値観であり、光具合もそうだけれど、大きくなればなるほどに、その値段は倍々に膨れ上がっていたのだった。

それが、BB弾どころでなく、その倍以上ある、ビー玉サイズ。

しかもこれは、この世界で最も先を行くであろう所にて製造されたもの。具体的に幾つかは分からないけれど、この店主の豹変振りを見るに、その価値たるや、計り知れないレベルなんだろう。既に代金として支払ってしまったのだが、あれは一体どれくらいの価値があるものだったのだろうか。やり過ぎた、という点だけはよく分かる反応では

あつたが。

(月に居た時、「宝石鉞山」から採取したのを幾つか加工して持ってきておいて良かった)
材料は俺が。カッティングは向こうが。

一応は宝石同士が傷つけないように、本に挟んだ葉の如く、厚手のハンカチ二つ折りにし、その間に閉じて持ち運びをしていた内の一つである。重さは死に繋がる節がある旅において、元々片手で数えられる程度の量しか持つてきていなかったのだけだ、この分ではもう少し多めに拝借してくるべきであつたか。

そう思うと、月に対しては一体幾らの贈与を行った計算になるのだろう。疑問と、物欲から派生する後悔という名のみみっちさが沸いてくる。

(……ああ、でも、宝石の価値はカッティングによるところも大きいからなあ)

重さと輝きのバランスが大事なのだと、ジャパ何とかタカタの社長が言っていた気がする。

月の最先端技術を用いた細工で、より一層価値を高めた宝石達。持ちつ持たれつか。と結論付けて、「宝石鉞山」から無限に湧き出るものを惜しむという事実には、我ながケチな性格だと苦笑した。

で、そのまま宿泊施設一階にドッキングしていた飯屋へご厄介になり、夜を迎える流れとなった。代金も例の宝石から引いてくれるというし。

初めはただの興味から。日本に……大和の国に居た時では絶対に味わえないであろう感覚を、五感を駆使して楽しみつつ過ごしてみれば。

「全く……ウイリク様にも困ったもんだ」

俺の後方。このカウンター席に着く前に見たそこは、確か数人掛け用のテーブルが用意してあるところだった筈だ。

「なあに、今はもう郊外は愚か、町に出てくる事もなくなつて久しいじゃねえか。もうすぐさ」

「だとすると、今後は色々やり易くなるな」

「おうよ。ただ、それを狙つてるのは皆同じさ。最初でどれだけ稼げるかが肝だぜ」

幾人かが、何やら商売の話をしているらしい事は理解出来た。……あまり宜しくない方向の。

声に差が感じられないので誰が話しているのかは分からないけれど、何を言っているのかは理解出来るので、あまり問題は無い。無言の聞き手となつていたのだが、途中で思案に没頭した為に会話の過程がスッパリ抜けてしまったのだが……。

「それはあれじゃないか？ 例のネズミ妖怪がウイリク様に取り入つてからじゃ？」

おっと。何やら心当たりのある話題が飛び出してきましたよつと。

「時期的には、そうだな」

「はは。じゃあ何か。今この国のトップは妖怪に食い殺されようとしているって訳か」
「何でも魅了の妖術を使うとか何とか。ウィリク様もそれにやられて一発でコロリつてな具合だったそうぞぞ」

「おいおい、それじゃあこの国での商売は上がったりじゃねえか。妖怪に全部搔つ攫われちまうぞぞ」

「そこはあれだ。豪族のお歴々が既に手を打つてあるさ。大方、『女王の死因はこの妖怪が！』とか言つて、そのままバツサリやるんだろうさ」

……あまり、ではなかった。どうやら、とても宜しくない話のようだ。

——聞き耳を立てる。という行為が思ったよりも楽しくて、ついつい時間を忘れて没頭してしまっていた。

とはいっても、行為もそうだが、その真は彼らの話す内容がとても興味を引いたからである。

女王に救われたネズミの妖怪。豪族達がこの国を手中に収める一歩手前状態。近々、何か大きな事が起こる。

ご当地物の料理を口にしつつ、色々と感想を抱きながら耳にした話を纏めるに、そんなところだった。

国存亡の危機という奴だ。今の話を——この国の状況を要約するのなら。だからといって、何かする訳でもないけれど。口には出していない彼らの「思考」は、それこそ犯罪者が有しているであろうものであつた。

誰を欺き、誰を利用するのか。物は、人は、時間は、そして、金は。十人十色の考えであるというのに、最終的には金銭方面へと結論に向かうのは、とても興味深いものがあつた。

(内容はさて置くとしても、色々な考え方があつて、つてのは勉強になるなあ)

高い宿の影響か。後ろで悪巧みをしている方々は、かなりの豪商や貴族様達らしい。ある者は関税の権利を。ある者は大量の不動産を。実に様々な考え方やアプローチの仕方があるものだと思ふべきばかり。

昔は仕事の関係上も肉体労働に比重が置かれていたし、諏訪子さんの所でも、ほぼ肉体方面での貢献であつたので、交渉事にはほとんど疎かつた事もあり、全てが真新しく、新鮮で。

千変万化に移り変わる思考の濁流を「観察」し、この土地の料理をパクつきながら、海千山千の狐や狸の会合に興味深く意識を傾け続けるのだつた。

『テレパシー』

青で「マナの『エンチャント』」

これが場にある限り、全ての対戦相手はその手札を公開したままゲームを進める。

思考でなく、記憶の部類になると途端に不明瞭になるけれど、そんな些細な不満を一風してしまうメリットを發揮しており、それが実感出来ていた。

俺的別名、『今日からあなたもさとりさん』カード。月での失敗を踏まえて、どうすれば誤解の無い関係を築けるのか。という考えの元から辿り着いた答えが、これであった。

思考で勝負する者達が、既に手札をばらされているという状況は、絵柄が透けて見え

るトランプでババ抜きでもプレイしているようなものだろう。勿論、一方通行の。

魂胆やら本音やらを何の苦勞せず理解出来るのは、何とも新鮮な気分させてくれたのだが。

(これ、頭痛くてしようがないんだが……)

一人一人に集中すればそこまででは無いのだが、二人目、三人目と同時に読み取ろうとする対象を増やしていくと、ジクジクとこめかみの辺りに鈍痛が走るようになった。……いや、もう一人目で、既に頭が重くなっていた。

痛みを抑える様に頭に手を当てると、一瞬、風邪引いたかと錯覚するほどの熱を感じる。体調不良ではないので、多分、知恵熱という奴だ。

(いつばい人の話を聞けるようになったよ！でも性能フルに使ったら自壊するよ！

……とでも?)

あんまり使いたくないなあ、このカード。

【テレパシー】による頭痛とはまた別の痛みが襲う。

通常ではありえない情報量——脳味噌を酷使しまくっている結果だろうか。順繰りに彼らの頭の中を覗く事で頭痛を制限しながら、カードの性能を活かしきれない自分の頭をちよつと不満に思った。これが永琳さんやらの月の面々であれば、多分、余裕で使いこなす代物なのかもしれない。

(色々とお話、ありがとうございます。ございました)

解散ムードに突入していた彼らに習い、こちらも席を立つ。

後ろのお方達の代金をこちらで払う様に、オーナー……バーテン……店主？ へと告げる。お代は、例のサファイアから代引きでお願いします。

『あいつらとお前、何の関係が？』と目の前の男の表情が——思考も——物語っているが、言葉で尋ねる真似はせずに、一つ頷くだけで了解してくれた。

(一度やってみたかったんだよね、これ)

気分は風来坊なカウボーイ。あるいはちょっとしたリッチマン。洋画で間々見た場面の焼き回しを、自分が体験出来る機会が巡ってこようとは。

何とも俗物な感覚であるが、実に良い気分です。自重する気はあまり無いが、全開にする気はもつと無い。欲望ばんじゃーい、する場面は見極めなくてはならないだろう。こうやって、小出しにする程度で今は十分である。

僅かに鈍痛のするコメカミを抑えながら、「テレパシー」を解除。就寝の為、借りた部屋へと戻り、床に就いた。

「……ねむ」

お早う御座います。頭が働きません。九十九です。……つてな具合の自己語りから今日を始めてみようと思つた、今日この頃。日も昇りきつていて、人によつては昼ご飯にあり付いている時間帯だろうか。うう、日差しが暴力的。

一日中眠り扱けていたい衝動が、今も絶えず働か掛けてくるのだが、そうも言つていられない。

(ジャン袋、かなり近くに来てるっぽいな)

昨日と変わらず、脳天を焼く日差しが恨めしい。旅先の記念品の意味も兼ねて、帽子か何かを買つておこうか。

閉じた瞼の上から、眼球に『昼だぞ』と訴えかけて来た太陽との戦闘は、俺が折れる事で決着が付いた。まどろむ意識の中、『ジャンドールの鞍袋』の感覚が、大分近づいて来ているのを感じたからである。

慌てて……なのにか重い動きなのか微妙なラインで起床↓準備の流れを終えて、待ち人が居るであろう方面へと歩いて移動し、数十分後。出会った時と同じ格好——薄いグ

レーのワンピースと木の枝、そして、大きな麻袋を持ったリンが、大通りを歩いているのを発見。

さてどうやって接触しようかと思っていたのだが……

(……何だ、この空気)

異様。次いで出てくる感想は、気持ち悪い、であった。

彼女が進む先に居た、人という人が道を譲り、あるいはその場から立ち去って……残っている者の誰もが、親の敵でも見つけた風な表情をしていた。

晒し者。

安直に言葉にするのなら、それが適切だと思えて……思えてしまつてならない。

(お前、何したんだよ……)

並大抵の事では、今日の前で起こつてる光景にはならないだろう。

しかし、そのとんでもない事を仕出かしたのであれば、この国の大事を中心に話していた、昨晩の男達の話題に上がつていた筈だ。

(なんだっけなー、なんかあつた気がするなー)

昨夜の出来事を思い返す。動機こそふざけていたが、あの会話はとても興味を引くものであつたのは間違いない。酔つていたとはいえ、かなり話は覚えてる。

そして、該当項目に引つかかる話を一つ思い出した。

(……女王の娘になった。つてのが原因なのか?)

この国の最高権力者に取り入った妖怪。何も知らない状態で聞いたのであれば、ここに住む者ならば、真つ先に対処したい問題ではないか。

でもそれは……リンを見る民衆の眼を見れば、首を傾げざるを得ない。恐怖や嫉妬、怒りだけではないのだ。

あの汚物でも見るような目は……心当たりがあった。

(仲の良かったあいつと、俺によくしてくれた先輩の時だ)

前者は学生の時。

異性への告白に失敗し、それをネタに——いや、原因となって、苛めの元になり。

後者は社会人となった時。

仕事は不器用であつたけれど、人一倍責任感が強く、優しい人物であつた為に、周囲の仕事「だけ」は出来る人から良い様に使い潰されていた。

その時にはそれぞれ解決策を講じ——今思い返しても愉快的結果になつたが——
—そんな彼らに向けられていた周囲の目を連想させるのだ。この光景は。

——ああ……気に喰わない——

久しく忘れていた感情を思い出す。が、それに合わせて、自制心も湧き上がった。

一部だけを見るんじゃない。まだ、こちらの知らない事情があるのかもしれないのだ

と。それでも心の温度が上昇していくのを止める事が出来ずに、ただじつと、侮蔑の視線を向けられる存在を視界から消えるまで見続けて——

(……しまった、見失った)

——我に返ったのは、あれからどれくらい経ってからか。

警察は勿論、軍隊も、妖怪も、恐らく、雑多な神すらも。純粋な力量で自分を諫める存在が少ない現状では、不満を爆発させずに堪えるのが、こうも難しいものだったとは思わなかった。

一分であつた気もするし、その十倍は経っていたかもしれない。

未だに握り拳は硬く閉じられているとはいえ、感情が一気に臨界点を超える段階は過ぎていた。我慢、成功である。

この程度の憤慨など、仕事で腐るほど体験してきた筈なのだが……人間、ぬるま湯に慣れるのはとても早いのだと実感。

(権力者が他者を省みなくなっていく気分が良く分かつた気がするわ……)

もしくは、叱られる事を知らない子供か。我が仮言い放題。し放題である。全てとは言わないが、テレビや新聞に名を連ねていた政治家なる面々を、良い反面教師だと思いつつながら、俺はリンが消え去って行った後を追った。

「……城じゃん」

当然と言えば当然か。何せ今の彼女は、女王の娘ポジションに納まっていると聞いた。

後を追って、数十分。何となく。な感覚を絞るようにメインストリートを突き進み、行き止まりというか十字の中央に陣取っているそこ——城……砦……？ を発見するに至る。

(どうするよ。不法侵入で見つかったら、処刑とか極刑とか当たり前な時代じゃなかったか)

他人の家に入って柵やベッドを漁り、武器やアイテム、ゴールドを入手してきたゲームの様になる筈も無く。こりや散策は諦めて、とつと大和へ戻ろうかという考えが浮かぶと同時。

(……あ、あのカードなら)

不法侵入バッチコイなカードが連想された。体力もマナもカード枚数も、どれも充分にストックがある。多少の冒険は問題は無い。コストは2。【飛行】と同様の青の【エンチャント】である。

「これさえあれば覗き放題！ 【不可視】！」

『不可視』

2 マナで、青の【エンチャント（クリーチャー）】

【エンチャント】されているクリーチャーの攻撃は、クリーチャータイプ【壁】を持つ者によってしか防げない。

クリーチャーに【回避能力】を付与させる効力を、MTGで初めて持たせたカードである。

一瞬漏れた言葉は、この土地の悪霊か何かが乗り移って言わせたんだろう。東南アジア

ア辺りでよくある『あれは悪魔がそうさせたのだ』という理屈である。つまり自分は無罪。清らかである俺の心が犯罪推奨な台詞をのたまう訳が無いのだ。……月で無関係の要人二人を昏倒させたような記憶はあるけれど。

(そう考えると、力使えば犯罪行為の百や二百は余裕で可能なんだよなあ)

そこに手を染める理由が無いだけで、もし発生したのだとしたら、殆ど躊躇する感覚は無いだろう。現に、今行おうとしている不法侵入という違法に対して、全くと言っていいほどに抵抗を感じないのだから。

(使い道……マジで間違わないようにしないと……)

ちよつと前に空の上でやらかしたばかりなのだ。能力——特に戦闘面での使用は極力控えておくべきだと思う。

墮ちる時は一瞬。そういう確信はある。

何処までがセーフなのかは人によって異なるので、その見極めを気をつけなければならぬだろう。……既に落ちかかっている気もするが、こういうのは気づいた時にいつでも心を改めようとする気構えが大事だと思います。はい。

自身の犯罪に対する意識レベルほどの程度になつてゐるんだと思ひながら、頭を掻いた。わしゃわしゃと髪を梳かし……本来視界に入る筈であるものが見られない光景を目の当たりにする。

「……お、マジで無い」

思わず零れた眩きは、本来見える筈の自身の腕が、全く視認出来ない為であった。

いや、腕だけではない。足も、腰も、腹も、胸も。そして、影すらも。ステルス機能で誤魔化しているのではなく、どうやら本当に光が透過してしまっているようだ。確認する事は出来ないが、恐らくは顔すらも見えなくなっているんだろう。

本来ある筈の場所に、ものが無い。どれだけ目を凝らしても何も映らない異常さに、気持ち悪さとか好奇心とかを感じていると。

(あ、服も見えなくなってる)

良かった。この辺が不可視になっていなかったのなら、もし本当にこのカードを使う場面が来た場合には、服を脱いで対処しなければならなくなる。

(幾ら見えないつつたつて、全裸で潜入捜査とかしたくありませんよ)

子供の頃は、噴水のある公園や実家の裏山の川などでよくやっていたので、その手の開放感によく知っているものの、それをこの歳になってやろうとは思わない。

変な方向性の安堵感を得ながら、既に掛かっている「ジャンプ」の効果を行使。城の上へと跳ね上がる。細かな着地点調整などは、もう手慣れたものだ。

建造物の全体像を確認しつつ、中庭みたいな場所でもあれば、そこに着地したいと思っていたのだが。

(おっと……このままだと)

風を切る中、思い至る。

「ジャンプ」の効果で飛び跳ねた着地地点が、城の一番上……天守閣？になりそうであった。

まあ、どうせ詳細な方向は分からないのだ。風潰しに探すのならそれもアリだと思いながら、風に揺れるカーテンが目につく窓の縁へと着地を果たす。殆ど音のしない着地であったので、俺って実は隠密の才能が。とか馬鹿な事を考えつつ、レースのカーテンを潜り、室内へと視線を向けた。

王室、とはまさにこの事か。けばけばしいまでの煌びやかさは無いけれど、調度品のどれ一つとっても匠の粋が凝らされているのだと分かるものが申し訳程度に並べられている。この部屋の主の性格が透けて見える気がした。

壁に掛けられた真紅の布には大きな絵柄。多分、国旗かトレードマークか、そういう役割のものだろう。本棚に机。他数点の家具と、部屋の中央に陣取るキングサイズのベッドがこの部屋の全てであった。王座の間、というよりは、寝室としての意味合いが強い印象を受ける。

その巨大なベッド——俺が三人、大の字になつて寝てもまだ余裕のあるそこに、レースのカーテンに隠れてはつきりとは分からないが、初老の女性が腰掛けて、手にし

た本へ、静かに目を通していた。

(……はー)

漏れた息は、感心の意味が籠ったもの。風に吹かれてカーテンの奥が見える。年老いて尚分かる美がそこにはあり、艶の失われた髪も、水分の抜けきった肌も、それを崩すには至らない。

まるで完成された芸術は、終焉を迎えても……いや。終わりが近づけば近づく程に輝くのではないかと思わされるもので。

(綺麗な人……)

……何をしに、ここまで来たのであったか。

大和や月の面々を見ている……ああ、いや。失礼な言い方だが、ある意味で彼女達には見慣れてしまった為か。それらが全く皆無である、見るのも出会うのも初めてな人物であった場合は、こういう風になってしまうようだ。

(まさか年寄り相手に、こんな感想が沸くとは夢にも思わなかったわ……)

異性というよりも、価値ある美術品を目にした心境が適切か。室内を通り過ぎる優しい風は、外の灼熱の気温を一瞬忘れさせられる。

レースが揺れる僅かな音と、初老の女性が本を捲る音のみが、今この場を構築しているかのような感覚の中。見惚れる。という言葉を体言していると、鈴を転がしたような

……聞き覚えのある声が、俺の鼓膜を振るわせた。

「——ただいま。ウイリクお母様」

今、彼女は幸せの中に居る。

優しい笑顔で老女に甘える少女に、全く関係の無い俺ですら、心の温かさを感じていた。

太陽光が白から赤へ。頭部を焼く日差しが斜め横から真横へと移り行く最中、素の少女の一端でも知ればと思つて部屋に不法滞在し続けて、幾つか、既に知っている事も含めて分かつた事がある。

目の前の老女がウイリクと呼ばれる、この国を統べている女王だという事。

リンは彼女に心を許しており、彼女の為に何かをしてあげたいのだという事。

そして、少女はこちらの目的であつた【ジャンドールの鞍袋】の入っている麻袋を使おうとしているという事が分かつた。

（袋からちよろつと寶石見えてますよー）

袖口からチラチラと覗き見える輝き。

ちよこつとだけではあるけれど、俺がNEN能力者であれば、具現化など容易なレベルにまで達しているジャン袋を見間違える筈が無い。

(でもそれ、俺以外には使えない筈なんだが……)

戸島村で鬼の一角が使おうとした際には、効果が現れず、散々引つ張り回した挙句にボロ絹状態へと姿を変えた。

もしかしたら。という展開もあるだろうが、可能性は限りなく低そうだと思つていて、リンの表情が一瞬固まり、取り繕う笑顔で行動を取り止めた。

やはり、というか何というか。ジャン袋を使用するのは失敗したようだ。

(自業自得だぜ全く……)

いつもならば、罪を犯した者が困るのはとても愉快だと感じるのだが、どうも善意から発生した行動であるようなので、いまいち楽しくない。というか、楽しくない。

(……さつて、どうしたもんか)

リンに対してはこれといって思い入れがある訳でもなく、ウイリクと呼ばれていた老女にも、綺麗だとは思うが、それ以上の感情は無い。

求める結果は、俺が如何に楽しめるかである。罪悪感を抱かずに。

「テレパシー」を使おうかとも思ったのだが、あれは昨晚に使ったのが最後であり、再度使うには夜を待たなくてはいけない。後数時間は、使用不可状態。

状況から考えるに、リンはウイリクに対して隠し事をしてここに居る。それはつまり、バレたくない事項があるという事であり。

(それが、俺から持ってたジャン袋、と)

……ぬふふふ。

これは実に楽しそうではないか。悪趣味だと言える仕返しに、我ながらいい性格しているかと判断出来る。

(いつバラされるともしれない恐怖を味わうが良い！)

袋盗られたのをぶつちやけるつもりは無い。リンが困るのを見たいだけであって、彼女が不幸になるのは望んでいないのだから。

ウイリクからは見えて、リンからは見えない位置へと移動。「エンチャント」である【不可視】を解除。

数秒の後。こちらの目論見通り、老女はこちらの姿を捉えてくれた。

「……あら、どちら様？」

急に現れた存在であるにも関わらず、これといって驚いた様子は見られない事に、これが年の功か。と、やや失礼な感想を思い浮かべた。場合によつては衛兵など呼ばれる展開も考慮していたのだが、どうやら杞憂で終わったようだ。

リンの目に俺の姿をしっかりと映し込むよう、ゆつくりと歩み寄る。

「——なっ!？」

驚きの声が心地良い。これ以上無いほどに真ん丸に見開かれた眼と、小さく開けられ

た口。そしてピンと伸ばされた耳が、彼女の驚愕具合を如実に物語っていた。

悪戯……ドッキリ？が成功した事で内心でほくそ笑みながら、彼女の持つていたジャン袋を掴み、手を入れる。

出すのは葡萄酒云々と言っていたのだが、この熱帯な土地で暮らす人にとっては、冷たい物が喜ばれるものなんじゃないかと思つたので、冷たい飲食系代表だと思われる氷菓子を思案し、出す事にした。

各種銘柄が脳内選択肢に上がり……最終的に、相手の好みを考えるのではなく、今自分が食べたいものを出すという身も蓋も無い結論で纏まつた。

何やらリンが絶望とも取れる諦めの表情を浮かべているのを他所に、諏訪の頃から散々やってきた精一杯の礼儀作法を実演。さり気無くこの地の者ではないと伝え、多少の無礼は許してね。とのニュアンスを含ませてみる。

取り出した棒アイス——ガリガリ君ソーダ味（開封済み）を差し出す。今の時代にソーダ味なんて前衛的過ぎる。とか思つてはいけない。

驚いた。というよりは、とても興味深いものを見る目でそれを見つめるこの人に、先に感じた、年の功。という単語は間違いでは無かつたようだと思ふのだった。

45 砂上の楼閣

質素ながらも堅実な造りであるテーブルに着く流れになり、時は経つ。

対面にはウイリク様。

真つ直ぐ伸ばされた背筋や表情からは、実年齢よりも幾分も若く見えて、昔は活発な女性であつたのだと思わせる雰囲気を伴っている。

その横には、ネズミ妖怪であるリンが。

実に気まずそうに小さくなつていて、巨大魚から逃げ惑う小魚の如く、視線が色々なところに泳ぎまわつていた。面白いのは面白いのだが、動揺し過ぎ。突つ込まれた後に理由を説明しなきやいけなくなる流れになつちまいますよ。

彼女……達、に振舞つたアイスは大変喜ばれた。予想通り、この国に温い程度の飲食は多々あれど、冷たい系は殆ど無かつたんだそうだ（季節限定物だが、一つ二つはあるらしい）。

そこで、このガリガリ君（ソーダ味）を始め、日本代表に名を連ねても可笑しくない氷菓子を差し出してみれば、元々、甘味——手の込んだもの自体が希少ということもあり、それはとても珍しがられ、その後に心地良いカルチャーギャップを味わわせて頂きます。豚も煽てりや……という訳ではないが、そうも喜んでくれたのなら倍プツシユだ！ という感情に後押しされて、各種氷菓子を次々にお披露目させて頂きました。

……ええ、実に愉快的な反応でござまして。こちらとしても、出した甲斐があるというものでした。

二つ目に出したガリガリ君（梨味）を始め、白熊くん、雪見だいふく、ピノ、もはや生産中止となったチューペットまで、テーブルの上に所狭しと並べ立てて、さあどうぞ！ と太っ腹ぶりをアピールした。

ただ、方やお年寄り。方や小……幼女。腹に入る分には限界があったのを失念していた。『罪悪感ある？』と問い質したくなるくらいに全てのアイスをもきゆもきゆ頬張っていったリンはさて置くとしても、ウイリク様がゆっくりながらも全ての氷菓子を一口ずつ食べてくれたのは、彼女なりの誠意の表し方だったのだと思う。うう、老人相手に何てことを。酷な事しました。

その後は惰性で雑談タイム。

メイドさん（アラビアンな感じの）が運んで来てくれた、目の前に人数分用意されたカップには、微かに湯気が立ち上っている。室内で幾許か涼しいとはいえ、外は西日真つ只中の刺す様な暑さ。幾らアイスを食べ体も冷やしたからといって、すぐにも水風呂に入りたくなる気温となってる。その上で暖かい飲み物など出されてみたのであれば、先程のアイス攻めの報復なのではないかと勘繰ってしまったのだが、口を付けてみて、その考えを改めた。

というか、だ。

不法侵入者である俺に対しても無碍に扱わず、こうして持て成しを受けているのは望外の喜びではないかと思ひ直す。

（甘っ……でもちよこっつと塩味が……んん、これはこれで……）

この土地では良く飲まれているものだという飲み物。チャイ、と呼ばれる茶の一種で、体力の低下（多分熱中症対策）を防ぐ意味も兼ねて、結構甘めに味付けされているらしい。

だが、今出されているものは若干の塩味が付随していた。甘いようなしよっぱいような味に、何となく、アクエリやらポカリやらのスポーツドリンクを連想する。よく汗を掻くこの土地ならではの工夫なのだなと思ひながら、啜る様にちびちびと口をつけていた。

「如何かしら。お口に合えば良いのだけれど」

「初めての味ですが、とても美味しいです。この暑さに良く合いますね。体が元気になる気がしました」

出来れば冷たいのが欲しかったが、これはこれで乙なものだと思う。

「それは良かったわ。東の地には、こういったものは？」

「甘い飲み物、というものがあまり存在しませんね。甘味は……精々が果物くらいです。お茶などは口の中をすつきりさせるものが多くて、味がしつかり付いているものは少数だったかと」

ただ最近、大和の極一部——天と地の神々の付近——では、それが崩壊、どころか未来の食べ物で溢れかえっている事は黙っておく。特産品として輸出の算段を組み立てているっぽい話し方に、なるほど。こういうところから貿易は始まるのかもしれないと理解させられるものであった。

他愛の無いように有意義な会話は続き、完全に日も暮れて、数刻。室内は幾つかの灯火にとつて照らされるだけとなっている。終始リンがそわそわしていた事と、それに対してウイリク様が、尋ねてみたいが空気を察して黙殺し、全く突っ込みを入れる気配が無かった事で、会話自体は順調に先に進んでいった。

ただ、出会ってすぐの時。この席に着いた彼女の一言目が発した言葉が未だに頭の隅

に引つかかっている。

『良かったわ。聡明な御方で』

意味が飲み込めずに目を瞬かせていると、彼女は懐から短刀を取り出し、それを棚へと置いてこちらの対面へ腰掛けた。

……老いても女王。その手の経験——暗殺云々は、そこそこにあるようだ。

場合によっては、近寄った時点で心の臓を一突きか、首やら手首やらの動脈が一閃されていた可能性もあったようである。聡明な、という意味は、敵ではない人物、というニュアンスが入ったものだったらしい。多分、こつちに釘を刺す意味合い兼ねて、暗器であった短刀を取り出したんだらう。でなければ、使おうとしていた当人の前でそれを取り出す意味が分からない。

年寄りだと思つて舐めて掛かつてはいけないな。と思う出来事でした。うへえ。

その後、この国の成り立ちやら、人々の暮らしについての話を聞いた。全く未知な文化であったので、とても好奇心を掻き立てられるエピソードのあれやこれに胸を高鳴らせる。大和……日本に居たらまず訪れなかつた機会に、旅行気分を味わえた。

特にリンとの出会いについての話は、俺が何を言うのか気が気じゃない様子でオドオドする少女に、親に悪戯をバラされる心配をしている子供、な光景が重なる。家族が楽しんでしまっていた食後のデザートを一人で全て食べてしまった時の記憶が蘇る。あれは、

食事が喉を通らず、何とかその場をやり過ごせないものかと神に祈りながら頭を働かせたのだったか。……まあその後はしつかりとバテて、母親からは張り手を。父親からは……母の張り手があまりに良い音だったので、自らは手を上げることはせずに、お説教だけに留まったのであつたか。

穏やかに時は流れ、太陽もその役割を終えて、部屋に火が灯つた最中――

「――ウイリク様。ヴェエラ様がお越しです」

平穏な一時は、第三者の到来で潰える事となる。

扉の外からそう聞こえたと同時に、こちらの――ウイリク様の応答も待たずに、戸が開かれた。

扉の左右に居たであろう門番によって開けられた扉の中央に、中肉中背……よりはやや肉を増量した体型の、引き締まった肉体は岩盤を思わせるそれを有した、まさにインドの商人な格好をした男が現れた。

深く一礼。すぐに体を起こす。年の頃は四十前後だろうか。頭に巻いた白いターバ

ンと、真つ黒に日焼けした手や顔からは、彼がこの地で長年暮らしてきたであろう様子が見て取れた。

「こんばんは、ウイリク様。本日の商談も恙無く終了しましたので、ご報告に」
温和とも柔和とも言える表情は、見ている誰をも穏やかな気分させるものであったのだが。

「……何用です、ヴェエラ。いつもならば結果を書に記すだけの事でしょうに」

だというのに、それは彼女と少女には通じない。今まで会話を弾ませていた様子など微塵も残さず、老女は一本の研ぎ澄まされた刃の様に。少女は席を立って、男の全てを拒絶するように、ウイリクの正面へと……まるで盾のように立ち塞がる。

「久しくお会いしておりませんでしたので。お顔合わせも兼ねて、でございますよ」
何だろう、この違和感は。

男の立ち振る舞いには嫌悪や悪意など、その一端も覗かせていない。温和そうな、気の良いおっさんだ。けれど彼女達の態度は、それこそ親の仇でも見る目をしている。互いの感情が激しく反比例している境界線上に立たされているこちらとしては、とりあえず事の成り行きを見守るしかないかな、と思っただけだ。

「……ほう。この方が」

ヴェエラ、と呼ばれたインド男が、その温和な顔をこちらへと向けた。事前に俺の事を

知っていた口振りと共に。

「茶を運んだ侍女から聞きましてね。普段は二つしか運ばない器を、一つ余分に運んだのだと。そしてそこで談笑しているのは、ウイリク様とリンお嬢様以外の者かが。……悲しいですな。ウイリク様のお知り合いでしたのなら、こちらに教えて頂ければ、それ相応のお持て成しを用意致しましたものを」

……それって、仮にも女王付きの侍女（守秘義務遵守だと予想）にまで手中に収めている、と公言しているようなものなのでは。

「……彼はリンの個人的な友人です。その様な第三者の気遣いは、無用のものと思いなさい」

「そうですか。それは失礼致しました」

先ほどまでの会話とは別人のような印象をしたウイリク様に戸惑いを覚えていると、そんな彼女の不機嫌を全く居に返さずに、インド男がこちらに足を進めた。

座ったままでは不味いかと思い、席を立ち、彼と面と向かい合う。俺より目線一つ二つくらい低い身長なのだが、巨大な岩石を前にしたような風格というか、威圧感すら覚える程に気圧される何かが彼にはあった。

「初めまして。私、ヴェラと申します。この地にて商いを行っておりますので、何かご入用なものがありましたら、何なりとお申し付け下さい。リンお嬢様のご友人であれば、

出来うる限りは勉強をさせて頂きましょう」

そう言つて、片手を差し出してきた。握手つてここでも有効なのね。

「これはご丁寧に。私は東の地から参りました、九十九と申します。そうですね、何かありましたら、是非に」

「おお。これはこれは。そのような遠方からわざわざお越しとは。……唐……いや、高句麗こうくり辺りのご出身で？」

高句麗つて何処かで聞いたな。昔の中国の国名だった………？ ……唐………も、確か昔の国名だったかな。三国志よりは後だったと思うんだが。

とりあえずは、彼の言う地名か国名か不明な場所では無い筈だ。との考えの下、言葉
を返す。

「いえいえ。もつと遠方からです（多分）。それらの国の更に向こう。海を挟んだ先の、小さな島国です」

この今の大陸（現在地点はインド辺りだと予想）と比べれば、ですがね。

日本人的謙遜スキルを発動させて、物腰を低くしてみせる。

「何と。そちらのお話は殆どお耳にする機会がありませんので、実に興味深いですな。

……如何でしょう。もし宜しければ、この後、一席。一昨日取り寄せたばかりの葡萄酒

がありました」

リンと言いこの男と言い、そこまで葡萄酒——ワインは良いものなんだろうか。嫌いではないのだが、どちらかといえば、ビールやカクテルよりも、焼酎や日本酒が好きな俺にとって、ワインには余り興味を惹かれない代物である。

でもそれは、今まで値段の安いものしか口にしていないからではないだろうか。日本酒の時だって、あんな砂糖を大量にぶち込んだだけのアルコールの何処が美味いんだと思っていた最中、知人の家で一本二万は下らない地酒をご馳走になった際に、その意識は吹き飛んだものだ。その経験が、今回にも当てはまるのではないかという回答を導き出すのに時間は必要無かった。

(高いワインなんて飲んだ事無かったなあ)

パツと見な第一印象だけでも、羽振りは良さそうである。おまけに国のトップな人と顔見知り。胡散臭さはぶんぶんあるにしても、そんな人物が勧めてくる品が、そんなよそこいらの物であるだろうか。いや、無い！

(サシで話してみるのも一興かな?)

その味が気に入ったのならジャン袋を使って入手すれば良い。そこから、今度はロマネなんちやらか、シャトーうんたらな代物に派生するのも楽しそうだ。

それに、女王やネズミ少女との関係は最悪だと言えるが、それに俺は当てはまらない。

仲良くなるに越した事は無いし、嫌うなり拒絶するなりにしろ、ヴェラと名乗った商人の人となりを知ってからでも遅くは無いだろう。場合によっては、「テレパシー」を使えば悪巧みをされても一発で看破出来るのだ。ある意味で、ジェイスよろしくプチ対人無双状態にもなれるのである。何でもバッチコイと思っても仕方ない。

——そう思つて、彼の意に応えるべく口を開きかけた矢先。

「いえ。それには及びません。ツクモさんは長旅でお疲れになつています。それに、リンとの再会の夜なのです。——邪魔をするのは無粋というものでしょう？」

二重の……というよりは色々な意味で『え?』となる俺を他所に、ウイリク様は鋭い視線をヴェラへと向けたまま断言した。それに対して興味深そうな視線を向けたインド男は一瞬目を細め、リンと俺を交互に見比べて、何やら納得した様子をする。

……待て、待つのだおっさん。その納得は俺にとって不名誉な理解である、と、経験と直感がダブルで告げている。

「それもそうですな。失礼致しました。では、邪魔者はすぐ引くとしましょう。——
九十九様」

初めて聞いたであろう筈の、和名を何の違和感も感じられずに発音した男へと顔を向けた。

「またの折に、是非」

片手を胸に当てて、一礼。個人的な少女マンガの代表格、ベル薔薇にそんな描写があつたような。それを連想する——西洋貴族のような挨拶に、『はい』と一言返すのがやつと。そのまま男は踵を返し、入室した時と同じ様に、柔らかな笑みを口元に湛えたまま、退室していった。

張り詰めていた空気が弛緩して、女王と少女は深い息を吐く。疲れたように額の汗を拭う老女と、その場に腰砕けになる少女。

「……申し訳ありません。ツクモさん」

疲労の回復も間々ならぬ中こちらを氣遣う女性に、慌てて応える。

「あ、い、いえ。それは構わないのですが……あれは一体？」

探る様な口調に、ウイリクは少しの間、目を閉じた。釣られる様にリンの顔にも皺が寄る。互いに異なる洗面を作った後、先に口を開いたのはウイリクであつた。

「彼が商人である、というのは既にお聞きの通りです。後は……そうですね。そこに経歴一切不明。と付け加えておきましょう。交渉に長け、必要としている者に必要なモノを提示する。その手腕は私が知る中でも随一。これでも決して短くない年を生き長らえてきましたが、彼ほどの商人には出会った事がありません」

彼女の話を聞いていく内に、彼に見せた嫌悪感の意味が段々と理解出来るものになつていく。

——裕福とは言えないまでも、そこまで貧困に喘いでる訳ではなかったこの国に訪れた変化。その原因が彼であるのだと言う。商いの優れた彼は多くの物、金、人をこの地に呼び込み、建国以来、最も賑やかな時代をもたらしているのだと。

ならば何故、彼はあそこまで嫌われて——否。敵意すら向けられていたのか。

「——近い内に、この国は戦火に飲まれます」

苦渋の声で告げる内容に、思わず唖る。発覚から発生までは瞬きをする間であったにしろ、思い返せばその根回しは、ずっと以前から行われてきたらしい。

ああ、商人や豪商達が言つてた『何か起こる』って戦争だったのか。

となると、あらゆるモノが動く。物然り、食べ物然り、金然り。そして人の命など、それこそ簡単に消えてゆくのだろう。宛ら、二束三文にも満たぬ、木の葉の一枚のように。

「はあ……つまり……あれですか。彼はその……」

どんな単語が最も適切であったかと記憶を辿っていると。

「——死の商人。それ以外の言葉なんて思いつかないよ」

忌々しげに吐き捨てたりんに、それが言いたかつたのだと脳裏でポンと手を合わせた。

「万に届く程の武器に、それを扱う兵——奴隷達の調達。そして、それらを賄う食糧。このほぼ全てを彼が握っているのです。今ではこの国の誰もが彼との関わりを持ち、媚

び詣う日々を送っている事でしよう」

胃袋や財布の紐どころか、心の臓までしつかり握られてしまっている状況、と。洒落にならんね、それは。

「彼は何ら悪事に手を染めている訳ではない。それは重々に理解していつもりですが……やはり、この国を治めていた者としては暗い感情を抱かずには居られない。歳ばかりとつて、こういう事はとんと成長していかないのは、いつそ笑い話として民草に言いつてみようかと思つてしまいますよ……」

正攻法の結果だとはいえ、人の命が掛かつてるとなれば、確かに良い気分はしない流れだ。

「……君、『俺は関係ないから』なんて表情が透けて見るけどね。その考えは改めた方が
良い」

完全に他人事な気分で聞き手に回つていたのを、リンに突つ込まれた。

でも、別に間違ひじゃあ無いと思うんだ。俺完全に部外者だし。

「何でさ？ 俺、ちよつと前にここに来たばかりだぞ？ どう考えても……まさか、ここに
に忍び込んだからか？」

今更お咎めが下されるといふのか。談笑しながらサラツと刑罰について考えを巡らせていたとは……いやはや、その辺はきつちりしているお方だと、むしろ感嘆すべきと

ころかもしれない。

「いいや。……彼に目を付けられた。これだけで理解してくれると説明の手間が省けるんだけどね」

「……ごめん、さっぱり分かんない。」

「……そこそ何でさ。俺、あの人に何もしてないし、ちよつと会話しただけじゃん？」

その「ジャンドールの鞍袋」も含めて、まだ何の力も見せてないぞ？ あの人から見れば俺ってただの一般人じゃないか？ 何で目をつけられるのよ」

「この部屋に誰にも気づかれずにやって来ているというだけで、普通じゃないのは確定してしまっているさ。そして、君が僕の友人だと彼は知った。……妖怪の僕の友人。そして、さっきの態度の通り、そんな僕はアイツが、憎い。そしてそして、結果的にはあるが、アイツに君の到来を告げずに居た事。——君ならそこに、どんな背景を思い浮かべる？」

「……ああ、なるほど。暗殺者とか復讐者とか、今の俺って、その手の類に見られてるのね。」

「よし逃げるか」

本来の目的も果たした事だし、今更ここに留まる理由も無い。

「……って、止めないのか？」

席を立ち、天体観測したら楽しそうな時間帯になつてゐる外——窓へと体を進ませ
て。窓から逃亡を計る泥棒のような格好であるというのに、そこに呼び掛けの声は無
い。

てつきり、『待つて』系のお言葉で呼び止められるもんだと思つたんだが。

「止める理由がありませんから。娘の為に来てくれた、初めての友人です。元気で……
無事で居て欲しいと思うのは当然ではありませんか。……ただ、願わくば……」

ウイリク様が席を立つ。俺が去る事に安堵していたリンの肩に、そつと手を掛けて。
「この国で宝物庫に並ぶ警備を誇るこの場所に、意図も容易く入り込めるあなたならば
問題は無いでしょう。不法侵入の罪はこれで無し、という事で」

若干の悪戯心を覗かせたかと思えば、それは一風で消え去り、残つたものは……真に
願う心のみ。安心とも、悲しみとも、後悔とも取れる表情を浮かべながら。

「今まで何一つ、母親らしい事はしてあげられなかつたけれど……。——この子を
……私の娘を。宜しくお願い致します」

砂漠という地帯は、昼間とは打って変わって、夜には極寒に近い気温となる。保温出来るものが一切無い地上では、太陽が消えてしまえば、熱を奪われるのはあつという間。真夏から真冬へと姿を変えた闇夜の小高い丘には、星に照らされ、大小二つの影が並び立っている。風は無いが、吐く息は、後少し気温が下がったのであれば、白い靄となりそうなほど。大の影は白い外套を、小の影は灰色の絹を用いて造られた外套を、隙間なく着込んでいた。

「数十年前の話で……。死産、だったそうだよ。大きな戦に巻き込まれてもうこの世には居ないが……。お母様の夫がリンと、そう名付けた……。名付けようとした、らしい」

所々に火が灯る町並みを眼下に納め、ネズミの少女はその瞳をガラスのようにしながら、ポツポツと語り出す。

「僕を一目見た時、何故か死んだ娘だと思っただけだそう。そうして、人間達から串刺しになりそうだった僕は命を救われて、お母様……。彼女に懐いたという訳さ」

自虐的に笑みを浮かべている。彼女の全ての幸福が、その手から零れ落ちてしまったかと錯覚させる程に。

「……今なら、簡単に戻れるぞ」

その場の空気……。主にウィリク様の纏う気迫に当てられて、思考を挟む余地もなく、

こうしてリンと共に町を離脱した。苦渋の表情を浮かべながらこちらに身を委ねて来た少女を小脇に抱えて、城の窓から、未だ効力の残っている「ジャンプ」の力を借り、暗闇に紛れて跳躍。「不可視」による偽装に頼らずとも、天体観測が趣味でも無い限りは、わざわざ夜空を見上げようとする者はいない。入って来た時と同様に、誰に見つかるでもなく、何の苦も無く城外へと離脱する事が出来た。

リンに触れた瞬間、何か電気のような感覚が背筋を走つたが……。不思議そうにこちらを見つめる彼女であつたので、特別何かをした訳ではなさそうだった。

体にこれといった変化もなかつたので、気にせず跳躍を続ける。時間にしてみれば然して掛かつていなかっただろうが、「ジャンプ」の尋常でない脚力は、いとも簡単に郊外を一目で納められるだけの距離を稼いでくれた。

「……もう、決めた事だ。お母様からは直接聞いた事は無かつたけれど、城中の雰囲気でも理解出来たよ。戦争が起こると分かつてからは、いつかはこうなるだろうとは……ね」
「……そう、か。……勝てそう、な訳はないか。じゃなかつたら、あんな提案はしなかつただろうし……」

「相手は、一兵一兵が一騎当千。兵力が少ないとはいえ、四方の人間達を砂漠へと追いやつて、国土豊かな草原地帯に陣取るほどの力を持っている。丁度、君と僕が出会つた所さ。対してこちらは数万が精々の軍隊。精強ではあるが、相手と比べると……。そ

んな二者を比較して、君はこの戦いに勝ち目があると思うかい？」

「俺、そんな場所で一晚寝たのか……。それだけ聞くと無理そうだが、つてのは分かった。……何で戦争起こりそうになつてゐるのよ。侵略されてるとか？」

脳裏に、諏訪であつた頃の記憶が蘇る。

「人間、力を持てば使いたくなる。それが今回は、多数の奴隷であり、整つた武具だつた。というだけの話さ」

……される側じゃなくて、する側ですか。

「……幾らなんでも盲目過ぎねえ？ 人間の国を四方に追いやつて尚健在でいられる国相手にちよつかい掛けるなんて。何、何処かの国で同盟でも結んでるの？ 億に届きそうな、マケドニアの王も真つ青な大軍団になつてるとか？」

「マケドニア……。西方の大国……。イスカンドル王、だつたね。でも、あれは億の半分にも届かない軍勢だつたそうじゃないか。まあ、人間がそれだけ居れば、神々の住まう土地ですら滅ぼしそうな気はするけど」

わあお、リンさん博識。イスカさんの話題が通じるとか……。マジで今がいつなのか分からんです。

そも俺は、あの人が何年に活躍していたのかすら知らないと来たもんだ。学校での勉強なんて、必要とした時には大概忘れてゐるもんじゃないだろうか。と、見ず知らずの

脳内大衆へと同意を求めつつ。

(もつと社会の……世界史やら日本史、真面目に取り組んでおくんだったわ……)

とりあえず、一頻りに後悔の念を思い浮かべていると、リンが事の発端とも言えるべき出来事を話し出す。

「……何でも、火と土の神の力を使った武器があるんだそうだよ。その力は岩をも砕き、雷に勝るとも劣らない音を出すんだそうだよ」

そういえば、時折、城の外でけたたましい破裂音を耳にしていたと彼女は言う。

その武器——兵器には、心当たりがある。具体的にそれ、とは特定出来ないのだが、十中八九、火薬を使った代物なのだろう。

(銃や爆弾の登場な時代なのかねえ。確かにあれなら、どんな敵が来てもバッチコイな感覚になりそうだなあ)

だとするのなら、火薬等の備蓄のストックさえ充分であれば、無血勝利すらも可能なのでは……

(……って、ちよつと待て)

爆弾は兎も角として、銃の登場は十世紀前後ではなかったか。そして、《諏訪大戦》が勃発したのは大雑把に記憶している限りでは、西暦三百から六百年の間。爆弾であれば深く追求するものではないが、仮に、銃であったとすれば……。

その疑問を本格的に思索する前に、ネズミの妖怪は町に背を向けて、何処とも知れない闇へと足を踏み出した。

「お、おい」

「さて、それじゃあ行くとしよう。妖怪だとはいえ、流石にここは僕でも寒い。何処か暖かい場所を——」

気軽に……少なくとも表面上は言い切る彼女であつたが。

——何も言わず、右手で彼女の肩を後ろから掴む。もはや言葉で止まるとは思えない。故に、思わず手が出してしまった。

ぼん、と。軽い音がする程度のものであつたが、決して放す気は無いと。幼い体に、五指が肉に食い込むぐらいに、強く。大人の、男の力で握るのだ。それこそ、『痛い』『止めてくれ』といった反応が、行動なり言葉なりで、すぐ返つて来ても良い筈であるというのに。

リンはこちらに背を向けて、無言のまま。振り向く気配は無い。それはあたかも、二度とこの地に踏み込む事は無い、と告げているようであつた。

町の中で見かけた時の、軽蔑の視線が彩る道を歩くリンの姿が思い浮かぶ。虫唾が走る街道を、表情を変える事無く、何食わぬ顔で。

——心で涙を流しながら。

……これは、妄想が過ぎるだろうか。

別に、彼女から直接そう聞いた訳でも、「テレパシー」を用いて心中を察した訳でもない。確たる根拠は全く無い、ただの俺の独り善がりである可能性だつてあるのだ。月でやらかした手前、能力——こと戦力に繋がるカードの使用には、過敏になっている節がある。

だが。

(……だからって、何もせずにいるなんて事、出来るわきやねえだろが)

これでも月の軍神様やらその姉に、お人好し、と評価された身。

例外的多い……というよりは、特定の対象でしか条件を満たさないお人好しではあるが、幸か不幸か、目の前の少女にこの条件は合致している。

例えれそれが、俺の思い違い——この少女が、あの星蓮船の事件において、ネズミの賢将と呼ばれる妖怪ネズミ、ナズーリンでないとしても。

「……戻るぞ」

振り向かない。

「城の中も少し見たが、夜になるつてのに、みんなバタバタ忙しく動き回つてた。……戦、近いんだろ？ だつたら少しでも——」

意思疎通が大いに不足していたのだと、俺はここで思い知る事になる。こちらの意図

は、彼女の力になる為に、何がどうなっているのかを逸早く把握して、何の力を使えばいいのかを検討する時間を作り出す目的であった。

けれど、そんな事情を少女が知る筈が無い。

彼女の前で見せた力は、食べ物を出したり、跳躍したりするものだけ。そんな男をどうしたら、どうすれば戦争という名の妖怪の如き問題の解決に結び付けられるだろうか。

だからこれは……俺の台詞は、”お前にはまだ出来る事がある筈だ”という、ただ単に相手の逆鱗に触れただけの言葉になってしまつて――。

「――君に何が分かる!!」

勢いよく振り向いた彼女の瞳には、今にも零れんばかりの涙が溢れている。

振り返り様に、こちらの胸に腕を振り降ろす。

……しかし、それに殆ど重さを感じない。

何が妖怪だ。何が悪魔だ。これでは、ともすれば一般的な少女よりもひ弱なのではないか。

何度も何度も。ぽすぽすと軽い音しか発せられない、こちらの胸板に振り下ろされる拳。それは俺を通して、己自身に向けて感情を爆発させている様を思わせる。

何にしても……そこには、弱々しいだけの印象しか感じられなくて。

「僕は妖怪だ。ネズミだから数が多いいとはいえ、一匹一匹は大した力も無い。例えその数が数万になろうとも、今回の相手には分が悪い。それでも何かある筈だと。そう思つて、今の今まで……さつきまで……手を尽くして来た……」

後悔全てを吐き出しているかのように、一語一語に苦渋が混じる。

「……でも、何も無かつたんだ。この国の連中はお母様の悩みなど有つて無いかのごとく振舞つて、戦争を取り止めるのなんて論外で。他国との協調も、利益が、取り分が下がるからと切り捨てた。自分の力がダメならと、僕個人でも協力してくれる誰かを探す試みはしたさ。お飾りだとはいえ、これでも女王の娘……だったから……。でも……ほら……」

言葉に詰まり、小さく俯く。その先は言わなくても分かる。色々理由はあるだろうが、その中の一つならば容易に想像出来る。きつと……いや間違ひなく、彼女はこの国の人達が向ける視線と同等か、それ以上の悪辣な目を向けられていたのだろう。

——妖怪だから。ネズミだから。

その一言で、彼女の意思は悉く切つて捨てられて来た。

それに合わせて、何度も胸を叩いていた拳も止んだ。胸板を叩いた姿勢で動きも止まり、リンの頭がこちらの腹部にもたれ掛かり、縋るような姿勢になる。

「後はもう、お母様を連れて何処か知らない地へと逃げるか、今しているように、お母様

の意思に従うしか思いつかなかつた……。前者はダメだ。あの人はとても責任感が強い……。優しい人だから。あの腐りきつた国であつても、最後の最後まで自身の役割を果たすおつもりだ。……。情けないだろう？　どんなにがんばつても……。人間の真似事は愚か、木つ端妖怪の域すら出れなかつたよ」

涙を湛えた顔を崩して……。とうとう流れ出た雫は留まるところを知らず。けれどそのの主は拭いもせずに、声を押して殺して自分の無力さを嘆く。

「もう、どうしようもない……。後出来る事と言えば、お母様の意思を汲んで、この地を離れる事くらいしか、今の僕には出来なかつたんだ……」

ここで俺は、漸く彼女の慟哭の全てを理解した。母を連れ去る事も出来ず、自分の命を対価にする事も叶わず、それでも導き出した——それしか残っていないなかつた唯一の選択肢が、これであるのだと。

途端、先程の流れと、自身が発した台詞も思い出す。一瞬にして頭に血が上り、奥歯が砕けんばかりに異音を奏で、口の中に薄く、血の味が広がる。

(この……クソ馬鹿野郎が!!)

自身に向ける、憤慨の言葉。我ながら、反吐が出る台詞であつた。あの仲睦まじい光景を見た後で先の言葉を吐いてしまった自分を、ぶん殴りたくなるくらいに感心してしまふ。その程度の事、彼女がしなかつた筈が無い。

考えたのだ。

考えに考えて、行動に移して、死に物狂いになって。

考えて答えが出ないから、足が棒になるまで歩き続けて、何か解決策が無いものかと模索していたのだろう。……でなければ、敵国の領土だという危険な草原地帯で、俺と出会う筈が無い。

少女は力無く笑う。全てが無駄であつたと。自分の無力さを嘆くように。しかし。

笑いであつた筈なのに、声に出てくるそれは鳴き声や嗚咽と呼ばれる類。笑おうとして、声が詰まって、それでも何とか声を出そうとして。

「……助けて」

掠れた声で、消え入るように。

「助けてよ……ツクモ……」

ただ一人を除き、他人など悪でしかないと学んだ……学んでしまったというのに、それでも言わずにはいられない、彼女の願い。

馬鹿な事を言った。無神経にも程がある。すぐにでも謝らなければならないというのに、口を突いて出た言葉は。

「——任しとけ」

謝罪も、後悔も、全てを後回しにして出た台詞。短く、たった一言呟いただけだとい
うのに、胸に縋る少女はとうとう大粒の涙を零す。

きつく、きつく。心を締め付ける慟哭。喉が張り裂けそうな程の声には、これまでの
全ての苦悩が吐き出されているようであった。

「……………落ち着いたか？」

「……………う、うん……………。その……………あの……………」

一頻り喉を酷使し、泣き腫らした目を拭いながら、リンは言い淀む。唯でさえ赤い眼
が、今では徹夜二日目に突入したかのような晴れ具合だ。

今までの自分の……………感情に任せて気持ち爆発させてしまった事を思い返して、色々
な念に囚われているようであった。

「ちよつと順序が入れ替わって心苦しいんだが……………」

一歩下がって、彼女との間に、体一つ分を入れられる空間を作る。

「……無神経な事言った。本当に……ごめん」

空いた隙間に、頭を滑り込ませる。姿勢を正し、直角に体を折り曲げた。

「い、いや。こつちこそ感情を高ぶらせてしまつてすまなかつた。自分の不甲斐無さを棚に上げて、誰かに当り散らすなんて……」

ここでリンは目を見開いた。苦虫を噛み潰した表情を一瞬浮かべて。

「……ツクモ」

「ん？」

「君が謝罪をする必要なんて無い。むしろ、逆だよ。まだ僕は君に対して一言も謝っていないんだから」

言つて、頭を下げる。

「袋を盗つてしまつて、御免なさい。僕に出来ることなら何でもさせてほしい」

ああ、そういえば。

一連の怒涛の展開に、その辺りの事は忘却の彼方であつた。このところ謝つてばかりであつたので、逆の事をされるとどうにも違和感が。

……そこに漬け込んで弄ろうとしていた手前、謝罪を受ける受けないというよりも、心苦しきの方が先に立つ。

「……もう良いさ。これを教訓に、次からがんばつてくれ」

「良い、の、かい？」

「良いか悪いかで言うなら悪い事なんだろうが、俺はもう気にしてないから。……俺だつて、今もそうだが、ついこの前に色々やらかしたからな。失敗したんなら、次に活かしましょうつて事で」

秘儀、本音と建前発動……つてのもあるのだが。流石にあれだけ色々と仕出かした直後で、自分の行動を棚に上げてのあれやこれには思うところがある。いずれはそれも気にならなくなるだろうけど、それにしたつて時間が必要だ。ブーメラン発言はほどほどにしておかねば、羞恥の念で悶死してしまうかもしれない。

「分かった。もう、こんな真似はしないよ」

「あいよ。……ん、じゃあこの話はこれでお終いにしよう」

しばらくの間。情けないような、恥ずかしいような表情を、双方の顔に貼り付ける。

「……じゃあ、早速であれなんだが、お前の仲間達。出来るだけ集めてほしいんだ。可能性——達成条件が何であれ、使える手は多いに越した事は無いからさ」

「それは構わないけど……さつきも言った様に、人間相手ならいざ知らず、今、あの国が挑もうとしている相手には、雑多な力など無意味なんだよ？　それでも、必要なのかい？」

確かめるような口調と共に掘り起こされた過去の話であつた筈なのだが、俺はここ

で、一つ聞かされていない事実を発見した。

「……人間相手ならいざ知らず」って……。なあリンさんや。……相手、人間じゃねえの？」

聞いてないよ、と顔で物言うこちらに。

「……あれ、言つてなかつた……。っけ？」

コクコクと頷く俺。それに対して、彼女は一筋の汗を流す事で応えた。

「……安易な気持ちであれを口にしたつもりは無いんだが、流石に相手の事を知らな過ぎだな。……リンの知っている限りの事、教えてくれてよ」

それを口にした途端、リンの表情がみるみる曇つてゆく。何かを言いかけ、口を閉ざす。数度それを繰り返す様は、必死に何かの事実を誤魔化そうとしているような印象を受けた。幾つかの理由が思い当たるが、最も確であろう答えを予測して、発言の枷を外すであろう言葉を補足する。

「例え相手が神だろうが悪魔だろうが、今更、相手の強弱程度で言葉を違える気は、無い」
人道的にどうかかな、と思うものでなければ。とは心の中で呟いておく。

この辺りの詳細はリンの口から直接聞きたい事であるので、あえて言葉にせず、思うだけに留める。

「——平天大聖。それが相手の名だ」

重々しく告げられた名前。決心を言葉に代えて吐露する様子に、こちらの予測である、強い相手だから言うのを躊躇っていた、という可能性は、どうやらの得ていたようだと安心しつつ。

「……知らん」

そう一言返すのが精一杯であった。

「えっ!？」

心の底からの驚きに比例して、こちらの羞恥心が熱を持ち、頬を薄く染める。それを誤魔化すように、気にした風もなく、相手の情報を尋ねた。

「……どんな相手なんだ、そいつは」

「知らない……いから、そう言ったんだったね。……ああ、そうか。君は東方からやって来たんだったか……」

あれの名が届いていない場所があるなんて。とか、もそもそと口に出しているんだが、そんなに有名な相手なんだろうか。インド（予想）の神なら兎も角、それ以外の人外なんて、全くと言っていいほどに知識に無い。

眉をひそめ、その小さな唇に、同じく小さな握り拳を当てて、リンは思案を開始する。ものの数秒程度で考えを纏め上げたようで、ゆつくりと、俺にも簡単に理解出来るような言葉を選びながら、その相手の情報を語り出す。

「妖怪達を纏め上げ、雑多な神など鎧袖一触。その配下は数こそそうは多くないものの、いずれも名のある妖怪達だ。それ一体で、人間達の百人、二百人なんて優に勝り、文字通りの一騎当千の力を持つ。……そんな相手さ。君が立ち向かおうとしているのは」

「……凄いやつ。つてのは理解出来たが、具体的には何にも分からんな……。つてかさいつ、妖怪なのか？ 平天大聖つて大層な名前なんだから、神様の仲間っぽい気がするんだけど」

「天にも等しい、という意味で自ら名乗っているだけだとは思うんだが……。詳細は分からない。そして、それに見合うだけの力を持っている。その力は山を崩し、天を引き裂くとか、なんとか。元々天に住んでいたから。なんて話も聞くけどね」

うぐう。ピンと来るものが一切無いと来た。過去、天の国在住だったお方……。天の世界から弾かれた……。墮天使系だろうか。西洋ならルシファーとかそれ系統のを思いつけるのだが、こっちのものは欠片すら思い浮かべる事が出来ない。

「えらい曖昧な情報ですね……」

「取り巻きの妖怪達が強過ぎて、誰もあれの元に辿り着けていないんだ。もう百年以上は、姿さえ見た者すら居ないよ。……。これでも、他の誰よりも情報は持っている方なんだけど、流石にあそこへは行けないかな」

目と耳は多いんだ。そう言つて、リンは自慢げに微笑む。

初めて出会った時に見せた表情。自分の種族を貶されながら、それでも芯は折れず、誇りとしている彼女に一種の敬意に近い感情を抱いた。

少ないながらも信用出来る情報の数々を耳にして、俺は必死で力の組み合わせや「シナジー」を選択し、選別する。

敵は、最低でも数千。そしていずれも一騎当千。更に親玉は、雑多な神すら退けるだけの力を持つ、妖怪の総元締め。まるで鬼のような……もしくはそれ以上の存在だと思つた。流石に一度にこれら全てを相手にする訳ではないだろうが、最悪の可能性として、考慮しておくに越した事は無い。

「えーつと……ウイリク様とお前の安全確保。それが最低条件つて考えで良いのかな？」

「条件はあるけど、お母様の安否だけが最低条件だと思つてもらつて構わないよ」

「……それは、あれか。自分の命すらどうなつても良い、と」

「勿論、無駄に命を散らす気なんて無い。今までは、自分の命を何千、何万と対価として支払つても覆えらない結果だったから、最適だと判断した道を選んでいただけさ。……もし、この命を以つて、あの人が無事なら、過ぎる日が来ると言うのなら、喜んでこの身を差し出すよ。ただ、仮に僕が死んでしまつたら、何一つ痕跡を残さずにして欲しい。

一応は、骸を仲間達に食べて貰うようには言っておくけれど」

「…………ん。責任重大だな、俺」

「そうとも。…………ああそうだ。お母様の為に、出来れば国…………国民も、と、付け加えさせて貰えるかな。…………僕個人としては、正直に言つて、いつそ滅んで欲しいくらいだけど」
「…………お前からしてみれば、そうだろうなあ」

俺だって、リンの立場ならば、逆に敵国に加担してしまっただろう。まあその条件は、状況次第ということだ。

「うっし。んじゃ早速、行動に移すか」

本日の使用カードは【ジャンプ】1マナ、【不可視】2マナの、合計3マナ使用。

後少して昨晚使用した【テレパシー】1マナ分のコストは回収出来そうだが、現状では、まだ叶わない。

【ジャンドールの鞍袋】は既に消しているの、現在、維持に気をつけなければならないカードは【今田家の猟犬、勇丸】の1マナのみ。

【土地】系は勿論、【マリット・レイジ】と【カルドラチャンピオン】は【トークン】である為、ノーカンと換算しても差し支えない。

よつて、使えるマナは5。維持中のコストは1。使用可能枚数は8。

最大限とはいかないが、これからの行動を考えれば、過去の状況と比べてもかなり自由の利く方であろう。

「もう、かい？」

「さつきも言ったとおり、時間、無いんだろ？ 考える時間は多い方が良い。時間は有効に使いましよう、つて事で。間違いに気づく時間は、あるだけあった方が助かる訳ですよ。俺としては」

すたすたと、月からの出現位置であつた草原地帯へと足を進める。

「お、おい！」

後ろから聞こえる呼び掛けには答える事はせず。

目の前に誰も居ないのを確認して、早速、行動を開始する。

「——召喚、【稲妻のドラゴン】」

『稲妻のドラゴン』

4 マナの、赤の【ドラゴン】クリーチャー。4 / 4

【飛行】と【パンプアップ】能力を有するが、次のターンに、もう一度、記載されている

コスト（大概是召喚コストと同等）を支払わなければならないデメリットの一種、「エコー」を持つ。

この「エコー」能力は「ハルクフラッシュ」にて使用した「天使」クリーチャー、「霊体の先達」にも付与されている。

二度コストを支払う、というデメリットを付与させる事によって、基本は、比較的速いターンに高性能のカードを使用する為の能力である。

4 マナという、「ドラゴン」タイプにしては手の出し易いコストの恩恵で、比較的召喚が安易であり、相手に「飛行」持ちが居なければ、かなりの脅威になる。

『ドラゴン』

クリーチャータイプ的一种。

炎と混沌、純粋な暴力を象徴する赤に多く見られ、コストが高いカードが目立つ。赤の「フライヤー（飛行）持ちのクリーチャーの俗称」の代表格。

必ずと言っていいほどに付属している「飛行」は勿論、初期の「ドラゴン」タイプには取り分け多く付属している、1 マナを支払う事で+1/0の修正を得られる「ポンプアップ」能力——通称「炎のプレス（前記の能力を付与させる「エンチャント」カード名より）、あるいは「火吹き」と呼ばれる非名称能力を有しており、赤のデッキにおいて、最後のトドメ的な存在として位置している場合が多い。

夜空に鳴り響く雷鳴。稲妻の輝きを伴って現れたそれは、光の四散と同時に形を成した。

真紅の表皮。刺々しい翼。くすんだエメラルドグリーンをした、左右二対、計四つの複眼。岩にすら、腐った果実を扱うかの如く楽に突き刺さりそうな爪と、捉えた獲物を決して逃がさない、前方にやや突出して生え揃っている、鋭利な牙。尾も含め、全長二十メートルを超える、紅色の暴力の権化。放電現象によつて闇夜に浮かび上がる赤い容姿は、東洋の龍ではなく、西洋の竜のそれ、そのままであつた。

心臓を鷲掴みにされた錯覚に陥りながら、リンは啞然と……腰を抜かす事すら叶わずに、それを見続ける。

逃げなければ。しかし、足に力が入らない。砂の大地に四肢を根付かせて、低い唸り声を……喉を鳴らしながら、出現時とは一転。静かに、自らよりも格段に小さな存在で

ある、自分達を見下ろしている。捕食者であった猫等を前にした時よりも、多くの人間達から目の敵として剣や槍、鋤を向けられた時とも違う。

ああ、自分は喰われるのだ。

悟りにも近い心境で、ネズミの少女は立ち尽くしていた。

「リン」

名を呼ばれ、やっと体に力が戻る。

しかしそれでも、とてもではないが、あの死の具現化から逃れられるとは思えない。

ただ、僅かな可能性。目の前の男の存在だけが、自らの命を繋ぐ術なのだ。名も知らぬ東方の地の大妖怪だと思われる、「稲妻のドラゴン」と呼ばれたそれを召喚した男を、絶るような目で見つめた。

何なのだ、彼は。

あらゆる場所に忍び込む自分達種族ですら困難な、あの国の王室にも全く……それこそ朝食前の散策に出掛けるような気軽さで訪れたかと思えば、この国では最も多くの食べ物を口にしてきたと自負する自分が微塵も知らない、天の国の如き甘味を無限に振舞って。空を突き抜けてしまうのではないかと思ってしまう程に高く、遠くへの跳躍を果たし。そして、この目の前の存在を、息をするように容易く出現させた。

呼び寄せたのか、生み出したのかは分からないが、彼があの大妖怪を従えていることだけは理解出来る。でなければ、突如としてこのような存在がこんな場所に出現する訳も無く、仮にそうだとしても、今頃仲良くあれの腹に収まっているか、ただの肉塊に成り果てている筈なのだ。

男が振り向く。さも当たり前のように、強大な存在を呼び寄せた事など微塵も感じさせず。道端を歩き、挨拶を行う動作に似て。実に気軽に、簡単に。ほんの少しだけ、その表情に疲労の色を乗せながら。あの魔法の食袋、「ジャンドールの鞍袋」と銘打ったそれを使用している時と、同様の疲労感を滲ませるだけに留まっているだけ。

彼は——いや、あの方は。その東の地を治めている、名のある神に違いない。

それならば、納得がいく。なんだって、たかだか小さな妖怪一匹の願望などの為に、戦という無数の命が散ってゆく地獄へ、自ら出て行こうとするのか。

人は願ひ、神は聞き入れる。自分達には適応外だと思っていた理が、まさに奇跡的な機を以って、目前に具現化したようだ。

なるほど。思い返してみれば、彼との口論には、いつの間にやら、彼を信じられるという前提の元で話を進めていた節がある。この「稲妻のドラゴン」と呼ばれた大妖怪を見た後ならまだしも、それを思い知る前であったというのだ。

きつと、タイミングも重なっていた事も理由の一つ。慎重に慎重を重ねて、母を救う

算段を進めていた段階ならば、何の根拠も確証も無い、やや特殊な魔法を操る男など、信じることは無かつただろう。

しかし彼の提案は、こちらが全てを諦めた直後の、まさに神の救いの手。絶妙の一言に尽きるタイミングで差し伸べられた、釈迦の蜘蛛の糸。そんな神がかつた瞬間を見極められる者など、神以外の誰が居よう。

(僕は……)

……但し、願いには代償が伴う。それが信仰であつたり、供物であつたりと、多岐に渡る場合もあるが、それでも。

(僕の命だけで、足りれば良いが……)

西洋の妖怪である悪魔という種族には、分の悪い取引の後に願いを叶える性質があると、風の噂で聞いたことがある。

それに比べれば、これは、最上の幸運。自身の命は兎も角として、最低限、母の安全は保障してれたのだから。

何処まで出来るのか分からないし、何処までやってくれるのかも分からない。相手はあの平天大聖。齊天を始めとした七天大聖の頂点に君臨する、妖怪の中の王。この願いを受け入れてくれているとしても、それが叶うかどうかは別問題だろう。

でも……それでも。自らに伸ばされた救いの手を払い除ける——縋らない、という

選択肢は、ある筈も無かった。間違いだつて構わない。どうせ元より、救いなど無かつたのだ。そこに希望の一つでも見出せたのであれば、今までの辛酸を舐める日々も、無駄ではなかつたと思えるから。

親しみを尊敬に。尊敬を畏怖に。畏怖を敬意に。そして——信仰に。

異質な神は、こちらに顔を向けて来た。

体はそのまま、横顔だけが覗く風に。口元には小さな笑み。不敵な眼には強者の証。

そして——。

(……………ん?)

時間の経過と共に、彼全体へと視野が広がる。上から始まり、徐々に下へと焦点が移って行き、

「……………あ」

全身から振り絞る様に零れた吐息の名は、落胆。見なければ良かったという思いに乗せて、叩き付ける様に。信じられない、受け入れられない現実を言葉にして。

男の下半身。正確には腰から下。

生まれたての小鹿には及ばぬものの、それでも、寒さに震える小動物の如く小刻みに膝を揺らす足が視界に入ってしまったのだった。

「怖いのかい!!」

敵かな態度を一転。男は抗議を以つて、彼女の言葉に応えた。

「うっさい！ 遠目ならいざ知らず、こんなかつちよ怖いお方が目の前に出られたらチビリそうだわ！ つてかもうヤバいわ！ トイレ何処!？」

信仰は一瞬にして雲散霧消と化した。残つたものは……出会つた頃よりも僅かに増した、親近感に似た、親しみくらしい。

「知らないよ！ 何なんだ、かつちよ怖いって！ 君が何とかしないと、生理現象の処理どころか、それこそ骨まで食べられてしまいそうじゃないか！ 命！ 命が掛かつてるんだからね！ こんな、開始以前の問題で躓くなんて嫌だよ僕！」

ぎやーぎやー喚く男に、ネズミの少女は正論をぶつける。それを、どう反応したら良いものか悩むように見下ろす巨大な赤影は、砂漠の夜空の下に、何か珍しいものを見つけた幼子の眼を以つて、ただ立ち尽くす。

「……でも、まあ」

感情を音量で表現するだけの時間が過ぎ、両者の熱が沈静化した頃、男は唐突に、静かな声で呟いた。子供の癩癩のように喚き散らしていた様子は、嘘のように成りを潜め、照れ臭いと。恥ずかしいのだと。そう、自身の駄目なところを全て受け入れたかのよ

うな態度に、リンは思わず言葉に詰まる。

「約束したんだ。空の上で」

男は夜空に浮かぶ満月へと顔を向ける。

「大切なもの、全てを守るって。突き放すでなく、拒絶するでなく、済まないと思う気持ちがあるんなら、そういう気概を見せろって」

決意を言葉に。言葉を現実には。その守りたい“大切なもの”に、いつの間にか自らも含まれているらしい。……頬が朱に染まり、胸が、苦しくなる。

「……そんなの、無理だよ。君が幾ら凄い神様であっても、万人を余す事無く救うなんて」

「だよな」

何の溜めもなく告げられた返答に、少女は目を白黒させる。無理だと分かっているのに、何故それをするのかと。

困り顔。そして、苦笑の後に出了た言葉が。

「それでも、目指す」

言い切る言葉には、何の根拠も無い——けれど、確たる自信に裏打ちされているよ
うな、矛盾した信念に見えて。

「それに、別に万人を守ろうなんて思っちゃいないさ。目で見える……手の届く範囲で

の話」

「……それこそ無理だよ。君の言う大切なものがどんな人達かは分からないが、それでも、その大事な一人から視野は更に広がって、その範囲はどんどん……それこそ無限に等しくなっていく。君の手の平に納まらないくらいまで、大きく、大きく。そして、掬った砂が指と指の間から零れる様に、どうしようもない現実を目の当たりにするんだ。……しかも、もし仮に全てを守れているとしよう。……でもね。いつかは裏切られる。増えすぎた大事なものによって。大事なものが傷つけ合って」

嫌になるほど正論な気がするが、こういう考えも、母親の行く末をどうにかしようとした結果の産物なのだろう。男はそう判断した。

怖気がする程に現実を直視しなければ、まだ幾年も過ごしていない少女が、こうも達観した思考になるだろうか。

悩みに悩み。考えに考えて。その末に到達してしまった答えが、それであるのだと。

「うむ、実に仰るとおりだと思えます」

「……だろう？ だから今の内からでも……」

だから、それ以上の悲観を許さぬ為、こうして行動に移したのだ。

「もしそうなら」

言葉を遮り、キメようと向けた顔は、キリリとしたものではなく。

「――過去も未来も、生も死も。全部蹴っ飛ばして、どうにかしてみるさ」

精一杯の恥ずかしさを誤魔化すように笑う、不器用な男の姿が、そこにはあった。

「え……？」

その告白に、少女の頭は真っ白になった。今、絶対のルールの内の、特に不可能な理を打破してみせる、とのたまった気がするのだが。

ぶつぶつと、『……ん？ 蹴っ飛ばしちゃう駄目か？』などと漏らす小声もリンの耳には入らない。

「よっしや行くか！」

けれどそれらの考えも、突如として浮き上がった体の影響で、一気に有耶無耶と化する。

「ちよっ」

ちよつと待ってくれ。

抗議の声は、しかし、羞恥心によつて恐怖を克服した男によつて止められる。恥ずか

しさを推進力へと変換した彼の小脇に抱えられたリンは、バタバタと四肢を動かすものの、どんどん近づくと赤竜の姿によって萎縮する流れとなる。

何のやり取りがあつたのか。以心伝心とばかりに、竜の首が地面へと触れて、こちらが徒歩で登れる階段へと変わった。

それを男は『靴脱ぐね。あ、このままで良い？ ありがとう』などと、傍から見れば一方通行の会話の後で、優しくドラゴンの上へと到達。刺々しい背中を見渡して、一番騎乗に最適そうな箇所へと移動する。こうなるだろうとは予想していたが、あまりの展開に、驚愕と恐怖によって声が出せず、思考も停止しかけている少女を他所に。

内臓が宙に浮く感覚がリンを襲う。同時、現れた時と同様に鳴り響く雷鳴を纏い、赤竜と大小の人影は一風の後に、星降る夜空へと飛び立って行つた。

七天大聖。それは、天と同格であると称する、七人の妖怪の総称である。

九十九には、名のある強力な妖怪程度の認識であり、事実、それは過ちではない。……その「名のある」程度の上限が、型破りに上へと続いている点を除いては。

それは、極東の地にて広まる以前の記号。將軍や元帥といった、位の記号の内の一つ。以来の性を——王としての通り名を知っていたのであれば、少女の意に応えて頷くにしても、もう少し言葉に詰まっていただろう。

……ゆくゆくの話ではあるが。

とある僧の一行と共に旅をする可能性を持つ、七天大聖の内が一人、齊天大聖。またの呼び名を、美猴王とも言う猿の妖怪を義兄弟に持つ、その妖怪こそ。白き牛の妖怪、平天大聖。

——別名、牛魔王と謳われる存在である。

46 アドバイザー

周りに広がる灼熱の世界が嘘のように、この土地には様々な生物が根付いている。

日中であれば、降り注ぐ太陽は木々に遮られて淡い光となつて生命を育み、それを縫うように流れる命の源たる小川は、気持ち悪いと思えてしまうほど無色透明。深度が幾ら増そうが、光の波長など存在しないとばかりに、いつまでも色など付着しないのではと思えてしまう。

濃過ぎもせず、閑散とも言い難い、適度な木々達の、あるいはその上には、同じく様々な生物——妖怪が、この春を謳歌していた。

——月と星が空を飾る刻限。

その春は一転し、真冬以外の何ものでも無い、死の森へと変貌を遂げる。

一本の枝が放られた。弧を画き暗闇の雑草の中へと消えていく枯れ枝は、純白。星の光によって照らされ浮かび上がる、斑の紅色に染めたそれ……何かの骨は、申し訳程度に桃色と赤色の粘度をへばりつかせてる。

その状態を見るに……喰われた直後の有様であろう。

人間か、動物か、妖怪か。それが何の生き物であったのかは既に暗黒の森の中へと溶け込んでしまった為、判断するには至らない。

のそのそと、それを成した大きな影は、ゆつくりとその場から離れていく。影の立ち去った周囲には、一体何を食したらこれを作り出せるのか。赤と白と星のコントラストが疎らに散りばめれた、死の美術館が残るのみ。

何かが襲われ、何かが奪われ、何かが殺され、何かが喰われる。原初の秩序が支配するこの土地こそ、七天大聖が続べる、弱き者は生きて戻れぬ場所——タツキリ山であった。

その、生き残る事こそ正義であるこの地において、適度に腹を満たした大きな影は、それなりに自由である存在だ。この場合の自由とは、我を押し通す力。つまりは、強い妖怪という事になる。

彼は満足だった。攫つて来た十人ばかりの人間は、どれもが若く、生きが良く、柔らかかった。

そして、それを狙つて、こちらの横合いから搔つ攫おうとした名も知らぬ大きめなヒトガタの妖怪も、既に彼の胃袋へと納まつている。満腹という、実に心地良い幸福感に満たされて。このまま一眠り出来れば文句は無いのだが、この地で無防備に横になれるだけの力は、そんな彼として有してはいない。それが出来るのは、それこそほんの一握り……七天天聖か、数人の大妖怪くらいのもだろう。

自分の巢に戻り、安全を確保した後、体を休める。とても幸せな気持ちで一杯であった彼の心は——ぼつり。一滴の水によって打ち消される事になった。

……先程までは、満天の星空であったのだが。

いつの間にか、既に曇天と化した空を見上げて、堪らないと不満気に鼻を鳴らす。

雨は好きだが、濡れるのは嫌いだ。巢へと戻る為、自身の手——巨大な翼を羽ばたかせた。瞬きの間に宙へと飛び出したその者——白い巨大怪鳥は、一粒足りとも濡れてなるものかと。その羽ばたきに力を込めた。

と。

続いて空が光り、次いで轟音が空を駆け巡る。この分では、下手をすれば、濡れるどころか、神の鳴き声に打たれかねない。これはいよいよ全力を出さねば間に合わぬかと、巢のある方角に目をやると……赤い何かが宙を舞っていた。

——気に入らぬ。

雷鳴渦巻く遠方の曇天より飛来する、一匹の……何か。龍のようにも見えるが、大きさは精々、自身と同程度。

なれば力も同等か。だとするのなら、それが巢に戻るだけの行いだとしても、何故、自分が逃げ隠れるように帰路を急がねばならぬのか。

ああ、やはり気に入らぬ。

もはや行動は決まった。誰に憚る風もなく、悠々と空を泳ぐ赤い何か。自らですら身の程を弁えての行動を意識しているというのに、あの無法者めが、と。

——その驕り、自らの命で償うがよい。

時折、この地に足を踏み入れる人や妖怪の愚か者共に理を示すのも、力のある者の勤めだろう。何、食後の甘味代わりと思えば、この不快感も薄れるというものだ。

翼の一打ちで百の人間を吹き飛ばし、このひと鳴きで、千の馬を方々へと散らす。嘴と鍵爪は岩をも砕き、鉄の檻をもへし曲げる。

そして、自らの巨大な体を自由自在に躍らせるこの羽があれば、七天大聖を除く、空を行く誰よりも速く翔られる自負があった。それは百に達する季節の一巡を過ごして来た中での、経験から来る事実であり、それを覆す存在など、今の今まで現れた事などなかった。

——そう、今の今までは——

赤。視界に飛び込んできた色は、それ。

次いで見るのは純白。何処かで見えた事のある光景だという感想は、ああ、これは大きく開かれた口なのだろう結論に——……待て。あの無法者は、自身と同程度の大きさではなかったか。

付け加えるのなら、自身で近づいていたとはいえ、こうも閃光の如く距離が縮まってる／——がぶり——／などととと——……

……——雷鳴が世界を埋めるよう走り出す空に、一つの赤が舞っている。

悠々と、堂々と、轟々と。火を噴く山から放たれた炎弾のように。灰色となった世界

を翔る、真紅の鳥蜥蜴。

空の支配者の風貌に、地を這う者も、空を飛ぶ者も、目を奪われ、心を縛られ。それが完全に視界から消え去るまで、呆然と、彼らはいつの間にか降り頻っていた雨に打たれ続けた。

ああ、自分達は助かったのだという漠然とした……けれど、確信に近い思いを馳せながら。

【稲妻のドラゴン】を呼び出し、騎乗して目的地へと向かう男に、格別、深い思慮があった訳ではない。

ネズミの妖怪の願いを短絡的に考慮した結果、

——軍隊止めれば良いんじゃない？ と。

とある国の女王が聞けば、『それが出来ないから頭を抱えているのです』と零す結論に達したからであった。

最も思考の工程が少ない答えは、人間の軍隊を動けなくする——消す事。つまるところ……命を奪う事。

しかし、幾ら強力な異能を持つが、神に準ずる信仰を得るかもしれない存在であるうが、彼は、基本、人間。国籍も人種も異なつていても、仮にも同族である命を奪うには忌避するところにある。

それに、軍人とは、奴隸、傭兵などの場合はあるが、大半がその国の民。リンから、軍の多数が奴隸であると耳にしてはいたものの、だとしても、奴隸という存在が進んでその地位に身を置いてるなど考えられようか。

反骨精神が心の底に潜む戦力を従えるには、せめて同数、屈服させる力が必要になるう。然るに、その屈服させる力——自国民は、奴隸と同数かそれ以上であり、もし先の案を実行しようものなら、少女の提示した条件からは大きく逸脱する事になってしまう。回避するに越した事は無い。

ならば無力化だ。……となつたのだが、一時だけならいざ知らず、戦を諦めてくるまで抑止させられるカードを、彼は知らなかった。

戦争を支持する人物全員をどうこうする。という選択肢も挙がつたけれど、それを達

成出来る力も思い至らず、先と同様、やはりこれも候補から外れてしまい。

——では、何故、彼は敵陣たる方面へと、わざわざ【稲妻のドラゴン】を呼び出してまで赴いているのか。諏訪や大和での経験の下、この見知らぬ土地で何処まで通用するかは不透明であったが、そう外れたものではないだろうと。

力を示せば認められる、完全実力社会の妖怪達の性質を善しとして、人間側でなく、妖怪側への働き掛けを考案。まずは交渉。次に贈与。最後は一発引つ叩いての、あるいは相手に無理矢理条件を飲ませる（傀儡化や洗脳等の）実力行使。との三段構えを取ったのであった。

細やかな行動を求めれば求めるほどに、マナも使用カードの種類も増加する傾向が強い為、単純な戦闘面の方が有利に物事を運び易いと踏んでの、この選択。……決して、力押しの方が楽そうだから。などという理由からではない。

そうして妖怪側への働き掛けの後にすることは、女王の確保。やや掻い摘んで述べると、専守防衛である。

人を襲い、人を喰らい、人を狩る者。それが喜びであり、生き様であり、彼らの存在意義。妖怪とは、それが本能として刻まれている。防衛どころか、戦争を吹っ掛けてきた相手ならば、嬉々としてこれを向かい討ち、相手の国へと乗り込み、血肉が山河を埋める地獄絵図を作り出す様が容易に想像出来る。力を持つ妖怪であれば、尚の事。弱者

に舐められたままで、心穏やかで居られる妖怪など、それは妖怪ではない、別の何かであらう。

最低……いや、最大でも、人の軍隊の壊滅のみに止め、国への報復は阻止しなければならぬ。なればこそ、その手綱を握らなければならない。

九十九自身が、平天大聖に何かをされた訳でも、される訳でもなく。例え相手が妖怪であつても、その琴線に触れていない現状では、妖怪側を全て殺める、という選択肢は無い故に。場合によっては「再生」や「プロテクション」などの、妖怪達の支援も辞さぬ覚悟で、最悪、カチ合つた両軍勢の間にドカンとどでかい呪文なぞ撃つての停戦も視野に入れつつ——例え一時凌ぎであつたとしても——ドカンとする時には人間の国から離れていた方が良いだろうという理由も相まつて、平天大聖の住まう魔界の境界線へと辿り着いた。

しかし、決して短くなかつた筈の移動時間は、九十九にとっては踏破不可能な道のりであつたようだ。

さあこれから。という段階になつても、とうとう、しつかりとした方針は打ち立てられず。終ぞ明確な答えの出ない自身に嫌気が差し……。

——自分だけで無理ならば、他人の知恵を借りましょう。

例え残りのマナを全て使つたとしても、それだけの価値はあるだろうと。そんな考え

から生まれた行動——召喚は、彼の拙い目標を助力するに足る者。

光が形となり、輝きが失われ、そこに現れたのは、一人の男。青竹色の漢服と帽子を被つた中背よりやや小柄。年の頃は三十後半であろうか。顔に浅く刻まれた皺と、短く整えられた髭が印象的な、その者こそは。

中国史でも上位を争う知名度を誇る、ゆくゆくは三国志と称される時代にて活躍する人物達——蜀の君主、劉備。呉の君主、孫権。そして魏の君主、曹操を支え、王佐の才を持つと渾名された筆頭参謀。旬 文若（じゅん ぶんじやく）その人であつた。

『魏ぎの参謀 旬じゅん或いく』

3 マナで、黒の【伝説】【アドバイザー】【人間】クリーチャー 2 / 2

クリーチャータイプでは比較的珍しい、助言を与える者、あるいは軍師としての意味合いを含む【アドバイザー】を持ち、自身を【タップ】する事で自軍のクリーチャー一体に、ターン終了時まで+2 / +0の修正を付与する能力を有する。

【稲妻のドラゴン】に使用した4マナによって、ストック分は後1となっていたのだが、それも時間の経過によって解決し、【ジャンプ】と【不可視】分のマナが復活。その分を全て費やす事で、これを成した。

これが史実か演戯かの違いで彼の能力や性格は差異が生まれるのだが、それでも、ジェイスと同様、俺など到底及ばない智謀の持ち主であるのは疑いようも無い。

名にし負う神々とは比べるべくもない人物なれど、霸王、曹操の忠臣であり、頭脳であつたと言っても過言ではないであろう人物。

両の手を、己の拳を包み込む様に構え、掲げ、頭を垂れ腰を折る格好をされ。それなりに覚悟して呼び出したというのだが、とてもじゃないがこんな人物に頭を下げられるほど偉くなつちやいないと、思わず一步下がってしまったくらいだった。

M T G 勢とは一線を引く。本来の意味でのクリーチャーなどとは、間違つても言えぬ者。ならば【プレインズウォーカー】かと問われれば、首を横に振らざるを得ない。そ

れはそうだ。通常のカードセットとは、MTGの舞台である多次元世界で起こった事件や災害を、あるいは「プレインズウォーカー」同士の対立や争い等を主題とし、そこから派生した様々な事柄がカードとして描かれるもの。それがMTGという作品であり、語るまでも無い事実である。

だが、「魏の参謀 旬戔」は違う。何故なら彼は、他のカードセットとは、全く理念を異にする特別な存在なのだから。

『【ポータル】【三国志】』

数あるカードセットの中でも、これは群を抜いて特異な存在……の内の一つ。他のもの——題材とされている「プレインズウォーカー」達が活躍する世界を基にしたものではなく、MTGのルールだけを引用して作られた、ある意味で、完全な別の作品。

その名が示す様に、中国の歴史、三国志を元に製作されており、実在の人名、地名、事件や出来事などの事象名を取り扱っている。「飛行」という能力が存在せず、この作品固

有の能力〔馬術（飛行とは似て非なる能力）〕が採用されており、MTGで唯一、地球上を舞台とした作品である。

『ポータル／Portal（カードセットのカテゴリ名）』

MTGの物語上にも同名のものが登場するが、これは、それとは別のものを指す。

完結に表記すると、「ポータル」はその英語名が示す通り、入り口、正門、表玄関、等の意味を持つもので「ポータル」というカードセットがある訳ではない（例・「ポータル」〔三国志〕。「ポータル」〔セカンドエイジ〕等）。初心者を対象としたカードセットに付随される言葉である。

難解な能力を保持するカードが極力省かれており、MTGの全体から見れば手を出し易く、遊び易い製品に仕上がっている。

彼は紛れもない地球に謂れのある御仁であり、その生涯を魏へと……いや、後漢王朝か？ ——に捧げた、言わば実在の人物。時代背景やら儒教やら曹孟卓やらの単語

が、彼を目の前にした事で脳裏を駆け巡り、しまったその辺りはどうなっているのかとテンパっていたのだが……。

一向に頭を挙げない句戔——文若さんによつて冷静さを取り戻し、ならばと余計な思慮を挟まず、自分の成したい内容を彼に伝える事にした。三国志……だけには限らなかつたと思うのだが、そつち方面の人名の呼び方には、色々な暗黙の了解があつた筈であつた。姓と名と字（あぎな）が云たら……だつたか。どうだつたか。確か、親しくない人が呼ぶ場合は、字か官職名を言うのが最低限の礼儀だつた……と思うのだけれど。恐る恐るも『文若……さん、で、宜しいでしょうか……？』と尋ねた時の、念話から伝わつて来る苦笑つぼい感情の色は何だつたのか。怖いので深くは突っ込めなかつた。とりあえずは、文若さんでOKのようです。

文若が現れた時の、リンの面食らつた表情は記憶に新しい。ドラゴンのみならず人間までも呼び出している事で、オフとなつていた驚きスイッチを、再びオンにでもしたんだらう。

【今田家の猟犬、勇丸】【稲妻のドラゴン】、そして【魏の参謀 句戔】の召喚によつて、合計8マナの維持となつた時の疲労の加速度は、元々目減りしていた体力に拍車を掛けて、静かに、確実に、こちらのスタミナゲージを消費していった。

【死の門の悪魔】や、月の裁判所でぶつ倒れた経験が脳裏を掠めるが、それと比べれば、今の8マナの維持は、決して難しいものではなかったけれど、そう樂觀視ばかりもしていられない。

悠長な感想を述べている時間は少なそうであった。例の如く疲労の度合いが無視出来ない問題になりつつあるので、出来る限りの確、かつ迅速に要点を句彙へと説明する。

まあ、それでも俺の説明不足は著しかったのだが、そこは彼がこちらに説明を求める事で補ってくれまして。

砂漠と森の狭間にて、辺りを見回しながら羽を休める赤竜と、それに騎乗し話し合う人間二人。そして、それを見続ける、小さな妖怪が一人。彼が持つ雰囲気にも当てられたのか。あるいは、方や無言（念話）な、まるで壁と対話しているような光景に疑問が尽きなかったせいか。俺と文若の遣り取りを、リンは固唾を呑むように見続けた。

……時間にして十分にも満たなかっただろう。けれど、それで充分でもあった。

王佐の才を持つ者は、しばしの瞑目。再び眼を見開いた時、それを達成した暁には、俺の目的をこれ以上無い形で実現し得る答えを出してくれた……のだが。

——矯正が多々入り、俺の拙い計画は、大きく修正される結果となったのが、少し

……凹みました。

もう限界だ、と、既に寝そべっている形であったので失礼千万な格好であったが、それでも何とか言葉くらいはと、短く感謝を述べて、文若を選した辺りだったか。そこで、俺がリンに一つの誤解を与えていたのだと理解する羽目になるのだが。

「……平天大聖に戦争を仕掛けに行くんじゃないやなかったのかい？」

「……何で？」

「……そこは何とか解決し、それぞれの目標——別行動を取る流れとなったのだ
た。」

森のほぼ中央。月と星の光が世界を浮かび上がらせる、魔の者達の祝福の時。とある
ネズミの妖怪が暮らす城とは打って変わり、そこには長大な石垣が生まれ、一つの山を、

それ自体が城であるかのように取り囲んでいた。山肌という山肌には岩が積まれ、緑と
いう色など無粋だとばかりに、文字通りの岩山城と化していた。

そして、この地においての城とは、建造物単体を指す言葉に在らず。主に城壁を意味
する度合いが強いが、まさにこの山丸々が、一つの城として成り立っている。ぼつりぼつ
りと赤が混ざる箇所は、全て瓦。数百から、場所によつては万にも及ぶ数の焼き土の集
合体。時に細やかに、時に大胆に敷かれている焼き粘土は、特に頂上に多く見られた。

未来という不確定な道の先の果て。中つ国という名称が付くかもしれない国にて建
造される、紫禁城と酷似する形。三十階建ての高層ビルを横倒しにしたような躯体の屋
根には、紅色の瓦が所狭しと詰まれ、上空を澄み渡る黒青にとても良く映えていた。

ただ残念な事に、その夜天も徐々に色合いを曇天のそれへと変化させ、晴天であつた
時の面影は、遠く彼方に見える星空だけ。打つて変わってしまった黒い天には疎らに閃
が走り、次の瞬間にでも、何かの弾みで空が泣き出しても何ら不思議ではない。そんな、
環境の変化を起こす一歩手前。このような天候、幾年この土地を支配し続けてきたその
者にとつても初めての出来事だつた。

そして、そんな梁山泊の如き宮殿に座して待つ者が、その変化に気づけぬ存在ではな
い。

「……」

手にした竹簡を脇に仕舞い、真紅の石柱が左右に立ち並ぶ先、成人男性の六倍の丈はあるであろう、唯一の出入り口へと目を這わせる。石の壁に覆われたここからでも分かる程に空気を震わす雷鳴は、しかし、空から聞こえるものではなく、その扉の先から鳴り響いていた。

稲妻。これは、雷祖かインドラ辺りが好んで使う力であつた筈だが。

けれど、そんな者達の気配など微塵も感じない。察せられるのは、全く記憶にない力の脈動。

はて。であれば、義兄弟である美猴王が殴打したと言つていた、冥界十王辺りの上位の神々が押し入ってきたのかとも思えるが、それにしても、数が少ない。奇襲の類も考えられる。だが、正攻法が好みである彼らであるので、その可能性も低そうだ。

思案するのが愉快で、つい、意識すらも雷鳴から外れかけた矢先、その荘厳な扉がゆっくりと開かれた。一人の妖怪が、その開かれた扉にもたれ掛かるように身を任せながら、何かの声——謝罪の言葉を発する。

「……………も、申し訳……………」

しかし、それは最後まででは叶わずに、とうとう力尽きて宮殿の床へとその身を横たえた。無意識ながら僅かに上下する胸を見るに、どうやらまだ、命はあるようだ。

その妖怪が開け放った扉の奥——玉座から見た側——広間は、沿岸に峙を持って

いたという妖怪から耳にした、地上最大の生物とされる鯨をも数体は並べられるだけの空間を有した、大よそ山頂に拵えるものではない規模の空間が造り出されている。

だが、その広大である筈の敷地が、今は実感出来るものではない。破壊されたのではない。消えているのではない。ただ単純に、そこに佇む者の大きさによつて、手狭に見えるだけの事。

我ら大聖以外にも、このような存在も居るものなのかと。西洋から届けられた文獻に、龍と派生を同じくする妖怪、竜という種族が、確かあのような形状であつたかと思ひ出す。

時折宙を走る閃光によつて照らし出される、剣山の如き真紅の鱗。夜の帳に灯る緑翠の瞳は、四対の複眼。

……不出来な赤蜥蜴だ。

宮殿の主は、人間の百や二百など物ともしない配下の妖怪達が畏怖したそれを、巨大な昆虫の延長線上の目線で観察する。

その内包されている力は疑うべくもない事実、との認識はある。恐らく、あれ一体で七大大聖の最下位に位置する駆神大聖に勝るかもしれないほどの力。

だが、彼が知り得る知識の中では、それくらいしか関連付けられるものが無かつただけであり……龍と似通っている所と言えば、顔くらいのもの。

……それに、あれを龍だと思ふには、悠々たる胴体も、自然の触覚である髭も、爪に握り込まれた宝玉も無い……まるで自国の歴史を嘲笑つたような風情の欠片もない貌など、認められよう筈もない。

王座から広間を一望出来るという事は、広間から王座を直視出来るという事。その者が肘掛に肘を乗せ、頬に手を当て興味深げに赤竜を見続けていると、それは、牛や虎でも数匹纏めてひと呑みにしてしまふ口を開け、甲高い、曇天を走る雷鳴の如き咆哮を上げた。

赤竜から迸る光。天を焼き、大地を焦がし。周囲に無残にも転がっている、名も分からぬ生き物達の、物言わぬ体を直撃した。いずれもこの王宮を守護する存在であつたその妖怪達は、例外無く全身から煙を上げて、天の怒り——その赤竜の洗礼を受け、再起不能となつている。

驚くべきは、その誰もが呼吸をしている事か。既に骸の手前と化した妖怪達は、悲しいかな、死体に鞭打つ。という言葉を、を余す事無く体験する。幾人かの残つていた意識ある者達は、それで完全に気を失う羽目になつた。それでもまだ命はあるというのだから、あの凶暴な外見を裏切る慈悲を持つ存在か。はたまた、生かさず殺さずを好みとする偏執家か。

魂の宿る墓地と化した石庭に君臨する赤の王は、玉座に君臨する白の王を一瞥。後者

は愉悅に口元を歪め——それはすぐに疑問の色へと取つて代わる流れとなつた。

赤の王が頭を下げる。軽く、どころの話ではない。文字通り地面に頭を擦り付けて、完全に石畳に伏したのだった。

怪訝に眉を顰める白の王は、ほう、と、その意図を理解する。

赤竜の頭上から、一人の人間が降りてきた。

上半身を覆う白。下半身は濃い藍。派手さこそ抑えられているものの、白牛である自身ですら羨むほどの、瑞々しい艶のある白外套を羽織つたその者は、頭部から始まり、眉間から鼻先へと竜が用意した道を伝い経て、この宮殿の広間へと足を着けた。

さて。あの正面を歩く人間は何者か。

妖怪の化け姿。神の使い。いや、あるいは神そのものか、崑崙（こんろん）辺りの仙人やもしれない。その表情からは何の思考も読み取る事が出来ず、ただ何かを耐える様な感情を貼り付けているのみ。

宛ら、自らの帰還の焼き直し。進む足取りは何の躊躇も恐れもなく、妖怪の総本山であるここを歩くのが当然の事のように、その歩みに淀みは無い。

「——楽しみですねぇ」

天を離れ、この地に座して、はや幾数年。それだけではないが、このような存在の到来を望んでの離別でもあった。

白の王は、ヒトガタの王を迎え入れる。それがどんな会合になろうとも、きつと愉快に違いない。そう、何の根拠も無い確信と共に。

我こそは至宝の玉たる存在だと主張する、今まで一度も見つた事のない頭髪をした者を見つめながら。

平時であれば、人の国の一つや二つを容易く崩す戦力が在中するこの宮殿は、九十九が呼び寄せた竜、「稲妻のドラゴン」によって無力化されている。

だというのに、数刻前から彼の胸に募る重み——行き場の無い不満は、その竜にこそ向けられているものだった。

移動手段に不満はない。空を飛び、地形どころか一切の悪天候を無視して飛行する赤の竜は、いつそ感動すら呼び起こすもの。

戦力においても、問題は皆無。幻想郷における妖怪の山の如き場所に、流石に4/4では不安が残るからと、とある緑のカードを使って「パンプアップ」を果たした「稲妻

のドラゴン」は、現在8/8となっている。

稲妻による攻撃は、まさに閃光となって敵対者を黙らせ、行動不能へと陥れる。実に頼もしい存在だと実感させられるものであった。

だから、問題はそれ以外。

移動手段でも、戦力でもなく、その力——稲妻によつてもたらされた攻撃の余波による影響。

「……いつ治るんだろうなあ、これ」

自分自身へと語り掛ける、慰みにも似た言葉。

ふっさふっさ。もっさもっさ。

手で触れてみると、形容し難い感触が伝わつて来る。これが自らの体の一部であるのだというのだから、何とも表現しづらい経験を積んでいる真つ最中だと思う。容量的には変化は無い筈なのだが、今までよりも一層、重量が増した気分である。

轟音に伴う閃光によつて、見事に感電した彼らの頭部。それに騎乗していた髪は、黒の球体となつて、油断すれば口から黒い煙をコホンと吐き出せそうな姿になっていたのだから。

アフロ。

黒の毬藻と化した頭髪を、涙するでなく、もう好きにしてくれとの投げ遣りな感想で

諦めた男は、妖怪の王が鎮座する玉座へと、その足を進めるのだった。

……いつの間にか元に戻っていた髪形については、当事者でさえも、最後まで触れる事はなかった。

そして、魔王と人間の対談が行われた。

明り取り用の灯火が付随する、朱色の石柱の林。真紅の絨毯が道を造る、その行き止まり。数十段の階段の最上の玉座に君臨する妖怪の王と、階段の最下にて、直立する形で対話をする流れとなった。

目の前にいるのは、こちらが身に付けた、白蛇の抜け殻を素材に造られたミシヤクジの外套すら霞んでしまうのではないかと思える純白のローブを身に着けた、細身の男。俺よりも頭一つ高い長身に、スラリとしながらも華奢には見えぬアンバランスさ。衣類と同様の銀よりの純白の髪は、いっそ雲か粉雪で形作られているのだと言われた方が、しつくりくるといふもの。

第一印象。厨二全開者の生み出した『ぼくのかんがえたさいきょうキャラ』そのままの容姿。超絶美形。そんな人物達を連想させる全体像である。肌の美白さであれば、東方キャラに勝っているのではないかと思えるほどである。

基調の色は、服から肌から髪の色まで、真っ白々助。ただし、瞳の色は、銀。これで

赤やら青やら、もしくは片目だけ金色の虹彩異色症——オッドアイであれば、思わず大きな拍手をしていた事だろう。

「……なるほど。つまり、仮に人間の軍隊がこちらの地に足を踏み入れたとしても、国への報復は行わず、防衛のみにして欲しい……。」と

「その通りです」

……ほんほん痛い。内臓の何処かがキリキリします。も少しすれば、擬音に濁点でも付きそうな程に。

分かつていた事だったのだが、やはりというか、やつぱりというか。恐ろしく無礼な話をしているな、という内容は、こうして相手の口から要約された話を聞く事で、ますます現実味を帯びてくる。

せめて言葉遣いだけでも。との虚しい努力も、序盤から崩壊が始まり、中盤では丁寧語と謙譲語が入り乱れ、後半に至つてはタメ語すら出てくる始末。最後の段階になつて『もういいや、用件だけ言い切ろう』と開き直れたのは、ある意味幸運だったのかもしれない。その会話を最後まで聞いてくれた相手の寛容さ、という点においても。

(うぐ、おつかねえ)

礼を失しているから、という不快感ではない——この、射殺さんと眼力を向けてくる、愉悦と隣り合わせの殺意をその瞳に宿していなければ。の話であつたが。

丁寧な喋り方、ピシリとした物腰、頬に手を当てるといった、ちよつとした艶のある仕草。どれもが穏やかでいて優雅な印象を抱かせるといふのに、その行為で帳消しです。場の空気とは裏腹に、やはり妖怪だなどと思える態度からか。僅かに安堵すら感じてしまうのは、何かの悟りを得た故なんでしょうか。どうなんでしょうか。

「——ただ、無償で。とは、難しいところ。こちらとしても何か益が無ければ、配下の者達に示しが付きません。そうなればこの山の秩序は崩壊し、無駄に周囲へと血肉の山河を作り上げる結末になりましょう」

言っている事は最もだし、事実、俺もその通りであると思う。

だが。

(何を白々しい)

事前にリンから聞き及んでいた情報では、この目の前の存在は、自分の欲望を、ありとあらゆる手段を用いて成し遂げ、現在の地位に納まった者なのだという。尤も、それは百年以上前の情報らしいので、現在の平天大聖は全く分からない。との締め言葉も頂いていたけれど、こうして面と向かって話し合う内に、そのピンボケした印象は輪郭を増してきている。

(文若の策の実現用に、一定量のマナは確保してなくちゃダメだから……マナ制限きつ
ついなあ)

出力が一つに、ストック分が二つ増えて、能力数値、二、三割増加という、実にウハウハな成果だった筈なのだが。細かなあれこれを行うと、一気に限度額に手が届く。こうしてみると、まだまだマナが足りないな。と思う事、頻りであった。

何せ、今の俺は対人無双を可能にし得るであろう【テレパシー】を使用出来ないでいる。ふとした弾み、気の緩みで失言取られそうで、逃げ出したい事この上ないけれど。『例え心を読めたとして、避けられぬ物事の方が多いでしょう』……ツスか。……たはは、耳が痛い)

耳から話を聞いていませんが。

マナ回復してから乗り込みたい。その条件ならば、【テレパシー】っていう便利な力がある。そうキツチリ伝えた筈なのが、【魏の参謀、句彘】から返ってきた言葉はそれであつた。

相手の思惑をリーディング出来たとしても、弁が立ったり、口が達者であつたり、駆け引き上手でもなければ、話し合いとは自分の思う方へと進まない場合が多く……。

……俺の自力を良く理解して下さった、なんとも痛烈な軍師様のお言葉でございました。よよよ……。

砂漠と森林の境界線。文若を呼び出した場所で【隠れ家】を使った一泊の後に事に及

ぶ予定であつたのだが、そこは魏の参謀の助言によつて、取り止めた。既に賽は投げられてゐる。つまりは、後手に回つてゐる状況であり、それはとても宜しくないとの事。そこを何とかして欲しいなく、と思つての「アドバイザー」だつたのだが、俺が出来る事を大雑把に説明し尽くした辺りで、『だつたら言う事聞きやがれ（要約）』とのご指示であつたので、疲労具合が顕著になつてきた体に鞭打つて、こうして敵陣へと乗り込んで来たのであつた。

戦争は生き物。事象は水物。人の心は魔物なり。今この一瞬は、万金に勝る価値がある、と。文若の話を要約し、それっぽい単語にしてみたのだが、話の内容を半分も理解出来なかつたから正解かどうかは分からない。……と、高校時代に国語が十段階評価で五という、感想を述べ難い成績であつた俺が愚痴つてみる。これつて三国志の名言が何かかしら。

第一は力（頭数や財力等）、次点で速きこそ、物事を有利に進めるには重要な要因だと。王佐の才を持つ者は語つた。

……それをどうにかするのが、力でも速きでもなく、知力なのでと。

ぼそつと零してしまつた内心に、苦笑と共に文若が答えた。武も誇れず、財も切り札と成らず、地位も人脈も不十分であつた。故に自分は、知を以つて事に当たるしかなかつただけの事。だから、武も財も人材も、今回においては「数」も用意可能な現状は、

高等な策など用いずとも、目的を達成出来るのだという。

戦乱の世の中で、魏という大国を、その知で支えた人物の言葉とは思えぬ発言に目を皿の様に丸くしたのだったが、なればこそ、その言葉の重みも伝わって来るというもの。それに、もしもの時には、また一緒に考えましよう。駄目な息子を見るような目で、溜め息姿が幻視出来てしまったのだが、それでも助力してくれるという姿勢に、これはPW以上に癖のある御仁なのではと思うのであった。

そして、「稲妻のドラゴン」が羽を休め、はや数刻。明り取り用の窓から見える光景からは、曇天は次第に方々へと散って行き、夜天が再び現れている様が見て取れる。後方では、意識を取り戻した数名の妖怪が立ち上がり、こちらを遠巻きに、辛うじて神経繋がっているっぽい四肢に力を込めながら、事の成り行きを見続けていた。時折、平天大聖の座する宮殿へと踏み込もうとする輩も居たのだが、それも、入り口を塞ぐ形で広間にて鎮座する赤き守護者のひと睨みで動きを止める。

彼の者の力を身を以って思い知った面々にとつては、効果観面。結果、危うい平穩は今もこうして保たれ続けていたのだった。

「ヤッ」

そうして、ここが最後の詰め。

「それでは、対価を頂きましょうか」

今までの話を纏めるように、平天大聖の声が響く。ここを誤れば、俺の思惑は水泡に帰す。そうなれば、残された道は、弱肉強食の摂理のみ。体力的にも厳しく、マナストックはゼロ。現存している戦力は頼もしいことこの上ない存在ではあるのだが、だからといって、胸に巢食う不安は拭えずにいる。全力で避けるべき結末である。こちらの事情は全て話した。隠し立てするようなものも無いので、知っている内容を全部伝えれば良いだけだった、というのには実在がたく。

後はこちら——平天大聖の要求を、どの範囲……俺が叶えられる程度にまで抑えられるかに掛かっていた。

俺の陳情を聞き終えて、彼の思考が結論を弾き出す。

「彼の力を」

白き王の視線が、こちらの後方——赤竜へと刺さる。

なるほど、そう来たか。

永琳さんの時と言い、この平天大聖と言い、強いクリーチャーというのは実にインパクトが強いようで。……俺も彼を初めて見た時は、ビビりを通り越して体に変調を来たしてたもんなあ。特に膀胱の辺りに。

確かに【稲妻のドラゴン】ならば、平天大聖の思惑に十二分に応える事が出来るだろう。何せ、今の【稲妻のドラゴン】は4/4にあらず。緑の真骨頂の内の一つである【パンプアップ】カードを使い、その基本性能を大幅に上昇させていた。

現在、基本数値の倍である、8/8（多分）。更には、パッシブスキルも一つ付与済み。具体的には【プロテクション（黒）】。流石に4/4では心許ないかと思いい行使したカード達の力によって、その地力を数段階上のクラスへと押し上げていたのだった。

『古きクロウサの力』

1 マナの、緑の【インスタント】カード。

対象のクリーチャー一体に、ターン終了時まで+2/+2の修正を与える。しかし、

特定の期間——端的に説明すると、戦闘時以外のタイミングで使用するのならば、それは代わりに+4/+4の修正をもたらす。

この手の「パンプアップ」カードは主に「コンバットトリック」目的で使用される場合が多く、それはつまり、戦闘時に好んで使用されるカードの部類という事になる。そのメリットを破棄した場合にのみ、より好条件が得られる、というカードがこれ。

カード名にもなっている、この「クローサ」とは、MTG世界にある、とある大森林地帯を指す。そこに住む生物は元々一般的な森林よりも粗暴で荒々しあつたが、然る人物が原因で、住まう生物が一様に巨大化。ますます危険度が上昇した。

現在は、ネズミですら熊を凌ぐ巨体となった、通常の倍以上の体を有した獣達の暮らす、破壊音の絶えぬ新緑の地である。

リン、文若と別れ、平天大聖が支配する森林地帯に侵入を果たした直後。全長二十メートルを超える「稲妻のドラゴン」に勝るとも劣らない凶体であつた、名も知らぬ白

い大鷲——ロック鳥だろうか——を、遠く、視界の先に捉えた時の事。明らかにこつちを見て殺る気満々な近づき具合から見て、「稲妻のドラゴン」と凶体が同格っぽいから、力も同等なのでは。と考え、それは拙いとの結論に至り。残り1マナで、現在の条件に合い、尚且つ最大限の効果を発揮してくれそうなカードとは。を考えた末に、戦闘前だから……と、そのカードを使用した。

一騎当千達の跋扈する地において、4/4とはそこまで無双出来る力量ではないかもしれない、とその時に思い直し、元々赤竜に備わっている「火吹き」よりも効果の高い「パンプアップ」をもたらしカード、「古きクローサの力」を使い、数値としては倍のステータスを実現させようとしたのだった。

元々、望んでいたのは数値修正のみ。戸島村での件——「ハルクフラッシュ」使用時に発覚した、「パンプアップ」能力の不透明さに使用を避けていたのだが、短い期間であつたけれど、月で永琳や依姫との関わり——実験やら戦闘訓練やら生贄要因ゲフンゲフン——やらの際に、おぼろげながら、その制限が見えてきていた。

●プラス、マイナス修正を与える能力、カードは相乗効果を成さず、一つの対象に一つの効果しか及ぼさない。全体修正についても同様。但し、修正値以外の効果（「飛行」や「プロテクション」等）は重複する。

じゃあ「屍肉喰らい」とガチンコしていた鬼の一角は2/2だったのかと、疑問の尽きない回答であった。自称、鬼の中では真ん中辺りの実力だと説明されたけれど、鬼の中級ランカー？ が2/2とか、鬼はどんだけ弱いんだよと。それとも東方プロジェクト固有の力、『くである程度の能力』で補っているんだろうか。今度会ったら、本人にその辺を尋ねてみようと思う。

以上の理由を踏まえて、単発で最大限の修正を……現状で最も効果を発揮してくれそうなカード「古きクローサの力」を使った訳なのだが……。

（体にまで変化が起ころるなんてなあ……。【クローサ】の名は伊達じゃねえぜ、ってか）

積み重なる疲労によって、立つ事も億劫になりつつある最中。光に包まれ、一瞬にして巨大化した【稲妻のドラゴン】が現れた事に、思わず眼を見開いた。

やたらと面積の広がった背中を見渡しながら思ったのだが、あまりに大き過ぎる彼の背中が、二倍、三倍どころか十に達しようかという体躯になった【稲妻のドラゴン】は、翼のひと扇ぎで暴風を撒き散らし、羽ばたきは地上の細身の木々すら押し折らんとする存在へと様変わりを果たした。

巨人の一步は、小人の万歩。実は音速に突入したのではと思える速さで、【稲妻のドラゴン】は巨大怪鳥と接敵を果たし、正式名称も分からない謎の白い鳥さんとの刹那の合は、二百メートルを超える体となったドラゴンのひと噛みで、一瞬にして終わりを告げる。遠目であったが、どう見ても俺達にちよつかい……以上の敵意を向けて来ていたので、一応は正当防衛になるのだろうか。気分的には、猪とか熊を追っ払った心情である。何の苦も無く、骨すら瞬きの間に噛み砕いたであろう強靱な顎によって、小さく咲いた火花……のような血の雨を空に創り上げ、僅か二口で、哀れな妖怪鳥は赤竜の食欲の犠牲者となったのだった。

【古きクローサの力】であれなのならば、それよりも更に高い修正値を与える——かつて、緑の【パンプアップ】呪文の切り札的存在であった4マナの【インスタント】を使用した日には、あまりの光景に眩暈すら覚えるかもしれない。

(マリさん見ておいて良かったかもしれん……)

あの全長がキロにまで達しているであろう山の如き姿を見ていればこそ、後々に呼び出すかもしれない巨大クリーチャー達に耐性も……ある程度は出来るというものだ。具体的な数値は分からないが、町一つを覆う。とか、島をひと呑みに。なんて「フレーバーテキスト」な御方達がごろつといらつしやいました。勿論、それ以上も。カード使用の際には何処まで再現するのかわかりませんが、そう考えると、寧ろマリさんは小さい部類である可能性が高い。

(マリさんが小型の部類……)

やってらんねー、と。

投げ遣りな気持ちは疲労感によるところも大きかったのだが、自分の可能性が見果てぬ境地にあるという事実から生じた、喜びの感情からもたらされるもの。感想とは裏腹に、感情は明るい色に染まっていた。星の数ほどある可能性の内の、たった一つの項目ですらこれなのだから、知るべき事の多さに——それを知り得た後の高揚を想像し、胸を高鳴らせつつ。

「——それは、彼に尋ねてみませんか」と

いつか、勇丸に言った台詞だと思い返した後、雑念を振り払う。首を後ろに。開かれた扉の先、黒の平穏が支配する広間にて、「稲妻のドラゴン」は横たえていたその体軀を

持ち上げた。

月と星々が徐々に陰る。彼の行動が天候に左右するのか、感情が呼応するのか。再び雲が夜空を埋め始めていた。

ビクリと体を震わせて、弱腰の臨戦態勢を取る、虎の表皮やら、牛頭やらの、名も知らぬ妖怪達。ビクリ人間コンテスト会場か、とある季節の有明か。はたまた、ハリウツドのB級製作スタジオにでも紛れ込んだのかと見紛う光景だったけれど、それも、ああもへつぴり腰を見せ付けられた日には、一種の慈愛すら抱いてしまいうさである。赤竜から微弱な閃光。帯電現象。念話は伝わって来ないが、そこは拒絶の色が見て取れた。

……やるなら誰にも指図されずに、一人でやりたい。という感情から派生した回答のようであったのは、目を背ける事にする。うう、やつぱりその辺りはドラゴンさんなんですね。

「おっと。誤解無きよう」

こちちのミスリードを誘っておいて、それを一頻り楽しんだ後、平天大聖は制止の声を掛けて来た。なんともはや。良い性格してやがりますね。

「何も、永久に隸属しろ、とは。我らはいずれ、天界へと攻め入る算段なのですよ。その折にご助力を、と思つた次第。ええ、それ以外の何ものでもありませんとも」

……あれ。今、サラツとヤバ気な発言を耳にしたような。

くつくつと。不敵に笑う様は、俺が翻弄されているのがツボにでも入っているんだろ。あるいは挑発の類なのかもしれないが、何にしても、実に楽しそうな声色でございませう。それを受ける側のこちらの気分は良くないが、無理を言っているのはこちらのなのだ。これくらいで済むのなら、寧ろ、安いものである。

ただ、仮にも天界……神様への殴り込みに加担するのは、躊躇うものがある。縁も言われも無い地の事なれど、それを快諾するのであれば、そもそも妖怪であるこの平天大聖へと、殺す殺さないレベルの喧嘩を吹っ掛けている。妖怪であるという点で人間の敵である場合が殆ど。俺自身も手心を加える余地は減少している節があるのだが、それでも、その相手に何かの害を受けた訳でもなく、その者達によって大切な何かを傷付けられたという訳でもない故に。そんな事をする気は、現状ではさらさら無い。

「それは……」

こちらの重い口調に呼応して、白き王の表情がますます艶やかに色付いていく。

「——しかし、流石にこれは受け入れ難いに見える。良いでしょう。こちらの領地にただの一人も足を踏み入れないと仰るのであれば、こちらからは手を出さぬと、我が名に掛けて誓いましょう」

あたふたする様子を一通り楽しんだ後で、予め用意してあった言葉を付け足したかの

ように、補足を入れて来た。全く以って嫌らしい言い方である。勉強になります。……出来れば、生かす機会など巡ってきて欲しくないものですが。内心、口を尖らせて、遺憾のイならぬ不満のフの字を密かに表明中。語呂が良いが意味不明。こうでもしないと、気持ちのやさぐれ度が上昇し過ぎて困ってしまいそうだ。見えないところでストレス発散です。

……だが、あまりにこちらの要望が通り過ぎている事に、俺の疑念は膨らむばかりで。例えばこれが、氷の妖精やら元お地蔵様な裁判官などであったのならそんな事は無いのだが、不良天人娘やら幾匹もの鯨を足蹴にした兎やら、後、スキマ妖怪等の延長線上に思えてならないのは、どう見ても約束を完全に守る気概が見受けられないせいだろう。

あちらからしてみれば、自国に侵入された場合は言わずもがな。国境の外側であつても、自国に侵略予定の軍隊を編成されているのは、厄介……かどうかは分からないが、気分は良くない筈である。

それが、からかわれているとはいえ、こつもこちらの要望通りに進むという異常事態。絶対に裏がある。そう思わずには居られなかった。

(でも安心！ 今の俺……達は【恭しきマントラ】の効果で【プロテクション(黒)】を付属されちゃってますので！)

このお方が黒ならば。というのが大前提ですけどね……。

【ピッチスperl】の恩恵でマナは消費しなかったけれど、それでも4マナ【ソーサリー】使用分の体力はキツチリ持っていかれた訳で。お陰で、使った直後は意識が飛びそうになりました。気絶しなくて良かった良かった。

——この時。一瞬だけであつたけれど、八意さんから貰った腕輪が熱を持った。それはすぐに体温の範囲内へと落ち着いて、普段通りの装飾品へと、時が巻き戻ったかのように何事も無く。どうやら、この腕輪はかなりシビアな発動条件になっているようで、壊れていなくて良かったと思う反面、もう少しリミッターを解放しておいて欲しかったと思うのであつた——

単発呪文は継続的に体力を消費しないので、そういう面では有利である。大聖つて名だから、白か黒かで悩んだけれど、そこはリンの話を参考に、『妖怪だったら黒でしょ』との、鬼の一角と同様の流れで黒を選択。

そしてこれには、リンを始め、【稲妻のドラゴン】にも与えてある。8/8【飛行】【プロテクション（黒）】とか、特に妖怪が……色が黒と部類される相手では、滅多な事では最悪の事態にならないだろう。MTG上でもエンドカード（ゲームを終わらせる可能性の高いカードの事）級だ。

「そう仰つていただけで——」——但し——……はい」

感謝の言葉を最後まで言い切る前に、ピシヤリと話を止められた。

「私もあなたに同行させて頂きましょう。何、邪魔立てする気はありません。赴くのは私一人。事が起こった場合には、後方にて静かに眺めるだけに留めるつもりですとも」

……胡散臭い。あまりに胡散臭過ぎて、もうこのまま一発殴つて気絶させてふん縛つて、何かされる前に行動不能にさせたいくらいに胡散臭かった。

「それはまた……何故でしょうか……」

頬を吊り上げ、齒を覗かせて。そのままウインクでも行いそうな笑いの顔を造り、口の前に人差し指でも添えそうな声色に乗せたかと思えば。

「——秘密です」

……マナが回復した暁には、真つ先に「テレパシー」を使おうと思つた一言であつた。細身の中世的な顔立ち……美形がやると何とも様になるので、その綺麗な白い肌（額）に、いずれ、肉、と。頬にはナルトマーク追加……を書いてやりたくなる。油性ペン（極太）で。

行き先不安……どころか、暗雲がもうもうと立ち込めている終着点であつたが、それでも何とか話は纏まつたようだ。

「……それだけで済むのでしたら、感謝の言葉もありません」

ありがとう、との言葉を取って付けて、音に乗せる。裏は兎も角、表面上は話を飲んでくれたのだ。どうせ『それだけ』は守りましょう』とか『約束を守った後は知りません』的な、揚げ足取りまくりの取り決め事であるのだろうか、ここでそれを突っ込み過ぎて、自らを窮地に追い込む事は無い。もしもやるのなら、少なくとも、マナが回復してからだ。藪を突いて何かを出す必要は無い。

平天大聖が片手を挙げる。途端。柱の影にでも潜んでいたのか、二人の女性が姿を現した。

平天大聖には劣るが、その白は肌理細やかな絹の輝き。純白のチャイナドレスを着こなして、流れる銀髪が衣類と相乗効果を生み出し、実に良く栄えている。一方はどう見てもサイズの選択を間違えただろうと突っ込みたくなる——むちむち（死語）な四肢を魅せつけて、もう一方は大変バランスの良い体を豹を思わせる動きで現し、その場に佇む。

両名とも猫目の双眼が、人間でない事をしつかりと物語っている。その美貌は、男を墮落させるサクキュバスのように。東方キャラでは無いにしても、ともすれば、その者一人で領地の一つや二つ程度なら得られよう程のものだろう。

「夜も更けてまいりました。部屋まで案内させましょう。……後は、案内役諸共、ご自由にして頂いて構いませんので。ただの人間では決して味わえない世界をお約束致しま

しよう。——お前達」

自らの王へと振り返り、一度頭を下げる。面を上げ、向き直り。こちらに近寄つてくると、幻想の里に誘う妖精のような笑みを浮かべながら、こちらの両の手を左右一人ずつ握られて、夢遊病患者のようにふらふらと宮殿の奥へと連れて行かれた。

——否。連れて行かれそうになつた。

こちらの手に侍女達の手が触れる間際、一筋の閃光が走り、宮殿内を突き抜ける。それは寸分違わず女達へと直撃し、その体を白き王の元へと滑らせた。

が、そこに横たわる筈の人の体は見られない。変わりに、二メートルに達する胴の長い白蛇が、その体から微かに白煙を上げていた。ピクピクと口から出した舌が痙攣している様を見るに、まだ息はあるようだ。

悲鳴すら上がらない。聞こえたのは、落雷が空間を掛けた音のみ。ここに來て漸く、平天大聖の顔から愉悦の色が抜けた。

目を大きく。ほう、と短く、息を吐く。

「——俺に触れるな」

声は静かに。腹の底から響く様に。疲労から来る脱力と、新しく加わつた別の何かに支配された表情は、暗く、冷たく、何の色も灯さない。

「これは失礼しました。案内「だけ」させましょう」

やや遅く、再び柱から現れる銀髪の蛇妖怪。多少の差異はあれど、先と同様の絶世の美女ではある。……のだが、その顔は恐怖に染まり、後少し何か刺激を与えれば、脱兎の如く走り去る事請け合い。男を客室へと導く為に先頭を進む様は、宛ら、十三階段に足を踏み入れた囚人。

片や召喚者本人は、雷撃を放った赤竜に目配せをし、雷雲立ち込める夜空——上空へと登らせた。

維持するにも色々と限界が近く、上空へ飛ばし、その後に還す事で、傍から見れば、あの赤竜が常に大空で待機している風に映るだろう。との考えである。

何の重さも感じさせず浮遊し、直後、忘れた重さが舞い戻る。吹き荒れる暴風に幾人かの妖怪が宙を泳ぎ、あるいは山を転げ落ち。風に弄ばれている間に、それを指示した者は先を行く侍女の背中を、足取り重く追隨する。

背中に受ける、再び造られた、獐猛な笑み。今までで最も平天大聖の妖怪らしい喜びの形をした視線を感じながら、九十九は完全に無視を決め込み、足を進めるのだった。(うっわー妖怪だけど美人さんぶっ飛ばしちましたよ!!) やっべ生きてますかあれ!?! よく交渉決裂にならなかつたな!。ってか攻撃ピンポイント過ぎ!。感電死しなくて良かったよホントに!。お前の攻撃【プロテクション(黒)】じゃ防げねえもんよ!。——召喚者を守ろうとした【稲妻のドラゴン】の行動を、どう正当化したものか—

瞬で悩み抜いた末の行動は、どうやら吉と出たようであった……という、雑多な思いが多々混じった思考は、当人の中から溢れ出る事は無かったという。

……そんな出来事など霞の如く。部屋に着いて一分も経たず、『あ、もう寝ますんで』と。柔らかな寝床で爆睡する男に、籠絡の任を伴っていた白蛇精と呼ばれている妖怪は、添い寝どころか、寝床へ近づく事すら成しえずに。

結局、とうとう一睡も出来ずに、時折寝返りを打つ男の一挙一動に怯えながら、部屋の隅で魂の擦り切れるような一夜を明かしたのだった。

それも当然。彼は就寝に入る直前に、更に一体。とある0マナのクリーチャーを呼び出して、警護に当たらせていたのだから。

客室には、男の寝息と、心の臓が酷使されている女妖怪の脈拍と。金属と金属の擦れ合う音に、無機質な顔……と思わしき紋様が、周囲を一寸の油断無く探っていた。……特に、銀髪の蛇女を凝視するように。人間の男の三倍に届く身長と、自動車を二台並べた位の幅を有する、命無き機械生物、「アーティファクト」クリーチャー。

大きな筈の客室は今、その者——銀色の巨大蝮のような金属のカラクリによって、その主が目覚めるまで、支配され続けるのだった。

「この辺りだった筈なんだが……」

確認の意味を含む眩きは、風を切る音によつて掻き消える。地上高、ゆうに百メートルを超える高度を飛び続けている。今現在。「稲妻のドラゴン」に騎乗……いや、あれは搭乗か——していた時よりも、大分、趣の違う様であった。

何せ、あれで移動していた際には回りの景色など見る余裕もなく、見える景色も曇天と雷鳴によつて遮られていた。何より、生まれて初めての鳥の真似事は、臓腑が浮き上がるという、形容し難い体験によつて、周りの様子などに気を配るなど、どだい無理な話。

「ん」

見つけた。

草原地帯よりもやや離れた、一面砂だらけの小高い丘。よくよく観察すれば不自然に

盛り上げた印象を受けるが、そんなもの、絶えず熱砂の吹き荒れる大地では目を見張るものではない。目印としても目立たない、ここ——この小山の、その下に。

「よつ、と」

これに乗って、数時間。扱いは、もう慣れたものだ。空を飛ぶという、羽を持つ者達の特権を、今の自分は有している。蝙蝠の羽と、それを支える細い金属棒達。徒歩での移動は時間が掛かるだろうからと、ツクモが僕に与えてくれた、カラクリ翼。自動だとか、機械的な判断だとか、彼はそんな風に言っていたか。

こちらが何処に行きたいか。何をしたいのかを察して、右へ左へ、上へ下へと、自由自在に空を駆けるこの羽は、「羽ばたき飛行機械」という……どう聞いても総称だと思うのだが……そういう固有の名前の代物らしい。

見た目に反して、昆虫のような細かな羽ばたきではなく、鳥類のそれ。高度を下げるよう体を傾ければ、迅速にそれに応えてくれる。風に守られているように着地を果たし、目を凝らして回りを見渡せば、一つ、二つと、人間の幼子がやつと通れるくらい小さな穴が見受けられた。今日に付く箇所はそれだけだが、探せばこの穴は、それこそ無数に存在している。

——ツクモが壮年の男を呼び出した光景は、今でも目に焼きついている。あの竜に

したって、この「羽ばたき飛行機械」にしたって。ほんと、どうやってこれを成しているのか不思議でならない。そこまで多くを生きていないとはいえ、こんな力を持つ神も仙人も、ましてや妖怪ですらも、噂の欠片すら耳にした事などなかった。

(しかも、もしあれが本当なのであれば……)

彼が召喚したという男。言葉の端々から零れた単語は、句彘。

句彘……そう。恐らく、あの句彘だ。母の為になればと。戦に関連する資料を読み漁る内に知り得た知識の中には、その者についての内容も含まれていた。

句文若。数百年前に故となった人物。戦国の乱世にて活躍した、類稀なる才能を持つ御仁。

霸王を霸王たらしめる、数多くの有能な人材を推挙した、王佐の才を持つ者。自らも、他とは一線を引く智謀を持ち、国の、彼の結末はどうであれ、少し歴史を齧った者であれば知らぬ者など居ない有名人。

(……まさか)

様々なものを招き寄せている、その有様。冥府の門を自在に開閉するかの如き力。失われた生命を司る存在は。

(冥界の——)

で、あるとするならば、それは最高神に次ぐ者なのではないか。

戦、太陽、そして、生命。他にも色々あるが、人の営みに関わる者は、その信仰の度合いが顕著。神位はかなり上の筈である。

……だが、それもおかしな話だ。仮に、彼がこの地の冥府の神、ヤマであつたとしても、死者をああも容易く現界させられるものなのか。古来より死者とは決して戻らぬ者として言い伝えられている。西でも、東でも。如何な地の神であっても、それは、ま
ず覆る事の無い定めであつた筈。

惜しむらくは、東洋の地の冥府の神の名を知らない事か。少なくとも、ツクモ、など
という神の名は……。

(……あ、れ?)

居た。確か、そんな名前の神が居た筈である。的確にそれ、とは断言出来ない記憶であつたが、確か、確か、そう——。

(大陸の遙か彼方。東方の、最奥。極東と称される地で、万物に……)
……万物に……の……? ……はて。その先は何であつただろうか。

兎にも角にも、万物と単語が付属するくらいなのだから、ともすれば最高神当人である可能性も捨て切れない。

(……あ、でもそれは無い……ような?)

先の考案が正解であれば、その地の神々は何と頼り無い支配者であることか。

文若から教えを受けていた時のツクモは、それはもう、粗相をした幼子が乳母に叱られる様を連想させられるもので。彼の軍師が何を言っているのかは不明であったが、一定の間隔でツクモが『はい』『仰るとおりです』『すいません』等の言葉を発していたから、神通力か何かで会話をしていたのではないかと予想出来るものだった。

(人間に叱られる神……か……)

謎の多い……というより、謎しか残らなそうな人物だが、それでも。小さな小さな。それこそ、神から見れば道端に転がる小石のような存在の自分にも、謝罪をし、助力をし、頭を下げた者である。それが発した言葉が偽りであるという可能性は、考慮にすら値しない。

彼ら——いや、彼か——が出した答えは、二通り。

一つは妖怪側である平天大聖——ひいては七天大聖へと働き掛けて、戦の規模を制御する事。

一つは人間側であるウイリクの国の軍隊を阻止する事。

もつと時間があれば第三、第四の案を用いたらしいのだが、自分の情報を元に魏の筆頭参謀が出した答えが、早くて一週間。遅くても一月以内には、戦争が始まるのだというものであった。

妖怪側への対応はツクモがするとの事。危険度も高く、成果も最低限の線しか達成出

来ず、これのみしか達成出来ない場合には、下策とも言える案であるらしい。

しかしそれも、人間側への対応を受け持った自分が成功すれば、上策へと変貌を遂げるのだという。こちらの成す事。それは、軍隊の兵糧を失わせるという策。兵糧攻め、というらしい。万に届く人の群れであれば、衣食住の内、生命に直結する食の喪失は、即ち……死。

但しこれは一時凌ぎにしかならず、二度目からは対策を取られ、困難になるのだという。事を思うように操る術を策と呼ぶのだが、文若からしてみれば、これは策と呼べるものではないと。ツクモは文若がそう言っていたと漏らしていた。

だが、とんでもない。今の今までそれすら思いつかなかった自分には、青天の霹靂にも似て。戦とは力と知恵の競い合いであり、戦鬪という行為、そのみに固執していた——してしまっていた自分の頭からは、終ぞ出ない答えであった。

刻々と迫る時間制限に、視野が狭まっていったというのは言い訳にしかない。それでも、何とか手遅れにならずに済みそうであるのは、まさに行幸と言える。

実行するのであれば、夜。暗闇に乗じて、静かに、音も無く。燃やすとも、毒を混ぜるとも違う、純粋に食べ尽くすだけという、単純な行いは、単純であるが故に、何にも増して効果的な戦果を上げる事は容易に想像出来た。

けれど、それを成し得たのであれば、一夜にして消え去った食料に啞然とし、戦意を

失う人々の光景が見られるだろう。

(もう、お母様の元には居られなくなるだろうけど、ね……)

そして、この世からも。

この点は、ツクモも文若には説明してはいなかった。そこまで考えが及ばなかったの
だろう。目標を達成する点だけを述べただけに留まつている。

万の兵糧を食べ尽くすのであれば、自分達が——ネズミが行ったという証拠が必ず残
る。これが自分の配下だけならば、そんなことはない。足跡から毛の一本に至るまで、
痕跡など発見させない自信があつた。

けれど、これから行おうとしている兵糧攻めには数が足りない。故にこうして、懐か
しの古巣たるネズミ塚へと舞い戻り、協力を呼び掛ける為、訪れている。

(成功すれば……)

最後の記憶では、三十万近い同胞達が暮らしていた筈だが。今はもう少し増えている
かもしれない。全員が協力してくれる訳では無いだろうが、その二割でも協力してくれ
たのなら、策は成功するだろう。

……しかし、言つてしまえば彼らは単なるネズミであり、そこに繊細さを求めるのは
難しい。それが数万に及ぶのであれば、尚の事に。

もしこの作戦が成功したとしても、時が経てば、それは女王の娘の立場に納まつてい

たこちらへと向き、それを養つていた母へと糾弾が及ぶ過程が簡単に思い描かれた。名立たる豪商達は、嬉々として王家を引き摺り下ろし、挿げ替えた首を掲げながら、自らがその立場へと居座る事だろう。

それを未然に防ぐには……。

(使い処が問題……か)

折を見て、自らの死体が大衆の目に晒されるか、女王本人が、この命を奪つてくれるのが最も好ましい。前者が成されれば追求対象を失う事になり、後者が起これば、難しいのは目に見えているけれど、女王の立場は、軍を撤退に追い遣つた妖怪の討伐という成果によつて、強固なものになるだろう。

一度は失つたようなもの。それを救つてくれた相手に捧げる事に、何の抵抗があろうか。元々命の対価すら考慮して行動していたのだ。今更、それに何ら不満は無かつた。寧ろ、あの人を助けられるのだという可能性が現れた事に、感謝の念が堪えない。

……堪えない……のだが……。

「……ぱんし」

その感謝すべき相手は、数刻前までとくとくと、文若に説教を受けていた。しゅんとしながらペコペコ頭を下げる様は、こう、妖怪の本能を的確に刺激される光景であつた。もし機会があるのなら、今後は自分であの光景を作り出したいと思う。

断片としてしか理解が及ばぬが、ツクモの策にダメ出しをしていた事だけは察せられた。ただその者も、この策においては、まだ出来る事がある筈だと言っていたらしい。『低コストの「アドバイザー」なら他にも居るんだけどな。ほら、ここつてアジアっぽいじゃん？ だったら、ホームグラウンドな御方達の方が、俄然有利かなと思つたのですよ。地の利つてすつごい重要らしいし。NHKとかデイスカバリーチャンネルとかで、そう言つてた』

草原で初めて出会つた時に差し出された食べ物、サンドイッチの解説を受けた時と同様に。色々と未知の単語が出てきたけれど、アイスの時と言い、その辺りは今更であつたので、特に気に留めるものではない。分かる範囲だけを聞き入れて、吟味すれば良い。(……む。追求すべきは、別のところだつた)

地の利等を生かす為に、彼の魏王の側近中の側近を呼び出したというのだが、その者は最後に、ある意味で自分の策を否定するような言葉を発したのである。王佐の才を持つ者が、己が力不足を進言し、完遂してくれるであろう者の名を上げた。自分ではこの地に明るくない。されど、その地に近しい者なら知つている、と。

その名を聞いた時の自分は、それはもう、ツクモと出会つて何度目か分からない驚きを頭わにした。何の知識もなく知つたのであれば、何を馬鹿な。と、一笑の元に伏していた話。

けれどそれは、彼が魏の軍師を蘇らせた事実を目の当たりにした事で、信じるに足る言葉へと変わっている。

期限は短い。三日か、四日か。持てる知識と話術の粋を結して、この地の同胞達を束ねなければならぬ。

——そう。これは、とある軍師“達”の一計。

敵であったからこそ熟知し、互い、ある種の信頼の域にまで知り尽くした者同士が織り成す——宛ら、赤壁の再来。それを伝えた時の文若は、胸の内に込み上がる言い様も無い感情を抑え切れなかった。

昨日の敵は、今日の味方と成り得るのか、否か。かつて自らの国の覇道の完遂を、最後の一手で防がれた、憎々しくも素晴らしき、神ですら読み切る事など不可能な、その策。

名を、連環の計。

「——やってやるさ、
凜、と。」

和名であつたのであれば、まさに自らの名を体現する姿勢を取りながら。

己が古巣へと、小さな体に大きな大志を宿し、小さな、幼き賢将は、その第一歩を踏

み出した。

47 悪乗り

「ツクモ……」

上がる声には、疑問と、恐怖と、懸念の片鱗が。

「……言いたい事は分かっております」

見上げた空は青く、降り注ぐ日差しは強く。

雲一つ無い、とはこの事。好き嫌いはさて置くとしても、初対面同士で行う事が一つあつたなど、ふと思った。

然して特別なもんじゃない。ただの……自己紹介である。

「……え、こいつはリン。見て分かると思うが、ネズミの妖怪。最近成ったばかりの、若輩中の若輩」

だよな？ との確認の視線にも、肯定も否定もない……というより、俺を全くと言っていいほどに視界に入れていない少女が一人。

無視かいな。まあ、その反応も充分理解出来ますので。スルーされた心の痛みは、いずれ消化されるまで、胸に深くしまっておくとしよう。

「で、……ちらが……」

チラと見る。

相も変わらず楽しげに口元を吊り上げているこのお方が。

「初めまして、小さき妖怪。——名乗りは必要ですか？」

うわっ、リンの顔から血の気が引いている。元々白かった肌が、見る見るうちに、青へと様変わりです。

『百年は姿を見ていない』とか言ってたくらいだから、初対面なのは確実なんだろうが、滲み出るボスオーラと今までの過程を結びつけた結果、目の前の者の格を直感で理解しちゃったんだろう。

「止めて下さいってホントにもう……」

無駄だと分かってはいるが、一応、抑止の声を掛ける。疲労が残った顔をそのままに、再度、リンへと向けた。

「その様子で察しているとは思いますが、一応な。……この度、俺達の案に協力してくれる事になりました、妖怪勢力の纏め役。平天大聖です」

はい握手。とか言ってみたいが、それをしたら、平天大聖は兎も角、リンの心臓が

ショック死しそうなので自重する。かくいう俺だつて、第三者だというのに心臓苦しいです。後、頭痛。

まだ余裕はあるが、こんな事態が続けば、こめかみに筋が浮かび上がったたり、頬なんかピクピクするかもしれない。

白い王様は変わらず笑みを湛え、逆に、リンは更なる恐怖で顔の青さを増していた。このまま行けば、ウォルトさんが製作を手掛けた作品に登場する、三つの願いを叶えるという某ランプの精並に真つ青になれるんじゃないだろうか。

「平天大聖。ちよつと……」

これだけで、俺が何を言わんとしているのか理解してくれたようだ。分かりました。俺達の脇を通り過ぎ、黒い草原の方へと歩き出す。多分、素直に従ったのは、インターバルを用意した方が、反応が良くなるからだろう。新鮮な恐怖心、という奴かもしれない。……お前は何処のフェイトな青髭ですか。

「……リン、大丈夫か？」

流星にこれ以上フォローしないのは拙い。パッと見の範囲でも、もはや限度を超えている。遠くへ……少しでも離れていてくれた方が良い。面と向かって対峙されるよりは、雲泥の差であつただろう。

「……正直、今にもへたり込んでしまいそうだよ」

「悪かった。次からは気をつけてもらおうように言っておく。……聞き入れて貰えるかどうかは別だけど」

聞き届けて貰えるよう願っておくさ、と。

諦めの言葉に乗せて、リンは希望を口にする。

「それで……」

「あー、うん。その辺は色々あった訳なんだが……。見ての通り、平天大聖がいらっしやいました」

「……はあ」

何ですかそのあからさまな溜め息は。こつちだつてハアしたいってんですよ？

「条件としては破格だったんだぞ？ 俺達のやる事を見学させる、つてだけなんだから。」

「……今のところは」

「反故にされるか、後から何を吹っ掛けられるか。もう、今から頭が痛いよ」

「その辺りは『プロテクション』である程度は賄えると思うんだが、それには俺も同意させてもらいます。……頭痛がする、つてところにも」

どちらからともなく漏れる、再びの諦めの吐息。その原因たる妖怪の王は、無数の命が蠢く何かの帯の手前にて、それを興味深そうに静観している。

王が向ける視線の地点が、まるで空爆でも受けたかのように四方へと散っていくのは

……とつても可哀想。俺も直で対面したから分かる。怖いもんなあ、あの全身這うようなサド目。

「それで、だ」

脈絡を断ち切る風に、そう切り出す。

「あれが、リンの成果……か」

平天大聖が目を向けるそれ。黒とも、灰色とも、茶色とも。少数ではあるが白も混じり、暗めの色しか思い浮かべていなかったの、若干意外な印象を受ける。空以外の色が一面それらの命で埋め尽くされている光景に、これからの事を考えると、戦慄を覚えずには居られなかった。

「ああ。元々、僕らは人間達に対して良い印象を持っていなかったからね。それに、自分でも言うのも恥ずかしい話ではあるけれど、こう見えても僕は、同族の中では中々に顔の効く立場なんだ」

「……まさか、ネズミの中でもお姫様だったとか？」

「違うさ。ただ単に、僕が妖怪であるから、というだけだよ。でもね、幾万の同胞の中でも、妖怪になれる者は、それこそほんの一握り。羨望の対象、と。言葉にすれば、そんなところかな。……それに今回は、君の存在も利用させてもらっているしね。でなければ、これの半分以下も集らなかったと思うよ」

「……俺？」

何かやったか。と思うが、空飛んだり食べ物出したりドラゴン呼んだり色々やっていたので、理由の特定は断念する。心当たり多過ぎです。お前は今までに食べたパンの数を……なんて幻聴とか聞こえてきそう。

「ああ。——的確にそれ、とは言えないけれど、君は東の地に住まう、名のある神なんだろう？ 畜生と貶められている僕達に助力してくれる神は、今の今まで一神として現れた事など無かった。本当はあの赤竜を皆に見せて、より強固な信仰を得たかったんだが、それでも、今こうして集っている同胞達は、自らに救いの手を差し伸べる存在に、少しでも力になれば。と応じてくれた戦士達だ」

優しい表情を引き締めて、真剣なものへと塗り替えて。

片足を下げ、片手を胸に当て。膝をつく——傳く姿勢を取ったリンは、頭を垂れ、臉を閉じたまま。

「——我ら、ダン・ダン塚の悪食ネズミ。馳せ参じた五十万、飛んで三十三の戦士の命。君に——あなたに、預けます」

姿勢は崩さず、すつと顔を上げ。

「……出来る限りで構わない。彼らの想いに応えてあげて欲しい」

精一杯の誠意を。頼りなさ気であった体からは、覚悟の文字が浮かび上がっている。

知らぬ間に何かのハードルが上がっているんですが。重さドンツ！ 更に倍！ 的な。記憶にあるネズミご御一行様の居住圏内——コロニーは、精々が百前後のものだった筈。

五十万ちよいのネズミとか、千葉市か熊本市丸々一つ。大企業の人数と比較するのなら、ホンダの倍以上。アップル・コンピュータ（旧名）の約七倍。どんだけ掻き集めてきたんだと、驚きの声を嘯み殺す。期待に込めてあげたい気持ちは充分にあるが、それにしたって、限度があります。

困った。何故だか、またはも神様扱いされてしまっている。大和の国で散々言われてきた事とはいえ、やはり人外の力の行き着く先は、その手の存在なんだろうか。異能を持つだけの人間だと、道中、リンにそれとなく言っておいたのは効果無かったようである。こういうのは否定だけの回答で暈すよりも、ピシッとそれ。的な断言の方が有効そう。

（こりや、マジで何か説得力のある役職か種族か決めておかねえと駄目なんか……）

今もそうだが、この分ではほとんど過大評価され兼ねない。勝手にハードル上げるのを止めさせなければ。噤む口から零れる唸り声。濁点付きの、むむむ、なんて擬音が適切か。この一件が終わったら、その辺りを真剣に考えてみようと思う。諏訪子さんへの報告の次くらいの順位で。

……お膳立ては整った。やる事やるかと、大きく深呼吸。吐き出した空気の代わり

に、やる気という気体を胸に吸い込んだ。

——意図せず舞い込んできた使命感を軸にして。けれど、それを偽る気は無いと。面食らつて、内心でふぎけた反応をしてしまつたけれど。少し時間が経てば、それが例えネズミのものであれ、誰かの命を預かるという責任が、重く、全身に押し掛かる。けれど、こんなもので折れて堪るか。

この小さな少女の泣き顔を止めたくて始めたのだ。それに応えずしては、男が廃る。性根が腐る。ミシヤクジの統括者に貰つた名前、九十九としての仁義が悖る。ならば、とことんやってやる。ここで逃げ出してしまつては……一度逃げ出せば、後はずっと、逃げ続けるだけの人生が待ち受けているだろうから。

なれば、後は一つ。心の底から応える気概で、返答を口にする。

「分かった。——任せとけ」

これで、二度目か。責任回避がデフォルトの自分からは想像も付かない台詞だと。ふと、そう思った。

「……さ、て。こうして使える手札が出揃つた訳ですし、いつちよ始めますか」

「ああ、彼を……招く? ……んだつたかな? 話を聞く限りでは信じられないことだけど、あの霸王を支えた者を見た後では、ただただ驚くばかりだよ」

「ついこの間、制限が開放されたばかりだから、俺自身も色々驚いてる。それに、今度は智謀だけじゃないぞ？ 当人には全く検討も付かないだろうけど、俺が呼び出すとパッシブスキル一個付くから。今回に限ってはそれが効果大だと思われまますアルヨ」
堅苦しいのは苦手だ。

先の空気を吹き飛ばすように、テンション上げつつ、おちやらけた語尾を付け足してみる。

「はいはい、じゃあ早速やってくれたまえよ」

「リンが冷たい……。りよーかいりよーかい、お姫様の仰せの通りに致しましょうかね」
まだ反応してくれるだけ有り難いか。これが無言とかにならないだけ、幾分かマシだ
と思います。

「……つて、待つんだ！ 今ここでそれをやれば——！」
「んっ」

その言葉、今一步及ばず。凝縮した光子が人型を成して、取り払われた後に、一人の人間が佇んでいた。

白の仕官服に赤銅の光沢を放つ内服。青年から抜け出し、壮年へと差し掛かる、やや手前の風貌。手に持つ扇は清純の白。何かの羽で造られた、羽毛扇。被る仕官帽子は清楚ながらも精巧に織られた品であり、持ち主の高貴さに直結するかのような出で立ちで

あつた。

『伏龍、孔明』

4 マナで、白の【伝説】【人間】【アドバイザー】2 / 2

これが場に居る限り、このカードを除く、自軍全てのクリーチャーに＋1 / ＋1の修正を与える。

(ええと……字は……孔明、だったかな……)

文若が言うには、自分よりも西方の地に詳しく、自身に勝るとも劣らない智謀を巡ら

す彼ならば、今回の策をより確実なものとしてくれるだろう。との推挙からの召喚である。それは俺としても賛同するものであり、知略は勿論の事、彼がカードとして製作された際に付与された能力には、今回の作戦の成功を、より後押しするものだろうと想像出来たからだ。

……あれ、史実の孔明って、軍の議決権握ったの、君主……劉備が死んだ後……相当後半からじゃなかったか……そもそも史実の孔明って凄くパッとしなげフンゲフン……となると、演戲基準の孔明さんなんだろうか。

と、こうしてしつかり御出でになって頂いた訳なのだが、確かに驚く現象だとは思いますが、何故静止の声が掛けられたのが分からなかった。出た瞬間に爆発が起こるとか、雷や毒を撒き散らすとかの「C I P (C o m e i n t o p l a y の略称・場に出た時に誘発する能力)」を持つてる訳では無いので、手遅れだとばかりに目を片手で覆い隠すリンの仕草に、なんで？ と首を傾げる。

「やっぱ疲れんなあこれ……。……で、手遅れっぽいのは理解したけど、何でストップ掛けられたのかが不明なんですが」

「ああ、もう……。君は自分の力の異常性……はそこそこ理解しているから……。その異常性を見た時の周りの反応を、もう少し予測してから使ってくれないか」

「……………んん？」

その台詞は「稲妻のドラゴン」を呼び出した時に出てくるのが適切なタイミングだと思うのだが、あの時は驚きのあまりに言い出す機会を逃していた故の、今この時の忠告なのだろうか。

答えの出ぬまましばらく悩んでいると、一向に言葉を発しない俺の態度に、リンは業を煮やしたように。このままでは、幾ら待ってもこちらの考えが答えに達しないと踏んだのだろう。呆れながらも正解を教えてくれた。

「君はね、故人を蘇らせ、現界させていたんだよ？　それがどれだけ異常な……有り得ない異能なのか、考えた事はあるのかい？」

「蘇らせたって……」

言われ、これまでの行いが点として思い浮かび、しばらくの後に線へと繋がった。

（ああ、今大体西暦……五百年前後だったか？　その頃の文若さんって、もう故人だもんなあ。アレキサンダー大王知ってるリンなら、その手の歴史を知ってても不思議じゃない、か）

呼び出したという認識はあっても、生き返らせたという考えは無かった。俺としての蘇りは、墓地に送られたクリーチャー等を再び場に戻す行為であり、伝記で記される様な御仁達を召喚する行為は、それに該当するものでは無く。

（……………【ポータル三国志】を使えば、ほぼ全て、死者蘇生に当てはまる………のか）

イメージ的に、地霊殿の主の想起系スペルや、亡霊姫の再迷・幻想郷の黄泉還りが思
い起こされる。

ただ、その辺は色々と思うところがあった。文若と言ひ、孔明と言ひ、こちらの世界
の故人を招いているのか、架空の彼ら呼び出しているのか、それとも生前の世界から
なのか、などといった差だ。

(こればかりは、当人に聞いても難しいところだろうし)

最大のポイントは、魑魅魍魎、超能力や魔法の類、○○な程度の能力を筆頭とした、物
理法則ガン無視なあれやこれやを「ポータル三国志」の方々が知っているかどうか。そ
れが判明すれば、消去法によつて、俺の知る世界から呼び出した。という線は潰える事
になる……のだが……。

(ああ、でも……)

けれど、それは俺が知らないだけで、実は生前に暮らしていた世界に、その手の類が
ある可能性だってある。少なくとも、絶対に無い……とは言ひ切れないので、真偽の追
求は困難であろう。

(……無理。これ絶対分かんない。パスパス)

こほんと一息。

「まあ、それは置いといて」

諦め成分を多量に含む閑話休題を切り出した事で、リンが訝しげな顔を造る。

「周りに誰か居る訳じゃなし、リンはもう、一度見てるだろ？ …… 同胞に見られちゃ拙かったとか、か？」

ぬ、渋い顔がますます濃くなつていく。もう言葉にする気も無いようだ。くいと顎を上げ、俺の後方を見るよう指示された。

「……あ」

戻れるもんなら戻りたい。

そう思わずには居られない光景が、そこに。

「……………くつくつくつく……………」

白銀の長い前髪に隠れて目元が見えないが、眼から発光しそうな程に怪しげな雰囲気漂わせている平天大聖の姿が在らせられました。

（うわー……しまったー……）

色々と驚く事はあるんだろうが、どう見てもこの状況の真価が分かっているっぽい様子。あの孔明を見て反応しているというのは、なんの捻りも無く考えるのなら、あの平天大聖は三国志の時代を生き抜き、数々の智将、猛将、為政者等を、その目で直に見ている節がある。という事。

他の誰かであれば、似顔絵文化など無いこの地において、数百年前の故人の顔を知つ

ている人物など、存命している筈は無いのだが……まさに相手が悪かった。きちんと把握している訳ではないけれど、リンの話を聞く限りでは、百年、二百年以上の時を生き抜いてきた大妖怪である。下手すれば三国志どころか、それ以前の時代——始皇帝が存命していた頃。もしくは、更に以前から健在であつた可能性だつて……。

(話し掛けたくねえ……)

今、あれと会話を始めたら、すぐさま根掘り葉掘りされちまいそうです。

俺でも分かる程に怪しさ抜群な態度ではあるが、表面上では愉しげにされていらつしやる。こちらの身の安全という面でも、何をするにしてもマナが勿体無いという意味でも、今は放置プレイを仕掛けてみよう。触らぬ大聖に祟り無し。も少し付け加えるのなら、カードを使ったところで、それが十全に効果を發揮してくれるかは難しいところだろうし。

「ところで」

不意に、リンがこちらに声を掛けてきた。

「何だ？」

「彼……違うかな……アレ……？ は、何？」

「あ、ああ……」

平天大聖の背後に佇む、無機物の象徴。炎天下で爛々と陽光を跳ね返す表皮は、白銀。

白き王と相まって、何とも様になる絵図である。

「あれは、今朝から始まったのでした……」

「……何で語り調なんだい？」

「……突っ込みは優しさだけど、スルーしてくれるのも優しさだと思うんだ……」

「……難しい、ね」

「そうだな……」

再び、互いに溜め息。思い返すだけでも心臓に悪い。いつか良い経験だと思い返す日が来る事を願いつつ、俺は、リンへと事のあらましを説明し始めるのだった。

目覚めの朝は、とても爽やかなもので。眩しい日差しと胸に吸い込まれる新緑の空気は、大和の地の、諏訪と八坂の神が住まう神社とはまた異なつた活力に満ち満ちていた。大きな欠伸と、両手を上に挙げて、軽く背伸び。

さて。と気を取り直して辺りを見れば、小さな口をポカンを開けて、白目を剥いていらつしやる、完全に魂が抜け切っているご様子のチャイナドレス妖怪と。

(おう、やっぱでつけえッスなあ)

室内で見ているせいもあるんだろう。召喚した時から微動だにしていなっぱい状

態で、こちらのベッドに覆い被さる様に、その四肢を壁、床に接触させ、大きな体を無理矢理この部屋に押し込んだ「アーティファクト」クリーチャーの存在があったのでした。

『メムナイト』

0 マナの「アーティファクト」【構造物】クリーチャー 1/1

0 マナのクリーチャー、という時点で様々な「シナジー」が考えられ、尚且つそれが「アーティファクト」でもある。ともなれば、その活用方法は更に増える。「コンボ」に良し、「シナジー」に良し、「アーティファクト」系【ビートダウン】に良しと、それを好むデツキには重宝する存在である。

無機質ながらも何処か愛嬌を感じるお顔……顔？ ……まあ、体の真ん中辺にある紋様がそれ系だと思っておこう。

(どうもありがとう)

顔を構成する部位の何処にも類似点が見られない……分からなかったクリーチャー様であるが、爆睡寸前での曖昧な指示の下、『守って下さい』と言った後にさっさと意識を手放した身としては、そんな漠然とした指示にであつても、文句一つ言わずに一晩中警護に当たってくれたのだから、お礼の一つも言いたくなるというものだ。

言葉に対して返つて来る意思すら無かつたのは、「ムムナイト」が純粹な「アーティファクト」クリーチャー……ロボットであるからだろうか。やや物足りない冷たさを覚えるが、感謝自体は無駄ではない筈だ。今後とも、機会があればお礼は欠かさない様にしましょう。と、小さく決意。メタルな外見と巨大な鋼鉄……何かの金属な体に『2/2以上だろこれ』と、疑念を覚えるが、伏魔殿の内部で五体満足のまま、一晩無事に一泊出来たようなので、些細な事かと思いつつ、安堵の息を零した。

その後は、起こすのも忍びないかと気絶した白蛇妖怪（人型）さんをベッドへと運ぶ。よっぽど疲れていたんだろう。こちらが触つても微塵も反応する素振りすら無かつ

たので、胸元&足元の裾から艶かしく覗く女体に、込み上がるムラムラを目と意識を反らす事で抑えながら、布団を掛ける。昨日の流れから考えるに、どう見ても籠絡する気概満々だったとは思うのだが、昨晚のガクブルした姿に同情し、せめてゆつくり寝てくれ、と配慮してみました。

プチ紳士振りを発揮しつつ、据え膳残した的に後ろ髪を引かれながらも、悠々と二人同時に行き来可能な二枚扉の片側を押して、トイレ探索の旅への第一歩を踏み出してみれば。

「ツ―」

結構心臓に悪かった。三メートルを超えていそうな身長。ジャイアントBABBAやハルクHOGANも真つ青な凶体のムキムキさん。何処ぞの市長も真つ青な、ダブルラリアットとか似合いそうな体格は、深緑を基調とした筒袖鎧に包まれながら、山の如く静観を決め込む燻し銀。そんな第一印象の、首から下が人型の、牛の頭の妖怪と、馬の頭の妖怪の計二名が、それぞれ門番の如く左右に直立していらっしやいましたので。

こちらを警護……というよりは、退室したり逃亡したりした場合には、報告なり一発ぶちかますなりする算段だったのだろう。何せ、扉の左右に立つてはいるものの、それはこちらを背にして、ではなく、扉に目を向けつつ佇んでいたのだから。……あれだ、彼らは門番です。但し牢獄の。みたいな。

今、こうして扉を開くまでに何か下手な事でもしていれば、一瞬で突貫して来たんじゃないかと思えてならないのだが……もし、昨晚、白蛇さんと事に及んでいたらと思うと、初行為がある意味で羞恥プレイという、難易度の高いものになっていたのであろう。牛&馬頭妖怪は二人共々、腰の両側に、柄の短く、先端に向かうに連れて幅広になるのが特徴な、中国刀……と鉦を合わせたような刀が据えられていた。燃えよド○ゴンで見たな。とか思いつつ、威圧感に気圧されて、思わず眼を見開いた。多分、顔も強張っていたんじゃないかと思う。

寝起きドツキリ的な展開だったので、心の準備も何もあつたもんじゃねえ。妖怪の罠に乗り込んで来た俺が油断し過ぎなだけな気はしますが、相手に不満をぶつきたい気分になった。

(……って、いつの間に)

視界の左右。俺の体を包む様に、白銀の腕と足が、何かあればすぐさま防御体勢へと移行出来るよう、某漫画のスタンド宛らにスタンバっていた。

これには、無双出来そうな体格の牛馬達も面を食らったようだ。お前は誰だと、その顔にありありと書いてある。

妖怪……馬や牛の表情なぞ未経験もいいところであつたけれど、彼らがとても驚いているのだけは理解出来た。

この事態をどういう風に捉えて良いのか判断付きかねる、といった困惑の表情を浮かべ、武器を向けた方が良いのか悪いのか、微妙な姿勢で固まっている。

ただ悲しいかな、俺の後方の存在は1/1。見た目が金属で超硬そうではあるけれど、何かあれば簡単に破壊されてしまう可能性が高いのだ。……これが勇丸以下とか、俄かに信じられんです。

相手が戸惑っている内に、白蛇チャイナドレス妖怪を電撃で吹っ飛ばした時の様に、不敵に、悠然と。少なくとも表面上はそう見えるように、態度と気分を入れ替えた。

『お早う。職に励んでくれてる様で何よりだ。厠は何処かな』

咄嗟にやった割には、様になってたんじやないかと思う。声こそ聞こえなかったが、啞然としつつ指先を通路の奥へと向けられ、「メムナイト」に待機を指示。それなりの重機一台くらいなら通過出来そうな、幅も高さもある広い通路を、何に気負う風も見せず進み、そそくさと目的を達成した。

良かった、トイレがちゃんとあって。そう安堵しながら、異国の雰囲気を感じて味わいつつ、足早に安全地帯である「アーティファクト」クリーチャーの元へと帰還を指していたのだが。

『朝餉は如何でしょうか』

ゴール目前。牛馬妖怪を左右後方に控えさせた状態で、王座の間での初対面の時と同

様の格好をした平天大聖が、同じく、出会った時と同様の笑みを湛えたままに、朝食の誘いを申し出てくれた。……どうやら、こっちの用事を済ませている間に報告されていたようである。

安全地帯一步手前の強敵とか狙い過ぎでしょう。と、見ず知らずの運命に悪態を吐きつつ、『ええ、喜んで』と瞬時に返せたのは、それなりに進歩を実感出来たエピソードでした。

「うむ。白蛇チャイナ妖怪（暫定）の格好やら宮殿の造りとか見るに、あそこはちゆうご……ウイリク様が居た辺りとは文化が違うんだろうな。持て成された朝食がな？ お粥っぽいんだが、トッピングにザーサイとか青葱とか、あ、蒸した鶏肉っぽいのもあったな。そんなのを好みで色々入れると、味の幅が広がる広がる。元が薄味だっただけに、色々入れていく内に、朝食が楽しくなってきた。お陰で胃もたれしそうなくらいに食べちゃったよ。お粥じゃなかったら、今頃腹痛だったな。ははははは」

「……」

何度目かのジト目がとつてもキュート。将来的には、紅白の巫女様辺りにも睨まれてみたい。

……うん、そうだね。聞きたいのはそこじゃないよね。

「……食事が済んだ段階で、事前に取り決めてたこの場所に来る為に、また【ジャンプ】使つて来ようかと思つてたんだけど、平天大聖に突っ込まれたのよ。【稲妻のドラゴン】に乗るんじゃないのか、つて。どうも便乗したかつたつぽいんだわ。一応、【稲妻のドラゴン】は雲の水面に待機中。的な演出しておいたから、還した、つてのは知られちゃ拙いんで、『あなた嫌われてますんで』とかテキストに誤魔化し入れつつ……」

目線を、平天大聖の傍で控えている【メモナイト】へと向けて。

「仕方ないから代案で、還そうと思つてた【メモナイト】に、俺の代わりに【ジャンプ】付与して、ここまで来ました。……これで一通りの説明は終わつただけど、何か質問ある？」

「【ジャンプ】を付与した、という意味は？」

あれ、予想外の方向から言葉が……。

(つて、ヤバイかこれ)

まだ、その手の情報は伝えてない&伝える気はないんだつた。というか、大和での暮

らしの時と同様、今のところは誰にも切り札……命綱である、集められた魔法を使う程度の能力、を話す意思は無い。【ジャンプ】を文字通りの、飛び跳ねる意味で受け取ってくれたようで、これくらいならば、何とか誤魔化せる範囲だと思いたい。

「……今の無しで。【メモナイト】の脚力を強化して、こっちまで来ました」

「別に言いたくないなら良いんだ。僕も深く追求する気はないから。ちよつと気になった程度のものだしね。……ただ、君の言動にはそういう注意力が散漫だから、気をつけ方が良いと思うよ。今までも何度か、そういう疑問点はあったから」

「……うい、ありがと」

はは……大分前に、神奈子さんに言われた事が実践出来てねえ……。

どうにも、話術や喋り方といった、知識量と、巡りの早さに比重が置かれる分野は苦手である。多分、何か痛い目みないと、完全に決意するには至らないだろう。

(身から出た錆。を経験しなきゃ本腰にならないとか……)

心の余裕が成せる業……とかポジティブに考えてみても、結果は好転しない。まあ、一番の理由は、これがバレたとして具体的にどう影響が出るのか不明である。という点が強い。

バレたらすぐ死にます。大切なあの人が亡くなります。とか安直で分かり易い意識や認識も違ってくるけれど、大変な事になるかも。的な意味合いの強いあやふやな段

階では、今一つ、こう……。

転生時に頂いた初期スキル、怠惰の抑制。あれがその手の勤勉さに磨きを掛けてくれるかと思つた時期もあつたが、あれはあくまで飽きるのを抑止するだけであつて、嫌悪、忌避の制御とは、また違うもの。どうやら自分の勉強嫌いは、飽き、から派生しているものではなく、嫌い、と同類らしい。

この辺の基本性能も何かの弾みで変化するんだらうか。だとしたら、晴耕雨読な日々とか送つてみたい。無論、雨読の部分が勉学的な意味で。

(……そうだ)

折角、三国志のお歴々を呼び出せると判明したのだ。これが終わつたら、大和への帰り道がてら、それら大先生に色々と教えを……教え……勉強……。

簿記三級取るのも一苦労だった俺が、言動改革の為の勉強……。

(先、長そうだな……)

……それらも感情も含めて、矯正をしていこうかと思ひます。

「……大丈夫かい？」

心配を形にしたような顔で、リンの小さな手が俺の服の裾を掴む。余程情けない表情であつたようだ。

ポンと頭に手を置いて、ぐりぐりと。撫で心地の良さに勇丸とはまた別の感触に満足

しつつ、馬鹿な悩みで心配掛けた事に心苦しさを覚える。

うーん、良い娘ねー、この子。まあこつちから窃盗働いたって気負いや、自分の目的の為に手伝つてくれているから、という気概もあるんだろうが。

(良く気がつく。フォローも上手。おまけ……じゃねえな……更には、まだまだちつこいが、美人さんと来たもんだ。将来は引く手数多だろうな〜)

せめて肉体年齢プラス十歳くらい重ねてからだろうけど。……いや、それでも俺の感覚からすれば充分に犯罪だ。つい最近、自らそれをブレイクした気はしますが。

って、おろ。リンの顔が完熟トマト。

「何を言い出すんだ君は！」

「何って……？」

……まさか口に出してた!? 心の声駄々漏れ!?

心中吐露とか、満員電車の密着状態で密接したオバさんの香水キツ過ぎて、『臭っ!』と咄嗟に言つた時くらいいしか無いぞ!

「何驚いているのさ! 思いつきり口に出していたじゃないか! からかうにしても、もつと時と場所を考えてくれ!」

「何だと!? 俺は嘘言つた覚えはねえぞ二重の意味で! からかつてなど、断じて無い!」

「否定する場所はそこなのかい!?」

「分かつちやいるが、恥ずかしさで穴でも掘って隠れたい気分なので！ 喜べ、リン！
これが俺の逆ギレだ！」

「それの一体何を喜んだら良いのさ！」

「……さあ？」

「——ツ!!」

——真夏の太陽が頭部を焼く中、その気温に負けないくらいの音量が辺りに響く。こんな掛け合いを少し前に行ったような気もするが、多分、猛暑にでも当てられたのだろう。

一頻り声を荒げ終えた頃。ようやく俺は、周りへと突っ込みを入れた。

「……結局、喉が枯れそうになるまで声出してたけど、あなた方は止める気ないのかね」
止めるタイミングが突っ込み待ちな部分はありませんでしたが、よもや完全スルーとは……。

荒く肩を上下させるリンと俺を眺める形で、平天大聖はニヤニヤとした……もう出会ってからほぼずつとしていた表情を浮かべていた。ここまで来るとあの表情がデフォなんじゃないかと思えてならないけれど、白蛇妖怪さん吹っ飛ばした時に見せた獠猛な笑みを思い返すに、やっぱり、今のこの状況がそうさせているだけなんだろう。

「若いとは、何と粗野で、瑞々しいものか。久方ぶりに、故郷の香りを嗅ぎたくなりましたよ」

……まあこつちは概ね予想通りなんですけどね。

（孔明さんが、さつきから無言&無反応なんだよなあ）

馬鹿馬鹿し過ぎて、呆れられてしまったのだろうか。文若の時には切羽詰った対応であつたので必死さを読み取ってもらえたんだろうが、今のこの状況は、馬鹿騒ぎ以外の何だというのだろうか。召喚者とはいえ若輩者が目の前で悪ふざけ継続中なのだから、良い印象ではない筈。今の今まで、俺が呼び出した方々とは良好な関係を築けていたのに、今回も。と、思い込んでいたのだが、とうとうそれを改める機会が巡って来た――

「……………え？　ネズミっ？」

——ネズミの大海原に面食らつて、恐縮してしまつていただけのようである。

何？　害獣対策？　兵糧攻め？　……過去に色々あつたんですね……深くは聞かないでおこう……。

このネズミ達は味方である。その一言を切欠に、俺とリン、そして孔明の作戦会議は幕を開けるのだが。

「……死ぬな、これ」

——だが、それは一分も経たぬ内に中断させた。ここへと移動する際には、風を切つて進む方法であつたので、それなりに涼しかったけれど、こうして足を止めてしまうと、途端に体中から全ての水分が蒸発してゆきそう。諏訪の外套や月の衣服のお陰で熱射病に掛かるまでの域には達しそうに無いが……何せここは、泣く子も黙る（絶命的な意味で）、天下の猛暑地帯、砂漠。仮に俺達だけならば「ムムナイト」の日陰にでも入れば、まだ耐えられる暑さではあるけれど、この一面にひしめき合う小さな戦士達を野晒しにするのは、まさに見殺しもいいところである。

付け加えるのなら、これが俺達の目的の為だけに集つてくれたとなつては、リンの気持ちに応える云々の前に、俺の気持ちが悪くなる。横に居るリンはそうでもないが、正面に居る孔明は額に玉の汗を浮かべ、後少しで滴りそうなほどになっていた。

平天大聖は……何か蜃気楼に浮かび上がる不気味な笑みっぽくて、ますます気味が悪い。暑さには強そうです。

(出来ればもう手の内見せたくないいんだが……背に腹は変えられませんが、つと) 辺りを見回し、特に問題は無さそうだと判断。

「リン、あそこに居るネズミさん達、移動させてもらえるか。えーと……あっちの、なだらかな砂丘の方まで」

「どうかしたのかい?」

「いんや、どうかするのさ」

思わせぶりな台詞に首を捻りつつも、サツと手を上げ、移動して欲しい箇所へと指を差す。

数秒後、黒い絨毯は大移動を開始。日本の左側にあつた北国家のマスゲームなど目じゃない規模の光景に軽めに慄きながら、これで大丈夫だろうと思われる場所にまで全員が動いたのを確認し。

「何かする前に暑さで参つちや笑い話にもならないな。涼みながら会議しよう。拠点の一つでもあつた方が、今後楽だろうし」

ただ砂が広がるだけの光景を見据え、深呼吸。

軽く息を吐いて――

――召喚【頂雲の湖】

『頂雲ちよううんの湖』

【特殊地形】の一種。

【タップ】で無色のマナを二つ生み出すか、【タップ】で白か青のマナのどちらかを一つ生み出す。後者の能力を使用すると、次のターンは【アンタップ】出来なくなる。その為、大きくテンポを削ぐので、避けられる傾向の強いカード。

極一部の特殊なデツキか、使用したそのターン中に勝負を決められる【コンボ】デツキに間々用いられる場合がある。

砂漠という自然地帯は消え去った。変わり、今日の前にあるのは、生命の源を並々と湛えた別世界。全長五百メートルはありそうな水源は四方を小山に囲まれて、太陽の光が水面を通り、周囲を青へと染め上げる。

山陰あり、水源あり、と。カードゲームとしての能力は特筆すべき点の少ないものはあるが、たった一枚で砂漠での二大死亡フラグを、まずまずのレベルで回避出来る性能を持っていたので、今この環境下においては、何にも増して価値のあるカードである。

吹き抜ける風は、草原の清らかさ。この地固有の、砂の混じった、ざらつく空気などではない、新鮮な空気が辺りを駆け巡っていた。砂漠の大地は不潔ではない。寧ろ逆で、清潔とさえ言えるほどのものであるが、それを胸いっぱい吸い込みたいかと問われれば、はい、と答える者はまず居ないだろう。

【MEMナイト】は言わずもがな。【伏龍、孔明】は扇を口元に当て、瞑目。何かを考えているようだ。

予想通りの反応は、リン。可愛らしい口をあんぐりと開けて、何か言おうと動かすも、息を吸って、吐くだけしか行わず。とても驚いてくれているようで、この反応が見れるのなら、何度でもこんな事をしたくなるというものだ。

(やっぱり、誰かを驚かせるってのは気分が良いなあ)

リンが驚いてくれたのは、想定範囲内であったとしても、こちらの気分を良くしてくれる反応であり……。

「——はっはっはっはっはっ!!」

爆笑だったらどんなに良かったか。

いや、声だけならば、まさに望むべくも反応であるのだが、然もありなん。何故って、あれの眼は全くと言っていい程に笑っていない。

あれはそう、体を動かすという名目で兵器実験場へと連れ出され、そこで対峙した蓬萊山輝夜か、各種実験で色々なカードを使用していた時に見せる八意永琳の顔、瓜二つであった。

(今日は完全に無視決定！)

平天大聖の笑い声は、クリティカルにこちらの喜びを削っていく。月で【森】と【宝石鉱山】を召喚した時は、永琳さんから、皆、とても喜んでいるとの話は聞いた。

まだ【土地】の有効性を見出していなかった頃——諏訪の時には細かなクリヤーチャーを使って開墾や農作業などの手伝いをしていたけれど、【土地】系を使えば一瞬で解決する出来事も間々あったなど。

数十から数百人が、一月以上の期間を設けて行う国政レベルのお仕事を、瞬く間に達成してしまうのだから、小規模ならば兎も角、大規模な——それこそ、今こうして出

現させている【頂雲の湖】レベルのものは自重しておこうと思つていたのだが……。後ろで高らかに笑う平天大聖の笑い声に比例するように、ますますその意思を硬くする。白き王と目が合いそうになつたので、さつさと顔を前へと向け直す。留まつては何言われるか分かつたもんじやないと思ひ、思案する孔明と、驚きに固まるリンを促して、話し合うに適切だと思える場所に足を向けるのだつた。

適度な規模の岩陰を見つけ、その日よけの下で、俺陣営の面子は腰を下ろし、一息。青々とした見た目通りの、キンキンに冷えていた湖へと足を投げ入れた。良い感じで山陰と水辺が合わさつた場所へと、それぞれの足水を行いながら、何ともフリーダムな会議……。話し合いとなつた。スカートを恥ずかしそうにたくし上げ、おつかなビツクリ水面に足を浸し、冷たさに耳と尻尾の毛を逆立たせるが、ゆるゆると、それも元に戻る。「んっ。……冷たい」

喉の奥から零れるような。気持ち良さ気に吐息を漏らすリンに、何度目かの撫で繰り回したい衝動を抑えながら、ネズミ少女と同様に、裾を持ち上げ、足を入れる孔明さんを横目に見た。

まさか過去の偉人とこんな体験する事になるとは夢にも思わなかつた。水辺に足を浸し、何処か遠くを見つめる孔明に、こうしているだけならば、ここは異世界などでは

なく、何処ぞのスーパージェットバスか、静岡、沖縄といった辺りのリゾートビーチの一コマに、見えない事も無いだろう。

対して俺は、完全に横に寝そべっていた。片手&片足だけを冷却水へと突っ込んで、じりじり奪われていく体力にダルさを覚えながらも、何とか会話を継続。合計5マナの維持は、こちらの回復量を若干上回る量であったようで、こうして体を休めていても、ゆっくりと疲労の蓄積を実感するものであった。

これでも過去に比べれば大分改善されているなど。そう思える。あの頃は3マナであつても息を切らす程であり、今、同様に3マナ分の何かを維持しても、やや苦しいか。くらいの範囲に収まるものだ。

このままいけば、体力……スタミナ面だけならば、フルマラソンで上位に食い込めるのではないだろうかと思えます。予想はでっかく、五色の輪がトレードマークの大会辺りとか。

誇張だとは思いますが、思うだけならタダである。メンタルの維持は、そこそこに優先順位の高い優先事項です。

「大自然の驚異、つて奴だなあ」

……まあ、もうそろそろ現実逃避は止めようか。

静かな湖畔は、今や、真夏の海水浴場。少し眉間に皺の寄るカビっぽい臭いが辺りに

広がっているのだが、幸いにも風向きのお陰で、こちらへの直撃コースは避けられている。リンの部下達は全くそんな事など無かったけれど、あれは、彼女が指示して身を清潔に保たせているのだろうか。女の子だもんな。その辺は結構気になるだろう。某邪仙の傀儡娘もそうだったし。

地鳴りすら幻聴しそうな程に大地を埋め尽くし、激しく脈動を繰り返す、無数の小さな戦士達は、突如出現した水源に、それを飲み干さんとばかりに突貫。それでも滾々と水を湛えている【頂雲の湖】の魅力を味わい尽くす勢いで、水浴びや飲料水や遊泳に興じていらつしやる。

ただ、流石に数十万のネズミに、この水場は小さ過ぎた。湖自体の大きさはまだ余裕があるのだが、陸と水面の接する面が不足していたのだった。

墨汁が真水に溶け込む様な。一点の黒い染みが、瞬く間に、オーシャンなクリスタルブルーを、刻々と問わずスूप……一番風呂を親父に譲ったばかりに、使用后、浴槽には形容し難い浮遊物&沈殿物が漂っているのを、更に酷くさせたような環境に変化させている。

八、九十年代頃に掛けて日本の夏場で多々見られた芋洗いプール&浜辺を連想させる光景が再現され、先に進水を果たしたネズミ達は、岸边に戻るところか、次から次へと押寄せる同胞の波に攫われて、ますます【頂雲の湖】の中心部へと追い遣られていく。

元々このような土地だ。多少は彼らも泳げるだろうが、それが得意である。とは結びつかない。時間が経つにつれて、事態が悪化していく未来が予想出来た。

このままでは、と。あわや圧死&溺死による死者まで出そうな勢いであった為に、リンが一喝。この時のリンの雄姿は俺でも少し驚きました。あの平天大聖も、〔頂雲の湖〕召喚した時よりかなり弱めではあったが、驚きの表情を浮かべていた。

まあそれでも、姿はちっちゃいし声は可愛いしで、驚きから別の何かに派生する事は無かつただけでも。

今では時間制限&人数制限を設けた会員制プールモドキが設立され、水場を取り巻くように黒い渦が、今か今かと自分の番を守っている状態。

泳ぎ終えた者達は、亀の甲羅の天日干し宛らに、岩陰や、山陰で涼んで昼寝中。中には日向に寝そべり、日光浴を行うものも極少数居るが、彼らはすぐにでも水場に逆戻りする流れになるだろう。砂漠の日光は、焼き殺す満々なレーザー光線です。

後からリンに聞いた話では、壩の水源は飲み水の確保で精一杯。でもって、ここは砂漠地帯。こんな機会はそうそう訪れるものではなく、雨期に、幻の如く現れる川か水溜りくらいしか経験が無いそうで、彼らの好奇心を刺激するには、充分であったようだ。この結果は成るべくして成ったようである。

……時折水面を漂ってくる、彼らから剥がれたであろう諸々な不純物には、目を瞑る

方針で。はい。

『こんな時でもなければ、僕もあれに混ざりたいくらいだよ』

水と土の境界線が、ほぼ全て黒で埋め尽くされている内の、唯一、例外の場所。リン、孔明、俺が居座るここだけは、まるでプライベートビーチさながらに、ネズミ達は足を踏み入れる事は無かった。彼らなりの、小さな気遣いだろう。

少女はそう言つて、足を漬した冷水を高く蹴り上げた。口を尖らせ、やや拗ね気味に不貞腐れるリンに、一通り事が終わつたら、いつそ海にでも連れて行つてみたいと思う。遊泳を楽しむ風習つて昔は無かつたんじゃないかと思うのだが、そんな些細はとつとと忘れる事にした。この程度の疑問無視出来ずして、ここでの生活など誰が送れようか。

平天大聖は、同席をする気は無いようだが、全く無関心で居る気もないようで。先程からやや離れた岩場の影で、こちらの話し合いを興味深げに眺め続けている。会話の内容も聞こえているんだろう。話し難い事この上ないが、言動に注意すると意識したばかりなのだ。これくらいの一試練は乗り越えなくてはならない。良い練習だ。と思う事にした。

【魏の参謀 句踐】と同じく、孔明さんにも知り得る限りの情報を提示。それでも補えなかつた箇所を質問という方法で埋めながら、日進月歩とも思える話し合いは続く中、リンが、前々から疑問に思つていた点を挙げて来た。

曰く、文若の時に挙げていた、交渉対策を用いたからこそその、現状——この地の妖怪を統べる王が条件を呑んだのか。というものだ。

……けれど、それには首を横に振らざるを得なかった。その場合は『そういう訳じゃないんだけどな』と話を逸らしてやり過ぎたのだが。

(まさか「テレパシー」でも読み切れんとは考えてなかったもんよ)

文若の言葉に従っておいで良かった。彼も、これを意図していた訳ではないだろうが、結果は……今のところ上々。

もし、この読心術を頼りに交渉を仕掛けていたのなら、通用しない力に動転し、現状よりも、より宜しくない方向へと転がり落ちていた事だろう。

……朝食に誘われた席で、俺は、すぐさま昨晩からの案である「テレパシー」を用いて、相手の内心を探ろうとした。例の、何考えてんだか隠そうともしない怪しさを暴こうとして、である。

けれど、それは十全に効果が現れる事は無く。そういう能力なのか、そういうルールなのか。頭痛はあったものの、一般人相手には問題なく効力を発揮していたので、後者の意味合いが強いは思うけれど、平天大聖相手には、今一つ信憑性の乏しい情報しかリーディング出来なかったのだった。

尤も、かなり大雑把にはあったが、大体の道筋程度ならば、読み取れた。

——如何に自分の欲望を叶えるか。

朝食の間、こちらの言葉を吟味し、数秒の間に幾つもの思惑を巡らせ、選択し、決定していく様は、「テレパシー」の副作用によって鈍く警鐘を鳴らす頭痛の元になっていても、尚、感動を呼び起こす。

それに比べれば、今の自分は何と卑小な存在なのだ。何年掛かっても、その領域には到底……。と、痛烈に感じ取りながら、それでも平常を装って言葉を取り繕い続け。相手の思考を読み、一切の企みを曝け出す、1マナの青の「エンチャント」である「テレパシー」。

けれどそれは、やはり相手の格が上である為なのか、『ありがとう』が『あ○が○う』、『ごめんなさい』が『○め○○さい』といった具合に、急に音量を絞られたステレオか、本を読んでいたら唐突に疲れ目になってしまったような。思考の半分以上がぼやけてしまっていた。

神奈子さんに使用した【お粗末】などの効力を思い返し、これはカード能力の制限、というよりは、元々の力量差から来る結果なのかなと判断する。いやはや、この力を完全に発揮するには、こちらの地力がまだまだ不足のようである。これがきちんと効果を発揮してくれる頃には、きつと神奈子さんに一泡吹かせられるに違いない。

「——ほら、ぼーっとしていないで。疲れているのは分かるけど、君が僕達の間を取り

持ってくれないと、話が進展しないんだからね」

おっと、意識が彼方でしたか。まだまだ余裕はあるが、暑さと水の冷たさと疲労感で、寝ようと思えば、五分掛からずに実行可能な状態である。

「こりや失礼。えーと、軍隊の進行ルートの割り出し……だったかな」

「そうだよ。彼の話を統合すると、この砂漠地帯を一気に進行してくる可能性が高い。迂回するにしても、それらの道筋は直線コースの五倍以上。前々から備蓄していた物資を考慮したら、まず間違いなくそこを通過する筈、らしい」

地形が変わっていないければ。最初にそう断りを入れて、嘗て培った記憶を辿りつつ、孔明が地面に画いた砂図は、一片が二メートル程度の正方形。簡略化に簡略化を重ねた絵図であるというのに、実には的確に、諸々の要点を抑えた表記が成されたものであった。砂漠横断とか、ただの人間からすれば自殺行為にも等しいと思うんだが、砂漠の民だとか水や食料をストックしておいたから、といった方法で回避するんだろう。そうなる

と、文若が言っていた兵糧攻めという手段は、実に理に適っている。

だが。

「……何？」

孔明が語り掛けてくる。その方法では、遺恨が残るのではないかと。こちらの提示した条件は、軍を退け、女王と、民の命を守るといふ点のみ。ここは文

若と同様の流れ。

しかし今回は、彼の時の何倍も、話を突き詰める時間があつた。

何故それをしたのか。どういう手段で達成したいのか。

深く追求の及ばなかつた箇所へ焦点が当てられた会話を続け、約一時間。こうして孔明が『待つた』を申し出た時になつて、漸く俺は、この作戦の最大の欠点——リンの置かれている立場の危うさに気づけたのだつた。

肌寒い……を通り越し、衣服を脱げば、鳥肌必須の気温へと変貌した大自然であつたが、ここ「頂雲の湖」は例外である。昼の内に熱を溜め込んだ湖が、夜では天然の暖房へと役割を変えていた。時折吹く風は温かく、この分では、明日の朝まで快適な気候を約束してくれるだろう。

——見渡した景色は黒。けれどその闇には、無数の赤が色付いている。

耳を澄ませば、キイキイと。自らの力を試そうと勇む、無数の生命達。赤い星の海を

一望する高台へと登り、一瞥。月で軍隊に囲まれた時とは別種の鳥肌が、背筋を駆け巡った。

やや後方には、蜀の参謀【伏龍、孔明】。更に続く後ろ。平天大聖が腕を組み、こちらに視線を固定している。

目の前には、ネズミの群れを率いる形で、リンが直立不動を成していて。けれどその表情には、うつすらと愉悦が混ざっている。

どうやら、俺の一世一代の演説を、少しでもミスしようものなら笑ってやろうという魂胆が見え隠れ。

おいこら、お前の為にやってやってんだから、そんな、弱い者苛めみたいな事しちやいけません。そういうの悪ノリって言うんだぞ！俺がやる分には好きだけど！

……と。

こんな流れの前にそれなりに抗議をしておいたのだが、一応こういうのはメリハリが大事だということで、遊び半分というか、気持ちのケジメというか、やる気の無い学校や会社で、幾年も繰り返される年の恒例行事並のいい加減さを連想させる空気が漂っていた。

多分、孔明が俺の経験値上げる為に画策した面もあるんだろう。失敗から学べ、という気概が伝わって来ますです。はい。

(むう、端つから失敗すると思いやがってからに……。どつかのお笑いの人が言つてたと思うが、笑わせるのは良いけど、笑われるのはイマイチ釈然としないものがあるなあ) まさか、一説ぶつてみる機会が訪れる事も、相手が無数のネズミだという事も、一体誰が予想出来ようか。

もし成功すれば、これによつて士氣の高揚を狙えるのだと——失敗しても、既にネズミ達には「頂雲の湖」を出す力は見せているので、最低限の気力は確保されているらしい。彼の軍師様は何食わぬ顔で仰つてくれましたが、戦士達に送る言葉なんて、『諸君、私は戦争が(ry』とかくらいしか……。あ、実の父にヒトラーの尻尾と罵られたロボット宇宙世紀なお話とかもあつたか。

どちらにしろ、あれは両者共々、天にお召になされていた。死亡フラグだ、避けておこう。

あれはあれで大好きな演説なのだが、あれを使う事も、あれを使う機会がある事も、何にしても色々々ダメな気がします。

……あれだ。今必要なのは、雰囲気だけで良いのだ。

彼らの纏う尊大な威厳を。この者にならばと思わせる尊厳を。上が音頭を取る事で、結束が固くなる場合もあるだろう。

今俺に求められているものは、さあこれからがんばりましょう。という、要約すれば、

それだけの事。それが予行練習出来るというのだから、望外の展開ではないだろうか。

フオローしてくれる軍師先生も居る。張り合ひのある女性——女の子だが——も居る。白い人は、思考の隅に置いておくとしよう。

人間と鬼との会合の場を設けた時を思い出し、あの時に比べれば、まだ幾分かマシだろうと、気分が楽になった。

それっぽい台詞を。それっぽい態度を。それっぽい間で。多少の間違い、失敗など、その場の空気で押し切つてしまえ。

イメージは指導者。

唯一無二のカリスマを持ち、夢の先端に立つ、求心力。

彼らの思いの先に、僅かな光でも見せられるのであれば——

「——立ち向かうは我らが怨敵。名立たる生命をその元に下し、神聖の加護を得て、虫も、獣も、妖怪も、そして同胞すらも。この三千世界を須らく蹂躪する、卑しく愚かな——しかし、強大な力を持つ存在。——名を、人間」

一步、前に。

彼らに、俺の姿が良く見えるよう、進み出る。

「弱き者はただ貪られ、弄ばれ、貶され、奪われ。家畜以下、畜生にも劣ると罵られた日々。それは今この時も、この世の何処かで続き、以後も永劫と連鎖する、憎悪の坩堝

に他ならない」

左腕を開く。

大きく広げ、彼らの視線を集めるように。

「——今、それを断ち切らん！ 我ら小さき存在。幾万もの種から蔑みの目を向けられて、尚、地を這い、泥を啜り、けれど生を捨てる愚かをせず、影に潜み、闇に紛れて、深淵の縁から世界を見続けてきた、忍ぶ者である！」

右腕を開く。

空を抱くよう、左右に開けて。

「その心の奥底で、磨き続けた刃を解き放て！ 例えそれが毛程の傷も与えられぬ牙であろうとも、汝らは一にあらざ！ 単にあらざ！ 個にあらざ！ で、あるのなら！」

我らが孤などある筈が無い！ 一が駄目ならば二を。二が無駄ならば三を。三が無意味であれば、十を、百を、千を加え、積み重ね続けよう！」

手の平を握り込み、拳を作る。

硬く、硬く。そこに、皆の意思が宿るよう。

「足元を見よ！ その砂粒は小さなもの。それこそ、諸君らにとつても、まだ矮小だと言えるものだ。けれど、見よ！ 周りを見よ！ それは山を覆い、地を隠し、湖の底、遙か彼方の海をも越えて、遍く世界を埋め尽くす、最も偉大な最小である！ 小さき事は、

それ以外で補えば良いだけの事だと。そう教示している先駆者に他ならない！」

目線を、目前のリンへと注ぐ。

ネズミの大群を率いる形で、彼ら集団の最前線に立っている彼女へと。

「示すは無数。現すは力——」

大きく息を吸い込み、眼を見開き、大口を開け。

「——その眇々たる牙を以て！ 我らが敵の喉元に！ その怨恨を！ その憤怒を！ 余す事無く刻み込もうではないか!!」

夜の帳のその奥。人間の軍が来るであろう方角へと、指を差す。

「——さあ往け！ 戦士達！ 怒りの炎をその胸に灯し、その身を焦がす熱が潰えるその時まで！ 煌々と輝く、暗き復讐の刃を振るい続けようぞ!!」

世界が動く。

湖を囲む小山の一角を、瞬く間に削り切る勢いの、黒い津波。

この世の終わり。

そう感じられる光景は、闇夜であつても尚赤黒く蠢く大地によつて、刻々と移り変わり。

——滑り込む様に首筋へと差し込まれた羽毛扇。

肌触りは柔らかであったというのに、俺にとってとはどんな刃物よりも切れ味の鋭い、死神の鎌にも見えて。

「——この、馬鹿っ!!」

焦りを多分に含んだ怒気は、小柄な少女から発せられたもの。

去り行く戦士達を指差しながら、どうするんだと涙目で訴えるリンとは正反対に、後方で眺めていたであろう、この地の妖怪の纏め役は、声高らかに……それこそ、純粹に楽しさか感じ取れない笑い声——爆笑を夜空へと木霊させている。

啞然とするこちらを他所に、唯一冷静……あ、溜め息聞こえた……を漏らす、孔明さん。首に当てていた扇を降し、何やら思案をし始めた。

(……あれ、おかしいな)

ネズミの皆さん、軍隊どころか、このままウイリクさんの国すら滅ぼしそうな勢いなんです。というか、目的地とか作戦内容とかその他諸々、まだ何にも伝えてない。演説終わった後に伝えようと思っていたものだし。

そもそもが、直接戦闘を仕掛ける、という方針は、今回不採用になったんだけども。豚も煽てりや木に登る。

けれど俺の場合は、気分が有頂天になると、宜しくない方面に昇ってしまうようで。

……そろそろ本気で泣き出しそうなりんに、ゾクリと、ヤバ気な感情(苛めっ子気質)

が起き上がるのを捻じ伏せる。

とりあえず事態の沈静化をしなければと。こりやカード使わなきや止められないなと考えているところに、孔明の案で使う予定であったものを、実験がてら、使用する事にした。

「……ほんとに、彼で大丈夫なのかな……」

背後。リンの消え入りそうな眩きに、見えない鍬が突き刺さる。

いやこれ、僅かながら、君にも原因の一端があると思うんですが。人をからかおうとした罰です。なんて直で言えたらそれはそれで楽そうだけど。それはそれで子供相手にムキになる大人みたいで情けない。……間違はなく原因は俺にあるのだから。

匙加減の難しさをしみじみと感じながら——方向性を間違えただけですが——、ピタリ……とまでは行かなかったが、しっかりと停滞してくれている……と思われるネズミ達を見る。

しっかりと効果を發揮してくれたカードの力に満足しつつ、煽り過ぎた事への謝罪と、孔明先生の作戦を通達。

全員に指示が行き届くまでには時間を要したが、何とか伝え終えたようで、こちらの『開始!』の合図と同時に、寸足らずの戦士達は、興奮冷めやらぬ様子のままテキパキとした動きで、孔明と文若の共同作戦を実行し始めたのだった。

……能力使用時。

例の如く、平天大聖の笑みが濃くなったのは、もはや詳細に語るまでも無いだろう。

砂に突き立つ音は、後方に点々と、その痕跡を残し続けている。馬車やソリといったものは使用出来ず、必然、これら環境に強い四足動物、中央アジアにて多く分布する、通称フタコブラクダに重点が置かれ、その保有数は財へと直結し、場合によつてはそれ一頭で、大人が一月は暮らせるだけの資金にもなるもの。

気の遠くなる様な先の話。野生で暮らすものの内、その生存数が千を切り、数階あるカテゴリ——希少、危急、などの言葉が続く内の絶滅一步手前……絶滅危惧種に部類分けされる生物。

それが、実に八千。時期を見計らい、全て売り払えば、小国程度ならば容易く手中に収められるだけの財産が、広大な砂丘をゆうゆうと突き進んでいた。

それに従うは、人間。浅黒い、あるいは黒と言ひ切れる肌を持つその者達は、全身を

しっかりと薄手の外套で包み込み、地面を焼く熱線から、その身を防護している。その手には、各々一本の棒——身の丈の倍以上もある武器、槍を持ち、引き摺る形で砂のキャンパスに足跡と線を描きながら、黙々と歩き続けていた。

総数、四万に届く、大軍隊。白黄の平面を邁進する人間の軍隊は、恐らく、どの同種よりも優れた戦闘能力を有している。

「———**■**○×**▲**!!」

その集団の先頭に立つ影は、歴戦の風貌。真紅の袈裟をタスキ状に身に付けて、同色の帽子を被り、腰に下げた曲剣は、適度な、それでいて華やかな装飾が施された一品。跨ったラクダも同様に着飾られており、細部に渡って手が込んだ匠が見て取れた。一般の兵とは明らかに異なるその者は、後方に連なる人々に、怒号に近い口調で指示を飛ばす。

キビキビと。何かに攻め立てられるように、三分にも満たぬ間に、前後二列の二本線を引く形で整列——陣形を形成。

彼らの手には、一抱え程はある、白い布に包まれた棒が握られていた。

その片側。棒の先端を、赤帽の者の指示通り、列の右側へと向けた。太陽が砂を焼く音すら聞こえそうな中、その熱砂が蠢く音を、徐々に人々は耳にする。

固唾を呑み、額の汗すら拭わずに。異音——砂を掻き分ける振動は、とうとう形と

なつて、彼らの前に姿を現した。

陽光を反射する甲殻は、茶。攻城兵器すら防ぐ堅牢さを、刺々しい表面に刻む鎧。

なればその手は、劍か槍か。二対の刃物が合わさった構造の腕——鍔は、小さな民家ならば、一度で真つ二つにし得る程に、巨大。

必然、それを支える体も、その雄々しい蟹鍔に見合うだけの体躯であつた。

けれど、それは蟹ではない。

一本の尾。その先端には、刺されば、死ぬ事は無くとも、激しい頭痛と全身の痺れは免れぬであろう猛毒を備えた針を持つ、巨大な砂蠍。

嘗て。

釈迦如来に弟子入りするも、素行が祟り、遂には窘めようとした釈迦の手を、猛毒の尾を以つて一突きしてしまふという逸話を持つ荒くれ者。

琵琶精とも称される、大妖怪に届かんとする力量を持つ者。の、同族。砂漠地帯で出会つたのであれば、まず助からないであろう熱砂の狩人は——。

——けたたましいまでに空気を震わす、燃え上がる煙硝の産声。続いて聞こえる、硬質物の破砕音。それは幾つも鳴り響き、たちどころに砂蠍の体を蜂の巣へと作り変える。鈍器を弾き、大劍にも一步も引かず、千の矢の雨を容易く凌ぐ甲殻は、何かの音と

共に、その役割を果たす事無く、粉微塵に碎かれていく。

その者が、疑問に思う間すら無い。ご馳走が軋がり込んで来たと思ひ、嬉々として襲い掛かった砂漠の山立は、哀れ。その美味そうな獲物が発した音によつて、容易く食い千切られ、打ち捨てられてしまった。

その音が三十に届く頃になり、穴だらけとなつた妖怪の骸を見下ろして、指示を下した赤帽の人間は、勝ち鬨を上げる。

連なつて響く、歓声。これを仕留めるには千単位の間が結束しなければ討伐不可能であつたというのに、これである。

歓声を上げながら骸へと近寄つて、ある者は笑みを、ある者はしげしげと眺め、残りの全てが朽ち果てた死体を、まだ足りぬと、何度も何度も足の裏で踏みつけていた。これに襲われた者、数知れず。喰われた家族、身内も、計り知れない。

積年の恨みを晴らした達成感に突き動かされて喜びを表現する者達は。

一方から見れば、英雄達の勝ち鬨であり。

一方から見れば、死体に群がる、蠅か蛆のようでもあつた。

一頻りの宴は終わり、赤帽の号令によつて、彼らは再び行軍を開始する。

彼らの表情は明るい。これならば。という気持ちが入み上がって来ているのだろう。強国と呼ばれる者達の悉くを打ち払い、追い遣った相手に戦を仕掛けようとしていたのだ。その懸念と、それが払拭されたこの反応は、当然のものだと言える。

手にした白い棒——持ち易い様にと巻かれた手拭いの中心は、筒。三人一組で運用する、彼らの間では火筒と呼ばれるそれは、燃える土によつて一定上の重量の何かを撃ち出し、対象へと飛ばす、鉄砲の先駆け——飛発の類。

だが、それだけならば、あの砂蠅を討伐するには至らない。あれの強固な表皮は、後の時代。対物、あるいは対戦車ライフルと呼ばれる銃器が発揮する力に並ぶ域に到達しなければ、貫くに値せず。

他の誰かが同様の物を用意し、同様の行動を取ったのであれば、甲高い音と共に撃ち出した物は弾かれ、無残な結果を残すだろう。

ならば何故、あれは、その甲殻を撃ち貫かれたのか。

——答えは、撃ち出したものにある。

松の実程度の大きさの金属——ただの鉄の弾には、僅かに細工が施されていた。何処かの国の言葉で書かれたそれは短く、しかし、その意味がしっかりと理解出来るもの。

『魔を滅せよ』

とある神が直々に祝福儀礼を施した銃弾は、狼男や吸血鬼に用いる銀の武器よりも尚

強い効果をもたらす、妖怪、あるいは悪魔といった邪な者達にとっての、必滅の刃。どうすれば、それを用意出来るのか。どうやれば、それが万にも及ぶ数を確保可能なのか。それを疑問に思う者は居らず、誰も答えを知らうとしない。

それを成した一人の商人は、何処とも知れない場所。誰も知り得ぬ地にて、一人。万人に向けていた温和な笑みを……まるで、悲劇も喜劇だと言わんばかりの有様で、一変たりとも違える事なく、いつまでも柔和に綻ばせていた。

48 Awakening

『出来んのそれ?』

あまりに予想外な答えであつたので、思わず、素の口調をあの諸葛孔明にぶつけてしまった。無礼千万甚だしかつたのだが、それを気にする孔明でも、それに気づく俺でも無かつた（後で気づいたので謝っておきました）。

肯定の意を示し、ゆっくりと、こちらにも分かる言葉を選び、懇切丁寧に策の説明を始め。

俺が呼び出した者達との意思疎通の手段は、念話。それは、相手の概念が入ってくるという状態に近いもの……で、あるというのに、伏龍とまで呼ばれた軍師の言葉と思考は、あの平天大聖とはまた違う系統の智謀を目の当たりにするのに充分であつた。

答えを教えてもらつても、まだ理解出来ないなど、久しく経験していなかった。文若の時にはここまではなかつたのだが、二人の作戦の概要を一直線で結ぼうとすると

……そう。点と点が繋がらない、というニュアンスが近いのかもしれない。まるで、旧作と新作の白黒魔法使いが同様の存在に思えないような感覚。あまりに難解であったので、段々と脳が思考を拒否し始め、『ビーム撃てませんか?』、『はわわって言ってみて下さい』なんて脇道の思考に逸れそうになるのを懸命に耐えつつ得た答えを要約すると、今までの作戦に、新たに一つ。

——相手に、こちらの存在を感じさせてはいけない。

そんな条件が追加されたのだった。

……ただ、その結論を下した辺りで、あれ、これつてもつと解説を簡略化出来たんじゃね? と思う事、頻りであった。

説明がくどいというか、詳細に話そうとして余計な情報も提示し過ぎているというか、話す行為を楽しんでいるというか。何となく、出身的にも、片腕包帯で巻かれている仙人見習いさんか、寺小屋で教師などしてらっしゃる方々を連想させるものがある。

『おっと、また悪い癖が』

そう最後に聞こえたのは、気のせいであった……と、思う事にします。

そうして始まる、リンやネズミ達主体の、一世一代の大プロジェクト。元々微々たる力のネズミ達であるが、何せ今は、あの「伏龍、孔明」がこの陣営には加わっている。

彼の常駐能力である、自軍全てのクリーチャーに＋１／＋１修正。自軍——神奈子さんが国を治めるようになったら頃から、触れる機会が出てきた項目。MTGに則つて言うのなら、『あなたがコントロールする○○は○○となる』という文面。正確な条件は不明だが、どうにもこの「あなたがコントロールする」という条件は、こちら——俺の考えに従う意思があるか否か。であるようなのだ。

効果範囲は未だに何処までか分からなかったが、着々と進みつつあるネズミ達の行動の成果を見るに、決して狭い範囲では無さそうだと思う。

その間、俺は何をしているのかと言えば、ほぼずっと横になって、睡眠を取り続けている。

日本童話の三年寝太郎にも迫るのでは。と、我が事ながら思ったものだ。5マナの維持は、こちらの疲労回復速度を若干上回っているようで、何もせずに居ては、真綿で首を締められるように、過労死に向かって着々と一步を刻んでしまう。

このままでは拙い。

よって、体力回復……疲労改善の効果がある「アンタップ」系のカードを使おうとしたのだが、何も、疲れる&疲れているのは自分だけではないのだ。

テキパキと動き回る灰色戦士達が視界に入る。もつと彼らの為に……どうすれば助力となるのだろうか。

その結果。

『……みんな元気になれば、色々捗るよな』

思い付きから零れた、とある「エンチャント」カードの維持によって、一日のサイクルに、バッテリー残量減少による強制休止モード突入台と、フル充電のループが組み込まれる事になるのだった。

——そして、そんな憂鬱な日々も、もうすぐ終わり。

今日で四日目。【頂雲の湖】の脇で工事監督宛らに指揮をするのも、最後を迎えようと猛進中。順調にいけば、明日中の正午頃には到着するであろう数万人のご一行歓迎の

為、既に作戦は最終段階を通り越し、完成後の見直し工程へと突入を果たしている。

約五十万のネズミとはいえ、現在の作戦を完遂させるには時間が足りなかったようなのだが、そこは孔明によって付与されている全体修正と、「アンタップ」効果を引き起こす【エンチャント】が補ってくれた。

例え彼らの元々の力がゼロであったとしても、この+1/+1というのは、実際に付与されてみると、目を見張るものがある。【伏龍、孔明】と【今田家の獵犬、勇丸】が同性能のパワー&タフネスを持っているのだと思うと、同じ数値を持つ対象によっても差異が生まれるのだろうか。などと漠然と考えていたのだが……。

少な目に見積もっても、+1/+1は成人男性程度か、それ以上の力ではないだろうか。多分、+2/+2レベルになると、優秀な兵士とか手練れの戦士とか、その手の枕詞がドッキングされるんじゃないかと予想しつつ、まさにその+2/+2である【伏龍、孔明】を見て、疑念を募らせる。

あんな細い体の何処にそんな力が……と思いつつも、同数値でありながらも八咫鴉を二体落とした勇丸が居たな、と。そういうものかと割り切った。

見た目に騙されちゃいけません。特にここは、キャラの見た目と年齢が結びつかない世界観である故に。……綿月……輝夜……永琳……諏訪&神奈……。これ以上の追求は無しにしておきましょう。そうしましょう。

平均男性よりも上の力を与えられたであろう彼ら小型げっ歯類は、圧巻の一言に尽きる労働力を魅せつける。

単純に考えて、やや屈強な人間の戦士レベルが、約五十万。それが、ほぼ絶え間なく労働に従事しているのだから、これが+1/+1ではなく+2/+2などであれば、人類最大だと思われる建造物、万里の長城なりが、三日三晩で完成するレベルの労働力なのかもしれない。

更には、駄目押しとばかりにとある【アントップ】効果を引き起こす【エンチャント】を使用中。元々長期活動に向いている彼らではないので、多少は異なるけれど、疲労困憊の頃合を見計らったかのようにスタミナゲージが全回復するという、素晴らしい効果をもたらしてくれている。

日本の高度経済成長期も終わった、八十年代頃。とある日本企業が、実際にピラミッドを造るのならば、一日に作業に当たる最大人数は三千五百人との計算で五年程掛かる。と言っていた……のであったか。重機による労働力の削減も当然あるのだろうけれど、だとしても、常時五十万人近い労働力を投入し、維持していると言っても過言ではない現状は、突っ込み所満載のこの考え方であったとしても、決して軽々しく見る事は出来ない作業効率であろう。

まあ、尤も。一番の要は、『人間には不可能なんじゃ……』と思える数を効率良く動か

し続けている【伏龍、孔明】と、彼の指示を読み取り、それを通訳した俺の声を聞くや否や、的確&迅速に仲間達へと飛ばすリンであるのは、言うまでもない。

『型が分かれば、そう難しいものではないよ。ここは任せて……』と、言いたいけれど、何か分からない事が起こったら、その時は声を掛けさせてもらおうとするよ』

作業開始日の日没頃には、とうとう孔明のジェスチャーのみで内容を察するリンに、少しの寂しさと、驚きの声を上げたものだ。

けれど、お陰で後半は睡眠を充分に取る事が出来た。これならば、目標の達成も実に容易である……など物事が簡単に運ぶかと思えば、たつた一つではあったが、決して無視出来ない問題が、俺達の前に立ち塞がる事になった。

それは文字通りの死活問題。何のことは無い。単純にして明解なそれは、衣、食、住、の内の、真ん中の項目である。

『僕達も、そこまで先見の眼が無い訳じゃない。巢に帰らせてもらえるなら、十日は持ちこたえられるかな』

一応は、ご実家の方にある程度の備蓄があるようで。この点は、リンや孔明は当然の如く議題に上げていた。唯一俺だけがその問題点に至らなかつたのは、今の今まで、食に関して不自由した事が無い為……だと思いたい。数日程度なら、飲まず……とまではいかないまでも、喰わず、での生活は可能だと。事が終われば。あるいは、場合によつ

ては途中でマイホームに帰還して、備蓄を消費した後に、再び戻ってくる算段であったようだった。孔明の作戦を聞くに、当初は、作業組、移動組、食事組、休憩組の四つでローテーション組んで回す予定だったらしい。

けれど、パッと聞いただけでも「移動」という項目は無駄な様な気がして、「アンタツプ」の効果を知っているこちらとしては、更に「休憩」という項目も省けそうだと思います。『じゅ……三十分待つて！ それまでに何か考えるからー！』

ビシツと手を前に出して言い切ったのだが、どうにも情けない切り出し方であった。何よりもまず、食べるもの。リンの部下達の食事確保の時ですらひいひい言っていた身としては、五十万の食の用意など、何処ぞの黒い翼の生えた鴉の文屋が挑む撮影物語で、これも何処ぞの月のお姫様の寺閨連の一発撮影に成功するようなものだろう。

何か例えが違う気もするけれど、「ジャンドールの鞍袋」を用いての飯確保は、とてもではないが、この数の胃袋を満たすには不可能だ。……と言いたいのだと察して欲しい。

選択肢の一つに、何か巨大なクリーチャー（食べられそうな奴）を供物として……なんて道も浮かんだが、ゼロマナで良さ気な巨大クリーチャーは「アーティファクト」しか居らず、当然、そんなものは幾ら悪食ネズミさん達とはいえ、一般の生き物が摂取出来る筈も無く。

やっぱ「土地」になるよなあ、と。思考が方々に巡った割には、答えを導き出すのに、然して時間を要しなかった。

ご飯、米、野菜、穀物。肉、動物、家畜、牧場。それっぽい単語を思い浮かべ、片っ端から、MTG関係を占める脳細胞と照合していく。これが戦鬪面であれば、まだ色々と思いついた単語はあるのだが、食に関する観点からMTGを見た事など無かつたので、困難を極めた。

そういう点から考えると、「ジャンドールの鞆袋」を連想出来たのは、一種の奇跡。今でも時折、そう思う。

いつそ野菜畑、酒池肉林、なんて土地があつても良かったのではないだろうか。なんて理不尽な欲望が、ゆつくりと鎌首をもたげ始めた頃になり。

『……あ、あつたかも』

肉、野菜、と続く、もう一つの項目に行き付いたのだった。

「それじゃあ、また頂いてくるよ」

「了解」

ひらひらと手を振るのにも、もう慣れたものだ。

こちらとしては、ジャン袋を使わずとも、食事に関しては問題は無い。文字通りに近い意味で、霞を食って栄養補給の点をクリア。このところは衣食住に恵まれていたので使う機会は無かったが、こうしてサバイバル方面へと陥れば陥るほど、便利な能力であると実感出来るものであった。

あんまり多用していない能力であったので確定ではないが、何食つても摂取した栄養にバラつきが出ないっぽいのは、大変有り難い。野菜とかの、赤、黄、緑の最後に部類される色の食べ物、そこまで好きではありませんので。

【頂雲の湖】の真横。そこに、俺は新たに【土地】を一つ追加した。所々に生える二階立てくらいの木々には、一階の半分以上から天辺に掛けてギツチリと、赤々とした丸い果実が色付いている。悪い魔女に騙されて口に入れてしまったお姫様を思わせる、毒々しいまでに艶やかな臙脂色。正直、【土地】の名前からして食べるのを避けていた。

けれど、リンが美味しいと言うので、自制心と言う壁は好奇心によって打ち崩されて、恐る恐る口へと運ぶのを良しとした。

だが。

(味、微妙だったんですけどね)

これには、一緒に食べた孔明も同意してくれた。食べれないものではないのだが、何かこう……味の深みが、好みとは正反対の方面に伸びていると表現したら良いのだろうか。首を傾げたくなる味であった。

しかし、どうにもこの果実、妖怪達……魔の属性を持つ者達？ には好物となるらしい。あの平天大聖も、今ではあの「土地」の住人だ。いや、主、と言い換えても差し支えないのかもしれない。

朝露に濡れる城の庭園を、優雅に散策する王を思わせる足取りで、果実の中でも最も良さそうなものを選別し、口へと運び、満足そうにコクコクと頷き、完食。決して貪り食している訳では無いのだが、この数日間、これを何度も何度も。飽く素振りすら見せず、繰り返して行っていた様子を見るに、結構気に入ってもらえたようである。

何がそんなに美味しいのか。

平天大聖が立食大聖へとクラスチェンジして二日目の昼。ふと、興味本位でポロリと零してしまった質問に、

『命の味がします』

彼は愉悦の顔で、そう答えてくれた。

ネズミ達も、悪食、との二つ名に見合うだけの暴食っぷりを発揮。一匹一匹はあれだ

が、その数が万に及ぶとなれば、目を瞑つていても分かる結果が目の前には転がつており……。

「——今日で最後ですか」

噂をすれば何とやら。

芯だけとなった果実を手で遊びながら、純白の王がこちらへと近づいて来た。どうやら、食事は終わったようだ。

「ええ。後は、明日に向けて備えるだけですよ」

「真に残念だ。しかし、後一度は行うのでしょうか？」

五十万の小さな胃袋を満たしてくれたこの「土地」も、こうして四日目を迎えてみれば、既に葉は枯れ落ちて、実がなっている木も、両の手でカウント可能なくらいに数を減らしていた。この分では、リン達一行が食事を終えた頃には、綺麗残らず消え去っているだろう。

それに、この「土地」は十分に役割を果たしてくれた。これだけの悪食達を相手に、今の今まで役割を果たせていたのは、大健闘と称えたいくらいである。感謝の念を胸に抱えて、しばらくの瞑目。再び目を開いた時には、既に視界からネズミの一匹、果実の一個すら発見出来るものではなくなっていた。

「ツクモ。ありがとう。もういいよ」

早いものだ。数千のネズミを後方に引き連れて、リンがこちらへと戻って来ていた。その手には、幾つか果実が確保されている。オヤツ用だろうか。しつかり者である。ちやつかり者とも言うだろうか。

「あの光景は、何度見ても興味が尽きませんねえ」

「……楽しんで貰えるなら何よりですが、それ以上は望まないで下さいね」

「これは愉快。あなたは本当に、言動共々、常にこちらを楽しませてくれるお方だ」

……望みまくりですか。そうですね。

少しは隠そうとしくれても良いだろうに。そうまで『何かする』と言われ続けている様は、俺に防ぐ手立てなど無い。と断言しているようなものだ。

——先の「テレパシー」の一件を、俺は孔明へと相談している。

彼も、下した答えは、黒。絶対に何か行動を起こすそうなのだが、流石に妖怪は門外漢なようで、詳細な予測は立て難いとの事。

けれど、行動を起こすであらうタイミングと、何を欲しているのかは、大よそにはあるが、答えを提示してくれた。

『全てが終わった直後。もしくは、終わる直前。あなたから、何かを奪う心積もりでしょう』

……思い当たる点があり過ぎて、頭を抱える羽目となる。それは「稲妻のドラゴン」で

あり、「頂雲の湖」であり、「伏龍、孔明」であり、食料の確保に一役も二役もかつてくれた、この「土地」なのだろう。

能力奪取。

考えない事も無かったが、コピー、篡奪、洗脳といった、こちらのアドバンテージがそのままひっくり変えされる展開というのは、実に嫌らしく、効率的で、効果靦面な方法である。彼がこちらに同行した意図は、俺の力の何かを奪う為の下調べであると。そんな可能性を思い浮かべ、なるほど。それならば、同行するだけが条件だという行動も、納得が行くというものだ。

一つ力を見せれば奪う選択肢が増え、それがより強力な、強大なものであればあるほどに、それを篡奪した時の喜びは、大きなものとなる。

それに、行動を起こさされる……仕掛けられるタイミングも、広くない範囲で絞れている。平天大聖が事を起こすであろう段階とは、人間の軍隊が、脅威では無くなった頃合。きつとその際に、こちらの油断に付け入って、何かの能力を使用するのだろうか。

(先手必勝……を、やるべきなんかなあ)

思考はどうあれ、何もしていない相手に危害を与えるというのは、言葉に詰まるものがある。それをこちらから意図的に行うのであれば、尚の事。

——それに。相手が先に仕掛けて来てくれたのであれば、こちらの心情は非常に

すつきりとさせられる。

月の勢力を相手にして、戦果だけに目を向ければ、余裕。と断言出来た身としては、今回の一連に然したる危機感を覚ええない。

過剰防衛、大いに結構。特に現状は、思い入れの無い方々が周りの全てである。

もしそうなったのであれば、結果はどうあれ、そこに至るまでの道中は、辛酸を舐めて頂きましょう。

(と、言う事で)

コスト維持の面と、平天大聖に悟られない様に。という面の二つの理由で、今の今まで出すのを躊躇っていた、あれを呼ぶ。

極力光が漏れないように、硬く拳を握り、その中に生み出すイメージを思い描く。

無から有が。五指を押し広げて現れる物体は、一つの小さな「アーティファクト」。とはいえ、思ったよりも大きいようで、指に隙間が作られた。ビー玉を握っていたつもりが、いつの間にもやら野球ボールになってしまったようなものだろうか。

慌てて体全体を使い、光の拡散を防ぐよう、体を丸くする。何とか召喚を終え、この手に握り込まれたのは、一粒の小石。

(デメリットをメリットに変えるのが、MTGの醍醐味の一つですのう)

過去使用した白の「インスタント」カード。無力化系その一にノミネートしている【お

粗末」は、大和の軍神相手にも、中々の成果があつたのだ。

平天大聖がどの程度の力量かは未だ把握し切れていないけれど、今、この手に握られている寶石が、全く効果が見込めない訳では無いだろう。

取り得る手段——こちらの手札は、約五十万の悪食ネズミ、若輩妖怪の少女、そして、俺……の、能力。この三点に共通する事は幾つかあるが、誰もがパワー&タフネスの項目に心許ない、という点が上げられる。

対して、平天大聖はどうだろうか。

腐っても——腐っていないが——妖怪達を纏め上げる親玉だ。能力によつてその地位に君臨していたとしても、それが2/2以下、という事は無いだろう。

『弱者の石』

1 マナの【アーティファクト】

カードを【アンタップ】させるタイミングに、パワーが3以上のクリーチャーは、そ

れを行えない。

攻撃を防げる訳では無いので、強い抑止力は期待出来ないが、これ一枚が場に出ているだけで、高いパワーを持つクリーチャーを操るプレイヤーは持続力を失う為、攻撃などを躊躇う場合が多い。

辺りを見回しながら、僅かに熱を持つオレンジ色の結晶体を、リンへと差し出す。

(うむ、こつち版で良かった……)

時代によって【弱者の石】……に限らず、MTGに画かれているカード達は、その姿を二度、三度、変えていたりする場合もある。今回で言えば、過去の【弱者の石】は、人間の下半身程もある、荒削りの円錐型の石柱……宝石……? ……うん、多分宝石。それが近年では、握り拳大の別モノへと絵柄を変えていた。

ならば、召喚したものには最新版が適応されるのかと思えば、

(あれ、そういや【極楽鳥】は旧型だったな)

旧型は燃えるような赤が綺麗だった、赤い鳥。新型は極楽との名を現したのか、何色かの色が合わさった、鮮やかな色彩の鳥であった。

(……げっ、もしそだったら……)

旧型については知識が無いけれど、新型「極楽鳥」の体長は、全長二メートルという設定があつた筈。……二メートルの鳥とか、もはや鳥じゃなくて怪鳥の域に入つてゐる気がする。俺ぐらいなら掴んで飛べそうな程のゴツさではないだろうか。こつちに選択権があるのか、それとも既に決まつているのかは、恐らく前者だろうが、今後の課題として。

「はい。これ」

「これは？」

不思議そうに眺めるリンに、大まかな能力を説明し、「弱者の石」を預けた。自分達には効果が無く、力を持つ者——今回に限つて言えば、平天大聖にのみ作用するであろうアイテムであると。二、三日前から出したのでは、体力が戻らぬ事態に疑問を持つかもしれない。察しの良いお方の事だ。あいつに与える時間は少ないに越した事は無い。故に、こうしてギリギリまで出さずにいたのだが。

「凄、……」

おそろおそろ受け取るリンに、壊れ易いものでもない筈だが、と思いつつ、1マナ使

用による若干の疲労感と共に口を開いた。

「つてことで、それは何とか隠し持つててちよーだい。平天さん相手には、時間が経てば経つほど、効果が現れると思うのさ」

「君が持つていたら駄目なのかい？」

「駄目つて訳じゃないんだけど、いざとなつたら……バレた時かな……そんな時には、お前か、ネズミさんの誰かに預けて逃げ回つてもらおうと思つてたからさ。咄嗟の時には、言葉が通じるお前の方が有利な訳ですよ。あいつの興味つて、殆ど俺に向いてるし。気持ち悪い事に」

「分かつた。死守するよ」

「おお、言葉が重い。」

「いやいや。連続じゃ厳しいが、時間があれば何回でも出せるもんだから、あんまりその辺は気負い過ぎんな。良く効く囹、程度に思つておいて。じゃないと、俺が心苦しい」

「……何回でも、か」

「おう。と応じる声に対して、吐息で返すとは失礼な奴め。気持ちには理解出来ませうけれど。」

「これがもし君の言うとおりの効果なら、僕達……ううん。力ある者と無い者との関係は一転するだろう。それこそ、どんな手を使つてでも、殺すか、奪うか、壊すか画策す

るくらいには」

日々のストレス、けだるい疲労。

そんな最中のお褒めの言葉でありましたので、しばらくぶりの嬉しさに、テンションがハイなものへと高速移動。

「そうだろう!?! どうよ、このバランスブレイカー! 十全に効果が發揮される訳じゃねえだろうが、その半分でも現れてくれたんなら、万々歳ツスよ! それに【弱者の石】とか、名は体を現す、を地で行く感じが最高じゃん!?!」

むふうと一息。鼻から白い煙でも見えるくらいの息を吐き出した。目を大きく見開いて、ドヤ顔アピールも忘れない。

……あ、リンが肩落としやがった。

「まったく、君って奴は……」

リンの言葉だけを見れば呆れのみしか感じ取れないけれど、まあ、それが笑顔と共に零れたものであったのならば、悪い印象では無さそうだ。

自分達の上に居座る者達のみには作用する、遅延性の猛毒。幾年も虐げられてきた者にとつては、恨み辛みの相手の生死権を得たようなものだ。暗い感情から派生しているのは疑いようも無いが、元より泥水か、それ以下の扱いを受けて来た者達である。これを責める者が居るのなら、神だろうが仏だろうが、無言のままに、頬に一発入れてくれる

わ。

（……とは言っても、な）

これだけでは、決定打にはほど遠い。

相手が何かして来たのであれば、それこそ幾らでもエグい方法を実行出来るのだが……いつそ思考を徐々に欠落させるものとか、直接肉体に作用しないような……いやでもそれはそれで……。

「……ツクモ？」

懸念が態度に出ていたようだ。

不安に揺れる瞳でこちらの顔を覗き込むネズミの少女に配慮して、言葉を返す。

「ん、考え事。気にすんな」

「……分かった」

聞きたい事はあります、と。それでもこちらの心中を察して、言葉を切り上げてくれた事に、ごめん、と。少しの申し訳なさを覚える。事が終わる直前を見極めて、対処可能なカード達を纏めておこう。

今出来るのはそれくらいだ。現段階で平天大聖へと、何か事に及んでは、人間の軍隊と妖怪の王相手の二面作戦を取らなければならなくなる。

唯でさえ制限が多いのだから、これ以上、懸念事項を増やしてなるものか。

「じゃあ、明日に備えて、最後の栄養補給と致しましよーか」

意識を切つて、目の前の【土地】を砂丘へと戻す。都市製作シミュレーション、シムなんちやらの早送りモード宛らに、一瞬で地形が変貌し終える様は、何度見ても圧倒的である。

いずれは食肉系の供給も大量に出来る様考えておくかと思ひながら、再びそれを呼び出した。

(来ませい！ 【禁忌の果樹園】！)

『禁忌の果樹園』

【特殊地形】の一つ。

【タップ】する事で好きな色のマナを一色生み出し、同時、対戦相手一人を選び、そのプレイヤーの場に1/1で無色の【スピリット】クリーチャー【トークン】を一体加える効果を持つ。

全ての色のマナが出るというのは大変重宝する能力であるのだが、何も考えずに使えば、相手の場に徐々に蓄積されていく1/1「トークン」によつて、倍々式にダメージソースが増す為、この1/1の「トークン」を対処出来るか、それがメリットとして働くような。あるいは即死コンボデッキでもなければ、「頂雲の湖」以上に使われる事の無いカードに仕上がっている。

……で、あつたのだが、この相手の場にクリーチャーを強制的に召喚させると言うデメリットは、とあるデッキにおいては多大なメリットとなり、キーカードの位置付けに近いポジションに収まってしまったカードである。よつて、ある程度の経験を積んだプレイヤーには、場に出した瞬間に——無論、それだけではないが——特定のデッキを連想させる事になる。

『スピリット』

クリーチャータイプの一種。

精霊や幽霊といった、幻影のような存在に多く付随される。このタイプに合わせて別のタイプを持つクリーチャーが多い。似たような系統に「エレメンタル」「フェアリー」「ナイトメア」といったものも存在し、間々、『これは「スピリット」というよりも○○なのでは?』といった疑念や話題が尽きないタイプであるとか、ないとか。

再び現れる、乱雑に植林されたような木々達。無数に実る、真つ赤な果実。一寸前の色褪せた景色が嘘のように、瑞々しい果物をその枝に実らせている植物達が、復元を果たす。【森】だと明るい色がなかったせいか、そうは思わなかったのだが、今の気分は花咲じいさん。灰すら用いないのがミソである。

(あん時は、何度もお世話になったなあ)

昔はよく黒をメインで使っていたが、黒だけに固執していた訳では無い。寧ろ、予算が許す限りで、あらゆる分野に手を出していたものだ。時間と体力の制約によつて、ここでは日の目を見る事は無いだろうが、あのデツキには過去何度も助けられ、あるいは逆に、辛酸を舐めさせられたものである。ミラーマツチ(同型デツキ同士の対決)とか結構熱かった。懐かしい。

……ただ時折、木の根が団子になったような、サッカーボール大の何かが動いているのを見かけるらしい(ネズミ談)。

現状、俺の認知する範囲に対戦相手は存在せず、マナも出ないので「タツプ」させる必要も無い。よって、この「土地」の、例のデメリットは発生しない筈なのだが……。

もし出会った場合には、恥も外聞もかなぐり捨てて、脱兎の如く逃げさせてもらおうと思います。

「九十九」

ぬ、平天大聖がお呼びです。

初日から、監視役に。と張り付かせている「メムナイト」が後方に控えており、これでは一体どちらのクリーチャーなのかと、やや拗ねる。

ただ、間違いなくあちらの方が様になっているので、口惜しい事この上ない。

「はい、何でしょう」

「こちらの果実。幾つか頂いても？」

あら、お土産確保ですか。あっちから話し掛けて来る事はそうそう無かったんで、何言われるかと心配したけれども、どうやら杞憂だったようだ。

「え、ええ。個と言わず、本単位でどうぞ。もしあれでしたら、こちらの目的が終わった後でなら、そっくりそのまま、あの山に出しても良いですし」

「それは有り難い。これだけの品、そうそう出会えるものはありませんからねえ。それが園丸々一つ分ともなれば、皆も、妻も喜んでくれるでしょう」

……何だつて？

「妻？」

「ええ。あれの舌は中々に厳しいもので。しかも、私は菜食を主としていますが、あちらは血肉が好み。同じ卓に着く機会も数えるほどでしたが、これならば、あれも気に入る事でしょう」

HHHHH。妖怪の親玉が草食とか笑わせてくれる。お前は牛か馬かつつーの。しかも夫婦仲が上手くいつてないとか、今まで散々こつちを弄つてくれたストレスを帳消しにしてくれる情報ゲットだぜ。ギャップ萌えでも狙っているのかと尋ねてみたい。他人のプライベートを無闇にべらべら喋るのも気が引けるが、機会さえあれば、進んで誰かに話してみたいネタである。

……のだが、自らの評価を引き下げよう言動など、幾ら美味いもん出したとはいえ、こちらの方がするわきや無いので、このお話は墓場まで持つていく事になるだろう。うっかり話して、何か爆弾仕組まれていたんじや、もはや苦笑すら取れやしない。

——という事は、聞くだけならば、問題無いのである。筈なのである。

まさかの既婚者宣言に大いに驚かせてもらった流れで、色々とその手のお話を突っ込んで聞いてみようと思つたんだが、さあこれから。というところで、孔明に遮られた。

作戦の最終確認がそろそろ終わるので、今後の事について少し話をしよう。という事

らい。

折角の機会を奪われ、無念の声を上げながら孔明の後へと続く。あれは終わったか。これは覚えているか。それはどうなったのだ。数日前と変わらず、寝そべりながら話をする俺と、瞑目の後に、やたら長めの説明を始める伏龍に。気持ちだけは誰よりも真剣であろうリンとの最後の会合は、特に真新しい事も無く、恙無く終了し。

「そろそろ……かな」

自然と生まれた静穏の空間に、ぼそりと、言葉が投げ入れられた。

眩きに近い音であっても、全員がコタツを囲っているくらいの距離である。耳を澄ませば呼吸すら判断出来るだろう。

「そうだな。いつもならこれくらいに効果が現れてくれる場合か」

「君が扱う……術、は幅が広過ぎだ。節操が無い。とは思わないのかい？」

「返す言葉も無いが、便利だろ？ これ」

そうだね、と。元々責める気など皆無であったので、リンの顔が綻びを見せる。彼女も、この「エンチャント」の効力を満喫している一人であるのだ。よっほど偏屈な奴でもない限りは、万人が望む効果であろう。

「……あ」

それは唐突に。

狐の嫁入りを見たように、何の予兆も無く実感出来るもので。

「——んっー!! 生き返ったあ!」

満足の表情と共に、ネズミの少女が背後へと倒れ込む。両の手を頭上へと伸ばし、そのまま寝そべる姿に、こちらも暖かな気分になる。

孔明も、一つ、大きな吐息を零す。どうやらあちらにも効果は現れたようだ。溜まった疲れ——気持ち的なもの——を、吐き出す空気と一緒に排出しているのだろう。

同時、周囲からネズミ達の歓喜の鳴き声が。

使用時当初からの反応であるのだが、この感覚は甚くお気に召してくれたようだった。

『覚醒／Awakening』

4 マナで緑の【エンチャント】

場に出たカードを【アンタップ】するタイミングとは別に、各プレイヤーの一ターン

に一度訪れるタイミングで強制的に、全てのクリーチャーと【土地】を【アンタップ】する能力を持つ。

細かい点を除いて説明すると、通常の三倍【アンタップ】を引き起こすカード。

これをキーカードとして機能する【ロック】デッキ、名前そのまま【アウェイキング】が有名であり、【土地】から豊富に湧き出るマナや、クリーチャーを【タップ】する事で発動する各種能力をこれでもかと活かした構成に仕上がっており、他の【ロック】デッキとは一味違ったプレイを魅せるものである。

／／『人々を奮い立たせ、その人々に行動を要求するときというものがある。今がそのときだ。我々がその人々だ。これがその行動だ。行け！』—— 葉の王、エラダム
リー／／

【フレイバーテキスト】的に、さあこれから一大決戦だ！ という場面で叫んでみたい気もするが、効果の程は長期向けの性能なので、難しいところである。残念だ。

リンの手が上がり、ネズミ達の声を鎮め、就寝を促す。段々とその音量を抑えながら、

自らが体を休める場所へ移動する赤黒い絨毯。

「孔明先生」

こちらの意に応え、すつと孔明は立ち上がる。それよりもやや早く直立の姿勢を取った俺は、腰を曲げて、念話で感謝の礼を述べた。「メモナイト」の報告では、現状、平天大聖はこちらを見ていない。「アンタップ」効果によってもたらされる疲労回復状態に、夜空を見上げながら、頬を愉悅によって吊り上げているようである。

今ならば問題は無い、と。光となって消える【伏龍、孔明】を見送った後で、【覚醒】への供給を中止。

元々【エンチャント】や【アーティファクト】への維持費はクリーチャーに比べて少なかったのだが、【覚醒】の使用を考慮した際に、それでも4マナは厳しいだろうと。【覚醒】の【アンタップ】効果が発揮されるまでは、永琳さんから貰った腕輪か、別の【アンタップ】効果を持つカードを使って、疲労を凌ごうかと思つてたのだが。

（一体いつ付与されたんだか……）

新たに一つ。

【エンチャント】を維持する際の負担が、大幅に軽減されているのを発見する。

【トークン】維持コスト軽減に引き続き、新しく判明したスキルに、4マナ域開放に次ぐ、達成感を実感出来た。

そんな進歩を実感させられるカードも、これでお役御免。

【土地】や【トークン】は相変わらず。今の状態は「今田家の獵犬、勇丸」の維持のみが、疲労の全てである。と判断出来る範囲のものだ。次点で「ムムナイト」の維持にやや疲れを感じるが、これも元はゼロマナなので、然して問題ではない。精々、溜め息が多くなる程度。これも、ノープロブレムだ。

——これで、全ての下準備は整った。

後は、充分な睡眠を取って、事に望むだけである。

岩場の影。諏訪の外套を体に巻きつけ、薄い寝袋のように用いる。保温性能は中々のものだ。寒過ぎもせず、暑過ぎもせず。心地良い温もりが、全身を包む。付け加えるのなら、今この場には、あの【禁忌の果樹園】の葉を用いて造られた簡易ベッドが用意されていた。

果樹園を出して二日目の夜。こちらに気を使ってくれたネズミ達による、粹な計ら

い、という奴である。

思つたよりも普通の感觸……寝心地に、幾許かの安心と、幾分かの肩透かしを同時に感じながら、雨降つたら悲惨だな。と、天蓋が星空の寢床に身を委ねる日々が続き……それも、今日で終わり。初日は例の「スピリット」【トークン】の亡霊でも襲つてこないかとひやひやしたものだ、事なきを得られたようだ。

夜空を飾る宝石が眩くて。何度も見ている筈なのに、籠つた吐息が口から漏れた。

数匹のネズミの偵察によつて、明日の正午頃には到着するだろう。との報告は受けている。そうなれば、後は、細かな判断は要らない。孔明によつて叩き込まれたタイミンを逃しでもしない限りは、一切証拠を残す事なく、人間の軍隊を長期に渡つて再起&行動不能にさせられる。早起きする必要は無さそうだが、

(……今更、緊張か)

ぐつすり寝れるかどうかは、難しいところだろう。

極力目を向けずに居た、責任、という言葉が重く押し掛かる。重く受け取ろうが、軽く考えようが、今回の場合、成すべき事を成していれば、結果は全く変わらない。そう思つて、義務に、悪ふざけにと、何かしらに我武者羅に意識を向け続けていたのだが、思慮の浅い自分の事だ。寧ろ、この行動は最悪の選択であつたのだろうか、今更過ぎる後悔が襲い掛かる。

(……いやいやいや、あれこれ考え過ぎて『いっそ全体除去カードでも……』とかに答えが落ち着き掛けたから、今の方針にしたんじゃないか)

……思考がストライキに近づくと、全てをリセットしたくなる。ここ最近。特に月であれこれ唸り続けていた頃から自覚し始めた、自らの思考の傾向に、溜め息が出た。

大和に居た時とは違う。あの時は、あの人の……あの人達の為になるのなら。と、それのみを追い掛けていた。

……ああ、しかし、諏訪子さんと初めて対峙した時にも、そんな思考を巡らせたのであったか。差異はあれど、よくよくひるがえってみれば、それらの兆候は所々に見受けられるものだった。理由を他に預けていて気づかなかった自己の内面は……いやはや、何とも。

(とりあえずは……お勉強から、か)

申し訳ないが、孔明先生は、現段階では難易度高過ぎる。ここはやはり、文若先生に個人教師の先達を勤めて頂いて……。

——と。

「……起きてる、かい？」

雑念は、可愛らしい声によって掻き消えた。

「……ん？ はいはい。まだ大丈夫ですよ、と」

横たえた上半身を起こし、声の方へと向ける。ぐちゃぐちゃした思考に、一服の清涼剤。実に有り難い存在である。

「どした？」

「……ん……どうした、という訳では無いんだけど……」

「……？」

小さく、こちらの眉間に皺が寄る。

えらく歯切れが悪い。視線があつちこつちへ行つたり来たり。深刻な表情ではないので、切羽詰った用件では無いようなのだが……。

「リン」

こちらの呼び掛けに、何故かビクリと肩を震わせる。

「……何故そんなにビビる」

「い、いや。な、何でもないよ」

どう見ても、なんでもなくないですが、突つ込まないのが優しさだろう。

……まあそれは兎も角として。今度は、こちらの疑問に答えてもらいましょう。

「別に良いんですけどね。……ところで、だ。お前の後ろに居る、いつぱいのお仲間さん

達は、一体何なのさ？」

今か今かと、何かを心待ちにしている風に、リンと俺の両方を見続けている、ぷち王蟲の群れ（赤目状態）。夜だから特に目の色が鮮明です。

……まさか今更、俺を喰う気じゃあるまいな。

もはや条件反射だ。脳裏に「死への抵抗」をセットした直後、俺の言葉に、リンは自分の後方をバツと振り返った。こちらからはその表情が見えないが、段々と肩……と、後、握り拳になっている手が震えを増していき。

「——あっちいけー!!」

蜘蛛の子を散らす。の諺の代わり、ネズミの群れを散らす。なんて諺が出来そうな光景が。『焼き払えー!』もかくやな一喝に、プロトンビームで消し炭……もとい、撤退し、方々へと散って行く。

肩で息をし、叫び終えたリンを見るに、どうやら俺をとって食おう、という意図が無い事だけは理解出来たのだが……これは……何ぞ……?」

「……うう」

リンの深呼吸。何かの決意を、硬く、胸に秘めました、と。

そう感じられる振り向きに、思わずこちらも唾を飲む。

「……」

……けれど、その後は一向に動く気配をみせない少女。

会話が途切れ、呼吸の音のみが辺りに響く。これはどういう状況なのかと、改めてリンの様子を観察する。

先と変わらず、目線が四方へと飛び回り、もじもじとする仕草は、何かを切り出そうとしながらも、それにまで踏み切れないのだと察せられ。

天体の光に浮かび上がる顔、幼い頬には薄っすらと朱が差している。

……答えは、ものの三秒で出てくれた。

「……なあ」

ビクリと震える少女に対して、吐息。疑念は確信に近づいて。

……これが、たった一人であったのならば、また違う答えを導き出していた。

けれど、彼女が現れた時の状況——ネズミさん達が後方に出歯亀……野次馬……見守っていた状況を考えて、尚且つ、今までのリンのこちらの反応や態度を思い返すに、そういう可能性は大分低く、純粋に、羞恥心のみが現在の彼女を支配しているのだと予想を立てる。

俺の脳裏には、学校の裏の夕暮れ時。若い男女が俯きながら相対し、それらを見守る友人知人のワンシーンが再生されていた。

「決定打は何だったのよ」

リンが、言われただけでこんな行動を取るとは思えない。きつと、止むを得ない何かを突きつけられたのだろう。

耳を立て、尻尾を伸ばし、目を見開いて。大きく安堵の吐息を吐き出して、感謝の念すら籠った視線を向けられた。ぺたんと座り込む様は、全ての苦労を吐き出し、芯が……空気が抜けた風船にも見える。

「……助かったよ。僕の方から切り出すのは、ご法度だったから」

「男としては残念だが、役に立てたのなら何よりです。……で、どういう流れで？」

「ざっ!? ……おほんっ。……話すのは吝かではないんだけどね。……でも、その前に」
そこまで深く考えなくても良いだろうに。俺にも分かる程に反応が初々しい。微笑ましい限りだ。

暗闇の一箇所。俺から見ればただの黒な地形であるそこに、リンは睨みを飛ばす。

途端、岩場の窪地から、数匹のネズミが、か細く鳴きながら駆けて……逃げて行った。全く気づかなかったです。流石、ネズミ。隠密性は目を見張るものがある。

「……監視役ツスカ」

「盗聴役、の方が正しい答えかな。……はあ、全く……」

呆れながらに呟く少女は、体の後ろに手を回し、実は。と、目尻を下げながら、事のあらましを切り出した。

話自体は大して時間も掛からずに。途中でのリンの溜め息やら何やらで間は生まれただ、それだけだ。

「まさか、自分達の撤退を条件に載せてくるとは思わなかった」

「……冗談だとは思……いたいが、もし本当にやられたら、参るなそれは」

あのネズミ達の行動原理は、何処から発生しているのやら。

不満たらたらに話すリンの内容を一言で纏めると、

『YOU！ 告っちゃいないYO！（俺達のご利益の為に！）』

との事。

断ったら、俺達帰る！

そんなノリで言われた少女は、しばらく我を忘れたそうだ。

「君の後光を、ずっと浴びたかったようだよ。今のこの高待遇は、期間限定だからね」

最後には「再生」系を用いて、身体的にも全快して頂いた後での話であるけれど。確かに事が終われば、彼らとはもう、会う事すら無いだろう。

「君は、口だけの神様とは比べるべくもない存在だ。……今でもこの湖と、その果樹園の創生術は目に焼きついている。飲み水の確保の為に、僕達の住処は地面の下にある。そして、そこから食料を得ようと思うと、方々に旅立っていかなければならない。一番のお得意先は、七天大聖の統べるタツキリ山だが、あそこに行ったものは、十匹の内に

二、三匹は永遠に戻らない。という程に危険なところだから」

こちらから視線を切つて、「禁断の果樹園」を見つめる。

「木の妖怪は時折見かけるが、命を落とすものは居ない。外敵も、明日の食料への不安も、何も不自由の無い楽園なんだ。僕達にとつての、この場所は。それを、全力で保ち続けようとしての、この行動なんだと思つているよ」

安定した生活というのは、古来より——つまり今の時代からだが——人々が目指す目標の一つである。

特に、命が簡単に失われる環境下では、その傾向が強い。

宗教を信じる——信仰というのは、そんな、意図も容易く運命が左右され、時に潰えるあやふやな生き様に、確固たる不変が欲しいが為の場合が多い。

人が死ぬ事など、病か、事故か、各シーズンのレジャーを愚かに考えていた時くらいしか出会う事の無いであろう島国出身の俺からみれば、とても納得のいく理由であった。

「……まあ一番の理由は、面白そうだから。だろうけれど」

「あ、あいつら……」

今までの切実な心中吐露を、オチで全部、夜空の彼方へぶつ飛ばしやがりましたよ。何ふざけた事を……との考えは、先にノリノリで馬鹿やった自分が言えた事ではない

かと、自己完結。というか、命の危険に多く関わる者達は、この手の刹那的な衝動を大事にする傾向があつたなど、諏訪、大和通して感じていた。

狩りの囲い込みに失敗し、馬の群れに轢殺された青年も。

山菜を採りに行き、翌日、壊れた人形の姿になつて川から流れて来た老人も。

出産とは、それだけで命懸けの行為なのだ。息みによる疲労が祟り、胎児共々、冷たくなつてしまつた女性も。

いずれも現場には居合わせなかつた……死者を弔う儀式の際に、耳にした程度の話ではあるけれど。

戦などではない、日常生活の範囲でさえ、命の比重が羽よりも軽くなる時がある、死と隣り合わせの、この時代。明日にも消えるかもしれない自分であるのなら、今を全力で楽しもう。そういう気概が、彼らからは見受けられるのだ。

直接戦闘を行う訳では無いけれど、既に、三千を超えるネズミ達はその身を犠牲にしてくれている。

とは言つても、生死判定の犠牲ではない。軽、重、の後に「傷」が付く方の犠牲である。「体」レベルが出てきていないのは、まさに不幸中の幸い以外の何者でも無い。遠く、異国の地であるというのに、諏訪&神奈両名の加護でも発揮されているんじゃないだろうか、と思つてならない状態である。俺の思つていたよりも＋１／＋１は有効で

あつたようで、今の彼らは、昆虫が人間サイズであれば云々。という例え話に等しいレベルへと達している。あの小さな体に、成人男性まるつと一人分のパワー内臓中。現在の作業でならば、サポートしてくれる同胞も数多く、まず命を落とす事は無いだろう。

しかし、危険な作業だという事に変わりは無い。現に、大小様々な理由で作業から離脱しているネズミ達が居るのだ。平天大聖や人間の軍隊を相手にしている現状では、体力も、マナも、時間も、節約出来る箇所は出来る限り節制していかなければと、【覚醒】による【アンタツプ】効果が現れる直前まで【再生】系カードの使用を渋っている身としては、何も言えなくなる。

そんな彼らの楽しみが、こちら——俺達があたふたする反応一つで済むというのなら。

「……そ、それで」

あれ、完熟トマトが再降臨。こちらの細々とした考えは、その表情だけで、霞と消えた。

「え、今ので終わったんじゃないの？」

「……僕、と、君、が……一緒、に、……寝ているところを……見ないと……駄目だ、……つて」

寝るって……あつちの意味なんだろうなあ。

見せる、という単語にようやく疑問を持ち始めた辺りで、リンの様子が、これまでとはまた違った動きをしているのに気がついた。

俺と、俺の後方に視線を行ったり来たり。釣られ、彼女が見つめる先に目を凝らしてみると。

「……怖ッ」

小山と夜空の境界線。夜明け直前宛らに赤が着色されており、無数のネズミ達が、こちらをガン見されている様が否応無しに理解出来た。体は隠しているようだが、光を反射する眼球によって、隠れる気皆無状態である。

リンの一喝で散って行き、間近で見聞きするのは諦めたけれど、行動の結末を見届けるのだけは、譲る気は無いようだ。

「かつ、勘違いしないで欲しいんだけど！ 彼らも、今の僕にそこまで期待はしていない！ 仲が良くなった、というアピールの範囲で良いんだからね！」

あっちの意味ではなく、どうやらこっちの意味でした、と。
 というか、やるのは確定ですか。

仲が良い。との表現をするのなら、ハグとか抱っことか、そんなのでも良いのではないのでしょうか。俺も結構恥ずかしいのだが、目の前に、自分以上にテンパっているお方がおりますと、逆に冷静になると言いますか。リンには申し訳ないが、君が焦ってくれ

ていて助かっています。

しかし、あたふたと右往左往する人は、どうしてこう……。

「……まあ、何だ。そういう考えは、体が出るとこ出てきてからにしろなさい」
「なっ!? そつ、そんな考えなんてしてないよ!」

だつたらこの会話は成り立たない筈なんだがなあ。見事にキャッチボール出来ている時点でバレバレでございます、お姫様。

(からかうのは好きだが、からかわれるのはダメ、と)

リンが射程圏内であつたのなら、きつと俺は鼻息荒くなつていたのだろうか……。今後の彼女に乞うご期待。何年後かは不明だが。

……ただ……しかし……いやもう、あれですな。

——唐突ですが、我慢の限界を超えました。

「——リン」

肩がビクリと揺れて、耳と尻尾がピンと立つ。

真剣に。おふぎけの色合いを完全に抜き取った声色を発してみたのが功を成したようだ。胡散臭い……いや、かなりウザいであろうウイスパーボイス風だったが、リン相

手には通用したようで。ここでしつかり反応してくれれば、それだけでウキウキ楽しいのだが、ネズミ達の要望に応えなければ、下手すると、彼らの助力を失う羽目になる。それだけは防がねばならない（建前）。

さつきまでなら、こんな考えなど全く思っていないなかったのだけれど、弱味を見せた相手というのはどうしてこう、からかいたくなるものなのだろうか。何となく、某花畑を嘔としてゐる妖怪の気分が分かった気がします（本音）。

「な、なんだい」

そんな相手はおろおろと、少し前に散々泳がせたであろ目線を、再度遊泳させていた。

「——撫でさせて」

「……はい？」

予想通りの反応、ありがとうございます。まあ、そういう勘違いをさせる為の言動ではあるんだが……チビツ子相手にナニしろってのさ。

女の子相手には犯罪だよなと思う面もあるが、女の子というよりは、小動物の類にか見えないのです。子犬や子猫を撫でる行為を犯罪だと思ふ者が居るだろうか。いや、無い！

……つまりは、罪悪感がほぼ皆無状態なのである。以前から大いに不足していた勇丸分を、ここで補給しておこうと思います！ 超触りたかったのよそれ！ もふもふそう

だから！

「耳だけで良いからさー、頼むよー」

「僕の耳を何だと思ってるんだい！」

一瞬、『何もしないから』と宿泊施設に誘ったり、『先つちよだけ』などのたまう男を連想したが、忘れる事にして。

夜天で陰る顔であつても尚分かる、朱に染まった頬。両手で耳を覆い隠しながら、今や、何か一つでも物音がしようものなら、電光石火でこの場から離脱する意気込みすら透けて見える程である。

「何って……チャームポイント」

「……」

……あれ、何その反応。

恥ずかしがっていた様子から打って変わって、驚いた表情を浮かべた。話し掛けるのも躊躇う姿であつたので、変な空気が漂い始める。

そして。

「………良いよ」

全く予想していなかった返答であつた。

「えっ……自分から言っておいてあれだけど、良い、のか？」

「君のことだ。どうせ何だかんだ言いながら、最後には結局、するんだろう？ だったら初めから認めてしまえば、多少は扱いが変わるかと思つてね」

しばらくもごもごした後に、少し俯き照れた表情をしながら。

「……それに……」

続く言葉に、思わぬ反撃を受ける事になる。

「……その……お母様以外は……初めてだったから……。人であれ、神であれ。忌み嫌われていた妖怪の象徴に、好意を持つてくれたのは」

言葉の裏から、その象徴に誇りに近いものが宿っていたのだと察する事が出来る言葉であった。

「ッー」

……くそ。今度はこつちが面食らってしまった。

「……どうしたんだい？」

耳をピクピクさせ、上半身を前へと傾けながら、覗き込む様に、その身をこちらに乗り出してきた。

上目遣いに、いつでもどうぞ。と言い表している態度に、からかうという意味合いの強かった欲望の熱が、急激に冷めていく。

「……寝る！」

「えっ？」

彼女と初めてであったあの日と同様に、背を向けて草のベッドに倒れ込む。

(あんな事言われた後で、行動になんか移せるかってんだ)

触りたいのと、リンが困る反応で楽しむのが、主な目的。

けれどそれは、彼女が密かに誇っていた象徴を安直に貶す事を、良しとするものではない。

「……そうか。……そうだね。変な事を言った。ごめんよ」

……おいこら。何でそこで残念そうな声色になってるんだ。謝るところなんて全く無かったじゃないのよ。むしろ怒るところだったじゃないのさ。

(まさか、『やつぱり君も、僕の事は妖怪とく』云々な思考に陥って、凹んだんじゃないだろうな)

出会った直後に宣言した通り、妖怪だとは思ってはいるが、だからどうした。というのが正直な感想だ。

人間だって、大雑把に分けて白、黒、黄、な肌の色が居る訳だし、人間と妖怪の差なんて、見た目が人型であるのなら、精々がその程度のものではないだろうか。

今更、耳と尻尾があるくらいの差異など、禿げかロン毛か、の違い以下である。……

逆説を唱えてみれば、人型妖怪と人間との差は、無毛か長髪程度の誤差しか無い、と言っているようなものだろうか。

——さて、この場合、どちらが妖怪側に部類されるのか。追求するのは各かではないが、それに悩む男性……女性含む人類の尊厳の為に、この思考は凍結させておこうと思ふ——

伊達に、江戸時代から（くんずほぐれつな方面の）擬人化文化のあつた地で暮らしてはいない。その手の寛容さには、そこそこ自信がある。全く根拠の無い。と、後に続くものだったが、リンに対する自らの感情を正直に判断するに、多少は裏付けのある自信にしても良いだろう。

「——ああ、もう」

「わっ!？」

不貞寝を決め込んだ姿勢から一転。不意打ち気味に反転し、体育座りを崩した格好でいた彼女を、抱き抱える様に草ベツドへと引き摺り倒した。俺の体を敷布にして、頭を抱える姿勢で、触る程度に耳を撫でる。

「ひゃんっ——な、何を」

ええい変な声出すな。最低でも十年早い。肉体年齢的に。

「……話を聞くに、だ。一応人間として、んで人間側としての意識のある俺からしてみれば、あんまり言えた事じゃないんだが……」

ウイリクの国に居た時の出来事が思い返される。

灼熱の通りを。城の内部でも。酷く自分の悪い視線を向けられる少女の姿。それを懸命に耐えながら、今日の今日まで過ごして来たのだろう。

「今触らしてもらってるけど、細かな毛並みとか、とつても丁寧に手入れされてるのは分かる。手触り抜群で気持ち良い。ミンクとかアザラシの赤子のコートなんて目じゃないくらいだ。……他の奴らが何と言おうが、俺はこれ、好きだぞ」

ミンクとかアザラシとか全く知らんだろうが、構うものか。雰囲気で流そう。妖怪に對して忌諱する人間側の感想や感情も充分に理解している……と思う。

俺だって、今の力が無い状態で全く知らない妖怪に出会ったのなら、心中穏やかでは居られない。何としても、その危険性を回避するだろう。

ただ何と言うか、その力が無い状態 “ではない” という境遇である為、当人からしてみれば虎でも、俺からしてみれば猫のような。危険や脅威に感じる必要が無いのが、妖怪⇨敵というフィルターを通さない理由の一つ。これは余裕と言うのだよ。とか言うてみたい気がします。

……なんて、だらだらとした思考を続けていたのだけれど。抱き込んだ胸の上で、り

ンが何か言おうともぞもぞしているのだが、一向に続きが出る気配が無い。

「……おチビさん、何か言いなさいって」

せめて、現状に対する答え——止めてくれ等、は確認したいところであつたのだが。

「……ありがとう」

……そういう感想は、大変卑怯ではないでしょうか。

「どう致しまして。……じゃ、寝ますか」

もうこれ以上は追及出来ない。ならば、さっさと次の行動に移るとしよう。

返事も待たずに、胸の重みを横へとずらして、再度、体を横に向けた。背中に何やら言いたげな存在を感じるのだが、これ以上何か行動を起こす気は無い。自分の顔に血液が集っているのが分かる。見られてなるものか。

この辺は先の演説同様、殆ど進歩が見られない事実内に内心、頭を抱えながら、僅かにシャツを摘まれる感覚と、背中に擦り寄ってきた温もりに、ビクリ。そちらに意識を傾けた辺りで。

「んっ……君の背中……暖かいね」

……彼女の全身を揉みくちやに撫で回そうと暴走しかけた右手を、全体重を乗せて鎮圧。自らの舌をも噛んで、意識を方々へと飛ばす。

「……あんま引つ付くなよ？ 寝返りでお前に押し掛かっちゃ、目も当てられん」

ヒキガエルならぬ、ヒキネズミの製作には携わりたくないもんだ。

幾ら妖怪だからといって、成人男性の重量は、決して軽い部類ではない筈だから。……それも良いかもしれないね……」

蚊の鳴くような声であったのだが、ほぼ無音の夜天と、音源が間近であった為に、幸か不幸か、それはしつかりとこちらの耳に届いていた。

今の台詞を、流石に自殺願望の類だとは思えない。

つまりは……。

「……嫌なら言え」

「え？」

最初の時と同様に。けれどあの時よりも優しく、包み込む様に胸元に抱き寄せた。

暖かい。

彼女が漏らした言葉と同じ感想を懐く。

こちらの腕の中にスッポリと納まる温もりは、体の熱だけではないだろう。

「ツ、ツクモ……」

戸惑う声には、困惑の色が伴っている。

拒絶の様子は無い。どうやら、独り善がりの行動からは逸脱出来たようだ。

「って、こら、わっぶ……尻尾を変なトコに絡ませんな」

「……え、わっ」

おっかなびつくり……恐る恐る首へと巻きつく細めのマフラーに、ああこの部位も暖かいのかと、目の前でちらちらと揺れる尻尾を見ながら思った。お前は勇丸か。

どうやら本人の意思とは無関係で動いているようだが、あんまりにも俺を誘うもんだから（多分）、再度、人參を前の前にぶら下げられた馬になった気分だというか。つい、
こう……

——にぎっ

「ひう!？」

あんまり強く握ったつもりは無いのだが、可愛い気のある、素っ頓狂な声上がる。

……いやもうね、こういう突発的な衝動と申しましようか。先程の『彼女が誇っている云々』といった事など星の彼方。

今と言い、レイセンの時と言い、瞬間的に湧き上がる欲望は抑え難い。

……妙に艶がかった声色だった、という事実には、強引に顔を背ける事にした。

「す、すまん。痛かったか？」

「……痛くは無いんだけどね。……その……そこを握られると、どうにも自分では抑制

出来ない感覚が口から漏れてしまつて……」

「敏感なんだな、そこ。……まさかそっち系の感覚が？」

『馬鹿か君はっ！』やら、白い目とか、即離脱等の反応を期待しての言葉だったのだが。

「……ばか」

搾り出すような、ぽそりとした言葉。こちらの外套を奪い盗り、掴んで、そのまま頭から覆いかぶさつてしまった。片耳だけがちよこんと覗いているのだが、自分のどういふ感覚が働いているのか、灰色の毛で覆われているそこには、真つ赤に染まっているような気がするのだが。

（オウ……）

何かを言おうとして、結局何も言えずに口籠る。

肌寒いという情報も、脳に到達出来ないくらいに、目の前の出来事に意識を持つていかれていた。

宛ら、何でも収納してしまうという、『しまつちやうよく』が口癖だと耳にするピンクの妖怪が住まうという小島で起こる現象の如く、俺の頭部からは、妙に間延びのする音と共に、大量の汗が噴出している事だろう。

……今夜は徹夜だ。異性という存在を、強制的に認識させられた。

寝耳に水どころの話ではない。寝ていたベッドごと絨毯爆撃で吹き飛ばされた気分

である。

勝手に上昇する脈拍数に、妄念を飛ばすと評判の精神統一……素数の計算すら行えない。場合によっては、俺の舌が流血か、あるいは倫理や道徳といった単語から今生の別れになるやもしれぬと――

「……手を」

白布達磨の内部から声がする。

それは、所々で言葉を途切れさせながら。

「手を……握って、も……良いかい……？」

包まったミシヤクジの外套から覗く、羞恥の色が付着された、潤んだ瞳。

——その姿が妙に愛らしくて。

今までの心情が嘘の様に、俺の心中は穏やかなものになっていた。

言葉にはせず、そつと片手を差し出した。

自身のテリトリーに引き入れるみたいに、それを外套の中へと招き入れ、小さな両手で抱く様に包み込まれる。

ぎゅつとされたり、そつと触れられたり。一通りの方法で感触を確かめられた後。

くす。と、小さく一声。外套の隙間から零れた音には、言いようもない満足感が伴っていて。からかわれた様子はない。多分、嬉しさを噛み殺した声。

この数日間。寝る間も惜しむ勢いでネズミ達の指揮をとっていた彼女の姿も、今のこの反応を見ては、嘘のように思えてならない。

——それが切欠だったようだ。

急激に襲い来る、安堵感に追随する睡魔。逆らう事をせず、既に彼女の元となつてしまった片手を預け、体から意識を切り離す。

調子に乗った一時であつたが、とりあえずは、悪くない着地点であつたかと。白蛇皮の蓑虫になつてしまったネズミ少女を最後に見て、俺は瞼を閉じる。

遠く。こちらを見続ける赤い光達は、いつの間にか、一つたりとも確認出来なくなつていた。

いつ以来だろう。こんなに暖かいのは。

生まれた頃か。お母様と出会った時か。数えるほどしかない暖かな記憶であつたけれど、一つ。新たな温もりを覚える事が出来た幸福を噛み締める。

何度も驚かさされ、何度も呆れ、何度も怒り、何度も笑い合い。あれを神と呼ぶ心境には、もう、戻れない。あそこまで変な存在は、一体何と比肩して考慮すれば良いというのだ。

神、ではなかった。

あれらは自らの信仰を貪欲に欲している節がある。程度の差はあるけれど、自らの生き死にに繋がるのだから、当然だろう。

けれど、ツクモにはそれが無い。僕達ネズミの神にでもなるのかと勘繰っていた時もあつたけれど、あの馬鹿な演説や、寒いから。とネズミの何匹かを翌朝まで抱き抱えて眠り扱ける様は、間違つても尊敬すべき者の態度ではなかった。完全に、己の欲を全面に出して行動している。ツクモ、などと呼ばれる神が居たと記憶していたけれど、今の今までの付き合いの中で、その答えはとうに、遥か彼方へと置き去られていた。

では、彼は妖怪か。

……可能性は高い。妖怪であるのなら、あの平天大聖が知らぬ様子で居るのはおかしいしけれど、ツクモは東の地より訪れた者だと言っていた。何処まで真実か。と疑つて

掛ければキリが無いが、あれに、誰かを欺くという行いが取れるのかには、苦笑で応えるだろう。

あの死の商人、ヴェラとは違う。あれは敵と判断した者に対して、悩む素振りすらせず、微笑みのまま、首を刎ねる精神の持ち主だ。味方にしよう、利用しよう、と思う対象以外には滅びを望む、絶対者としての視点がある。

頼る、縋る、敬う。それらの言葉があれ以上に似合う者は、先に顔見知りとなつてしまつた平天大聖以外には居ない。一国の主たる自らの母親でさえも、あの領域には達していない、何者にも染まらぬ芯を持つた——それ以外は無慈悲を体言する存在に他ならない。

それに、邪な者は多かれ少なかれ、黒い気配を漂わせる。僕であっても、ダン・ダン塚の彼らだつて、それはある。そういう点から見ると、普段のツクモはそれらを一切表に出す事は無いのだが。

(霸王を補佐し、尽力した……王佐の才を持つとまで呼ばれた、筆頭参謀……)

文若を……死者を蘇らせた時に垣間見えた、底知れぬ、黒。それは瞬時に消え去り、雑多な妖怪であれば疑問を覚える間すら無いだろうが、何かを見つける、という行動は、手に入るか否かは別としても、誰にも負けないと自負出来るものである。

あの異能は、平天大聖当人を目の前にしても断言出来る、純粹な黒の力だ。

嫉妬。憎悪。悲哀。それらおぞましい感情の結晶——ツクモが呼び出した者から零れたそれは、いつそ澄み渡る夜天の如き、美しいものであった。

不可思議なのは、それは他の術を行う際には漏れ出さない、という事。異形の赤竜であれ、あの孔明であれ、白銀の馬モドキであれ、それは一切感じ取れるものではなかった。

ただ、黒とは違う、全く別の何かの力が漏れているのは察する事が出来た。それが具體的に何なのか。は不明だが……。

(……あつ)

閃く、とはこの事か。あれの言葉を鵜呑みにし過ぎて気づかなかつた。

極東の地……の手前。自らの活動範囲には生息していなかった種族。仙術を用いて天変地異を起こし、不死であり、天界に住まうという、世捨て人。

名を、仙人。

(そうだ、ツクモはそれに該当するものが多い)

この作戦が始まってから、彼は果樹園の実一つを食ただけで、飲食の一切を行っていない。時折、何かを咀嚼するように口を動かしていた。何か食べているのかと尋ねてみれば、『霞食ってる』と。

何が本気で、何が冗談か判断付きかねる者であるので、それも戯言の一種だろうと思

い、ぞんざいな相槌と共に流していたのだが。空腹によって、彼の体調に変化が起こった際には、迅速に人間用の食事確保に動く算段であったのけれど、目立って悪い健康状況は、疲労以外に筆頭すべき点の無いもので。天候を操り、山や川を二つ二つ動かし、空を飛び、キョンシーと名が付いてた筈の、死者を動かすという術まであるというわけではないか。

(……あれ? でも……)

彼らは崇高な行いを是とし、私利私欲は極力行わぬようにする性質ではなかったか。途端、矛盾に突き当たるけれど、それも数瞬で解決する。そういえば、仙人の中には、それら欲求を埋める為に何ら忌諱を持たない連中も居た筈だ、と。

邪悪な仙人。そのまま邪仙、などと呼ばれていたと思うのだが、残念な事に、詳細についての知識は殆ど持ち合わせていなかった。

(うーん……)

神にしろ、妖怪にしろ、邪仙にしろ。ああも圧倒的な異能を持っているというのに、ネズミ達に戦き、こちらの言動一つにあたふたとし、右往左往する姿は、妖怪の本能を甘美に刺激する獲物……もとい、素晴らしい協力者以外の何者でも無い。

ただ、そんな獲物も今は、夢の世界へと旅立って行った直後。

規則正しく上下する胸。呼吸音。あの時、煌びやかな鞍袋を奪取した時と何ら変わり

のない寝姿に、何処か可笑しさと、心の温もりを感じながら。

(……変な奴)

結局。彼への思いは、その一言に集約されるのだった。

彼が施してくれた恩恵は、彼が行ったあらゆる言動——調子付いた行動や、妖怪をからかう事に愉悅を見出している言葉によって、打ち消されてしまっている。当然、そんな些細な事でツクモが成した功績は微塵も揺るぐものではない。自己欲達成の為の腹芸が得意な自国の商人や政治家ならば、内心はどうあれ、仮面の笑顔を貼り付けたままに良好な関係を……。

(……いや、無理かな)

『御免なさい！ 町、水没させちゃいました！ すぐ元に戻しますんで！』などとやりかねないのが、彼である。

本当、あれは人の心に入り込むのが上手い。そのの悉くが、尊敬や敬意といった単語とは対極の方面であるのが、また彼らしいというか、勘弁願いたいものであるというか……。

(……でも)

あの時。全てを諦め、大切な者との今生の別れになる筈であった、あの瞬間。たった一言。

神でも、妖怪でも、邪仙でもなく。

彼が差し伸べてくれたあの言葉が、今も、この胸の中で。

「……惚れた、弱み」

外套の中で、思わず呟いた。けれど、額面通りの意味では、決して無い。

単純に、自らを縛る暖かな鎖に呆れているだけである。

……まあ、この鎖。

重かったり軽かったり縛ったり縛らなかつたり。あるいは何処かで勝手に絡み付いていたり、実に手の負えない自由奔放さなのだが。

(……馬鹿だなあ、君は)

あれだけの力だ。もつと賢く、簡単に生きる方法が、山のようにあるだろうに。

丸まった懐に抱え入れた彼の手は、思ったよりもゴツゴツとして、大きくて、暖かくて。これでもつと真面目にやってくれたのなら。と、そう思わずには居られない。

これには、一人で何かをやらせては駄目なのだ。自ら支えてやれば、きつと彼は、唯一無二の偉大な人物になれるかもしれない。

(……ん?)

——待て待て待て待て。今、何か自分はおかしな単語を出さなかったか。

真面目にやって、までは問題ない。

一人で何かを……うん。ここも、いい。

その後、その後だ。

自分は一体、何を考えた？

(……ツクモ……を、支えて、あげれ、ば?)

……何だそれは。

支える、とはどういう意味だ。

いやいや、深く思う必要は無い。言葉通りに、彼の失言や失態を先回りして防止したり、やってしまたら即座に咎め——

(——つて、それじゃあツクモの傍にずっと居なければいけないじゃないか!?)

いやいやいやいや。それこそ、追及すべき点が皆無の思考だ。別にずっと傍に居なければいけない訳でもなし……。

……はて。ずっと傍に。とは、どう成すのが通例であったか。

(——ツ? ——つ!? ——!!)

堂々巡りの思考は、とくん、とくん。動力源が、鼓動を休めるまで収まる気配もなく。ボディランゲージにしては行き過ぎた気がしないでもないあれこれや、『俺は好きだぞ（毛並みが）』、といった台詞が、真意が分かっているというのに、実に都合の良いように、頭の中で組み上がる。

自身の中で、ふわふわとした思考は飛び続け。それは、夜が明けるまで行われる羽目となり。

「うう、寒ッ……。おはよ……。ん、どした？ 寝不足か？ うりうり」

少女の目の下に、クマでもあったのだろう。

起床と同時。ぐりぐりと両の頬を抓り、円を描くように引つ張られ、リンはその意識を覚醒させた。

そして。

「——ばかあ！」

元気爆発。快音一発。

睡眠不足と、行き詰った思考の果てに、少女の理性は限界を迎えたのだった。

炎下の地。

季節外れ&場所外れの広葉樹の葉が、ひとひら。事態が飲み込めず呆ける男の頬に、色鮮やかな紅葉を成したという。

49 陥穽

太陽が大地を焦がす砂地に土煙を彼らが見たのは、日が昇り切った頃合だった。

地平線から立ち上る陽炎に、ぼつり、ぼつりと、歪む存在、波打つ人型。それが時間の経過と共に、段々と輪郭をはっきりさせてゆき、その数を、十、百、と増やしていった。ウイリクの国からやって来た、人間の軍隊である。

土煙を立ち上らせて、黙々と進軍する姿には、玉の汗が吹き出る気温であるというのに、見る者の背筋を振るわせるものがある。

そんな一団を全て見渡せるそこは、砂漠に急遽構築された、新しい【土地】。眼下を廣大な黄色が締める【頂雲の湖】の頂上の一端で、三つの人影が息を潜め、一つの影が悠々と直立していた。

前者がリン、九十九、【伏龍、孔明】であり、後者が七天大聖を統べる者、平天大聖で

ある。

リン達は、姿を見られては拙いだろうと、山頂で伏せ、極力ウイリクの軍勢の視界に入らぬようにしているのだが、一方の後者である平天大聖は、そんな苦勞を嘲笑うかのように、何食わぬ顔で佇んでいた。

「……おい」

基本、目上の他人には丁寧語である九十九だが、これには眉を顰めるものがあつた。

「何でしよう」

しかし、それを齒牙にも掛けないのが妖怪の王。

楽し気な表情を隠そうともせず、これから起こるであろう一挙一動を見逃すまいと、その眼を油断無く巡らせている。色々な力——『集められた魔法』を見せ付けたとはいえ、修羅の如き闘気を纏っている訳でも、英雄宛らの風格を漂わせている訳でも無い存在からの不満など、耳を貸すにも値しない。と、思っている節があるせいでもあるのだが、最大の理由は、他者の不快な感情を楽しんでいるからに他ならない。

しかしながら、一応は、九十九の要望に応えてはいるのだ。

炎下の地、力ある妖怪達の住まうタツキリ山に君臨する、大聖の頂点。それが、○○の能力によるものではない——妖術の一つや二つ、使えない訳が無い。

「……もう、いいッス」

不貞腐れながらも口を噤む九十九は、思いつきり膨れつ面を晒しつつ、顔を前方へと向け直す。何せ、今の平天大聖の姿は、視界の先に辛うじて見える陽炎と同様に、揺らめき、掠れ、間近であつても目を疑うほどに、周囲の風景と同化していたのだから。

至近でこれなのだから、それがキ口は離れているであろう、人間の目で捉えられる事はないだろう。

— そう思うからこそ、九十九は何も言葉を……嗜める事すら出来ないまま、時は過ぎ——。

「——ツクモ。そろそろ」

不貞腐される九十九と、それを愉快そうに眺める平天大聖。それら間の微妙な空気を完全に無視する形で、目の前の展開に全神経を集中させていたリンが、時を告げた。既に、今朝方のおかしな態度は抜け切っている。今、リンが見ているものは、如何にこの作戦を完遂させるかという点と、その先に見る、母親との幸せの未来だけ。

「……あいよ」

それを感じ取ったのか、九十九は不承不承と言葉を返し、雰囲気を引き締めたものに変えた。

「最終確認。……居ない、な？」

「ああ。お母様の姿は、影も形も視認出来ない。仲間達からも報告は来ていない。——

—これで、何の気兼ねも無くなった、ということだね」

既に二人……いや、三人か……の意識は、その全貌を現した、ウイリクの国の軍勢へと注がれている。

「しかし……楽しそうですね、孔明先生」

視線は切らずに、言葉だけを真横の軍師へと投げ掛けた。硬い地面に伏せる孔明が、九十九の声に応え、念話を送る。

「……はあ、『大兵力は素晴らしい』……ですか」

魏という大国を、呉という強国を。それらと隣り合わせの、食うか喰われるかの死闘を演じ続けてきた経歴を思い返したせいか。存在こそ人間ではなく、ただの食欲の強いネズミの群れではあるけれど、それが十／十修正の効力で成人男性と同等の力を持ち、命令には従順であり、五十万匹近く居て維持費（食費等）もクリアしているというのだから、これが恵まれていない訳が無い。

勝利条件こそ特殊なものではあるけれど、常に綱渡りであった頃と比べれば、今歩んでいる道は、幅三メートルの石畳の歩道。安堵を覚えるのも仕方無い事だろう。

——そして、彼らがウイリクの国の四万人の軍勢を眼下に収めきったところで、とうとうその時は訪れた。

違和感を覚えたのは、一団の先頭を進む、真紅の衣を身に着けた者だった。取り分け機微には鋭く、先も、持ち前の観察眼にて、一軍を滅ぼし得る砂蠍を難なく迎撃している。

その者——仮に、將軍、と呼ぶ事にする人物は、前方に見えてきた森林地帯、自然豊かな新緑が地平線一杯に広がるそれと、その奥の天に突き出す霊峰、タツキリ山へと進軍を続けていた。

名立たる魑魅魍魎が潜む魔境。それ故に、手付かずの自然と資源が残る地。

何より、方々の国から略奪の限りを尽くし、天界や、名立たる仙人から譲り、あるいは強奪したと聞く、一国を手放してもまだ足りぬほどの効能をもたらすという、数々の財宝達。あの一帯を手に入れられたのならば、西方の地までも手中に収められるかもしれない。

新たにもたらされた武器——火筒は、人間の一軍をも滅ぼし得る砂蠍を瞬く間に打ち倒すという成果を上げた。

弓や弩よりも威力と射程に優れ、バリスタや投石器よりも運用性に秀でた、これまでの戦争を兇戯にも等しいものへと様変わりさせられるだけの性能を秘めたもの。使用回数の制限と、湿気に弱いという欠点、命中率の低さ、等々。解決すべき問題は山積みであるが、それらを笑って受け入れられる程に、あれは素晴らしいの一言に尽きる兵器である。

この聖戦が成功すれば、より純度の高い鉄を精製し、威力、射程を強化した火筒を生み出せよう。

伏魔殿と化した森林地帯は、自身の能力に縋る妖魔達の薨。故に、資源を大量に活用するという選択肢が存在せず——その様な土地であるから、これら兵器の要となる燃える土も、大量に眠っている可能性も高い。

……いや、そもそもが、それらが埋まっている、という確定の情報としてもたらされた結果が、この進撃である。

全てを変えたと言っても過言ではない、ヴェラと名乗る商人の到来。一体何処でこれら情報や武器、人材を集めてきたのか不思議でならないが、それらが何らこちらに対し

て不利益に繋がらないというのだから、真に不気味で、都合が良く——信頼出来ぬ者。
——これが終われば、神の元へと送らねばならない。

自国の諜報機関を用いて調べ上げた範囲では、まだこの情報と武器を所持しているのは、この国のみ。

商人とは、過程はともあれ、最終的には利益を最優先に行動する。これだけの成果を生み出す人材は惜しいが、だからといって、自らの命を危険に晒しては元も子もない。過去、あれとは幾度か話した事はあつた。だが、その全ての印象がこちらの利となり、裏付けされた成功が浮かび上がり、言動一つ一つ、どれをとつても疑う余地が無いもので。
——あれは、人ではない。そう結論付けるには、然して時間は掛からなかつた。

もうすぐで、三十も半ば。無駄に、毛の生え揃わぬ内から、幾年も海千山千の化かし合いの場で生き抜いてはいない。人間、誰しも欠点があり、弱点があり、表と裏の……：少なくとも、片側から見れば、善か悪——利か損かのどちらかに取れる行動を、幾つも積み重ねている筈なのに、あれには、それが無いのだ。とてもではないが、あれを御せるとは思わない。今この思考すらも、あれの手の内、予測の範囲なのではないかという懸念が捨て切れずにいるくらいである。一刻も早く、不安の種が芽吹かぬよう、迅速に刈り取らねば安眠の日々は訪れないだろう。

そしてより豊かになった自国を見れば、自分の求心力は、女王の比を超えるだろう。

そうなれば、後は思うがままだ。頂点の交代は、恙無く行われる筈。特産の宝石、一種のみで保っているような経済ではあるが、それはまだ尽きぬ様子を見せず。最悪、自分の代だけならば湯水の如く財を消費しても問題は無い。場合によっては、民からも搾取するという選択肢もある。将来は約束されたようなものだ。これを機に豪族、豪商達が、己が利益の確保に邁進しているが、主要な箇所はほぼ全て抑えてある。多少の権利の剥離は許してしまうが、幾らかの損失は目を瞑ろう。ある程度の蜜も蒔かねば、呼び水とはならないのだから。

所詮、下々の心は低きに流れる。甘い方、楽な方へと転がった先にあるものは、決して抜け出せぬ階級。名だけが国民であるという、奴隷と大差の無い家畜。女王への真の忠誠心を持つ者はとうに消し去っており、これさえ成せば、自分の未来は曙光が登る事になるだろう。

——そう思う、国を立てての、五日目。半刻もすれば腹の虫が騒ぎ出す刻限に、將軍は、それを見た。水蒸気が飽和状態となり、凝縮した後に水粒となつて空中に浮遊し続ける現象——霧である。

馬鹿な。という突発的な感想は、どうするか、という思考によつて塗り潰される。早朝や夕暮れならば、まだ分からないでもないが、今は真昼以外の何者でも無い。

見れば、それは既に視界の先の目的地を白で覆い隠し、瞬く間にこちらの軍勢を飲み込まんとして来ているではないか。

「×●○×■!!」

指示を飛ばし、密集させ、停止を命じる。既に霧は自分の体に触れ始め、真後ろに追隨する者の姿の視認も難しくなつて来ていた。

停止を命じておいて、正解であつた。

ここまで濃い霧に出会つた事も、あまりに唐突に発生した自然現象に対処する術もなく、これでは歩くだけで軍が散り散りになるだろうと理解させられるだけの天災である。指示が行き届くまでにはまだ時間が掛かるだろうが、軍の壊滅という、最悪の事態は回避出来そうだ。

……しかし、これを自然がもたらしたものだとは考え難い。どうやら、早くも妖魔達の洗礼を受けてしまった可能性がチラ付く。

手を伸ばせば、手の平が白で埋まる視界。多量の水分は、火筒の肝である、燃える土をただの屑土のものへと変容させてしまう。周囲の警戒と、なるべく火筒を外気に晒さぬよう命令し、後続に対し、指示を口にする。続々と集結しつつある一軍は、徐々にその規模を増しつつ、互いの安否を確認。響く号令の数と音量から考察するに、今のところは順調に――

「▲△ッ!？」

——足元から伝わる微震。

四万人の兵士達でも実現不可能であろう振動に、堪らず驚きの声を上げてしまう。

巨人の到来。大地の悲鳴。世界の鳴き声。それらを思わずには居られない未知の不安が、周囲の視界が完全に塞がっているという現実と相まって、警戒心と、それよりも尚強い恐怖心を芽生えさせた。

数秒毎に振動と音量が比例し、体と鼓膜を揺らす。そしてそれは、後方にて集っていた兵達にとっては、より深刻な事態をもたらしていた。

神の名を上げ、天に祈る者。

耳を塞ぎ、目を瞑り。体を小さく丸めて、地面に伏せる者。

地震、という自然現象に全くと言っていいほどに耐性の無い彼らにとって、それはこの世の終わり。終焉に他ならぬ、星の断末魔に聞こえているのだろう。幾ら戦に身を置く者であったとしても、槍で突かれるでも、剣で切り裂かれるでもない、全く予想していなかった死は受け入れ難い。

恐怖の伝播は静かに、素早く。砂地に染み込む水のように。同様が恐れを生み、恐れは足へと、脳へと伝わる。

「■□▲ッ!!」

白で閉ざされた視界と、世界を揺るがす鼓動に耐え切れなくなった、とある者が、とうとうその職務を放棄した。手に持つ剣から察するに、切り込み隊の内の一人であったのだろう。

浅黒かった顔であつても尚分かる程に血色を失わせ、不安に駆られて抜刀していたそれを放り出す。その集団の、隊長の静止も耳に入らない。自らの命を守る為にと握り込んだ武器をも捨て去つて、逃亡への……生還への第一歩を踏み出そうとし——その未來は永久に閉ざされてしまったのだと知るのに、然して時間は必要無かつた。

音だけ。という経験も、中々あるもんじやないと思う。それが喜び方面ではなく、恐怖系の方であれば、尚の事。

意識せず、ポロリと出てきた言葉は、溜め息成分100%。

「……無いわー」

いや、やったのは自分なんですけどね？

「はーっはっはっはっ!!」

俺の背後。声高らかに、腹を抱えて笑う平天大聖サマ。

もはや姿を隠す気など微塵も無い、と、とても楽しそうに爆笑中。何が楽しいんだが分かんないけれど、出来ればしばらく関わりたくないお声で御座います。

「うん。これなら」

一方。喜び、という点のみならば、リンも同様の心境にはなっているらしい。

目の前で繰り広げられる、当人達からしてみれば悪夢以外の何者でもない現象を前にして、ネズミっ娘は片手で小さく握り拳を作り、今回の作戦の手応えを感じているようだ。グツ、って感じで。

—— 格別、難しい事はしていない。陥穽。またの名を、落とし穴。

かのニュートン先生が見つけた偉大な法則。重力の恩恵を最大限に利用した、古来より罫の常套手段として位置する、単純にして、効果絶大なトラップ。一定以下の体躯強度しか持たない生命にとっては、命を失う場合もある、危険なもの。

……ただそれが、総勢四万に及ぶ人間達を瞬く間に飲み込むほどの広範囲な規模であったり、高さにして、三、四階建ての建造物に匹敵するものであった事くらいか。特筆すべき点としては。

後はそこに、孔明先生が存命だった頃に得ていた、この辺り一帯の知識——枯渇した水脈群と、『集められた魔法』の力を併用させただけ。

水脈が枯れた事が原因で、この一体が砂漠になったのかどうかは定かではないけれど、ただの敷き詰められた砂の足場よりは落とし穴として活用し易い地形であったのは間違いない。それを、五十万のネズミさん達でゴリゴリと耐久値を減らし、崩壊寸前へと持って行き、タイミング良く、発動させたただけだ。

けれど、その発動方法が難題でもあった。通常の落とし穴であれば、一定以上の負荷を切欠にするものなのだが、今回は範囲が範囲故にそうもいかず、こちらで誘発を計る必要が生じ。

(始めは「頂雲の湖」の水を利用して、支えの石柱を水圧で押し折る算段だったんだが……)

この作戦を発案した、数日前の会議の最中。ふと目に入った、こちらを面白そうに眺める平天大聖の姿に、何だか不公平な気持ちがつつと沸いて来た。真面目やつてる横で、楽し気にされちゃあ、不満の一つも生まれるというものではないだろうか。例え

それが、こちらが切欠を作った流れであつたとしても。

『暇なら手伝つて!』

『良いですよ。』

おお。と逆にキョドつたのは、記憶に新しい。

余りにすんなり受け入れられた事で面食らう羽目になつたけれど、了解を得られたのなら良いのでは。なんて思つていたのだが。

これが後の交渉——こちらから何かしらの譲歩を引き出し易くする為の複線だど気づくのは、それが実際に効果を發揮した場面……タツキリ山に【禁忌の果樹園】を造林? するのを確約をした際に、【伏龍、孔明】から指摘を受けてからだつた。

俺からしてみれば、時間が掛かるとはいえ元手は無料なんで、損の無いやり取りであつた……のは結果論。『この程度で良かった』と、後から孔明先生にネチネチと攻められる経験は、出来れば一度に留めておきたい。

尤も、その後、妖怪とはいえ一角の王と交渉を成功させた点“だけ”は褒めてくれた。これが俗に言う飴と鞭というヤツなのだろうか。勉強になります。次回からは、もう少し飴の成分多めを期待してみよう。

始めは平天大聖が落とし穴地帯ごと、何かの重圧によってペシャンコにする方法を提

案されたのだが、それじゃあ目的の一つである、軍隊不殺が達成出来ないってんで……。
(平天大聖の……何か知らん妖術で支えを崩してもらって……)

……というか、魔術とか魔法に比べて、そもそも妖術自体が下級の代物ではなかったか。八雲さんの式神さんの式神さんが、子供騙しのなもんだと言ってたような……言つてなかったような……。

それをどうやったらここ【頂雲の湖】の頂から、キロは離れた砂漠の地下を狙い撃ちしたんでしょうか。機会があれば教えてくれねえかなあ、タダで、簡単に。これから起こるであろう展開を考えるに、可能性は低そうではあるけれど。

「素晴らしいですねえ。羽の生えた、赤蜥蜴の使役。山と湖の一体になった、大地創造。甘美な果樹を実らせる、命が実る木々の造林。そして今度は、自然現象の発生。……ネズミ達の先走りを諫める為に使用した昨晩は、月明かりのみの視界であったので細部は把握出来ませんでした、こうして隅々まで見渡せる場所と、しっかりと明かりが差す刻限であれば……くっくっくっ……」

楽しそうだなー、この人。帰ってくんねーかなー、今すぐに。

「名前、お伺いしても？」

道を尋ねる風に気軽な、平天大聖の言葉。

流れるに、今使った能力——カードを指すんだらう。

まあ、別に隠すようなものではないので、サクっとご説明しちゃいましょう。

—— 昨晚、ネズミ達の先走り（原因・俺）を阻害し。今日、人の列を塞ぎ止め、線から円へと膨張を誘い、落とし穴の効果範囲内に人数を集中させる為に用いた、それは。

【濃霧】

『濃霧』
のうむ

1 マナの、緑の【インスタント】

このターン中のクリーチャーの攻撃を軽減し、ゼロにする。

緑による【コンバット・トリック】の代表格。数々の亜種が派生しており、この効果の優秀さ（ゲームバランスとしてのもの）が窺える一枚。効果の程は、たった一ターン、相手のクリーチャー攻撃を無効にするだけのものであるが、油断大敵、とばかりに飛んでくる【濃霧】には、窮鼠の一撃にも似た効力がある。緑を使う者は勿論、一定期間以上MTGを楽しんでいるプレイヤーにとっては、馴染みの深いカードである。

嘘は言っていないのだが、どうやらあちらさんは、誤魔化されたと思つたらしい。声にこそ出していないが、やれやれ。と幻聴すら聞こえて来る始末な仕草。胡散臭いくらいに似合っております。

(まあ、名前そのまんまだもんなあ)

逆の立場なら、俺だつて疑つて掛かる……まず信じない自信はある。こちらは嘘偽り無い事実を言っただけなのだが、勝手に相手が勘違いして空回りしてくれる展開というのは、中々に無い経験だ。それが、こちらがそれを把握している状況であれば、尚の事。面白い。

これからの流れを考えると憂鬱にしかならないけれど、それでも、その最中に楽しみを見つけたのは、冷静さのレベルでも上昇したんじゃないかと思える経験であった。

……現実逃避が上手くなっただけ、という可能性は、目を瞑る事にして、今はただ、
”来た”時に備えて、事前を選んでおいたカードを、脳裏に思い描くのだった。

——無数の悲鳴は、深い霧と、穴の空いた大地に飲み込まれ、消え入る灯火のよう
に小さくなつていく。

鋼の鎧を持つ蠍を砕いた武器を持つとも、それが万の軍勢に運用されようとも、相
手が居なければ意味を失うもの。振るう相手の居なくなつた火筒は、砂の底で瓦礫と化
して、それは瀕死となつた人間達には、無用の長物と成り果てる。

足の折れた獣は捨てて。水と、食料と、気持ち程度の武具を手に、鈍重な足取りで撤
退を開始する、人、人、人、人。人の群れ。そこに見えるは、総数、四万に届く敗走軍
と、それらを見下ろす——

「——なあ」

出鼻を挫かれる。とは、この事か。九十九の顔は前方の敗軍を見つめたままに、背後

に居る妖怪の王へと、平坦な声を投げ掛けた。

チグハグな丁寧語は消えて、今は、フラットな関係のそれへと変化している。

契約を守り、隠す気の無い面従腹背を貫いていた平天大聖の表情が、この時、初めて僅かに固まった。

「何でしょう」

とはいえ、それも一瞬。すぐさま不敵な態度が戻り、些細な失敗をおくびにも出さず、言葉を返す。

「———するのかわ？」

伏せていた体を起こし、パンパンと、二回。前面に付着した土埃を払いながら、九十丸は後ろへと振り返る。

探るような声色。気さくを装った言葉。これから起こるであろう不安に対してか。その口調は、重い。

「はて。何を———」
「……惚けてくれるなよ」
「……ふむ」

腕を組み、顎に片手を添える形で、平天大聖が熟考する仕草を行った。

けれど、油断無く上空へと気を巡らせている様は、そろそろ現れると思っただろう、タツキリ山の根城で姿を消した赤蜥蜴、【稲妻のドラゴン】を警戒しての行為である。

「これでも、感謝してゐるんだ。突然土足で乗り込んで来た、見ず知らずの……何処の馬の骨とも分かんねえ奴相手に、考えはどうあれ、こうして最後まで付き合ってくれたばかりか、手助けまでしてくれただから」

直立する九十九の傍に、隠し切れない懸念を表情に貼り付けたまま、リンがおずおずと寄り添った。それに習う形で、「伏龍、孔明」も横へと並ぶ。太陽の真下。「頂雲の湖」の上。丁度、三対一の構図を画いた様に立つ彼らの姿は、これから始まる出来事を、否応無く思い起こさせるに足る立ち位置だ。

「——では」

大聖のおどけたような態度はなりを潜め、代わりに姿を覗かせるのは、妖怪の妖怪足る所以の形。歯止めの無い欲望の具現化。的確な応答では無かったが、次の言葉には、平天大聖の本心が含まれていた。

「あなたをここで貰い受ける事に致しましょう——ッ!!」

鋭さの増した、愉悦の笑み。

それを体中から溢れさせながら、

「——男にコクられる趣味はねえ!!」

九十九達の四方。四角く囲むように現れた角に、それぞれ一本。足元から、白銀の柱が生え揃う。地面から突き立ったそれらに合わせ、彼らの真下の岩肌が円形に砕け散り、三人の姿を暗闇の奥底へと誘い込んだ。

「——ッ!?!」

なんと。

言葉に出さずとも、落下を開始した九十九らからは、そんな平天大聖の驚きの言葉が、しつかりと顔に張り付いているのを読み取った。

「こんな事もあるのかとおおー!!」

一度言ってみたかった。と、九十九が内心で呟いたかどうかは定かではないけれど。

リンを小脇に。孔明と肩を組む形で、九十九は一連の出来事の切欠を作った相手——自由落下する「メモナイト」へと、自分達の背中を預け、対象をしつかりと視界に収め。

（【お粗末】!!）

本来の力による攻勢か、自らも奈落へと飛び込もうかの追隨か。その二択で平天大聖の心が揺れ動いた僅かな隙に、無力化に秀でた白のカードを繰り出した。

大和の軍神が一人、八坂神奈子であっても一定以上の効果を発揮したそれは、大聖の頂点に位置する存在であっても、例外は無かったようだ。

逡巡の後、忌々しげに、力による攻勢に移ろうとした途端、

「ッ!?!」

そこで、初めて平天大聖は、自身に起こった変化に気が付いた。この一帯ごと踏み潰さんとする……筈であった不可視の重圧は、しかし、本来の力の半分に届くか否かの効力しか現れない。予想していたよりも大幅に減少した攻撃範囲。山頂から、湖の麓まで。高低差にして百メートル以上はあるであろう、突如出現した穴を、それごと……地の底までも崩落させる気概で放たれた重圧も。いずれも十全の成果を発揮せず、山頂の何割かを砕くだけに留まった。下へと続く穴の入り口を塞いでしまっただけという、十九達にとって最も都合の良いものへと。

大聖の端整な顔立ちが、苦虫を噛み潰したように変貌する。自身に起こった変化。相手の退路を確保してしまった愚行。それらを微塵も予期出来なかった自分。様々な要因に対し憤慨を顕わにして。

「……………ちいッ!」

一際大きな破砕音。遠目で見る者が居たのなら、そこには、蜃気楼のような、何かの巨獣の白足が見えた事だろう。久しい……本当に久しい、八つ当たりという行為を、平天大聖は自ら潰した瓦礫の山へと向けるのだった。

大きな深呼吸を、一つ。足元の瓦礫から視線を切り、代わり、【濃霧】の晴れたそこに、未だ地の底を蠢き、這い上がろうとしている存在を見た。

先に見た様は、愚鈍を体現する人間達の軍隊の……成れの果て。自らの行動の規模の大きき故に、何をするにも派手になるものだ。そう思う平天大聖は、たつた今取り逃がした獲物と交わしたものを思い浮かべる。

『人間の軍隊がこちらの地に足を踏み入れたとしても、国への報復は行わず、防衛のみにして欲しい』

何ともまあ、頭の悪い契約——穴だらけの約束であった。

まず、期間を設けていない。

次、国の範囲を定めていない。

そして、防衛の規模を決めていない。

他にも他にも。穴だらけというよりは、むしろ穴しかないような取り決め。約束ならまだしも、あそこまで曖昧な契約は、大聖を統べる者にとって生まれて初めてであった。これまではその立場故、並み以上の知識を持つ者達としかやり取りを行っていなかった

ので、当然とも言える。

なればこそ、九十九が意図的に曖昧にして、何処まで切り込んでくるのかを……真意を探ろうと垂らした餌なのだ、平天大聖は今の今まで思っていたくらいだった。

彼自身、九十九の提示した理由の真意は十分に理解していた。今後とも人間達への攻撃を行わないように。との考えが窺えたのだから。

これが九十九を手に入れた……機嫌の良い状態であったのならば、卑しい人間の頼みなれど、その真意までを汲み取り、反映させていた事だろうが、もう、それも適わない。

あれらを全て潰してしまえば、このうねる感情の抑制に一役買ってくれるだろう。後は、これが終われば「自分以外に」かの国を攻めさせるべきか。それとも、真綿で首を絞めるかの如く、国境を封鎖し、餓死させるのも興味がある。

そうすれば、そこに怒りを覚えて、復讐や報復という手段で、あちらから自らの元に来てくれるのではないか。

そこにはもう、見る者全てに怖気を感じさせる笑みを湛えながら、自己の望みを如何にして叶えるかを巡らせる、妖怪の王の姿しか存在していない。

恐怖に歪む人間というのは、それだけで大聖の心を満たしてくれるもの。遠方からでも見ていたこの山の頂。それを、瞬く間に崩す存在が、ゆつくりと自分達の方へ向かって来ていると知れば、あれらは、今よりもさぞ面白い様を見せ付けてくれるに違いない。

平天大聖の足取りは、荒れた山岳であつても軽やかに。微塵も体勢を崩す事無く、ゆつくりと、撤退を開始している敗軍へと進んでいった。

ひとまず、と。そう思わずには居られない。〔頂雲の湖〕の山頂から、湖の麓、どころか、更に下の枯渴水脈まで退避して来たのだ。油断は禁物ではあるけれど、幾ら妖怪の王とはいえ、そうそう追つてこられるものとは考え難い。時間は稼げた筈だ。

安堵と言う名の吐息は、深く、大きく、何回か。ほんの僅かに瓦礫の隙間から太陽の光が差し込んで来る。人間であればその程度の光源、有つて無いよなもの、程度のも
が。

(「こういう時には、心から感謝出来るね)

自らが、ネズミという種であつた事に。

過酷な環境に対しての適応力は、数少ない自慢の一つである。

「おっと。先生、手を」

よつて、ただの人間……であると思う孔明先生は、この真つ暗闇にも等しい場で、若干の困惑を浮かべていた。暗中模索を体現する格好は、それが数日間、五十万の生き物に凛々しく指示を飛ばしていた事を思い返せば、悪戯してみたく……興味深いものがあるけれど、それをいつまでも見ている訳にもいかない。苛め心を覗かせた、自分を諫める。

前方へ延ばされていた手を取り、自分の方へ。優しく、しつかりと握り返してくれた手に、九十九に蘇らされた頃の、ネズミに対する怪訝な態度は無かった。僕が妖怪……人型だから。という理由もあるだろう。

それでも、それが少し、嬉しくて。

(思ったよりも、ゴツゴツしてる)

机仕事のイメージが強かったけれど、この手の平を握ってみて、考えを改める。筆を握った箇所を中心とした皮膚が、全て硬化しているのを感じ取れた。

毛扇を絶えず振るっていたとはいえ、たった数日間でこうなるとは考え難い。これは以前から、こうだったのだろう。それだけで、過去どれだけの事を成して来たのかを、肌で感じられた気がする。

「——それに引き換え……」

後ろに続く存在、「MEMナイト」へと顔を向けた。所々に変形した金属の皮は、落下の影響で受けたものだろう。嬰鑠（かくしゃく）としている様子を見るに、どうやら、深刻な傷では無いようだ。

ただ、「MEMナイト」も夜目は効かないようで、孔明先生と同様に、周囲をおそろそるといった感じで、手探り……

（手……？）

そういえば、その部位は何だろう。足だろうか。爪だろうか。あるいは触手かもしれない。まあ、手で良いか。と結論付けたところで、「MEMナイト」が担ぐ者を見る。

「まさか、落下の衝撃で気絶するなんて……」

傍から見ても気持ちの良い笑顔を浮かべながら、これからの展開の肝心要な人物——
——九十九は、完全に意識を手放していた。両の頬が、僕の手の平と同じ大きさの小さな紅葉型に、幾重にも、赤々と張れているのはご愛嬌。僕だって手が痛いのだ。これくらいは、男の甲斐性だと思って受け入れて欲しい。

……心なしか、九十九の後頭部が蹴鞠の如く膨らんでいる気もするけれど。

（意識戻らないのって……これ……が原因、かな……？）

それは……まあ、見なかった事にして。

「参ったな……」

冗談としか思えない体たらくを披露する恩人の、間延びした笑顔が緊張感を削いでゆく。

この、ますますやる気の無くなった気持ち、どう処理すれば良いものか。同様の心境を共有しているであろう孔明先生へと目をやれば、既に割り切っているのか、その目には力強い意思が宿っていた。これから取るべき道を考えているのだと察せられる。流石だ。

(本当なら無視したいんだけど……)

お母様の……いや。人間達の軍隊は、叶うのならば、僕自身が手に掛けたいと思つていた者達だ。それが平天大聖が行うのなら——外部によつて行われるのなら、ある意味で願つたり叶つたりであつたのだが、それはそれで……というより、国力の大幅な低下を招く要因となるので、予てよりの案の通り、極力命を救うよう、こうして嫌々ながらも行動に移している訳で。

おかしな話だ。平天大聖との和平を結ぶよりも、むしろ敵対し、人間達の軍隊を救う方が国益となるのだから。九十九の存在を——能力を知らなければ、怒号の如く拒絶していた事だろう。

「移動中くらいは、休ませてあげないとね」

赤々とした皮膚になるまで、散々頬を張つた側が言う台詞では無いけれど。

水脈を辿り、目的の場所へ。十数分以内には着くけれど、休める時間があるのなら、これを用いない手は無い。その間に人間達へ犠牲が出てしまったのであれば、その時はその時だ。気持ち良く、晴れ晴れとした心を秘めつつ、『しかたなかった』と一言述べて、綺麗サツパリ諦める事にしよう。

そろそろ同胞達と合流も出来るだろう。そう思いながら、完全な暗闇となりつつある水脈を、一人と一体と、荷物一つ先の先導を勤める。体の大きな「メムナイト」であつても通過可能なようには計らつたつもりだが、こうして彼があまり不自由無く移動する様子を見るに、しっかりと仕事を行えたようだ。

てくてくと、カツカツと、カシヤカシヤと。

三者三様の足音を枯渇水脈——洞窟へと響かせながら、人外一向は、人間の軍勢が落ちた方へと、その足を向けるのだった。

50 沼

平天大聖の協力。

勝手に話を持ち掛けてしまった時には酷評の色が強かったけれど、それもこうして時を経て、最善の一手とも思えるものへと。怪我の功名を如実に感じます。はい。

当初の予定では、「頂雲の湖」の水を遠方の枯渇水脈まで流し、足場を一気に崩し去ろう。との算段であった。

しかしながら、これにはネズミさん達に強く負担を強いるものであり、4マナ【エンチャント】の【覚醒】を用いる事で、何とか余裕の範囲内に収められたものの、それが無かつたのであれば、かなりの負担が掛かる作業具合だったと思う訳で。

けれど、平天大聖から協力を確約を貰った事によって、それも必要無くなった。大きな二つの要であった、広範囲の地盤沈下を狙う組と、「頂雲の湖」の湖に大穴空けて、引き水用の水路を開通させておく組の、後者を削れたのだ。多分、作業内容の半分は短縮

&簡略化に成功したんじゃないかと思う。余った労働力は、必然、選択肢に幅を持たせる結果を生む。それが何に繋がったといえ、協力を取り付けた張本人、平天大聖への対応策に、である。

〔頂雲の湖〕の山頂から地下をぶち抜く、百数十メートルの縦穴。……落とし穴の延長線上で、冗談っぽく言った案が採用されるとは思わなかったわ〕

常にこちら……俺の周囲で、色々と観察していた平天大聖の事だ。今回の作戦を行う時には、まず間違いなく近距離に居るものだと予想はしていた。

まあ、そもそもが、約束を果たした瞬間から行動に移る可能性が高かったのだ。先の妖術を思い返すと、こちらの予想も付かない方法で何かやられていた可能性もあったなと、背筋にぶるりと来るものがあるけれど、確実に事を成すのならば近場に居る可能性が高く……、を色々と考えた結果、じゃあどすればサクッと脱出出来るのかを突き詰めた案が、先のアレ。脱出ルートな落とし穴。

最後の一手は穴の蓋部分の裏にへばり付いていた「MEMナイト」に手伝ってもらったんだが、あれは機械……「アーティファクト」じゃなかったら、一晩壁に張り付いているのは無理だったんじゃないかと思えます。

そもそもが、ネズミさん達だと一気に穴を開ける手段が難しいってんで彼に頼んだのだが、適材適所を実践できたようだ。

場合によつてはその場でドンパチ行かう状況もあつたけれど、そうなると弱点（俺）が思いつきり露出&敵の間近な状況は非常に宜しくないと判明し、まずは距離を置いて、体勢を立て直す時間を捻出するのが、唯一にして最大の目的。それを行うまでに、相手に先手を切らせちゃならないだの、会話のペースを握れだの、それでいて能力は極力温存しておくように（孔明談）。との忠告を何処まで守れるかを加味し、何とかギリギリなラインを維持出来たんじゃないかと思える一連であつた。

（で、誰一人欠ける事なく撤退出来たは良いものの……）

流石にこれは予想外。鈍痛が響く後頭部と、ヒリヒリする両の頬——であつた筈なのだが、今はもう、それを感じる暇……余裕も無い。ここは、人間の軍隊と、「頂雲の湖」の、中間くらいだろうか。微妙に軍隊の方面が、下方へとなだらかな斜面になつているので、様子はそこそこに把握出来る。

……ただそれも、微妙に視界が塞がっている為に、不満が残るのだが。

視界の先には、真つ白な小山が一つ。【頂雲の湖】を出した身としてはあれだけど、大砂漠のど真ん中には、似つかわしくないこと、この上ない。

しかもそれはどういう原理か、地響きさせながらゆーっくりと動いており、更には眼やら角やら尻尾やらが付属されている、珍妙奇天烈な山のように。随分と珍しい……いや、初めて目にする山だな。これはカメラにでも撮つて、どこぞの投稿サイトにでもU

Pすれば、一躍時の人に——……

「……前にも言った通り、七天大聖というのは、妖怪達が住むタツキリ山一帯を統べる、最も力のある妖怪達の総称だ。人型は、あくまで仮の姿。それぞれに元があつて、空を泳ぐ魚だったり、城をも絞め壊す蛇だったり、と。半分程度しか正体は知らないけど、それをまとめる大聖の頂点、平天大聖の詳細は、これっぽっちも入ってこなかった。まあ、元々は天界に住んでいた、とは耳にするから、神々ならば知っているもの……では……あるんだろうけど……」

……軽く現実逃避をしていたので、不安を覚えたせいかもしれない。こちらに意識を引き戻す為だと思われる、リン様の現状解説であつたのだが、

「……でけえ」

黄色い大地と青々とした空が広がるだけであつた風景に、突如現れた白い小山。寸法表記間違つてんだろ、と、これを生んだ何かに対して突っ込みたくなる気持ちを抑えながら、ひたすらに巨大。ただ巨大。それはもうべらぼうに大きな白牛……まず間違いない、あの平天大聖の正体……真の姿であろうものを見て、呆けてしまう。

（「マリット・レイジ」に届くんじゃないか？ あの大きさは）

少なくとも、標高……うん、標高。標高は絶対に超えているだろう。主に四肢の長さ
が原因で。

高さだけでも、東京の紅白な電波塔を軽く超えてる。ともすれば、スカイでツリーな電波塔にも迫るかもしれん。

歩くだけで地響きがぐ。とか、こうも間近で体験する日が来ようとは。貴重な体験ではあるけれど、今からそれに挑む身としては、御免被る事実である。

しかしながら、いつまでもこうしている訳にもいかない理由が、白牛さんの目前に。悠々と……それこそ、一步進んでは止まり。を繰り返している平天大聖の歩みのその先は、つい先程、数万規模でボツシュートした、ウイリクの国の軍隊さん。

奥から、軍隊——平天大聖——俺達——【頂雲の湖】

が、直線上に並ぶ順か。後はそれらの間に、砂漠の広大な距離が加われば、適切な図解と言えるだろう。

(何だったかな……冬に石どけたり、木の皮を剥いたら、そこに冬眠中の虫のコロニーを見つけて……それが一生懸命逃げていくような……)

それとも、蟻地獄から這い出る蟻、というのにも合ってるんじゃないかと思う。

軍隊の逃げ足は、鈍重。殆どの者が何処かしらに負傷しているようで、足を引き摺っていたり、肩に手をやっていたりと、それこそ死に物狂いで痛む体を動かしている印象を受けた。

元々彼ら……ウイリクさんの国民に対しては印象が悪いので、いつそのままスルー

してしまおうかと邪念が過ぎるけれど、どちらにしろこうなれば、軍のみに留まらず、国にまで侵攻する未来は眼に見えている。遅かれ早かれ対処しなければならぬのなら、国力である民を失う前の方が良い。場合によつては、恩なども感じてくれるかもしれない。

(そっぴいや……)

俺自身は見えていないけれど、リンの事前情報では鉄砲つぽいのを所持している筈なのだが、一度として発砲音は聞こえない。皆、少しでも遠くへ、一步でも距離を取ろうと足掻いていた。まあ、それも、巨大な雄牛と化した平天大聖を見れば……それが迫ってくる状況であれば、否応無く理解させられる。押寄せる津波に、拳銃で対応するような気持ちなんだろう。彼らの心境は。

「……ありや怖えわ」

「うん……」

独り言のつもりだったのだが、リンが同意をしてくれた。ちよつと嬉しい。

「さつて、とツ！」

快音一発。両の手の平で、自身の頬を張る。

「——いッツ!?!」

しまった。事前に何処ぞの小ネズミ妖怪が、入念にそこをシバいていたのを失念して

いた。傷口に塩を塗るような真似になってしまい、予想以上の激痛が涙腺を刺激する。ただ、それも今はありがたい。

不可能ではないのだろうが、ああも馬鹿げた巨大モニュメントを相手にするのは、今まで一度も無かった事だ。良い気付け薬である。

(つつても、な)

不安はあるが、やってやれない事は無い、と。そう思えてならないのは、増長や満身に準ずるものではない筈だ。

「おー痛え……。んじゃ、計画通りに」

コクリと頷くりんと、無言で肯定する孔明が、それぞれに構える。既に人手？ は配置済み。後は今後の流れ次第で、交渉か、抑止か、撤退かを迅速に行うだけ。「メムナイト」に乗り、遠くへ離れていく「伏龍、孔明」を見送る。安全な……。あの巨体を見ると安置無さそうだけど……。安全そうな、ここら辺を一望出来る場所まで孔明を下ろして、「メムナイト」が戻ってくれば、作戦開始である。

今、この場に居るのはリンと俺だけ。傍らで懸命に何かを耐える姿に、唯でさえ小さな身を縮込ませていた。

(何かこう……。元氣付けられる言葉……。とか……。)

けれど、『大丈夫』とか『問題ない』とか。思い浮かぶのは、気休め以外の何にも感じ

られない、微妙なものばかり。先にネズミさん相手に身振り手振りの大演説（笑）を繰り出した身としては、一步踏み出すに對して勇氣が要る。

自身の引き出しの少なさに焦りを覚え……それでも案が出ない事に、声を掛ける、という手段を放棄。

「んっ」

疑念なのか、容認なのか。リンは、今一つ反応に困る声を出した。ぐしやぐしやと、こちらの胸に届かないくらいいの、触り心地の良い頭を撫で回す。落ち込んだ時とか、むしやくしやした時とか、そういった時には、体を動かしたり、熱い風呂に入ったりするのが一番だと思つたから。

本当ならお湯にでも浸かりたいんだが、状況が状況なので、それは除外。ということ、体を動かす（強制的に）方面を実行。変則ではあるが、ようは体に直接刺激を与えるのが目的である。『女の髪は命』を一蹴する乱暴さだったのだが、こちらの真意を汲み取つてくれたようで、傍らの存在は、極度の不安から適度な緊張へと、纏う空気を変えてくれた。

反応を確かめるべく眺めていると、リンが服の上から、胸元を握る動作を行つた。いつの間にかやたら簡易的な紐で結ばれた、首元から下げられ、服の下に隠されている「弱者の石」の感触を確かめているのだろう。

この「アーティファクト」は敵も味方も問わず、効力をもたらすもの。しかしながら、この手の効果範囲が、未だに何処まで及ぶのか判明していないのだ。

目の届く範囲か。この辺りの土地一帯か。あるいは、まるごと世界全てなのか。

色々制限を受けている身としては、少なくとも世界丸ごとは無いと思うのだが、今最も気になるものは、及ぼす最高地点ではなく、最低範囲。過去に使った全体再生である「活力の覆い」や、全体に「プロテクション」を与える「恭しきマントラ」。それらは決して狭くない範囲をカバー出来ていた。

それに、唯一にして最大の対象である目標は、あんなにデカいのだ。距離が離れていようと、片足の一本くらいは範囲内に収まっているだろう。

「ま、駄目なら俺がガンバリや良いだけの話……という事で」

「？」

何でもねえですよ、と撫でる手に力を込めた。流星に強過ぎたのか、不満の色を感じ取る。

と、それに合わせて、後方から、硬質のものが砂へと突き刺さる音が連続で聞こえてきた。振り返って見てみれば、案の定な「メモナイト」。孔明先生が乗っていないのを見るに、しっかりと送り届けてくれたらしい。

——では。

「んんん……あー、あー。……んんんん」

喉の異物を取り除くように、気道を確保。何をするのか察したリンが、自らの手を頭上げて、ぺたりと伏せた耳の上から、その手を乗せ……無い!?

「——何ツ!？」

こいつツ! 獣耳の方じゃなくて、人の耳の方を押さえやがった! いやまあ確かに人耳の方は自力じゃ閉じられないけどさ!

「ツ!? ………………なんだい?」

緊急事態発生に対しての驚きだと判断して、即座に振り返ったであろうリンの顔は、みるみるうちに曇り空。どうやら俺の態度で、何かしらを感じ取ってくれたようです。

よしこれから。という場面で出鼻を挫かれたせいだろう。怪訝な表情がありありと。それでもこちらに応えてくれる辺り、優しさを感ぜずには居られません! というか、俺だって出鼻を挫かれたようなもんですし!

「だってお前! 耳! 頭! (意識・獣耳キヤラは、獣耳の方を押さええるものではないのですか?)」

何を言っているんだと眉間に小さな皺を寄せ、無言のままに、呆れ顔。きつと漫画的表現ならば、リンの頭上には、こんがらがった糸屑のような絵柄が見えるだろう。

「……分かった分かった。何かは分からないけど、よく分かったから。君のどうでも良

い疑問は今は置いておいて、今は目の前の事に集中してくれ」

疑念を完全に無視する形で正論を繰り出し、リンは会話を止めてしまった。二の句を告げられず、出掛かった言葉を飲み込むように、押し黙る。

くそつ、それ気になって仕方ないんですけど！

「あつ……うつ……けちつ！　これが終わつたら、絶対それ追求してやるからな！」

丁度「MEMナイト」も到着。準備万端、時間ギリギリ。「今田家の獵犬、勇丸」や「伏龍、孔明」、「MEMナイト」……は微妙なところだが、「弱者の石」よりは少ないか——の維持コストで疲労が徐々に蓄積中だが、これならまだまだまだ耐えられる。

というかそもそもネズミって、自分で自分の耳を畳めない筈じゃ……。

(……ええいつ、それもこれも、全部アイツのせいだッ！)

行き場の無い不満は、どういう訳か、全て目の前の白牛へと。胸いっぱい空気を取り入れ、あの馬鹿デカイ巨獣まで届くよう、精一杯の力を腹に込め——。

「——この……ホモ野郎がああああ——ッ!!」

それらを一息で出し切った。

ホモなんて言葉、知らないどころか、きつとまだ造られてすらいない。しつかり伝えたいのであれば……えーと、あれだ。同性愛者が適切か。

けれど、そこは便利な八意印の翻訳機。拡声機能でも備わっていたのか、聞こえるかどうかとも怪しい距離であったのに、動く小山と化した平天大聖の歩みが、ピタリと止まる。これで駄目なら「メムナイト」に騎乗して注意を引く手筈であったけれど、どうやら、そうせずには済みそうだ。

遠目で見ればゆつくりと。近場で見れば、巨大船舶の大回頭。振り向く動作だけで足元には軽い砂嵐が起こっているのだから、つくづく大きな相手である事を知らしめていく。

と、素肌に突き刺さる何かを感じ、恐らくの出所であろう、小さな隣人さんを見てみれば。

「……」

……いやん。リンの目線が絶対零度。異文化であった為に不安なところはあつたけど、やっぱり侮辱にはるんだな、これ。

しかし、その視線はあまり好ましくない。愛が感じられませんか。

ううん、ここは一つ……。

「……あく、いいか？ 大概の男にとって、掘る側じゃなくて、掘られるという行為は、それはそれは——」

「そんな解説聞きたくないよ！」

「良いから聞け！ さっきの空気を流す為には、多少強引に押し切らなければならいと、古今東西の相場は決まってるんだ！」

「あの平天大聖に挑もうとしている以上の相場は求めてない！」

……確かに。

後十数秒でこちらへと完全に体を向ける超巨大な白牛以上の強引きなど、今この場にある筈が無いのだった。

「……」尤もです」

毒蛇だったか。

最後の息抜きも兼ねて。など内心想っていたのだが、ちよつと抜き過ぎたかもしれん。

「んじゃ、ま……たつた今失った名誉を、挽回とか回復とか、そういったの目指しながら、奮闘してみるとしましょうか」

そもそもが、名誉等などという輝かしいものなど、端っから持ち合わせてはいないのだけだ。仮に持っていたとしても、所持した次の瞬間には、流れ作業の如く廃棄して

いるようなもんですし。

場違いながら、『やれやれ』とか言いたげなりんが、なんだかとても似合っている気がした。場が場なだけに、相手によつては今度こそ本当に呆れられる可能性もあったけれど、あの白牛を前にして軽口を叩ける心境を、肯定的に受け止めてくれたようだ。どうやら、今までの付き合いの中で、こちらの性格をある程度把握してくれたらしい。例えその把握が、どういう方面の意味であれ。

(……これが終わったら、水遊びやってからバイバイした方が良さげかなあ)

【頂雲の湖】を出した頃に考えていた案を、実行に移す機会が見つかった。終わり良ければ、な、お言葉信じ、何か出来る事は無いものかと考えた結果が、それであった。フラグだろうか。とも思うけれど、眩かなければ大丈夫と思う事にした。最有力候補は、やっぱり【頂雲の湖】だろう。ウイリク様と二人で、親子水入らずな展開などやってみたい。そう、心に留めて置く。

時間にして、大体二十秒。ずっしずっしと四肢を動かし、反転、回転、180度。完全に、こちらの方へと向き直る白牛様。

きつちり、こつちに目線が向いたのを確認し、

「よっつ」

大声を出した訳じゃないので聞こえる筈も無いのだが、しゆたつ！ と自前の片手を上げた挨拶をすれば、連動するように出て来た言葉だ。格別、何を求めたものじゃない。《——これはこれは。まさか呪いを掛けたお方が、こうも易々と眼前に現れようとは、夢にも思いませんでしたよ》

浦辺の戸島村で襲われ……出会った鬼の一角の比じゃない声が、俺達の全身を揺らす。出す音の一言一句が、振動兵器なんじゃないかと疑ってしまう程。判断に困るところがあるけれど、どうやら普段通りに話しているらしい。これで大声を出された日にゃあ、鼓膜どころか、横隔膜にすら影響が出かねない。というか破られかねない。実行される前に、行動に移しておくのが吉と見た。

しかし、だ。

(え、何……呪い？ 何それ)

そんな禍々しい系の術なぞ、行使した記憶は無い。

「……知らないなあ。俺はこれとって何もやってないんだが」
つて、あ。

《ご謙遜を。この状態は、中々に堪えるものがある。神々であっても、ここまで私を弄んだ存在は居ませんでしたよ。——出来ましたら、すぐにでも解いて欲しいのなのですがねえ》

自分の言葉の、『何もやってない』辺りで気がついた。

やってないわきゃ無いのです。すっかりやっておりました。恨みとか呪いとか、そういった方面とは真逆の性質——【色】であつたので、即座には関連付けられなかったけれど、まず間違いない、【お粗末】か、もしくは【弱者の石】の事を指しているんだろう。両方かもしれないが。

素の反応がすつとぼけた返しになつてしまつたが、あちらにとつては、知つてるけど知らないふり。な態度に見えたんじゃないだろうか。お惚け挑発行為、な感じで。

しかし、今の平天大聖の状態を見るに、どう【弱者の石】やら【お粗末】やらの効力が発揮されているのか、ヒジョーに首を傾げたくなる。どう見てもラスボス風（第一形態・巨人的な意味で）だと思ふのだが、一体何がランクダウンしているのだろう。

《——しかし、今更、何か御用でしょうか？ 私の一世代の告白を無碍にするほどの、急な事情がおありのようでした》

うわーい、色々と根に持つてるお言葉だ。体に似合わず懐はミニマムなんですな。なんて言つてみたいが、パチ屋で会話をするかの如く、大音量で聞き取り難い事この上ない声色から判断するに、当人は本心からそう思つている訳ではないようだ。礼儀上の売り言葉に買い言葉、を行つただけっぽい。

というか、お前にや奥さん居た筈だろう。一世一代の告白とやらは、その時にはやら

なかつたんだろうか。

(……まさか、コクつたんじゃなくて、コクられたのか!?)

いやまあ、あの美貌でしたら嫌でも理解してしまうものでしょうけど。詳細な事情など分かる筈も無いのだが……今初めて、こいつに対する個人的な恨みが自分の中に生まれた気がする。

「生憎と、こちとら初心なんぞでな。雰囲気もへつたくれも無い状況じゃあ、頷くもんも頷けねえわ」

《なんと。これは私とした事が。あれでも充分に場を盛り上げたつもりだったので、自分の気持ちを優先し過ぎて、尊重を忘れてしまったとは。汗顔ですなぁ。いや、私もまだまだ。くっくっくっ……》

「……その、盛り上げるつてのがどういふ方面にか、強く突っ込みたいところなんだが……」

何度思い返してみても、あの盛り上げ方には、危機感メーターの上昇以外に無いと思うのだが。

《なるほど。あなたは入れられる方より、入れる方が好みですか。……まあ、始めは……オスなら誰しもそのようなものでしたか。懐かしい。——私の要望に応えて頂けるのなら……あなたになら、構いませんよ?》

って、そつちに食いつきやがったか！ 突つ込む、を意図的に捻じ曲げやがってからに！

ヤバス。さっきの挑発、墓穴だったくさい。色んな意味で。今はでつかい白牛な格好だが、人型であった頃の顔立ちは、そこいらの女が十派一絡げになつても太刀打ち出来ない程に整っていた。女装でもさせて言い寄られたら、男は十人が十人、頬を赤く染めるだろう。それが例え、同姓ある。と理解した上であつても。

そして、そんな俺も例に漏れず、男。場合によつちやあ、さっきの言葉で胸に来るものがあつたかもしれないが、

(今は、なあ……)

気分がノつてる時には、そういう認識は極度に低くなる。

一時ではあつたが、相手の事情をしっかりと認知した状態であつても——神奈子さんに殺意を覚えた時もあった。結果的に丸く収まったから良いとはいえ、今にして思えば、流れ次第で神奈子さんを、「死の影」で頭から。な未来もあつたのだ。

それに今の平天大聖は、どっからどう見ても、牛。人間の姿ならまだしも、連想すら難しい対象では、俺の心には波一つ起こりはしない。

「二応、もう一度聞いておく。あん時は……ほら。なんていうか、バタバタしてたからな。こつちの聞き間違えだったかもしれない……そうだったら——」

自分の口の端を吊り上げながら。ふてぶてしい、を体現しつつ。

「——後味悪いじゃん？」

一陣の風。

《——ほう》

愉快だ。との反応に乗せて、巨大な白牛が鼻息を一つ、ふぎけた空気ごと、こちらへ向けて吐き出した。挑発を兼ねた軽口で返す、俺の言わんとする事をしつかり理解してくれたようで、その表情は獐猛な笑みに彩られている。

後味が悪いとは、味わえる事は前提であり、この場合の味わうとは、相手を——下すという事。勝利を得る事が大前提の物言いであるのだから。

《それでは、今一度。——今度こそ、天地に響き渡り、あなたの心まで届くように致しましょう》

挑発、成功。

我を忘れさせるほどのものではないけれど、気分を害したのは間違いない。この分ならば、このまま突っ立っていても、あちらの方からやって来てくれるだろう。ありがたい事だ。

現状の特筆すべき維持コストは、〔今田家の猟犬、勇丸〕の1と、〔伏龍、孔明〕の4、の二点。次点で〔弱者の石〕の1マナ。〔メムナイト〕はコスト無しなので……まあそれ

でも【土地】とかよりは消費しているんだが、殆ど気になるものではないので、除外しておく。

使用したものはマナは、【濃霧】の1と【お粗末】の2。使用コスト合計、3。残弾……使用可能なカード枚数は八で、残りのマナは5と来た。色々行えばマナがカツカツになるのはいつもの事だけれど、展開次第で今回は、カード枚数も限度額まで使用する。本当なら事前に【被覆】なり【死への抵抗】なりの、何かしらのカードでも使っておくのが安全なのだが、孔明先生が予想している今後の展開を考えるに、削れるところは削っておきたい。

勿論、駄目そうなら即使用。【ダークステイル】化か、【プロテクション】を即座に。って感じで、何とか。なので、自ら対処可能な事態であれば、それらを使用する事なく、自力で対処すべし。この、未知の大声が響き渡るであろう展開であっても。

「リン」

急いで指先を湿らせて、自分の両耳に突っ込んだ。同様の事をリンに行うよう、目配せと、やや強めの口調で名を呼ぶ事で、察してもらおう。落とし穴大作戦の際。孔明と悪食ネズミ達の橋渡しとして、数日間携わっていただけあつて、俺の拙い肉体言語でも、その意図する所を十全に汲み取ってくれたようだ。尤も、そうじゃなくても、今までの流れから言つて、嫌々ながらも先の展開が見えていたからだろう。

いそいそと、こちらにならう形で、追っかけモーションを実行。可愛いですなあ。癒されますなあ。

……指製の耳栓も人間の耳の方にやるのか。獸耳は基本フリーなんだろうかと募る疑念を沸きに退け、

「口は開けておくといい……らしいぞ」

リンが耳を完全に塞ぐ前で助かった。こちらの言葉も、しっかり伝わったようだ。かじった程度の漫画の知識だが、所々リアル指向な作風であつたので、本当っぽいと判断。試してみよと思います。

両の耳に指を突っ込み、あんぐりと口を開ける、男と少女。その後ろには、「メムナイト」。目の前の危機に対して、何とも間抜けな格好であると漠然ながら思うけれど、鼓膜の破裂という痛々しい未来を考慮すれば、この格好は『仕方ない』の一言で片付けられる羞恥心。嫌な方向に経験値の上昇が見られます。この面の皮の厚さを生かす機会は、あまり訪れて欲しくないものだ。

大きく息を吸い込んで、腹の底から力を込める。穴の奥へとめり込ままばかりに指先を深く耳へと押し当てて、大きく口を開け。

そして——来た。



全長キロに迫る体軀の白牛、平天大聖の、咆哮。足元の砂が揺れ動く。周囲の雲が四散する。

自力のスペックも関係しているのだろうか、何か特別な——妖術か、能力か。それらと併用していなければ、ここまでの現象を引き起こせるもののだろうか。体中に叩き付けられる振動が、脳味噌までも掻き乱す。気絶までは行かずとも、揺れる視界によつて、自分の平衡感覚が狂ってしまったのが分かった。

何か言葉を発した、と思わせるだけの振動の強弱は感じ取れるが、ここまで来たのなら、それはもう言葉というカテゴリーから逸脱している。振動兵器そのものだ。高層ビルが乱立する一帯で行ったのであれば、全ての窓ガラスが四散していた事だろう。そこに意思疎通の意図は、微塵も感じ取れるものでは無い。

「来たぞッ!!」

咆哮が止んだと同時に、小山が突撃を開始する。若干臃腫とする頭を振つて、リンへと警戒の声を掛けた自身の声は、はつきり言葉に出てきただろうか。

その移動は、風を切り裂き、なんて例えが良く似合う。中々の距離があつた筈なのに、あれのガチ徒歩は規格外。元々の巨大さ故か、遅めのモーションが唯一の救いだと

は思うけれど、

「うっそ!？」

ズンツ!! と一踏み。砂塵と微震が発生する。踏み出した一步で、あつという間に詰められた。もう一步……いや二歩か……。それを繰り返すだけで、巨大な白牛の蹄の餌食は確定だ。俺なら走つても二十分以上は掛かる距離だと思つたのだが、比べる相手が悪かった。

とはいえ、それでも。

「ツクモー!」

「おうよッ!」

元より、蜀の大軍師たる諸葛孔明の策に変化なし。

遠方に見える、慌てふためく人間の軍隊を見ながら、

(あそこには届くなー、あそこには届くなー……の、召喚! 【沼】!!)

『沼』

【基本地形】の一つ。【タップ】する事で、黒のmanaを一つ生み出す。

黒を主として扱うプレイヤーにとって、最も馴染みの深いカード。不気味さと神秘性を併せ持つ絵柄が多い。

他の【色】にも間々あるが、【黒】には【沼】の出ている数を参照し、それによって効率のダメージやライフロスを起こすカードが比較的によく、【コントロール】系の【黒】を扱うプレイヤーと対戦した場合には注意が必要である。

乾いた大地に出現する、対極に近い性質。見渡す限りの黒の大地は、高い粘度の表れ。脱出困難の証。そこに足を囚われたが最後、成す術もなく暗い泥沼の奥底にまで誘い込まれるのだと、否応無く理解させられる。

申し訳程度に生え揃う木々は、どれもが力無く地面へとしな垂れ掛かり、突如として発生した霧は、【濃霧】には及ばずとも、【沼】を挟んだ視界の先を見通すのは不可能な

程度に漂っていた。

《——ちいッ!》

馬鹿でかい声……いや、音か。驚愕、と判断出来る振動が周囲へと木霊する。突進する白牛の足元。それらを全て、底なし（かどうかは分からんが）沼へと変えたのだから。とはいえ、相手はそれも織り込み済みの筈。先の【頂雲の湖】や【禁忌の果樹園】の召喚のせいで、『土地を思うがままに誕生させられる』といった認識をしたのは、想像に難くない。一つ目だけなら、そののみしか出せないと思う可能性も色濃かったけれど、それが二つ目ともなれば、土地の改変を瞬時に、容易く行う存在である。と認知された事だろう。

ならば、対策を採られていると考えるのは必須。そうなれば、後は済し崩しに相手のペースに吞まれる展開が待ち受けている。

よって。

「動くなッ!」

思考の欠落。手札破壊能力を持つ【暴露】を発動。【死の門の悪魔】を代償として、平天大聖へと対象を定め、

（みっけ!）

複数ある思考の内、条件反射にも近いそれ——『体勢を立て直す』という考えを削

除。月の賢人や戦姫であつても、ほぼ100%な性能を發揮してくれたものなのだ。短期的な効果しか見込めないけれど、信頼性は充分です。

《ツ!?!》

雪原に棒を刺すかの如く、あつという間に「沼」へと片足を付け根まで沈ませた白牛が、何の姿勢制御も行わず、その巨体を横倒しにした。百メートル以上はある前足がずぶりと地面に同化してしまったのを見るに、どうやら、本当に底なしな「土地」であるらしい。

沸き立つ泥津波と、周囲へと散る霧が、その威力を感じさせる。人型ではなく牛型である為に分かり難いが、多分呆気にとられたであろう、僅かに口を丸の字に開いた状態を見て、少し、胸の内が晴れた気がした。何となく、氷山へと激突し沈没した、某巨大客船を連想させる光景であるのだが、

「なっ!?!」

「ぶっ!?! 泥キター!?!」

こつちにも襲い来る高さ数メートルの泥波に、これは予想していなかったとの思いを込めつつ、言葉短く感想を述べて、すぐさま思考を切り替える。状況が状況だけに、津波ではなく、波の方だとは思ふのだが、幾ら「ムムナイト」の上とはいえ、あの水量……いや物量が……? は、堪えるものがある筈だ。

(ひらりマントー!!)

無論、あらゆるものを跳ね返すという、青狸御用達の秘密道具ではないけれど。諏訪子さんから貰った外套を外し、リンと俺の両方を包み込む様、羽織り直す。全体を覆える面積は無いけれど、やらないよりは何倍もマシな筈だ。

「——いけッ!!」

その間に、タイミングを見計らっていたリンが指示を出す。

小さな全身を駆使して、精一杯の声と態度で命を下した直後に合わせ、体全体を隠す為、なるべく隙間の生まれないう、蛇柄の白い布を巻きつけた。元々小柄であった事も幸いし、ほぼ全身を覆う事が出来たのは行幸だ。その分、俺の体が露出してしまうのは、男としての名誉だと思ふ事にして。目の高さに上げられた「ムムナイト」の胴体から伸びる二本のマニピレーターをしっかりと掴み&掴まれ。

(月の衣服に乞うご期待!!)

洗濯的な意味で。と、内心で自嘲気味に呟いたと同時に——俺達の体は、粘度の高い濁流に激突した。

視界の半分が、黒で覆われている。さて、これが何であつたのかを思い返すだけで、滾る感情が心を満たす。

(何たるザマでしよう。天より下つた先が、泥沼への接吻だとは)

くつくつと嗤う。皮肉の効いた現状に、怒りとはまた別の、愉快と思える感情も覚えるものだ。

若輩の頃、幾数もの力ある存在を仰ぎ見た過去を思い出す。あの時の血肉と屈辱の味は、今でもこの胸の内と舌の上にある。その味を、この泥に見た気がする。と、場違いながらも、感傷に耽る。

丁度、体の右半分が露出する形か。泥沼に浮かぶ孤島と化した自らの体は沈み切る事をせず、今もこうして、黒の中に浮かび上がる、白い異物となつていた。

(口惜しい……)

本来の自分であれば、このような“小さな”沼地など障害になるかも怪しい地形であるというのに、今の力は……さて、どれくらいにまで制限されているというのか。

正体不明の術によって、力も、能力も、全てが無視出来ないまでに低下してしまつた現状は、一体いつこの呪いを掛けられたのか分からぬ不安と共に、数々の呪術を跳ね除け、あるは跳ね返して来た過去を通して見ても、背筋の凍るものがある。

本来の半分以下の大きさにしか戻れぬ体と能力。この状況から脱出すべく、何かを行おうとしたのだが、その行うべき何かが、とんと思ひ出せないという異常。

そして、現状、最も厄介である……

(……拙いですねえ)

疲労が回復し難いという、単純にして効果絶大の術。

あるいは能力か、それ以外の手段かもしれないが、忌々しい事に、詳細に調べる術を今は持たない。

術、と仮定しておくとして、これは真綿で首を絞めるかの如く、自らの行く末——死という終わりが垣間見えるもの。

何もせずに休んでいれば徐々に戻る力とはいえ、こうも世話しなく動き続けてしまつては……。

(ですが……もう……間も無く……)

昨晚、秘密裏に飛ばした文は、既に根城へ届いている頃だろう。四六時中張り付き、監視を行っていた「メモナイト」なる奇怪な鉄馬の為に大分遅れてしまつたが、それも、闇

夜に紛れ、上空へと待機させていた鳥妖怪、姑獲鳥（こかくちよう）を見抜くのは敵わなかったようだ。上空へと消え去った赤蜥蜴の探索にと思い、当初から命を下しておいたのだが、思わぬところで役に立ってくれたものだ。

他の大聖達が間に合うかどうかは怪しいが……いや、そもそも動くかどうか難しいところか。しかし、一番乗せ易い……欲望に従順……素直な心を持つ、新たに義兄弟の契りを交わした岩猿は、まず間違いないと訪れる筈だ。このような不可思議な天界は、あれが好むところなのだから。

まあ、こうして状況を鑑みても、まさか。と、起こっている現実を否定したくなる。奇妙天烈な術を使うとはいえ、たった一人……と一匹の鼠妖怪の為にこのような事を行うおうとは、出会った直後の自分が知れば、一笑に伏した事だろう。

（あの果樹園から生み出される実だけは、何としても確保しておかなければ）

一口齧る度に自らの力の上昇を実感させられるあの実は、もたらす成果だけを見れば、同種以上のものがあるにはある。しかし、それが云十万の鼠に食わせても尽きぬ——何度も生み出していた——無限に等しい数ならば、タツキリ山全体の強化を計っている身としては、最大限優先すべきものだ。

その為に、急遽、万全を期す形へと方針を決めた。『動ける配下は総出で』との命を出したが。

そう、今後の流れに安堵をした直後——視界の黒が動き出した。
(……はて)

この沼は、勝手に動くものであっただろうか。土地ごと押し潰す自らの重量によって、蓄えられた泥水を周囲へと零れさせたのは記憶している。けれどそれは、ああも滑らかに動くものなのだろうか。今体の半分を潰す粘度から考えるに、もつと、纏わり付く悪意宛らの……。

——チュウ、と。

小さな小さな。それこそ、普段の自分であれば、気づきすらしない鳴き声を、目の前の泥から耳にした。

(——ッ!!)

怖気が走る、とはこの事か。視界を覆い尽くす黒は、一片足りとも見紛う事も無い程に、矮小な存在によって成されたものだった。

比重の差によって泥沼にも沈み切る事も無く、歩みは遅くとも、一歩一歩着実にこち

らとの距離を詰めてくる、鼠、鼠、鼠の群れ。

(これはッ)

普段ならば気にも留めない、羽虫以下の存在であるというのに、何よりこの時、この状態。説明不可能、理解不能な術に掛かり、あらゆる点で劣化をみせる自分であつては、これ以上の脅威は考え難い。

あれは……あれらは、どういう理屈か、通常の鼠とは一線を引く力を宿していた。悔つた見方をして、人間と同等か、それに準ずる程に。接近は、好ましくない。

《ぐっ!》

迫り来る恐怖から逃れる様に、まずは顔から。と、持ち上げる。

けれどそれも、掛かる荷重で、僅かに頭を浮かせるだけで、より一層体全体を沈み込ませるだけにしかならず。

ならばと、ぬかるむ土地の固着化と、浮遊の妖術を練るものの、前者は“体制を整えなければ”意味は無く、後者は自らの重量によって、飛翔の域にまで及ばない。

(ッ! 何を今更!)

そうだ。この状況から離脱を図るには、四肢を動かし、術を操り、『体勢を立て直す』だけで済むというのに、何故それを行わなかつたのか。

(素晴らしい、忘却術まで備えておいでのようだ——ッ!)

恐らく、大幅に力の落ちた術と共に掛けられていたものだろう。皮肉を込めて、内心で毒づいた。術にしろ、能力にしろ、それ以外にしろ。思考を弄るといふ行為は中々に困難である筈なのだが、それを微塵も、苦も無く行使し、更には全く気づかれずに相手……自分へと掛けた手腕は、傀儡などよりも、いつそ、大聖の一人として迎え入れたい衝動に駆られてしまう。

(いや、それもありませんか——ねえ！)

忘れ去った……思い出した行動を再発させた。

固着させた泥へと、無事であつた左の前足を突き立てる。僅かに蹄が沈んだが、ぬかるんだものではなく、ピシリと罅割れた音を聞くに、力を込めれば、この泥沼からの脱出は叶うもの、と思えるもので。

《しまッ》

結局、それは思うまでの範囲で止まつてしまう。ただ安直に、泥を固着させたのが拙かった。

これ幸いと、地を這っていた塵芥共が疾走を始め、瞬く間にこちらの……脱出しようと突き立てた左前足へと到達する。蟻塚に棒を突き入れるかの如く、忽ちの内に黒い柱と様変わりした自らの足は……、

《——ッ》

表情が硬くなる。体に無駄な力が入る。プツプツと、極小の針で表皮を突き刺される……削られる感覚が、久しく忘れていた、背筋の凍る思いを呼び起こす。

それでも、この程度ならば、半日以上は耐えられる。

尤も、そんな慰めなど――。

(たかが鼠如きにッ！)

――無様。余りに劣化した力を嘆く。

鼠の牙どころか、下級の妖怪程度ならば傷一つすら残せず健在である純白の毛皮は、その役割を果たさない。何せ、毛を掻い潜る形で噛み付かれているのだ。鎧の下から攻撃されては、満足に防御も行えず、ただ死を待つばかり。

本来であれば、例え毛を除いた表皮であっても、雑多な攻撃は受け付けないものであったのだが、今はそれも叶わない。このままでは、座して死を待つ他に、道は無い。よって、自ら道を造る事を選ぶ。

一瞬人型を取り、すぐさま、また元の姿へと戻れば、状況の打破には打って付けてはあるものの、あれは中々に体力を使う。疲労が抜け難い現状では、避けるべき行動。

《はあ！》

黒く染まった足を高々と振り上げて、硬質化した沼へと叩き付け、付着した塵を弾き飛ばす。

しかし、思ったよりも効果が現れない。

幾分かはこそぎ取れたようではあるが、叩き潰した感触は、想像の半分にも届かぬもの。

とはいえ、当然と言えば当然か。

何せ足を上げた瞬間には、大地へ接触するであろう箇所から、鼠は、移動か離脱を果たしていたのだから。まるで何者かが指揮するように、即座に、迅速に、早々と。全体を見渡し、瞬く間に指示を受け、動く様は、上に立つ者として最も望むべきものの一つ。それが自らに向けられた牙であると理解しながらも、小さく込み上がる欲望は、これらを手に入れる手段を模索せずには居られない。

《はははっ！ これはいけない！ よろしくありませんねえ！》

大地に湧き出る泉の如く、静かに忍び寄る疲労を無視し、再度前足を大地に打ち付け、強引に、全身を沼地から弾き起こす。舞い上がる土砂と、塊となった泥が、宛ら、大地の怒り——火山弾にも見える。

……が、それも今一步遅かったようだ。

《ぬッ!?》

この感触は、耳、の内部から。

耳の付近を這い回る怖気は、頭部へと……背後から接近を果たしたであろう、小賢し

い鼠らに他ならない。目前の脅威ばかりに目を向けて、周囲への警戒を怠っていた事実を突き付けられた。全身を灼熱化させるか、霧状に姿を変えるか、極寒の冷気を纏うべきか。それとも、単純に硬質化を成すべきか。

いずれにせよ、より力を消費する事態を避けられなかった事を僅かに悔いて――、
「――もう、止めにしないか？」

場違いも甚だしい、申し訳なさの滲み出た声が届いた。

51 墨目

……まったく、汚い格好だ。

目前の脅威を目の当たりにしながら、最初に思った事は、それであった。

視界の先には、〔沼〕に平天大聖の体が半分沈んでおり、白い孤島と化していた。他人事ながら、そこ目掛けて群がるネズミ達を見て、〔マリット・レイジ〕にも似た怖気を感じさせる。こう、背筋どころか体全体がぞわぞわするような、集られるものが。

踏ん張ってくれたであろう〔メムナイト〕も健在で、全身泥塗れになった、元、白銀のボディが目を引くけれど、故障したりした箇所は無いようだ。

しかしながら、それら以上に気になっているものが、自らの容姿。

(厄介な病原菌なんて混ぜとっちゃいけないよな……?)

足場となっていた「メムナイト」が泥塗れで、そこに乗っていた俺達が清潔で居られる理由など無いのだ。

今更ながら、この「土地」はMTG界のものであったなと思ひ返す。未知の物質&微生物満載な可能性は高く、幾ら全自動殺菌&除菌な月の衣服を着込んでいるとはいえ、これが片付いた時には、除菌とか消毒も考慮すべき流れなのかもしれない。

ならば、今まで出してきたアレやコレはどうなんだとも思うのだが……何せ、これは【沼】の一部。他の【土地】より死を連想させ、嫌悪を催し、忌み嫌われる、黒の大地。こちらに襲い掛かつてきた泥津波は、引き潮の現象は起こさずに、幅広い範囲の黄色い大地を、一面の闇へと変色させていた。やはり津波ではなく、波の方であったようだ。

「ぺっ！　ぺっ！　……うへえ、洗って落ちれば良いけど……」

陸上に打ち揚げられた魚宜しく、「MEMナイト」の上で横になっていた体を、上半身のみ起こし、改めて自身の置かれている状況を確認。

数こそ少ないとはいえ、節々に、大小様々な鈍器で殴られたような痛みと、髪の毛バリアを突破して、頭皮にまで到達していた泥に悪態を付く。

それとは対照的に、モロに泥を被った衣類には、これっぽっちも汚れは付いていなかった。

……ああ、いや、正確には殆ど落ち切っている。

どういう理屈か、粘度の高い性質である筈の泥が、熱せられた鉄板に置かれた氷の如く、ツルツルと表面から流れて落ちてしまっているのだ。今は逃げ場の無い泥が、衣類

の窪んだ場所で停滞しているだけで、立ち上がるなりをして逃げ場を造つてやれば、すぐにでも洗浄は完了するだろう。購入してくれた永琳さんに感謝です。

……まあ、それ以外の露出した表皮とかには、おもつくそ付着し続けているんだけど。手とか、顔とか、服の中とか、色々と。

「人生初の泥沼パックが、まさか砂漠のど真ん中……とはなあ」

美容に効果があるのかは怪しいところだが。……場違い甚だしい感想だ。顔にへばり付く泥を拭いながら、これって傍から見たらランボ○かスネ○クみたいじゃないかと思いつつ、蛇皮の外套で梱包していたネズミ少女を取り出した。

「ご開帳。……痛いところは無いか？ 泥だけじゃなくて、折れた木とか沈殿してた石なんかも混ざつてたみたいだけ」

津波で死ぬ生物は、その大半の死因は溺死だが、体中には無数の切り傷、打撲、骨折、内臓破裂などが見られるものなんだそうだ。そこに至るまでの過程は、大自然による滅多打ち。天然のミキサーに掛けられたるようなものだろう。今、体の各所に感じる鈍痛に、それは真実であつたと、漠然と思つた。

そう思うと、骨折やら出血やらも無く、数箇所の鈍痛のみで済んでいるという幸運に、短めの感謝を捧げておこう。神でも仏でもなく、+1/+1の修正を与えてくれる、孔明先生辺りに。

「うう……人間達が使う空の水瓶の中で遊んでいたら、移動の為に、ゴロゴロと転がされてしまった時を思い出したよ……」

世界が回った。と締め括るリンを見るに、不調なところは無さそうだ。

悪戯ネズミの過去をチラと耳にしながら、出来るだけ丁寧に外套を外してやる。完全に露出した少女の体には、一滴足りとも泥の付着は見られない。その事に小さな満足感を覚えながら、滑る足場と化した大地に立ち上がる。

白い孤島と化した平天大聖の体が半分沈んでおり、一瞬だけ見ると、あれが何なのか理解するのは難しい光景だ。

現状把握の為にすぐさま周囲を把握し始めたリンは、平天大聖へと視線を固定し、時折、怒号にも聞こえる声を出しながら、前方のネズミ達へと指示を飛ばし始めた。この段階では、俺は何もする事が無い。極力、邪魔にならないように、静かな存在に徹しよう。

「……こうして見ると、酷いな」

ざっと見ただけでも、泥……黒一色。

もたらした成果は残り続ける、自身の能力を思い出し、

「……あれ、でも、泥って良質な土の一種だった……か？」

少なくとも、砂漠よりは生命の育みを助長する土地の筈。時間が経てば、もしやこの不毛の大地に、MTG産である事を加味しても、草木の一本でも生えるかもしれない可能性が出て来た。

砂漠化を抑止……もしかしたら改善とか、俺って地球さんの役に立ったんじゃね？

など思っている、

「うおー」

一際大きな振動と音。

視界の先の平天大聖が。【沼】から露出していた前足を高々と振り上げ、地面へと振り下ろしていた。

湿った音を響かせる筈の泥沼は、しかし、硬質の大地にでも打ち付けたかのような、正反対の振動を周囲へと振り撒く。

十数メートルの隆起を起こす、どういう理屈かで……まあ原因は平天大聖なんだろうが……硬質化した【沼】。それに合わせて宙を舞う礫——黒は、泥もそうだが、何よりよく見知った存在になった、無数のネズミ達である。

(……)

こちらの為に——片手で数えられるだけの日数の間のみとはいえ、本当によく働いてくれている。感謝もしているし、想いに応えてやりたい気持ちも、十二分に持ち合わ

せているけれど、我を忘れそうになるほど強い思いを抱いている訳では無い。

正直に心中を吐露すれば、彼らが何百、何千と死のうが、涙を流すことは無いだろう。

——だからといって、心穏やかで居られるかと問われれば、答えは、否。

やはり【プロテクション】や【ダークステイル】化は必須であったのでは。

居た堪れない……焦燥に駆られるが、平天大聖相手に必要な……必要だと判断した手
段からは外れるもの。無論、死なぬ兵とはそれだけで何者にも変え難い切り札はある
が、

「どうだ？」

このままで効果を発揮してくれたのであれば、今すぐにでも鉄壁の加護を付与させた
いのだけれど、それを判断する為に尋ねた返答は、ふるふると、小さく数回。『効果が無
い』と首を振るリンの態度で、行えなくなってしまった。

「……体毛に阻まれた箇所は無理だけど、それを掻い潜って直接皮膚に爪跡を残す事は
可能らしい。……ただ、それも瞬時に回復してしまうんだ。齧ったり、引つ掻いたり。
でもそれも、痕跡をつけた瞬間に……という具合にね」

いつの間にやら、俺達の周囲に数匹のネズミの姿があった。リンは彼らから情報を収
集しているようで、一方的にネズミ達からチュウチュウ言われているだけのやり取りは
すぐに終わり、報告をし終えた者から順に、前線へと戻っていく。その意見を統合した

答えが、今の話であるらしい。

「……ねえ」

ともすれば、消え入りそうな声。

視線は前方に向けたまま、前方から二度目の地響きが起こる中、小さな存在は、その小さな姿に似合った眩きを零す。

「うん？」

「本当に、このままで大丈夫なのかな……。実は、現状が平天大聖の策略で、これから僕達が行おうとしている事も、全部見抜かれた上で、踊らされているだけなんじゃないかって思えてならない……。これで……。本当に……」

「……そこには俺も同意させて頂きます」

自分の素直を暴露しただけなんだが……。あれ、リンが盛大な溜め息を。

『君もそう思うよね』とかな相槌を期待したんだが、少女にとっては予想外の返答であったようだ。

「……いや、なに。そこは『大丈夫さ』とか、『きつと何とかなる』とか、そういった気の利いた台詞を掛けるのがオスとしての役割なんじゃないかなー、と自分勝手に期待していただけさ……」

オスってあーた……。間違いではねえですけども。

『つくづく君は期待を裏切るのが上手い』だの何だの聞こえるが、既にこんな反応をさせている間柄な訳でして。

先の悪ノリな大演説（笑）と言い、言葉遣いや態度じゃあ、どうにもボロが出てしまふ。カッコ付け（偽）のスキルは健在のようだ。……健在じゃなくなる日は来るんだろうか。

「ッ！ 一定数の目標地点侵入を確認！ いつでも良いよ！」

「了解。【メモナイト】ッ！」

少女一人、男一人。それを軽々と騎乗させて、より一層足場の悪くなった砂漠の泥沼を疾走する。草原で駆ける馬よりも速いだろうと思う駆け足は、既に距離を詰められていた事もあり、あつという間に平天大聖の目と鼻の先へ到着を果たす。

一面が泥で覆われてしまったとはいえ、一応は砂漠と【沼】との境界線が存在している筈なのだが、見た目じゃ絶対分らない。……と、思ったのだが、どうやら【メモナイト】はそれを見極めたらしく、適度な距離まで来た途端、その歩みをピタリと止めてしまった。どうやら、大地に突き刺した足の感触で場を把握している節があるらしい。便利なものだ。

——言葉でも駄目。態度でも駄目ってんじゃ……。

（行動するしかないじゃない！）

まあそれも、色々とやらかしている身ではあるけれど。

いつそ寡黙系男子でも目指そうかと頭を過ぎるが、らしくない事この上ないので、却下。第一、そんな性格になりたいとは思わない。

平天大聖との距離、目測で百メートルは切っているっぽい。ちよいとMEMさん近過ぎじゃ、など思いつつ、停止した「MEMナイト」の上で、直立。微塵も動かない安定感抜群の足場に頼もしさを覚えつつ、表皮のみ泥塗れになった体を晒す。泥遊び後に新品の衣類を着込んだような不自然さだが、もう、それも気にならなくなった。

そろそろ口を閉じながらの呼吸が厳しくなってきた自分の疲労具合と折り合いを付けながら、ここまでで出揃った状況を改めて思い返す。

現状の手札は「沼」、「MEMナイト」。遠方にある「頂雲の湖」と「伏龍、孔明」。白牛の攻撃……地団駄によって、五十万からその数を減らした、+1/+1修正を受けているネズミ達。

【お粗末】か【弱者の石】による平天大聖の弱体化。具体的な減退数値は不明だが、相手の口振りから察するに、決して小さいものではないようだ。

そして、何より重要な点が、ネズミ達によってあの「平天大聖が傷ついた」という情報。

それらは毛ほどの引つ掻き傷であり、それも即座に修復してしまうという、全く無意

味な特攻しか思えないものだけだ。

(幾らMTGの呪文系は、自力の高い……強力な存在にや効力が薄いつつてもなあ)
それらは、全く効かない訳では無いのだ。

これが成功すれば1マナで。駄目ならば残りの3マナを駆使して、幾つか見繕って
いたコンボの妙技をお見舞いすれば良い。

けれども、1マナ呪文使用の段階のみでも、目的が成功する確率は高いだろうとも考
えている。何せ、単発で使用しても、意味を成さないものなのだ。使い勝手と成果が上
昇すればするほどに、制限が見受けられる自身の能力を鑑みて、多少なりとも使用に条
件が伴えば、それら制限は緩和されるのではないかと判断した。

それでも、試すのは初めてである。まあ、ぶつつけ本番は今に始まった事では無いの
が、ある程度の冒険を決断する切欠にもなった理由だろう。

そんなものの考え方を、度胸が付いた、と好意的に解釈するのも吝かではないが、そ
れはもう少し……もっと弱そうな相手と当たった時の為に、残しておく事にした。肯定的
に捉えた後でスカしたんじゃ、色々と目を背けたくなる体験やら経験やら記憶になつて
しまうのだから。大見得切った後のズッコケは、笑いを取る為の前振りだけで充分であ
る。

「一定時間、経過。恐らく目標数を遥かに上回る傷は与えた筈だよ。後は、君の言う呪文

がしっかりと効いてくれるのを神に……は、居ないんだった、か。……ははっ、君に願っておくかな」

固唾を呑みながら向けられたリンの瞳に、何処か軽い口調で答えようとした言葉が、潰えてしまう。

……これは、その、なんだ。

あの時の、俺らしく無い台詞を、まさかもう一度言う場面が来ようとは。

「——任せとけ。これで駄目なら、まだ幾通りかの手は残してるから。……そんなきや、場合によっちゃあ、怪獣大決戦の観客になれる事、受け合いです」

「それはまた、頼もしい言葉だ。その時には、精々踏み潰されないように、日頃から鍛えてある逃げ足を活用するさ」

……使用するカードによっては、鳥や馬であつても離脱不可能になるかもね。という項目には、口を噤んでおきましょう。

(こつちが細心の注意を払えば、どうにかかなりそんな問題だしな)

——これで、お膳立ては全て整った。後は相手の出方のみ。

吉と出るか凶と出るか……とは思いますが、相手は妖怪の親玉である。種族の特徴——勝負が決まれば潔い良い鬼とは異なり、吉と出る可能性なんて、多いのか少ない

のかすらも分からないのだけれど。

「なあ」

暴れ続ける平天大聖へと。

この言葉を機に、「メムナイト」へと縋り付いていたリングが片手を上げ、ネズミ達に停止の合図を送る。行動に移るまでの時間はそれなりに要したが、それでも、分は掛からずに済んだ。

攻撃の手を止めて、張り付いたままの組と、そろそろと白牛から下山していく組に分かれる。

それら違和感を感じ取ったようで、絶え間ない地響きを繰り返していた平天大聖の動きが徐々に緩まり、ネズミ達の半分以上が体から離れた時点で、完全に停止した。

風すら吹かない、耳の痛くなるような静寂の中。

「——もう、止めにしたいか?」

自分の言葉だというのに、やけに大きく、周囲へと響く気がした。ネズミ達ですら、しわぶき一つ立てず、無音の一部となっているのか。辛うじて音らしい音が聞こえたかと思えば、それは、既に遠方へと消えかかっている、人間の軍隊の後姿。

《……世迷言を。道化の台詞は、笑いの一つでも取れるようになってからしてみても如何です?》

似たような場面を、日本に居た頃に見た。ただあの時とは、相手も、場所も別モノで

はあるけれど。

「どうだろうな。ただ、状況はキリが良いとは思ってる。……お前、かなり疲労しているだろ。それ、今のままでとまず抜けないからな。……前々から……色々企んでたようだし、こつちから頭下げて黙認やら協力やらを取り付けた形でもあるし」

自分の身長以上の眼球に睨まれるという貴重な……けれど一度のみで良い体験を味わいながら、平天大聖か、それ以上に疲労しているかもしれない体力を隠し、平常心を装う。

「お前さんが何もしなげりや、この後に色々と粗品贈呈しておこうと思ったんだが……」その機会は無くなった。他ならぬ、平天大聖自身の手によつて。

内心で、『悔しがれ』と幼稚な念を送りながら、我ながらももう少しどうにかならん言い方なのかと眉をしかめつつ、今回のでチャラにしよう。との案を持ち掛ける。命を超越せだとか、隷属化必須だとか、そういった無理難題を吹っ掛けている訳では無いのだ。逃げ道は多く、魅力的な筈。

——もし、それでも事態の収拾を選ばないというのなら。

「ツー」

こちらの言葉に応える様に持ち上げられた白い柱……平天大聖の前足。泥飛沫を撒き散らし、あつという間に建造された高層ビルは、建造時に掛かった時間と同じくらい

あつという間に、倒壊の兆しを見せる。合わせ、弾かれた様に、足場である「メムナイト」が駆け出した。

《——舐めるのも大概にしろツ、人間!!》

倒れ込む方向は、無論、こちら。風切り音すら巻き込んで横倒しになりつつある白い柱に、圧巻の二文字を垣間見る。

一体、何が琴線に触れたのか。自我は健在っぽい、それでも、感情に任せた部分の大きい行動に移ったのは、何をするにも飄々としていた平天大聖の姿を思い返すと、興味深いものがある。裏を返せば、この状況はそれだけ屈辱的なものなのかもしれない。

けれど、正直、その台詞は在りがたい。今までの腹芸合戦——俺にとつては——に比べれば、怒りという感情は非常に理解し易く、馴染み深いもの。親近感も沸いてくる。

……それが、好感度の上昇に向かうとは限らないのだが。

「雑魚化フラグゲッター!!」

こういう展開は、先に底を見せた方の負け。的な流れを脳裏に画きながら、自分の中で最後の一線の外れる音を聞いた気がした。ここまでやったのだという思いは……汚い話だが、言い訳づくりの何者でも無い。差し伸べた和解の手を払った直後——気持ち良く事に望む為の根回しが全て済んだ、今この時ならば。

——お前がどんなに惨たらしく死んでも構わない。

そんな想いが込められた呪文——カードを、自身の内で呟いた。

(発動——【命取り】)

MTGにおいて、黒の特徴——真骨頂たる力の一端を、今ここに。

『命取り』

1マナで、黒の【インスタント】

使用したターン中にダメージを受けているクリーチャー全体を対象とし、破壊する。

それは【再生】出来ない。

デイスカード、ライフドレイン、高性能デメリット付属カードなど、黒のお家芸と言っても過言ではない内の一つ、クリーチャーを破壊するカード。その殆どが、【再生】を許さない。

破壊故に、クリーチャーのライフたるタフネスを参照しないので、高パワー&タフネ

スが多い〔ファツテイ〕などの大型クリーチャーにとつては厄介な呪文となる。特にタフネスが高めな〔白〕や〔緑〕に対しての効果が高い。

使用頻度こそ高くは無いが、だからこそ、これを使う場合には、奇襲として成立する事が多い。黒のクリーチャー破壊カードは、条件として「黒でも〔アーツィファクト〕でもない」と付随されているものが大概であり、その点をクリアしている〔命取り〕は、決して侮れないスベックを秘めている。

切欠は——それこそ、ほんの小さな……短い、一本の黒い線。純白の表皮に走った裂傷は、とても細く、短いもの。

ただ、それも一瞬。次の瞬間には、その数は倍になった。いや、倍ではない。倍という範囲に留まらなかった。

一本、二本。十、百、千、万、と。恐ろしい勢いで数を増やし、黙々と、淡々と、着実に、黒い線を増やしていく。毛で覆われていながらも、昼間の砂漠に照らし出される

白牛には、それらがとてもよく映えていた。まるで、自らの影によつて食い殺されているような。もしくは、子供の落書きに塗り潰される白紙のように。

《ぎゃ……—があああああ!?!?!?》

地の底から響く声、とは、こういうものを指すのかもしれない。急遽、指製の緊急耳栓を装着したにも関わらず、鼓膜が破けてしまうのではと思える音量を全身で感じた。

(こつとも効果を發揮してくれるとは思わんかった……)

カード効果をなんの捻りも無く解釈したのならば、ダメージを……傷を与えたか否かが発動の条件であつて、そこに傷付けた回数は含まれていない。

それでもこれを使用したのは、1マナのクリーチャー破壊呪文で、黒でも「アーティファクト」でも対処可能であつたから、という点と、先に考えていた通り、発動条件の難しさに起因する。間々制限の見受けられる自身の能力は、発動条件が困難になればなるほど、しっかりとした効果を發揮してくれるのではないだろうか、と。

コンボの回数制限だつたり、「プレインズウォーカー」の枷であつたりと、これは便利! と考える手段の大半が、一回限りの使い捨て。

ならば逆に、発動条件がキビシ目のものであれば、それら制限は緩和……ないし、設定されていないのではないだろうか。

(無数に近いつつつても、引つ掻き傷程度がダメージとしてみなされるか怪しかったん

だけどな)

よって、それが成功したとなれば……、

(……あれ。もしかして、「命取り」って、もう使え……役に立たない?)

それは、条件の緩さと結び付き、連鎖的に、過去に経験したコンボやPWの制限へと繋がった。

悶え苦しむ平天大聖は、今も声高らかに叫び続けている。それを成した——抜群な成果を見せた「命取り」は、結果と対価のアンバランスを際立たせる。毛ほどの傷をダメージと見なし、一体だけとはいえ、対象を破壊し、「再生」を不可能にさせる力とは、チート乙、と自分で思える性能だ。

これまでの各種制限を思い返すに、真偽を確かめるまでは、今後、これは使用出来ない。と考えておくのが最善だろう。少なくとも、ぶつつけ本番で使用して良いものではなくなった。

「……」

もう攻撃は無いと判断し、停止した「メムナイト」の上で、泥沼の上でのた打ち回る巨大な白牛を、リンは能面のような顔で見続けている。飛び跳ねる泥や礫を気にする風も無く、ただ呆然と、消えゆく命に目をやっていた。

地響きに時折混ざる、耳を覆いたくなる絶叫。けれど、何もせずに棒立ちする姿から

は、一切の感情を読み取れるものでは無くて。

「最後まで見る必要はない。……行こう」

こういう時にこそ普段通りに……軽口を叩かなければという思いは、鼓膜にこびり付く悲鳴によつて掻き消されてしまった。直立する少女の両肩に手を置いて、強引に反転させる。何の抵抗も感じなかったのは、脱力に近い状態であつたからだろうか。

平天大聖から距離を取りつつあるネズミ達を見ながら、自分達もそれに習う。

窮鼠の一撃、を思い出し、死体へと近づいていく妖怪の王を、油断無く監視しながら後ずさる。とは言つても、俺は白牛を見ているだけで、後退するのは「MEMナイト」の方なのだが。

無数のネズミ達ではなく、「命取り」の効果と「沼」によつて段々と黒く染まっていく。数刻後には、あのまま地の底……泥沼の奥深くへと沈んでいくのだろう。

(……くそ)

気分良く事を終える為にやっていた筈なのに、こうして最後を看取る立場になつてみれば、心には何の爽快感も生まれえない。むしろ逆に、響き渡る苦悶の声によつて、不快感が募るだけであつた。

もつと憎々しい……それこそ、悪辣非道な「魔王」であつたのなら、どんなに良かった事だろう。

（魔王、か……。……白牛……。……巨大な牛……。……牛で魔王つつたら……。……）

おや？ と心に、疑問が一つ。考えが考えだけに、それが解決されるのは、然して時間掛かるものでは無かった筈なのだが。

『——援軍！ 神速！』

思考は断ち切られた。心に届く、遠方より事態を見守る【伏龍、孔明】によつて。

「おっ？」

念話の内容が脳味噌に染み込む前に、俺の体は揺れた。

【MEMナイト】が体制をやや崩した事もそうなのだが、何より、背後に控えさせていたリオンが、こちらの体をグイと押し出して来た。元々広い足場ではないので、危うく落馬しそうになるのを何とか踏ん張ろうとしたものの、体を支えてくれた【MEMナイト】の手の片方すらも、その役割を放棄して、リンの強行に便乗する形を取った。

—— 拉げる金属音が耳に届く。

乾いた甲高い耳鳴りが、一つ。鉄板にパチンコ玉でもぶつけた様な、青空によく響く音。

何の支えもない崖つぶちの体は、いとも簡単に宙に放り出されてしまう。砂の大地に

ベチャリ顔なりから行かなかつたのは、ただ単に運が良かっただけであろう。大した衝撃も感じずに着地をした足により力を込めて、見上げる形で振り向き、顔を起こす。

「おいおい、一体——うお!？」

視界を覆う黒い影。

それは人間の幼子のような大ききで、一瞬それが何なのか分からなかつたが、

「ふっ!」

全身を強張らせ、それを受け止めるよう力を込めてみれば、肺に溜まっていた幾許かの空気が排出される。

その刹那、衝撃が両の腕に押し掛かる。ここ二年ばかりの大和生活で多少は鍛えられており、そもも高さがある訳では無いとはいえ、子供一人の重量の自由落下を受け止め切るの、そこそこ難易度が高めのミツシヨンだった。

しかし、今の俺は通常の状態では無い。【伏龍、孔明】によって＋１／＋１の【パンプアップ】を果たしている、超人……とまでは言い切れない、超人一步手前のぷちスーパーマン。名前的にパーマンだろうか。そんなところだ。恐らく今の状態であれば、四年に一度の世界大会でも各種の上位を狙えるポテンシャルになっている。それが、重量三十キロ程度（予想）をキヤッチ出来ない筈が無い。

「リン! どう——」

——どうした、と。そう、言う筈だった。

……おかしいな。これは本当に……オカシイ。

場の雰囲気から察して、何かの襲来を受けたのは予想出来る。平天大聖にのみ目を向けていて……かといって、それ以外を疎かにして来たとは思わない。周囲数十キロの地平線には敵影は見えずに、斥候として分散させていた何百かのネズミ達からの報告も上がってきてはいない。

しかし、唯一事前に判明したと思われる情報が、「伏龍、孔明」による念話だという事実を加味すると、ネズミ達の情報網には掛かっていたが、それ以上の速度でこちらへと接敵を果たしたのかもしれない道筋が見えてくる。

でも今は、そんな事はどうでもいい。

「……良かった」

真つ赤な口元を今も赤で染めながら、小さな妖怪が懸命な笑顔を造っている。肩と胸

の中間辺りから、トマトジュースでも零したように広がる赤い染みに、あらゆる感情が吹き飛ばされた。眼の鼻の先の大地には、一本の長い棒。羽の付いた先端を見るに、どうやらそれは、弓矢の類であるのだろう。

(真上……から……?)

先の流れを予測しながら出た確定の結論は、何処からとも無く飛来した弓矢から、リングが身を挺して守ってくれたという、分かりたくもないもので。

ただ、熟考に浸る間も無く、俺達は暗い影に覆われた。

空を仰ぐ形で見上げてみれば、そこには押し掛からんと天を遮る「MEMナイト」。再び同様の事が起きても良い様に、文字通りの身を挺して盾となってくれたのだろう。

そんなクリーチャーの足元。恐らく、初撃。リングがこちらを突き飛ばした時に聞こえた音によって生まれであろう小さな穴が、「MEMナイト」の足に穿たれていたのだから。腐つても金属製であり、1/1から「パンプアップ」を受けて2/2となっており、そんな金属板を貫いた弓矢が、ただの矢であるなど考えられない。

落ち着いた状況を見計らっていたかのように、「伏龍、孔明」の念話が届く。上空より飛来する者が居る、と。

けれど、そんな問題はどうでもよかった。

抱えた少女の傷口を一瞥し、脱力しきつた……口から血を流している状態と照らし合

わせ、一刻の猶予も無いと判断。ゼロマナである【アーティファクト】、【葉草の湿布】は除外。

【再生】効果のカードを思い浮かべ、ネズミ達も合わせての【再生】か、単体での【再生】かを、逡巡し——初めて少女を抱えた時に感じた、痺れる感覚に襲われた。

直後に脳裏に飛び込んでいる情報。それは、新たに開かれた道の標。だが、今はどうでもよかった。

それよりも今は——

「——おい」

小さな体だ。軽く抱えれば、包み込めてしまうほど。

空から降ってきたので、それを受け止めたのだ。必然、しっかりと支える為に、触れ合う箇所が多くなり……

「……おいつて」

——腕に感じていた鼓動が——無い。

浮かべた笑顔はそのままに、小さな鼓動も、か細く上下していた胸も、全く動かない。力の抜け切った体は温かく、腕を伝わるぬめりとした液体も、未だその存在を熱いくら

いに主張していた。

だが、それだけ。

困ったような笑いも、罵倒にも似た明るく可愛らしい声も、クリクリとした大きな二つの瞳も、苦悶の声すらも。何も、何も、見せてはくれない。

(……………参った、な)

あれは諏訪の国、であつた頃か。大切な人を目の前で奪われ、あの時最も力強い存在であると思つていたカードを行使した。

後先など考えず、一寸先の未来など考慮せず、ただただ目前の怨敵の命を奪わんとして、それのみを思い、行動に移した。今の状況は、あの時の焼き回し。腕に感じる温もりすら一緒だ。

けれど自らの心は、とても冷えたもの。暗い激情に突き動かされた時とは、やや異なっていた。憤怒の炎だとか、憎悪の波動だとか。抱いていない訳では無いけれど、それによつて思考が塗り潰されるまでにはならなかったのだから。

(本当に……………参ったな……………)

こういう可能性だつて、考えていた。

トップを下せば、それに連なる者達が御し易い縦社会、妖怪という種族ではあるが、今回のように平天大聖を倒しても向かつてくる……………これを機に。と一躍を狙っているの

か、事前に指示を受けていたのか。それ以外の何かの要因か。

いずれにせよ、ボス戦の後の中ボスカ雑魚ラッシュは、想定範囲内であったのだ。

——この腕に感じる、重い重み以外は。

ここで即座に「再生」を使おうものなら、事前に「ダークステイル」化も、「プロテクション」も行わなかった意味を失ってしまう。そうなれば、既に散ってしまったネズミ達の意味も消失し。無論、無意味ではない。それでも、そう思わずには居られない後悔が実行を躊躇い、二の足を踏ませる。

「メモナイト」という傘からチラと見える空を見てみれば、そこには、キメラを思わせる不出来な存在が居た。一瞬だけ思った感想は、ペガサス。翼の生えた馬、という見た目が、まさにそれであった。

けれど、目を凝らしてよくよくそれを見てみれば、安易なすぐに感想は否定される。大雑把に判明したものは、四つ。人の頭。馬の体。鳥の羽に、虎の表皮。大空に居る為、縮尺がはつきりと分らないが、通常の馬の倍以上はある巨体。一体何の妖怪かも分からない、いつそ神々しいとすら思える存在に、僅かなも目を奪われた。

それを、見計らっていたかのように。

「ぐっ!?!」

押し上げられる体。宙を浮く感覚。太陽が眼光を焼いたかと感じる間もなく、リンを

抱えた俺の体は、『耐えて』という念話と、それを発した「ムムナイト」の足によって、数メートル先の地面へと蹴飛ばされ、横滑りに着地した。

直後、轟音。

砂煙を巻き上げながら、同時に煌く、無数の金属片。嫌になるほど目を引くそれは、鋼の従者の成れの果て。横たえ、やや軋む体を首だけ起こし、そこへと目を向ければ、「ムムナイト」の体は中央から二つに別たれていた。

ならば、それを成したのは何なのか。その答えも、視線の先にあった。

戦利品の如く肩に掛けられている獣……犬か狼の毛皮。俺を二人重ねても足りない長身は、深緑を基調とした赤銅と金色の装飾が施された鎧に包まれて、屈強だと思われる体をより一層、堅牢かつ煌びやかに際立たせていた。

(リザード、マン?)

爬虫類と人類の合いの子のような存在。蛇の頭部。人の体。両の手に一本ずつ握る、肉厚の直剣と、大型の戟。

(……お前か)

背中に背負われた、真紅の弓と矢籠。何本か残っている矢の羽の部分が、リンを貫き、大地に突き刺さっていたものと酷似していた。

しかし、落ち着いて姿を確認してみると、蛇だと思つた顔には、二本の髭が生えてい

た。蛇皮のような艶やかさではなく、鎧に覆われた全身から覗く表皮は、鱗。黄色の猫目からは並々ならぬ闘気を発しており、西洋のモンスター、リザードマンだと思つていた考えを改めるには充分な容姿。

(龍人……)

そう思い直すのに、時間は掛からなかった。

余裕があれば……リンがこうなつていなければ、ゆくゆくは紅魔館で門番を務める者との関連性に、胸躍らせ、興奮しながら考えを巡らせていたのかもしれない。振り下ろした巨大な直剣を持ち上げ、無防備なようにだらんと構え直し、こちらへと歩む姿は威風堂々。一角の武人のそれだ。

光に還りつつある「メムナイト」の残滓を興味深そうに……けれど何の躊躇も無く踏み潰しながら進み来る様子に、心がざわめき立つ。

そんな最中。

「っー」

大地が動く。否。大地を疾走する影が動いた。

周囲に散つていた無数のネズミ達が、我を忘れたように龍人へと襲い掛かる。先の泥津波もかくやな黒い波となった勇士達が、その眼を赤々と輝かせながら猛進していった。

ただし、そこにはある程度の規則が見られるもの。間隔の空いた戦列であったり、強弱の別れた突撃部隊の速度であったりと、下手な人間達よりも統率の取れた様は、彼らを畜生と蔑みの視線を向けて来た者達から見れば、眼を見開いて驚く事だろう。

流石にこれには分が悪いと見たようで、龍人はその場からの離脱を図った。

とは言っても、撤退の意味ではなかった。留まる事を良しとしないだけであり、その移動先は——こちら。

(……俺か)

駿馬にも迫る移動速度もそうだが、足元のネズミ達に這い上がられないように、剣や戟を足の代わりとし、大地への接触を避けながら向かって来るではないか。

武器を用いた竹馬のようだ。と、場違いな感想が脳裏を過ぎるが、それが意味するところとは、こちらへの害意。

——そつと。足元のネズミを一匹持ち上げる。妖怪でも何でもない。ただ下に居ただけの、小さな生き物。

右手の中に納まる『何?』とクリクリとした目をする存在に、そういえば言葉が通じないのだったと気づかされる。

けれど、数日間ジエスチャーという肉体言語を学んで来た事を思い出し、すつ、と人差し指を前方——跳躍を繰り返し、襲い来る龍人へと向けた。

「——あいつ、殺すぞ」

小さな……けれど甲高い鳴き声。

チュウ。との、それではない。キィ、と空気を切り裂く怒号であった。

場を読むことでこちらの意図を察してくれたようで、口元から覗く小さな牙を、精一杯剥き出しにしながら、威嚇行為を取った。

——成長と共に解放される力について、また、分かった事がある。

今回は大まかに二つ。

一つは、俺の制限はスキルツリー方式であるようだ。

ツリーの名の通り、枝先になればなるほどに、そこに到達する道は細分化されるもの。安易に果実だけをもぎ取る真似は許されず、得る為にはしっかりと枝を伸ばさなければならぬ。故に、どんなに同じくつわを踏もうとも、条件が整っていないければ、その先は見られない。

いつかは、この暗中模索な能力制限も解放される未来が来るのだろうか。

少なくとも、その暗闇に一筋の光が差し込んだのは、諸手を挙げて喜ぶべき答えの筈なのに、それが判明するまでの過程を考えれば——腕に感じる暖かな重みを鑑みれば、唾を吐いて顔を背けたくなる事実であった。

過去、このような状況に陥ったのは、諏訪の頃に一度のみ。その際には何も気づきす

らしなかった……ただ我武者羅に。感情の赴くままに行動していただけだった。だが、今回は違う。

大和の風神との付き合いか、鬼との接触か、月での一戦か。それらどれかを経由して分かった事。

血液。恐らく……それがトリガー。

リンから伝わって来る、痺れ。怖気にする赤い暖かさによって、能力解放と銘打つ取扱説明書を、直接頭にぶち込まれた。

●スキル解放——『特定対象接触中の間、同種族（タイプ）の全コスト無効』

ウイリク様と別れた直後。夜の砂漠に身を躍らせた——初めて少女を抱き抱え跳躍した時に僅かに感じた痺れは、これの先触れであったようだ。

「つらあああッ!!」

乾坤一擲。全力投球。撃ち出した小ネズミになるべく負担を与えない様に。しかし、あらん限りの力を込めて、腕を上から下へと振り被る。疲労の重なりつつある中で自ら

行動するなど、ただでさえ際どい制限時間を削りに行くような愚行。

しかし、今回ばかりはそうも言っていない。言いたくない。と、言い換えた方が正しいが、それすらも些細な問題だ。

投擲された、一匹のネズミ。【伏龍、孔明】の加護を受けているとはいえ、2/2には届かない、1/1に毛の生えただけの力な存在。何の能力も付与されておらず、何の策も持っていない。

(悪い、先生)

更には、これからの事を考え、【パンプアップ】効果と、維持費の削減の為に、【伏龍、孔明】を還す。独断&即決+一方的な説明通知であったが、先生からは、『御武運を』とのお言葉を頂けたのが幸いか。知力抜群な客観的視野を持つ司令塔と、五十万の全体修正を捨ててまで得たものは――。

経験か、直感か。九十九より撃ち出されたそれを異常と感じ取った龍人が、迎撃の姿勢を取った。

低空を翔ける速度はそのままに、投擲したネズミ—— たった一匹の小さな存在に向け、巨大な直剣で、渾身の斬撃を繰り出した。

足元を埋めるネズミ達には目もくれず、一閃。その重量を微塵も感じさせずに振り抜かれた剣は、その空間にある全てを切断する。

空気も、時間も。そして、投げられた、小さな命も。

「——ッ!？」

—— その、筈だったのに。

「そう手間は掛けさせねえよ……。」 〃がんばれや〃、爬虫類」

〃投擲した筈の小ネズミを手の平に乗せながら〃、ふてぶてしい声色で、声を飛ばした。

前方。龍人の目標である人間からの挑発……いや、〃応援〃が耳に届いたのと同時、全身を未知の力が駆け巡る。この力ならば、より上位の……いつそ大聖の末席に名を連ねるのも可能かもしれない、と。僅かとはいえ、それに意識を奪われてしまった、刹那の間。

焔が走る。否。焔に似た眼光、二つ。龍人の目前を駆け抜けた。

雷光一閃。常人では満足に振るう事も適わない直剣を持つ龍人の豪腕が、血飛沫すら上げる暇もなく、澄み渡る青空を舞った。

——そこには……投擲された小ネズミが居た筈の空間には、薄汚れた人型。

体軀は九十九と同程度か。腰まで届く灰色の髪。体の動きを妨げないよう最小限に施された、黒茶色の装甲。共に、身の丈ほど。巨大な剣を右手に。鉈のような刃を左手に。刃こぼれしてしまい、切れ味など期待出来ないであろうそれは、振るった対象の苦痛をより引き出させるのだらう威力を宿しており、腰から伸びる長い尾先には、小刀のような形状の手裏剣が握られていた。

九十九はガクンと抜け落ちる体力と抗いながら、月で貰った腕輪に熱が入るのを感じた。だが、胸に抱いた少女を取りこぼすことはしない。

「……………」

再び鼓動を刻む、小さな胸。空気を震わす、愛くるしい呻き声。停止した少女の時間が再度動き出し、可愛らしい顔に皺を作る。

「……………あ、れ……………」

薄つすらと見開かれた眼には、困惑の色。混乱する脳内をどうにか整理しようと頭を働かせ、懸命に冷静さを取り戻そうとしている。それを感極まったように、隠し切れないう喜びと共にチュウチュウと鳴く小ネズミは、リンの顔に鼻を摺り寄せた。

「……良かった……。……どうもありがとう。……お陰で、命拾いました」

目覚めの挨拶。安堵とも罪悪感とも付かない表情を浮かべる九十九に、それこそ意味が分からないと、リンは困惑の色を濃くする。

「っ！ そうだ！ あれからどう……な……」

事態を把握すべく尋ねる……尋ねようとした行動は、視界に入る、赤黒い染み……自らの腹部に広がる血痕によって、途切れてしまう。

そうだ、自分は――。

困惑しながらも、どう見ても致命傷であると判断したリンは、しかし、現実を前に考えを改めるのに時間を要した。

「――過去も未来も、生も死も。全部って訳じゃねえが、とりあえず“死”の部分を蹴っ飛ばして、どうにかしてみました」

疲労の色を隠そうともせず。『どうよ』と落ち着いた声で答える九十九に、リンの口は大きく開かれ、空気を欲する魚のような状態になる。魏の軍師であつた句彥もそうだが、蜀の軍師である孔明をも蘇生させた彼ならば、不可能ではないのだろう。

けれど、それも何処かで納得していたところもあった。

後世に渡り名を呼ばれ、記されて続けている偉人であるのなら、それくらい荒唐無稽はあり得るのでは、と。特別な存在は、特別な出来事があるものだと思っていた。

対して、それが自分であれば、どうか。

……無理だ。特別と凡庸を同一視出来る筈もない。

何が『どうよ』だ。何が『どうにかしてみました』だ。幾人もの生命がそれを望み、けれど様々な柵によつて断念し、あるいは阻害されて来た事か。

あの言葉は全て本当であつたのか。

愕然とした表情を浮かべたまま、リンは漠然と、そう思った。

(本当に……それを成したのか……)

少女は恐る恐る自らの腹部を擦りながら、大穴どころか、傷一つない自身の体に、戸惑いを覚える。

「本当なら『魂だけ呼び戻し定着させる』のが彼女の力なんだが、そこはこつちの能力で補いました。今は体力全回復のオマケが付いて来る状態だな」

説明には違いない筈のだが、九十九の話を十全に理解するには、幾つかの前提が無ければ不明瞭のままである。

意図的にぼかしていると判断したリンは、追求を止めて、数瞬前に自分を貫いた相手

を見た。

この地を統べる妖怪の頂上。七天大聖の内の半分は容姿を把握しているのだ。それ以下であれば、ほぼ全て把握している。そしてあれも例外ではない。その名前は、既知である。

「……睚眦、か」

睚眦。それが、九十九やリンが対峙している龍人の名。龍に似た姿で山犬の首飾りを持ち、殺戮を好む妖怪。武具の扱いに秀でている面があり、その力は千の軍隊にも勝るとされる、豪の者。

淀みなく言い切ったリンに、九十九は、そうかと頷く。隻腕となりたたらを踏む睚眦を睨む眼に、一層の力を込めた。

射殺さんとする視線を、延ばした片腕——指先に乗せて、一言。

「——切り刻め」

その者、暗殺を営む血族。けれどあまりの残虐性に、同族からも疎まれ、孤立無援となつてしまった過去在り。

技巧は随一。行いは、無垢にして、無残。可憐にして、冷酷。

名を、墨目（すみめ）。

生を嘲笑うかの所業を行う彼女は、冒瀆する者とも呼ばれる、闇に生きるシノビであ

る。

——其の業、刹那。

ぼとり、ぼとり。

瞬きの間に十七の肉片となった睚眦は、爆散でもしたかのように、乾いた大地へと降り積もったのだった。

『鬼の下僕、墨目』

6 マナで、黒の【伝説】【ネズミ】【忍者】クリチャー 5 / 4

希少能力【忍術】と【再生】を併せ持ち、プレイヤーへ直接ダメージを与えた場合、そのプレイヤーの墓地にあるクリチャーを一体、自軍の場に呼び出し、使役する——
墓地から釣る、とも比喻される【リアニメイト】能力を保持する。

『忍術』

クリチャータイプ【忍者】が多く持つ固有能力。

自軍のクリーチャーの攻撃がブロックされなかった場合、「忍術」の後に表記されている分のコストを支払う事で、攻撃クリーチャーと、手札にある、「忍術」コストを支払ったクリーチャーを入れ替える事が出来る。

【鬼の下僕、墨目】の場合は、5、である。

——立ち込める血風とむせび立つ赤の臭いに、俺は眉を蹙めながらも、周囲への警戒は崩さない。

二度目などあつてたまるかと、一瞬遠退いた意識を、自分の舌を噛む事で繋ぎ止める。腕に感じる仄かな熱は、月で貰った腕輪から。ヒカリゴケのように淡く純白に輝くそれをチラと見て、あまりの発動条件のシビアさに、苦笑。

「墨目、さん。助かりました」

血と肉片の絨毯と化した一带から視線を切り、墨目はこちらへと向かい、膝を突く。

『勿体無きお言葉——』などと返されたが、その声には、いつそ艶やかとすら思える熱

が籠っていた。後、こちらを見る目線にも同様の温度を感じます。

(……なんか、エロい)

これぞ獣人。な容姿の墨目は、新手のビキニアーマーかと思ってしまう即席の鎧のよ
うなものを申し訳程度に身に着けており、彼女のボディラインがハッキリと分かっ
てしまふ。方向性はまるで違うものの、前に月で召喚した「吸血鬼の呪詛術士」を思い出
す。全身を白に近い灰色の毛でいる為に直球的な欲望は感じないが、隠されれば隠される程
に色々と遅くなるこちらとしては、今までそちらにはほとんど興味が無かったのだけ
だ……。

「……アリだな」

そう思わずにはいられなかった。……口には出してしまったが。小首を傾げる仕草
の墨目に、気にしないで下さい。と、スルーを推奨。

ただ、今の彼女の状態にはやや疑問が残る。記憶していた限りでは、残虐によつて喜
びを感じるところがあり、力——あるいは自由か——を求める為ならば、恩人にす
ら手を掛ける節があつた。

まあ、その恩人は墨目に対して顔をしかめるような暴力を振るっていたので、同情は
し難いのだが。

(一応、聞いておくか)

何が原因で寝首を搔かれるとも限らない。そう思うのも理由の一つではあるけれど、今もヒシヒシと感じる熱視線の意味が分からないのが、最大の原因である。

「……なるほど」

興奮冷めやらぬ口調で捲くし立てられた言葉をまとめると、墨目を「パンプアップ」した為であるようだ。

—— 睚眦へと挑みかかる墨目の背中を後押しするつもりで使った「ピッチスperl」。名を、〔激励（げきれい）〕。一時期、緑デツキの真骨頂たるクリーチャーによる蹂躪——
—「ビートダウン」で間々使われた、「パンプアップ」呪文である。

『激励』

3で、緑の「インスタント」

対象のクリーチャー一体に＋4／＋4の修正を与える。

代用コストとして、自身が「森」をコントロールしているならば、対戦相手一人のライフを3点回復させる事でも使用可能な「ピッチスperl」を備えている。

特定の状況下では比類なき性能を發揮する為、緑の「ビートダウン」、特に、高速型に部類されるものにはまずまずの確立で採用されている。

ライフの回復とは、一般的にはメリットにこそなれ、デメリットになる機会など、そうそうあるものではない。

ただ残念な事に、俺はその、そうそうあるものではない機会に恵まれてしまった。
(あれ、体、超痛えんだよなあ)

ライフの減少——【死の門の悪魔】召喚時のデメリットが肉体の減少だとしたら、単に考えれば、肉体の増加。

諏訪から大和へと国名が変わった頃、ライフ回復効果を確かめるべく行ったのだが、体中を小さな刃物で切られ、そこに肉塊でも押し込まれるような怖気は、今でも軽くと

ラウマものだ。腕や足を生やす、といった使い方は可能なようだが、出来るだけ【再生】で済ませたいものである。

だが、

（あの反応は、痛みとかで驚いていたって風じゃなかったな……）

【森】さえコントロールしていれば、コスト無し＋クリーチャー強化&相手にダメージ。な呪文となりうる筈であった【激励】は、予想ちは違った効力を発揮したのかもしれない。PWやデッキが二度目からは使用出来ないとか、そういった制限と一緒に。面倒なものだ。

とはいえ、それでも数値の上昇は倍々ゲームになっている面の強い、パワー&タフネス表記。10/9となった墨目によって、某直死の眼を持つ殺人貴かくやな解体術を披露した彼女には、とても感謝しております。

幸いな事に、あまりに生き物であった頃の面影から掛け離れている形状であるので、後ろでのた打ち回っていた大聖と比べれば、スプラッタなゲームの延長線上にしか見えないのも救いだ。悲鳴を上げさせなかったのも助かりますです、はい。

更に付け加えれば、今は彼女自身の能力に付け足す形で、こちらの能力——MTGの【リアニメイト】能力が付与されている。

物語上の彼女は、死体に魂を呼び戻し、固着させる程度のもの。それには、体の修復

は含まれていない。

だが今ならば、修復も兼ねた、完全な死者蘇生へと格上げされた力が宿っていた。そこにはこちらへの服従……プレイヤーの従僕と化すルールが付与されてしまうけれど、指示しなければ、それは無いも一緒。もしかしたら、それによってコスト維持というデメリットが追隨する事も考慮していたけれど、披露具合に変化の無い状態を鑑みるに、その心配は杞憂で終わったようだ。

(確か、墨目が寝首を搔いた後に付いた主が……9/9、だったか)

タフネスは兎も角、パワーだけならば同格。更にはMTGとしての効果によって、蘇生モドキが、完全な蘇生へとシフトしている。豪華スペシャル得点仕様な状態だ。

……ただ、その熱の籠り様がヒジョーに怖い。恍惚と……自らの力に酔っている節が見受けられる。

気分はどうですか？ と尋ねてみると、やや溜めた後、『素晴らしい……』とのお言葉が。

何処となく天空な城のム○カさんの台詞が頭を過ぎる。実際にやってはいないけれど、俺の脳内映像には、両の頬に手を当てている、未来○日のヒロインが恍惚な表情をみせるあれ状態が再生されております。

「……って、どうした、リン」

さつきから無言の少女に、何事？ と視線を向ける。

これで何度目か。その目は大きく見開かれ、【鬼の下僕、墨目】を穴の空くほどに凝視していた。リンの肩に乗っていた小ネズミも、做う様に、完全停止。ネズミという種に共通点のある者同士、何か惹かれるものでもあるんだろうか。

「つ、ツクモ……彼女……このお方、は……」

たどたどしい言葉遣いだけれど、一言一句に力が籠っているのが分かる。早く教えろ、とばかりにリンの肩に乗るネズミも、キイとひと鳴き。

……何か、ウイリク様に次ぐ敬い具合なんだが。その遥か下に俺、みたいな。……嫌な事実だ。

「どうしたのよ、そんなに畏まっちゃって」

そう、不思議に思い尋ねてみると。

「……僕の無知なところはまだ多いけれど、それでもこのお方が、同族の中で高位の力をお持ちだというのは一目で分かった。僕は、ネズミの妖怪だからね。自分達の頂点に近しいお方がこうして顕現して下さったんだ。とてもじゃないけど、平常心で居続けるのは無理だと断言させてもらうよ」

驚きによる動揺と、それ以上の羨望を体中から溢れさせながら、一切どもる事もなく、リンはそう言い切った。

腕の中で静かな歓喜に震える少女に、そういう事なら。と、たどたどしいながらも知り得る情報を口にします。

「えー、と……。彼女は墨目さん。数々の技を持つ（と思う）、一流の【忍者】……。えく……裏稼業？ の専門家です」

【忍者】と言われても、日本以外で分かる者など居る筈もないので、取って付けた補足を入れておく。

尤も、今はその日本ですらも、未だ生まれていない役職ではあるけれど。

こちらの言葉に冷静さを取り戻したのか、墨目がリンへと微笑みかける。

(……なんと)

その表情は、温和。直前に解体劇を行った者と同一視が難しい程に、優しさに満ちていた。

同族には優しいのか、それとも、年下だからなのか。持っていた鉈刀を脇に置き、空いた手でそつと——繊細なガラス細工にでも触れるように、ふわり、リンの頭を撫でる。

俺に抱かれたまま、恥ずかしそうに成すがままとなるリンと、それを優しく見守り撫で続ける墨目は、家族か姉妹のように。一瞬、百合っぽい展開が!? と思いつけた数秒前の自分を殴りたくなる。そんな光景だ。

と。

「……お前は、俺か」

ふとリンの肩に乗っていた小ネズミを見てみれば、あまりの興奮状態に参ってしまったように、気を失ってしまっている。何処となく親近感を覚える奴だ。もしかしたら俺の祖先であるのかもしれない。

(取り込み中、すいません。残り、宜しくお願いします)

経過する時間に余裕が削られ、墨目へと指示を出す。

念話で届く、了解の意。すくと立つ獣人の忍。彼女が見る先には、肉片となった睚眦が居た。

「うわっ！」

と、リンが驚きの声を上げた。

……俺だつて、何の事前情報も得ていなければ、それ以上のリアクションを取っていた事だろう。

しかし、それを起こした……指示したのは、俺。驚くわきやないのです。

光の凝縮。瞬間に視界一杯を覆う光子に目を細め、見るそこへ向け、口を開く。

「さつきは、ありがとう」

俺の身の丈の倍はある体躯。白銀の装甲。重厚な金属の四肢。先程、睚眦によって光

に還った「メモナイト」が、完全な姿で再び現れた。リンに言った感謝の台詞を、もう一度。この手の言葉は言い過ぎて困るものではない。思ったのなら、口に出すべきだ。

静かな機械の駆動音に、返答の意を感じ取り、笑顔がこぼれた。

良かった、と。無心でそう思えた。

「きみ、は……」

何やら言いたげなリンの声に意識を戻し、顔を向ける。

純粹な驚き。そう思える表情を浮かべながら、口を開こうとして、また嚙む。を、繰り返していた。

「……あ………気にすんな？」

疑問系の命令口調。

言いたい事は何となく分かるし、答えてあげたい気持ちもあるが、出来ればもう少し余裕のある時にやってもらいたい反応だ。

「……うん」

渋々、というよりは、仕方がない。と割り切つての返答。とりあえずの対処法としては最善であった、と思いたい。

「……で、だ。妖怪博士なリン様に、一つ、お聞きしたい事がありました」

バラバラになった死体に向けて、何かを呟く墨目を他所に、一番初めに見た妖怪……

と思われる特徴を伝えた。

人の頭。馬の体。鳥の羽に、黒と黄の虎柄表皮。通常の馬の倍以上はありそうだった巨体。魔的ではなく神聖さを感じられた雰囲気。一瞬だけ見た情報としては、結構特徴は掴めているのではないだろうか。

リンに伝え終え、自己満足の判断に及第点を下す。

「……それは、英招えいしやうかもしれない。妖怪ではなく、何処かの山の神様だった筈だよ。ひと翔けで五つの国を走破する、と聞くね。妖の者とは無縁の存在だったと記憶しているけれど、勢力を伸ばしていた大聖達に使役されていたのかもしれない……い……い……」

まさか、殺したのか？

そこまで言い切って、考えがそちらに至ったリンが、そう尋ねて来た。

「いんや、争ってすらおりません。……ああく……睚眦は英招に乗って来たって感じの、あの流れか。通りで孔明先生が切羽詰って『速い』って伝えて来る訳だ。……国の大きさが分からんけど、ひと翔けで国五つってどんだけ……」

そこで言葉を区切り、

「で、実際のトコはどうなのよ。ガ・イ・シ・サ・マ？」

リンの肩が大きく揺れる。いつの間にか、俺とリンの横には、墨目があり、それだけならまだしも、その背後には武具をズタボロにされた睚眦が、虚ろな瞳で直立していた

のだから。これでビビらん輩は、まず居ない。

墨目に指示し、これまでの経緯を暴露させる。

淀みなく、つらつらと。目の前に朗読用の文面でも用意してあるかのような。平天大聖が、昨晩に増援を指示した事。大多数の妖怪がこちらへと馳せ参じているのだという事。そして自分は、その中でも特に速い足を持っていたが為に、武勲を独占出来るものだと判断し、捉えた英招に跨り、飛んで来たのだという事。

(昨晩って……いつの間に……)

妖術か、能力か、伏兵か。五十万匹、百万の眼と。ほぼ四六時中張り付いていた「ムナイト」。更には蜀の軍師たる諸葛孔明にすら気づかれず——何にしてもあれの全てを把握出来ていなかった事実を突きつけられ、よくもまあそんな大物をやつちやえたものだと安堵して。

振り返り、背後を見る。こちらが油断している素振りをしていれば、何かしらのアクションを起こすのでは——【命取り】によって骸と化した平天大聖が、予想も使い方ですら仕掛けてくるかもと踏んで、警戒を続けていた……のだが……。

「……動かない、か」

もう、呻き声すらも聞こえない。既に巨大な体を【沼】へと半分以上沈み込ませている、黒く変色した牛が、一頭。後はただ沈むだけのタンカーのように、ゆつくりとその

姿を沈下させていつている。

「……」

嫌な気分だ。いつそ、とつと沈んで……視界から消えてくれれば、この鬱憤も晴れてくれるだろうか。

「墨目さん。あいつに潰されたりした……リンの……いや……。俺達の仲間の蘇生、お願いします」

墨目が一瞬で視界から消え、はたと気づいた時には、もう遠くの方に駆けていた。

「はっやー」

まず疾走など不可能な土地である【沼】など、彼女にとっては全く関係ないようである。軽々と悪路を走破する姿は、思わず見惚れてしまいそう。後数十秒もしない内に、平天大聖の死骸へと辿り着くだろう。

淀んだ空気を入れ替えるように、成すべき事へと意識を向ける事で、気持ちを切り替えた。虚ろな瞳で直立する睚眦を見て、恐らく、この地に留まっている限り、この手の刺客がちよくちよく訪れそうだと嫌な考えが脳裏を過ぎ、眉間に皺が寄った。

残りマナは4、カード枚数は3。体力的には水面に口を出す魚状態だが、最低限の維持をしてくれる腕輪で、沈没は免れている。便利なものだ。非常に助かります。

カード枚数なり残りのマナなり体力なり。色々な残量がそれだけあれば、巨大クリー

チャーの一体くらいなら呼び出せるだろう。

「……ツクモ」

と、腕の中から、恨みがましくも愛くるしい声。走り去る墨目から声の主であるリンへと顔を動かせば、そこには我慢ならない。と、おかんむりなネズミの少女。

……はて。一体何があつたのだろうか。理由は全く思い当たらないのだが、少なくとも、不機嫌であるのは間違いない。

「ど、どうした？」

これ以上話を進めなくなつたが、そももいくまい。

剥き出しの地雷源に自ら足を突つ込む心境を味わいながら、恐る恐る尋ねてみれば。

「——君は、あの方になんて格好をさせているんだ！」

「びっ！」

力も弱く、腰が入っていないとはいへ、それでもリンは妖怪だ。同じ体格の人間と比べれば、まあまあに腕力はあるのです。

それが、こちらの頬を目掛けて平手を繰り出した。

音がない。力の全てが打撃力へと変換されてしまい、俺の首を強制的に真横へと動かした。赤みは引いたとはいへ、数刻前に散々頬を張られた身としては、軽く触られるだけでも痛いというのに。

……まあ、月の軍神様の時と比べれば、大砲（120 m 榴弾）と拳銃（ゴム弾）ほどに差はあつたけれど、それでも、痛いもんは痛い。

よつて。

——ぷちっ

「理不尽だ！ あれは彼女のデフォだデフォ！ 俺の趣味じゃねえ！」

体力の限界も何のその。理不尽には理不尽で応えるべし。特にこれが、苛めがいのあの相手ならば、尚の事。

失ったものが戻りつつある現状に心が軽くなって来たので、沈みつつあつた気持ちを明るめるに定めた。

リンを支えていた片方の腕を外し、アイアンクロー宜しく、その小さな口を覆い隠すように、両の頬を摘む。むにゅー、と少女の口がひよつとこのようになり、それにも構わずリンが言葉を口にししようとするものだから、むーむーと唸る音としか判別出来ない状況に。

可愛いものだ。写メかデジカメはないものか。まあそんな文明の利器などあるわきゃ無いので、脳内フォルダに四枚ほど保存しておこう。動画込みで。

「——つぷはっ！ だとしても、もうちよつと気を利かせてくれてもいいじゃないか！」

がんばってこちらの腕を振り払い、話を切り出す。元々、今の俺の体力なんて、あつてないようなものだ。こちらの魔手を振り解くのは、とても簡単だっただろう。

「つて、待て！ 暴れんな！ 触れ合つてないと墨目さん還つちまう！」

ビクリ。こちらの言葉に反応し、リンがその動きを止めた。

その言葉は確定ではないが、半ば確信に近いものとして、自分の中では定めている。脳裏に走った情報では、接触中の全コスト（能力含む）は無制限というもの。使用する際や維持費の体力は持つていかれるけれど、完全フリーな使い放題、やり放題。

単発系の呪文なら全く気にする事はなさそうだけれど、これが継続効果の発生する……今で言うならクリーチャーの維持とかならば、今までの制限掛かりまくった経験が鎌首をもたげて思考にかかる。失敗フラグ、ノーサンキュー。

「……………えっ？」

「だから、今はそういう状態なのよ。……こっちの力にも色々制限があつてな。その内、お前に触れてる事で出来る事が判明しましたので、それを実行中な訳なのです」

こうして言葉にしてみると、胡散臭さ甚だしい台詞だ。俺ならまず信じないが、ここはどうにかして受け入れてもらわなければ。

「ああ、言つとくけど、お前の命を吸つて、だとか。そういった害は無いぞ？」

「……………どういいう理屈かは知らないけれど、別に良いさ。害があらうと無かろうと、この身

が役に立つのなら」

そう言つて、リンは覚悟の籠る悲しげな表情を作る。ええい、暗いなコンチクシヨウめ。それを見たくないから、この一件に加担したつてのに。

グリグリと、小さな頭を撫でる。不二家のペ〇ちゃん人形の如く、頭も動いておりません。

「い、痛いよ」

「知らん。我慢なさい」

強引に撫で回す。リンの肩で気絶している小ネズミが落ちそうになるのを、完全にリンの腕の中に落としてしまう事で解決。小突いて落としたのを慌てた様子でキャツチする少女に、軽く笑う。

「ちよつと時間は掛かるが、今、墨目さんがお前の仲間を蘇生しに行つてる。それが終わり次第、こつから離れるぞ」

怖いしな。と本音の弱音を付け足して、「メモナイト」に抱えてもらうよう指示を送る。自分の足が動けば言う事はないのだが。では一体、この脱力し切つた……スタミナ切れを起こしかけている体を、どうすれば短時間で稼動させられるものかと考えた。

——その、矢先。

『偽者です』

端的に届く、墨目の連絡。

勢いよく振り返れば、豆粒程度の獣人が、元来た悪路を逆走している。

——あの平天大聖が、ただただ朽ちていくだけ。など、どうして考えられようか。不安要素は極力削除。死体があれば、形を残さずデストロイ。お焚き上げか、粉微塵が好ましい。ゾンビやエイリアンに準ずるホラー映画のフラグは、塵芥と化するのがアンパイである。

しかし今回は、それを行う前に二転三転する状況に対応するのが精一杯であり、いざそれを成せる時間を得た時には、「鬼の下僕、墨目」の能力が判明した後。

プレイヤー兼クリーチャーであるここでは、死体となった平天大聖であっても、効果を発揮する。肉片となった睚眦が、こうして五体健全となり、無駄とも思える護衛に徹しているのが何よりの証拠だろう。死体に鞭打つ、をなお上回る行為にはなっただろうが、それは形が残っていて初めて出来る事。

それに、目と鼻の先……とまではいかずとも、あんな馬鹿でかい孤島に異変が起これ

ば、気づかない筈がない。もし襲われるとしても、すぐにコンボなり【シナジー】なりをお見舞いする算段はあった。

だが、どうだ。

(やつぱお前だよなあ！)

重圧。陸地から深海へと叩き落された感覚に似て、全身を襲う空気圧。周囲の砂地は四方へと飛散し始め……それはまるで、俺達を中心に砂漠が逃げて行くかのような光景であった。

その空間ごと閉ざされてしまうのではと錯覚させる状況に、一瞬で周りを確認し、「ッ、ですよねー!!」

残る視界。蜃気楼の如くぼやけ始めた上空を、確信を以って、仰ぎ見た。

子供の頃。空が落ちてくると思い、震えていた過去を思い出す。今の映像は、まさにそれ。途方もない大きさの何かが、辺りの空気を押しつけ、あるいは押し潰しながら、自由落下を開始していた。

「なっ!?!」

釣られて上を見たりんが、驚きの声と共に、硬直してしまっている。それはそうだ。段々と輪郭を顕わにする幻影の色は、白。ロードローラーだ! どころではない。巨大タンカーだ! レベルのぼやけた何かが、あまりの大きさ故にゆっくりとすら思える速

度で、こちらを二次元の生物に変えようと迫って来ていた。

(……コロニー落としっぽい)

散々常識外れを目の当たりにして来たというのに、まだまだ世界は驚きで満ち満ちているようだ。舞い上がる砂塵に目を細め、そろそろこちらに到達する墨目の必死さに、心が暖かくなる。我ながら、何とも卑屈な性根だ、とも思いながら。

何かをしなければ。でも、何をすれば。

そんな視線を向けるリンの肩に、ポンと手を乗せて。

「——任せとけ」

これで、三度目。けれど、今までで一番滑らかに出て来た、責任の言葉。

知略を巡らせるでもない。感情を読み解くでもない。運という幻影に挑みかかるでもない。

「邪魔だよな。あれ」

視線を、上空から落下するものへと向けた。ポカンと呆けるリンの表情が、堪らなく愉快な気分になんてさせてくれている。

だって。

(カード三枚だけ? マナが4しかない? ……余裕!!)

ただ、あれをどうにかすれば良いだけなのだから。

くたくたな体に、喜びと興奮の入り混じった熱が入ると、ほぼ同時。

——横殴りの暴風。万雷の嵐もかくやな爆音。視界を埋める閃光。それらが混在する現象で五感を消し去られる直前。

《ぐつ——ツ!?》

光学迷彩完備のメテオと化していた平天大聖の巨大な体が、強制的に真横へとずれ込んだ。

ものが宙に浮いているので、動かしやすいは動かしやすい。しかし、それを成すには一体どれだけのエネルギーが必要になるだろうか。幻影に着弾する幾筋もの雷光に眼を焼かれながらも、直撃コースから遠ざかりつつある妖怪に対して。

「……………あれ？」

……まだ、何もやっていないのだが。

盛大に空回ったやる気……振り上げた拳の降ろしどころを見失い。

「凄いいー 凄いいよツクモー！」

壮絶に勘違いされているリンと、いつの間にかこちらに辿り着いた——眼を丸くし、より一層の恍惚とした羨望を向ける「鬼の下僕、墨目」の表情のダブルパンチに對して、どう弁明をすべきか悩むしかなかった。

「——お久しゅう御座います。あの時以来ですかな」

温和な声。閃光の発生源と思われる上空から響くのは、つい最近、一時の間であつたけれど耳にした……とてもよく耳に馴染む中年の男のもの。

「ヴェラ……ッ！」

憎々しく吐き掛けるリンに肩を竦める異国の商人は、あの時は全く異なる衣装……神々の纏うそれとしか思えぬ風格と共に、未知の力で浮かぶ戦車……チャリオットのようなものに乗って、降下して来た。

彼の背後には、神聖の群……否、軍。妖怪の群れに負けず劣らず、多種多様な神聖を纏う者達が、天を埋め始めていた。

今度こそ【沼】へと没する平天大聖は、完全に下半身を黒に沈没させ、辛うじて上半身を覗かせる。一度目以上の泥津波は、どういう理屈か、何かに遮られるように二又に

分かれ、その威力を喪失させていた。

5 2 土地破壊

「あれ……ヴェラ、さん？」

「はい。御鼻肩にさせていただけます、ヴェラで御座います。これはこれは、何とも珍しい鉄馬にお乗りで。見目麗しい獣人のご令嬢もとは、肖りたいものですな。……数日ぶり、で御座いますかな。九十九様」

興味深そうに「メモナイト」を眺め、あの時の商人は、そう言葉を発した。

変わっているが、変わっていない。

態度や言葉遣いはあの時のままなのに、今、対峙する存在は、それらとは別格なのだと肌で感じられる。

何やら神々しい武具で身を包み、片手に拳二つ分程度の高さの宝塔を持ちながら、チャリオットから降車。砂漠の光が眩しいせいか、後光すら射している気がする。

「何の用だ！」

「これはご無体なお言葉ですな、リン様。これでも、あなた方のご助力を。と思い行動した次第。それ自体に他意はありませんとも」

それ以外には他意ありまくりなんです。分かります。

正直なのか、隠す気がないのか。多分両方だろうと当りを付けつつ、その〃行動した〃という成果——無理矢理軌道をずらされた平天大聖へと目を向けた。

《……あ……がっ……！》

ネズミ達に群がられていた時の再来か。

ただしそこに見えるのは、無数の小さな生物ではなく、幾人、幾体もの、神聖をまとった有象無象。先の光景が地面に落ちた蟬だとすれば、こちらは虫ピンで止められた標本のように。各々が手にした武器を白牛の体に突き刺して、その動きを完封していた。

「いやはや、並々ならぬお方だとは思っておりましたが、よもやここまででありましたとは。東の地とは、大聖すら下す豪傑達の住まうところでありましたか」

対象が巨大な白牛である刺繍作業を横目で見ながら、褐色の商人がこちらへと近づいてくる。空を翔ける戦車に乗り、天軍を率いている。そんな人物を、もはやただの人間であるなど思える筈がない。

「……あなた、何者？」

一言目の問いかけとしては何とも失礼な物言いであつたけれど、攻撃力を伴った警戒

心を表に出さないだけ、良しとしてもらうしかない。

「ふむ……やはりこの名は、そんなにも印象に薄いものでしたか……」

返答ではなく、熟考という形で反応を示すヴェエラに、状況が全く飲み込めず、沈黙に徹する流れになった。リンも苛立ちと憎々しい瞳を向けるものの、何も言わずに押し黙る。ひとまずは、状況を理解しようと感情を抑止しているようだ。

「——宝物神、クベーラ。主に地下に眠る資源を管轄しております」

唐突に、その正体を告げられた。

（クベーラ……クベラ……ヴェエラ……ああなるほど。そういう事か……面倒臭せえ）

偽名であったところのそれは、アナグラムどころか、殆ど直球の名前であったように。

ただ、生憎と俺にはその凄さがこれっぽちも分からない。何それ美味しいの？ 状態だ。

しかし、傍らに佇むネズミの少女は別であつたらしい。耳をピンとし、目を真ん丸に見開くリンが印象的であつたが、次の瞬間にはへたへたと、全身の力が抜ける様にこちらにしな垂れ掛かってきた。

「は……はは……なんて……お母様は……僕達は……とつくに……」

絶望一步手前だと理解するのは早かった。

元々小柄であつた体を包み込む様に抱き締める。やや強く……ともすれば痛みすら

伴う力加減であつたのだが、それに応えたのは、絶るような手。溺れるものが掴むのは、今回だけは蜘蛛の糸でも、藁でもなく、俺の衣類、ミシヤクジの外套であつた。

一方で、リンの反応に思うところがあつたのか、墨目の眼力が強まり、熱く暗い感情が流れてくる。睚眦を背後へと移動させ、次の瞬間には、挟撃し、首から上の部分を鉈刀の刃の上に乗せる算段であるようだ。

手を伸ばし、それを阻止。『何故止める』との、墨目の感情の矛先がこちらに向かうが、今しばらく待つて欲しい。

「……良い趣味じゃねえな。いや、良い趣味してるのか？ 絶望を振り撒くのが、この地のカミサマつて名乗つてる妖怪の流儀なのか？」

こちらの感情を読み取つたようで、ヴェラ……クベーラは肩を竦め、言葉を返す。

「心外ですな。このまま何もせず居た場合、ウイリク様の国は愚か、その周辺……あるいは大陸全土に及ぶまで、妖の者達の手中に納まつていた事でしょう。我らを信仰していただける方々の危機。そこに手を伸ばさずして、何が神でありましょう。ただそれも、簡単ではなかつた。こうして策を取り、何とか……というところでしたので。……まさか、こうした形で平天大聖を下す事が出来るとは、夢にも思つておりませんでしたのでな」

言っている事は最もだとは思ふのだが、そこには幾つもの言葉が抜けている気がして

ならない。

……とはいえ、過程は兎も角、結果的には目前の敵を排除してくれたのだ。

リンに……ウイリク様に対して行って来た事には苦虫を噛み潰す想いだ、ここは沈黙が得策か。

尤も、これが全て仕組まれていた事態であるとなれば……。

「……ま、いいや。……で？ そんな人間思いのカミサマは、こんな場所にまで何の御用でしょうか。生憎とこつちは色々と忙しいんだ。助けてもらったのは感謝しているが、そろそろいっぱいになって来る身としては、一刻も早い撤退をしたいんですけどねえ？」

「その懸念は、尤も。しからば、その後始末は我らで受け持ちましょう」
引き受ける……端から成果を横取りする気ではあつたようだ。

……ああ、何となく、道筋が見えて来た。

元々、クベーラは、妖怪達に戦争吹っ掛ける気であつたのだ。どちらが先かは分からないけれど、その過程にたまたま俺という不穏分子が混入し、それが思いもよらぬ要素となつたものだから、僅かでも相手を翻弄してくれるなら良しとし、今の今まで様子見に徹していたのだろう。

……リンの胸が貫かれた時ですらも。

(……いや、それは怒りを覚えるところじゃない……責任転嫁もいいとこだ)

自分の不甲斐無さを柵に上げての怒り。理屈では分かっているというのに、それでも怒りが込み上がる自分に、また怒りが湧き起こる。

しかし、それに身を焦がすのは、今ではない。無様な感情を、目の前の危機をチラつかせる事で切つて捨てた。熱が引き、飲み込める様になるその時が来るまでは、意識から外す。

「そりやありがたい。精々ウイリク様の国にまで影響が及ばないよう、気張つてくれや」
「……おや。本当に構わないので？」

やや尻を下げて、疑問の表情をクベーラは作った。構わないか、との疑問は……ああ。成果の横取りのな意味合いか。この地方の妖怪の王様っぽいのを倒したのに、本当に手柄は要らないの？ とでも尋ねているんだろう。

「……いらねえ」

全てコイツの手の平であつたような経緯になつてしまったのはかなり癪に障るが、凄さは知らないけど、神様とその軍隊。迫つて来ている筈の妖怪達を任せるには相応しいと思える。これからの事……面倒事を引き受けてくれるというのだから、それを利用しない手はない。

それに、折角あの馬鹿でかい白牛を拘束してくれているのだ。墨目の行う蘇生術は魂の固着だが、「鬼の下僕、墨目」による「リアニメイト」は完全な復活。ただしそれを行うには、一度、攻撃を加えなければならぬ。

「何千回斬られるんだか」

意図せず漏れた呟きを十全に理解するのは、俺と墨目のみ。他……リンもクベーラも、小首を傾げるだけであつた。

「ところで、九十九様」

ふと、何かを尋ねたい素振りのクベーラが。

関わりになりたくない思考がありありと浮かんだ顔をしていたと思うのだが、それに全く反応せずに、胡散臭い神様は言葉が続けた。

「この辺り一帯に、何か術式なりを施しておりませんか？」

「……ああ、あれか」

思い至るまでに少し時間は掛かったが、答えは間違いでは無い筈だ。

さすが無差別。「弱者の石」の効果は、神であつても例外ではなかつたようだ。

「ああ。徐々に……根こそぎ体力を奪うものが」

詳細は異なるが、もたらず成果は間違いではない。

困惑から一転。その表情を真剣なものへと変えた神様に、小さな優越感と、大きな緊張感を抱く。

これから重要だ。そう、漠然とした直感が働いた。

「……それは、解いていただけのものなのですか？」

「俺達やウイリク様の安全が確保されれば、な」

クベーラの温和な表情が、少し崩れた。僅かだが眉間に皺を寄せ、対処に困ると、その顔が物語る。

いい気味だ。実にいい気味である。

いい気味、で、あるのだが……。

(……うっし、セーフ)

ここで『では私達はこれで』など言われると、それはそれで残りのマナやらカード枚数やらを用いなければならず面倒なのだが、どうやらやる気は満々であったようだ。

まあ難関の一つであったらう平天大聖が既に無力化されている状態を、元々無かったものだ。忘れよう。と容易に切って捨てるのは難しかったようだ。少なくとも、今のところは。

段々と周囲に天の軍団っぽい連中が集り始め、俺やリンを始めとし、墨目や「メムナイト」へと、警戒の視線を向けてくる。

特にそれが顕著なのが、睚眦であろう。空虚な眼のまま、無差別の闘気を垂れ流し状態で、クベーラの背後に佇んでいる。

この地の妖怪だからか、認知度が高いせいか。天軍らの顔からは『えつ、何でお前が』という風な感情が読み取れた。

「……何を、お望みで？」

宝物神のこの言葉を切欠に、ただならぬ緊張感が辺りを支配する。もはや周囲を全て囲むように展開していた天の軍団は、事が起これば、即座に行動に移せるだろう。

弓で、槍で、剣で、棍棒で。後は何か、雷なり炎なり発光体なりを繰り出そうと構える、人やら獣やら。平天大聖を対処した存在として危険視しているのか、たかが人間と舐めているのか。

いずれにしても不快な状況に変わりはない。周りの熱とは裏腹に、こちらの内心は段々と冷えていく。

だが。

「――返せ」

クベーラの問いに答えたのは、俺ではなかった。

震える足に力を込めて、意識の飛びそうな状況にも、拳を握り込み、そこから赤い液体を垂らしながら。少し前まで絶望に打ちひしがれていた名残を引き摺りながら、それ

でも歩みを止めない、精神力。

「お母様が過ごす筈だった平穩を。慎ましくも心豊かだった国——お母様の環境を」
段々と。声高く。俯き加減であつた姿勢は正され、胸を張る。と言えるほどに、背筋を伸ばす。

「あの人が得る筈だつた、お前達が奪つたものを！ それ以外は求めない！ ただそれだけで良いんだ！ 神だろうお前は！ 散々奪つてきたものの、たった一つくらい返してくれても良いじゃないか！ それだけで良いんだ！ たつたそでだけで！ ……それ、だけ……で……っ」

けれどその声も、次の瞬間には失速し、最後は消え入るようなものとなつてしまった。しかし、姿勢は崩さない。流す涙はそのままに、何も恥じ入る事はないと凜と佇む姿は、ネズミ妖怪が。などと嘲笑されるそれではない。一国を統べる立場に居るような堂々たるものだつた。

言いたい事は言い終えた。段々と嗚咽の混じり始めたリンの呼吸音に反応し、墨目の殺気が、いよいよ零れんばかりに滾つて来ている。

揺れる瞳の、赤い鬼火。脱力する両腕の獲物が速く殺せと急くように、ぶらりぶらりと、一定のリズムで揺れ始めていた。

沈黙、沈黙、沈黙。

本当にここには多くの生命が集っているのだろうかと思いたくなる、静寂。

呼吸の音も、衣類の擦れる音も、武具が軋む音も、風すらも。耳がもげるような無音は、一体どれくらい続いたのか。

「——解りました」

運命を言葉にしたようなクベーラの回答に、大きく大きく、息を吐き出す。

元々体力がいつぱいいつぱいであつた俺としては、精神面での消耗も加われれば、眩暈の一つも覚えるというもの。

(……きつつ)

こんな力押し交渉の交渉モードキなどとつとと終えて、ぱつぱとウイリク様のところに戻り、さつさとハッピーエンドの土台作りを行いたいものだ。

忌々しげに獲物を降ろす墨目に俺が安堵していると、鳥つばい何かクベーラに近寄り、耳打ちをする。

こちらで言うところの八咫鳥の一種だろうか。色々と宝飾で着飾っているから神様よりの何かなんだろうが、一体何の聖獣なんだかサツパリだ。

「……ほう？」

声色からして、良くない事なのは間違いないようだ。

それを……俺の顔色を察したのか、クベーラがこちらへと顔を上げ、今知り得たであ

ろう情報を口にする。

「千を超える妖魔が押寄せてきているようですな。中には、他の大聖も混じっているとか。……先の雷撃を見たのでしょうか。独断行動は危険と……群が、軍となりつつある模様です」

大聖が混ざるのは予想外ではありませんが。そう締め括る宝物神の表情には、予定調和と記されている。

元より、牛魔王と同格と称される者達の相手はするつもりだったのだろう。というか、牛魔王自体を相手にする算段では、かなりの確立で考えていた事だろう。

まあそこに、平天大聖以外の大聖……『悪属性と闘おうとしたら火属性でした』的な差異はあるだろうが、何にしても高レベル帯の敵に挑む心積もりは、間違いなくあった筈だ。

……んじや、まあ。

「クベーラ。お前のさつき言葉、偽りは無いな？ 約束したのは私だけですとか、あの言葉はそういう意味ではありませんとか。……さつきの了解、その揚げ足を取るような真似でもしてみろ。——解るな？」

釘を刺すのなら、それなりの態度で行うべきだ。特にそれが、胡散臭い相手であれば、尚の事。

「……我が主神の名に掛けて」

「結構」

主神が誰かなぞ知らないが、重々しく口にした言葉であるのだから、それ相応の相手なのだろう。

しかし、我が事ながら、なんて偉そうな態度であったか。

客観的に自分を見れば、似合わないを通り越し、ウザつたい事この上ない。せめてそれに見合う人格者でもあればとは思おうが、今のところ、その域に到達する予定は、未定である。

《くつくつくつ……》

断続的な強風が、周りを翔け抜け、泥津波から辛うじて免れた砂地部分の土埃を巻き上げる。炎天下であっても生暖かいその風は、【沼】にその身を浸し、串刺し一歩手前まで陥っていた平天大聖であった。

「……すっげ」

あれでまだ生きていたのか。

破壊、再生不可、【お粗末】と【弱者の石】による弱体化。それに加えて、無数の聖属性武器による串刺し状況。それでもまだ笑みを浮かべられるという態度に、きつとあれは、死んでも直らない類の性格だと理解した。

《存外早まりましたが、それでもこちらには地の利がある。苦戦は免れぬでしょうが、それでも神々相手にならば……。それもまた、快楽になるでしょうねえ》

本当に瀕死なのかと疑いたくなる、流れるように紡がれた平天大聖の言葉に、妖怪の妖怪たる所以の一端を垣間見た気がした。

快楽を求め、拘束を嫌い、情性を拒絶し、強者を好み、命削る戦いに喜びを感じる。何ともはた迷惑な思考回路に、思わず目を覆ってしまうが、

(俺も、そんなもんだよな……)

全て、とはまでは言わないが、幾つか当てはまるものがある。先と同様、自分を棚に上げての一方的な拒絶は、もう少し冷静さを欠いている時にしか出来なさそうだ。

「おや、お早う御座います。平天大聖。このような形での相対となり恐縮ではあります。が、何卒、ご容赦の程を」

《クベーラ、と言いましたか。北の地を守護するものが、わざわざこのような辺境に訪れるとは。相当な粗相を仕出かした、と考えても?》

「浅はかなお答え、とても興味深い。これは単に、私こそがこの任に最適だとの考え故。他意はありませんとも」

《これは失敬。いやなに。全ての幸福が自らに起因するものとする神々に相応しい態度でありましたものですから。……漁夫の利、という言葉。ご存知で?》

「これは何とも。お恥ずかしい。まさかこんな形で大聖を統べる者が墜ちるとは思ってもみませんでしたので。予想外の事態には、対処も難しくあるもので御座います」

……言葉遣いは丁寧なんだが、『横取り乙wwww』の後に『お前弱すぎたからなプゲラwww』的なもののやり取りを見た気がした。妖怪達が向かって来ているのを分かっている筈なのだが、余裕なのか本当に忘れているのか、二人……一神と一体は、今しなくても良いだろう、という会話をしばし続ける。

(ああ、上空から降ってきたのって、妖術使ったからなのね)

会話の所々に不明瞭であった経歴が混入し、寝耳に水、な感じで情報を得る。

睚眦が襲来したのに合わせ、自身の外側だけの分身を作り、一度人型となり、宙に浮く。で、一定の高度に達した段階で実体化。後は持ち前の超重量に任せたストーンピングを慣行した、という感じであったようだ。

(妖術。パネエ……ってか万能過ぎ)

子供騙しの術が妖術ではなかったのですか。色の名を冠した、二尾の猫又様。

まだ誕生しているかも怪しい相手に愚痴を零しつつ、けれどこうして味わってみれば、その威力や効力は疑う要素が微塵もないほどに強力無比なチート級。

……というか、そもそもMTGというルールを従える俺がその手の事は言えないと思いい直した。ここはスルーしておきましょう。

「あんな不完全な隠遁では、我々の誰の眼も誤魔化させませんとも」

《こちらが空に上がるまで行動に移らなかつた者の台詞とは思えませんねえ》

何だイントンって。意味分からん。

どんな雰囲気が碎けて来ている錯覚に陥り始めた頃に、そこそこに緊張が感じられる、墨目からの念話が届く。

(……ああ、それ、俺が原因だわ)

力が戻りません、と。気づかない内に敵の手中に嵌ってしまったと思っていた墨目に、リンが持つ「弱者の石」の効力を伝える。言葉にならない微妙な感情が返ってくるが、こればかりは今のところ仕方がない。対処はするが、すぐに。となるかどうかは、クベーラ次第だ。

……しかしながら、そんな悠長な時間は、もう残っていないようである。

「ちよっ!?!」

口を突いて出た言葉は、音。単語にすらなっていない。

方向からして、妖怪の山……タツキリ山の方角か。土煙を上げながら疾走、あるいは飛翔する小粒な点は、大なり小なりの、異形。大聖達が統べる配下の妖怪達が進撃して来ているのだから。

「早過ぎじゃねえ!?!」

クベーラと平天大聖。互いに熱くなっていた部分はあるが、それにしても冷静さを欠いていたとは思えぬクベーラであったので、脅威がやってくるのはまだまだ先だろうと思っていたのだが。

(あ……)

そんな両者から零れる笑み。見る者を安堵させるような笑いを湛えたクベーラの表情に、本来ならば安らぎを覚える筈の顔に、しっかりと『してやったり』の文字を読み取った気がした。

「これは参りましたな。今からでは間に合わないかも……いえ。私めならば、この一団から脱兎の如く逃げ去る者には、並々ならぬ関心を向けますな」

……ようは、俺が迂闊だったのである。

クベーラの意図は無条件で「弱者の石」を解除させる事であり、今までくつちやべつていた平天大聖の言葉を加味すると、どうも他の大聖達に俺を確保させる気概があるようだ。天の軍隊相手にも勝てる！ と言っていたのを思い出し、ならば余力で。と考えるのも自然な流れか。

「お前ら敵同士だろ!?!」

今までのふてぶてしい態度を忘れ去って出た指摘の言葉は。

「さて。何のこゝとでありましょう」

《まさにその通り。そのお言葉には微塵も偽りなどありませんねえ》

絶対確信犯だ。どうしようもない感情がつつつと沸き立つのを感じながら、段々と迫り来る妖怪達を視界に捉えた。

既に、ある程度の輪郭も分かるほどに近い。

目測で、数キロだろうか。多少の高低差はあるけれど、地平線なのはありがたい。……のだが、比較対象が何も無いのは困ったものだ。何となく、でしか距離感が掴めない。

天と地を疾走する異形共に、ふと、場違いな懐かしさを覚える。

(この光景見た事あるわあ。有明の海にある特徴的な建物の辺りで。足の速い奴から段々と見え始めて、後から後続が物量で押寄せるんだ。凄いぞー。迫力が)

……違う、そうじゃない。

現実逃避しそうになった思考を引き戻すように、慌てて首を振る。

「そろそろ宜しくありませんな……」

と、何を思ったのか、クペーラが懐から赤い物体を取り出した。

……どうにもそれは、記憶に引っかかるものがる。具体的には色と形が。

何せ。

「……何、それ」

それ——赤い瓢箪をこちらに見せ付けるように掲げ。

「紅葫蘆（べにひきご）。呼び掛けを行い、それに答えたのならば、忽ちの内に内部へと取り込む宝具で御座います。そして、取り込んだ者の形を崩し、液状と化するもの。痛みはありませんが……まあ、あの平天大聖であれば、形を保つのでていっぱいとなりましょう。脱出など、とてもとても。事が終わるまでは、大人しくしていただける筈に御座います」

紅葫蘆、牛の妖怪、大聖。んで、この地方。

バラけたパズルのピースが、今、全て繋がった気がした。

「——牛魔王かよ!?!」

体力の低下も何のその。ビシッ！ と擬音でも伴いそうな……残った体力を掻き集め、水平チョップをキメるが如く、全力で右手を横に薙ぐ。ジャパニーズ合いの手、ツツコミというやつだ。

この仕草にはさしものクベーラや平天大聖も意味が分からないようで、両者それぞれ

れ、若干の困惑が浮かぶ。周囲の天軍も同様に。

関西の人間が見れば激怒必須であろう、コテコテの突っ込みモドキの再現は、ものの見事に空振りとなつたのであつた。

——牛魔王。

中国三大奇書の内の一つ、『西遊記』に登場する妖怪。齊天大聖……後の孫悟空と対峙する、大妖怪中の大妖怪。

その実力は定かではないが、真の姿は全長三キロをも超えるとか、超えないとか。先に見た平天大聖……牛魔王の姿は、少なくとも三キロには及んでいない。精々が、五百オーバーかな？ といった程度だと思う。

手加減した、という素振りは見受けられなかった。
なので。

(……ああ、だから呪いが云々……とか言ってたのか)

どうやら呪い……平天大聖曰く『中々に堪えるものがある』という【お粗末】の効果は、過去の神奈子さん同様、しっかりと現れていたようだ。

《あると分かつてい、どうしてそれに応えると思うのでしょうかねえ。どうやら神々は私が思っている以上に墮落したようだ》

「それこそおかしなお言葉だ。何故、そうも単純な事に我々が気づけないとお思いなのか。泥のような思考をするお方は泥に浸かるのがご趣味のようだ。ははっ、理解に苦しみますなあ」

つまりは、知らせる事に意味があつたのか、知っていても尚、不可避な方法があると言っているようなものか。

あれもこれも、彼らの思考……手の平から逃れられない錯覚に眩暈を覚え。

——それ以上に、こちらを弄ぶとしか思えない言動に、胸の底から沸き立つものを感じ取る。

(……全部全部、予定調和ですってか?)

何もかもが見透かされているような。折角集めてきた食材を、目の前で他人が食い散らかしているような。そんな錯覚を覚えた。

「九十九。みんなは殆ど撤退出来た。後数分あれば、全員離脱出来るよ」

「……はへ？」

何の話? と疑問に思いながら、リンの方を見てみれば、彼女の足元から去っていくネズミが一匹。体の大きさの割りに素早いものだ。小型犬並みのダッシュ力で遠ざ

かつていくちユウユウさんが視界に入った。

「——やるんだらう？」

その言葉に、数秒の沈黙。

リンの言う、やる、のそれは。

「——ああ、勿論」

怪獣大決戦。云十万の仲間達を撤退させた理由など、それ以外の何が考えられようか。

これに対して、クベーラや平天大聖は、その表情に疑問の色を貼り付けた。探るような視線に内心込み上がる笑みを噛み殺し、さて。どんなものが良いかと、逡巡。

「……ああ……でも、その前にやっぱ、聞いておかないとな」

リンからクベーラへと顔を向け直し。

「——クベーラ。お前は、俺の敵か？」

ただの人間とは思われてはいないだろうが、何処の馬の骨とも知れない相手から舐めた口を効かれた方の心中は、穏やかとは言い難い筈だ。

クベーラ本人は兎も角、それを耳にした天軍が殺気立つ。それを片手で制する宝物神に、多少は憤慨してくれたのなら気分は良かったのだが、それが肩透かしで終わった事実、内心溜め息を付く。

「——いいえ。こうして九十九様とのご関係を結べたのです。あなた様が我らに牙を向かぬ限り、それはあり得ません」

真剣な表情で言い切る褐色の顔は、一片の嘘など含んでいないと断言している。

もしこれが嘘であるのなら、もはやお手上げだ。素直に騙され——その後、即座に報復に移るとしよう。

「そっか……」

首を動かし、逆剣山となった平天大聖へと。

「平天大聖。お前は、俺の敵か？」

ただでさえ巨大な眼球が、より一層見開かれ、黒水晶の如き瞳に俺達の姿を映し出す。ここまで来て、何を今更。そんな感情が見て取れる。

しばしの間から、低い唸り声。それは苦しみや怒りといったものではなく、大地を揺らす、嘲笑。重低音のくつくつとした声はしばし続き、それがピタリと止まった直後。

《然り。我ら妖怪は九十九の敵。もし平穩を手にしたくば、タツキリ山全ての妖の者を打ち据えるがいい》

一切の淀みなく、そう言い切った。

【お粗末】で。【弱者の石】で。【命取り】で。そして天軍に全身を串刺しにされ尚、そうもキツパリ言い切られた事に、一種の清々しさすら覚えてしまう。気持ちいいとすら思

える啖呵を返されたせい、普段の言葉遣いは為りを潜め、変わりに出てきたのは、先にクベーラと相對した時の、それ。

「その心意気や良し！」

気分はどつかのお偉いさん。具体的には、文若先生の口調の一つ。高揚と怒りの混ざった感情に後押しされて、口を突いて出た言葉は、そのまま自らの行動の後押しとなった。

リンの手を引いたまま、踵を返し、その場に背を向ける。

「……何をすのおつもりで？」

警戒を強めるクベーラに、どう答えた方が良い……楽しいものかと考えて、目前に迫り来る危機であつたので、それすら面倒臭くなり。

「破壊」

返答すらどうかと思つていたけれど、一応は答えてやったのだ。実に分かり易い言葉であつた筈のだが、訝しむクベーラに説明不足の文字を読み取つた。

が、それを懇切丁寧に説明してやる義理はないし、したくもない。だからこそその、説明不足、なのである。

終わりの見え始めた道に、心なしか気持ちりが軽くなる。成功すれば、クベーラに苦い思いをさせ、平天大聖に一泡吹かせる事が出来そうだから。

さて、ではどうやってこの場から移動しようかと考えを巡らせる。

【恭しきマントラ】や【弱者の石】を使った成果を鑑みれば、あれを使えば十中八九、俺も巻き込まれる。というか、この一帯まるっと全て。

何せ、発動中心地点は俺なのだ。より効果的に行うのならば、なるべく数を巻き込む場所にまで移動しなければならぬ。

(足が居るな)

条件的に、速い奴。地形に左右されず、高速に移動が可能な……飛べる奴が好ましい。MTGのカードでならば、ここは【羽ばたき飛行機械】辺りが適切か。

ただ、そういった条件を満たしたいだけなのであれば、別に自分の力のみで解決せずとも良さそうなのが、この状況。節約出来るところは節約しておきたいものである。

「なあ」

「……何で御座いましょう」

丁寧さは崩さない、か。本当に神様なのかと疑ってかかりたくなる低姿勢だ。神奈子さんに爪の垢でも飲ませてみたい。やった瞬間にオンバシラ確定だろうが。

「飛べる奴貸して。速いの」

出来れば強い方がいい。

そう付け加えての、初めてのご入用を告げた。

「一応商人、だろ？　んで、お前は味方と来た。ありや出会った直後だったか。『勉強させていただく』って言っていたじゃないか。対価は払うぞ？　商品くれよ」

「そ、それは……しかし……」

それならば、今この場からも逃げられる。

自らの失言に対して、焦燥感に駆られているのがありありと分かる。協力すると言った手前、断固拒否の姿勢は取り難いのだろう。どうやって断ろうか。そう、クベーラの顔に書いてある。

と。

「うおっ」

視界を埋める砂塵。局所的な風圧。

これに対応して「メモナイト」がその姿勢を沈ませた。次の瞬間には、即座にこの場から離れる前運動だろう。手で遮り、目を閉じるか開けるかの間、ギリギリで見開かれた目から見えたのは、不恰好なキメラ様。

「……英招？」

ただしそこには、煌き、二つ。英招に纏わり付く黒い影と、そこから伸びる、銀色の

厚板。「鬼の下僕、墨目」が、英招に馬乗りになる形で背後を取り、二振りの刃を突きつけている状況であった。

英招を見ても攻撃を加えない「メムナイト」を見るに、今の状況は、俺にとっては全然なものであるらしい。

「墨目さん。ステンバーイ、ステンバーイ……」

両の手の平を彼女の前に。ここに台詞を付け加えるのなら、『ストップ!!』あるいは『それ以上いけない』である。

すると墨目は、残念そうに羽と首に一本ずつ添えていた刃を下ろし、元の立ち位置へと戻る。

途端、彼女の黒いマスクで覆われた口の奥から、舌を鳴らす音が聞こえてきた。冷や汗が止まらないんですが、こちら以上に脂汗を流している……ように見える英招に何故か同情し、静止せずには居られなかった。

「え、英招……様……」

《ほう。睚眦が傀儡と化した事で、守護する地の安全が確約されたとお思いのようだ。……しかし、こうして私の前に姿を見せた事は、端的に言って、愚策。でありましようねえ》

クベーラと平天大聖の双方が口々に言葉をもらすが、これ以上、外野に構っていられ

るものか。彼らの言葉を遮るように睨みを飛ばす墨目とリンだったが、前者は兎も角、後者は可愛いの域を出ないレベルである。現に、天軍の何名かが生暖かい目を向けている。この地の神様系の者は、妖怪に対しては嫌悪するのが普通だと思っていたので、その反応はちよつと意外です。

「ツクモ。英招、様、は、君に感謝しているそうさ。足になってくれるそうだよ」
神を嫌っている節の強かったリンが、取り繕うように、様付け。たどたどしい印象が目立つ。

「一翔けで、国を四つ……五つだっけか……兎も角、すつごく速いんだしたよね」
コクリ頷く中華風キメラに、言葉短く感謝を述べて、

「……すいません、屈んでいただけますか？」

その席の高さに、自力の到達は諦めた。大体、四メートルくらいか。毛や羽を引つ掴んでならば登れそうだが、それやったら痛いんだらうな。と、妙な心遣いが過ぎつた為である。

【ターパン】と初めて出会った頃を思い出す。足を折つて、半分以下になった高さの背に、リンと接触——手を繋いだまま、跨つた。

父親の気持ちつてこんななんだろうかと馬鹿な考えは、とてもじゃないが誰かの親になんぞ為れる経験値は積んじやいないので、鼻で笑つて吹き飛ばした。何か言いたげな

クベーラと平天大聖であつたが、これ以上言葉を重ねても俺達を静止する手段を思いつかないのだろう。沈黙し続けている。見守りに徹している天軍達を知り目に、睚眦と「メモナイト」に待機命令を。墨目にはいざという時の護衛も兼ねて、同乗を指示し。「期待させてもらいます」

睚眦という重量級な者を乗せても、妖怪達の中で誰よりも速くここへと来れたのだ。その速さは折り紙とお墨のダブルが付いているに違いない。

応えるように、一瞬にして高々と飛翔する英招に、何処か「ジャンプ」を連想しつつ、その翔けるべき方向へと指を向けた。

——ウイリクが収める国ではなく、妖怪達が押寄せる方角へと。

英招に乗る者以外の誰もが言葉を失った。

逃げるのではなかったのか。その一点のみが思考を生める中、英招は大地を蹴り、上昇。二度目に足を振り上げ降ろした時には、クベーラや平天大聖達から視認出来るか出来なにかの距離にまで離れ去っていた。

ドップラー効果によつて響き渡る男と少女の悲鳴らしき音もすぐに消え、一陣の風が吹くばかり。

「……こうなるとは予想外ではありましたが……あなた様が何か術を掛けたので？」

平天大聖へと尋ねるクベーラに、全身を串刺しにされながらも、そんなもの何処吹く風かと言わんばかりに、牛魔王は何食わぬ口調で答える。

《さて、どうでしょうか。そう願ひはしましたが……。とうとう私の妖術も、願うだけで叶うという域にまで達したのでしょいかねえ》

子供騙しの域であつた妖術を、大妖怪や神々であつても通用する域にまで押し上げ、行使するのが平天大聖——この、牛魔王という存在である。そしてそれは、彼が持つ能力とは、別。《妖術を操る程度の能力》とも呼べる力は持つが、筆頭ではない。術をかけてはいないが、素直に答えるのも癪である。既に今の平天大聖ではここから離脱する手段がない為、軽口を叩くくらいしか、今の平天には出来る事がないのであつた。

「そうですか。まあ、どちらでも宜しい。今からあなたには、これに納まつてもらいます

のでな」

実に温和な笑みと共に、取り込んだあらゆるものを溶解させる赤い瓢箪を掲げてみせる。

《おや。こんな事に時間を取られていては、あれがどうにかなってしまいますよ？》
空を翔けて行ったアレの方へと、平天大聖は目を向ける。

「構いませんとも。元より、何の期待もしておりませんでしたのでな。それが使えれば良し。使えないものでありましたら、無かつたものとして割り切れば、全て世はことも無し。で御座います。……それに、どうやら九十九様が行っていた呪いは、彼を中心として発動していましたようで。段々と負荷が取り除かされていくのが実感出来ます」

蓄積され続ける疲労に息苦しさを覚えていたが、それも、徐々に回復してきている。彼らにその詳細は分からないが、「弱者の石」が離れていった為であった。

「ですので、あなた様にはすぐに収まっていたかもしれません。あまり時間を取られて、また珍妙な妖術で姿を隠されては溜まりませんので」

《余裕がありませんねえ》

「あなた方に何度苦渋を舐め続けさせられた事か。インドラ様も心を痛めておいでだ。——大人しく縛に付け。貴様は滅ぼす事は適わぬ故……その身心、輪廻永劫、冥府に繋ぎとめてくれる」

成す術もない平天大聖であつたが、それでも浮かべる笑みは消え去らない。

油断なく周囲を見張る天軍と、クベーラ。それらを観察する睚眦に「ムムナイト」。

泥を被る白牛にその足を向けた宝物神は、ふと、ネズミの少女の行動を思い返し、九十九が零した言葉を連想した。

ネズミ達を撤退させた事。破壊をしようと云つていた事。そして、妖怪達の方へと飛び去つていた事。人間の国一つを安泰とするだけで、何の戦力も割かず平天大聖の対処を行えた事に意識を奪われ過ぎて、瑣末ごとへはあまり考えが及ばなかつた。

——その、結果。

(……太陽?)

クベーラは、それを見る。澄み渡る青空は一変し、まるで日暮れの光景を一部に映し出していた。

広範囲の青を侵食する夕日。赤と黒が入り混じる、世界の終わりを連想させる荒廃。ドロドロに溶けてゆくような景色に、祈りや危機を鋭敏に感じ取る神という種族故か、否応なく視界に入つてしまうそれに、恐怖とも、悲しみとも、怒りとも取れる感情が込み上がる。

世界が壊れた。

紅葫蘆を平天大聖に向け、九十九が飛び去つていた方向を見続け硬直するクベーラ

に、何事かと疑問を持ち始めた者から順に、そちらへと視線をやり……クベーラ同様、体
と思考を停止させる。

《……は?》

これには平天大聖も、素直に感情を顕わにした。世界が壊れてゆく現実を前に、いつ
の間にか幻術に掛かってしまったのではないかと思ひ直す。しかし、何度目を凝らして
も、心を諫めても、自我を強く意識しても、それが変わることはない。

血肉沸き立つ世界は望む所ではあるが、この光景はそれには含まれない。

あれは、無。

何者も存在せず、何者も存在出来ない、虚無の世界。

生など許さない。死など許容しない。明るい感情も、暗い感情も、何もかもを飲み込
む終焉であった。

『ハルマゲドン』

4 マナで、白の【ソーサリー】

全ての【土地】を破壊する。

平等を謳い、不平等を強いる【白】のリセットカードの内の一つ。これがデッキに含まれているか否かで、戦い方を変えざるを得ないほどのカード。単純明快にして強力無比なその効果に、使われた方は大概悶絶する。場合によっては、使った方も悶絶する。

本来のハルマゲンは、事象や現象を指すものではなく、聖書にてただ一度のみ登場した、土地（あるいは場所）の名前である。

遙か遠方であるというのに、彼らは見た。広大な砂地……妖怪達が進撃する中間部分から、目を疑う程の広範囲が沈下していく様を。

底など見えぬ奈落に並々と湛えられた黄砂が消え去り、ついだとばかりに、その上を移動していた数々の命を飲み込んでいく。空を行く者。飛べる者達は幸いであたったが、それ以外は――。

「やっぱ広範囲だなー。色々制限掛かっているから、*“全て”*って言う割には、文字通りじゃないだろうとは思ってたが……もう出番なさそうだな、これ」

誰もが息を呑む場に、感心の声色を伴った言葉が響く。クベーラや平天大聖を含む何名かがそこ——一瞬にして戻って来た、英招に跨った九十九や墨目、リンを見た。

興奮冷めやらぬ様子なのは九十九のみ。半ば魂が抜けかけている英招や、驚きに顔を歪める墨目と、呆れ、溜め息を付きな額に手を当てるリンであった。

「……てつきり【稲妻のドラゴン】のような、強大な式神を呼び出して蹂躪するものだと思ってたんだけどね……」

最も早く意識を回復させたのはリンであった。これまでの付き合ひにある程度の耐性が付いていた為、今回の目を疑う光景を前にしても、取り分け時間も掛からず心を戻す事に成功したようだ。

「【ファッティ】系とかでの殲滅も大好きなんだけどな。でも、それ維持し続けるのに体力使ってますよ。その点、あれなら一瞬だから。一時的にガッツリ体力持つて行かれるけど、それで終わり。継続消費は無し。呪文系の利点だな」

「もう何度目かも忘れたけれど、君の術は、幅が広すぎて特定すら出来ないね。一段落したら、それについては教えてくれるのかな？」

「あく……その点については、まだ何とも。ウィリク様へのご奉仕上乘せつて事でご勘

弁を。お姫様」

「……そもそも君は、協力してくれているという立場なのを忘れていないかい？」

周囲の刺さる様な疑惑の視線も、何処吹く風。どんどん会話を推し進める一同に、とうとう耐え切れなくなったクベーラが、おずおずと声を掛けた。

「——んで、だ」

——否。声を掛けようと近寄った段階で、九十九の方から声を掛けられた。

「ツ！………何か」

あれだけの光景を前にしては、さしものクベーラでも声色が硬くなる。手に持つ紅葫蘆をいつでも発動させられるよう構え、更には別の宝具を取り出す素振りすら見せながら声に応える様は、油断の文字は見取れない。

「ほらほら、俺の味方様。平天大聖の部下が壊滅状態になったぞ。——これで大分、楽

になるよな？」

「………ツ」

九十九は敵の数を減らした事で、追撃される可能性を減らしただけの行い………問い掛けであつたが、それはクベーラにとっては全く異なつた意味合いに伝わつた。

この程度なら、お前達でも全て対処出来るだろう？ と。紛れもない上からの視線で

あつたが、誰一人——あの平天大聖ですらも、それに口を挟む事は出来なかつた。

先程の一件。逃げ果せる気であった九十九達に対し、妖怪の群れを相手にしてクベーラは、取りこぼしが出て来てしまう可能性を告げた。

それへの回答が、妖怪達の殲滅——脅威の排除という単純明快な形で返って来たのであった。

万全に万全を期して——人間達に火の武器を与えてまでタツキリ山の攻略に望んだ……望まざるを得なかったというのに。

名立たる妖怪達相手に一方的な成果を上げた人間の反応は、通常ならば、喜びか、それに準ずるものであろう。

しかし、それにしては九十九の態度は平然とし過ぎていた。

おおよそ考えられる反応をせず、朝の散歩から帰って来ただけのような、いつそ朗らかとすら思える口調で言い切った姿勢に。

——ああ、これは見戯なのだ。

この時ようやく……平天大聖は二度目の確認を以って、思い知った。

全て偽り。全て嘘。あれが見せてきた間抜けな態度も、あれが取っていたふざけた仕事も、全ては遊びの範囲内であっただけ。あまりに強過ぎる力故に、自ら枷を負う事で、一時の怠惰を忘れようとしているだけなのだ。

でなければ、大地を消し去るといふ暴挙を、死を拒絶する行いにも……。文字通りの、

神をも恐れぬ所業の数々。それをこうも易々と実行した行動が理解出来ない。

妖魔を従え、死者を呼び戻し、大地を創り、強弱の一切を無視し、命を奪う。それも、たつた一瞬で。シヴァでも、カーリーでも、主神たるインドラであつても不可能だろう。それら事實は——平天大聖は、自らがただの井の中の蛙であつたのだと悟つたのだつた。

《——く……く……く……く……フツ……フツ……フツ……あーっはっはっはっはっはっ!!》

敵は——強者は、天のみにあらず。

それを嘯み締めた瞬間であつた。

《蛙、蛙か！ 他の誰でもなく、他の何にでもなく。この私が、この平天大聖が！

何と矮小な存在であつた事か！ 愉快！ 実に爽快だ！ 腸が捻じ切れてしまいそうな程に猛るではありませんか!》

狂つたか。そう思うクベーラや天軍達とは打つて変わり、九十九の反応は、係わり合いになりたくない。との表情が浮かんでいる。口にこそ出してはいないが、その口の形から、うへえ。と聞こえてきそうな程であつた。

(何か悟つちやつたっぽいなあ。何だよ蛙つて。お前は牛だろうに。……この手のボスキャラの特徴かねえ。メンドクセーですよこれ……。……二段変身される前に用件すませておかないと……)

逃げよ逃げよ。

そうボソボソと漏らしながら、九十九は英招から下馬することなく、呼び出したクリーチャー達へと指示を出す。天軍達に捕らえられている状態であれば、復讐や追撃フラグも無いだろうとの判断からでもあった。

「じゃ、墨目さん。〔メモナイト〕。後は任せた」

「お、おいつ、まだ何も……」

良いから良いからと。

九十九は強引にリンを言い包め、英招にウイリクの国を目指すよう声を掛ける。

言葉は、すぐさま行動に。抗議の声を上げる間もなく上空へと浮き上がった英招一行は、一陣の風と共に、この場からの離脱を成してしまった。

呆気に取りられる天軍を他所に、墨目は己が与えられた指示——これからの楽しみに胸を膨らませ、高鳴らせる。

向かうは白牛。泥沼と化したそこに縫い付けられた、平天大聖。リンを蘇らせた一連の流れは、クベーラも平天大聖も見ている。何をされるのかは、それぞれ自ずと予想出来ていた。

無骨な刃を研ぎ合わせ、鏢迫り合いの火花を散らす。そこにどんな意味が籠められているのかを察せられない者は、今この場に居なかつた。

《おやおや、因果応報という奴ですか。先は長そうだ》

「……拘束隊を倍に。全力で当りなさい。残りは予定通り、妖魔達の撃滅に向かいます。
——私は、これが終わるまで離れられなくなりました」

もう、限界だ。

墨目は平天大聖に歩み寄る姿から一変し、駆け足となり、跳躍。

その手に光る二本の獲物は、死者を生者に引き戻す為の血肉を求めて唸っている風にも見えた。

《本当に……先は長そうですね……》

潰した命は、さて。どれくらいであったか。

行った轢殺を思い浮かべながら、巨大な白牛の眼球に突き立てられる金属の刃を何処か他人事のように、平天大聖は眺め……視界が赤に染まった。

チュウ、と鳴き声一つ。

一度刃が振るわれる度に増えていく声を——愉悦を浮かべ自らを切り刻む獣人を見つめるのだった。

53 若返り

日も傾き始めて、しばらくしたら、西日が厳しくなるだろう。

湿気がない為、纏わり付く暑さでないのは助かるが、それもこの気温を前にしては、慰め程度の事実。身を焦がす暴力には抗えない。

——しくしく。しくしく。

だというのに、それも気にならないのはどういう心境か。

表面だけをソテーされ、中はしつとりのレア肉にでもなったような気分だ。

離れていても分かる程に炊かれた香のせいか、線香に甘い成分を付けたし、それを十倍くらいに濃くした……目の前の事実から目を背ける為に香る煙は、部屋の窓から、薄く、長く、外にまで立ち上っていた。

ウイリクが治める国の、ウイリクが住まう城。そういえば国名は聞いていなかったなと、どうでもいい感想を思いながら、初めて彼女と出会った時と同じような格好で、窓

枠……ではなく、部屋の上部に換気と明り取り用に作られた小窓から、室内を見下ろしていた。

城の最上部。屋根の上の一角。焼けるような石屋根に、それを気にする風もなく寝そべる英招と、全身の力が抜け切った状態で放心するリン。

そんな彼女は、膝を崩し、肩を落とす、頭を下げて、無表情を貫いている。咄嗟に中へと駆け出さなかったのは、あまりのショックでそれすらも出来なかった為であろう。

掛ける言葉がない。体に触れる事すら躊躇われる。例え、それに対する解決方法を持つていても。

足の下では、幾人もの煌びやかに着飾った者達が、大きな一つのベッドを二重、三重に囲み、涙を流していた。

大声を上げる者。静々と涙を流す者。

けれどそれも……それでも、分かってしまう程に、それらは偽りの仮面であるのが見て取れた。

反吐が出る、とはこの事か。思わずこのまま城ごと押し潰してしまいたくなる衝動に駆られてしまうけれど、それも今は耐えなければ。

【鬼の下僕、墨目】に、平天大聖が殺したネズミ達の蘇生を指示しているが、その数は膨大だ。今しばらく時間は掛かるだろう。しかし、それが終わればすぐに、こちらへと

やってきてもらわなければならなくなった。

「……英招さん。墨目……ネズミの獣人の用が済んだら、すぐこちらに連れて来ていただけますか」

のそりと起き上がった神獣の姿は、次の瞬間には消えていた。

突風が、後を追うように吹き抜ける。肌を焼く熱線が少し和らいだ気がした。

「……」

このままでもい続けるのは拙いか。

何処か自分を客観的に見ながら、諏訪の外套を外し、リンの頭部へと被せる。……が、反応は無い。

それでも、やらないよりは良い筈だ。そんな願望を胸に秘めながら、肌を焼く太陽に目を向ける。

城の上部へと目を向ける者などは居ないだろうが、仮に目を向けたとしても、元々白い城であったので、白い外套であれば、良いカモフラージュにもなるだろう。見つかったても困る訳ではないけれど、今は、そっとしてほしい。

微動だにしない少女に、普段なら気まずさを覚えていただろうが、リン程ではないにしろ、俺も彼女と似たような心境に陥っていた。

いつも通りの振る舞い……普段の「俺」に戻るには、今しばらく時間が掛かる。

どかりと小窓付近に腰を据え、室内からしくしくと響く喜びに耳を穢されながら、目を瞑る。

遙か遠方とはいえ、神魔が争い合っていた事など、夢のよう。ならばこの事実も、もしかしたら次の瞬間には露と消える幻なのではないか。

……現実逃避は好きだが、それが逃げ切れぬものだとは分かっていてもし続けるのは、馬鹿馬鹿しく、虚しいだけだと思ひ知る。それでも思わずには居られないのは、生き物だからか、心が弱いからか。

——ウイリクが、死んでいた。

小窓から覗くベッドには、安らかにとは言い難い……心残りが読み取れる寝顔を浮かべた女性が一人。

大地を焦がす熱量も、今この時、沈み、冷め切った心には有り難いものなのかもしれないと思つた。

ずっと握り続けている少女の小さな手が、やけに……冷たい。

ここを飛び去った時に見た星空は、今も変わらず、この頭上に輝いていた。

吹く風は肌寒く、焼け付いた土屋根の熱が今は暖房効果を發揮中。設置面をやや多めにして熱を吸収しながら、寒さから逃れるように身を縮めた。

ウイリクが眠る部屋には誰も居らず、周囲を蠟燭のような火種が幾つか囲む程度。数刻前まで悲壯を演じていた者達は、今頃、転がり込んだ幸福の篡奪に、目を輝かせながら取り掛かっているのだろう。

「ハルマゲドン」を使った方角へと目を凝らす。

そちらからは何の違和感も感じ取れない事に、あれだけの大規模な破壊を行っても、離れてしまえばこの程度のものなのかと、世界の大きさと、自分の小ささを感じていると。

「……おかえり。どうもありがとう」

「ありがとうございます」

リンと俺の労いの言葉に、コクリと頷くのは「鬼の下僕、墨目」。

身軽なものだ。殆ど取っ掛かりの無い城の上部であっても、木登りをする猿のような軽快さでこちらの横に並び立つ墨目の両手には、人間大の布の塊が抱えられていた。両の手が塞がっているというのに、素晴らしい機動性である。

日が沈み切ったと同時に、呆然としながらも意識を戻したリンは、ウイリクに対する蘇

生を言葉小さく、けれど捻り出す様な口調で懇願した。

断る理由など皆無であったのだが、それでも、問題が無い訳ではなかった。

それが、ウイリクの死因。早い話が、老衰だ。

こちらが出来る事は、魂を現世に固着させる事と、肉体を回復させる事。……そこに、老化の防止は含まれてはいない。

——と、黒い影がリンの肩を登る。

どういう訳か、「鬼の下僕、墨目」の【忍術】によるコストに用いた投擲ネズミ様は、俺達に同行し続けている。

好奇心旺盛で、ややおつちよこちよい。短い付き合いだ、そんな印象を受ける。

移動中、英招の体の上を走り回り、彼が嫌そうにしていたのだったか。何度か墜ちかけていたけれど。

そんな小さな冒険者は、口に小さな布袋を咥えている。小さいといっても、それは俺からしてみれば。であって、コイツにしてみれば、等身大のものを運んでいるような大きさだ。

墨目を消す訳にもいかず、けれど城の内部に忘れ物があるとの事だったので、リンがこいつに回収を命じて、こうして無事帰還したのだった。

それが何かは知りたかったけれど、自分から言う気はないようで、ならば無理に聞く

ものでもないかとスルーしている。

チュウチュウと鳴き、リンに情報を伝えているのは理解出来るのだが、それが何かまでは分からない。

「どう、だった？」

「無事に。……簡単なものだね。誰もが皆、これから訪れるだろう幸福に目を輝かせていたよ。警備なんて、有って無いも同然だった……そうだ」

表情の変化は読み取れないが、心なしか傲慢そうな態度の小ネズミが目に入る。

幾ら小さい侵入者だとはいえ、どれだけ警戒がザルだったのかを感じ取った。

「……滑稽だ。お母様が一生懸命に周辺国との軋轢を生まない様に、豊か過ぎもせず、貧困に喘ぐ訳でもない綱渡りの政策を続けて来たというのに。これで、今こちらに戻りつつある……壊滅した軍隊を見たら、何と云うのかな。自衛に徹するならそうも問題は起こらないだろうけど、豊国を求めたが最後……ああ、いや。まさに最後になるだろうね。この国の民は、贅沢を知ってしまったから。決して短くない間、彼らを見続けてきたけれど、自制は適わないだろう」

感謝と共に、小ネズミの唾えていた小袋を受け取り、それを懐へと仕舞い込む。

顔を動かし、夜景となった町並みを見下ろし……見下しながら。

「——守る力も無い状態で、貪欲に利だけを求め続ければどうなるか。……尤も、それ

でなくても今まで財を溜め込んできたんだ。これから否応なく、同族の欲望を味わう事になるだろうさ」

一応は、俺も人間。それらの危険性や業の深さは、簡単に思い浮かべる事が出来た。背筋の凍る言葉である。

「……おー怖い怖い。こちらの小さなネズミ妖怪様は、他人の不幸がお好きなようだ」

「何言ってるのさ。そういうのは人間の独壇場。彼らに勝てる種族なんて居やしないよ。僕達が原因みたいには言わないでほしいね。……元々彼らが持っていたものだ。それを抱いたまま溺死するだけなんだから、何も怖いところなんて無いじゃないか」

何も言い返せないし、言い返す気もない。それだけが全てな人間ではないけれど、リンの言った事は、実にその通りだと思えたから。

にんまり笑う姿に、釣られるような自嘲の顔を浮かべた。

「ははっ、そりやそうか。これは失礼致しました」

「うむ。分かってもらえて嬉しいよ」

一体何のやり取りなんだか。

芝居がかった態度を改め、ほぼ座りっぱなしであった屋根から腰を上げる。

尻の辺りがむずむずする。やはりというか当然というか、結構長く座っていたので、色々と固まってしまっていた。

座り込むリンを引つ張り上げる形で、手を取り、自分の腕に力を込め、立たせる。軽い。当人が立つ意思があるからなのだろうが、然したる抵抗もなく、少女は軽やかに立ち上がった。

「……じゃ、行くか」

声は無い。コクリと頷くリンと、荷物を抱えながらその横に並び立つ墨目。いつの間にか、小ネズミもリンの肩に乗っていた。

二人の奥で厳かに佇む英招に、それぞれがよじ登り、あるいは飛んで、騎乗する。

「墨目さん、落とさないで下さいね」

『御意』、と。短い返答であったが、力強い意思を感じる念話であった。

全員がしっかりと乗り込んだのを確認し、英招が宙に浮き、空をひと蹴り。

能力か、妖術か。殆ど重圧を感じない加速度に違和感を覚えながらも、瞬く間に視界から消え去っていくウイリクの国……であった場所は、もう、光の粒の集合体にか見えない。流石にひと翔けで国五つ分、というのは誇張であったようだが、この分なら、数分以内には目的地に着く筈だ。

落とさないよう、全く姿勢を崩さずに居る墨目が大事に抱えるそれは、一つの亡骸。王女、ウイリクの遺体。

この国の……城中が確実に混乱はするだろうが、構うものか。リンも居ない。ウイリ

クも居なくなつた場所など、知つた事ではない。

目指すは、地下。ネズミ達が暮らしているという、ダン・ダン塚と呼ばれる地帯。

月明かりに浮かび上がる、目まぐるしく変わる夜景を漠然と眺めながら、無言の時間はしばらく続いた。

ネズミ達が住む塚……国というからには、暗かったり、狭かったり、湿つぽかったりと、人間が住まう条件とは対極の環境なのだとは思っていたのだが、思っていたよりは悪くない。

砂漠地帯の一角。岩の群れ。そこに、日光から隠れるようにぽっかりと空いた穴は、大体七くハメートル四方の中々大きなもの。スライムやらミノタウロスやらが出て来ても何ら可笑しくないダンジョン具合。

場所が場所のせいか、英招さんはお留守番。中に入るのは極力避けたいとの事。潔癖

症かと思いましたが、本心はどうあれ、その辺は神様だからと思うことにして、納得する事にした。

日も暮れ、辺りの気温が下がり過ぎていている為か、中は生暖かい空気で満たされていた。これが昼間であれば、きつと冷たく感じるのだろう。

お世辞にも臭いが宜しくない事だけが難点か。まあずっと居る訳ではないのだ。他人の家に来ていてあれだが、用事が終わったらとつと離れる事にしよう。

「滑るから気をつけて。……と、ツクモだけなら助言しようとしたんだけど、それも必要無さそうだね」

カツカツと、硬質の清んだ音が洞窟内に木霊する。岩石と金属の奏でる音楽は一定のリズムで鳴り続く。しばらく終わる事はないだろう。

というのも、リン、墨目、俺の三人は、「ムムナイト」の上。入り口付近で待機していたムムさんに乗り……乗せられ中なのである。

【今田家の猟犬、勇丸】の1マナ。【鬼の下僕、墨目】の6マナ。今も腕で淡く輝く、月で貫つた腕輪が無ければ、とつくの昔に気絶していた筈だ。

熱いと温いの境目の微妙なむず痒さを手首に覚えながら、喋るだけのお人形になったように、最後の一線……の三步くらい手前で、何とか意識を保ち続けていた。

という事で、極力消費を減らす為、リンに預けた——彼女が懐に入れていた「アー

ティファクト）、【弱者の石】は既に消してある。【アーティファクト】が他より消費が少なく、更には1マナであるとはいえ、それでも気になるもんは気になるのだ。

半分以上リンに体を任せているプチ介護人状態であり、今後に危険が無さそうな事も相まって、今更ながら羞恥心が襲い掛かる。

ただ、疲労に勝る感情ではなかったようで、心の中で『あく……ハズい……』と眩く程度の域に収まっていた。それが少し、ありがたい。

ウイリクを抱える墨目は、最低限の注意を周囲に払いつつ、同胞の歓迎に微笑みで応えていた。意外な一面を見れた気がする。

と。

狭い……【MEMナイト】からしてみれば何とか通れる洞窟内を進み続けて行く内に、しわぶきにも似た鳴き声が耳に入り始めた。

何の事は無い。ここはネズミ達の住処。住人が現れたからといって、何を驚く必要があるものか。

(……なんて考えていた時が、数分前までありました)

ようは、程度の問題。具体的には、数である。

二、三匹なら可愛いもので、十、二十ならば賑やかに。けれど、それがどう見……えはしないので、どう聞いても百は超えているネズミ達の大合唱を前にして、げんなりす

るしかなかった。

数日間、彼らと一緒に過ごしていたので恐怖とならなかった事は、経験値でも稼げていて、レベルアップなんぞ果たしていたのかもしれない。

思い出したように月光が差し込み照らす洞窟を進み始め、どれくらいの時間が経ったのか。とうとう、視界の奥に光を見つけた。

生気の抜けた瞳の龍人、睚眦の姿も見える。どうやらあそこが目的地のようだ。

「メモナイト」が辿り着く。そこは、今までの道程が嘘のような……ダンジョンから神殿に迷い込んだような場違いさであった。

直径、大体五十メートルくらいか。円柱状に開けた空間には、さっきまでの籠った空気はない。どうやら、常に新鮮な空気が入り込んでいるらしい。肌に冷たい風を感じる。

四、五階建て分はあるんじゃないかと思える高さの天井から降り注ぐ月光と星の光。それらに照らされ、周囲の壁やら地面やらに生息している苔が淡く光っていた。

特に何がある訳でもないが、この中央に神などが居ても、全くの違和感を覚えないうろうろ。

きつとここは、彼らネズミ達にとって神聖な場所なのだ。それが証拠に、今までこち

らの足元ではやし立てる様に騒いでいた彼らは、この場所には一步足りとも入っては来なかつた。

「ここが、彼らの住処の中で最も清潔な場所だよ。これ以上となると、地上に求めるしかないかな」

「充分じゃないか？ 俺は何とも思わないぞ？」

「君の大雑把な感性じゃあ、お母様には当て嵌められないよ」

「うわひでえ。一切否定出来ないところとか、特に」

「……それはどっちが酷いんだい？」

俺が酷いのか、リンが酷いのか

どっちでもいいかと——俺が酷いのなら良くはないのだが——曖昧な返答で濁し、「メモナイト」の上から降り立った。

リンに支えてもらいながら足を着けた地面は、滑るような事もなく、しっかりと摩擦が存在している事を伝えてくれる。

並び立つ睚眦に、俺もリンも複雑な心境になるが、仮にも今は護衛としてやっているのだ。心を砕く事こそ行わないにしろ、嫌悪しすぎるというのも宜しくはないだろう。

中央よりやや離れた場所に陣取り、墨目に、ウイリクを置くよう指示を出す。

「ツクモ……」

不安気に揺れる瞳に、ぼんぼんと頭を二度叩く。耳と毛の感触が心地良い。

大なり小なりの円柱の空間に空いた穴から、無数のネズミ達が顔を覗かせ、見つめて入る気はないようだが、立ち去る気はもつと無いようだ。それが証拠に、後数分もすれば、隙間という隙間は彼ら、小さな命達で埋め尽くされる事だろう。

月光の白と、苔の緑と、瞳の赤が混ざり合う空間に、深呼吸を一つ。

体力的にはダルい事この上ないのだが、これから行う事を考えるに、座ったままでは誠意に欠ける。

【濃霧】【お粗末】【沼】【暴露】【死の門の悪魔】【命取り】【鬼の下僕、墨目】【ハルマゲドン】。今回用いたカードは、これが全て。それ以外は以前より出現させていたものなので、今回のカウントからは除外。

それも後数時間で全回復するだろうが、現状では、マナは全て使い切ってしまった。けれど、カード枚数は、残り二枚、使用可能。【暴露】に類似した【ピッチスperl】なり、ゼロマナのカードなりを行使する余裕は残っている。

——これから使うのは、ゼロマナのカード。

過去用いたノーコストカードは、【土地】という特殊なタイプを除外すれば、【羽ばたき飛行機械】と【メモナイト】だけであったか。

それらの類似点は、「アーティファクト」であるという事。今回用いるものも、それに部類される。

（ちやんと大きさを把握してる訳じゃねえが、そうもデカくはなかった……よな）
狙い目は、広場の中央。

憶測の効果範囲内には、誰も居ない。

「——召喚、【若返りの泉】」

あらゆる生命の目指すものの一つ。誰もが一度は望み、そして諦めた願望を。

『若返りの泉』

ゼロマナの【アーティファクト】

2 マナを支払い【タップ】する事で、所持者のライフを1、回復する。

ノーコストで召喚可能な為、序盤のテンポを失わずに出せるのは中々の利点。後半で余りがちになるマナを活かし、長期戦向けのデッキに組み込まれる……場合もある。

それは意外にも、こじんまりとしたものだった。

五メートルには届かないだろう幅の円形の縁に並々と湛えられた清水。その中央には白亜の獅子が、口から滾々と吐き出していた。

水が水を叩く音が絶えず聞こえるようになり、子供の頃に遊んだ噴水のある公園を思い出す。

「墨目さん、お願いします」

横を通り抜け、手に持つ人間大の布を、静かに泉へと沈める。

大人の膝をやや超えようかという水深に完全に没する形となり……道中、決して見ようとしなかった亡骸が顕わとなった。

水の影響で、花が咲くようにシルクに包まれた遺体が露出。その表情には当然ながら、数刻前に見た頃と変化はない。

それをまじまじと観察する間もなく、墨目は眼を閉じ、祈るような仕草を取る。

しかし、それも然したる時間は掛からなかった。

——固唾を呑んで見守る中、物言わぬ抜け殻と化した老婆の目が、薄つすらと見開かれたのだから。

声にならない声を噛み殺すように、口元に両手を当て、叫び出したい衝動を懸命に堪えるリンを横目に、事態の成り行きを手に汗握りながら見続ける。

ただ、人は息を吸わねば生きてはいられない

まどろみから懸命に意識を戻し、水を掻き分け上半身を起こすウイリクは、何が起こったのかと状況を判断するよりも、肺に一生懸命空気を取り込む事に尽力していた。

もう、耐える必要は無い。感極り駆け出すリンに、

「あ」

俺の口から、そんな言葉が零れる。やれやれという風な表情を浮かべながら霞んでいく墨目に、『このお礼はいつか』と、ジェイスに続く二人目の恩人に謝罪と感謝の意を述べた。どうやら、召喚は元より、維持中であつても接触していなければならぬという懸念は正しかったようだ。

送還ギリギリに意思疎通を食い込ませた形となつたが、しつかりと届いてくれただろ

うか。特に墨目はリンに対して、俺以上に気に掛けていた節がある。不安な思いはさせたくない。

しかしながら、ジェイス……「ブレインズウォーカー」と比較すれば、二度目のご対面はすぐに訪れるだろう。

脳裏に叩き込まれたスキル説明には一度目以降の召喚は禁止されていなかった筈なので、色々と回復した……日が明けた頃に、もう一度招くとして。

「お母様っ！ お母様っ！——お母様ッ！」

応える声すら上がらずに、ただただ娘の抱擁を困惑と共に受け続けるウイリクであったが、ふわりとその頭部を撫でる手は、しつかりとしたものだった。

全身びしょ濡れどころか、今も沐浴中な状態ではあったが、それを気にするリンでもウイリクでもないようだった。

「……って、あ、それヤバいか!? リンさん離れて！ 特に液体に触れないように！」
もし。の可能性を考慮して、即座に声を飛ばす。

一応は届いたようだが、二人がその体を離すまでには、やや時間が掛かった。

名残惜しげに距離を置く両名に変化の見られない事を確認し、ふうと一息。とりあえずは問題ないようだ。

「……あなた、は」

「はい。お久しぶりです、ウイリク様」

視線の定まらない時間が続くが、彼女の境遇を考えれば仕方のない事だろう。現状を飲み込むのにも、しばらくの時間が掛かる筈だ。

リンや俺だけならばそうも問題ないだろうが、周りには龍人の睚眦やら、壁面から覗く無数の赤い眼光だったりとかいった恐怖がオンパレードなのだから。

ウイリクの元へ近寄り、これまでの流れを大雑把、かつ簡潔に話す。

平天大聖を下した事、国の軍隊をほぼ不殺で壊滅に追い込んだ事、神様相手に恩を一つ売った事。

そして。

「……そう、ですか」

怒り……は見受けられない。

悔しさと悲しさと。辛うじて喜びを示しているのは、リンが目の前にいる為か。……

リンが居なければ、静かに泣き崩れてしまうような印象であった。

「こんなお婆ちゃんの為にそこまでしてもらって……。……けれど、ご免なさい。……

私は……。ご期待に応えられそうにないわ」

そう言つて、自らの手をマジマジと見つめる。

細く、やや歪に曲つた骨と皮は、彼女のこれまでの歩みを——どれだけ生き長らえてきたのかを宿している。

自虐的な笑みに、リンが今にも泣き出しそうな顔を浮かべた。

理由は分かる。こちらとしても、それが最もな懸念材料だったのだから。——だからこそ、それを対処する方法なくしくて、安直に希望を奪い去るような事などしてたまるものか。

「ご懸念は充分に。ですので、それ無くしてウイリク様を起こす真似はしないよう、こうして水に浸かつて頂いている訳でして。……思つたよりは効果を發揮するまでに時間を要するようですが」

ウイリクの細部を見ながら、効果が現れてくれて良かったと、内心で胸を撫で下ろす。

どうやらこの泉、生きている状態でなければ効果を發揮しないらしく、それもすぐさま。とは、いかないようだ。

「……う？ それは、どういう——」

「こういう事さ、お母様」

楽しそうに母の手を握り、再び視界に収まるよう、掲げる。

疑問に思いながらも再度自身の手を見るウイリクであったが、毛が生えてきたでも、

白く輝きを放つようになった訳でもない、何十年と共に過ごして来た体の一部が映るの
みで、リンの意図するところが読み取れずに居た。

「よく、見て」

優しく諭す口調に従う形で、ウイリクはしばし、自らの枯れ枝の如き手を見続け――
。

「――まあ」

呆けるように、一言。

その声色には、一日千秋の思いに似た熱が籠っていた。

「……まさか」

驚きを隠す素振りもせず、こちらへと顔を向け、ウイリクが尋ねて来た。

「はい。お考えになつている通りかと」

変化は些細なものではあるけれど、何が起こるのかを予想出来ていれば、目を凝らす
べき場所は自ずと限られてくるもの。

泉に浸り、これで何分くらい経つたのかは覚えていないが、砂漠に染み入る雨の如く、
乾いた肌が段々と潤いを持ってゆくのが分かる。

「神様を味方に付けた……。というお話は、本当のようですね」

どつちかといえは脅した……。少しニュアンスが違う気もするが、まあいいか。今はそ

れよりもやりたい……聞いておかなければならない事がある。

唾を飲み込む。液体である筈なのに、飴玉でも放り込んだような硬さを覚えた。

リンもこちらと同様、喉を鳴らし、息を呑むのが伝わって来る。自分だけではないのだという仲間意識に救われながら、よし。と内心で活を入れ、切り出した。

今後はどうするか。

最もリンが重要視する案件を。

「ぶへえー……」

もう、取り繕う必要もないか。

勝手な自己判断の末の回答は、全身の弛緩。【鬼の下僕、墨目】を還したとはいえ、疲労の回復には今しばらくの時間が掛かるようだ。

「ご免なさいね。年寄りの長話に付き合せてしまつて」

困り半分、申し訳なさ半分の口調で言うウイリクであったが、俺が緊張していた面は

そこではないので、要らぬ心配である。

……というか、だ。

「ご冗談を。ウイリク様、ご自身のお体をもう一度見ましてから、先の台詞を再び言えるかどうか判断してみると面白いかもしれませんよ？」

もったいぶった言い方での返答に、その意図を察してくれたようで、苦笑という形で反応が来た。

ウイリクが蘇ってから数十分。彼女は未だ、「若返りの泉」という浴槽に浸かり続けている。

スローモーションな進展具合ではあったけれど、彼女の体は徐々に若さを取り戻し中。骨と皮であった腕も今では適度に肉付いており、後……一時間位……だろうか。それくらい【若返りの泉】の中で過ごせば、女性の全盛期を取り戻せるだろう若返り具合の進行状況であった。

「もう、国を統べる立場でもないただのお婆……いえ、女ですもの。リンや友人に話すようにして下さっても宜しいのよ？」

「その辺りはちよつとご勘弁を。現状ですらとつてつけたような丁寧語で恐縮なのですが、何というか、その辺りまで緩める気分にはなれなくて……」

「立場としてならば、私以上……何倍も上の方々をお相手にされて、勇ましくあられたの

でしよう？ なれば私相手に礼を尽くす必要などないでしように」

「勇ましいいつて……」

輝かしい武勇伝というよりも、力押し一択な面が強かったあれやこれやの行動を鑑みて、スルーすべきか訂正すべきか逡巡。前者を選ぶ事で、事無きを得る、を選ぶ。

次いでだ。話題も変えて、より、事を無きにしておこう。

「じゃあ……国へは戻らず、リンと暮らす。……という方針で良いでしょうか」

コクリと頷くウイリクには、これから訪れる幸福と、積み上げて来たものが崩れ去ってしまった寂しさが窺える。

女王としてではなく、一人の母親としてだけの生活があつたのなら。

夫を支え、娘を愛し、家庭を築く。ifの可能性を夢見ながら、それは叶わぬ道だと虚しい絵空事に何度かぶりを振った事か。

傷ついても、老いても、孤独となつても自らに定めた意思を遵守して、命を燃やし尽くした気高き者。

けれどこうして、究極的な終わりを迎えてしまえば、それらに対して諦めも着くというもの。

死は絶対、死は不可避、死は終焉。死とはあらゆるものに対する、最たる区切り。

……とはいえ、それでも彼女は国に全てを捧げていたのも事実。それをそう易々と、

今まで根幹であつた気持ちの切り替えなど出来よう筈もない。

悲しみ半分、幸福半分の、何とも人間らしい……共感の持てる儂げな表情を零しながら、不安と期待の入り混じる愛娘の視線に、微笑を以つて応える様に、安堵と、胸を締め付けられるような思いがチクリと刺さる。

本当ならば、彼女の夫も。……そう言えたのなら、どんなに幸福な事だつただろう。

俺の知る死者蘇生術は、大まかに部類して、三つ。

一つ目。

俺の墓地……具体的に何処かは知らないが、そこに落ちたカードを使用可能な状態に戻す場合。

これはカードの力を用いて、墓地から呼び出す「リアニメイト」に該当する。恐らく最も蘇らせやすく、コストも低いだらう方法。

二つ目。

魂の去つた肉体が残っている場合。

一部でも良いのか、ある程度形が残っていなければ不可能なのかは分からないが、自分の墓地ではなく、相手の墓地に眠るカードも「リアニメイト」するカードも存在する。この場合はコストが高く、制限もあつたりと難易度は上がるが、それでも不可能な訳ではない。

そして、三つ目。

殺めた者が存在している場合。

これは先に呼び出したクリーチャー【鬼の下僕、墨目】の効果によるもの。これも二つ目同様、死体の有無が何処まで適応されるのか不明瞭ではあるものの、平天大聖に押し潰されたネズミ達を蘇らせる事が出来たのを鑑みるに、殺害対象さえ居れば、【リアニメイト】は難しいものではないだろう。

戦で死んだ、と妻は言う。

遺体は墓に収められたらしいが、それも数十年前の話。確実に肉は消失している。

けれども骨ならば、ほぼ完全な形で残っているだろう。それだけあれば、二つ目の方法に該当する可能性が高いのだが。

『構いません。——いずれ、私が夫の元に赴きますので』

息を呑む。とはこの事か。睚眦と【メムナイト】は相変わらずの無表情であったが、リンの反応は、唾然の一言に尽きるものであった。

若返りの方法と、死を超越する手段は、古今東西、誰もが望み、求めていたものだから。それを、要らない。と言いつ切ったも同然の返答であったのだから。

恐る恐る、それについての真意を問うべく、一体何故かと言葉を投げ掛けた。

理解は出来るが、納得は出来ない。

こちらの世界に訪れてからは、死という事柄に接する機会が多かった為か、アニメや映画で死に対する——死を受け入れるもの——幾つかの答えを見聞きしていても、それはすぐには受け入れられないものとなっていた。

だから聞いたのだ。何故なのか、と。

『だって、寂しいじゃありませんか』

——何を言っているのか理解するのに、何十分も掛かった錯覚に陥った。いや、もしかしたら本当に掛かっていたのかもかもしれないが、それを確かめる術はなかったので、体感でそれくらいだろうと判断する。

後に続く者達の為にだとか、死ぬ事で最後の役割を伝えるのだとか、命の尊さを教えるのだとか。

年齢、実に六十五。この時代の平均寿命が五十であることを考慮すれば、他の者より遥かに長い生を受けて来た。けれどもまだ足りぬ。見るべき視野は広く、味わいたい世界は大きく、求める知識は星の数。それが大多数の……人間としての意見であり、本能から求める生への執着であつた筈だ。

けれども。それでも。そんなもの。

彼女が国の為に粉骨碎身してきた最大の理由が、夫との約束事だという。早い話、愛の力、というやつ……なのだろう。

顔から火が出る、という体験はしなかった。肅々と、心の底からそう思っているのだと話す彼女に対して、ああそうなのかという思いが先に立ち、こちらの感情を挟む余裕もない。

けれど、話が終わり、ゆっくりとウイリクの言葉を加味する時間が訪れれば、それに対しては幾つか思うところがあった。

特に、リンに対して。

今でこそ最愛たる母と歩める道が現れたものの、それはいずれ閉ざされるもの。ゆくゆくはやってくるであろう絶望……こと妖怪という種である少女では、確実にその時はやって来る。

ウイリクに対してではなく、リンにそれを告げる事で、やがて来る不幸を回避出来ないものかと画策したが。

『大切な人と別れる辛さは、昨日までずっと味わっていたからね。それを否定して我を通す真似は出来ないよ』

物分りが良過ぎる、という風ではなく、純粹にそう思つての吐露だったのは分かる。

相手の為を思いに思い、自ら命を捧げる事すら叶わなかったリンにとっては、欲望のままに行動するのを苦痛と感じてしまうのだろう。

……まあ、それを物分りが良い。と定義するかはさて置くとして。
(どうにか……ならんもんか……)

理解出来るが納得出来るものではない。を味わいながら、とうとう二十代に差し掛かったであろう肉体を取り戻しつつあるウイリクを見て。

「……あ」

女神降臨。

褐色の肌は水を吸い込んだ衣類が張り付き、そのボディラインを浮かび上がらせている。

衣類の白と地肌の小麦色、そして濡れた白銀の長髪のコントラストに、水という神秘が合わさって見えるそれは、平均よりは大きめであろう豊かな胸元も相まって、自分が男という種である事を否応無く突きつけられる肉感を宿していた。

まだ全裸の方が良かった。と思うのは、多分、俺の感性が捻くれてるんだろう。

妄想のレベルが非常に高いお国柄であるせいか、視認した絶景以上を想像してしまうのだから始末に終えない。この所ご無沙汰であるのも合わさって、色々とヤヴァイ感じに陥った。少なくとも、少女と女性一人の前でする態度ではない。

「MEMさんカモン!!」

それ以上の言葉は不要。戦隊ものの呼び出し兵器並みに動いてくれた「MEMナイト」

に飛び乗り、一目散に出口を指すよう指示を飛ばす。

諏訪……日本に居た頃ではそのような機会は無く、月ではそもそも血液が集るような感覚すらなかった。

(永琳さんがものっそり無防備だったんだがなあ……)

睡眠に負け、自宅の机に突っ伏したまま眠ってる時に見えた頃とか。

ちよいと激しい運動をすると弾む二つの母性とか。

屈むだけで下着のラインが張り付き浮き出る衣装とか。

今にして思えば不能になったんじゃないや。と思えるイベント目白押しであった筈なのが、その時々を感じていたものは……何というか、眼福眼福と二度唱えて終わりになる程度の感情しか込み上がらず。

(……あれか。それが穢れの無い世界ってヤツなのか)

穢れの大地と呼ばれる地に戻り、分かった。

然もありません。月の……蓬莱の国とは、男にとって、全自動で去勢されてしまうに等しい……げに恐ろしき魔境であったようだ。

まあ、でなければ、数千万年を暮らす超科学を持つ国の人口が増え続けられない訳が無い。月一面を摩天楼が埋め尽くしている方が自然な流れだと考えられる。

(……あれ。インフレの進んだ国ってのは出生率が低下するのが通例だった、か?)

もしかしたら他にも理由はあるかもしれないが、それを知る機会は当分無いだろう。

「……あら。これはこれは」

「……っ！ おっ、お母様！」

既に出口への逆走を開始し、坑道へと入ってしまった背後で少女と女性の声が聞こえた。

場合によってはリンの殴打が飛んでくるかもしれないが、こうして距離を取ってしまえば、どうやら鉄拳制裁ルートへの突入は無事に回避出来たようだ。

（まあ、仮に近くに居ても避けますがね！）

言い訳する気はないが、無抵抗で居る気もない。これは事故というヤツだ。……ラツキースケベとも言うかもしれないが。

来た時の倍以上の速度で狭い洞窟を疾走する「MEMナイト」に、頼もしさと、変則的なジェットコースターにでも乗っている恐怖を抱きながら、速さもそうだが、何より小さな住人達を踏まないように。と指示を出しつつ、神獣の英招が待機しているであろう出口を目指した。

——そこに、待ち構えている者が居るとも知らずに。

5 4 宝物神

いつかはこの時が来るだろうとは思っていたが、二日と空けずに出会ってしまった……こうも早いのは予想外。

もう少し……せめて一週間とか、それくらいの時間は掛かるものかと考えていたのに。彼らの行動の早さを見習うべきなのかもしれない。

「各大聖を含む、タツキリ山の制圧は滞りなく。……と、申しますか、そも、そのタツキリ山が消え去っているのですから、魔窟が減んだと喜ぶべきか、雄大な自然が消失してしまつたと嘆くべきか、生命を尊重する面の強い私共としましては、複雑な心境ではありませんなあ」

星と月の光は、夜であつても相手の顔の皺まで視認出来るほどに降り注いでいる。

「メモナイト」と共にダン・ダン塚の出入り口へと躍り出てみれば、そこには一人の男。やや離れたところに飛翔戦車を待機させている、宝物神クベーラが単独で佇んでいた。

神聖をまとった鎧。右手に身の丈ほどの華燭な棍を持ち、左手にどつかで見たような宝塔を持つ姿は、何処かの神殿に祭つてあつても何ら不思議ではない姿をしていた。

微笑みを絶やさぬ表情は、初めて出会つた頃と同一の余裕を感じさせる。数刻前の、苦虫を噛み潰したような顔は見る影も無い。

どうやら笑顔を再び装備しなおしたらしい。ちよつとやそつとじゃ外せない雰囲気
がチラチラと零れているのは、こちらに対する威嚇でもしているんだろうか。良い度胸
だ、受けて立とう。……マナが回復し切つた時にも（汗

「これでこの地を脅かす妖の者は居なくなり、残るは、雑多の一言で片付けられる者達ばかり。他の神々を始め、インドラ様も、その点につきましては”大変感謝しておられる。現状彼らは事後処理に腐心しており、持ち場を離れる事は叶いませんで心苦しくはありますが、私めが代表としてお礼を申し上げると共に、九十九様のご意向に沿うよう、事を運ばさせて頂きます」

そうして、頭を下げるどころか、腰を折つて体を九十度に曲げる神の姿を見る事になる。

（その点以外は思うところ有りまくりなんです、分かります）

やたらそこにニュアンスを置いての発言だから、こちらに責を求める気はあるんだろうが、んなもん知つたこつちありません。自己防衛を主張します。例の如く、そこに

過剰が付くのは避けられないだろうけど。

「ここに感謝を。我ら神々はあなた様に多大なる恩恵を授かりました。民が滅び、大地が枯渇し、空が紅に染まったとしても、私共は九十九様の武功を忘れず、語り継ぎ、恩義に報い続ける所存」

笑顔、ではなかった。

決して外せないだろうと思っていた仮面は、綺麗サツパリ無くなっている。

体を起こし、至極真面目な表情を浮かべていたクベーラの目は、真剣そのもの。非難も憎しみもない、清んだ瞳であった。

「——つきましては、我らと共に、人々の光とならん道を創ろうではありませんか。もしご快諾いただけたのであれば、東の神々にはこちらから話を通しておきましょう。無論、それ相応の対価はお渡し致します。天を裂く剣、地を割る槌、不老不死の霊薬らを始めとした、宝具や秘術の数々を」

額面だけを見て判断すれば、強引な勧誘としか思えない。

主神インドラ、と、クベーラは言った。

幾らその手の知識に乏しいとはいっても、各神話の主神クラスならば、流石の俺でも記憶している。

(やっぱ、インドラ、インドラだったか)

牛魔王に次ぎ、今度は西の神話とご対面。実際には違うけれど、インドと中国の全面戦争とも思える出来事に、自分の中の神話に対するあれやこれが瓦解していく気がした。

(……ああでも、こっちの神様が名前とか姿を変えながら、日本の方にまで伝わって来るものなんだったか)

となると、もしかしたらこのクベさん(暫定)も、ゆくゆくは何かの神に名を変える前神なのかもしれない。

好感は持てないが、無碍にするのも得策ではないか。

接し方を敵対から無難に移行。少なくとも口調は丁寧なものへと定めておこう。

日本に関わらない存在ならばどんなに楽だっただろうと、甘い思考に逃げながら、

(……あ、これ良いんじゃないか?)

ふと思いついた……我ながら結構良い線いってそうな案に、自画自賛を贈りたくなつた。

クベーラは表情にこそ出さなかったものの、必死、の二文字すら透けて見える態度での勧誘であったのは間違いない。

最大の問題点の一つであつただろう妖怪達の討伐は終えたらしいのに、それでも俺を誘う理由は何か。

そりや、据え膳喰わねば。という線もあるだろうが、誤解中とはいえ、こちらを東の神と認識していても尚、クベさん側に引き込みたい意図とは何だろうか。

大聖達を下し、他に侵略でも仕掛ける風もなく。もはやそこまでの力は必要無いであろう事を鑑みると、原因もおおのずと絞られる。

その自分が考えられる中で、最も正解に近いであろう答えは……マツチポンプ以外の何であるというのだろうか。

「……俺に、何をさせる気ですか？」

とはいえ、ドヤ顔でそれを尋ね、それが外れても格好が悪い。確認の意味合いを込めた疑問を口にする。

何秒かの沈黙の後、乾き閉じてしまった口を舌で湿らせながら、クベーラは何かを諦めるような……もう誤魔化し切れない。とでも言いたげな態度で、言葉を発した。

「——大地の、修復を」

やり過ぎたか。そんな思考が俺の脳裏を掠める。

一体どれくらいの規模であったのかは最後まで見ていなかったので把握してはいるが、十や二十のキロメートルでは治まらないだろう範囲が失われてしまった事だけは分かる。

これを人々が暮らす土地で行ったのであれば、人類史始まって以来の大虐殺者となる

のは必須。それくらいの広さ。それくらいの威力を見せ付けたカード、「ハルマゲドン」であつただから。

「今、インドラ様指揮の下で、我らの大半が身を粉にして再生に勤めております。……が、それでも数十年は掛かるだろうとの見通しが立ちました。しかしながら、それではあまりに気の遠くなる作業。時間を掛けるだけならまだしも、幾人かの神が見守つていなければ、修復どころか維持すらまもらぬとは、九十九様のお力を垣間見るに足る事柄で御座います」

どうやら、「ハルマゲドン」の効果は今現在も進行中なようで。

とは言つても、カード自体の効果は既に終了している。ニュアンスから推測するに、余波のようなものだろう。

微妙な想像だが、波打ち際で砂の城でも造つていようなもの、なのかもしれない。神様達は今それを懸命に修復中だが、直しても直しても波が押し寄せ破壊されてゆく……ような感じを思い浮かべる。何もせずに手を拱いていたのなら、被害は拡大する一方なのだろう。

おまけにその手の修復作業にあたつているのが、本来別件を進めていた者達であるので、人員不足に陥つてるようであつた。

「……平天めより、あなた様のお力の一端は窺つております。それを何度か……いえ。

一度だけでも構いません。大地創造のお力を、何卒——」

神の懇願とは、そうそうあるものではないだろう。

しかしながら、気持ちに余裕が生まれた身としては、この態度には色々と思うところがある。

クベーラの苦渋の顔も見だし、現状はどうなってるのかは知らないが、牛魔王にも一矢報いた。リンの命を奪った睚眦は既に傀儡と化しており、ウイリクも全快に近づいている。

やるべき事はまだ残ってはいるが、こいつへの仕返しは既に済ませている。

よつて、年上に頭を下げられる場面——それも必死に——とか、居心地が悪いつたら、ありやしない。

という事で、先に思いついた案を述べる。この様子なら、断られるという事は無い筈だ。

「じゃ、リンとウイリク様と、ここに居る奴らの面倒をお願いします」

近い内に居なくなる身としては、アフターケアが行き届かない可能性がある訳で。

ならいつそ、その手のものは神様に叶えてもらおうじゃないの。と、神頼みをする方法を思いついた。

レイセンの時と対応が似通ってしまふけれど、月であつてもこの手法は通用した。こ

ちらの力を知らしめた後では、効果抜群の方法であるのは疑いようも無い。

それに、俺個人では中々に骨が折れる件であったのだが、人でも妖怪でも妖精でも無く、願いを叶える存在という面の強い、神様が相手なのだ。幾ら原作知識の無い状態だとはいえ、それなりに期待は出来るだろう。

「彼ら……。ウイリク様の民達も、ではないのですかな？」

と、クベーラは首を傾げながら尋ねて来た。

むむ。そういやそういう約束をしたんだったか。確かに繁栄を約束させるような事は言ったが……。

(あく……でもなあ……)

しかし、今までの過程を思い返し、あれらを支援する気が全く起きない……というより、嫌悪感しか沸いてこない。

というか、そもウイリク様が……リンが幸せになれるのなら。という目的の為の提案なのだ。

食った飯は美味かった。酒も趣のある味だった。人々もそれなりに優しくはしてくれた。

けれど、炎天下の公道を黙々と進むリンに対して向けられていた侮蔑の視線は、今でも脳裏に刻まれている。

(そりゃ、誰しも善悪は持つちやいるけどさ……)

見知らぬ相手と、見知った相手。

どちらに比重を置くかなど、自分の利の為に妖怪達へと「ハルマゲドン」を撃ち込んだこの身であれば、今更考えを巡らせるまでもない。

差し引き、ゼロ。積極的に手助けもしないし、進んで危害も加えない。俺の思考はそういう結論で落ち着いた。

「ええ、違います。あそこに住んでた人達には、別に何も。——俺……私が指すのは、ここに居るダン・ダン塚の悪食ネズミ。五十万と……あれ、幾つだったか……いやそもそも参戦してない奴らも入るだろうし……。あゝ、兎に角、ここに住んでる全員です」

「……なる、ほど」

不愉快な相手が不愉快な思いをしてくれるのは好むところだが、既に「ハルマゲドン」とタツキリ山の妖怪を受け持たせた事で終わらせたと思っっているこちらとしては、重々しく返された納得の言葉に不安が混じる。

ここでNOと言われた場合、最も難題になるのは食料の確保。【禁断の果樹園】ですら何度か出現させなければ五十万匹の維持はままならなかった。

それが、今ではそれ以上を賄わなければならぬ可能性が露見している。解決策の発見は早めに行っておかなければ。

「やはり——」

無理ですか、と。

自ら聞きだすのも怖かったのだが、一向に二の句を紡がない神様相手に不安は募り、こちらから問い掛けを行った。

「いえ、無理ではないのです、が……」

即否定で答えた割には、続く言葉は尻すぼみ。複雑そうな事情がある……ようなのは理解出来る口調である。

「ご存知の通り、我らは、神。正義を掲げ、善を説き、光を象徴します。……しかしながら、ここに住まう者達……彼らは妖怪寄りの存在。それに手を差し伸べる行為は、ゆくゆくは九十九様の契約を果たす事も叶わなくなりそうにして……」

色々と省き過ぎな印象は受けるけれど、イメージ的には、警察が犯罪者に恩情を与え続けているようなもんだらうか。人々が受ける印象は、決して良いものではないだろう。

知ったこつちやねえ。と一蹴するのも出来るが、それでは将来、ネズミ達への支援も滞ってしまうので宜しくない。

ならばどうすりゃ良いのかと、それについて考えようとした途端。

「違うので御座います。そのご懸念は見当違い。……一番の問題は、我ら自身にありま

す」

クベさんの察しが良いのか、俺が顔に出やすいのか。こちらの思考を読み取ったのよ
うな言葉を付け足される。

相手神様だし、多分前者だろうと思いつながら、首を傾げて言葉の続きを促した。

「関係を悟られずに施しを与える手段は幾つかありますが……それは同族……我ら神々
同士には通用しません。……何と申しましょう。我らは、ネズミ達に対して快い感情を
持ち合わせていないのです。その内、私を始めとした数名はそうも嫌悪感を抱いており
ませんが、他の神々はそうも行かず……」

「ええ……」

もっと複雑に入り組んだ事情の絡み合いの末の、言葉に窮する。かと思っていたの
が、ただ単に身内の問題であると聞いて、こここの地の神様に対する印象が、元より下がっ
ていた数値とはまた別の数値が、幾つか下がった気がする。

何というか、こう、強力な独善者から、足の引つ張りあいをする力ある者、的な。

(……例えになっておりません、つと)

要約能力の無い頭を振り被り、クベさんの話に耳を傾ける。

とつとつと語る神様の暴露話……身内ネタに、変な親近感を覚え始めてしまうのは、
こいつの策略か何かなんだろうか。

「——そのせいか、最近は頭皮を覆う命達の数に心許なくなっておりまして……」
「髪の毛ですか……。ああ、それなら今度、月で知り合った高御産巢日っていう奴が居ましてね？ そいつが提案してくれたものに、確か毛生え薬が——」

……ん？

「……………待て！ 何かズレてきてないか!？」

はい？ と小首を傾げられるが、それをしたのはこつちだつっの。

ハツと何かに気づいたように慌てやがってからに。お茶目路線でも狙っているのかと尋ねてみたくなるけれど、こつちにはそこまでボケを拾う余裕も、フォローする優しさも持ち合わせていない。

「……………おほんつ。そうでしたな。そのお方とはまたの機会……………おほんツゲフンツ！ ——他の同族を説き伏せられるなら良し。そうでなければ、一時の繁栄だけしかお約束出来ません。……………申し訳ない」

「は、はあ……………そうですか……………」

一転して真面目モードで結論を言われたのだが、それには言葉に詰まるものがある。濁すような口調での相槌が精一杯であった。

嫌いな相手にでも、それを行動に表す事無く、誠意を以って対応して欲しい。

イメージ的には飲食店の接客業か、お役所仕事。余程の事が無い限りは、どんなクレームにも笑顔で対応、スムーズな接客。迅速かつ適切な処理。求める結果はそのようなもの。

(よりによつて、あんまり相手にしたくないものを相手にしなきゃならなくなるとは……)

神を始め、あらゆる知的生命体の胸の内にある——その相手の名は、感情。

思うがまま、感じるがままに流動する存在。その者が培つて来た全てが即座に反応し、示す、答え。

力押し不可能な存在とか、ガチンコ方面以外の知識が乏しい力を扱うこちらとしては、御免被る対戦相手である。

ただ。

「……それ、お前がやるもんなんじゃねえの?」

声を落とし、脅し半分、疑問半分の口調で問い掛けた。

何も、それをこちらでやる理由は無い。本来なら、それ込みでの助力の懇願である筈

なのだから。

しかし。

「……その通り、では、あるのですが……」

苦々しい返答から、どうやら、何も案が思いつかないらしい事は察せられる。

怒りを覚える云々の前に、自分の口からは溜め息しか出てこない。ここで感情を爆発させても、事態は何も好転しないのだと、心の何処かで理解している為だろう。

数刻前に、平天大聖と共謀してこちらの足止めを謀った一件を思い出し、これもその手の類なんだろうかという念が沸き起こるが、それを確かめる術は無さそうで。

マナは無し。カード枚数も残り一枚じゃあ、今の俺には何も思い浮かばない。

(せめてーマナ……「テレパシー」でも使いりやあなあ)

使えないのが現状なので……というか、この手の能力は孔明先生に難色示されてたんだ。使えたとしても十全な効果を見込むのも難しく、それを十二分に活かす術も知識も持ち合わせていないのだから、当然といえば当然か。これはさつさと選択肢から外し、他の方法を考えるべきだ。

やはり夜の砂漠は冷える。肌寒さを凌ぐ為に、外套ごと体を抱き込むように羽織り直し、はあと一息。満天の星空を見上げ、吐息をこぼし……一時ほど。

(……これ、ダメじゃね?)

心の中で白旗を上げた。

考え事がただでさえ苦手なのに、正解の無さそうな答えを導き出さずにアカンとか、難易度が高いにも程がある。

なあなあではなく、求める答えは、恐らくベターなヤツ。その場凌ぎではダメな回答。むんむん唸り、数十秒。秒から分の域に差し掛かっただろう頃合で。

「クベさんや」

「……ワタクシの事、で御座いますな。はい、何でしょうか、九十九様」

何処ぞの水戸のご隠居的な風の名を呼んでみたのだが、ツツコミが返ってこないところを見るに、どうやら主導権はこちらが握っているらしい。

いつもなら喜びを覚えているところだけど、今回、その権利を手にした者には、もれなく感情を説き伏せるという難題が付属している。嫌な権利だ。誰か貰ってくれないだろうか。

軽く脇道に逸れかけた思考を正し。

「無理。お手上げ」

こちらの結論をサクッと述べた。

困惑の表情であったクペーラは、その言葉を皮切りに一変。瞬きの間にまとう雰囲気を入れ替え、呼吸が苦しくなるほどの重圧を放ちながら、握る武器に力を入れていた。

こちらの世界に来たばかりの頃なら、これだけで心肺停止状態になっていただろうが、現状は『きつつ』と一言、内心で呟く範囲に留められる程度のもの。

諏訪&神奈+綿月家らの経験値によって、主に精神面での対・聖属性の耐久値は、中々に高くなっているようだ。

「ただし!!」

腹の底から声を叩き付ける。僅かに体が硬直する素振りを見せたクベーラは、その反応に従うように、ピタリと動きを静止させた。

火の付いた……付けた爆弾を鎮火させるべく、間髪入れずに続きを話す。

「それは俺自身に対しての事。三人集まれば……寄れば? いや、寄らば、だったかもしれん……——文殊の知恵とも言うし、自分だけで駄目なら他人の力を借りましょう。というか頼りましょう、という事で」

「……申し上げ難いので御座いますが、我らでは——」

首を振り、クベーラの言葉を遮る。

申し上げ難い。とか言い出した時点で、どうせ我らじゃ無理だとか、それに類似する意味合いの話になるだろう流れは、想像に難くない。

それは今までの——これからの歴史。聖と魔の交わる物語が存在しない……しなかった事が証明しているのだから。

接客態度を幾許かランクダウン、お客様からお客さん……の更に下へと格下げした。それに合わせ、口調もそれに準ずるものとなる。

ようは、タメ語であつた。

「兎に角、明日。明日まで待て。それでも駄目なら、【土地】だろうが楽園だろうが創るから」

今一つ釈然としない顔を向けながらも、クベーラは静かに両の腕から力を抜いてくれた。

とりあえず。ではあるけれど、待ちの方針を採用してくれたようだ。ぞんざいな口調なのに何も咎めない様子を見るに、こちらの態度も黙認してくれるらしい。

今は体を……マナが全快するまで休息に当てておくとしよう。

「……あれ。そういうや英招様は？」

寝るかと思つて踵を返そうとしたのだが、ふと、この場に居る筈のお方の姿が見えない事に疑問を抱く。

そも長くは一緒に居る事はないとは思っていたけれど、勝手に居なくなるようなお方じゃなかつた筈だとの思いを込めた問いを、クベーラへと投げ掛けた。

暗に、お前行方を知つてるだろう。との、若干の詰問が入っておりますが。

「この場はワタクシめが受け持ちまして、英招様は 槐江（カンコウ）の地へと戻られま

した。幾年か空けていた事でやや荒れてはおりますが、あのお方でしたら数年以内には平穩を取り戻されるでしょうな。そして、言伝を預かっております。『最後まで共に居れず心苦しく思うが、何卒、許して欲しい』と」

「そういう強制的に連れて来られた……睚眦に使役されたとか言つてたっけか。

すぐにも戻りたかつただろうに、それを一時とはいえ付き合つてくれたのだから、こちらが感謝こそすれ、相手に許しを乞われる理由などあるものか。

「気にしないで……つてお前に言つてもしょうがねえか……。カンコウだかカンコクだか……戻った先が何処かは知らないんだが、英招様に伝言とか頼めるか？」

「神速であられる英招様を見つけるにはお時間が掛かりますが、九十九様が感謝していい。と、お伝えする事は可能で御座います」

察しが良いのは助かるが、それをもつと別の方面でも發揮してほしい身としては、色々と考えさせられる反応だった。

（つてか、英招様、喋れたんですね……）

月で【吸血鬼の呪詛術士】にからかわれた時を懐かしむ。

出来れば話の一つや二つしたかつたけれど、あの時は色々と切羽詰つていたし、仕方がなかつたと思う事にした。

いずれ機会もあるだろうと未来に期待しながら、リン達の待つ穴倉へと戻る為、やや

後方にて控えていた「メムナイト」に騎乗する。

何度目かの行いであったので少し慣れたかと思ひながら、唐突に沸き起こった懸念によつて、俺は動きを止めた。

「……なあ、クベーラ」

緊の文字を浮かび上げながら、宝物神はこちらを見る。

そういう意味合いで名を呼んだ訳ではなかったのだが、どうやらクベさんはそう受け取つてはくれなかつたらしい。

「……はい。何で御座いますよう」

何を言われるのか。そこに全身系を集中させているのが分かる。

……その気構えは取り越し苦労であると分かつている身としては、若干心苦しさが先に立つ。

いつそ発言内容を変更するかとの誤魔化しが脳裏を掠めるが、数瞬の間では妙案なんぞ出る筈も無く。地雷を踏みに行く気構えで、元々言いたかつた事を口にした。

「答えは明日……つて言つたけど……」。やっぱ一週間くらい後……とかじゃ、駄目？」

自ら宣言した期間を反故にする。大した理由でもない……期間は長い方が良好だろう、という考えの下に。

借金の返済日を先延ばしにしてもらう心境を味わいながら、唾然とするクベーラと、何だか呆れられた気がしないでもない「ムムナイト」の視線が印象的な一晚であった。

晴れて、翌日。既に日は真上に差し掛かり、緩やかに傾きを開始していた。

直射日光が露出している肌を焼き、それでも足りぬと瞼越しても目をチカチカさせる太陽は、こちらを殺す気満々なんじやねえかと思うのですが、その辺、各方面の太陽神達に是非とも尋ねてみたい気持ちにさせてくれる。

吹き出る汗を払いながら、こりや堪らんと、ダン・ダン塚の出入り口付近にある岩陰に移動。クベーラの姿は無いが、もうしばらくしたら来る筈。結果の如何は別として、そういう取り決めとなっている。

「……ダルい」

全快には程遠い俺の体は、泥のような。なんて表現が良く似合う愚鈍さを体現していた。

一歩一歩が足取り重く、今何処かの劇でゾンビ役でも任せてもらえれば、最優秀賞を狙える自信がある死体っぷりだ。

これまでの出来事に加え、さっきまで中々の体力を消費していたのだから、これは仕様なのだよ。とか、意味不明な理由を自分自身に言い聞かせてみたり。

「大丈夫かい？」

本心からだと分かる、リンの労いの言葉がありがたい。

元々の美声に加え、それが俺を労わる様な口調なのだから、男としては、がんばらざるを得ないだろう。

同時、また苛めてみたい。なんて悪戯悪魔が目を開きかけるのだが、二人きりならまだしも、今は駄目だろうと良心天使が一蹴。

邪念悪魔を追い払い、リンの気遣いに応答する。

「……何とか。今なら一分以内で意識を手放して、その後は三日三晩寝っぱなしで居られる自信があります」

「うーん、それは中々に困ったものだね。他の人なら軽口を装った空元気と取れるけど、君の場合は本当にそうだから参るよ」

「参っているのはこちらでござい。もう少し親身になって、同情とか労いの言葉とか『キヤー！ 九十九様カツコイイー！』とか黄色い声なんぞ掛けてくれても、罰は当ら

ねえと思うのですが」

「……そうしたいのも山々なんだけど、ね」

不安に曇る表情には、明るい色は見取れない。懸命に押し掛かる重圧に抗っている様子が分かる。

「どうやら、突っ込み返す気力も無いらしい。いつもならそれなりに辛辣な言葉が返って来ていた筈なのだが、切れが悪いどころか、返答すらまもらぬとは。」

「いやはや、俺が思っているよりもリンはかなり気負っているようにして。昨日までならどうやって不安を取り除こうかと頭を抱える出来事ではあるけれど、昨晚からは、その心配は無用のものとなっている。」

「大丈夫よ、リン。もし駄目でも、私は何も気にしないもの」

「でも、お母様……」

落ち着かないリンの手を、ウィリクが横からそつと握り込む。

「縫うような目をするネズミの少女が顔を向けるが、それ以上は何もしなかつた。ただ黙って、母の優しい言葉に耳を傾け続けている。」

「かの地の英霊たる、魏と蜀の為政者達の妙案ですもの。例え神相手であっても、遅れを取る事は考え難いわ」

——クベーラを残し、穴倉へと戻ったこちらに對して、女の肌を見た云々……と食つて掛からんとするリンを諫めながら、一連の出来事を切り出した。

そつと目を閉じ思案するウイリクと浚面を造るリンは、今後の未来を必死で思考している様子であつた。

俺が全て話し終えた頃には二人の答えはある程度まとまつたらしく、各々の希望を口に出し、なるべくそれに近づけるよう持つていく方針を固める事になり。

ウイリクについては、リンと一緒に居れさえすれば特に何も無いとの事だったので問題はなく。對してリンは色々とした事情が絡み合っているようで、母に楽な思いをさせてあげたい事と、この塚で暮らすネズミ達の面倒を見て欲しい事の二つが最優先となる条件、という事で落ち着いた。

とつとつと話し出したリンの会話の内容に、ここの巣穴の運営状況は結構切羽詰つていたものだど理解させられる事となりました。

「ムムナイト」が通過可能な坑道があつたりと、かなり巨大な塚であるのは薄々感じていたが、それでも一極集中型の壻の弱点として、生命線たる食料の確保が非常に困難なものとなつていたらしい。

水の方はまだどうにかなりそうであつたのだが、食べる物はそうもいかず、死を覚悟してタツキリ山へとおこぼれを漁りに行くのが常と化していたのだとか。

あまり大勢で行つては妖怪達に目を付けられ罅を壊されかねず、それをせずしては、ここに留まり続ける限り、餓死の道しか残つておらず。

につちもさつちも……、とはこの事か。

最悪、共食いすら在り得た可能性が見え始めた矢先の俺からの援軍要請に、『リン様のお願いならば』『どうせ散る命なら』と、助力の申し出を受諾してくれたんだそうだ。
(で、戦略的な結果は大勝利だったものの……)

種族的には唸りたくなる戦果となつてしまつたのは、戦に参加してくれたネズミ達の数が全く減らなかつた事に起因する。

……ああいや。減るには減つたのだが、その減つた分をしっかりと戻してしまつたのだから、差し引きゼロ。ぶっちゃけ、貪欲な胃袋の間引きに失敗してしまつたのだと……かなりの数の命を失つておいた方が良かったのだという、黒い正解が導き出されてしまつた。

しかも、最大の食料地帯であるタツキリ山を始めとした周辺の土地は「ハルマゲドン」によつて焦土……どころか消え去つてゐる。

妖怪達が人間を始めとした無数の命を襲い、殺め、その食いかスをあやかする事で種の存命を成していたネズミ達にとっては、まさに悶絶級の未来となつてしまい、それを伝えた直後の洞窟内を思い返せば、刹那的な思考である彼らですらも、その動きやら鳴き

声やらに不安の色が見て取れるほどにか細いものであった。

勝利したのに恩賞を与えられない。日本史でもそんな話が幾つかあったかと、参考になりそうでならなかった史実を、かぶりを振って払う。

一昨日くらいにこの話題が出ていたのなら、俺としても言葉に窮していたのは間違いないけれど、その点の食糧事情はクベーラが十分に補えるとの事で、解決策に一步步近づいた形となった。

よつしやと事態の好転を実感出来た……までは良いものの、それでは同族に受けが宜しくないとの事。

何となく、分かる。一人だけでは仕事が回らないように、良い顔されないだけならまだしも、非協力的な人間関係では、その先の未来は想像に難くない。

神様ちっちゃええ！　と思うのも吝かではないのだが、これまでの善悪な関係に加え、どうにも生理的に受け付けられないらしい面もあるとクベーラは言っていた。

すぐに理解させるのは無理か。と、自分の中で結論をまとめ。

〔魏の参謀、旬彘〕さんと、〔伏龍、孔明〕先生のお二方にご登場頂きましたよ、つと合計7マナ。勇丸と合わせれば8マナの維持という、骨の折れる疲労具合であったけれど、その分の成果はしっかりと残せた筈だ。それを確かめるのが今からだとしても、あの案なら神々を納得……まではいかずとも、理解させられる事は可能だろう。

……まあ、二人の顔合わせの時には結構心臓に悪かったんだが、それは忘れる事にしておきましょう。

「お陰で、残り一マナしか使えないんだ。困ったもんだよなあ——クベーラ」

ギョつとするリンと、すぐさまそちら——前方をしつかりと見据えるウィリクに応えるように、にこやかな笑顔を造る宝物神は、いつの間にやらこちらの眼前に佇んでいた。

元々疲労で半眼となっていたのが幸いした。視認すら難しくなつて来ていた白日の下であつたけれど、クベーラが静かに上空から降り立つたのが見えたのだから。

「イチマナ、とは何の事で御座いますようかな？」

「教えねー」

これはこれは、と。

軽くおどけてみせる褐色中年オヤジは、元より深く追求する気は無かつたんだろう。それつきり、追求の手を伸ばさなくなつた。

「本日は、あの銀馬は居られないので？」

牛魔王の時にもそれっぽい事を言われたけれど、ロボットなんて知る筈も無い方々から見れば、鉄馬——【メムナイト】は、そういった類のものと認識しているんだろう。「さつてな。隠れてるのかもしれないし、どっかに還つたのかもしれないし。まあ、良い

じゃない。これからするのは話し合い。力の強さとか足の速さなんて関係ないだろう？」

「ええ。それで御座いますな。『話し合っている内であれば』、大地の消失も、大聖の頂点を下す力も、全く無縁のものに御座いますなあ」

こちらがクシシと意地汚く嗤えば、あちらはハハハと朗らかな笑顔で応答する。

不敵に、掴みどころなく、謎めいていて。

底が見えない。と、それっぽく思わせれば対話は有利に運べる場合が多い。との、二大軍師からのご指導&ご鞭撻によって、今の俺は雑多な事では動じない自信がある。今のところ実践出来てはいるだろうが、出来れば早めに切り上げたい。

(かなり疲れてるんで、動じるだけの心の余裕……体力が無いのが最大の理由なんですけどね……)

瀕死の二、三歩手前くらいにならないと効果を發揮してくれない月の腕輪でありますので、この程度の疲労では一切起動してくれません。

もう少し制限の緩和を願いながら、これからするべき事を思い、少し、心が軽くなる。疲労によって頭の切れも悪くなるけれど、記憶していた条件を読み上げるだけで良いのだから、楽なもの。それに、これでもし駄目になった場合には、早急に応えずとも良い、との結論も出ている。

食糧事情は由々しきものだが、俺が居る限りは迅速に対処しなくてはならない問題ではない。それ以外で至急の用もなく、後は、相手の出方次第。

今回の場合は、時間は味方。

もつたいぶつて、重々しく頷きながら、『うむ。慎重に検討しよう』とかそれっぽい口調と態度で言いつつ、家に帰ってゆつくりと内容を吟味すれば良いのだから、これが楽でなくて何だというのだろう。

「それでは」

「ああ」

クベーラがこちらにやって来て、すつと腰を落とし、胡坐を組む。それに倣う形で、俺やリン、ウイリクも後に続いた。

砂漠のど真ん中の岩場地帯ではあるけれど、影の下であればそれなりに涼しく……涼しいと感じられる温度であり、どうせダン・ダン塚の内部にこの潔癖症な神様は入ってこないだろうから、ここが話し合うにはベストな場所である筈だ。

変に取り繕った言葉は、もう止める。丁寧語だの尊敬語だのに比重を置くよりも、これから……今からは、如何に相手へこちらの方法を正確に伝えるかに掛かっているのだから。

「宝物神、クベーラ。あんたは人間達の信仰を得たい。——これに間違いは無いか？」

「それだけではありませんが、その面が強いのは事実で御座いますな」

「その方法つてのは、信仰者の願いを叶えたり、つて方法。——これも間違いは無いかな？」

「はい。仰るとおりかと。ただ、お言葉を付け加えさせていただけのならば、人間のみから得ている訳では御座いません。数が多く、我らを信仰するに足る知性を持ち合わせている種族であるが故である。との補足をさせて頂きましょう」

クベーラの言葉を噛み砕いて若干の悪意をトッピングしてやれば、『人間は俺に相應しい奴隷だぜ』なんて言葉にも聞こえるけれど、虫や動物が神などを信仰しないように——もしかしたらしてるのかもしれないが——何かを信仰するという行いは、一定以上の知性を持たなければしなない行動であったかと思ひ当たり、納得する。

不純なものだから持たなかったのか、必要になつたから行うようになつたのか。その辺について討論すれば良い暇潰しにはなりそうであるが、この場ですべき事ではないので、それらは置いておくとして。

「じゃあ、その信仰を得る行動つてのは、あれか。雲の上とかで民草に耳を傾けながら、何をすれば僕達を崇めてくれるのかなー、とか考えて実行する。そういつた事か？」

「雲の上ではありませんが……よくご存知で。お知り合いに、我らの地に住まう同族でもいらつしやるのですかな？」

ここの神様に知り合いは居ないが、別の神様になら知人&友人はそれなりに。

神様と知り合いだとか、昔の俺が聞いたなら、有名な精神科医が在中する病院のパンフレットを一束くらい贈りつけていた事だろう。

諏訪や大和で行って来た事と、漠然とした神様なイメージと照らし合わせ、それらを混ぜたり省いたりした意見を述べてみただけなのだが、まさか寸分違わず、つぼく正解になるとは思わなかっただけだ。

「この地じゃないけどな。ちよつと前まで似たような事やってたし」

「それは良い。知らぬ者と知る者との差は、顕著に現れるものですからなあ」

ちよつとこつちの苦勞が分かってくれそう。そんな思考がチラと見て取れるクベーラに、半分同意し、半分苦笑する。

ある程度の苦勞は分かるが、今回はそこに付け入る側となる面が強い。

とはいえ、苦澁を味あわせる訳ではない。これが成功すればWIN&WINな関係に治まってくれる可能性が高いのだ。結果良ければ、言葉もある事だし、決して悪い話では無いと思う。

「その効率。もつと上げたいとは思わないか」

沈黙は……さて。どれくらいの時間続いたのだろうか。

つうと一筋。俺の額から滑り落ちる玉の汗。

頬を通り、顎へと至り、飽和の限界を迎え、地面へと染み込んだ頃合に。

「……それは難しいでしょう。彼ら……ネズミ達はどの種族からも好意的には認識されていない。それが現れればたちまちの内に嫌悪の感情を顕わとし、手に鋤や鍬や棍棒を持ち、行動に移す事でしょう」

こちらの意図をしばらくの沈黙のみで察したクベーラは、流石神様、と言わざるを得ない。

——つまりは、ネズミ達に民草の願いを聞いて神の元へと届けて貰おう。というのが今回の案である。

思うがまま、感じるがままに流動する存在、感情に対しての働きかけが主な命題となっていた一件であつたが、誰しも、それを統べる力を持ち合わせている。

名を、理性。

沸き立つ怒りを、滲み出る憎しみを、溢れ出る悲しみを律し、手綱を握る理。

早い話、ネズミさん達が凄く有能な存在であると知らしめられれば、多少……かどろかとは知らないが、納得せざるを得ない土台を作つてしまえば良いのだ。

本当に神が生理的に無理だとかいふのであれば、それこそネズミという種族は既にこ

の地から滅せられていただろうし、それでも生き残っている現状を鑑みるに、幾許かの交渉の余地はあると見た。

どんなに嫌いな奴でも、いけ好かない者でも、必要であると周りに認めさせてしまえば、決して無碍には出来なくなる。

(……まあ、その大半は不快な思いをするのが殆どだったけど)

句彘が、死刑囚——嫌われまくりな人物達を用いて、敵軍を打ち破る武功を成した人物の話をしてくれたけれど、そこに些細な修正を付け足したのは、リンでもウイリクでも、ましてや孔明先生でもなく、俺自身。

まさかこんなところで上司やら後輩やらの苛めについての知識が役立つとは思わなかった。そして、その手を選ぶ自分にも。

ただ、この際四の五の言っではいられないので、出来る範囲での最善だと思われる方法を選択&実行する。

因果な生き物だ、と自嘲的に笑ってみるが、悪意を振り撒いていた側と同じになっってしまった気分になり、ちっとも心は晴れなかった。

「クベーラ。お前達が信仰を得たい……信仰をしたいと思っっている人物は、どんな奴らだった？」

「……裕福な上流階級であればあるほど、死から遠ざかる為でもあり、そういった意識は

薄れていく傾向が強いものでは御座います。死に際にはそうでもありませんが、貴族や豪族達からの信仰を獲得し難い。何より、願いの力が弱くあります。よって——」

正解ではないにしろ、こちらの言わんとしている事を察し始めたらしい。

一を言えば十を知る、であったか。爪の垢でも飲ませて欲しいくらいに羨ましい頭だ。無論、実際に飲ませようものなら右ストレートを叩き込むが。

「……ですが、それは何もネズミ達でなくとも。例えば……そう。空を翔ける者達が我らの使いとなる事は多く、事実、それらは信仰の獲得に一役買っております。天より来る者、其は正に天の使い為り。などという風に」

なのでネズミ達に出番は無い、と。そう言いたいのだろう話は、最後まで紡がれずに、そこで止まった。

言いたい事が分かるが、それに関しては——これに関してだけは、何処に目を付けているんだと言いたくなる。

元々嫌悪していた存在なので、その手の方面に視野を向けてこなかったせいでもあるんだろうが……。

「けど、それはあくまで飛ぶ者から見た視点だろ。視覚の広さは負けるとしても、多さで勝てる奴なんぞ居るもんか。昆虫じゃあこの寒暖の激しい土地じゃ生活範囲は狭くて、鳥じゃあ上空からの視野しか持つてない。他の奴らじゃ数が足りず、体が大き過ぎたら

難しい」

この売り込みに、ネズミ達の今後が掛かっている。

こういつた緊張感は未だに慣れないものだと思いつながら、声が小さくならぬよう、一言一句、しつかりと叩き付ける様に。

「対して、ネズミ達はどうよ。居ない場所なんて、それこそお前達神様の住んでるところくらいじゃないのか？ 貧困に喘ぐ家の中、無数の死が立ち込める墓所、日夜問わず存在する眼でもって、最も救済が場所には必ず在る、命綱」

捲くし立てるように、つらつらと。

一度も嘯まずに言えたのは、しつかりと暗記していたから……などではなく、本心でそう思っているから、それを吐露するだけで良い為である。

セールストークとSEKKYO交じり合った売り文句に口を挟む機会を与えず、畳み掛ける様に、リンの背中を軽く押し出し。

「……って事で、その口利きとして、こいつを推す。最低五十万……百万以上の監視の目と、それを束ねる、小さな小さな司令官。錬度も抜群、下手な人間の軍隊より誇れるくらいのも勇ましさだ。すぐってのは難しいだろうが、季節が一巡するまでには、誰もが唸る成果を上げるだろうよ」

憎き相手の元で働く。

誰が言い出した訳では無い。リン自ら、そうすれば事が丸く収まるだろうとの進言からであった。

『なに。今の僕には君の後光があるんだ。居心地は悪いだろうけれど、無体な扱いは受けないだろうさ』

何かを振り切るように言い切った言葉には、やってやれない事はない。と、自信満々の中に僅かな不安を紛れ込ませたものであつて。

それにもかしたら、この幼……女の子がゆくゆくは『ナズーリン』に改名するのかもしれない可能性もある。

……本音を言えば、そうであつて欲しいと願う俺の、思い入れやら肩入れやらテコ入れやらの、入れ入れ尽くしな思惑が強いせいではあるけれど。

もしナズーリンとなる人物であるのなら、いずれこの子は毘沙門天という大御所の神に仕える事になる……かもしれないのだ。それまでの下積み時代だと考えれば、良い経験になるのではないかとも思ったが故の推挙でもあつた。

「……ふむ……期間を設け、その間に成果を……——先の見える期限内であれば我慢も……数も膨大……——」

こちらの存在など忘れてしまったかのように、顎に手を当て、自らの思考の海に漕ぎ出してしまったクベーラは、しばらく戻つて来る様子が無さそうで。

目の前でブツブツ眩かれ、ちよこつと気味が悪いのだが、それがこつちの利になるものだと分かっているだけに、止める訳にも逃げる訳にもいかず、固唾を呑んで見守り続ける。

凜と——少なくとも表面上は姿勢を正すリンであつたが、視線が一点に定まつていない眼光を見るに、その内心は不安に揺れているだろう動揺が察せられる。

（『しばらくお待ち下さい……』とかクベーラの頭上に見えてきそ……）

なるべく早く終わらせたいところではあるが、こればかりは相手の対応次第。

しかし今は、リンの傍にはウイリク様が居る。

手を握るでも、優しい声を掛けるでも無いけれど、ただそこに居るといっただけで、今のリンにとっては何よりの支えになる筈だ。

俺には無理な方法である事に対して、みみっちい嫉妬感が込み上がるのを、一笑。身の程を弁えろと活を入れる。

そして。

「——分かりました。そのご提案、承りたく思います」

四択クイズ番組に出演しているみもんたも真つ青の溜め具合を経て、クベーラは了解の意を告げて来た。

「では、細部を詰めたと思います……その前に、一つ」

尋ねたい事がある。

それなりに真剣な表情を向けるクベーラの視線は、俺でもリンにでもなく、その背後に居る人物……ウイリク様へと向けられていた。

「そちらの……」

しばしの沈黙の後。

「……そちらの女性……いや。『少女』は……ウイリク、様……で、御座いますか？」

「今更かよ!？」

思わずノリ突つ込みなぞしてみたものの、幾ら神様とはいえ、これまで……昨晚から今朝に掛けての短期間の経緯など知らぬだろうから、当然な質問であった。

クベーラと相対する前から、ウイリク様はその容姿である。

年齢、大よそ二十と少し。

無色と白髪の入り混じった頭髮は全てプラチナへと変色し、罅割れ、乾燥し切った大地を思わせていた褐色の肌も、生まれたての赤子に迫る瑞々しさを感じさせる小麦色のそれへと変貌を遂げていた。

適度な大きさの母性が二つ。ネズミ達が何処かで入手した旅人用のやや濁った白のサリートを押し上げ、その存在を主張している。

下半身の肉付きは、平均以上。直立以外の体勢を行おうものなら、衣類が肌に密着し、

その肌触りすら想像出来るであろう肉質を浮き彫りにさせる事だろう。
ただし。

『懐かしいわ……。十五、六の時に戻った気分……。』

リン共々、あんぐりと口を開けて反応する羽目になった一言は、今も俺の脳裏にこびり付いている。

とても十代の半ばとは思えない、二十代過ぎたくらいが適切な妖艶さであるのだが……当人がそう言うのだから、そうなのかもしれない、と納得しておく。

人間の記憶の曖昧さとか、自分勝手な美化路線とか。色々と疑って掛かっていたのだが、若返り中のウイリク様を見ていたリンが『ああ、なるほど』と素直に納得していたのを見るに、虚言とか妄言では無さそうなので、信じる事にした。

(その方が浪漫がありますしね！)

美少女が美女へと上り詰める……ああいや、今回の場合は逆なのだが……その過程の光景がスツパリ抜けているのを一頻り悔やんだ後で、渋々ながらクベーラと出会った事を話し合ったのだった。

「……どうやらその通りであるようで。……それも、九十九様のお力？」

「それをあなたに話す必要を感じません。ヴェラ」

キツパリと。けれど、何処か相手をからかう声色を以って、褐色の女性は楽しげな笑

みと共に答えた。

クベーラという神であるのは既に知っている筈なのに、過去の偽名で名を呼ぶのだから、これは彼女なりの嫌味のひとつと捉えるべきか。

「……これは手厳しい」

「これからどんな間柄になるのか、とても興味があるわ。叶うならば、あの頃の関係には戻りたくありませんものね」

ウイリク様イキイキ。リンちゃんニコニコ。クベさんタジタジ。

楽しそうな元女王様の反応に、俺も釣られて楽しくなっていたのも、僅か。何だかクベーラの背後に、尻に敷かれる男の未来を垣間見た気がして、どういふ訳か、俺の心が痛くなった。

(毛生え薬、本気で考えといてやるか……)

あれだ。多分、見ず知らずの他人であっても、股間を強打された男を同じ男が見れば、思わず内股になってしまふ心境に近い。

それに、担がれたような形にはなったが、仮にも平天大聖以下の妖怪達を受け持つてはくれたのだ。これくらいのパレゼントは構わないだろう。

「……ところで、クベーラ」

ここまで事が運んだのだから、すぐさま反故にされる事も無い筈だ。

そんな気持ちから、なるべくすぐに終わらせようとの思考が呼び起こされて。

言葉は無くとも、顔がこちらに向けられた。話を聞いてくれるようだ。

「お前、治癒とか得意か？」

ふむ。と唸り、数秒の後。

「殆どの病や傷は治せるものではありませんが、それが九十九様にも適応されるかどうかは、言葉に詰まるところがある……というところが、正直なところで御座いますなあ」
「素直に微妙って言ってくれよ……」

それが何か。と顔で尋ねるクベーラに答える形で、話の続きを再開する。

「それが出来るか否かで、大地の修復作業……速度が四、五倍くらい変わってくるから
や」

「!？」

一瞬の驚きは、次の瞬間、熟考という形に取って代わる。

ぶつぶつと高速で口元を動かすクベーラを見るに、手がない訳でもなさそうだ。

……ただ、これに関しては、別に回復や治癒なんぞ無くとも使える事は使えるのだ。

千を超え、万に及ぶMTGのカードの種類の中には、当然ながら類似品——亜種を始め、上位、下位効果を持つものも多く、これから使う予定であるカードは、それら様々な亜種や変種の元になったものの内の一つ。

使用コスト、たったの1mana。「土地」を出す、という一点において、出し易さ、制限の軽さを含む総合評価が群を抜いて高い——他の追従を許さぬ性能を秘めたものである。

『Fastbond／素早い支配』

1manaで、緑の「エンチャント」

かなりザックリと内容を省いて要約すると、望む枚数の「土地」を手札から出す事が出来るもの。その際にはダメージを受けるペナルティが発生する。

正式な文面は下記に。ほぼ複写。

あなたはあなたのターンの間に、追加の「土地」を望む枚数だけ出しても良い。あなたが「土地」を出す度、それがこのターンにあなたが出した最初の「土地」でない場合、「素早い支配」はあなたに1点のダメージを与える。

登場した時代が古く、日本語表記のカードが存在しない。

【土地】を出すだけ。と、侮る事なかれ。MTGの基本である『土地』は一ターンに一枚のみ場に出せる』というルールをここまで無視するカードは非常に少なく、事実、様々な公式大会で禁止カードに指定されている。

完全に安全を確保してくれるのなら、【素早い支配】の亜種を用いて事に当たるのだが、それが保障されてくれないのならば、数日間掛けて【土地】を生成し続けるしか考え付く方法は無い。

「過ぎたる力は身を滅ぼす——。古事にはよくある文句だけれど、ツクモさんには尺度が違っているのかしら」

「ああ、そういえば……お母様はこれの大地創造術を知らないんだったね。見掛けに騙されるといけない、という事例を体験させられる能力だったよ」

これ、とは俺の事かおチビさん。良い度胸だ、受けて立とう。今なら心の余裕も相まって、出されたものなら何だって平らげてしまえそう。

保護者同伴……というより真ん前だろうが、その程度で俺が自重するなどと思うなよ

!

「人を指してコレとか言うんじゃありません!」

「うにゅ!」

お父さん許しません!　なんて心の中で呟いてみたり。実際に口に出すと、必然、ウイリク様に失礼になるので言いませんが。

片手で両の頬を摘むように挟み、ひよつとこのような顔にさせる。

これで二度目か。可笑しく歪む表情と、面白い口調になる声が楽しくて、もう一度やってみたくなったのだ。

右手を顔にアイアンクロー。左手を後頭部に添えて、後方に逃げられないようガツチリホールド。元々ちっちゃな体であるので、顔の半分以上がこちらの手の平に収まってしまうている。

抗議の声をうにゅうにゅと口にはしているが、それが言葉……意味を成す事はない。よって、俺が静止する理由にはならない。

「わっしやっしやっしや!　人型になってしまった自分を恨むが良い!」

「にゅー!　むにゅー!」

わっしやっしやと奇怪な笑いを上げてしまったのは、きつと性悪な牛魔王の呪いか何

かに違いない。

うにゆ、とは何処その八咫ガラスの少女から聞きたい台詞ではあるけれど、可愛い相手は何をやらせても可愛いもんだ。これはこれで楽しいのです。

ウイリク様は『まあまあ』と困った風な表情こそ浮かべているが、静止の声は掛かってこない。こちらの悪戯……教育方針に賛同はしてくれているようだ。

色々解放された気分に乗じて、こちらの自重精神までリミットブレイクしてしまつたらしく、もう少しくらい別の事をやつても良いのでは。などと悪意が顔を覗かせた途端。

「ん？」

するり。ズボンの足の隙間から潜り込む、小さな毛むくじやらの感覚。

くすぐつたい。こそばゆい感覚に従つて、それを止めるべく、自然とそこに——リオンをホールドしていた左手が、自身の内股へと伸びてゆき。

——がぶり。

そんな音など聞こえていない筈なのに、俺の耳にはしつかりと、自身の肉体が欠損する信号が伝達された。

「——ッ?!?!」

洒落にならない痛覚が、悲鳴すらもシャットアウト。というか、喉が引き攣って肺から噴出しそうな空気を遮断してしまっている。

瞬時に額から滲む脂汗と、瞬く視界が俺の世界の全てとなった。

患部、左足付け根……の内側。人体の構造上として、外側から外れれば外れる程に脆弱なる。

二の腕などが良い例か。外側を摘めば『イテテ』程度で済むかもしれないが、それが内側となれば、外の何倍もの痛覚が働き掛けてくる。そして今回も、それに例外は無く。

「豆腐は……大豆やねんで……」

「……そうかい」

想像を絶する痛覚によって、こちらの思考が何十も通行止めになってしまった影響か。絶叫や苦悶の声どころか、別の記憶と繋がってしまったらしい。

我ながら意味不明な発言であったのだが、それは相手にとってみれば、俺以上に意味不明であるのは疑いようも無く。

さつきまで苛めていたリンであつても、とりあえずの同意をしておきたくなる位な状態になっている俺は、入った時と同様、するりと足の裾から抜け出る小さな影を捉えた。

「あの一件から、親しくなってるね。あまり回数は重ねていけないけれど、もう、僕の友人だよ」

とても嬉しそうに。楽しそうに。リンは、初めて手に入れた友という名の宝物を誇っている。

両の手を伸ばし、その上に乗る小ネズミ——【鬼の下僕、墨目】の能力を使用する際に投擲した灰色の存在は、ルビーの色をした瞳をクリクリと動かしながら、何処となくこちらを見下している態度を取っていた。

「……そりゃ……良かった、な……」

「……思ったよりも被害は大きそうだね」

普段なら嫌味などの追撃も行って来る筈なのだが、同情の色が濃い視線から判断するに、どうやら俺の思っている以上に俺の格好は宜しくないらしい。

まあ、それもそうかと自らがとつてる格好を思い出し、納得する。

脂汗に涙目。血の気が失せて視界に星が瞬き、股間を蹴り上げられたように内股となっているのだから、見苦しい事この上ない筈だろう。

「もう言わなくても分かってくれただろうから、これ以上は口を噤んでおくよ。それに、僕も調子に乗った。ごめんよ」

「……いや、いいッス。こっちも悪かったッスから……」

ここまでしつかりと嘯まれたのは勇丸の時以来か。

あの時の歯型は二週間程度で消えたから良いものの、今回の場合はどうだろうか。少なくとも、しばらくは確実に残るんだろう。と、心の深くで静かに涙する。

「あらあら。リンはツクモさんと、こんなに関しくなっていたのね」

ニコニコするウイリク様であるのだが、その表情にはからかいの文字が浮かび上がっている。こちらの事情をしつかりと認識した上で、冗談を述べているようです。からかわれるのは嫌いじゃないが、今はもう少し同情が欲しいところです。

「……いや、自業自得、自業自得……」

自己暗示も兼ねて、二度ほど詠唱。

因果応報を嘯み締め、

（——次はもつと上手くやる！）

嘯み締めたものが栄養となるのは、ヒジョーに時間が掛かるだろうと、第三者のように感じた。

「……うっし。……そういや、そいつに助けてもらったところもあるんだよな」

あの時からお礼の一言も告げていなかったと思ひ返し、膝を折り、リンの両手に乗る小ネズミと目線を同じにする。

「……あの時は助かった。お陰で、無事、こうしてみんなで居れる未来を掴み取れた。――」

——どうもありがとう」

チュウ、と一声。

すんすんと宙の匂いを嗅ぐ動作の後に、リンの服の中へと走り、消えてしまった。

「ははっ。人間にお礼を言われるなんて思ってもみなかつたんだらうね。恥ずかしい、つてさ」

「そっか。そりゃ、悪い事をしちゃったかな」

体を小ネズミが這い回る感覚によつて、くすぐつたいと僅かに体をくねらせるリンに、見た目の年齢相応の、暖かいものを見た気がした。可愛いものだ。このままこねくり回してしまいたくなる程に。

(……勇丸う)

そんな戯れる光景を見たせい。今は遠き、愛犬……もとい、忠犬の名を思い返した。感触を思い出すように宙を搔く手は、虚しく空を仰ぐばかりで。

「……でも、次からはもつと女の子の扱いは心得て欲しいよ。ツクモはその辺りの気概が皆無だから、この先も不安でしょうがない」

とりあえず、の抗議の声。

郷愁の念を振り払い、内心を誤魔化すように、からかい半分、本心半分の、ふざけた言葉を口にする。

「そりゃ、こんな可愛い女の子ですもの。苛めたくなるのは男の性ではねえでしょうか」
数日前なら顔を真っ赤にしてくれたんだらうが、まんざらでもなさそうな表情で苦笑する様子に、この手のやり取りに慣れてしまったのだと判断する。

「うう、悲しいぜい。少し前はあんなに可愛げのあつた娘が、今じゃこんなに……」

「君の娘になつた覚えはないんだけど……。ま、君の後光があるのなら、それも悪くは無
いかな。——お母様にさえ手を出さないのなら、ね」

にんまり晒うネズミ妖怪様に、へいへいと微妙な返答を行い、肩を竦める。

いつの間にか心を立て直した小ネズミがリンの肩に出現しており、同意するように鼻を動かしている。

(……あ、これ、『ナズーリン』っぽい)

記憶にある絵図には遠いが、何割かが合致し始めている現状に笑みがこぼれた。

後は青いネックレス……ペンデュラムと、尻尾の籠に、方位ロッドを持てば完璧か。

「どうしたんだい?」

「んー? 答え合せつばい展開になって来て、ちよつとドキドキしてるだけー」

何言ってるんだ気持ち悪い。

ジト目な、そんな表情が見て取れるネズミ少女様ではあるけれど、俺の内から込み上がって来た興奮は、冷める様子を見せない。しばらくは続きそうだった。

ふと視線を動かせば、自己の世界に閉じこもってしまいそうな位に熟考しているクベーラを、微笑ましいもの見る目で眺めるウイリク様が印象的で。

(近い……でも相容れない隔たりを感じるツス……)

男と女だ。一瞬、それな連想が脳裏を過ぎるが、ウイリク様の顔があまりに楽しそうなものだから、すぐさま否定されられた。

その辺りは女王——女王様のような気はするが——としての気質なんだろうとか強引に納得する方針で眼を背け、事態の進展を図るべく、思考を働かせる。

「これで、後はクベさんの……神様達の出方次第、か」

「うん……。そうすれば……。そうなれば、お母様だつて……」

リンと共に過ごすと宣言した女性は、しかし、その具体的な案を提示してはいなかった。

周囲はただっ広い砂漠であり、水源は岩肌剥き出しな、このダン・ダン塚だけ。唯一の食料源確保なタツキリ山は消滅し、この場に留まれば死、以外の何も無い。

……と、思っていたのは俺だけだったようで、親子水入らずで旅をするのも悪くない。との考えを持っていたウイリクに逞しさを覚えたのは記憶に新しい。

多少の武芸は心得ているらしく、自分と娘の命を守る程度なら大丈夫との事。

『妖怪相手だと難しいけれど、人間であれば、何人掛かって来ても、切り飛ばして差し上

げられますよ』

「そういうや出会ってすぐに、俺の首を一閃しようとしていたのだったかと、沈殿した記憶が蘇ってきた。

暗器使いなのだろうか。しかも切るだけではなく、飛ばすとはこれ如何に。

それなら大丈夫ですね、と笑顔で相槌を打ちながら、身震いする体を落ち着かせるのに一苦労でありました。

「……つてか、クベーラ、熟考し過ぎじゃね?」

「気のせいか、頭から湯気が見える気がするよ」

心無しか、神様のおめめがグルグルと渦を巻いている気さえする。

自分と無関係の相手であれば楽しい有様だが、これがこちらの未来に直結する……してしまふのだから、指を咥えて眺めている訳にもいくまい。

「——そうかつ! これならばっ!!」

今までの喧騒を一刀両断する、我悟りを得たり。なクベーラの歓喜。

孔明先生とか文若さん還したのは早計だったかと思ひ掛けていたのだが、クベさんの喜ばしい態度を見るに、どうやら杞憂で済みそうだ。

「それでは九十九様、参りましょう!!」

「……はっ?」

全く触れられた感覚は無かったというのに、気づいた時には、俺の体は飛翔戦車の上に乗っていた。

「え?」

「しっかりお掴まり下さい——はあ!」

神速とは、文字通り、神の速さの比喩である。

リンも小ネズミも、ウイリク様すら疑問の声を上げる間もなく拉致られた俺は、嬉々として空を翔ける戦車の上で、しばらくの間呆け続けるのだった。

55 大地創造

クベーラの操る飛翔戦車の上から見る景色は、文字通り空を飛んでいる視点である為に、それはそれは色々なものが見える訳でして。

しかしながら、見えるものは景色だけには留まらなかった。こちらと同じく空中に……それも、そこかしこに見て取れる物体がチラホラと。象の頭やら、鳥の上半身やら。他は……キ〇グギドラの親戚なのかと尋ねてみたい多面顔やら、真つ黒とか真つ青とか真つ白とかな肌な方々とか。数にしてそう多くは無いのだが、誰もが一筋縄じゃあいかないだろう雰囲気をこちらに叩き付けて来ている。

——敵対姿勢は取らない。

そう公言させてから【素早い支配】の亜種である、ダメージを一切受けない性質の【マナ結合】による【土地】の連続召喚を行ったのだが……。

『マナ結合』

1 マナで、緑の【エンチャント】

自らの手札から、好きな数の【土地】を場に出す事が出来る。この能力を用いて【土地】を出した場合、残りの手札は全て捨てる。

【素早い支配】の亜種であり、調整版。元になったものはその性質から、非常にコンボに向いていた為に調整を施されたものがこれであり、手札を溜め込む傾向の強いコンボデッキの動きを大きく制限するデメリットを付与させたものとなっている。

(……ああ、でも、インドの神話のやつらって、主だったキャラでも騙し討ちスレスレの

手段とか、えげつない計略とか色々やらかしてる奴やら面やらもあつたんだよなあ)

神様だからと、相手を信じたのは早計だったか。

——何故、こんなやつが。

彼ら……あれらの姿からは、そんな文字が浮かび上がっているのがバツチリと分かってしまう。これは喧嘩を売られているのだろうか。そう思い、感じ、応えてやるように蔑みの視線で睨み返す。

こちらにとつては造作も無い、ただ土地を並べるだけの、こんな事も——この程度の事も出来ないのかと。

脳内の第三者視点の俺が『普通は出来ねえよ』『普通じゃなくても出来ねえよ』『だよね?』『だよな?』と仲良く会話をしながら突っ込みを入れてきたものの、そこは見ない振りをして。と、口を噤んでもらう事にした。

そんな俺の態度がいたくお気に召さないようで、刺さる視線の鋭さは何倍にも膨れ上がるのだが、対・神聖防御な数値はしっかりと上昇しているらしく、息苦しくなる程度の重圧で収まっている。これまでの経験からすればこれくらいの苦痛など、十二分に無視出来る問題だ。

……それに、謂れない非難の視線には、心沸き立つものがある。

全員が全員とは言わないが、己を神聖視している雰囲気醸し出しているのがチラホ

ラと。

(良いねえ。そういう思想は大好きだ)

——何故って。

だってそれは——相手が増長してくればくれるほどに——。

「——この度の助力、感謝の言葉もあります」

暗い感情を払拭するように、横から響く男の声——宝物神クベーラのものに、張り詰めた空気が萎んでいくのが分かる。

そこに不快な色は無い。

心の底から感謝しているのだと信じられる、芯に響く、ありがとう、であった。

「……別に。その言葉からすると、もう大丈夫……と思っても良いのか?」

「はい。未だ欠損部分がありますが、これならば百の年を待たずして、元の大地を取り戻す事も可能でしょう」

そりや良かった……のだろうか。

百年以内とは結構長い気がするのだが、元々回復の目処すら立っていないなかったのと比較すれば大分マシになった方なのだろう。

自分でも投げやりな口調で応えてしまったのだが、周囲の神々と、このクベーラという神を見比べて、もう少し自分の態度を軟化させても良いのではないだろうか……と。

今後を考えれば、そう思えてならない。

これが全てという訳ではないのだろうが、少なくとも、この場に居る神々の誰よりも、この宝物神は温和である。少なくとも内心はどうあれ、他者に対して高圧的に出ることはしないのだから。

(殺人犯の中に居る、詐欺師っつーか、なんっつーか……)

周りのイメージがものつそ低ければ、ただ低いだけの相手が相対的に上昇している……ような感覚か。

環境によって、物事の評価など簡単に変わるものだという一例を垣間見た気がします。

「……ただ、一点。お伺いしたい事が御座います」

と、そんなお方から質問が。

……大よそ、その答えが予期出来る為に耳を塞ぎたくなる声であったのだが、こんな近距離でそうもいくまいと、何食わぬ顔を作り、素知らぬ風に返答する。

「何か？」

「はい……その……」

しばし言い淀んだ後で、意を決した……というより、困惑の方が目立つ口調で。

「これらの……地面……？ は、一体……」

やっぱり突っ込まれたか。

あちやー、と一言内心で呟いて、何食わぬ顔で眼下に広がる広大な地形を見据える。

【ハルマゲドン】による大規模破壊。それを修復する事は、とても【土地】一つで収まる代物ではなく、必然、ぽっかりと出現した空白……もとい暗闇を埋めるべく、大量の【土地】で補填する形を取らざるを得なくなる。

【土地】一つで数キロ範囲を一瞬で作り変えるというチートスキルだというのに、それを複数回使用しないといけないとか……使用した【ハルマゲドン】の性能に身震いするレベルであった。

（流石、白を代表する二大リセット呪文の片割れ……）

しかしながら現在の俺は、同名のカードは一日に一枚しか使えないという制約の下に居る。使い回し……墓地から回収して再び使用するのは可能だが、それには何よりmanaを喰う。

この地に降りて色々経験は積んだとはいえ、それらが改善された様子も無く、予定も無さそう。

なもんだから、先に考えていた通り、カード名の異なる、砂漠に準ずる各種【土地】で補った。

別に自然豊かな大地でも、命溢れる水源でも出せたのだが……。

（お前に食わせるタンメン……ゲフンゲフン……お前らにやあ、何の思い入れもねえですし〜）

知名度的には良く知っているのだが、それは時代背景やら人間関係やら背負って来た歴史やらに対してのものであって、性格とか思考パターンとかの、彼らの内面に関する知識はほぼ皆無。

鈍器本の一角たるタウンペ○ジに記載されている店名をチラつと眺めて知っているだけ、的な。そこには何の感情も挟む余地は無い。抱く印象はそのようなもの。

「別に良いじゃないか。とりあえず暗闇は埋めたんだ。後はそつちで好きにやってくれ」

「は、はあ……ですが……」

一陣の風。その「極寒の冷氣」が火照った……どころか焼け焦がす気満々の太陽の暴力を軽減してくれる。

——こちらとしても、何の対策も講じずに、カード枚数とマナのストックを全て消費したのではない。

【Mana結合】や【素早い支配】を選択肢として上げた際に、ある系統のデッキを思いつき、これは中々悪くないのではないかと思ひ、実行した。

コンボデッキに滅法弱く、【ビートダウン】や【コントロール】……特に【パーミッシヨ

ン) に対して目を見張る強さを誇る、それは。

(当時は貧乏デツキなんて呼ばれておりました、【土地単(とちたん)】の一部で御座います)

『土地単』とちたん

数あるデツキ名の内の一つ。その名の通り、主に【土地】の中の【特殊地形】を主軸として構成されたデツキ名。

勝ち手段は主に二つ。クリーチャー化する能力を持つ【土地】、通称【ミシユラ・ランド】で相手を殴る【ビートダウン】寄りのものと、とある【特殊地形】を出し、【火力】で対象を焼き尽くす【バーン】型……あるいは【コンボ】型のどちらかに部類されるタイプの二つがある。一般的なデツキ内にある【土地】が二十枚程度であるのに対し、【土地単】は三、四十枚以上が【土地】という異常な代物である。しかし、クリーチャー除去、ライフ回復、直接火力、等々。その汎用性は非常に高く、臨機応変な戦法を得意と

する。

反面、デツキ構成の大半が【特殊地形】に依存している性質上、特定のカードを使用した途端に完封され投了、あるいは瞬殺される事もある。

今、この砂漠にポツカリと空いた暗闇を埋めた【土地】達は、【土地単】の構成するカードを参考にした。

見た目は砂の大地だけれど、一部のものはクリーチャーにマイナスの修正を与えるものやら、【土地】を一つ破壊するものやら、色々と。

ただし、クベーラが反応したのは、それらではない。

黄色い大地に、明らかにこの地には出現しないであろう性質の代物がでんと広がっているのだから、無視するには大きすぎるし、寒過ぎる。

何せ一面、氷の世界。【マリット・レイジ】を召喚した【暗黒の深部】とは一味違った氷の大地の連続体が、吹き荒む灼熱の風を、絶対零度のそれへと変えて、天然のクーラー

……いや。これはもはや冷凍庫か。そういったものへと作り変えてしまっている。

北極やら南極やらで見られそうな光景が、今、こうして大砂漠ど真ん中であつた目の前に展開されてしまっているのだから、何か一言、言わずにはいられなかつたんだろう。(何となく……これが原因で他の神さんから睨まれてるんじゃないかと思わんでもないです)

名を、【氷河の割れ目】。

非常に強力な能力を持つ【特殊地形】である。

『Glacial Chasm／氷河の割れ目』

【特殊地形】の一つ。古いカードである為、日本語表記のものが存在しない。

これが場に出た時、【土地】を一つ生贄に捧げる。そして、これが場に出ている限り、自身がコントロールするクリーチャーは攻撃が不可能になり、代わり、自身に与えらる、あらゆるダメージを軽減し、ゼロにする。

非常に強力な能力を有するが、当然ながら、そんなものが安易に使用出来る筈もない。使用ターンの経過すればする程に、2点、4点、6点と、雪ダルマ式に膨れてゆく維持費——ライフを支払わなければならないデメリットが発生する為、長期間の維持は自殺行為となる。が、その問題点をクリアして運用するデッキも幾つかあり、その内の一つが【土地単】でもある。

砂漠のど真ん中に氷河とか、天変地異にも程があるとは思うんだけども、細部に眼を凝らして見て見れば、徐々に氷が溶け始めているのが分かる。どうやら、周囲の環境に影響を受けているらしい。

すぐに。とはならないだろうが、この分ならば、防衛的な意味でも、大地の修復的な意味でも、充分に時間稼ぎとなってくれる筈。その間にこの地の神様ががんばって、自力で修復可能なレベルまで直す事だろう。

ただ、この【氷河の割れ目】。確かダメージ軽減の仕方は、氷河の壁が一切の攻撃をブ

ロックしてくれてるのだが、代わり、氷河の中にい続ける事で凍え、凍死してしまう。というイメージで画かれたものであったと記憶していたけれど、「ダークステイル」……【死への抵抗】の能力宜しく、絵柄とカード効果の採用比率は、カード能力の方に比重が置かれているようでした。

「いやー、下手したら氷河の中に囚われちゃうんじゃないかと内心ビクビクしてたんだわ。無事に足元に出てきてくれて良かった良かった」

「氷、河……で、ありますか。……元は運河であったものを、何故そのような手間を掛けてまで凍結なさったのですかな？ ……そも、何もそのような不確定なものに頼らずとも……」

言い淀むクベーラに、心の中で同意する。

仰る事は最もだと思うのだけれど、クベさんは兎も角、ほぼ完全に他人な他の神々には気を緩める訳にはいかないのです。

特にそれが、何の思い入れも無い奴らであれば、なおの事。

月で高御産巢日を相手にしていた時には丸め込まれた印象が拭えないけれど、今この場の……クベーラ以外は丸め込む素振りすら無いと来た。

リンの事を考えれば……というより、色々な前神っぽい連中……方々であらせられるので、友好になっておくに越した事は無いのだろうが、それをするには些か抵抗を感じ

てしまう。

「他の奴らが絶対に手を出さない、ってんならこんな真似しなくて済んだんだけどな。今だってこんな状況ですし〜」

隣のクベーラにだけ聞こえるよう、不貞腐れた子供の口調で、一段と音量を落として返答する。

それを聞いた宝物神は、むうと唸って黙ってしまふ。確約は出来ないのだろう姿を察するに、色々大変なのね。という同情が沸き起こる。

「……本来ならば、この後、九十九様には天界へと足を運び、インドラ様と会談していただきたい所ではあるのですが……」

周囲の神々のトゲトゲ視線を見渡して、溜め息一つ。自ら口にした言葉が不可能であるのだと理解したようだ。

「これ、あれか。過ぎたる功は身を滅ぼす。とか、そういうった類になりそう……って解釈でいいのか？」

ぼつと出の……何処の馬の骨とも知れない輩を、自分達のトップが持て成す、というシチュエーションが好ましくないのだろうと当りを付ける。

ダン・ダン塚で、ウイリクがこぼした台詞を思い出す。

幾らトップに認められたからといって、以下一同が納得しているかは別の問題。表面

上は理解するだろうが、長い眼で見れば怪しいものだ。こういう所は完全縦型社会の面が強い、妖怪達の組織体系が羨ましい。

まあそれも、時間を掛けて成果を見せることでの改善を図る道もあるのだろうが、俺が長くこの地に留まる気がない以上、無駄な答えだと切つて捨てた。

「申し訳ありません……」

「いんや。別に問題ない。むしろ面倒が少なくてありがたいッス」

「どうやら本当に『そういった類』であつたようで、心苦しさを前面に展開した謝罪を受ける羽目になつてしまった。

苦虫を噛み潰した表情や、四苦八苦する姿は十二分に堪能したので、これ以上の謝罪などはこちらの気分が宜しくない。それがリンの為に働こうとしてくれている相手であるのなら、もはやそれは、心苦しきの方が先に立つ。

そう思つてのおどけた語尾を付け足してみたのだが、見事にそれはスルーされてしまひまして、慌てて話題を作り出し、空気を強引に変える事にした。

「そつ、そつ、そつ、いや平天大聖はどうなつたんだ？ あの後には完全に丸投……任せ形になつたけど。こうして土地の修復に当つてたつて事は、妖怪の山……タツキリ山だけ？ そこに構えてた妖怪達は倒した……んだろ？」

こちらの質問に、短めの深呼吸の後、クベーラは真面目な顔で答えてくれた。

俺とクベーラが雑談に入り始めたのを察したのか、一人、また一人と異形の神々は方々へと散つてゆく。それに合わせ、射殺さんとする視線も消えて行き、未だ何名かの存在は確認出来るものの、悪辣な気配は消え去った。この場に残っている者は、こちらに嫌悪を向ける存在ではないようだ。

「はい。それにつきましては、九十九様の度量を見せ付けるものとなりまして御座います」

俺が去つた後の戦いは、大した山場も無く終わりを迎えたんだそうさ。

雑多な……とはいっても一騎当千クラスの妖怪の殆どが奈落の底へと消え去り、辛うじて残っていた者達は、インドな神様達によつて鎮圧されたらしい。

とは言いつつ、牛魔王を除く他の大聖……七大大聖が最後まで粘っていたそうなのが、多勢に無勢で一網打尽。一名の大聖を除く全員が捕縛されたんだそうさ。

「そも、齊天めが不在であったのが幸いで御座いました。あれの力は平天に勝るとも劣らぬもの。思慮が浅く直情的な分、その俊敏さや直感は、我らでも対抗は難しい」

幸運が重なった。というニュアンスなのは分かるのだが……。

「……知ってる前提で話されても、俺、その齊天？　つて奴が誰か知らないんですが」

というか、数日前まで平天大聖が妖怪か神様か……どんな存在だったのかすら知らなかったし。

リンから一応は教えてもらったけれど、七天大聖というのも似たような名前ばつかで、牛魔王以外は記憶から抜け落ちている。

とりあえず凄い奴なんだろう。という認識はあるのだが、それ以上思考が派生する事はなかった。名も知らない国の大統領とか首相の名前を言われた気分です。

「どれほど前かは詳細に記憶しておりませんが、最も新しく大聖と名乗る列に加わった若輩者にて御座います。天界での地位……高位を寄越せと申しましたので、馬の飼育係……おほんつ……相応の官職を与えましたところ、不服に思い、反逆したのでしたかな」

高位……この場合は、役職の高い位を指す言葉、で良い筈……。官職って言ってたし。……つてか、今、馬の世話云々してもらってなかったかコイツ。

「……それ、お前らが悪いんじゃないかね？」

「何を仰います、九十九様。ワタシク共は一切偽りなど申しておりませんとも。それに、力はあれど傍若無人な輩を上位に据えた場合、一体どれほどの民草の命が失われてしまう事になるか。消え往くものが命ではありませんけれど、ただ悪戯に消費していいものは、決してありません」

そういつて、視線を宙へと這わせ、何かの記憶を思い返すような風になり。

「……あれは何とも、目を覆いたくなる出来事で御座いましたなあ」

何があったのかは分からないけれど、あんまり良いものでは無かったようだ。

「それで結果として離反されてちや、世話ねえと思うのですが……」

などと口に出して言ってみたところ、それは折込済みの事であつたらしく、齊天大聖の実力を知り、対策を立てる為の時間が欲しかった為の……ようは時間稼ぎであつたらしい。

「そして、平天めでありますが……。あれは今、紅葫蘆の中にて封印中であります」

後に金銀の名を冠する妖怪に持たれるであろう、西遊記で一二を争う知名度を誇る……と思う宝具の中に囚われているのだという。

「あれを滅する事は叶いませぬ故に、このような手段にて封じるしか手が無かつた。と
いうのが実情ではありますなあ」

「……確かに、あいつの耐久値には目を疑いたくなる光景だつたなあ」

軽く語尾が被ってしまったけど気にしない。

「弱者の石」で弱らせ、「命取り」で止めを刺した筈なのに、牛魔王はしつかりと生きていた。

実は何処ぞの不死鳥みたいな存在なのだろうかという線も疑っていたのだが、クベラの口から出て来た言葉は、なるほど。と、頷くものであつた。

『『あらゆる傷を癒す』。かつて誰よりも天を統べるに相応しいと言われ、しかしそれを

足蹴にし、天に牙向く存在へと墜ちた者が持ち得ている能力で御座います。その力によつて妖の者達を束ね、大聖と名乗るに足る地位へと上り詰めた。……口惜しい。叶うのならば、ワタクシこそがあれの力を得たかった……」

「……それ牛魔王と何の関連性も見出せねえよ」

もう少し何か理由付けが欲しい能力であつたのだが、西遊記を紐解けば、その能力を持つ理由が分かる出来事やらが書き記してあるのだろうか。

……ただ、ここで俺がポロつと漏らしてしまつた単語に問題がありました。

「ふむ、なるほど……牛魔王、ですか……」

あつ、やつべ。ネタバレですよこれ。

【暴露】でも使つて無かつた事にしようか。それとも、いつそ『我は未来が分かるのだ』的な預言者でも装つてみようか。

……いや、別にヤバくはないのか？ というか何かヤバいんだ？

「……うん！ 何もヤバくはない！」

「っ!？」

選択肢その三、強引に押し通す。を選択&実行。すまんクベさん。出来ればスルーして下さい。

こちらの会話に耳を傾けていた神様やらから、おお、という感じの声色でヒソヒソと

会話をしている。『印象操作』とか、『言ったもん勝ち』とか、あんまり好ましくない単語のものがチラホラと。

「それで!? その瓢箪の中に閉じ込めたお方はどうなるんでしょうか!」

「は、はあ……。えー、それはインドラ様がお決めになるでしょう。今、紅葫蘆はあの方の元にありますので」

強引だったが、路線変更は出来たらしい。

リンと話す時にちよこちよこやっていたけれど、何だかこの手の強制力にだけ秀でて来た気がするのだが、これは喜ばしい事なんでしょうか。どうなんでしょうか。教えて偉い人。

——その後は、空白となっていた穴を埋める形での時系列順な会話が続き、数名だけであつた神様は先の焼き回しの如く、一人、二人と、興味を失つた方々から何処かへと去つていった。

全て話し終えた頃にはこちらに聞き耳を立てる神様は誰も居なくなり、遠目で大地の修復をしている二、三人がポツポツと見えるだけ。

ならばと後は全て丸投げ……ゲフンゲフン……任せる形で、ダン・ダン塚へと帰還した。

ウイリクやリンは既に内部へと潜っていたけれど、同伴していた「メムナイト」に念話で連絡を入れ、塚の近場の岩陰でクベーラを交えての話し合いを行い、今後のあれこれを確かめ合う。

護衛として付近の警戒を行っていた龍人妖怪、睚眦を他所に、終始、ウイリクやリンがクベーラに冷や汗とか浚面を造らせるだけの光景であった気もするが、無理な事は無理だと言っていたのを思い返し、実現不可能な取り決めは結んでいないだろうと思えます。

「それじゃあ、リンはしばらくの間はここでネズミ達を統率して、情報収集の為の組織化。ウイリク様はクベーラとリンとの間の橋渡し。そんな感じで良いのかね？」

「はい。ゆくゆくはウイリク様を間に入れずとも、リン様のみで完結させられるよう、事を運ばせていただきます」

そこで言葉を止めてしまったクベーラに、目線で『まだ言う事があつただろう』と訴え掛ける。

はたと気づき、さも元からもったいぶった言い方であったかのように、話を付け足した。

「その際のお話で御座いますが……ウイリク様」

そう続けるクベーラの姿は、神。

人々の苦悩を取り除き、救いを与える存在が、今まで見て来た中でも最も純粋な微笑みを湛えていた。

「例え人の身であつても、ワタクシへの使者としてならば問題はないでしょう。——宝物神……地下の資源などを管理する立場上、ワタクシの主な活動区域には、地の底なども含まれます。必然、死者が暮らす地とはそうも距離を置かず、近いものとなつております。これより幾万ものネズミ達からもたらされる願いを受けます故に、多忙となるのは目に見えております。然るに、場合によつてはその地で幾日も待ち惚けをさせてしまいます事を、事前に申し上げておきましょう」

わざわざ話しを区切つてまで付け足した内容であるのだから、何かしらの意味はあるのだろうが、その意図が掴めない。

眉をしかめるリンであつたが、とうのウイリクは大きく眼を見開いて。

「——あり、がとう」

震えそうになる声を押し殺し、眼から滾々と湧き出る雫を拭いもせず、深々と頭を下

げる女性の姿がそこにはあった。

「お母様!？」

動揺するリンを他所に、クベーラはそれら出来事の詳細を話します。

特徴を教えて欲しいだの、何処で出会ったのかだの、答えを知らなければチンプンカンプンな話し合いに、とうとうリンが質問しようとして口を開きかけたところで、肩に手を置き、静止をかけた。

どうして止める。と、こちらを見るリンに顔を寄せ、なるべくウイリクとクベーラの会話の邪魔にならないよう小声で、簡潔に。

「ウイリク様の旦那さんと、会う機会を設けてくれるってさ」

息を呑むリンに、笑いを向ける。

そうかと一言呟いて、そのまま顔を下へと向けてしまった少女の背を軽く擦る。ウイリクに引き続き、こちらの真横でもポタポタと砂の大地に煌くものが零れていくのを見なかつた事にして、小さな背中を優しく擦り続けた。

日差しも真横から射す様になって。けれど、今はその熱が心地良い。

(あゝ……疲れた……)

もう、気を張らなくとも良いだろう。

心地良い脱力に身を任せながら、ぱたりと仰向けに寝そべった。

「……ツクモ？」

「疲れた。寝る」

何とも簡潔な応答であつたけれど、まだ、応えただけマシだと思つていただきたい。視線を逸らして眺めた太陽に目をやりながら、それが完全に地平線へと没すると同時に。

「——君に、百万の感謝を。助かった。どうも、ありがとう」

可愛らしい声色に耳を傾けながら、俺の意識は日没と共に沈んでいった。

——気づいた時には、体は横になっていた。

天幕のように覆う「MEMナイト」の腹部が真つ先に目に飛び込んできたものであり、ちよろちよろと動くネズミ達が、今寝ている場所がダン・ダン塚の洞窟内である事を教えてくれる。

横になつたのが夕暮れから夜に入る直後。けれど天上から差し込む光は、真つ白。ど

う見たって太陽さん絶好調な時間帯だ。

「……………む」

と、俺の胸に小さな重み。

首だけ持ち上げてそこに目を向けてみると、やはりというか、納得いったというか、一匹の小ネズミが気持ち良さそうに寝息を立てていた。

諏訪子さんから貰った外套が掛け布団代わりに被せられており、その上にちよこんと乗っかる姿からは、そつと撫でたくなる類の愛くるしさを感じる。

「……………ふへえー」

何だか色々考えるのも面倒臭くなって、どうでもいいやと頭を降ろし、後頭部のゴツゴツとした感触を実感しながら、大きく息を吐き出す。

(結構疲れてた……………もんなあ……………)

少なくとも日付を跨いだくらいに眠っていたようで。

リンやウイリクの姿は見えず、クベーラ、睚眦の影も見受けられない。小ネズミと胸板に挟まれる形になっている、月で貰った青い翻訳宝石が痛いのだが、これが俺の意識を覚醒させた最もな原因であつたらしい。

再び大きく息を吐く。

これが無ければもつと眠りこけていた可能性が高いので、そういう意味では感謝すべきなのかもしれない。

(あー……何もやる気しねえ……)

気力の問題ではなく、体力的な問題で。

動こうと思えば動けるけれど、まどろむ意識を捨て去るのは、中々に誘惑が多くて困る。三大欲求の頂点に君臨しているのは、伊達ではないようだ。

(……二度寝こそ人生の至高!!)

問題があれば、「MEMナイト」が対応してくれるだろう。

内心で叫ぶ言葉とは裏腹に、俺の瞼は完全に閉ざされ——。

——直後に感じる地響きによって、瞬発的に跳ね起きた。

「うお?」

母親に水をぶつ掛けられた子供よろしく、諏訪の外套を跳ね飛ばし、起床。

反動で、上に寝ていた小ネズミがコロコロと前方に転がっていくのだが、今感じた振動は、それに意識を向けるだけの余裕すら奪い去るもので。

けれど、こちらの護衛に徹している「MEMナイト」の反応は薄い。

若干姿勢を低めにするけれど、そこに護衛や警戒といった感じは見取れない。
 (あー、MEMさん。何か事情を……存知で?)

『食料、到着』。返つてきた答えは、そんな簡潔なもの。

多分、ここに住むネズミ達の食料をクベーラが運んで来たんだろうと当たりを付けながら、地響きと共に吹き飛んでしまった眠気に苦笑しつつ、体を完全に起こす。

足元からキィキィと、一匹の小ネズミの抗議の声らしき鳴き声を聞き。

「わりいわりい。謝罪……といっちゃ何だが……」

ひよいと小ネズミを掴み上げ、肩の上へとご案内。

「一緒に行こうぜい」

小さくなった不満の声に、了承の意思を感じ取り、一緒に同行する事にした。

「MEMさん、頼みます」

姿勢を屈める「MEMナイト」に乗り、地響きの音源たる地上方面へと移動する。

恐らく、そこにみんなは居るだろう。そこで事情を把握した方が良い筈だ。

「あー……体、バツキバキ」

僅かな振動で、体の関節の何処かしらからパキポキ音が鳴るのを何とも言えない感覚で受け入れつつ、目的地を目指す。

楽しそうに鳴く肩の存在を手で撫でながら、しばらくの後。

ダン・ダン塚、最大の出入り口へと訪れてみれば。

「あつ、ツクモ！」

パタパタとこちらへ近づくと、ネズミ妖怪様の表情からは、満面の笑みが溢れていた。

今の今まで清々しい労働に従事していたであろう、光る玉の汗をアクセサリーにして駆け寄ってくる様からは、年齢相応の無邪気さを垣間見た気がした。

「おー……こりゃ、凄いな」

どうやって持ってきたのかは分からないけれど、小さな学校の体育館であれば溢れそうなくらいの量の肉やら野菜やら果物やらの食料が、瑞々しさを誇示するように、その鮮やかな彩りを炎天下へと晒していた。

……ただ、その周りに二重、三重にもなりながら、黒い城壁を作り上げているネズミ達には、それなりに慣れ親しんだ筈だというのに、ちよつと引く。

牛魔王へと挑みかかっていた時は勇ましが目立つ印象であったのだけれど、今回は欲望……食欲が根底にある為か、彼らが聖に属するものでは無いのだと理解するに足る光景であった。

「クベーラは第二陣を手配中で居ないけど、夕暮れまでには、この倍は持つてくるらしい

よ。お母様はそんな神様と同行中。色々と見たり知ったりしておきたいところがあるんだって」

何処にこんな大量の食料があつたのか疑問は尽きないのだが、こうして手配してくれたのだから、これ以上は何も言うまい。元から何も言つてないが。

「そ、つか。……で、何で今はみんな『待て』状態になつてんの?」

「たまたま、だよ。誰が静止している訳では無いんだけど、全ての食料が出揃うまでは。と、みんなが自主的に自粛しているだけなんじゃないかな。……あの大妖怪中の大妖怪。七天大聖が頂点の平天大聖に自らの牙や爪を突き立てた事実が、彼らの中で自信へと繋がつたみたいなんだ。ちよつと驕つた言い方になるけど、ただの獣から一步を踏み出したんだと思うよ。早い話、カツコ付けたいのさ」

「驕つちやいないさ。あの巨大な白牛相手に一步も後退をしなかつたんだ。俺が同じ立場だったら、尻尾巻いて逃げてたかもしれないのに、我が身も省みず挑みかかつてくれた姿は、誰に恥じる事もない勇ましきだつたぞ」

リンは少し頬を赤らめて、人差し指で頬を搔き、照れた表情を浮かべる。

「……うん。そう言つてくれるのなら、彼らも命を懸けた甲斐があつた、かな」

「あー、まあ、色々積もる話でもあるが……」

視線を切つて、目の前の、うず高く詰まれた食料を取り囲むネズミ達へと顔を向ける。

姿勢を屈め、クラウチングスタート。足元の地面は砂地と岩場の混合地帯。その辺りの見極めが勝負を決める筈だ！

「えっ？」

戸惑いの声を上げるリンを他所に、内心、『勝った』と勝利宣言。

「一番頂きいいいいい!!」

背後に砂塵を巻き上げて、全力疾走を実行。

あつという間にリンや小ネズミ達を後方へと置いてけぼりにし、前方の食料山へと躍り出た。

「——子供か君は!!」

抗議（正論）を無視し、より一層足に力を込める。

寝起き直後&抜け切らない疲労のせいか、結構空腹な筈なのに、胃袋さんは元気がありません。なので、肉系はちよつとノーサンキュー。

今の獲物は、左前方。小山と化しているその一角。南国旅行番組やらでしか見た事の無いような各種フルーツ系。果物系も一般的なものは殆ど口にしてきたと思うけれど、視界に映る色彩豊かな果実達には、こちらの食指も動こうというもの。

何より、喉が渴いている。そんな、この如何ともし難い欲望を満たすのは、目の前のご馳走以外には無い訳でして。三大欲求の内の最上位はある程度満たしたのだ。次席

である食欲に走るのは、必然であったと言える。

「……ん？」

……しかしながら、自分の手でダムを決壊ボタンを押してしまったのだと、その直後に理解する羽目になろうとは。

自重や自粛を覚えた彼らではあるけれど、誰かに獲物を奪われるのを、ただ黙って見過ごすなど在于り得ようか。

「ッ!？」

背後に、波。

赤い眼光を爛々と灯しながら地を駆ける無数の黒津波——ネズミ達は、人間との徒歩の幅の差など、在って無いかのように覆し……。

「ぎゃああああ!!」

予想以上の足の速さに驚く間もなく、俺の体は小さな生物たちに轢殺されてしまうのだった。

「おお、本日はまた、随分と楽しげな催しを経験なされたようで御座いますなあ」

僅かに残っていた果実を、纏めて口へと放り込む。

夕日から逃れるべく、岩場の影で不貞腐れボーイと化していたこちらに、初めて出会った時と同様の衣装を纏っているクベーラが声を掛けてきた。

少し離れた所には、無数の貨物。空を飛ぶと思われる巨大バナナっぽい船の内部から、天界の中でも下つ端っぽい者達が、嫌々食べ物を降ろしていく光景が見られる。

「……ちよつと何千匹かに踏まれただけだ。屁でもねえさ、こんなもん」

「で、ありましたら、せめてお顔の足跡くらいはお拭きになられるのが宜しいかと。それとも、何かそのままで居続ける事に意味があたりで？」

「いや、あるにはあったんだが、それも今済んだ。ちやつちやと拭いちゃいます」

首を傾げるクベーラに応える事はせず、シャツの襟辺りを掴み、顔をゴシゴシと擦る。

……別に、俺の惨状を誰も突っ込んでくれないので『ぼく、何かありました』アピールのまま誰かにかまってもらおうとして、ブスーつとし続けていた訳では決していない。クベさんが突っ込んでくれたので結構満足したなんて、微塵もないのである。

「えーつと……ウイリク様は？」

「あちらにて、配下の者達に指示をしております。リン様もそこに加わり、作業は滞りなく」

「ここからその姿は確認出来ないが、クベーラの言うとおり、何の停滞する素振りもなく運ばれてゆく物資を見るに、順調そうに物事は進んでいるようだ。」

「やはり不平不満は表れましたが、インドラ様の承諾も得られ、現状は安定しております。年内が勝負、で御座いますかな。いやはや、腕が鳴りますなあ」

そう言つて、温和な表情を作る褐色な中年様。

心なしか、戦場で見た時より活き活きとした雰囲気纏つている。どうやら、戦闘方面よりも内政方面が好みらしい。

——ならば。

「……もう、大丈夫……か」

最後まで見届けられない事には抵抗を感じるけれど、とりあえずの未来は明るそうだ。

「——行かれるのですかな」

眩きにも似た音量であつた筈のだが、クベーラにはしつかりと届いていたようだ。

柔らかい表情はそのままに、少しの悲哀を伴つた笑顔となつている神様は、大和の頃の神々を連想させるものであつた。

何もかもが違うのに、月の国での別れ際に依姫から言われた台詞と被り、ちよつと心が重くなる。

「……まったく。初めっからそういう風だったら、俺だつて終始丁寧な応対してたつーの」

「立場故……。と、言い訳したくなるのを許していただければ助かりますなあ」

一頻りの苦笑。

互いに満足し切つたところで。

「……うん。明日にでも行こうと思つてる」

テキパキと動くネズミ達を眺めながら、零すように、質問に答えた。

しばしの沈黙。

大地へと没し始めた太陽を眺めると。

「後の事は、お任せ下さい。確約出来ぬのは心苦しくありますが、最悪の場合が訪れたとしても、ウイリク様とリン様の命は守り通してみせましょう」

「そう言つてもらえると助かります、つてな。……うっし。んじや、ま、これで心置きなく帰れますよ。つて事で」

考える人、に成り掛けていた体を起こし、背伸びを一つ。

吊りそうな感覚に慌てて姿勢を元に戻して。

「クベーラ。この後、空いてる?」

「義務はうず高く積まれておりますが、九十九様のご要望を断る域の案件はありませんなあ」

素直にOKと返してくれても問題無いと思うのだが、これはもはや、コイツの癖のようなものなんだろう。

(そういうや高御産巢日なんかも、こんな感じの言い回し好きだったなあ)

今頃は禁固刑の真つ最中なんだったか。

何処で禁固されているのかは知らないが……今は何をしているのだろうか。

(永琳さん達が地上に来た時には、何か暇潰しの道具とか贈れるように計らってみるべきか)

甘いんだろなー、なんて思ったりはするのだが、全部終わった……綺麗? に片が付いた物事。何もかもに区切りを付けた訳では無いけれど、全て無視出来る範囲内。

(……その辺交えて、もう一度くらいは月に行かねえとダメくさいなあ)

まあ、彼らの寿命は有って無いようなレベルなので、何十、何百年後とかでも構わないだろう。

「んじゃ、付き合え。飲んで騒いで愚痴って笑って。少なくとも退屈はしないだろうし……まあ、ネズミ様達への顔合わせだと思えば。……どうよ?」

「申し上げました通り、それを断る理由は御座いません。天界へと一報を入れましたら、すぐに」

荷降ろし終えて、撤収作業へと入り始めた天軍へと歩いていくクベーラの背中を見送る。

その先は、テキパキと身振り手振りで指示を飛ばすリンとウイリクが。彼女達にも何かしらの話があるんだろう。

「さ、つてと……」

気だるい感覚は未だ残っているけれど、マナ&カード枚数はフルストック。特筆すべき維持費は「今田家の猟犬、勇丸」の1マナくらいか。

（やり放題だな）

やりたい事は幾つかあって、それはすぐに実現可能で。

（あの辺りだったらダン・ダン塚も届いてなかった筈だし、【土地】出しても、それも影響無いよな……）

とりあえず、リンを反してネズミ達に指示を送らなければ。牛魔王に用いた【沼】的な状態にさせる訳にはいかない。

（イメージは夜のリゾートビーチ！）

昼間に泳ぐのも楽しいけれど、夜に水遊びというのも一興だろう。光源の確保は……

まあ、夜に強い妖怪が殆どだから、俺とウイリクの二人分どうにかすれば、後はあんまり問題は無い筈だ。

水遊びをしようと前々から考えてはいたので、それが出来そうな機会が訪れたのであれば、それを実行しない手はない。

「何出そっかなー」

楽しみだけの選択肢とは、何と幸福な事なのだろう。

溢れ出した喜びが口から零れて音となり、月と太陽が競演する僅かな時の間を通して、リン達の方へと駆け出すのだった。

56 温泉にて《前編》

一日の疲れを落とすのには、睡眠は勿論として、やはり湯に浸かるのが一番ではないだろうか。

諏訪子さんの秘湯よりは……まろやかさ？ が足りない気はするけれど、高めの湯温は肌寒い外気も相まって、これはこれで気持ちの良いもんだ。

頭上に輝く満天の星空と、太陽かと思えそうな月の光。それらを時折覆い隠す湯煙が、より一層の風情を演出している気がする。

「んーっ！ ……はあく……」

蕩け切ったお顔のネズミの少女はご満悦。

他の顔ぶれも見渡してみても、その表情には満足の文字が読み取れる。

「湯浴みは幾度かしましたが、壁も天幕も……夜の帳の中で。というのはこれまで一度もなかった……かしら。……ん……。ツクモさんの、故郷の……でしたか。趣きがあつ

て宜しいですね」

背にした岩場からお値段高そうな白い手拭いを取り、それで額の汗を拭いながら、ウイリクが心地良さげな吐息をこぼす。

声色だけでも結構悩ましい感じではあるのだが、それだけに意識を向けてもらえない状況なのは、不幸中の幸い……であると思う事にする。

……本来なら夜のビーチを意識した場をセッティングしたかったんだが、俺が眠り扱っている間に皆様色々動いていらっしやられたようで、とてもお疲れのご様子でありました。

流石にそれじゃあ遊べねえでしょうってんで、娯楽方面からリラックス方面へとシフトチェンジ。水遊びという方面からは遠退くけれど、カテゴリ的には似通った沐浴を採用する事にした。

継続的な体力回復効果を持つ【エンチャント】である【覚醒】を発動。体力面での労いをそれとして、精神面での癒しを露天風呂——【温泉】でもって補おうとした……のだが、【覚醒】は兎も角として、【温泉】自体はそもも大きなものではなく、ダン・ダン塚で暮らすネズミ達全員を楽しませるのには無理があった。

【温泉】に似通った【土地】もあるにはあるのだが、思い出せる範囲では、とてもじゃないけど『良い湯だな』的な、楽しめるようなお気楽な代物は該当せず。こちらを殺しに来るような荒々しい水源や、熱風のみで焼死しそうな鉱泉とか、そんなのばかりが思い起こされる一件でありまして。

なので、ネズミさん達には申し訳ないが、ローテーションで入浴する案を採用。一番風呂は、俺達四人となりました。

【温泉】は【土地】に付与させるタイプの【エンチャント】であるので、どうせなら彼らの望むものが良いだろうと思ひ、何度目かの【禁断の果樹園】を創造。

出現してまだ数時間も経っていないと思うんだけど、もう食い尽くされた感が漂う雰囲気なのは、俺の錯覚なんだろうか。どうなんだろうか。

「いやはや、これは良いですなあ」

クベーラの声に近い。

四人で入浴する分には中々に広いここ【温泉】ではあるけれど、どういう訳だか俺の周り数メートルの範囲内に、リン、ウイリク、クベーラがご同伴している訳でして。

「えもいわれぬ開放感と、背徳感。これは是非とも我らの間に取り入れたい文化で御座います。金の湯船や琥珀の大釜では何度もありますが、やはり自然の中に居てこそ。と実感させられますなあ」

特にクベーラ。ほぼ真横。

一瞬『アツー!!』な関係がガンガンと警鐘を鳴らしていたのだが、何の素振りも見せない状態がしばし続き、とりあえずのリラックス状態を維持するにまで安心するに至る。

それが原因で周囲の……というより若干名の色香に酔いしれる余裕がなかっただけでもあるのだが。

「俺んところじゃあ、基本は着衣NGなんだけどな。他に誰が入る訳でもなし、今回は無礼講ってことで。機会があつたらその辺確認してから浸かると良いぞ」

今現在、俺含む全員が厚手の白いサリー……のようなものを全身に巻いた状態で入浴中。

クベーラが持っていた物らしく、非常に残念……もとい、大変質が良いもののように、水分を含んでも透けて見えたり、体の輪郭をしつかりと浮き上がらせるといった効果は無い。

……無い、のである。チクシヨウ。

「しばしば御座いましたが、九十九様のお言葉には、妙な力が宿っておりますなあ。まったく耳にした事の無い単語でありますれど、まるで幾年も慣れ親しんだように、とても耳に馴染みます」

……？

一体何のこつちやと首を小さく傾けて、尋ねる風な視線をクベーラへと向けると、蕩けた表情はそのままに、リンが声のみで俺の疑問に答えてくれた。

「えぬじー。と言っていたじゃないか。少なくとも、僕達が暮らしていた地では、そんな言葉は無いよ。……確か……そんな発音をする……単語を使う国が西方にあつた筈だけど、ツクモが住んでいる東の島国は、それが母語ではないんだよね？ ……んく……もう言葉が混ざり合う程に国同士の交流が盛んなのかい？」

おつふ、そういう事か。納得納得。

「YESでもあり（過去のな意味で）、NOでもあり（現在のな意味で）。黙秘権を行使しまーす」

そう応え、ぶくぶくと顔を湯へと沈める。

体の芯からぼかぼかと。入浴前に、周囲に山積していた雪をこれでもかと【温泉】内部に投入しているので、とても良い湯加減です。

緩みまくりな状態に触発されてか、口調も気の抜けたものへとなっている。

言われた途端に用いた外来語。これに関してはMTGは関係無いし、ネタバレが発覚したとしても、数百年後までは意味の無いものだ。その時には神様は表舞台からご退場されている事でもあるし、思わせぶりの言動で楽しみつつ、もう少しくらい説明しても

良いだろう……。ということ、早速、外来語の受け答えで応えてみたのでした。

「ぷっは。まあその原因……というか理由は、これのお陰だな」

再び湯から顔を上げて、首に下げていた青い宝石を掲げる。

一同の視線が集り、凝視。特にクペーラはとも興味をそそられているようであった。

「空の上で貰ってきました、翻訳機でござい。これが無いと、この国……この辺りの言葉とかまったく分からんのですよ、俺は」

英語ならいざ知らず、多分インドな発音とか文字とか微塵も理解出来る要素は備えていない。まだ一度も勉強した事の無い中国語の方が、漢字の意味が薄々察せられるだけマシなレベルである。

（腕輪と翻訳機の干渉が……。とかで、めっちゃ悩んでた……んだっけか）

まだ実験に付き合っていた頃、検査が終わりフリーとなったので、折角だからと労いの差し入れ、ジャスミン茶を届けた際に、研究室内で熟考していた永琳さんの姿を思い出す。

あの時は何をやっているのかと思っていたけれど、それがこちらへの贈り物を用意していたのだと分かった時には、こそばゆい気持ちになったものだ。

……サラっと、『九十九さんの脳に……すれば解決……』とか漏らしていた気もする

が、あれは多分気のせいだ。俺も疲れたせいで幻聴でも聞こえたんだろう。うん。

……現状、使用に何の異常も無い事から、問題は解決したんだろうが……もしかしたら……。

「そういえば、君は出会った頃に空の上から来た、と言っていたね」

リンの言葉に意識が戻る。

これ幸いと、変なところに向かい始めた思考回路を切り替えた。

「ですです。……あん時にやあ、まさかこんな展開になるとは思ってもみなかったなあ」

言われ、これまでの経緯を思い返す。

どうにも辛勝であった感が拭えないので、もう少し効率の良い「シナジー」とか「コンボ」は無いものかと眉をしかめるのだが、リンの質問に答えるのを忘れていたのを思い出す。

「……はあ」

けれどこちらの沈黙が続いたのを話す気は無いのだと判断したようで、軽く息を吐くに合わせて、それらを追求する意欲も吐き出してしまったらしい。先の質問の答えを得るのは諦めたようだ。

ぬう、別に誤魔化す気は無かったのだが……。まあぶり返して説明するのも面倒だ。知りたくなったらまた聞いてくるだろうし、その時にきちんと応える事にしよう。

「……こんな展開。なんて、それは僕の方こそ言いたい台詞でもあるんだけどね。……その点に関しては、お母様も、そのクベーラ・サ・マ、も同意だろうさ」

リンの言葉に、肩に湯を掛けていたウイリクが追隨して話し出す。

サマを一音一音区切っている事から、宜しくない感情がありありと伝わって来ます。

「ええ、本当に。あなたがリンと出会っていないければ、一体どうなっていた事か。どう考えを巡らせたところで、現状以上には為り得なかつたでしょう未来は、想像に難くありません。……尤も」

チラと甚振るような眼を、ウイリクはクベーラへと向けた。

その目……眼光は、優しいものではない。責任を追及するような、過失を責める意図が見える。

「ヴェエラが手を出していないければ。あるいは、しっかりと手を貸してくれていればどうなっていたか。は、こうなってしまうしたので、定かではありませんけれども」

「在り得たかも知れぬ未来を幾通りも思い描くのは、とても楽しい逃避でありますなあ」
数刻前ならタジタジとなっていた宝物神であったが、反す言葉は中々に棘がある。

……しかしながら、よもや、続く言葉でこちらが押し黙る羽目になろうとは、夢にも思っていないかつた。

「——何百年前かは思い出せませんが、ウイリク様が住まう……住んでおりました国

の付近の地中を宝物庫としていた頃が御座いましてなあ。区分けの如く、そこには一種の玉のみを保管しておりましたが、いつの間にもやらそれを人間が見つつけ、いつの間にもやらその上に家を建て、城を築き、国を造り。ワタクシが気づきました頃には、方に届く民草が営む地へと変貌してしまいました」

クベーラの暴露話？ によつて判明した事は、ウイリクが洩面を造るに足る内容であつた。

（泥棒……先に悪さしてたのはこっちです、つてか……）

分かるかんももん！ ……と声を荒げてみたくもなるけれど、もしその話が本当ならば、元女王様の心中は穏やかでは居られない筈。なんてつたつて、先に手を出していたのはこちらになるのだ。善悪の視点が一気にひっくり返つてしまう程の爆弾発言である。

「……そのご様子のみで、ワタクシは満足で御座います。どちらも一方的なものとなつてしまいました、あなた方は国を。我らは信仰と大聖相手の勝利を。——それが等価かどうかはさて置くとしまして、対価は充分に求め尽くしたのではありませんかな？」

熟考するウイリクとリンとは反対に、普段通りののにこやかなクベーラが際立つて見える。

「良きかな良きかな。これでもし『そんなものは知らない』など申されましたら、今後の信頼関係には不安が付き纏う間柄となつていたでしょうからなあ。やはり物事は、誠意を以つて挑まねばなりませんなあ」

傍から聞いているとすげえ胡散臭い物言いではあるけれど、内容自体は深く頷くものがあるのです。

「さあさあ。得難い経験は、これつきりに致しましょう。心中、悩ましいところは御座いますでしょうか——」

湯に肩まで浸し、宝物神は月を見上げて。

「怨敵とし、敵対し合う道も御座います。しかし、これまでの全てを認め合い許しあう道も、今、我らの目の前に。如何で御座いましょう。小さき勇兵を統べる將軍様。そして、それらを従える王女様」

クベーラの見つめる先には、二人の女性。

それはつまるところ、女王様とはウイリクの事で、將軍様とはリンの事を指すのだらう。

（おお！ 『ナズーリン』の二つ名に近づいた！）

ニュアンス的に、ネズミ達を指揮する立場であるから將軍であり、その上……？である存在だから王、とでもしたんだらう。リンは別としても、元々ウイリクは女王で

あつたのだ。その表現に疑問は無い。

表面上はまつたりと。内面的には期待がマツハな光景に、いよいよ過去が未来に追いついた！ な展開を想像していたところに。

「……ん？」

にこやか。から、軸がズレて、にんまりとした笑顔に染まるクベーラに、結構熱めの湯温であるというのに、どういう訳だか背筋が震える。

「初めてお会いしましたあの頃より、かねてから心惹かれております」
ずいど迫る褐色の中年男。

口にする台詞は、状況によつてその意味合いが変わる厄介なもの。

岩石を思わせる体躯は赤銅の塊を思わせ、元々兼ね備えている神気と相まつて、威圧感が半端ない。後、俺とクベーラとの距離。

「近い！ 話は聞くからあんま近寄んな！」

「これはこれは。ワタクシとした事が」

浮かした腰を再び湯へと沈め、落ち着いた表情でこちらを見つめて来るクベ様は、ヒジョーに期待に満ちた目の輝かせ方をしていらつしやる。

「九十九様。あの時にウイリク様にお出しした甘味を、再び食する事は可能で御座いますかな？」

……予想していた内容のどれにも合致しない話に、一瞬、自分の目が点になるのが分かった。

「……あ、ああ……うん……。出来る……けどもさ……」

【覚醒】の4マナと【温泉】の2マナで、【ジャンドールの鞍袋】を出す2マナは、しっかりと残っている。カード枚数だつて超余裕。【ピッチスベル】二回くらい使つたつてまだ余力があるくらい。

……けれど、素直にそれに応えるのには洩つてしまう。恨み辛みを抱き続ける状況ならまだしも、今はそれらを全て清算し、共に歩いていこうと足を踏み出したというのに。
(……ちつちえなあ、俺)

これからの事を考えれば、居なくなる俺よりも、リンやウイリクの為に尽力するのが最善である。そう、頭では分かっているというのに、感情がその邪魔をする。

……自己的には兎も角、大局的に見れば、これは少なくとも、良い思考ではない……
筈だ。

——大切なものを、守ると決めた。

幾つもの創造作品で見たヒーローのように。幾人もの英霊が宣言した誓いのように。あの、誰もが一度は抱き、誰もが一時は夢見る願いを、俺も信念として掲げたのだ。

答えは単純明快で。道程は踏破不可能な程に険しくて。

ならばせめて、真似事くらいはしなければ。

月の——女の前で大見得切った手前、百歩譲ってまだ『出来ませんでした』はあれだとしても、ただ『やりませんでした』なんて答えなど、己を誤魔化す言い訳にすらなりはしない。

「……ええい！ 雑念退散！ これも目的の為の第一歩と割り切るべし、俺！」

「おお！ 意味は掴みかねますが、承諾していただけたようで嬉しく思います！」

飯を出すか否かの域の雑念を、何カッコつけた風に悩んでいたのだと正論様が突っ込みを入れてくるけれど、『はいはい後でね』とサラリと流せたのは、自分の中で何かのレベルが上がったんだらう。凶太さとか、性根の悪さとか、あんまり宜しくない方面で。

「あつ、じゃあツクモ！ あれ！ あれが食べないな！ 名前は分からないけれど、あの冷たい宝石のような氷菓子！」

のほほんリンさんが我に返り、目を輝かせながら要望を口にする。物事に乗っかるタイミングは上手な様で、羨ましい限りです。

「あー、あれか？ あれはガリガリ……ア、アイス！ うん！ あれは棒アイス的一种です！」

アニメ風に表現するなら、キュピーン！ とかいう擬音が発生していた事だろう。こう、私にも敵が見える！ 的な。

直感を越えた何かによって、商品名の暴露は避けてみた。既に脳内で何度か口に出していたような気も致しますが、そこは忘れる事にして。

名前を濁した後ではあれだけれど、別に大した問題は無いと想うのだが、本能？ が NG を出したんだから、それに従っておくのが吉というものだろう。

「確かにあの歯応えは、音で表現するならガリガリと聞こえるだろうね」

【温泉】の脇に積もっている粉雪を手に取り、リンは自らの頭へと、それを振りかける。『こんな感じかな？』と、余った雪を口へと含み、もぐもぐと。

予想とは違ったのだろう。一瞬、苦笑手前の表情を造り、すぐさまリラックスモードへと再突入。ふう、と心地良さそうな吐息をこぼす。冷たくて気持ちが良いそうだ。

「とりあえず、その棒アイスを何本か。他のも好きだけれど、やはりある程度の食べ応えが無いと味気ないね」

「私は、逆かしら。あの白い草原を思わせる……紙……？ の器に収められたものが好です」

「なるほど、なるほど。数も種類も豊富なご様子。叶うのであれば、全てを味わい尽くしてみたいものですなあ」

おいこら神様。どっちかって言うのなら、お前は願いを叶える側だろうが。何をしれつと立場逆転させとんのじゃ。

……色々思うところはあつたけれど、先に『やる』と宣言した手前、これはとつとと言実行した方が楽なのではと結論付ける。このままのりくりとしていた未来に、幸福そうな結末は思い描けない。主に俺の。

「……ああもう面倒くせえ！ 良いき、やってやるよ！ その胃袋、破裂させないように気をつけやがれ！ —— あ、ウイリク様は調子悪くなつたらすぐに言つて下さいね？

パパつとどうにかしますんで」

「ツクモ、僕には？」

「お前は大丈夫だろ。……というかな、そもそもお前、城の時に何人前平らげたと思つてやがる」

「……三人分、くらい？」

「十五人前だ！ そりや一個一個は小さいけどな！ ハーゲン……カップアイス系四個。棒アイスとモナカ系三個ずつ。詳細は忘れちまつたが……他にもまだ色々喰つて……た……よな……」

数日前のおぼろげな記憶を思い出しながら喋っている内に、感情に熱が入ってきた。話すべき……言いたい台詞を言い切る為に、大きく息を吸い込んで。

「——限度つてもんがあるだろ!? あん時はウイリク様が気掛かりで深く追求しなかつたが、あの食べた量は、そのちつちえ体に対してどうなのよ!? 幾ら溶ければ殆ど

が水分だつっても、短時間でのアイスのガチ喰いとか我が目を疑いますよ!! 後、よく頭痛くならなかったなお前! ちよつと羨ましい!」

「……ええと……食べ盛り……とか……?」

初めて出会った頃、サンドイッチ一つで満足そうにしていたのは、俺の見間違い……勘違いだったのだろうか。

ハラペコ属性とはちよつと違う気がするのだが、甘味大好き女の子であっても、大食漢であるのには変わりないだろう。リンに対する新たな認識が一つ増えた。

と。
リンさん。片目を瞑り、ウインク一発。

「——てへへ」

これ見よがしにおどける仕草に、思わず『おおう』と内心で面食らう。

畜生この野郎。意図するところは分かっちゃいるが、撫で回したくなるくらいに可愛いじゃねえか。声色も妙に意識しやがってからに。多分この声を目覚まし時計とか携帯の着信音とかに組み込めば、大きなお友達でそっち方面が遅しい方々は、一発で反応する筈だ。

「あざとい! あざといですよ! あなたの娘!」

この手の攻撃とか誘惑とか精神干渉とかは、分かっているても効くものだ。男として

は、避け難く、抗い難く。反則技トップ三に食い込む奥義であると思います。

なので、これはあまり宜しくない、遠回しな抗議を親御さんにしてみる訳なのですが。

「遅くなったわね、リン。……でも、まだまだ。色香は追々教えるとしても、あなたくらしいの外見なら、もつと初々しさとたどたどしさを両立させつつ、全面に押し出すものです。今後は……そうですね……肩を竦めるようにしてから——」

まさかの裏切り!?! ……まあ、元から味方であった記憶は無いのだけれど、それにしても指示がやけに的確というか具体的というか、ちよつと他人の家庭事情に口を出してみたくなる。

「チクショウめ! 孤立無援とはこの事か!」

「元来、男とは孤高で居てこそ輝けるといふものでは御座いませんかな?」

満面の笑みなクベーラの合いの手は、助力なのか追い討ちなのか掴み兼ねる印象で。何故だか、女房に愚痴をこぼす飲み友の一人のような慰めを受ける羽目となった。

つまりは味方ゼロ。自分一人で解決するしか手はなさそうである。

いよいよ、月での経験をここで活かす時が来たようだ。……来てしまった、とも言うかもしれないが。

「流されるだけの俺だと思ふなよ! —— お出でませ! ジャン袋おー!!」

流れを制する。なんて器用な真似が、この俺に出来る筈もなく。俺的ニ大常套手段。強引に押し流すか、別の流れを造るか。の内の片割れ——今回は後者を実行する。

水面に叩き付ける様に無手の腕を振り、途中で虚空より出現した【ジャンドールの鞆袋】を掴み、目の前の湯にぶち当てる。

ドパンと快音。激しい水飛沫……いや、もはやこれは湯柱か。それに反応して仰け反る三人に、この場の流れが変わったのを感じ、畳み掛ける様に行動を続ける。

「喰らえー！ ソーダー！ ブドウー！ 梨ー！ の三連弾!!」

「わわっ!!」

ぼいぼいぼいと。リンに向けて、緩い山なりを画く様に打ち出した剥き出しの三本のアイスは、少女の手両の手に一本ずつ。最後の一本は器用にも、ネズミの象徴の一角たる尻尾でしゅるりと巻きつく様にキャッチした。

「よし！ 良い反射速度と対応能力だ！ ——はい、ウイリク様。カツプアイスのバニラ……と呼ばれる味のもんです。ちよつとお湯につけてあげると、周りが少し溶けて食べ易くなりますよ」

ウイリクがしつかりと受け取るのを確認してから、そつと手を離す。

取り出したのは、個人的にお気に入りなハーゲンダッツ。機会があれば、浅草にある老舗のモナカとか、サーティーうんたらなチェーン店系のアイス専門のものとかも出し

てみたいけれど、今は無難なところで充分だろう。個人的にはコンビニやスーパーなどで手軽に買える点を評価したい一品である。

「僕との対応に差があり過ぎやしないかい!？」

リン様の抗議はスルー。今は湯面にガリガリくんを落とさない様、気張っていて下さいませ、小さな將軍様。

「で、お前は何か希望はあるか?」

こちらのやり取りを眺めていたクベーラへと声を掛ける。

微笑ましいものでも見る風な表情に、お前は俺の親父か。と突っ込みを入れてみたい気分です。

「では、ウイリク様と同様のものを頂けますかな?」

「ん……あいよ」

それに応える形で、袋に手を突っ込み、二つ目の小ぶりのカップアイス差し出した。「蓋を開けると更にシートが被ってるから……掴めそうな部分があるから、そこを摘んで剥がしてから食べて。後、食べ終わったら残ったものは回収です」

「その袋といい、この氷菓子といい、東の地とは我らよりも遥かな高みに至っているように、羨ましい限りで御座いますなあ」

上から下から、カップに印刷された文字の羅刹や紋様を食い入る様に見つめるクベー

ラに、修正の意味での合いの手を入れておく。この時代と比べてしまえば、小物一つとつても未知の集合体である事だろう。納得の反応であった。

「それは誤解。これは全部俺が元……原因だ。どつちかつて言うなら、お前んとこの方が文明規模は進んでるんじゃないのか？」

脳内で、火薬を使った武器を所持している筈だという情報が蘇る。

それに釣られる形で、ふと、ウイリクの国が——大敗を喫した軍隊がどうなったのかが気になった。

クベーラが何か知っているかもしれないと思い、アイスを渡すついでに尋ねてみると、それはもう、よくご存知であるらしい。

——簡単に言えば、蜂の巣のつついたような大騒ぎになっているのだ、との事。

大敗した事による目論見のご破算。正規軍は兎も角、半分以上を占める奴隷……食いつ持がまるつと残っている状況。そして、一番の働き手である年代——遠征に参加した彼らの大半が長期間動けないという惨事に、国防どころか、国としての形を維持する事すらままならないと来た。

ウイリクの遺体が消え去ったのも結構響いているようで、怨霊となつて呪いを振り撒くのだとか、国が駄目だと悟り天へと昇つていったのだとか、中には窮する国を憂いて英霊となつて再び指揮してくれるのだという噂もあるそうなのだが、それは少数であ

り、大半は始めに述べた通り、あまり宜しくない方面で遺体が消えた事実を受け取ったようだ。

自壊は時間の問題。国としての体制が保てなくなる事は、埋蔵……埋設された資源によつて避けられるだろうが、規模は著しく縮小される未来は、想像に難くないらしい。これが人間同士の戦争であるのなら、他国はこれ幸いと侵略を企てるだろうが……何せ、相手にしたのが、あのタツキリ山。七天大聖。

敗戦とは、大なり小なり勝つた相手の国の支配を受けるといふ事。つまりは、ウイリクの国は今、周りからしてみれば、妖怪達の巢窟……どころか魔窟や伏魔殿に等しい一帯と映るだろう。

幸か不幸か、それが原因で隣国からの侵略を阻害しているらしい。が、人の流出は止められない。

(……触らぬ神に祟り無し、ツスカ)

とはいえ、その祟り神様の配下は「ハルマゲドン」によつて、拠点込みで地中へとポツシュートさせている。

すぐに気づかれる事はないだろうが、資源の眠る地が、いつまでも放置され続けるとは考え難い。

「懸念は尤も。……で、ありますが、元より資源を得る理由は、損得の均衡の果ての

答え。……九十九様。あなた様が用いられました、極大破壊。あれによって、消滅しました大地以外の地形にも多大な影響が及んでおります」

ハーゲンダッツのバナラ味を頬張りながら、けれど一切淀みなく説明するクベーラに感心しつつ聞いた話をまとめてみると、ウイリクの国に行く道中が、かなりの悪路になつてしまったのだという。

希少価値は生まれるだろうが、道中の過酷さを考慮すると、そこまで欲しいものかどうかは怪しいところ、らしい。

「そういうや資源云々とか言つてたなあ。何、金塊とか油田でも埋まつてんの？」

「(ゆでん……?) ……いえいえ。そこまで大それたものは。翡翠の亜種……: のようなものですかな。様々な色が存在致しますので、それ故の価値が現れている面も強いもので御座います」

ちよつとタメの入った沈黙が気になるが、この程度の間は過去のやり取りでも何度かあつたので、こちらへの回答を吟味してくれての事だと判断する。

そしてその回答であるのだが……: どうやら、そんなに凄いもんじゃないらしい。まあそれは神様側からの価値観であつて、人間側からすればそうではない可能性が高いけれど。

と、そんなこちらのやり取りに何かを感じ取つたのか、ウイリクが思い出した風に湯

から上がり、『失礼しますね』と言いなから、ダン・ダン塚の方へと消えて行く。……お花を摘みにも行つたのか。深くは考えないでおきましょう。

湯上り美人な光景ではあるけれど、やはり衣類がすっかりしているものの為、透けて見えるとか体のラインがハッキリ分かるとか、全く、これっぽっちも無い訳でして。

「……クベさんや。ちよつと上等な服過ぎやしませんかねえ？」

「ほっほっほっ。では、今から天女達を呼び寄せましょうか。何処まで男女の営みを育くむかは九十九様次第で御座いますが、何、あれらの力を見せつけた後なのです。一目散に逃げ出すか、恐怖に震える体に鞭打ちながらの舞いを見る羽目となるか、の二択であります。……まあ、中には、何とかあなた様と懇意なろうとする輩も現れるやもしれませんが」

分かり易いですな。と纏める宝物神の言葉に、月に次いでこっちもか。と頭を抱える。あの時のように、いつの間にか側室云々というレベルにまで及んでいないのが幸いか。

「うゝ……」

唸るように息を吐き出し、その流れで鼻から下を着水させた。

ブクブクと泡が眼下に現れ、弾けた飛沫が眼球に掛かる。すつと目を閉じ、思考をミクロからマクロへとサイズアップ。細かな点で見続けるから気が滅入るのであって、そ

うでなければ、異なる視点が見えてくるだろうから。

「——何の心配も御座いませぬ。不安、懸念は五万とあれど、そのどれもが九十九様の力の足元にも及ばぬ類のもの。それに……」

耳……というより、頭の中に直接囁き掛けるようなクベーラの声に、薄目を開けて、視線だけを向けた。

目と目が合い、こちらが反応するのを確かめた後で、褐色の宝物神は視線をずらし、【禁断の果樹園】に居る無数のネズミ達を見据えた。

「今のあなた様には、彼らやウイリク様もいらつしやるではありませんか。そして、ワタクシめも」

「……はっ、どうだか」

前半は兎も角、後半の人物は何処まで信用出来るか分かつたもんじやない。

そんな意味を込めた返答に、クベーラは微笑みと苦笑の中間のような表情を造る。

「まこと、信頼とは綻び易く、築き難いもの。ことワタクシに限っては、一度失墜させた分、生半可な覚悟では改善は出来ても上昇は困難でありましょう」

何処から取り出したのか、酌でもされる風に差し出された片手には、俺の拳二つ分くらい輝く何か載っていた。

「こんな格好では示しが付かぬものでは御座いますが、これでもワタクシ、他の神々より

は名が通る地位におりまして。——こちらの宝塔をお持ち下さい。簡潔に申し上げますれば、これはワタクシの分身のようなもの。試作品ではありませんが、宝物神としての力の何割かと、これを見せる事で、成されました全ての責をワタクシめに背負わせる事も可能で御座います」

早い話が、代理のようなものです、と。

雰囲気も覚悟もあつたもんじゃねえと思う心境の中、俺の思考はそれに反して、冷静に回っていた。

(代理……？ 宝塔……？ ……将軍……リン……？)

嫌な感じで繋がりがりだした記憶に呆けるのとは裏腹に、俺の手はしっかりと宝塔を受け取ってしまったていて。

はたと気づいて、それを見る。

某虎さんが持つそれよりは装飾が簡素なものの気がするけれど、これは……どう見ても……その……。

「な、なあ、クベー……う、さん」

「……？ 何か」

こちらの「さん」付けに訝しげな表情を浮かべるものの、追求する気はないようで助かります。

「別名とか二つ名とか渾名とか……そんなのってある……あつたりします?」
「……北方の守護者、宝物神くらいであつた筈ですが……」

それが何か、と。

真剣に考えてくれた風のその回答であるので、嘘ではないのだろう。

明確な答えが出て来た訳ではないけれど、前神。という単語の意味も含めて知っている身としては、一気に脂汗が流れ出そうな心境に陥つた。

何故自分でもここまで動揺してしまつたのかは把握しきれていないけれど、一番近いのは……。

(祝福してもらつた筈だつた結婚相手の両親をぶん殴つてた気分なんです)

しかもその後、土下座までさせて菓子折りを要求しているという感じだろうか。

一切そんな状況ではないというのに、一度としてそんな経験などしていないというのに。何故だか、それ以外の言葉が思い当たらないのはどうしてなのだろう。

一足飛びに高まる鼓動。全身から滲み出る脂汗。

教えてえーりん。助けてえーりん。

自動で再生される脳内BGMに合わせ、自分が片腕を空高く振り上げ、そして振り下ろす動作がエンドレスリピート。石鹼屋さんからのバックコーラスまで掛かり始めた思考を遮る形で、クベーラから話し掛けられるまで、それらは鳴り続け……。

「……九十九様、如何されました？」

「ひゅい!？」

氣遣うような、探るような言葉によって、ようやく思考が現実へと戻つて来た。

某お値段以上な河童さんの台詞を先取りしてしまったのをスルーしつつ、これは拙いと冷や汗を流す。

「気分が優れぬのでしたら、お休みになられるのが宜しいでしょう。何、後はこちらで万事整えておきますとも。信頼し切れぬのは重々承知してはおりますが、どうかお任せいただけますよう」

「いつ、いや!？ そうじゃ、そうではないんですがね!？」

乱気流でも宿つたような楽譜を演奏するようにこぼれた返答は、上擦り、を通り越した歪な声色であつたと思う。

刹那の熟考。

【温泉】の熱とは関係なく、一気に血の上つた頭は瞬時に答えを弾き出す。

【ジャンドールの鞆袋】に手を突っ込み、思い浮かべたそれを握り込み、取り出した。

手に握られた深緑色のワインボトル。銘柄の一部には口マネなんちゃらと記されたそれを手に。

「——飲みましょう!？」

不思議そうに小首を傾げるリンを尻目に、やつちまった感を吹き飛ばす勢いで、押しの手を強行する。

こちらの迫力に戦きながらもココクと頷くクベーラに、取っ掛かりは掴んだ。どの手応えを感じながら、思いつく限りの銘酒を取り出して行き……。

「……頭、くらつくらする」

「大丈夫かい？」

事前に何本か出していたそれ——リンにペットボトルに入ったミネラルウォーターを差し出され、項垂れながらもそれを口に含む。吐き気とまではいかずとも、良いか悪いかの二択な体調であるのなら、微妙に後者へと傾く状況でありまして。

二度三度と喉を鳴らし、体内のモヤモヤのリセットを試み……。

「——ぶはっ……うへえ」

改善したかは怪しいものの、さつきよりはマシになった気がする。気分が大事よね、

こういう時って。

「口当たりが良いから騙されそうだけれど、葡萄酒を……こんなに酔いやすいものを一瓶も空けてしまったんだ。しばらくは安静にしておくの良い」

「すみません、お手数お掛けします、リン様」

構わないさ。そう爽やかに言葉を返してくれるのが心地良い。

【温泉】の縁の一角。雪を退けていたそこに、俺は仰向けで横たわっていた。

甲斐甲斐しくも世話をやいてくれるリンに、脳内で『いつも済まないねえ』それは言いつこなしですよ云々』な老人と女性のテンプレやり取りが再生されるものの、それが全て表に出てくる事はない。

吐き気は感じていないけれど、グラグラと歪む視界は、自らの状態が普通ではない事を示している。ようはへべレケ。完全に酔っていた。

お湯を縁に掛けていたので、仄かに温い岩肌には、このまままどろみに沈んでしまいたい気分になるけれど、クベーラがどうなるのかを見届けるまでは、今回ばかりは意識を手放す訳にはいかない。

「体力的には……余裕あるんだけど、なあ」

【覚醒】による体力回復も、意識の覚醒までは範囲外のようにして。

星の光に照らし出されるリンに目をやれば、淡く染まる赤い頬と、とろんと垂れる二

つ瞳。何より彼女の象徴とも言える耳はへたり込み、尻尾は緩やかに、湯の中を左右に揺れ動いていた。とても気分が良いのだと分かる状態です。

（勇丸とかコイツとか、尻尾つてのは感情にでも連動してんのかねえ）

猫とかはそんな事はなかったと思うのだが、ネズミは別扱いなんだろうか。

もしくはリンが特殊なだけかもしれないけれど、見ているだけで、自然と自分の頬が緩む。

「ははっ、情けないなあ」

その反応を酔い潰れたと判断したのか——間違いいではないが——リンはそう言つて、事前に出していたワイン……コンビニでも夏目さんか野口さん一枚程度で一瓶購入可能な、コノスルの赤を飲んでいる。具体的な種類は定かではないけれど、『こんなだったよな？』との曖昧な状態でも食品を取り出せるのは【ジャンドールの鞆袋】の大きな利点であった。

『僕には、まだ早いようだね』

その台詞と共に、リンは大衆向けのコノスルの赤を飲酒するに至る。

高級なワインは何本か出していたのだが、口にしていたロマネさんを脇に置おてからのそれであつたので、どうやら好みが合わなかつたらしい。

折角なんだから高いのを。という気持ちは湧き上がるものの、その辺りは本人が好き

なものを飲むのが一番。というか、俺も正直なところ、日本酒かビール系なら兎も角、ワインとか他の海外製の酒の味は殆ど分からない。というか知らない。機会が無かったし。今も飲んでないし。

かしこばった席でもないの、今は楽しめればそれが一番なのだ。余計な事は言うまいて。

(けどなあ……その手の酒って、結構度数が高い筈なんだが……)

一瓶まるごと抱えて手酌をするリン様に、何やら敗北感を覚えます。

酔っ払い状態になっているのは間違いないと思うのだが、それは酔いどれなどではなく、しっかりとした酒の楽しみ方をやっているのが羨ましい。

「アイスの時といい、その酒といい、見た目の若さに騙されちゃいけないぜ、ってか」
「その辺りの自覚はあまり無いんだけど、今の君の反応を、今後の参考にさせてもらおうとするよ」

うーん、リン様、強し。

俺の三倍……ワインボトル三本以上は既に飲み干していたと思うのだが、諏訪&神奈然り、月の方々然り。……ああ、依姫だけは別であったけれど、どうやら比率的に、東方キャラは酒豪が多めらしい。宴会好きそうだなあ、あいつら。そうでなければ人外魔境の宴など、やってられないのだろう。

(月で酒か……。……柔らかかった……。んだらうなあ、多分……)

腕やら胸やらに綿月姉妹が密着していた記憶が蘇るけれど……。悲しいかな、血液含む神経が通っておりませんでしたので、肝心の感触だけはサツパリ分らないのであつた。

あれ、何やら……。後悔(欲望)という名の汗が目から……。

「お母様もクベーラも、とても静かに嗜んでいるからね。それを邪魔するのは無粋というものさ。生憎と僕はそこまで感性を養っている訳ではないから混ざり難いけれど、こうして君の面倒を見れるのは、少しは心が軽くなるかな」

と、いつの間に戻つて来たのか。【温泉】の端でサシで飲み合う女王様と神様は、長年連れ添つた夫婦のように、多くを語らず、静々と雰囲気と酒の味を味わっている風に見える。

ただし時折耳に届く会話は、連絡手段の確認だの問題が発生した場合の対処法だの、事務的なものばかり。出来ればこの場を楽しんで欲しかった身としてはやや残念な気持ちが入り上がるけれど、過ごし方は人それぞれだ。強要すべきもんでもないだろうし、する場でもない。それを壊すのは面倒ゲブンゲブン……。無粋な気がして、あの二人はそつとしておこうと思う訳でして。

というか、今のリンの台詞には、ちよつと疑問を覚えることがあつたのだ。

丁度良い。今はその追求に時間を割くとしよう。

「心が軽くなるって、なんでよ」

「それは、これだけやってくれた君への恩返しだよ。怒り、恨み。それが感謝であつても、行き場のない感情というのは、それだけで心苦しくなるものじゃないか。百万分の一にも届かないけれど、こうして恩人に何かをして上げられる。という状況は、とても心地の良いものだよ」

何かのスイッチ入ったのか、リンが俺の頭を柔らかかに撫でてくる。

(……変な気分)

ちっさな子のオママゴトに付き合っている気分になるけれど、これでも立派なレディーなのだ。数日前に認識を改めたばかりである。あまりに女性として意識しな過ぎるのも問題だろう。

中身(年齢)的には……いや。この辺は深く考えないでおきましょう。

「恩……恩、ねえ……」

何はともあれ、可愛い女の子に構ってもらっているという状況は、それだけで満足なところがあるけれど。

「お前の信頼ゲットした。なんて思えば、安いもんじゃないか？」

少しの呆れと、少しの照れと。

主にその二種で構成された表情のままに、それでもリンは俺の髪……頭を擦る行為は止めるつもりはいようです。実に可愛いもんである。

「……ばか」

やっぱり胡散臭かったか。クツセー台詞ではあるけれど、目論み通り、場を和ませる効果くらいはあつたようだ。

平時であれば、髪の毛クシヤクシヤになるくらいに撫で回したい可愛さだとは思いうけれど、若干多めにアルコールが投入された頭では、ただ可愛いと思うのみに留まつている。

——もう、俺の中でリンは『ナズーリン』になつていた。

後は何かのタイミングで——数百年の間に培うであろう様々な出来事を経て、最終的な記憶のそれと合致する筈だろうから。

これで、もし俺がこの地に現れなかつたのなら。

そんな「もし」も考えてはみるけれど、そも、後に幻想郷に集る彼女達の起源……この世に生を受けた状況が判明している者は居なかつた筈。そういう答えを出してしまふのも仕方ないのではねえでしょーか。

(もし他に『ナズーリン』が居たとしても、二人を会わせてみるのも良いんじゃないか?)

きつと、姉妹以上の関係になつてくれそうな程、仲良くなれる気がして。

その時は良き友となつて、何処かの歌であつたように、喜びは倍に。悲しみは半分。互いが互いを支えあい、高めあつてくれる関係になつてくれると嬉しいのだけれど。

身勝手過ぎる思惑は、その件が現れた時に真剣に考える事にして。今は何とかクベーラ……もしかしたら、日本のあの神様になるっぽいお方のご機嫌を崩さぬようにしなければ。

「クベーラもお前くらい飲んでた筈なんだが……何か？ お前らつてかなり酒強い？」
答えてくれるかな？ なんて疑念をリンへと振つてみる。

顎に手を当て、耳をピクピク。それがシンキングタイムのモーションなのだろうか？ 観察していると、答えが出たのか、こちらの方に目を合わせて、口を開く。

「君の種族が分からないから、あまり強くは断言出来ないけれど……。僕の常識と照らし合わせても、君が人間という種族であるとするならば、君の今の状態が……それくらいが平均だとは思うけれどね。お母様は人間だけれど、何十年もその手の席で培った経験と気力があつて、その相手は神様で。そして僕は若輩だけれど、妖怪だ。文字通り、造りが違うのさ」

分かつてくれたかな？

最後まで話さずとも、そんな台詞をリンから読み取つた。

「……分の悪い賭けは嫌いだったんだけどなあ」

「なんだいそれ」

元ネタが分かる筈もない当然の突っ込みに曖昧な返答をして、大きく息を吸い込み、ゆっくりと吐き出した。

（うっし、大分頭も冴えてきた）

そろそろ酒やアイスだけではなく、肉や野菜や魚といった料理も出しておくべきだろう。食べるにしろ食べないにしろ、食卓は鮮やかであった方が気分は良いだろうから。

俺の頭を撫でる手を制し、これから起きるぞ。との雰囲気を作る。

それを察したリンは僅かに身を引く。その時を見計らい、

（食卓なんてありませんがね、っと！）

回復した体を上半身のみ跳ね起こし、眩暈を覚えない事を確認。良かった。思ったよりもアルコールは抜けたようだ。

「これでクラッと来た日にや参っちゃまうが……ん？」

苦笑するリンの奥。

【温泉】の外側、夜の砂漠が広がる方面の岩陰に――

——何か。

在り得ないものを見た——。

「ツ!? 【メモナイト】!!」

誰も気づかなかった。

俺は論外だとしても、リンやクベーラ、何より周囲に存在する無数とも言えるネズミ達の目を掻い潜って現れた事になる。

それら刹那の疑問を置き去りにする勢いで、MTGの力を行使する。

光子の収縮。そして四散。叫ぶに合わせ、白銀の鉄騎が盾になるように現れる。幾度となく尽力してくれた存在は、会いも変わらず鏡面装甲。月光にプラチナの肌を輝かせていた。

その出現を確認した直後、即座に【恭しきマントラ】を【プロテクション（黒）】で実行。

相手にも付与してしまうが、構うものか。今は攻撃よりも専守防衛。出来れば【死への抵抗】が欲しかったが、マナが足りない。最悪のタイミングとはこの時の為にある言葉だと実感する。

【覚醒】、【禁断の果樹園】、【温泉】、【メモナイト】。【恭しきマントラ】と、そのコスト分に用いた【ターパン】が一枚。

静かに、迅速に、相手に気づかれず——見えないようにリンの手を握り、制限解放などではなく、新しいルールとでも言うべき条件をクリアにしておく。

俺の声に反応し、何処に居たのやら、龍人の妖怪である睚眦が【メモナイト】の横に並び立つ。

両手にそれぞれ持つ、蛮刀なのか中華剣なのか分からない刃物を握り締め、虚ろな目のまま戦闘態勢を取り、停止。迎撃準備は出来たようだ。

——そこには、二つの影。

純白の法衣は月光に浮かび上がる白い陽炎のように。腰まで伸びるストレートの白銀の長髪は、一房でも売買しようものなら、ひと財産を築く事すら容易だろう。

鋭い笑みは出会った頃より変わりなく。むしろ、より一層の切れ味を増している印象さえ受ける。

「——お久しぶりですねえ」

「ああ……久しぶり、だな。——平天大聖」

タツキリ山の主。七天大聖が一人にて、頂点。

紅葫蘆の中で囚われていた筈の大妖怪中の大妖怪が、散歩中に出会った知人に声を掛けるかの如く自然に、俺達の目の前に佇んでいた。

「なッ——イ——!?!」

瞬く間に完全武装へと換装していたクベーラが、何かを言いかけ、口を嚙む。

それは、一人の少女がそう指示したから。

二つの影の内の一つが平天大聖ならば、もう一つの影は、その少女に他ならない。

年の頃はリンより上か。

腰まで届く薄桃色の長髪。きめの細かな小麦色の肌。その場に居合わせる者達の中でも、リンに次ぐ小柄な容姿であるのだが、そこには静寂の大河を思わせる落ち着きが伴っていた。

真紅を基調としたローブの上から、小粒ながらも神々しい光沢を放つ、瞳を模した造りの白玉を羽織っている。まるで幾本もの真珠のネックレスを全身に巻き付けているような外見である。

その少女は、人差し指を一本。口の前へと立てて、『静かに』……いや。『話すな』とのジェスチャーを行っていた。

(ああ、こんな場所や時代でも、そういった肉体言語は既にあつたんだなあ)

……つて、そうじゃない。問題はそこじゃねえのです。どうしてここに居るだとか、その少女は誰なんだとか。

湯水のように沸き上がる疑問は、全て脇に退け。

「何の用だ」

答え……応えてくれる。など期待してはいけないのだろうか、それでも言いたい事はあるのだ。こちらの気持ち的な問題で。

もはや反射に近い口頭であつたのだが、一応は回答が返つて来た。

「ええ。少し——湯浴みをしようと思ひまして」

微塵も信じられない受け答えというのは、行う意味はあるのだろうか。

「……ちよ〜〜〜」

大して息は吸い込んでいなかった筈なのだが、思ったよりも声の出は良いもので。

大体、十秒過ぎたくらいか。俺以外が誰も口を開かない事を良い事に、気の済むまで

『ちよ』を延ばし続け。

「胡散臭い!!」

握り拳を眼前に。

吼える。を体現した気分になりながら、力強く言い切った。

こちらに同意する形でコクコクと頷くクベーラヤリンを背後に感じ、一体感を得た事

に、ちよつと満足。

「ご無体な。それが証拠に、今この身には寸鉄一つ帯びてはおりませんよ」

「お前、武器とか使う必要ねえじゃねえか！ 妖術とか巨大化とか、そういつたのが主だったじゃんよ！」

「そう言われれば、そのような気もしますねえ」

ニタニタと笑う大聖様に、とつても気分が滅入つてしまふ。

(すつげえ胡散臭い)

出てくる感想は、先に叫んだそれと同じ。まだ二、三言しか話していないというのに、メンタルがゴリゴリと削られていく。

出来るものなら即オサラバ願いたいお相手ではありませんが、生憎と全マナ使い切つた身としては、下手に強気に出れない実情となつている。参つた……といより、結構ヤバい状況である。

「そういえば、そこの者は初見になりますか」

こちらの狼狽を無視しながら、平天大聖は俺の背後——クベーラの影に隠れる形で無手を構えるウイリクの方へと声を掛けた。

「初めまして、人間。つい先日まで御山の大将など気取つていました、しがな妖怪です。もはや大聖、などと名乗るのは汗顔ですので、ただの平天。と、思つていただけ

ば」

楽しそうに話し始める平天様。

困惑しながらも思考するウイリクであつたけれど、それも数秒と掛からなかつた。

「……まさか」

そこで言葉が途切れてしまつたけれど、驚愕と警戒の表情がありありと浮かべているのを見るに、どうやら相手がどんな存在であるのかを理解したようだ。

そのウイリクの反応に、満足だと深く頷く牛魔王。

会いも変わらず良い根性してやがる。見習いたいものだ。実践するかどうかは別として。

「して……何用で御座いますかな……? その……」

ウイリクに次ぎ、別の意味で困惑している風なクベーラは、平天大聖の方ではなく、視線の先の厳かな少女に対して、探るような、窺うような口調で話し掛け。

「——ヴァジジュラパーニ」

小声であるというのに、とても良く通る澄んだ声。流れから察するに、自らの名前だろうか。

抑揚の感じられぬ音程ではあつたけれど、何処か暖かさを伴つた声色であつた。

クベーラなど目に入らぬと、じつとこちら……俺を見つめる眼力が、幼い見た目とは

裏腹に、中々の威圧感を放っている。

「ヴァ、ヴァジユ……らば……？」

しかしながら、日本語とか中国語とか英語とか、そういった響きとは掛け離れた部分が多い今の発音は、些か覚え&発音し難い部分が多く。

「――」

不満の色を隠そうともしないヴァジユ何とかちゃん？は、ジト目で抗議の顔をする。

「……マガヴァーン」

「え？」

うっ、よく分かんが、余計にジト目が強まった。

もしや先ほどのヴァジユ何とかは、名前ではなかったのだろうか。

更に分からない事に、この褐色少女が不機嫌になる度に、クベーラがおたおたしていらつしやる。宜しくはない状況のようだ。

(どーなってますかー、これー)

おかしい。こちらには全自動翻訳機の宝石を持っている筈だというのに、それが発揮される様子が微塵もないと来た。

異国の言葉なのは間違いなさそうなのだが、それが翻訳されてくれないのを見るに、考えられる可能性としては、そういう固有名詞であるという事。

リンや平天やクベーラなど、今の今まで翻訳機能は十全に機能していた事と、開口一番に発せられた言葉であるのを思い返し、やはりこれらは名前である……と、思うのだが……。

「……ヴリトラハン」

「なっ!?!」

「ッ!?!」

不機嫌さ四割増しの声色で告げられた何かの単語であるのだが、これも何かの名前の事なんだろう。それも、中々に知名度が高い、系の。

何となく、そうと呼べ。的な意味合いの話し方であるとは予想していたのだけれど、俺が理解するよりも早く、リンとウイリクが驚きの声を上げた。どうやら相手が何者なのか分かったらしい。

「……なあなあリンさんや」

横で驚くリンへと、噂話をする奥様のように手を口へと当てながら、小脇を突く形で疑問を投げ掛ける。

あれは一体誰なのか、と。

目線を俺と褐色少女の間を往復させ、二度三度口をパクパクさせた後。

「君は——ッ!」

と、『知らないのか君は!』的な流れで話し出そうとしたであろう言葉は、褐色少女の
 一層強まった眼力によつて黙殺されてしまったらしい。喉に物がつかえたように押し
 黙るリンに、自分の中で、更に疑念が募る。

そんな中、駄目押しと言わんばかりに褐色少女からの言葉が向けられた。

「……プランダラ」

「……ぷ、ぷらんだら!」

音程こそあれだが、今度こそしっかりと復唱出来ていたと自負する応答であつたのだ
 が。

「えっ! 何でさ!」

ぷいつ。とそっぽを向く褐色少女は、それもお気に召さないらしい。

数瞬間の、静寂の大河を思わせる雰囲気は何処へやら。

今俺の目の前にいるのは不機嫌……いじけて拗ねる子供が一人。

「ヴァジュラパーニ《ヴァジュラを手にする者》マガヴァーン《惜しみなく与える者》ヴ
 リトラハン《ヴリトラを殺した者》に、プランダラ《都市を破壊する者》……全てイン
 ドラ様の二つ名であります……参りました……拗ねてしまわれたインドラ様は、しば
 らくは九十九様に真実を伝える気は無いでしょうし……ああ、だから九十九様は名を告

げられても、意味を理解なされないのか」

「その理解が何であるのかは分かりませんが……。あれがあなた方の主神なのですから、気苦労の多さは察するに余る。といったところでしようかねえ」

「いえいえ。成すべき時には、我らを統べるに相応しい威厳を纏うのですよ？ それに、時が経てば、あれはあれで大変好ましいものに見えるものに御座いますとも」

背後でいつの間にもやらクベーラの方へと移動していた平天大聖は、二人で仲良く談笑しているもんだから、余計に混乱してしまう。

こつちに聞かせる気があるようで全く無いという絶妙な音量での会話なものだから、その内容が気になって仕方がないのです。特にそれが、現状の問題解決の糸口であるような気がするものだから、なおの事。

というか、あんたら仲良いのね。俺もそつちに混ざりたいんですが。お近づきの印に、熱燗の日本酒など如何でしょうか。今なら熱燗、冷酒、水割り、ロックと、何でもござれのジャン袋もありますので。

「うお!!」

思考が逃避していた隙を突かれる形で、俺の腕を掴むイッパイアツテナ系褐色少女。害意が無いせいなのか、睚眦や「メムナイト」は動く気配すら無いと来た。

その二体の護衛さん同様、事の成り行きを見守るに徹する……。半分魂の抜けかけてい

るリンを素通りする形で、ぐいぐいと引つ張るその先は、未だ縁に雪が積もる憩いの場、
【温泉】。

「なにつ、なにつ！ なんだつてんですかー!？」

大小異なる湯柱、二本。

気泡が眼球を撫でる視界の中で、そんな光景になっているのかなー？ という考えが
頭を満たすのだった。

57 温泉にて 《後編》

暗雲立ち込める雰囲気になるものだとばかり思っていたけれど、そんな様子は微塵もない。

入場料無料、順番待ち云十万匹という露天浴場に、シード権でも設けたのか、新たな来客が二名。平天様と、まったく知らない褐色少女である。

〔MEMナイト〕は一応完全防水加工……というより水を含んでも問題のない構造らしいのだが、何故だか濡れる行為に抵抗があるらしく、〔温泉〕の縁で龍人の睚眦共々、監視役と化している。

そんな護衛達の居るここ〔温泉〕内部では、何ともやり難い空気が漂っていた。

ニタニタする平天と、オロオロするクベーラと、そわそわするリンに、ニヤニヤするウイリク様。

んで、やり難い……どう動いて良いものか悩む状況を作り出している最もな原因が。

「……なあ、退いてくんねえ?」

つーん。なんて擬音が似合う口の尖らせ方をする褐色少女……もとい、ドラちゃん。何故だか俺の胡坐の中に、我が物顔で鎮座中。

湯浴み用の着衣でもあるのか、出会ってから衣替えをする素振りもない。堂々としたものだ。

まるで、肉親を奪われんと主権を主張する幼子。名前については、『……ドラ様……』と、お呼び下されば……恐らくは……』とのクベーラ様のお言葉でありましたので、先に告げられたまどろっこしい幾つもの名は全て忘れる事にし、そう呼ぶ事にした。

名前の響き的にはモロに青狸のアレなのだが、流石に見た目が掛け離れ過ぎているので、あまり意識する事はない。これで例のダミ声であった日には、俺の脳裏に「!?」系のマークが乱舞していただろうけど。

というか、様付けですか。立場的にクベーラの上なんだろうが、青狸のイメージが強過ぎて、他の神様が連想出来ねえのです。

それに、脳内に未だ残るアルコールが、こちらの熟考を阻害しているのも要因の一つだろう。酔いどれ気分は楽しいけれど、こういった面では足を引っ張るのだから、厄介なものだ。

「なあなあ、クベさんや」

「はいはい、何でしょう。九十九様」

もはやテンプレと化しつつある応答の後、内心満足しつつ、俺は疑問を口にする。

今更畏まった口調は、かえって相手に不快感を与えるものになっていたので、現状維持を採用中。今のところは問題無さそうだが……ううむ、どうしたものか。

「さつきからスルーしっぱなしになって、今更かなー？ とは思うんだけどもさ」

「……ああ。ええ、ええ。九十九様の疑念はご尤も。それにつきましては、ワタクシも同意させていただきますとも」

そう言つて、二人……いや。リンやウイリクも合わせ、計八つの目で一人酒を楽しむ白銀髪の男——平天を睨み付ける。

「そろそろ用件を聞こうか。……何の用だ。平天大聖」

あえて大聖、と付ける意味を察して欲しいところであつたけれど、超が付く大妖怪相手に、それは杞憂に終わったようだ。

不敵な笑みは相変わらずだが、からかいと愉悦と見下しのミックスされた眼力はなりを潜めて、どういう訳か、挑発的な笑いへと変貌していく。

「自身の溶解した体液の湯船に浸かる……。長らく生を貪っていました、初めての体験でしたもので。出来ればそんな気分を一蹴したいと思い、こうしてあなたの掘り起こした……。いえ。あなたの事ですから、また創造でもしたのでしよう。そこにご厄介にな

ろうと思ったところもあります」

入浴も望むところであつたと話しながら、高級な陶磁器など足元にも及ばぬ白魚の腕をこちらへと掲げ。

「——東方の破壊神、九十九。あなたに提案があります」

湯を跳ね上げながら、反射的に自分の片手を突き出した。

手の平を相手に押し付けるように持ち上げた形は、絵や写真にでもおさめれば、『今のちよつと待った!』と題名が付く格好だろう。

「……名前のとこだけにして」

この手の呼び名は止められない。

先にやったあれこれが、自慢出来るものであれば『そんなのは過大評価さ(キリ)的に、素知らぬ顔で俺の鼻はグングン伸びていただろうけれど。

(破壊神つてあんた……)

中二どころか小二くらいいの二つ名に眩暈を覚える。宛ら、スーパーウルトラ・TSU KUMO。とでも名乗っている心境か。眼を背けたくなる事、この上ない。

それに、結果は兎も角、過程はお世辞にもカッコいいとは言えないものだ。

ならばせめて、俺が耳にする機会くらいは減らしたい。それくらいの努力は惜しんではいけないのだ。きつと。

「九十九だけ……。まあ私は構いませんが。そうですか。あなたはこの手の別称が羞恥と見える。私を知る者であれば誇りこそすれ、腫れ物のような呼称ではなかった筈なのですがねえ」

くつくつと晒う平天様は、羽虫を甚振る幼子の笑みを造っております。

「……【暴露】」

ボソリと一言。

一度目の時と同様に、効果はしっかりと現れてくれたようだ。

やっべ、残りのカード残高が……。

「ツ！　そこまで毛嫌いするものでしたかねえ!？」

先の戦闘で一度経験しているせいも、自分の思考が消失したのを実感出来たらしい。何かを忘れさせたのは認識したらしいけれど、肝心の何を忘れたのかは認知出来ていないようだ。

あの平天大聖が突つ込み側に回っている。

面白いものが見れたと思うけれど、カード枚数を消費しているという、自らドツボに嵌っているのは間違いない。

まあ何かあればドラちゃん……は知らないけれど、クベーラがどうにかしてくれる筈だ。曲がりなりにも「プロテクション（黒）」を付与させているので、対・妖魔相手ならば、中々に頼もしい存在へと昇華しているのだから。

そして……。【暴露】——手札破壊の効果は、思考の欠落のみにあらず。

「……なるほど。お前はお前で色々柵を受けた訳か」

笑顔が一転、無表情。

それなりに顔を合わせていたとはいえ、完全に感情が抜け落ちた顔を見るのは初めてであった。

そりやそうだ。何せこれからあらゆる対価を用いてこちらに飲ませようとした要求を、一発で見抜いてしまったようなものなのだから。

「——覗きましたね？」

「イエス!!」

からかいの意味合いが強い、ウザく輝く笑顔のグットサインと共に返答する。きつと、この瞬間に俺の歯は純白に煌いたんじやないだろうかと思える程に。

不敵な笑みか、真剣な眼差しか。相手は恐らく、そういった類の反応を予想していたんだろう。テンション高めのお答は予想外であったようで、平天の表情が呆れたものへと。大きく吐息をこぼし、二度三度と首を左右へ振る。意図した訳ではないけれど、気

力を削ぐ事に成功したようだ。

「お前が同時に色々考えてくれて助かったよ。説明の手間が省けたからな」

細部は未だ分からないけれど。

そう、心の中で付け足しながら。

「……なるほど。その【暴露】とやらは、相手の思考を、文字通りあなたへと曝け出し、同時に欠落もさせる妖術……能力のようだ。呟くだけで、何の兆候も察せられずに効果を発揮する。……参りましたねえ、考えを巡らせれば巡らせるほどに不利になるとは」
困惑なご様子に満足したので、何とでも取れる笑みを浮かべながら、どうだ。と言わんばかりにニヤリと反す。

(合ってるっちゃ合ってるが、そこまで便利なもんじゃないんだけどもね)

常時思考がオープンになるのは「テレパシー」であつて、「暴露」は一瞬のみしか相手の考えを覗く事は出来ない。けれどそれは表面上の全てを読み取る事が可能であり、コイツのように一瞬で色々と考えてくれる相手には効果抜群なのであつた。

……ま。

あんまり思考の数が多過ぎると、閲覧の量に限界を感じるのだけれど。八意さん相手の時とか、永琳さん相手の時とか。

「しっかし、意外も意外っつーか、なんっつーか……」

「……」

自己確認を兼ねての独り言に対して、澁面を造る平天は、眉間に皺すら寄っている。睨んでいるのか、困惑しているのか、怒っているのか。

少なくとも好ましい表情ではないのだけは、しっかりと理解出来るお顔である。

「ツクモ、何が分かったの？」

「ん？ ああ……」

戸惑うリンがおずおずと質問してきますので、これに応えるべく口を開く。

平天は、沈黙。

受け入れ難い状況ではあるが、話の流れに身を任せる方針のようだ。話をして大丈夫だろう。

「——子供の面倒を見て欲しいってさ」

その静けさは、どれくらい続いたのか。

氷の妖精さんの某スキル、パーフェクトフリーズも真っ青の凍結具合を、まさかこの目で見ようとは。【温泉】から立ち上る湯気だけが、世界が正常に動いているのだと示していた。

大体こういつた時間を体験する時は、俺の時間も止まっている場合が殆どであったので、客観的に見る機会というのはとても貴重だと思います。良いねこれ。結構楽しい

ぞ。

「……誰の？」

分かったけれど、認め難い。

強張った表情になったリングが、間違いである筈だとの意味合いの強い言葉を返す。

「あれの」

けれど、それは無意味だ。

リングの淡い希望を切り捨てるように、そのあれ……平天へと視線を向ける。

「……」

「……まあ」

「……なん、と」

ウイリクは心の籠っていない、魂の抜けたような相槌を。クベーラは理解した上での驚きを。

眩暈を覚えたリングが、俺の肩へとしな垂れる。意識は保っているようだが、体の力は半分抜けたらしい。どっかの映画とかドラマで、貧血とか眩暈で視界が眩んだマダムのようなのだ。これでまさに相手がマダムなのなら『おっ、奥様！』とか言ってみたい気がするが……まあ、それは置いておくとして。

「……めんどくせえ奴」

人の事言えないけどね。と、内心で言い訳のように呟いた。

ぐつ、との呻き声を上げる平天さんは、見ていて愉快なものでして。出来れば、後何回かはこんな感じで表情やら顔色を変えさせたいものだ。

そして、こんな面倒くさい状況を創り上げた最もたる原因の人物——存在へと、同意を求める風に言葉を掛ける。

「お前も結構えげつない方法取るんだなあ——なあ？ インドラ様？」

ここでようやく、俺の股の間で、我関せず。と不機嫌を体現していた少女——インド神話の主神様が、その小さな肩をピクリと震わせた。

クリクリとした目を皿の様にしながら、どう判断したらいいものか分かりかねる、何の感情も読み取れない顔を向けられた。ちよい怖い。

「平天の頭ん中見た時に分かったよ。何て言ったら良いもんか……あく……破天荒ね、お前さんは」

普段ならば、ドラちゃんが主神だと分かった時点で『げえ!』とか『うつそー!』なんてリアクションが飛び出し、低姿勢を敢行するのが俺らしいと思う。

けれど、幾ら良く知っている名とはいえ、俺にとつては名前だけの偉人。飲酒と「温泉」の相乗効果でふわふわと浮いた気持ちとなつていゝ現状も、態度を改めない事繋がっている。

これが東方キャラなどであれば、また話は別なのだが……。

(名前だけ聞いたウンタラ国の王様より、取引先の相手との商談の方が緊張するようなもんかねえ)

自分の心境をどう把握すれば良いのか困っていると、両の頬に、「温泉」とはまた違った優しい柔らかさが添えられた。

「なっ」

クベーラか、リンか。誰の声とは判断し難い驚きの声を耳にしながら、こちらの頬に手を添える、ずぶ濡れ衣装の褐色少女。衣類の上から身に着けられている無数の白宝玉は、妖怪・百目か、メデューサの頭髮か。何人もの眼光によって全身を射抜かれている錯覚に陥る。

(すごいやインドラって、千里眼とか……千の目を持つ……なんて伝説もある……んだった、か?)

持ち上げた虫籠でも観察しているような。大瓶の中を覗き込むような。俺の外見以上の何かを見ている雰囲気がある。

柔らかく、優しく。全身をゆっくりと舐めまわす悪寒。

何の色も見えぬ瞳。全身を射抜く観察眼に、アルコールによって衰えかけ、度重なる上位者との相対によって蓄積されて来た筈の凶太い神経は、あまりに距離が近いせい

か、それほど機能してくれていない。

(……こわ)

【温泉】の暖かな温もりが胸より下を包んでいるというのに感じる寒気。常夏の島国へと足を運びたい気分になる。

それでも気持ちだけは心構えが済んでいたようで、なるようになれ。との達観が入っていた思考では、冷静さを失う程の恐慌状態には至らない。

「……」

「……」

何かを言い出す気にもならず、何かを言い出す素振りも見せない。

こちらに馬乗りになる形で顔を覗き込んでいるインドラは、もはや幼子のそれではなく、遍く世界を見通す眼を持つ、神の名に相応しき存在へと。

十秒、二十秒と。一体何がしたいのか把握しかねる状況に流されるがまま身を預け……。

(何だろなー、この間)

〃秒〃から〃分〃の位には達したんじゃないかと思える時間の後。

「……そう」

一人で行動を起こした存在は、勝手に納得した風な口振りと共に、俺の上から移動し

た。

もそもそと膝の上から退いた後、何事もなく「温泉」へとその身を沈める姿は、何か一仕事終えたような空気であった。

小さな口から、ふうと一息。

そのまま、やや熱めの湯船に心地良さげな吐息を漏らすインドの主神様は、自己満足
の文字が透けて見える風貌へと。どうやら、先の何かを完全に読み取ったらしい。

……ようは、こちらに何も話す……説明する気は無いのである。

「……おい、いら」

人を怯えさせといて、一切関知しませんってか。

納得いかない気持ちがあくまくくと。洩矢、大和、そして綿月に八意など。伊達に対・神
聖な数値は高くなっておりません。防御力……は、今のは十二分には発揮されなかつた
けれど、回復力だって常人の比じゃねえのです。

「——うみゆ!?!」

「確かに唯我独尊な奴らが多いのが神様だとは思っちゃいるけどな、幾らなんでも我が
道を行き過ぎだろドラちゃん」

上から退いたとはいえ、それも距離が離れている訳でもない。徒歩一步分の移動の後
に、両方の腕を上げて、正面からその小さな頬の片側を抓るように摘み上げる。

釣られて可愛らしい奇声上がるが、黙殺。

うりうりと上下左右に引つ張るに合わせて『みゆう』だの『みい』だの猫っぽい声
 が上がるのを楽しんでいると、我に返った者達からの、静止の声が掛かってきた。

「つ、九十九様つ、お止め下さい！」

「そつ、そうだよツクモ！ インドラ様に頬抓りとか、えと、あの……これ以上いけない
 ！」

実力行使すべきかどうか。中腰状態になり、どうしたら良いのだと焦るクベーラ。

語尾がアームロックサラリーマン登場作品に出てくる口調になっているリン。

口をあんぐりと開けるウイリクとか、反応はそれぞれ。

「ははははっ!!」

平天だけが爆笑しているのが対照的な光景ではあるけれど、立場を考えれば理解出来る
 ものである。

これがインド神話のトップか。この世界って幼女が基本なのかな。柔らかい
 なし、良く伸びるなし。安直な感想ではあるけれど、突き立てのお餅のようだ。

……これ、結構楽しいかも。

「言え！ 言うのだドラちゃん！ 説明プリーズ！ 簡単に！」

「……いふ、言いまふ」

涙目へと代わりつつある幼女に満足するという、警の字が付く公共機関の一つと精神科にお世話になるであろう未来は確実の場は、誰に邪魔される事もなく。

——唐突に。

勇丸にがぶりとされた時や、子ネズミにがぶりとられた記憶が脳裏を掠めた。

慌てて、摘んでいた手を離す。このままやり続けてはいつぞやの二の舞になるは必須。わざわざ地雷を踏みに行く必要はない。

『言う』との答えも聞けた事であるし、用が済んだら即悪戯……抗議を取り止めるのが吉だろう。

自分自身の頬に手を当てて、抗議の視線を向ける褐色少女に、むふー。と鼻から息を吐きながら、満足気な顔を向ける。

「……この場に居る神が、ワタクシのみで良かった……。シヴァ様やカーリー様が見れば、東の地へと聖戦を仕掛けるは必須でありましたでしょう……」

……どうやら、首の皮一枚で「ハルマゲドン」に勝るとも劣らないジハードを回避していたらしい。

しまった。あまりに態度が憎たらし……幼かったので、思わず近所のガキ共を相手にする風に接してしまった。

ぼつりぼつりと、褐色の主神の口が動く。

内心の動揺を隠しながら、その小さな声を聞き逃すまいと耳を傾ける。

——そうして。口数は少ないながらも要点を抑えたインドラの説明は、平天がこの場に居る理由と、今後どうなるのかを知るに足るものであった。

それらを聞いた直後の俺の感想は。

「……えげつねえ」

インドラが平天へと出した条件は、早い話、囧。

「ハルマゲドン」によって壊滅的な状況となったこの地の妖魔達の統括の為、平天は影でインドラに屈しつつもそれを隠し、散り散りとなった妖怪の旗印となって、管理&運営を行うのだという。

時に人間達を攻め立て、時に神々に屠られながら、この地の悪の王としての役割を果たし続ける。あらゆる物語で存在する善と悪の関係の縮図を、他ならぬ現実に誕生させようというのだから、マッチポンプも良いところだ。

しかもこれが、裏で糸を引くのが悪側ではなく善の側だというのだから、生々しいったらありやしない。

「九十九様、そのお考えは察せられますが、我ら神として万能ではない。輪廻の輪の中に組

み込まれております、命の一つに過ぎないので」

俺が渋面になっていたのをクベーラが見て、内心を察したらしい。

「正義を謳っている身として、可笑しな話で御座いますが……。持ちつ持たれつ、なのですよ。ただそれらの主導権を、どちらかが握ったというだけの事。無論、機があれば覆される運命にあります。——平天」

そう言いながらクベーラは、酒の入った杯を片手に湯を楽しむ平天へと話題を振る。

「何か」

「あなた、もし我ら神々を下していたならば、その後はどうなさったお積もりで？」

「そうですねえ……。それを成した後は、シヴァやインドラなどは全て排除している事でしようし……」

黒い笑み。

根っ子のところは決して相容れない存在であるという、魔の加虐性を覗かせながら。

「……残りの神を続べ、飼い慣らします。私達は命を楽しむ術はあれど、命を育む行いに疎いですからねえ」

声と音の間くらいひえー。という感想が自分の口から漏れる。

神側の勝利がマツチポンプならば、妖怪側の勝利は飼い主と家畜。神に人の増産を行わせながら、それを消費するという事か。

こうして二つの答えを並べてみると、人間にとつては、やはり神側に勝利しても
らった方が良かったに違いない。

(平天が日本に居なくて良かった……)

その一点のみは、見た事も聞いた事もない、運命とやらに感謝すべきだろう。

尤も、今こうしてそんな欲望を垂れ流して語る理由などある筈もない。捲土重来を狙
うのであれば、それ以外の答えなど有り得ようか。

こうして野心を吐露している現状こそが、もはやそれが叶わぬ夢となつてしまつたの
だと、平天自身が口に行っているようなものだ。

「あ……で、お前は俺に子供の面倒をみさせたい……んだつたか？」

脳内で雨雲がモクモクと立ち込めていたのを、かぶりを振つて払いながら、気持ち
切り替える意味で平天へと確認を取る。後、二つ三つほど黒い欲望を垣間見ようものな
らば、この内心の曇天は、豪雨か雷雨にでも変貌するやもしれません。

「ええ、まさに」

けれど、それに素直に頷く筈も無く。

……ただ、そうせざるを得なかつた事情は、とても興味があつたりするのです。

「自分でやっておいて何だが、よくガキ共は生きてたな。タツキリ山ごとぶつ壊したつ
てのに。流石は平天のお子さんですつてか？ それともどつかに出掛けてた？」

「いえいえ。しつかりとあの地で暮らしておりましたとも。ですが……ははつ。妻に鍛えられたあれらは、そう簡単に朽ちるような軟な体ではありませんよ」

あれ「ら」つて……。お子さん達は何人兄弟なんだろう。

さり気なく恐妻家の面が見えたのをスルーしつつ、平天大聖としての相対を思い出す。

十全とは言えないまでも、MTGの能力を使いまくつて、それでも倒し切れなかった平天が言う、一体子供達はどれだけ強いのだろうか、こちらの命に直結しそうな懸念が過ぎる。お礼参りのな意味で。

「おつと。あなたが考えているのとは、些か実情は異なるものだと思いますがねえ」

こちらの思考を読み取り、例の不敵な笑みを浮かべたと思えば、一転。

とても気まずい何かを感じている風な、苦虫を噛み噛みする表情をして。

「——この条件を飲んで頂ければ、私はあなたの元に下りましょう。正確にはその鼠の下ですが、この地から離れるあなたには、これの後ろ盾は、多いに越した事はない筈だ。間接的になりますが、これにはインドラの利も含まれている。要望はつつがなく受理されるでしょう」

平天の口振りに、条件を飲まねば全てを話す気は無いのだとする、意気込みのような

意図を感じ取った。

我関せずとばかりに沈黙を続けるインドラを見るに、その言葉は事実らしい。

「だから、何でだよ。お前には一片……くらいはあつた感謝の念も、あの崩落した土地ごと埋没しちまつたからな」

尤も、それに素直に応えてやる気概は無い。

当初に感じていた感謝の念は、相殺どころか、鼻頂目に見ても、命を奪うに足るレベルの恨みへと変貌していても可笑しくはない。

こいつもそうだが、子供とはいえ、見ず知らずの他人の運命など。ましてや東方プロジエクトに何ら関係のない……思い入れの無い存在であれば、余計に。

これがしっかりと約束を守ってくれる相手であるのなら、クベーラの時よろしく、応えるのも吝かではなかったけれど、言葉の裏を搔いて接してくる相手など、御免被る者である。

「……ッ」

まさか、自分を対価としても受け入れられない案だとは思っていなかったのだろう。美形と言える、整った顔立ちが醜悪に歪む。

それとは対極的に、インドラの表情に明るさが混じる。慈しむような、愛しむような、まるで、平天の苦悩を知っている故の喜びであるかのように。

「……私には一人……羅刹女（らせつによ）と玉面公主（ぎよくめんこうしゆ）以外に情を交わしていました者が居ます」

羅刹女が本妻で、玉面公主が第二夫人……だったか、逆だったか。

どちらにしても奥さん二名という事実を突きつけられ、埃の被った知識に光が当たり、役に立つんだか立たないんだか怪しい記憶が蘇る。

「……いや、待て。ちよつと待て」

片手で両目を覆い隠しながら、空いたもう一方で静止の意味での手の平を向ける。

羅刹女……本妻は良い。別に子供が生まれたからと言って何が問題になるというのだ。むしろお子さんを儲ける事こそ結婚の目標の一つのようなもの。一号さんだって、今の話の流れで言えば、寛容の文字が透けて見る。そうも大した事情は無さそうだ。

けれど、俺にやらせたい事は子供の面倒を見てほしい、というもの。

「……隠し子、なのか」

この平天の表情を、どう言葉にすれば良いのやら。

羞恥と、苦渋と、恐怖が外装を固めているその内面は、覚悟。

「……はて、おかしいではありませんか。例え夫婦の契りを結ばぬ子であったとしても、あなた程の立場も実力もある者が、何故たった一人の子の為にここまでするのです。反論があれば、それこそ、それを発した者もろとも、木の葉の如き平たい存在へと成しえ

る力をお持ちの、あの平天大聖が」

横からクベーラの疑問が入るが、それは俺の耳に、話半分にしが入っては来なかった。俺の大切な者達を奪った……奪った原因となった者が、何を今更。

赤い感情となり、黒い感情となり。

……けれど、大切な者を守りたいと。理解出来るが故の感情をも抱いてしまった身としては、この振り上げた拳を何処に叩きつけると言うのか。

これで、リンやウイリクは勿論、こんな俺に付き従ってくれたネズミ達の一匹ですら欠けて居たのであれば話は別であつたが、結果だけを見れば、完封勝利も良いところ。とはいえ。

コイツに対して抱いた恨み辛みは、今も俺の胸の内で燻っている。いずれは鎮火される程度の大きさであるけれど、今すぐにとは、流石に……。

(さつて……どう区切りを付けたもんか……)

意図せず相手の殺生権を握った……レイセンの時とは別の感情が込み上がる。

ちよつと前に、リンの為になる事をするのだと決めたばかりなのだ。折角相手が力になつてくれると申し出てくれていたのだから、それを突っぱねる理由はない。

結婚……というより女と関係の一つも持つていない身で子供の面倒を見れるのかと不安にもなるが、やらない。という選択肢が取り難い以上、受け入れるしかないのだ。

ならばその対価として、どんな無理難題を突きつけてやろうかと。知識の中にある、数百年分先の七難八苦を脳裏に思い浮かべた、その矢先。

「——それは、あの子が人の血を引いているからです」

呆けるほどでもないが、聞き入るほどでもない回答が、寝耳に水とばかりに俺の方へと飛び込んできた。

(……うん?)

即座に判断し兼ねる平天の言葉に、どうやって鬱憤を晴らそうかと波立っていたこちらの思考は、平坦な水面へと変える。

「まだ天に近い官位に収まっていた頃でしたか。何処ぞかは記憶にありませんが、紅に染まる山河を眺めていた時の事。何やら神妙な面持ちをした人間と出会いましたねえ。妖怪について知りたい。と、この私に戯言……おほん……懇願されましたので。血風の如く舞い散る紅葉に酔っていた私は夢見心地でありましてねえ。つつい……」

吐き出す言葉は留まる所を知らず。そのままグダグダと、長つたらしいつたらありやしない思い出話を切り出された。

その人間と何を話したのか。という流れから始まった会話は、何十分続いたのか分からない。

どっかの廃ビルを晦としていた、アロハシャツのおっさんと、絞りカスな吸血姫を彷彿

佛とさせるうんたら物語的なやり取りを彷彿とさせるものであつた事だけは、漠然と理解する事が出来た。

「——ですので、仙人や邪仙と呼ばれる者達は……」

「も、もう勘弁してくれ……」

もう、限界だ。

俺の腕の中で目を回すインドラは、絶賛以つて湯当たり中。

すぐに出れば良いものを、俺より先に出るのが気に食わないらしく、勝手に我慢大会など実行中でした。辛い、出よう。と腰を上げた時に俺と目が合い、何を思ったのか、つーん、なんて擬音と共に、何食わぬ顔で再び肩まで浸かつてしまったのである。

目下、意識だけは辛うじて残つちやいるが、こちらに体を預けなければ【温泉】に沈んでしまいそうなほどに疲弊していらつしやる。

本当にコイツは主神なんだろうか。さつき思った通り、そこら辺に居る子供の一人なんじゃないだろうかと疑念が募る。意地っ張りの無口な少女にしか見えません。ああ言いながら目を回してますし。

「だらしないですねえ」

「馬鹿言え！ 妖怪のリンとか、人生経験値積みまくりなウイリク様とか、神様なクベーラとかドラちゃんだつてグロッキーになつてんじゃんよ！ 見ろこの惨状！ 俺が泥酔するまで宅飲みした後の翌朝だつて、もうちよつと活発だぞ！」

多分、さつきまで飲酒しまくつてたのが大きな原因なんだろう。回るの早いもんなあ、お湯に浸かりながらの飲酒つて。途中から酒飲むの止めて良かった。

俺よりは断然アルコールの許容範囲が高いお三方ではあるけれど、それでも限界はあるらしい。先に、ネズミ妖怪様が種族の違い云々などと言つていたのが嘘のようだ。

ただし、インドラだけは純粹に湯当たりしてるようであるが。ここだけ見ると可愛いんだけどなあ。でも獸耳が無い分、リンには劣るな。触り心地的な意味で！

「……つてか、何でお前……ら、まで俺と一緒に長湯しちやつてんのよ。途中で抜けても良かったのに」

冷却の為だろう。片腕を【温泉】の縁に積もっていた雪に突っ込んでいたクベーラが、何とか言葉を返してくれた。

「そ、そうは申されましても……。この機を逃せば、これの話は中々に知り得ぬものでありましたもので……」

これ。とクベーラは平天を視線で指しながら、意識を繋ぎとめるのに精一杯。

良い感じで酒が回っているようです。いや、この場合は悪い感じだろうか。

……まあ、何が切欠で会話を中断するのは分からないのだ。妖魔を相手にする機会が多い、神様という種族である。相手が勝手に情報を垂れ流しにしてくれるというのだから、それを得ない。という選択肢は無かつたんだろう。

「ウイリク様とリンは？」

「私はただの興味から……。であつたのですけれど……」

「今後の……。参考に……」

冷えたミネラルウォーターのペットボトルを額に当てながら天を仰ぐリンと、氷囊代わりのチューペットを首筋へと当て冷却を計るウイリク様。

各々、湯当たり対策は講じているようだが、何事にも限度がある。勉強熱心なのは良い事だけど、それで倒れられては宜しくないと、この話題を早く次の段階へと持つていくよう、平天に抗議する。

「……ちつ」

耳障りな音が聞こえた事に、俺の選択は間違いではなかつたようだと実感します。こ

んにやろめ……意図的に仕組んでいやがったか。

「さて、何処からでしたか……。そうそう、私の子の一人に、ヒトの血が混じっているからでしたね」

こほんと軽く咳払い。

【温泉】脇に積もっていた雪の中へと突っ込んでいたワインボトルを一本開けて、ぐびりと一口。あ、それ一時期ニュースで話題になつてた、一千万届く白のシャトー……。ぬう、目聡い。

「……素晴らしい。洗練の極みとも言える技法の賜物としか思えないこのキレを、何と呼称すれば良いものか。至高、とはこれの為にある言葉だ。これだけで、ここへと訪れた甲斐があつたというものですねえ」

「おお、あなたにもお分かりになりますか。いやはや、初めてこれを口にした時には、数日前に自信を持つて勧めようとなりました葡萄酒……九十九様のお言葉を借りるのであれば、ワイン……でしたかな？ が、霞んでしまいます。恥を搔かずに済んだと、胸を撫で下しているところなのですよ」

共感出来る相手の出現に、クベーラの意識が覚醒。互いに頷き合いながら、ロマネさんとシャトー君に舌鼓を打っている。

(全部が全部、俺の時代の物が美味いって訳じゃないんだけどさ……)

特に、水。こつちの土地のは砂っぽくて困るけれど、あつちの……大和の地の水は、今飲んでいる南アルプスな飲料水とは、比べ物にならないほど美味かつたものだ。お陰でペットボトル系の水を飲むのに不満を覚えるようになってしまったけれど、国に帰ればいずれ飲めるあの旨さを思い返せば、十二分に耐えられる。

どつかの料理漫画じゃ、豆腐とワインにや旅をさせるな。なんて言葉もあるようだが、まあ多分……鮮度とかでも違うんだろう。ここからワインの生産地までは、ものつそ大雑把に思い浮かべてみても、ヨーロッパとインド。この地でワインを飲む機会があつたとしても、そこには距離という壁が立ちはだかつている。時間だけならば熟成云々と価値を高める要因ではあるけれど、その為には、完璧に近い品質管理が伴うのだ。冷凍車も、湿度管理も、衝撃吸収性の高い輸送手段を確保している訳でもないこの時代であれば、味の劣化は避けられないもの、なのかもしれない。

「つて、良いからはよ続きを言いなさいよー」

楽しみを邪魔された事に不快感の混じつた顔を向けてくるものの、しぶしぶ。といった風に、こちらの言葉に従う平天は、その真つ白な肌を僅かに朱に染めるだけ。

くそ、こいつも酒強いのか。リンやクベーラの反応を思い返し、酔い潰れるまでにはかなりの時間が掛かるものだと予想する。あちらが先に音を上げる事は無さそうだと
思いながら。

——不承不承と話す平天は、何故俺に子供を預けるのかを説いた。

妖怪の暮らす地で、人間の血が混じる者が住まうのは、酷。

かといつて、人間の暮らす地であれば、妖怪の血が妨げとなる。

では天界はどうかと問われれば、自分を利用する為に何をされるか分かつたものではなく。ゆくゆくは子すらも利用するに違いないので、それだけは認められなかつたのだ……とか何とか。

「……それで、俺？」

「ええ。妖の者であれば人の部分が蜜となり、天の者であれば魔の部分が險となる。なれば、残る道は、人。……尤も、一人の力量など塵芥。——人の利点は、数。けれどそれを選べば、排他性が強い種である為に、半人半妖たる我が子の害となるのは必須ですからねえ」

平天が求める条件とは、子供に害をなさない護衛。

しかしそれは、神様でも妖怪でも都合が悪く、人間だと力が無いので守れない。

「幾万もの命を蘇らせ、幾万もの命を地の底へと没せしめた者よ」

やや溜めた後。こちらを見ながら、ニヤリと口元を釣り上げて。

「常識の外。限界の果て。久遠の彼方。幾数もの神々と、幾万もの妖魔を知る私ですら

未知である存在。まるで、そう。あなたは——超越者と呼ばれる種に違いないのですから。だからこそ、そんなあなたに——」

そこで、俺の羞恥心は超越した。

「いやーッ!!」

何だよ超越者って！ ある意味で間違いでない気もするけれど、それも真顔で前振り込みの解説されると、色々刺さるもんがありますよ!?

抱えていたインドラを放り出し、粉になれ。と言わんばかりに湯へと体を叩き付ける。遠巻きに見ている「メムナイト」や睚眦、身近といえれば身近に居るリンとウイリクの冷めた視線が全身を射抜いている気がするの、錯覚ではない筈だ。

耳から頭に入ってきた馬鹿馬鹿しい単語を打ち払う為に、餌にありつく緋鯉よろしく、ぼっしやんぼっしやん水面を跳ね回る。

「おお愉快かな！ やはりあなたはこうでなくては!」

「お前それモノ頼む態度じゃないだろう!」

獅子もかくやに叫んでみたものの、とうの牛魔王はそれすらも望む所であったようだ。笑いの質が、よりサドっ気の強いものへと深まっていく。

——それも、何度目かの瞬きの間には、幻のように消えていた。

熱の籠った眼差しに、今し方まで行っていた会話は全て、この為の……子の為の複線であつたのかとすら思える、急緩を付けたテンポ。

緩みに緩んだ心構えに、一刺し。

「我が子を——慧音を。どうか」

その間、大よそ二十秒。

「……………え？」

突っ込み所は、それこそ山のように。

まさかこの後に及んで、記憶の中にあるそれ……ではない可能性は考えられなかった。

平天大聖、あるいは牛魔王の名前を、どうもじればあの苗字になるのだとか。人間嫌いつぱいコイツから、何をすれば子供が人間好きな性格になるのだとか。そもあれは、後天的に妖怪となつた者ではなかつたのか、とかとか、とかとか。

何を言おうか。というか、何か言うべきなのだろうか。

動けば動くほどはまり込んで行く泥沼のように。足掻けば足掻くほど埋もれてゆく蟻地獄のように。答えのない答えを求めて、俺の思考は堂々巡りへと突入するのだつ

た。

58 監視する者 《前&後書き追加》

見る影もない。

未だ百年には届かないけれど、決して短くない年月そこを見てきたというのに、無限に広がっているとしか思えない月光と星々の輝きによつて照らし出された砂の大地は、相も変わらずそこにある。数日前には完全に消え去ったというのに……はてさて。それは蜃気楼であつたのか。

「……ああ。変わり様、という言葉は、適切じゃあなかつたかな」

その、数日前に旅立っていった男の影を思い出し、苦笑。ひとしきりの「参つた」を満喫してから、思考の続きを再開した。

変わったのではない。戻つたのだ。

結果だけを見れば差異はないとはいえ、真実をより鮮明にさせるのは良い事だ。それがどういふ意味であれ。

頭髪の色に合わせた灰色のワンピースを風になびかせながら、眼下の砂漠を見据える

者——ネズミの妖怪リンは、ぼそり、そう呟いた。

「何を眺めているのですか？」

後ろから、リンと同じく、天界へと挨拶を行う為に同行しているウイリクが声を掛けた。クベーラより奪……授かった、簡素ながらも技巧の凝った純白のサリーを小麦色の肌身に付けている。若返った肉体に更なる彩りを添えるアクセサリーと化した事で、女としての魅力に一層の拍車をかけていた。

現在、ダン・ダン塚は大幅な改装工事中。ネズミだけならまだしも、たった一人とはいえ、これから人間が住まうのだからと。ひとまずの安定を手に入れた小さな住人達の手によって、恩人への感謝と未来への期待を爆発させた為か……他の種族顔負けの、文明とすら呼べる建造物が出来つつある。

これも偏に神の加護か、はたまた「禁忌の果樹園」の実という実を貪り尽くして自力の底上げをしたせいなのかは、誰にも分からぬ答えであるけれど。

振り向き、リンは微笑を以って母を迎え、二人は並び立つ。

その二人の足場は、船。ヴィマナと呼ばれる大型クルーザー大のそれは、いずれ幻想郷に出現する宝船にも似た形の、神木を用いた神族の飛行船であった。

特別な力場でも発生しているのだろう。人ならば体を震わせる冷気であるというのに、船の周囲は一定の温度で保たれている。

う思い故に、それを独占しようとする意味合いの強いマーケティング……スキンシップであつた。玩具に夢中になる子供が、それを決して手放さないように。

尤も、それは玩具がこの地を離れてしまう事によつて、無駄となつてしまったのだが。リンは悩ましげな視線を大地へと這わせた後、遠方の地へと消え去つた……戻つていつた存在へと思いを馳せた。

「あれは……」

九十九の力は——片鱗は、それこそ刹那の間の、ほんの僅かしか分からないもの。そこに何かがある、と知つていなければ、勘違いだと意識を逸らす程だろう。

だからこそ気づかない。力ある者……クベーラなり、インドラなり、平天なり。彼らは自身を持つ強大な力によつて、それが感じ取れていないのだ。

聖も使う。魔も用いる。けれど、それだけではない。

世界の全てとも思えた大地の崩壊は、白——聖の力であると言い、巨大な山であつた平天大聖の体を一瞬にして死の縁にまで立たせた力は、黒——魔の力であると言ふ。

けれど、皆の体力を回復した力はそれらとは別で、雷の赤竜を呼び出した力もまた別で。更には、幾度も行つていた大地創造術は、当人すら詳細に把握していないらしい。

……大地の悉くを崩落させた力が聖なるものだと理解に苦しむところがあるけれ

ど、まあ、それも今更か。

(ふわふわ、ふわふわ。君は言葉だけじゃなくて、その力までも定まらないんだね)

少し、羨ましい。

風に吹かれて流されるだけの浮き雲が、それを良しとせず、一つの目的を持って動いているのだから。

国へと帰る。否、あの人の元へと帰るのだと。

結局最後までできちんと尋ねる事はなかったけれど、隠す気があるのだから無いのだから不明瞭な彼であったので、さり気なく問い詰めてみれば、言動の端々からそれ——思い人が居るのだと推理するのは難しくはなかった。

……しかし、それを全く感じさせない……いや。悪さをした子供のように、家に帰りたけれど帰れない。とでも言わんばかりの気の持ちようであったのだが、それでも、決めた事はあるようで。

「良いなあ」

決して縛られない者を、縛る。妖怪としても、女としても、そういう存在には憧れる。実に魅力的な立場だ。叶うのであれば、今後の参考として、そんな立場へと収まってる者に会ってみたいものである。

聖人であっても難しそう。悪人であれば尚の事。

ならば一体、どのような偉人が、彼——雲の心を掴む事が出来るのだろうか。

（生きる……生き延びる為ではない事に頭を使う……か）

これまででは、どうすれば母が生き伸びられるかに腐心していた自分が全てであったというのに。

起死回生を苦悩でもなく、最悪の中からの最善を模索する熟考でもない、ただの妄想。しかもそれが、現実逃避の類ではないときた。

何と無駄で、何と楽しい甘美な時間。こんな時がずっと続けばと思い、こんな時をずっと続けていけるよう。無理をする日々でなく、無茶をする日々を目指していつと。

——と。リンは自分の左頬に、こそばゆい感覚が走るのに気づいた。

思い当たる節は一つしかなく、思い当たるそれとの確信の下に、口を開く。

「おや、もう我慢の限界かな？」

いつの間にやら自らの肩に縋っていた小ネズミへと、リンは人指し指を差し出した。

スンスンと鼻を動かし、擦りつけ。少女の意見に同意する形でひと鳴きする声には、不満の意思が表れていた。

「あら、その子は？」

「何でも、ツクモの命の恩人……恩ネズミらしいよ？」

ワザとらしい疑問系。自らの紹介がぞんざいであると感じた小ネズミは、抗議の声を上げる。

冗談だよ。とリンが反し、小ネズミが抗議した最もたる理由の部分——自らとの関係を口にした。

「色々あつて、今じゃ僕の友人。ほら、こつちへ」

声を掛け、肩に乗ったそれを手の平へと誘導。ウイリクの方へと差し出した。

母はそれを両手で受け取り、自身の前へと手を持ってきた。

完全に胸の前へと持つてこられた小ネズミは、チュウと一声、ペコリとお辞儀。愛くるしい仕草を披露する。

「まあ。しつかりとしたお友達ね」

「ははっ。うん。僕の自慢の友人——チフスつて言うんだ」

元々、その小ネズミには名など無かった。

けれど、リンや九十九との交流を持つ内に、名がないのは不便でならないと思つた九十九は『こんなのだうよ?』と提案し、今に至る。

「ツクモが名付け親だね。何でも、凄く強いイチマナ?のクリーチャーから借名したそうなんだ」

その1マナのクリーチャー、「チフス鼠」という黒の1/1のカードは、「接死」と呼

ばれる強力な能力を有している。

100/100だろうが、1000/1000だろうが、ダメージを与えた相手を破壊する効果があり、ともすれば等価交換以上の取引の強要か、強大な抑止力となってくれる性能を保持していた。ところどころ欠点があるとはいえ、それが1マナで可能であるのは、MTGでもそうあるものではない。

それを知ってか知らずか、得意気に胸を張る小ネズミ——チフスの顔には、根拠のない自信が表れているような気がするウイリクとリンであった。

……このチフスという名前。

後々の時代、高熱や発疹を伴う細菌感染症の一種……ピロリやコレラといった類の病原菌の名となっている事を、とうの名づけ親は知らないのだが。

「やりたい事。やらねばならない事。山積する量は共に目を疑うばかりですが、それもまた楽しみとなりつつある……」

遠ざかる地上に憂いを帯びた視線を這わせ、ウイリクは哀愁の籠った吐息をこぼしながら。

「……ふふつ、強欲な女ね。少し前まで、如何にして民を治めるかに頭を抱えていたというのに。……それが……今は……」

「お母様……」

納得してここに立っているというのに、それでも後ろ髪を引かれる思いが消え去らないのは、それだけ自分の中で大切な……大切であったもの、だったから。

自虐に濡れる顔を不安に思ったリンが、ウイリクの服の裾を掴む。

もう離れないでくれと。もう居なくならないでくれと。

いつかは別れる定めではあるけれど、それでも、寿命以外の離別は許容出来るものではない。

儂げな微笑を向け、ウイリクは了解の意を反す。

人生、一度きり。そんな定め……命の真理を容易く覆された上で、今の自分はここに居る。

命ある者の誰もが望み、命ある者の誰もが継った願いの体現者。しかもそれが、聖魔のどちらでもなく、ましてや幾年もの修行の末の成果——仙人でもないただの人であるのだから、他の者が耳にすれば、子供向けの幼稚な笑い話としかとれないだろう。

「ああ、そうでした」

陰鬱な空気を払う形で、ウイリクは話を変えた。さも今思いついたという口調からの切り出しであったが、まとう空気からは、元よりこれを告げる機会を窺っていたのだと知るものであった。

リンと並び立っていた姿勢を、対面する形へと。

優しげな表情はそのままに、そこには真を含んだ心が宿る。

「我、故クシャタナ王国が女王、ウイリクが真を以つて発する。五十万以上の小さな猛勇達を。そして、あの平天をも影で束る将。宝物神クベーラの使い——監視する者、ナズーリンよ」

それは、九十九がこの地より去つて翌日の事。

クベーラ、インドラの兩名は、神の使いになろうという者が、ただの名のままが良い筈がないと。しかし当初の懸念通り、仮にも妖怪を配下として迎えるには他の神々には多くの抵抗がある。よつて、多少なりとも嫌悪感を軽減すべきだとし、母国の言葉を用いず、隣国——後にペルシア、ペルシャと呼ばれるもののそれ。『n a z a r e』——見る、監督、の言葉から流用する事となつた。

ウイリクの言葉に反応し、二人は対面。しばし目と目を交わす。

そして、すぐにリンはその場に傅き、目を閉じて頭を垂れた。機微を察した小ネズミのチフスはリンの肩から降り、やや離れた位置でそれを見守るよう静かに伏せ、二人の間に混ざる気はないと、行動で示す。

無言の均衡は、ウイリクが動く事で変化を見せる。

一步踏み出し、懐より取り出した小箱を開ける。それは、リンがウイリクの国より持ち出していたもの——クシャタナ国の特産である、ホータン玉と呼ばれるそれであつ

た。

通常、この玉は多少なりとも異物が混じる。ダイヤモンド、ルビー、トパーズのように、不純物が殆ど混入していない代物は皆無に近い。

けれど、ウイリクが小箱より取り出したそれは、青。

晴天の青空。南国の大海。清水の湖。一点の曇りも異物も見受けられない、ともすればサファイアと見紛うほどに清んでいた。紛れもない国宝。その価値は計り知れない。

だからこそ、それをせめてものウイリクの死の対価として奪取したリンであり、この場で行われようとしている……それを託される意味も、充分に理解している。

小箱より出された宝石は結い紐に連なり、首飾りとして着用するものだと分かる造り。それをウイリクがどうするのかは、一目瞭然であった。

「これより、あなたは神の僕となります。弱き者の声を届け、声無き声を拾い集め、炎下の地を駆け巡る。けれど、忘れてはなりません。妖怪という種故の嫌悪、若輩者であるからの偏見、経験や知識がない為の齒痒さ。立ちほだかり、待ち受ける困難は、この広大な砂漠にも似た規模である事でしょう」

傳くりんの首へと、青い宝石をかける。

目を開き、ゆつくりと立ち上がるリンに、ウイリクは力強く、それでいて慈愛に満ちた眼差しを向けながら。

「ですがあなたには、あの平天大聖にすら挑む幾万の勇士が居ます。その力量は火を見るより明らかであつたというのに、それでも付き従つてくれた部下——いえ、あなたの大切な仲間です。そんな彼らが傍に居る。信頼の置ける者達が周りに居るといふ状況は、それだけで何者にも変え難い、巨万の富に勝る、あなただけの——いえ。あなた達の、宝物」

国に裏切られた者の吐露だからか。その言葉の端々には苦く、赤黒い色が混じつてゐる。

だからこそ、その言葉は真実。

ウイリクは膝を落とし、直立不動のリンへと目線を合わせ。

「そんな仲間達が居ても……もし、それでも挫けそうになつた時。乗り越えられない現実に打ちひしがれ、歩みが止まってしまひそうになつたのなら」

言葉を区切り、とても柔らかな笑顔のままに。

「逃げなさい」

ともすれば、最低の侮蔑を受けるであろう行いを推奨する言葉を告げた。

ただしそれは、額面通りの意味にあらず。

「弱気になつた自分から。逃避したくなる心から。逃げたくなる気持ちから、全身全霊を以つて背き続けなさい。そうすれば、あなたはこの世の誰よりも素敵な女になれる。

そう、母は思い、願っています」

目頭が熱くなる思いのリンは、それでも無言。

口を硬く結び歯を食い縛りながら、それでも声だけは上げまいと、両の手の平を握り込んでいた。

しかし、この点においては、リンはそれを実践し続けてきた。

自らの命を救い、心を救ってくれた母の為に。西へ東へ、北へ南へ。魑魅魍魎が跋扈する危険地帯から始まり、魔に属し、忌み嫌われる身でありながら、人間のコミュニケーションである他国までも。妖怪とはいえ幼い体に酷使を重ね、考えられうるあらゆる手段を講じてきた。

巧妙に隠していた——と信じているのはリンばかり。それに感づかぬ母ではない。ウイリク自らに嘘偽りを述べてすらも実行していた心情を察し、言葉で止める術はないものと思い、ならばせめて心穏やかな場を作り続けようと苦慮した結果の、これまでのリンやウイリクの付き合いであった。けれど。

「でも、それで本当に折れちゃったらいけないわ。逃げて、逃げて、逃げ続けて。それでも逃げ切れなかったのなら——」

悪戯をした幼子のように、声色を明るなものへと変えつつ。

「——本当に逃げちゃいなさい。そして、あなたが本当に逃げてしまいたくなるような経験をした、そんな時が訪れたとすれば」

優しげな表情に加え、今度は茶化す風な色を新たに付け足しながら。

「その時は——ツクモさんが黙ってはいないでしょう」

一瞬、リンの目が点となる。

何故この場に居ない者の名が出てくるのかという疑問は、ウイリクの続く言葉で氷解する事となる。

「広大な砂漠の一点……偶然と、奇跡と、運命と。それらが結託しないと……しても起せない様な出会いだったんですもの。たまたま出会い、たまたま良好な関係を築き、たまたまそんな相手が大聖以上の力を有しているなど、何処の夢物語だと疑ってしまうでしょう。……もし、あなたがまた苦境に立たされたのなら、全ての問題を押し退けて、きつとその手を差し伸べてくれる。縁とは、そういうものですから」

愛おしく頭を撫でながら、愛おしさをその手に乗せながら。

「逃げる事は恥ではないの。頼る事は悪ではないの。逃げ続ける事、目を逸らし続ける事が弱さであると。私はそう、考えます」

その考えは万人には当てはまらないものだど、リンに語り掛けた本人が最もよく理解しているし、それをリンが行い続けてきたからこそ、今の自分達はここに居るのだとも

思っている。

釈迦に説法。ウイリクの心を過ぎる思いを言葉にしてみれば、そんなところが適切か。

それでも言わずにはいられないのは、ずっと押し殺してきた——僅かにしか表せなかつた、母としての面が強い。

クドクド、クドクド。誰もが言われた経験があるだろう。

分かつていても言いたくなる。それが親という者であり、最愛の存在を持つ者の、性の一端でもあるのだから。

「おかあ、さま」

母は子を胸に抱く。

子は母の胸に縋る。

背に回された五指が強く握られるのを感じながら、ウイリクはより一層の力を込めてリンを抱きしめ反した。

「……それに、今の私だって、我が子を抱きしめる事くらいは出来るもの。あなたの心を守るのは、インドラ様よりも、ツクモさんよりも。他の……世界の誰よりも適任である。自信を持って告げておきます」

あなたが困難に直面するまでには、それなりの力を蓄えておきたいのですけれど。

僅かに頬を朱に染め、照れた顔を浮かべながらそう漏らすウイリクに、リンは再び胸へと顔を埋めた。もそもそと首を左右に振って、奥へ奥へと押し入るように。

今までは体を労わっていた付き合いであつたので、極力避けて……遠慮していた力強いスキンシップであつたけれど、今の母は十代半ば。見た目こそ二十代前半ではあるが、歩行も困難であつた老体とは比べるまでもない体力である。

「あら、どうしたの？」

胸へと顔を埋めたリンが、しかし、再びむず痒そうに体をくねらせ、頭を離す。

ふはあ、と大きな一呼吸。悩ましげな目を、目前の柔らかな物体へと向け。

「……」

その後、視線を下へと自分の胸へと落とし、自らの手でそつと……。

——ヒニユン。

「……はあ」

おそるおそる、繊細なガラス細工でも触るように触れた体の一部は、しかし、見た目通り、肉体年齢通りの感触を反してくるばかりで。

対して、ウイリクは無言。

微笑ましい、若き日の過ちでも見るような、全てを許す慈愛の瞳を浮かべ。

「大丈夫。私の夫も、大よその男が興味を惹く……筈だつたお尻やおっぱいには目もく

れず、太股ばかりを愛でていたもの」

「……ツクモ相手ならいざ知らず、お母様からそういつた言葉は聞きたくなかった、です」

肩を落とし、顔面に何本かの縦線を走らせるリンに対し、ころころと笑うウイリクの内心は、少しの嫉妬が含まれていた。

リンと九十九、当人達の意味はどうあれ、自分の目の前であれだけ夫婦漫才をやられた日には、拗ねたくもなるといふものだ。

それが——愛娘の唇を奪った者であれば、なおの事と。

「——そこまで気落ちするものでしょうかねえ。その辺りは多少の造形よりも、相性の要素が強いものだ」と認識していたのですが」

月光降り注ぐ砂漠に木霊する、鋭く冷たい男の声が。

純白のサリーに身を包んだウイリクよりもなお白い全身の。元・タツキリ山が主、平天その人であった。

「女心が分からないとは、あなたの奥方達は、さぞ苦労されているでしょうね」
そこに居たのは知っていたと。

呆れと挑発の視線を混ぜ合わせた眼光を向けるウイリクに、平天はおどけた風に肩を

疎めた。

「おや。一を見て十を知った気です？ インドラから千里眼でも授かりましたか？」

「そんなもの無くても分かります。女ですもの」

「……参りましたねえ」

どうやら凶星であつたようだ。

困つた、と吐息を一つ。警戒するリンを他所に、平天はウイリクの横へと並び立つ。

……いや。並び立とうとし、足を勧めた直後、対面する形で、彼の進路を塞ぐ形で大

柄な人影が現れた。

「ほう。久方ぶりですなえ。——睚眦」

片手に直剣、背に大弓を担ぐ大男の名は、睚眦。九人居るといふ龍の子の内の一人である。

壁となつて平天の前にそびえ立つ意図は、誰がどう見ても、背後に居る者を守る為。

これが数刻前、「鬼の下僕、墨目」によつて傀儡と化していた時ならば当然のものであつた。けれど、今ここに居る睚眦の瞳には、虚ろとは真逆の、力強い意思が感じ取れるもの。

「これはこれは。あなたともあろうものが、まさかヒトに下ろうとは」

「……それはキ……あなたが言えた事じゃあないと思うけどね」

非難の声。小馬鹿にした物言いであつた筈なのだが、それは非難した相手の全身を撫で回すような視線によつて封殺されて、リンは慌てて言葉遣いを若干丁寧なものへと修正した……された。

幾ら立場が上とはいへ、相手はタツキリ山の主であつた平天大聖。實力差は日を見るより明らかである。怖いものは怖い。

そんな平天の視線を挑発と取つた睚眦が、その大妖怪の眼前へと直剣を突きつけた。かつて配下にいたものの、それは利害関係の一致からに過ぎず、こうして不一致となれば、それは……。

「おっと。冗談、冗談ですよ。怖い怖い、あなたは昔から、冷血でありながら血氣盛んで楽しい者ですが……」

そつと。一枚の紙切れを扱うように直剣の切つ先を掴み――。

「――この場で騒動を起こす事は、どちらにとつても不都合以外の何者でもないでしょう？ 我らにとつて、この小船は、力を受け止めるには小さ過ぎますからねえ」
触れている面は人差し指と親指のみ。たったそれだけしか触れていない筈の直剣は、岩に突き立つ聖剣の如く、ピクリとも動かず固定されてしまった。

ただの人間であればそれも当然かもしれないぬ状態であろうが、相手は妖怪の中でも上位に食い込む猛者。そう易々で行えるものではない。

睚眦の目が僅かに細まり、次いで浮かべる表情は、笑み。龍の顔から牙を覗かせ晒う様は、獯猛な赤に染まっていた。

直後。

睚眦が直剣を握る腕が一瞬膨らんだかと思えば、バキリ。金属質の叩き折れる音と共に、直立不動の姿勢へと戻る。その手にあつた刃の先端。それが見事に一部を欠けさせた事を除けば、時の巻き戻りを錯覚させる光景であつた。

(……「これらを監視しきる自信がないよ……」)

危うい、など生温い。傍から見れば一触即発状態であつた。

これが、この先ずっと。

これから起こるであろうあれやこれを思い浮かべ、内心で頭を抱えるリンを他所に、平天は摘んでいた直剣……の先端部分であつた金属片を、興味を失つたとばかりに船の外へと放り投げ、当初の目的通り、睚眦の横を通り抜けて、ウイリクの隣へと移動。

問い掛けるような、言い聞かせるような。そんな自問自答を呟いた。

「やはりあの男は理解に苦しみますねえ」

平天は、願いを託した男を脳裏に画く。

初めての出会い……印象は、妖怪の総本山たる場所へと雄々しく乗り込んで来たかと思えば、道中は欲に塗れた人と呼ぶに相応しい態度であり、その評価はこうして全てが

一区切り付いた後となつても、基本は変わることはない。

最後まで己が心情に従つて欲を貫いた姿勢は、人間を統べている立場の、主に王や皇帝と呼ばれている者に多く見られる傾向ではあつたものの、その態度は大よそ人の上に立つてゐる者ではなかつた。

まだあれと敵対する前、ネズミ達と共に【禁忌の果樹園】の実を食していた頃の評価は、ここにきてそれが寸分違わぬ評価であつたのだと決まつた……決まつてしまつた。

余裕を消す事で相手の本性を曝け出そうとしての行いは、それをせずとも、見たまま、感じたままの相手であつたのだから。

初めて見る、チグハグな存在。

自分やインドラを凌駕する力を持ち、それらを得る為にはまず解脱してゐる筈の境地……一貫性とも言えるそれ——人という種の欲を抱きながら、たつた数日間とはいえ、それをまつたく感じさせない程に自然体で居続けられる胆力は驚嘆に値する。

まるで人という種をそのまま強大にした……仕立て上げたような試作品。古びた剣に、無理矢理人外の力を宿したような歪さ。

それを何と例えたら良いものかすら、今の自分には思い至らない。

(……いけませんねえ)

数百年のこれまで培つて来た知識が、かえつてあれの認識を歪めてしまつてゐる。

次に会う機会があるのなら……あの者を正確に把握するには、余計な経験はない方が
良い。自分などよりも頭の軽い……そう、最も新しく義兄弟となった岩猿の方が適任だ
ろう。

（まあ……だからこそ、ですか）

愚者と蔑んでいた相手……ヒトという種に、羅刹女、玉面公主に次ぐ三つ目の愛が
実ったかと思えば、それを奪い去っていったのも同じ種の愚者。

——人の子ではないからと。人外の子であるからと。

火炎が舞う家屋。それを取り囲むニンゲン。手にした鋤や鍬の先端にこびり付く甘
美な赤と、ぶつ切りに解体された肉人形は、最も新しく情愛を交わしたばかりの……ナ
ニカ。

その次に視界に飛び込んでくるものは、今まさにその小さく幼い体に刃を突き立て
んとする、塵共の姿——。

ヒトは、守り、導く対象にあらず。そう思い至るのに、さして時間は掛からなかった。
他の理由が鬱積していたところに起こった決定打。天界より反旗を翻した頃にあつ
た考えは、今も変わらず胸の中にある。

事実、タツキリ山などという雑多な神々や妖魔すら寄せ付けぬ根城を築き勢力を広げていたというのに、把握しているだけでも、人の数というのは減るところか増える一方。まだネズミ達の方が自然を尊重している分、可愛げがあるというものだ。

その後。残った子への対応は、自分を以つてしても探り探りであつたとしか言いようのない程に危ういものであつたが、妻を亡き者にした同種は全て噛み砕き消化してしまつている。

少しは妻の心でも流れ込んでくるかと思えば、味わえたものは恐怖のみ。実に予想通りで、実に期待外れの結果であつた。

……そして、そんな最愛にして最憎たる種族に再び友好を以つて関わろうというのだから、この世の理を鼻で笑つてしまいたくなる。

それもこれも。

(既に、私はあれの手中にあつたのですから)

あの東の超越者が、情に脆く、情に厚い事は把握済み。

それがどう叶えられるか……。に対しては不安が鬱積しているものの、仮に最悪の事態になろうとも、死の否定すら軽々としてしまふのだ。親として、これ以上の安心感はずもあつたものではない。

あの子以外は、もはや自らの加護がなくとも十二分に世に羽ばたいていける実力は有

している。後は残りの手札を全て使い助力を確約させれば良いだけ……で、あったのだが。

（慧音の名を告げた時の、あれの反応ときたら）

見ず知らずの我が子の名を知らせた時のあれの反応は、もはやそれが既知であるとか言えないほどの狼狽であった。

知っていたのだ。自らの秘部を。

掘んでいたのだ。自らの弱点を。

ただそれが、今の今まで平天の子であるという事実に結び付いていなかっただけ。口にしなければ良かった弱みを発してしまった事で、自らの墓穴を掘る羽目となり……。

「……降参、ですねぇ」

数千万は居るであろうヒトという種の中で、よりにもよって、何故自らの子の存在を知っているのか。しかもそれが顔見知り程度のもではなく、あの驚き様からして、既に一定以上の関係を築いているに違いないときた。

偶然などという単純な答えて片付けられる訳がない。我が子この世に生まれ、まだ百年は経っていないという短い間に、自分に気づかれる事なくあれは、既知の関係を育んで来たのだ。

ありえない、と。それ以外の何の言葉が出てこよう。

炎天の地を統べる神々は勿論、配下の妖怪、自らの妻ですら。誰もが知り得なかつたそれを把握していたばかりか、既に根回しが済んでいたという、もはや未来を……千里眼を持つインドラすら上回る、先見の眼でも備わっているとしか考えられない手回しの良さ。

……もし。それを知らずに、あれを意のままに操ろうと画策した場合の未来は。一騎当千の妖魔の群れを沈め、大聖の大半を大地へと没し、タツキリ山すら埋めてしまった結果を見るに、自らが守るべき全ての死という結果が待ち受けていただろうから。

「あの方は、娘の唇を奪ったのですもの。これくらいはしてもらわないと」

——そんな思い悩む平天の思考を遮る形で、ウイリクが九十九に対する感想を述べた。

平天の浮ついていた意識が戻り、彼は何故この女が唐突に、そのような事を言い出したのかを考える。

あれについての熟考が顔にも出ていたのかと思つたが、何の事は無い。
(……おっと。そういえば、問い掛けの形になっていましたか)

自ら発した、あれは理解に苦しむ。との呟きに反応しての台詞だろう。

こちらから振つた話題であつたのを平天が思い返していると、それを皮切りに、忘れていた記憶が鮮明に蘇つてしまったリンは、耳や頬のみに留まらず、顔……いや。

もはや全身から湯気が出そうな程に赤く茹で上がってしまっていた。

「ですが、それだけの為に睚眦を傀儡から解放するなど、愚の骨……ちっ」

ほぼ言い切ったに等しいが、それだけ述べた所で平天は言葉を止めて、忌々しげに顔をしかめた。

九十九を蔑めば蔑む程に、それに屈した自分を下げることにはかならないのだから、自虐行為もいところである。平天にそのような趣味はない。

先に内心でその者に白旗を振った手前、効果はより大きなものとなっているが故に。

「……まあ、その辺りは色々と、ね」

呟きは、ネズミなのに茹蛸となっていた少女の方から。

睚眦の獍猛な空気は一転。ギョツとしてリンを見る彼であったが、『分かっているさ』と返す少女に、大きな安堵の息をこぼす。

どう見ても弱みを握られているとしか思えないそれ——この不透明な関係は、九十九が旅立つ前日にまで溯る。

完全に。とはいかなかった「ハルマゲドン」によって崩壊した土地の修復を全て完了させるべく奔走していた時の事。出会ってからまだ日も浅いというのに、半ば恒例として周囲に認知されつつあった九十九とリンの漫才の一時であった。

少しキツク言い過ぎたリンに対して拗ねる九十九に、少女は苦笑しながら、どうすれ

ば許してもらえるのかと問い掛けたのであったが。

『ちゅーしてくれ、ちゅー』

出来る訳がないと踏んでの男の物言いは、事実、リンが素直に受け入れる事はなかった。それを告げる事で困るリンを九十九が見たいが為の戯言である。

……けれど、その体は、別。

【鬼の下僕、墨目】が龍人の睚眦を傀儡と化した時に、九十九は気づいておくべきだったのかもしれない。墨目によつて蘇ったクリーチャーは、プレイヤー……彼のコントロール下に置かれるという事に。

惜しむのならば、この時まで命令やお願いと云つた言葉を口にしてこなかったのを悔やむべきかもしれないが、時、既に遅し。

『んんっ!?!』

『——んんっ!?!』

幸いにも少女の口と男の頬が合わさっただけで抑えられたハプニング……見るものが見ればスキンシップの一環とも取れる行動が起こした結果が、今のこの状況である。

その直後のネズミ達の、『よっしやこれで!』と言わんばかりの歡喜やら、『あらあらうふふ』と無手——恐らく暗器持ち——で九十九に接近するウイリクやら、あうあう言いつつ魂ここにあらざるネズミの少女やら。

そんな、約一名の命の危機が迫りつつあった騒動があった最中。

「……それが原因で、偶発的に睚眦の呪縛が解けちゃったんだよね」

リンは懐かしみ、疲れた笑いをこぼす。

その時、羞恥と混乱の最中の思考によつて九十九が導き出した答えは、そんな状態の改善。自分が自分の意思で行動出来るようにする、命令権の返上であった。

『家路』

【土地】 【特殊地形】

タップする事で無色のマナを一つ生み出す能力に加え、タップする事で、各プレイヤーはそれぞれのクリーチャーのコントロール権の再配布を行う能力を有する。要約すると、場に出ている奪った、奪われたカードが元の所有者の下へと戻る。

この【土地】が場に出ているだけで、対戦相手が使うコントロール奪取系のカードは無力化されたようなもの。そういったカードが用いられる場面が多い訳ではないが、そ

ういったカードを使う相手には、これが出ているだけで強い抑止力となる。

個別に対象が取れるものではないそれは、当然ながら、全てに効果をもたらすもの。最大範囲は分ならずとも、護衛の為に目と鼻の先に居た睚眦に、その効果が届かない筈がない。

一瞬で【恭しきマントラ】による【プロテクション（黒）】を付与し、【お粗末】による無力化を狙う九十九であったが……。

『……うん？』

間の抜けた九十九の眩きは宙に溶けて。

血風が飛び、剣撃が乱舞する未来を予想していた誰もが、どれだけ時が経っても風が周囲を吹き抜ける音しかしない……睚眦がまったく動かない、魂の抜け殻にでもなってしまった状況に、頭の中を疑問で埋め尽くし、数十秒後——。

「君に、お姉様は無理だと思うけどね」

忘れ去りたいような、決して忘れたくないような奇妙な心境を経て、睚眦が意思を宿したままでも付き従っている状況への一言を、リンはそう締め括った。

途端、龍人の顔が朱に染まる。

人間の生半可な攻撃では傷一つ付かないであろう新緑色の表皮の上からでも分かる程に赤く色付いた体からは、もう少し追い詰めれば先程のリン同様、湯気でも立ち上るのではと思わせるくらいであった。

その時の一件を要約すれば、一文……否。たった一言、僅か一文字で事足りる。恋。

それが、他八人居るといふ龍の兄弟達の中で、殺戮を好み、最も残忍と言われた者がリン達の護衛になっている理由である。

「……なるほど。命を奪われたばかりか、魂までも、とは」

一触即発の空気、再び。平天のからかうような感心の声は、睚眦の気に触れたらしい。先の冷たい闘気ではなく、紅蓮の……薄桃色に見えなくもない滾りが体から溢れ出しそうになる龍人であったけれど、その元上司は、そんな相手を片手で制し。

「分かりますとも。でなければ、この私に妻などおりませんからねえ」

口元の嘲る笑いはそのままだが、眼光だけは嘘偽りないとする力強さ。

舌打ち一つ。睚眦は行き場をなくしたわだかまりを、それに乗せて吐き出した。

「こつちの情勢が落ち着いたら。そういう契約だからね」

墨目は九十九が呼び出した存在である事。つまるところ、この世をいくら探そうとも会えないのだという事を、九十九当人が説明。

『ならば呼び出せ』と龍人が言えば、『ごんけな。嫌とは言わねえが対価を払え』と男が反し。

そんな流れで話は進み、リンやウイリクが会つても良いと判断すれば、九十九が呼び出すという内容で契約する事で落ち着いた。

(……あれ。でも、その場合つてツクモがこつちに來るといふ事になるのかな?)

まさか、こちらから行かねばならないのだろうか。きちんとした距離は分からないけれど、九十九が目指している国というのは、決して近いところではなかつた筈。

その辺りがうやむやのままに決め事をしてしまったのだと改めて気づいたけれど、神の助力が期待出来る以上、どちらにしても大きな問題ではないだろう。

(ま、具体的な期間は決めていないから)

それが百年先か、千年先かは、少女やその母の胸三寸。

大切な事は、会わせられないと言つてしまう……言つてしまつたと同義の行動をしない事。可能性を完全に断ち切る、希望を捨て去る行いは、その命のリミッターまでも奪い去つてしまう。

早い話、自暴自棄。それだけはさせてはならない。相手の力量的に。
(狡賢くなつた気がするね)

僅かな希望をチラつかせ、それで相手を操ろうというのだから、ある意味でまさに妖怪の本懐を達成中なのであるけれど、それに素直に喜べないのは、母や九十九の影響だろう。

けれどそれも悪くはないと。首に掛かる、ウイリクより授かつたスカイブルーの宝石を触りながら、リンは納得と共に微笑した。

「子供……娘さんは、九十九の国の辺りに居るんだつた、かな？」

そんな影響を発していた相手の一人、今回の件の最大重要人物を思い浮かべ、彼が向かつていったであろう目的地を平天へと尋ねる。

「細部は話すつもりはありませんが。まあ、そちらの方角かもしれないですねえ」

弱味は少ないに越した事はない。ぼかした表現は、そう意図するからに他ならないとリンは察した。

クベーラやインドラは勿論、妻達にさえも。平天が九十九当人にしか告げていないそれ——慧音と呼んだ子の居る地は、既に没してしまつた元タツキリ山にあらず。この地より遙か遠く、決して平天が率いていた陣営の勢力が及ばぬところであつた。

彼の子供達がタツキリ山で暮らしていたのは間違いないけれど、それが全員だとは一

言も発していないのだから、平天と九十九以外がそれを正確に把握するのは、まず不可能。

しかしながら、第三者へと話してしまった時点で全てを秘匿するのは難しく。

他人に頼られ、それを了承した九十九が子供の確保——居場所を隠したがっていた平天の本心に沿うように、目的地向へと一直線に向かわない。という気の利いた行動が取れるとは考えられなかったリンであつたので、自ずとそのような答えが出て来た。

そして、それはあまりのから外れていないようである。

尋ね過ぎたか。

平天という相手を鑑みて、知り過ぎた者の末路を連想したけれど、今のところは穏やかなのまま。これ以上は止めておくのが最善だ。

思わぬ地雷を踏み抜きそうになったリンではあるが、無事に回避に成功する。

悪寒を振り払う様に隣に居た母の手を握り、再び考える事は、九十九の事である。

「超越者……か」

神でも妖怪でもなく、仙人や邪仙でもないとするれば、そういった種族であるのだろう。あの時に初めて耳にした名であるが、呼んで字の如く存在に違いない。

何といつても、広大な大地を丸々と消失させたばかりか、死の否定すら容易にやってのけるのだから、納得する他に答えはない。

超越者という種族を知っていた平天の博識さに感心しつつ、持ち込まれた文献や書物、伝聞くらいしか外の知識を有しない自分を恥ずかしむ。

「まさかキ——あなたがハクタクだったなんてね」

「くつくつくつ……。世間に散文している認識は把握しておりますよ」

中々に直らぬ蔑みの口調に笑みを濃くする平天に、またやつてしまったと慌てて言い直すリンであった。

ハクタク。

人面の白牛であり、計六つの角に加え、体中に眼を持つというそれは、人外が存在ではあるものの、妖怪ではなく聖獣として認知されている。

世を治める為政者の前に現れ助言を与える事から、王の選定者としての面も持ち、それに会えば子孫繁栄となり、ハクタクに関わる物品は権力者や延命者達の手元に、こぞつて集められている。

「……と。そんな話ならよく耳にするだけけれど」

「希望というものは、見る者の欲によつて色を変え形を変え、無駄に膨らむもの。そのよ
うな行いは、たった一度しかしていませんがねえ」

一度、人に対して福をもたらした噂が一人歩きし、後は受け取り手の自由に話を膨らませた結果だと。

ジト目になるリンに、実に愚かだと平天は晒う。

「しかし……」

そんな妖怪の王へと収まってしまった聖獣を、上から下から。リンは余すことなく観察し。

「……なに。時が来れば、徐々に周知のそれに近づく筈ですよ」

その意図するところを察した平天は、疑念を氷解させるべく言葉を発した。

一度だけであるけれど、リンが平天の本体を見た時には、ただの巨大な白牛であった筈。

それが途方もない巨大さであった事を除いても、人面、六つの角、体中にあるという眼。そのどれも見た記憶は無い。

「自身の欲に身を任せる程に眼の数は減り、清らかであろうと勤めていた心を無視する程に角は減り。まるで自己の醜さが顕現するように、頭部にあった双角だけは物々しい凶器へと変貌していききました。力を持つだけの獣——妖怪である者に過度なモノは不要だと、自身の体が判断したのかもかもしれませんねえ」

西洋には、聖なる者が邪な者へと変貌する際には、墮天、反転などと呼ばれ、その容姿を大きく創りかえる場合もあると思ひ出したリンは、それが平天にも起こったのだと判断する。

好奇心に突き動かされるがままに詳細を尋ねてみたいとは思うが、更に口を開く気はない。

(……これ以上、機嫌を損ねたくない)

折角和らいだ空気を、再び剣呑にする必要もないし、したくもない。

自分は、ツクモではないのだ。見えている危険に飛び込む無謀は断固避けるべきである。そう考えるリンであった。

「しかし……他の大聖の位置は掴みましたが……はて……あの岩猿は一体何処へ……」
夜景を見ながら自らの思考に没頭し始めた平天から視線を切り、同じく夜景に視界を向ける母の手を握り、共にそちらを見つめる。

すると、これまで見守る事に徹していた小さな友人が、再び自らの肩に駆け上つてきた。

母や自分と同じ方向へと視線を向ける様は、こちらを仲間外れにするなどとも言わんばかり。

「ごめんごめん。そうだね、これからは君と一緒に居てくれるんだものね」

そうだ。と断言する風に胸を張……つている気がするチフスに、微笑。どうやらずっと一緒に居る算段らしい。

それも良いかもしれない。しかし、今後同行するのなら、移動手段はどうしようか

と思ひ悩む。

歩幅の問題は大きく、ならばこれまで通り自らが連れて歩くのが最適であろうが……。

「ま、ゆつくりと考えていけばいいさ」

幸いにも、これから学ぶべき機会——これまでと比べれば安息に近い時間は多くある。

母も居て、仲間も居て。友も出来て、目指す未来も出来た。

実に心躍る。これから訪れるであろう様々な出来事に思いを馳せて。

「——ははっ」

感謝の言葉は、これまでの経緯を脳裏に描いた途端、苦笑にも似た——心の底から晴れ渡る笑みになっていた。

異形の鉄馬〔メムナイト〕に跨り、うんうん唸りながら東の地へと旅立つて……戻って行った男の後姿を思い描き、その背を後押しするように、小さく。口には出ない感謝の念を、そつと視線に乗せる。

「まずは……私、と言うところから始めようかな」

これまでの呼び方——僕、などと。

神の下僕たるものが、そのような自己の呼称で公の場に出られようか。そんな、愛娘

の女らしさの向上を意図する意味合いが強いウイリクの言葉によって、それを改めるに決意する。

長年それを口にして来たのだ。矯正に一体どれくらいの間が掛かるものかと……それを成せたのなら、あの男はどのような反応をしてくれるのかと想像し。

「」

母にも、平天にも、顔の真横に居るチフスにすら知られないよう。悟られないよう。リンは口元に、柔らかな笑みを浮かべるのだった。

——西暦、二千と少し。

中央アジアの一角には、タクラマカンと呼ばれている砂漠がある。

現・中華人民共和国のウイグル自治区に点在するそれは、ゴビ砂漠、サハラ砂漠に並

ぶ大砂漠として世界に知られた、ウイグル語でタツキリ（死）とマカン（無限）を合わせた造語——場所である。

死の世界。生きては戻れぬ土地。そんな意味合いが込められたそこは、事実、何人も寄せ付けぬ過酷な環境を有するものであり、西方より吹き込む強風によつて運ばれる黄砂は、数世紀に渡つてタツキリの名に相応しい災害をアジア各地で振り撒いている。

しかしながら、それでも生命の営みの名残はある。付近にある山脈が、夏季の雪解けと共に川を成す、季節河川と呼ばれる生命線の存在も大きいだろう。

その内一つ。既に砂土へと朽ち果てた遺跡があつた。

八世紀頃に放棄されたとされるその町は、その頃その土地を統べていたウテンなる王国の重要な拠点として存在していたらしいが、その詳細な調査は未だ不明瞭のまま、現在も古き生活の跡を残すばかり。

そんな未知の可能性を秘めた遺跡の中に、板絵が何枚か残つていた。内容は、人間の軍勢に攻勢を仕掛ける無数のネズミが描かれているものである。

いずれも人間達を襲うものでなく、剣の柄や鎧の結び紐、弓の弦に馬具などを噛み千切り無力化にしているという——人間が現実的に考えられる範囲での構図であつたが、何でも、ウテンなる国となる前、クシヤタナと呼ばれていた古事が残る、現・ホータン王国の一部であつた国王が、襲い来る敵国の軍勢に対して劣勢であると悟り、藁に

も縋る思いで近くのネズミ塚へと祈りを捧げたところ、その日の夢にネズミが現れ、そのネズミはそれを受諾。撃退は拒否したものの、無力化を約束し、それを成したという逸話が元であるのだとか。

それ故か。それら地域には、嫌われ者である筈のネズミを信仰する、カルニマタ寺院という建造物すらある始末。何でも、そのネズミは神の子の生まれ変わりであるから、という理由からである。

——そのネズミ塚の名は、ダンダン・ウイリク。

当時からその名称であったのか、はたまた途中で改名されたのかは定かではないが、西暦二千年と少しの現在。御伽噺や空想上の物語、良くある絵空事の一つだと認知されているその真偽がどうであったのかは。

今もまだ、黄色の大地に眠ったままである。

ご報告十嘘予告りりカルギヤザリング

ただのご報告のみの投稿は、字数的にも規約的にも難しいく、過去に投稿しましたエイプリルフル企画によって、これら条件をクリアしようと考え、このような形の掲載になりました。『ハーメルン』様投稿用の改行の削除をおこなっておりませんので、見難いところが見受けられるかと思いますが、ご了承いただければ幸いです。

仮に問題などが発生した場合には、気づき次第、対処させていただきます。



こちらはMTGが既知である事を前提として書かれた面が強くあります。ご存知でない方は、拙いものではありませんが、※のある箇所には、簡略的な、参考程度のものですが、下に解説を加えさせて頂きました。

4 / 1 企画 「リリカルギャザリング」

「——さようなら。……あなたの事は、一度として娘と思ったことなど無かつたわ」

落ちてゆく。落ちてゆく。落ちてゆく。

いつまでも。どこまでも。ただずっと。

最愛の娘と共に、自ら造り出した、最愛の娘と瓜二つの造形に看取られながら。

拒絶されてなお、その手を差し伸べる程に、あれはこちらに酔狂していた……ものだとばかり。自らその身を投げ出すものかと思つたものだが、思つたよりは、あちら側に思い入れがあつたようだ。

徐々に小さくなつてゆく娘の姿をした存在から視線を切り、すぐ横に冷たいケースで覆われた、愛娘へと目を向ける。

何一つ辛い事など無い——と物語るその寝顔だけが、ともすれば、一瞬先には絶命が待ち受けているかもしれない状況であるというのに、心に安らぎをもたらしてくれて

いた。

私の人生は、何処で過ちを犯したのだろうか。

あの人と別れた事か。娘の生活を優先させなかつた事か。違法にまで手を染めて、生命体を創り上げた事だろうか。

悲しみによる涙など、とうの昔に枯れ果てたかと思つていたのだが、今頬を流れる暖かな感覚は、全てに対して諦めてしまったからなのかもしれない。

それでも。

唯一の救いは、最愛の者と一緒に最後を迎えられるという事。

例えそれが……ただの抜け殻であつたとしても、そこに人格を見出し、想像を投影し、思考を反映させるのが人というものだ。傍から見れば虚しいばかりであるとは理解するものの、だからといって、その言葉を丸々受け入れる気などさらさら起きない。

底の見えない虚数空間の穴は、即死という単語からは遠くに位置している。自分の病が命の灯火を消すのが先か、エネルギー摂取の手段が皆無である事によつて餓死するの

が先か。三者三様の終わりが目の前に控えている今となつては、魔法の使えないこの場において、確実な死、以外の何者でもなかった。

——手の感触は、未だにガラスの容器が自身の傍にあるのだと伝えて来てくれる。もう、とうに距離という感覚が消失した空間で、自由落下による無重力が全身の負担を和らげている事にも慣れ始めた頃——

「……え？ ……プレ、シア……？」

もうある筈の無いと思つていた、人の言葉を耳にする機会が再度訪れた事を感じた。通常ならば驚愕の極みに達するであろう状況なのは間違いない。けれど今の自分は全てを達観してしまつている。例え何が起ころうとも——

「——っ!？」

憂鬱な臉を薄つすらと開き、それを見た。——見て、しまった。

数百メートルはあろう、小型次元航行艦並の大きさ。視界に映るそれは、距離感の図り難いこの空間であつても理解出来る、巨大な何か。

石で形成されたひし形には、幾筋かの切れ目。

下部だと思われる箇所からは無数の瘤がついた触手が漂つており、無作為に周囲へと伸ばされている。

そして、それから感じる、言いようの無い……途方もない膨大な力と、それに見合うだけの……恐怖。

逃げ出したい。——否……死にたい。

時間制限付きの死など待つていられない。今すぐにでも自らの胸の鼓動を——

「ッ!? エムラ※0さんストップ! 力弱めて! あんたの【滅殺】の一端が発動しちゃつてますよ! 被害者が死亡者になつてまうがな!」

さながら、プロレスのリング上でマットを叩きカウントを進める審判の如く、ペシペシと。

死の具現化の上で胡坐を掻いていた者は、それが不可能だと分かっている筈なのに、そう叫ばずには居られなかつたという。

「えつと……粗茶ですが……宜しければ……」

今、私の思考は限界を迎えていた。

それはオーバーフローなどの意味ではなく、達観や諦めなどと言う、一種の悟りに近い心境だと判断出来る。

魔法の一切発動しない、虚数空間の底の底。

その人知未踏の空間に生物が居たとしても、何ら可笑しくはないのだから。

……ただそれも、そこに、接客……あるいは接待、という単語が存在している事は微塵も予想出来ない。いや、出来る筈が無い。

「……結構よ」

改めて周囲へと目を向ける。

エムラ……と叫んでいたのを思い出し、この足元に居る存在の呼称は、そういう呼び名であるのだと理解する。

そういった方面の専門家ではないが、それでもこのような生物が実在しているなどとは全く聞いた事が無い。完全に未知である。もし知っていたのなら、娘を蘇らせる実験の参考にする為、必ず調べ上げていたと断言出来る程に。

膝や手に触れる感触から分かるのは、硬い表皮は硬質な何かであり、それは始めに思った感想である石や岩などとは断じて違うものだと考えた。

時折こちらの目線以上の高さに触手が見え隠れするものの、状態はそれ以上進展する様子も無く、傍に置かれた娘……保存シリンダーのみが、この非常識な世界であっても平静でいられる要因となっていた。

エムラと呼ばれた物体……生物の上に足を崩して座る自分と、1メートル先できちんと正座を成していた、白い服を来た男が、差し出したコップを断られ、気まずそうに對面していたのも、平静でいられた一因であろう。

——全てを失った魔女は、深淵の底で、白い男と出会う——

「下らない。復讐なんて、そんな面倒な事をするくらいならば、娘の為に何が出来るかに
気を向けるべきよ。何も思わない訳ではないけれど、何かする気も起きないわ。精々、
何かの次いででやってあげても良い。くらいなものよ」

「なるほど……やっぱり娘さん最優先なのは間違いないのか……。うんうん、こんな人
が絶望の最後を迎えるなどと、この世に神も仏も無いのなら、自分でやるしかあるまい
て。……プレシアさん」

「……何かしら」

「我ながら、胡散臭いのは重々理解してるんですが……——取り戻したくありません
か。失った時間を。存在していた筈の平穏な日々を。そして何より……その子の命を。
何処ぞの失われた魔法大国目指すよりは確実性高めなのは保障します」

——元より、それを目指していた身。断る理由などある筈も無く——

「……おかあ、さん……?」

「ああ……アリシア……っ!」

「肉体残つてて助かった……無いとそこそこ手間が掛かるからなあ。……じゃあ、プレシアさん。さっきの約束、守って下さいね」

「……え、ええ……何とか……やってみるわ……」

「? どうしたの? お母さん。そこのお兄さんは誰?」

「よ、良かった。てつきりおじさんと呼ばれるもんだとばかり……。おほん。初めまして、アリシアちゃん。お母さんはね、君の妹と喧嘩中だから、その仲直りに向かおうとしているんだよ」

「妹? お母さん。私に妹が出来たの?」

「え……あ……」

「……プレシアさん。俺との約束は、藁にも縋る思いで結んだのだと、そう理解していません。確かにこの子を目覚めさせられるのなら、あなたは何でもする気概がありました。……ただそれも、こうして結果を出してしまった後の事までは、考えが及んでいなかった。……ですが、あの時のお返事。何かの間違いであった。などと言うおつもりはありませんよね?」

「……………う……………あ……………」

「お兄さん！ お母さんを苛めちゃダメ！」

「ぐっは、思わぬ援護射撃！ ……ごめんねアリシアちゃん。ちよつと卑怯な言い方だけど、これは君のお母さんが超えなければいけない壁……問題なんだ。だから」

「知らないもん！ お母さんを苛めないで！」

「何一つ理屈が通じねえ！ 何てお母さん思いの娘さんなんでシヨウ！ あだつ、痛い痛い！ そのローキック何処で覚えたんだよ！ 鋭いし重いし回転も速いし！ 本当になさつきまで眠り続けていたのか疑問です！ 分かった。分かったから！ もう苛めないから！」

「……………本当？」

「うい、本当です。……………ただ、後一つ。失った命を戻す為に、お母さんにはちよつとチクつとしてもらわないといけないのですが」

「嘘吐き！ もうやらないって言ったじゃない！」

「確かに言ったな！ ごめん俺嘘吐いた！ 悪い男です！ でもこれやらないとフルメンバーにならないんですよ！ 許して！ これで最後だから！ アリシアちゃんだつて、リニスに会いたいでしょう!?!」

「……………リニ、ス？」

——失つた過去が輪郭を取り戻し——

「人型の使い魔や、獣人はそれなりに見る機会があつたけれど、前者は兎も角として後者はどれもが理性や知性といった単語からは掛け離れた存在。居ない訳ではなかつたけれど、それも極少数。……ネズミを媒体とした人型の使い魔……その姿は、そちらの世界でシノビ、と呼ばれている存在に酷似しているわね」

「良くご存知で。ああ彼女、媒体とかでなくて、まんまそういう種族なんですよ。墨目※1（うお睨まれた）ツ、さんつて言います。立ち振る舞いから戦闘含む各種スキルに……特に特殊能力は、プレシアさんの知る価値観から見れば、全財産投げ打つてでも、誰もが喉から手が出る程に欲しがるものだと思いますよ」

「それは、あなたが娘やりニス蘇らせたよりも興味をそえられる事かしら。それとも、初対面にも関わらず、こちらの内情を熟知しているような物言い起因するのかしら」

「あー……その、前者の方ツス。まんま、蘇らせる能力持ちでして。自我の有無は彼女の匙加減一つですが」

「あの、プレシア……私は……いえ、これは一体……」
「とりあえず何処か落ち着いて休める場所行きませんか？ ……移動手段の如く使役しておいてあれですが、エムラさんの上って、針の筵というか……どうも虎口に飛び込んでる心境が拭えなくて……うん、そうなのエムラさん……ごめんよお」

—— 全てを取り戻すとは ——

「完全に人の手が加わっていない惑星……探索の眼も無し、つと。……うん、ここなら良
いかな」

「お兄さん、これからどうするの？」

「ぬっふっふ、凄い事です。これが前に発覚した時にはかなり面倒な事になったから、人
気の無いトコに来たかったですよ。—— プレシアさん」

「何？」

「満足そうにしていると何ですが……あなた、そのままで近い内に宜しくない状態になりますよね? ……吐血を拭った後、袖にまだ残ってますよ」

「……構わないわ。あなたとの約束を守る時間さえ残されているのなら」

「守っていただけるのは嬉しいんですが……ううむ、思考がそつちに至ってないのか……。つまり何が言いたいかと言うとですね……。あなた、こんな幼い娘さん残して居なくなる気ですか?」

「……もう、どうしようもないもの。その際には残りの力の全てをリニスに注いで補おうと思っているわ。……それとも、私の死も掻き消してくれるのかしら? あるいは、この病の治療? 今度は何を対価にすれば良いの? 優しい神様は」

「もうとつくに考えてたのか……。いやいや。さっきの言葉、覚えてないようですね。全てを取り戻したくありませんか、と。——そう言った筈ですが」

「あの……それは一体どういう……」

「まあ全てってのは誇張なんです。では、リニスさん疑問にお答えすると致しましたよ。う! って事で有言実行。召喚【若返りの泉】※2! 死ぬなどは言いませんから、せめて娘さん成人するまでは元気で母親やって下さい。さあまずは肉体からだあ!」

「なっ! 物質変化!? いえっ、これは……大規模な空間転移の兆候なんてまったく!」

「プレシアさん、理屈は後回しです。病気は後で治しますんで。はい、どーん！」

「きやあああ!？」

「お母さん！」

「アリシアちゃんが入っちゃダメ！ ヤバイ事になるから！（……プレシアさん、声、可愛いですね）」

——再会は終焉への始まり——

「手間掛けさせてくれるぜ。あれだけの大規模魔法を一瞬で何度も繰り出してくるなんてよ」

「だが、流石に我ら四人を相手に大技の連発は隙が大き過ぎるな。本業は……教師か、研究者か。戦闘向きでは無いのはハッキリと分かった。……恨んでくれて構わん。これが終わったら、次はその使い魔からだ」

「くつ、一線を退いて長かったせいですか。体が思うように……っ！ プレシア！」

「かあ、さん……っ！」

「やっぱりダメな母親だったわね。……ごめんなさい、フェイト。リニス、せめてこの子だけは回避させなさい。時間は私が——」

『収集、開始』

「【解呪】※3！ かーらーのーっ、結界突破あー！！ プレシアさくくん、現場に着けましたかー？ ……あ」

「【あ】×多数

——奪われた力は、次元世界の力の一端——

「赤……青……緑……黒……は、大丈夫です。……何でリンカーコア無いのに収集されてんだ俺」

「……つまり、白の力が奪われた、と？ ……平等の名の下に、全てを均一に消滅させると言ってた、あれを？」

「おお、プレシアさん他一同な視線が痛いッス……。後、奪われたってか、コピーされたようなものかと」

「相手があなたの力を使えるかもしれない。という時点で、脅威なのです。……あなたが無防備で、無責任過ぎるからいけないんです。僅か数分の間に説明した力が、仮に一端でも行使されてしまったのであれば、あなたは始めての知的生命体のまま、ロストロギアにカテゴライズされる存在ですから。……本当にこんな人が私達の恩人なのかと思ふと、首を傾げたくありません」

「……アシリア、リニスが苛める」

「頭下げて。……ん。良い子、良い子」

「……大の大人が少女に頭撫でられて慰められて……。形容し難い光景だなあ。サーチャー、撮影ストップ。前後二十秒を削除しちゃって」

「エイミィ、その映像は完全に削除して構わないから。とりあえず……。まずは、自己紹介からかしら？」

「リンディさんキビシーッ！」

「クロノ君クロノ君、リンディさんって、結構物怖じしない人？ フェイトちゃんと仲良くなる時にも、ガンガン押していったし」

「多分、君がフェイトと仲良くなりたい。と、ぶつかって行った時と同じくらいの気概は

あるんじゃないかな」

「なるほど……」

——その力は——

「——白夜に染まれ—— ホワイト・デアアボリック・エミツション」

「!? 対象空域に超超高濃度魔力反応! ——いや、これはもう魔力なんてものじゃ

ない! ただのエネルギーの塊だ!」

「そりやあれだクロノ君。マナ反応だな。俺の……あく……魔法の力だ」

「リンカーコア云々と、自分とこの世界の力の関係について語っていた割には、しっかりと力を使われているじゃないか! 法則が違うから使えないんじゃないのか!」

「その辺突っ込まれてもちよつと……。ワタクシ、ついこの前、この世界に来たばかりですの」

「急によそよそしくなるんじゃない! この無責任男!」

「な、なんだと! まさにその通り過ぎて涙が零れそう! しかもそれがかなりの年下

からとなつちやあ、このままトンズラこきたいッス！」

「いいから！ 局員や、なのはとフェイト達が到着するまで何とか持ちこたえるんだ！
それで、何か目の前の光景に何か心当たりは無いのか？」

「使われる力は白……で、高威力の魔法……広域クリーチャー殲滅……十中八九、あの辺
だろうなあ……。しかし、ホワイトディアボリックつてあんた……それラスゴ※4
……」

「……」ピクツ

「ああ！ 無言で出力上げやがったなテメエ！ 大人げないぞ！」

「それは僕の台詞だ！ ああもう君つて奴は！ この際内容は問わない！ あれに対抗
出来るのか！ 出来ないのか！ どっちだ！」

「舐めるな小僧！ 単色だけの相手など、こつちにしてみればメタ余裕な相手以外の何
者でもねえ！」

「そう言うなら——っ！ 来るぞ！」

「任せとけ、早老坊主！ 【パーミッション】の真髓、魅せてくれる！」

「きつ、君は言うに事欠いて……っ、うわあああ!？」

——ありえたかもしれない未来に——

「ほなら、リインはしばらくおねむさんになつてただけなんやね？」

「その通り。今はジェイスを始め、『プレインズウォーカー』達が協力してくれているからね。魔道書の一冊や二冊、どんと来いつてなもんさ。むしろあれだ。夜天の書を、修正どころか、加筆してパワーアップさせてくれるかもしれない。というか確実にそういう路線に向かつてそう……テゼレット※5え……」

「だが、修復元の情報も、防衛プログラムも何も、具体的な対策は出来てないのだろうか？」

「主の恩人を疑いたくは無いが、疑問を拭うには、些か……」

「シグナムさんの疑問は最もなので、とりあえず後者——防衛プログラムの、応急処置的なものですが、対応策だけ。——あれ、膨大な魔力を糧に、永続強制で修復される術式みたいなものなんですよ、確か。その……ぶつちやけ、エルドラさん達のご飯——には届かないから、おやつになってます。こつちとしては修正せずに、そのまま残しておきたいなあ。なんて」

「える、どどらっ！」

「でつかいクリーチャーとでも思つて下さい。……プレシアさん、何ですか、その呆れた

ような表情は」

「よくな、ではなく、まさにそうなのよ。——みんな。心配要らないわ。もし本当なら、下手に関わらない方が身の為よ」

「話がよう見えへんのやけど？」

「プレシアさんはエルドラの一体、エムラさん知ってるからなあ……」

「あの……」

「? どうしたね、なのは&フェイトちゃん」

「……良いんだよね？」

「うん。強くなるって、決めた事だから」

「そうだね……そうだよねっ！」

「うん……ッ」

「せくの……私達のデバイスも強化して下さい！」

「ッ!? 砲撃対象の消し炭フラグきたー! (主にヴィヴィオちゃん、ティアナちゃん、マジ御免)」

「……未開の惑星で二人きり……あまり良い状況ではないけれど。……お話というのは何かしら」

「ちよつとリンデイさんにご提案です。プレシアさんとほぼ同様の内容ですが……。——取り戻したくありませんか。あの頃の幸せを。……我ながらこの言い回しはどうにかならんものか……胡散臭過ぎだ……」

「な、何を……」

「おほんつ。……こちら……私について、公私問わず調べているのは分かっています。——ハラオウンさん、でしたか。あなたの夫は。構いませんよ。すぐに、とは行きませんが、条件さえ飲んでいただけるなら。……これって何処からどう見ても悪魔との契約だよなあ」

「——お聞きかせ下さい、その条件を」

「（うわ目が据わつてる……）別に何かを差し出せ。とかつて訳じゃありませんよ。色々細かい条件はありますが、ただ私のこの力の事を黙秘して頂ければ、それで」

「!? それだけ……ですか」

「ええ。プレシアさんも同じ条件を飲んでいただけでいます。リンデイさん自身も重々ご理解しているでしょうが……ほら、こういう力ですので。それはもう、過去に色々あった訳ですよ」

「……分かりました。その条件、飲ませて下さい」

「その願い、叶えてしんぜよう——はい堅苦しい雰囲気終了! じゃあ早速若返りから!」

「え? え??」

「召喚【若返りの泉】! 今回二度目のツツパリアタック! はいどーん!」

「きゃあああ!」

「うむ叫び方までプレシアさんと一緒とは。何とも気が合いそうだと思います。同じ母親同士、後で……というか今後とも仲良くやって下さいな。余計なお世話ですが、愚痴れる相手って大事だと思いますし」

「いいじゃないか。そう減るものではないだろう?」

「嫌じゃ嫌じゃ! 誰が好き好んで、男に体の隅々まで弄られなきやあかんのじゃ!」

「つれないな。君が言い出したんだろう? 『私の力は、あなたの欲望を満たすものだ。無限の未知が溢れている』と。こちらの行動に制限をしているんだ。こちらとしても、君の行動に何かしらの示唆を行っても良いと思うのだけれどね」

「だからって、まさか『ファイレクシアの抹殺者』※6とか『ファイレクシアン・ドレットノート』※7を一週間でまるツと解体されるとは思わなかったもんよ! 生首状態で『助けて』って訴え掛けてくる……生きてる抹殺者とか見た時は心臓止まるかと思っただぞー!」

「だがそのお陰で、ファイレクシア病※8の全四段階の内、第一症状までならば完治可能になったんだ。君だって狂喜乱舞していたじゃないか。発情期の猿のように」

「……最後に付け足された言葉にや悪意を感じますが……うん……そりゃあ、ねえ……。お前、だってあれ、あっちじゃ『プレインズウォーカー』でも対処の困難なもんでしたし……それも結構初期段階までの話で、末期になったら打つ手無しつていう」

「だから、良いだろう? 時間は『若返りの泉』で、資材は君の召喚能力で、幾らでも、如何様にも対処可能だ。——断言しよう。それさえ提供してくれたのなら、そのファ

イレクシア病——黒い油を、コップ一杯——否。錠剤一粒だけでたちどころに解毒出来る様、成し得てみせようじゃないか。——だから」

「もしそれが出来たらヨーグモス※9が卒倒するわ……。でも駄目！ お前とニコル※10さんは絶対会わせません！ 俺が……。世界が終わるわ!!」

「はっはっはっ、おかしな事を。「エルドラージ」達を使役している君が言うと、空々しさを覚えるよ」

「うっさい……。個人的な二大悪の巨頭の一人を顕現させてたまるかってんだ……。自分で自分の脳味噌足りない自信があるのに、智謀の塊みたいな人なんか呼べねえですよ……。スカさんは色々と解析して自分の研究に反映させてるんだ。今はそれで我慢しておいてくれよ」

「私の名前をそう言うのは、君くらいのものだよ」

「スカさんが嫌なら、スカリエッティのエッチちゃん」この話題は分が悪い。先に進めさせてもらおうよ」って呼び……。別に良いですけどね……」

「それは重畳。……。しかし、これでも極秘裏に進めていたものだったんだがね。……。なら話は早い。そろそろプロジェクト・フェイトを引用した……。私の娘達の第一陣が完成する。『——完成された祝福をとくと見よ』。そう君が言わしめるクリーチャーを、是非とも見せてもらえれば、第二陣からはその技術を——」

「誰が【ファイレクシアの抹消者】※11なんぞ調べさせるか!!」

「相変わらず、君は私を焦らすのが得意なようだ。……くつくつく……だがそれもまた心地良い……」

「お客様ー！ お客様の中に、特大級ホームランが得意な、疾風迅雷のお方は居りませんか!?!」

——リリカルギャザリング、始まりません——

「PW【ニコル・ボラス】も、【伝説】の【エルドラージ】ですらも。……あまりに強過ぎて、クリーチャーとして製作出来なかったその力。しっかり眼に焼き付けて——
 どうかさされちまえ! 【フェイジング】※12スタンバイツ! 来いツ! 【大口縄】
 ※13 ——てっしゅー!!」



※0 【引き裂かれし永劫、エムラクール】

多次元宇宙の一つを犠牲にし、そこに隔離されていた生物【エルドラージ】の内の一体。最も強大、最も暴食とされ、数々の次元世界を滅ぼしては。を繰り返していた為、複数のPW達の手によって上記の対処方をされ、知的生命体達はどうにか平穩を手に入れた……筈だったのだが。

※1 【鬼の下僕、墨目】

黒の中型クリーチャー。ダメージを与えた対象の墓地にあるクリーチャーを一体、自軍の場に出す。

※2 【若返りの泉】

アーティファクト。2マナとタップで、ライフを1、回復する。

※3 【解呪】

アーティファクトかエンチャント一つを破壊する。

※4 【神の怒り】

ソーサリー。全てのクリーチャーを破壊する。再生不可。略称はラスゴ。

※5 テゼレット

PWの一人。アーティファクトに対し、優れた一面を持つ。

※6【ファクレクシアの抹殺者】

クリーチャー。強烈なデメリットを持つ、黒らしい、高パフォーマンス所持者。

受けたダメージ分だけ、場に出したカードが墓地へと送られる。クリーチャー同士の間になった場合、たった一度の戦闘で、自分の場はまっさらになる事受け合い。

※7【ファイレクシアン・ドレットノート】

巨大クリーチャー。三本の指に入るマナレシオを持つ。12/12

※8ファイレクシア病(MTG Wikiコピペ)

第一段階：発疹と吐き気。

第二段階：高熱と高い感染性。

第三段階：筋肉痛とひどい咳。

第四段階：うわごと、ひきつけ、そして死。

別名、黒い油。

物語のハッピーエンド後、スタッフロールの最後にこっそり映る黒い影とか、そんな存在。

悪夢は決して終わらない。

※9ヨーグモス

個人的MTG悪の二大巨頭の内の一人。次元世界を影から侵食するファイレクシア病をばら撒く人。……人？

多次元世界の裏側を支配する、悪の組織の首領。何者にも染まらぬ邪悪が彼だと思えます。

※10 ニコル・ボラス

竜の「ブレインズウォーカー」。個人的MTG悪の二大巨頭のもう一人。知略、智謀、魔力、そして、飽くなき力への探求心、等々。あらゆる点で他のPWとは一線を画く存在。あちらが組織的な最悪であるのに対し、こちらは個での最悪。ただ配下は多数居る。

※11 「ファクレクシアの抹消者」

クリーチャー。「ファクレクシアの抹殺者」の完成形。デメリットが一転、メリットに変化している。受けたダメージ分だけ、相手の場のカードが墓地へと送られる。ただしあくまでダメージを与えた者がこの効果を受けるのであって、自分で出して、自分で与えて。では意味がない。

※12 「フェイジング」

能力。噛み砕いて言うと、一時的に存在を消す事を指す。恐らく無色透明とかではなく、別次元に転移するレベルの存在消去。

※13 大口縄／おおかがち

ソーサリー。【最後の裁き（全てのクリーチャーを追放する）】を行うであろう存在の名前。以下MTG Wikiコピペ。

現し世と隠り世（人間の世界と神の世界）を隔てる「世界の帳」をつかさどる神。その巨大さ、異常な力から、伝説のクリーチャーとしてのカード化はされなかった。

■ □ □ □

当初、東方ギャザリングとこちら、リリカルギャザリングのどちらを執筆しようか悩んだものの、一方、妄想の欠片。個人的1000コメ達成企画、兼、エイプリルフール企画。書きたいから書いていただけ。な妄想モロだしネタであります。

本編の進行の息抜きとしての小ネタの一環でありますので、本編との繋がりなどは一切ありません。多分。恐らく。きつと。

東方ギャザリングも、根底はこんなノリでありました。

……あれ？